

天龍ちゃんと狩娘

二度三度

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある鎮守府にて建造された天龍ちゃん。これから艦娘として世界水準の大活躍してやると意気込んだのも束の間、そこは艦娘の代わりに狩娘（ハンむす）がいる鎮守府だった！

艦娘ではなく狩娘として戦うことになった天龍ちゃん。そんな彼女の前に立ちふさがる非常識の連続。

艦娘としての常識が何一つ通用しないこの鎮守府で、果たして天龍ちゃんは世界水準の狩娘になれるのか!?

タイトル通り艦これとモンハンのクロスです。だけど一部を除いて基本的にモンスターとは戦いません。これはモンハン世界のルールで深海棲艦と戦う天龍ちゃんのお話です。

目次

天龍ちゃんと新たな世界1	1
天龍ちゃんと新たな世界2	6
天龍ちゃんと新たな世界3	13
天龍ちゃんと新たな世界4	21
天龍ちゃんと旅立ちの風1	30
天龍ちゃんと旅立ちの風2	43
天龍ちゃんと旅立ちの風3	56
天龍ちゃんと楽しい採集1	64
天龍ちゃんと楽しい採集2	73
天龍ちゃんと楽しい採集3	83
天龍ちゃんと鎮守府の仲間達1	95
天龍ちゃんと鎮守府の仲間達2	107
天龍ちゃんと鎮守府の仲間達3	116
天龍ちゃんとオトモ連装砲1	123
天龍ちゃんとオトモ連装砲2	134
天龍ちゃんと初めての緊急クエスト1	141
天龍ちゃんと初めての緊急クエスト2	152
天龍ちゃんと初めての緊急クエスト3	161
天龍ちゃんと初めての緊急クエスト4	169
天龍ちゃんと初めての緊急クエスト5	181
瑞鶴ちゃんと選ばれし民1	195
瑞鶴ちゃんと選ばれし民2	203
瑞鶴ちゃんと選ばれし民3	214
ここまでの登場人物1	226

天龍ちゃんとうーちやんさん 1	234
天龍ちゃんとうーちやんさん 2	245
天龍ちゃんとうーちやんさん 3	259
天龍ちゃんとうーちやんさん 1	267
天龍ちゃんとうーちやんさん 2	276
天龍ちゃんとうーちやんさん 3	286
長門さんと下着泥棒 1	302
長門さんと下着泥棒 2	310
長門さんと下着泥棒 3	318
長門さんと真犯人 1	326
長門さんと真犯人 2	336
長門さんと真犯人 3	345
長門さんと真犯人 4	356
ここまでの登場人物 2	371
天龍ちゃんと運命の出会い (?) 1	378
天龍ちゃん改め香取さんと運命の出会い 2	390
香取さんと運命の出会い 3	401
香取さんと運命の出会い 4	407
香取さんと運命の出会い 5	417
香取さんと運命の出会い 6	429
香取さんと運命の出会い 7	442
香取さんと運命の出会い・超特殊許可	454
天龍ちゃんとうーちやんさん 1	469
天龍ちゃんとうーちやんさん 2	479
天龍ちゃんとうーちやんさん 3	489

天龍ちゃん	と卯月ちゃん	4
曙ちゃん	と風翔剣士	1
曙ちゃん	と風翔剣士	2
曙ちゃん	と風翔剣士	3
曙ちゃん	と風翔剣士	4
曙ちゃん	と風翔剣士	5
ここまでの登場人物		3
ここまでの登場人物		4
雷ちゃん	とピンクの長門さん	1
雷ちゃん	とピンクの長門さん	2
雷ちゃん	とピンクの長門さん	3
雷ちゃん	とピンクの長門さん	4
雷ちゃん	とピンクの長門さん	5
雷ちゃん	とピンクの長門さん	6
雷ちゃん	とピンクの長門さん	7
雷ちゃん	とピンクの長門さん・超特殊許可	
ここまでの登場人物		5
天龍ちゃん	と一泊二日の旅	1
天龍ちゃん	と一泊二日の旅	2
天龍ちゃん	と一泊二日の旅	3
天龍ちゃん	と一泊二日の旅	4
天龍ちゃん	と一泊二日の旅	5
天龍ちゃん	と一泊二日の旅	6
天龍ちゃん	と一泊二日の旅	7
球磨ちゃん	と熊	1

球磨ちゃんと熊2	780
球磨ちゃんと熊3	788
球磨ちゃんと熊4	801
球磨ちゃんと熊5	812
球磨ちゃんと熊6	824
ユーちゃんとヤーパーン1	852
ユーちゃんとヤーパーン2	861
ユーちゃんとヤーパーン3	872
ユーちゃんとヤーパーン4	885
ユーちゃんとヤーパーン5	895
ここまでの登場人物6	914
天龍ちゃんとアイスがボーン!1	931
天龍ちゃんとアイスがボーン!2	941
天龍ちゃんとアイスがボーン!3	952
天龍ちゃんとアイスがボーン!4	963
天龍ちゃんとアイスがボーン!5	972
天龍ちゃんと炭鉱夫1	997
天龍ちゃんと炭鉱夫2	1006
天龍ちゃんと炭鉱夫3	1012
天龍ちゃんと炭鉱夫4	1022
葛城ちゃんとカムラ鎮守府1	1035
葛城ちゃんとカムラ鎮守府2	1046
葛城ちゃんとカムラ鎮守府3	1058
ここまでの登場人物7	1100
山城ちゃんと極秘指令1	1110

山城ちゃんと極秘指令2

山城ちゃんと極秘指令3

イサナちゃんと天を廻りて戻り来よ1

イサナちゃんと天を廻りて戻り来よ2

イサナちゃんと天を廻りて戻り来よ3

イサナちゃんと天を廻りて戻り来よ4

天龍ちゃんと新たな世界1

深海棲艦に対しては、艦娘の装備している艦装を使わないと効果的なダメージを与えることが出来ない。それがこの世界の常識である。

通常兵器では深海棲艦に大きなダメージを与えることが出来ない。その理由については諸説あるものの、一説においては通常兵器だと深海棲艦が身にまとう怨念のオーラを貫くことが出来ないからとされている。

そして怨念のオーラを突破する為には妖精さんの加護が必要であり、その加護を受けた艦娘と艦装ならば深海棲艦にダメージを与えることが出来るという訳である。

しかしそんな常識が通用しなかったら？謎の力学により、妖精さんの加護のある艦装を使っても深海棲艦にダメージが与えられなかったら？

その一方で、何故か謎の力学に対応している大剣やハンマー、ボウガンで深海棲艦にダメージが与えられたら？

これはそんな謎の力学が働く不思議な海域にて戦う狩娘達ハンモサの物語である。

「オレの名は天龍。フッフ、怖いか？」

たった今建造されたばかりのオレの名は天龍。天龍型1番艦の軽巡洋艦だ。

出来立てホヤホヤのオレだが、艦娘っていうのは建造された時点で既に最低限の知識を持って生まれてくる。だから艦娘っていうのは自分がかつて船だった頃のことを覚えていいるし、艦娘となった自分の存在にも疑問を持たない。

もしも建造されたばかりの艦娘に知識が無かったら一般常識どころか言葉や歩き方すら分からない身体だけデカイ赤ん坊が生まれてくることになる。

だけどこの知識のおかげでいきなり実戦にも出られる兵士として生まれてくるってワケさ。

え？なんで会ったばかりの提督を怖がらせるのかだって？そんなことしたら第一印象が最悪になる？

おいおい、考えてみろよ。オレは世界水準超えの天龍だぞ？貧弱な提督よりも豪胆な提督の指揮を受けたいだろ。へボな提督には使われたくねえ、だからオレは真っ先に提督の根性を確かめさせてもらうってわけさ。

まあへタレな提督でもオレはそんなに厳しく当たるつもりはねえが、世の中にはダメ提督更生機って呼ばれる提督に対して厳しい艦娘もいるらしい。

そんなもってそんなダメな提督を一人前にするのも艦娘としての立派な仕事の一つだけど、個人的には艦娘に怒られて更生する前に提督としての訓練を受けた時点で一人前になってほしいもんだぜ。

「又ハハハハ！よく来たな、我輩が提督だ！」

工廠にある建造マシンの中から出てきたばかりのオレを出迎えたのは、日焼けした黒い肌にヒゲ面が特徴的な提督を名乗る偉そうな態度のおっさんだった。

若干態度がムカつくが、オレの挨拶に対してビビるわけでもなく、怒るわけでもないこの提督ならこのオレに相応しい世界水準の戦場を用意してくれるかもしれねえ。

大体先に挑発したのはオレだからな、別に挑発し返されたって怒

りやしねえし、この程度で怒るような天龍様でもねえよ。

……それにしてもこの提督は妙な服を着てんだな。提督といえば基本的に海軍仕様の白い軍服を着てるもんだろ？

だけど目の前にいるこの提督は黒のインナーにオレンジ色の軽鎧みたいなを着こんでいる……っていうかこいつ本当に提督か？

いくらなんでもこの格好はおかしいだろ!?!角の生えたヘツドギアまで着けてるし。

艦娘だつて変わった服装の奴らが多いけどよ、あの服はただのオシヤレじゃなくて艦娘が受けたダメージを肩代わりする効果があつて、生存率を上げる意味があるからな。

だからダメージを受けても服が破れたり艤装が破損するだけで艦娘本人が大きな怪我をすることは少ないのさ。

え、季節限定グラフィックで違う服に着替えてる？あつちの衣装にも同じ機能があるんだよ……多分あるよな？

そもそもオレだつて他人の服装に文句言える程立派な人間(つていうか艦娘)じゃねえし、他人に迷惑が掛かってないつてんのなら服装なんて個人の自由だと思っけだよ。

だからといって鎧を着た提督なんて聞いたことねえよ。しかもよく見たら歯も総金歯になつてるし趣味が悪いな。

豪胆だが妙な服装の提督カツコカリに対して、淡い期待と若干の不安を抱えながらも早速オレは自分のやる気アピールしてみることにした。

ここで使えない奴だと思われて出撃させてもらえなかつたら目も当てられないしな。

「戦闘なら任せろよ！練度だつてあつという間に上げてみせるからな。なんなら死ぬまで戦い続けてもいいぜ、大戦果を挙げてやる！」

「ふーむ、やはり貴様も勘違いをしているようだな。」

「勘違い？貴様も？一体何の話だよ？」

「又ハハハハ！説明してやってもいいのだがな昔の我輩ならいざ知ら

ず、今のリツチでセレブな我輩はとっても忙しいのだ。貴様のような新人でへっぽこなヒヨッコ狩娘相手に使う時間などありやせんのだ！」

なんだよこの提督!?態度は悪いが豪胆な奴かと思っただけのクソ提督じゃねーか!!一人で納得しやがって、そもそものはんむすってなんだよ?

「ほれ、貴様の着任祝いだ!ありがたく思えよ貧乏人、又ハハハハハハハハ!!」

提督はそう言いながら、若干の怒りと疑問で動きの止まっていたオレに向かつていきなり小銭を一枚放り投げた後、そのままどっかに歩いて行ってしまった。

チクショー、クツソ腹立つな。口も悪いし態度も悪い、そんなもって性格まで悪いかとんでもない提督の下に来ちまった!?

これが噂に聞くブラック鎮守府ってヤツか?このままじゃ戦果を挙げるどころか、どんな目に遭うか分かったもんじゃねえ!?

しかもよく見たらこれ日本円じゃねえな、1z?1ぜつと?見たことのないお金だが外国のお金か?まさかとは思うがニセ金じゃねえよな?

大体なんの説明も受けてないし、これから何をすりゃいいんだよ?確かに艦娘は最低限の知識を持って生まれてくるとはいえ、所詮それは自分が艦娘であるということや深海棲艦と戦うってことに一般常識ぐらいのもので、文字通り本当に最低限の知識しか持っていない。

自分が生まれた鎮守府のことなんて分かるワケがないし、これからどこに行けばいいのか、何をすればいいのかだって説明が無ければ分からない。

もういつそのこと勝手に出撃しちまうか?でも後で始末書とか書

かされるだけならまだしも、ここが本当にブラック鎮守府なら最悪解体だってありえるかもしれない。戦って死ぬならともかく解体されて終わりだなんてゴメンだぜ!!

それに世の中には艦娘相手に、えーつとその……え……えええエツチなことをする提督もいるっていうし……本当に好きになつた……じゃなくてオレ様の御眼鏡に合うような相手となら……かかか考えてみてもいいけどよお……つていやいやそうじゃなくて!!

認めたくはねえが天龍型っていうのは、軽巡の中でも旧型なんで残念ながら性能は低い。だからオレのことを役立たずのポンコツ扱いするんだろ!?

それでもって使えない貴様にはせめてこつちで役に立つてもらおうとか言ってイヤらしいことをするんだろ!?!?そんなの絶対に嫌だーっ!!

……ちつたあ冷静になれ、大体なんでこんな変なこと考えてんだ? こんなのオレのキャラじゃねえだろ。あー、滅茶苦茶恥ずかしい。そんなことよりもっと真面目にこれからのことを考えなきゃダメだろ!?!?

着任早々にしていきなり立ち込めた暗雲を前に、1人で百面相をしつつも途方に暮れる天龍なのであった。自分自身に起きていた1番の異常に気付きもせずに……。

天龍ちゃんと新たな世界2

パシヤツ!!

工廠で立ち尽くしていたオレの耳に何やら物音が聞こえてきた。これってカメラのシャッター音だよな? 近くに誰かいるのか?

音のした方に振り向くと、工廠の機材の陰から人影が現れた。

「はあ〜い天龍ちゃん、久しぶり〜♪目覚めたばかりでしようけど私のことが分かるかしら〜?」

黒い服、特徴的な喋り方、そしてあの不思議な輪っかを頭の上に浮かべている艦娘なんて世界ひろしと言えどもただ一人。間違いねえ、あいつはヴォル……じゃなくて龍田だ!

「お前、龍田か? 久しぶりだなあ!」

何故か片手にカメラを持った龍田が笑顔を浮かべながらこっちをやつて来た。

この艦娘としての姿になってから会うのは初めてだが、知識に無くても龍田のことは一目見りゃ分かるってもんだ。姉として妹のことが分からないなんてことはないさ。

「ほら天龍ちゃん、ブーツとしてないでカッコいいポーズを決めてね? 再会の記念よ、記念。」

目の前まで来た龍田は唐突にカメラを構えながらそんなことを言ってきた。

突然のことで頭が追いつかないオレは言われた通り、つい反射的にポーズをとる。

まあ他ならぬ龍田の頼みだし、特に断る理由もないからな。

どうだ、バツチリ決まった天龍様のカッコいいポーズは?

波紋……じゃなくて波紋使いの冒険第4巻の表紙みたいでイカすだろ?

我ながら下らねーことを考えながらポーズを取っていたが、顔の前に手をかざした瞬間に凄まじい違和感に襲われた。

右目だけじゃなくて左目でも物が見えている？ってことは今のオレは眼帯を着けてないのか？

このオレのトレードマークでもあるあの眼帯が無いっていうのはどういうことだ？

建造されてから眼帯どころか顔すらいじってねえし、誰かに触られてもいねえから建造された時点で最初から着けてなかったことになる。

建造直後から色々とあり過ぎてそれどころじゃなかったとはいえ、艦娘は建造の際に肉体だけじゃなく服や艦装も一緒に用意されるから服の一部である眼帯も当然あるもんだと思ってたし、そもそも眼帯が無いなんて考えもしねえから全然気付かなかったぜ。鈍いとか言うなよ！

「はいチーズ！」

パシャツ!!

色々と考えている間に、龍田にそのまま写真を撮られてしまった。つてことはノリノリでポーズを決めたとはいえ、眼帯無し素颜を写真に撮られたってことか？ちよつと恥ずかしいな……。

「うふふつ、いい写真が撮れたわ〜♪ありがとう天龍ちゃん。それじゃあさつそく鎮守府まで案内するわよ〜。どうせあの提督のことだからロクに説明を受けてないんでしょ？」

そう言つて工廠の出口を目指して歩き始めた龍田に当然オレも付いて行く。

しかし龍田にも『あの提督』つて言われてんだな。オレも初対面とはいえあの変な提督には正直良い印象を抱けなかったし、やっぱり態度が悪いからあんまり人望がねえのかな？

「天龍ちゃん、ここの工場は鎮守府とは別館になつてるの。だから鎮守府に行くには一度工場の外に出る必要があるのよ。」

そう言いつつ工場の扉を潜り抜け外に出る龍田。当然オレも続いて外に出る。

いい天気だ、眼帯が無いせいか太陽の光がやけに眩しいぜ。

新たに着任したオレを祝福するかのよう、爽やかな一陣の風が吹く。

「……やぶつ!？」

何だ何だ何だつてんだ!?ただ風が吹いただけだつてのに、やたらと寒いじゃねえか!?

慌てて龍田の方も見てみるが、龍田はニコニコしながらこつちを眺めているだけで全然寒がつているようには見えない。

そもそも天気は晴れ。雲一つない素晴らしい快晴だ。今の気温は知らないが、少なくとも秋や冬じゃないのは確かだ。寒い要素が無い。

それと何故か歩いていると足の裏がチクチクして痛い。靴の中に小石でも入ったかな?

ふと龍田の目線が気になった。オレの顔じゃなくて身体の方を見ている?オレの身体に何か変なものでも付いてんのか?

オレも気になり、目線を下げて自分の身体を確認してみる。

……ふむ、我ながらよく引き締まった健康的な肢体が目に入る。出るところはちゃんと出ているし、引つ込むところはしっかりと引つ込んでいる、スタイルには自信があるぜ。

続いて見えるのは飾りつ気のない白いブラジャーと同じく白いパンツ、やっぱり建造されたばかりじゃ洒落たデザインの下着は着て

ねえな。

そしてお腹の真ん中には形のいい可愛らしいおへそが……………えっ？

「何じやこりやああああ!!?寒いと思ったら服を着てねーじやねえか!!!」

「あらあら天龍ちゃん、やっぱり気付いてなかったのねえ。」

「やっぱりってなんだよやっぱりって!?!っていかまさか写真撮ってたのって?」

「ええそうよ、天龍ちゃんったらそんな格好で自信満々にポーズ決めちゃって可愛い♪」

「消せーっ!その写真のデータを消してくれーっ!!」

「うふふ、だーめっ♪」

チクショー、着任当日からなんて厄日だ!変な提督の下に就くわ、龍田に下着姿でカツコつけてる写真を撮られるわ。ってことはあの変な提督にオレの下着姿を見られてんのかよ!?

そもそも提督や鎮守府のことが気になってオレ自身に付いて考える時間が無かったとはいえ、服を着てないことにすら気付かないとか何やってんだよオレは!?

そういやさつき顔の前にかざした手にも指抜きグローブがはまっていなかったじゃん!何でそこで気が付かないかなあ?それに裸足で歩いてたんだぞ、足の裏の感触で分かるだろ!?

艦娘は建造された時点で当然服も一緒に作られてるし、最初から着込んでいるっていうのも常識だ。裸で着任する艦娘なんて聞いたことがないし、そんなのいたらただの露出狂だ。

第一服は最初から着ているっていうのが当たり前だから、ちよつと違和感があったとしても服を着ていないなんて無茶苦茶な発想に至るワケねえだろ!?

ましてや龍田は普通に服を着てたもんだから尚更だ。

あれ、じゃあ何で下着は穿いているんだ？全裸は流石に論理的に問題があるからか？だったら最初から服も着せときゃいいだけの話だろーが!?

とにかく今のオレは眼帯どころか下着以外の服を身に着けていないってこった。しかも頭を触ってみたら電探すらついてねーじゃん！っーことはまさか……。

「ええい、ウオリャーっ!!オレの艤装よ、出やがれーっ!!」

本来は艤装を出すのに掛け声やガッツポーズなんて必要無い。意識するだけで出したり引つ込めたり出来る。しかしひよつとしたら出ないんじゃないかという悪い予感と、もしかしたら出るかもしれないという僅かな希望に賭けて、気合！入れて！いきますッ!……じゃなくて、全身に気合を入れて艤装を出そうと試みる。

………うん、やっぱり何も出ないな。やる前から何となく分かってはいたよ。だけど半ばヤケクソとはいえ確かめない訳にはいかねえだろ。

そして龍田の方を見てみると、案の定笑いながらこっちを見ている。

「もう天龍ちゃんったらお茶目なんだからあ。でも変身するウル○ラマンや、ガ○ダムファイターみたいでとつてもカツコよかつたわよ。これもビデオに撮っておけばよかつたわ。」

ああもう、他人事だと思つて………つていうかまた龍田に変なシーンを撮られるところだつたぜ。

しかし服が無いどころか艤装すら無いって、もはやこれを艦娘って呼んでいいのか？

「うふふ、天龍ちゃんとっても混乱してるわねえ。」

龍田は笑顔のまま、混乱するオレにとんでもないことを言い放った。

「あのねえ天龍ちゃん、ここではインナー姿で建造されるって言うは当たり前のことなのよお。」

な……何だつてエー……!?

いやいやどういふことだよ、下着姿で建造されるのが当たり前って？じゃあ龍田もここに来た当初は下着姿だったってことか？

「提督はお金儲けに夢中だし、インナー姿とか全然興味の無い人だから見られたことなら気にしなくてもいいわよお。下着姿で興奮するのはオコチャマだとか偉そうに言ってたし……。」

いやいや、興味の有る無し以前に初対面のおっさんに下着姿を見られることそのものが問題だと思っただが……。

そう思っていると龍田は更なる爆弾を投下した。

「それによつてはね、インナー姿じゃないと出発が出来ないクエストもあるのよお。」

一体何の話だよ!?!大体クエストって何のことだ?作戦のことか?下着姿で出撃つて変態を通り越して自殺行為だろ!?!潜水艦だつて下着姿じゃ出撃しねえよ!!

それに服の事は百歩譲るとしても、艀装が無いって言うのはどういうことだよ?!

服も無し、艀装も無しで出撃したら10秒立たずに海の藻屑になるぞ?!

「まずは報告と詳しい説明も兼ねて秘書艦に会いに行きましょう。提督はあんな感じで仕事をしないから鎮守府の仕事は全部秘書艦がやっているのよ。」

まだまだ聞きたいことが山ほどあるが、今ここで説明する気はないのか、そのまま鎮守府を目指そうとする龍田。

だが再びこちらを振り向いてこう言った。

「そうそう天龍ちゃん、着任祝いと姉妹の再開の記念にこれをあげるわね。」

そう言いながら龍田が懐から取り出したのは……眼帯じゃねーか!?

さっそく左目に着けてみる。うん、悪くねーな。やつぱこれがなきやキマらねえ!

「うんうん、似合ってるわよお。それじゃあ防具が手に入るまではそれだけで過ごしてね。」

……えっ、くれるの眼帯だけ? せめて靴もくれよ、足の裏が痛いんだけど。

新しい職場での第一目標は出撃や戦果のことではなく、まず服を手に入れることと心に誓う天龍なのであった。

天龍ちゃんと新たな世界3

「クロオビ鎮守府へようこそ天龍さん、秘書艦の神通です。あなたの着任を歓迎します。」

龍田に連れられて着いた鎮守府の執務室にて、オレを出迎えたのは緑色のリボンと一体化した鉢金が特徴的な艦娘の神通だった。

「着任早々提督が無礼な態度をとったようで、秘書艦として代わって謝罪します。」

そう言う神通はこちらに対して頭を下げてきた。

今まで変な提督やちよっぴり意地悪な龍田にしか会ってなかったから、こうも生真面目なキャラが相手だとなんか調子狂うな。

っていうかクロオビって地名か？全然聞いたことないんだけど……。横須賀とか佐世保じゃなくて？

「あの提督は元々は海軍で士官候補生達の教官をやっていたんです。その後この鎮守府の提督として配属され、若干不真面目ながらも業務にはちゃんと取り組んでいたのですが、自分で開発したビールが売れるようになってきてからは『ヌハハハハ！これからは商売の時代だな、提督なんて面倒臭いことなどやってられるか！』と言い出し、更に不真面目となって提督としての仕事すらしなくなりました。今日天龍さんに会いに行つたのも気まぐれみたいなものですよ。」

ええ、それって提督としてどうなんだ？

それと提督の本名知らないけどそれはいいのか？みんな提督として呼んでないから未だに本名不明なだけ……。

「では天龍さん、少し長くなりますがこの鎮守府の成り立ちも含めてお話ししましょう。」

えっ、成り立ち？そんなところから話す必要があんの？

驚くオレを見て神通は微笑みながら話を始めた。

「ふふふ、不思議そうな顔をしていますね。初めてここに来る狩娘ハンむすはみんなそんな顔をしますよ。」

「またはんむすって言ったな。かんむすの聞き違いじゃなかったのか？」

「かんむすとはんむすの違いについて考えているオレに構うことなく、神通はいきなり爆弾発言を放り込んできた。」

「まず最初に言っておきますが、ここの鎮守府に艦装はありませんし、あつたとしても使いません。」

「天龍ちゃん、さつき艦装を出そうとして失敗してたでしょ？でも最初から無いものが出るわけないのよお。」

「やっぱり艦装って最初から無いのかよ!?っていうか使ってすらいらない？」

「じゃあ後で改めて支給されるってワケでもないのか。あと龍田、その話はオレが変身ポーズをする前に言ってくれ。」

「このクロオビ鎮守府という名前も聞いたことがないですよ。当然です、何故ならここは日本ではありませんから。」

「ええ、何だそりゃ？じゃあここはドコだよ？ひよつとして噂に聞くグンマーとかいう謎の国か？でもあそこって確か海は無いよな？海が無きや艦娘の意味も無いような……？」

「次々と出てくる衝撃の事実につっこみが追いつかないでいるが、神通はそのまま続きを話し始めた。」

「ここは太平洋に浮かぶカリユード諸島、そしてここはそんな数ある島々に建つ鎮守府の1つです。」

「カリユード諸島？何だそれ、全然聞いたことないぜ？」

「それも当然です、何故ならこの島はいつの間にかあつたのですから。」

「は？いつの間にかつてどういうこと？
さつきから言ってることが無茶苦茶でさつきぱり分からねえ。」

「オレの疑問が手に取るように分かるのか、それとも最初から説明す

る気があったのか、神通は淀みなく続きを話し始めた。

「地殻変動によるものなのか、異常気象によるものなのか、はたまた超常現象によるものなのかは未だにハッキリと分かっていません。しかしある日、普段通らないルートを偶然通った艦隊は、あるはずの無い島々を見つけました。それがこのカリユード諸島です。しかしかつてこの場所は間違いなく海でした。常に荒れて入り込めず、調査の出来ない未知の海域などでは決してありません。岩礁はおろか浅瀬さえ見られないごく普通の海域でした。ですがこれらの島にはまるでジャングルのように木々が生い茂り、数多くの野生動物の姿も確認されています。仮に海の底にあった島が浮上してきたのだとしたら、木や動物などが存在するはずがありませんし、何らかの要因で動植物がこの島にたどり着いたのだとしても、短期間ではあり得ない程の繁栄を見せています。何より島の奥地には建造物と思われる遺跡がいくつも発見されているのです。つまりかつてこの島には人が住んでいたということですよ。それも1人や2人ではなく大勢の人々が、です。」

「よく分からんけどとにかくスゲー！それって世紀の大発見じゃん。でもそれだけじゃ艦装が無い説明にはならねえよな。」

「ええ、おっしゃる通りです。結論から言いますとこの島と付近の海域では未知の力が働いており、艦娘と深海棲艦もその力の影響を受けているのです。」

未知の力？なんだか色々あり過ぎて逆に驚かなくなってきたな。

「島を発見した艦隊は倦怠感を感じていました。しかしそれは長旅による疲れと割り切り、調査の為に気にすることなく島を目指しました。そして島を前にして遭遇した深海棲艦といつも通り戦闘に入りました。こちらの艦隊の練度はそこまで高くはありませんが、相手は何の変哲もないイ級数隻。疲労こそあれど、油断でもしなければまず負ける要素のない相手です。しかしこちらの艦装による攻撃はまるで通用せず、逆に一方的に攻撃を受け撤退に追い込まれたのです。」

イ級に攻撃が通用しない？ イ級って基本的に一番弱い深海棲艦だろ？そりゃ絶対に勝てるよまでは言わないけどさ、一方的にやられ

るってどういうことだよ？

「その後は万全を期して選りすぐりの艦隊を組み、再び島を目指しました。しかしやはり謎の倦怠感に襲われた上に、深海棲艦に対してこちらの攻撃は通用しないという二重苦に襲われました。そこで仕方なく艦隊は強行突破を敢行し、ようやく島への上陸を果たしたのです。」

「へえ、ってそれじゃ詰んでねえか？こっちの攻撃は通用しないのに、相手の攻撃は受けるんだろ？上陸したところで袋のネズミじゃん。」

「ええ、ですがこちらにも精鋭部隊。ただやられるだけではなく冷静に相手の攻撃を観察した結果、この海域のイ級は砲撃を行うことはなく、噛み付きや体当たりなどの肉弾戦を中心とした戦い方を行うことが分かりました。また攻撃力は肉弾戦故か普通のイ級よりもむしろ低かったのですが、何故かダメージを服に受け流すことが出来ず次々とダメージを受け、大きな被害を受けたそうです。」

「そうなのよ。だから天龍ちゃん、この海域を任されている私達は艦装を持っていないし、インナー姿で戦っても服にダメージを受け流せない以上、受けるダメージは変わらないのよお。」

「なるほど、それなら下着姿で出撃しても問題は……いやいやそういう問題じゃないだろ!?ダメージ変わらないから下着でいいやつて……そんなアホみたいな発想があつて堪るかーっ!!」

「もうっ、天龍ちゃんったら。さっきから下着下着つてずっと言ってるけど、これはインナーっていうんだって。」

「いやいや名前はどうかだっていいんだよ！大体インナーも下着も意味は一緒だろうが！」

「……………んんっ!!天龍さん龍田さん、話を戻してもよろしいで

「しよるか？」

あつ、ヤベっ！神通からなんか不機嫌なオーラが出てる。神通って普段は穏やかだけど絶対に怒らせたらマズいタイプだろ？ほら、あの龍田も神通が咳払いした一瞬ビクツってなったもん！

きつと怒らせたなら『私を本気にさせたのですね？』とかいつて逞しい姿に変身するんだろ!?そんなでもって生まれたことを後悔するよ
うな酷い目に遭わせるんだろ!?フッフ、怖え。

神通は一度、内心で怯えるオレをジロリと睨むと、気が済んだのか表情を改め続きを話し始めた。

「ゴホンツ……それでですね、イ級を振り切りようやく島への上陸を果たした艦隊は見慣れない妖精さんを発見しました。」

「見慣れない妖精さん？」

妖精さんってアレだろ？詳しい正体は不明だが、艦娘の建造から装備の開発、更には戦闘の補助までしてくれる、艦娘にとってなくてはならない小人のことだろ？

「ええ、それがこちらです。」

いつの間にか神通の手のひらの上には妖精さんがいた。

うーん？どっからどう見ても妖精さんだな、どこが違うんだ？

……あれっ、耳が葉っぱのように尖っている？いわゆるエルフ耳ってヤツか？

「気付きましたか天龍さん。彼らは竜人妖精さんといい、この島固有の妖精さんです。そして彼らの技術も本土の妖精さんとは大きく異なるものでした。」

うーん、神通の話すげえ長いなあ。ちよつと飽きてきたぞ……あつ、何だか神通の目付きが怖くなってきた！聞いてます、ちゃんと話聞いてますから！

「続けて大丈夫ですか天龍さん？……そして上陸した艦娘達に対して

竜人妖精さんは資材を要求してきました。そこで試しに行き掛けに偶然手に入れていた鋼材を竜人妖精さんに渡してみたところ、妖精さんはあつという間に一振りの無骨な大剣を作り出しました。」

「大剣？機銃とかじゃなくて？」

「ええ、大剣です。ロクな設備も無しにその場で2メートル前後の巨大な鉄製の剣を作り出したのです。ですがこれを見た当時の艦娘は落胆しました。まあそれは当然ですね、これまで砲撃や航空機で戦っていたというのに、いきなりこのような原始的な得物を渡されれば困惑するのも無理のない話です。」

そりやそうだ。オレだって本来なら艦装の一部として刀を持つてるんだが、艦娘の戦いは基本的に射撃戦だからな。本当に余程のことがない限りは使わねえつもりだ。そもそも刀を使う距離まで敵に近付かれた時点でこちらの負けみたいなものだ。

「ところがどの艦娘もその大剣を上手く扱うことは出来ませんでした。理由は簡単です、金属製の巨大な剣が非常に重くて持ち上げるのがやっとだったからです。しかし艦娘は仮にも軍艦の生まれ変わり。艦装に秘められたエネルギーを艦娘本人に供給することによって人間と変わらぬ体格でありながら当時の出力と同等の力を発揮出来ません。いかに鉄製といえどもその程度の大きさの剣を持つなど簡単にはずでした。だというに何故か扱うことが出来ません。」

ええ、冗談だろ？剣が重くて持てないのに、どうやって材料の鋼材を運んだんだ？

基本的に艦娘ってヤツは普段の生活では力にリミッターを掛けるから鎮守府の壁に穴を開けたり、うっかり提督を殴ってミンチにするようなことはない。日常を送るのに、過ぎた力は必要無いからだ。

だけど本気を出したら素手で敵艦の装甲を引き裂くようなヤツだっている。まあそれも一部の戦艦とかであって、全ての艦がそのまま出来るワケじゃないけどな。

とにかく艦娘のパワーは凄いなよ、何たって元が軍艦だ。まあそれも結局は艦装の力であって、艦装を外したら見ての通りの細腕なんだけだな。

「しかし先の戦闘とも呼べない強行突破で囷を務めていた為に大きく破損していた艦装を用済みと判断して既にパージしていた1人の艦娘がその大剣を手にとってみたところ、不思議なことに大剣は簡単に持ち上がったのです。艦装の無い艦娘の力など人間とほとんど変わらないというのです。そしてその艦娘は駄目元で大剣を使いイ級に戦いを挑みました。すると今まで砲撃が全く通用しなかったのが嘘のように互角の戦いを繰り広げ、そして見事イ級を追い払い無事に鎮守府に生還することに成功したのです。」

「ん？何で艦装が通用しなかったのに鉄製の剣で戦えたんだ？それに艦装が無い艦娘だけが持つことが出来たって……実は選ばれし者だけが使える隠された力を持った伝説の剣だったのか？」

オレがそう言ったとたん龍田が笑い出し、神通も何とも言えない顔をして固まってしまった。

「クスクス、天龍ちゃんったら何を言いだすの？変なことを言って神通さんを困らせちゃダメでしょ。」

「何だよ、いいじゃねーか!?そっちの方がカツコいいだろ！」

あーもう笑うな！自分じゃ見えないけどオレきつと顔真つ赤だぞ!?

文句を言うオレとそれを笑いながら流す龍田のやり取りを見て調子を取り戻したのか、ようやく神通も再起動を果たした。

「……いいえ、剣そのものは頑丈なだけの鉄の剣です。ですがここで先程の力が関係してくるのです。」

そして神通は真面目な顔をしながらも、まるで冗談のような話を始めた。

「その後の研究と竜人妖精さんの情報提供により、この島とその周辺の海域には原理不明の特有の力が働いていることが分かりました。その名もアタリハンテイ力学です。」

ア……アタリ……ハンテイ……力学う???

服の調達すらまだなのに、未だに続く神通の長話と意味不明な単語の連続に、着任から1時間経たずして疲れ果てる天龍なのであった。

天龍ちゃんと新たな世界4

神通から発せられたアタリハンテイ力学という言葉にオレは混乱していた。

「だってあんな真面目な顔から、出てきた内容が当たり判定だぜ？」

「当たり前だろ？ シューティングゲームとかに出て来る『どう見ても自機に敵弾が当たっているけど、内部データ上では当たっていないからセーフです。』みたいな奴のことだろ？」

「でも神通の雰囲気は本気だったしマジであるのか……その力学っていうのがよ？」

「アタリハンテイ力学りきがくとはこの島を含む海域周辺にアタリハンテイ力りきばくという特別な力場が発生しているという理論のことです。」

「どうやらマジっぽい。だけど顔が真面目なのに出てきた話は間抜け過ぎる。真剣な顔でアタリハンテイって……。理論の名前はもうちょっと何とかならんかったのか？」

「科学的な話まですると専門的な用語が多い上にキリが無いので省きますが、アタリハンテイ力に対して、艦娘の艦装との相性は最悪でした。未だに研究中であり解決方法は不明なもの、アタリハンテイ力の影響下において、艦装による攻撃は命中しても深海棲艦にまるで通用せず、素手で石ころを投げつけた方がよっぽど効果があるという信じがたいデータが出たのです。」

「それって要するに、力場の中では艦装を使った攻撃は深海棲艦に通じないってことなのか？」

「いえ、艦装そのものの攻撃力が無くなったと言った方が正しいでしょう。その後、実験としてアタリハンテイ力の力場内にて艦娘同士での実弾演習を行いました。そして通常では間違いなく大破するような砲撃が命中したにも関わらず、力場の中ではダメージがありません

んでした。つまり艦娘、深海棲艦を問わず艦装の攻撃は無効化されるということですよ。しかしこの研究によってイ級が肉弾戦を挑んできた理由も分かりました。彼らの砲撃もこちらには効果が無いことが分かっていて、砲撃を一切行わなかったということですよ。」

「どうやらオレの考えは、半分当たりで半分外れのようだった。」

「だから熟練部隊でもイ級に勝てなかったのか。まあ攻撃が通用しなけりゃ勝てるワケが無いよな。」

「天龍ちゃん、話はそれだけじゃないのよ。」

「ええ、このアタリハンテイ力の影響下において艦装を装備した艦娘は本来の力を発揮出来ません。島に近付いた艦隊が倦怠感を感じたのも当然ですよ。今まで艦装から供給されていたエネルギーが途絶えていたのですから。むしろ重い艦装を背負っている分、普段より辛いでしょ。服にダメージを受け流せなかったのも同様にアタリハンテイ力が関係しています。この島の物理法則の前に妖精さんの技術は通用しないのです。」

「だけど何で艦装を捨てると重い剣が扱えるようになったんだ？艦装の補助が無いのと艦装が無いのは同じようなもんだろ？それに鉄の剣で深海棲艦と戦えた理由にもなってないじゃん？」

「当然の疑問ですね。それは艦娘や艦装が力場の影響を受けるように、大剣や深海棲艦もアタリハンテイ力の影響を受けていたということです。竜人妖精さんの技術によって作られた大剣はまさにアタリハンテイ力の申し子。アタリハンテイ力と相性の悪い艦装を身に着けた艦娘には扱えず、逆に艦装の無い艦娘に扱えた理由もそれによるものです。艦装を外した艦娘はアタリハンテイ力のマイナス面ではなく、プラス面による影響を受けます。つまり艦装の無い艦娘が突然怪力になったのではなく、艦装を捨てたことでこの島の物理法則に適応出来たということです。アタリハンテイ力に適応さえすれば、同じくアタリハンテイ力によって作られた大剣を扱うことなど造作もありません。深海棲艦の怨念による守りのオーラも、アタリハンテイ力に適応した武器の前では無いも同然ですよ。そして仮に怨念を突破したとしても並の砲撃にも耐えうる深海棲艦の装甲を、単なる鉄製の剣

で貰けたのもアタリハンテイ力によって物理法則が異なっていたからです。」

「そう、だからこの鎮守府には艤装が無いのよ。武器にも出来ずエネルギーも得られない艤装は文字通りのお荷物。そしてアタリハンテイ力への適応を妨げるなら荷物を通り越して邪魔者だからねえよ。」

「そして艤装が役に立たない以上、艦娘の服も普通の衣類となら変わりありません。だから龍田さんはインナー姿でも変わらないと言ったんです。ですが天龍さん、さつきから私や龍田さんがいつも通りの服を着ていることを不思議に思っているでしょう?」

「そりやそーだ。龍田は胸を強調したいいつもの黒い服を着ているし、艤装が無いって言ったくせに頭の上に輪っかも浮かんでいる。神通の方も、頭には緑色の鉢金リボン。着てるのはオレンジと白の二色のカラーがオシャレな、フリフリとしたデザインが特徴的な川内型改二のセーラー服。」

それに対してオレの格好は眼帯とブラとパンツ……これって新人イジメじゃね?」

「この服も見た目は艦娘としての衣装そのものですが、実際は竜人妖精さんの技術によって作られた防具で、アタリハンテイ力により薄い見た目とは裏腹に高い防御力を持っています。」

「この艤装モドキも実は竜人妖精さんに作って貰った頭用の防具なのよ。だから見た目は艤装だけど実際は別物なの。」

「じゃあオレも竜人妖精さんに防具を作ってもらえばいいんだな?」

オレは期待を込めてそう聞くが、神通は困った顔をしながら続きを話し始めた。

「はいその通りです。ですが防具を作るのにもお金と素材がいります。これは普通の服ではないのですよ。これらの装備は鉱石や虫を集めたり、剥ぎ取った深海棲艦のパーツを素材にして作られています。」

「えっ、服の素材って綿とかポリエステルとかの線維じゃないのか？ってというか鉱石はまだいいとして虫？そして深海棲艦のパーツ!?それがどうやって服になるんだよ?」

「それが竜人妖精さんの技術なのよ。それと生産の素材にはチケツトやコインが必要になる場合もあるわよお。」

「それは厳密には生産許可証ですね。生産の際には素材の代わりにそれらを要求されることもあります。」

「じゃあそういった材料とお金を持ってなきや服は作ってもらえねえのか?」

「ですから服ではなく防具なのですが……まあその通りです。」

「ってことはオレはまだここに着任したばかりで素材なんて何にも持っていないから、しばらくは下着のまま過ごさせてことなのか?……それは嫌だなあ。」

「つうか、防御力とかどうでもいいから普段着はねえのかよ?しょうがない、龍田に相談してみるか。」

「なあ龍田、素材か防具を分けてくんねーか?流石にこの格好のまま過ごすってというのは辛いんだけど。」

「そう言ってみるが、流石の龍田も困り顔で首を横に振った。」

「それはダメよお、眼帯をあげたのは特別サービスなのよ?武器や防具はね、持ち主の実力を示す証明でもあるの。強力な深海棲艦の素材で作られた装備を身に着けているってことは、その相手を倒して素材を手に入れられるだけの實力を持っているっていう証明なの。それに實力が無いのに装備だけが強力なものになると、弱い相手なら装備の力だけで倒せてしまうから慢心と實力不足にもつながるわあ。だから基本的に装備と素材の受け渡しは禁止されています。」

「しょうがねえな、だったらさっさと素材とやらを手に入れようじゃないか。要は深海棲艦を倒せばいいんだろ?裸同然で深海棲艦と戦うってというのは少し不安が残るが、ずっとこのままじゃいられねえしな。」

「はいその通りです、ですが天龍さんはまだ武器をお持ちではないですよ。先程も言いましたがこの鎮守府では艦装ではなく竜人妖

精さんが作ったアタリハンテイ力に適応した武器を使つて戦います。ですが武器には様々な種類があります。なのでまずは最初に使う武器を選んで下さい。」

そう言うのと神通は何やら雑誌のようなものを取り出した。

「これは月刊情報誌『狩りに生きる』です。狩娘なら誰もが一度は目を通すべき本ですので、天龍さんも是非どうぞ。この号は武器特集ですので、ここから使いたいものを選んで下さいね。」

どれどれ？なんかいっぱいあるなあ……。

「えーと大剣……一撃の威力は全武器中でも最高クラス、力を溜めて更なる破壊力を生む、デカくて使い勝手悪そうだなあ。ランス……相手の弱点を集中して狙う鋭い攻撃と鉄壁の防御力が自慢ねえ、ちよつと地味だな。このスラッシュアックスってのは何だ？斧が剣に変形するって言われてもよく分かんねえぞ。ふむふむへビイボウガン……機動性と引き換えに放たれるな弾丸の威力は絶大かあ、せつかく臙装じゃなくて武器が使えるんだから遠距離戦じゃなくて接近戦がやりてえな。ん？これは何て読むんだろ……せ、せん？穿龍棍でいいのか？見た目はトンファアームみたいだな。」

オレが武器選びに悩んでいると横から神通が声を掛けてきた。

「天龍さん、狩猟笛はいかがですか？攻撃とサポートが同時に出来るテクニカルな武器ですよ。」

そう言つて神通が取り出したのは、変な形をした身長よりも大きな棍棒……いやよく見たらこれはマイクか？大きさを無視すれば、駄菓子屋で売つてそうなチープな見た目のマイクだ。でも笛つつつたな、じゃあこれはマイク型の笛なのか？

マイクのボディにデフォルメされた那珂ちゃんのイラストが描いてあつてなんか恥ずかしい。マジで何だろうなコレ？このマイクでぶん殴つて戦うのか？

「狩猟笛には演奏という他の武器に無い特徴があります。そのメロデーは聴いた者の秘められた力を引き出す不思議な効果があるんですよ。」

音楽を聴いたらパワーアップするってことか……音楽療法を通り越してドーピングか洗脳の域じゃね？そーいや世の中にはドラム係やタンバリン係ってというのがいて、ひたすら演奏を続けて仲間の補佐をするらしい。これもそれ系の道具なのか？

「狩猟笛ごとにメロデーや効果も違うので、色々な笛を作って使い分けるのも楽しいですよ。この那珂ちゃんマイクの場合だと吹くと恋の2―4―1―1のメロデーが流れます。私のお気に入りなんですよ。」

マイクなのに吹く？マイクなのか笛なのかハッキリしろよ……。

オレが狩猟笛に気を取られていると、負けじと龍田も何かを取り出した。あれって龍田の艤装の槍じゃん。でも艤装は使わないって言うってたな、じゃああれも艤装型の武器なのか？

更に龍田は槍とは別にもう1つ、オレの頭よりデカくて丸い何かを取り出した。そっちは何だ？槍とセットってことは盾か？

「じゃじゃーん！天龍ちゃん、操虫棍はおかしら？こっちも便利な武器よお。猟虫は相手のエキスを吸い取って、こっちのパワーに還元してくれる凄い能力を持っているの。それに猟虫も慣れれば可愛いわよお、育てる楽しみもあるしね。」

そう言つて龍田が差し出してきたものは……うわっ！でつけえ力ナブン!?何それ気持ち悪い！それに龍田の言う相手っていうのは当然深海棲艦のことで、エキスっていうのは要するに体液のことだろ？つまりこのお化けカナブンは深海棲艦に取り付いて体液をチュウチュウ吸い取るってワケだ……最悪な絵面じゃん、オエツ。

すると顔に出ていたのか龍田はあからさまに不満そうな顔をした。

「もお〜天龍ちゃん、私のマルドローンちゃんのこと気持ち悪いって思ってたでしょ？」

うっ、スマン。つい気まづくなつて手元の雑誌に視線を戻す、するとそこに書かれていたある武器にオレの目は釘付けになった。

「太刀……鋭い連続攻撃で敵を圧倒する。己の気を刃に宿すことで繰り出される気刃斬りは万物を両断し、持ち主の更なる力を引き出すことも出来る……これだっ！オレに合う武器は間違いなくこの武器だ、これが使いたい！」

興奮のあまりつい叫んじまったが、龍田と神通は気にすることなく納得したような顔をした。

「やっぱりその武器を選ぶのねえ。まあ最初からそうなるんじゃないかな〜って思ってたけど。」

「太刀を使われるのですね、分かりました。ではこちらをどうぞ。」

そう言つて神通がオレに手渡してきたものは……ナニコレ？削つただけの細長い骨か？

困惑するオレに神通は言い放つた。

「これこそ初心者狩娘に贈られる最初の太刀、その名も骨です。」

「やっぱり骨じゃないですかー！やだー！！」

見るからに頼りない骨なんかを渡されたショックで、四つん這いになつて落ち込むオレ。

すると傍に龍田が屈んできて、オレの頭を撫でながら慰めてきた。

「あのねあ天龍ちゃん、さつきも言つたけど最初から強い武器は与えられないの。それに弱い武器でも素材を使って強化をすることが出来るのよお。骨は素材が単純な代わりに色んな武器に生まれ変わる可能性があるの。だから天龍ちゃんが強くなれば、骨も一緒に強い武器になってくれるわよお。だから骨と一緒に世界水準を目指しましょう、ねっ。」

「……ええい妹に慰められるとは。けどそうだな、落ち込むにはまだ早いぜ！考えてみればまだ建造されて1日も経つてねえ、オレの伝

「説はここから始まるんだ!!」

「そうよ、その意気よ天龍ちゃん！（単純で助かるわあく。）」

「では改めまして天龍さん、あなたの活躍を期待しています。」

そう言っつて神通はオレに敬礼をしてきた。当然オレも敬礼を返す。

「おう、任せとけ！」

そしてそのままの勢いで執務室から退室しようとしたが、ふと一つ疑問を思い出したオレは足を止めて振り返り神通にこう尋ねた。

「そういや結局はんむすつて一体なんのことだ？」

「そうですね、それについてもお話しましょう。これも遺跡の研究の結果と竜人妖精さんによる話をまとめたものなので、憶測の域を出ていないのですが……。」

そう前置きをした後、神通は語った……。

「かつてこの地に暮らしていた人々は、同じくこの地に生息していた恐るべき強大な生物に脅かされていたといえます。しかしそんな人々を守るために巨大な武器を手に生物に戦いを挑んだ勇敢な者達がいきました。矮小な人の身で人知を超えた生物と戦い、そして見事に討ち取る勇者。そんな彼らのことを人々は尊敬の念を込めて狩人と呼んだそうです。今、私たちが使っているこの武器や防具も当時の狩人達が使っていた装備と同じ技術で作られています。そして艦である艦装を捨て、代わりに狩人の誇りと魂である武器を手にして深海棲艦に戦いを挑む私達は彼らにあやかっつてこう呼ばれているのです。」

狩娘と……。

天龍ちゃんと旅立ちの風1

「ウエミダー!!イクゾー!」

鎮守府で骨を手に入れたオレは、更に龍田からチケットの半券のよ
うなものを半ば無理矢理渡された。そしてオレは龍田にそのまま拉
致同然に鎮守府から連れ出され、小型ボートに乗せられた。特に抵抗
はしなかったとはいえ、初日からハイエースされるとは……。

龍田の運転するボートでオレが連れて来られたのは、鎮守府から少
し離れた場所にあるテントが設置された小島。どうやらこれは誘拐
ではなく、狩娘流の攻撃らしい。

艦娘……じゃなくて狩娘なんだから鎮守府の前の海から直接出撃
すればいいと思ったんだが、狩娘は基本的にこのテントがある場所を
スタート地点としてクエストっていう名の任務を開始するんだとき。
それにしても目の前に広がる海、見渡す限りの大海原! やっぱ海は
いいよな。狩娘になったとはいえ、オレがもともと大海原を走る船
だったのは変えようのない事実。船の生まれ変わりとして、海を見て
テンションが上がらないワケがない。ちよつと興奮し過ぎてセリフ
も噛んじまったぜ。

早速飛び出そうとするが、一緒に付いてきた龍田にやんわりと止め
られる。

「ちよつと待ってね天龍ちゃん。これから狩りに出るんだけど、その
前にベースキャンプの設備とクエストについて教えてあげるから。」

まず龍田が指差したのはすぐ後ろにあるテントとベッド。

「このベッドがあるエリアをベースキャンプと呼ぶの。ここはクエス
トにおいての拠点となる大切な場所だからしつかりと覚えておいて
ねえ。ダメージを受けたらこのベッドで休めば回復出来るわよお。」

「回復？戦闘で破損したら鎮守府で入渠するんじゃないのか？」

「そんな時間とコストの掛かることはしないわよお。狩娘は艦娘と違ってベッドで数秒仮眠すればどんな傷でもたちまち元通り。勿論資材も必要ないわ、寝るだけだからタダでいくらでも使い放題なの。補給だって必要無し。弾薬はボウガンなら必要だけど近接武器を使う私達には関係無い話だし、そもそも艦娘が使う弾薬はボウガンと規格が合わないから持って来ても意味が無いわ。当然ボーキサイトもね。軽巡洋艦の私達にはもともと必要無いものだけど、空母だってここでは艦載機を使わないから逆に補給のしようが無いわ。」

へえ、便利なもんだ。入渠するのは時間が掛かるし資材も使うかな、戦艦や空母ともなれば尚更だ。それが数秒寝るだけで修復されるっていうのは本土の奴らが知ったら羨ましがるんじゃないか？

それに狩娘は艦娘と違って弾丸もボーキサイトも燃料も何もかも必要無いんだろ？そういった資材が要らないってことは当然遠征の必要も無いから、オレや駆逐艦みたいな低燃費艦や潜水艦の酷使も無いワケだ。すげえな、超ホワイト企業じゃん！提督があんなのだから警戒してたが、ここの鎮守府に来てよかったぜ。

「もつとも入渠が無いだけで普通のお風呂はあるわ。中でもユクモ鎮守府にある温泉は別格よお。ユクモ鎮守府の狩娘はいつも風呂上りに特製ドリンクを飲みながらユクモ温泉たまごを食べてるんだって。ズルいわよねえ。」

やっぱりクロオビ鎮守府以外にも鎮守府ってあるのか。まあ諸島って言ってたし当然か。しかしユクモねえ、やっぱり聞いたことがないなあ。

次に龍田が指差したのはテントの横にある大きな青い箱。

「これは支給品ボックスっていうの。この中には狩りの最中に役に立つアイテムが入っているわよお。」

さっそく中を覗いてみる。これは海図か？確かに海図は必要だ、海図無しでの航海は危険だからな。でもこれはオレの知ってる海図と

ちよつと違うような？海図っていうよりまんま地図だな……。

こつちはビンに入った緑色の薬品と小さい固形燃料。あれっ、やっぱり燃料つているのか？でもさつき補給しないって言ったばかりじゃん、どういうことだ？

まあいいか、そんでこれは砥石だな。これは武器を研ぐのに使うんだろ？それくらいは分かるぜ。

そして最後に……えっ、何これ？木の棒が2本生えた石製のコンロ？イスもセットになってるな、というかコンロにイスが直接くつついてる。こんなデカイ物を何に使うんだ？いくら何でもかさ張るだろ。こんなデカイの邪魔で持ち運べないぞ？

オレの疑問を余所に龍田の説明は続く。

「これらは支給品といって狩娘なら誰でも自由に使っているのよお。だけどこれは飽くまで支給品、クエストが終わったら回収されちゃうから持ち帰ることは出来ないの。天龍ちゃんは今回が初めてのクエストだし、ゼニーも持ってないだろうから構わないけど、支給品とは別にちやんと自前のアイテムを持ってこなきゃダメよお。お金がなくても自前のアイテムはケチらない、ケチってやられたら元も子もないものね。それとこの支給品と一緒にクエストに出ている狩娘全員で使う物だから、仲間の了承無く独り占めにするのはマナー違反になるわ。使うときは気を付けてね、まあ今回は私はいらなから全部持って行っていいわよお。」

「なるほど、そういうルールがあるんだな。だけど独り占めしようにもこんな大量の荷物なんか持てねえぞ？」

「そう言うと思ったわ。はいっ、これあげる。」

そう言つて龍田が差し出してきたのは小さなウエストポーチと1本のナイフ、そして1枚のカード。

「このポーチは4次元ポケットつてワケじゃないけど、大型魚雷が10本入っても平気な上に重さを感じない不思議なポーチよ。次元連結……じゃなくてアタリハンティ力学のちよつとした応用によるものなんだって。荷物がかさばらないから狩りの際にはとつても便利よお。そしてこつちは倒した深海棲艦を解体して素材を剥ぎ取るの

に使う剥ぎ取りナイフ、狩娘の必需品だから大事にしてね。剥ぎ取った素材はポーチにどんどん入れちゃうといいわよお。最後にこれはギルドカードついていて、狩娘の身分証明になるものよ。絶対に無くしちゃダメだからねえ?」

「分かった、ありがたく受け取っておくぜ。」

受け取ったばかりのポーチに早速支給品を詰め込んでいく……うわっ、デカイコンロもイスごと入っちゃったよ!マジでどうなってるんだコレ?しかも全然重くねえ!

「天龍ちゃん、はしゃぐのはいいけど話はまだ終わってないわよ。」
慌てて龍田の方に向き直す。まーた恥ずかしいところを見られちゃった。

「こっちの赤い箱は納品ボックスっていうんだけど、今回は使う予定はないから説明は次回ね。それでね、基本的にクエストは1回につき50分の時間制限があるから50分以内に目的を達成する必要があるのよお。もし時間が過ぎても目標が達成出来ない場合は問答無用で失敗になるから気を付けてねえ。」

「えっ、たったの50分?1時間以下!?!じゃあ夜戦とかどうすんだ!?!」
「そんなもの無いわよ?」

えっ、無いの?夜戦は駆逐艦や巡洋艦にとって活躍の場じゃん、それが無いって本当か?

「夜になったところで与えるダメージは一緒よ?狩娘と艦娘は違うもの。それに空母でも関係無く攻撃出来るから艦種も関係無いわ、ただただ暗くて眠いから面倒なだけよ?」

そっか、今のオレは狩娘なんだった。艦娘と同じで考えちゃダメだな……。

「どうしても夜戦がしなかったら最初から夜のクエストに行くといいわよお。クロオビ鎮守府には神通さんのお姉さんの川内ちゃんって娘がいるんだけど、その娘は夜のクエストに出たいからって昼はずーっと寝てるの、変わってるわよねえ。」

いや、わざわざ夜更かししてまで夜戦に出たくはないぜ。夜は普通に寝て、朝に戦った方が健全だ。話を聞く限りメリツトが無いからな。

それにしても姉の川内はちゃん、妹の神通はさんなのか……。鎮守府における力関係が垣間見えるぜ。

「それにしてもゼニーね、ひよつとしてコレのことか？」

オレはそう言つて龍田に1Z硬貨を見せてみる。

「そうそうそれがゼニーよ、カリユード諸島で使われている通貨はそれなのよお。だけどそれをどこで貰ったの？これが初クエストだからまだお給料は出てないでしょう？」

「いやあそいつは提督が着任祝いとか言つてさ、オレの前に捨てていったんだよ。」

「……そう、分かったわ天龍ちゃん。(提督ったら天龍ちゃんにそんなことして……後で覚えておいてよね。)」

うっ、龍田のいる方から急にぞわつと寒気がしたんだけど、やつぱりこれって服を着てないせいなのか？相変わらず天気はいいし、寒いはずがないんだけどなあ？

「それじゃあ天龍ちゃん、改めて出発するわよお。」

「おうっ、狩娘として新生した天龍様の抜錨だぜ！」

島から海面に向かって飛び移り、そのままの勢いで出航する。全速前進DA！

……が、あまり進まない内にもう息切れしてきた。何でだよ!? 龍田はまだピンピンしてるっていうのに、これが練度の差か？

とうとう息苦しくなつて足が止まってしまう。

「……ハアハア、何もしない内から疲れてきたんだが。」

もう疲れて一步も動けない、オレの狩りはここで終わってしまうのか……？

「それはスタミナ切れよお、飛んだり走ったりするとスタミナを消耗するの。スタミナを使い過ぎると息が整うまで動けなくなるわ。だからスタミナが切れそうだと思ったら走るのをやめて歩いた方がいいわよお」

あ、そう………ふう………はあ、ようやく息が整ってきた。よっしゃ、動ける！

「ほら、支給品の中に燃料があつたでしょう？あれは携帯燃料っていつてスタミナの上限を少しだけ増やしてくれる効果があるの。それを飲めばもつと長い間走れるはずよお。私が疲れなかったのもあらかじめスタミナを増やしていたお陰だもの。」

これはスタミナ切れであつて燃料切れではないのか……。考えてみればガス欠になったら息が整つても動けるワケないもんな。けどスタミナは燃料で増やすのか？じゃあ燃料って何だよ一体？

疑問も残るが取り敢えずポーチの中からさつき入れた支給品の燃料を取り出して、言われた通り食べてみる……!?

うげっ、マズい!!何だよこの味、少し苦い上にパサパサしていて口当たりは最悪だ。だが文句は言っていられない。オレも大人だ、我慢してさつきと飲み込む。

………おおっ、味は悪いが確かにさつきよりスタミナが増えたような気がするな。

そしてマズいにも関わらず、何故かガッツポーズをとってしまふ。ふふっ、効果は理解出来たみたいね。スタミナが多ければ多いほど長く走ることが出来るわよお。それとスタミナの上限は時間が経つと減っていくから定期的にスタミナ補給をすること、いいわねえ？」

「了解だぜ！」

さーてつまらないことで出鼻を挫かれたが、今度こそ張り切って行

くぞ!

羅針盤は回してないし、そもそも持つてきてすらいないが高いテンションの前に、その存在自体も忘れて海図を片手に意気揚々と進むオレ。

そしてそんなもの無くても平気と言わんばかりに進む龍田。

そんなオレ達の前によくやく深海棲艦と思わしき黒いシルエットが見えてきた。

黒い笠を被ったような頭部に、肥大化した下半身……あれは輸送ワ級か?全部で3体いるな。

輸送艦が相手じゃあ物足りない気もするが、初陣だと思えばまあいいか。連中はまだこつちに気付いてないみたいだし、先制攻撃のチャンスだ!

「よしっ、行く!はいはい天龍ちゃんストローップ!」ぜ……ってうわわわわっ!」

先手必勝とばかりに骨を構えて突撃しようとしたオレだが、今度は龍田にパンツの裾を掴まれて止められる。

「やめろっ、引っ張るな!脱げる脱げるっ!!」

慌ててパンツを引き上げる。自分自身ですら見たことのない(というか着任したばかりでそんなヒマも無い)オレのお尻をお日様の下に晒しやがって……。龍田じゃなきや引っ叩いてたところだぞ?

「何すんだよ!?あのままパンツとやってズガーツとやってドカーンとやれば完全勝利なのに……。」

「まあまあ、怒らないでプリケツ・オイゲンの天龍ちゃん。落ち着いてそこで見ててね。」

誰がプリケツだ、誰が!

龍田はオレをその場に残すと武器も構えず、呑気にワ級に近付いていく。

おいおい、いくら輸送艦が相手だからって油断し過ぎだろ。

そう思ったのだが、ワ級は龍田が目の前までやって来てもまるで気にした様子がない。

仕方なくオレもワ級の前まで出てみる。うん、やっぱり無視されて

るな。

「ほら見て天龍ちゃん、こんなに近付いても警戒されてないわよお。」
「何でだよ？戦闘能力に乏しいワ級とはいえ深海棲艦だろ。」

もう手を伸ばすと触れる距離まで近付いたぞ？

「あのね、カリユード諸島の海域で現れる深海棲艦はアタリハンテイ力の影響か、それとも純粋な環境の変化によるものかは分からないけど普通の海域で見られる深海棲艦とは生態や行動パターン、場合によつては外見まで違ってくるのよ。さつきイ級が砲撃してこなかった話をしたでしょ？それと同じで、この海域のワ級は狩娘のことを警戒しないのよお。」

だとしても油断が過ぎるだろ……。

することも無いので近くでワ級を観察してみる。人間に似た部位はそうでもないが、やつぱり艦装部分は結構大きい。そもそも頭を下げたひたすら海水を飲んで……いや、これは海水に含まれている何かを濾し取ってる？つまり食事中ってワケか。

それにしてもこれ程近付いても敵対どころか反応すらしないとは、やる気が削がれるぜ。

しかしやる気の無くなったオレとは対照的に、ワ級に向かって龍田はおもむろに槍……じゃなくて操虫棍を構えた。

「ほら天龍ちゃん、早速狩るわよお。」

オレも慌てて骨を構える。戦意の無い相手を襲うつてのもどうかと思うが、相手は深海棲艦だし、それに目の前に敵がいるのに油断している方も悪いか。

オレ達が臨戦態勢に入っても相変わらず無視を決め込むワ級。

そして……………

「たあーっ!!」

「うおーっ!!」

ザシユツ!!ザンツ!!

「ワウウ!?!」

オレと龍田の攻撃で2体のワ級が倒れ伏す。ようやく状況が飲み込めたのか、残った1体のワ級は反撃すらせずに慌てて逃げ出した。「オイオイ、あいつ逃げちまうぜ。」

「いいのよ、追わなくて。そもそもこの島に鎮守府が作られた最大の目的はアタリハンテイ力学の研究及び島と海域の調査であつて深海棲艦の殲滅じゃないもの。生態の違う深海棲艦を調査することはあつても、クエスト中に深海棲艦を見つけるたびに狩っていったら50分なんてあつという間に過ぎちゃうわ。」

「ええ、何か思つてたのと違うな。もつとこう深海棲艦は弾切れや撤退中みたいな事情でも無けりやあ、見つけ次第沈めるもんだと思つてたが……こんなんびりとした調子で練度が上がるのかよ?」

「これじゃあ練度99なんていくら時間があつても足りないぜ、ましてや150とか無理ゲーだろ。」

「練度なんて無いわよ、艦娘と狩娘は違うもの。当然MVPや戦闘評価だつてないわ。」

「えつ?練度が無い?じゃあいくら戦つても強くなれねーじゃん!」

ジャンジャジャーンと今明かされた衝撃の真実。

強くなれないつてことは、カリユード諸島に生まれた時点で世界水準の活躍は不可能。世界最強なんて目指す以前の問題だった。

オレが生まれの不幸を呪っていると、すかさず龍田がフオローを入れてきた。

「安心して天龍ちゃん、確かに狩娘には練度が無いからいくら戦つたところで火力や耐久力は増えないわ。だけど戦いで得た経験と知識によつて狩娘本人の実力が鍛えられるのよ。戦い慣れた相手なら行動パターンや弱点も分かってくるから楽に勝てるでしょう?それに装備が強くなれば結果として火力も耐久力も上がるでしょ、装備は本人の実力を示すつてさつき教えたばかりじゃない?」

言われてみれば確かにそうだ。同じ相手と戦い慣れれば、戦い方も洗練されてくる。

艦娘は練度が上がつても、何故か狙いはお粗末なヤツが多い。狩娘と比べて艦娘の方が遠距離で戦つてるとはいえ、戦闘経験が豊富な

くせに敵の旗艦以外を撃ち続ける艦娘は珍しくない。ようするにどれだけ練度が上がっても、艦娘の戦い方自体は大雑把なままってことだ。

そう考えると戦闘経験を頼りに無駄の少ない動きで敵を仕留める狩娘も悪くない気がしてきた。

「それに艦娘には性能差があるけど狩娘には性能差もないの。仮に練度1の秋津洲ちゃんと練度150の大和さんがそれぞれ艦娘から狩娘に転向したとしても、経験と装備の差が無ければ実力は互角になるのよお。何より狩娘にはレベルや艦種の縛りが無いからさつき言ったように空母だって夜に戦えるわあ。それに初期レベルのまるゆちゃんでも好きな武器を装備出来るし、間宮さんだって大剣を振り回して戦えちゃうの。どう、面白いでしょう?」

それは確かにスゲーな。認めたくはねえが天龍型っていうのは燃費がいい反面、性能は低い。

だから天龍型は前線ではなく遠征に出す提督が多いって聞くが、ここでならオレも名実ともに最強の狩娘を目指せるってワケか、燃えてきたぜ!

狩娘になってから取り柄の燃費が悪くなった気がするが、それは気のせいだ!

「練度がない代わりに狩娘の実力はハンターランクっていう数値で表すの。これはどれだけの功績を上げたかが基準になるから闇雲に戦い続けても簡単には上がらないわよお。ちなみに私のランクは5で神通さんは137、新人の天龍ちゃんは当然1よ。」

へえ、龍田はランク5か……ランクの基準を知らんから凄さが全然分からん!

それにしても龍田に比べて神通のランクって滅茶苦茶高いな。何をしたらそんなに上がるんだ?

疑問が顔に出ていたのかまたしても龍田の説明が入る。

「神通さんはハンターランクを解放しているからねえ。ハンターランクはある一定までは功績によって上がっていくんだけどお、その一定を超えた狩娘はひたすら狩りをしてランクは上がるのよお。これ

をハンターランク解放って呼ぶの。」

なるほどなあ、まあ最初はオレ自身の経験を増やすところから始めるとするか。

決意を新たにしていると、横で龍田がワ級を解体し始めていた。オレも龍田を真似てナイフを使ってワ級の解体をやってみる。

「うへえ、人型の相手をナイフで解体するって結構キツイものがあるな。」

「そう？すぐに慣れるわよ。それにここで慣れておかないと後で困るわよお。」

どうやらすぐに慣れるらしい……敵を倒すたびに毎回こんなことしなきゃいけないのか、狩娘っていうのも大変なんだな。剥ぎ取らずに丸ごと持って帰れりや楽なのに……。

それでもってワ級から剥ぎ取れたのは……粘液が滴る黒くべたつく謎の塊。何これ気持ち悪い、素手で触っちゃまったけど大丈夫なのか？

記念すべき初剥ぎ取りで妙な物体が剥ぎ取れて不安になるオレだったが、よく見ると龍田も平気な顔で同じものを掴んでいた。

「安心して天龍ちゃん、それは生燃料よ。ワ級は体内に良質の燃料を蓄えているの。」

なんだ、変なものじゃないのか。それなら安心………生燃料？生ってなんだよ？

更なる疑問にオレが頭を悩ませていると龍田は慣れた手付きでポーチから石製のコンロを取り出した。取り出したそれを当たり前のように海面に置き、イスに座りながらコンロに火を着ける。何で石で作られている物が水の上に置けるんだ？

そしてコンロに着いた火の上に棒で串刺しにした生燃料を……っ

て危ない！燃料に火を着ける奴があるかぁー！ツ！！

BGM：肉焼きのテーマ

そう思ったのだが何やら香ばしい匂いと共に燃料に焼き目が付いていく。そして龍田は程よく焼けた燃料を片手にイスから立ち上がる。

「上手に焼けました♪」

龍田の奴、頭がおかしくなったのか？いやおかしいのはオレの頭か？きつと幻覚が見えてるんだな。うん、そうに違いない。

「どこもおかしくないから大丈夫よお。これはこんがり燃料っていつてね、生燃料を燃料焼きセットで焼くところなるの。もともとは肉を焼く道具だったんだけど、竜人妖精さんが燃料を燃やさず焼けるように改造してくれたのよお、凄いでしょ？」

凄いや！何が凄かって意味が分からない過ぎて凄いや！！

「生燃料のままでは食べられないんだけど、火を通すことで美味しく頂けるようになるの。携帯燃料とは比べ物にならない程美味しいし、スタミナ回復量も多い狩娘の定番アイテムの一つよお。ほら、天龍ちゃんも支給品の燃料焼きセットを持ってるでしょ？焼いてみて。燃料を焼かずして狩娘ライフは始まらないわ！」

押し切られる感じでオレも燃料焼きセットを出して生燃料を串に刺して焼いてみる。燃料を焼くってまるで意味が分からんぞ！？不純物が混ざっているから精製しないと使えないってのなら分かるが、生だから使えないってどういうこと？

余計なことを考えながら焼いていたせいか香ばしいを通り越して何やらコゲ付いた臭いが漂ってきた。龍田の時の匂いとは全然違うなあ……………ん？やべつ、コゲてんじやん!?

慌てて燃料を火から上げるが燃料はコゲコゲになっていて、とてもじゃないが美味しそうには見えない。

「あらあら、それはコゲ燃料よお。食べてもいいけどオススメはしないわあ。まあこれから上達しましょうねえ♪」

記念すべき初めてのクエストで、これまた記念すべき初めての狩りも成功させたというのに、狩りの結果は大失敗して真っ黒にコゲ付いたのであった。トホホ……。

天龍ちゃんと旅立ちの風2

「ムグムグ……ゴホッ……ングング……うつ、エ、エ、ッ!?ゲホッゴホッ!!」

現在オレは先程焼いたコゲ燃料を食べている真っ最中だ。龍田には無理して食べなくていいって言われたが、自分のミスでこんなにした以上捨てて終わりっていうのはオレのプライドが許さない……とはいえ只今絶賛後悔中。言われた通り食うんじゃなかった。

これはいくらなんでもマズ過ぎる。黒コゲになったせいかガサガサしていて滅茶苦茶硬いし、噛めば噛むほど苦みが出てきてもはや苦行だ。ハッキリ言って飲み込めたもんじゃやない。何だか食べる前よりも逆にスタミナが減ったような気すらする。これと比べれば携帯燃料でもご馳走だ。

マズさのあまり年頃の女の子が出しちやいけない声まで出したぞ? ついでに鼻水まで出てきた。龍田あ、ポケットティッシュ持ってない?!

龍田が焼いた燃料は外はカリカリ、中はふつくらでジューシーなのに、オレが焼いた燃料はこのザマだ。ちよつと焼き過ぎただけでどうしてここまで差が出るんだよ?……っていうかそもそも何で燃料がそんな美味しそうに焼き上がるんだ? 燃料が燃えないってだけでも変なのに意味分かんねえ。

建造1日目にしてメシマズゲロインと化したオレだが、龍田はオレが吐いたことなど気に留めずに淡々と話を進める。

「健康上の害は無いから大丈夫、好きなだけ食べて好きなだけ吐いていいわよお。それとね、生燃料は燃料焼きセットじゃないと焼けないから注意してね♪直接火を着けると火事になっちゃうわあ。」

ここにいと段々と常識がおかしくなるな。燃料に火を着けると

燃えるってのは当たり前のことなのに何で一々説明されてんだ？なんかバカにされてるみたい。それと好きで吐いたんじゃないやい！

「以前提督が新たな金儲けを考えるとか言って、生燃料を直接火で焼いて大変なことになったのよお。全身に火が燃え移ってアチアチ言いながら大慌てで鎮守府から飛び出して、そのまま海に飛び込んだの。提督の肌が黒く焼けているのはその時の後遺症よお、ウフフツ」

あれって日焼けじゃなかったのかよ!?それよりも提督の奴よく無事だったな、いや無事じゃなかったから黒いのか？普通人間が焼けたら真つ黒じゃ済まないと思うんだが……。ひよつとしてあのおっさんも狩娘なのか？それと自分の提督が火だるまになったっていうのに、思い出し笑いするってヒドくない？

「それにしてもこの海って見るからに変だなあ、そこから中岩礁だらけじゃん。島に近いとはいえこの岩礁の多さは異常だ。」

「あら、気付いた？」

提督に対する新たな謎も程々に再出発するオレ達。そんな中でつい気になったことを呟くと、聞こえていたのか龍田が返事を返してきた。

「この島にある海域は、基本的にどこでも岩礁がまるで通路を作るかのように並んでいるのが特徴よお。この岩礁で囲まれた広い場所をエリアって呼ぶの。エリアとエリアをつないでいる通路はそのまま通路って呼んでいいわ。」

「へえ、何か不自然なくらい綺麗に岩礁が並んでいて気持ち悪いくらいだな。」

ブラツと壁のように並んだ岩礁は大小の差こそあれど隙間はほとんど見当たらず、普通の船どころか狩娘でも隙間を通り抜けるのは難

しそうだ。

「まるでポ○モンの世界の海みたいね。なみのりでマップの外に行かれると困るから、外に出られないように岩で囲んでいるのよ。きっとそれと同じなのねえ。」

「どういう表現の仕方だ……。せめて遊泳区域のブイみたいって言えよ。」

「この大量の岩礁が道みたいになっているお陰で完全に迷子になる狩娘は少ないんだけど、その代わり船はエリア内まで侵入出来ないのよお。だから船はベースキャンプまでしか使えないの。海域の調査が思うように進まない原因の一つはこれなのよお。目ぼしいものほとんどは岩礁地帯の中にあつて、外では大したものが見つからないっていうのもあるけどねえ。」

「でもあそこは岩礁が無いぜ。あそこから外洋に出られるんじゃないか?」

オレが指差した方向には岩礁の壁が無く、広々とした海が広がっている。あそこなら大型船だつて簡単に通れるぞ。

「そうね、じゃあ試しにそこからエリアの外に出てみてくれる?」

龍田に言われた通りに岩礁の無い場所から外に出るべく走り出す。

そう、さながら今のオレは自由を求めて大空へ飛び立とうとする一羽の鳥。

そして目の前の大空ならぬ大海目掛けてホップ、ステップ、ジャンプ……かーるいす!!と言わんばかりに勢いよく飛び出したオレは……。

「へぶっ!?!」

見えない壁に激突した。

そう、さながら今のオレはガラス戸に気付かず飛び込むアホ犬、水槽のガラスにぶつかる水族館のマナティ。鼻が痛い、思いつきり顔面

を強打した。

「そこから先はプレイエリアの外だから出られないわよお。」

何だよプレイエリアの外って!? P S V Rか!?

「クエスト中は海図に描かれているエリアの外には出られないの。クエスト中にここを通れるのは深海棲艦だけよお。」

「ええ、それって滅茶苦茶不利じゃん。」

この見えない壁の向こうから一方的に攻撃されたらたまんねえぞ。

「心配しなくてもターゲットの深海棲艦がエリアの外に出ることは滅多にないし、仮に出たとしても岩礁の内側を縄張りと考えているからすぐに戻ってくるわよ。増援の深海棲艦や縄張りの横取りを狙う余所の深海棲艦がそうだったところから入り込んでくることもあるけどねえ。」

「それは分かったけど、見えない壁があるなら先に教えてくれよ!」

お陰で意味もなく顔をぶつけたじゃねーか。

「だってえ、まさか走って飛び出すとは思わなかったもの。でも安心して、何かやらかすんじゃないかなあ〜って思ってた今度はちゃんと録画しておいたから♪」

「は?」

そう言う龍田の片手にはスマホが握られていた。

「最新機種は画質が違うわねえ。ホラ、車に轢かれたカエルみたいに見えない壁に激突した天龍ちゃんの勇姿がバッチリ撮れてるわよお。せっかくだからパソコンにもデータ転送しとくわねえ。」

気を付けよう 狩娘は急に 止まらない(字余り) by天龍

今度はちゃんと通路を通って次のエリアに出る。これ以上アホな真似はしないぜ。

ぶつけた鼻を押さえながらも慎重に進んでいくと、突然空気が変わった。

何者かの視線を感じる、それも好意的な視線ではなく敵意を含んだものだ。

オレも気を引き締め視線を感じた方へ振り向くと、またしても黒いシルエツトを見つけた。

ワ級よりも凶体は小さく見えるが、こちらに無関心だったワ級とは違い、間違いなくそいつはこつちを見ている。

近付くことで明らかになったそのシルエツトの持ち主はどう見ても駆逐イ級だ、数は5体。歯茎をむき出しにしてこちらを威嚇している。

戦意の無いワ級と違ってようやくまともな相手と戦える、そう思っ
てオレも骨を構える。

その一方で龍田は武器を……構えてない!? それどころか数歩後ろ
に下がってしまった。

驚くオレだが龍田は苦笑しながら理由を説明してきた。

「これがちゃんとした天龍ちゃんのデビュー戦だもの、それにいきなり
手助けしてたら狩りの練習にならないでしょ? 見守っていてあげ
るから頑張つてねえ。」

そういうことかよ、なら仕方ねえな。狩娘としては龍田が先輩かも
しれねーが、ここで姉の実力って奴を見せてやるぜ!

「イイーッ!!」

睨み合いが続く中、とうとう痺れを切らしたのかイ級が1体こちら
へ目掛けて突っ込んできた。へっ、誰がそんな見え透いた攻撃に当た
るもんかよ!

そのままの勢いで大口を開けて喰らい付こうとするイ級の攻撃を
身体をずらして回避、隙だらけの横っ面に骨を振り下ろす!

「オラアッ!!」

「イッ、イッ!?」

流石に削っただけの骨じゃあ斬れ味が悪いのか一刀両断とはいか
ないみたいだが、頭を斬られたイ級は軽く吹き飛び海面に倒れるとそ

のまま動かなくなった。

「「「イイーーツ!!」」」

仲間が倒されたのを見て、残ったイ級もこちらに襲ってくる。

「いいぜ、まとめて相手してやる！掛かってこい！」

1体目の体当たり……避ける！2体目の噛み付き……これも避ける！3体目と4体目の同時攻撃……くっ、突っ込んでくる3体目の顔を叩き斬って仕留めるが、4体目に右腕を噛まれる。だがこの程度のダメージでやられる天龍様じゃないぜ。

「よくもやりやがったな、こいつはお返しだ！」

「ギツ!？」

イ級の脳天に骨を叩き付け仕留める、だがその隙に別のイ級の体当たりを受け吹き飛ばされる。

人が裸同然だったのに酷いことしやがるな。だがまだ大丈夫、まだやれる。この程度で死にはしない。

急いで起き上がると先程のイ級が大口を開け目の前まで迫ってきていた……つて危ないっ！

「クツ!？」

「!？」

とつさに振り下ろした骨がイ級の頭部をかち割り断末魔も上げずに絶命する。

「オラッどうした、残りはお前だけだぜ？」

「イイツ!？」

残ったイ級に骨を向けると怯えたのかイ級は背を向けて逃げ出した……つてその方向には龍田が!？」

「あらあら、もう仕方ないわねえ。」

慌ててイ級の後を追うオレだが、その前に龍田は笑顔のまままで慌てることなく操虫棍を振るう。

龍田の操虫棍の切っ先は吸い込まれるようにイ級の顔面に命中し、吹き飛ばされたイ級はそのまま動かなくなった。

「フウー、どうだい龍田。初陣にしちや悪くないだろ?」

「うーん、最後に1匹逃しちやったのは頂けないけど初めてにしてはまずまずつてとこね。だけど最後まで油断しちやダメよお。」

勝ったのに怒られる情けないオレ……。まあ龍田の言うことも正しいし、ここは真摯に受け止めるか。オレは妹の忠告にも真面目に向き合う出来る姉だからな!

「天龍ちゃんが今倒したのがこの海域固有のイ級よお。神通さんが言った通り砲撃してこない代わりに噛み付いてきたり、体当たりをしてきたでしょ? イ級は1匹1匹は弱い代わりに群れを作って集団で襲ってくるのが特徴よお。」

倒したばかりのイ級を観察してみる。見た目は普通のイ級と変わらない。全長は2メートル前後ぐらいか? 力任せに斬り付けたわりには死体が傷付いてないな。やっぱり骨じやあ斬れ味に難があるのか?

そして最初に群れがいた場所を見るとそこにはワ級の死骸が転がっていた。これってさつき逃げたヤツだよな? ワ級にはかじられた痕もあって、それはイ級の歯形と一致している。

「気味が悪いな、こいつら共食いするのか?」

「そうじゃないわよお。基本的にワ級はワ級としか群れないし、イ級もイ級としか群れないわ。本来の深海棲艦は船種問わず集まれば編隊を組むんだけど、この海域の深海棲艦は基本的に同型艦以外とは群れを作らないの。そして他種の深海棲艦と縄張り争いをしたり、襲って食べたりするのよお。簡単に言えば草食動物と肉食動物みたいなものね。シカはシカ、オオカミはオオカミと群れるのが普通で、シカとオオカミは一緒に群れないでしょう? そしてオオカミはシカを襲って食べるわ、ここではシカがワ級でオオカミがイ級ね。もつとも強力な深海棲艦なら群れを作らずに単独行動するのも多いけどねえ。」

へえ、この海域の深海棲艦は随分と個性的なんだな。そりや海域や深海棲艦そのものの調査もするわけだ。

さて、勉強も程々に倒したばかりのイ級から剥ぎ取ってみるか。……これはイ級の皮に骨か。おつ、歯も取れたな。これで服が作れんのかな？

「なあ龍田、これで武器や防具が作れるのか？」

「流石にそれだけじゃ無理よく、素材が少なすぎるわあ。それにイ級の骨や歯は装備の素材としては小さいし貧弱だから他の素材のつなぎにするか、ボウガンの弾の素材にするのが一般的よお。」

クツソー、やつぱこんだけじゃダメかあ。服着てないせいかイ級に攻撃されたところが痛いんだよな。だけど傷自体は見当たらない。血も出ていなければ、アザすらない。傷が無いのに痛いつて太極拳の発勁みたいだな。

「傷が無いのが気になるんでしょ？それもアタリハンテイ力によるものなのよ。攻撃を受けるとちゃんとダメージは受けるんだけどお、それでも目に見える傷は出来ないの。だけど傷が無いからつてやせ我慢しちや駄目よお、精神論で耐えられるものじゃないからねえ。」

艦娘は攻撃を受けると服や艤装にダメージがいくけど、力場の中ではそうならないって言ってたな。今のオレは下着姿だから、下着が破れたら流石に困る。

とはいえ、あれだけ暴れていながら外見上は傷一つ無い上に、汚れてすらいないってのも変な話だな。傍から見たら全然苦戦していないように勘違いされるんじゃないかコレ？

外見上の傷が無くてもダメージがあるのなら、戦い続ける為にもこの見えない傷をどうにかして癒す必要があるな……。

オレが傷の手当てについて考えていると、龍田はポーチから緑色の液体が入ったビンを取り出してオレに見せつけてきた。

「ダメージを受けて消耗した時はベッドで休むこと以外にこの回復薬で治療出来るわよく、天龍ちゃんもさつき応急薬を取ったでしょ？それも回復薬と同じ効果があるわあ。支給品だから遠慮なく使った方がいいわよく。それに戦った後は砥石も使わないとねえ。武器も使っていると斬れ味が落ちてきて威力が下がっていくの。体力、スタミ

ナ、斬れ味。この3つを保つことが狩娘としての基本よお。」

それ青汁じゃなかったのか……。てつきりクエスト中の栄養補給に使うものだと思ってた。

試しに青汁……。じゃなくて応急薬を飲んでみる。ングツ……。うーんマズいつ、もう一杯……。いや、言うほどマズくは無いな。ちよつと青臭い味がするけどこれで薬だと思えばむしろ飲みやすい。携帯食料も見習えばいいのに……。

ん？おおつ、確かに痛みが無くなった！しかもこれは痛みそのものを誤魔化しているんじゃないかと、実際に受けたダメージが治っているっていうのが体感的に分かる。そして飲み干すと同時に、またしてもその気がないのにガッツポーズをとってしまう。どうなってんのコレ？副作用？

まあいいや、続いて砥石も使ってみる。砥石を使うのは初めてだが不思議と使い方が分かる、というか身体が勝手に動いて砥いでくれる。骨を砥石で研ぐっていうのも変な感じだが、研いだ骨の刀身も心なしか光り輝いているような気がするぜ！

そんでもって使った砥石はその場にポイツと捨てる。……。いやオレの意思じゃないんだ、身体が勝手に！まだ1回しか使ってないんだぞ、勿体ないだろ！？それと海にゴミを捨てるなよ、石とはいえ不法投棄は良くないって!!

あれ……。そもそもまだ刃の片面を4回砥いだけのような？これで本当に砥げてんのか？

「さて、天龍ちゃん。クエストには失敗条件があるように、成功条件も当然あるのよお。今回のクエストはイ級6体の討伐でえ、今ので5体倒したから残り1体やつければおしまいよお。」

「まあ成功しないクエストなんて受けたくないけど……。それじゃあ最後のイ級を探しに行くとするか、そいつを倒して今日のクエスト

は終わりだ！」

クエストの成功を目指して龍田と共にイ級を探していると、早速遠方に1匹のイ級を見つけることが出来た……が、こちらに気付いたイ級はこちらと戦う意思が無いのか逃げ出した。

「あつ、逃げるんじやねえ！待ちやがれ！」

「もうっ、深追いしちやダメよ。」

龍田は引き留めようとするが、無視してイ級を追い掛ける。丁度1匹だし、仮に逃げた先に群れでいたとしてもイ級程度に負ける気はしねえ！

えっ、妹の忠告を真摯に受け止める出来た姉はどこに行ったのかだつて？まあ残り1匹だし大丈夫だろ。(慢心)

スタミナの許す限り走り続けたオレは、ようやくイ級を追い詰めた。

「2つもエリアを走らせやがって……。ふう、さあて観念しな。もう逃げられねえぞ。」

「イイ〜！イイ〜！」

イ級は逃げられないと判断したのか、大きな鳴き声を上げ始める。何だよ、1匹じゃ勝てねえからって仲間でも呼ぼうつての？呑気にそう考えるオレだが、本当に仲間が来たのかバシヤバシヤと大きな水音が近付いてきた。本当に増援かよ、面倒臭いな。

だが、その方向に顔を向けたオレが見たのは信じられないものだった。

BGM：喧々たる来訪者

新たに表れたのは確かにイ級だ、だけど近くで見ると普通のイ級と

の違いがはつきり分かる。

デカイ！俺が最初に抱いた感想はそれだった。目測だが目の前のイ級と比べるとその体格は2倍以上、ヘタしたら3倍もある程の巨体だ！そして本来イ級には無いはずの鋭い角が額に1本生えている。そう、まるでナントカのS型、指揮官機に生えているようなブレード状の角が！

そういや龍田がイ級はイ級同士で群れるって言ってたな、じゃあこいつがイ級の群れのボスなのか？そんでもってピンチになった部下を助けに来たっていうのかよ？

大型イ級は今にも飛びかかってきそうだ。やんのかコラ？いくらデカイからってイ級の分際で絶好調の天龍様に勝てるつもりか、ああん!?そのイ級のついでに片付けてやるぜ！

……ん？今のオレの思考って三下のチンピラっぽくてちよつとダサい？まあいいか。

「先手必勝だ！食らいやがれ！」

ザンツ!!

大型イ級の脳天に振り下ろした骨の一撃は間違いなく命中し、確かな手応えを感じた。

普通のイ級ならこれで倒せる、デカイとはいえ脳天にぶち当てたんだ。例え死んでなくても大ダメージは必至だろ？

……ん？おかしいな、コイツ何時まで経っても倒れないぞ？

「ギイツー！」

突如大型イ級は激しく頭を左右に振り始めた。頭に食い込ませたままの骨もその勢いで弾かれ、その勢いでオレも一緒に吹き飛ばされる。

「なっ、コイツ!?全然効いてねえのか？」

よく見ると頭に付けたハズの傷もねえ！確かに骨を食い込ませてやったつてのにどうなっついていやがる!?

体勢を崩して隙だらけのオレに大型イ級が迫る！大型イ級の噛み付き！突進！頭突き！動揺していたせいで回避が疎かになっていたオレはどの攻撃も避けることが出来ない。防御力が貧弱なことも

あつてあつという間に削られていくオレの体力。

遠目によく龍田が追い付いてきたのが見える、だがオレの体力も風前の灯火だ。

そして……………。

「イーーーーッ!!」

「があっ!？」

大型イ級の渾身の体当たりを受けたオレは派手に吹き飛び、立ち上がろうにも身体に全く力が入らない。そしてオレは倒れたまま徐々に海に沈み始めた。これって……………まさか轟沈か……………?

クツ、情けねえ……………初陣でやられちゃうなんて……………。それも妹の忠告を無視して独断で深追いした上に……………自分の力量も考えずに格上に喧嘩を売って……………その結果がこのザマなんて……………本当に三下のチンピラじゃねーかよ……………。死ぬまで戦わせろとは言ったが……………別に好きで死にたいワケじゃない……………。

オレとの再会を……………あんなに喜んでくれた……………龍田の目の前でやられて……………妹を悲しませちゃうなんて……………姉失格だよな……………。

「龍田……………悪い……………先に逝くぜ……………」

海に沈んでいくオレが最期に見たのは悲しみに暮れる妹の顔……………ではなく、しようがないわねえとでも言わんばかりの呆れ顔だった。

何でだよ……………自業自得とはいえ……………目の前で姉が死ぬんだぞ……………もうちよつと……………悲しんでくれても……………いいだろ……………?」

……………そしてオレの意識は完全に闇に閉ざされるのであつ

た。

天龍ちゃんと旅立ちの風3

ガタゴトガタゴトガタゴトガタゴト……………

……………ん、何の音だ？そもそもここはどこだ？さっきまでオレは何をしていたんだっけ？

オレの視界は真っ暗だが、すぐ近くから木製の車輪が転がるような音が聞こえてくる。そしてその音に合わせて身体が小刻みに揺れているような気もする。

そうだ思い出した、オレはさっき轟沈したんだ！あれは絶対に夢じゃない。オレはデカイイ級と戦って、手も足も出ないままボコボコにやられてそのまま海の底に沈んだんだ。

じゃあ何でオレに意識があるんだ？死後の世界に来たのか？そんなでもって三途の川を渡っている最中なのか？

それともこれが噂に聞く轟沈した艦娘が未練と怨念の影響で深海棲艦になっちゃうっていう現象か？あれはただの噂だと思っていたし、そもそも今のオレは艦娘じゃなくて狩娘だ。いやそれは関係ねーのか？

深海棲艦になつたらどうなるんだろうな？この意識も無くなっちゃうのかな？龍田は深海棲艦になったオレを見てどう思うんだろう？泣きながらオレを沈めるのかな？それともオレと気付かないまま倒してしまうのかな？

暗闇の中で物思いに耽っていると、突然浮遊感を感じた。

「いびっ！」

続いて感じたのは固い地面に放り出されて転がるような感覚。痛

みで完全に目が覚めた。

まず目に映るのは眩しい太陽、そして青い空。起き上がってみると目の前には広い海原。

あれ？オレは確かに海に沈んだはず、だけどここは明らかに海の上だ。足元には地面がある、そして背後にはテントと青と赤の二つの箱が……ってここってベースキャンプじゃん!? やられたと思ったら何でベースキャンプに戻ってんだ!?

そんでもってオレの真横には安っぽい木製の荷車と2体の連装砲ちゃん。連装砲ちゃんって島風の艀装だろ、何でこんなところにいるんだ？

状況が飲み込めないオレの目の前に突然緑色の煙が立ち上った。

何だこれ、と思う間もなく煙の中から現れたのは龍田。マジで何だよこれ？いつの間に帰って来たんだ？イリユージョン？

龍田は不機嫌といった顔でいきなりオレに詰め寄って来た。

「もうっ、天龍ちゃんったら！あれ程言ったのにいきなり1オチするなんて！」

「いやっ、その……スマン。」

プリンといった効果音が付きそうな感じで説教を始めた龍田に思わず謝ってしまう。っていうか1オチって何？

「なあ、確かにオレは轟沈したはずだろ？なのに何で生きてんだ？」

生きてるだけでも奇跡だが、それと同時に身体に痛みが無いのも不思議だ。死ぬ寸前までボコボコにやられたのなら、未だに死に掛けないやなきやおかしい。それとも自分で気付いてないだけで、実は意識不明で一週間くらい寝てたとか？

「それは簡単な理由よお、だって狩娘は轟沈しないもの。やられちゃったから沈んだだけよ。」

「はあ？轟沈しない？でも倒されたから沈むって、轟沈と同じだろ？」
「全然違うわよお。轟沈した艦娘はサルベージ出来ないし、仮に引き上げたとしても残念だけど轟沈した時点で死んじやってるわ。だけ

ど狩娘はただ動けないだけだから、回収してくればいいのよ。やられてもすぐ動ける理由は連装砲ちゃんも簡単な手当てをしてもらっているからよお。それに全てが元通りつてワケじゃないわあ、増やしたスタミナが減ってるでしょう？」

何じゃそりゃ？狩娘はやられても動けなくなるだけ？確かにスタミナが減ったとはいえ、それは燃料で補給すればいいだけの話だ。つまり狩娘つてのは不死身なのか？ダメージ受けても傷が残らないし、艦娘と比べて回復もお手軽だ。ようするに無敵つてことじゃん！

「天龍ちゃん、やられても問題無いと思ってるでしょ？大アリよ、それじゃあ誰も一緒に狩りに行ってくれなくなるわよお。」

えっ、何で？死なないのなら時間は掛かるけどゾンビアタックで確実に敵を殲滅出来るじゃん。

そんなオレの疑問を余所に龍田の話は進んでいく。

「確かに狩娘はそう簡単には死なないわあ。それでもクエスト中には何があるか分からない。だから基本的に出撃している狩娘達が合計3回やられると時間制限が残っていてもクエストは失敗となるの。つまりクエストが終わらない内に3回もやられる狩娘は実力不足と見なされるってこと。1人でクエストを受けているのなら本人の責任で済むからまだいいけど、他の狩娘と一緒に狩りに行った場合でも合計で3回やられたら1人残らず撤退しなきゃいけないの。つまり他の狩娘の迷惑になっちゃうから無謀な行動は控えるべきなのよ。」

「よく考えたら艦娘でも独断行動は他の仲間の迷惑になるよな、提督からの指示が無いから忘れてた。ほんと反省してる、ゴメン。」

「分かるのならいいのよ。大丈夫、天龍ちゃんはまだまだ狩娘初心者なんだもの。これから成功も失敗も色々経験して立派な狩娘になってねえ。それとね狩娘は艦娘と違って提督の指示は受けられないの、全て現場の判断に任せられているのよお。だからこそ経験を積んで、どんな状況にも冷静に対応出来るようにならなくちゃいけないの。さつき天龍ちゃんはやられている時に応急薬飲まなかったでしょ？飲んでいれば私が到着するまで攻撃に耐えられたのに、ピンチに慌てて薬の効果どころか持つてることすら忘れてたんでしょ？提督から

の指示は出ないんだから自分で考えなきゃダメよ!」

はい、忘れてました。何でそんなことまで分かんたよ?しかし指示が無いのかあ、まああの提督じゃあどのみち期待は出来ねえけどな。

「そりやそうとなんでオレはベースキャンプにいるんだ?それに龍田も変な煙の中から出てきたじゃん。さっきの場所とここって結構距離あったよな?」

「私が使ったのはモドリ玉よお。玉が割れると出てくる緑色の煙の中に入ると、どこにいてもベースキャンプに一瞬で戻ってこられる不思議な玉なの。」

煙に入るとベースキャンプに戻って来られる?意味も原理も全てが分からん。どこでもドアと玉手箱の雑種か?

「天龍ちゃんが戻って来たのは1オチしてレンタクに乗せられたからよお。レンタクっていうのはね、連装砲タクシーの略で連装砲ちゃんが押す荷車のことよお。クエスト中に力尽きた狩娘は素早く連装砲ちゃんに回収されるの。そして連装砲ちゃんが危険な狩場から安全なベースキャンプまであつという間に運んでくれるってワケ。それと1オチっていうのは1回やられたっていうことを指すスラングよお。1乙や1死とも言わね。2回やられると2オチ、3回やられると3オチって言うの。」

へえ、それで1オチって言われたのか……えっ、連装砲ちゃんがオレを運んだの?それも一瞬で??あのデカいイ級がいるにも関わらず回収して???

「マジで?」

思わず連装砲ちゃんに聞いてみる。よく考えたら返事なんてあるわけないのに……。

「マジダヨー。」

「キエエエエエアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

連装砲ちゃんは笑顔であの短い手を振りながら返事をしてきた。

嘘だろ？連装砲ちゃんって喋るの!? 島風不在なのに動く連装砲ちゃんってだけでも不思議なのに喋るとかこれ本当に連装砲ちゃんか？中に誰か入ってるんじゃないのか？

「中ノ人ナドイナイヨ。」

中に人は入っていないらしい。じゃあAIで動いてるのか？

「連装砲ちゃんが気になるんでしょ？この子は見た目は島風ちゃんの艦装と同じだけど、艦装の連装砲ちゃんと違って島風ちゃんがいなくても自立しているし自意識もあるの。つまりこの子は生きていますよ。」

ええ、これが生き物？でも確かに島風抜きで動いてるし喋ってるしなあ……。

2体の連装砲ちゃんは龍田にも手を振ると荷車を押しながら何処かに行ってしまった。あ、やっぱり荷車ごと海の上を進むんだ。

「連装砲ちゃんは危険な海域から狩娘を連れて帰ってくれる代わりに、代金としてクエストの報酬金を3分の1ずつ払う仕組みになっているのよお。やられればやられるだけ報酬金が減るから注意してねえ。」

連装砲ちゃんに金を払うって……じゃあ連装砲ちゃんも金を使うのか。つまり生活の為に仕事をして給料を貰ってるってことだよな？島風がないから自分のことは自分でする必要があるから金が要るのか？あの可愛らしい見た目で金使って生活しているなんて生々しくてイメージが崩れるなあ。

「さて、私達も帰りましょ。」

「えっ、ノルマは6体のハズだろ？まだ5体しか倒してないじゃない

か。」

「天龍ちゃんが連装砲ちゃんに運ばれてる間に、私が1体やつつけちゃったわ。」

「Oh……何てこった。じゃああのデカイイ級は？」

「ああ、ドスイ級のことね。」

ドスイ級？デカイイ級のことか？そもそもドスって何？ボスじゃなくて？

「あれはイ級を率いる群れのリーダーよお。群れの中で1番大きく育ったイ級は普通のイ級には無いリーダーの証である角が生えてくるの。戦闘力も普通のイ級とは比べ物にはならないわあ。だけど所詮はイ級、そんなに大した相手じゃ無いわよ？」

「ええ、オレその大したこと無い相手に手も足も出なかったんだけど？斬り付けても全然効果無かったし。」

あの時斬り付けてもまるで効いた様子は無かった、っていうか傷一つ付いて無かったしな。

「狩娘が攻撃を受けても外傷が無いように、深海棲艦もダメージを受けても目に見える傷はそう簡単には出来ないわ。普通のイ級でも剥ぎ取る際に傷が無かったの覚えてるでしょう？」

そういやそうだった。あれはてつきり骨の斬れ味が低過ぎて斬れなかっただけだと思ってたけど、考えてみればアタリハンテイ力は狩娘と深海棲艦の両方に作用してたんだったな。

「そして大きな深海棲艦はちっちゃな深海棲艦と違ってそう簡単には倒れないし怯まないわよお。だけど効いてないように見えても効かないってことは絶対に無いわ、とにかく攻撃あるのみよ！」

「つまり効いてないように見えただけでちゃんと効果はあったんだな、無敵かと思つて焦つちまつたぜ。だけどこんな貧弱な骨と裸一歩手前の防具で勝てんのか？」

「簡単よお、ドスイ級は動きが単純だし攻撃力も耐久力も低いもの。天龍ちゃんが負けちゃったのは慌てて判断力が落ちたせいよ、その装備でも十分に勝てるわ。うちの提督はキック1発でドスイ級を倒したって言つてたし、バルバレ鎮守府のまつ毛提督なんかパンツ一丁で

深海棲艦を撃退したそうよお。」

マジで？あれをキック1発で蹴り殺すとか冗談だろ？それとそのパンツまつ毛提督はどういうシチュエーションでそんなことになったんだよ!?

「うちの提督は普段からあんな様子だからちよつと嘘っぽいけど、少なくともバルバレのまつ毛提督の話は本当よお。目撃者も一杯いるもの。当時のバルバレ提督は士官候補生ですらない一般人だったんだけど、深海棲艦を追い払った功績を認められて提督に任命されたんだって。バルバレ鎮守府が新しい提督を欲しがっていたっていう理由もあるけどねえ。まつ毛提督は提督としての素質もあつたみたいで、鎮守府の狩娘達からも慕われているそうよお。」

まつ毛提督すげえじゃん、ウチの提督と取り換えてくんねえかな？それにしても深海棲艦って一般人でも倒せるもんなの？つうか提督って人種はどんだけ強いんだよ？狩娘の立場がねーじゃねえか！

「あのねえ、狩娘は海の上を歩けるってだけでそんなに強くないのよお。アタリハンテイ力に適應しているだけで、艦装が無い狩娘は普通の人と同じか、少し強い程度の力しか出ないもの。純粹なパワーなら艦装のエネルギーを扱える艦娘の方がずっと強いわあ。」

「そーいやそうか、オレ達艦装使ってねえんだった……。」

「カリユード諸島で提督に選ばれるには立場や功績はもちろん必要だけど、アタリハンテイ力に適應出来るかどうかが一番重要なよお。」
「はあ？何でだよ？提督がアタリハンテイ力に適應しても狩娘には関係無いじゃん。それに適應出来るかどうかってことは、適應出来ないヤツもいるってことか？」

「それが関係あるのよお。提督と狩娘の関係についての詳しい話はまた今度してあげるけど、とにかく提督が戦えるってことは鎮守府最後の砦になれるってこと。それとね、アタリハンテイ力には狩娘が全員適應出来るってだけで人間が適應出来るかどうかは別の話よお。ほら、神通さんも言ってたでしょ？人々を脅かした怪物をアタリハンテイ力に適應した狩人がやつつけたって。誰でも狩人になれるのから最初から全員で怪物と戦っているわあ。」

誰でも狩娘にはなれるけど、誰でも狩娘の提督になれるワケじゃないのか。めんどくさい世の中だなあ。

「アタリハンティ力に適応した提督は水の上に立てないだけで狩娘と条件は同じだから武器や防具も使えるし、深海棲艦とも互角に戦うことが出来るのよお。流石に水上には立てないから、本当に最後の切り札になるけどねえ。ほら、私たちの提督が変わった鎧を着てたのは覚えてる？あれもアタリハンティ力に適応した装備なの。だから狩娘より提督の方が強いっていうケースも決して珍しくはないのよお。」

うへえ……提督強過ぎだろ。いや狩娘が弱いのか？

「ちなみにそのまつ毛提督が追い払った深海棲艦ってのはね、100メートルを超えた超巨大深海棲艦だったそうよお。」

100メートルの深海棲艦をパンイチの人間が撃退!?もう全部そいつ1人でいいんじゃないかな？

「まあいくらドスイ級が弱いと言っても、装備を整えて挑むのは間違いじゃないわあ。打倒ドスイ級を目指して頑張りましょうねえ。」

「はあい……。」

こうしてオレの最初の目標はドスイ級へのリベンジと、それに向けての武器の強化と防具の生産に決まったのだった。

あれっ？オレの予定、龍田に勝手に決められてる!?

天龍ちゃんと楽しい採集1

「天龍ちゃん、虫あみとピッケルは持ったわね!!行くわよお!!」

何だか妙にテンションの高い龍田に前回と同じように拉致されて、連れて来られたのはさつきと同じ海域。

龍田にアイテム屋で採集道具をたくさん買っとけって言われたからさつきのクエストの報酬を使って買ったんだけど、元々の報酬が少ない上に1オチしたせいで更に報酬は減ってるんだよなあ。

龍田は初のお給料なんだから全部貰うべきだって言って報酬を分けてくれたから数本ずつ買えたけど、ピッケルと虫あみ数本買っただけでオレの懐はスツカラカンだよ。

ちなみにアイテム屋の店員は連装砲ちゃんだった。レンタクの時点で分かってたけどやっぱり連装砲ちゃんが働いていて、それで給料貰っているらしい。明石なんていなかった。

「採集って楽しいのよお。戦いがメインじゃないから天龍ちゃんには物足りないかもしれないけど私は好きよお。戦いばかりしていると身体は疲れるし心も荒むわ、だからたまには息抜きついでに採集をするの。広い自然の中でのんびりと虫取りしたり鉱石を集めていると時間を忘れるわあ。トレジャーハンタークエストっていう時間内にとれだけ珍しいアイテムを集めて納品出来るかを競う楽しみ方もあって採集はとっても奥が深い。機会があったら天龍ちゃんも是非トレジャーにチャレンジしてみてねえ。」

……だつてさ。そんなに楽しいもんかね?虫捕りとか小学生じゃねえんだし、すぐに飽きそうな気がするんだが?

さて、言われた通りに採集道具持って海に来たわけだがそもそも海で虫あみって使うか？タモ網の間違いじゃなくて？海の上に虫なんているのかね？

フナ虫でも捕まえるのか？だけどああいう素早い虫は普通に網で捕るより、罌を仕掛けた方がいいんじゃないかなかったっけ？

疑問を感じながらも龍田と一緒に海上に繰り出すと、まず最初に入ったのは海面にプカプカと浮かぶ藻屑。海底からちぎれた海藻や漂流物が集まって出来た、云わば海のゴミだな。

ところが龍田はそんなゴミ溜めに屈んで何かを拾い始めた。

「ほーら天龍ちゃん、海藻よお。」

いやいやそんなもん拾うなよ、ばつちいな。晩飯のおかずにもするつもりか？

確かにオレ自身は全然金は持ってねーけど、鎮守府で生活してるから飯は出てるだろ？ましてや龍田はちゃんと金を持ってるだろ、そんなもので飢えを凌がなきゃいけないほど貧困してたっけ？

ちなみに食堂の店員も連装砲ちゃん、食堂の名もレンソウキッチンっていうらしい。別にオリーブオイルをたくさん使ったりはしない。案の定間宮さんや伊良湖なんていなかった。

「この海藻は薬藻やくそうっていうのよお。」

「薬草？どう見ても草じゃないだろ。」

「薬草じゃなくて薬藻よ。薬に海藻の藻って書いて薬藻。これを食べるとダメージが回復するわ。だけど回復量は少ないからこのまま使う狩娘は少ないわよお。」

薬藻って、それ食べて回復すんの？何か嫌だなあ。戦闘中に隙を見て海藻を頬張って体力を回復する狩娘……だっせえ。

生の海藻をモグモグ食べる龍田を想像してドン引きしていると、またしても龍田は藻屑を漁り始めた。

薬藻に続いて龍田が手にしたのは、海に浮かぶ朽木に生えていた青いキノコ……キノコ!?キノコって海水でも育つのか？しかもこんな

日当りのいい場所？

「疑問に思ったら負けよ。いいわね？」

「アツハイ。」

心を読まれた、ひよつとしてオレって顔に出やすい？

「出やすいわよお。それに天龍ちゃんのを考えてることはすぐ分かるわよ、なんたつて姉妹だものねえ。」

フッフ、怖い……。何だよその奇妙な姉妹の絆、オレは龍田の考えてること全然分かんないんだけど……。

「それでね、これがアオキノコよお。これと薬藻を調合すると回復薬になるの。回復薬は薬藻より回復力が高いから、これを使うのが基本よお。」

そう言いながら龍田は慣れた手つきでアオキノコと薬藻を1つのビンと一緒に入れると蓋をした。そしてシヤカシヤカと軽く振る。

そうするとあら不思議！振っただけなのにキノコと海藻が綺麗に混ざり合い、緑色の液体になったじゃありませんか!?

「はい回復薬の出来上がり。ほら、天龍ちゃんもやってみて。」

とりあえず龍田の真似をして、薬藻とアオキノコを拾うとビンに入れてシヤカシヤカ混ぜる。

そうするとあら不思議！ポントツという軽い音と共にキノコと海藻はビンごとペンギン人形へと生まれ変わったじゃありませんか……何でだよ!?

「あらあら、それはもえないゴミよお。調合に失敗しちゃうとそうなっちゃうのお。それにしても初めての調合は必ず成功するっていうジンクスがあるのに、それを失敗しちゃうなんて凄いわねえ。初調合を失敗するところなんて初めて見たわあ。」

「うるせいやい！」

「まあ調合は調合書っていう教本を読みながらやらないと、慣れた狩娘でも失敗しちゃうから気にしなくて大丈夫よお。（回復薬の調合成率は95%だけどね……。）」

いやそれ全然フオローになつてねーから……。

「この回復薬にハチミツを混ぜると更に効果の高い回復薬Gになるか

ら覚えておいてねえ。回復薬Gは狩娘の必需品よお。」

海藻とキノコとハチミツのブレンドドリンク？何その食欲のそそらない飲み物、絶対マズいだろ？

でもそれが狩娘の必需品なんだよな、良薬口に苦しってことか？なるべく飲まないで済むためにも攻撃を食らわないように気を付けよう……。

再び龍田と一緒に進んでいき、藻屑に続いて見つけたのは海面から顔を出す小さな岩礁。

だけど普通の岩礁じゃなさそうだ。周囲の岩礁と違ってそこだけ少しキラキラと光っているように見える。

「見て見て、これが採掘ポイントよお。ほら、普通の岩と違って光ってるでしょ。こういう岩からはピッケルを使って鉱石を採掘出来るから覚えておいてねえ。」

なるほど、確かに見た感じは普通の岩と明らかに違うな。何ていうか特別感があるな。

「じゃあ早速ピッケルを使ってみて。カツーンとやるのよ、カツーンとね。」

言われたとおりにやってみる。それっカツーンと。おっ、握り拳大の金属片が出てきたな。

「それは鉄鉱石ねえ。ありふれた金属で硬さはそれ程でもないけど、大抵の金属製の装備は鉄鉱石をベースに作ってるからとっても大切よお。」

「えっ、鉄の硬さがそれ程でもないっていうのか？鉄って十分に硬いだろ？」

「それがそうでもないのよお。この諸島では本土で見られないレアメタルがたくさん採掘されてるの、そしてその金属はどれも鉄より硬く

て丈夫なのよお。それに強力な深海棲艦なら力も強いから鉄製品の守りなんて簡単に貫いてくるし、皮膚も硬いから鉄の刃じやダメージが通りにくい。けどレアメタル製の装備ならそんな強敵とも渡り合えるわあ。そしてそんな鉄よりも強い深海棲艦の素材とレアメタルを組み合わせで作った装備の威力は更に強力よお。」

そういえば装備は己の実力を示すって言ってたな。つまり装備を強化して深海棲艦を狩り、そいつから手に入れた素材で更に強い装備を作っていくのか。それなら確かに装備自体が強敵を倒したっていう実力の証明になるな……。

「だけどそんなに強い金属があるのなら、それを本土に持って帰れば強い兵器が造れるんじゃないのか？」

「ところがそうはいかないのよお。そういった金属はアタリハンテイ力の力場内でないとうまく加工出来ないし、そもそも竜人妖精さん以外が加工しても真価は発揮されないもの。第一アタリハンテイ力と艦装の相性が悪いのは既に教えたでしょ？だからそういったレアメタルは本土に持ち帰っても珍しいだけでしかないのよお、不思議でしょ？」

そりゃ残念、そう簡単な話でもないのか。

「それでね、前に神通さんがこの島はいつの間にかあったっていう話をしたでしょ？そしてどうして現れたのかも分からないって言うってたわよねえ？」

「そーいやそんなことも言ってたな、それがどうかしたのか？」

「あのねえ、さつき見つけた海藻やキノコもこの島特有の物なの。薬藻とかアオキノコとか聞いたことないでしょう？」

「言われてみりゃその通りだな。海藻は体にいいって言うけど流石に傷の治療に使えるなんて聞いたことねえもんな。」

「でしょう？それでね島が突然現れたことや、見たことも聞いたこともない資源がたくさんあることから、この島は実は異世界からやって来たとか宇宙から降って来たっていう噂話まであるのよお。」

んなアホな……って言いたいけど頭ごなしに否定出来ねえな。確かに変な物が採れるし、そもそもこの島の周囲にだけ変な力場があ

るっていうし、正直言つて地球の物とは思えん。

そりゃ調査もするワケだ。とはいえ流石に宇宙から来たはねえだろ……ねえよな？

さあて、雑談も程々に採掘の続きを始めるか。そーれカッーン、カッーンと。

ポキンッ！

あん？何の音だ？

近くから聞こえた謎の音が気になりつつも、構うことなくピッケルを振り下ろす。

スカッ！スカッ！

……あれっ、手応えがおかしいぞ？

こればかりは流石に気になり手元に目を向ける。

うん、ちゃんとピッケルの柄があるな。折れたところの断面を見て気付いたけど、これって骨が材料になってんだなあ。これは一体何の生き物の骨なんだろ……ん？

「何じゃこりやあああああ!!!折れてるじゃねーか!?まだ数回しか使つてねーんだぞ!!」

「あらあら、もう折れちゃったのねえ。」

龍田が呑気にそう呟く。

いやいやこんな簡単にぶっ壊れてちや苦情モンだろ？買ったばかりで10回も使つてないピッケルがその日の内に壊れたんだぞ!!」

「ピッケルは見た目より壊れやすいのよお。でもそんなものなのよ、だって硬い鉱石を掘ってるんだもの。数回で壊れるなんて当たり前、ひどい時は1回使っただけで壊れちゃうんだからあ。」

マジかよ……だから複数本買えつて言つてたのか。

「ピッケルも骨と鉄鉱石を調合すれば作れるから覚えておくといいわよお。失敗すると回復薬と同じようにもえないゴミになるけどねえ。」

またもえないゴミか……。つていうか何でピッケルの調合、つーか

製作で失敗してもえないゴミになるんだよ？それにこのデカイピツケルが縮んで両手サイズのペンギン人形になるってのもおかしいだろ？これもアタリハンテイ力の影響なのか？

色々と納得がいかないが、とりあえず予備のピツケルで続きを掘る。それカツーン、カツーンと。結果として掘れたのは鉄鉱石数個と石ころ、そして丸くて硬そうな青い玉。

「あら、鎧玉じゃない。良かったわねえ。」

「鎧玉？この青い玉のことか？」

「ええ、そうよお。鎧玉には防具に蒸着させることで守備力を上昇させる効果があるのよお。今使っている防具の守備力が不安になったら集めてみるといいかもね。ちなみにユクモ鎮守府では武器玉と呼ばれていて防具だけでなく武器の強化にも使ってるみたいだけど、それはあまり一般的じゃないみたいねえ。」

なるほどな。確かに今の装備じゃ防御力には不安しかないからな、というか眼帯しかないワケだけど……。

だけでもっといい防具を作ったときにそっちに使ってもいいわけだよな、何に使うか悩むぜ。

どうせならいっぱい集めたい、そうすりゃ悩まずにすむからな。だけど目の前の光る岩は掘り尽されてただの岩になってるな。

「これってもう掘れないんだろ？鉱石ってそう簡単に集まるもんじゃないし、どうすんだ？」

「心配しなくても大丈夫よお、この島では鉱石の掘れるポイントって珍しくないから他所に行けばまだあるわあ。それに掘り尽した採掘ポイントも時間が経つといつの間にかまた鉱石が掘れるようになるのよお。」

いやいやそれはおかしいだろ、鉱石が湧くのか!?草とか生き物とかなら増えるのも分かるけどよ、掘り尽した石がまた掘れるってどういうこった？この石生きてねーだろうな？

手に入れたばかりの鉱石が突然動き出したりしないか不安になりながらも次に進むと、今度は朽木ではなく見るからに丈夫そうな大きな丸太がプカプカと浮かんでいるのが見えた。

「あら、運がいいわねえ。これはユクモの木よ。ユクモの木はユクモ鎮守府周辺で見られる木で、軽くて丈夫でしなやかだから建材や家具だけじゃなくて、武器や防具の材料にもなるのよお。せっかくだから剥いでいきましょう。」

よーし、龍田に言われた通りに丸太を剥いで……剥いで……うぎぎつ、何これ硬つてえ！さつきから頑張つてんに全然剥げねえ！
んっぐつ、ぎぎぎぎぎぎ……ふう、やっと剥げた。硬過ぎて筋肉痛になるかと思つたぜ、こんだけ硬けりやそりや装備の素材にもなるよな。

オレが硬い丸太と格闘している間に、龍田が丸太の根元に何かを見つけたらしくオレに向かって手招きしてきた。いい加減木を剥ぎ取るのにも疲れたし、龍田のもとに行つてみるか。

「ほら見て、ここに虫がいっぱい飛んでるでしょう？こういう虫は虫あみで採取出来るわよお。試しに虫あみを使つてみてね。」

虫くらい素手で採れと思わなくもないが、毒とかあつたら嫌だし渋々虫あみを振り下ろす。

そんでもって採れた虫は……ミミズ？飛ぶ虫じゃねーじゃん、つて
うかミミズつて虫か？そもそも土の中にいるハズのミミズが何でこんなところで採れるんだよ？

ウネウネしていて気持ちわりーな、こんなのポーチに入れたくないぜ。

「あら、それは釣りミミズねえ。名前の通り釣りの餌になるのよお。」

それに畑に撒くと豊作間違いなし、土壌を豊かにしてくれるわあ。そして猟虫のご飯にもなっちゃう使い道の多い虫よお。私もお世話になってるわあ。」

いやオレ釣りなんかしねーし、園芸もやってねーし、操虫棍も使わねーから。

しかしこの後、嫌になるまで釣りをするハメになるのを今の天龍は知らないのであった……。

天龍ちゃんと楽しい採集2

あれから虫あみを振るい続けた結果、釣りミミズに続いてにが虫とかいう青い虫に、セツチャククロアリとかいう蟻んこも数匹ずつ採れた。ミミズにアリって、小物ばつかで達成感が無いな……。

それにしても何で海の上でアリが捕れるんだ？これ羽アリじゃないって普通の働きアリじゃん。ついでに言うとうち虫あみも2本ダメになった。脆過ぎだろ、虫あみって消耗品だっけ？

「これで鉱石に木材に虫と色々な素材を集めたな。もうそろそろ帰っていいんじゃないか？」

「それはダメよお、これは採集ツアーじゃないもの。れっきとしたクエストだからノルマを達成する必要があるわあ。」

あ、そうですか。でもノルマって何すんだろ？またイ級でも狩るのか？

「今回のクエストの目的はね、黄金魚5匹の納品よ。」

「おう……ごん……ぎよ……？？新海の深海棲艦か？」

「もうっ、そんな訳ないでしょ。魚よ、魚。」

ええ、深海棲艦と戦うならともかく魚を捕るとか漁船の艦娘にでもやらせりゃいいじゃん……いやいや漁船の艦娘なんていなかったわ。

本土の艦娘ならイベントとかいってサンマ釣りをすることがあるらしいけど、狩娘も似たようなことやる必要があるのかあ。

「で、どこで釣りたいんだ？足元は全部海じゃん。」

「この諸島の魚は1ヶ所に群れる習性があるから適当なところに釣り糸を垂らしても何も釣れないわよお。心配しないで、私が釣りポイントに案内してあげるわあ。」

どんどん進む龍田に着いて行く。釣りポイントって遠いんだな、どこまで行くつもりなんだか？

それにしてもいい景色だよなあ。白い雲、空を飛ぶ海鳥、そして海の上を歩く2匹の無茶苦茶デカイ黄色のダンゴムシ、まさに大自然………ん、ダンゴムシ？

「何だあれ!?今度こそ新手の深海棲艦か？」

「ああ、あれねえ。あれはクンチュウっていうの。この海域に生息していたダイオウグソクムシがアタリハンテイ力の力場の中で生活しているうちに突然変異したものよお。」

ええ、アレがダイオウグソクムシ?ダイオウグソクムシって確か最近の水族館で人気の深海生物だろ。オレが知ってるのと色も形も全然違うじゃん、サイズも人間並みだし……。

そもそも深海生物が何で海面を歩いてるんだよ、アメンボじやあるまいし当たり前のように海面を歩くのやめろ!これももう突然変異つてレベルじゃないだろ、核実験の影響で怪獣化したっていう方がまだ説得力あるぞ!?

オレが変わり果てた水族館のマスコットに呆然としてみると、クンチュウは体を丸めてこちらにコロコロと転がって来た……って危ねえっ!ぶつかるかと思っただぜ。

「もうっ天龍ちゃん、そこはぶつかるトコでしょ?ほらほら空気読んで。」

嫌だよ!リアクション芸人じゃねーんだから!

「さてと、おふざけもこのくらいにして……クンチュウは深海棲艦じゃなくて、れっきとした野生動物よお。だけど縄張り意識が強いのか狩娘を見つけると攻撃してくるの。深海棲艦との戦闘中に横から体当たりされて、その隙に深海棲艦にやられた狩娘は数知れないわ。だから深海棲艦じゃないけど狩りの対象として認められているの

よお。」

深海棲艦だけじゃなくてグソクムシとも戦わなきゃいけないのか、狩娘も結構大変なんだな。

まあいいか、巨大化したとはいえ深海棲艦ですらないグソクムシなんかはこのオレが負けるわけねえだろ？ 転がってなきゃ動きもトロいから狙いやすいぜ、喰らいなっ！

ガキンツ！

「うわっ、弾かれた!？」

オレが振り下ろした骨の一撃はクンチュウの黄色い甲殻に直撃するも、まるで手応え無く弾き返された。

こいつ無茶苦茶硬い!?!いくら骨製の武器だとはいえ、深海棲艦のワ級やイ級に通用したんだぞ？グソクムシすら倒せねえってどういうことだよ!?!深海棲艦よりグソクムシの方が強いっていうのか？そんなの嫌過ぎるだろ！

「期待を裏切らないわねえ、天龍ちゃん。クンチュウの甲殻はとっても硬いから並大抵の武器じゃ弾かれて斬れ味が落ちるだけよお。その代わりクンチュウは衝撃に弱くて軽く蹴られただけでもひっくり返っちゃうの。ほら見て、さっきのクンチュウも天龍ちゃんに斬られた衝撃で裏返ってるでしょ？クンチュウはお腹が柔らかいから、ひっくり返してお腹を攻撃すればいいのよお。」

そう言いながら龍田はひっくり返ったクンチュウのお腹を操虫棍で突いた。途端に体液を撒き散らして動かなくなるクンチュウ。ホントにお腹が弱いんだな……こう言うとなんか腹の調子が悪いみたいだ、言い方を考えよう。

さて、言われた通りにもう一匹のクンチュウに蹴りを入れてみる。蹴られたクンチュウはサッカーボールのように転がっていき、止まると同時にひっくり返ってジタバタともがき始めた。

ボデイがガラ空きだぜ！振り下ろした骨は先程とは違いクンチュウに深々と突き刺さる。これには耐えられないのか、先程のクンチュ

ウと同じように緑色の体液をまき散らしてそのまま動かなくなった。「せつかくだから剥ぎ取りましょ？クンチュウの硬い甲殻は優秀な防具になるのよお。」

こんな硬い奴に剥ぎ取りナイフの刃が通るのかと不安になったが、ナイフの刃は硬い甲殻など無いも同然と言わんばかりにクンチュウを解体していく。ひよつとして骨よりナイフで戦った方が強くね？

「天龍ちゃん、剥ぎ取りナイフで戦おうって考えてるでしょ？残念だけどそれは無理よお。ナイフの刃の鋭い斬れ味もアタリハンテイカのお陰だから普通に使えばただの鈍らよお。基本的に倒した相手を解体するときには使わないし、戦闘中でも相手の身体に乗った際に弱らせるために刺す程度ねえ。普通に振り回しても全然斬れないし、ヘタすると折れちゃうわよお？そもそもナイフじゃリーチが無さ過ぎるわ。相手はノロマなゾンビじゃないんだから、そんな変な縛りプレイしたって誰も得しないわよお？」

また考えを読まれた!？どうなってるの？オレってひよつとしてサトラレなのか？

しかしナイフが折れたら剥ぎ取れなくなるな、そりゃ困る。それにオレは太刀で戦うって決めたんだ。まだほとんど使わないうちから他の武器、ましてやナイフに浮気なんて真似は出来ねえぜ。

若干ズレたことを考えながらも2匹のクンチュウを解体した結果、連中の甲殻が手に入った……っていうかまるでエビの脱皮殻のようにクンチュウの甲殻が尾頭付きで綺麗に剥ぎ取れた気がするが、気にしないことにしてポーチに詰める。

しかしポーチにクンチュウが2匹も入ってるって考えると少し気味が悪いな、次にポーチに手をつ突っ込むときには気を付けよう。

その後もテクテクと歩き続けてようやく目的地に辿り着いた。こ

ここが釣り場かあ、見た目は周囲の海と変わらないが泳ぎまわる魚のシルエットが肉眼でもハッキリと見える。思ったよりも浅いところを泳いでるんだな。

「やっ」と着いたわねえ。じゃあさっそく釣りをするわけだけど、まずはお手本として私が釣るからよおーく見ておいてね?」

そう言っつて龍田はポーチから釣竿を取り出すと、テグスにルアーを着けて海に投げ入れた。

「そーいやオレ、そもそも釣竿なんて持つてたっけな? 持つてないと釣り以前の問題だぞ。」

「そんなワケでポーチに手を突っ込んで探してみる。」

「おっ、この硬くて細い手触りは釣竿……………じゃないな。あつ、そうかこれっつてクンチュウの触覚だ! 釣竿にしちやザラザラしてるからなんか変だと思っただぜ……………ゲーツ!? あれ程気を付けようと思っただのにさっそく触っちゃった!」

鳥肌を立てながらも我慢して再度ポーチを探るとようやく釣竿とルアーが出てきた。

「なんだ、ポーチの中に釣竿専用の収納スペースがあんのかよ。しかし釣竿なんて買った覚えも入れた覚えも無いんだが、それなのに入ってるっつてことはこれはポーチのセット品っつてことか。」

「ちよつと天龍ちゃん、騒ぐと魚が逃げちゃうでしょ? それによおーく見てっつて言っただじゃない、ほら魚が掛かりそうよお。」

「言われた通りに水面に浮いたウキを眺めると、すぐ真下に垂れ下がったルアーに数匹の魚が群がっているのが見えた。そしてとうとうルアーに1匹の魚が喰い付く。すかさずリールを回す龍田、そして水面を突き破って現れたのは金色に輝く美しい魚。」

「あらあら、1回目で釣れちゃったわあ♪ 幸先良いわね、これが今回の目的の黄金魚よお。」

「え、コレが? 確かに金色だけど、どう見てもアロワナじゃん! これっつて淡水の熱帯魚じゃねーの?」

「なあんだ、そんなことが気になるの? この島では海水や淡水なんて考えてもしょうがないわよお。海でアロワナやデメキンが釣れるの

は普通のことだし、川でイワシやマグロが釣れるのも普通のことなんだから。」

普通とは一体……うごごご！まあいいや、どうせ考えたって分からねえんだ。とにかくオレも黄金魚を釣ろう。

とりあえず龍田と同じようにルアーを海に投げ入れる。するとさつきと同じように魚が集まってくる………が、全然喰い付かない。何でだよ、偽物の餌だってバレてんのか？

「落ち着いて天龍ちゃん、ルアーは釣り餌に比べて食いつきが悪いよお。慣れればなんてことないんだけど、天龍ちゃんは釣り初心者でしょ？こういうときはさつき採った釣りミミズを使うといいわよお。釣り餌はルアーと違って魚に食べられちゃうから何度も使いまわすことは出来ないけど、その代わりに喰い付きはバツグンなんだからあ。」

一旦ルアーを引き上げ、今度は餌を釣りミミズに変えてもう1度挑戦してみる。……おおっ、明らかにさつきよりも魚の反応がいいな。

そしてようやく1匹の魚の影が餌に喰い付いた。

「この瞬間を待っていたんだーっ！おりやあああああ!!」

リールを巻きつつ釣竿を思いっきり引く、そして釣れたのは………あれ？これはどう見ても魚じゃねーな、拳より少し大きなサイズの緑色の団子みたいなのが釣れたけど海藻の塊か？おつかしいなあ、確かに餌に喰い付いたからゴミを釣ったとは思えねーんだけどな？

疑問を感じつつも釣り針から海藻を外そうとすると、いきなり海藻がウネウネと動き出した!?

「うわっ、なんだこれ？気持ちわりーな。」

「あらっ、それツカミダコじゃない？珍しいわねえ。」

ツカミダコ？よく見てみると海藻の塊だと思つたものには眼があるし、足や口もある。れつきとした動物みたいだ。

「それはツカミダコっていったね、身体中に海藻を生やして擬態する習性を持つこの島固有の珍しいタコなの。本物を見るのは私も初めてよお。」

ふーん、なんかメンダコに似てるな。だけどこれホントにタコか？足が7本しかないし、それに吸盤もないな。あ、口を広げて威嚇してきた……うわ、えらく立派な歯が生えてるな。タコに歯なんてあったっけ？

釈然としないが、とりあえず生きたままのツカミダコをポーチに詰めてもう1度釣りミミズを餌にして竿を振るう。

再び集まる魚の群れ、そして……。

「きたきたきたーっ！どっせーい!!」

次に釣れたのは……何だこれ？魚の骨じゃん。目の前でクネクネと身をよじらせる、これまた拳骨より少し大きな魚の骨。魚の骨なんだけど魚にしちや妙なシルエツトをしているな。尻尾が2本も生えてるし、その尻尾の先にも頭……というか頭骨がある。

骨なのに生きてるってアンデッドか？そもそも骨が餌を食べるのか？

「今度はガロアイカねえ。ツカミダコに負けず劣らずとっても珍しい種類のイカでね、食べた獲物の骨を身にまとう習性を持つこの島にしかない珍種よお。これも本物を見るのは初めてねえ。」

これイカなのか……。あつ、ホントだ。釣り針を咥えている魚の頭骨の下に本物の顔がある。ツカミダコと違って立派な吸盤とカラストンビもあるな。2本の尻尾だと思ってたのは触腕か。

あまりタコに見えないツカミダコに比べりや遥かにイカっぽいな、マンメンミ！

呑気に釣り針に引つ掛かったままのガロアイカを観察していると、段々とガロアイカの体色が赤くなってきた。そーいやイカって興奮すると赤くなるって聞いたことがあるな、つーことは今のコイツは怒ってんだな。

確かこういうのを鬼おこあきつ丸とかカムチャツカイヤツツホオオオオオオウって呼ぶんだろ？ん……イカと目が合った？

「キーーーーッ!!」

「うぶっ、何だこれ……痛ててて!!」

怒ったガロアイカはオレの顔に向かって口から赤黒いスミを吐い

てきた、そんなもってこのスミが付いたところがまるで感電したかのようには痺れて痛い。コイツひよっとして毒持ってたのか!?

「あらあら、顔に掛かったの?ガロアイカの吐くスミには毒は無いけど、代わりに不思議な成分が含まれているから触れると痛いのおお。ほらハンカチ、よく拭いてねえ。」

「頼むから、そういう大事なことは先に言ってくれ……。」

ようやく痛みも引いてきたのでガロアイカも生きたままポーチに詰めて釣りを続ける。ポーチの中でツカミダコとよろしくやっついてくれ。

「それにしても天龍ちゃん、初めての釣りでツカミダコとガロアイカを釣り上げるなんてすごいわねえ。今まで調査団が発見したことすら片手に数えられる程度で、生きたまま捕らえた記録はないんじゃないかしら?ましてや釣竿で釣り上げるなんて偉業と言ってもいいかもねえ。2匹とも珍し過ぎて食材としても武器の素材としても価値は見出されていないけど、これって自慢出来ることよお。狩娘の中でも特に釣りが上手な娘といったらメゼポルタ鎮守府の曙ちゃんだけど、天龍ちゃんも曙ちゃんに負けないくらい釣りの才能があるかもしれないわねえ。」

「肝心の黄金魚がまだ1匹も釣れてねーけどな、それにメゼポルタ鎮守府ってどこだよ?..」

「メゼポルタ鎮守府はこの島にある鎮守府の中でも特に規模の大きい鎮守府よお、クロオビ鎮守府なんて比較にならない程のねえ。そしてそこに所属している曙ちゃんはねえ、なんとカジキマグロを3000匹も釣り上げて太公望っていう銘の釣竿型の大剣を手に入れた凄いやつな狩娘なのよお。」

「いやいや3000匹もカジキマグロを釣ったって、深海棲艦との戦

いはどーしたんだよ？狩娘ってそんなにヒマなの？それにカジキはそんなに釣られて絶滅しないのか？これじゃあ狩娘っていうより釣娘だな。

龍田と楽しくおしゃべりしていると、再度釣竿に手応えを感じた。流石にもうコツも掴んだもので手際よく釣り上げる。

釣れたのは金色に美しく輝く……アロワナじゃねーな、この丸っこい姿はオコゼかな？

「あつ、黄金魚じゃない！おめでとう天龍ちゃん。」

「えっ、これさつきお前が釣った魚と全然違うじゃん。」

「言いたいことは分かるけど、それはどっちも同じ魚なのよお。アロワナ型の魚もオコゼ型の魚も生物学上はまったく同じ黄金魚、こんなに見た目が違うのに不思議よねえ。」

「色以外に共通点が見当たらないんだけど……。まあいいや、とにかくこれで黄金魚を2匹手に入れたしノルマまで後3匹だな！終わりが見えてきたぜ！」

「……………あのね天龍ちゃん、黄金魚は釣っただけで終わりじゃないのよお。狩猟クエストならターゲットの深海棲艦を倒せばそれで終わりになるからレンタクが迎えに来てくれるけど、採集クエストは納品してようやく終わりなの。つまり帰るまでがクエストなのよお。」

「えっっ。」

まだまだ終わらない採集クエストに、これならまだ狩猟の方が楽だ

と感じてげんなりする天龍なのであった……。

天龍ちゃんと楽しい採集3

「それじゃあ改めて納品について説明するわね。ベースキャンプに赤い箱があったのを覚えているかしら？あれを納品ボックスといってね、納品クエストでは指定された物をその箱の中に納めることでノルマ達成と見なされるのよ。今回のノルマは黄金魚5匹の納品だから私の釣った黄金魚と天龍ちゃんの釣った黄金魚を無事に持って帰ればそれで終わり、簡単でしょ？」

「ようするに来た道を戻ればいいだけなんだろう？そんなら楽勝だぜ。んじゃ、このマグロをポーチに仕舞ってから行くとするか。」

釣りを続けて数十分、結局オレはあれ以降黄金魚を1匹も釣ることが出来なかった。

一方で龍田はあつという間に黄金魚を3匹釣り上げ、後は適当に釣りを楽しんでいた。

誰だよ、オレに釣りの才能があるって言ったヤツは？

その代わりサシミウオとはじけイワシって魚が数匹に、大食いマグロっていう魚が1匹釣れた。

マグロって高級魚の代名詞のハズなのにここではそんなに珍しくないし、高くも売れないんだとき。釣った瞬間のワクワクを返せ！

しかしポーチに生魚をそのまま入れて大丈夫か？途中で腐ったり生臭くなったりしねえだろうか？

とりあえず釣ったばかりのマグロをポーチに入れてみる……が手応えが妙だ。マグロがポーチの中にグイグイと引っ張られているよな？

異常に感じてすぐさまポーチからマグロを引っっこ抜いてみるとあら不思議、あれだけ大きかったマグロが頭と尻尾を残して骨になって

るじゃありませんか……って、ええええええ!?

「なんじやこりやあああああ!? オレの大トロが無くなってるじゃねーか!!」

マグロの骨と一緒に出てきたのは一回り大きくなった緑のタコと骨のイカ、どことなく満足そうな表情をしているような気がする。

よく見たら大きくなったんじやなくて腹が膨らんでいるだけか………ってことはお前らが犯人か!!? オレのマグロを喰いやがったな!! まさか黄金魚まで喰ってねえだろうな!?

慌ててポーチを漁ってみるが、黄金魚とサシミウオにはじけイワシ、その他採集したアイテムは無事に出てきた。

良かった、黄金魚まで喰われたらオレがコイツらをタコ焼きとイカ飯にして喰うところだったぜ……。

タコとイカはマグロのお詫びと言わんばかりに薬を一つ、短い触腕を使ってこちらに差し出してきた。

えっ、くれるの? っていうかこれどっから持ってきたんだ?

「大食いマグロをこの子達に食べられちゃったんだあ。見た目に寄らず健啖なのねえ、まるで空母や戦艦の狩娘みたい。狩娘になつてもあの手の艦は大食いだものねえ。」

周りに空母娘や戦艦娘がないのをいいことにさらつと酷いことを言う龍田。

「大食いマグロは目についたものを何でも食べちゃう魚でね、食べ物じゃないものでも平気で呑み込んだんじやう性質があるの。だから解体してみるとお腹の中からアイテムが出てくることがあるのよお。今回マグロの中から出てきたその薬は秘薬ねえ。秘薬はすごいわよお、飲むと体力が満タンになる上に最大値が増える効果もあるの。更に上位互換のいにしえの秘薬っていう薬もあつてね、こっちは秘薬の効果に加えてスタミナまで満タンになるの。どっちも頼れる狩娘の切り札よお。」

何その修復バケツ涙目な薬は……。まあ艦娘と狩娘って全然違う

からそう簡単には比べられんねえけど、もし修復バケツがマグロの腹の中か出て来たら間違いない絶滅まで乱獲されるな。

それにしてもこの軟体動物ども、さつきまで散々威嚇してきやがったくせに何だか急に馴れ馴れしくなってきたな。

まるで手乗り文鳥のようにマグロの骨からオレの手に移動してきやがった。

イカはそのままオレの二の腕にしがみ付き、タコの方は……オレの顔の横でプカプカと浮いてる……え、コイツ飛べんの？

「お前、蛸じゃなくて凧だったのか？」

「全然面白くないわよ。」

うぐつ、今のはオレでもスベったと思ったよ！しかし何でこんなに態度が変わったんだ？

「タコやイカは見た目よりも知能が高いっていうからねえ、天龍ちゃんのことをマグロをくれた優しい人だとも思ったんじゃないかしらあ？」

自分で勝手に食べたくせにそのまま餌付けられるとかなんて自分勝手な奴らだ！ぜってー優しい人じゃなくてエサを持って来てくれた便利なヤツ程度にか思っただけでコイツら！

とにかく黄金魚の無事も確認出来たし、何だかよく分かんねーけどタコやイカとも（一方的に）仲良くなったオレ達は黄金魚の納品の為に来た道に戻り始めた………が、その道中で行き掛けには無かったものを見つけた。

「『『『ダヨーダヨー。』』』」

「あつ、見ろよ！あんなところに連装砲ちゃんがいっぱいいるぜ。」

目に前に群れているのは間違いなく連装砲ちゃんだ。ぜかましと書かれた浮き輪を背負っていたり、片手に小さなピッケルを持っていたりと鎮守府にいる連装砲ちゃんとは若干装備に違いがある。

働いている奴は浮き輪もピッケルも持ってねーし、店の制服やコック帽にエプロン着けてんだよな。

「あれは野良連装砲ちゃんねえ、鎮守府で働いていない連装砲ちゃん達は独自のコミュニティを作って野外で生活しているの。」

野良連装砲ちゃん……？何だそりゃ、野良犬や野良猫か？せめてポ○モンみたいに野生のつて言えよ。野良の連装砲つて嫌過ぎるだろ。

あれ？よく考えたら野生の連装砲ちゃんがいること自体に何の疑問を感じなくなってる？普通に考えておかしいだろ、野良の臙装とか。オレも狩娘の常識つて奴に毒されてきたのかな？

そのまま連装砲ちゃんの群れを眺めていると、少し外見の違う個体が混ざっていることに気が付いた。

連装砲ちゃんに比べてニヤついたような特徴的な笑顔、背中に担いだ艦首型のリュック、そして片手に持ったピコピコハンマー。

「二二「ダゼーダゼー。」」

「よく見たら連装砲くんもいるじゃん！連装砲くんも天津風無しで生きてんのか、つーことは長10cm砲ちゃんや二式大艇ちゃんも自立した奴がいるのかな？」

「いるわよお。二式大艇ちゃんは基本的にどこに鎮守府にも1体は必ずいて、当然うちの鎮守府にもいるわあ。」

「えっ、オレ鎮守府で二式大艇ちゃんを見たこと1回もねえぞ？」

「それはそうよ、だつて普段は執務室の机の下で寝てるもの。」

ああそう、そんなところにいたのか。あの真面目な神通が仕事している机の下にそんなものがあると何か意外。

「鎮守府の二式大艇ちゃんを撫でてご機嫌にさせると1日の運勢が良くなるっていう噂があるのよお。それでね、神通さんは仕事の始まりと終わりに必ず二式大艇ちゃんをニコニコしながら撫でるの。きつ

と癒しが欲しいんでしようねえ。だって提督の代わりに全部の執務をやってるんだもの、疲れもするストレスも溜まるわよお。ちなみにこのことはクロオビ鎮守府にいる人なら狩娘、連装砲問わずみんな知ってるんだけど、本人は隠しているつもりだから秘密にしといてねえ。もしもうつかり神通さんにしゃべっちゃったら、神通さんはきっとビックリして天龍ちゃんのことを……………うふふふ。」

フッフ、怖えく。オレは何も聞いてないぞ！神通の痴態なんて知らないからな！

全く何でオレがこんな気苦労しなきやなんねえんだよ、オレも癒しが欲しいぜ。タコやイカよりも可愛くて愛想もいい動物とかいねーかな……………。

その時……………！圧倒的閃きつ……………！！

よく考えたら目の前に連装砲ちゃんがいるじゃん。連装砲ちゃんは見えた目も可愛いし愛想もいい、癒しを求める相手としてはピッタリだ。ちよつと撫でるくらいならいいよな？

試しに連装砲ちゃんの群れに近付いてみる。連装砲ちゃんはオレに対して無関心のようなが、連装砲くんはオレに気付くとテクテクと近寄って来た。連装砲ちゃんより連装砲くんの方が愛想が良くて人懐こいのか？

「あー天龍ちゃん、連装砲くんが可愛いからって油断しない方がいいわよお。」

「は？…それってどういう……………？」

目前まで来た連装砲くんを撫でようと屈んで手を伸ばした瞬間、急にそんなことを言い出す龍田。

それに対してオレが疑問を感じる間もなく、連装砲くんは鮮やかな手際でオレのポーチから黄金魚を取り出すとそのまま背負っている艦首型のリュックに納めてしまった。

へえ、器用なもんだな……ん？

「貫ツタゼー♪」

「ああーっ!! テメエオレの黄金魚盗みやがったな!? チクショー返しやがれ! それ釣るのにどんだけ苦労したと思っただ!? それが無いとクエスト終わらねーだろうが!!」

慌てて連装砲くんを捕まえようとしますが軽快な動きで上手く捉えられない。そんなことをしている間に2体目、3体目と次々に連装砲くんがやって来た。

「二「ダゼーダゼー。」」

「あーもう、うっとおしい! お前らあっち行つてろ!!」

足元まで来た連装砲くんを蹴飛ばして追い払う。ちよつと可哀想な気もするが、ドロボー相手に慈悲はねえ!

しかし連装砲くんを蹴飛ばした瞬間、今まで無関心を貫いていた連装砲ちゃん達が一斉にこちらへ向き直ってきた。こちらに突き刺さる大量の視線。

「二「……………」」

「なっ、何だよ? オレに何か用事でもあんのか? 今忙しいから後にしてくれ!」

相変わらず見た目は可愛らしいが、小さい体に似合わないプレッシャーを発している。

むしろ表情がそのままなせいで逆に怖い。

そして……………。

BGM：猫汁大作戦

「二「ダヨーダヨー!!」」

「うわあああああ! 何だよコイツら!」

連装砲ちゃん達が一斉に襲い掛かって来やがった!? 次から次へとピッケル片手に殴りかかってくる連装砲ちゃん、そしてどきどきに紛

れてアイテムを盗もうと試みる連装砲くん。もう滅茶苦茶だ！

「うおおおおお、邪魔をするなあああ!!」

隙を見て連装砲ちゃんの包囲網を突破し、盗つ人連装砲くんに飛び付くとコメカミに渾身のグリグリをお見舞いする！

「オラッ、どうだ！降参しろっ！そして黄金魚を返しやがれっ！」

グリグリグリグリっっ!!

「ウギャー！ゴメンサイナンダゼー!!」

連装砲くんは堪らずリュックから黄金魚を放り出す。

オレが慌てて黄金魚を受け止めると、その隙に連装砲くんは海の中に潜っていきそのまま姿が見えなくなってしまった。何はともあれ無事に取り戻した黄金魚をポーチの中に仕舞う。

「どうだ龍田？バッチリ取り返したぜ！」

「エリック上田……じゃなくて天龍ちゃん、後ろよーっ!!」

「あ？？」

龍田の唐突な発言に思わず変な声を出しながらも言われた通りに振り向くと、巨大な魚雷を担いだ連装砲ちゃんが目と鼻の先にまで迫っていた……つて自爆特攻する気か!?冗談はよせ!!

「やめるバカっ、それはシャレになんねーぞ!?うわっ、うわああ!!」

しかしいくら焦ってもここまで近付かれたらもはや避ける術などあるわけもなく……そして遂にその瞬間は訪れた。

ドッガアアアアアン!!!

「うわらば!!」

「ああっ、天龍ちゃんがまるで中破した妙高さんみたいなポーズで吹き飛んだっ!!えっと確か、こういう時はこう言うのよねえ……もりさきくん ふつとばされた!」

本人がいらないの良いことに再び酷いことを言う龍田だが、それ以上にもオレの状態はもつと酷い。魚雷の直撃で体中が痛いし、相変わら

ず連装砲ちゃん達に取り囲まれてるし、未だにピンチは継続中。

その一方で一緒に吹き飛んだはずの連装砲ちゃんはススだらけだが特に目立った傷もなく、先程の連装砲くんと同じように海に潜って何処かへ行ってしまった。

それとオレと一緒に吹っ飛んだと思っていたタコとイカはいつの間にか龍田の方に移っていて無事だった……うぐぐ、抜け目のない奴らめ。

「龍田あく、助けてエ〜。」

「もうしようがないわねえ〜。」

青ダヌキに頼るメガネの少年のように思わず龍田に助けを求めると、龍田は連装砲ちゃんの顔が描かれた小さな魚雷を取り出して、それを連装砲ちゃん達の群れの中心で爆破させた。

先程の大型魚雷とは違い爆炎は上がらず、その代わりに小さな魚雷は不思議な匂いのする粉を周囲にまき散らす。

その途端、まるで酔っぱらったかのようにフラフラと歩き始める連装砲ちゃん達。焦点が合っておらず、どこを見ているかも不明だ。そしてオレへの敵意もスツカリ忘れてしまったようだ。

その隙に急いで包囲網から抜け出し、応急薬を飲んで一息つく。

「ふう、助かった。深海棲艦と戦って負けるってんならまだしも、連装砲ちゃんに囲まれて袋にされるとか冗談じゃねえ。それにしてもオレは何で襲われたんだ？そんなでもってお前は一体何をしたんだ？」

「もう質問が多いわよお、まあいいわ。連装砲ちゃんは普段はおとなしいんだけどとっても仲間意識が強くてね、自分や仲間が傷付けられると逆上して我が身も顧みずに反撃してくるのよお。連装砲くんはとっても好奇心旺盛でね、狩娘を見掛けるとアイテムを盗んでいくの。そしてね、連装砲くんも連装砲ちゃんにとっては大事な仲間なの。だからさつき天龍ちゃんが連装砲くんを蹴っ飛ばした途端に連装砲ちゃんに襲われたのよお。」

「なーるほど。」

「そして連装砲ちゃん達の動きを止めたのは、このマタタビ魚雷のおかげよお。」

そう言つて龍田が取り出したのは先程の連装砲ちゃんの顔が描かれた謎の魚雷。それにしてもマタタビつて連装砲ちゃんはネコじゃねえだろ。そもそもマタタビ魚雷つて何だよ？

「マタタビ魚雷つていうのは連装砲ちゃんや連装砲くんの好む匂いの粉末を大量に詰めた時限式爆弾のことよお。殺傷力は無いんだけど、爆発することによってその粉末を周囲に撒くの。そしてその粉末を大量に吸い込むことで連装砲ちゃんは酔っぱらったようにフラフラになっちゃうの。その様子がマタタビに酔っぱらうネコに似ているからマタタビ魚雷つて名前になったのよお。」

へえ、話だけ聞くとなんか危ない薬でもヤツてるみたいだな。

「それにしても天龍ちゃんつて優しいのねえ。」

「へっ、何が？」

オレが優しい？そりやあオレは世界水準の天龍様だからな、心の広さも世界水準さ。だけど今までのやり取りの中で優しい要素なんてあつたっけ？

「だつて連装砲くんに軽くお仕置きするだけで許しちゃつたでしょ？」

「そりや黄金魚を盗まれたことはムカつくけど、連装砲くん相手だしそんなもんだろ？」

「それがそうでもないのよ、基本的に狩娘は連装砲くん相手に容赦なく武器を振り回して戦っているのよお。」

「ええ、やり過ぎじゃねえ？相手は連装砲くんだぞ？」

「でも天龍ちゃん、さつき大型魚雷で自爆したにも関わらず無傷だった連装砲ちゃんを見たでしょ？連装砲ちゃんや連装砲くんは武器で斬り付けたくらいじゃ死なないのよお。例え斬れ味紫の大剣で抜刀会心溜め3斬りをお見舞いしても傷1つ付かないんだからあ。けどやっぱ痛いものは痛いから、ある程度ダメージを受けると海に潜って撤退しちゃうの。そしてアイテムを盗んでくる連装砲くんや、魚雷で特攻してくる連装砲ちゃんは場合によってはヘタな深海棲艦

より厄介な相手だからみんな武器を使って追い払っちゃうのよお。」

ひえ〜っ！連装砲ちゃんや連装砲くんを深海棲艦と同じように武器で倒すっていうのか!? 抜刀会心溜め3つっていうのは何のことかはさっぱり分かんねーけど、とりあえずヒデエことをしてるってのだけは分かるぞ！

狩った相手を解体したり、連装砲ちゃんをボコったり、狩娘って思った以上に恐ろしい職業なんだな……。

その後、無事に黄金魚を納品することに成功し、鎮守府に帰って来たオレ達が向かったのは鎮守府の工廠。

龍田が言うにはここにいる竜人妖精さんに集めてきた素材とゼニーを渡すことで武器を作ってくれるらしい。オレも眼帯と下着だけっていう裸同然の装備じゃなくて、いい加減まともな防具が欲しいからな。

「つてなワケで妖精さん、お願いします。」

「マカセロー！」

頭の防具は既に竜王の隻眼があるので、他の部位の防具が欲しい。そこで今日集めてきた素材を竜人妖精さんに差し出すと、妖精さんはその中から幾つかを抜き取り、手にしたハンマーでそれらをガンガンと叩き始めた。

こんな乱暴なやり方で本当に防具が出来んの? そんな疑問とは裏腹に、あつという間に出来上がっていく防具。そして自信満々に出来上がった防具を渡してくる妖精さん。

さっそく装備してみるが……。

「……何だこれ?」

「ふふっ、天龍ちゃん似合ってるわよお。」

まず足の装備はチエーンパンツ、ジーパンみたいで悪くはねーな。

腰の装備も同じくチェーンベルト、地味だが実用的なデザインだ。胸装備はユクモノドウギ、あのユクモの木からどうやって作ったかは分かんねーがノンスリーブに立った襟が中々にオシヤレだ。そして腕用装備はというと……。

「なあコレ本当に装備しなきゃダメか？」

「その防具はね、今日作った防具の中でも一番防御力が高いのよ。駆け出し狩娘の天龍ちゃんなら頼りになるはずよお。」

なるほど、確かに強力なんだろう。見た目からして硬そうだしな。だけど、けどよお……。

「だけど見た目がクンチュウそのまんまじゃねーか!!」

妖精さんが作ってくれた腕用装備はどこからどう見てもクンチュウそのものなクンチュウアーム。これを着けると腕にクンチュウが取り付いているみたいで嫌なんだけど……。

ブラやパンツは見えなくなったわけだし、別に腕装備の1つや2つくらい無くてもいいよな？

「……天龍ちゃん、せっかく妖精さんが作ってくれたっていうのに使わないつもりなの？」

「えっ? いやそれは……。」

クンチュウアームをどうにか使わずに誤魔化そうとしたところ、龍田が不満げな様子でそう聞いてきた。そりゃ妖精さんには悪いと思うけどよ、こんなの使いたくねーんだよな。

そう考えた次の瞬間……。

「つかわな い つ も り な の ? 」

「ひいつ!? ハイッ、誠意をもって使わせていただきます!」

「そう、良かったわあ。」

笑顔のままなのに物凄い剣幕で迫ってくる龍田の前につい頷いてしまった。

フフフ、怖い……。この一瞬だけでめっちゃ汗かいた。しかもいつの間にかパンツも少し湿っている気がする……。うん、これも汗だな。

ちびってなんかいないぞ！本当だぞ！

ああもう龍田、そんな生暖かい目でオレを見るんじゃない！

防具も大事だけど、まずはパンツを大切にしよう。そう心に誓う天龍なのであった……。

天龍ちゃんと鎮守府の仲間達Ⅰ

「ほーらジョニーにスマス、餌だぞ〜かまぼこだぞ〜。」

おお〜、ガツガツ喰うなあ。見ていて気持ちいいくらいだぜ。

ん、今オレが何をしているかだつて？鎮守府の食堂で朝食の前にジョニーとスマスに餌やりをしているところさ。

え、ジョニーとスマスって一体誰かだつて？そりやあのタコとイカのことだよ、タコがジョニーでイカがスマス。ちなみに命名したのはどっちも龍田。

最初は捕まえたオレが名付けるって話になったから、苦羅阿剣とくらあけん天墮苦瑠てんたくるって提案したら龍田と神通に即刻却下されて結局龍田が名付けたんだ。名付けろって言ったくせに横暴な奴らだぜ。

そもその発端は昨日連れて帰ったこいつらをどうするか悩んで神通に相談したところから始まるんだが……。

「珍しい生き物みたいですし、頭が良くてしかも天龍さんに懐いているのでしよう？せつかくですから鎮守府で飼育してみてはいかがでしょうか？」

「そりや別にいいんだけど、コイツらどこに置いとけばいいんだ？それにオレがずっと世話するの？」

「食堂に使ってない水槽が置いてあるので、そこで鎮守府の皆さんで世話をしましょう。きつと他の狩娘の皆さんも喜ぶと思いますよ？」

「使ってない水槽？昔何か飼っていたのか？」

「ええ、以前は鎮守府の皆さんで釣ってきたシンドイワシの世話をしていたんですよ。」

シンドイワシ？何か嫌な名前なまの魚だなあ……。

「ですがある日酔っぱらった提督が生のまま食べてしまったんです。」

翌日二日酔いと極度の疲労で水槽の前に倒れていた提督を見つけたときは大騒ぎでした。あつ、罰として提督は逆さ吊りにしましたよ。」
二日酔いと疲労で動けない人を看病どころか逆さ吊りつて……よく死ななかつたな。

「それでイワシがいなくなつてみんながっかりしたのですが、勿体ないので水槽はそのまま残してあるんです。なので水槽は洗えばすぐにでも使えますよ。」

……つてなワケでお言葉に甘えてその水槽を使って世話をすることにしたんだよ。

それにしても本当にすごい喰い付きだな。何喰わせていいのかサツパリ分からねえから試しに厨房で余つた食材を貰つてそれをやってみたんだが、こんだけ食うのなら厨房の生ゴミが減るかもな。

オレが水槽を眺めていると食堂につながる廊下の方から複数の足音が聞こえてきた。

「あら天龍ちゃん、部屋にいないと思つたらもう食堂に来ていたのねえ。」

まずは龍田が入つて来た。オレは龍田と同じ部屋を使っているんだが、今朝は早く目が覚めたからまだ寝ている龍田を起こさないようにして部屋を出てここに来たからな。

でも足音は1つじゃなかったよな、神通か川内でもいるのか？もつともまだ川内とは1回も会つたことないんだけどな。あいつ陽が出ている間は部屋でずっと寝てるから見たことないんだよ。夜中に部屋で寝てると廊下の方からドタドタうるさい足音と「夜戦ー！ーっ!!」つていうやかましい声がするから、いるのは間違いねえんだろうけどさ。

つーかよく考えたらオレここの鎮守府に来てから妖精さんや連装砲くんを除くとまだ提督と龍田と神通以外に会つたことねーじゃん。

ひよつとしてオレって他の狩娘に避けられてる？

オレが若干ブルーになっっていると、龍田の後ろから2人の小柄な狩娘がひよつこりと姿を現した。

「天龍さんですね、初めまして。電なのです、よろしくお願いします。」

「私は雷よ！何かあったらどんどん私に頼っていいからね。」

現れたのは駆逐艦の電と雷。礼儀正しくペコリとお辞儀をする電と、元気よく手を振りながら挨拶する雷にオレのダダ下がりだったテンションもようやく回復する。

「おう、オレが天龍だ。よろしくな。」

オレが雷電姉妹に挨拶を返していると今度はズカズカと大きな足音が聞こえてくる。程なくしてオレや龍田よりも大きな人影が現れた。

「酷いじゃないか、先に行くなんて。んっ？おおっ、お前が新入りの狩娘か？初めましてだな、私は長門だ。よろしく頼むぞ。」

「お、おう。どうもよろしく……。」

次に入って来たのは戦艦長門。戦艦だけあって背も高いし、力も見るからに強そうだ。

だけど龍田は狩娘のスペックは艦種問わず同じだって言ってたな、じゃあ装備と経験の差はあってもオレも長門も電も雷も基本的な能力は同じなんだよな？

こうして考えてみると狩娘ってやっぱ変な存在だなあ……。

「あーっ、水槽にタコとイカが入っているじゃない。」

「小っちゃくて可愛いのです。」

雷と電は水槽に入っているジョニーとスミスに気が付くと目を輝かせ始めた。珍しい生き物だとは思うけど可愛いかな？

「その子達は昨日天龍ちゃんが海で釣ってきたのよお。こつちの子がジョニーでそつちの子がスミスっていうの。とつても頭のいい子達よお、仲良くしてあげてね。」

「ほう、ツカミダコにガロアイカか。実物を見るのは初めてだな。」

「長門さん、この生き物のこと知ってるの?」

「ああ、と言つてもそんなに詳しくは知らないぞ。」

「それでも教えて欲しいのです。」

「そうかそうか。よし、この戦艦長門が教えてやろうじゃないか。」

雷と電に質問された途端、あからさまに長門がニマニマし始めた。駆逐艦の子に頼られたのが嬉しいのは分かるが、そのだらしない顔を何とかしてくれ。さつきまでの凜としたキャラが台無しだぞ。

「こつちのツカミダコはな、体内にガスを溜めることで空をフワフワと飛ぶことが出来るんだ。水棲生物なのに陸上への適応力も高くてな、ずっと空を飛んだまま生活し続けることもあるらしい。そして数十年、もしかしたら百年、下手したら千年以上も長生きするとされていてな、長生きしたツカミダコは40メートル程にまで巨大化するらしい。40メートルのコケに覆われた巨体が空を飛ぶ様子は空に浮く山岳と例えられるそうだ。成長したツカミダコの食欲は凄まじくてな、食事の跡にはペンペン草1本すら残らないらしい。」

「えーっ! そんなに大きくなつたら水槽で飼えないじゃない、困つたわ。」

「いやいやそれじゃ水槽どころか鎮守府で飼えねえだろ! それ以前に百年も面倒見きれねーよ。」

「こつちのガロアイカは骨を身に着けて生活しているんだが、体が大きく成長するにつれて食欲が増していき、より大きな獲物とその骨を求めて目に付いたものを次々と襲うそうだ。水棲生物なのに陸上生活が出来るのはツカミダコと同じでな、食料を求めて陸地にも上がってくるらしい。こちら最終的には40メートル以上の巨体になつてな、次々と他の動物を襲う骨で覆われた長大な2本の触手を見た昔の人は双頭の骸と呼んで恐れていたそうだ。」

「は? 何それバケモンじゃん。知らなかったとはいえ、オレはそんな

危険生物を鎮守府に入れちゃったのか？

「はわわ、見たものを次々と食べちゃうなんて怖いのです。」

「ははは、そう本気にするな。どっちも狩りに生きるのUMA特集回に書かれていた与太話さ。他に書いてある情報も大海に現れる雷光を放つ大渦だとか、砂漠の人食い水晶とかの胡散臭いものばかりだぞ。よく考えてみる、こんなに小さくて愛嬌のある生き物が大きくて獰猛な怪物になるワケないじゃないか。そもそもこの島はつい最近現れたばかりだというのに昔の人が出てくるなんておかしな話だろう？つまりこれは創作話さ。それに私達の前世は艦だ、その時の私達のサイズは100メートルを超えていただろう？そう思えば40メートルなんて可愛いサイズさ。」

仮に与太話だとしてもシヤレになんねえよ。それに昔の人が出てくるハズがないって言うけど神通は昔の人がいたって言ってたじゃん？

第一いくらオレ達の前世が船でも、今のオレ達は人間と変わらない大きさだろ？全長40メートルってシロナガスクジラよりもデカいからな、光の巨人並みの巨体だぞ!!

そんな巨大生物どうしろっていうんだよ!?今からでも遅くないから海に捨ててこようかな？

「本当に与太話かしらあ？」

龍田はふと、思い出したように語り始めた。

「これはモガ鎮守府にいる三日月ちゃんから聞いた話なんだけどお……。」

それは空に三日月が輝くの夜の海のことでした。

「ふう、これだけ捕ればきつと司令官も喜んでくれますよね。」

私、三日月はモガの海でアワビを捕っていました。

アワビはモガの特産品の一つで、素潜りでしか捕れない食材です。本土では中々手に入らないアワビもここでは塊で一杯捕れるんですよ。

あつ、密漁ではないですよ。ここは禁漁区でもなんでもありません。それにアワビはちゃんと岩からはがして捕ります。満月の夜に岩から剥がれて泳いだりはしません、そもそも今日は三日月です。

ちよつと話が逸れました……。このおっきなアワビ、肉厚で旨味があつてみんな大好きなんです。勿論司令官も、そして私も。

それで今日は狩りをお休みしてここでアワビ漁をしていたんです。「ちよつと遅くなっちゃった。そろそろ帰らないとみんな心配しますよね。」

お昼にアワビ漁を始めたんですが、夢中になつていたらいつの間にか夜になっていました。

夜の海はちよつと怖いです。普段は鎮守府の仲間と海に出てるから夜中の海に一人きりっていうのはちよつと不安です。

私は空に浮かぶ三日月を見上げながらも帰りの支度を始めます。

「あれ？」

ふと気付きました。とつても静かな夜の海、ですがあまりにも静か過ぎます。いつもならザアザアと聞こえる波の音すら聞こえません。流石にこれはおかしいです。

目の前に広がるのは波一つ立つておらず、不気味なほど静かな漆黒の海。明かりになるのは唯一普段と変わらない三日月の光だけです。

私は怖くなって念のためにと持ってきたメイスを構えます。

司令官が『三日月にはこれが似合う。』と言つてプレゼントしてくれた無骨なメイス。

武器としてのカテゴリはハンマーですが、実はパイルバンカーが仕込まれた必殺兵器なんです。使い方が分からないのでその機能を使ったことは一回もないんですけど……。

「……………」

メイスを片手に四方を確認します。ひよつとしたらどこからともなく深海棲艦が襲ってくるかもしれません。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……。

その時です。あれほど静かだった夜の海、しかし今はまるで沸騰したかのように揺れています。

「な、何が起きてるの?」

あまりに揺れに立つことも難しくなり、思わず海に尻餅をつく私。その瞬間、目の前の海が爆発しました。

『オオオオオオオオオオ!!』

私のいる場所から100メートルほど先の海面。そこが徐々に盛り上がったかと思うと突如として砕け散り、中から青白い光を放つ巨人が姿を現したのです。

その巨人は頭に三日月のような形をした一對の角を持っています。た。

海面を突き破り、空へと舞い上がった巨人はまさに深海から現れた三日月の化身、見上げる私からは月が二つに増えたような錯覚を覚えました。

やがて三日月の片割れは重力に引かれて海へと帰っていきます。三日月が海面に堕ちると同時に凄まじい水しぶきが上がりました。

非常に長く感じられた深海の三日月との邂逅、ですが実際には5秒にも満たない僅かな時間だったようです。

「あ……。」

目の前の光景に呆然としていた私ですが、巨人が海に飛び込んだことで発生した大波と降り注ぐ海水の豪雨を前に正気を取り戻します。

「ひゃあっ!?!」

目の前に迫る海の脅威、ですが私だって狩娘の端くれ。必死に耐えて、ようやくやり過ぎすことに成功しました。

「巨人は?・巨人はどこにいったの?」

慌てて三日月の巨人が現れた場所に向かいます。ですがそこに見

えるのは黒い海面に映る天空の三日月だけで、深海の三日月が見えることはありませんでした。

やがて海はいつも通りの風景を取り戻します。

不気味なほどの静けさも、沸騰したかのような揺れも無く、ただただ潮騒の音が響くだけでした……。

「……つてことがあったそうよお。三日月ちゃんはきつと深海を彷徨う神様だつて言つてたけど、それこそ未確認の巨大生物じゃないかしらあ？この島にはまだまだ未開の地が多いから常識では想像もつかない生き物がいるかもしれないわよお。」

えええ、何だそれ海坊主か？真夜中の海で青白く光る巨人なんて見たら卒倒する自信あるぞ!?!そんな化け物に遭遇してSAN値を保つていられるなんてすげえよミカは。

それにしても三日月つて言葉が連続し過ぎてゲシユタルト崩壊してきたな……。

「凄いいじゃない、私も新種の生き物を見つけてみたいわ！新種の生き物って最初に見つけた人が名前を付けていいんでしょ？新しい生き物見つけたら絶対にイカツチつて名前を付けるんだから！」

「じゃあ電も新しい生き物を探すのです！雷ちゃんの名前からはライの字を貰つて、天龍さんと龍田さんの名前からは竜の字を貰つて、最後に電の名前をくっ付けて電竜ライゼクスつて考えてみました。どうです？」

「うふふつ、素敵な名前ねえ。新種の生き物が見つかるといいわねえ。」

「あれ、私は？長門の名前は使わないのか？ホラ、世界のビッグ7だぞ？スゴイぞー、カッコいいぞー!!」

電の奴め、中々粋な名前を考えるじゃねーか。新種の生き物って第

一発見者に命名の権利があるんだろ？ だったらオレも見つけて最高にイカした名前を付けてやるぜ！

そうだな、グレートスラッシュャーネオ天龍ザウルスとかどうだ？ きつと世紀の大発見となって世界中の凶鑑に載るに違いないぜ。暇があつたら探しに行ってみるか？

「やる気を出したらいつもよりもお腹がすいてきちゃったわ。そうだ天龍さん、せっかくだし一緒に朝ご飯食べない？」

「そうなのです、ご飯食べながら色々とお話したいのです。」

「おう、いいぜ。」

特に断る理由もないので承諾する。せっかく会えた鎮守府の仲間とオレも話をしてみたいしな。

「わ、私は？ 私は一緒にダメか？ 私も一緒に食べたいのだが？」

「もちろんいいわよ。一緒に食べましょう。」

「このテーブルをくつつけてみんなで使うのです。」

長門の奴必死過ぎる……。そんな不審な長門相手にも優しい対応をする雷電姉妹いい子過ぎるだろ。

食堂に5人で使えるテーブルは無いので2人掛けのミニテーブルを2つ並べ、片側に椅子を2つ、反対側に3つ置く。

「天龍さんは電と雷ちゃんの間座るのです。」

「長門さんと龍田さんは私達の向かい側に座ってね。」

「えっ？ 私も雷と電の間に座りたいんだが……。そうだ天龍、私と席を代わらないか？ 妹と並んで食べたほうがいいだろう？」

「はいはい、長門さんは私の隣に座りましょうねえ。」

「ああ、夢の駆逐艦姉妹サンドがあく……。」

雷電姉妹に手を引かれつつ、そのまま2人の間に座る。長門は龍田が耳を引っ張って強引に座らせた。……。駆逐艦姉妹サンドってなんだよ？

「今日は天龍さんの歓迎会なのです！ 大したことは出来ないけど電がお食事券を使うのです。これで1グループまでなら無料でご飯が食

べられるのです！」

「ええ〜っ、せつかく天龍さんと出会った記念だもの。雷が出すわよ！」

ポケットからお食事券と書かれた小さなチケットを取り出して掲げる2人の少女、そしてそんな年下の少女に食事をおごられそうになっっているオレ……。

気持ちは嬉しいんだけど情けなさ過ぎるだろ。っていうか今まで飯食う時にお金掛かったことねえんだけど、お食事券を使うってどういうことだ？

「いや待てっ、ここはこの長門が出そう！それと使うのはこのとおきのお高級お食事券だ！」

「本当ですか？じゃあ長門さんに出してもらおうのです！」

「わーいつ、ありがとう長門さん！」

「あらく、じゃあ私もご馳走になっちゃおうかしら？」

「あ、えーと……ゴチになりまーす。」

雷電姉妹を制しながら勢いよく黄色く目立つお食事券を取り出したのは長門。これが噂に聞くどうぞどうぞってヤツ？雷電姉妹が食券出すと見せかけて、2人にいいところ見せたい長門がそのまま乗せられたのか……。まさか雷電姉妹が狙ってやったんじゃないだろうな？いやいや、そんなことあるワケねーよ。長門じゃあないが、こんなに小さくていい子の駆逐艦の狩娘が実は腹黒くて計算高いなんてことがあるワケがない……。ないよな？

「メニュー表ダヨー、ドウゾー。」

長門の残念さと雷電姉妹の腹黒さについて考えていると、いつの間にやら連装砲ちゃんがメニュー表を持って来てくれていた。

まだ数回しかこの食堂使ったことないけどメニュー表なんてあったっけ？

「そういえば天龍ちゃん、メニュー表を使うのは初めてだっけ？そうねえ、そろそろ知っていてもいい時期だし。」

疑問が顔に出ていたのか、何やら龍田が察したように言う。

「この食堂には内容の決まった無料メニューと、注文が選べる有料メニューがあるのよお。天龍ちゃんが今まで食べていたのは無料メニュー、お金を払ったりお食事券を使って食べられるのが有料メニューよお。」

「へえ、そんな違いがあるのか。だけどそのくらいなら無料でよくねえか？有料の飯の方が美味しいのかもしれないけど、無料の飯だって質素だし量もちよつと少なめだけどマズくはねえぞ？」

「そうじゃないのよお。無料メニューはただお腹が膨れるだけだけど、有料メニューには体力やスタミナの上限を上げる効果があるの。それに攻撃力や防御力を上げる効果まであるんだからあ。」

「えええ!?!ご飯食べただけでパワーアップすんの？それってドーピングじゃね？副作用とか無いよな？」

「何より凄いのは連装スキルっていう特別なスキルが発動することがあるの。連装スキルは普通のスキルに比べたら地味かもしれないけど、意外と侮れないものも多いのよお。今回は長門さんが高級お食事券を使ってくれたから無料で食べられる上に体力とスタミナの上昇率も高くなって、更には連装スキルも確実に発動するわよお。」

「ちよつ、ちよつと待てっ！そもそもスキルってなんだよ、そんなの説明されてねーぞ!?!」

聞いたことがない単語が飛び出して来て少し焦る。連装スキルって何？家事スキルとかコミュニケーションスキルとかの親戚か？

「あらごめんねえ。昨日までほぼ裸だったし、今もキメラ装備だからスキルについて説明するのを忘れてたわあ。」

キメラって……。確かに統一感の無いチグハグな装備だけどキメラ扱いとか酷くね？

「むう、龍田さんいつまでも天龍さんと喋ってないで電とも代わって欲しいのです。」

「そうよ、天龍さんだつて龍田さんだけじゃなくて雷にも頼ってくれていいんだからね!」

「そうねえ、じゃあこの後の説明は電ちゃんと雷ちゃんにお願いしよ

うかしらあ。」

「その前に料理を注文しないか？連装砲ちゃんも待っているし、私もいい加減お腹が空いてきた。話は食べながらでも出来るだろう？」

「それもそうねえ、まずはメニューを見ましようか。」

「なのです！」

「何を注文しようかしら？」

「ちよつと待ってくれ、そもそもこのメニューの読み方が分かんねーんだけど!?!肉とか野菜とか食材の名前しか書いてねーじゃん、料理はどこだよ!?!」

自分の歓迎会のハズなのに有料メニューだの連装スキルだのキメラ装備だの、新展開の連続に置いてけぼりをくらってしまう天龍なのであった。

天龍ちゃんと鎮守府の仲間達2

「どうやって注文すりゃいいんだ？全く分からねえ……。」

連装砲ちゃんから渡されたメニュー表には見馴れない食材の名前が書かれているだけで、料理と思われるものの名前は1つも無かった。つーかこの米虫って何？米に付く害虫のコクゾウムシのことか？正直食欲失せるんだけど……。

「天龍さん、注文の仕方が分からないの？じゃあ雷が教えてあげるわ！あのね、ここに書いてある食材を2つ選ぶとコックさんがその食材に合った料理を出してくれるのよ！」

ええ、何だよそのシステムは？簡単なのか面倒臭いのかよく分からんな……。ファミレスみたいに普通に注文させてくれよ。

「食材の組み合わせごとに違う効果が現れるわ。組み合わせの数はとっても多いから、自分の好みに合った組み合わせで注文するといいわよ！」

「最も組み合わせによってはハズレもあるがな。以前注文したドクドクドリアは凄まじい味だった。」

「あの時の長門さんは床を転げ回りながら悶絶していたのです。」

「それにこの時期のオンプオオは繁殖期だからうっかり注文しちゃ駄目よ。オンプオオの卵巣には毒があるから食べちゃうと大変なことになるものねえ。」

……ちよつと注文するの怖くなってきたな。つーか調理師免許や食品衛生法はどーなってんだよ!?

悶絶するくらいマズい飯を出したり、毒のある食材を平気で使用するって……。そんなんで金取るんじゃないやねえ!!

「電は今流行りのチーズフォンデュを食べるのです。チーズに軽く焼

いた夏野菜を浸して食べるレディにふさわしい料理だつて暁ちゃんに教えてもらったのです。それにチーズは牛乳の親戚だから食べたらきつと背も伸びるのです！」

「雷はパンを食べるわ、穀物は1日のエネルギー源なんだから食べなきゃ頭が働かないわよ。それと果物も朝食食べるのにはピッタリね！」
「食べるのならやはりステーキだな、肉を食べると力が湧いてくるぞ。肉と肉の組み合わせだと他のメニューと同じ値段でガツツリ食べられるから得した気分になる。一日三食肉を食べれば疲れ知らずさ。」

「私はサラダを食べるわあ、天龍ちゃんも好き嫌いせずに野菜を食べるといいわよお。それと白身魚のフライもお勧めねえ。」

モタモタしている間にみんな注文を決めてしまった。まだ決まっていなのはオレだけじゃん！えーい、もうこうなったら適当だ！

「これだつ、この組み合わせでくれっ！」

「カシコマリマシター。」

何だかよく分からない内に注文してしまった……。慌てて何を注文したのか自分でも分かってない、一体何が出て来ることやら？

「出来タヨー。」

早っ!?もう出来たのか？注文してからまだ1分すら経ってないと思っただけど……。

連装砲ちゃんが注文した食事を順番にテーブルに並べていく。

電、雷、長門、龍田の前にそれぞれ料理が置かれる、どれも見るからに美味しそうだ。

そしてオレの前に置かれたのはジョッキになみなみと注がれたビールと小鉢に入った香り豊かなチーズ……………ビールとチーズ？

「ええええええ!?何だコレ、これが料理なのか!?どう見ても料理じゃないだろ！ビールと付け合わせのツマミとか、まるで仕事終わりのオッサンじゃん！」

料理とも呼べないツマミに驚くオレだが、他の4人は当然といった

顔をしておりビールとチーズに疑問は無いらしい。まさかこれで驚くオレがおかしいのか？

「あらあ、いい組合せを選んだじゃない。酒と乳製品の組み合わせは体力とスタミナの上昇率が特に高いのよお。」

ええ、納得いかねー。強力な効果を持った食事なのかもしれないけど何の因果で朝っぱらからビール飲まなきゃなんねーんだよ？これじゃあいつものタダ飯より量が少ないじゃん。

「そのビールは達人ビールといって、私達の鎮守府の提督が作ったビールなのよ！えーつと確か……そうそう、貴様のココロの回復薬っていうキャッチコピーで売ってるわ！」

「大人気商品でとつても売れていて、テレビでCMもやっているのです。みんなで飲もうぜ達人ビール！ゴクツゴクツゴクツ、プハー！イエーイ！最高だぜ！なのです。」

「可愛い……じゃなかった、その売り上げによって身分不相応な大金を手に入れたせいで舞い上がり提督業を疎かにしているのだから。それに性格も悪くなった、いや前から若干高慢な性格をしていたがそれが悪化したのだ。本当に金の力というものは恐ろしいな、ああも簡単に人を変えてしまうとは。全く困ったものだ。」

あの提督が作ったビールかあ……。売れてるってことは美味しいのかもしれないけど何だか嫌だなあ、あの提督ってだけでマイナス補正が掛かるぜ。

それにオレって酒はあんまり得意じゃねえから普段から飲まねーんだけどな。

「それじゃあ、手を合わせて……。」

雷と電はそう言いながら両手を合わせる。龍田や長門も一緒に両手を合わせたのを見て、オレも慌てて両手を合わせた。

「……いただきます。」

気は進まないが、さっそくチーズをツマミにビールを飲んでみる……！?!

うん、意外と悪くない。オレはアルコール類は苦手なんだ、悪酔いするから飲まないって決めている。そんな下戸なオレでも美味しく

感じる辺り、売れ筋のビールつつうのは伊達じゃねえんだな。あの提督に負けたみたいで悔しいが、認めるしかないようだ。

こっちのチーズも口いっぱい広がる濃厚な旨味が最高だなあオイ！名前はロイヤルチーズっていうのか？上手く説明出来ねえが、とにかくロイヤルな味だぜ！ロイヤルでデリシャスでデンジャラス！美味しい美味しい、最高だ！

………だけどやっぱこれを朝飯と呼ぶのは流石に無理があるよな。ハア、普通の飯が食いたいぜ。

「それじゃあ食事も来たし、電がスキルについて教えてあげるのです。」

「雷も一緒に教えてあげるから、分からないことがあつたらどんどん頼ってね。」

張り切ってオレにスキルについて教えようとする電と雷。人にものを教えるっていうのが楽しいんだろう、左右から似た声で話しかけられると若干混乱するけどな……。

「天龍さん、防具にはスキルポイントというものが割り振られているのです。このスキルポイントの合計値が一定数を超えるとスキルが発動するのです。」

「スキルが発動すると狩りの際に有利になるのよ。スキルによつては攻撃力が上がったたり毒に強くなつたりと便利なものばかりだから、深海棲艦に勝てないって思ったときはスキルに頼るといいわ！」

「ただど中にはマイナススキルっていうのもあつて、これが発動すると損しちゃうのです。ちなみに現状のスキルポイントは考えれば不思議と頭の中に浮かんでくるのです、これは狩娘特有の能力なのです。」

なるほどな……つまり発動させたいスキルのポイントが多い防具

を組み合わせて装備すればスキルが発動するってわけか、意外と戦略性が高いんだな。

そんなもって今のスキルは意識すれば分かるようになっていくのか。どれ、オレのスキルポイントは……うん、見事にバラバラでどれも発動してねえな。

「同じシリーズの防具には同じスキルのポイントが割り振られていることが多いのです。だから基本的に一式で装備すればスキルが発動するのです。」

「私と電が装備しているのは第六駆逐シリーズって言うの。今は部屋に置いてあるから手元に無いけど、暁や響とお揃いの帽子もちやんと持ってるのよ。こういうのを一式装備っていうの。長門さんや龍田さんの装備も同じく一式装備ね。今の天龍さんは装備の種類がバラバラでスキルポイントも滅茶苦茶だから何もスキルが発動していないの。そういう統一性の無い装備をキメラ装備って呼ぶのよ。一方で神通さんみたいに装備の一部を入れ替えたり、見た目の統一性は無いけどスキルの統一性が図られている場合はキメラ装備とは呼ばないわ。」

ああ……キメラってそういうこと。別にオレだって好きでこういうカッコをしてるわけじゃねえんだけどな。

「そして防具とは別にお守りっていうものがあって、このお守りにもスキルポイントが割り振られているのです。」

「お守りは採掘することで見つけたら、クエストの報酬で手に入ることがあるわ。天龍さんはまだ持ってないでしょ？ 歓迎会なんだからプレゼントに1個あげるわね、はいっ。」

雷はそう言うとおれに綺麗な色をした小さくて丸い石を渡してきた。

へえ〜これがお守りか……スキルポイントは気絶が+8で、お守りの真ん中に小さな穴が1つ開いてるな。

「あつ、雷ちゃんズルいのです！ じゃあ電はプレゼントにこれをあげ

るのです。」

電が渡してきたのはお守りよりも更に小さな綺麗な玉、これってさっきのお守りの穴にピッタリと入りそうだな。

「それは装飾品なのです。装飾品も少しだけどスキルポイントを持っているのです。装飾品は原珠っていう玉を素材にしている、原珠も採掘で集まるのです。」

「私が渡したお守りに空いてる穴はスロットって言って、そのスロットに装飾品をはめ込むことでスキルポイントが追加されるのよ。スロットは武器や防具にも空いていることがあるから、穴が多いものを選んで方が装飾品がいっぱい入ってお得ね！」

試しに今貰ったばかりの装飾品をお守りのスロットに入れてみる……あつ、さつきまで＋８だった気絶のスキルポイントが＋１０になってるな。

「それは耐絶珠っていう装飾品なのです。雷ちゃんのお守りと組み合わせることで気絶確率半減が発動するのです。」

「それを装備していれば天龍さんは気絶しにくくなって狩りが有利になるわ。本来ならオートガードのお守りを渡すのが伝統なんだけど、太刀を使ってる天龍さんにオートガードは使い道が無いからこれはその代わりね。」

つまりこれを装備しておけば気絶確率半減のスキルが発動するから気絶しにくくなるってことか。でもオートガードっていうのも名前はカッコよくていいな、どんな効果か知らねえけど……。

「ちよつと待てっ！私は雷や電からプレゼントなんて貰ったことないぞ!？」

貰ったばかりのお守りをポーチに着けていると、唐突に長門が騒ぎ始めた、正直に言ってちよつとうるさい。

「ええ、だって長門さんは私達より先に着任していたじゃない。」

「長門さんは着任当時に神通さんにお守りを貰ったって聞いたのです。」

「欲しいー欲しいー、私だって雷や電からプレゼントが欲しいーいー！」

みつともなく駄々をこねるビッグ7。お前幾つだよ、子供じゃないんだから……。

「じゃあ長門さんにはこのベルナスをあげるのです。ナスは嫌いなのです、だから遠慮しなくていいのです。」

「なら私はポケットティッシュをあげるわね！」

「おおーっ、こんなに嬉しいことはない。これで後10年は戦えるー！」
フォンデュ用に軽く焼いただけで何の味付けもされていないナスと、これまた何の変哲もないティッシュを貰って大喜びするビッグ7、そんなもの貰っただけで10年間も戦うって、給料で考えたら安いつてレベルじゃねえな……。

正直言つて雷と電から物を貰えれば何でも良かったんじゃないか？

「じゃあ次は連装スキルについて教えてあげるのです。連装スキルはその名の通り連装砲ちゃん特別な方法で作った料理を食べた時だけ発動することのあるスキルなのです。」

至福の表情で何の味も付いていないナスを頬張る長門を尻目にスキルの説明を続ける電。……よくあんなだらしない顔をした長門をスルー出来るな。

「連装スキルは普通のスキルと違って1回のクエストに出かけてから帰ってくるまでの間しか効果は続かないの。効果もボウガンで相手を直接叩いた時の威力が上がったり、ツタを登るのが上手になったりと地味なものも多いのよ。だけど受けるダメージを減らしてくれたり、やられて沈みそうになった時に持ち堪えることが出来たりと頼りになるものも多いの。ちよつとしたときに助けてくれる縁の下の力

持ちよ！」

「だけどスキルの中には敵に狙われやすくなったり、弾丸の威力が強くなる代わりに弾が真つすぐ飛ばなくなったりと扱いが難しいものもあるのです。それと連装スキルが発動するかしないかは運次第、運が悪いとスキルが発動しないこともあるのです。」

「スキルを発動させたい時はなるべく新鮮な食材を選ぶといいわよ。それとお食事券を使って料理を注文するとタダで食べられるだけじゃなくて、食材を全部新鮮なものにもしてくれるのよ。だからスキルを発動させたいってときはお食事券を使って食事をするといいわ！」

つまり裏を返せば新鮮じゃない食材も出しているってことだよな、それって食堂としてどうなんだ？

それにお食事券を使えば新鮮な食材を出すってことは、普段からちゃんと新鮮な食材があるのに出し惜しみしているってことだよな？在庫を使ってしまうっていう気持ちは分かるけど、知ってて客に古い食材を出すって駄目だろ。

……まさかここではそれが当たり前なのか？まさに『カルチャーショック！』って奴だなあ。

「特に今回長門さんが使ってくれた高級お食事券は絶対にスキルが発動する優れモノなのです、絶対に発動させたいスキルがある時は迷わず使うといいのです。」

タダ飯食うためだけの食券かと思いきや、実はすげーチケットだったらしい。恐るべし高級お食事券……。

そんなことを考えながら高級お食事券を使った張本人である長門の方に視線を向けてみると、長門はまだムグムグと何かを食べていた。

いつまでナスを食ってるつもりだよ、いい加減さつさと飲み込め……ってオイオイ、よく見たらそれナスじゃなくてティッシュペーパーじゃねーか!?ナスはともかくティッシュペーパーまで食うんじゃないねーっ！お前はヤギか!?

それでもって何で雷と電と龍田は長門の奇行を前にしても平然と

してられんの？これがここの日常茶飯事なのか？『カルチャーシヨツク！』にも限度があるだろ!?

頼れるはずの仲間のドンビキな姿に本当に頼っていいのか不安になる天龍だった……。

天龍ちゃんと鎮守府の仲間達3

「龍田さんは今日の予定はどうなってるのですか？」

ティツシユパーパーを貪る長門を誰も気にすることなく和気藹々と話は続いていく。オレもここで生活し続けていくうちに慣れていくのかなあ……。

「今日は天龍ちゃんがドスイ級にリベンジするからその応援に行くのよお。」

あ……オレがドスイ級にリベンジするのと、それに龍田が着いてくるのは決定事項なんだ。

「電は雷ちゃんとジャンボ鎮守府にいる暁ちゃんに響ちゃんとの4人で一緒にクエストに出掛ける約束をしているのです。」

まあた知らない鎮守府の名前が出てきたな……。クロオビ鎮守府にいるオレが言える立場じゃないけど、ジャンボって本当に地名か？「私達姉妹はみんなお揃いのイカリハンマーと第六駆逐の制服を装備しているの。ハンマーで相手の頭を叩くと、相手が眩暈を起こして気絶したり疲れて動きが鈍くなるのよ。」

「電達第六駆逐隊は息の合ったコンビネーションが自慢なのです。声を出したり合図をしなくても次々にハンマー攻撃を繰り返してやつつけちゃうのです！」

ええつとつまり第六駆逐隊はデカイ錨を武器にして、4人掛かりで深海棲艦の頭をボコボコに殴ってるってことだよな？話だけ聞くと可愛らしいが、冷静に考えてみると壮絶な絵面だなあ……。

「抜群の破壊力で眩暈を起こすでガンス……じゃなかった、第六駆逐隊4人で一緒に狩りに行くだとお!？」

ガバツ!!

うおっ、ビックリした！

いつの間にかティッシュペーパーだけでなく広告の用紙とビニールの包装まで食べてグロツキーになっていた悪食長門だったが、電と雷の話を聞いた途端に飛び起きた。

「そんな羨ましい……じゃなくてハンターランク2の駆逐艦4人じゃ心配だ。予期せぬ事態が起きるかもしれないだろう？ 私が一緒に着いて行ってやろうか？ うんそうだ、それがいい。」

どうやら電達の狩りに同行したいらしい。

何が何でも着いて行きたいんだなコイツ、もはや必死さを隠そうとすらしていないじゃねーか。

「えー、それはダメよ。だってクエストは基本的に4人以上で行ったらダメっていうジンクスがあるじゃない。」

「それに長門さんは今日は陸奥さんと待ち合わせの用事があるって言うていたのです。」

え？ 既に別の約束をしてるのにバックレようとしてたのコイツ？ 変態行為には目を瞑るとしてもそれは流石に駄目だろ、人として……。

「くうううくおのれジンクス、そして陸奥との約束！ それさえなければ着いて行ったものを……。」

妹だつてのに暗に約束しなきゃ良かったとか言われてるむっちゃん可哀想……。

「はいはい、大丈夫よ。下位のクエストは環境安定だから予期せぬ事態はそうそう起こらないって知ってるでしょう？ それに第六駆逐隊のコンビネーションは下位の狩娘とは思えない程洗練されているのも知っているはずよお？ そもそも長門さん自身も下位ランクの狩娘でしょ？ だから長門さんは何の心配もすることなく陸奥さんに会いに行つてね……分かつたかしら？」

「え？ いやでも……。」

「分かつたかしら？」

「ハイ、ワカリマシタ。」

長門の肩を掴みながらとっても素敵なお顔で告げる龍田。戦艦が軽巡に気圧されるなよ……。あれだけ必死だった長門が一瞬で涙目になってんじゃない。

「つーか長門も下位の狩娘だったんだな。ここでは艦種が強さに関係ないのは知ってるが、戦艦長門が神通や龍田よりも格下なのか……。」

「そりやそうとジंकスってなんだよ？4人以上で行くとダメだつて言ってたけど、艦隊って通常6隻で組むもんじゃないのか？そんでもって連合艦隊の場合だと12隻で出るだろ？」

「そういえばそれについても説明していなかったわねえ。あのね、狩娘は艦娘と違って1つのクエストで同時に出撃出来る人数は最大4人までっていう決まりがあるのよ。」

「またしても訳の分からないご当地ルールが出てきたな……。」

「まだ狩娘の存在が認知されて日が浅く運用のノウハウも確立していなかった頃に、艦娘と同じように6人編制で出撃したことがあったの。目的のクエストも決して難しいものではなかったわあ。けど無事に帰ってこれた狩娘は4人だけで残りの2人は轟沈しちゃったのよお。」

「はあ？狩娘って負けても動けないだけで轟沈しないんじゃないよ。前に出撃したとき狩娘は倒されても轟沈しないし、レンタクで回収のよ！」

「ええそうね、狩娘はやられても基本的に轟沈しないわよ……ただし4人以下の人数で出撃した場合に限るわ。逆に4人以上で出撃するとまるで呪われているかのように戦死者が出るのよ。」

流石に真剣な内容の話しているからか、龍田の表情もいつもの微笑から真面目なものへと変わる。

「その後5人で出撃したのだけど、またしても1人轟沈して生き残ったのは4人だったの。その事件以来狩娘は4人以上での出撃を禁止しているのよ。だから長門さんが電ちゃん達に着いて行ったら第六

駆逐隊の誰かが轟沈しちゃうかも?……ねえ長門さん?」

「あ……い……。」

もうその辺でやめたげてよお!長門の顔が土気色になっちまったじゃねーか!?

「……あれ?でもこの島を見つけた時に選りすぐりの艦娘で艦隊を組んで出撃したって言ってたじゃん、その際に勝てなかったとはいえ轟沈した艦娘はいなかったんだろ?その時の編成は4人だったのか?」「ううん、もちろん6人よお。」

あれ?さっきの話と矛盾してない?4人じゃないとダメなのに6人で生還したのか?

「6人なのに全員助かったことが不思議なんでしょう?でもそんなに難しい話じゃないわよお。だって1度に4人以上で出撃していけないのは狩娘や提督だけだもの。狩娘じゃない艦娘だから4人のジnkスを無視することが出来たのよ。最もアタリハンテイ力に適応出来ない艦娘じゃ戦力にはならないけどね。」

そういうルールなのか……。ここで普通に提督が出撃して、しかも艦娘よりも戦力になるなんて発言が飛び出す辺りやっぱりアタリハンテイ力っておかしいな……。

「あら、もうこんな時間なの?それじゃあ待ち合わせもあるし私達は先に行くわね、ご馳走様!」

「バイバイなのです天龍さん龍田さん。」

雷と電は俺達に一礼すると食堂から立ち去った。……あれ、誰か1人名前を呼ばれてない奴がいるような?

ほら、その机に突っ伏しているおもしろい格好をした顔色の悪い

アブナイ女がおるじやろ？

え、腕にダンゴ虫をくつつけているもつとおもしろい格好をしたアホみたいな女がいるって？H A H A H A、誰のことだよ？

「うぐぐ……しかし私がやられても第2第3の私がいるということをお忘れな！」

意味不明なことを言いながら涙目の誰かさんも逃げるかのように退室していった。

まあ狩娘も艦娘の一種だし、同一の狩娘がいても可笑しくはないから他所の鎮守府に第2第3の長門もいるんだろなあ。まさか全員ティツシユを食べるとかないよな？

「それじゃあ私達もそろそろ行きましようか。」

そう言いながら龍田も立ち上がり、それに合わせてオレも立ち上がる。

「さてと、このまま出撃……と行きたいところだけどその前にちよつと用事があるの。せっかくだから天龍ちゃんも着いて来たらどう？きつと天龍ちゃんにとつてもいいことがあるかもしれないわよお。」

いいこと？なんだそりや？

やって来たのは日当りがよく、小さな畑もある鎮守府の裏庭。来るのは初めてだが、のどかな雰囲気でも悪くない場所だな。

小さなクワで一生懸命に畑を耕しているのは笠を被った連装砲ちゃん、そろそろ連装砲ちゃんが働いているのにも違和感無くなってきたな……。

他にも昼寝をしている連装砲ちゃんや、腹筋を鍛えている長10cm砲ちゃんがいる……艦装が腹筋???

まあとにかく数多くの連装砲ちゃん達がここで過ごしているらしい。

ひよつとしてこの鎮守府って狩娘よりも連装砲ちゃんの方が人数多いんじゃないか？

辺りの景色を眺めていると、裏庭から外へと続く裏口から目が赤く、黒い体色をした連装砲くんが荷車を牽きながらこちらに向かってやって来た。

何か深海棲艦みたいな格好してるな、あの目の周りを覆うようなマスクはどことなくチ級の着けているものに似てるし、上半身を覆っている黒いラバースーツもチ級っぽい。深海棲艦版の連装砲くんか？

っていうか連装砲くんなのに服を着てんのかよ……。オレなんか昨日まで下着姿のまま外出してたっていうのに……。

「うっ、連装砲くんか……。」

前回酷い目に遭わされたせいであんなに身構えてしまう、また何か厄介事が起きるんじゃないかと気が気でない。

が、そんなオレとは対照的に龍田は笑顔で黒い連装砲くんに向かって手を振っている。何だ、知り合いか？

「お帰りなさいコータロー。交易の方はどうだった？」

「大成功ダゼー、ハチミツドツサリダゼー！」

「あらあら、ありがとう。お礼にこの大きなドングリをあげるわあ。それじゃあしつかりと休んでね、お疲れさまあ。」

「オ疲れダゼー。」

そのまま連装砲くんは立ち去り、その場に残されたのはハチミツの入ったビンを胸に抱えた龍田と、唐突な展開に着いて行けずに啞然とするオレ。

「え？今の何？っていうか誰？」

「ふふふ、あの子はコータローよ。」

「いやいや、名前じゃなくて……。あの連装砲くんは何なのさ？」

「コータローは私のオトモ連装砲よ。」

「オトモ連装砲？何だそりゃあ？」

またしても聞いたことのない単語が出てきた……。オトモって

何だ？きび団子でもあげたのか？でも今あげてたのってドングリだよな？じゃあお腰に着けたきびドングリになるのか？

「天龍ちゃん、また混乱して変な事考えてるでしょ？ふふつ、私が教えてあげてもいいんだけど、私よりもっと連装砲ちゃんに詳しい狩娘がいるからその娘に話を聞きに行きましよう。」

そう言うと龍田はオレを連れて裏庭から鎮守府の外へと続く裏口の方へ向かって歩き始めた。

連装砲ちゃんに詳しい狩娘ねえ？何となく誰だか予想がつくけど、それがいいことに関係するのか？

いいこととやらに期待を膨らませながらも同時に今までロクな目に遭ってないので、それならここにいる連装砲ちゃんと遊んでいた方がよっぽどいいことなんじゃないかと思いはじめた天龍なのであった。

天龍ちゃんとオトモ連装砲Ⅰ

連装砲ちゃんに詳しい狩娘に会わせてもらうことになったオレは、龍田に連れられて鎮守府の裏口から外に出た……出たのだが。

「あー、良かった。あそこにいるのがその狩娘よお。」

「え、もう？・近くない？」

その狩娘は意外にも裏口の外のすぐ近くにいたらしい、もう少しくらい歩くと思ったんだけどな。

「それであそこってどこだよ？・どこにも姿が見えねーんだけど。」

「なに言ってるの、あそこにいるじゃない。」

あそこって言われても龍田の指差す方向には2, 3メートル近くあるバカでかいリュックが1つあるだけで狩娘の姿なんて影も形もねーぞ？

あつ、突如としてリュックが動き始めた!?

ひとりでに動くお化けリュックだ………なんてアホなことではなく、リュックを背負っている誰かがオレ達の声を聞いて振り返ったらしい。

そのリュックを背負っているのが連装砲ちゃんに詳しい狩娘ってことか。

振り返ったリュックの狩娘。その容姿はサラサラとした綺麗な長髪に、小柄でポリュームは無いがスレンダーな肢体。そしてセクシーを通り越して若干いやらしい服装。何よりも連装砲ちゃんと関わりがあるというその狩娘は間違いなく……。

「いい風ね、あたしが天津風よ。」

お前かよ!?

「彼女が連装砲ちゃんに詳しい狩娘の天津風ちゃんよお。」

「あたしが詳しいのはどちらかと言えば連装砲くんなのだけどね、まあ大体それで合ってるわよ。」

「いやいやちよつと待て、ここは普通島風じゃねーの?」

「あら、あたしじゃ不満? 島風の方が良かった?」

「いやそういうつもりで言ったワケじゃ……。」

「冗談よ。この仕事は島風と交代でやっているからあながち間違いじゃないわ。今日はあたしが担当の日なのよ。」

担当? 一体何の仕事の担当だよ、荷物持ち?

天津風は背負っている大きなリュックを片手で軽くトントンと叩く。それと同時にリュックの中から飛び出してくる何体もの連装砲ちゃん。

そっか、あのでかいリュックの中には連装砲ちゃんが入っていたってワケか。

「さて、ここでは連装砲ちゃんを雇うことが出来るわよ。好みの子はいるかしら?」

ズラツと並んだ何体もの連装砲ちゃんに連装砲くんは長10cm砲ちゃん。

用もないのにホームセンターのペットコーナーに寄るヤツの気持ちがかかったぜ、こりや眺めているだけでも楽しいな。

とはいえ龍田に言われて連れて来られただけで何の話をしてるのかさっぱり分かんねーんだけど……。

「連装砲ちゃんを雇うって何の話さ? それとオレはオトモ連装砲について知りたいんだが。」

「じゃあ連装砲ちゃんを雇うのは初めてなのね? いいわ、あたしに分かることなら何でも教えてあげる。」

そう言っただ教師モードに変わる天津風。小柄な駆逐艦とはいえ、雰囲気大人びているせいか雷や電に比べてそれっぽい。

「まずこの地域の連装砲ちゃん達が野外で暮らしているのは知ってるかしら?」

「それは知ってるぜ、実際に見たからな。」

本当は見るどころか魚雷で派手に吹っ飛ばされたんだが、それは流石にみつともないし黙っとこう。

「なら話は早いわね。連装砲ちゃんは野外で独自に生活しているんだけど、艀装だった頃の記憶が残っているのか狩娘と一緒に暮らすことを望む子も多いの。あたしと島風はそんな連装砲ちゃん達をスカウトしてシヨップやレンタクといった狩娘の役に立てるお仕事の手廻をしてるのよ。」

ああ、だから鎮守府のあちこちで連装砲ちゃんが働いてるのか。そんなでもって仕事と担当っていうのもこれのことね。

「そして連装砲ちゃんの中には狩娘と同じように深海棲艦と戦いたっていう子も少なくないわ。だけどいくら元々艀装だったとはいえ、連装砲ちゃんはそのままじゃお世辞にもそんなに強いとは言えないの。いきなり連装砲ちゃんを深海棲艦の前に放り出してもそのままじゃあ返り討ちに遭っちゃうわ。」

連装砲ちゃんが弱い?じゃあその連装砲ちゃんにすら轟沈寸前までボコボコにやられたオレは一体……?」

「だから深海棲艦に立ち向かえるようになるまでの修行も兼ねて、狩娘の狩りのお手伝いをするオトモ連装砲というお仕事が誕生したのよ。オトモ連装砲は狩娘と一緒に深海棲艦と戦うだけじゃなくて、アイテムを採集したり、強くなるために身体を鍛えたり、交易に出掛けたりと色々なことが出来るの。」

ああ、だから長10cm砲ちゃんが腹筋を鍛えていたり、龍田のコータローがハチミツを運んだりしていたのか。っていうかあの腹筋意味あったのかよ……。

「本来なら仲介料を取るのだけど、オトモ連装砲を雇うのは初めてなんでしょ？初回サービスとしてタダにしてあげるわ。好きな子を1人連れて行っていいわよ。」

マジで!?!ラツキー♪持ち合わせも少なかったしツイてるな。

さて、オレの前に並んでいるのは全部で6体の連装砲。連装砲ちゃんに連装砲くんは長10cm砲ちゃんがそれぞれ2体ずつ。色も赤に黄色や緑色などとてもカラフルで目移りするぜ。

それにしてもこんなカラーバリエーションがあったんだな、まるでカラーヒヨコみたいだ。

「天龍ちゃん、見た目で選ぶのも構わないけど連装砲ちゃんのトレンドやスキルにサポート行動もすっかり考えた方がいいわよお。」

「トレンド？それにスキルはさつき聞いたけどサポート行動って何だよ？」

「そうね、せっかく初めて連装砲ちゃんを雇うんだもの。それについても知っておいた方がいいわ。連装砲ちゃんにもそれぞれ個性があつて、それによって得意な戦い方も違うのよ。そしてその戦い方を大まかに分別したものをサポート傾向またはトレンドって呼んでいるの。例えばここに赤い連装砲くんとピンクの連装砲ちゃんがいるでしょう？連装砲くんのサポート傾向はファイトで、ファイトの子はとにかくガンガン攻めるのが得意なの。それに対してこっちの連装砲ちゃんのサポート傾向はボマーよ。ボマーの子は魚雷を使った攻撃が得意なの。スキルも狩娘とは違って連装砲ちゃんが初めから覚えていてスキルを自由に選んで使えるからスキルポイントは必要無いわ。その代わりに連装砲ちゃんが覚えていないスキルを新たに覚えさせるのは一苦労だけどね。この連装砲くんの場合だと体力強化の術を覚えているから普段よりも体力の上限が増やせるわ。こっちの連装砲ちゃんなら熱・爆弾耐性の術を覚えているから魚雷で自爆してもダメージが少ないの。最後にサポート行動なのだけど、まず前提

として連装砲ちゃんは基本的にアイテムを使うことが出来ないの。使い方が分からなかったり、そもそも狩娘用のものは規格が合わなかったりするみたいね。その代わりにこのサポート行動で体力の回復をしたり魚雷で攻撃出来るのよ。この連装砲くんなら攻撃力を強化する鬼人笛の技が使えて、こっちの連装砲ちゃんなら連装式活力壺の技が使えるから怪我の治癒が早まるわ。サポート行動は敵を攻撃するものだけでなく、自分を強化するものから一緒にいる仲間を援護するものまで様々な効果の物があるわ。これら3つの要素の組み合わせを考えて雇いたい連装砲ちゃんを選ぶといいわよ。」

ふーん、なるほど……………話が長過ぎて全く分からん。

要するに連装砲ちゃんにも色んな性格があるから性格の合う子を選べよってところか…………。

とはいえ見た目で選んでも問題無いって龍田も言ってたしルックスで決めるか、難しいことは分かんねえぜ。

まずはこの赤い連装砲くん。通常の連装砲くんの3倍速いってんなら話は別だがそんなワケねーよな？とはいえスポーツカー的な雰囲気があつて悪くは無い。

もう1体の連装砲くんは目に優しい緑色で何だか野菜みたいだ。草むらに入ったら迷彩効果がありそうだが、海の上じゃ意味ねーよな。

こっちの連装砲ちゃんはライトグレー、いや銀色か？光が反射して若干眩しいぜ。

もう1体の連装砲ちゃんは淡いピンク色でどことなく綾波型の潮の持つてる連装砲に似ているな。女兒受けの良さそうな可愛いカラーだ。

こっちの長10cm砲ちゃんは黄色に黒の縞模様が入っている。トラや蜂みたいな色合いだが、長10cm砲ちゃんの金属質な外見じゃ工事用の機材みたいだな。

そんでもって最後の長10cm砲ちゃんは…………!?

「濃い紫色の体色に黄色の隻眼だとお!?これってどう見てもオレじゃねーか、オレだよオレオレそうオレだよ天龍だよ!きつとオレが死んで生まれ変わったらコイツになるんだよ!」

「はあ?あなた何を言っているの?」

「まーた天龍ちゃんが意味不明なことを言ってるわあ。軍艦が生まれ変わって現れたのが艦娘なのに、更に生まれ変わって次は連装砲に転生するつもりなのかしらあ?それに天龍ちゃんにはちゃんと両眼があるでしょう。」

「そもそも今あなたが死んでも、この子にはどう足掻いてもなれないと思うんだけど……。」

つい思ったことを口に出しただけにメタクソに言われてるオレがこの程度じゃメゲねーぞ。

こういう出会いを運命って呼ぶんだろうな、オレとコイツは出会うべくして出会ったってワケだ。

うーん、本当はカツコよくて頼れる男性に運命を感じたかったんだけどな……。

意外だと思ったか?オレだって女だしそういうのにちよつとは憧れるんだよ。

「よし、決めたっ!こういうのはヒアリングだ、オレはコイツが気に入った。せっかくだから、オレはこの紫の長10cm砲ちゃんを選ばせ。」

「……それを言うならフィーリングね。」

メゲないとは言ったが傷付かないとは言っていないからな、グスン……。

「旦那サン、ボクヲ雇ッテクレテアリガトウ!オトモノ仕事ガンバルゾー!」

愛想良く挨拶をする長10cm砲ちゃん。おうおう元氣のいい奴だ、

こりや当たりを引いたかもしれねえな。

「決まったわね、それでこの子の名前はどうする？連装砲ちゃんにも元々の名前はあるけど、狩娘から名前を送られるっていうのは連装砲ちゃん達にとつて特別なことなのよ。」

へえ、そんな習慣もあるのか。

「ちなみにこの子の今の名前はヤングアルくんよ。」

「ボク、ヤングアルくん！」

「……やんがるくん？何だよその妙ちきりんな名前は？沖縄の天然記念物の飛べない鳥か？」

「そんなに変かしら？確かにこの子の名前の由来は鳥だけど、この諸島に伝わる昔話に登場する黒狼鳥から付けられた名前だからそこまで可笑しくないわよ。」

昔話い？いきなりそんな話を出されてもオレ知らねーぞ？

そもそも黒狼鳥って何だよ？狼だけなら強そうだけど鳥って言われたら弱そうじゃん。どうせヤンバルクイナみたいな外見してんだろ？

「黒狼鳥っていうのはねえ、禍々しい紫色の翼と団扇のように大きな耳が特徴的な全長10メートルを超える巨鳥よお。戦うことだけが生きがいの孤高の戦闘狂で、鋭い嘴は大地を砕き、猛毒のトゲが生えた長い尻尾は鉄の剣を押し折り鋼の鎧をも貫いたそうよお。そして口からは灼熱の火球を吐き出して周囲を焼き払ったんだって。そんな戦闘狂の黒狼鳥は戦いに次ぐ戦いで全身傷だらけとなり、とうとう片耳と片目を失ったの。それでも命尽きるまで戦いをやめることは無かったそうよお。フッフ、怖いかしらあく♪」

「何それ怖すぎワロエナイ、どんな化け物だよそれ？想像上の生物だよな？まさか実在してないよな？実在するとしたらこいつの前世はオレじゃなくて黒狼鳥？それともオレの前世が黒狼鳥でそのオレの来世がヤングアルくん？………オレも死ぬまで戦いたい戦闘狂の気質があるしこれが正解じゃね？」

「うーん、天龍ちゃんはまずその前世来世って考え方から離れよつか？話がとつてもややこしくなってるわよお。それに艦娘自体が船を

前世に持つてるとはいえ、鳥が船に生まれ変わるワケないでしょう。それだと船の頃の天龍ちゃんがいなくなっちゃうわよお?」

「何でもいいからそろそろ名前を決めてくれないかしら。この子も待ちくたびれているわよ?」

「ヤンガルクン、新シイ名前楽シミダゾー。」

むう、龍田と天津風が冷たい……。まあいいや、今からこの天龍様の世界レベルのネーミングセンスって奴を見せてやるぜ。

「……………よし、隻眼戦鬼・ヘヴンズドラゴン政宗公ってのはどうだ?」

「却下。」

「即答だ?! 一生懸命考えたのにひでえぞ! 鬼、悪魔、龍田に天津風!」

「酷いのはあなたのネーミングセンスよ! ヤンガルくんよりよっぽど変じゃない! だいたい隻眼戦鬼とか深海棲艦の一種にしか聞こえないわよ!」

「引つ叩いてもいいかしらあ天龍ちゃん? そもそもあんまりこんなこと言いたくないけど名乗るのも憚られるような変な名前を付けるのって立派な虐待よお。」

何……………だど……………? オレの信じる命名は、連装砲を幸せに……………。

「ソノ名前ハチョットイヤダゾー。」

ヤンガルくんにもダメ出しされたぞ畜生め……………。

何が駄目だつてんだよ? カッコいいじゃん、隻眼戦鬼・ヘヴンズドラゴン政宗公っての。

「しようがない、じゃあコイツの名前はヘヴンズ」はいマサムネ、マサムネで決定!」ゴンで……………ってオイコラ、まだ人が喋つてる最中だろうが!」

何だよ天津風の奴、ヘヴンズドラゴンじゃダメだったのか? オレの名前が元になってんだぞ、いい名前に決まってるじゃねーか。この名前にケチを付けるってことはオレの名前にケチ付けるのと同じだぞ

?

「私もマサムネがいいと思うなあ、ヘヴンズドラゴンはちよつと長過ぎて言いにくいわよお。それに比べてマサムネは実在した歴史の偉人だし凄くセンスがいいと思うわあ。ほら、独眼竜で天龍ちゃんにも通じるところがあるし。」

「ボクモマサムネノホウガ、センスガイト思ウゾー。」

センスがいい……マジで？ ジョニーやスミスの命名時にも却下されたオレのネーミングセンスだが、マサムネには今まで日の目を見られていなかったオレのセンスが輝いているっていうのか？

「フフフ、そうかそうかア！ オレもそう思っていたんだよーっ！ ウフフフフ！ 今日からお前はマサムネだア！ 気に入ってもらえて嬉しいぜマサムネ！！ マ〜サ〜ム〜ネ〜！！！！」

「……………」

「まあいいわ。ヤンガルくん、あなたは今からマサムネよ。色々不安もあるでしょうけどこの人のオトモ連装砲として頑張るの、いいわね？」

『色々』のところ強調しやがったな、クソツタレ……。

「マサムネイツパイ頑張ルゾー。頑張ッテ1人前ノオトモニナルゾー！」

「それじゃあ天龍さん、あなたにはこれを渡しておくわ。無くさないようにね。」

そう言つて天津風が渡してきたのは……連装砲ちゃんの顔が描かれたVRゴーグル？

何だこれ、オトモ契約キャンペーンの一環でおまけのゲームでも配っているのか？ それともオトモの取扱説明書代わりの情報媒体か？

「それはレンターモードで使う連装砲ビジョンモニターよ。それが無いとレンターモードで活動することが出来ないから注意してよ。無くしたら売ってあげるけど、高いし作るのも大変だから無くさないでよね。」

レンターモード？今日は知らねえ言葉ばかり出てきやがるなあ。レンタカーの親戚か？

「レンターモードについてはいつか実際に使う時に私が教えてあげるわあ。天龍ちゃんのことだし流石にそんな一度に覚えられないでしょ？」

それもそうだな、いい加減頭がパンクしそうだけ。

「それでもってマサムネよ、お前さんのトレンドは何なんだ？」

「そういえばそれを知らずに契約したんだったわね……。」

「天龍ちゃん結局見た目で決めちゃったものねえ。」

呆れるなよ、コイツを気に入ったんだから仕方がないだろ？

まあこの外見だし戦闘狂で有名な黒狼鳥由来の名前が付いていたんだ。きつと勇敢で戦闘が得意なパワータイプなんだろうな。

「マサムネハ平和主義ナンダゾー。ダカラ得意ナノハ宝探シダゾー。」

えっ？平和主義??宝探シ???戦闘は?その歴戦の猛者のようなそのルックスは??

「平和主義ダカラ戦イハ苦手ナンダゾー。旦那サンガ戦ツテイル間ハ隠レナガラ一生懸命応援シテルゾー。ソレニレベルモ一ダカラ深海棲艦ニ襲ワレタラスグニ逃ゲチャウシ、ヤル気モ少ナイカラ疲レヤスクテスグニサボツチャウケドソレデモ頑張ルヨー。」

平和主義だから戦闘中は隠れているし襲われたらすぐに逃げるって……。

深海棲艦と戦いたいからオトモ目指しているんじゃないのか？

それに今回は初回サービスだから無料とはいえ、基本的に仲介役にお金を払って雇ってもらっているっていうのにやる気が無い?そんなもってすぐに疲れてすぐにサボる?

こんなんじや正社員どころかバイトにもなれねーぞ!?

これはひよつとしてとんでもない大ハズレを引いたのでは？

初めて雇ったオトモ連装砲のあまりのやる気の無さに呆れを通り越して戦慄する天龍なのであった……。

天龍ちゃんとオトモ連装砲2

うくん、戦いが嫌いな平和主義のオトモかあ。本当に役に立つのかなあ？

「天龍ちゃん、この子じゃ頼りにならないと思っっているんじゃないかしらあ？」

オレがやる気を感じられないマサムネの態度に不安を感じたことに気付いたのか、龍田が声を掛けてきた。やっぱコイツオレの心読んでるだろ？

「そうね、確かに宝探しのオトモは戦闘ではアテにならないわ。でもね、一流の狩娘になりたいならなるべくオトモには頼らない方がいいのよお。いつもオトモに頼ってばかりいるとオトモ無しでの狩りが上手くいなくなっちゃうわ。それじゃあどっちがオトモか分からないでしょう？それに狩娘の運用が始まった当時はオトモという概念自体が無くて、みんなオトモ無しで狩りに行っていたのよお。そう考えればオトモがいるだけでもありがたいでしょう？もしオトモを实战に連れて行く気が無いのなら交易に行かせればいいのよ。」

なるほど、言われてみりやその通りだな。龍田だって普段はオトモを連れて行っていないみたいだし、最強の狩娘を目指すオレが連装砲におんぶに抱っこじゃカツコが付かないもんな。

「じゃあマサムネ、お前は採集する時とかには着いてきてもらうけど普段は交易や自主トレをしてもらうことになるぜ。それでもいいかい？」

「イイヨイイヨー！ココデイツパイ鍛エタリ勉強シテ、トレンソウサンヤレント様ミタイナー人前ノトレジャーレンターニナルゾー！」

了解してもらったのはいいんだけど、なりたいのは1人前のトレジャーハンター……じゃなくてトレジャーレンターなんだな、まあいいけどよ。

つかトレンソウさんにレント様って誰？ホウレンソウの親戚か？

「話はまとまったかしら、じゃあ最後にこの契約書に目を通してね。契約内容に同意してサインをしたら手続きは終了よ。」

そう言われて天津風から契約書を手渡される。

契約書も書かなきゃいかんのか、面倒臭いな。えーと、どれどれ……。

『オトモとなった連装砲はあなたの所有物として扱われます。』

『オトモの責任は雇い主の責任となりますのでご注意ください。』

『オトモとして働く経験そのものが報酬となるので基本的に給料は不要です。』

『連装砲はドングリと連装マタタビを好みます。給料代わりにそれらを〴〵褒美として与えるとやる気と懐き度が上がります。』

『やる気と懐き度が高い程、連装砲のパフォーマンスは上がります。』

『連装砲は働き続けるとやる気が下がりますので、適度に休息を与えましょう。』

『彼らも生き物であり感情があります。あまりにも不当な扱いを行つた場合には憲兵に通報されます。〴〵注意ください。』

『専門家の許可なくオトモを改造した場合にはいかなる理由があろうとも犯罪となり、重い罰則が科せられます。』

ふーん、なんかペットを飼うときの契約書みたいだな。

それにしても連装砲の改修は特に重い罰則が科せられるのか……。

とはいえ普通の連装砲ならともかく、この島の連装砲ちゃん達は生き
ているんだし勝手に改修するのはダメだよな。あれ？改修じゃなく
て改造か？何がどう違うんだ？

「どう、納得してくれたかしら？」

「まあ大体分かったけどよ、このオトモの改造って何なのさ？」

「ああそれね。まあ健全な鎮守府なら大丈夫だと思うけど、このオト
モの改造っていうのはクエストの捏造や装備の不正改造と並ぶ禁忌
中の禁忌よ。これらを破った狩娘は解体処分になるし、提督なら資格
の剥奪と懲役刑に処されるわよ。だから絶対にこれらの規則は破ら
ないようにね。」

禁忌中の禁忌!?!……ゴクリ。クエストの捏造ってのは何となく分
かるけど装備の不正改造ってのは何だよ？

「この際だから他の禁忌についても一緒に教えておくわ。まずクエス
トの捏造だけど、これは嘘のクエストをでっち上げることです。不当に報
酬を得ようとするものよ。言うまでもなく犯罪だけど、これに知らず
に着いて行った狩娘も責任を問われることがあるから個人の問題だ
けでは済まないの。中には自分でクエストの資料を捏造する技術が
無いから、他所の鎮守府の狩娘に捏造したクエストの資料をねだると
いった問題行動も見られるわ。当然そんなクエストを渡すのも貰う
のもれっきとした犯罪よ。仮にあげると言われても絶対に貰わない
ようにしてね。」

「天龍ちゃんは騙され易いところがあるから、チケットを納品するだ
けでお金も素材もたっぷり貰えるお得なクエストがあるとか言われ
たらきつと着いて行っちゃうでしょ？今言われたように着いて聞く
だけでも犯罪になるから着いて行っちゃ駄目よお。明らかに変なク
エストを見掛けたら憲兵さんに通報してねえ。」

誰が騙され易いってんだ!?!オレは退却命令とかなら無視するかも
しれねえが、基本的に熱く燃え上がる正義の魂を持つ女だけ？不正は
絶対に見逃さねーっての！

「次に装備の不正改造についてだけど、まず知ってると思うけど武器の生産や強化が出来るのは竜人妖精さんだけよ。そして妖精さんは自分の仕事に誇りを持つてるし、いい子揃いだから決して適当な仕事はしないわ。だけど妖精さんを脅したり、非合法的な機材を使って武器や防具、場合によっては本来強化改造が出来ないお守りすら改造しようとした事例もあったのよ。正規の方法で作られていない装備は異常なまでの性能を誇るし、お守りも有用なスキルが簡単に発動するよなものばかりよ。」

あれ？それだけ聞くといいこと尽くめじゃん。妖精さんを脅して働かせるってのは良くねえけど、強力な装備が作れるのならむしろ積極的に使った方がいいんじゃないのか？

……そう思っているとまたしてもジト目の龍田が声を掛けてきた。「天龍ちゃん、不正な装備を使ってみたいとか考えてるでしょう？当然駄目よお。知つての通りこの海域ではアタリハンテイ力の影響を受けているでしょう。そして竜人妖精さんが正規の方法で作り上げた装備がアタリハンテイ力に対応しているというのも既に知っているわよねえ？そんな中にそんな怪しい方法で作られた装備なんかを持ち込んだら何が起こるか分かったものじゃないわ。実際にそんな装備を使っていた狩娘がいたのだけれど、徐々に情緒不安定になって異常な行動が見られるようになったの。そして最期はクエスト中に突如として音信不通になって、そのまま行方知れずになってしまったそうよお。」

怖エ、錯乱した挙句に神隠しに遭うのかよ。もはや力学でも何でもないじゃん、ズルした悪者への天罰か？

戦いの果てに倒れるんなら望むところだが、頭がおかしくなっていないくえ不明で早くも終了とかちよとSYレにならんしょこれは……？

「他にも狩りの最中に装備の性能が0になった事例もあるわ。これじゃあ当然深海棲艦に勝てるはずもなく返り討ちにされるだけよ。これで装備の不正改造の危険性は理解出来たでしょう？当然こんな

装備の狩娘を見掛けた場合も一緒に狩りに行ったりせずつに落ち着いて憲兵に連絡するといいわよ。」

狩娘と互角以上に渡り合う提督ツエーって思っていたけど、不正改造した装備を身に着けた狩娘すら取り押さええる憲兵もすげえな。提督と一緒に憲兵が深海棲艦と戦えばいいのに……本当に狩娘って必要なのか？

「それじゃあ最後に本題のオトモの改造について教えてあげるわ。この島の連装砲ちゃん達は狩娘から独立して生きているとはいえ、艦装だった頃と体の作りが大きく変わったわけではないから理論的には改造やパーツの組み換えは出来るわ。だけどアタリハンテイ力によつて連装砲ちゃんを改修してもそれは強化にはつながらないの。それにここの連装砲ちゃんは鍛えて強くなる、つまり成長するわ。だからこの諸島では一般の艦装も含め連装砲ちゃんの改修は基本的にやってないわ。その代わりに連装砲ちゃんは狩りに出て経験を積んだりトレーニングをしているっていうワケ。」

そういえばそうだったな。この諸島ではアタリハンテイ力によつて艦装の効果が無いから、連装砲ちゃんも艦装の一種だと考えれば改修しても変化が無いということにも納得だ。

それでもつて連装砲ちゃんが鍛えて強くなるっていうのはちよつと納得し辛いけど、改修の代わりに戦つて強くなるっていうのはそつちの方が分かり易くていいな。

「でも最初に誰が考えたのかは知らないけれど通常の改修で性能が上がるのならば、連装砲ちゃんの身体そのものを改造して戦闘能力を上げようという実験があったのよ。それもちよつとした改造ならまだしも、明らかに連装砲ちゃんへの負担を無視した無茶な改造をね。」

身体への負担を無視した改造？確かにそりゃヤバそうだ……。

「この改造で連装砲ちゃんの性能は狩娘を遥かに凌駕するようになったわ。更には頭脳回路の改造までして、戦って相手を殺すこと以外考えられない戦闘兵器にしたの。こうして生まれた連装砲ちゃんは我が身も顧みずに戦い続け、敵対する相手を一撃で討ち取る程の強さを見せたわ。その圧倒的な戦績から悪魔連装砲との呼び名も付いたの。」

ひえくっ、リアル仮面ライダーじゃねーか!?!しかも脳改造済みだからショットカライダーじゃん!そんな海の平和を守る組織がやっていたいいことじゃねーだろ!

「当然その実験は明るみに出て関係者は全員逮捕されたわ。だけど無理な改造が祟ったのか保護された連装砲ちゃんは衰弱が激しく、未だに意識不明の寝たきり続きだそうよ。そして実験の結果は闇に葬られた……ハズなんだけど、どこから情報が漏れたのか未だに悪魔連装砲を作り出そうとする悪徳提督もいるみたいで逮捕者も出ているわ。悲しい話ね……。」

そう語る天津風の表情は辛そうだ、やっぱり連装砲ちゃん達のが大好きなんだな。

「だからこそオトモになった連装砲ちゃん達は大切にしていあげてね。ただの艦装じゃなくて狩猟生活における掛け替えのないパートナーなんだから。」

「おう、任せとけて。オレがそんな悪いことする奴に見えるか?むしろそんな外道を見掛けたら真っ先にぶっ飛ばしてやるぜ!ほら見ろよ、契約書にもしっかりとサインしたぜ。そんなことは頼まれてもやりませんってな。」

「ふふっ、愚問だったわね。それじゃあこれにて手続きは終了よ。マサムネのこと宜しくお願ひします。」

こうしてオレは新たなパートナー、マサムネと出会った。

色々としょckingな話も聞かされたが、連装砲ちゃんを大切にしたいという天津風の熱い想いも受け取った。

オレは受け取ったその想いを大切にしていきたい、心からそう思う……。

「あつ、私も新たに連装砲ちゃん雇っていいかしらあ？その銀色の子が欲しいんだけどお？名前はノブヒコにするわあ。」

「毎度ありー！」

おいコラ！人がメに入ってるんだぞ、綺麗に終わらせろよ!?

天龍ちゃんと初めての緊急クエスト

「……トイウ訳デ、マサムネハ高い場所ガ苦手ナンダゾー。」

「へえ、高所恐怖症なんだな。まあオレ達は海の上で戦うんだしあまり気にするなよ。」

「デモ遠クマデ狩リヤ交易ニ行ク場合ハ気球ニ乗ルコトモアルンダゾー。ソレニ今後ノ探索ノ為ニ大型飛行船ヲ造ツテルツテ噂モアルンダ。何ヨリレント様ノモンレン隊ニ参加スルト、モレナク気球カラ大砲デ発射サレルンダ。レント様ミタイナー人前ノトレジャーレンターヘノ道ハ辛ク厳シインダゾー。」

マジで？そのモンレン隊ってのが何かは知らねーけど、連装砲ちゃんを大砲に詰めて飛ばすとか発想がスゲーな、南斗○拳かよ？そもそも連装砲ちゃんを大砲で飛ばすってことは、砲台から砲台を発射してることじゃない。それなんてマトシヨシカ？

天津風の紹介でマサムネとノブヒコを雇った後の帰り道、鎮守府の長い廊下を歩きながらオレと龍田はさっそく新しいオトモとコミュニケーションを取っていた。

自分専属の連装砲っていいもんだな。可愛いし、話し相手になってくれるし、もはや戦いで役に立つとか立たないとかどうでもよくなってくるな。オトモ連装砲と遊んでるだけで丸一日潰せそうだ。

よく島風が連装砲ちゃん以外に友達のいないボツチキヤラ扱いされることがあるけど、実際にこんなに可愛い連装砲が3体も身近にいれば実際にボツチでもあんまり気にならねーよな。可愛いは正義とはよく言ったもんだ。

……でもよく考えたら艦娘の方の島風と一緒にいる連装砲ちゃんは生き物じゃなくて艀装のままなんだっけ？すると艦娘の島風が連

装砲ちゃんと一緒に遊んでもそれはただのブンドド？うわあ、考えただけで悲しいぞ。いやいや、生き物じゃないだけで艦装の連装砲ちゃんにも自我はあるだろ……あるよな？

「そうそう天龍ちゃん、今までは私が貼ったクエストの半券を貰ってクエストに出掛けていたでしょう？でも今回受ける予定のクエストは絶対に天龍ちゃんが自分で受注してねえ。」

「はい？」

唐突に何の話だよ？半券って今まで無理矢理押し付けられていたあの紙切れのことか？

「次に受けるドスイ級狩猟のクエストは天龍ちゃんのハンターランク昇格が掛かった緊急クエストだからねえ。」

「緊急クエスト？非常事態でもあったのか？」

「そうじゃないわよお、勿論非常事態にも緊急クエストは発令されるけどこれは天龍ちゃんの昇格のための緊急クエストなのよ。」

翔鶴……じゃなくて昇格のための緊急クエスト？それもオレの？オレ何かしたっけ？

「詳しい話は神通さんがしてくれると思うから、一緒に執務室に行きましょう。」

結局よく分からないまま執務室の前まで来てしまった。

それにしてもここに来るのって初日以来だよな、まあ執務室なんて用事が無きや普通来ないしな。そういや提督にも初日以来会ってないけど、アイツどこにいるんだろ……っていうかちゃんと鎮守府の中にいるのか？

まずは扉をノックする。

もしいきなり扉を開けた結果、神通が二式大艇ちゃんを撫でてる最中だったら殺されるかもしれないねえしな……。

「神通いるか?」

「……その声は天龍さんですね、どうぞ入ってください。」

神通は在室中みたいだし、入る許可も貰えたから遠慮せずに扉を開ける。

「ちよつと聞きたいことが……ヴェツ!」

執務室の中にいたのは神通と、久々に会った気がする提督。

だけどもあからさまに様子がおかしい。

神通は室内だったのに例の狩猟笛、那珂ちゃんマイクを構えたまま立ってるし、提督に至っては鎖でグルグル巻きに縛られて床に転がされている。

何より異常なのは提督が頭にデッカいタンコブを作って気絶しているところだろう。

状況から判断するに神通が提督を縛り上げてマイクでぶん殴ったってところか?

きぎゃー ひとこゝろしー

「ようこそ天龍さん。来て頂いて早々に見苦しいところを見せてしまい申し訳ありません。」

「アウイラ……タゴノ……モウラミジャ……ハラハットンナ……。」

いやいや、見苦しいっていうかそれどころじゃねーだろ。

目の焦点の合っていない提督がブツブツと意味分かんねーこと呟いてるけど、これって本当に大丈夫なのか?

「あらあら、今日も派手にやったわねえ。」

「今日も?毎回こんなことやってんの!」

「ええ、今日の種類にはどうしても提督のサインが必要なんです。こ

ればかりは提督にしか出来ない仕事だというのに、逃げ出そうとしたので動けないように拘束させていただきました。手首さえ動けばサインは出来ますので。もしも今日1日このまま目覚めなければ私が提督の手を掴んでサインをします。」

「オー…ナニシツール…ソナルモノ…オホホホ…。」

とうとう提督が変な笑い方をし始めたぞ、これ救急車呼んだ方がいいレベルじゃないか？

「提督のことは心配しなくても大丈夫よお、回復薬掛けとけば治るから。」

ええ…それで治んの？それに治るからって何してもいいってわけじゃないだろ常識的に考えて。

それにしても不真面目だからとはいえ仮にも上司を殴り倒しておいて、それでいて何の罪悪感も感じさせない神通の笑顔が怖すぎる。つーか人の手を使ってサインしても、それじゃ本人の書いたサイン扱いはならねえだろ…。

神通は前から怒らせちゃいけない奴だとは思っていたが、こんな無茶苦茶な事でも平気でやるとは何つー奴だ。世界水準を超えたオレでもこんなことやらねえよ。

差し詰め宇宙水準超えつてところか。フッフ、怖い。

「また天龍ちゃんが意味不明なことを考えている気がするわ。ほら、早く正気に戻って。神通さんに用事があるんでしよう？」

ハッ、そうだった。緊急クエストについて聞きに来たんだった!?

「えーっと、龍田からオレの昇格が掛かった緊急クエストが受けられるって聞いたんだけど、そもそも緊急クエストって何だよ？それと昇格についても詳しく教えてくれねーか。」

「緊急クエストと昇格についてですね、分かりました。まず昇格についてですが、天龍さんはハンターランクについてはご存じですか？」
「ハンターランクは以前龍田が教えてくれたから知ってるぜ。狩娘の実力を表す数値のことだろ、功績を上げると一緒に上がるんだったっ

け？」

「そうですね、大体その認識で合っています。ハンターランクの高さはその狩娘の実力を表しますので、ハンターランクが低い狩娘は実力不足と見なされて簡単なクエストしか受けることが出来ません。逆にハンターランクが高ければそれだけ実力のある狩娘とされ、より難しいクエストを受けることが出来るというわけです。」

なるほどな。こうやって狩娘ごとに受けられるクエストに制限があれば、弱い狩娘が太刀打ち出来ないレベルの強敵に出くわすことも少なくなるってワケだ。よく考えられてるもんだぜ。

「そしてクエストを重ねて功績を上げて実力を認められることによりハンターランクは上がります。これが昇格です。ですがただ闇雲にクエストをこなしていくだけでは昇格することは出来ません。大本营により定められた特定のクエスト、通称キークエストと呼ばれているクエストを全てこなすことによつて、ようやく昇格試験に挑む資格を手にすることが出来ます。そしてその昇格試験というのが緊急クエストなのです。緊急クエストはその名の通り緊急時にも発令されるクエストですが、広義的には普段では受けることの出来ないクエストのことです。」

ああ、だから昇格試験が緊急扱いなのか。緊急時は何らかの異常が起きなきゃそもそも受けられるワケがねえし、試験だつて資格が無きや受けられないんだから、どっちも普段からやってるわけがないもんな。

「この緊急クエストは進級テストですので、当然今までのクエストに比べ難易度が高くなっています。ですが無事に攻略することが出来れば、己の実力を示したことになるハンターランクが1つ上がるという仕組みです。ただし緊急クエストはキークエストをこなした特定の狩娘に対するテストですので、クエストを受けた狩娘本人以外のハンターランクは上がりません。そしてハンターランクが上がったことで今まで受けられなかった難しいクエストに挑戦し、そこに含まれたキークエストをこなして新たな緊急クエストを受ける。それを繰り返してハンターランクを上げていき、一定のハンターランクを超え

ることが出来ればそれ以上の試験は必要無しと見なされ、それ以降は緊急クエストを受けずとも狩り続ける限りハンターランクは上がっていくようになります。これをハンターランク解放と呼び、一流の狩娘の証とされています。」

ある程度強くなったらもうテストの必要が無いのか、免許皆伝つてやつだな。そももつて神通は確かハンターランク解放してたよな？てことは神通は一流の狩娘なのか？

自分の提督を縛って殴る一流狩娘って……。まあ逃げ出そうとした提督にも落ち度はあるけどさ。

「天龍さんは今回緊急クエストへ挑戦する資格を得ました。このクエストを無事に合格することが出来れば昇格し、晴れてハンターランク2となります。」

「よっしゃ、じゃあ早速挑戦するぜ！」

これに合格すりゃもつと強い相手とやりあえるんだろ？そんでもって相手が強いってことは手に入る素材もいいものになるから、作れる装備もより強力なものになるってワケだ。

つまりオレはまだまだ強くなれる。上を目指す者としてこれに挑戦しない理由はないからな！

「それでは、こちらをどうぞ。」

そうやって神通が取り出したのは一枚の書類。

どうやらこれがクエストの受注用紙らしい。何やら色々書いてあるな、この目立つ大きな文字が今回のクエスト名か？

えーと、なになに『強敵、ドスイ級現る！』……？

何だこの変な名前？真面目な書類じゃなかったのか？

「こちらのクエストが天龍さんが受ける緊急クエストになります。このクエストの目的はドスイ級の討伐です。無事ドスイ級に勝利することが出来れば天龍さんは昇格です。」

「……まあいいや。OK、任せろ。やってやるぜ！」

「では契約金150zの方をお願いします。」

「契約金？えっ、クエストを受けるのってお金が掛かるのか？」

「はい、支給品やレンタクの手配に必要ですのでどうしてもお金が掛かります。残念ながら全てをこちらで負担することは出来ません。こちらで全額負担した場合、いたずらにクエストを失敗され続けたら困りますので。でもご安心下さい、クエストに成功すれば契約金は2倍になって返ってきます。」

「成功すれば？じゃあ失敗したら？」

「残念ながら返ってきません。」

ええ、じゃあ失敗出来ないじゃん。オレ持ち合わせ少ないんだぜ！

クエストに失敗したらもうアイテムも買えねえし、食堂でも無料の定食しか食べられないじゃん！オケラは流石にシャレになんねーぞ。
「……又、又ハハハハ。その程度の出費にも四苦八苦するとは、これだから貧乏人は。天才ビジネスマンである我輩の手に掛ければその程度のはした金の用意など、息を吸って吐くことよりも簡単だぞ。どうだ貴様、我輩に借金してみる気はないか？利子のことは考えんでいいぞ、貴様程度から取り立てる程に我輩は困っておらんのでな、又ハハハハ！」

あつ、提督が甦った。目が覚めて最初の発言がそれって凄いな……。

最初に気絶させられたこととか、鎖で縛られて寝かされていることとか気にしないのか？

「フンッ！」

ドボオ!!

「ヒィーフン!!」

「あらあ？足が滑ってうっかり提督を蹴っちゃったわ。ごめんなさいねえ。」

……と思ったらすぐさま龍田が倒れている提督の腹にサッカーボールキックをお見舞いして大人しくさせた。手加減……というか足加減(?)の足の字も見当たらない惚れ惚れするほど綺麗なフォームの蹴りだったな、これが腹パンならぬ腹キックか。

ちよつとくらい躊躇しろよ、絶対うつかりじゃねーだろコレ……。それに暴力系ヒロインは今のご時世じゃ流行らねーぞ？

「提督から借金する必要は無いわよお。提督は利子を気にするなって言つてたけど、そもそも借金をするって考え自体が駄目よ。もしもお金が足りなくなつたら天龍ちゃんの装備を売つてお金に換えてあげるわねえ。(採集ツアーなら契約金無しで素材を取りに行けるから金策になるけど、こっちの方が面白そうだし黙つてよ♪)それと私は提督のヒロインじゃないから心配しないでいいわよお。」

「そうですね、提督は自分の階級やお金を悪用して狩娘にいやらしいことをするような人間ではありませんが、お金に関するトラブルは避けるに越したことはありません。ちなみに私も提督のヒロインではありませんよ。」

えええ……。そりや金がねえから持ち物を売るつてのは分かるが、装備を売つて再び下着姿で出撃つてのは流石に避けたい。

しかし龍田はともかく、何で神通にまでオレの心が読まれてるんだ!? 読心術つて熟練狩娘の必須技能なのか？

あつ、オレも提督のヒロインじゃねーからな!? 勘違いすんなよ? そもそも提督にヒロインがいるかどうかすら謎だけど……。

それにしてもセクハラは絶対にしないって断言されるつて、提督つて信頼されてるんだか、されてないんだか？

「提督はお金儲けにしか興味が無いだけよお。」

「現役の教官だった頃は、若干意地悪をしながらも新人を鍛えることに生き甲斐を感じていたそうなんです。ですが今の提督を見ると、とてもそうとは思えませんね。」

ああ、これつて信用してるけど信頼していないパターンだ。まあ仕事から逃げようとしたら当然か。とはいえ昔はちゃんと教官の仕事やつてたんだな、意外だ。そっちの方もサボつてたのかと思つたぜ。

それにしても提督は龍田に蹴られてから、うんともすんとも言わなくなつたけどこれつて大丈夫なのか? かなり強烈な蹴りだったけど

生きてんのか？

「……………へエイwwwwアツアツオーwwww
w」

……大丈夫じゃないどころかさつきより悪化してね？

「あら、この程度なら回復薬は使わなくても大丈夫みたいねえ。にが虫を4、5匹食べれば正気に戻るわあ。」

正気の無い人間の気付けににが虫とか呼吸困難で死ぬんじゃない？
ここまで提督の扱いが酷い鎮守府って他にあるんだろうか？

提督は態度がムカつくし、仕事もしよつちゅうサボってるみたいだけど殴り倒す程のことじゃないし、それにここはブラ鎮でもなんでもないのに……。

ひよつとして提督に対するこの滅茶苦茶な扱いも、ここの鎮守府における提督と狩娘のコミュニケーションの一種……なのかな？

オレもいずれ提督を張り倒すようになっちゃうのかなあ？

「提督のことなんか気にしないでいいわよ。それよりも天龍ちゃんは自分のことを気にした方がいいんじゃないかしらあ。」

「その通りです、天龍さんはこれから初めて緊急クエストを受けるのですから。」

そーいやそうだった。提督をほったらかしにするのは気が引けるが、オレも余裕は無いんだった。

「それではこちらの書類にサインをして契約金を払って下さい。」

言われた通りに『強敵、ドスイ級現る！』と書かれた書類にサインをして、なけなしの150zと一緒に神通に渡す。

神通は渡された書類に大きなハンコでペタンと印を押し、書類だけをオレに返してくれた。

「この押印された書類を持って、外にあるボート乗り場や気球乗り場にいる連装砲ちゃんに言えば目的地まで乗せて行ってもらえますよ。目的地が近いなら自分で運転して行く場合もありますけどね。それとこの書類はクエスト中に確認することも出来ますので、目的のクエ

ストをクリアするまでは肌身離さず持つていて下さいね。」

オレが受け取った書類を再確認していると、横から龍田にサツと盗られた。

鮮やかなお手並み……じゃなくていきなり何するんだよ!?

「ほら、ここをよく見て。切り取り線が付いてるでしょ?」

言われた通りに書類を見てみると、確かに下部分にクーポン券みたいな切り取りが3つも付いていることに気が付いた。そして龍田は遠慮なくそのクーポン券もどきを1枚破り取る。まったく、人の書類に好き勝手してくれるなあ。

「ほら、この破いた形なら天龍ちゃんも見覚えがあるんじゃないかしら?」

うーん、言われてみれば……。確かに、このちぎった紙はどこかで見たことがある気がする。

「……そうだ、思い出した!クエストに行く前に龍田に渡されてた謎のチケットの半券だ!」

「大当たりよ天龍ちゃん。他人が受注したクエストに同行する場合はこの半券が必要な。これを持つていないと一緒にクエストに行きたくても門前払いを受けるから注意してねえ。それと食堂で4人のジnkスについて話したけど、この半券も3枚あるから最大で3人まで同行出来るわあ。」

そう言いながら龍田は半券をポーチに仕舞い、書類だけをオレに返してくれた。

「さて、これで全ての準備は整いましたね。それでは健闘を祈ります。」

「おう、任しとけ!必ずドスイ級を倒して昇格してみせるぜ!」

神通の敬礼にオレも敬礼を返し、部屋の外で待たせていたマサムネとノブヒコも連れて4人で意気揚々と鎮守府の外に向かう。

「……………」。

何者かがこつそりとオレ達の後を付けていたということには気付かないまま……………」。

天龍ちゃんと初めての緊急クエスト2

青く穏やかな海、雲一つなく晴れ渡る空。今日は間違いなく絶好の狩り日和である。

しかしそんな気持ちのいい天気とは裏腹に、天龍はガチガチに緊張していた。

昇格が掛かった大事な緊急クエスト、もしも負ければすっからかになる有り金、初見では歯が立たなかったドスイ級。

様々な要素が重なった結果がこの有り様である。

「う、うーし！やるぞ、やってやるぞ！今日のオレは調子がいいんだ、やれるハズだ！」

「旦那サン大丈夫カー？」

「コレジャア先ガ思イヤラレルヨー。」

うぐぐ、空元気はオトモにも通用しねーのか。

「ちよつと天龍ちゃん、大丈夫？いつもの自信はどうしたの？」

付き合いの短いオトモにすら緊張を見抜かれているんだから、勘のいい龍田相手では誤魔化しきれるはずもなく当然のように気付かれる。

「そんなに緊張しなくても大丈夫よお。緊急や昇格テストっていう普段使わないような言葉に緊張しちゃうっていうのは分からなくもないけど、やることは至って単純よお。ドスイ級と戦って勝てばいいの、それだけよお。それにお金のことも気にしているみたいだけど、2回までならやられても報酬金は減っちゃうけど貰えないわけじゃないし、それに契約金も倍になって返ってくるから、アイテムの無駄使いでもしない限り損はしないはずよお？」

うーん、そう言われてもなあ。

「何よりそんなの天龍ちゃんらしくないわよお。天龍ちゃんはもつと強敵相手にも怯まず堂々と戦う狩娘でしょ?」

……そうだよな、弱気なんてオレのキャラじゃねえ。龍田に言われるまで自分を見失っちゃまうなんて本当にらしくないぜ、オレは世界水準超えの天龍様だ!

「サンキュー龍田、お陰で目が覚めたぜ。今度は本気で負ける気がしないぜ!」

「それでこそ天龍ちゃんよ! (ふふっ、落ち込むのが早ければ立ち直るの早いわねえ。)」

「ん?何か言ったか?」

「いいえ、なーんにも。それより今回のクエストは天龍ちゃんの本格的な腕前の審査と、ドスイ級へのリベンジも兼ねてるから悪いけど私は直接手を貸すつもりはないわあ。だけどその代わりにオトモとしてノブヒコを連れて行っていいわよお。ノブヒコのトレンドは回復だからきつと役に立つと思うわ。それに支給品も私のことは考えずに全部持つて行っていいわよお。」

「えっ、ノブヒコ貸してくれんのか?」

「ええ、そうよお。雇ったばかりのオトモでも、いるといたないとじゃ大違いでしょ?それに今回のノブヒコは………ふふっ、やっぱり秘密♪」

……何だ?何を言おうとしたんだ龍田のやつ?

まあとにかく平和主義のマサムネだけだと戦力としては微妙だったが、ノブヒコという心強いオトモがメンバーとして加わったってワケだ!

「それでね、本当は良くないんだけど私はベースキャンプ司令塔としてここから天龍ちゃんにアドバイスを出してあげるからよろしくねえ。」

「ベースキャンプ司令塔?何だそれ?ここに塔なんてあったか?」

この小島にあるのはベッドのあるテントと支給品と納品のボックスだけで、他に目立つものはせいぜい小さな茂みと船着き場ぐらいか？塔なんてどこにも見当たらねえぞ。

「あつ、勘違いしてるのね？ベースキャンプ司令塔っていうのはね、ベースキャンプにこもって自分は戦おうとせず、そのくせ他人には偉そうにああしろこうしろと一方的に指図を出してくる狩娘のことでよお。その様子がまるで司令塔みたいだからそう呼んでいるだけで、本物の司令塔があるわけじゃないの。」

ああ、そういうこと。でもそれってなんだか腹が立つな。本物の司令官が指示を出しているのならともかく、一方的に注文だけ付けられたらお前も戦えってなるもんな。

確かそういう時は……頑張つてじゃねえよ、おめえも頑張らだよ！……つて言えはいんだっけ？

「こういうのは寄生行為って呼ばれていて、自分はまともに戦わず全部他人にやらせておきながら報酬だけは手に入れようっていう特に嫌われる行為の1つなの。こんなことをしたら他の狩娘の迷惑になるのは当然として、本人の信用も無くなるし所属する鎮守府の評判も落ちるから絶対にやっちゃ駄目よ。」

「なるほどな、そりゃ嫌われて当然だ。オレだつてそんなことされたら嫌だ。」

「そうでしょう？だけど今回は不慣れな天龍ちゃんの為にここでアドバイスをあげるから聞きたい事があつたらどんな言つてねえ。それに万が一のことがあるかもしれないから、その為にもここでスタンバイしておくわよお。」

万が一のことって……出撃直前に嫌なフラグ立てるのやめて下さい、マジで。

「それにしてもどうやってここから現場の様子を見るんだ？流石に距離があり過ぎるぞ。それにこんなところから指示出しても絶対に聞

「こえねえぞ？」

「それも大丈夫、このインカムを着けておけば離れていてもお互いの声が聞こえるから安心よお。」

そう言つて龍田がオレに渡してきたのは補聴器サイズの小型インカム。

早速左耳に着けてみる。

「うんうん、よく似合ってるわねえ。それでちゃんと聞こえるかしら？」

補聴器が似合うつて言われてもなんだかなあ。

それはともかく至近距離とはいえちやんと龍田の声は聞こえるみたいだな。

「問題無いみたいねえ。そのインカムは、クエスト中に狩娘同士が離れ離れになつても連絡が取り合えるように開発された物よ。2人以上で出発する時は必ず着けるものなんだけどお、今まで離れて行動することがなかったから渡すのを忘れてたわ。ゴメンね。」

軽く舌を出してウインクしながら謝る龍田。これが噂に聞くてへろろつてヤツか。

うーんあざとい、それに反省しているように全く見えないどころかバカにされてる気までする。でも可愛いから許す！

それにオレも存在を知らなかったとはいえ、今まで無くて困つたことないしな。

「通信ログも残るから聞き逃しても後で確認出来るけど、失言も取り消せないから変なことを言うとは恥ずかしいわよお。それとおしやべりに夢中になつて深海棲艦にやられたらダメよ、チャット死はみつともないものねえ。」

「チャ、チャット死？電話に夢中になつて交通事故を起こす的なことか？分かった、気を付けとくつて。」

「それとこれを使つて現場の様子も見ておくから安心してねえ。」

インカムに続いて龍田が取り出したのは連装砲ビジョンモニター、

天津風から貰ったあのVRゴーグルだ。

「これを着けておけば自分のオトモ連装砲の視界を共有することが出来るのよお、凄いでしょ？今回はこれを使ってノブヒコの視界から天龍ちゃんの様子を見るからねえ。（本当はもう一つの機能の方が重要だけどねえ♪）」

なるほど、これならベースキャンプにいても声が聞こえるし、現場の様子も分かるってワケだ。

……なんか視界ジャックみたい。屍人相手ならともかく他人の目を通して見るのって、ちよつと悪い気もするけど。

「ノブヒコもまだ雇ったばかりでレベルが低いから、お世辞にも頼りになるとは言えないし、やられちゃったときはどうしようもないけど、少なくとも当てずっぽうな指示は出さないハズよお。」

なるほど、2体のオトモだけでなく龍田のアドバイス付きか。これなら大丈夫そうだな、むしろこれで負けたら恥ずかしいぜ！

「戦果を期待してるわよお。天龍ちゃんもノブヒコに負けなくらい戦ってねえ。」

「何言ってるんだ、いくら何でも今日雇ったばかりのオトモには負けねえぜ！」

とはいえ龍田がそこまで言うってことは実はノブヒコって強いのか？オトモより活躍出来なかったら流石にへこむな……。

「マサムネ、お前はどうすんだ？つい勢いでクエストに連れて来ちゃったけど、ここで龍田と一緒に待っていてもいいんだぜ？」

そう提案してみるが、マサムネは意外な言葉を返してきた。

「マサムネノコトハ気ニシナクテモ大丈夫ダゾ、旦那サンハ自分ノ戦イニ集中シテ欲シイゾ。」

おおつ、頼もしいセリフ。これで戦ってくれりやあ言うことないん

だが、それは流石に無理か。

うーん、やっぱり戦ってくれる子の方が良かったかな？

「話はまとまったみたいね。それじゃあ行つてらっしゃい、頑張つてねえ。」

「そうだ、あのセリフ言ってみよう！言うならこのタイミングしかないからな！」

「頑張つてじゃねえよ、おめえも頑張んだよ！」

「は？（威圧）」

「ひっ！」

「フ？」

「へほ。」

「何か言ったかしらあ？」

「スイマセンナンデモナイデスガンバリマス。」

「空気を読もうね、天龍との約束だぞ♪」

「さあて、そろそろいいかしらねえ。レンターモード、スイッチオン！」

「……オン！」

「ん？ノブヒコどうかしたか？」

「ナンデモナイワア……ジャナクテナンデモナイヨ。………フフ

「フ。???」

龍田をベースキャンプに残し、オレとマサムネとノブヒコの3人で意気揚々と出発……と行きたいものの、まだルートを覚えてないのでマップを頼りに進んでいく。

しかし道中にてワ級やクンチュウは見掛けるものの、肝心のドスイ級はどこにもいない。

「うーん、ドスイ級はどこにいやがるんだ？」

ドスイ級を探しながら海原を彷徨っていると、突如としてオレの耳に直接声が響いてきた。

『しっぽきって、やくめでしょ。』

「うおっ！何だ今のは!?!」

まるで子供どころかインコが発したような、たどたどしいカタコトの声が聞こえてきたんだけど一体誰だ!?

『うふふつ、私よ。龍田よ、天龍ちゃん。』

何だ、龍田がワザと変な声を出していただけか。そういやインカム預かってたんだっけ。

「今のは何だよ？尻尾を斬るって何の話だ？誰の尻尾を斬りやいいんだ？」

『今のセリフ1回言ってみたかったのよねえ。ちなみに今のセリフはベースキャンプ司令塔定番のセリフの1つなのよ。深海棲艦には尻尾が生えている種類もいて、そういう尻尾は大剣や太刀といった切断属性の武器で切り落とすことが出来るのよ。切った尻尾からは貴重な素材が剥ぎ取れることも少なくないわ。そしてハンマーやボ

ウガンといった武器種だと尻尾の切断は少し難しいから、切断系の武器を持つてる仲間に頼るのは普通のことなの。だけどこのセリフの場合だと自分は戦いたくないけど、尻尾の剥ぎ取りだけはしたいっていう自己中心的な思考から生まれたセリフなのよ。』

「そりゃあマトモな狩娘なら、そんなゆとり全開のセリフ言う機会なんかあるワケねーよなあ。しかし尻尾のある深海棲艦ねえ？レ級以外に尻尾のある深海棲艦なんていたっけ？」

オレもまだ建造されて日が浅いから全ての深海棲艦を知ってるわけじゃねえが、尻尾がある深海棲艦に心当たりはねえなあ。

『あら、天龍ちゃん忘れたの？ここの海域の深海棲艦はみんなアタリハンテイ力に適応した変異種ばかりなのよお。ほら、ドスイ級に角が生えていたのを覚えてない？あれも変異によるものよ。だからレ級以外にも尻尾の生えた深海棲艦がいてもおかしくはないのよお？』

ヲ級とかタ級とかにも尻尾があるってことなのかね？例えて言うならリザードマン的な……。

『ちなみにイ級にも短い尻尾はあるし、ドスイ級にも尻尾はあるけど残念ながら切り落とすことは出来ないから、そこは気にしなくていいわよお。』

そういえば部位破壊つてのが起きない限りは表面的には傷付かないんだっけ？知らないで尻尾の切れない相手の尻尾を切ろうとしたら逆に戦いが長引く可能性もあったのか……。

『前にも言ったと思うけど、ここの深海棲艦はアタリハンテイ力に適応した戦い方をしてくるから油断しない方がいいわよお。この深海棲艦はこういう艦種だからこういう攻撃をしてくるに違いない……なんて思い込みをしていると痛い目を見るわ、いいわねえ？』

はい、思い込んでました。すっかり肝に銘じておきます。

『ふふつ、大丈夫。今ので油断も緊張も無くなつたでしょ？今の天龍ちゃんならきつと勝てるわあ！それじゃあ今から私が迷子の天龍ちゃんの為にドスイ級の住処にナビゲートしてあげるわねえ、心の準備はいいかしら？』

「そんなもんとつくの昔に出来てらあ！あとオレは迷子になってねえ

ぞ？ただ敵がオレにビビッて現れねえだけだ！」

『ふふっ、そう言うことにしといてあげる。それじゃあ行くわよお
く。』

「……行クワヨォ〜。」

「おうナビゲートは任せるぜ……………つてノブヒコどうした？」

「オット、心配シナイデ。タダノ独り言ダヨ〜。」

「そ、そうか。」

可愛いオトモと頼りになる龍田のナビゲートがあればもう何も怖くない……………と思っていたけど、どこことなく挙動不審なノブヒコにむしろ恐怖を覚え始める天龍なのであった。

「……………。」

天龍ちゃんと初めての緊急クエスト3

『そこに大きな岩礁で囲まれたエリアが見えるでしょ、海図でも確認出来たかしらあ？そこに向かって進めばイ級の住処に着くわよ。』

龍田のナビゲートのお陰で迷うことなく目的地の前まで到着した天龍一行。

いよいよドスイ級との対決である。

「ようし！いいからお前ら、いよいよ対決の時だ！覚悟は出来たか？」

「……ノブヒコハヤル気バツチリダヨー！」

「マサムネモ応援ノ準備ハ出来テルゾー。物陰ニ隠レナガライツパイ
エールヲ送ルカラ楽シミニシテルンダゾー！」

うーん、マサムネが戦えないっていうのは雇った時点で分かっていたとはいえ、こうもハッキリと言われるとちよつとガツカリするな……。

「そんじゃ、これからあのエリアに入るぞ！もう後戻りは出来ねえからな、行くぞつ！」

ドスイ級程度にどれだけ慎重になってんだ……って思うかも知れねーが、オレにとつちや初めての緊急クエストだし、何より1度は勝てなかった相手だ。臆病になるつもりはねーが、慎重になって損はねえだろ？

そこは岩礁で作られた天然の闘技場。

ある程度の広さはあるが、壁のように囲まれた岩礁により逃げ場は少ない。

『まるで孤島のエリア6がそのまま海になったみたいねえ。』

「そうだな、まるで孤島のエリア6が……孤島のエリア6？」

今度は何の話だよ？いい加減オレの知らない話をするのはやめてくれ。

『狩娘初心者の天龍ちゃんにとっては、知ってる話の方が少ないわよお。』

「言われてみればそうだった。ああもう、何で艦娘としての知識は最初からあるのに狩娘としての知識はインプットされてねえのかなあ？」

『それは当然よお。だって狩娘っていうのも結果的にそう呼んでいるだけで、実際のところは艦装を武器に持ち替えただけの艦娘だもの。最初から狩娘として作られてない以上、狩娘としての知識なんか持つてるはずがないわあ。』

……そうですかい。

「イーツ！」「イーツ！」「イーツ！」

「「「イイイーツ！！」」」

岩礁地帯内部、そこはイ級の巣窟となっており、そこかしこから姿を現すイ級。

そして岩場の一番奥にそいつは姿を現した。

BGM：孤島の篡奪者たち

「イイイーツ!!!」

周りのイ級に比べ遥かに大きな身体、そして普通のイ級には見られないブレード状の角……間違いねえ！あいつが今回のターゲット、ドスイ級だ！

それにこれは勘だが、あのドスイ級は前日にオレを叩きのめした奴に間違いない。ハッキリ言って証拠は無いが、オレの戦闘者としての本能がそう告げてるんだ！こりや正真正銘のリベンジってわけだな、燃えてきたぜ！

「よしつ、ちよつとばかし危ねえがこのまま突入するぞ！」

「ラジャー!!」

骨を片手に岩礁地帯の中心に勢いよく突っ込む。

周りのイ級共は唐突なオレの出現に戸惑っているらしく動く気配が無い。

よっしゃ、このまま先手を打たせてもらうぜ！

「うおりやああああー！」

ズバアアアン!!

「イッッ!」

オレが振り下ろした骨の一撃は寸分の狂いもなくドスイ級の眉間に命中した。

ドスイ級の反応からしても間違いなく効いている……が、やはりドスイ級に目立った傷は見られない。このままでは前回の焼き直しだな。

「ギイッ！」

「おっと！」

ドスイ級は頭突きで反撃をしてくるが、その前に横に跳んで避ける。

今回はここで吹っ飛ばされたからな、同じ轍を踏むオレじゃあないぜ。

「イッイッイッーッ!!」

「イイイッー!!」

体勢を立て直したドスイ級の咆え声によって動き出した3体のイ級が、オレの周りを取り囲むように泳ぎ出す。数で攻めるつもりか？だが今回はオレだって1人じゃないんだぜ？

「ソレー、ブーメラン攻撃！」

「旦那サンガンバレー！」

ノブヒコの投げたブーメランで1体のイ級が怯み、マサムネの応援によつて気が逸れたのか、もう1体のイ級の動きも止まる。その隙に残った1体をやらせてもらおう！

「オラツ、邪魔だテメエ！下っ端はすつ込んでろ！」

ザンツ!!

「イッ！」

目の前のイ級を斬り捨て、そのままドスイ級を目指す。狙うは本命のみだ！

「どうだ、もう1発喰らつてみるか？」

再びドスイ級に近付き縦斬りをお見舞いすべく骨を振り下ろす……が、ドスイ級は後退して攻撃を躲す。思ったよりも相手が身軽……というよりオレの足が遅くなつてる？

「クソツ、避けられたか。だったらこれならどうだ!?!天龍連続撃ーつ!!このオレ様の速い突きがかわせるかーっ！」

後退したドスイ級に走り寄り、連続で突きを繰り返す。

これなら相手が後退しても切っ先は届くハズ……が、またしても躲される。今度は軽快な横ステップだ、こうも連続でオレの攻撃を躲すとはやるじゃねえか。

流石は群れのボス、雑魚とは格が違うってワケか……。

『天龍連続撃?……つてそうじゃない、天龍ちゃんっ移動するときはなるべく武器は背負つて!武器を構えたままだと足が遅くなるわよ!』

えっ、マジかよ?見てから回避余裕でした状態だったのは、ドスイ級の反射神経がいいからじゃないやなくて単純にオレの動きが遅かったからなのか。

『太刀は大剣やヘビィボウガンに比べれば動きは遥かに軽快だけど、それでも無手に比べればフットワークは落ちるわあ。状況に応じて抜刀と納刀を使い分けなきゃダメよお。』

なるほど、なら一旦回避重視で様子見に徹してみるか。そうすりゃ相手の攻撃の癖も見つかつて攻め易くなるかもしれないな。

骨を背負い直してドスイ級の様子を窺う……。ドスイ級もオレとの間合いを計っているのか、はたまた俺の隙を窺っているのか俺の周囲を回るように泳ぎ始めた。

「イイツー！」

俺の背後まで回り込んだドスイ級は隙有りを見たのか、オレの背中目掛けて頭突きを繰り出す。

だがその程度の攻撃には当たらない。後ろに目が付いている訳じゃねえが、音と気配で分かるんだよ。ワザと背後を取らせたってのが分かんねえのか？

油断してそのまま突っ込んでくるドスイ級を躲し、逆に隙だらけとなったドスイ級の背中にお返しと言わんばかりに抜刀からの一撃をお見舞いだ！

「イ、イ、ッ!？」

まだ頭突きの勢いが残っていてバランスを崩していたのと、オレが放った背後からの攻撃を受けた衝撃でドスイ級は勢いよく前方に吹き飛び倒れた。

「やったか!？」

「ヤツテナイヨー。」

「フラグ乙ダゾ。」

オトモの言う通り、ドスイ級は何事も無かったかのように起き上がった。

目に見える傷が現れないっていうのは一応分かっちゃいたが、こうも効いたように見えないと流石に攻撃が通用しているのか不安になるな。まさか不死身ってことはないよな？

「イイーーーーッ!!」

「「イイツー!」」

体勢を立て直したドスイ級が咆える。どこから現れたのか新たにイ級が1匹増援に現れ、再び3匹になる。

そのままオレ達を取り囲むように跳ね回りながら動くイ級。ク

ソツ、この跳ねる動きのせいで狙いが付け辛い！

「クツ、これで最後だ！」

骨を振り回し続け、ようやく全てのイ級を片付ける。動き回る相手には振り下ろしや突きよりも、攻撃範囲の広い斬り抜けの方が当て易い。

攻撃範囲の広さが災いしてマサムネに1発、ノブヒコには2発も誤爆したけど、軽く転んだだけで斬撃そのものは効いた様子が無い。ダメージとかは大丈夫なのか？

「ワザト当テルノハ駄目ダケド、魚雷ノ攻撃ヲ除イテ狩娘ヤオトモハ同士討チヲシテモダメージハ受ケナイノヨオ……ジャナクテ受ケナイヨ。タダシ周リヲ考エズニブン回スノハダメ、絶対。」

「俺ニ構ワズ、俺ゴト敵ヲ斬ルンダ……ツテヤツダゾー。ドラマミタイデカツコイイ！」

イ級を仕留めた斬撃も味方にはダメージが無いのか、アタリハンテイ力つて本当に謎だな。

でも誤射で味方を轟沈させちまうってことがないのはいいな。誤爆で味方を沈めちまうようなことがあったら後悔してもしきれねえ。

しかしノブヒコのヤツ、話し方が龍田に似てきたな、ペットは飼い主に似るっていうけどそれと同じか？

……ん？そーいや提督は神通に殴られて頭にタンコブを作ってたような？

味方同士で斬り合っても怪我しないのに提督は怪我をした……ひよつとしてあの提督は神通から味方扱いされてない!!

しかし雑魚の掃討と提督のタンコブに気を取られていたオレは今

更になって重大なことに気が付いた。

「……ん？ああー！つ！?! 肝心のドスイ級がどこにもいねえじゃねーか！どさくさに紛れてどこかに消えやがったな!?!」

「マダ誰か残ツテルカー?」

「死体ダケダゾー。」

マサムネの言った通り、今この場に残っているのはオレ達3人とイ級の死骸だけだ。

『そういえばペイントボールのことを教えていなかったわねえ。』

「ペイントボール?それってコンビニや郵便局に置いてあるオレンジ色をした玉のことか?」

『それは防犯用カラーボールね、とはいえそれと似たようなものねえ。ペイントボールっていうのは深海棲艦に投げ付けて使うアイテムで、ボールの中に含まれた特殊な塗料と臭いの成分が深海棲艦に付着することで追跡を容易にするお助けアイテムなのよお。支給品ボックスの中にも入っていたでしょ?』

「……あく、言われてみれば確かにそんなものあったな。そうか、そのために入っていたのか。てっきり普通のゴムボールだと思って邪魔だから取らずに置いてきちまった。」

『えっ?ちよつと待って、今支給品ボックスの中を見てみるから。……本当に取ってないのねえ、呆れたわ。神通さんが支給品の用意には契約金を使ってるって言うたでしょう?契約金っていうのは文字通り契約のお金で、信用の証なのよお。そんな大事なお金を使ってしまう、おもちゃのボールなんか用意している訳がないでしょう?説明しなかった私も悪いけど、ロクに確認もせずにゴミ扱いするなんて流石に信じられないわよお。これは私が預かっておくから、後でちゃんと取りに来てよねえ。』

うわあ……龍田がめっちゃ怒ってる。こりゃあ後で地獄のお説教コース確定じゃねーか。

行方知れずのドスイ級の追跡よりも、その後に控える龍田からの折檻の方に頭を悩ませる迂闊な天龍なのであった……。

「……………コオオオ。」

天龍ちゃんと初めての緊急クエスト4

『天龍ちゃんとの大事なお話(意味深)は後ですとして、まずは逃げたドスイ級を追い掛けなくちゃねえ。』

龍田から死刑宣告を受けて気落ちした天龍だが、肝心のクエストはまだ終わっていない。

しかし逃げたドスイ級を追い掛けたくとも、天龍はドスイ級の逃げる場面を見ていなかったのどこに逃げたかまったく見当つかないのが現状である。

「うーん、適当に探したところで見つかるもんも見つからねえよな。」

「天龍ちゃん……ンンツ、旦那サン旦那サン。ボクナラドスイ級ガドコニ逃ゲタカ分カルヨ。」

「えっ、マジで? 何で分かんのか? 連装砲ちゃん固有の特殊能力か? マサムネ、お前もドスイ級がどこに行ったか分かるのか?」

「ゴメンネ、マサムネニハサツパリ分カラナイゾ。」

ええ、何でノブヒコには分かってマサムネには分からないんだよ?
?

「ボクハチョットシタ裏技ヲ使ツテイルンダヨ。裏技ノ才陰デ敵ノ位置ガ分カルンダヨ。」

「裏技あ? その裏技ってオレにも使えるのか?」

その裏技で敵の位置が分かるのならすげえ有利だし、ペイントっていうのも必要なくなって龍田に怒られる必要もなくなる。万々歳じゃん!

「狩娘ニハ無理、自マキスキルヤ千里眼ノ薬ヲ使ウシカナイヨ。」

……ダカラペイントボールヲ粗末ニシタ件ハ忘レナイワヨオ。」

ゾクツ!? 何かノブヒコから殺気のようなものが……。

ちよつと怖いし、話題を逸らそう。

「それで、ドスイ級はどこに逃げてったんだ?」

「ココノ岩礁地帯ニハ大キナ出入リ口ガ2ツアルヨ。ホラ、最初ニボク達ガ入ツタトコロト、ソノ向カイ側ニアルアノ通路ネ。ドスイ級ハアツチノ通路ヲ通ツテ逃ゲ隣ノエリアニ出シタンダヨ。」

言われた通りに入って来た場所の反対側を見てみると、同じような通り道があった。

「すげえ、ノブヒコって頼りになるんだな。それに比べて……。」

チラツとマサムネを見るが、本人はキョトンとしていてまるで気にした様子が無い。

『天龍ちゃん、マサムネくんだったって自分が出来る範囲で頑張っているのよお？それにこの子を選んだのは天龍ちゃんでしょう？だったらもつと自分のオトモのことを信じてあげなきゃダメよお。』

ムムム、そう言われると弱いな。

オレのオトモだ、オレが信じずに誰が信じてやるっていうんだ。

「マサムネ、オレはお前のことを信じているからな。」

「???……ヨク分カンナイケドガンバルゾー！」

マサムネの頭を期待を込めながら撫でる。

それに対して満面の笑みを返すマサムネ。邪気の無い笑顔がとっても愛らしい。

そうだよな、例え役立たずでも可愛いだけでいいって言ったのは他ならぬオレ自身だ。

コイツと一緒に頑張る気になったよ。決意を改めさせてくれてありがとう龍田。

『……いい雰囲気のところ悪いんだけど、早くいかないとドスイ級がもつと遠くに逃げちゃうわよお。』

……あ、忘れてた。

言われた通りに入って来た通路と反対側の通路からエリアの外に

出る。

そのまま海図を頼りに進んでいくと、ドスイ級の背中が見えてきた。

「いたぞおおおおおおお!!」

間違いなくさつききのドスイ級だ。本当にすぐ近くのエリアにいたんだな。

追撃を加えるべくドスイ級に近づく……が、ドスイ級はオレ達に背を向けたまま、その場から動くことなく頭を海面に向けてモゾモゾとしている。

「何やってんだコイツ？オレ達に気付いてないのか？」

オレ達に気付いた上で、なおこうしているのだとしたら舐められたもんだぜ。

オレ達は敵じゃないってか？

『……あつ、天龍ちゃん！早く攻撃してドスイ級を怯ませて！』

「あん？どういうことだよ？」

ドスイ級に更に近付いたオレは、そこでようやく事態を飲み込んだ。

「うげつ、こいつワ級の死骸を喰ってやがる!？」

初めて海に出た時にイ級がワ級を襲って食べたっていう形跡は見ただが、リアルタイムで深海棲艦の食事風景を見るのは初めてだ。

あの太い杭のような歯で、ワ級の肉と体内の燃料を引きちぎるようにして食べており、周囲にびちゃびちゃと黒い体液が撒き散らされる。

目の前の壮絶な光景に、流石のオレも鳥肌が立つ。

『早くドスイ級の食事を止めるのよ！このまま放っておくとスタミナを回復されてしまうわ。』

「えっ？！どういうことだよ?!!」

グロシーンを前に思わず呆然としていたが、龍田の呼び掛けで正気に戻る。

『説明は後でするわ。ほら、早く攻撃して!』

言われるままに食事中で隙だらけのドスイ級を骨で斬り付ける。

1発、2発……中々食事を止めないドスイ級。

3発目の攻撃でようやく怯んだのか食事を止めてオレの方に向き直った……が、あからさまに様子がおかしい。

口からよだれを垂らしながらハアハアと荒い息を吐いており、見るからに元気が無い。一体どうしたってんだ?

『これは疲労状態ね。以前スタミナと燃料について教えたでしょ? スタミナが尽きると疲れて動けなくなるから燃料で補給するってね。そしてそれは深海棲艦にも当てはまるのよ。どうやらドスイ級は先程の戦いでスタミナ切れを起こしたみたいねえ。ひよつとして戦う前から少し疲れていたのかしら、だとしたらラッキーね。スタミナ切れで疲れた深海棲艦は動きが鈍くなるから絶好のチャンスよ。そして疲労した深海棲艦はスタミナを回復する為に他の深海棲艦を襲ったり、死骸を探してそこから血肉や燃料を得るというわけよ。』

だからワ級を食べていたってことなのか。そしてそこをオレが攻撃して妨害したからスタミナが回復しきってねえんだな。

「よっしゃチャンスだ、この隙に畳みかけるぜ!」

疲れて弱った相手を攻撃するっていうのは若干の罪悪感もあるが、こつちも負けたくないんでね。

ドスイ級の攻撃のスピードも、攻撃頻度も落ちていて戦いやすい。

「ハッハー、いいザマだぜ! 楽勝、楽勝!」

『まくたそうやってすぐ調子に乗るんだからあ。後でどうなっても知らないわよお?』

龍田が何やら小言を言っていたようが、テンションの上だった今のオレには聞こえない。

このまま連続攻撃でぶっ倒してやるぜ!

調子に乗ってドスイ級に攻撃を続けていると、またしてもドスイ級の様子がおかしくなった。

よだれは止まり、目がギラギラと光り始める。

相変わらず息は荒いものの、それは疲れにより吐く不規則なものとは違い、確かな力を感じる呼吸だ。

「イッーイッー・キューーウ!!!」

大声で咆えるドスイ級。

字面では愉快的な鳴き声に見えるが、実際に目の前で聞くとかなり迫力だ。

「お、大声がなんだってんだ！そんなコケ脅しがオレに通用するかよっ！」

咆え声に怯まず攻撃を続行だ。

ドスイ級が体当たりを仕掛けてくるが、それに合わせて骨で斬り掛かる。

今までの戦いでドスイ級のスピードは大体見切ったからな、このタイミングならドスイ級の攻撃を躲しつつ、オレの攻撃だけ当てられる！

「イイーイ!!」

「なっ!?速っ!!」

ドゴオ!!

「ぐっはあ!?!」

オレが骨を振り抜く前に、ドスイ級の体当たりがオレに直撃する。

勢いよく吹き飛ばされ、そのまま海面に叩き付けられるオレ。

な、何が起きた？何でオレだけがやられたんだ？

倒れたまま首だけで周囲を確認すると、オレに向かってドスイ級が突っ込んでくるのが見えた。

慌てて起き上がり横に転がって移動する。

オレが身を躲したその地点に噛み付くドスイ級。

ガチンツと大きな音を立てて口が閉じられる。今までの噛み付きとは勢いも迫力も段違いだ！

コイツ動きが早くなつてないか!?それに攻撃の威力も上がっている気がする。

今までは手加減していたとでもいうのかよ!?

「ギャヒーン!?!」

水面に伏せて隠れていたマサムネを目敏く見つけたドスイ級は続いてマサムネに狙いを定め、短い尻尾を激しく振り回しマサムネを弾き飛ばした。

身体が小さくて軽いせいか、先程のオレ以上の勢いで吹き飛んでいくマサムネ。

「おいおい、マサムネ大丈夫か!?!」

慌てて海面にうつ伏せに倒れたマサムネに駆け寄る。

あんなにちっこいオトモ連装砲が、オレでも悶えるような一撃を貰って無事で済むとは思えねえ。

「ウウ……旦那サンゴメンナサイ、ボクハモウ駄目ダゾ。」

もう駄目だど!?!まさか内臓……じゃなくて重要な内蔵パーツでもやられたのか?

クツ、今日会ったばかりだったのに不甲斐ない主人ですまねえ。お前の仇は絶対に討ってやる!

「……ダカラ帰ツテ寝テクルゾ。」

「はっ。」

「ソレジャマタネー。」

マサムネはそう言いうと、海に飛び込んで見えなくなってしまうた。

……帰って寝る、寝る? ってことはもう駄目だったのは今の攻撃で疲れたから駄目ってだけで、別に致命傷を受けたわけじゃないのか。

そういえばすぐ逃げるって言ってたけどこういうことかよ!?!

クツソー、オレだって体当たり喰らってピンチだったのに……心配

して損した！

もちろんオレとマサムネが喋っている間にドスイ級が大人しくしているワケもなく、再びオレを狙って近付いてくる。

まだ回復してねえつてのに、このままだと一乙確定だぞ!?

先程までに比べてドスイ級のスピードが上昇したこともあり、今まで歩いて躲せていた攻撃も転がって大きく回避しないと避けにくい。マサムネがいなくなったことも合わせてオレを執拗に狙ってくる。……そういえばノブヒコはどうしたんだ？

さつきから姿が全然見えねえんだけど？あいつ確か回復が得意つて言ってたよな？オレのダメージを回復してくれると助かるんだが……。

「ノブヒコく、どこだ〜っ!!」

転がったの回避はスタミナを消耗するからあまり多用出来ない。

ドスイ級の攻撃を躲しながらノブヒコを探していると、ようやく波の合間に銀色に光るものを見つけた。

アレがノブヒコに違いない……が、先程からじっとしていて動かない。アイツ何やってんだ？

更に近付いて様子を確認してみると……あいつ肘枕して寝てんじゃねーか!?

ひよつとしてサボってる？だとしたら戦闘中だつてのに呑気に寝てんじゃねえー!!

「オラッ、ノブヒコ起きろっ!」

「アイタツ!?!」

サボるノブヒコを蹴り飛ばす。流石のサボり魔ノブヒコも、これには目を覚まして飛び起きた。

「アイタタタ……蹴ルナンテ酷ゾ。」

「オメーがサボってるからだろうが!?!」

「……本当ハコンナトキニ天龍チャンガドウ行動スルノカ見ヨウト
思ツテ、ワザトサボツテイタンダケドネエ。」

「ん、何か言ったか？」

「ナンニモ言ツテナイヨ。サボツテゴメンナサーイ。」

ノブヒコを蹴り起こしたのはいいが、現状は何も解決していない。
相変わらずドスイ級は暴れており、反撃の糸口が見いだせない。ノ
ブヒコも回避に手一杯だし、マサムネは未だに帰ってこない。

どうしたもんかねえ……。

『はいはい天龍ちゃん、お困りのようねえ？私がアドバイスをあげ
ようかしらあ？』

龍田からの連絡が聞こえる……が、忙しくて返事が出来ない。呑気
にお話ししていたらそれこそチャット死しそうだけ。

『まあ状況は分かっているから返事しなくてもいいわよ。天龍ちゃ
んは急にドスイ級が強くなって困っているんでしょう？それは怒り
状態ねえ。深海棲艦は基本的にある一定以上の攻撃を受けると怒っ
て攻撃力やスピードが上昇するの。要はパワーアップねえ。天龍
ちゃんがあんまり調子に乗るもんだから怒ったんじゃないかしらあ
？』

深海棲艦って殴られるとパワーアップすんの!?殴られれば殴られ
る程に強くなる相手とか、宇宙から来たマシユマロ型の完全生命体
じゃん!?

こんなのどうやって倒せってた、こういう時こそ狩猟笛の出番か
？音楽で心を和ませるんだ!

『訳の分からないこと考えてないで落ち着いてね。心配しなくても怒
り状態は長くは続かないわあ。ある程度暴れると落ち着いてくるの
か解除されるわよ。それにパワーアップしたとはいえ、動きそのも
のは変わらないからパターンさえ読めば反撃を加えることも難しく
ないわね。それに深海棲艦によつては怒りで我を忘れるせいか、守り
が疎かになって逆に大ダメージをお見舞い出来ることもあるのよお。

ピンチはチャンス、頑張つて！」

それもそうだよな。逃げてばっかじゃ戦いにならねえし、オレのスタンスとも反するぜ。

とはいえ、流石に体力を回復しなきゃマズいよな……。

あつ、ドスイ級がノブヒコの方を見ている！今の隙に応急薬を……。

ゴクツ、チュピーン！ぷはーっ。

ハア、ようやくダメージが癒された。

うっし、これでオレはまた戦える……っつて、なんでオレはこのクソ忙しい時にガッツポーズなんかとってんだ!?

そもそも飲む際にいつの間にか足が止まってるし、こんなもん走りながらも飲めるだろ！

ってマズいマズいマズい!!薬の味じゃなくてこのシチュエーションがマズい!!

ドスイ級のヤロー、ノブヒコの方を見ただけで、結局はオレの方に向かって来てるじゃねーか!?

せつかく回復したつてのにピンチのままじゃん。いや、動けねえぶんさつきよりもヤバイ!!

ドスイ級はそのまま屈伸を始めた。あの動きは体当たりの合図だ!

「身体、動け！身体、何故動かん!？」

オレの願いも空しくドスイ級はコロンビアポーズのまま動けないオレの鳩尾目掛けて真っ直ぐ体当たりを繰り返した……そして。

ドゴオオオオン!!

「うおおあああ〜!!」

他人には見せられないような変顔を晒して先程以上に景気よく吹き飛ばすオレ。

やっべえ、一瞬意識を持っていかれたわ。この気絶半減のお守りが無きや、そのままレンタクに乗せられてここからいなくなるところだったぜ。

ちつくしよー、痛ってえな。体当たりの際にオレの腹にドスイ級のあの尖った角が刺さった気がする。腹に穴空いてねーだろうな？

片手で腹をまさぐって傷の有無を確認してみる。出血とかは無いが、腹の真ん中に小さな穴が1つ空いてるな……ってこりゃオレのヘソか。

そういや深海棲艦だけでなく狩娘も余程のことがない限りは目立った傷は出来ないんだっけ？

「回復ハマカセロー！」

ぱくぷく♪ぱくぷく♪

ノブヒコが吹く笛の音を聞くと、不思議と体の痛みが消えていった。

これが回復笛か。タイミングがいいようで凄く悪いぞ、もうちよつと早くそれやって欲しかったなあ。

それにしても何で急に身体が言うことを聞かなかったんだ？ドスイ級にはオレの知らない武器が内蔵されてんのか？

『天龍ちゃん、面白い顔だったわねえ。私もカメラ持って着いて行けばよかったわあ。』

姉が酷い目に遭ったっていうのに、顔が面白いからカメラで撮りたいとか何て妹だ!?

あつそうか、死なないのが分かっているからこそ落ち着いていられるんだな。

とはいえ今のは痛かった、痛かったぞー!!!この天龍様が死に掛けたんだぞ!?

もう怒った!オレも今から怒り状態だ!真の力を見せてやる!ド

スイ級め、絶対に許さんぞ、覚悟しろ!!

『はいはい、天龍ちゃん落ち着いて。今の天龍ちゃんのスキルには火事も力の開放も付いてないから怒りの力でパワーアップなんて無理よお。それに狩娘はいつでも本気で狩りをするの。舐めプなんて言語道断、いいわね?』

うっ、言い返せない。ここで文句言ったらオレが今まで真面目に戦っていないかったみたいじゃんか。

『それとね、回復薬や燃料を使う際はどうしても隙が出来るの。立ち止まってゴクツと飲んで、そのままガッツポーズを決める。この一連の動作は自分の意思に関係なく取ってしまうのよお。だから戦闘中に飲むときは注意してねえ。特にこんがり燃料は食べる動作が入るからとつても時間が掛かっちゃうわ、要注意よお。』

「目の前で深海棲艦が暴れてるっていうのに、呑気に燃料をムシヤムシヤ食るとか正気の沙汰とは思えねえぞ。」

『そうかしら? 確かになるべくなら避けるべきだけど、そうも言ってもらえない場面も多いのよお。だからこそ深海棲艦の行動パターンを見切つて攻撃を仕掛けるタイミングだけでなく、回復をしても大丈夫なタイミングを覚えることも重要な、分かったわね?』

龍田と楽しく(?) お喋りしていると、いつの間にかドスイ級も落ち着いており、最初のテンションに戻っていた。

『ほら見て天龍ちゃん、ドスイ級の怒り状態が解除されたわよお。今なら攻め易いハズよお。』

おおっ、マジだ。つてことはスピードも攻撃力も元の状態に戻ってるってことだよな?

よっしや、今こそ反撃のチャンス! マサムネの仇……はいいか。オレのヘソの仇だ! 絶対に狩つてやる!

「……コオオオオ。」

ピンチはチャンス、今まさにピンチを切り抜け反撃のチャンスを手にした天龍。

そんな天龍を助けるべく、更なるチャンスもコツソリと動き始めるのであった。

天龍ちゃんと初めての緊急クエスト5

怒り状態が解除され、大人しくなったドスイ級。

パワーもスピードも元通りになり、先程までと比べて戦い易くなった。

「オラツ、さっきまでの勢いはどうした!？」

チャンスとばかりにドスイ級目掛けて攻撃を仕掛ける……が、再びあっさりと躲される。

「あれっ?」

『もうっ天龍ちゃんったら、あんまり調子に乗らないの。怒り状態が解除されただけで、弱体化したわけじゃないのよお。』

あつ、そうか。弱体化するのは疲労時のみか。

とはいえ、怒り状態を基準に考えれば通常状態になったことで弱体化したと捉えられるのも事実。

だったらやつぱり今攻めるしかないよなあ？

ドスイ級の間を見つけては骨で斬り付け、しかしこちらの間を減らすために深追いはしない。

何とも地味な戦い方だが、先程のように一方的にボコられるようなことはなく、ちゃんと互角の勝負になっている。

もつとも骨から伝わる手応えから攻撃があんまり効いてないような気もするんだが……。

何というかちゃんと斬れてないというか、肉を斬った感じがしないんだよなあ……。

いやいや、そんなことがあって堪るか!当たってるんだから効いてるに決まってる!

『(斬り方補正っていうのがあってえ、斬れ味が悪い武器は降り始めと

振り終わりの際に威力が下がっちゃうんだけどお、伝えるべきかしらあ……?』

「イイツ……イツ！イツ！キューーウ!!!」

しばらく戦い続けると再び目の色が変わり、息が荒くなるドスイ級。

先程の焼き直しのように勇ましく咆え、そして怒り状態に突入した。

さつきは大苦戦した怒り状態、だけど今度はそうはいかねえ！

ここをどう切り抜けるか、オレの腕の見せ所ってワケだな？

そう意気込んだのだが……。

キラキラキラ……。

「ん？何だ、この光る粉みたいなのは？」

「ワー、キレーイー！」

突然仄かな光を放つ粒のようなものが風に舞うようして大量に飛んできた。

いや、よく見るとこれはただの粒じゃない、小さな虫だ。

理由は分からないが、どこからともなく光を放つ小さな虫が群れを成して飛んできたんだ。

「イツ？」

光を放つ虫はまるで導かれるかのようにドスイ級の周囲に集まり出す。

怒り状態で冷静さを欠いているとはいえ、この奇妙な光景に疑問を覚えるのか流石のドスイ級も動きを止めて周囲を観察し始めた。

一体何が起きているんだ？そう思った次の瞬間……。

カツ!!

突如として虫の大群は一瞬視界が奪われる程の閃光を放った。

「うおっ、眩しっ!」

「今ノハ閃光!?ダトシタラ光虫?ドウシテコンナトコロニ……。」

何やらノブヒコがブツブツと言っているが、今はそれどころじゃない。

「イッ!? イイーツ? イツイツ??」

何故なら一番近くで閃光を浴びたドスイ級が完全に動きを止めていたからだ。

これは一時的に視力を失ったのか?

怒り状態で再びピンチになると思いきや、一転して相手は棒立ちで隙だらけ。

ここで攻めずにいつ攻める!?

「何だかよく分からねえが、これはチャンスだ!日頃の行いが良かったお陰だな!」

いつの間にか一匹残らずいなくなっていた不思議な虫達に内心で感謝しつつ、真正面からドスイ級に斬り掛かる。

ザンツ!

「ギツ!」

よしっ、今度は間違いなくクリーンヒットだ!手応えが違うぜ!

しかも相手は未だに体勢を崩したままで、まだまだ攻撃を当てる隙がある。

「よっしや!もう1発縦斬りだ!続けて喰らえっ!」

ザンツ!!バキイツ!!

「イッギアーツ!」

何かが砕けるような鈍い音と共に、今まで以上に派手に吹き飛んでいくドスイ級。

それでも未だ息絶えることなく起き上がってくる。思った以上にタフなヤローだ。

これだけ攻撃したんだぞ、いい加減倒れるよ……。

「……ん、何か様子がおかしいな？」

今までどれだけ攻撃しても傷1つ付かなかったドスイ級。

そんなドスイ級の額に生えていた角が根元からポツキリとヘシ折れていたのだ。

『やったじゃない天龍ちゃん。狩娘人生初の部位破壊おめでどう♪』

部位破壊？え、今の角が折れた状態のことか？

『前にも教えたけど改めてもう1回教えてあげるわねえ。基本的に狩娘も深海棲艦もどれだけダメージを受けても外見上は傷付かないけど、中型以上の深海棲艦は特定の部位に一定以上のダメージを受けた場合、その部位が壊れたり脱落するの、これを部位破壊って呼ぶよお。破壊した部位はクエストに成功すれば報酬として持って帰ることが出来るの。そして深海棲艦によってはこの部位破壊によって行動が制限されることもあるから積極的に狙っていくといいわよお。』

成功すれば貰えるってことは、失敗したら貰えないってことか？だとしたら尚更負けられねえな！

それにこの戦いはオレの昇格が掛かってるんだ、ハナから負けるっていう選択肢はねえ！

オレが勝利に意気込んでいると、突然足元の海面から何かが飛び出してきた。

新手の深海棲艦か？慌ててそいつに骨を向ける。

「待ッテ待ッテ旦那サン。敵ジャナイゾ、マサムネダゾー。回復シタカラ戻ッテ来タンダゾー。」

なんだマサムネか。急に足元から出て来るなよ、ビビるじゃねえか。

「旦那サン、ドスイ級ヲ追イ詰メタンダナ。ナラ僕達モ取ツテ置キヲ出スゾー！」

取って置き？そもそもお前は戦わないんじゃないやなかったのか？

そんなオレの疑問を余所に何かの用意を始めるマサムネ。

やがて完成したそれは……ちっちゃなロケット？

「ノブヒコ、アレヲ使ウワー！」

「エエ、良クツテヨー！」

妙な掛け声と共にロケットに跳び付く2体のオトモ。

そしてロケットは2体を乗せたまま打ち上がる……って何をするつもりだ!?

てつきりそのまま空高く飛び去るかに思われたロケットは、3メートル程空に登ると奇妙な音を立て始め、やがて絶叫マシンもビツクリの軌道を描き始める。

やがてデタラメに飛んでいたはずのロケットの先端は、狙いを定めるかのようにドスイ級の方にピタリと向くと、そのまま2体のオトモを乗せたまま物凄い勢いで突っ込んでいった。

「マンマルドングリバンジャーイ!!」

「テンリユ……モーレッツマタタビバンジャーイ!!」

謎の掛け声と共にドスイ級へと向かう2体。てつきり日本万歳とでも言うのかと思つたら、まんまるドングリにモーレッツマタタビって……それってお前らの好物じゃねえの？

……ってというかこれはまさかの自爆特攻!? やめろーっ! カミカゼは悲劇しか生まれぞ!!

しかしそんなオレの願いも空しく、2体のオトモを乗せたロケットはドスイ級に直撃した。

そしてロケットに搭載された火薬と残された推進剤が合わさり大爆発……するかに思われたが、ロケットはパキツと軽い音を立てて砕け散る。あれえ、思ってたのと全然違う？

2体のオトモは素早くロケットからドスイ級の頭に飛び移ると、その身体でドスイ級の両目を塞ぎつつ、空いた手でドスイ級の頭をポカポカと叩き始める。

「ワイワイ！」

とうとうドスイ級を倒せたぜ！

前回出会ったときは一方的にボコられて全然勝てる気がしなかったというのに、今回は時間こそ掛かったが、1乙すらすることなく勝つことが出来た。

無事に試験を合格することも出来たし、狩娘としての自信も付いた。言うことなしだ！

『やったわね天龍ちゃん。ドスイ級討伐おめでとう。』

「おう、やったぜ龍田。どんなもんだい！」

『喜ぶ気持ちも分かるけど、倒したドスイ級から剥ぎ取らないの？』

おっと、そうだった。急いでドスイ級から素材を剥ぎ取りに掛かる。

『小型の深海棲艦から剥ぎ取れる回数は1回から2回までなんだけど、中型以上の深海棲艦からは基本的に3回、かなり大きな深海棲艦からは4回も剥ぎ取れるわよお。中型以上の相手は手強いけど、その代わりに見返りも大きいってワケ。』

確かに3回剥ぎ取れた。見た感じはもっと剥ぎ取れそうなんだけど、何故か身体が言うことを聞かず、それ以上は剥ぎ取ろうとしない。

「3回以上剥ぎ取れないのはなんでだよ？それと4人で狩ったら1人剥ぎない奴が出るんじゃないか？」

『それは大丈夫よ。1人が剥ぎ取れる回数が3回までってだけで、4人で行けば4人とも3回ずつ剥げるからケンカにはならないわ。それと3回以上剥ぎ取れない理由は残念ながら不明よ、ゴメンねえ。』

剥ぎ取りのときといい、飲食のときといい、狩娘って謎の金縛りに遭う職業なんだな……。

『そんなことより天龍ちゃん、勝利に水を差すようで悪いんだけど帰ったら反省会をするわよ。』

「えっ、反省会？何でだよ、そこは祝賀会とかだろ？」

せっかく勝ったんだぞ、気分のいいまま終わらせてくれよ!?

『ペイントボールのこと忘れたの？』

「……あつ。」

しまった、忘れてたあ。龍田に折檻を忘れさせるためにホメ殺し
作戦とか考えてたのに、色々あり過ぎて肝心のオレ自身が覚えてな
かった。

『それに太刀の使い方がまだまだなっていないわよお！あれじゃまるで
大剣の立ち回りじゃない!?その様子だと狩技や練気の使い方も分
かってないんでしょう？何より勝てたのは途中で光虫が乱入してき
て怒り状態のドスイ級が思うように暴れられなかったからでしょ？
第一ドスイ級を倒した程度で祝賀会は開けないわよお。晩御飯くら
いは奢ってあげるからそれで我慢しなさい！』

うわあ、龍田が冷たい。せつかく勝ったっていうのに反省会かよお
。

「旦那サン、旦那サン。」

オレが落ち込んでいるとマサムネがズボンの裾を軽く引つ張つて
きた。

「マサムネイッパイ採集シタンダゾー。旦那サンニアゲルンダゾ。」

そう言つてマサムネはオレに鉱石を渡してきた。

「コレハマカライト鉱石ダゾ。コノ辺ジャ珍シイ鉱石デ、コレヲ素材
ニ使ツタ武具ハ強力ダゾ。ソレニコツチハ黄金石ノカケラダゾ。コ
レハ素材ニハナラナイケド、金ダカラ高値デ売レルンダゾ。他ニモ
イッパイ集メタカラ全部アゲルゾ。」

マサムネありがとう、お前いい奴だな。ロケット特攻の際にもドス
イ級の動きをしつかりと止めてたし、役立たず扱いしてマジでゴメン
……。……。

後に控える龍田のお説教に怯えながらも、マサムネとの絆が深まっ
た天龍なのであった。

龍田との反省会が終わったオレは工廠にいる竜人妖精さんのもとを訪れていた。

せっかく手に入れた新素材、何が作れるか楽しみだ。

「狩娘サン、足ガプルプルシテルケド大丈夫カー？」

「ずっと正座してたから足が痛い……。」

龍田に怒られてた間は正座させられてた上に、時々足をつついて苛めてきたからオレの足はもう限界だよ……。

「今日は色々と手に入れてきたからな、これで作れるものは何かあるか？」

「ドスイ級ノ素材ト新シイ鉱石ダネ、ソレヲ使ツテ作レルノハコレダナー。」

そう言いながら小さな体に似つかわしくない大きなカタログを軽々と持ってきた竜人妖精さんは、そのまま器用にカタログのページをペラペラとめくり始めた。

「アツタアツタ、コレガ作レルンダヨー。」

そう言っで見せてくれたページに載っていた装備は……。

『第六駆逐シリーズ』

……えっ、これ？ドスイ級から剥ぎ取った素材で電や雷がいつも着ているアレが作れるの？

そんでもってソレをオレが着る……？

『はわわわ、天龍なのです。一人前の狩娘として扱ってよね。その活躍ぶりから世界水準超えの通り名もあるよ。司令官のためにもっともっと働いちゃうわね！』

いやいやそれはねえわ。っていうかそれ以前にサイズは合うのか？

「サイズハ狩娘ゴトニ測ッテ作ルカラ大丈夫！」

「さいですか……。」

「デモ素材ガ足りナイカラ全部ハ作レナイヨ。モシ全部作りタイノナラ、モットドスイ級ヲ狩ッテキテネー。」

それを聞いて残念なような、安心したような……。

「骨ノ強化モ出来ルヨ。報酬デ手ニ入レタ素材ハ防具ノ生産ダケデナク、武器ノ生産ヤ強化ニモ使エルンダ！」

武器のパワーアップか、そりゃいいな。攻撃こそ最大の防御！力こそパワー！

太刀の力……斬れ味のパワーがためえをブツつぶす!!

それに強い防具を着るよりも、強い武器を使った方が自分が強くなった実感が湧くつてもんだ。

そういうや龍田も骨は色んな武器に生まれ変わる可能性があるって言うってたな。

「よし、じゃあ骨を強化してくれ。」

「カシコマリー。」

受け取った素材を骨の上に乗せて、そのままハンマーで叩き始める妖精さん。

前も思ったが、よくこんなやり方で装備が作れるな。正直言ってみてぶっ壊してるようにしか見えん。

さて骨よ、お前の可能性をオレに見せてくれ！

「骨2ガ出来タヨ。攻撃力ガ少シ上ガッタヨ。」

「えっ?」

色んな武器に生まれ変わる可能性がある。(絶対に生まれ変わるとは言っていない。)

見た目も同じで名前もほとんど同じの骨2って……。

このまま強化し続けても骨3、骨4、骨5になるばっかりで、いずれオレが神通並みに強くなった頃には骨200とかになってるのか

な？

……まあいいか、強くなったことには違いないんだし。

ついでに余った素材で防具も1つ作ってみるか。

怒ったドスイ級のタツクルは滅茶苦茶痛かった、あれを軽減出来るなら無駄にはならないだろ。

今のオレの装備は上から『竜王の隻眼』、『ユクモノドウギ』、『クンチュウアーム』、『チェーンベルト』、『チェーンパンツ』。

そして残った素材で作れそうなのは『第六駆逐ハット』、『第六駆逐スーツ』、『第六駆逐スリーブ』、『第六駆逐スカート』、『第六駆逐ソックス』の中からどれか1つ。

現状じゃどうせスキルも発動してないんだし、どれか1つを第六駆逐シリーズと取り換えるとすれば……。

……分かってる、本当は防御力が1番低いパーツを取り換えるべきなんだって。

でもいつまでも腕にダンゴムシを着けていたくねえ、出来ることならこれと取り替えたい。

「第六駆逐スリーブヨリモ、クンチュウアームノ方ガ防御力ハ高インダヨ。」

替られない。現実是非情である。

いくらなんでも性能で劣るものに替えたら損をするっていうのは子供でも分かることだし、何より龍田にまた怒られる。

仕方がない、防御力の低い胴、腰、足のどれかを替えるとするか。「下半身3パーツの中で1番手持ち素材に優しいのを1つ作つてくれ。」

「アイヨー。」

そう言うや否やドスイ級の皮や鉱石をまとめてハンマーで叩き始める妖精さん。

そして出来上がったのは……。

「第六駆逐ソックスガ出来タヨー。」

よりによってそれかよ！素材をケチらずスーツかスカートを作りやよかった！

いや待て、これは靴下だ。ということはチエーンパンツとは別に装備が出来るハズ……。

「ココデ装備シテイクカイ？イヤ、シテイケ。チエーンパンツハ部屋ノ衣装タンスニ送ツトイテヤルカラナ。」

気が付くとオレはいつの間にかチエーンパンツを脱がされていて、代わりに第六駆逐ソックスを履いていた。あれえ？一体何が起きたんだ？

竜人妖精さんが装備を着替えさせるタイムは、僅か0.05秒に過ぎない。ではお着替えプロセスをもう1度見てみ「人様の着替えを2度も見るんじゃないやねーっ!!」

危ねえ、謎の力で2度も辱められるところだった……。

「コレデ防御力ガ上ガッタヨ、ヨカッタネ。ソレト靴下ダカラツテ他ノ足装備ト組ミ合ワセヨウトシテモ、不思議ナカデ出来ナイシ、ソレデモ無理ニ履クト不正装備扱イサレテ頭ガパーンツテナルカラ気ヲ付ケナー。」

また金縛りか!?そんなでもってズボンと靴下を履いただけで不正装備扱いされるとは……。

狩娘って艦娘に比べて安全で自由に気ままな仕事だと思ってたけど、実はスゲー恐ろしい職業だったんだな……。

「ソレ ज्याア新シイ装備デ次ノ狩リモ頑張ツテネ。マタノゴ利用ヲ、オ待チシテマース。」

そう言うのと竜人妖精さんは工廠の奥の方に引っ込んでいってしまった。

1人残されたオレは改めて自分の格好を確認してみる。

眼帯とユクモノドウギはいいとしても……腕に金色ダンゴムシ！

ズボンも履かずにパンツの上に直接着けた金属ベルト！そして暁型仕様の黒ニーソ！最後に背中に背負ったデカイ骨！

自分の変態度指数が上がり続けていることに頭痛すら感じるオレだった……。

「ふう、やっと今日の分の執務が終わりました。結局提督は目覚めませんでしたね……。」

どうも皆さま、秘書艦の神通です。

今日はあれからずっと仕事をしていました、なので体が凝って仕方がありません。

流石にもう出撃する気は起きませんね、食堂で気晴らしに甘い物でも食べましょうか？

「……おや、あれは？」

執務室から出て食堂を目指して歩いていると、フワフワと宙に浮かぶ野球ボールくらいの大きさの物体がゆっくりと食堂の中に入っていくのが見えました。

「コオオオオ……。」

あれは天龍さんの釣って来たツカミダコ？

空中に浮いて移動出来るというのは知っていましたが、どうやら水槽から出て外を自由にうろついているようです。

ツカミダコ、未だ謎の多い生物とはいえ、タコも散歩をするんですね。初めて知りました。

「あらっ、廊下に光虫が落ちている？」

ふと足元を見ると一匹の光虫が落ちています、もう少して踏み潰すところでした。

光虫といえば閃光玉の材料として有名で狩娘からの需要も高い昆虫です。

とはいえ鎮守府の中に光虫が捕れるスポットなんてあるワケがありません。

「……空いている窓から入って来たんでしょうか？」

そう思ったのですがよく見ると廊下に点々と、まるで一本の道のように光虫が落ちていきます。

「これは一体？」

食堂から引き返し光虫を一匹ずつ拾っていくと、やがては鎮守府の玄関に着きました。

それにしても凄い数ですね。雷光虫は大群で集まって大きな塊を形成すると聞きますが、ひよつとして光虫も群れで行動をする習性があるんでしょうか？

そして状況から察するにこの光虫は玄関から入って来たということになりますね。

とはいえ鎮守府の玄関ドアは閉まっています。鍵は掛けていませんが、開けっ放しにはしていません。

だとしたら光虫の大群が鎮守府のドアを開けて入って来た？そして何らかの理由で一匹ずつ脱落し、最終的に食堂付近まで続く道となったということでしょうか？

「いえ、そんなことあり得ません。そもそも虫がドアを開けるなんて……。」

きつと執務のやり過ぎで疲れているんですね。

ハア……私も久々に頭を空っぽにして、ただひたすらに狩りがしたいものです。

瑞鶴ちゃんと選ばれし民Ⅰ

太平洋に浮かぶカリユード諸島。発見されて数年も経っておらず、未だに謎の多い海域である。

そのような謎を調査するためカリユード諸島にはクロオビ鎮守府を始めとして、ユクモ鎮守府やメゼポルタ鎮守府など数多くの鎮守府が造られた。

そしてその鎮守府の1つであるココット鎮守府、今回の物語はここから始まる。

「やっと、やっと完成したわー！この出来立てホヤホヤの新兵器で加賀さんをギャフンと言わせてあげるんだから！」

私は瑞鶴、ココット鎮守府に所属している狩娘よ。

ココット鎮守府はカリユード諸島の中で1番最初に作られた鎮守府として有名なの。

そしてこの鎮守府が作られた土地は、最初に艦娘と竜人妖精さんが出会った記念すべき場所でもあるんだって。だからここを始まりの地と呼ぶこともあるそうよ。

最も狩娘っていう存在自体が確立されたのがごく最近だから、そんなに深い歴史があるってワケでもないんだけどね。

そしてそれと同時に、ここはガンナーを志す狩娘にとっても特別な鎮守府なの。

何故ならここには伝説のガンナーと呼ばれているあの人がいるからよ。

「提督、お茶が入りましたよ。少しお休みになられてはいかがですか？」

「あーすまん、もうちよつとで終わるからそこに置いといてくれるか？」

「私達のために働いて下さっているのは分かりますが、無茶してはダメですよ。」

提督の秘書艦である鳳翔さん。

この鎮守府に所属している狩娘の中でも最古参の狩娘で、まだ他に鎮守府もなく狩娘の人数が少なかった頃から提督と二人三脚で戦い抜いてきた歴戦の勇士にして数少ないG級の狩娘。

普段の穏やかな様子とは裏腹に、必殺の射撃で立ちはだかる深海棲艦を次々と撃ち抜いていったんだって。

私は鳳翔さんが戦っているところなんて見たことないんだけど本当かな？

ちよつと前にどうして今は戦っていないのか、それとなく聞いてみたことがあるんだけど……。

『昔は貴方のような狩娘だったんですけど、膝に港湾水鬼の角を受けてしまったんですよ。』

……だつてさ。

鳳翔さんには悪いけど、これって絶対に嘘だ。そのくらいの攻撃なら傷にもならないもん。

狩娘の人数が充実してきたからそろそろ休みが欲しいというのはまあ分かるけど、それ以上に提督さんの傍にいたいというのが丸分

かりよ。決して口には出さないけどね。

それにしても鳳翔さんだったら提督さんのどこがいいんだろ？

確かに提督さんは優しくてカッコよくて背も高いし頼りになるし一緒にいるとドキドキして幸せな気分になるけどそれだけでしょ。鳳翔さんならもつといい人見つけられるわよ？

私だって秘書艦になって提督さんと一緒に仕事を出来たら最高だなあ〜って思うけど、秘書艦がやってみただけで他意はないもの！別に提督さんのことが好きとかそんなんじゃないわ！

それにあの人もう30歳でしょ？30歳つてもうおじさんじゃん。試しにおじさんって呼んだら『まだオレはおじさんじゃないぞ！』って言うってたけど30歳だよ、30歳。

ど…どどど、どうしてもって言うんなら私がケツコンしてあげてもいいんだけどね?!いい年して独身の提督だなんて惨めだし！

えっ、お前実年齢70歳超えてるだろって？うっさい！狩娘の年齢は肉体年齢なんだから！

ちよつと話が脱線しちゃったけど、ココット鎮守府はカリユード諸島で最初に作られた鎮守府ってこと以外に特徴が無くて、建物も古くて狭いし特筆すべき施設もない田舎鎮守府。

一番最初ってことで試験的に作られた鎮守府だから本当に何にも無いし、使える設備も古臭いわ。

他の鎮守府に無いものといえば、せいぜい裏庭に刺さっている誰にも抜くことが出来ない不思議な剣くらいね。何でも鎮守府が造られる前からあったらしいわ。

でもポツケ鎮守府にある洞窟の中にもずつと昔から黒い巨大な剣が刺さってて、そっちの剣はなんと生きているみたいに傷が直るのよ。そんな不思議な剣と比べるとただ抜けないだけの剣じゃどうしようもないわね。

そんな何もない辺鄙な鎮守府だけど、わざわざ鳳翔さんの話を聞くためだけに色々な鎮守府からガンナー志望の狩娘が研修に来るのよ。当然ここに所属している狩娘もみんな鳳翔さんを尊敬していて、全員が伝説のガンナーである鳳翔さんを目指しているの。

もちろん私もそんな狩娘の1人。いずれは伝説のガンナーを超えた、『伝説の超ガンナー』になってみせる！

そして伝説の超ガンナーを目指している私の先輩にして、史上最大のライバルでもある一航戦の加賀さん。

鳳翔さんと同じで提督さんのことが好きなのか、虎視眈々と秘書艦の座を狙っている狩娘よ。

提督さんの次期秘書艦なら私で間に合ってるのに。

そして加賀さんはことあるごとに私に小言や嫌味を言ってくるんだから嫌になっちゃうわ！

『覚醒も発動させずにパチンコを装備してくるだなんて……。おもちゃで遊びたいのなら帰ってからにしてくれろ？』

『4連発の速射は反動が大きくて隙が増えるから考えなしに使うなどあれほど言ったじゃない。まったく、これだから五航戦は……。』

『ああっ赤城さん!? シエロツールで直接ワ級食べようとするのやめて下さいっ！ 研修生の葛城さんが見てるんですよ!? 先週に異国には虫を煮込んで食する文化があるとか言って食堂で異臭騒ぎを起こして鳳翔さんに叱られたばかりじゃないですかあ！ とぼちちりで私まで怒られたんですよ、もしもこれが鳳翔さんの耳に入ったら……。あわわわ。』……ってこれ言ったの翔鶴姉だった。

『ストライカースタイルだとしやがめなくなるわ。狩技を使うのはいいけど、その装填数の少ないボウガンでどう戦うつもりかしら?』

『ただでさえ扱いの難しい曲射を連発するなんてどういうつもり? 貴方の迂闊な行動のお陰で翔鶴さんが動けなくなつて、そのままレンタクで運ばれていったわよ。』

『炭鉱夫つて意外と面白いですね。クーラードリンクも癖になる味ですし、この燃石炭も美味しいんですよ。あらつ? 納品しようと思つた燃石炭が全然足りませんね、どうしましょう?』……つてこれは赤城さんが言つたんだつた。結局赤城さんはお守りを一つも持つて帰つてこなかつたけど、一体何をしに行つたんだらう?』

『左右にブレる弾道では当たるものも当たりません。暴れ撃ちスキルはもつと考えて発動させなさい。』

『幸運スキルが発動している装備は周りからいい目で見られないわ。身内同士での狩りだから許してあげるけど、他所の鎮守府の娘と一緒に狩りに行くときは気を付けなさい。幸運の女神だか何だか知らないけど、貴方一人の恥が鎮守府全体の恥となるのよ。提督の名に泥を塗るような真似は絶対に許さないから。』

『だからヘヴィじゃなくてヘビィだつてんだろ!!ヘビーでもヘベエでもねえ!!』

『ヤバイ。老海棲砲。まじでヤバイよ、マジヤバイ。老海棲砲ヤバイ。まず使用可能弾が少ない。もう少ないなんてもんじゃやない。超少ない。少ないとかつて「回復弾とか補助系使えなくらい?」とか、もう、そういうレベルじゃない。何しろ通常弾以外LV3弾のみ。スゲエ!なんかLV1通常弾とか使えないの。ボウガンの常識とかを超越してる。だつてLV3弾つてのは、調合しなきゃならないらしい

い。ヤバイよ、調合だよ。だって普通は大剣とか研ぐだけじゃん。だって一振りするたびに電気袋消費とか困るじゃん。「5回斬ったら子級に会いに来てね」とか言われても困るっしょ。片手剣振る回数と、虫アミ振る回数一緒とか泣くっしょ。だから剣は研ぐだけでいい。話の分かるヤツだ。けど老海棲砲はヤバイ。そんなの気にしない。サポ弾も毒LV2のみ。ヤバすぎ。深海棲艦戦の準備に5時間！スゲエ！ボウガンっていったけど、もしかしたら大砲なのかもしれない。でもボウガンじゃないって事になると「ヘビィボウガンの最終形って説明はナニよ？」って事になるし、それは誰もわからない。ヤバイ。誰にも分からないなんて凄すぎる。あと超強い。攻撃力300。ヤバイ。強化して360。イ級一撃で殺せない。最強のボウガンなのに……。怖い。それに見た目へ級砲。超へ級砲。ちよつと白い。それに超のんびり。深海棲艦がケツ向けてるときにリロードしたら90度旋回2回してズサー食らうくらい。深海棲艦見つけて、ペイント弾撃とうと構えたら、もう戦いは終わってるくらい。ガコツ、ガツチャンツ、ガコツて。霰ちやんでも言わねえよ、んちゃは言うけど。なんつっても老海棲砲は浪費が凄い。店売り弾なんてほとんど使えないし。うちらなんて「ヘタクソと組んだから高級弾使わないでおこう」とか、「採集するのメンドクサイから店売り弾でいいや」とか、「金がないから散弾はLV1でいいか」とか思ったりするのに、老海棲砲は全然平気。むしろ高級弾しか使えない。凄い。ヤバイ。とにかく貴様ら、老海棲砲のヤバさをもっと知るべきだと思います。そんなヤバイ老海棲砲をこよなく愛するガンナーとか超偉い。もつとがんばれ。超がんばれ。』

ああもう、思い出しただけでムカつく！

確かに言ってることは正しいし、私に非があるのも認めるけど、もうちよつと言い方ってもんがあるでしょーが!!

絶対一航戦なんかには負けたりしないんだからッ!!

瑞鶴ちゃんと選ばれし民2

「今回の目的は空母棲鬼の討伐よ。空母棲鬼と戦うのは初めてでしょう？初見の相手だけど戦えるかしら？」

「平気よ、初見だから戦えないなんて言わないわ。」

何よ、年上だからって子ども扱いしてえ!!

空母棲鬼だか正規空母だか何だか知らないけど、さっさと片付けて帰るんだから!

「相手は空母、しかしここはカリユード諸島です。本土の空母と同じように航空機を飛ばしてくるとは限りません。相手がどんな攻撃をしてくるか、まるで想像出来ないのがこの海域よ。決して油断をしないように。」

「それも大丈夫、油断なんてしないわ。」

そんなことくらい分かってるわよ!私だって同じ空母の狩娘だけど、今まで1回も艦載機なんて飛ばしたことはないもの。言われるまでもないわ!

「ならいいわ。それで空母棲鬼の居場所は分かるかしら？」

「千里眼の薬を持ってきたわ、抜かりなんてないわよ。」

あくもう、一々うっさい!いい加減にしてよ!!

あんたは私の母親か!?母親ポジションなら鳳翔さんで間に合ってるっての!

心配性の翔鶴姉えだってここまで口出ししないわよ!

イライラを表に出さないように我慢しながら、千里眼の薬を飲んで空母棲鬼の居場所を探る。

ここから少し離れているけど、走ればエリアアチェンジされる前に間に合いそうね。

待ってなさい、空母棲鬼!加賀さんに私の实力を見せつけるための踏み台になってもらうんだからっ!

「空母棲鬼はこのエリアの先にいるようね、準備はいいかしら?」

「大丈夫、今日のために準備してきたものがあるのよ!」

そう言いながら私は被せていた布を取り払い、新兵器を加賀さんに見せる。

「その武器は?」

流石の加賀さんもこの武器には驚いたようね、気分がいいわ。

「よくぞ聞いてくれました。これぞ私の新たな相棒、組み立て式ボウガンです!」

「……そう。」

そうって、たったそれだけ?

もつとこう他に言うことないの? わく何それスゴいとか、キヤール初めて見たく、とか?

……いや加賀さんはそんなキャラじゃなかったわね。

キヤールキヤール言う加賀さんとか想像しただけで鳥肌立つわ。

「以前ロックラック鎮守府でやってる峯山砂嵐祭りを見に行った時に、そこで仲良くなった狩娘に作り方を教えてもらったのよ!」

この組み立て式ボウガンはロックラック鎮守府とモガ鎮守府以外ではほとんど使われていない珍しい形式のボウガンで、最初から規格に沿って作られている普通の一体型ボウガンとは違って、フレームにバレルにストックといったそれぞれのパーツを自分の好みで組み合わせさせて作り上げる持ち主の個性が強く表れる武器なのよ。

そしてガンナーが多いココット鎮守府でも、これを使っている狩娘はいないレアな武器でもあるわ。

残念だけど私の腕前じゃライトボウガンにヘビィボウガンに弓のどれも、鳳翔さんや加賀さんに赤城さんといった先輩達の技術には敵わない。

だから私は誰も使っていないこの武器で、鎮守府の天下を取ってみせるわ!

ロックラック鎮守府でお世話になった3人のお友達、いや同志と呼

ぶべきね。

同志達のお陰で完成したこの新兵器、名前が無いと不便ね……そうね、RZTカスタムとでも呼ぼうかしら？

これがあればどんな深海棲艦なんて鎧袖一触よ。心配いらないわ……なーんてねっ。

BGM：太古の律動

「ナンドデモ……ナンドデモ……シズンデイケ……！」

私達は目的のエリアに到着し、そして空母棲鬼を発見した。

どことなく顔が加賀さんに似ているわね、あの深海棲艦……。

それとデータで見えたものより遥かに艤装のサイズが大きい。

カリユード諸島に生息している深海棲艦の資料はまだ数が少なく、大部分が本土の物の流用だからこういうことはよくあるのよ。

とはいえ、資料ですら数メートルもあつた艤装が10メートル近い大きさにまで巨大化しているとは思わなかったわ。

深海棲艦の人型の部分のサイズが私達とあまり変わらないせいで、余計に巨大に見える。とはいえ、今回の私にとってその巨体はむしろ好都合ね。

「それではあなたがどれだけ戦えるか見せてもらおうわ。その武器に自信があるのでしょうか？」

そう言うと加賀さんは後ろに下がった。

いいわ、お望み通り見せてあげる。この新兵器の威力を！

「いくわよ、空母棲鬼！その（誰かさんに似た）キレイな顔をフツ飛ばしてやる!!」

早速特製ボウガンを構える。ヘビィボウガンに匹敵する大きさの武器だけど、見た目より重量は軽いので素早く構えることが出来た。作った自分で言うのもなんだけど、予想通りの扱い易さでいい感じじゃない♪

このボウガンはミドルボウガンという、これまたロックラック鎮守府やモガ鎮守府でしか流通していないライトボウガンとヘビィボウガンの中間に位置するレアなタイプのボウガンよ。

ボウガンは重さによつて種類が分けられていて、普通は小型で軽いものをライトボウガン、大型で重いものがヘビィボウガンとされているの。

だけど組み立て式のボウガンならライトとヘビィの中間の重量を選択することによつて、ミドルボウガンに仕上げることが出来る。これなら武器を構えたままでも機動性を損なうことなく動くことが出来るわ。

そして採用したフレームは軽くて取り回しに優れる非中折れ式タイプ。

フレームの名前は『たまごやきたべりゆうど玉子焼食邊竜弩』。3人の同志のうち1人が使っていたボウガンのフレームと同じものを採用したのよ！

抜銃が早いのもこのフレームのおかげ。中折れ式だと抜銃のたびにボウガンを組み立てる必要があるから動きが遅くなるもの。もちろん納銃も素早いわよ。戦いの中ではほんの数秒が命取りになることもあるからね。

このフレームの重量が軽いからこそストックとバレルの重量を含めても重量過多にならず、ミドルボウガンのままでいられるの。

一式で組み立てればライトボウガンになるこの玉子焼食邊竜弩、その軽さと扱い易さはパーツ別に分けられても優秀な性能よ。

ライトボウガン並みの機動性で立ち回りつつ、ヘビィボウガン並みの火力で敵を圧倒する。これがミドルボウガンの戦い方なんだからッ！

「LV1貫通弾発射っ!!撃って撃って撃ちまくれえ!」

バギユバギユバギユバギユ!!!

あらかじめリロードして置いた貫通弾を連続して撃ち込んでいく。空母棲鬼の巨体に貫通弾は効果抜群のはずよ。

最初にああは言ったけど、流石に顔は狙わないわ。貫通弾の連続ヒットを狙うには小さい顔は不向きだもの。顔のサイズが5メートルくらいあったら狙ったかもね?

このミドルボウガンは全LVの貫通弾を5発以上装填以出来る上に、反動もやや小という貫通弾に特化した構築になっているのよ!

リロードの速度は普通だからLV2と3の貫通弾のリロードは最速にはならないけど、このくらいなら気にならないわ。

そしてこの反動を抑える役目を果たすストツクの名前は『装甲大砲』そっこうたいほう。これももう1人の同志が使っていたボウガンのパーツで、装甲の名の通り防御力の低いガンナーには嬉しい防御力上昇効果もあるわ。

大砲の名に違わずバレルもフレームも全て装甲大砲一式で組み合わせれば、大砲レベルの反動でも抑えられる強力なミドルボウガンになるそうよ。

「ナマイキナ……カワイクナイヤツ!!」

空母棲鬼が乗る艦装が口を開く。これはブレス攻撃かしら?まさか航空機が飛び出してくるなんててことはないわよね?

ゴバアツ!!

「きゃっ、危ない!?!」

空母棲鬼が吐き出してきたのは激しい水流のブレス。納銃する暇もなく武器を構えたまま横に転がって避ける。

ビーム系の攻撃は貫通性能があつて威力も高いから、あんなのが直撃したらタダじゃ済まないわ。

「マダダ……クラエ!!」

回避したばかりの私に目掛けて空母棲鬼の巨体が迫る。
突進攻撃?このタイミングじゃ更なる回避は出来ない。

「だけど、惜しかったわねー!」

ガギンツ!!

ボウガンのバレルに装備されているシールドで突進を防ぐ。

くうっ、削りダメージとノックバックがキツイ。

それでも直撃を貰うよりはマシ、ガンナーの低い防御力であんなのを喰らったら瀕死になっちゃう。

装備していて良かった、シールド付きのバレル。

一体型のヘビィボウガンと違って組み立て式のボウガンは、後付けでシールドを取り付けることは出来ない。

シールドが使いたければ、初めからシールドが付いているバレルを選ぶというやり方になっているの。

私は回避に自信が無いから、シールドは頼りになるわね。

このボウガンのバレル、『R Jガン72式』アルジェエーガンななじゅうにしきはまな板のような独特なシルエツトで敵の攻撃をガツーンと受け止めることが出来るわ。

これは3人の同志の最後の1人にしてリーダー格の狩娘が使っていたボウガンのバレルと同じものよ。それにシールド付きでありながら攻撃力も高めでブレも無い、極めて強力なバレルなの。

玉子焼食邊竜弩は取り回しに優れる反面、攻撃力が低いからね、高威力のR Jガン72式でカバーよ。

ただし威力とシールドを両立している反面、重量も相応なものがあ
るから一式で運用すれば間違いなくヘビィボウガンになるわ。

高い攻撃力とシールドを併せ持つ重量級の『R Jガン72式』のバレル。

小柄なボディで機動性に優れる軽量級の『玉子焼食邊竜弩』のフレーム。

反動を抑えつつ防御力も上がる中量級の『装甲大砲』のストック。

これら3つを組み合わせた特製ミドルボウガン、RZTカスタム。これが3人の同志が使っていたボウガンのパーツを個別に合わせた私オリジナルのボウガン。

3人の同志のボウガンとそれを扱う私、合わせて4人の狩娘の魂がこのボウガンには込められているのよッ!!

『そんなにかしこまらなくていいんだよ? ほらお腹空いたでしょ、私の作った玉子焼き、食べるう?』

同志Z、美味しい玉子焼きご馳走様でした!

思えば初めて訪れたロックラックで迷子状態の私に真っ先に声を掛けてくれたのもあなただったわね。お陰で峯山砂嵐祭りを楽しむことが出来た、感謝してるわ!

『ここロックラック鎮守府は広いですからね、案内は私に任せて下さい! そうそう、焼き芋はいかがですか? 食物繊維は身体にいいのよ?』

同志T、道案内してくれてありがとう。あなたのガイドはとっても分かり易かったわよ。

それと焼き芋も美味しかったわ。美味しい焼き芋に免じて、途中であなたがガスを漏らしたことは黙っというてあげる。

『なんやキミイ、ココット鎮守府から来たんか? ココット鎮守府って鳳翔さんのおるとこやろ? 鳳翔さんには色々世話になったことがあるさかいに、もしキミが困ったことがあったら相談にのるで? ドーンと胸を貸したるからな……って誰の胸が貸し出し中やねん! あははは……は……はあ。ゴ、ゴホンッ!! そ、そんなことよりタコ焼きでも食うか? 美味しいで?』

同志R! あなたのアドバイスを参考にして、この武器に行きついたわ。今の私がいるのはあなたのお陰! 本当にありがとう!

それとタコ焼きもありがとう! 熱かったからハフハフしながら食

べたけど、とつても美味しかったわ……つてあれっ？ひよっとして私食べてばかり？

……ま、まあ私も空母だもの。赤城さんほどじゃないけど結構食べるわよ？

「まだまだっ！撃て撃てーい！」

突進した空母棲鬼はそのまま後方まで通り抜け、離れたところでようやく止まった。

こういう時こそ飛距離が長くてクリティカル距離も遠いLV3の貫通弾の出番よ。

私お得意のアウトレンジで決めちゃうわ、背を向けて隙を晒している空母棲鬼に追撃するわよ。

どう、この活躍ぶり？流石の加賀さんも私のことを見直したかな？

「ここまですすね、あなたの実力は分かりました。もう結構です、下がりますい。」

「ええっ!？」

唐突に加賀さんが終了宣言を出してきた。

何がいけないっていうのよ？これからがいいところだったのに……。

「そのボウガン、なるほど色々と考えて組み立てたようね。だけどまだまだ甘いわ。」

えっ？どこが??高い攻撃力に敵の攻撃を防ぐシールド、取り回しに優れる重量に貫通弾の運用に適した装填数と反動、そしてガンナーとしての戦いを助ける防御力上昇効果、どこがいけないっていうの!？」

「あなたのボウガンは弾丸の飛距離が長過ぎます。それでは貫通弾の本来の威力は出ないわ。」

どうということ？有効射程距離が長いから普通のボウガンより離れ

た位置からでも弾かれずに射撃が出来るのよ。これなら敵から反撃を受けにくいから立ち回りの際に有利じゃない。

「貫通弾は身体の大きい相手に撃ち込むことで、連続してダメージを与える弾丸よ。だけど飛距離が長いと連続してヒットする前に相手の身体を突き抜けてしまうわ。今のあなたの戦い方は貫通弾という名前の通常弾を撃っているだけよ。それなら最初から単発性能に優れる通常弾を使いなさい。」

うぐぐ……確かに言われてみれば確かにそうだった。

「それにそのボウガンにはもう1つ欠点があります。」

欠点？まだ何かあるっていうの？もうお説教は勘弁してほしいんだけど。

空母棲鬼はこちらとの間合いを測って移動を開始し始めた。

その隙に騒ぎを聞き付けたのか、深海棲艦の航空機が3機集まってきた。

「って航空機いるじゃないですか!?!さつき空母でも航空機は出してこないって言ったのに!」

「別に空母棲鬼本体から航空機が出てきたわけではないし、航空機がないとは一言も言っていないわ。」

いけしやあしやあと言い放つ加賀さん。

「それよりも、航空機は痺れ針や溶解液で大型の深海棲艦と戦うこちらの妨害をしてくる厄介な相手。あなたのそのボウガンであれを撃ち落としてみなさい。」

加賀さんだったら、いくらなんでも私のことをバカにし過ぎじゃない？流石にそのくらい楽勝よ。

小さな航空機程度、このRZTカスタムで木っ端微塵にしてやるわ。貫通弾を使うまでもない、LV1通常弾で十分よ。

「……って、アレ？LV1通常弾が装填出来ない?」

「ようやく気が付いたようね。その組み合わせではLV1通常弾は撃

てません。LV1通常弾は大型の深海棲艦との戦いでは、その威力の低さからなるべく使用を避ける弾丸です。しかし弾丸による持ち物の圧迫と弾数制限という枷を抱えたボウガンにとって、荷物制限にも弾数制限にも囚われないLV1通常弾はただ弱いだけの弾丸ではないわ。」

すっかり忘れてた。どんなボウガンでもLV1を装填出来るから、このRZTカスタムでも撃てるものだと思い込んでいたわ。

このボウガン自体、貫通弾に特化した半面、通常弾や散弾の装填数には難があるっていうのに……。

「そしてミドルボウガンは一般的でないが故に狩猟スタイルもギルドスタイルのみです。それに狩技も専用の物が開発されていないので使えるのも汎用狩技のみ。ライトボウガンのように全弾装填やラピッドヘブンが使えるわけではないし、ヘビーボウガンのように火薬装填もアクセルシャワーも使えない。何より武器内蔵弾に対応していないので、手持ちの弾丸に全てを託すことになります。それなのに通常弾LV1が撃てない。今のあなたの実力で本当にその銃を使いこなせるかしら？」

もうやめてえ加賀さん、とつくに瑞鶴のライフはゼロなんですよ！
加賀さんをギャフンと言わせるはずが、逆に私がギャフンと言わされてるんですよ。

そんなに瑞鶴を虐めても何も出ないんですよ、もうぐうの音すら出ないんですよいっくっつ!!

「……加賀さん、ひよつとしてミドルボウガン使ったことあるの？何でそんなに詳しいの!？」

「いえ、ミドルボウガンも組み立て式ボウガンも使ったことはないわ。しかし1人前の狩娘を目指すのなら、自分が使わない武器についても詳しくなければいけません。自分の使わない武器を持った狩娘とチームを組んだ時に、その武器の戦い方を知らないから連携が取れないなんてことになったら困るのは自分よ。分かったら下がらなさい、

空母棲鬼は私が倒します。今のあなたにはまだ荷が重いわ。」
「そう言うと加賀さんは私を後ろに下がらせて前に歩き始めた。」

「鎧袖一触よ。心配いらないわ。」

瑞鶴ちゃんと選ばれし民3

「鎧袖一触よ。心配いらないわ。」

そう言いながら空母棲鬼の前に出る加賀さん。

「オマエガツギノ……ワタシノ……アイテカ。」

「ええ、そうよ。そしてあなたの最後の相手でもあるわ。鬼級とはいえ下位の深海棲艦に私の相手が務まるかしら？」

加賀さん、一体どんな武器を使うんだろう？加賀さんはライトボウガン、ヘビィボウガン、弓といった遠距離武器ならどれでも使える狩娘だからどの武器を持っていても不思議じゃないのよね。

今回加賀さんが背負っている武器は、化石と一体化した緑色に光るラインの入った青い鉱石のような見馴れない武器で、見た目は綺麗だけど初めて見る武器だから判断が出来ないわ。

加賀さんが背負っていた青い鉱石を構えると、鉱石は左右に開いて弓の形になった。

あれって弓だったんだ……。

「五航戦、あなたに本当の射撃戦というものを見せてあげるわ。アムニス、あなたの出番よ。」

「あ、アムニスう？」

アムニスの名前は噂で聞いたことあるけど、実物を見るのは初めてよ。でもその噂って確かロクなものがあったような……？

「アムニスってあのアムニスですよね？」

「あのアムニスっていうのがどのアムニスかは知らないけど、この弓は確かにアムニスよ。」

マジですか？あの堅物の加賀さんが？あの冗談の通じない加賀さんが？あのすぐに怒る加賀さんが？あの表情の変わらない能面女の

加賀さんが？あの卑しい女の加賀さんが？

ポンコツ武器として名高いあのアムニスを使うなんて……。

「その顔、アムニスの性能についてはある程度知っているよね。」

「そりゃ私だって鳳翔さんを超えるガンナーを目指しているもの。だけれどそんな弱つちい武器で戦うって本気なの？」

すると加賀さんは軽く笑いながら、アムニスの性能を疑う私にこう言い放った。

「確かにアムニスは弓の中でも特に扱いにくい弓です。しかし、だからこそ使い手の腕が試される武器です。今のあなたの実力でこの弓を使いこなすことは無理でしょう、ですが私には扱えます。」

ムツ、言ってくれるじゃない。それなら見せてもらおうじゃないの、アムニスの性能とやらを。

「先手はもらいます。」

そう言うとか賀さんは矢を構えて、弦を引き絞る。

そのまま力を溜め続けるのかと思いきや、すぐさま放たれる矢。

矢は3本に別れて上空に向けて飛んでいく。

拡散矢のようだけど、そんな溜め方じゃ威力なんてまるで出ないんじゃない？それに一体どこを狙っているの？そんなに上の方を撃つたって空母棲鬼にはかすりもしないわよ!?

シャツ！トストストスツ！

……と思いきや、加賀さんが適当に放ったように見えた矢は上空の3機の航空機にそれぞれ1本ずつ見事に刺さっていた。分かれて飛んでいく複数の矢を全て違う敵に当てるなんて、なんて精密な射撃なの。

とはいえ威力が低いから一撃では倒せなかったみたいだけど。

「流石に一撃では倒せませんか、それなら更にもう一射。」

シャツ！トストストスツ！

加賀さんが続けざまに放った矢は先程の攻撃で怯んで動きを止めていた3機の航空機に再び刺さり、次こそその機体を粉々に撃ち碎いた。

「ウソでしょ？溜めレベルの低い矢は性能も低いから使わないのが常識じゃなかったの？」

「なるべく使うなどというだけで、全く使うなどは言ってます。属性値の高い弓で溜めずに高レベルの連射矢や拡散矢を使える弓なら、その高い属性値で攻め立てることが出来るわ。」

「じゃあアムニスにも高い属性値が？」

「そんなものはありません。アムニスは無属性の弓よ。」

「ええ……何だか拍子抜け。アムニスには神の属性が込められているって噂を聞いたことがあるんだけど？」

「そんなものありません。そもそも神属性なんてものは存在しないわ。馬鹿にしているのかしら？」

神属性は存在しないか……。それはそうよね、名前からして厨二臭いし。

「これで邪魔者はいなくなったわ。」

今度こそ本命の空母棲鬼に向けて弦を引き絞る加賀さん。

相対する空母棲鬼も艤装の側面に備え付けられた砲台を加賀さんに向けてる。

「クラウガイイ。」

側面の砲台から小さな水球が連続して放たれる。

バシヤシヤシヤ！

加賀さんは弦を引くのを止めることなく、そのまま横に歩いて水球を回避する。

そして空母棲鬼本体の顔に目掛けて矢を放った。複数の矢が真っ直ぐに飛んでいく、これは連射矢ね。

放たれた矢は狙い変わらず全て空母棲鬼の顔に命中し、流石の空母棲鬼もこれは堪えたのか動きが止まる。

うわあ、もの凄く痛そう。ここがカリユード諸島じゃなかったら翌日からお肉が食べられなくなるくらい残酷な光景が繰り広げられていたかもしれないわね……。

「せめてもう少し激しく動いてくれないかしら、これでは射撃の練習にもならないわ。」

そう言いながらも冷静に次の矢を番える加賀さん

「最大レベルまで溜めました。これには耐えられるかしら?」

続いて空母棲鬼の巨大な艦装に正面から矢を撃ち込む加賀さん。

放たれた1本の矢は艦装に直撃すると、そのまま装甲を食い破り反対側から突き抜けていった。

その衝撃で砕け散る艦装の前面装甲、そしてたまたま倒れこむ空母棲鬼。

「所詮は下位個体ね、相手にならないわ。」

凄い、部位破壊と同時にダウンまで奪っちゃった。

これは間違いなく貫通矢、ということはアムニス溜めレベル1で拡散矢、レベル2で通常矢、レベル3で貫通矢が撃てる弓ってこと?

「溜めレベル4の貫通矢の威力はどうかしら?」

「えっ?レベル4!?!じゃあ加賀さんは装填数UPのスキルを発動させているの?」

あのスキルはスキルポイントが重いから、そう簡単には付けられなかったはずなんだけど……。

「そんな効率の悪いスキル発動させていないわ。これはアムニス自身の特性よ、アムニスは最初から溜めレベル4の矢を放つことが出来るわ。」

「じゃあ放てる矢の種類はどうなってるの?」

「それぞれ下から拡散、貫通、連射、貫通よ。」

レベル3の矢とレベル4の矢の種類が違う!?

以前私が装填数UPのスキルを発動させて弓を使っていた時は、矢の種類が違うし無駄も多いって怒ったくせに。

素の状態でレベル4の矢まで溜められる……いや、溜められてしまう。そんな不便な弓を使うなんてどういうつもり?

「この弓の特異性に気付いたようね。確かにこの弓は使いにくいし、矢の威力を上げるスキルとも相性が悪い。だけど放つタイミングを見極めれば強力な連射矢と貫通矢を両立させることが出来るわ。」

「そんな無茶なこと出来るわけが……。」

「それが出来るのが一流の弓使い、あなたには使えないけど私には扱えるとはこういう意味よ。並みの使い手ではこの弓の真価を発揮することは出来ないわ。だからこそ並みの使い手は誰が使っても高い威力を発揮出来る弓を選んで、それで強くなったと思って満足してしまう。結果だけを求めるのならそれもいいでしょう。それに誰が使っても強いということはその弓が優れた名品だという証拠でもあります。だけどそれで果たして一流の弓使いを名乗れるかしら? 使にくい弓でも戦果を出してこそ本当の弓使いよ。今のあなたもそう、使ったこともないアムニスの性能を噂だけの色眼鏡で判断して馬鹿にしている。それで一流のガンナーを目指すなんておこがましいわ。批判するのも結構だけど、それは実際に使ってからにしないさい。そして使い手が武器を選ぶのではなく、武器の方が使い手を選んでくれるのです。それを決して忘れないで。」

武器が使い手を選ぶ……か。

神属性と比喻されて扱いにくいアムニスを己の手足のように使い

こなす加賀さん。

それに対して私は使ったこともない武器を自分の価値観で勝手に評価している。

たしかにこれじゃ武器に選ばれるなんて無理な話ね……。

このザマでは一流のガンナーなんて名乗れるハズもない。

負けだわ……完全敗北ね……。

技術でも心でもまるで勝負になっていない。

私が加賀さんに張り合おうとするのがそもそもの間違いだったんだわ……。

「何を落ち込んでいるのかしら？」

「えっ？」

私が落ち込んでいると加賀さんが厳しい表情で声を掛けてきた。

「あなたはそれで諦めるの？ 鳳翔さんよりも強くなると言ったのは嘘かしら？」

「そんなことを言われても今の私じゃ……。」

「今のあなたが未熟なのは知っています。だけど未来のあなたはどうかしら？」

「未来の私……？」

「そうよ、言っておくけど今の私の腕前でも鳳翔さんには及びません。それでも少しずつ差は縮まっています。いつか必ずあの人に追い付いてみせるわ。そしてそのまま追い抜き、鎮守府のトップの狩娘となって秘書艦の座も貰っていくつもりよ。分かるかしら、私の技術と心は月日と共に成長しているの。あなたはどうかしら？ 更なる高みを目指して心身共に成長する？ それともこのまま腐ってずっと私の背中を眺めているつもり？ それもいいかもしれないわ、七面鳥には似合いの末路ね。」

「い、言わせておけば……。」

「言わせておけばどうするつもり？」

「……今回は負けてもいいっ、でも負けたままじゃいられない！ 私に

だってプライドがあるんだっ!!加賀さんや鳳翔さんに勝ちたいって
いう気持ちは嘘なんかじゃないっ!!私だってガンナーとしての、狩娘
としての頂点からしか見るこの出来ない景色を見たいんだあゝ
っ!!!」

私が啖呵を切るとフツと加賀さんの表情が柔らかくなった。

「よくぞ言いました、それでこそ私の後輩です。美味しい所は譲って
あげるわ、武器を構えなさい。」

「は、はいっ!」

使いこなしてあげられなくてゴメン、RZTカスタム。

この戦いが終わったらきつと私はあなたのことを分解しちゃうん
だと思う。私があなただけを使いこなせるようになるのはずっと先の話。

だけどそれでもあなたは私が心を込めて作り上げた初めてのミド
ルボウガンであると同時に、命を預ける大切な仲間なの。お願い、力
を貸して!

RZTカスタムを構え直すと、気のせいかな銃が少し笑ったような気
がした。

加賀さんはアムニスを仕舞い、ダウンから起き上がろうとしている
空母棲鬼に向かって言い放った。

「先程は私が最後の相手だと言いましたが、それは撤回します。あな
たの最後の相手はこの娘よ。」

「ナニ……?コンナミジクナコムスメガ……ワタシノアイテニ……
?アタマニ……キマシタ……。」

グルオオオオオーツ!!!

起き上がった空母棲鬼が怒ると共に、艦装の口から凄まじい音量の咆哮が放たれる。

その迫力と殺気に、離れていても耳を押さええてうずくまりそうになる。

「いいかしら？ 怒り状態の空母棲鬼は攻撃力が激増する反面、肉質は軟化するわ。あなたのミドルボウガンの貫通弾は連続ヒットしにくい以上、一撃の威力が最も高く飛距離が短いLV1貫通弾を使うのが一番です。また斜めに向かって撃てば少しは飛距離を稼げるでしょう。艦装の一番前方に撃ち込み、そのまま特に肉質が柔らかい空母棲鬼本体を貫くように撃ちなさい。」

「分かったわ、やってみる！」

怒り狂った空母棲鬼が突っ込んでくる。

「キサマノコウゲキハ……ツウヨウシナイ……ナンドクリカエシテモ……カワラナイカギリ……オナジダア!!」

「通用するわっ！ 私は今日ここで変わるのツ!!」

バキュバキュバキュ!!

空母棲鬼の突進に怯むことなく射撃を続ける。

撃とうと思えばもつと撃てるけど、これ以上撃つとこっちが危険ね。横に転がって突進を避ける。

そして空母棲鬼が通り抜けた隙を狙いリロードする。

加賀さんに言われた通りに本体狙いで斜めに撃ち込んでみると、先程までとは明らかに手応えが違う。空母棲鬼の顔が苦痛に歪んでいるもの。

振り返った空母棲姫は艦装から再び水流を発射しようと大口を開け始めた。

「させないっ！」

バギユバギユバギユバギユバギユ!!!

ブレスが来る前に狙い撃つ！危険な賭けだけど、敵が撃つ前に怯ませられれば!!

「グッ……バカナ……。」

空母棲鬼は読み通りに怯んでブレスを撃ち損なった、それに足元もおぼつかないみたい。

これは間違いなく瀕死のサイン。だったらここで畳み掛ける！

「これで終わりだぁーっ!!」

バギユバギユバギユバギユバギユ!!!

リロードしたLV1貫通弾を全て撃ち込む、お願い倒れてっ!!

バギンツ!!ズウウン……。

最後の貫通弾が命中すると同時に空母棲鬼の服が破れ、それと同時に艤装が横倒しとなった。

服が破れたということは部位破壊に成功したのね、やったあ！

倒れた艤装から放り出される空母棲姫。

そのまま勢いよく海面に叩き付けられ、うつ伏せに倒れる。

やったのかしら……?フラグっぽいとはいえ、こう言わずにはいられないわ。

「カッタト……オモツテイルノカ?カワイイナア……。」

水面に手を着き、意味深な言葉と共にムクリと起き上がる空母棲鬼。

あわわわ、やっぱりやっていなかったんじゃ……？

バシヤン!!

しかし空母棲鬼は力無く崩れると艀装を残して今度こそ海中に沈み、そして浮かんでくることはなかった。

……や、やったわ。部位破壊と同時に討伐にも成功していたみたい

!?

「やった、やりましたよ加賀さん！」

「ええ、見ていました。やれば出来るじゃない。」

思わずピョンピョンと跳ねて喜ぶ私を、珍しく満面の笑みで迎える加賀さん。

私、加賀さんの笑顔って初めて見たかもしれない。私といるときの加賀さんはいつも無表情ばかりだったから知らなかったけど、こんなに綺麗な顔で笑う狩娘だったんだ。

「喜ぶのもいいけど、せつかく狩ったのだから剥ぎ取ったらどうかしら？」

「あつ、そうだった。いけない忘れてた。」

クエストクリア後の待ち時間は1分しかなくて、それを過ぎると何があつてもレンタクに乗せられちゃう。急いで艀装から剥ぎ取らなきゃ。

慌てて残された空母棲鬼の艀装へと向かう五航戦。

ふふっ、剥ぎ取りすら忘れるなんて相変わらず未熟ね。

ただどあなたは本当に凄い娘よ。私はずっとあなたに厳しく接してきたわ。

普通の狩娘ならきつとすぐに嫌になって音を上げるでしょう。けどあなたは潰れずに私の指導を受け続けてきた。

そしてあなたは未経験の戦法やスキルに武器といったものに何でも挑戦し、私が欠点を指摘すれば反省点や改善点を考えて次回からちゃんと直してきた。

あなたは間違いなくココット鎮守府で一番向上心のある狩娘よ。

今回の組み立て式ミドルボウガンだっそう。特定のスタイルや狩技すら未発達で一般的とは言い難い武器。それを使いこなそうと努力するあなたの姿勢はとても素晴らしい。

いずれミドルボウガンの新しい狩技を生み出すのは、案外あなたかもしれないわね。

確かにあなたはまだまだ弱い、だけど伸び代も大きいわ。それに成長速度もとても早い。様々なことを学んで自分の糧にしていく。

あなたのような後輩を持って私は誇りに思うわ。

きつとあなたはいずれ鳳翔さんをも超えるでしょう。だけど私だっって負けるつもりはないわ。

鳳翔さんを超えて絶対に秘書艦の座を手に入れてみせる、そして提督と一番近い席で過ごすのよ。

鳳翔さんのことは尊敬しているけど、それ以上に負けられない戦いがあるの。

それに鳳翔さんを目指している狩娘は私だけじゃないわ。

赤城さんや翔鶴だっって更に強くなってきたら、鳳翔さんだっって狩りに出ていないだけで武器の手入れと練習は毎日欠かしていない。

あなたの競争相手は多い上に強豪揃いよ？

頑張っ
てね瑞鶴。
私の可愛
い後輩に
して、最
高のライ
バルさん
♪

ここまでの登場人物1

天龍：クロオビ鎮守府に所属する狩娘で、この作品の主人公。
可愛くてカッコいい天龍型の1番艦。ただし現在の装備は壊滅的にカッコ悪い。

狩娘としてはまだまだ初心者であり、好戦的な性格も災いして酷い目に遭う事が多い。

本人としては常識人のつもりだが、実際はカリユード諸島の常識に
適応出来ていないだけであり、むしろ非常識人である。

ぶっ飛んだネーミングセンスの持ち主で、命名に関わらせるとロク
なことにならない。

使用武器は太刀。

龍田：クロオビ鎮守府に所属する狩娘で、天龍の妹兼相棒。

可愛くてちよつとコワイ天龍型の2番艦。

経験豊富なベテランの狩娘で、初心者狩娘である天龍の教育係も務める。

天龍のことが大好きで過保護な面があるが、それと同時に天龍の
着姿を写真に収めて辱めたりとイジワルな面もある。

クロオビ鎮守府で本気で怒らせたらいけない狩娘1号。

使用武器は操虫棍。

クロオビ提督：クロオビ鎮守府の提督………なのだが提督らしいこ
とは全くしていない。

提督としての威厳が無いせいか、鎮守府の狩娘からはぞんざいに扱
われている。

昔はちやんと提督としての職務を果たしていたのだが、自身が製造した達人ビールの成功で大金を手にして以来、提督業をほったらかしで金儲けに励んでいる。

とはいえかつては海軍で教官をしていたので、全くの無能ではないらしい。

金があるのをいいことに豪遊しているようだが、それがいつまで続くことやら……。

モデルはMHシリーズお馴染みの孤高の教官。

神通：クロオビ鎮守府で秘書艦を務める狩娘。

提督が提督なので、鎮守府の仕事はほとんど彼女が一人でこなしている。

仕事続きでストレスが溜まっており、現在は二式大艇ちゃんに癒される毎日。

鎮守府最古参の狩娘あり、実力もナンバーワン。

お淑やかで優しい雰囲気、意外と短気で機嫌が悪いとすぐに手が出る過激な性格。

クロオビ鎮守府で本気で怒らせたらいけない狩娘2号。

使用武器は狩猟笛。

ジョニー&スミス：天龍が海で釣ってきた不思議な生き物。

最初こそ天龍のことを威嚇していたが、すぐに餌で懐柔された懐いた。

現在はクロオビ鎮守府の水槽で飼われているが、頻繁に水槽から抜け出している。鎮守府の中を気ままに歩き回っている。

頭足類特有の何を考えているのか分からない顔をしているが、実は人並みに知能がある。

二匹ともクロオビ鎮守府の狩娘が気に入っており、特に天龍のことが大好きらしい。

電：クロオビ鎮守府に所属する狩娘で、第六駆逐隊の四女。
第六駆逐隊のメンバーとの連携は目を見張るものがあり、中でも雷とのコンビネーションは抜群。

優しくて穏やかな性格の狩娘……のハズだが腹黒く計算高い一面も覗かせる。

クロオビ鎮守府で本気で怒らせたらいけない狩娘3号。

嫌いな食べ物はナス。

使用武器はハンマー。

雷：クロオビ鎮守府に所属する狩娘で、第六駆逐隊の三女。

世話焼きな性格のロリお艦。しかし怠け者の提督の世話を焼く様子は無い。仕方ないね。

腹黒い妹と違って素直な性格。しかし考えが足りないのか、電に丸め込まれることも多い。

ジャンボ鎮守府に二人の姉がいる。

食べ物の好き嫌いはしないいい子。

使用武器はハンマー。

長門：クロオビ鎮守府に所属する狩娘で、世界のビッグ7。

普段はキリツとしているが、可愛いものに目が無く、特にちっちゃな子供が大好き。

可愛いものが絡むと他の都合をすっぽかそうとする困った性格。

仮にも戦艦のくせに、軽巡洋艦の神通や龍田に頭が上がらない。

鎮守府では提督の次に扱いがぞんざいである。

使用武器は大剣。

川内：クロオビ鎮守府に所属する狩娘で、夜戦中毒。

聞こえるのは声と足音ばかりで、天龍はまだろくに会ったことが無い。

実は神通、龍田に次ぐ古参の狩娘なのだが、夜のクエストにしか出撃しないせいでハンターランクがちつとも上がっていない。

昼間は寝てばかりでテコでも動かない。

神通は何とか彼女を昼のクエストに行かせようと思っているのだが……。

使用武器は狩猟笛。

三日月：モガ鎮守府に所属する狩娘。

まだまだ新人だけど、司令官や鎮守府の仲間達のために頑張るすげえ狩娘。

モガの近海で海の神様を見たらしい。

使用武器はハンマー。

天津風：連装砲ちゃんの仕事の幹旋をしている狩娘。

小柄な体に見合わない巨大なりユックを背負ってあちこちの鎮守府を渡り歩いている。

連装砲ちゃん達の幸せを願っているらしく、自分のお目に適わない狩娘には連装砲ちゃんを託さない信念を持つ。

同僚は島風で、せっかちな島風と比べて仕事は丁寧と評判らしい。

連装砲ちゃんや長10cm砲ちゃんよりも連装砲くんの方が好き。

モデルはネコ嬢……ではなくネコバア。

マサムネ：天龍のオトモの長10cm砲ちゃん。

濃い紫色の体色に黄色の隻眼が特徴的。

天龍には自分に似ていて強そうな、そのルックスを気に入られて雇

われた。

見た目は強そうだが、実際には争いごとが苦手な平和主義者。
本名はヤンガルくん。

コータロー：龍田のオトモ連装砲くん。

黒いボディに真っ赤な目が特徴的。

龍田に可愛がられてはいるが、クエストにはあまり連れて行っても
らえてない。

ノブヒコ：龍田のオトモの連装砲ちゃん。

シルバーのボディに緑の目が特徴的。

雇われて早々、レンターモードで出撃することになった。

※レンターモード：天津風が配っているVRゴーグルには連装砲の
意識と同調する機能があり、これを使えば狩娘が遠隔操作で連装砲を
動かすことが出来る。

この狩娘が連装砲を動かしている状態のことをレンターモードと
呼んでいる。

狩娘に動かされている間の連装砲は自意識はあるものの、夢を見て
いるような状態になっている。

連装砲の意識を奪って好き放題に操っているように見えるが、連装
砲側の了解が無ければそもそも同調することが出来ない。

また狩娘に比べて狩りの腕前が劣る連装砲は、狩娘が動かす自分の
身体の動きを参考にすることが出来るので連装砲側にも大きなメ
リットがある。

瑞鶴：ココット鎮守府に所属する狩娘で、伝説の超ガンナーを目指
している。

最大のライバル加賀に勝つために様々な武器やスキル、そして戦術に挑戦するも、そのたびに駄目出しをされている。

提督のことが好きだが、素直になれないのか提督のことをおじさん扱いしている。

ロックラック鎮守府にて三人の心強い同志を得た。

使用武器は組み立て式ミドルボウガン。

加賀：ココット鎮守府に所属する狩娘で、瑞鶴曰く口煩くて卑しい狩娘。

後輩の瑞鶴には厳しく当たっているが、それは期待の裏返し。

提督のことが好きで、隙あらば秘書艦の地位を狙っている。

ココット鎮守府では鳳翔に次ぐ弓の使い手で、神の弓に選ばれし者でもある。

使用武器は弓。

ココット提督：ココット鎮守府の提督。

どこかの誰とは違い、ちゃんと提督としての仕事をしている。

狩娘からの信頼は厚く、更にはほぼ全員から好意も向けられている羨ましい奴。

こう見えてカリユード諸島初の鎮守府であるココット鎮守府を任された凄い人。

年齢は30歳だが、おじさんではない。

本編では外見に関する記述は無いが、モデルはMHのオープニングでリオレウスに大剣を弾かれ、続くMH2のオープニングではドドブランゴと戦っている銀髪の大剣ハンター。

鳳翔：ココット鎮守府で秘書艦を務める狩娘。

百戦錬磨を誇るココット鎮守府最古参の狩娘で、通称伝説のガン

ナー。

彼女に憧れてガンナーの道を志す狩娘も多い。

港湾水鬼との戦闘で負傷して、現在は療養中……………らしい。

提督のことが好きだが、まだケツコンは出来ていない。

しかし提督との息の合いっぷりは、実質ケツコンしたも同然の仲である。

使用武器は射撃武器全般。

赤城：ココット鎮守府に所属する狩娘。

加賀と並ぶ凄腕のガンナーだが、食べ物関係で何かと騒ぎを起こす

困った人。

食い意地が張っているココット鎮守府のイビルジョー。

食べ物さえ関わらなければ穏やかで優しいお姉さんである。

やっぱり提督のことが好きらしい。

使用武器はヘビィボウガン。

翔鶴：ココット鎮守府に所属する狩娘で、被害担当艦。

特に落ち度は無いのに毎回騒動に巻き込まれては、とばっちりを喰

らう可哀想な人。

当然彼女も提督のことが好き。

使用武器はライトボウガン。

葛城：ココット鎮守府に研修に来たガンナー志望の狩娘。所属は不

明。

瑞鶴とはあることで共感し意気投合したらしい。

ロッキラック鎮守府に行けば同志達にも歓迎されそうである。

同志Z：ロツクラツク鎮守府に所属する狩娘。正体は不明。

瑞鶴の心の友の一人。得意料理は玉子焼き。

使用武器の玉子焼食邊竜弩は火竜弩のパロディー。

使用武器はライトボウガン。

同志T：ロツクラツク鎮守府に所属する狩娘。正体は不明。

瑞鶴の心の友の一人。よくガスが漏れる。

使用武器の装甲大砲は最初はガス大砲という名前にする予定だったが、それは流石にあんまりということで改名したという裏話がある。

使用武器はミドルボウガン。

同志R：ロツクラツク鎮守府に所属する狩娘。正体は不明。

瑞鶴の心の友の一人で、同志達のリーダー格。独特なシルエットと

関西弁が特徴的。

RJガン72式という名前は流石に直球過ぎたかと少し反省している。

使用武器はヘビィボウガン。

天龍ちゃんとストロベリー

「今日は天龍ちゃんのために特別講師を呼んでおいたわよう。」

龍田と二人でいつものように朝飯を食べていると、龍田が唐突にそんなことを言い出した。

ふーん、特別講師ねえ。あつ、この納豆美味しいな。糸を引くネバネバがいい感じだ。

何か知らねえけど今朝、今日は狩りに行かないって龍田に言われたからタダ飯の方を食べてんだ。

この島独自の食材を使った有料メニューも美味しいけど、この無料メニューも捨てたもんじゃない。

これは珍しくもなんともない本土で作られた市販品の納豆だけど、慣れた味がして食べやすい。

値段が高くて珍しいものが美味しいんじゃない、美味しいものが美味しいんだな。

珍味とかは珍しいってだけで美味しいワケじゃないし、癖も強くて好みが分かれるっていうしな。

何よりこのメニューはタダだ。タダっていうのは懐が寂しいオレにとつては何よりも代えがたいからな！

そーいや長門は納豆の臭いが苦手で食べられないとか言ってたな。

ティツシュを平気で食べるヤツが何言ってたんだって話だが……。

「もう、ちゃんと聞いてよねえ。天龍ちゃんのためにわざわざお願いしてきたのよお。」

「特別講師って言われたって、一体何の講師だよ？それに今日は狩りに行かないって言ってたじゃん。」

狩娘になってまで何か勉強しなきゃなんねーのか？

オレは座学ってヤツが嫌いなんだよ、身体を動かしている方が性に合ってるぜ。

そもそもオレに何の相談も無しに勝手に決めるなよな。

「狩りには行かないわよお。今日は天龍ちゃんに太刀の使い方学んでもらおうと思ってるの。太刀の扱いがとつても上手な狩娘が先生になってレッスンしてくれるわよお。」

「マジで!？」

前回散々龍田に立ち回りについて怒られたから、そこは直したいと思ってるんだ。

それに艦娘のオレは眼帯と刀がトレードマークの天龍だったのに、狩娘になった途端に太刀が使えないとか言われるのは癪に障るしな。

オレのために太刀の上手い狩娘に交渉してきてくれるなんて、やっぱりお前は最高の妹だぜ!

「本当は私が太刀の使い方教えてあげてもいいんだけどお、やっぱりプロに任せるのが一番いいものねえ。ちなみに私の得意武器は操虫棍だけど、それでも今の天龍ちゃんよりは上手に太刀を使えるわよお。」

「う、うるせいやいっ!」

「うふふっ、その狩娘は鎮守府の中庭にいると思うから歯を磨いたら会いに行つてね。私は自分の狩りがあるから今日は天龍ちゃんに付き合えないの、ゴメンねえ。」

まあ龍田も自分の用事があるからいつまでもオレに掛かりつきりつてワケにはいかねーよな。それにいつまでも妹におんぶに抱っこじゃ姉として情けねえぜ。

「大丈夫だって。見てろよ、今日1日で見違えてみせるからな!」

その後龍田と別れたオレは、身支度を済ませると中庭に向かって歩

き始めた。

それにしても太刀が得意な狩娘ねえ、誰なんだろうな？

陸軍仕込みの剣術でも使っていそうなあきつ丸か？それともオレとキヤラ被りしてる木曾とか？

まさか神通じやないよな？身体を動かすのは好きだが、スパルタは勘弁してほしいぜ。

他にも那智とかも太刀が似合いそうだなあ……。那智に太刀……。ブツククク……。『全然面白くないわよ。』

ハッ!?今龍田の声が聞こえたような？気のせいだよな？あいつは狩りに行ったはずだし……。

ようやく中庭に着いたオレは今回の目的である特別講師の狩娘を探していた、探していたんだが……？

その狩娘ってヤツはどこにいやがるんだ？どこを見てもそれらしいヤツはいねえ。

待たせすぎて帰っちゃったのか？

中庭にいるのは黒髪に青い羽織袴を着た見馴れないノツポのおっさんだけで、それらしい狩娘なんて影も形もねえぞ？

しようがねえ、そのノツポにこの辺で狩娘を見なかったか聞いてみるか。

BGM：船が来たゼヨ

「おーい、そのアンタ。聞きたいことがあるんだが、ちよつといいか？」

「ん？ワシのことゼヨ？」

ここでようやく振り返ったノツポの顔を正面から見たんだが……うわあ眉毛ふつといな。それにすごい糸目、前見えてんのかな？それと後ろに流しただけの黒髪に広いオデコ、そしてアゴヒゲ。耳が尖って見えるのは気のせいに違いない。

老け顔の頼りない坂本龍馬って感じの男だ。マジで誰だよ？提督の友人か？

「オレは人を探しているんだが、アンタこの中庭で誰か見なかったか？」

「人探しゼヨ？悪いけどここではオヌシ以外誰も見ていないゼヨ。」

「おかしいなく、確かここで待っているって聞いたんだが？」

「それでその探し人とはどんな格好をしているゼヨ？」

「格好？そーいやどんなヤツが来るのか全然聞いていなかったなあ、参ったぜ。」

「待ち人がどんな人か分からないんじや、探しようがないゼヨ。」

確かにその通りで返す言葉もない。

あらかじめ龍田に聞いたときやよかつたな、つーかなんで龍田は何でどんな狩娘が先生になるのか教えてくれなかったんだ？ウツカリか？それともワザとか？きつとワザとなんだろうなあ……。

「うーん、一緒に探してやりたいのはやまやまゼヨ。だけどワシもここで人を待っているゼヨ。だから悪いけど付き合えないゼヨ、申し訳ないゼヨ。」

「いや、気にすんな。それにしてもアンタも人と会う用事があるのか、奇遇だな。」

「その通り、奇遇ゼヨ。何故ならワシもどんな人が来るのか全然知らないゼヨ。オヌシとおんなじゼヨ。」

ふーん、このノツポもそうなのか。偶然の一致にしちや出来過ぎていて気味が悪いな……。

「ワシはとある狩娘に『私のお姉ちゃんが新しくここの鎮守府に着任したんだけど、まだまだ太刀の使い方が下手つぴな初心者なお。ここの中庭に行くように言っているから、会ったらあなたの得意な技術のことを教えてあげてほしいの。お願いねえ。』と言われただけゼヨ。その狩娘はお得意様だし、ワシも世話になっているから、なるべく力になってやりたいゼヨ。」

へえ、どこかで聞いたことあるような喋り方。そして話の内容。

「太刀が下手なヤツを待っているのか？ますます奇遇だな。オレは逆に太刀の扱いが上手い狩娘を探してるんだよ。」

「太刀の扱いが上手い狩娘？それはひよつとしてワシのことゼヨ？」

「いやアンタじゃなくて、オレが探しているのは狩娘なんだが。そもそもあんた男だろ？」

「だからワシがその狩娘ゼヨ。ならオヌシが龍田殿が言っていた狩娘ゼヨ？」

「えつ、狩娘？それに龍田って……。じゃあオレが探している狩娘って、もしかしてこの糸目ノツポ……。じゃなかった、この人？あんたマジで狩娘？人間じゃなかったのか!？」

「フッフッフ、だゼヨ。ワシはこう見えてもれっきとした狩娘。その名も潮風丸ゼヨ、ヨロシクゼヨ。潮風がワシを呼んでいるゼヨ！」

「潮風丸ウー？オレはそんな軍艦見たことも聞いたことねーぞ？つていうかお前女なのか!?!どこからどう見ても男にしか見えねえんだけど。」

「聞いたことが無いのは当然ゼヨ。なんたつてワシは交易船、軍艦ではないゼヨ。それとワシは男で間違いないゼヨ。何ならここで脱ぐゼヨ？」

交易船であつて軍艦じゃない？……つーか艦じゃないなら艦娘じゃねえじゃん！

……あつ、そうか！狩娘は艦娘じゃねえから艦じゃなくてもなれる

……のか？

でもこの潮風丸だつて建造、またはドロップして現れた狩娘なんだろう？

軍艦じゃないつてのにどうやって船が狩娘化したんだ？

それと別に脱がなくていいです。憲兵呼ぶぞ？

そもそも男なら狩娘じゃなくて狩息……つていうか狩人じゃないの？

「聞いて驚くなゼヨ。なんとワシはカリユード諸島の先住民が使つていた船ゼヨ！そしてこの島にワシの船としての記憶が眠つていたからこそ、こうして狩娘として生まれ変わることが出来たゼヨ。カリユード諸島だからこそあり得た事例だそうゼヨ。ワシが男になつたのもその辺が関係しているらしいゼヨ。それと男だとしてもワシはれつきとした狩娘ゼヨ。オスだろうがメスだろうがイヌはイヌ、ネコはネコ、狩娘は狩娘ゼヨ！」

うん？……最後の例えはよく意味が分からなかった。

イヌ？ネコ？もうちよつと分かりやすく言え。

とはいえ……………。

「カリユード諸島の先住民が使つていた船!? つーことはアンタ、未だに謎に包まれているカリユード諸島の過去を知っている生き証人なのか!？」

これつてスゲエことだぞ！カリユード諸島の歴史は竜人妖精さんの話や遺跡や壁画といった過去の遺物からしか推測することしか出来ねえんだろ？

けど実際にかつてのカリユード諸島で使われていて当時の実情を知る船が、現在において話すことが出来る狩娘として転生しているつてワケだ。だとしたら歴史の空白が埋まるかもしれねえんだぞ

?

しかしカリユード諸島だからこそあり得たって………カリユード諸島なら仕方ないなで済ましていいのかコレ？

「………期待しているところ悪いんだが、ワシはかなり昔に作られた船だから記憶の摩耗が激しくて、当時のことはほとんど覚えてないゼヨ。すまんゼヨ。」

ええ〜。ほとんど覚えていないって……オレのワクワクを返せ。

「ほとんどってことは、何か覚えていることはあるんだろ？」

「数少ないワシが覚えていることといえば、ワシに乗っていた船長さんのことゼヨ。船長さんはワシに乗って海を渡りビジネスネットワークを広げていったスゴい人ゼヨ！」

へえ〜。まあ交易船だから当然だとはいえ、当時から交易の概念があつたんだな。

バケモノを狩って生活していたって聞いていたから、てつきりもつと原始的な生活をしているもんだと思つてたぜ。

「船長さんは太刀の達人ゼヨ。そのネバネバとした独特の太刀筋は誰にも真似することが出来なくて、弟子は1匹のネコ以外に誰もいなかったゼヨ。今のワシの剣術は船長さん譲りのものゼヨ。だけどワシの弟子も船長さんと同じように連装砲ちゃん1体しかおらんゼヨ。やっぱり船長さんの見事な太刀筋を常人が真似るのは難しいゼヨ。だからオヌシがワシのネバネバ剣法を学ぶというのであれば、オヌシはワシの弟子第2号になるゼヨ！」

ネバネバ剣法???どんな剣法だよ!?

弟子がいないのって、剣術の真似が出来ないからじゃなくて、ただ単に習いたくなかっただけじゃ？

それに弟子はネコ1匹って……。それって本当に弟子なのか？船長が飼っていたペットの間違いじゃなくて？

それにその連装砲ちゃんっていうのも弟子じゃなくてアンタのオトモじゃないのか？

しまいにやオレにもその変な剣法を学ばせようっていうのか!?

「そしてこの話し方も船長さんに教えてもらったものゼヨ。船長さんが長年研究していたカツコいい言葉遣いの集大成ゼヨ。どうぞゼヨ、イケてるゼヨ〜?」

カツコいい……か?

「今のワシは船長さんに憧れて交易を営んでいるゼヨ。前に所属していた鎮守府は一時的に辞めて、狩りも休業中ゼヨ。だけど後悔はないゼヨ。ワシの使命はビジネスで世界をつなぐことゼヨ!」

へえ………まあ狩りをするだけが人生じゃないからな。

連装砲ちゃんの幸せのために狩りではなく斡旋を始めた天津風だっているし、ケツコンして家庭を持つことを夢見る狩娘だっているだろうさ。

オレの夢は世界水準超えの狩娘になることだが、なった後はどうすんだろうなあ………。

「せっかくだからオヌシもワシの商品を見ていくゼヨ? メイアイヘルプユーゼヨ。」

「いやオレは太刀の使い方………。」

「これは『足柄印の燃料揚げセット』ゼヨ。生燃料は普通の燃料焼きセットだとこんがり焼くことしか出来ないゼヨ、だけどこれならふんわりサクサクきつね色に揚がるゼヨ。」

コイツ全然人の話を聞かないな……。

それにしても燃料を揚げるって?

燃料を焼くっただけでも意味が分からんのに、燃料を油で揚げるとか頭おかしいのか?

「もちろんパン粉と油もセットだからお得ゼヨ。ウルトラ上手に揚がった燃料カツはサクツとジューシー、正に絶品ゼヨ。」

ゴクツ……ってそうじゃない！何食い物に釣られそうになつてんだ、しつかりしろオレ！

「こっちは操虫棍の教本『操瑞雲棍の全て』瑞雲だけで狩りは出来るよ』ゼヨ。」

「いや、オレは操虫棍は使わな……瑞雲？」

「そうゼヨ。この本の執筆者は自分の猟虫に瑞雲という名前を付けて可愛がつているらしいゼヨ。そして棍を全く使わずに、虫だけを飛ばして狩りをしているとの噂ゼヨ。」

それって操虫棍の扱い方としてどうなんだ？

オレは操虫棍の扱い方についてそんなに詳しくないけど、龍田は棍を振り回してイ級を斬り刻んでいたぞ？

「本の作者曰く『これからは瑞雲の時代だ。瑞雲は凄いぞ、切断型なら尻尾の切断が出来るし、打撃型ならスタンが狙える。必殺の溜め撃ちだって出来るし、緑のエキスで体力の回復すら可能だ。自分の狙いが良ければ印弾も必要ない。それに武器の強化なんてしないで済むから素材もお金も安く上がる。業物？匠？わざわざそんな重いスキルを発動させるなんて、暇人もいるものだな。砥石も回復薬もオトモ連装砲も、何もかも私には不要だよ。棍は瑞雲に指示を出すのに使うだけで、これで直接相手を斬り付けて戦うというのはナンセンスだ。単なる棍の時代は終わったな。』とのことゼヨ。ワシは操虫棍は扱ったことがないからとっても勉強になるゼヨ。」

いや、それ絶対騙されてるだろ……。

瑞雲……じゃなくてそいつの猟虫がどんだけ強いのかは知らないけど、棍を使わない方がよっぽどナンセンスだって！

「これなんかどうゼヨ？ミツネ石鹼ゼヨ、いい匂いがするし泡立ちも

「最高ゼヨ。」

「ミツネ石鹼？ミツネって？」

「ミツネはミツキツネ草のことゼヨ。ミツキツネ草とはキツネの頭によく似た形をしたピンク色の花を咲かせる草ゼヨ！この花の匂いは最高で香水にも使われるゼヨ。そしてこの花から採れるエキスを水に混ぜると泡がブクブクとたくさん出てきて何でもピカピカになるゼヨー！」

「そりやすげえ！こーういうまともな商品なら買ってもいいかな？」

「とある鎮守府の狩娘が手が滑らせて浴槽にこの石鹼を落としたところ、なんと風呂場どころか鎮守府の敷地全てが泡で覆われた程の泡立ちの良さゼヨ。お陰でその鎮守府は一週間以上も業務を停止したゼヨ。でもその代わりに部屋も廊下も屋根も全てがピカピカでいい匂いになったゼヨ。どうぞゼヨ？この石鹼欲しくなったゼヨ？」

「今の話で一気に欲しくなくなったわ。」

「……ってというかそれ欠陥商品じゃ？よく製造停止にならないな。」

「そしてこれは取って置き、『フルフルの実』ゼヨー！」

「なんかまた意味不明なものが出てきたな。」

「この木の実はずいゼヨ！食べるとなんと、フルフルのようになってしまいうゼヨ。」

「えっと、そのだな……。」

「なんゼヨ？」

「フルフルって一体何だ？」

「それはワシも知らんゼヨ。」

「知らねーのかよ!?食ったらフルフルみたいになるんじゃないのかよ!？」

「実はワシも怖くて食べたことがないゼヨ。それに食べている人を見たこともないゼヨ。何たってこれは今まで一回も売れたことがない凄惨商品だからゼヨ。だからこそ取って置いたつもりもないのに、いつの間にか取って置きになっていたゼヨ。サービスでタダにしとい

てやるからオヌシ食べてみるゼヨ？」

「絶対に嫌だ!!」

「残念ゼヨ。」

在庫処分も兼ねて毒見させようとすんな!!お前仮にも商売人だろ!?

こんな滅茶苦茶な奴がオレの剣の師匠になんのか、嫌な予感しかないんだけど……。

果たしてこのまま潮風丸に剣術を習って大丈夫なのか、不安になる天龍なのであった。

天龍ちゃんとストロベリー2

結局あの後、潮風丸に太刀を学ぶことになったオレは骨を片手に中庭で待機していた。

「それでは今から指導を行っていくぜヨ。指導を受けるにあたって、訓練中はワシのことは師匠と呼ぶがいいぜヨ。」

「はい、師匠！」

「師匠……いい響きぜヨ。」

どうやら今まで弟子がいなかったため、師匠と呼ばれることに感動しているらしい。

……そんなことはいいから早く進めてくんねえかな？

「それじゃあ早速太刀の扱い方のレッスンを始めるぜヨ。剣レン丸、カモ〜ンゼヨ！」

剣レン丸？誰だそれ？

するとすぐさま中庭の出口から荷物を抱えた連装砲ちゃんが走り寄ってきた。

「船長、オ待タセシタゼヨ。」

やって来たのは微妙に形が崩れたちよんまげを頭に乘せた、袴姿の連装砲ちゃん。

ひよっとしてコイツが師匠のオトモ……じゃなくて弟子1号の連装砲ちゃん？

「船長ノ太刀ヲ持ツテキタゼヨ！」

レン丸が師匠に渡したのは青い鞘に青い柄を持ち、これまた青い鍔を持つ、何から何まで青い太刀。きつと刀身も青いんだろう。

「やっぱりこれがないと始まらないぜヨ。これがワシの愛刀、南蛮刀ゼヨ。」

「ソシテコツチガ今回ノ訓練ニ使ウ的ゼヨ。」

続いてレン丸が用意したのはイ級の絵が描かれた木の板。

的って言ってたし、これを本物のイ級だと思つて訓練するのか？

「上出来ゼヨ。せつかくだから紹介しておくゼヨ。こいつは剣レン丸、ワシの一番弟子ゼヨ。そしてオヌシの兄弟子に当たるゼヨ。レン丸、コイツは天龍ゼヨ。今日からオヌシの弟弟子、いや妹弟子？とにかくオヌシの後輩になったゼヨ。」

「ヨロシクゼヨ、ワシガ剣レン丸ゼヨ。ボク……ジヤナクテワシニ後輩ガ出来ルナンテ夢ノヨウゼヨ。弟弟子ナンダカラ、ワシノコトハ才兄チャント呼ンデクレテモ構ワナイゼヨ？」

「いや、それは遠慮しておく。」

「ソウゼヨカ、シヨボーンゼヨ。」

がっかりするレン丸。だけど流石に連装砲ちゃんをお兄ちゃんと呼ぶのは抵抗があるだろ……。

「それではまず最初に狩猟スタイルについて教えるゼヨ。」

「教エルゼヨー。」

「よろしくお願いしまーす。」

「狩猟スタイルというのは、分かり易く言えば武術の型みたいなものゼヨ。スタイル毎にそれぞれ特徴があつて、少しずつ違う型で立ち回るゼヨ。」

「必殺技ガイッパイ使エタリ、敵ノ攻撃ヲ躲シタリト色々ナ狩猟スタイルガアルカラ、自分ノ戦法ニ合ツタモノヲ選ブゼヨ。」

へえ。変な連中だと思つていたけど、意外と真面目に教えるじゃん。

てつきり一日に感謝しながら太刀を1万回も振り回したりするの
かと思つたぜ。

「今回教えるのはギルドスタイルゼヨ。ギルドスタイルは基礎中の基礎。最終的にどのスタイルを選ぶにせよ、まずはこれを学ぶことから始めるゼヨ。」

「ギルドスタイルハ繰り出セル基本技ノ数ガ1番多イゼヨ。ココカラ派生シテイクコトデ他ノスタイルニツナガッテイクカラコソ、基礎中ノ基礎ト呼バレテイルゼヨ。他ノスタイルニ比ベルト尖ツタ部分ハ少ナイケド、ソノ代ワリ状況ヲ選ブコトナク常ニ安定シテ戦ウコトガ出来ルノガ強ミゼヨ。マアスタイルニ囚ワレナイ連装砲ニハ、アマリ関係ノ無イ話ゼヨ。」

そう言うのと師匠とレン丸は背負った太刀を抜き、イ級の的の前に立った。

やっぱり師匠の太刀は刀身も青かった、予想通りだな。

それに対してレン丸はミニサイズの太刀を鞘から抜くことなく、そのまま鞘ごと構える。

ひよつとして鞘っぽく刃を持つ見える太刀なのか？それとも装飾過多な木刀か？

「ヌンツゼヨー！」

「ゼヨー！」

師匠が的に向けて連続して太刀を振るう。

その動きはオレが前回ドスイ級に振るった太刀筋に比べ遙かに洗練されており、木製の的はあつという斬り裂かれて間にバラバラになつてしまった。

一方でレン丸の太刀は……リーチが短いせいか的に届いてすらない。

そもそも振り方自体滅茶苦茶じゃねえか、お前本当に1番弟子なのか？

「今のが太刀の基本的な動きゼヨ。さあオヌシもやってみるゼヨ。」

「よっしゃ、やってやるぜー！」

見よう見まねで太刀を振るう。

これでも記憶力には自信があるんでね、それに運動神経だっていい方だと自負してる。

オレの動きは師匠の動きをトレースしたかのようにバツチリ決まった。

あつという間に斬り刻まれるイ級の的。どんなもんだい？

「オオツ、オヌシ中々にスジがいいゼヨ。これなら次のステップにいつても問題無いゼヨ。」

「スゴイゼヨ、ワシモ兄弟子トシテ鼻ガ高イゼヨ。」

連装砲ちゃんに鼻なんてあつたつけ？

「次に教えるのは狩技ゼヨ。」

「狩技って？」

「アア！」

ああー……じゃねーよ、真面目に答えろよ。

「狩技とは簡単に言えば必殺技のことゼヨ。とはいえ攻めるだけでなく守りの技もあるゼヨ。そして狩技も大きく2種類に分けられるゼヨ。1つはどんな武器でも繰り出すことが出来る汎用狩技ゼヨ。これは武器を選ばない反面、攻撃の補助や守りに使うものゼヨ。もう一方は武器種固有の狩技ゼヨ。こっちは武器種毎に繰り出せる狩技が違ウゼヨ。太刀なら太刀の、狩猟笛なら狩猟笛の狩技があるゼヨ。武器毎に使える狩技は違ウけど、その代わりどれも強力な技が多いゼヨ。一気に攻め込んだり、ピンチを切り抜けるのにはもってこいゼヨ。」

「自分ノ狩猟スタイルニヨツテ、1度ニ使エル狩技ノ数モ違ウゼヨ。ギルドスタイルナラ1度ニ使エル狩技ハ2ツゼヨ。」

「ただし狩技は飽くまで必殺技、いつでも使えるわけではないゼヨ。狩技を使うには深海棲艦と戦って、闘気を身に溜める必要があるゼヨ。」

ヨ。」

「闘気を身に溜める？わりい師匠、ちよつと何言ってるのか分かんねえんだけど。」

前にドスイ級と戦った時にはそんなもん無かったぞ？

そもそも闘気なんてどうやって溜めりやあいんだ？亀印の師匠の下で修行でもするのか？

「フツフツフツ、だゼヨ。闘気の溜め方、それはとつても簡単ゼヨ。まずは使いたい狩技を事前に決めておくゼヨ。すると戦っているうちに、いつの間にか闘気が溜まってくるゼヨ。闘気がどのくらい溜まったかは、慣れれば体感で分かるゼヨ。今なら狩技が出せそうっ……と思えたのならそれが闘気が溜まったという証拠ゼヨ。ちなみにクエスト中は狩技の変更は出来ないゼヨ、だから狩りに行く前に使いたい狩技を決めておく必要があるゼヨ。何で変えられないかは不明ゼヨ、不思議ゼヨ！」

「格ゲーノパワーゲージノウナモノゼヨ。戦エバ溜マルゼヨ。」

つまりドスイ級と戦った時は、オレが使いたい狩技を決めていなかった……っていうかそもそも狩技の存在を知らなかったから、その闘気とやらが溜まらなかったってワケか？

「本来なら闘気は戦うことでしか溜まらないけど、今回はこの狩技ドリンクを飲んで闘気を溜めるゼヨ。これは飲むと戦わずして闘気が溜まるスゴい代物ゼヨ。」

師匠が取り出したのは赤くてドロリとした、見るからに怪しげなドリンク。

さっきのフルフルの実は件で、師匠の出した飲食物って信用ならねえんだけど本当に飲んででも大丈夫か？

「さあて、これをイッキ飲みするゼヨ！」

そう言いながら狩技ドリンクを飲み干す師匠。

毒見……じゃなかった。師匠が飲んだんなら、オレが飲んででも大丈夫か？

「!?……………ゼヨゼヨゼヨゼヨゼヨゼヨゼヨゼヨゼヨゼヨゼヨゼヨ!!」
うわっ、師匠がおかしくなった!?

いや、おかしいのは最初からか?とにかくやっぱり毒だったんじや…………?

「船長……!?大丈夫ゼヨ?」

「ゼヨゼヨツ……………大丈夫ゼヨ、ただちよつとむせただけゼヨ。」

むせただけって…………普通の人はむせた時にゼヨなんて言わねえよ。

それにえらく余裕あるな、実は大したことなかったんじや?

「サスガ船長ダゼヨ。ムセタ時スラ、カツコイイ言葉遣イヲ忘レテナイゼヨ。マダマダ見習ウベキコトガ多イゼヨ。」

お前はお前でどこをどう見習うってんだ?

やつぱりコイツらから太刀を学ぶの不安になってきたな…………。

この辺でコツソリ帰った方がいいような気がしてきた。

「ゴホンツ、それではオヌシにも狩技ドリリンクを渡すゼヨ。イツキにグビツと飲むゼヨ。ついでに剣レン丸にもあげるゼヨ。剣レン丸もグビツと飲むといいゼヨ。」

「あ、ありがとう師匠。」

「船長アリガトウゼヨ。狩技ノ概念ガ無イ連装砲ニスラ狩技ドリリンクヲクレルナンテ、船長ハヤツパリカツコイイゼヨ!」

「フッフッフツ、だゼヨ。そんなに褒めてもフルフルの実くらいしか出せないゼヨ。」

「ア、ソレハイラナイゼヨ。」

「ガツカリゼヨ。」

「それでは改めて飲むといいゼヨ。イツキに飲むのが作法ゼヨ。」

かなり不安だが、まごついていても仕方がねえ、天龍いつき

ま……す!

グビツ!!

「……………ウプツ。」

「どうぞゼヨ、美味しいゼヨ?」

うつつくつく、何も言えねえ。

無茶苦茶甘い、甘過ぎる。苺シロップにハチミツと砂糖を混ぜて煮詰めたような味だ。

こんな甘いのをイツキ飲みとか、むせるに決まってる!?
逆流して鼻の穴から出てきそうさ。

「ソー、量が多クテイツキニ飲メンゼヨ。ヤツパリ船長ニハマダマダ敵ワナイゼヨ。」

そしてお前は何の勝負をしているんだ?

そりゃ狩娘用の飲料なんだから連装砲ちゃんには多いだろ。

「すんげえ甘いんだけど、これの原料って何だよ?」

「狩技ドリンクの原料ゼヨ? 獯猛化した深海棲艦のエキスに、にが虫とハチミツで作った増強剤を混ぜたものゼヨ。獯猛エキスには深海棲艦の闘気が込められているから、飲むだけで簡単に狩技が使えるようになるゼヨ。」

「ブフオ!!?」

おっげえくくくく!!!!深海棲艦のエキス!? ふざきんな!! 1111
……………じゃなくてふざけるな!!!

深海棲艦のエキスっていうのは猟虫が吸うものじゃなかったのかよ!? 獯猛化っていうのは何だか知らねえが、ハチミツ以外にオレの予想当たってねえじゃねえか!?

ひよつとして深海棲艦の体液って甘いのか? だから猟虫は深海棲艦のエキスを摂取してるのか? 樹液に集まるカブトムシじゃあるまいし、そんなバカげた話があつてたまるか!!

ああもう、吐き出そうにも完全に飲み込んだよ。

肌の色が緑色になったりしたらどうしよう?

「これで狩技が使えるゼヨ。さて、今からワシが教えるのは練気解放

円月斬りと鏡花の構えゼヨ。どっちも太刀固有の狩技で、決まるとつってもカツコいいゼヨ。」

どこまでもマイペースな師匠。弟子が変な飲み物でお腹壊して病院に運ばれるかもしれないんだぞ!?

……………それはともかく練気解放円月斬りと鏡花の構え。確かに名前はカツコいいな。

天龍連続突きといい勝負だぜ。

※天龍連続突きとはドスイ級相手に繰り出し、そして簡単に交わされた、何の工夫もない単なる突きの連打のことである。太刀で突き攻撃を何度も繰り出すという、その単調にしてあくびが出るほどスツとろい攻撃の実用性はモンハンのプレイヤーにとっては言うまでもないだろうが、当然お察しである。

「まずは鏡花の構えを見せるゼヨ。」

師匠は太刀を抜いてイ級の的の前に立ち、一方のレン丸は小型の魚雷を担いでイ級の的の後ろに立った。

そして太刀を構える師匠と、今にも魚雷を投げようとしてるレン丸。一体何を始める気なんだ？

「それではレン丸、始めるゼヨ!」

「了解ゼヨ!」

そう言うのとレン丸は躊躇することなく小型魚雷を師匠に向かって投げ付けた……つてまじで投げるヤツがあるかあ!?

人に向かって魚雷を投げちゃいけませんってママに教わらなかったのか?危ないだろ!!

そんな心配を余所にまったく避ける気配の無い師匠と、目と鼻の先にまで迫った魚雷。

ああもうダメだ、当たる……そう思った瞬間、師匠は飛んできた魚雷を太刀の鎬で受け流し、そのままの勢いでイ級の的と、ついぞと言わんばかりに的の後ろにいたレン丸を華麗に両断した……つてレン丸ウー!?

「見たかゼヨ、これが鏡花の構えゼヨ。」

「いやいや、レン丸斬ったのに何ケロツとしてんの!？」

「船長才見事ゼヨ!」

……つて、ええくくく???

見事に両断されたかと思われたレン丸だったが、こちらは何事も無かったかのようにケロツとした表情で起き上がる。

「躲スノニ失敗シタゼヨ、サスガハ船長ノ太刀捌キゼヨ。」

なんだ、無事だったのか……。

そういやアタリハンテイ力学があるから武器で斬られても平気なんだっけ？

とはいえ仮にも太刀で斬られたんだぞ？普通もつと他に言うことあるだろ？

「鏡花の構えは相手の攻撃に合わせて使う狩技ゼヨ。太刀は大剣やチャージアックスに比べると刃が細くて薄いから、本来なら刀身で相手の攻撃を防ぐのには不向きゼヨ。だけど鏡花の構えは直接防ぐのではなく受け流すことによって、相手の攻撃を防ぐことが出来るゼヨ。更には相手の攻撃の勢いを自分に上乗せすることによって、防御と同時に鋭い反撃を可能とするゼヨ。」

そりやいいぜ、まさに見切りといった感じでカッコいいな。

相手の攻撃をサツと受け流し、返す刀でスパツと斬る。くうく、これぞ太刀といった感じだぜ!

「ただし欠点もあるゼヨ。受け流せるのは1度に1回までだから、連続で攻撃されると受け流しきれないゼヨ。それと攻撃を受け流せないと反撃が出来ないゼヨ。攻撃を待ち構えているのに相手が攻撃してこなかったらそれで終わりゼヨ。何より狩技は闘気を消耗するから連発出来ないゼヨ。失敗したからすぐさまもう1発なんてことは無理ゼヨ。使い所を見極めるゼヨ。」

「次はもう1つの狩技、練気解放円月斬りを見せるゼヨ。これはワシが最も得意とする狩技ゼヨ。」

師匠は先程と同じようにイ級の的に前に立つと、今度は太刀を縦に構えて力を溜め始めた。

「イヤーーーッ、ゼヨ！」

そして十分に力が溜まった瞬間、太刀を素早く一振りする師匠。

これまたズンバラリンと斬り裂かれる的。

うーん、さっきの鏡花の構えに比べるとちよつと地味だな。

それに力を溜めての斬撃つてのは分かるが、力を溜める必要があるせいか、ちよつと出も遅い。

「練気解放円月斬りのスピードが遅いと思つたゼヨ？ だけどこの練気解放円月斬りは一定時間、練気という力を太刀に込め続けることが出来る素晴らしい技ゼヨ。練気が使い放題の太刀は強力ゼヨ。」

「錬金？」

「錬金じゃなくて練気ゼヨ。錬金術に興味あるゼヨ？ 最近レンキンスタイルに押されて、本来の錬金術が廃れてきているゼヨ。ワシが扱っている商品には錬金術のレシピが載った調査書もあるゼヨ。これがあればコゲ燃料に深海棲艦のウ○コを錬金することで生燃料に戻すことも出来るゼヨ。これをもう1回焼いてこんがり燃料にすればちゃんと食べられるようになるゼヨ。」

オレの知つてる錬金術と全然違う!?

オレが知つてる錬金術は卑金属から貴金属を製錬する技術のことであつて、決してウ○コとコゲ燃料を混ぜるようなアホ技術のことじゃねえ!!

そりや確かにゆで卵が生卵に戻つたら凄えと思うし、同じようにコゲ燃料を生燃料に戻せるのも素直に凄いと思う。だけどその材料がウ○コつて……、そんなもつてそれをこんがり焼き直して食べるとか冗談じゃねえ!! そんなもんを食べるくらいならオレは餓死を選ぶぞ!!

子供向けの下品な漫画でもそんなことやるもんか!?

最初にその錬金術のレシピを発見したヤツは、何を考へてその組み合わせを試したんだ!?

「そもそも深海棲艦つてウ○コすんの？」

「さあ？知らんゼヨ。」

「知らんって……。じゃあなんで深海棲艦のウ○コって分かるんだよ？」

「深海棲艦の縄張りの海に浮かんでいることなく排泄物っぽい物体だから深海棲艦のウ○コと勝手に呼んでいるだけゼヨ。そもそも今まで誰も深海棲艦が用を足すところなんて見たことがないゼヨ。見たらきつと新発見ゼヨ。」

新発見……。確かに新発見なんだろうが、なんて嫌な新発見だ。

仮に新発見するとしても雷が言っていたように新種生物の発見とかがいい。

「ちなみに普通に混ぜてもウ○コ塗れのコゲ燃料が出来上がるだけゼヨ。錬金するにはこの本が不可欠ゼヨ。どうぞゼヨ、調査書欲しいゼヨ？」

「絶対にいらんっ!!」

「残念ゼヨ。」

「ちつとばかし話が逸れたゼヨ。練気というのは戦闘中に溜まっていた闘気とはまた違う力のことゼヨ。練気は闘気と違って太刀を使っている時のみ太刀の刃の内側に溜まっていく気のようなものゼヨ。溜まるのは太刀を使っている時のみだから、当然太刀以外の武器では使えんゼヨ。この練気が溜まると太刀の威力と斬れ味が高まるゼヨ。練気は普通に戦っていても溜まるけど、攻撃の手を休めたり、大技を繰り出すと減っていくゼヨ。この練気解放円月斬りはそんな練気を一瞬で限界まで溜められるゼヨ、しかも練気がしばらく減らなくなるオマケ付きゼヨ。」

つまり練気というのは時間制限付きのパワーアップか。

そういや前回ドスイ級と戦っていた時に、骨の刀身が仄かな熱を持っていたような気がしたんだよな。

てつきり戦闘で気が昂ってるからそう感ただけだと思っていたんだが、ひよつとしてあれが練気だったのか。

「しかしこの狩技にも実は1つだけ欠点があるゼヨ。」

問題？力の溜め過ぎで自爆するとかか？

いわゆる、これ以上のチャージは危険だ、溜まり過ぎたエネルギーは君自身の身体を傷付けてしまうぞ……みたいな？

「この狩技は刀身に練気を溜めた時点で本来の効果は終わりゼヨ、だから別に相手を斬る必要はないゼヨ。相手を斬り損なつても本来の効果はちゃんと発動するゼヨ。とはいえ空振るとカッコ悪いゼヨ。カッコ悪いというのはとんでもない欠点ゼヨ。」

ズコー、だな。思ってたより深刻じゃなかった。

「それじゃあ狩技を試すゼヨ。まずは鏡花の構えからゼヨ。狩技の使い方は簡単ゼヨ、使いたい狩技を心の中で思うだけゼヨ。後は体が自然に動くゼヨ、レッツトライトライトライゼヨ。」

「よーし、やってやるぜー！」

師匠に言われた通りにイ級の的の前に立ち、太刀を構える。

そして狩技を使おうと心に思う、使う狩技は鏡花の構え……鏡花の構え……鏡花の構え……？

………あれっ？

「言われた通りにしてんのに、全然狩技が出ねえんだけど……。」

「狩技が出ないゼヨ？そんなハズは………ハッ、技が出ない理由が分かったゼヨー！」

「狩技が出ない理由？」

もう分かったのか？

変なヤツだと思っていたが、流石に自分のことを師匠と呼ばせるだけはある。

やっぱり狩技に関してならオレより詳しいんだな。

「そうゼヨ。そしてその理由は簡単ゼヨ。オヌシに2つの狩技を教え

たのはたった今ゼヨ。それに対してオヌシが狩技ドリンクを飲んだのは少し前、狩技ドリンクを飲んだ時には、まだオヌシに狩技を1つも教えていなかったゼヨ。」

ここまでくればオレにも分かった。狩技が使えなかった理由、それは……。

「狩りに行く前に使う狩技を決めるということは既に教えたゼヨ。つまりドリンクを飲んだ時はまだ使う狩技を決めていなかったから、闘気が溜まらなかったってことゼヨ。」

やっぱりいい!!!

「というワケで狩技ドリンクをもう1回飲むゼヨ。」

そう言っつて再び深海棲艦の体液入りジュースを取り出す師匠。

「心配しなくても今度は事前にはちゃんと使う狩技を決めているから、闘気が溜まらないなんてことはないゼヨ。安心して飲むといいゼヨ。」

安心出来る要素がどこにもねえ!!

味は甘過ぎて気分が悪くなるし、原料を知れば気分は更に悪くなる。

飲まないで済むっていうのが1番安心出来るぞ!?

結局狩技ドリンクを飲まされたオレは鏡花の構えを試すものの、見事に失敗してレン丸の投げる魚雷に吹き飛ばされた。

アタリハンテイ力のお陰で痛くないのは武器攻撃だけで、魚雷の爆発は普通に痛いじゃねーか。

これずっと続けたらそのうち爆死しちゃうんじゃねえの？

その後天龍は鏡花の構えが成功するまで魚雷に吹き飛ばされ続け、

そのたびに回復薬と狩技ドリンクを飲まされた。

そして明日どころか今日の時点でトイレのお世話になることが確定したのであった……。

天龍ちゃんとストロベリー3

「これにて狩技もマスターゼヨ。ところでお腹の調子は大丈夫ゼヨ？」

「トイレトツテモ長カッタゼヨ。」

狩技は失敗しても鬨気を失ってしまう。

鏡花の構えに失敗して魚雷に吹き飛ばされ続けたオレは、そのたびに回復薬と狩技ドリンクを飲まされ続けた。

そしてようやく鏡花の構えに成功したオレは、太刀を構えるだけの気刃解放円月斬りをさっさと成功させ、そのままトイレに直行していた。

もはや何本飲んだのかすら覚えていない。

濃厚な甘さと飲み過ぎで少し気持ちが悪くなってきた、誰か胃薬と頭痛薬をくれ。

もうオレのお腹はタップタプだよ……。

「最後に教えるのは狩技ではない、太刀そのものの必殺技ゼヨ。」

太刀そのものの必殺技？

ゴクリ……、今までで1番凄そうだな。

「……その名も気刃斬りゼヨ。」

気刃……斬り……？

カ、カッコいいじゃないか、名前からして気刃にも関係がありそうだな……。

「フッフッフツ、だゼヨ。狩猟スタイルによって多少の違いはあれど、気刃斬りは太刀にとって必要不可欠ゼヨ。気刃斬りなくして太刀は語れないと言っても過言ではないゼヨ。気刃斬りの無い太刀なんて、ワサビの入ってない寿司みたいなものゼヨ！」

気刃斬りの無い太刀は、ワサビの入っていない寿司同然……。ふーん、なるほどね……。全然分からんっ!! つーかなんだよその変な例えは？

気刃斬りなくして太刀は語れないとか言ってるけど、サビ抜きは寿司なんて珍しくないだろ!!

それに駆逐艦みたいな小さい娘や、辛いのが苦手なヤツはサビ抜き食べるだろ!?

ひよっとして気刃斬りって太刀にとってそこまで重要じゃない……?

そんなもって小さな子供や、体質的に合わない奴は使っちゃ駄目な技なのか!?

オレの疑問を余所に師匠は話を続けていく。

「刀身の内側に練気が溜まってパワーアップするのはさつき教えたぜヨ。この気刃斬りというのは溜まった練気のを開放して繰り出す太刀の奥義ゼヨ。素早い連続攻撃と刀身の外側に開放した練気のお陰でその威力は絶大ゼヨ。まさに我に断てぬもの無しゼヨ。」

ワサビ云々は置いとくとして、気刃斬り自体はめっちゃ強そうじゃん! だって奥義だぞ、奥義。

狩技に関係無くそんな必殺技が使えるっていうのに使い方を知らないんじゃない、そりゃ龍田も練気の使い方がなっていないって怒るよな……。

「その代わり狩技の鬨気と同じように気刃斬りは使うと練気を消耗するし、連続攻撃故に隙も大きいゼヨ。使い所には気を付けるゼヨ。」

ハイリスクハイリターンってワケか、ますますオレ好みだ!

ノーリスクで放てる強い技なんてオレの性には合わねえぜ。まあそんな都合のいい技なんてそうそうないだろうけどな。

「気刃斬りの極意はこれで終わりではないゼヨ。気刃斬りのその先に究極の最終奥義があるゼヨ。」

きゅ、究極の最終奥義……??

「それじゃレン丸、準備を頼むぜヨ。」

「了解ぜヨー！」

レン丸は先程のイ級の的よりずっと大きく、そして頑丈そうなドスイ級の姿が描かれた的を地面に突き刺した。

これならちよつとやそつと斬った程度でバラバラになることはなさそうだ。

「それでは気刃斬り、そして最終奥義を見せるぜヨ。」

師匠はドスイ級の的の前に立ち、鞘に収まったままの太刀の柄に手を掛けると、深呼吸をして精神統一を始めた。

「スウーッ、ハアーッ……。」

カツ!!

師匠は糸目を大きく開くと同時に素早く太刀を抜き放つ、そしてドスイ級の的に勢いよく斬り掛かった。

「これが気刃斬りぜヨオオオ!!」

ザン！ザンツ!!ザンザンザンツ!!!

凄まじい勢いで太刀を振り回し、流れるようにドスイ級の的に連続攻撃を叩き込む師匠。

「そしてこれが最終奥義ぜヨオオオオオオオ!!!」

ズバアアアアアアン!!!!!!

カチンツ……ズズズ……パタンツ。

踏み込みつつ、身体ごと大きく回転しながら斬撃を繰り出す師匠。そしてそのまま太刀を鞘に納める。

遅れて数秒後、真つ二つになってずり落ちるドスイ級の的。

「フツ、決まったゼヨ。これこそ最終奥義、気刃大回転斬りゼヨ。」

か……かっけえー!!これが気刃大回転斬り、太刀の究極の最終奥義……。

「気刃大回転斬りは気刃斬りの締めにしは繰り出せない、まさに気刃斬りの先にある最終奥義ゼヨ。ただ動きを真似て回転斬りをして、それでは威力の乗らないただの紛い物ゼヨ。そして見るがいいゼヨ。」

再び太刀を抜く師匠。しかし今度は何かを斬るように構えるのではなく、ただ単純に刃をオレに見せるためだけに抜いたらしい。刃が一体どうしたってんだ……!!?

「これはツ!?!」

「フツフツフツ、だゼヨ。気付いたかゼヨ?」

「太刀の刃が仄かに白く光っている?」

「その通り、そしてこの輝くオーラこそ気刃大回転斬りの神髄ゼヨ。気刃大回転斬りはただ強いだけの必殺技ではないゼヨ。なんと気刃大回転斬りには気刃斬りを使うに当たって放出した練気を、刃の表面に取り込み直す力があるゼヨ。つまり使った練気のリサイクルゼヨ。とつてもエコで、自然にも優しいゼヨ。」

エコ?自然に優しい?!

……えっ、練気って自然に優しくないの?ただ太刀を振ってるだけじゃなくて?

オレの疑問を余所に話は続いていく。

「練気を刃の表面に取り込み直したことで、今まで刃の内側にあつて直接目で見る事が出来なかった練気が見えるようになるゼヨ。それがこの白いオーラゼヨ。内側に秘められていた練気が表に現れた

ことによつて太刀の威力と斬れ味は更に上昇するゼヨ。つまり気刃大回転斬りを繰り出すということは、太刀をパワーアップさせるというところでもあるゼヨ。」

必殺技で相手に大ダメージを与えつつ、更にパワーアップも出来る。何より見た目も最高にカッコいい。成程、そりゃ確かに最終奥義に相応しいな。

「話はまだ終わりではないゼヨ。このパワーアップ、なんと更に上があるゼヨ。この白いオーラを纏った太刀で更に気刃大回転斬りを繰り出すと、次は黄色いオーラを纏うゼヨ。黄色のオーラは白のオーラよりも更に強力ゼヨ。そして黄色いオーラを纏った太刀で気刃大回転斬りを繰り出すと、今度は赤いオーラを纏うゼヨ。この赤のオーラは練気が最高に高まった証ゼヨ、これこそ太刀の最強形態ゼヨ。赤いオーラを纏った太刀の威力は、普通の太刀なんて相手にならないレベルゼヨ。」

すげえ!!すげえ以外に言葉が出ねえ!!

詰め込み過ぎでよく分かんねえけど、要するに斬れば斬る程強くなるってワケだろ?

こりゃ最高だぜ!今からこれを使えるようになると思うと脳汁が止まらねえ!!

「ただしもちろん欠点もあるゼヨ。練気が時間とともに消耗するっていうのはさつき教えたゼヨ。そして気刃大回転斬りで溜めた太刀の外側の練気も練気には違いないから、時間と共に徐々に消耗していくゼヨ。だけど練気は太刀の中ではなく生成されないゼヨ。太刀の中にある練気は戦えば維持出来るゼヨ、それに対して太刀の外側にある練気は普通に戦っても生成されないから消耗する一方ゼヨ。だから定期的に気刃大回転斬りを繰り出して、練気を補充する必要があるゼヨ。」

成程、強くあり続けるのにも条件があるのか。まあそれも納得だな。

努力無くして結果無し!どの道、更なるパワーアップの為には気刃大回転斬りを繰り出す必要があるんだろ?だったら連発すればいい

だけの話だしな。

「欠点はまだあるゼヨ、むしろこっちの方が重要ゼヨ。」

……えっ?まだあんの?欠点多くない?

「1つは気刃大回転斬りをちゃんと相手に当てなきゃ練気を取りこめないことゼヨ。気刃解放円月斬りと違って、繰り出すだけでは意味がないゼヨ。隙の大きい気刃斬りを最後まで繰り出して、そこから更に気刃大回転斬りを相手に当ててっていうのは意外と大変ゼヨ。気刃斬りを繰り出す隙を伺っている間に、時間を使い過ぎて練気が無くなったら全部パーゼヨ。」

確かに言われてみればその通り、だからこそ如何に当ててくるかについても重要になるんだな。

使いこなすって意味では、最終奥義っていうのも伊達じゃねえな。

「もう1つはもつと重要ゼヨ。気刃大回転斬りは斬り付ける範囲が大きいゼヨ。適当にぶん回すと間違いなく味方を巻き込むゼヨ。アタリハンテイ力のお陰で痛くないとはいえ、斬られていい気分になる狩娘はいないゼヨ。それに痛みは無くても斬られている最中は怯んで動くことが出来ないゼヨ。自分の攻撃のせいで動けなくなった味方がそのまま敵にやられたら責任取れないゼヨ。気刃斬りを繰り出す時は敵だけでなく、味方もよく見るゼヨ。視野を広く持つことが重要ゼヨ。」

うおっ、そりや確かに重要だ。

これ知らなかったら龍田に自慢気に披露して、一緒に斬っちゃう未来が目に見える。

そんなことになったらもはや怒られるどころじゃスマンだろ。

もう正座は嫌なんだ!あれ以上正座したらオレの足が使い物にならなくなつて軽巡棲鬼になつて化けて出るぞ?

うわあああああ足が、足があああああ
!!!!??!!

「何だか少しS.A.N値が下がっているように見えるゼヨ。ほら、正氣に戻るゼヨ。ボーっとしてると練習する時間が無くなるゼヨ。時間は有限ゼヨ、タイムイズマネーゼヨ。」

はっ!?オレは一体何を……?」

「それじゃ本題に戻るゼヨ。今から氣刃斬りの練習……といきたいところだが、今のオヌシの太刀には練氣が溜まっていないゼヨ。このままでは氣刃斬りは使えないゼヨ。」

……そうだな、言われてみれば太刀に力が溜まっていないような気がする。

今までは氣付かなかったというか氣にもしていなかったんだけど……何というか、刃に重みが無いと言うか、温かみが無いというか……ちよつと表現が難しいんだけど、とにかく何かダメなんだよ。

「氣刃解放円月斬りを使えばしばらく練氣を使い放題にする効果があるから、戦わなくても練氣を溜められるし氣刃斬りも使い放題ゼヨ。そしてオヌシは先程の狩技の練習で氣刃解放円月斬りを放っているゼヨ。」

そーいやそーいいう効果があるってさっき言ってたな。

外すとカツコ悪いの連呼で、どんな効果なのか忘れかけてたぜ……。

「だけどオヌシはトイレが長かったから、流石の氣刃解放円月斬りの効果もとつくに切れているゼヨ。」

ん?何か嫌な予感が……。

「……という訳でこれを飲むゼヨ!」

じゃんじゃじゃーん、狩技ドリンクくくく♪

……って冗談はやめろオ!オレはもうそれを飲みたくねえ!!

トイレに行ったとはいえ、まだ腹の調子は悪いし、それに口の中も大変なことになってんだぞ!?

「どうしたゼヨ?早く飲むゼヨ。」

天龍ちゃんと演習1

「お見事ゼヨ、これで太刀の動作は一通り覚えきったゼヨ！」

「モット時間掛カルト思ツテタゼヨ。」

結局あの後更に追加で狩技ドリリンクを飲まされたオレは無事に気刃斬りもマスターした。

もう今日は昼ご飯どころか晩ご飯もいらねえわ。

お腹いっぱい、胃が受け付けないぜ。

「それじゃあ最後は実際の戦いの中でも使いこなせるかどうかのテストゼヨ。これをクリアできれば晴れて合格ゼヨ。」

「練習ア出来テモ、本番ア出来ナキヤ意味ガナイゼヨ。」

確かにその通りだ、実戦で使えてこそナンボ。

初めてドスイ級と遭遇した時に、焦って応急薬を持っていることすら忘れてそのままやられてしまったのは未だに記憶に新しい。

慌てていざって時に技が出せなきや合格とはいえないもんな。

ようするに最後は実践訓練ってわけか。

「とはいえまだ海に出て深海棲艦相手に試すのは早いゼヨ。だから最終試験は試験をするのにピッタリの場所でやるゼヨ。着いてくるゼヨ。」

ピッタリの場所？この中庭じゃダメなのか？

今日は狩りに出ないって龍田が言ってたから、海に出ないのは分かるけどさ。

色々と疑問もあるが、とりあえず師匠に着いて行く。

「着いたぜヨ。」

思ったよりも近かった……というか鎮守府の外に出るところか、鎮守府の敷地の奥にどんどん入って行ったような？

「この鎮守府の提督は元教官ゼヨ。それに秘書官の神通も教官気質の狩娘ゼヨ。だからこの鎮守府には余所の鎮守府には無い特別な施設があるゼヨ。」

オレ達がたどり着いたのは鎮守府には似つかわしくない古めかしい雰囲気の大きな建物だった。

物々しい鋼鉄製の巨大な門、ローマのコロッセオを彷彿とさせる頑丈そうな壁が目を引く。

その施設というのがこれなのか？

「その名も訓練所ゼヨ。提督が教官だった頃の経験を活かして造られた施設で、この鎮守府の狩娘はみんなこの施設で腕を磨いているゼヨ。」

訓練所……なるほど、確かに仕上がりを見るにはピッタリな場所だな。

「オヌシにはここで演習を受けてもらおうゼヨ！」

演習？へえ、狩娘にも艦娘と同じように演習があるのか。

確かに演習なら実戦みたいに轟沈は出ないもん……ってそもそも狩娘に轟沈はないんだっけ？

まあ万が一があるかもしれないし、それに演習なら問答無用の実戦と違ってルールも決められて安心だしな。

演習ってというのは艦娘の場合だと互いに陣形を組んで最大6対6戦うんだが、演習のチームがオレ1人の場合だと演習相手が単艦放置でもなきや6対1で袋叩きにされて終わりだよな？

そういや狩娘は艦娘と違って4人縛りのルールがあったな。

相手が4人ならオレ1人でも勝ち目はあるか？いやいや、4対1でも無理なもんは無理だ。戦いは数だって言うしな。

そもそも4人縛りなら3対1になるのか？いかん、混乱してきた……。

とにかく今回はオレの仕上がりを見るのが目的なんだから、普通に

考えれば演習はオレ1人で受けるもんだよな。

なら相手も単艦ってことになるか？じゃないと仕上がりを見る前にハメ殺しに遭って負けちまうぜ。

それでもって相手が単艦だとして、身近なところにいる暇そうな狩娘っていったら師匠しかいないよな？ということはおレと師匠が1対1の決闘形式で戦うのか？

それなら中庭でやってもいいと思うんだが、中庭で暴れるとやっぱ周りの迷惑になんのかね？芝生が荒れるとか、騒音が出るとかさ……。

「それじゃあワシはオヌシの代わりに演習の手続きをしておくから、オヌシは更衣室で着替えておくぜヨ。」

「えっ？着替える必要があんの？」

何でだよ？オレが変な格好してるのが悪いのか!?

オレだつて好きでダンゴムシ持っていたり、パンツにソックススタイルでいるわけじゃないぞ!?

「指定された装備で戦うためゼヨ。これは装備の質によって有利不利が出ないように、強さの均一化を図っているからゼヨ。強い装備と弱い装備なら強い装備を使った方が成績がよくなるのは当然ゼヨ。だから全員同じ強さにすることで、改めて自分の技量がはっきりするゼヨ。ついでに言う所持込み荷物も支給された物以外は持ち込めないゼヨ。これも理由は同じで、アイテムをいっぱい持っている方が有利になるからそれを防ぐためゼヨ。当然食事の効果も無視されるゼヨ。うっかり有料メニューを食べるとお金を損するゼヨ。」

ああ、そういう理由があるのか……。

それなら納得だ。オレのドレスコードが酷過ぎるからとかじゃなくって良かった。

お前みたいなクソダサコーデの女は出禁だとか言われたら憤死するぞ？

そーいや今朝タダ飯を食べたのもこれが理由か。

それにしても新入りとはいえこここの鎮守府出身のオレよりも他所の鎮守府出身で、交易でたまにしか来ない師匠の方がクロオビ鎮守府の設備に詳しいって少し納得いかねえ……。

訓練所の中に入ると、すぐさま係の連装砲ちゃんが出迎えてくれた。

「訓練所ニヨウコソダヨー。天龍サンデ間違イナイネ？ソレジャアココノ更衣室デ着替エテ、ソシテ支給サレタアイテムヲ持ツテイツテネ。準備ガ終ワツタラソノママ出撃口カラ外ニ出レバ訓練ノ始マリダヨー。」

そう言つて連装砲ちゃんは数ある部屋の中から1つに案内してくれた。

オレの想像していた更衣室と随分違うな。

更衣室っていうもんだから、てつきりロッカー室みたいなところで着替えるもんだと思つてたが、そうじゃなくて個室がたくさんあるパターンなんだな。

案内された部屋に入つて中を確認すると、狭い部屋の中にロッカー代わりの青いアイテムボックスが1つ置いてあり、部屋につながる廊下の奥には出撃口と書かれた扉があつた。

ボックスの中を覗いてみると服と太刀にお守り、そしてアイテムが入っている。今の装備とこれを取り換えろつてことか。

「とうわけです速速着替えてみるが……。」

「何だよ、この変な組み合わせは……。」

天龍ちゃんの現在の装備

武器：凍刃【氷華】

頭：ツ級ヘルム

胴：島風スーツ

腕：島風アーム

腰：島風スカート

脚：島風ソックス

護石：城塞の護石

スキル：体術＋1、スタミナ急速回復、雑念

スタイル：ブレイヴ

狩技：妖刀羅刹

何これ？

太刀の方は氷の装飾が素晴らしく、オレの使っている骨と交換したいくらいなんだが、防具の方は見た目が酷い。

考えて見ろよ？頭だけツ級になった島風コス为天龍だぞ？こんな恥ずかしいにも程がある!!

頭装備も島風だったらいっそのこと開き直れたんだが、これならまだ腕にダンゴムシ着けてる方がマシだ。

それに頭だけ違う防具だからスキルも中途半端なことになってるな。

この体術っていうスキルはスキルポイントが12で2余ってるみたいだけど、こつちのスタミナっていうスキルはスキルポイントが1足りてないから発動してないじゃん。

気力回復のスキルは防具のスキルポイントだけだと1足りないから護石で補ってるんみたいだが、その護石に溜め短縮—10付けるって酷くない？

このスキルが発動すると練気が溜まりにくくなるって書いてあるじゃん！

太刀の練習にこのスキルじゃ練習になんねえよ!?

アイテムの方は意外と充実していて、応急薬や携帯燃料、携帯砥石といった基本の他に、生命の粉塵っていう見馴れないものも入っている。

でもこれってよく見たら集団戦で使うものじゃん、1人で使っても旨味が少ないんじゃないか？

何よりの問題はブレイヴっていう知らないスタイルと、妖刀羅刹っていうこれまた知らない狩技が指定されていることだ！

ブレイヴって何？練気解放円月斬りと鏡花の構えはどこに行った？

これでどうやって戦えばいいんだ？

「まあいい、ここでウダウダ言っても始まらねえ。倒れるときは前のめりだ、行くぜツ！演習がオレを呼んでいるぜヨ……じゃなかった、呼んでいるぜ！」

ドアを開けて外に出る、暗い室内から明るい外へ出たせいか日差しが眩しいぜ。

ここが訓練所のベースキャンプか、無駄に広いな。

周囲にはベースキャンプらしくベッドも支給品ボックスもちやんと用意してある。

そして鎮守府には似つかわしくない古代ヨーロッパ風のアーチ型のゲート。あそこをくぐれば演習の始まりだな？

オレが通ってきたドアはいつの間にか閉まっており、オートロック機能もあるらしくカチャンと鍵が掛かる音がした。鍵が掛かって戻れないのなら前進あるのみだ。

念のため支給品ボックスを覗いてみたが何も入っていなかったし、ここにいてもしょうがないな。

迷うことなくゲートをくぐって先に進む。

ゲートをくぐり抜けた先には一面にプールが広がっていた。プールに障害物らしい障害物は見られず身を隠す場所も無きそうだな。

こりや確かに狩娘向けの演習所だ。小細工抜きのおつかり合いになりそうだな。

突然ガシャンという音と共に、俺が通り抜けてきたゲートに鉄格子が降りてきた。

これじゃもう戻れないな。

この施設は提督がまだ真面目に仕事してた時に作ったっていうが、ひよつとしてあいつオートロックが好きなのか？

下らないことを考えていると、オレの入って来たゲートの反対側にあるゲートの鉄格子が少しずつ上がり始めた。ゲートの奥には誰かがいるようでほのかに人影が見える。

それでオレの相手は誰だ？ やっぱ師匠か？ それとも神通か？ 神通が相手だと下手すると訓練でも殺されそうだな。はたまた他の鎮守府からの刺客でも来てるのか？

勝つなら当然完全勝利Sを目指すぜ、戦術的勝利Bだと勝った気がしないからな。

少なくとも敗北Dだけは絶対に避けたい。敗北Dなんかになったら龍田に何言われるか分かったもんじゃないし、それに今朝に見違えてみせるって大見栄張っちゃったしな……。

ん……？ あの人影デカくない？ 10メートル以上あるように見えるんだけど……。

あんなにデカイ艦娘……じゃなくて狩娘なんていたっけ？

オレの疑問を余所にととうとう鉄格子が上がり切り、中から巨大な影が現れた。

さあて、鬼が出るか蛇が出るか？

BGM：水上の戦慄

「ウフフ……。」

漆黒の巨大な艦装、そこから生える鋭い爪を備えた白い巨腕。

そしてその艦装の上に乗っている……否、生えているのは白髪をポニーテールにした白い肌の女。

そう、その名は装甲空母鬼。

「えっ?…ええっ?…えええくくく???」

どこからどう見てもあれは装甲空母鬼だな、うん。

まだヲ級どころかヌ級にすら会ってないのに装甲空母鬼?

そもそも演習だつて聞いていたのに相手は狩娘じゃなくて深海棲艦?それも鬼級?相手つてコレ?

ウソだろ、マジで鬼が出てきやがった!?今日は狩りに行かないつて言つてたじゃないですか!やだー!

そもそも何で鎮守府に深海棲艦が?ひよつとして侵入者?

ドスイ級にようやく勝てるレベルのオレじゃ勝てる気がしねえんだけど?

えくつと逃げるには……あつ、そういやゲートには鉄格子が降りたから出られないんだっけ?

ということは……。

「可愛ガツテアゲル……。」

オレを見て狂氣的な笑みを浮かべる装甲空母鬼。間違いなくオレを襲うつもりだ。

チクショー、このままやられて堪るか!!やられる前にやつてやる!!

窮鼠猫を噛むんだぞ?!追い込まれた狐はジャツカルより凶暴だ!!

「サア来ナサイ……。」

「ウオオオいくぞオオオ!!!」

／ぬわーーっっ！！／

天龍ちゃんと演習2

「大丈夫ゼヨ?念のため秘薬飲んどくゼヨ?」

破れかぶれで装甲空母鬼に戦いを挑んだオレは、あつという間にポコボコにされレンタクに乗せられた。

当然のようにロッカー室ではなくベースキャンピングに運ばれ、更衣室に戻ることが出来ず仕方なくもう一度出撃。

再び装甲空母鬼に挑んだものの先程の焼き直しのように敗北、またしてもレンタクのお世話に。

三度目の正直と言わんばかりに装甲空母鬼に挑むものの、結局瞬殺。

!? 記念すべき初の3オチは装甲空母鬼でした……って何の記念だよ

ああもう酷い目に遭った!

大体ブレイヴってなんだよ!?

思うように動けねーし、攻撃技は貧弱だし、納刀も何だか変だし……。

納刀するだけで体力とスタミナがどんどん減って何もせずに死にそうになっただぞ!!

「何で鎮守府に深海棲艦がいるんだよ!?!これ演習じゃなかったのかよ?」

「この鎮守府では生態観察と訓練も兼ねて、深海棲艦の飼育をしているゼヨ。」

「深海棲艦の飼育ウ!?!」

なんだそれ!?!そんなことが可能なのか?

「当然、本土の鎮守府でそんな危険なことはやっていないゼヨ。アタリハンテイ力に縛られたカリユード諸島だからこそ出来ることゼヨ。とはいえそれでも危険なことには変わりないから、やっている鎮守府

は非常に少ないゼヨ。」

「鎮守府に深海棲艦が攻めてきたワケじゃないってのは理解した。だけれどなんで演習に深海棲艦が出て来るんだ？オレの知ってる演習と全然違うんだけど……。」

演習って艦娘同士が編隊を組んで模擬戦をする集団訓練だろ？

だったらこっちの演習でも、狩娘同士が戦って腕を磨くんじやないのか？

「決められた装備とアイテムを使って訓練所内の闘技場で深海棲艦と戦ったり、同じく決められた装備とアイテムでフィールドにいる深海棲艦を探し出して戦うのが狩娘流の演習ゼヨ。狩娘同士で戦い合ってもアタリハンテイ力でダメージにならないし、闘気も練気も溜まらないから演習にならないゼヨ。狩娘同士で勝負がしたいのなら演習の攻略タイムを競い合って勝負するゼヨ。装備やアイテムを支給して条件を均一化しているから本人の実力がそのままタイムになるゼヨ。みんなで競い合ってお互いを高め合うゼヨー！」

「まあそれは分かったけど、ドスイ級を倒したばかりのオレの相手に装甲空母鬼って厳しくない？」

「それについてはすまんゼヨ、ワシの手続きミスゼヨ。本来なら演習相手に選べる深海棲艦の強さは受ける狩娘のハンターランクで決まるゼヨ。オヌシはまだまだ低ランクの狩娘ゼヨ、だから受けられる演習のレベルもそれに見合ったものしか選べないゼヨ。それなのに間違えて今のオヌシでは受けられない装甲空母鬼討伐演習を選んでしまったゼヨ。戦うのはオヌシだけど手続きをしたのはワシゼヨ。それで間違えてワシのランクのまままで申請してしまったゼヨ、決してワザではないゼヨ。とはいえこれは装備指定の演習で、みんな同じ条件で戦っているゼヨ。だから決して勝てない相手ではないハズゼヨ？」

決して勝てない相手ではないって……。

閉ざされた空間で初見の相手、それも見るからに強そうな深海棲艦と一騎討ち。

そんなの無理ゲーだって。

こちらは慣れないブレイヴスタイルでろくに身動きも取れないつていうのに、逃げ場も無い闘技場内であんなデカイ深海棲艦に追い回されるとかシャレにならない。

あのデカイ腕に何度も叩き潰されて、心身共に挽肉になるかと思っただぜ。

「もし一人で厳しいと感じたら仲間と協力してチャレンジするゼヨ。そうすれば記録は縮まるし、連携の練習にもなるゼヨ。大勢で参加するデメリットなんて報酬金が減る以外に無いゼヨ。むしろ一人で参加する方がよっぽど損ゼヨ。仲間との絆を大切にするゼヨ。」

「だったら師匠も一緒に受けてくれよお……。」

「それもいいけど、今回の目的はオヌシの仕上がりを見ることゼヨ。だから今回はオヌシ一人で頑張るゼヨ。一人で戦う場合は深海棲艦が相方に気を取られている隙に、アイテムを使ったり大技を繰り出せばいいゼヨ。だけど一人だとそうはいかないゼヨ、相手は常に自分だけを狙ってくるからアイテム一つを使うのにも一苦労ゼヨ。けどどんな相手にも付け入る隙はあるゼヨ、観察を怠らないことが大事ゼヨ。」

簡単に言ってくれるなあ。

勝てるって言われても現状じゃ、またしても装甲空母鬼に一捻りにされて終わりじゃん。

「心配せずとも今度はちゃんと見合ったランクの相手を用意するから安心するゼヨ。二の轍は踏まないゼヨ。」

師匠に言われて仕方なくもう一度演習をすることになったオレはまたしても更衣室で着替えていた。

着替えていたんだが……やっぱりこれ着なきやダメなのか？

天龍ちゃんの現在の装備

武器：鉄刀

頭：朝潮ハット

胴：朝潮スーツ

腕：朝潮スリーブ

腰：朝潮スカート

脚：朝潮ソックス

護石：無し

スキル：砥石使用高速化、節食、探知

スタイル：ギルド

狩技：気刃解放円月斬り、鏡花の構え

ツ級頭の島風に比べれば全ての防具が同じシリーズなだけあって、見た目の統一感はずバリだ。

見た目の統一感はない……、問題はオレがこの服を着るってことだ。

朝潮型の格好をしたオレかあ……。

『朝潮型駆逐艦の天龍です司令官！アゲアゲで行きましょう、このクズ！』

……我ながらこりやねえわ。

鉄刀はいかにも刀といった外見で、非常に格好いいが肝心のオレがこの格好じゃなあ……。

それに朝潮ハットっていつてるけど、これって大潮や霞が被ってるヤツじゃね？

確かに朝潮型ではあるけどさ……。

そーいや雷や電は暁や響とお揃いの帽子を持っているって言うってたな。

ということとはひよっとすると朝潮や満潮もお揃いの帽子を使ってるのかも……。

ちよつとだけ見てみたいと思ったのは内緒な。

スキルの砥石使用高速化っていうのは便利そうだが、この探知っていうのは役に立つのか？

たまに敵の位置が分かったり、ペイントした時に詳細情報まで分かるスキルなんだろう？

だけど闘技場って閉ざされた空間じゃん。無いよりマシだが……。

この節食っていうのも飲食物を節約出来るから有用っちゃ有用だが、食べ残しをずっと持つておくのって汚くない？

持ち物は応急薬と携帯燃料に携帯砥石の3点セット、粉塵とかいうのは入ってなかった。

まあ今回の相手はオレのランクに見合った相手だっけって言ったし、相手が弱いのなら用意されたアイテムもこんなもんか。

そして最後に支給用の狩技ドリリンクが一つ。もう見たくもないんだが捨てちやダメか？

BGM：死闘の円形闘技場

「ロロロオオ……。」

プールの闘技場に足を踏み入れたオレを出迎えたのはドスイ級によく似た中型の深海棲艦。

丸みを帯びたイ級とは違い、全体的に角張ったシルエツト。

笑っているかのようにつり上がった口元。そして『ロロロ』という独特の鳴き声。

初見だが間違いなくこいつはドスロ級だ。

頭に生えたサメの背ビレのような形のトサカがその証拠。

頭に角を生やした大型のイ級がドスイ級なら、頭にトサカの生えたデカイロ級がドスロ級じゃなくてなんだってんだ？

この調子ならドスハ級やドスニ級もいそうだな。

「ローローッ!!」

「うおっと!」

オレが仕掛ける前にドス口級が襲い掛かって来た。咄嗟に横に跳んで躲す。

お互いに身を隠せる場所がないので、ドスイ級の時のような不意打ちは難しい。

師匠の言っていたようにまずは様子を見ることにする。どんな相手にも付け入る隙はあるんだろ？

「ロツ!!」

短いながらも太い尻尾を振り回すドス口級。

だがこの程度なら、大きく回避をせずとも少し距離を取れば簡単に避けられる。

続いて頭突きを仕掛けてくるドス口級。

鋭い角が生えていたドスイ級に比べると、頭にヒレを生やしたドス口級の頭突きは大したことはなさそうだが、それでも痛いのは嫌なのでしつかり躲す。

しばらく回避に専念し、同時に観察を続けた結果オレはあることに気が付いた。

「コイツの動き……ドスイ級と同じだ。」

頭突き、噛み付き、突進、尻尾攻撃、更には泳ぎ方そのものまで……どの動きもドスイ級と酷似している。

ドスイ級はオトモ込みだったとはいえ、既に倒した相手。

その攻撃パターンは既に覚えた（物理的な意味で）。

同じ動きしかしてこないのなら対処法も同じだ。

あの時とは違ってオトモがいらないから立ち回りには注意する必要があるが、それでも負ける気はしないぜ!

「さあ反撃開始だー!」

今日限りで朝潮型駆逐艦となった天龍様の实力を見せてやる!

それもただ倒すだけじゃダメだ。

！
見せるのは太刀独自の動きと練気、そして狩技を活かした戦い方だ
ドスイ級との戦いでは偶然繰り出せた連続斬り。

あのようなコンボ攻撃は技のつなげ方というのが決まっているらしく、順番を間違えるとそこで攻撃の手が止まってしまおう。

そんな連続攻撃、今度の戦いでは狙って繰り出す。

ドスイ級と行動パターンの似ているドスロ級なら攻撃を当てるのはそう難しくはない。

「暴れまくるわよお。それ！どーん！ウザイのよッ！沈みなさい
……………んちゃ。」

「ロロオツ!?!」

思った通り楽勝……とまでは言わないが、オレの連続攻撃はドスロ級に次々と命中する。

えっ、言葉遣いが変わ?

うるせー、敢えて開き直って朝潮型になりきって戦ってみたんだよ。

こうすりゃあ逆に恥ずかしさも薄れるんじゃないかと思ってな。

……………うん、余計に恥ずかしくなってきた、やっぱりこのキャラやめるわ。

「地道にこれを繰り返してりゃ勝てそうだが、時間が掛かるし課題のクリアにはならねえからな。何より無難過ぎてつまらん。練気も闘気も溜まってきたことだし、そろそろ気刃斬りを試させてもらおうぜ
！」

ドスロ級の動きが止まった瞬間を見極め、気刃を開放する！

「うおおっ、気刃斬りイ！」

勢いよく振り回す太刀の切っ先は吸い込まれるようにドスロ級へと命中する。

「ロロロ……………」

「……………っておい、逃げんじゃねえ!!」

気刃斬りの2発目を叩き込んだ時点でドス口級は身の危険を感じたのか、オレの脇をすり抜けるように移動をし、続く3連撃を避けてしまった。

しかし勢いづいたオレの動きは止まることなく……。

「うわあああ、実戦で初めて放った奥義がこれかよオオ?!」

そのままの勢いで気刃大回転斬りを繰り出してしまおうオレ、当然ドス口級には当たらない。

気刃大回転斬りというのはその場で一回転しつつ、太刀を鞘に仕舞うまでが一連の動作。

大技を繰り出して隙だらけのオレ、オレの背後まで回り込んだドス口級。

ここから導き出される答えは一つしかなく……。

「ロオー……ッッ!!」

「へぶっ!」

オレは背後から放たれたドス口級のタツクルでぶっ飛ばされ、そのまま顔面からプールの水面に叩き付けられる。

「ぺっぺっ、口に水が入ったじゃねえかチクショウ!」

強がってはみたものの結構なダメージを受けてしまい、それ程余裕は無い。

練気も無駄に消費しちまったし、どうしたもんだろ……。

取り敢えず体力を回復したいが、ここは訓練場内の闘技場。

隠れるとも無ければ逃げるところもない。

敵の気を引いてくれるオトモもおらず1対1のこの状況。

こんな時に呑気に応急薬を飲んでたら、ガッツポーズ中にタツクルを喰らってヘソを増やされる。

「そんなデジャブはゴメンだぜ。守れないのであれば攻めるのみ! 攻撃は最大の防御ってな!!」

練気が無くなったのであれば、補充するまでのこと!

あいにく鏡花の構えを使用するには闘気がまだ足りていないみた

いだが、気刃解放円月斬りなら問題無く使える。

気刃解放円月斬りを使えば練気はすぐさま溜まる上に、しばらくは減ることもないから気刃斬りは使い放題。

形勢逆転にはもってこいの技だ！

「よし、この技は直接当てる必要は無いつて言ってたな。」

師匠の言葉を思い出し、ドスロ級からの妨害を避けるために少し離れた場所で狩技を使用する。

この距離ならバリア……じゃなくて、噛み付き攻撃は届かないな！

「いくぜ気刃解放円月斬りっ！」

太刀を構えて力を溜め始める……が。

「ロロウツ!!」

「おわっ!?!」

突然オレ目掛けて飛びかかって来るドスロ級、見た目によらずかなりのジャンプ力だ。

狩技を繰り出す直前のことだったので避けられるはずもなく、あつという間に距離を詰められオレはそのままドスイ級に押し倒される。

あの距離からでも届くなんて信じられねえ、オレの見通しが甘かったっていうのか!?

ドスロ級は倒れたオレを逃すまいと、そのままのし掛かり押さえつけてきた。

「ロロオ……。」

倒れたオレを見下ろし、舌なめずりをしながら口を歪めて笑うドスロ級。

拘束されて抵抗出来ないプライドの高い勝気な女。

そんな女に馬乗りになって見下ろし、いやらしく笑う不気味な魔獣。

あれ?こういうシチュエーションってまさか……??

「おっ、オレに乱暴するつもりだろ!?!まだ昼間だつてのに!!クツソー、深海棲艦なんかに辱められてたまるか!クツ、殺せ!!」

ガブリッ!!

「イツテエ〜!!?」

ドス口級に口では言えないあんなことやそんなことをされると思いきや、実際にされたのはこんなこと。

ガブガブガブガブ!

「痛い痛い痛い!?!ちよっ、おまつ!やめろっ!?!」

ドス口級に性的にはなく物理的に食べられるう〜〜!!?

アタリハンテイカのお陰かオレの肉がちぎり取られるようなことはないみたいだが、それでも間違いない。この感覚は食べられている、コイツはオレの肉を食っているんだ!?

身体からは肉を1グラムもちぎられていないというのに、どんどん肉をかじり取られていく。

全くもって意味不明だが今はそんなことを気にしている場合じゃない。

「深海棲艦の〜飯になんかされて堪るかあ〜〜!!」

かくして深海棲艦のお昼〜飯にされ掛けている我らが天龍。

しかしこの程度はまだ序の口だということを、今の天龍は夢にも思ってもいないのであった。

天龍ちゃんと演習3

ドスロ級に食べられている真つ最中のオレは、何とかしてヤツの拘束から逃れようと必死にもがいていた。

「はくなくせえく!!」

両手でドスロ級の顎を掴んで抵抗する。

しかし相手はオレより大きな深海棲艦、そう簡単には放してくれない。

掴んだ顎を右へ捻り、左へ捻り、最後には右足で蹴り飛ばす。

「ロッ!?」

拘束が緩んだ? よしつ、チャンスだ!! 更にもう一発、今度は両足での蹴りをお見舞いする。

蹴られたドスロ級は怯んで後退り、ようやくヤツの拘束から逃れることが出来た。

うへえ、顔がドスロ級のよだれでベチョベチョだ。散々噛まれた挙句、唾液で汚れて気分が悪い。

おのれく。この恨み、晴らさしておくべきか。

「やられたらやりかえす! 噛まれたのなら噛み返す!! 今度はオレの牙を受けてみるッ!!」

すぐさま気刃斬りの構えに入る。

ドスロ級が体勢を立て直すにはもう少し時間が掛かるから、気刃大回転斬りを繰り返す時間はあるはずだ。

「いくぜえ気刃斬り……………あれっ??」

気刃斬りを繰り返そうとするものの、何故か放つことが出来ない。

おかしいな? 気刃解放円月斬りを使ったのなら、練気は使い放題になっっているはずじゃあ?

あつ、そうか! 気刃解放円月斬りを繰り返す前にドスロ級に飛び掛かれたから技が不発になっているんだ!!

「だったらもう一度気刃解放円月斬りを……………つて、ええっ!!」
闘気が無くなっている!?!?何でだよ!?!
ひよっとして技を発動したか、してないかじゃなくて、発動しよう
としただけで闘気って消耗するのか!?!

オレが狩技の不発に戸惑っている間に、いつの間にか体勢を立て直
したドスロ級は口を一文字に閉じると両頬を膨らませ始めた。

ハムスターやカエルのようにプクーツと膨らんでいくドスロ級の
頬。

「ロツー」

そして膨らんだ頬を萎ませると同時に、口から何やら黄色くて粘性
のある液体を勢いよく吐き出した。

こ、これは深海棲艦のゲロか!?!汚ねえっ!!

黄色い液体の飛んでくるスピードは大したことなく、避けるのはそ
う難しくはない……避けられる状態にあるならば。

未だに狩技の不発に気を取られていて動けないオレに対して、黄色
い粘液は容赦無く降り掛かり……。

「し、し・び・れ・るううう!?!あがががが……。」

どうやらあの黄色い液体はゲロではなく、麻痺成分を含んだ液体
だったらしい。

それをまともに浴びてしまったオレは全身が痺れてその場に倒れ
込む。

もはや狩技どころの話ではない。

麻痺液は非常に強力なようで、起き上がるどころか指一本すら動か
せない。

そんなオレに悠々と近づくドスロ級。

動けないオレの前まで来たドスロ級は、見馴れた体当たりの予備動
作を取り始めた。

ワザとらしいまでにゆっくりと身体に力を溜めるドスロ級。

「ロツー!!」

「うっげえ!」

そして繰り出されるドスロ級の渾身のタツクル。
当然防げるハズもなく、オレは勢いよく吹き飛ばされた。

バコンツ!!

落ちた先は水面ではなく何故か木の板の上。

左の頬と両膝でだらしなく身体を支え、ケツの上に突き出した土下座よりも情けない格好で木の板の上に着地、もとい落下したオレはそのままベースキャンプへゴトゴトと運ばれて行った。

オレが落ちたのはレンタクの上だったのか……。

ということは連装砲ちゃん達も今のタイミングでオレがやられるのを分かかっていて出待ちしていやがったんだな、畜生め……。

ゴトゴトゴトゴト……ポイツ、ドサツ……ゴトゴトゴトゴト……。

「いつてえ……、何で毎回投げ落としていくんだよ? 負けた人への罰ゲーム? 既にやられて痛い目に遭ってるっていうのに、更に1回痛い目に遭わせるとか鬼じゃねえか。」

ドスロ級のタツクルで見事に1オチしたオレは、レンタクであつたという間にベースキャンプに戻された。

麻痺液を吐いてくるとか聞いてねえよ、ドスイ級はそんなことしなかつたじゃん。

ドスロ級つてドスイ級のコンパチじゃなかつたのかよ……。
すぐに再出撃する気にはなれず、ベッドに腰掛けて携帯燃料をかじりながら考える。

あつ、節食スキルの効果で食べかけの携帯燃料が残った!

わーい、これでもう一回食べられる……つてそんなことど

うでもいいわ!!

ドス口級と戦うだけならただ単に太刀でチクチクと突いて倒せばいい。

しかしこれは太刀の使い方についての試験だ、そうやって倒すのは違うだろう。

気刃斬りと狩技は絶対に必要だ。

しかし気刃解放円月斬りも気刃斬りも今は使えないし、鏡花の構えも使うにも闘気が後少し足りていない。

だからと言って再び力を蓄えるために、のんびりと戦い続けるというのも見つともない。

この戦いはタイムが残るんだ、せつかくならビシツと決めたい。

さあて、どうしたものか……。

「……ロ?」

「待たせて悪かったな、お詫びに凄エものを見せてやる!」

戻って来ました闘技場、さあて作戦通り上手くいくかな?

「いくぜ気刃斬り!!」

闘技場内に戻ると同時にいきなり気刃斬りの構えに入る。

「ロロ?」

首を傾げてこちらを見るドス口級。

不思議に思っているようだな? 闘技場内に入って来たばかりでまだ練気が溜まっていないというのに、いきなり気刃斬りを繰り出すとしたことが。

「だけどなあ、出せるんだよ!!」

その場で太刀に練気を込め、迷うことなく気刃斬りを繰り出す。

確かに繰り出される気刃斬り、しかしドス口級とは若干の距離があり太刀の切っ先はまったく届いていない。

「ロロロ??」

またしても不思議に思っているようだな？届かない距離から気刃斬りを繰り出したことを。

だけどそれを疑問に思う、お前の賢いオツムが隙を生むんだ！

「2撃目、3撃目！」

空振りを続けるオレを不思議そうに眺めるドスロ級。

これが無意味な行動だと思ってもらっちゃ困るな。

「油断したな？喰らいやがれ、気刃大回転斬りイ!!」

ズバアアアアン!!!
!!!

「ロオオオオオ!!」

「おっしやあ、見事命中！上手くいったぜ!!」

太刀の外側に練気を纏わせるためには敵に気刃大回転斬りを当てる必要がある。

逆に言えば練気を纏いたいだけなら、普通の気刃斬りは当てなくてもいいってワケだ。

気刃大回転斬りは太刀を大きく振るから間合いが広い上に、繰り出す時に大きく踏み込む特性がある。

敵の間合いの外でワザと気刃斬りを空振りして、本命の気刃大回転斬りだけを命中させるっていうのがオレが考えた作戦だ。

出来ることなら前座の気刃斬りも当てた方がいいっていうのはオレだって分かっている。

だけど隙の少ない敵に接近して、時間の掛かる気刃斬りを繰り出すっていうのはリスクがデカい。

それにヒットストップって呼べばいいのか？相手に斬り付けると空振りした場合に比べて斬り抜けるまでに時間が掛かるからな。

だから空振りの連発の方が、斬撃を当て続けるよりも素早く気刃大回転斬りを放てるってワケだ。

「ロツ！ロツ！キューーウ！！」

「おつ、斬られて怒ったか？だけどこっちはお陰様で初期段階の白とはいえ練気を纏ってパワーアップ出来たぜ！」

怒りに任せて突撃してくるドロ級、だけど来るのが分かっていれば怖くはない。

この距離なら躲そうと思えば躲せる、だけど敢えて躲さない。限界までドロ級を引き付ける。

そして目と鼻の先の距離まで来たドロ級がタツクルの構えを取る。

来たツ、ここだ！やるとしたらここしかないツ！！

「ロオーーッ！！」

「勝負ツ！鏡花の構え！！」

ザンツ！！！！

突っ込んでくるドロ級の攻撃をいなし、そのまますれ違うように斬撃を叩き込む。

練習では散々失敗した鏡花の構えだが、本番では1発で成功したな。

本番に強い実践型の天龍と呼んでくれ！

さて、この強烈な斬撃を受けて未だに立っていられるかな？

「ロオオオー！」

背後から聞こえた唸り声に驚いて振り返る。

そこには牙を剥いて唸る、依然として健在なドロ級の姿があった。

「げっ、あれ喰らってまだ戦えるのか!？」

慌てて太刀を構えて相手の様子を窺う……が。

「ロ、ロオ……。」

ドス口級は力無くプールの水面に倒れこんだ。

「お、おっしやあゝゝゝっ!! 気刃斬りと狩技を使って勝てたぞおゝゝ
ゝ!!」

これでノルマ達成だ! ハアゝ、疲れた。思った以上に苦戦したな。
とはいえ相手の体力が低いようにも感じたな、体感的にはあの時の
ドスイ級よりも低いんじゃないか?

さあてお楽しみの剥ぎ取りタイムだ! ドス口級からは一体何が剥
ぎ取れるのかなつと?

『応急薬を入手しました』

あれ? 何やらおかしな物が剥ぎ取れたような……。

気のせいかな? 試しにもう一回剥いでみる。

『応急薬を入手しました』

あつれー、おかしいな?

常識的に考えて深海棲艦から応急薬なんて剥ぎ取れるワケないよ
なあ。

ああ、ひよつとして目が悪くなったのかな?

ずっと師匠と太刀の練習してた上に休み無しでのドス口級との死
闘だもん。

そりゃ疲れて目も霞むさ。素材と応急薬を見間違えるなんて我なが
らどうかしてるぜ。

目と鼻の間を指で摘まんでほぐしてみる、こうすりゃ疲れ目も少し
は良くなるだろ?

これで視力よーし、もう見間違えることは無いな。

それじゃあ最後の1回を剥ぐとするか。

『応急薬を入手しました』

何でだよ!? 3回剥ぎ取って3回とも全部応急薬とかいい加減にしてくれ!

ここは皮とか骨とかが剥ぎ取れる場面じゃないのか?

もう戦いは済んだんだよ、今更応急薬なんていらねえよ! せめて持って帰れる回復薬にしろよ!?

「終ワツタノナラ帰ルヨ。」

「えっ、レンタク? もう来たのか、早くない? まだ1分経ってない……うわやめろ、無理矢理乗せようとするな!?! うわああああ……。」

「……………ロツ。」

「おお、戻って来たゼヨ。無事に勝って何よりゼヨ。」

「見事ナ鏡花ノ構エダツタゼヨ。」

元の装備に着替えて訓練所から出てきたオレを出迎えたのは師匠とレン丸。

「えっ、見てたのか?」

「師匠として弟子の訓練を見届けるのは当然ゼヨ。訓練所内の闘技場

には観客席があるから、そこから見てたぜヨ。」

ええ、じゃあオレが食べられたところやレンタクに乗せられたところ含め全部見られていたのか……。

「それにしても、オチした後、気刃斬りを使ったのはどうやったぜヨ？」

「練気が無イカラ使エナイハズゼヨ。」

「ああそのことか、それなら……。」

「練気も無い、鬨気も無い、このままじゃあ打つ手が無い。無い無い、くしは厳しいな。とりあえずベースキャンプで落ち着いていられる間に砥石でも使つとこう。ポーチにドスロ級相手に使えそうなアイテムが入つてねえかな？魚雷でもあると心強いんだが……。」

ドスロ級にベースキャンプに送り返されたオレは逆転の一手を求めてポーチを漁っていた。

物は試しと支給品ボックスの中を覗いてみたが、案の定何も入っていないかった。

「……ん、そういやこれが入っていたんだっけ？」

オレは見つけたのは、正に現状を打破するのに相応しい秘密兵器。

だけど個人的にこれだけは使いたくなかった。けどもはや贅沢を言っている場合じゃない。

こうなったら覚悟を決めるか……。

「ええい、ままよっ!!」

意を決し、それを使う。

そう、その秘密兵器の正体とは……。

『狩技ドリンク』

ううつ、この口の中に広がる甘ったるいイチゴシロップのような味。

今日1日で何本飲んだか分からないし、この甘さのせいで飲み込むのが辛い。

ただどこかで吐き出したら最低の絵面だし、逆転も出来なくなるから頑張つて飲み込む。

これだからコイツには頼りたくなかったんだよ……。

せめて鼻を摘まんでから飲みたかったけど、強制的なガッツポーズのせいでその作戦すら使えない。

こういう時こそ節食が発動して欲しいのに、発動しなかったので仕方がなく全部飲み干す。

「うぐぐ……飲み切ったぞ……さて、次は。」

口の中は未だに甘いままだが、それに構うことなく太刀を構える。狩技ドリリンクのお陰で既に闘気は溜まった、ならば次にオレがやるべきことは……。

「気刃解放円月斬りッ！」

オレ以外誰もいないベースキャンピングで虚しく響き渡る、オレの掛け声と空気を斬り裂く太刀の音。

「うーん、気合を入れたけどやっぱカッコつかねえ。だけどこれですばらくは気刃斬り使い放題だ！」

練気を溜めるだけなら相手に当てる必要の無い気刃解放円月斬り、なら安全なベースキャンピングで繰り返し出せば絶対に妨害されることない。

それに狩技ドリリンクのお陰で使えるようになったのは気刃解放円月斬りだけじゃあない。

「よし、後は上手く気刃大回転斬りと鏡花の構えを上手く使いこなせれば……。」

「なるほどゼヨ、邪魔の入らないベースキャンブであらかじめ闘気と練気を溜めておいたってワケゼヨ。」

「スゴイゼヨ！頭良イゼヨ!!作戦勝ちゼヨ!!!」

「ま、まあな。ところで倒したドスロ級から剥ぎ取ったら応急薬しか剥ぎ取れなかったんだけど、それは何でなんだ？」

剥ぎ取った応急薬は控室に戻される際に没収された。

代わりにドスロ級の顔が描かれたコインを数枚貰ったけど、これ何に使うんだろうな？

「その理由は簡単ゼヨ、演習用の深海棲艦は本当に死なせてしまうと再補充が大変ゼヨ。ここで飼育されている深海棲艦は身の危険を感じると、本当に死んでしまう前に倒れてしまうように調教されているゼヨ。だからあれは死んでいないゼヨ、思ったよりもあっさり倒せたのはそれが理由ゼヨ。死んでいないんだから素材が剥げないのは当然ゼヨ。」

なんだ、だから早めに倒せたのか。

それならこっちの動きを疑問に思う賢さも、調教されたことで頭が良くなっていた結果なのかねえ？

「そして演習内容によつては複数の深海棲艦と戦うこともあるゼヨ。だから妖精さんに頼んで素材の代わりに支給品を渡すようにしてもらっているゼヨ。つまりあれは剥いでいるように見えて実は何も剥げてないゼヨ。妖精さんの目にも止まらぬ早業ですり替えられているんだゼヨ。それにこれはお膳立てされた演習だから、本当に素材が欲しかったら自分で狩りに行けつてことでもあるゼヨ。」

冗談だろ？何でも妖精さんの謎技術で完結するのやめろよ。

そういや前回は妖精さんに一瞬で着替えさせられたっけ？

狩娘ですら見切れないスピードで渡すとか、どっちが戦ってるんだか分かったもんじゃないな。

あれ？そういや提督や憲兵は狩娘と互角かそれ以上に強いらしいし、妖精さんも凄いスピードで動ける。

そしてオレは複数いたとはいえ連装砲ちゃんにすら負けかけた。
ひよつとしてカリユード諸島の鎮守府にいる連中の中で狩娘が一
番弱い？

そんなバカな……。

「さて、ちゃんと狩技と気刃斬りを使ってドスロ級討伐演習を終わら
せたオヌシの試験は文句無しに合格ゼヨ。もう日も暮れてきたとは
いえ、1日で全て終わらせるとは立派ゼヨ。とはいえこれに慢心する
ことなく精進を続けることゼヨ！」

「はい師匠！」

変な師匠とはいえ褒められて悪い気はしない。

「しかし勿体ないゼヨ、少し時間があつたらワシのネバネバ剣法も伝
授してやれたゼヨ。どうぞゼヨ、来週もワシは来るからその時にネバネ
バ剣法の勉強もしていくゼヨ？」

「えっ!? いや、それは遠慮しとく……。」

「そうかゼヨ、残念ゼヨ。」

1日つきつきりで太刀の使い方を見せてくれたのは感謝している
が、流石にそんな変な剣法を習わされるのは勘弁してくれ。

「それではこれにて特別授業は終了ゼヨ、解散ッ！」

「ありがとうございましたっ！」

「シーユーアゲインゼヨ！ 次来ル時ハ商品買ウゼヨ、安クシトクゼ
ヨ〜！」

さあて帰るか。今日1日で全部マスターしたつてことを龍田にも
教えてやらねえとな。

「……帰ったゼヨ？」

「……帰ッタゼヨ。」

「天龍殿には1つだけ申し訳ないことをしたゼヨ。」

「ソレハシヨウガナイゼヨ。勝ッタコトデ自信ト達成感ヲ得タノニ、ソレニ水ヲ差スヨウナコトハ出来ナイゼヨ。」

「そうかゼヨ、ならばきつとこれで良かったんだゼヨ。」

スマンゼヨ。勝てたことを嬉しそうに報告するオヌシには言えなかったけど、実はあのドスロ級は普通のドスロ級ではないゼヨ。

ドスロ級を超越したドスロ級さんゼヨ。

オヌシは全力で戦った上での勝利だと思ってるんだろうけど、本当は物凄く手加減してもらっているゼヨ。

ドスロ級さんが倒れたのは危機に陥ったからじゃなくて、今日はこのくらいで勘弁しといてやろうの精神ゼヨ。

あんなに頑張つて戦ったにも関わらず、部位破壊出来なかったのが何よりの証拠ゼヨ。

なんたってあのドスロ級さんを捕らえて演習用に調教と訓練を施したのは他ならぬ神通殿ゼヨ。

鍛え上げられたドスロ級さんはオヌシが最初に戦った装甲空母姫よりよっぽど強いし賢いゼヨ。

ドスロ級さんは賢いから手加減だつて手慣れているゼヨ。

もしあのドスロ級さんが本気を出したら今のオヌシじゃ秒殺ゼヨ。

ここの鎮守府で本気のドスロ級さんを倒せるのは神通殿だけゼヨ。それをオヌシに言えなかった心の弱いワシを許してほしいゼヨ

……。

「ふーん、じゃあ無事に勝てたのね？（可哀想だしドスロ級さんに手加減されたことは秘密にしといてあげよ。）」

「そういうこつた。これからは生まれ変わったスーパー天龍Mk-2

と呼んでもいいんだぜ？」

「んー、それはちよつとダサイから呼ばないかな？」

「あ、そう。（ガツカリ）」

オレは現在自室でくつろぎながら、さつき帰って来た龍田に今日の修行の成果を話していた。

龍田の狩猟の方も無事に終わったみたいだし万々歳だな。

「そうそうそれでね、今日は頑張った天龍ちゃんにお土産を用意してきたのよ。」

そう言つて龍田が取り出したのは、片手に収まる小さなサイズのプレゼント箱。

「天龍ちゃんが演習を頑張っているんだろぅな〜と思つて、私もクエストついでに採集してきたのよお。はいっ、あげる♪」

「おつ、ありがとな。中身は何なんだ？」

持った感じだとそんなに重たくはないが、少しヒンヤリとしているな。

「うふふつ、美味しいモノよお。お店じゃ売ってない珍しい物だから、よおく味わつてねえ。」

「食いもんか、じゃあ冷たいうちにさっさと頂くことにするぜー！」

「はい、召し上がれ♪」

中身は何だろう？冷たいしアイスかケーキか？でも店では売っていない物だつて言つてたよな？

何だろなく、楽しみだなく。それっ、オープン！

『氷結晶イチゴ』

「……………、これは？」

「それはねえ氷結晶イチゴといって、限られた土地でしか採集出来ない熱帯イチゴっていう果実を氷結晶で凍らせたものよお。採集してすぐに凍らせてあるからとっても新鮮なの、天龍ちゃんのためにわざ

わざ作ったんだからねえ。」

うぐぐ……イチゴ……狩技ドリンク……龍田がオレのために作ってくれたイチゴ……イチゴ……食べるんだ……食べなきゃ……狩技ドリンク……演習……。

パクツ……。

「どお、美味しい?」

「……………」

「天龍ちゃん?どうしたの?天龍ちゃんってば……!?!」

「……………」

「そのままの姿勢で白目を剥いて気絶してるう!?!」

ここから先は電が話すのです。

どうやら天龍さんはイチゴを啜えたまま気絶をしてしまったらしく、3日も寝込んだのです。

目が覚めた天龍さんに対して平謝りする龍田さんという珍しい光景が見られたのですが、肝心の天龍さんは演習を終えて鎮守府に帰った後の記憶が無いらしく、自分が倒れたという自覚も無いので当然龍田さんの謝罪にも心当たりが無く首を傾げていたのです。

ただこの日以降天龍さんはイチゴを見ると気絶するようになったので、鎮守府では天龍さんの前でイチゴを食べるのは厳禁という新しいルールが生まれたのです。

天龍さんには電と雷ちゃんがプレゼントした気絶半減スキルがあるにも関わらず、気絶させちゃうことが出来るイチゴは凄い果物なの

です！

長門さんと下着泥棒1

やあ良い子のみんな！私だ、世界のビッグ7である長門だ！

今日はダウンした天龍の代わりに私が主役を務めるぞ。私の活躍を楽しみにしておいてくれ！

何でも天龍はイチゴを見て倒れたそうだな。

イチゴを見ただけで倒れるとは、不思議なこともあるものだ。

私ならイチゴ100個食べてもまだまだ平気だぞ！

そうそう、イチゴといえば最近雷がよく穿いているお気に入りのパンツの柄もイチゴ柄なんだ。

えっ、いきなり何を言い出すのかだと？まあまあ、そんなこと言わずに聞くん。

それでな、雷がお風呂に入っている間にカゴに入っているイチゴパンツをこっそり拝借したことがあるんだが、これが色よし、形よし、手触りよし、何より匂いが最高だ！下着だというのに、これがちつとも臭くない。

じゃあどんな匂いなのかというと、なんとイチゴのような甘く優しい香りがするんだ。流星はイチゴ柄のパンツなだけはあるな。

雷は香水とかは使っていないハズなのに、こんな香りがするなんて実に不思議なものだ。

それに対して電の最近のお気に入りパンツは黒い紐のような、かなり大人っぽいヤツだ。

電の姉である暁は一人前のレディーを自称しているようだが、この下着を見るとどっちが姉だか分からんな。

匂いは芳しいフローラルだ。これまた大人っぽい香りで実に素晴らしい………おつといかんいかん、鼻から駆逐艦への愛が溢れ

るところだった。

えっ、どうして違う鎮守府の暁のパンツの柄まで知ってるのかだつて？

そりやたまたま一緒に狩りに行った際に、剥ぎ取りに夢中になっている暁の後ろに回ってだな……。

すぐさま響にハンマーでカチ上げられたが、一瞬とはいえ目に焼き付けておいたのだ。

何、私のことを変態だと言うのか？

失敬な、ただ私は守るべき子供達の事をより詳しく知ろうと思っただけだ。他意は無い！

……そういえば今の時間帯はちょうど雷と電がお風呂に入る頃だな。

そうと決まれば、いざ出発！待ってるよ、私の桃源郷！

狩娘は艦娘と違って入渠する必要は無い。

……とはいえ潮風や海水を浴びながら深海棲艦と戦う狩娘にとつて、風呂は重要な施設だ。

温泉で有名なユクモ鎮守府にはそれはもう立派な露天風呂があるし、ここクロオビ鎮守府にだってスポーツクラブにあるような大きめの風呂がある。

入浴が嫌いな狩娘なんていないだろう。

ちなみにここの風呂は混浴だ、というかカリユード諸島における鎮守府の風呂全てが混浴になっているといった方が正しいか。

もつとも私達の提督は自分用に最高級ユクモヒノキ風呂を作り、そしてそこを使っているからここに訪れたことは全く無いがな。

さあて脱衣所に着いたワケだが、まずは風呂場の様子を覗うか。ちやんと雷と電が入っているか、確認をしておかないとな。

風呂場の扉はアクリル型板が使われているので丸見えというワケではないが、ぼんやりと中が透けて見えるのだ。

それに防音でないから中の音も聞こえる、つまりシルエツトと声で中に誰がいるかが分かるというワケだ。

『雷ちゃん、その石鹼取ってほしいのです。』

『これのこと？いいわよ、はい！』

ビンゴ！この声は雷と電のものだ。

扉越しに見えるシルエツトも二人分、他の狩娘が入っている様子は無い。

ここの鎮守府の風呂場には、何故か個人用ロッカーやアイテムボックスが無い。

だから荷物や脱いだ服、そして着替えは全部カゴに入れるようになってる。

不用心な様にも思えるが、気心の知れた仲間同士だし、メンバーもそう多くないのでな。

それでは脱衣カゴの方を拝見させてもらおうとしよう。

脱衣カゴの中で綺麗に畳まれた制服一式、それらの一番上にそれは置かれていた。

……………おおっ!?これは正に先程熱く語ったイチゴパンツに黒の紐パン!!

なんとという僥倖!!一度にこの二着を目にすることが出来るとは……………。

じゅるり…………いや食べるのはダメだ。もし食べてしまったらこの後雷と電がノーパンで過ごすことになる。

それはそれで素晴らしい光景だろう、しかし私はパンツを無くして

悲しみに暮れる子供たちの姿は見たくない。

それに私がここで下着を物色しているというのは誰にも知られてはいない、私だけの秘密だ。

だから今までパンツを盗んだり汚したことは一度も無い。

匂いや手触りに温もりを楽しんだ後、元通りに直して一切痕跡は残さないのが私のポリシー。

お陰で今まで一度もバレた事はないんだ。

さあてパンツを愛でるのもこのくらいにして、偶然タイミングが合った風を装って混浴としゃれこむとしよう。

ここ、カリユード諸島ではユアミという服に着替えて入浴するのが常識だ。

湯船の中にはタオルを入れないのがマナーだとはよく言うが、ユアミは湯船の中でも着っぱなしだ。

このユアミがあるからこそカリユード諸島の風呂は混浴になっているのだ。

しかし私はこのユアミがあるせいで未だに駆逐艦娘と裸の付き合いをしたことがない。

くう、ユアミさえ無ければ雷と電の生まれのままの姿を拝むことが出来るというのに……。

ついでに言うとユアミに着替えるのも一瞬で済む。

防具を変更するのと同じだ。だから着替え中に突入してもやはり裸は見られない。

パツと着替えられるのは確かに便利だが、便利過ぎると人は墮落する。

みんなも世の中はもう少し不便であるべきだとは思わないか？

私が着替えようと自分用のカゴを用意していると、再び二人の声が聞こえてきた。

今度は何を喋っているのかな？

『……あつ、もうっ！ジヨニーったら、あんまり変なところを触らないでほしいのです。』

『オオー。』

………えっ？

『はぁーい、スミスおいでー！洗ってあげるわよー！』
『キイー。』

………なあんだとおおおおおお
!!!???

ななな、何であのタコとイカが雷と電と一緒に風呂に入っているんだあ!?

私ですらあの娘達と一緒に風呂出来るようになるまで、半年以上も掛かったというのに!?

雷はともかく電は非常に警戒心が強くてだな、私があの人と一緒に風呂に入ろうとすると電に風呂桶をぶつけられて追い返される日々が続いていたんだ。

毎日追い掛け回しては真摯にお願いし続けて、最終的に土下座までしてようやく一緒に入れるようになったんだ。

あの時、土下座する私に対して電が放った『流石に根負けしたので。雷ちゃんに免じて一緒に入るのは認めてやるのです。だけどお触りは厳禁なのです。入浴中の電達に指一本でも触れたら許さないので。』というセリフと、蔑むような眼差しは未だに覚えている。

だというのにあのタコとイカはお触りOKで、更に洗ってもらってさえいるだとお!?

可愛らしい小動物だと油断させておいて、その本性は淫獣だったか!?!ええい、許せん!!

そもそもタコやイカといった生き物は生まれつき何本もの触手を

持っているだろう？

そして触手と女体といえば導き出される答えは一つ!!

あいつらをペットとして受け入れた、あの時の呑気な私をぶん殴りたい!

もはや酌量の余地無しだ!!

ドガシャーン!!

「うおおおおお、二人の貞操はこの長門が守護るっ!!」

風呂場の扉に体当たりをして破壊し、そのままの勢いで中に突入する。

私の突然の出現に驚いたのか驚愕の表情を浮かべた雷と、風呂桶を片手に持って臨戦態勢に入った電が見える。

ターゲットたる軟体動物は電の足元だ!

「きやあっー!?な、長門さんっ!?物凄い表情をした長門さんが着替えないまま、扉を壊しながらお風呂に乗り込んできたわ!!きつと獰猛化だわ!扉ブレイク!獰猛と化した長門さんだわ!!」

「解説乙なのです。やれやれ、とうとう我慢が出来なくなったのですか?やっぱり優しくするべきではなかったのです。取り敢えずこれでも喰らうのですっ!!」

私の顔面目掛けて勢いよく飛んでくる風呂桶、しかしいつまでもそんなものに当たる私ではない!

立ち止まることなく首だけを動かして華麗に避ける。

しかし避けられたというのに電は余裕の表情を崩さない。

「避けられましたか、けどそうやって避けるのは読んでいたのです。戦いとは常に二手三手先を読んで行うものなのですよ。」

ツルンツ!!

「なっ、これは石鹸!?!」

足元に落ちていた石鹸を踏んづけてしまい、思いつきり滑る。

そうかつ、今の風呂桶の投擲は石鹸から私の注意を逸らすための才トリだったのか!?!

ええい、まだだ！まだ終わらんよ！

まだ私は滑っているだけで転んでない、何とか体勢を立て直せば!?

「掛かったのです、それでは二投目なのです。えいつ!」

スコーンツ!!

「ぐへえ!」

体勢を崩したままでの二投目は避けられず、風呂桶はオデコに直撃。

そのまま後ろに転倒し、更に床で後頭部も強打する。

ま、前も後ろも痛あい……。

「……こ、攻撃しないでくれ。これは君達のためを思って……やっっているんだ……ぞ。」

「それが辞世の句なのですか?とにかくこれで詰みなのです。トドメはジョニーとスミスにお願いするのです。お前達、やくつておしまいつ……なのです。」

「オオオオオオ。」

「キイイイイ。」

頭を押さえて風呂場の床で転がる私ににじり寄ってくるタコとイカ。

クツ、私の貞操もここまでか。その触手でアハーン♡やウフーン♡なことをするつもりだろう!?

しかし私とて誇り高き戦艦娘!!対魔艦なんて不名誉なあだ名、ここで返上してみせる!

触手なんか、絶対負けたりするものかツ!!

痛い痛い痛い!!頭に噛み付かなくてくれっ!そこはさつき転んだせいでタンコブになってるんだ!!えっ?何だ、その赤黒いオーラは? やめろっ、その見るからにヤバそうなイカ墨を私に吐き掛けるんじゃない!

ギ
ヤ
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ツ
!!

長門さんと下着泥棒2

……………んがっ……………あれっ、私は一体？

そうだ、私は確かお風呂場で電の風呂桶攻撃を喰らって、倒れたところだ。ジョニーとスミスに襲われて……………。

「あつ、長門さん。目が覚めた？」

目を開けるとそこには天使がいた……………じゃない、そこにいたのは雷。

ここはまだ風呂場か、私は風呂場の床で寝かされていたのだな。

風呂場のフローリングは硬い上に濡れていて寝心地は最悪だ……………

駄洒落じゃないぞ？

さっさと起き上がるとしよう…………………………って動けない？

「やっと気が付いたのですか？今の長門さんは洗濯紐で縛ってあるから動けないのです。」

首だけを動かして身体を確認すると、確かに私の身体は身動きが取れないように縛られている。

それにしても胸を強調し、股間に食い込むようなこの独特の縛り方。

この縛り方は確か亀甲「菱縄縛り」なのです。「しば……………菱縄縛りだ。

クソツ、何故気絶なんかしてしまったんだ!?気絶さえしていなければ、電に縛ってもらえる感覚が味わえたというのに!!

「長門さんを縛ったのはジョニーとスミスなのです。縛り方は電が口頭で教えたのです。」

……………ま、まあいい。

「それじゃあ電達は着替えてくるから、もう少しそこで頭を冷やしているといいのです。全く、扉が壊れたから修理しないといけないのです。」

「電から聞いたわよ。長門さん、よく分かんないけど頭の病気なんですって？頭の病気だなんて大変じゃない、体調悪いのに気付かないでゴメンね。天龍さんも倒れちゃったみたいだし、長門さんも健康には気を付けてよね。それじゃあね！」

そう言うのと電と雷は風呂場から出て行ってしまった。頭の上にそれぞれタコとイ力を乗せたまま……。

さあて一人風呂場に取り残されてしまったワケだが、どうしたものか……。

「きやあくくっつ!」

こっ、この悲鳴は雷と電!?

一体何があった!?!二人が脱衣所に向かってから、まだ一分も経っていないんだぞ?

まさかあの二匹が淫獣の本性を現わして、幼い二人の未熟な肢体に触手を這わせたとでもいうのか!?

うおおっ!こうしちやおれん!!

幼くて可愛い駆逐艦の子供達よ!待っている、この長門が助けに行くからな!!

とはいえ未だに縛られたままなので、芋虫のように這いつくばって濡れた床を進んでいく。

痛たっ、顔にアクリル板が刺さった!?

誰だ、こんなところにアクリルの破片をばら撒いた奴は?危ないじゃないか!?

壊した扉は雷と電が外しておいたらしく、扉に邪魔されることなく風呂場から脱衣所へたどり着く。

ついでに床のアクリルの破片も掃除しておいてほしかったな……。
「大丈夫か!? 私が出来たからにはもう安心しろ! 悪党は私が粉碎してやるからな!」

「……………」

あれえ? 二人の窮地に現れたハズの私に突き刺さるのは疑念を孕んだ視線。

二人は軟体動物に襲われてなんかいなかった、だとしたらさっきの悲鳴は一体?

「ひよつとして長門さんなのですか?」

「えっ、何がだ?」

「私達のインナーを盗んだ犯人が長門さんなのかと聞いているのです。」

「着替えようと思つてカゴを覗いたら、パンツが無くなってたのよ!」

な、何イ!? 誰がそんなうらやまけしからんことを!?

私はずつと我慢してきたというのに、あつさりと一線を越えおつて! 許さんぞ!!

こんなことになるくらいなら私が盗つて、それを煮出してお茶にして飲むべきだった!!

「し、知らん! 私は知らんっ! 私は犯人じゃない!!」

「本当に知らないのですか?」

「知らんつたら知らん! イチゴパンツと紐パンの行方なんて私は知らないぞ!!」

「犯人じゃないというわりに、どうしてパンツの柄を知っているのですか?」

「……………あつ。」

「実質自白したのも同然なのですが、今のところは保留にしておいてやるのです。」

マズい、このままでは下着泥棒の濡れ衣を着せられてしまう。

どうにかして誤解を解かなければ…………。

しかし弁解をする暇すらなく、電に片足を掴まれてそのまま引きずられて行く。

逃げたりしないから、せめて足の拘束を解いてくれないか？そこら中に身体がぶつかって痛いんだ。

一体私をどこに連れて行くつもりなんだ？

現在私がいるのは執務室だ。

あの後そのまま工廠に連れていかれて解体でもされるのかとヒヤヒヤしたが、雷と電は私を連れて執務室に行くと事情を神通に話した。

すると神通は何故か執務室に鎮守府のメンバー全員を集め始めた。執務室には現在気絶している天龍を除いた狩娘が勢揃いしており、更には連装砲ちゃん達や、あの不真面目な提督までいる。

ついでに何故かタコとイカまでいる、言葉は通じるんだろうか？

「ふわあ……眠いよお。まだ夕方になったばっかじゃん……。もう少し寝かせてよ……。23時くらいになったら話聞くから……。」

眠たそうに目をこすっているのは川内だ、なんだか久しぶりに顔を見たような気がするな。

「姉さん、今から大事な話をするのでもう少し我慢して下さい。元気ドリリンコあげますから。」

「ふあい……。」

これじゃあ川内というより加古だな。

「えー、それでは一人いませんが始めます。皆さんに集まってもらったのは、ここ数日続いている盗難事件についてです。」

途端にざわつく室内、全員何かしら心当たりがあるようだ。……と
「いか盗難??？」

「現在、我々の鎮守府では全員何かしら物が無くなるという事件が多発しています。無くなった物は全員バラバラですが、いずれも盗まれる現場を目撃した人はいません。全て目を離れた隙に無くなってい

「私も那珂ちゃんドンドルマスペシャルライブのブルーレイディスクを盗まりました。あれは初回限定品なのでもう手に入りません。」

そういう神通の表情は一見冷静だが、目が笑ってないどころか目の奥に怒りの炎さえ見える。

これはいつ爆発してもおかしくない。

「盗られたのは観賞用のBDです。幸い使用用と保存用のは残っていますが、盗られたことに違いはありません。」

使用用……？使用用のBDって何だ？

保存用ってのはまだ分かるが、BDは鑑賞することが使用するということではないのか???

「無くなったのなら私の未開封のBDあげるからさく、もう帰っていい?。」

「そういう問題じゃありません！そもそも姉さんのBDは私があげた物じゃじゃないですか!?!それに他にもいくつかの那珂ちゃんグッズが無くなっているんですよ!!」

……そういえば那珂は最初はここの鎮守府に所属していたんだっただな。

まだ建造されてから日が浅い雷や電に天龍は、かつてここに那珂がいたこと自体知らないだろう。

ある日唐突に『那珂ちゃんは本格的にアイドルを目指すよ！艦隊のアイドルじゃない、真正銘のアイドルにね!』とか言って、神通が止めるのも聞かずに鎮守府からいなくなっただった。

私はそういった業界には疎いから知らなかったが、本当にアイドルになっただのか……。

そして神通はそんな那珂をいちファンとして応援していたのか。美しい姉妹愛だな、肝心の川内はあまり興味が無さそうだが……。

「今までの話を統合すると、盗まれた物に統一性はありません。特定

の物を狙って盗んでいるワケではなく、特定の個人を狙って盗んでいるというワケでもないようです。そして盗まれた場所もバラバラで、強いて言えば全て鎮守府の中というだけです。犯人の目的は現状では分かりません。しかし一つだけ、ある可能性が浮上してきました。」

ある可能性？

「それは犯人が鎮守府の中にいるのではないかということです。我々の中の誰かが犯人であるということも十分に考えられます。」

神通の衝撃的な発言に全員がざわつく。

それはそうだろう、ひよつとしたらこの中に犯人がいるかもしれないのだからな。

「飽くまで可能性です。それに私も身内を疑うようなことはしたくありません。ですが、鎮守府というのは仮にも軍の施設です。部外者の出入りがあればすぐに分かりますし、そもそも手続きも無しに入れるような場所ではありません。もちろん犯人が単独とは限りませんし、それに外部の人間と結託している可能性もあります。ですがどちらにせよ姿を見せることなく鎮守府内ならどこでも犯行を行うことが出来るとすれば、それは鎮守府の構造に詳しくなければいけません。ハッキリ言って私もこういった捜査に対しては畑違いなので、推理については穴も多いでしょう。ですが誰にでも出来る様な犯行ではないということだけは確かです。」

なるほど、確かに逃走ルートを確保していないと見つかる可能性が高まるからな。

とはいえ鎮守府の構造に詳しいだけで、全く見つかることなく犯行が可能なのだろうか？

「そういえばあ……少し前に天龍ちゃんの変なものを見たって言うってたわねえ。」

ポツリとこぼした龍田だが、状況が状況なだけに全員が反応する。

「変なもの……ですか、龍田さん？」

「ええ、そうよお。私も今の今まで忘れていたんだけどお、こんなことがあったのお……。」

龍田が始めたその話、それは何とも反応に困る妙な内容なのであつた……。

長門さんと下着泥棒3

そう、それはほんの数日前のことよお。

その日はもう夜になっていたし、私もそろそろ休もうと思って自室でくつろいでいたの。

するとトイレに行っていたハズの天龍ちゃんが血相を変えて飛び込んできたの。

「た、龍田！龍田ア!!」

「あらあ、お帰り天龍ちゃん。随分と早かったわねえ、もしかして間に合わなかったのかしらあ？」

「別に漏らしてなんかいねえよ……ってそうじゃない、緊急事態なんだ!!」

「はいはい、どうしたの？」

ふふっ、慌てちゃって可愛いわねえ。

ちなみに今の天龍ちゃんの格好はいつもの変態コーデじゃなくてパジャマ用の黒ジャージよ。

眼帯は付けたままだけどねえ。寝辛くはないのかしら？私だって寝るときは頭の輪を外すのに。

えっ、私の寝間着？フフツ、それは秘密よお♪

「こ、ここの鎮守府には幽霊が出るのか!？」

「……はい?」

流石の私も急にこんなことを言われたら困惑するしかないわあ。

「幽霊ねえ。フフツ、天龍ちゃんったら面白いこと言うのねえ。」

「嘘じゃねえって！本当に見たんだよ、幽霊!」

「はいはい、それでその幽霊はどこで見たのかしらあ?」

「そこであっちだ!」

「うーん……そこやあっちって言われてもねえ。そうだ、それじゃあ私をそこまで連れて行ってくれるかしら?」

「えっ!?!」

露骨に嫌そうな顔をする天龍ちゃん。

「いや、また幽霊が出るかもしれないじゃん?危ないことはやめよーぜ?」

「でも正体を確かめといた方がいいんじゃない?ほら、幽霊の正体見たり枯れ尾花って言うでしょう?それにトイレにも行けてないんじゃないかしら?」

「うっ、それは……。」

「大丈夫、一緒に行つてあげるから安心してねえ。」

それにしてもお化けが怖くてトイレに行けないなんて、天龍ちゃんつたら本当に可愛いわねえ♪

深海棲艦より幽霊の方が怖いのかしら?!

別に私はトイレ行く必要は無いんだけど、天龍ちゃんの為にも一緒にトイレに向かう。

天龍ちゃんは私の背中に隠れるようにして着いて来ている。

もし本当に幽霊がいるのなら、背中に隠れたところでどうしようもないと思うのだけどねえ。

「そこだ、その曲がり角だ!まずそこで出たんだよ!!」

そこお?当たり前だけどここは何の変哲もない普通の廊下よ、本当にここに幽霊が出たのかしら?!

「オレがトイレに行こうと思つてこの廊下を通っていると、その曲がり角を人影が通つていったんだよ。最初は誰かがいるんだと思つたんだ、それでせっかくなら一緒に行こうと思つて俺もここを曲がつたんだ。ところが曲がつてみるともう誰もいねえんだ、消えてたんだよ!」

私も曲がり角を通つてみる。当然だけど幽霊がいた痕跡なんて何も無いわねえ。

そもそも曰くも何もない普通の廊下なんだから、無い方が普通なんだけどね。

「本当にいたのかしらあ？何もいないわよお？そもそも見間違いじゃなくて？」

「ホントだって！ほら、周りにも隠れるところなんて無いじゃないか！！幽霊なら実体が無いから消えたり壁を抜けたり出来るだろ!!」

言われてみれば、確かにここには扉も窓も無いものねえ。

とはいえ通気口なら天井にあるわねえ。

まあスパイ映画じゃないんだし、そんなところを人が通ったとは思えないけど。

そもそも幽霊が消えたり壁をすり抜けることが出来るなんて、誰が最初に言い出したのかしら？

その後も幽霊や怪異と遭遇することなんて一度もなく、普通にトイレにまで辿り着く。

「ほら、何も出なかったじゃない。やっぱり幽霊なんていないのよお。分かったら早く済ましてらっしゃい。」

「……………」

「天龍ちゃん？」

「次に幽霊が出たのがここなんだよお……………」

「ここお？トイレに幽霊だなんて怪談話としてはありきたりねえ。」

「オレも最初の廊下で見たときは見間違いだと思っただよ、あれはオレの勘違いだったんだってな？だけどここで再び幽霊が現れたんだ、トイレの中に入っていく人影を見たんだよ！」

トイレに住み着いた幽霊ならともかく、わざわざトイレに立ち寄る幽霊なんて変わった幽霊もいるものねえ。

幽霊も用を足すのかしら？というかやっぱりそれ幽霊じゃないでしよ？

「それでな、まだこの時はそいつが幽霊だなんて思わなかったんだ。

だからオレも続けてトイレに入ったんだが、やっぱり誰もいねえんだよ。トイレのどこを探しても誰もいない、個室は全部開いていたんだ!!」

「ふうーん。でもその窓から出て行っただんじやないかしらあ?」

「それも考えたさ、だけどこのトイレの窓には外から格子が嵌めてあるだろ?」

言われてみればその通りねえ。

ここには女子トイレということで防犯のために窓に格子が付いているのよ、私としては別にそんなもの無くても問題無いと思うんだけどねえ。

格子は腕ぐらいなら抜けられそうな隙間があるけど、流石に頭や身体を通すのは無理ねえ。

「もしそこから逃げようとしても格子に顔が挟まっちゃうよ! だけど幽霊なら窓や格子どころか壁すら無視して出入り出来るだろ? だとしたらやっぱりそいつは幽霊じゃねーか。それで気味が悪くなってきたオレは急いで部屋に戻ってきたんだよ!」

「そういうことだったのねえ。とはいえ結局幽霊なんて見当たらなかったわよお? きつと幽霊の国に帰っていったのよ。何なら見張っというあげるわよお?」

「幽霊の国ってなんだよ! あの世界か? あの世のことなのか!」

散々騒いだ天龍ちゃんだけど、結局尿意には勝てなかったのか私がトイレの入り口で見張ることを条件にトイレを使うことにしたわ。

私としては天龍ちゃんが使っている個室の前で待つてあげても良かったんだけど、それは流石に恥ずかしいから嫌なんだって。

トイレの中で再度幽霊が出現するなんてこともなく、天龍ちゃんは怖がりながらも無事にトイレを済ませて出てきた。

「ほら、何もなかったでしょ？それじゃあ戻りましょ。」

「そ、そうだな！幽霊なんていなかったんだ！フンフフン♪」

鼻歌を歌いながら意気揚々と歩きだす天龍ちゃん。

どう見ても空元気だけど、それに対してツッコむのは流石に野暮ね。

そんなワケで部屋に帰るために来た道に戻り始めたの。

「そう言えば予備のトイレトパーパーがやけに減っていたわねえ。清掃の連装砲ちゃんが補充しなかったのかしら？」

今思えばこれも犯人が盗っていったのかもしれないけど、この時は泥棒騒ぎなんて知らなかったから、そんなこと考えもしなかったわあ。

そして先程の通路の曲がり角まで戻ってきた時、少し面白いことが起こったの。

ガサツ……。

「ん？」

「あら？」

「なあ、今何か物音がしなかったか？」

「ええ、したわねえ。上の方から。」

ガサツ……。

「ひいつ、やっぱりだ！どっかに何かいるぞ!？」

先程の幽霊騒動で精神が参っているのか、単なる物音程度で怖がる天龍ちゃん。

この音は多分通気口からね。

「や、やっぱり幽霊じゃ？」

さっき自分で幽霊には実体が無いって言ってたじゃない。

実体の無い幽霊がどうやって物音を立てるっていうのかしら？霊的パワー？

『オオオオオオ……。』

「ごっ、この声は?!まさか幽霊の声?」

本当にそうかしら?そもそもこの声ってどこかで聞いたことがあるような?

『キイイイイ……。』

「また聞こえてきたッ?!この声は間違いない、これは現世を恨む幽霊の声だ!怨嗟の慟哭だ!!」

怨嗟の慟哭って……。天龍ちゃんったら急に何を言い出すのかしら?
?

きつと通気口の中にジョニーとスミスがいるからだと思うんだけどなあ……。

タタタタタツ……。

「ひっ、今度は何だ!」

続いて聞こえてきたのは何者かの足音。

その音はどんどんこちらへと近付いてきているみたい。

そして……。

「やせくくくん!!」

「うわあああつっ?!」

いきなり暗がりから飛び出してきた何者かに驚いた天龍ちゃんは、そのまま脇目も降らずに逃げ出して行っちゃった。

私には着いて来てって言ったくせに、自分は置いて行っちゃうなんて酷いわねえ。

「ひゃあっ?!いきなり大声出さないでよ。ビックリしたなあ、もう。」

飛び出してきたのは川内ちゃん。

「こんばんは、川内ちゃん。」

「あれ?誰かと思ったら龍田じゃん。するとひよっとして今大声出しながら走り去っていったのが天龍って娘?」

「そうよお、そういうえばまだ会ったこと無かつたんだっけ？」

「そうだねー、まだ会ったことは無いねー。そうだ！親睦を深めるついでに一緒に夜戦に行こうって誘ってみてよ？」

「それくらい自分で言ったらいいじゃない？」

「そんなこと言われたってさ、日が昇ってくると眠くなっちゃうし。どうしても時間が合わないんだよねー。」

「まあ気が向いたら誘ってみてあげるわ。それじゃあ私はもう寝るからねえ、バイバイ。」

「はいよー、それじゃーねー！よーし、夜戦だ夜戦だあ~~~~!!」
全く、夜だつていうのに賑やかねえ。

「……………その後、部屋に戻ってみると布団に包まってガタガタと震えている天龍ちゃんがいたからその日は一緒に寝てあげたのお♪」

「姉さん、また他の人に迷惑を掛けて…………。」

「いやあ、だつてさあ……………そんなに驚かれるなんて思わなかったし？」

「夜戦に行くのはともかく、夜中に廊下を騒ぎながら走り回るのはやめて下さい。」

「だつて夜なんだよ、テンション上がるでしょ？それに時間は有限なんだよ、早く行かないと朝になっちゃうじゃん。」

何とも言えない空気が執務室を包む。

確かにアレは私もうるさいと思っていた。

「姉さん、とりあえずその話はまた今度にしましょう。今は窃盗事件の方が優先です。それで龍田さんは天龍さんが見たという、その幽霊が犯人だというのですか？」

「んんー、全然。」

あつさりと手の平を返す龍田に周囲が唾然となる。

「だって幽霊が物を盗むなんておかしくないかしらあ？呪うとか憑り付くとかならまだ理解出来るけど、幽霊が泥棒なんてねえ。もしそうなら盗んだ物はあの世に持って行くのかしら？それに私自身も幽霊なんて信じてないからねえ。」

「だって何故そんな話をしたんだ？」

「とはいえ天龍ちゃんが人影を見たってことは、そこに誰かがいたってことじゃないかしらあ？もちろん幽霊じゃなくて、実体のある誰かがねえ。その人影が犯人かどうかは分からないけど、天龍ちゃんの話が正しければ正体不明で神出鬼没の何物かが鎮守府の中をうろついているってことよお？」

「ふむ、なるほどな。」

「隠れたり通ることが出来ない場所で身を隠すことが出来るのなら、盗みをした後に見つからないといった理由にも領ける。」

「とはいえ本当にそんな人物が存在しているのだろうか？」

「しかし雷と電のパンツを始めとして、鎮守府中から物品が無くなっているというのもまた事実。」

「私を差し置いて二人のパンツを入れた……じゃなかった、パンツを盗んで二人を悲しませた犯人を許すつもりはない！」

「犯人への義憤に燃える私は、ある決意をするのであった。」

長門さんと真犯人1

執務室で続いた窃盗騒ぎについての話し合いだが、結局あれ以降有益な情報が出て来る事は無く、神通も全員に注意を促すに留まりその場は解散となった。

既に夜も更けてきており、そのまま外出していった川内を除き全員が自室へ戻っていった。

かくいう私も自室にいる、しかし私が自室に戻ったのは寝る為ではない。

今から犯人確保に向けて推理及び作戦を練らなければならないからだ。

それではこの名探偵ナガトの名推理をご覧に入れようッ！

……とは言ってもやはり情報が少なすぎる。

それに私自身、あまり頭のいい方ではないとの自覚もあるからな。

しかし私の勘は昔から当たる方なのだ!!

あれは確か半年程前、まだ天龍が建造されていなかった頃の話だ。

龍田がシュークリームを作り、それを鎮守府のメンバー全員で食べることになった。

しかしそのシュークリームには一つだけ『にが虫』がぎっしりと詰まったのが混ざっている、いわゆるロシアンルーレット方式になっていたのだ。

そしてそんなものが入っているなんて全く知らなかった私は最初選ばせて貰ったのだが、一発でにが虫入りを引き当てることに成功し、あのマイペースな龍田を困惑させることに成功したのだ。

どうだ、凄いだらう。龍田から一本取った狩娘なんて、私くらいのものじゃないか？

えっ、それは本当に狙ってやったのかだって？………そうだ、狙ったのだ！

決して私の運が悪かったただけだとか、考えなしに適当に取ったとかじゃないぞ!?

思い出すと未だに口の中が苦くなる、文字通り苦い思い出だ。

しかし今回はこの天性の勘を駆使して、見事犯人を突き止めて見せよう!!

神通は内部犯の可能性が高いと言っていた、つまり外部犯の可能性は低いということだ。

だからこそまずは外部犯から考えよう、少ない方から考えた方が早いし簡単だからな。

外部の人物で特に鎮守府での出入りが多い者といえば、天津風と潮風丸。

まずは天津風、天津風は連装砲ちゃん達とても仲がいい。

連装砲ちゃんも天津風に恩義を感じている為、天津風に頼み事をされて断る連装砲ちゃんはまずいない。

オトモとして雇われている連装砲ちゃんでも、状況によっては現在の雇い主よりも天津風を優先することすらあるだろう。

つまり天津風がその気になれば、鎮守府にいる全ての連装砲ちゃんを泥棒に変えてしまうことすら可能なのだ。

鎮守府で働いている連装砲ちゃんの数はとても多いし、小柄な連装砲ちゃんなら狩娘が入り込めないところに潜り込むのだって簡単だ。

鎮守府内でバレずに盗みをするなら連装砲ちゃんの右に出る物はないだろう。

しかし心から連装砲ちゃんを愛する天津風が、大切な連装砲ちゃん達にそのような犯罪行為をさせるとは考えにくい。

よって天津風は犯人じゃないと思われる。

逆説的に連装砲ちゃん達も犯人ではないと言える。

何故なら彼らも大好きな天津風が悲しむようなことはしないと決めているからだ。

天津風と契約をする際に、連装砲ちゃん達は悪いことをしないと約束している。

野良だと手癖の悪い連装砲くんが、雇われた途端に盗みをしなくなるのがその証拠だ。

天津風と連装砲ちゃんの信頼関係は妬けてしまう程に強い。

だからこそ生命に係わるとかそういうった極端な理由でも無い限り、天津風との約束をやぶって盗みを働くなるとてもじゃないが思えない。

それによく考えてみればいくら小柄な体格でも身体そのものは金属で出来ている連装砲ちゃんじゃ、狭いところを無理やり通り抜けるという芸当は無理だろう。

先程龍田が言っていたトイレの格子だって、流石の連装砲ちゃんでも通り抜けるには少し狭いからだ。

続いて潮風丸。彼は商人だから盗品を売りさばいている可能性がある……かもしれない。

しかし潮風丸はあの外見に言動、そしてあの性格だ。どこにいても非常に目立つ。

彼のオトモの剣レン丸も同様だ。

剣レン丸も連装砲ちゃんだが、他の連装砲ちゃんと違ってやはり目立つ。

隠密行動とは程遠い二人組だ、彼らが鎮守府内をうろつけば誰でも分かるだろう。

そもそもあの二人が盗みをするような性格だとはとても思えない。

犯人ではないとみていいだろう。

あつという間に外部犯の可能性が消え去った。

神通の言う通りだったな、流石は鎮守府最強の狩娘にして鎮守府の全てを取り仕切る秘書艦だけはある、頭の回転も鎮守府最強だな。

それでは内部犯の考察に移ろう。

まずは雷と電、あの二人は確実に犯人ではない。

何故ならあの二人はとつても可愛い天使だからだ、天使が悪いことをするはずがない！

うむ、我ながら完璧な考察だな……えつ、さつき電に痛い目に遭わされたばかりだろうって？

はっはっはっ！あれはただの照れ隠しだよ、照れ隠し。

小悪魔の雷と電というのも悪くはないが、やはりあの二人は天使だ。

可愛いは正義とはよく言ったものだな。

続いて提督。提督は確かに不真面目な男だ、ロクに執務をしているところなんて見たことが無い。

だがあいつも変なところでプライドが高く、決して悪事に手を染めるようなことはしないだろう。

それにあいつはお金儲けが大好きだ。発覚するリスクがある盗みを働いて、安定しない収入をチマチマと得るよりも、ビールを売って儲けた方が確実に手っ取り早く、そして合法だ。

何よりあいつはお金で何でも解決すると思っている節があるからな、仮に欲しい物があるとすれば盗む前に買うだろう。

こうして考えると提督が犯人の可能性も限りなく低いだろう。

次は神通。本人の人格的に考えて彼女が犯人とは思えないが、とにかく推理してみよう。

神通はクロオビ鎮守府最強の狩娘だ、そしてカリユード諸島にある全ての鎮守府に所属する狩娘の中でもトップクラスの实力者。

もしそんな彼女が犯罪を起こせば、それを止められる者なんてほとんどいないだろう。

しかし彼女が犯人だとすれば、実力の割にやっている犯罪が小さ過ぎる。

神通が本気を出せば、ここの鎮守府なんてあっという間に乗っ取ることが出来る。

そうすれば盗みなんて働かずとも、鎮守府の物は全て彼女の物となる。

だということにそうしていかないということは、それは神通が犯人ではないということの何よりの証拠だ。

神通の姉の川内、趣味は夜戦。

私と同じ下位ランクの狩娘だが、それは夜戦ばかりやっていてキークエストをほったらかしにしているからであり、戦績なら私よりも遙かに上だ。

本人があんな態度だから誤解されがちだが、同条件ならその实力は上位ランクの狩娘にも引けを取らないだろう。

彼女は日中をほとんど寝て過ごししており、夜になると夜戦を求めて外出している。

それで彼女が犯人かどうかについてだが、先程も言ったように彼女は昼夜逆転生活を繰り返しているので古参の狩娘でありながら顔を合わせる機会は少なく、夜戦好きということ以外は趣味も私生活も不明な点が多い。

ひよつとしたら夜間に出撃するフリをして、皆が寝ている間に盗みを働いているのかもしれない。

そもそも昼間の川内は本当に眠っているのだろうか？

寝たフリをしてアリバイを作っておけば、昼間に盗みをしても疑われる可能性は低くなる。

また川内は、本土では夜戦忍者というあだ名で呼ばれることもあるらしい。

忍者なら隠密行動はお手の物のハズだ……えっ、それは川内改二のあだ名だって？

まああいつは実力だけなら改二並みだし、夜戦忍者と呼んでも差し支えないだろう。

忍者なら天井に張り付いたり、壁抜けだって出来るんじゃないか？
そうすれば盗むのも隠れるのもお手の物！ニンジャが出て盗む！

アイエエエ！

天龍が幽霊を見た日に遭遇したのも川内だというし、幽霊の正体が川内という可能性はある。

ただし夜間によく騒いでいることから、彼女は泥棒をするには向いていないようにも思える。

犯人としての可能性は半々といったところか？

そして龍田、彼女は川内とは違ったベクトルで謎の多い狩娘だ。

ハッキリ言って何を考えているのか分からない。

人をからかって困らせることも多いが、最近は姉の天龍が建造されたことで関心がそちらに向いている。

その実力は未知数。立場的には上位ランクの狩娘だが、そのマイペースな性格故に実力を隠しているようにも見える。

流石に神通程ではないが、川内と互角かそれ以上の実力を持っていると見て間違いない。

なにより非常に頭が回る、悪巧みをする際に限っては神通をも上回るんじゃないだろうか？

とはいえ流石の龍田でも、人を困らせるためだけに盗みをするとは考えにくい。

何だかんだで優しい彼女のことで、やっていいことといけないことの区別は付いているだろう。

限りなく白に近いグレーといったところか。

ここの鎮守府で一番の新顔の天龍、建造されて一ヶ月経つか経たないかといったところ。

ジョニーとスミスを連れてきた張本人。現在よく分からない理由で療養中。

天龍が来たのはつい最近だが、考えてみれば泥棒騒ぎが始まったのもつい最近。

そこで私は一つの仮説を立てた。

今まで泥棒による被害が無かったのは、そもそも泥棒がいなかったからと考えられる。

つまり急に窃盗騒ぎが始まったのは、鎮守府に泥棒が現れたからなのだ！

そして窃盗騒ぎが始まったと同時期に現れた人物こそが天龍………とジョニーとスミス。

もちろんまだ天龍が犯人と決まったワケではない、しかし色々疑問な点がある。

天龍が倒れたのが昨日で、雷と電のパンツが無くなったのが今日だ。

現在寝込んでいる天龍にはアリバイがあるので、犯人ではないように思える。

しかし倒れた理由が意味不明だし、タイミングも良過ぎると思わないだろうか？

それにジョニーとスミスを拾ってきたのも天龍だ。

あの二匹は見た目によらず頭がいい、飼い主である天龍の命令で盗みをしているとも考えられる。

つまり計画犯と実行犯の関係だな。

あの二匹なら身体が小さいから目立たない上に、人が入れない場所

への侵入も容易だ。

そして私を差し置いて雷に電と一緒に風呂に入ったのもコイツらだ。

鎮守府のペットということで周囲を油断させ、私が気絶している間に二人のパンツを盗んだのかもしれない。

もしかすると天龍は無関係でコイツらが独断で盗みを働いているのかもしれないが、天龍にはもう一つ怪しい点がある。

先程の天龍が幽霊を見たという話だが、天龍以外に幽霊の目撃者がいないという点だ。

これは幽霊に罪を擦り付けるための狂言ではないかと私は考えた。いわゆる天狗の仕業というヤツだな。

最もこれは龍田の口から出てきた証言なので、龍田が嘘をついている可能性もある。

先程龍田が犯人の可能性は低いと言ったが、龍田は天龍のことを溺愛しているので、天龍が犯人の場合は犯行を黙認している、あるいは共犯という可能性もありえる。

何より天龍は本土では名物天龍幼稚園と呼ばれる程に、駆逐艦と行動を共にしているらしい。

何と羨ましい、艦娘としての私が同行すればあつという間に赤字になるというのに!!

だとすれば雷と電のパンツを盗んだ犯人は少女趣味の天龍に違いない！（私怨による八つ当たり）

他に盗まれた物は本当の狙いを悟られない為のダミーだろう、というワケで犯人としての可能性が一番高い。

訓練所にいる深海棲艦の連中はどうかだろう？

艦娘と深海棲艦は相容れぬもの、それは我々が狩娘となった今でも変わらない。

敵対している狩娘に捕獲され、訓練所に閉じ込められて管理されるというのは深海棲艦にとって屈辱なのではないだろうか？

そんな深海棲艦が狩娘に一泡吹かせる為に騒動を起こしているのだとしたら？

うーん……自分で推理しておいてなんだが、深海棲艦は犯人の可能性は限りなく低そうだ。

危険な深海棲艦を飼うために作られた訓練所は、そう簡単に抜け出せるような代物ではなく、仮に脱走が成功したとしても警報で分かるようになってる。

訓練所の管理システムはそうヤワなものではないのだ。

それに脱走を企てる深海棲艦を訓練所のボスであるドスロ級さんが放つておくはずがない。

並大抵の深海棲艦なら脱走前にドスロ級さんに鎮圧されるだろう。

逆にドスロ級さんまでグルだとすると脱走される可能性は非常に高くなるが、ドスロ級さんはそういうことを考えるような深海棲艦じゃないからな。

次に深海棲艦が犯人じゃない証拠として、犯行の内容があまりにも低レベルだからだ。

狩娘への復讐としてやるのが、パンツや那珂ちゃんのグッズの窃盗？

まずあり得ない。

バレずに訓練所から脱走出来たのならそのまま海に逃げるか、油断している狩娘を闇討ちするかのどちらかだろう。

そもそも訓練所の深海棲艦が狩娘を恨んでいるという話自体、私の勝手な想像に過ぎない。

狩娘に対して何の感情も無いと言えば流石に嘘になるだろうが、食事は毎日出てくるし、定期的に演習で暴れることも出来る。何より訓練所では命の危険が無いのだ。

墮落しているようにも思えるが、訓練所の深海棲艦達は今の生活を受け入れているように思えて仕方がない。

最後に本当に泥棒の幽霊がいるという可能性。

正直信じがたいが、仮に真実だった場合は祓う以外に方法はないだろう。

幽霊が相手じゃ物理攻撃では対抗のしようが無い。

効果的なのは塩か？それともお札か？はたまた念仏か？

どちらにせよ実際に幽霊と遭遇しないことには、判断のしようが無い。

とはいえ過去にここの鎮守府で誰かが恨みを持って死んだとか、そういうた曰く付きの事件なんて起きた事も聞いたことも無い。

鎮守府が造られる前のここ土地に曰くがあつたのかもしれないが、そうだとでも唐突過ぎる。

つまり幽霊の現れる要素が無いから幽霊が犯人の可能性も低いだろう。

よって一番怪しいのが天龍及びジョニーとスミス。次に怪しいのが川内で、最後に龍田。

どうだ、これが私の推理だ！完璧だな！

えっ、私が犯人の可能性？そんなものあるわけないだろう!!

とはいえこれは所詮推理でしかなく、本当に彼女らが犯人かどうかはまた別の話だ。

ならば次にやるべきことは決まっている。そう、実際に犯人を捕らえるのだ！

待っている犯人め、お前の悪事もこれまでだ！

長門さんと真犯人2

やあ、良い子のみんな！私だ、長門だ。

今の時間帯は深夜、良い子も悪い子も皆寝る時間だ。

だが今の私は寝るわけにはいかない、犯人を確保しなければならぬからな。

深夜の鎮守府は通路に常夜灯が付いているだけで、非常に薄暗い。私も本当なら暖かい布団に包まってぐっすりとおきたいところだが、全員が寝ているからこそ犯人が動き出す可能性がある。

そこで犯人の痕跡を調査し、あわよくば捕まえてしまおうというのが私の魂胆だ。

とはいえ私がいるのがバレてしまったら、犯人が行動をしないかもしれない。

そこで私は考えた、犯人に気付かれることなく調査をする方法を！何でもこの世の何処かには『伝説の傭兵』と呼ばれる潜入のスペシャリストがいるらしい。

その傭兵は段ボールを被って行動することにより、敵の目を誤魔化して発見されることなく任務を遂行したという。

私もそれに倣い段ボールを被って行動しよう………と思っただのだが、残念ながらこの鎮守府には女性としては大柄な体格の私が入り込めるサイズの段ボールが無かったのだ。

それに無理に被っても頭の角が段ボールに刺さってしまう、よってその案は却下だ。

しかし私は閃いた、段ボールが無ければ他の物を被れば良いということに！

段ボールよりも大きく丈夫で、そして手に入れるのが簡単なもの。

そう、それは大タルだ！

大タルは私が立ったまま入っても多少の余裕があり、木製なので角が刺さることもない。

これに入って行動すれば私の姿が犯人に見られることはない！

ただしこのままだと前が見えないので目の位置に穴を開ける必要があるが、それも見つからないメリットに比べれば些細なことだ。

そしてもう一つ必要な物がある、それは食料だ。

長時間の調査ではお腹も空いてくる、しかし夜食のためだけに自室に戻るなんて論外だ。

聞いた話によると、刑事が張り込みをする際にはアンパンと牛乳を用意するらしい。

しかしタイミングが悪く、私の手元には牛乳もアンパンも無い。

そこで私は代わりのものを用意した。

まず用意したのは元氣ドリニコ、これは飲料であると同時に眠気を覚ましてスタミナも回復させてくれる。

今は深夜だからな、いずれ眠気が襲ってくることだろう。

眠気に負けて捜査が出来なければ本末転倒だ、よって元氣ドリニコは必須さ。

更にもう一つ、私が用意したのはドーナツだ。これは小腹が空いたときの食料だ。

何故ドーナツなのかというと、以前陸奥の紹介で知り合ったアイオワという狩娘にアメリカの警察はいつもドーナツを食べているというのを教えてもらったからだ。

要するにゲン担ぎだな、警察御用達のドーナツを食べて犯人を捕まえるのだ！

私が用意したドーナツはウラカ・ゼ・リング、青い色が食欲をそそらない実にユニークな一品だ。

私としては腹持ちのいいドスドーナツが良かったのだが、これしか用意出来なかったんだ。

とはいえこのウラカ・ゼ・リングも捨てたものではない。

見た目はアレだが、ふんわりと甘いミルクの風味がとても美味しいドーナツだ。

ついでにアメリカではドーナツをコーヒーに浸して食べるということも教わった。

私もそれに倣ってこのウラカ・ゼ・リングを元氣ドリニコにジャブジャブ浸してから食べてみようと思う。

しかしこれでもまだ準備は万全とは言えない。

もし本当に幽霊が現れた場合、今の私では太刀打ち出来ないからだ。

まさか殴って倒せるとは思えないし、取り押さえるなんてことも物理的に不可能だろう。

とはいえ幽霊なら清められることに弱いんじゃないだろうか？

そこで私が用意したのは空きビンで汲んできた海水だ。

海水には塩分が含まれている、これにより清めの効果があるんじゃないかと私は考えた。

何よりここは鎮守府、海が近いので海水は簡単に手に入るし元手もタダだ。使わない理由は無い！

ついでに自己流で念仏的なものも唱えて海水を聖水に変えておいた………多分変わったと思う。

清めの塩と聖水の合わせ技！

これにより更なる清めの効果が期待出来る、もはや幽霊など恐れるに足らず！

これで準備は完了だ。犯人め、目にももの見せてやる！

私が廊下の真ん中で大タルを被って待ち伏せを始めてから何時間経ったのだろうか？

体感的には午前3時か4時を過ぎたような気がする。

ね、眠い……それに退屈だ……。何も進展が無く、ただただ時間だけが過ぎていく。

刑事や探偵、そして潜入作業員はいつもこんな大変なことをしているんだろうか？

だとしたら想像以上に大変な職業だったのだな、実際に体験してみないと分からないこともあるものだ。

さあて、こういう時こそ用意した元気ドリンコとドーナツの出番だ！

こいつを食べて眠気を吹き飛ばすでしょう。

ゴソゴソ……ゴソゴソ………うーん、暗くて手元が良く見えん。

えーっと、多分この柔らかな手触りの物がドーナツだろう。

ウラカ・ゼ・リングは指に吸い付くようなしつとりとした柔らかな触り心地も特徴の一つだ。

この病みつきになる触り心地と甘く優しいミルクの香りが世の男性の心を掴んで離さないそうだ。

それにしても何故男性に人気なのだろうか？女には分かん感覚だ。

えっと、元気ドリンコはコレか？

触った時の形状がボトルだし、中で液体がチャプチャプとしている。

よし、これということにしておこう。

忙しい狩り場でも一気に飲める大口経ボトル、今回はこの大口径を利用してドーナツを浸してみようと思う。

キャップを開けて、半分にちぎったウラカ・ゼ・リングをドリンコに浸す。

暗くて見にくいだが、ドーナツが湿ってきたような感覚があるから上手くいったようだ。

後はドーナツの形が崩れない程度にドリンクを吸わせて、それを食べる。

あぐあぐ……むぐむぐ……ゴクンツ！

「んっ???何か味が変だな……あっ……海水だこれ。」

「……………!!!あああああ!!!しよつぱああああい!!!そして苦くいいいい!!!エグいいいい!!!があああああ!!!ぎやあああああ!!!」

げ、元氣ドリンクと海水を間違えたアアア!?

同じ形のボトルに入れたのは失敗だった!

自室でこれを用意した時は部屋が明るかったから間違えるなんて考えもしなかったが廊下は暗く、タルの中は更に暗い!

これでは見て分からないのは当然だ、せめて触っただけで分かるようにボトルそのものに細工をするべきだった!

海水独特の塩辛さと苦さが混ざった味に、ドーナツの甘みが混ざった何とも形容しがたい味。

一言で言えば不味い!

不意打ち気味に浴びせられたあまりの不味さに思わず叫び声をあげてしまう。

最初からこんな味がすると分かっていたらまだ耐えることも出来るが、これは流石に耐えられない。

「ゲホツ、ゴホツ………ハアハア。」

よしっ、落ち着いた。

少々みつともないところを見せてしまったかな？

だが安心してくれ、ここから犯人を確保して華麗に名誉挽回というじゃないか？

ペタペタペタペタ……………。

この音はっ!?何者かの足音!!

こつちへ向かって誰かが歩いてきている!?

ペタペタという奇妙な足音は生気の無い幽霊特有のものだろうか？

足音が聞こえるのは出入り口の方ではなく、むしろ廊下の奥の方からだ。

つまり帰って来た川内の足音ではない。

こんな時間に廊下を歩く者なんて犯人以外に果たしているだろうか？

そうと決まれば早速捕まえよう!

廊下の曲がり角で足音の主を待ち伏せする。

この大タルは目の位置だけでなく、腕の位置にも穴を二つ開けてあるのだ。

この工夫により、タルを被ったままでも犯人を取り押さえることが出来るようになっていた。

そしてこのタルは身を隠すだけではなく鎧の役割も果たしてくれる。

流星に深海棲艦レベルの攻撃は防げないが、そんじよそこの不審者の攻撃なら難なく防いでくれるだろう。

まさに攻守一体の装備というワケだ!

ペタペタペタペタ……………。

すぐそこまで来たッ!

確保するならこのタイミングしかない。よし、行くぞ!

「うおおおお!!」

角を曲がって来た人陰に飛び掛かる。

シュツ、バギイツ!!

「げふっ!」

一瞬で鳩尾をタルの鎧ごと撃ち抜かれ、そのまま吹き飛ばされて廊下の壁に叩き付けられる。

打撃と壁にぶつかった際の二つの衝撃により、碎けてバラバラになる大タル。

な、何が起こったんだ、確かに不意を突いたハズなのに???

鳩尾の痛みで蹲りながらも人影を見上げる。

私よりも小柄なその人影は、右手の手刀を突き出した状態で立っていた。

ぬ、貫手!?あの一瞬で貫手を繰り出して私を迎撃したというのか?下手に使うと逆に指を痛める貫手を繰り出したにも係わらず、まるで痛がる様子を見せない。

そしてタルの鎧ごと私を打ち抜いて吹き飛ばす程の技量、犯人は一体どれほどの達人だというのか!?

「一体そこで何をやっているんですか、長門さん?」

蹲ったままの私に人影が声を掛けてきた………というかこの声どこかで?

人影が左手に持っている懐中電灯のライトを点ける。

うおっ、眩しっ!?

「もう一度聞きます。一体そこで何をやっているんですか、長門さ

ん。」

ようやくライトに目が慣れてきた……つて神通？

そこに立っていたのは着た神通だった。

意外と可愛らしいパジャマを着ているのだな。

ペタペタと音を立てていたのは、履いているスリッパによるものだったのか。

しかし見た目こそ可愛らしいものの、その目はまるで笑っていない。

「神通が犯人だったのか!？」

「いきなり何を言い出すのかと思えば……とにかくそこに座って下さい!!」

「は、はい!」

神通の剣幕に負け、鳩尾の痛みも忘れて慌ててその場に正座する。

「廊下からいきなり叫び声が聞こえてきたから何事かと思って見に来てみれば、こんな時間にこんな格好をして貴女は何をしているのです!?! あまつさえ暗がりからいきなり飛び掛かってくるなんて言語道断! 見知った顔でなかったら、そのまま四肢の骨を粉碎していたところですよ!?!」

さらつとんでもないことを言い出す神通。

下手したら両腕両足を複雑骨折するハメになっていたのかもしれない。なかつたのか、ひえくっ!

「いや、これは……。」

「言い訳無用ツ! 貴女が何をしようとしていたのかは知りませんが、ただでさえ騒動があつてみんなが不安になつているときにこんなことをするなんて何を考えているんです!?! 鎮守府の一員としてもつと良識のある行動を心掛けて下さい!!」

ヒィ〜、神通のマジ切れ説教モードだ!?

こうなつた神通はそう簡単には止まらない。

眠い、口が苦い、鳩尾が痛い、正座も痛い、神通の説教が耳に痛い、何より神通から放たれるプレッシャーがとても怖い。

幾つにも重なつた責苦が私を襲う!

そして私は朝日が昇ってくるまで、このまま神通に説教され続けたのであった。

長門さんと真犯人3

うぐぐぐぐ……耐えた、私は耐えきったぞお……。

ようやく神通の説教が終わった、辛過ぎてどうにかなりそうだった。

説教中に眠るワケにも痛みで姿勢を崩すワケにもいかず、このまま死ぬかと思っただぞ。

起きっぱなし立ちっぱなし説教しっぱなしの神通も同じくらい辛いハズなのに、どうしてアイツはケロッとしていられるんだ？

『貴女はそもそも……って、いつの間にか朝になっていきますね。まだ言いたいことはありますが、とりあえずここまですべておきましよう。今日の業務があるので、私もそろそろ着替えて準備しなければいけませんからね。それでは失礼します。』

そう言う神通は去って行った………ペタペタと足音を立てながら。

うぐぐぐ……鍛え方が違うとかそういうレベルじゃない、アイツの体力は底無しか？

まあいい、とりあえず散らかしてしまった廊下を片付けよう。

先程神通にぶっ飛ばされた際に砕けたタルの破片は廊下に散らばったままだし、間違えて海水ドーナツを食べた際に慌てて元氣ドリニコと海水のボトルも近くに落としてしまったからな。

………おかしい、何か変だ。

廊下のゴミを集めてみたが、どう見ても数が合わない。

まずは砕けたタルだが、落ちていた砕けた破片を組み合わせてみても元の形に戻らない。

パーツの数が足りないのだ。

続いて海水が入っていたボトルだが、これはすぐに見つかった。

廊下の真ん中に出来た海水の水たまりの中に落ちていたんだ。

蓋をせずにボトルを落としたことで、海水がこぼれてしまったのだろう。

これは雑巾を持って来て拭き取らなければならぬな。

しかし海水のボトルと一緒に落としたハズの元氣ドリンクは全く見当たらない。

一緒に落としたのなら、すぐ近くに落ちていなければおかしいというのだ。

さては犯人だな、犯人がタルの一部と元氣ドリンクを持ち去ったんだ。

とはいえいつの間に盗られたんだ？

恐らく私が神通に叱られている間に盗んでいったのだろうが、何故私も神通も気が付かなかつたんだ？

確かに廊下は暗く、明かりは神通が持っていたライトと常夜灯の僅かな明かりくらいしかない。

それに神通は私に集中しており、私も延々と続く神通の説教と、どっと押し寄せてきた疲労で周囲にまで気が回ってなかった。

つまりタルと落としたボトルからは目を放していたのだ。

とはいえ流石に近くに第三者が現れれば、我々がその気配に気が付かないはずが無い。

特にあの神通に気付かせることなく盗みを完遂するとは、まさか相手は正真正銘の幽霊なのか？

……………ん？

よく見ると廊下に雫の跡が点々と続いている？

ペロ…………こ、これは元氣ドリンク!!!

そうかつ！元氣ドリニコも落つこととした際にボトルにヒビが入ったのか、はたまたキヤップが少し開いたのか、真相は知らないがとにかく少しずつ中身が漏れていたんだ。

そして犯人は元氣ドリニコがこぼれ続けていることに気付かず持ち去った。

ということはこの雫の跡を追っていけば犯人に辿り着けるというワケか!?

これぞ犯人を捕らえる絶好のチャンス、もはや迷っている暇なんて無い！

掃除の続き？そんなもの犯人を捕らえた後でゆつくりとすればいい！

行くぞオ!!

進むにつれて量が少なくなってきたが、それでもわずかに続いている雫の跡を何とか辿っていくと、やがて鎮守府裏の雑木林に出た。

更に薄暗い木々の隙間を進んで行くと、やがてとても古く、そして荒れ果てた小屋に辿り着いた。

こんなところにこんなものがあるなんて、私は全く知らなかったぞ。

この鎮守府が建てられる前後に作られた仮施設か、はたまた資材置き場として使われていたのだろうか？

小屋自体はそこその大きさがあがるが、手入れをされている様子は無く、提督や神通からも忘れ去られてしまったのだろう。

そして雫の跡は半開きになっている小屋の扉の中へと続いている。恐らくここに犯人が潜んでいるとみて間違いない。

よしっ、もう逃さないぞ！ 犯人め、正義の鉄槌覚悟しろッ!!

小屋の中に入った私をまず最初に出迎えてくれたのは古びた埃とカビの臭い。

クモの巣らしきものが部屋のあちこちに張っており、この小屋が長い間誰にも使用されることなく放置され続けていたということがよく分かる。

それに人のいた気配というものがまるで無く、当然生活感といったものも皆無である。

本当に犯人がここを根城にしているのだろうか？

まさか犯人は本当に幽霊なのか？

続いて私の目に入って来たのは小屋の中央に乱雑に積まれたガラクタの小山。

ここが古い小屋なだけあってかつては物置代わりにでも使われていたのか、はたまたゴミの不法投棄だろうか？

ん？雫の跡がガラクタの前で止まっている？

……………いや、違う。

よく見てみればこれはガラクタやゴミじゃないッ、これは盗品だ!!

近付いて小山を確認してみる。

山の一番手前に捨てられているのはほとんど中身の入っていない元氣ドリントのボトル。

間違いない、これはさつき私が落としたボトルだ！

更にはペンや定規といった小さな文房具から、フライパンや麵棒といった調理器具に、シャベルや土嚢といった大きくて重たい土木用品、そしてどこからどう見てもゴミ同然の空き缶からお菓子の空き箱まで…………。

物の大きさや種類、そして価値なんて全く関係無いと言わんばかり

突如として女性の悲鳴のような叫び声を上げるカマキリ。
その声色も、そして音量も人間の女性の悲鳴そのものだ！
「カ、カマキリが咆えただとおお!？」

BGM：墟城の魂たる女王

突然の事態に動揺する私を尻目に、カマキリは尾の先から金色の糸を吐き出し、盗品の中からコンクリートブロックを絡めとると、そのまま軽々と自分の背中の上に乗せてしまった。

カマキリが糸を吐くなんて!? それにあんなに重い物を持ち上げるだど!?

よく昆虫は自分の何倍も重い物を持ち上げることが出来ると言われるが、だとしてもコンクリートを持ち上げるなんてありえない!?

『シユルルルル……シユルルルル……』

カマキリは突然の事態に呆然とする私に向かって、おもむろに背負ったコンクリートを投げ付けてきた。

「うおおおっ!？」

慌てて避ける、あんなものが当たったらタダじゃ済まないぞ!?

『シユツ、シユツ……』

続いてカマキリは糸を巧みに操り数本のフォークとナイフを絡めとると、どういうカラクリかそれらを宙に浮かべ、そしてその切っ先を私へと向けてきた。

すぐさま私目掛けて矢のように次々と飛んでくる食器類。

「マズい、これを全部避けるのは無理だ!!」

「くっ、これで防げるか?」

私は急いで足元に落ちていた箱を手にとると、飛んでくる食器類に向けてそれを投擲する。

ダンダンダン!!

勢い良く投げられた箱は、同じく勢いよく飛んできたフォークやナイフが次々と突き刺さり、そして勢いを失うと同時にその場に落ちる。

何本もの食器に串刺しにされ、無残な姿となった箱。

防がなければ私がこのようになっていたのだと思うとゾツとする。

……んっ？この箱、何か印刷されているような???

えーつとなになにに、『那珂ちゃんドンドルマスペシャルライブ』？

………うん、これは見なかったことにしよう。

ここは神通と那珂が奇跡を起こして私を助けてくれたのだと思つておこう！

しかし何という戦闘力だ、もはやただの虫とは思えん！

それに物の形状を理解して私への攻撃に利用するとは、知能もかなり高いと見える。

こうなったら交戦あるのみ！

盗品の中からシャベルをひったくると、剣のように構える。

本当は普段から使い慣れているブレイズブレイドがよかつたんだが、こんなことになるなんて思つてもいなかつたんで、残念ながらも手元に無い。

しかし弘法筆を選ばずだ、使い慣れた大剣でなくても戦ってみせる！

それにシャベルは世界大戦においても武器として活躍したんだ、武器として不足は無い！

この害虫め、退治してくれるツ！

カマキリが投げ付けてくる盗品をシャベルで叩き落としつつ、反撃の機会を窺う。

しかし相手が小さい上に、盗品の間を素早く動き回るものだから中々狙いが定まらない。

何回かシャベルで叩こうとしたが簡単に避けられ、逆に近くにあった盗品を破壊してしまった。

クソツ、こんなことになるんだつたらブシドースタイルかブレイヴスタイルの練習でもしとくんだった！

………ツ!?何だ?急に右足が動かなくなったぞ?

慌てて足元を確認すると、私の右足は何本もの金色の糸で床にガツチリと絡めとられていた。

引き剥がそうにも、強靱な糸はビクともしない。

いつの間にかこんなものを!?

ふと周囲を見てみると、カマキリが歩いた後にうつすらと金色の糸が残されているのが見えた。

そうかつ、アイツはただ闇雲に動き回っていたんじゃない!

少しずつ罠を作って、そこに私が掛かるのを待っていたんだ!

クソツ、虫にしてやられるとはそれでも私は狩娘か!?

自分が情けない!

『シユルルルル……。』

私が動けなくなったのを確認したカマキリは、盗品の山の上に陣取ると中から古びた室外機を取り出した。

そんなものまで隠し持っていたのか!?室外機なんてぶつけられたくないぞ!?

「ええいつ、外れるー!」

どうにか糸から逃れようとするが、金色の糸は驚くほど丈夫で中々ほどけない。

このままじゃ室外機を避けられない、では避けられないのであればどうするか?

そりゃ迎撃あるのみだ!倒れるときは前のめり!!

『シャッ!!』

「うおりゃああああっ!!」

遂に飛んできた室外機、それをシャベルをバットののように構えて迎

え撃つ！

大剣の溜め斬りの要領で力を込め、タイミングを見極めて全力で振り抜くんだ!!

カアン!!

見たかつ、やったぞ！

私が放った渾身の一撃は見事に室外機を捉え、そして跳ね返した！
我ながら惚れ惚れとするスイングだったな、若干腕が痺れたが……。

『シャアッ!?!』

ガアアアアン!!ガラガラガラガラ!!

まさか跳ね返されるとは思っていなかったのか、意思を感じさせないハズの冷たい複眼に困惑の色を浮かべるカマキリ。

そしてそのまま戻って来た室外機の下敷きとなり、その衝撃で崩れた山の中に埋もれてしまった。

完璧な当たり具合だ、これこそホームランだな。

……えっ、こういう場合はピッチャー返しと言うのか？

すまん、野球はあまり詳しくないんだ。

あの素早いカマキリでも、流石にこれは避けられなかったようだな。

いや、想定外の事態に避けるという発想自体が浮かばなかったのか？

昆虫でありながら驚いたりする辺り、やはり見た目より知能が発達していたのか。

まあヤツが潰れた今となってはどうでもいいことだが。

しかし盗難事件の犯人がカマキリとはな、未だに信じられん。

ここに私の元氣ドリソコや神通の持ち物である那珂ちゃんの本Dを含めた数々の盗品があつたことから、ここに盗品を溜め込んでいたというのは間違いないが、まだ別に犯人がいて偶然そこにカマキリが紛れ込んでいたという方がまだしっくりくる。

とはいえこのカマキリが高い知能を持っていて、道具を使うことが出来るというのは紛れもない事実。

やはりこのカマキリが自分で使うために盗んだのだろう。

しかしこれで謎は解けた、それでは改めて名探偵ナガトの名推理を
ご覧に入れよう！

いくらこのカマキリが大型種とはいえ所詮は小さな昆虫、こんなものが鎮守府に入り込んで誰も気付かない。

この身体の大きさなら通気口の中だろうが、格子だろうが簡単に通り抜けることが出来る。

そして虫とは思えない怪力と強靱な糸、そして小さな身体による隠密性を活かして鎮守府中で盗みを働いていたんだ。

それに虫の価値観は我々とは異なる、価値の有る無し関係無く物を盗んでいったということにも納得がいく。

だが私がかマキリを退治したことで事件は解決した。

後はこの盗品を回収して、ことの顛末を報告すればお仕舞いつてワケだ。

『シユルルルル……シユルルルル……』

……ツ、この不気味な声は!?まさかツ!!

そう、勝負はこれで終わりなのではなく、ここからが本番だったのだ。

長門さんと真犯人4

『シユルルルル……シユルルルル……』

………ツ、この不気味な声は!?まさかッ!!

バゴンッ!!

盗品の山の中から飛び出してきたのは、室外機に潰されて倒されたと思われていたカマキリだった。

紫色だった瞳は、怒りの感情を表すかのように真紅に染まっている。

『キヤアアアアアアアアアア!!!』

虫が出したとは思えない程の大きな絶叫を上げるカマキリ、その迫力に思わずたじろぐ。

相手は小さな昆虫だが、この叫び声一つで生物としての格が違うような錯覚すら覚えた。

ひよっとして私は迂闊にも喧嘩を売ってはいけない相手に挑んでしまったのか？

バカな、相手はたかが虫だぞ。そんな相手に気圧されてどうする？

盗品の山から飛び降りたカマキリは、私に背を向けると尾から大量の黄金の糸を吐き出した。

その本数はとても一匹の生物が出したとは思えない量だ。

それらを全て盗品に絡みつかせると、地引網でもするかのように両手のカマで器用に引き上げる。

何をしようとしているのかは知らないが、今のヤツは隙だらけ!

背を向けている今の内に叩き潰せば………って、私の足にはまだ

糸が絡みついたままじゃないか!?

クツ、ギリギリ攻撃が届かない距離に陣取っているだと?

そうかつ、アイツは私が動けないことを見越して隙の大きな行動をしているのか!

こちらの状態を把握して行動出来るとは、やはりコイツは賢い!

とにかくこのままではアイツに手が出せない!

私が足の糸に手間取っている間にも、次々と引き上げられていく盗品。

それらはまるで初めからそうなることが約束されていたかのように組み上げていき、やがて一つのシルエットを形作る。

「こ、これはまるで人間じゃないか!」

そう、そこに現れたのは盗品で構成された人形だった。

身長は2メートル程。

その姿は人間に似ておりながらも全身が継ぎ接ぎだらけで、目も口も無い頭部が非常に不気味だ。

そして本来ならば心臓があるべき胸部、そこにはポツカリと一つの穴が空いている。

『シユルルルル……。』

カマキリは素早く人形の胸部に飛び込むと、全身を糸で覆い黄金の繭へと姿を変えた。

BGM：蠢く墟城

『ブオオオオオオン……。』

不気味な軋みを上げて動き出したヒトガタは、ゆったりとした歩調でこちらへと歩み寄ってくる。

規格も材料も何もかもが異なる部品で構成されているにも関わらず、その動きは人間そのものだ。

技術が進歩した現在でも未だにロボットを二足歩行させるのはそう簡単ではないというのに、コイツは信じられないことに二本足で歩いている。

継ぎ接ぎだらけの不自然な人工物が、生物のような自然な動作をするその様子は寒気すら感じさせる。

そうかつ、天龍が廊下で見たという人影の正体はコイツかッ!!
暗闇なら継ぎ接ぎは目立たず、遠目に見たのならば単なる人影しか思えない。

それにコイツが鎮守府で盗みを繰り返していた理由も理解した、このヒトガタを完成させるための部品集めだったんだ!

そして天龍がコイツを見失った理由もようやく分かった。

シルエツトだけなら人間そっくりだが、その身体はいくつものパーツから構成させたもの。

身体を分解して小さな部品へと戻して輸送したり、蛇のような細い身体へと再構成すれば狭い隙間だって抜けられる!

これでトイレから消え去ったと勘違いさせたんだ!

「ええい、剥がれるっ!!」

ブチブチブチ!!

ようやく糸から足を引き剥がすことに成功したが、目の前には大きく右腕を振りかぶるヒトガタの姿が。

いくらなんでもこれは避けようがない!

慌ててシャベルを盾にして防ぐ。

しかし今の私が使っているのは深海棲艦をも叩き斬る頑強で巨大な大剣などではなく、ホームセンターで普通に売っているような何の変哲もないシャベル。

こんなもので防げる攻撃など、たかが知れており……。

バギヤツ!!

「がああっっ!!」

一瞬にして吹き飛ばされ、壁に叩き付けられる。

盾にしたシャベルの柄は真っ二つに折れ、胸への強烈なダメージに

呼吸もおぼつかない。

ちよつと前に神通に似たようなことをされたが、威力は段違いだ。信じがたいが、こちらの方が遥かに痛い。

あの百戦錬磨の神通より、カマキリの方がパワーで優るといのか!?

「ゲホツ、ゴホツ……ハツ!？」

『ブオオオオオオン……。』

倒れた私に対して、容赦無くダブルスレッジハンマーで追撃をするヒトガタ。

使い物にならなくなったシャベルを手放すと慌てて横へ飛び、それを避ける。

先程まで私がいた場所に振り下ろされた両腕は轟音と共に床をぶち抜き、まるで幼児が障子を破くかのように簡単に穴を開けてしまった。

あんなものをまともに喰らったら冗談抜きで頭が割れるぞ！

これはクエストでも何でもないから、ここで私が力尽きたとしてもレンタクの救助は来ない。

そのまま殺されてしまうだろう、そもそもここに私がいること自体誰も知らないからな。

だが同時に光明も見えた！あの胸の繭だ、繭の中に本体のカマキリが入っている。

間違はなく弱点はあそこだ、そこを狙えばコイツを倒せる！

左腕を振り上げるヒトガタ、その手にはいつの間にかフライパンが握られていた。

調理器具で攻撃するなんて傍から見れば滑稽だが、攻撃される側からすれば堪ったものではない！

ただでさえ桁違いのパワーを誇るコイツが、武器を振るえばその威力は計り知れない。

しかしアイツは動きこそ滑らかだが、動作自体は鈍い。そこに勝機

を見出す！

『ブオオオオオオン……。』

振り下ろされるフライパンを躲し、腕が戻り切る前に懐に飛び込む！

チャンス到来、やるならここしかないッ！

「我が渾身の右ストレートを受けてみる！でやあああああ！！！」

ズンツ！！

私の放った正拳突きは見事黄金の繭を直撃し、そしてヒトガタはその動きを止めた。

しっかりと繭に突き刺さる私の拳からは、確かな手応えを感じる。
……………や、やったのか？

バギイツ！！

突如として振り抜かれるヒトガタの右腕。

油断していた私は、先程の焼き回しのように壁に叩き付けられる。

「がふっ!？」

ぐっ、私の渾身の一撃も効いてないのか？

口の中にジワリと広がる鉄の味。

こんなことになるんだったら「やったのか？」なんて言わなきやよ
かった……。『シユルルル……。』

床に倒れている私目掛けて、黄金の繭から糸が放たれる。

先程の足元の罠とは違い、大量に放たれた金糸は私の両手両足を何重にも縛り上げた。

あつという間に手足を封じられ、私は芋虫のように床に転がされる。

マズいッ、これでは逃げるどころか糸を解くことすら出来ん！
風呂場でも洗濯紐で縛られたが、この糸の強度はまるで鉄線だ。
洗濯紐など比較対象にすらなりえない。

動けない私に勝利を確信したのか、ゆつくりとこちらへ近付いてくるヒトガタ。

やがて私の前で立ち止まると、おもむろにサッカーボールキックの体勢に入った。

一撃でシャベルをへし折り、床を簡単に叩き割る程の腕力を誇る相手が繰り出す蹴りだ。

そんなものを顔面で受ければ、私の頭などザクロも同然に弾け飛んでしまうだろう。

くつ、ここまでか……。

顔面に爪先が迫ってくる様子なんて見たくない、最期に見る光景がそれなんて尚更だ。

完全に諦めムードに入った私は目を瞑る。

済まない鎮守府の仲間達よ。

せっかく犯人を見つけたにも関わらず盗品は取り返せず、そして私自身も返り討ちだ。

私の仇を討ってくれなんていわない、むしろこんな危険な相手には挑まないでほしい。

死にゆく私の唯一の願いは、私の墓に駆逐艦娘の靴下をお供えしてほしい。

それだけだ。

鎮守府のみんな、さようならだ……。

ズッ!!!

硬い物が柔らかい物へとめり込む鈍い音が聞こえた。

……………ん？蹴られた音が聞こえたわりには、全然衝撃が来ない???

あまりにも痛過ぎて、逆に神経が痛みをシャットしたのか？

それとも私はまだ生きているのか？既にあの世に来てしまったのか？

少し怖いがそつと目を開けてみる。

BGM：英雄の証　　M H X X v e r .

「オオオオオオ!!」

私が目にしたのは短い脚で踏ん張りながらも、二本の触手で蹴りを受け止めているジョニーの勇ましい後ろ姿だった。

更に私の後方から飛んできた青白い粘液がヒトガタの関節に降り掛かり、その動きを阻害する。

この粘液は間違いない、スミスが吐き出したものだ！

「キイイイイ!!」

予想通り、ジョニーに続いてスミスも現れると私を守るようにヒトガタに立ち向かう。

お前達、私を助けてくれるというのか!?

駆逐艦と一緒に風呂に入ったことで腹を立ててお前達を排除しようとしたり、お前達を勝手に事件の犯人扱いしたこの私を!?

二匹に対する感謝と感動の気持ち、そしてそれに対する私自身の情けなさに涙と鼻水まで出てきた。

そうか！龍田の証言でお前達が通気口に潜んでいたとの情報があつたが、その理由が分かった！

お前達もこの事件の犯人を追っていたんだな！

だからこそ私が誰にも行き先を告げていないというのにも関わらず、ここに駆け付けることが出来たのか。

………しかしちよつと待て？

コイツ、神通をも超えるパワーの持ち主の蹴りを普通に受け止めて
いる？

この小さな体格で？嘘だろう
!!!???

『ブオオオオオオン……。』

「オオオオオオ!!」

ヒトガタはジョニーを振り解こうとするが、ジョニーは人型の足を
掴んで離さない。

それどころか二本の触手で徐々にヒトガタを持ち上げていく。

信じられん、なんてパワーだ。

神通より強いカマキリよりも更に強いジョニー、もう訳が分からな
い。

「キイイイイ……。」

その間にミスは力を溜めるような動作と共に口腔から赤黒い光
を漏らし始め、それとは対称的に全身からは青白い光を放ち始めた。

どんどん赤みを増していくスミスの口元。

全身から放たれる青白い光はどんどん強まり、部屋中を眩しく染め
上げていく。

それに対して焦りを見せるかのように暴れるヒトガタだが、逃すま
いとジョニーは全力でヒトガタを押さえ続ける。

「キイイイイ!!」

やがて全身から禍々しく感じられる程の赤黒い稲妻を迸らせるス
ミス。

その迫力はG級の深海棲艦でもたじろぐ程のものだろう。

この殺気は私に向けられたものではないから私は平気でいられる
が、もしもこれが私に向けられたものであれば、私はすぐさま白目を
剥いて失禁しつつ気絶するに違いない。

な。

……って小屋が崩れ始めた!?

次々と落ちてくる小屋の破片には、金色の糸が絡みついているのが見て取れた。

恐らく廃屋同然のこの小屋を、カマキリが自身の糸で補強していたのだろう。

しかしカマキリが倒されたことと、スミスの規格外なビーム攻撃によりその力を失い崩壊を始めたのか。

って、冷静にそんなことを考えている場合じゃない!

早く逃げないと瓦礫の中に埋まってしまう!

………あつ、逃げようにも私の手足は縛られていたんだつた。

ジョニーツ、スミスツ、助けてくれ〜っ!!

って、もうあいつらないじゃないか!

あんの薄情者共め、見直すんじゃないか!

うおおおお、早く解けっ!!

カマキリは倒されたんだ、その拘束力も今なら弱まっているハズ!!

よしっ、解けた………って大きい破片がこつちに、ぐへえ!?

「……………とさん、長門さん。」

うくくくん、むにやむにや。誰だ、私を呼んでいるのは？

昨日の晩から寝てないから眠いんだぞ……………。

「長門さん、起きて下さい。」

「むにや……………んっ、神通？」

目を覚ますとそこにいたのは神通だった。

「長門さん、今度は何をしたんですか？」

何って、何のことだ？

起き上がって周りを見回すと、そこは自室の布団の中ではなく野外の瓦礫の中だった。

……………そうだ、私は小屋の崩壊に巻き込まれて気絶していたんだ。

「ここは随分と前に放棄された小屋なんですけど。突如として外から爆音がしたので何事かと思つて業務を途中で休んで見に来てみれば、小屋は崩壊、貴女は昼寝。いい身分ですね？今朝に私が言ったことをもう忘れたんですか？そもそも廊下の掃除は終わらせたのですか？」

こ、これは非常に怒つてらっしゃる……………。

しかし私は泥棒騒ぎを解決に導いたんだ、頑固な神通だつて話せば分かつてくれるはず。

とはいえ馬鹿正直にカマキリが泥棒をしていて、それをジョニー達と一緒にやつつけましたなんて言つてもそんなの信じてもらえるワケがない。

私だつて実際に見なければ、とてもじゃないが信じないだろう。

それに色々あり過ぎて、私自身上手く説明出来る自信が無い。

説明が出来ない事を並べ立てても単なるいい訳か、頭がおかしくなつたと思われるのがオチだ。

だがここで私が確保した盗品を見せれば、説得も難しくはないはずだ！

あつ……そういえば盗品はヒトガタの身体になった挙句、スミスの攻撃で消し飛んだんだった。

「どうしたんですか？何か言いにくいことでもあるんですか？」

神通が真顔になっていく。

ヤバイヤバイ……せつかく事件を解決したというのに、このままでは私は死ぬぞ？

……何か、何か使えそうなものは残ってないか？

ハッ、あそこの陰に盗品が残っている!？」

「神通つ、これを見てくれッ!」

すかさずそれを拾い上げ、神通に差し出す。

「……………へえ、それで何か言い残すことはありますか？」

あれ、神通の反応が芳しくない？

何かマズいことをしてしまったのか？

ふと自分が持っているものに目をやると、そこにあったのは穴だらけになった那珂ちゃんのBDだった。

「あ、あの……これは……。」

「バカなことをした人へはお仕置きをしないとイケませんよね？私は体罰肯定派です、しかし何でもかんでも叩いて終わりというのは逆に教育になりません!」

反論は許さないというように、語尾を強めて言う神通。

「貴女がここで何をしていたのか追及はしません、ですが廊下の掃除をほったらかしにしていたのは事実。よってこここの小屋の後片付け及び、鎮守府全ての清掃が終わるまで寝ることは許しませんッ!!」

「えっ、でも昨日の晩は一睡もしてないいいですね?」……はい。」

ハアハア、やっと掃除が終わったぞ……。

一人で鎮守府全てを掃除させるなんて鬼畜の所業だ……。

あれから更に丸一日掛かった……その間は寝てもいなければ、ご飯も食べてない。

これ以上は冗談抜きで命に係わる……。

結局掃除は誰も手伝ってくれなかった、それどころか神通はワザと清掃係の連装砲ちゃんを休ませていたらしい。

あれだけ頑張って犯人を探して、更には死闘まで繰り広げたというのに得たものが一つも無い。

それどころか神通に二回も怒られて、カマキリには死ぬ寸前まで追い詰められ、拳句の果てには罰を受けた。

何一つ良いことが無かった、ここまで私の運は悪かっただろうか？

せめて瓦礫の中に何か使えるものが残っていないか調べたが、ほとんどの物は破損していたり、最初からゴミだったものばかりだった。駆逐艦パンツもあの戦いで消し飛んだのだろう、恐らく人に擬態するために衣類を求めたんだな。

それにしても神通は私に対する当たりが強くないだろうか？

私が配属された当初はそうでもなかったんだが、私が他所の鎮守府

の駆逐艦娘と狩りに出るようになってから徐々に厳しくなっていき、そしてこの鎮守府に雷と電が配属されてからそれはピークを迎えたんだ。

私が何をしたというんだ？何だ？駆逐艦娘と仲のいい私に対する嫉妬による嫌がらせか？

えっ、日頃の行いが悪いせい？自分の胸に手を当てて考えてみろだ
と？

何を言い出すかと思えば、私は常に清廉潔白だぞ？

それに胸に手を当てても、そこにはムニムニと柔らかい脂肪の塊があるだけだ。

やっと自室まで戻ってこれた、今日は一日中寝ていても文句は言われないだろう。

パジャマに着替えることも無く布団に潜り込む、食事も風呂も後回しだ。

「オオオオオ……。」

「キイイイ……。」

眠りに就こうとした瞬間、どこから入って来たのやら枕元にジョニーとスミスがやって来た。

「何だ？もう眠いから、お前らの相手はしてやれんぞ。」

そう言う私に対して、ジョニーはビー玉のようなものを差し出した。
きた。

気怠げに布団から手を伸ばし、それを受け取る。

私が玉を受け取ったのを確認すると、二匹はそそくさと立ち去った。

受け取った玉をしげしげと観察してみる。

玉は薄紫色に光り輝いており、光源が無いのに玉そのものが仄かに

光を発しているように見える。

見れば見る程に美しく、まるで吸い込まれてしまいそうな魅惑の玉だ。

最初はビー玉かと思ったが指触りもガラスとは全く違う、それどころか今まで一度も感じたことの無い手触りをしている。

これは宝石と呼ぶことさえおこがましい、もつと神秘を込めた言葉にすら出来ないナニかのようだ。

「……………、これは一体？」

未知との遭遇に疑問が湧くが、襲い来る眠気には勝てず、玉を枕元に置くと眠りに就く。

あいつらはこれを私に渡すためだけに来てくれたんだな、几帳面な奴らだ。

これが何かは知らないが、とても素晴らしいものだということだけは理解出来る。

フフツ、何も良いことなんて無かったと思っていたが、こんな素敵なものを買えるなんてまだまだ人生も捨てたものではないな♪

ここまでの登場人物2

天龍：クロオビ鎮守府に所属する狩娘で、この作品の主人公
………のだがあまり主人公らしいことをしていない。

狩娘としての基礎のきの字も出来ていない初心者だが、潮風丸に弟子入りしたことで太刀を使う際の立ち回りと狩技を学んだ。

しょっちゅう深海棲艦にボコられたり、公私ともに理不尽な目に遭っているが決して挫けない鋼のメンタルの持ち主。

修行中に妙なトラウマを作った挙句に気絶したり、アホらしい理由で長門に犯人扱いされたりしているが平気ったら平気なのである。

しかし心の中では散々不平不満を漏らしており、かなりのストレスを溜め込んでしまっている模様。

そのうちハゲるかもしれない。

嫌いな食べ物はいちゴ。

元々は嫌いじゃなかったのに、見ただけで気絶するほど大嫌いになった。

龍田：天龍のことが大好きなクロオビ鎮守府の狩娘。

天龍のことをいじめて楽しむ悪い趣味がある。

とはいえ意地悪をするばかりではなくちゃんと助けになってあげようとする良心も持ち合わせている。

しかし流石の龍田も本人のあずかり知らぬところで、天龍が新たなトラウマを作って帰って来るなんて夢にも思っていないのであった。

シュークリーム（ハズレ付き）を作ったり、氷結晶イチゴを作ったりと手先が器用で料理を作るのも得意。

お化けの存在は全く信じていないし、仮に遭遇したとしても全然怖くないらしい。

ある意味艦娘や深海棲艦だってお化けみたいなものだなんて言っちゃいけない、思っちゃいけない。

天龍を差し置いて遂に改二が実装されたが、改二装備はG級から（という設定）なので現在はお預け。

クロオビ提督：クロオビ鎮守府の提督、しかし残念ながら今回はあまり出番が無かった。

今回自分が使用する物に関しては、例えそれが使い捨ての物であろうがアホみたいに金を掛けるということが判明した。

提督としての務めを全然果たしていないようだが、実は……………。

神通：クロオビ鎮守府で秘書艦を務める狩娘。

クロオビ鎮守府最古参の狩娘で、数少ないG級狩娘。

その実力は丸腰でも非常に高く、大タル程度なら素手の一撃で粉砕してしまうほど。

更に三日程度なら寝なくても平気でいられる体力と精神力の持ち主でもある。

長門にカマキリの方が強いと評された、しかしあれで全力とは誰も言っていない……………。

ジョニー&スミス：天龍が海で釣ってきた不思議な生き物。

片手に収まるサイズの小動物だが、実はとんでもないパワーを秘めていることが発覚した。

基本的に気ままに鎮守府内をうろついているが、狩娘達を脅かす者に対しては悠然と立ち向かう頼もしい連中。

クロオビ鎮守府はいつの間にもやら、非常に頼もしい警備員を得ていたい。

雷や電と一緒に仲良くお風呂に入ったかと思えば、洗濯紐で長門を縛り上げて噛み付いたりスミを吐き掛けたりと、一見仲良くする人を選んでいるかのように見える。

とはいえ別に雷と電が好きで、長門のことが嫌いというわけではない。

むしろ鎮守府にいる狩娘で嫌いな娘はおらず、全員好きという社交的な生物。

中でも天龍のことは飛び抜けて大好きらしい。

電：クロオビ鎮守府に所属する狩娘で、第六駆逐隊の四女。

前ははまだ自重していたが、とうとう本格的にぶらずま化し始めた。

戦闘力はそこそこだが視野が広く戦術眼も高い、将来大成しそうな狩娘。

その巧みな戦術で長門を簡単にあしらった。

今回大人っぽい下着を穿いているということが判明した……エロいっ！

しかし残念ながらその下着が手元に戻ってくることは無かった。

雷：クロオビ鎮守府に所属する狩娘で、第六駆逐隊の三女。

あからさまな変態行動をしていた長門を心配してあげる心優しい……というかもはや危機感の感じられない天然な性格の持ち主。

ハイエースされたら簡単に連れ去られそう。(小並感)

お風呂場にジョニーとスミスを連れ込んだのは何を隠そう雷である。

今回子供っぽい下着を吐いているということが判明した……可愛い。

とはいえこちらの下着も灰となってしまったので、本人の下に帰ってくることは無かった。

長門：クロオビ鎮守府に所属する狩娘で、自称小さな子供の味方。非常にスタイルのいい美人だが、本人の性格がアレなので色々台無し。

自分の頭があまり良くないという自覚があるにも関わらず、名探偵を気取って適当な推理を始める困ったちゃん。

前回はまだ擁護のしようがあったが、今回の行為でどうしようもないド変態だということが判明してしまった。

電と共にキャラ崩壊が激しい狩娘であり、ある意味行き当たりばつたりで作られているシナリオの犠牲者でもある。

他所の鎮守府の駆逐艦娘に対してもちよくちよくちよつかいを出しているらしく、時折鎮守府に苦情が届いている模様。

神通が自分に対して辛く当たってくることを気にしているが、その原因が分かっていないらしい。

神通のことを体力お化けだと思っているが、かく言う本人も一睡もしないまま神通とカマキリ相手に立て続けにぶっ飛ばされて、なおかつ鎮守府全体を一人で掃除し終えるという並外れた体力の持ち主。

使用武器は大剣のブレイズブレイド。

しかし肝心な時に持つておらず、シャベルで代用するという大失態をやらかした。

川内：クロオビ鎮守府の夜戦忍者。

番外編にてようやく本人の出番が巡って来た………が、特に活躍はしていない。

ついでに天龍ともようやく対面することが出来たが、肝心の天龍には幽霊と勘違いされており川内と認識されていない様子。

自室は汚部屋、というか夜戦以外のことに對する興味が薄いらしい。

潮風丸：過去のカリユード諸島で使われていた交易船の記憶から生まれた狩娘。

世にも珍しい男性の狩娘である。

通称『船長』、天龍からの呼び名は『師匠』。

かつて自分に乗って交易をしていた船長のことを敬愛しており、自分も船長のように立派な交易家となることを夢見ている。

しかし扱っている商品は奇妙なものが多く、売っている本人ですら使い道が分からないものまで混ざっている。

その独自の喋り方は船長譲りのものであり、本人の得意とする剣術も船長譲りのものである。

船長譲りの剣術を広めることも目標の一つだが、肝心の弟子が少ないことを気にしている。

龍田が自身の商売のお得意様だからという理由だけで無償で天龍の特訓を引き受けたり、貴重な狩技ドリンクを惜しみなくガバガバと天龍に飲ませたりする気前のいい性格。

しかし龍田から天龍の詳細を聞いていなかったことに後で気付いたり、天龍が狩技ドリンクを嫌がっていることに気付かなかつたりと若干ズレた性格をしている。

言うまでもなくモデルは交易船の船長、というか実質本人。

ちなみに名前の由来は交易船の船長の口癖である『潮風がワシを呼んでいるゼヨ！』からであり、非公式のものである。

剣レン丸：潮風丸のオトモの連装砲ちゃん。

海で溺れていたところを潮風丸に助けられてオトモになった経歴がある。

連装砲のくせに溺れていたのかと言わない。

潮風丸の一番弟子を自称しており、尊敬する潮風丸に近づくべく日々彼の動作を真似している。

当然喋り方も真似しているが、半角カタカナ中心の見づらいセリフ

で話す連装砲語に更にゼヨを付け加えていく作業は作者を大いに苦しめた。

潮風丸に斬られても気にしなかったり、弟子となった天龍に自分のことをお兄ちゃんと呼ぶせよとするなど、潮風丸に負けず劣らずズレた性格をしている。

モデルは交易船の船長の弟子のアイルーである剣ニャン丸。

ドスロ級さん：クロオビ鎮守府の訓練所で飼われているドスロ級。見た目は何の変哲もないドスロ級だが、その実力はギルドクエストレベル140並みである。

まだ駆け出しの頃の神通によって捕獲され、訓練相手として共に切磋琢磨していった結果、恐ろしいまでの実力を手に入れた。

深海棲艦としての使命や本能などどうでもよいらしく、今は新たに訓練所にやって来る新人狩娘や新入りの深海棲艦の相手をするのが日々の楽しみ。

訓練所の深海棲艦達が大人しくしているのは神通や世話係の連装砲ちゃんの努力ももちろんあるのだが、一番の要因は所詮はドスロ級と舐めて掛かってくる身の程知らずの新人を彼が叩きのめして教育しているからである。

一方で接待プレイも得意であり、新人狩娘に自信を付けてもらうために手加減してわざと負けてあげたりと、飴と鞭の使い分けも出来る賢い深海棲艦。

その実情を知る狩娘から畏敬の念を込めて『さん』付けで呼ばれ続けた結果、他のドスロ級との区別も兼ねてドスロ級さん呼びが定着した。

カマキリ：いつの間にか鎮守府に住み着いていた未知の生物。

カマキリに酷似しているが、本当にこれがカマキリなのかどうかは不明。

今まで発見されてこなかった新種の生物であり、長門は実は大発見をしていたのだが、そういうことに対してあまり興味の無い長門は深く考えずにスルーした。

新種生物の命名をしたがっていた雷に紹介すれば、長門にとって駆逐艦天国が待っていた………かもしれないのに惜しいことをしたものである。

大きさは20センチほどでカマキリとしては大型種だが、これで成虫なのかどうかも不明である。

尾から吐き出す黄金の糸は強度に優れ、これを使って周囲の物を組み上げて大きな巣を作る。

巣を周辺の生物に擬態させるといった習性も持ち、更に操り人形の要領で糸を動かし、その生物の動きを真似ることも可能である。

しかし糸を操る本体が倒されると、何故か糸の強度も大きく下がり解けてしまうようだ。

糸が解けてしまう理由は不明、多分ゲーム的な都合主義。

巣が人型をしていたのは、この地域では狩娘と深海棲艦の活動が活発なため、それに合わせて巣の形を人間に似せたためである。

暫定的な名前はアトラルカマキリ。

初期プロットでは長門に盗品の中に混ざっていた殺虫剤が使われて追い払われる予定だった。

しかし仮にもラスボスを務めたモンスターがそれでやられるのは流石にあんまりなので却下された。

その代わりに軟体動物コンビと戦い、木端微塵に爆破されて完全に死亡した。

古龍級生物とはいえ、本物の古龍2体が相手では流石に分が悪かったのだろう。

天龍ちゃんと運命の出会い（？） 1

「いい加減頃合いよねえ。」

「うん、何のことだ？」

「天龍ちゃんはもう狩りの基礎は覚えたでしょう？なら今度は私以外の狩娘と一緒に狩りに行ってみなきやあね？」

いつもながら食堂で朝食後に唐突な提案をしてきたのは龍田。

オレは今まさに食後のコーヒータイムの真っ最中なんだぜ？

まだそんなこと考えたい気分じゃないんだけど……。

もはや朝食↓龍田の提案↓オレが巻き込まれるっていうのが一種のテンプレと化してるな。

「それよりも修行を終えて鎮守府に帰って来てからの記憶が全く無いつてというのが気になるんだけど……。やっぱアレか？演習で疲れ過ぎて部屋に戻ると同時に寝落ちしたのか？しかも日付も3日くらい進んでいるような気がするし、なんだか気味が悪いぜ。」

「そ、そうね……。昨日の天龍ちゃんはとつてもくたびれていたもの、すぐに寝ちやったのよお。それと日付の件は気のせいよ、気のせい！天龍ちゃんが昨日の日付を勘違いしていただけじゃないかしらあ？えっと、昨日の話はもういいでしょ？終わったことを気にするなんて天龍ちゃんらしくないわよ！そんなことより今日の話をしましょう、今日の！」

そんなことって酷くない？オレすげえ気になってるのに……。

昨日の話をしようとすると慌てて話を逸らそうとする龍田の挙動

不審な態度が気になるが、それについて詮索されたくないのか龍田は強引に話を進めようとする。

「それでねえ太刀の扱い方は覚えても、まだ狩りにおける狩娘同士のマナーについては教えてもらってないでしょう？他の狩娘と一緒に狩りに行く場合は1人で行く場合とはワケが違うわよ？この際に狩りのマナーも覚えてしましましょう？」

なんか若干誤魔化された気がするが、言ってることは確かに一理あるな。

いつまでも姉妹2人でつるんでいるワケにもいかねえし、気心の知れた同じ鎮守府の仲間同士ならともかく、他所の鎮守府の狩娘と一緒に狩りに行くことだつてあるだろうからな。

そんな時にマナー違反なんてしたら恥ずかしいし、だからといって知らない相手とは一緒に出たくないだなんて人見知りの子供みたいな真似は嫌だろ？

「分かった分かった、やってみるつて。」

「返事は1回でいいわよお。でもやる気になつてくれて良かったわ！」

「……とはいえオレは他所の鎮守府にツテなんてねーぞ？そもそもどうやって他所の鎮守府の狩娘と一緒に狩りに行くんだ？」

「うふふ、そう言うと思って今日は私のお友達を呼んどいたのお。天龍ちゃんならきつとすぐ仲良くなれるわあ。それからお友達と一緒に狩りに行くのならフレンド登録をしないと連絡も簡単よお。フレンドになった狩友とは簡単に連絡が取れるからねえ。フレに呼ばれたので移動します……フフツ、これも狩娘人生の中で一度は言ってみたいセリフの1つよねえ。」

お友達を呼んどいたつて……オレが断っていたらどうするつもりだったんだ？

まあそんなときやあそんなときで、適当に丸め込まれて結局一緒に狩りに行かされたんだろうが……。

それにしても龍田の友人だなんて、一体どんなじゃじゃ馬がくることやら……。

ハッキリ言って、始まる前から不安だ。

それとフレンド登録って何？

言葉の響きで意味は何となく分かるけど、ダチと連絡取りたいのなら電話やメールでいいんじゃないのか？

「それでそのお友達ってのは誰だよ？いつ来るんだ？」

現時点でオレ達以外に食堂にいるのはキッチン連装砲ちゃん。

それと水槽の中のジョニーとスミスだけで、それ以外に狩娘の姿は影も形もない。

ウチの鎮守府って、ある1名を除いてみんな朝早いからなあ……。オレだってそんなに寝坊助になつたつもりはないんだけどな。

まあ今日は珍しく長門が未だに眠りこけているらしいけど、それは偶然だよな？

アイツも寝坊することがあるってだけで、オレの謎の記憶の空白とは無関係なはず……。

「それが実は既に来てもらってるのよねえ、出てきていいわよお。」
そんな龍田の声と共に、食堂の入り口からゆつくりと姿を現したのは……。

「カモ……。」

「二式大艇ちゃん？」

えっ？こいつが今日のオレの相手……マジで？

これからオレはコイツと一緒に狩りに行かなきゃなんねーの!?

嘘だろ、コイツって鎮守府のペットポジションじゃなかったのか？

いやいや普通に考えてそれはねーだろ、そもそも龍田は狩娘だって言ってたじゃん。

とはいえ連装砲ちゃんが狩娘の補佐が出来る位の戦闘力を持っているのなら、二式大艇ちゃんもひよつとしたら強いのか？

「ばあつ!!」

「うおあああああああ
!!!??」

ドンガラガツシヤアアン!!!

あいててて……驚いて椅子から転げ落ちちまった。

だつ、誰だ!?!いきなり背後から大声出しやがったのは!?:

コーヒーを飲み切つてなかつたら、思いつきり服にこぼすところ
だったじゃねーか!?

「あつはつは、いくらなんでも驚きすぎだつびよん。」

音も無くオレの背後に立っていたのは、ピンク色の髪と三日月の髪飾りが特徴的な駆逐艦の狩娘。

「バルバレ鎮守府からやって来た卯月です!よろしくびよん♪」

そう、その名も睦月型駆逐艦娘の卯月……つてバルバレ鎮守府?

「卯月だけじゃない、です。弥生もいます。初めまして、卯月と同じく
バルバレ鎮守府から、来ました。よろしく、お願い……です。」

続いて食堂の入り口から普通に歩いて現れたのは、薄紫色の髪とお揃いの三日月の髪飾りを身に着けた、同じく睦月型駆逐艦娘の弥生。

「……というワケで私が呼んでいた狩娘の卯月ちゃんと弥生ちゃん
よお。ホラ、天龍ちゃんも挨拶して!狩娘同士の挨拶はマナーとして
基本中の基本よお?」

「えっ、挨拶?……ハッ、オレの名は天龍。フッフ、怖いかな?」

「尻餅着いたまま言われても全然迫力が無いつびよん。」

「うるせえ!……つてそうじゃない、お前一体ドコから現れやがった
!?!」

さつきまで食堂にはオレと龍田以外狩娘なんていなかったら?

瞬間移動か!?!それともステルス迷彩!?!はたまた隠れ身の装衣か!?!

「えへへ、近くのテーブルの下に隠れて待っていたつびよん。」

「ついでに、言う……二式大艇ちゃんを連れてきたのは……弥生。」

マジで?見るからにイタズラが好きそうな卯月だけならともかく、

マトモそうな弥生も加担してたのかよ……。

「テーブルの下にいたって、一体いつから隠れていたんだ？」

オレが朝食注文してそれを食べてからコーヒー飲むまで10分ちよいくらい、最低でもそれまで気配を殺して隠れ続けていたのか……。

物音一つ立てずに隠れ続けるとは我慢強いというか何というか。

ひよつとして忍者の末裔か、はたまた特殊部隊の隊員か？

「遅刻したら悪いと思って、朝早く鎮守府出たら、思ったよりも早く着いた……。だからここでご飯食べて、待ってました……。」

「ここで朝ご飯食べた後、そのまま龍田さんの合図があるまで出待ちしてたっぴよん。だけど2人が来るまではそのタコとイカと遊んでいたから、そんなに待った気はしないっぴよん。」

バルバレ鎮守府がここからのくらい遠いのかは知らねえけど、話を聞くからにはすげえ朝早くから来てたっぴいな。

つまりオレよりずっと早起してんだよな……。……やっぱオレって起きるのが遅い？

それにしても知らなかったとはいえ、他所の鎮守府からはるばるやって来たオレよりちっちゃい駆逐狩娘をそんなに待たせるとは悪いことを……。ん、龍田さんの合図？

「龍田ア！お前の仕込みかあ!?!あのイタズラはあ!!」

「もう、そんなに怒んないの。イタズラは卯月ちゃんりの親愛の証なのよ。ほら、弥生ちゃんも何か言っただけ。」

「……弥生、怒ってなんかないですよ？」

「ぷっぷくぷく。」

……ハア、もはや怒る気力も無くなった。

「それじゃあこれから天龍ちゃんは卯月ちゃんと一緒に狩りに行って

もらうわ。」

「それじゃあつて……他所の鎮守府の狩娘と一緒に狩りに行くっていうのは分かったけど、それで何で卯月なんだ？」

他所の鎮守府所属の狩娘なら誰でもいいだろ？」

それに卯月とだけ一緒に行くつて……弥生は何しにここまで来たんだ？」

「むく、卯月と一緒に行くのは不満っぴょん？」

「いやそういう意味で言ったワケじゃ……。」

両頬をぷくぷくと膨らませた卯月がオレを睨んでくる。

駆逐狩娘の不満げな顔ってヤバいな……。

迫力は全然無いけど、幼い子供を苛めているみたいで罪悪感がパナイわ。

「はいはい、喧嘩しないの。卯月ちゃんを呼んだのにはちゃんと訳があるのよお。」

龍田がパンパンと手を鳴らしながら仲裁に入る。

「少し前にバルバレ鎮守府の提督さんの話をしたでしょう？」

「ああ、パンツ穿いただけの実質全裸姿で深海棲艦を追い払ったつていうあの……。」

にわかには信じがたいエピソード。

一般兵器では歯が立たず、狩娘ですら苦戦を強いられる深海棲艦相手にパンイチでも渡り合える驚愕の戦闘力を誇る特別な人間。

それがここ、カリユード諸島における提督という存在だ。

しかしそれだけの実力があるのだとすれば、深海棲艦と戦う狩娘を率いるトップとしては相応しい。

……だというのに龍田はやれやれといった感じにため息をつき、首を横に振った。

「そっちの話じゃないわよお。」

「へっ？」

「バルバレの提督はもともとは提督の教育なんて一度も受けたことの

無い、単なる一般人だったってところよお。」

そんなこと言ってたっけ？パントの話が衝撃的過ぎて覚えてねーや。

「だけど不思議に思わない？」

「不思議い？何がだよ？」

「どうしてバルバレ鎮守府はそんな一般人を欲しかったのかってところよ？」

確かに言われてみればそうだな。

提督っていうのは誰でも簡単になれるような職業じゃない。

「艦娘の提督と違って狩娘の提督にはアタリハンテイカへの適性が求められるって話自体は前にしたでしょう？それでね、バルバレ鎮守府が造られた当初はまだ狩娘の提督が少なくて人材不足だったのよ。それで仕方なく狩娘の提督としての適性が無い人を最初の提督としたの。その人は本土でも立場があって信用のおける人だったんだけど、やっぱり狩娘の提督には向いていなくて鎮守府の成績は低かったの。本人も早く適性のある提督を派遣してくれってボヤいていたみたいねえ。」

「でも提督にアタリハンテイカへの適正が求められるって言われても、現地で戦う狩娘には関係のない話だろ？提督と一緒に出撃するワケじゃないしな。」

それに狩娘の提督は、艦娘の提督みたいに現場の指揮を執ってくれているワケでもない。

オレ達狩娘は一度現場に出れば、後は全部自分で考えて行動しているからだ。

ただ単にオレ達の提督がサボって指示を出していないだけならともかく、その代わりを務めている神通だって一回も指示をくれた事は無い。

ひよっとしたら他の鎮守府は違うのかもしれないが、少なくともオレ達の上層部は放任主義だ。

なので提督なんて、いてもいなくても変わらないように思えてしまう。

そもそも提督のアタリハンテイ力への適性って何の意味があるんだ？

適性が無いと提督になれないのか？

大体カリユード諸島における提督の役割って何なんだ？

狩娘が全滅した時の予備戦力って話は聞いたけど、それなら最初から補欠の狩娘を待機させときゃいいだけの話だ。

だったら自慢の腕つぶしで、反抗的な狩娘を服従でもさせんのか？
いや、それも違うか、オレの提督は普通に神通にボコられてたしな。

「ふふふ、悩んでいるわねえ。それじゃあ答え合わせよ。あのねえ、狩娘にとって提督はいるだけで意味があるのよお。いること自体が一番の存在意義なのお。」

いるだけで意味がある？ どういうこと？

アレかな？ 『大切な提督のいる鎮守府をやらせはしない！』みたいな感じで、それで力が湧いてくる……いや、そりゃねえわ。

そんなので力が湧いてくるなら苦労はねえし、そもそもそれじゃアタリハンテイ力全然関係ないもんな。

それにサボリ魔のオレらの提督が後ろに控えていても、そこまで必死になって戦うだろうか？

「そうねえ、簡単に説明すれば正規の提督のいる狩娘は能力にブーストが掛かると思えばいいわ。」

「はー。」

ようするにアタリハンテイ力に適応した提督が率いる鎮守府に所属しているだけで有利な補正が付くってことか？

「いやいや、いくら何でも冗談だろ！？荒唐無稽にも程がある！」

「まあまあ、落ち着いて。ちゃんと根拠はあるのよお。」

「あのね、前に初めてこの島に上陸した艦娘が最初の狩娘になってイ

級を追い払った話をしたでしょう？その狩娘はイ級を追い払うことが精一杯だったの。いくらその娘が手負いで、足手まといの艦娘を庇いつつ、しかも狩娘としての戦いに慣れていなかったとはいっても相手は所詮イ級よ。」

言われてみれば確かにそうだ、普通のイ級って大して強くないもんな。

「天龍ちゃんだって初めての狩りでいきなり複数のイ級を倒したでしょう？狩娘初心者天龍ちゃんがイ級を倒せて、同じく狩娘初心者とはいえ実戦経験のある艦娘がイ級を倒せないなんておかしいとは思わないかしらあ？つまり提督のアタリハンテイ力への適応の違いが、狩娘の戦力の決定的な差になってくるのよお。」

「つまりにわかには信じがたい話だが、オレ達がこうやって戦えているっていうのは提督がいるお陰ってことなんだな？」

「その通り、良く出来ました！だから私達の提督はサボっているように見えても、提督としての最低限の役目は果たしているってワケ。」

いや、あれは擁護の余地無くサボっているだけだろ……。

「じゃあ鎮守府を辞めて独立した狩娘とかはどうなるんだ？提督補正を受けられなくなっちゃうんじゃないか？」

例えば天津風とか潮風丸とか。

天津風が連装砲ちゃんをスカウト中に深海棲艦に襲われても太刀打ち出来ないし、師匠が自信満々にネバネバ剣法を繰り出して、それが深海棲艦に通用しなかったら虚しいどころの話じゃないぞ？

「それは大丈夫よお。鎮守府を辞めて独立するというのは便宜上の物であり、除名されたワケじゃないわ。それは終わりの無い休暇みたいなものよお。提督補正は受け続けられるから、もし今天龍ちゃんが旅人になるって言って家出をしたとしても、戦う力はちゃんと残されているから安心して家出をしてねえ。」

誰が家出なんかするかっ！

「でもさあ、なんで提督の差だけでどうしてそこまで違いが出るんだ

？」

「さあ？それは知らないわ、でも実際に結果が出てるからそれでいいのよ。考えても答えが出るワケじゃないし、アタリハンテイ力つていうのはそういうものって納得するしかないわあ。これからの研究に期待ねえ。」

さあつて、投げ槍にも程があるだろ……。

デメリットがあつたらどーすんだ？アタリハンテイカスゲーで済ますなよなあ。

「まあその話はいいとして、ここまで話してもらつても卯月と一緒に狩りに行く理由にはなつてねえぞ？」

「そうねえ、少し話が逸れたけど要するにバルブレ鎮守府の初代提督は狩娘の提督としては向いていなかったの。だから狩娘の提督として適性のある人材が新たに送り込まれてきたのよお。」

「まあ妥当な話だな。で、その新しい提督がパンツ一丁のまつ毛提督だつたつてワケか？」

そう聞くが、龍田は含み笑いを返すだけで否定も肯定もしなかった。

「今日卯月ちゃんを呼んだのはそれについて関係しているわ。だけどそこから先の説明は……。」

そう言いながら卯月と弥生を見る龍田。オレも釣られて二人に目が行く。

「私……弥生と……。」

「うーちゃんが説明するつぴょん！」

そう言つて胸を張る卯月と相変わらず無表情の弥生。

「今まで長い話をしたけど……続く話は、もっと長い……。それでもいっつ。」

「構わねえぜ、長話がなんぼのもんじやい！オレを飽きさせたきやその3倍は持つてこいってんだ！」

心配そうに聞いてくる弥生だが、ここで嫌とか言ったら女が廢る。本当は長話なんて大っ嫌いだが、ちっちゃい子がお願ひしてるのに、長話だからつて断るような女に生まれたつもりはねえ！

あつ、神通の長話でオレが飽きかけたつてのは秘密だぞ？

だから龍田、そんな顔でオレを見るな。

いくらお前でも、オレが長話をされるとすぐ飽きるつてことをみんなにバラすと許さんぞ！

オレは長門みたいにちっちゃい娘をどうしようなんて思っちゃいけないが、それでもガキンチョが見ている前のオレは、いつだつて最高に粹がつて格好いい天龍じゃなきゃいけないんだ。

変な格好したマヌケで寝坊助なHRが2に上がったばかりの初心者天龍なんてここにはいない！分かったか？

「まあ今からする話の半分以上は秘書艦の香取お姉ちゃんから聞いた話で、うーちゃん自身の話は少ないから信憑性は知らないつぴよん！」

「え？」

「香取お姉ちゃんはしつかりしてるけど、本気がジョークか分からない話も多いからどこまでが本当で、どこまでが嘘か分からないつぴよん。」

ええ〜……。

香取つて、直接会ったことないけど面白おかしいヤツなの？

もつと真面目で厳しい、委員長的タイプのお姉さんキャラじゃないの???

見栄を張ったのはいいものの、果たして時間を掛けてまでそんな与

太話を聞く価値があるのか不安になる天龍なのであった。

天龍ちゃん改め香取さんと運命の出会い 2

あちこちに立ち並ぶ赤茶けた古代文明の遺跡と、まるで黄金のように輝く枯草のコントラストが美しい平原。

きめ細やかな砂で作られた、黄金の海原のようにも見える広大な砂漠。

その二つの黄金の狭間に造られた、黄金でも何でもない平凡な鎮守府。

その名はバルバレ鎮守府、今回の話はここから始まる。

「提督、クエストから艦隊が帰投しました。全員無事の様子ですね。」
「どうも皆様、練習巡洋艦の香取です。」

私はここバルバレ鎮守府で秘書艦を務めさせてもらっています。教官役をイメージさせる練習用巡洋艦ですが、私自身はこの鎮守府が造られてからすぐに秘書艦として働き続けています。

なのでほとんど出撃してはおらず、狩娘としての実力は残念ながらまだまだといったところです。

えっ、今の私が着ているこの服ですか？ふふっ、似合っていますか？

いわゆる軍の教官のような外見をした香取型の制服ではありませんが、この緑色の受付嬢の制服も素敵でしょう？

こっちのカエルのポーチは私が自分で編んだのですよ。

「おう、そうかア。あいつらもクエストで疲れているだろうし、俺の方から出迎えに行くとするか！」

こちらの赤いテンガロンハットを被った初老の男性、彼が私達の提督です。

提督は本部においてかなりの地位に就いていた方なのですが、カリユード諸島における提督不足によりわざわざこちらに来て下さったそうです。

「それと俺のことは提督じゃなくて団長と呼んでくれって言うてるだろ？ 提督だなんて肩が凝って仕方ないな。はっはー！」

「あつ、すみません。……それでは、団長！」

「おうッ！」

提督……いえ、団長はいつも明るく笑顔の絶えない方です。

ですがその笑いが空元気だということを知らない狩娘はこの鎮守府にはいません。

「それに、俺はお前達に提督らしいことなんて何一つしてやれてないんだからな……。」

ここカリユード諸島では、提督にもアタリハンテイカへの適応が求められました。

どうしてそのようになるのか理屈は未だに分かっていませんが、アタリハンテイカへの適性が認められる提督が所属することで、その鎮守府に所属する狩娘の力は大きく高まります。

そして団長にはアタリハンテイカへの適性がありませんでした、それが団長の負い目となっているのです。

「そんなことはありません。……この鎮守府に団長のこと嫌いな狩娘なんて一人もいませんよ。」

「Hey! 団長ウー! ただいまネー!」

「睦月、帰投しましたー。作戦完了です!」

「おお、お前ら無事だったか……いや、そうじゃないな。良くやった!

それでこそ我らの鎮守府の狩娘だ！あと一週間くらいは帰ってこないかと思っていたぞ！はっは！」

帰投してきたのは狩娘の金剛さんと睦月さんです。

ここバルバレ鎮守府は完成からまだ日が浅い鎮守府であり、また团长も臨時の提督としての扱いのため所属している狩娘は非常に少なく、私を含めてたったの三人だけです。

「ボロボロにされたけど今日は1オチしなかったにや！どお、睦月だって立派に成長してるんだよ？」

「あれ、戦闘中に間違えてモドリ玉を投げてBase CampにWent backしたのはどこの誰だったかナー？オヨヨ、置き去りにされて私は悲しいネー。」

「にやあああああ！それは言わないで！」

どこまでも明るい二人ですが、二人ともハンターランクは未だに1。

装備もまだまだ貧弱で、常に苦戦を強いられています。

金剛さんの防具はロツクラツク鎮守府にいた竜人妖精さんが着ていた服、それを狩娘サイズに仕立て直した民族衣装。

睦月さんの防具に至っては、食料として平原で仕留めたケルビというシカの革をなめたものに過ぎません。

ただでさえ不利だというのに、この程度の貧弱な防具では身を守るのにも限界があります。

ここがカリユード諸島でなければ、何度轟沈するのかわかったものではありません。

「二人とも悪いなア、俺が不甲斐ないばかりに苦労させて。本当なら香取も付けて三人で行かせてやりたいんだが、秘書艦抜きじゃ業務に支障が出るし、鎮守府の守りも薄くなっちゃうんでなア。」

「それは言わない約束ネー。团长に貰ったこの必殺のGun Lanceがあれば向かうところ敵無しネー！」

「そうそう、睦月だってあれから一生懸命世話をして虫さんと仲良くなったんですよ。マルドローンちゃんと一緒なら負ける気がしないにやし！团长はそんなこと気にせずに提督らしくどーんと構えて

「いれればいいにや！」

「はっは！愛されてるなア。ガラにもなく暗くなって悪かった。全く、お前達は俺にはもつたいたいないう狩娘だよ！」

「ほら、言った通りでしょう？ここの鎮守府に団長のことが嫌いな狩娘なんていませんよ。」

「まー、私の団長に対する愛はLoveじゃなくてLikeだけドネー。」

「おっと、振られちまったか。はっは！残念だなア。」

「団長は私のPapaだよ。Loveにはなれないけど大切なFamilyだからネー！」

「睦月にとつてはおじいちゃんだよおー！」

「おい見ろ香取、一瞬で可愛い娘と孫が出来たぞ。こりやめでたい！もう飲むしかないなア、酒。」

「もう、こんな時間から飲まれては困りますよ。」

「団長は嬉しい事があるとすぐにお酒を飲もうとします。」

「一度酔っぱらって大切な書類を紛失したこともあるので、お酒の管理だけは気を付けなければいけません。」

「これで山城のヤツがいればもつと最高だったんだがなア。」

「山城……ですか？」

「ああ、そうだ。そういや話してなかったか。山城はなア、俺が本土で普通の提督をやったときの鎮守府に所属していた艦娘で、一番付き合いの長かった頼れるヤツさ。それでな、俺が提督を辞めたときと前後してあいつも大本営命令で狩娘になるためカリユード諸島に向向したのさ。経験豊富なあいつなら、狩娘になっても上手くやれるからなア。」

「懐かしそうに語る団長、その口調からも山城さんへの信頼が伺えますね。」

「むう、それって睦月じゃ頼りにならないってことにやしい？」

「そう言つて怒る睦月さんですが心の底から怒っているようには見

えません。

これも怒ったふりをしているだけで、彼女なりのコミュニケーションなのでしょね。

「はっはー、そうむくれるな。お前達のこと頼りにしてるさ。しかし山城のヤツ、今はどこの鎮守府にいるのやら？ 当時は俺もカリユード諸島に行くなんて夢にも思わなかったから行先を聞きそびれたなア。もしあいつと連絡が取れたらお前達と一緒に狩りに行ってもらおうように頼んでやろうか？ あいつは何だかんだで世話焼きだ。それにあいつだって俺の頼みとありや断れんだろ、後が怖いがな。はっは！」

私達バルバレ鎮守府の狩娘は常に苦戦しながらも、この団長と共に二人三脚で過ごしていました。

弱くたっていい、遅くたっていい。少しずつ少しずつ、一步一步前進していく。こんな鎮守府が大好きでした。

……ですが、やはり団長はみんなが思うように戦えないことに責任を感じていたようで、常に新しい提督の催促を送っていたようなのです。

そしてある日。

「おーい、みんな大ニュースだ！」

そう言って私達狩娘を集合させる団長、その声は今までになく明るいものでした。

「よし、全員集まったな。とは言っても三人しかいないわけだがな。はっはー！」

「どうしたのですか団長？急に呼び出したりして。」

「ひよつとして以前、香取お姉ちゃんが言ってた『青い恐竜』でも見つけたにやしい？」

「それが本当ならBig Newsどころの騒ぎじゃないネー！ジャギイのことでさえ未だに信じられないっていうのに、そんなBig gerなDinosaurがいるなんてUnbelievable！そんなのがいたら私は鼻から紅茶を飲んでもいいもんネー！」

「むむう、言ったなあー！もう取り消せないぞー？」

「H A H A H A！女に二言は無いネー！」

「あの、盛り上がっているところ悪いのですがそれは……その私も一瞬そう思っただけで……そもそも恐竜かどうかすら……。」

今でもあの出来事は鮮明に思い出せます。

あのとき私は苦戦の絶えない二人のために、平原から少し離れた森の中でハチミツやアオキノコを集めていました。

陸上なら危険な深海棲艦は現れない、それにこの森にも危険性の高い野生動物は確認されていない。

そういうった事情により、油断した私は周りに注意を払うことなく採集に夢中になっていました。

その時です、今まで大人しく草を食んでいたケルビ達が突然走り出し、野鳥も一斉に飛び立ちました。

ここで私もようやく異変に気付いたのですが、次の行動に移る間もなくズンツ、ズンツという重々しい音とともに、木々の隙間を緑色の

光を放つ青い巨体が横切って行ったのです。

呆然とする私を他所に、緑の光はそのまま森の奥に消えていきま
した。

信じられない光景を前に放心した私は固まってしまい、やがてあま
りに帰りが遅いので心配して探しに来てくれた団長にこっぴどく怒
られるまでその場に立ち尽くしていました。

僅から秒にも満たない出来事でした、今思うとあれは白日夢だった
のかもしれない。

でもあの緑色を見た瞬間に、ふと今朝テレビで見た内容を思い出
たんです。

『近々運命を大きく変える出会いあり、ラッキーカラーはグリー
ン。』って……。

普段は占いなんて全く信じない私ですが、あの緑色を見た瞬間に表
現が難しいんですけど、こう……ビビッと感じたんです。

ひよつとしてこれが運命の出会いの始まりじゃないのかなって？

その運命が良い運命なのか、はたまた悪い運命なのかは分かりませ
んが、その日以来占いを信じて緑色の制服と自作のカエルのポーチを
身に着けるようにしたんですよ。

未だに運命が大きく変わった気はしませんが、あの緑色との出会
いは幸運の前触れだったんじゃないかなって思ってるんですよ？

団長に話したら笑われましたけどね。

「はっは！残念だがそうじゃない。別に鼻から紅茶を飲む必要はない
ぞ。」

「じゃあ何なのサー、勿体ぶらずに教えて欲しいネー。」

話を急かす金剛さん。当然私も睦月さんも話の先が気になります。

「お前たちをびつくりさせようと思って黙っていたんだがな、今日からこの鎮守府に新たな提督が着任するぞ。」

「新しい提督にや?」

「Really?」

「今日から!?!」

団長の口から飛び出したのは、私達の予想だにしなかった言葉でした。

「ええっ、今日!?!本当に今日からなんですか?何でそんな急に!?!」

「ど、どういうことネー?」

「まあまあ、お前ら落ち着け。ほれ、入ってこい!」

団長の合図と共に、部屋の中に一人の人間が入って来ました。

入って来たんですが……。

「えっ!?!」

「ひよっとして……いや、ひよっとしなくても子供ネー?」

「嘘!?!睦月よりちっちゃい!?!」

そう、入って来たのはどう見ても小学生にしか見えない黒髪の幼い少年だったのです。

子供サイズの白い提督服を着ていますが、まるで似合っておらず服に着られているようにしか見えません。

「……………」

「……………この子ちつとも喋らないネー。」

「無口な方なのでしょうか?」

「どうした?緊張しているのか?はっは!心配しなくても大丈夫、みんないいヤツさ。ホレ、まずは挨拶と自己紹介を試みたらどうだ?何事もまずは挨拶からだ。」

「……………」

それでも頑なに喋ろうとはしない少年提督、仕方ありませんね……。

「では私から。練習巡洋艦、香取です。ここの鎮守府で秘書艦を務め

させていただいています。どうぞよろしくお願いします。」

「英国で産まれた帰国子女の金剛デース！ヨロシクオネガイシマース！」

「睦月です。はりきって、まいりましょー！」

「……………」

沈黙が辛い……。なんでこの人喋らないんでしょうか？

まさか失語症とかじゃないでしょうね？

1分程経つたでしょうか？

4人の視線に晒されてようやく喋る気になったのか、新しい提督の重く閉ざされた口が開きました。

「……………ゆうた（仮）、よろしく。」

えっ？それだけ？

自己紹介ですよ、もっと他に話すことはないんでしょうか？

ちなみに本当は本名を名乗ったのですが、ここはプライバシー保護のため名前は『ゆうた』とさせていただきます。

とにかくゆうた提督は名前を名乗り、最低限の挨拶をした後、また黙ってしまいました。

「ま、まあこいつは提督として着任するのはこの鎮守府が初めてになる新米で、不慣れなところも多いだろうが、みんな仲良くしてやってくれ。」

団長も必死にフォローをしていますが、流石にこれじゃあ…………。

「あれ？その子が提督になるってことは、団長はどうなるネー？」

そういえばそうでした。団長と呼ばせているとはいえ、団長も提督に違いはありません。

提督が2人もいる鎮守府なんて前代未聞です。

「ああ、そのことだが俺は一旦本部に戻ることにした。悪いな。」

申し訳なさそうに言う団長。

「……つてことは、団長はこの鎮守府からいなくなっちゃうの!?!そんなのヤダー!」

「えっ、えっ……?本部に戻る?それこそ急過ぎますよ!?!」

駄々をこねる睦月さん。当然私も金剛さんも同じ気持ちです。

新しい提督が来るのはいいことなのかもしれません。

苦戦続きのこの鎮守府にアタリハンテイ力に適応した提督が来るということは金剛さんと睦月さんの負担が減るということであり、臨時ではない本物の提督権限により、新しい仲間を建造する許可が下りたということでもあります。

ですが心の準備も無く団長とお別れだなんて、納得出来るハズがありません。

「心配するな、誰が二度と戻って来ないって言った?一旦帰るだけだ、一旦な。」

そう言つて落ち着かせようとする団長ですが、金剛さんと睦月さんは食い下がります。

一方で置いてけぼりをくらったゆうた提督は、近くにあったテーブルの周りをぐるぐると走り始めました。一体何をしてるんでしょうか???

「古巣の先生に呼ばれているんだ。いい加減帰らないと先生に怒鳴られるかもしれないだろ?先生が怒っているところは見たことないが、あの人は怒らせたくないんだ。心配しなくても用事が済めば帰ってくるつて。まあ俺は提督としては用済みだから、戻ったところで単なる穀潰しになっちまうがなア。」

団長の先生ですか?一体どんな方なんでしょう?

初老の団長が先生と呼ぶ方なら、背中の曲がったヨボヨボのお爺さんかもしれませんか?

「それと山城のヤツに定期的にここの様子を見てもらえるよう頼んできてやるから心配するな。今のあいつはドンドルマ鎮守府つてここで狩娘をやっているんだとき。ドンドルマつて言ったら鎮守府の中でも特に大きいところだからなア、そんなところで働いているなんて

アイツも出世したもんだ。帰りの船が丁度ドンドルマにも寄るらしいから、久しぶりに顔を見に行くついでに頼んでみるさ。強要するつもりはないが、アイツなら断らないはずだ。まああいつもあいつで忙しいかもしれないけどなア。はっはー！」

ドンドルマ鎮守府……、ミナガルデ鎮守府やロツクラツク鎮守府にメゼポルタ鎮守府といった鎮守府と並んで最大クラスの鎮守府です。そこで特別な立場に就く程の狩娘だとすれば、その実力も窺い知れるというものです。

「それにこいつはこんなナリでも、本部が送ってくれた真正正銘の提督なんだ。正直俺もこんな子供が来るなんて思ってもいなかっただが、きつとお前達の力になってくれるハズさ。」

団長はゆうた提督の方に向き直り、ゆうた提督も団長の視線を感じたのか走るのを止めて団長の方に向き直りました。

「それじゃ、俺はここを離れる。後のことは頼んだぞー！」
「……………」

結局ゆうた提督からの返事はありませんでしたが、団長はそれで構わないのか鎮守府から去って行きました。

当然団長を見送りに行く私達ですが、一方でゆうた提督は見送りに参加することはなく、またしてもテーブルの周りをぐるぐる走り始めました。

マイペースにも程があります、ひょっとして走るのが好きなんでしょうか？

こうして新しい提督との新しい生活が始まりました。

正直不安しかありませんが、この年で提督になったのですからそれ相応の実力は備えていると見るべきでしょう。

これも運命を大きく変える出会いなのだと信じて……。

香取さんと運命の出会い3

新しい提督と共に新たな一步を踏み出したバルバレ鎮守府。

正規の提督が加入したことにより戦力は向上し、更に建造の許可が下りたことで新しい狩娘も増えてきて鎮守府も徐々に賑やかになってきました。

今まで苦勞を続けてきた鎮守府は生まれ変わり、全ては順調になるかと思われたのですが……。

「提督！・どういふことなのですか!?! ましても苦情が届きましたよ！」

「うるさいかとり いまいそがしい でだけ。」

どうやらこのゆうた提督、提督としてのイロハが無いどころか、人間的にもまだまだ幼いようで、至るところで問題ばかり起こします。

他所の鎮守府に一方的に資材をねだり、禁止されている改造クストや改造裝備を求め。

拳句の果てには連装砲ちゃんの改造にまで手を出そうとしました。

もつとも技術と知識が足りなくて、改造どころか分解すら出来なかつたみたいですが。

しかもどうやらそれが悪いことだと思っていないようなのです。

彼は本当に軍の育成機関を卒業したのでしょうか？

ゆうた提督が提督らしいことをしている場面なんて見たことがありません。

執務室はゆうた提督に占領されて子供部屋と化してしまい、仕方な

く物置を整理して新たな執務室として使っているのが現状です。

子供相手に何を期待しているんだ？って思われる方もいるかもしれませんが、提督というのは責任のある立場なんです。

子供だからといって何をやっても許されるなんてことはありません、責任が取れないのならそもそも提督になるべきではないのです！

「ヘックション!?我輩としたことが風邪でもひいたか？それにしても神通め。『いい歳した大人が他人に迷惑を掛けないで下さい。』とは失礼なヤツだ。我輩は迷惑を掛けるどころか美味いビールを作って世の狩娘どもに貢献しているというのにな、又ハハハハ！」

ゆうた提督は無口なのではなく、必要があるときにしか喋りません。

喋るときにはただどしく聞き取り難い話し方をします、そして指示が通るまでオウムのように何度も同じ言葉を繰り返すのです。

また彼はちよつとでも気に入らないことがあると癩癩を起して喚き散らします。

論してもまるで聞き入れず、反省の色も見えません。

ここはいつから託児所になったのでしょうか？

「しつこいとかいたいです、はやくでてけ、いわれたとおりしろ、ひしよかんのやくめでしょ。」

こうなってしまうともう手の付けようがありません、流石の私も解体されたくはありませんしね。

稼げるっていうから、そっちの方も絶対に探して貰ってくるっぴよん！

彼女もまた私の頭痛の種の一つです。

楽しそうな本人を見る限りきつと悪気は無いのでしよう、ですが狩娘としての非常識な行動はとても目に余ります。

そもそも普通の狩娘は改造クレストなんて持っているハズがないと思うのですが、そういう発想には至らないのでしょうか？

実はこういった問題行動を起こす狩娘は卯月さんに限ったことではありません。

提督があいつた方ですから、精神年齢の若い娘が多い駆逐艦の狩娘は彼の影響を強く受けてしまっています。

自分達のトップである提督があのような行動を取るものですから、自然と駆逐艦娘も問題行動ばかりを繰り返すのです。

お陰でここの鎮守府の評判は最悪です。

バルバレ鎮守府所属と名乗った瞬間に、他の鎮守府の狩娘に追い返されるといった話も少しずつ増えてきました。

駆逐艦以外の狩娘達も、提督があのようにではまるでやる気も起きないようです。

非常識な提督と駆逐艦に挟まれて、やる気が出る方がおかしいのかもしれません……。もしも私がいれば……。

もちろん私だって何もせずに見ていたわけではありません。

駆逐艦の狩娘が問題を起こすたびに注意をしてきました。

ですが『提督がいいと言っている。』との一点張りで終わってしまうのです。

私も秘書艦とはいえ、所詮は一介の狩娘に過ぎません。

あんな子供とはいえそれでも提督、私とでは言葉の重みも違うのでしよう。

金剛さんや睦月さんが一緒に出撃するときには問題のある狩娘のフオローに入ってくれますが、それでも彼女達は当然二人しかいません。

鎮守府の全員と出撃しようにも身体は足りませんし、疲労だつて溜まります。

金剛さんは目の下にクマが出来ました、睦月ちゃんは髪がボサボサです。

『紅茶飲んでる場合じゃないネー。』

……と力無く笑う金剛さんはもう見てられません。

最初は提督を教育しようとしたのですが、まるで聞く耳を持ちません。

話を聞かないだけならまだしも、逆ギレすらされる始末です。

次に提督を本部に送り返すことを考えましたがそれでは何の解決にもならない上に、戦力の低下にもつながってしまいます。

そもそも私にそんな権限はありません。

もはやこの鎮守府ではまともに戦っている狩娘の方が珍しいです。

ほとんどの狩娘は他の狩娘の狩りに便乗して、自分は何もせずにおこぼれを貰うだけのハイエナのような娘ばかりです。

その数少ないまともな狩娘の負担を更に増やすような真似なんて私には出来ません。

新たな提督との出会いによって確かに私達の運命は大きく変わりました。

ですが誰もこのような運命は望んでいません。

本当にグリーンがラッキーカラーなのでしょうか？私の心も流石に折れる寸前です。

……ああ誰か鎮守府を救って下さい。

「よう、その若い兄さん！元氣かい？この連絡船ももう少してバルバレに到着だ、いやあ楽しみだな。俺は会いたい奴らがいるんだ、あいつら元氣にしているかな？とところで兄さんは提督か憲兵さんかい？……えっ、この船の船員なのか？それも新人の清掃員？はっは！端正な顔付きにすっかりとした体幹をしてるもんだから、てっきり狩娘の関係者かと思ったよ。……へえ、兄さんは今から上陸まで休息时间なのかい。そりゃ休もうとしているところを引き留めて悪かつたな。袖振り合うも何とやらというし、また会ったら一杯やろうじゃないか。それじゃあな！」

香取さんと運命の出会い 4

「そういえば今日は連絡船が来る日でしたね、色々あり過ぎてすっかり忘れていました。」

この鎮守府に限った話ではありませんが、鎮守府には定期的に連絡船がやって来ます。

ここはカリユード諸島、本土には無い珍しい物がたくさんありますが、逆に言えば本土でしか手に入らないものも多いのです。

それに鎮守府の設備や調合を駆使しても作れない物は数多くあります。

そういった物資を補給するためにも、連絡船は無くてはならないものなのです。

ゆうた提督が着任してから心休まる日はありませんでした。

本来なら忙しい物資の搬入も、少しでも気分の転換になるのならむしろ望ましい限りです。

今日はもうクエストの受付業務を終了して、連絡船の受け入れ準備を始めた方がいいかもしれません。

一応提督にも伝えておきましょう、真面目に取り合ってくれるとは思えません……。

やっぱりまともに聞いてくれませんでした。

『ぜんぶやって やくめでしょ』だそうです。

秘書艦の役目は提督の補佐であって、提督の尻拭いではありません。

ハア……今の鎮守府を団長が見たら一体どんな顔をするのでしよう？

後のことは頼んだとまで言われたのに、子供一人にすら手を焼くなんて情けない限りです。

仕方ありません、私一人で連絡船の受け入れ準備をしておきましょう。

ドジャアアアアアアン!!!

辛い現実から目を背けるかのように鎮守府に搬入されてくる物資の予定リストに目を通していると、突然鎮守府全体に大銅鑼の音が鳴り始めました。

この大銅鑼はこの鎮守府の緊急警報です。

現在のこのご時世で、何故未だにサイレンではなく古めかしい大銅鑼を使用しているのかは不明ですが、とにかく滅多なことでは鳴らない緊急用の大銅鑼が鳴ったんです。

文字通り緊急事態に違いありません！

私自身も避難訓練など以外で大銅鑼の音を聞くのは初めてです。

ですがこれは訓練ではなく本当の非常事態、確認の為に急いで大銅鑼の設置されている屋上まで駆け上がります。

屋上まで着いてみると、その場を任されていた連装砲ちゃんがとても慌てていました。

その焦り方からこれは誤報でも訓練でもなく、本当に緊急自体だというのが一目で見取れます。

「アッ、香取サン！大変ダヨー！アレヲ見テヨー！」

私に気付いた連装砲ちゃんは屋上に備え付けてある監視用の望遠

鏡を覗くように促してきました。

一体何が見えたのでしょうか？

「言われた通りに望遠鏡を覗いてみます……………あつ、あれはっ!?

「緊急クエスト発令！緊急クエスト発令！この鎮守府に入港予定の交易船が正体不明の超大型深海棲艦によって襲撃を受けている！詳しい説明は一階のロビーで行う、戦闘可能な狩娘は直ちにロビーに集合せよ！繰り返す、この鎮守府に入港予定の交易船が正体不明の超大型深海棲艦によって襲撃を受けている！詳しい説明はロビーで行う、戦闘可能な狩娘は直ちに一回のロビーに集合せよ！」

全館放送で鎮守府中の狩娘に呼びかけます。

この目で見ても未だに信じられませんが、規格外の大きさを誇る深海棲艦が連絡船を襲っているのを確認しました。

バルバレ鎮守府近海どころか、カリユード諸島に初めて鎮守府が造られてから現在に至るまでの歴史の中で、あそこまで巨大な深海棲艦の目撃情報なんて一度もありません。

故に相手の正体は不明ですし、当然有効的な戦法も分かりません。そもそもあそこまで巨大な相手だと、挑むことすら憚られます。

ですがあの連絡船はこの鎮守府の生命線、それが撃沈されるとなると大打撃は必至です。

それに仮に物資などが関係無くても、船を見捨てる理由にはなりません。

何より深海棲艦の侵攻ルートから考えて、放っておけばそのまま鎮守府まで攻め込んでくる可能性も考えられます。

そうなる前に何としてでも食い止めなければなりません。

念のため提督にも声を掛けましたが、布団をかぶって縮こまっていた。
ました。

『ぼくはかんけない、ここくるじかんあるなら はやくなんとかしろ しねしねしねしねしねしねしね』とのこと。

何故声を掛けに行っただけなのに、罵倒されなければいけないのでしょうか？

とはいえ提督とはいえやはり子供、鎮守府まで攻め込まれるとなると怖いでしょう。

口こそ未だに悪いものの、いつもの傍若無人な振る舞いは見る影もありません。

ですがパニックを起こされないだけまだマシと考えましょう。

しかし深海棲艦を恐れて引きこもっても現状の回復にはつながりませんし、当然提督として取るべき行動でもありません。

やはり提督を頼るべきではないようです。

「集まったのは金剛さんと睦月さんだけですか!?他の狩娘は一体どうしたのです?」

ロビーに集まった狩娘は金剛さんと睦月さんのたった二人だけ。

この鎮守府にはあれから何人もの狩娘が所属したのですから、外出中の狩娘や戦闘不能の狩娘を除いたとしても、二人しか集まらないというのはいくらなんでも異常です。

「G i a n tな深海棲艦って話に、みんな怯えて戦意喪失しちゃって

るネー！」

「睦月も他の娘に声を掛けたけど、みんなオロオロするばかりで戦えそうにないのじゃ！」

私達の鎮守府の新しい狩娘達はほとんどロクに狩りをしたものがいません。

それで戦闘経験が少ないが故に、状況にまるで対応しきれていないようです。

「くっ、なんてこと……。ですが金剛さんも睦月さんもずっと他の狩娘のフォローを続けていた為に疲労が残っているはずです！今日一日は休息をするようにと、今朝言ったではありませんか!？」

普段からあまり怒鳴るようなことはしないのですが、緊急事態による焦りと人員の少なさによる不安からかつい語尾が強くなっています。金剛さんと睦月さんに当たっても仕方ないというのに。

それどころか休みを返上して駆け付けてくれた二人に対して、このような態度を取ってしまう自分が情けない限りです。

「でも誰も来てないじゃないですか！それに私達だって鎮守府の危機だつてときに、のんびり休んでいられないんです！」

いつになく真面目な様子の睦月さん。

「Oh、ムツキーの言うとおりデース！それにマトモな戦闘経験の無い狩娘を無理に出撃させたところで結果は見えてるヨ！ましてやT a r g e t は今までにないV e r y b i g な深海棲艦、戦意喪失した娘に相手が出るワケないネー。それくらいなら私が出マース！」

そして疲れているにも関わらず、戦意を隠そうとしない金剛さん。彼女達を説得するのは無理ですね。それにあまりこういうことを言いたくはありませんが、やはり他の狩娘を出撃させたところで戦力になるとは思えません。

この状況でお二人の出撃さえ認めなければ、間違いなく連絡船は沈没し、鎮守府も壊滅してしまうでしょう。

「仕方ないですね。分かりました、お二人の出撃を認めます。」

「Thank you! やっぱり香取は話が分かるネー!」

「あれからパワーアップした睦月のパワー、存分に見せてやるぞく! ようやく完成した睦月型制服のデビュー戦だにゃ!」

「ムムツ、私だつて新しい装備を揃えたんデスからネー! 負けないヨー! (吹雪型の制服ダケド……。)」

やる気満々で出撃しようとする金剛さんと睦月さん、ですがまだ話は終わっていませんよ。

「お待ちなさい、誰もタダで行かせるとは言っていないませんよ? その出撃……1つだけ条件があります。」

「条件?」

出撃に条件があると聞いて驚く金剛さんに、疑問を隠そうとしない睦月さん。

しかし無理を言つての出撃というのが分かっているのか、不安な様子は見えても不満な様子は見られません。

ふふつ、そう心配しなくても無理難題は出しませんよ。

「私も一緒に出撃する、それが条件です。」

「なあんだそんなことカー、もつと難しいこと言ってくるかと思つたヨー。そんな条件断るワケがないネー!」

「香取さんがいれば百人力だよっ♪バルバレ鎮守府の初期メンバーの強さを後輩に見せつけてやるいい機会にやしい!」

私が出した条件を聞き、笑顔を見せる金剛さんと睦月さん。

「それでは今から緊急クエストを開始します。メンバーは私、香取と金剛と睦月の三人。クエストの成功条件は超大型深海棲艦の撃退及び撃沈であり、失敗条件は連絡船の撃沈及び鎮守府が破壊されることです。それではいざ出撃っ!」

「おーっ!!」

こうしてカリユード諸島史上初となる超大型深海棲艦戦が始まっ

たのです。

先程までは穏やかだった交易船。しかしそこは現在、混乱の真っ只中であつた。

しかしそれは状況を考えれば当然の話で、むしろこの状況で落ち着くと言うのが無理な話である。

それもそのはず、連絡船は超大型深海棲艦の襲撃を受けていたのだから。

BGM：砂海に浮かぶ峯山

「うおおっ、何だあの化け物は!?!」

「深海棲艦だツ！早く迎撃態勢に着け！」

「信じられん、デカい、デカ過ぎる。この船よりデカいなんて……。あんなデカいのがいるなんて聞いたことないぞ！」

「オレだって聞いたことねえ！無駄口叩いているヒマがあつたらさっさと手を動かせ！」

なんてこった、もうすぐバルバレだつてのに……。連絡船に乗つてのんびりとバルバレを目指す優雅な船旅のハズが、こんなことになるなんてな。

突如として船の遙か後方に現れた巨大な深海棲艦は、かなりの勢いでこの船を追つて来ている。

深海棲艦とこの船の距離はまだまだ遠いが、逃げ切れる速度じゃない。

俺も引退したとはいえ提督の端くれ。せめて相手の正体を見極めようとは思つたが、流石にこの距離からじゃ黒い小島が動いているようにしか見えず、相手の艦種もさっぱりだ。

もつともあんな巨大な深海棲艦を見るのは初めてだし対策もすぐには浮かばないが、とにかく尋常な相手じゃないということだけはハッキリしている。

しかしこりや不味いぞ、船員達は完全に深海棲艦の迫力に吞まれちまつてる。

口では強がっているようだが、明らかに動きに精彩を欠いているな。

「団長殿！」

「おお、船長か？」

俺に声を掛けてきたのはこの輸送船の船長だ。

ハゲ……じゃなくてスキンヘッドが眩しい、大柄な体格と老け顔が特徴的な海の男だ。

「すまない、オレも長い間連絡船の船長をやってるがこんなことは初めてだ。いつも相手にしている小型の深海棲艦なら船員達でも相手が出来るんだが……」

そう言つて船の設備に目を向ける船長。

そこにあるのは古めかしいデザインの大砲とバリスタ。

まるで中世時代に逆戻りしたかのような兵器だが、アタリハンテイ力の影響下で深海棲艦に通用する兵器はこういったものしかない。

大砲とバリスタは竜人妖精さんお手製の兵器であり、現代兵器や艦装の武器とは違ってカリユード諸島に生息する深海棲艦にも効果がある。

もちろんそのような近代兵器と比べれば格段に使い勝手は格段に悪い。

しかしあると無いでは大違いであり、小型の深海棲艦程度が相手ならアタリハンテイ力に適応出来ない船員達でも十分に倒すことが可能となり、中型の深海棲艦が相手でも追い払うことが可能となった。

事実、今までずっとそうやって航海をしてきたのだから。

「こんな巨大な相手は初めてだ。この船も決して大きいワケではないが、だとしても相手がデカすぎる。目測100メートル以上はあるか？この船の倍近くだ、この目で見ても信じられん。文字通り深海に棲む艦だ……。こんなことを言いたくないが、正直オレの手に負える相手とは思えん。」

船長の顔が苦悩に歪む。船乗りとしての誇り、船員たちの命の安全、長年付き合ってきた船への愛情、戦って無事に済むのか、脱出したとして果たして逃げられるか、様々な考えがない交ぜとなっているのだろう。

「なあに、心配するな。ここは俺がいた鎮守府に近いんだ。あそこにいる狩娘ならすぐに救援に駆け付けてくれるさ！俺達が勝つ必要は無い。船長、アンタはここで時間を稼いでくれればそれでいい。後はバルバレ鎮守府の狩娘が全部やってくれる、何たってアイツらは強いからな！」

そう言っつて船長を励ます。正直言っつて狩娘が救援に来てくれる保証はない。だが、アイツらなら確実に来てくれると俺は信じている。「船長ともあろう立場の人間が弱みを見せて悪かったな。ありがとうよ団長殿、お陰で目が覚めた。何としても持たせて見せる！」

船長は自分の両頬をパシンと一発叩くと、大声で船員達に指示を出し始める。

「おいお前ら、手を休めるんじゃないやねえ！一班は大砲を撃ちまくれ！射

程は短いし射角も固定されているが、見た目は派手だからなあ！アイツを近付けさせないことが目的だ、命中させなくていい！二班はバリスタを使え！こっちはちゃんと命中させろ、射程に入るまでは撃つな！アイツの顔を狙え、顔面を撃たれて平気な奴なんていやしねえ！三班は一班と二班のフォロワーに回れ！弾を切らすんじやねえぞ、負傷者の手当ても忘れるな！舵はオレに任せろ、歴戦の船乗りの操舵術を見せてやる！いいか、必ず救援が来る！それもとびきり可愛らしいお嬢さんの救援隊だ！海の男ならお嬢さんの前でみつともない姿を晒すんじやねえぞ！分かったか！分かったのなら交戦開始だ、合図の大銅鑼を鳴らせエー……ッ！！」

「二二」ラジャー……ッ！！」「二二」

ドジャアアアアアアアン！！

流星は船長だ、あつという間に現場の混乱を収めやがった。

指揮力が高く人望もある、船員達の不安な空気も叱咤激励と大銅鑼の大音量で消し飛ばした。

こういう人にアタリハンテイ力の適性が無いのは惜しい限りだな。

しかし指揮系統が違うから口出し出来る立場ではないとはいえ、こういう時に何も出来ない自分かもしかしくなる。

今の俺に出来ることはみんなを信じて待つことだけだ。だったら信じて信じて信じ尽すのみ！あいつらなら絶対に勝てる、俺は信じているぞ！

香取さんと運命の出会い5

「撃て撃てえい！敵を近付けるんじゃないやねえぞ！残弾のことは気にするな、ここでやられちゃ意味がねえ！」

船長の指示により、超大型深海棲艦に向かって砲撃を続ける船員達。

だが深海棲艦は動きを止めることなく、どんどん船に接近してくる。

「信じられん、こいつあドス二級か？」

とうとう船の後方100メートル近くまで迫って来た、その深海棲艦の正体はドス二級だった。

提督であれば誰でも知っている、イ級と並んでカリユード諸島ではよく見かける駆逐二級。

俺も今までの提督生活において、本土でもカリユード諸島でも何度か見たことのある駆逐艦型深海棲艦、その大型種であるドスバージョン。

しかしここまで巨大化したヤツを見るのは初めてだ。

二級っていうのはイ級の親戚みたいなもんで、カリユード諸島では睡眠液を吐いてくることで有名なヤツだ。

ボスのドス二級は腕の生えた後期型の姿で、上顎にはミツクリザメを思わせる一本の角が生えていいる。

主に中規模の群れを作って活動をしており、手下の二級を従えて睡眠液を吐きまくる厄介な深海棲艦として認識されている。

だがコイツは一体何なんだ？

その姿は先程も言った通り、確かにドス二級だ。

深海棲艦特有の白と黒の二色の肌、白く短い腕、下顎の無い顔、そんな不気味な顔の中央で緑色に光る一つ目、鼻先から伸びた太く長い角。

どこからどう見てもドス二級そのものだ。だが、そのサイズは桁外れといったレベルじゃない。

二級のサイズは一般的に2メートルから3メートル程、そしてドス二級が8メートルから10メートル程とされており、カリユード諸島に現れる駆逐艦型深海棲艦の中でも大型種と言われている。

だが目の前のドス二級は船長の目測通り100メートルを超えており、とてもじゃないが同じ生物とは思えない。

それどころか大きな身体をしている種の多い鬼級や姫級の戦艦や空母の深海棲艦ですら、ここまで巨大な種類は確認されていない。

間違いなく現在確認されている深海棲艦の中で最大級の巨体だろう。

また本来の二級の皮膚はツルつとした黒曜石のような見た目をしており耐久力はそれ程でもないが、この二級の皮膚はまるで岩盤のように厚く、そして硬くゴツゴツとした質感をしており、一目見ただけで生半可な攻撃は通用しないということが分かる。荒波に打たれ続けたことよって皮膚が硬質化したのだろう。

コイツはまさしく大海原を泳ぐ山だ、猛々しい豪山だ。

こんな規格外の豪山を前にして、船長の言葉で一度は奮い立った船員達も再び恐怖がぶり返してきたらしく、明らかに砲撃の頻度が落ちていく。

並みの深海棲艦が相手なら船長の巧みな操舵技術であつという間に振り切っており、そうでなくてもこれ程の弾幕を受けて無事な深海棲艦はいないはずだ。

しかし巨大な二級はその速度を落とすどころか明らかに速度を増しており、追い付かれるのも時間の問題といったところだ。

「クツツタレエ!!明らかに火力が足りてねえ、あの岩のような装甲を撃ち抜くにはこんな兵器じゃ火力が足りん!やはりアタリハンテイ力に適応出来ないオレらじゃ駄目なのか!?!せめてもつとデカくて威力のある武器があれば!」

船長は歯ぎしりをしつつ吐き捨てる。

相手は初めて確認された超大型深海棲艦だ、戦闘データどころか存在自体が想定されていなかったのだから、有効な大型兵器なんてあるはずがない。

それでも船長や船員達がアタリハンテイ力に適應出来ていれば巨大な二級が相手でも、もう少しはマシなダメージを与えられたかもしれない。

そんな気持ちは俺にもよく分かる。俺が何度狩娘達に負担を強いていることを不甲斐なく思ったことか、俺がアタリハンテイ力に適應さえ出来ていれば……とな。

だが今のあいっつらなら……俺という重石の消えたあいっつらなら!!

「船長！来ましたっ、救援です！三人の狩娘がこちらに向かって来ています！接触までおよそ30秒!!」

間違いない、バルバレ鎮守府の狩娘だ！間に合ったか！

「良かった、まだ連絡船は無事だにやー！」

ようやく連絡船が見える距離まで近付くことが出来ました。

私は見ての通り眼鏡を掛けているのであまり視力は良くないのですが、それでもそこに船があるかどうかくらいは流石に分かります。

まだ深海棲艦に沈められてはいないようですね、強走薬を飲んで走り続けた甲斐があったというものです。

「Oh、アレはひょっとしてドス二級ネー？Unbelievable！いくら何でも育ち過ぎだヨー!!」

金剛さんの悲鳴にも近い声に、私も目を凝らします。

大きい、大き過ぎる……。あれは本当にドス二級なのでしょうか？

明らかに連絡船よりも大きな身体をした深海棲艦が船を追っており、このままでは追い付かれるのも、そして破壊されるのも時間の問

題でしょう。

「今から何としてもあの深海棲艦を食い止めます！私と睦月さんは深海棲艦に直接攻撃を仕掛けます！金剛さんは船の守りに回って下さいー！」

「Roger！この大盾でどんな攻撃でも防ぐネー！」

「はい！進化したガルヘルちゃんも私のコンビは無敵なのだぞ！」

強気の返事をする二人ですが、やはり不安なのでしょう。まだ交戦前だというのに冷や汗をかいています。当然私だって不安です。

今回の戦いは私達は勿論、全ての狩娘の戦闘の歴史においても史上初となる超大型深海棲艦との戦いになるのですから。

勝てるのか、そもそも勝負になるのか、こちらの攻撃は通用するのか、それすら全く分かりません。ですが全員それを覚悟でここまで来たんです、今更怖気付くワケにはいきません。

一先ず船まで近付くと、ふと懐かしい声が聞こえてきました。

「おーい、こっちだ！」

左手で連絡船の船首の手摺に掴まり、こちらに向かって空いた右手を振りつつ大声を出している赤い帽子をかぶった初老の男性。

見間違えようがありません、どこからどう見ても団長です。

「団長!?!この船に乗っていたんですか!?!」

「あーっ、団長だあ！」

「団長！久しぶりネー、会いたかったヨー！」

「ようお前ら、久しぶりだなア！色々と積もる話もあるが、今は見ての通り大ピンチなんぞな。早いとこ船のみんなを助けてやってくれ！」

団長との唐突な再開に、今が非常事態の真つ最中だということも忘れてしまいそうになります。

「なあに、お前さん達が来てくれたからには勝つたも同然だ！お前らの実力は、誰よりもこの俺が知っている！そうだとも！お前さん達なら出来る出来る！」

出ました、団長お馴染みの根拠の無い『出来る』発言。しかしこのセリフに私達は幾度となく励まされてきたんです。

「団長の言う通りだにや！私達なら出来る出来る！」

「団長が乗っているのなら尚更負けられないネー！この船は絶対に守り通すヨ！」

ほら、もういつも通りの二人が帰ってきましたよ。

確かに私達は今まで幾度となく苦戦を繰り返してきました。ですがそれでも出来なかったことなんてないんです！

無茶は承知の上ですが、それでも無理ではないんですッ！

「行きましょう！交戦開始っ!!」

「クッ、いくら攻撃してもまるでスピードが落ちない！」

意気込んだのはいいものの、やはり相手は超巨大な深海棲艦。こちらが攻撃を加え続けているにも関わらず、まるで堪えた様子がありません。

流星に不死身ということはないでしょうが、それでも見た目通りの凄まじい生命力を持っているようです。

二級は私達に対してあまり目立った攻撃を仕掛けて来ないので何とか戦い続けることが出来ていますが、相手の矛先は船に向かってい

るので救いにはなっていません。

「どうしよう、もうすぐ強走薬も無くなっちゃうよ？このままじゃ追いつけられない！」

二級は相変わらず船を追い掛けています。

二級と並走を続ける私達ですが、走りながらの戦闘なので当然効率は悪く、強走薬が無くなればそのまま置き去りにされてしまうでしょう。

「Ouch！また鱗が飛んできたヨー!?とても全部は防ぎきれないネ！」

超巨大な二級は普通の二級のように睡眠液を吐くことはないものの、その代わりに身体を勢いよく屈伸させることで古くなった外皮や鱗を投石機のように飛ばして船を攻撃しています。

普通の二級の鱗なら片手サイズも無い大きさですが、この超大型二級の鱗の大きさは一つ一つが人間の半身以上もあり、その様子はまるで空爆です。

船上に上がった金剛さんは、飛んでくる鱗から船や砲撃を続ける船員達を守る為に攻撃を防ぎ続けています。

ですがいくらか大盾を持っているとはいえ一度に防げる数には限界がありますし、防いだ金剛さんにダメージが無いワケではありません。

金剛さんはじわじわと体力を削られているようです。

「金剛、無茶はするな！」

「団長こそ、いつまでもそんなところにいるとそのうちペシヤンコネー。ほら、船の中に入った入った！」

「……すまない、無事でいろよ！」

「H A H A H A、誰にもを言っているデース！」

心配する団長に強がってみせる金剛さんですが、私達の中で一番限界が近いのは間違いなく彼女でしょう。

金剛さんも隙を見つけては回復薬を飲んでいるようですが、それも何時まで持つか……。

「マズいつ、もう船との距離が10メートルちよつとくらいしか無いにや!」

「これ以上近付けさせるワケにはっ!!」

あれから戦闘を続けることで少しずつ二級の行動パターンや、攻撃の通る箇所が徐々に分かってきました。

急所と思われる頭部は位置が高過ぎて狙えません、なので私達は比較的柔らかい腕の甲殻を集中的に狙うことで、多少なりともダメージを与えて動きを鈍らせる作戦に出ました。

ですが逆に二級の怒りに触れたのか先程よりもスピードが増し、攻撃も激しさを増してきました。

このままでは追い付かれるのも時間の問題でしょう。せめてあと一人狩娘がいてくれれば……。

「Shit! 攻撃の間隔が短くなってる!?! だんだん腕が痺れてきたネ……。」

船に接近したことで着弾までの時間が短くなった鱗攻撃。

次々と攻撃を防いでいく金剛さんですが、攻撃の激しさにだんだんと対応が間に合わなくなってきたようです。

「Ah! 盾がっ!?!」

マズい、とうとう限界が来たのか金剛さんの盾は弾かれて手元から離れていきました。

ですが二級は攻撃の手を緩めることなく、既に次の弾を撃ち上げました。

「逃げて下さいっ、盾も無しにあの攻撃は防げません!」

「でも見捨てることは出来ないネ、こうなったらWhatever!」

しかし金剛さんはそう叫ぶと、逃げるどころか覚悟を決めた顔で鱗の落下地点へと身体を滑り込ませたのでした。

ズガアアアン!!

「ぐっ……ふ……船は……無事ネ?……だけど……これ以上は……戦えない……ネ……。」

「金剛さん!」

ゆつくりと甲板に倒れ込む金剛さん。あなた何て無茶なことを……。ですがお陰で船は無事です。

普段ならここでレンタクがすぐに来て金剛さんを救助してくれるのですが、今回のクエストは緊急中の緊急。レンタクの手配なんて出ていません。金剛さんは船の甲板に倒れたままです。

このまま攻撃を続けられたら船へのダメージを防げないどころか、瀕死の金剛さんへの命にも関わります。これ以上の攻撃を許すわけにはいきません。

ですがここで敵の動きから目を放したのがいけなかったのです。う。

「香取さん、危ないっ!」

「えっ?……ぐあっ!」

傷付いた金剛さんに気を取られ、よそ見をしていた私に対して抉り取るかのように突き出される巨大な角。腹部を強打して瞬間的に意識が飛びます。

更に不幸は続くもので、通過した角に服の裾が引っ掛かり離れませんか。

「ぐっ……持ち上げられるッ!」

まるでモズの早贖のように私を角に絡めとったまま、下げていた頭の位置を元に戻す超大型二級。

何とか角から逃れようとはしますが、ダメージが響いているのか腕を上手く動かすことが出来ず、服を剥がすことが出来ません。

ハッキリ言ってお腹に穴が空いていないどころか、身体が寸断されていないのが不思議なくらいです。

「香取さんを離せーっ!!……………ってこんな時に強走薬が！やだっ、ダメー！走って私の足!!後からいくらでも休めるでしょ!?!お願い走ってエ!!」

必死に追い続ける睦月さんですが徐々に引き離されて、とうとう豆粒のように小さくなってしまいました。

最悪の事態です。金剛さんは戦闘不能、睦月さんは戦線離脱、そして私も拘束されて身動きが取れない。超大型二級を止められる存在はいなくなってしまうました。

邪魔者がいなくなつたのが分かるのか二級は更に加速を続け、あつという間に船に追い付きました。

船と並んで泳ぐ二級、その距離は既に10メートルもありません。

『二、イイイイイイイイイイイイイイイイ!!!!』

勝ち誇つたかのように咆哮を上げる二級。

その巨体に見合った音量はもはや爆音の域、間近で聞かされた私はもはや意識を失う一歩手前です。

船上の船員達もその大声の前に怯み、砲撃の手が止まります。

私達と違って、アタリハンテイ力に適応出来ていない船員達です。船長さんはなんとか歯を食いしばって耐えたようですが、音圧に頭を揺さぶられ気を失う者も出てきました。

倒れていた金剛さんを運んで避難させようとしていた船員もいましたが、そんな彼らもまとめて倒れてしまい船上は死屍累々です。

『ニ、イツ!!!!』

その場で大きく頭を左右に振る二級。

角に引つ掛かった私の服は今のスイングの勢いでようやく剥がれました。

「あつ……………」

しかし勢いよく振り回された私の身体は自由と引き換えに宙を舞います。

吹き飛ばされた私が向かうのは船の甲板、このまま落ちれば甲板に叩き付けられてしまいます。

見た目によらず知能の高い二級のことです。角に引つ掛かったま

まで邪魔な私を排除するために狙ってやったのでしょうか。

せめて受け身を取らなければ………くっ、駄目ですね。意識が朦朧として身体が思うように動きません。

金剛さんに続いて私も戦闘不能になるとすれば、船を守る者は全員いなくなっただことになります。残念ですが睦月さんは追い付かないでしょう。

せめて囿になって船員と団長を逃すことが出来れば良かったのですが、初めから船を狙っている二級相手にその作戦は通用しません……。

身体が動かない以上、出来ることはありません。目を閉じて重力に身を委ねます。

すみません団長、私には守ることが出来ませんでした。助けられなくてごめんなさい……。

ドサツ……。

………甲板に叩き付けられたハズなのに痛くない？いえそれは奇妙です。受け身も取れずに落ちたのですから、痛みが無いなんてことはありえません。

そもそもこれは本当に甲板なのでしょう？何やら暖かくて柔らかいものに包まれているような感じがします。

誰かがクツションが敷いてくれたのでしょうか？

いえ、船員はそのほどが倒れており、動けるものもそれどころではないハズです。なのでそんなこともありえないでしょう。

ですが助かったことは事実。状況を確認するためにも、そっと目を開きます。

「君、大丈夫かい？」

目に映ったのは、優しげな表情をした茶髪の若い男性の顔……って!?ちっ、近い!顔が近いです!?

恥ずかしさから思わず顔が赤くなります。生まれてこの方、ここまですり顔と顔を近付けたことなんてありません!何故この方はここまですり顔を近付けているのでしょうか?

……落ち着きましょう、そもそも何故落ちたハズの私は無事だったんでしょうか?

赤くなつた顔を誤魔化すように彼の顔から視線を逸らし、周囲を確認します。

どうやら私の身体は横抱きにされているようです、この暖かくて柔らかな感触は腕の中にいたからだだったんですね。

これは女の子が憧れる、俗に言うお姫様抱っこという抱き方です。私ですか?そりやあ私だつて憧れていますよ、お姫様抱っこ。

女の子なんて歳ではありませんが、私だつて女性の端くれ。いつか素敵な男性にやってもらいたいなあ……なんて思ったことぐらいいくらでもあります。

そもそも私は誰に抱かれているのでしょうか……いえ、そんな分かって切つたことを誤魔化す必要は無いでしょう。

吹き飛ばされた私は目の前の男性に抱き留められることによつて助かつたんです、だからお互いの顔が近かつたんですね。

目の前の彼は自分の危険も顧みずに私のことを救ってくれたのでしよう。そう考えると更に顔が赤くなつたような気がします。

「あ、あの……ありがとうございます。その……もう大丈夫です、一人で立てますから……。」

ずっと抱かれているのが恥ずかしくなり、名残惜しさを感じつつも男性の腕から抜け出します。

……あれっ?目の前に立つてようやく気付きましたが、この男性は非常にラフな格好をしていますね。具体的に言うとなんかはタンクトップ一枚です。そして下半身は……!?

な、ななな何て格好をしているんでしょう!?!
この人トランクスしか穿いていませんか!?!トランクトップにトランク

スってどっちも下着じゃないですか!?!?!
ってことは私はインナー姿の男性に抱きしめられたことに……あ
わわ／／／

どうしてしまったのでしょうか？

未だ戦闘中であり、そして恥ずかしいのにも関わらず何故かその男性から目を離すことが出来ません。

この出会いにより、私の心の中に今まで感じたことのない何かが生えたのでした。

香取さんと運命の出会い 6

危機に陥った私を助けてくれた男性（下着姿）。

未だに戦闘中だということにも関わらず、私は彼から目を離すことが出来ません。

あつ、別に彼が下着姿だからとかじゃないんです。私はそんないやらしい目で見えていません!!

そんな彼は力尽きて動けなくなった金剛さんに気が付くと、そちらの方へ駆けて行きます。

私を助けてくれた彼なら、倒れたままの金剛さんを放っておくようなことはしないでしょう。

私も大切な仲間である金剛さんが傷付いたままなのを見るのは辛いです。

ですが、何でしょうこの気持ちは？彼が私を置いて金剛さんのところへ向かったのを見ると胸の奥がモヤモヤとします。

一先ずこの気持ちは置いておくことにして、私も急いで気を失った船員達を起こします。

幸い彼らは二級の咆哮により正気を失っていただけで、軽く揺すつたり頬を叩くだけで目を覚ましました。

「大丈夫か、しっかりしろ!……クツ、駄目か。ダメージが大き過ぎる!」

彼は金剛さんを目覚めさせようとしているようですが、いくら呼び掛けても金剛さんは意識を取り戻しません。

せめてレンタクがあれば彼女を治療してもらえるのですが……。

そもそも連装砲ちゃんほどのようにして倒された狩娘を治療しているのでしょうか？未だにその現場を見たことのある狩娘はいます

!？」

「良かった、気が付いたんだな。」

悲鳴を上げて取り乱す金剛さんですが、そんな彼女の態度はどこ吹く風といった様子で純粹に喜ぶ彼。

ひよつとすると彼は少し天然なのかもしれません。

金剛さんが助かったのは確かですが、緊急時とはいえ女性相手に躊躇することなくそんな方法を取り、口付けしたことも気に留めていないだなんて……。

それにしても金剛さん、どこことなく嬉しそうに悲鳴を上げていましたね……。

いくら相手が命の恩人とはいえ、目が覚めたばかりで状況が飲み込めていない状態でこんなことになっていたら普通はビンタしてますよ？

彼女も私に負けず劣らず顔が真っ赤になっていますし、ひよつとしてこれは……。

「あの、金剛さん。本当に大丈夫ですか？」

「アツ、香取！どうしてこうなっているネ!?ここはどこ？彼は誰？そもそもなんでこの人は服を着ていないネ？」

「ここは船の上です。二級は未だ健在、睦月さんはスタミナが切れて戦線離脱しました。そして二級に倒された金剛さんをこの人が治療してくれたんです。私も危ない所をこの人に助けてもらったんですよ。そして彼が……彼が……彼が？」

そういえば結局この人は誰なんでしょう？それにどうして服を着ていないのでしょうか？

「おーい、兄さん。待ってくれ！」

この声は……団長！

「ふう、俺も歳だな。ちよつと走っただけでバテるなんて。どうしたんだ兄さん、急に嫌な予感がするとか言って飛び出して。外はデカイ深海棲艦がいるんだ、危ないぞー！」

船内から走って出てきたのは団長でした。爆撃を避ける為に船の中に避難していたのですね。

「団長！」

「おつ、香取に金剛か！お前らどうした、そんなに顔を真っ赤にして？何だ、兄さんの下着を見てビックリでもしたのか？ウブなところもあるもんだなア。はっは！」

「それは……まあそんなところです。それよりもこの方はどなたですか？団長の知り合いですか？」

「いんや、知り合ったのはついさっきだ。兄さんはこの船の船員の一人さ。」

「船員ですか？船員の方の大半は先程の二級の咆哮で大半が気絶し、良くてフラフラでほとんど動けない状態です。」

しかし彼は落ちてきた私をしっかりと受け止め、金剛さんを助ける際にも走っていました。そんな彼は本当にただの船員なのでしょうか？

「僕はこの船の清掃員だ、下着姿なのは気にしないでもらえると助かるな。さっきまで休息中でシャワーを浴びていたんだけど、戦闘の余波で船が揺れた際に着替えを入れていた棚が崩れてね……それで下着以外取り出せなかったんだ。それに巨大な深海棲艦の襲撃って聞いたらそれどころじゃないだろう？だから最低限の着替えだけ済ませて自分出来ることをしていたんだ。」

そういう事情があったんですね、良かった。私達の恩人が露出狂だったらどうしようかと……。

「兄さんはこの船に巨大な深海棲艦に有効な武器が積まれていないことに気付いていたんだ。それで船内に避難してきた俺にも手伝わせてさっきまで秘密兵器を作っていたんだが、急に嫌な予感がするとか言い出すと大急ぎで作ったものをポーチに入れてそのまま飛び出していったのさ。俺もすぐに追いかけてしようとしたんだが深海棲艦の声がるさくてなア、しばらくフラついて駆け付けるのが遅くなっちゃまったんだ。」

秘密兵器とは一体？

しかし凄い勘をしていますね、その勘のお陰で私は助かりました。この勘の良さ、そして深海棲艦の咆哮を浴びても気を失わないメンタ

ルの強さ。いえ、これはメンタルで済ませられるようなものではありません。ひよつとするとこの方は……。

BGM：迎え撃つ大銅鑼

ズオオオオオオオ……。

「おっと、悠長に話し込んでいる暇は無いみたいだな。みんなあれを見ろ！」

「あれはっ!？」

先程までの大暴れが嘘のように沈黙を続けていた超大型二級ですが、その沈黙の原因が分かりました。

船と並走を続けながらも大口を開けて海水を飲んでいきます。いや、あれはもはや飲むという次元ではありません。物凄い勢いで大量の海水を吸い込んでいます。急に攻撃をしてこなくなった理由は海水を吸い込むのに忙しかったからなのでしょう。

「アレは一体何をしているネー?」

「恐らく飲み込んだ海水を吐き出して攻撃してくるつもりだろうな。あの勢いだ、とんでもない量を飲み込んでいるようだし、吐き出す力も並大抵の物ではないだろう。ヘタしたら一発でこの船がバラバラになるかもしれない。」

「そんなんっ!?!何とかして阻止しないとー!」

でもどうやって? 私の攻撃であれを食い止めることが出来ないのは先程の攻防で証明されています。金剛さんと二人で攻めても難しいでしょう。

そもそも私ですら大きなダメージを受けているのに、ついさっきまで瀕死だった金剛さんにこれ以上の戦闘させるワケには……。

しかし放っておけば船は破壊されて団長も彼も海の藻屑、手詰まりとはこのことですか……。

「……船長っ！」

何か閃いた顔で大きな声を上げる彼。近くにいたので少しビツクリしました。

「おう、誰かと思ったら新入りの坊主か。こんなときだっていうのにアホな格好をしてるな！」

「船長、大銅鑼を鳴らしてもいいですか！」

「連絡及び号令用の大銅鑼を？何をするつもりか知らんが別に構わん。お前のことだ、きつと何か秘策があるんだろう？」

「ありがとうございます！」

彼は大銅鑼のスイッチの前まで走ると、その場に落ちていているピッケルを手に取り大銅鑼のスイッチに向けて振り下ろします。

「上手くいってくれよ！」

カアン！

ドジャアアアアアアン!!!

超大型二級の咆哮に勝るとも劣らない凄い音量です。

バルバレ鎮守府でも採用されているこの大銅鑼、鎮守府全体や嵐の中の船内でも聞こえるように大音量が鳴るように作られています。

お腹の底まで響くようなこの音は、スピーカーでは到底出せません。

しかし彼は一体何故大銅鑼を鳴らしたのでしょうか？

『二、イイイイイ！?』

あれは？あれだけの強さを誇る超大型二級が、大銅鑼を鳴らされただけで苦しんでいる？どうして？

「そうかつーあいつは確かにデカイ凶体に見合った高い防御力と攻撃力を持っている。だが聴力にまで耐性は付いていなかったんだ！」

理由が分かったのか、興奮した様子で話す団長。

大声でまくし立てているようですが、二級の咆哮や大銅鑼の音を立

て続けに聞いた後だと大したことないように思えるから不思議ですね。

「でも超大型二級はこっちが気絶しそうなほどの大声で咆えますよ？ そんな相手に同じ音をぶつけたところで効果があるとは思えないのですが？」

「なあんだ香取、お前知らんのか？ 深海棲艦の咆哮で人間や狩娘が動けなくなるのはその音量もさることながら、一番の要因は本能的な恐怖を刺激して身体が怯むためだ。自分の咆哮で動けなくなった深海棲艦なんて見たことないだろう？」

「それは……ええ、確かにそうですね。」

「そしてそれはこちらも同じだ。この大銅鑼は確かにうるさいが、それで気絶したヤツはいない。だがアイツにとつては違う。この大銅鑼は生き物ではないから本能的な恐怖を感じることは無いだろう。それでも油断しているところにいきなり爆音を叩き込まれたんだ、それも海水を飲んでいる最中にな。」

苦しむ二級をよく見てみれば口から海水を吐き出しています。しかしその吐き方は最初に想定していた船を破壊するための激流ではなく文字通りの嘔吐です。

水を飲んだはいいものの、大銅鑼に驚いたことで飲み続けることが出来ずに吐き出さざるを得なかったのでしょう。

「よしっ、作戦の第一段階は成功だ！」

彼はピツケルを放り捨てると、続いてバリスタ砲台に向かって駆け寄ります。

そしてポーチから一本のバリスタの弾を取り出して砲台にセットすると、超巨大二級に向けて発射しました。

勢いよく飛んでいくバリスタの弾。そしてその弾は超大型二級の胴体に着弾すると、堅い外皮など関係無いと言わんばかりに深々と突き刺さりました。

船員達があれだけ砲撃を続けてもまるでダメージを与えられなかった超大型二級にこうも簡単に有効打を与えるなんてやっぱり彼は……。

ですが驚くのはこれからでした。

あのバリスタの弾、矢羽に長いロープが結び付けてあります。そしてそのロープを辿っていくと、なんと彼の身体にタスキ掛けのように結ばれていました。

つまり彼と二級は一本のロープでつながっていることになります。

「お手製のロープ付きバリスタも上手く刺さった！作戦の第二段階も成功だ！」

そして彼はロープをしつかりと握るとそのまま船から海に向かつて迷うことなく飛び降りました。二級の身体に乗るつもりでしょうか？

「って危ない！こんなにスピードを出している船から海に飛び出すなんて何を考えているんですか!?二級との距離はまだ数メートルもありますよ、飛び移れる距離じゃありません！」

「そうダヨー！早く助けに行かないと溺れてしまうネ！こんな自殺行為だヨ！」

案の定海に落ち、そのまま船の後方へと流されて行く彼。

突然の蛮行に驚いて慌てふためく私と金剛さんですが、団長は至って冷静そのもの。

「大丈夫だ、兄ちゃんを信じてやれ。」

「団長がそう言うのなら……。」

納得はしていませんが渋々引き下がります。

「ほら、見てみる。どうやら上手くいったようだなア。」

彼は海に流されながらもロープを伝って二級の身体に到達すると、そのまま二級の背中によじ登りました。

見ているこちらとしてはバリスタの弾が抜けてしまいうんじやないか、ロープがちぎれてしまいうんじやないかとヒヤヒヤものでしたよ。

「乗れたっ！第三段階も成功だ、これなら……。」

彼は身体に巻いていたロープを解くと、そのまま二級の頭を目指して背中を走り抜けます。

二級も自分の身体の上に彼が乗ったのが分かるのか身体をよじり、時には鱗を飛ばして抵抗します。

しかし彼は軽い身のこなしでそれらを躲していき二級の顔に到達すると、行き掛けの駄賃と言わんばかりに二級の単眼を踏み付け、更に二級の角まで飛び移りました。

いくら二級が巨大とはいえ、手摺りも無く上下左右に揺れる不安定な角の上に命綱も無しに立っている彼の姿は見ていて非常に心臓に悪いです。

「作戦の最終段階だ！」

彼はポーチに手を入れると、そこから2メートル近くもある大きなタルを取り出し角の上に置いていきます。

あのタルは恐らくこの船に積まれていた物資の一部ですね。鎮守府に搬入されてくるのでよく見かけます。

鎮守府で使われているタルのサイズは大きく分けて3種類あり、小タル大タル特大タルの三種類があります。あれは特大タルですから中身はビールかワインのハズですが、そんなものを置いて一体何をするつもりなんでしょうか？

彼は合計で4つのタルを置くと最後に時限式の小型魚雷をその場に置き、そしてそのまま角から助走をつけて勢いよく飛び降りました。

「急げ香取！兄ちゃんを受け止める！」

言われるまでもありません、今度は命綱も無いんです。

慌てて背負っていたチャージアックスを投げ捨てると大急ぎで海に降り、落ちてくる彼の下に駆け寄ります。彼が海に落ちる前に受け止めなければいけません。

「間に合って!!」

彼が海に落ちるまで残り1秒も無いでしょう、落ちてくる彼の影に合わせて両腕を滑り込ませます！

ドサツ……。

「ははは、ありがとう。お陰で助かったよ、さつきとは立場が逆だな。」
「あつ……。」

先程は彼が落ちてきた私を抱き留めてくれましたが、今度は私が彼を抱き留めています。

彼の顔が近い。彼の息遣いが、体温と鼓動が伝わってくる。

「あわ、あわわわわ……。」

再び真っ赤になる私。あまりの恥ずかしさに、頭から湯気が上がっているような気すらします。

「なにをボーツとしているんだ香取！早く船に戻ってこい、そこにいと危ないぞ！」

「はっ、そうでした!？」

「私の前でイチャイチャするなんてズルいネー！ほらお兄さん、私の手に掴まるネー！」

金剛さんに引つ張り上げられて船上に上がる彼。私も団長の手を借りて船に戻ります。その直後……。

ズドゴオオオオオオン!!!

空気を震わせる爆音、離れていても感じる熱気。

小型魚雷が小さな爆発を起こすと、それによって特大タルに引火。そして特大タルも魚雷の後を追うかのように大爆発を引き起こしました。

『二、イアアアアアアアアアア!!』

苦悶の声を上げる超大型二級。あれ程の大爆発が顔の前で炸裂したのです、流石の二級もこれには耐えられず悶え苦しんでいます。

しかし何故、特大タルが爆発したのでしょうか？

「よっしゃあー！どうやら兄ちゃんの作戦は成功したみたいだなア！」

「団長、何か知っているんですか？」

「知ってるも何もあれは俺と兄ちゃんが作ったもんだ、考えたのは兄

「ちゃんだけどな。」

「作った?」

私と金剛さんの目線が彼に向かいます。

「あれは物資のワインのタルに爆薬を詰め込んだものさ。同じく物資として積まれていた大型魚雷を分解して爆薬を取り出したんだ。更にハレツアロワナや鬼ニトロダケといった爆発物も手当たり次第に詰め込んだ。あの大きさの相手じゃ大型魚雷でも通用するか怪しかったからな、もつと大きな火力が必要だと思ったんだ。」

「お陰で新品のブレスワインを全部捨てるハメになったけどなア、一口くらい飲んどきやよかったよ。名付けて対巨艦爆弾といったところか?」

ブレスワイン!?あの超高級ワインと名高いブレスワインを惜しげも無く捨ててしまうなんて……。

事態が事態とはいえ思い切ったことをしますね。

ピシ……パキパキ………バギンツ!!

二級の角から罫の広がるような鈍い音が聞こえると、それから間もなくして巨大な角は根元から折れて脱落しました。

バシヤアアアン!!

『二……イイイ………』

大きな音を立てて着水する巨大な角、信じられないといった顔で己の角があった場所を眺める二級。

いえ、表情が変わらないので本当に二級が驚愕しているかどうかは分かりません。ですが雰囲気です。あれだけの巨躯と力を持っているのです、自分に敵う相手なんていないと思っていたのでしょうか。

ですがその自信は打ち砕かれた、狩娘どころか武器も持たないちっぽけな人間に……。

『ニ、イ……。』

二級は船から離れるとそのまま引き返し、ゆっくりと海中に姿を消していきました……。

「……かった、勝った、勝ったぞおお!!俺達は勝ったんだア!!」

「「「ウオオオオオオオ!!」」」

勝鬨を上げる団長、それに合わせて雄叫びを上げる船員達。

先程まで絶望の空気に包まれていた船の姿はどこへやら、今はもうお祭り騒ぎです。

「Wow!最初は下着姿でビックリしたけど、大活躍ですごくカッコよかったネー!お兄さんとってもWildで素敵ネー!」

「ははは、ありがとう。」

金剛さんに褒められて照れている彼。

戦っている時の顔は凜として格好良かったけど、照れた顔は可愛いですね。

二級を追い払ったことで急ぐ必要が無くなり、スピードを落とす船。そんな船の後方から息も絶え絶えといった様子で睦月さんが追いついてきました。

「はあ、はあ、はあ……。やっと……。やっと追い付いたにや……。睦月抜きで決着をつけるなんてひどいよお……。って下着姿の人がいるーっ!?!」

彼を見て驚く睦月さん。まあ事情を知らない人が見れば誰でも驚きますよね。

「……よくやったな、坊主。」

船長も小声で何かを呟きます。そんな船長の呟きは潮風にかき消されて私達の耳に届くことはありません。ですがそれで構わないのでしよう。その誇らしげな顔は言葉以上に心の内を語っているのですから……。

香取さんと運命の出会い7

超大型二級を追い払い、連絡船を守り抜いた私達はそのまま連絡船に乗って鎮守府へと帰還することになりました。

船の上ではささやかながら打ち上げも行われ、船を守った私達は英雄扱いです。

今まで団長以外に褒められることの無かった私達にとって、こういうのは何だかむず痒いですね。

二級を追い払ったのは清掃員の彼であって私達はただやられていただけだと思うんですけど、彼は『君たちが船を守ってくれたからこそ、爆弾の用意が間に合ったんだ。僕は最後に美味しい所を持って行っただけで、全ては君たちが頑張ってくれたお陰だよ。』って言うてくれたんです……………下着姿のままです。

打ち上げでは彼に甘えようとする金剛さんに、困惑しながらも金剛さんの相手をしようとする彼。

そんな彼から彼女を引きはがそうと奮戦する私に、私達をからかって遊ぶ睦月さん。

そしてその光景を見て笑う団長と船員達という、短いながらも楽しいひと時を過ごしました。

ですがそんな楽しい時間も終わりの時がやって来ました。

船が鎮守府の港に着き、物資の運び入れが始まります。船員達はあわただしく動き回り、彼も船長に連れられて船室の中へと消えていきましました。

私達も鎮守府に戻って、みんなに事件が無事に解決したことを説明しなければいけません。

怯えて室内に引きこもり、外の状況を把握していない娘も多いですからね。

そういえば団長はどこに行ったのでしょうか？私達と一緒に鎮守

府に戻ったはずなのに、いつの間にか姿が見えなくなっています。執務室にいるハズのゆうた提督もいなくなっていますし、超巨大二級を退けても鎮守府の問題はまだまだ山積みのようにですね。

やがて物資の運び入れと簡単な船体の修理も終わり、連絡船は出港していきました。

彼らにもスケジュールとノルマがあるとはいえ、あれだけのことがあつたというにも関わらず、もう出ていくなんてタフな方々ですね。

船長曰く『ここ周辺の海域はあのデカブツが縄張りになっていたお陰で、普通の深海棲艦は追い払われていたんだ。さっきの戦闘でこの主であるデカブツはいなくなつたとはいえ、他の深海棲艦が戻ってくるのにも時間は掛かる。だからこそ今出港すれば当分は安全だ。』とのことだそうです。

「連絡船、行っちゃいましたネ。残念デス。」

「彼らも忙しいのですから、仕方ないですよ。」

「せめてお別れの挨拶くらいしておきたかつたにや。」

自然と鎮守府の中庭に集まる私達3人、仲良くベンチに並んで座ります。

ですがみんな少し気落ちした様子です、船員さん達がいなくなつて寂しいのでしょうか。

普段は連絡船が来ても簡単な挨拶程度で、見送りまでしたことはありませんでした。

ですが共にあれだけの激闘を潜り抜け、そして共に勝利を分かち合つたんです。仲間意識も芽生えるというものです。

「鎮守府で他の狩娘へ何があつたかの説明なんて後回しにして、彼の

連絡先を聞いとくべきだったヨー。」

「……って残念がる理由はそつちですか!？」

自分に正直な金剛さん、せめてもう少し取り繕ったらどうでしょうか？

「そんなの次回に連絡船が来た時に改めて聞いたらいじやないですか!？」

「次に船が来るまで待つてられないヨー!恋愛に時間は天敵、ぼんやりしていると誰かに盗られるかもしれないんだからネー!」

「れ、恋愛ですか?金剛さん、薄々勘付いてはいましたがやっぱり彼に惚れたんですか!？」

「だって私のFirst Kiss奪われちゃったんだヨー!それにあんなに強くて大きな二級に怯まず立ち向かう勇氣、そして見事に追いついて強さ。何より顔もカッコいい!ピンチに颯爽と駆け付けて助けてくれた白馬の王子様に惚れるなっていう方が無理な話ネー!」

「やって来たのは白馬の王子様じゃなくて下着の清掃員なのね……。」「それにそれは医療行為ですつ、キスなんてしていませんっ!それにそんなことを言うのなら私だってピンチのところを彼に助けてもらったんですよ!?!その際にギュツと抱き締めてもらったんです!そして二級から飛び降りた彼を助ける際にも抱き合いました!合計で2回ですよ、2回!」

「ムムム、だけどHugよりKissの方が強いネー!Kissは1回でHug10回分くらいの価値があるヨー!Hug2回が20ポイントならKissは1回でも100ポイント、80ポイント差で私の勝ちだモンネー!」

「ぐぬぬっ、そんな変なルール認めません!それにされたのは私の方が先ですっ!!」

「何つままないことで張り合ってるのにや?不毛過ぎて付き合つてられないよお……。」

ついムキになって言い合う私達。

傍から見たら馬鹿そのものですが、彼のことに関してだけは譲つてはいけない気がします。

「おーいお前ら、こんなところにいたのか。」

のんびりと中庭にやって来たのは団長、今までどこにいたんですか？

「色々やることがあつてな、立て込んでいたんだ。それはともかくお前らに言っておかなきゃならないことがある。」

そう言うのと帽子を脱いで、その場で正座を始める団長。

「ここは野外で地面も舗装されてないただの土ですよ、そんなところでかしまるだなんて一体何を始めるつもりでしょうか？」

「お前ら、済まなかつた！」

「団長!? 一体何を？」

団長はそのまま土下座をし、私達に対して謝罪をしました。

突然のことに驚き、私達3人もベンチから立ち上がります。

「い、一体なんのことネー？」

「俺がいない間に散々苦勞をしたんだろう？全部俺のせいだ、本当に済まないっ！」

「えっ？でもそれは団長に責任があるわけじゃ……。」

「いいや俺の責任だ。俺が大本营にどんな人材でもいいから、早く提督の適性がある人間を送ってくれと催促し続けたせいだ。こんなことになるなんて思わなかつたんだ。」

「それでゆうた提督が来たんですか……。」

「ああ、そうだ。だがゆうたを恨まないでやってくれ。あいつは提督の適正こそあるが、まだロクに提督としての教育を受けていなかったんだ。俺もついさつきアイツがただの子供だということを知ってた。てつきり最年少で士官学校を卒業した天才児か何かだと思っていたんだが、実際は俺があまりにも急かすもんだから取り敢えず適性があるだけの子供を送り込んできたんだそうさ。知らなかつたとはいえ、相手の経歴をロクに調べようとしなかつた俺の過失だ。それに狩娘のことを何も知らないどころか、軍の教育すら受けていない普通の子供をこんな戦場に連れてきた挙句、提督なんて重い役目を押し付けち

まうなんて本当に申し訳ないことをした。」

カリユード諸島の鎮守府における提督の役割は本土と大きく異なります。そしてアタリハンテイ力に適応出来る人材も少ないそうです。

恐らくここでは提督が指揮を執ることは滅多に無いので、未教育の子供が提督でも問題無いと判断されたのでしょう。

通常の鎮守府とは環境が違い過ぎるカリユード諸島だからこそ起きた事件とも言えます。

そんな子供を選んだ大本営に責任が無いとは言えませんが、他に提督候補がい無い以上無いものねだりも出来なかつたのでしょうか。

「頭を上げるにや。別に睦月は怒ってないし、恨んでもいないよ？」

「そうダヨー！むしろこれはこれでいいExperienceになつたネー！」

「二人の言う通りです。確かにゆうた提督が来てからは辛いことがたくさんありました、違う人が提督だったらいのにつて思ったことだつて何度もあります。でも私達が誰かを恨んだり憎んだりするよくな狩娘じゃないっていうのは団長が一番知っているでしょう？」

「お、お前ら……。」「お、お前ら……。」「珍しく目を潤ませる団長、団長のこういう顔を見るのは初めてですね。」

「ほら、ハンカチです。そんな顔をしないでシャキツとして下さい。いつもの自信たつぷりの団長に戻して下さい。」

「済まない……。いや、ありがとう。」

団長は立ち上がると私のハンカチで顔を拭きます……。つて鼻をかまないで下さい。いくら団長とはいえ流石にそれはちよつと……。」

「それでだな、お前らに言うべきことはもう一つあるんだ。」

顔を拭った団長は帽子を被り胸の前で腕を組みます。いつもの調子が戻って来たようですね、良かった。……あつ、ハンカチはお貸しするので洗って返して下さいね。

「これは他の狩娘にも言わなきやならんのだが、新しく建造された連中はまだ俺のことを知らないから説明が難しいだろう？ それにお前らには真つ先に知っておいてもらいたかったからな。」

誰よりもまず私達に知ってもらいたいこと？ それは一体？

「まずゆうただが、さっきの連絡船で帰らせたよ。勿論無理矢理じゃない、本人の許可も取った。説得には時間が掛かったがな。」

「えっ？ 提督を帰した？」

「ああそうだ、このままここに居続けてもアイツの為にならない。アイツはこれからもっと勉強をして、今度こそ立派な提督にならなきやいけないんだ。ただ、アイツ一人を手ぶらで帰らせても説明は出来そうにないから俺のサイン入りの書類を持たせた。俺のサインがあれば大本営も文句は言つてこないだろう、それに先生も味方をしてくれるハズさ。」

「でも提督がいなくなったらこの戦力が低下しちゃうよー？」

「そうデース。私達は戦闘経験が多いからまだいいデスけど、今まで提督ありきで戦っていた他の娘達から提督を取り上げたら戦えなくなってしまうマース！」

二人の言うことももつともです、ですが私はもう一つ疑問が増えました。

「彼がいなくなるということは団長が提督に戻るのですか？」

「いんや、俺は提督には戻らん。」

「「ええ〜〜〜っ!?!」」

ど、どういうことなんでしょうか？

流星に提督抜きでの鎮守府の運用は問題があります。

団長が提督の適性が無いにも関わらず無理に提督をやっていたのは、提督のいない鎮守府というのが原則として認められていないからなんです。

「何だお前ら、俺が何も考えずにゆうたのヤツを本部に帰したと思っ
ているのか?」

「そりやまあ……。」

「団長つてたまにその場のノリだけで行動するもんねえ、面白いかど
うかが一番大事だとか言つてにや〜。」

「これだけ付き合があつても未だに団長のとる行動は予測が付かな
いネー。」

「グフツ!?……そ、そりや酷いなア。はっは。」

ついジト目になつて団長を見る私達。団長も自覚があるのか、ぼつ
が悪そうに後頭部を掻きます。

「今回はそんなことはないぞ?新しい提督候補もいる。俺と違ってア
タリハンテイカに適応していて、ゆうたよりも責任感がある奴がな。
ほら、もう出てきていいぞ。」

団長が声を掛けると建物の陰から一人の人物が出てきました。

声を掛けられるまでずっとそこで待機していたんでしようか?

「あーっ!!」

「あなたは?」

「You must be joking!」

「やあ、さつきぶりだな。」

私達の前に現れたのは連絡船に乗つてそのまま帰つたと思つてい
た清掃員の彼でした。

「どうしてここに?それにその格好は一体?」

彼の服装は当然下着姿ではなく、だからといって船員の服装でもあ
りませんでした。

後頭部に鳥の羽をあしらつたオレンジ色のヘッドギア。紺色のイ
ンナースーツに、白を中心とした革製の上着とブーツ。

「ソレハ……団長二頼マレテ……俺ガ作ツタモノダ。」

「あつ、竜人妖精さん!」

いつの間にか私達の足元にいたのは、ここの鎮守府の加工担当の竜

人妖精さんです。

バルバレ鎮守府にいる竜人妖精さんの中でも恵まれた体格と日焼けした黒い肌が特徴の、普段はあまり喋らない寡黙な方です。

まあ大柄といっても妖精さんなので私達に比べれば遥かに小さいのですが。

「……ソレデナ、団長カラ戦イノ詳細ヲ聞イタ俺ハ……コノ防具ヲ作ツタ。……彼ハ勇氣ヲ示シタ……ブレイブシリーズ……勇氣アルモノニコソ相応シイ防具ダ……。」

「そういうことだ、そして俺は兄さんをここの新しい提督に任命しようと思っっている。」

「えっ、本当に!?!」

「お兄さんがここにずっといてくれるのなら私はとってもHappyネー!」

素直に喜ぶ睦月さんと金剛さん。ですが私にはどうしても気になる事があり素直に喜べません。

「ちよ、ちよつと待って下さい!私も彼がここにいてくれるのは嬉しく思います。でも何故彼なんですか?それに彼もゆうた前提督と同じように提督の訓練を受けていません。何より清掃員の仕事はどうなったんです!?!」

「何だ、そんなことかア。まず1つ目だが兄さんにはアタリハンテイ力への適応力があるからだ。あの戦いを見ただろう?普通の船員の攻撃ではまるで歯が立たず、お前達でも苦戦を強いられた超巨大な二級。そんな規格外を相手に作戦があつたとはいえ、一矢報いるどころか大打撃を与えて追い払ったんだ。これ程の逸材、見逃すわけにはいかんだろう?」

確かに……。私も薄々勘付いてはいましたが、間違いなく彼にはアタリハンテイ力への適応があります。

そして強敵相手に一步も退かず、戦って勝利を収める勇氣にとつきの判断力。

彼のような方が提督なら安心して鎮守府を任せることが出来ますね。

「2つ目は、俺が兄さんを教育することで解決する。俺だって提督の端くれだ、適性が無いだけで提督のイロハ自体は全て頭に叩き込んである。それにゆうたの時と違って俺はもう帰ったりはせんよ、先生への挨拶はもう済ませてきたからな。それに兄さんの学習力はかなりのものだぞ? さつき提督業務についてちよいとばかり教えてみたが、あつという間に覚えちゃった、こりやあすぐに一流の提督になるさ。」

「じゃあ団長は提督にはならないけど、ここには残ってくれるの?」

「Oh Yeah! husbandとPapa、二人とも鎮守府にいてくれるなんてVery Happy!二人がセットでハッピーセットネ!」

……は、はっぴーセット? どういう例えなんでしょうか?

金剛さん、ひよつとしてあなたの頭の中がハッピーセットになっているのでは? (辛辣)

そもそもいつ彼とケツコンしたんでしょう? こればかりは聞き捨てなりませんね!

「そして最後の疑問だが、これは兄さんに直接話してもらった方がいいだろうな。」

団長はそう言うとその場から数歩下がり、代わりに彼を前に立たせます。

私達の前に立った彼は少し恥ずかしそうに頬を指で搔きますが、覚悟が決まったのか姿勢を正すと語り始めました。

「えつとだな……その……清掃員、クビになったんだ。」

「「えつ?」」

クビ……ですか?

「高級なブレスワインを何バレルも台無しにしたからな。物凄く高いのに全部捨てちゃったのは流石に不味かったみたいだ。他にもいくつもの物資を勝手に使ったからなあ……。商品に手を付けて売り物

にならなくなったから大赤字なんだってさ。」

「はっは！それは建前だ。兄さんも知ってるだろう？あの船長がそのくらいのことでクビにするもんか。」

そんな理由でクビになったと聞いたときは驚きましたが、どうやら本当の理由は別のところにあるようですね。

「船長は僕をクビにする際にこう言ったんだ。」

『おい坊主、お前はこんなところで掃除をして一生を終えるような男じゃないだろう？お前もつと自分に相応しい場所にいるべきだ。心の底からお前を求める人達がいる場所にな……。オレはどんな出会いも必然だと思ってる。オレが行き場の無いお前を拾って、清掃員として船に乗せたこと。団長殿がオレの船に乗り、すぐにお前と知り合ったこと。そして化け物に襲われたオレの船を助けるために駆け付けた狩娘をお前が救ったこと。全て偶然じゃない、逢うべくして逢ったんだ。分かったらとつと行け、出会いを無駄にするな。……。何だその顔は？今生の別れじゃないんだ、次に会うときにもつと立派になってオレを驚かせてみろ。』

「……ってな。物資の運び入れ中にこの鎮守府の実態を知った団長は、新しい提督として僕を迎え入れたいという話を船長にしたんだ。だから船長は僕をクビにして船から降ろしたんだ。」

そういうことだったんですね。

適当な理由でクビにさせられたにも関わらず、船長のことを語る彼の顔は誇らしげです。船長のことを尊敬しているんですね。

「……って『行き場の無いお前』って、まさか!？」

「あ、そんなに重い事情は無いって。ただ自分探しの旅をしていたら道中で行き倒れただけさ。両親も健在だし、定期的に連絡も取ってるよ。心配掛けさせて悪かったね。」

なんだ、良かった。もしも彼が孤児だったり、両親が借金を残して

蒸発してたり、はたまた記憶喪失だったりしたら気まずくてそれどころじゃなかったですよ……。

「それじゃあ暗い過去は無いんデスネー？これで心置きなくイチヤイチャ出来るヨー！」

「そうですね……って違います！そうじゃないでしょう!？」

いけないいけない、私まで金剛さんのペースに乗せられるところでした……。

「もう質問は無いな。それでだな、兄さんを提督に任命しようと思っているんだが、まだ本人から了承を取っていないんだ。」

「そういえばそうでしたね、まだ提督になつたとは言つてませんが……。とはいえここまですれば拒否権は無いような気もしますが……。

団長は彼に向き直ると姿勢を正します。

「頼むつ、この鎮守府の提督になつてくれないか!？」

頭を下げた頼む団長、表情も真剣です。

「私からもお願いします！この提督になつて下さい。」

「私もお兄さんに提督になつて欲しいネー！」

「お願いします、みんなの力になつて下さい！」

私達も頭を下げてください。彼と一緒に戦いたい、この気持ちに嘘はありません。

「そんなにされたら断れないじゃないか。まあ断る気は最初から無いけどね、僕で良ければ是非とも力になるよ。」

「本当か!?ありがとう兄さん……いや、提督！」

「やったあ！新しい提督だあ〜！」

「今日は提督の歓迎パーティーネー！船上パーティーに続いて鎮守府パーティーのパーティー日和ネー！美味しい紅茶とスコーンも用意するからネー！」

「……オレハ最初カラ信ジテイタゾ。彼ガ提督ニナツテクレルコトヲナ……。サテ……。イツマデモ……。ココニ長居スルワケニハイカン……。オレハ自分ノ仕事ガアルカラナ……。」

新たな提督の着任を全員で喜びます。

団長は笑顔で提督と握手を交わし、睦月さんと金剛さんも彼の下に駆け寄ります。

一方妖精さんは空気を読んだのか、鎮守府の中へ帰っていきました。

こうして新たな提督を得たバルバレ鎮守府は新たな一歩を踏み出しました。

これからバルバレ鎮守府は生まれ変わっていくのでしょうか、勿論いい方向へ。

緑色の衣装に緑色のカエルさんのポーチ。占いを信じて緑色を身に着けていたお陰かどうかは分かりませんが、素敵な出会いがありました。

私の運命を大きく変える出会い、それは間違いなくこのことだったんですね！

……と、ここで綺麗に終われば良かったのですがそうはいかないのが世の常みたいです。

香取さんと運命の出会い・超特殊許可

「ふう、待たせたわね。」

「あれ、あなたは？」

新しい提督の誕生を喜んでいた私達のもとに、見知らぬ女性がやって来ました。

黒いボブヘアに赤い瞳、白い巫女服と赤いミニスカート、そして妙に縦長い艦橋の髪飾り。

ついでに黄金に輝く城壁のような盾と、これまた塔のように長い黄金のランス。この特徴的な容姿の狩娘は……。

「あれ？お前は山城じゃないか。」

「久しぶりね団長。」

そうだ、山城さんです！彼女が提督の言っていたドンドルマ鎮守府の山城さん！

こうして会うのは初めてですね。

「ようやくどこの鎮守府か突き止めたわ、苦労したんだから……。それによろやく鎮守府に着いたと思っただけにもよって中庭にいるんだもの。どこにいるのかと思っただけで鎮守府の部屋という部屋を探し回ったんですからね！」

ああ、唐突に現れたと思っただけでそういうことだったんですね。

「それでとっても大きな深海棲艦とやらはどこにいるのかしら？」

「……え？」「……」

「出たんでしよう、信じられないくらいに大きな深海棲艦が？鎮守府にいた娘から聞いたわよ、ものすごく大きな深海棲艦が鎮守府に迫ってきているってね。」

会って最初に出す話題がそれですか？もっとうこう、自己紹介とかあるでしょう。

「ああ……確かに出たが。」

困惑しながらも答える団長。

「でしよう？言っちゃ悪いけど、見た限りこの鎮守府の娘はあまり強くなさそうね。」

ムツ……確かにこの鎮守府の娘はまだまだ弱いですよ、でも面と向って言うなんて言い度胸ですネ。

「でもG級狩娘である私が来たからにはもう安心なさい！」

えーっと、彼女は一体何の話をしているのでしようか？

「筆頭狩娘山城！私の槍に賭けて鎮守府に迫る巨大な深海棲艦なんて蹴散らしてみせるわ！」

ババーン！と効果音が付きそうな感じで見得を切る山城さん。

これが漫画なら見開きでページを占領しそうな勢いです。そして顔が丁度ページとページの中央に来てしまっただけで見えなくなるところまでがお約束ですね。

筆頭狩娘っていうのも言葉の意味はよく分かりませんが、とにかく凄い自信があるようですね。

だけど一つだけ気になる点が……。

「あの、山城さん……。」

「何かしら？……というか誰でしたっけ？」

「か、香取です……この鎮守府で秘書艦をやっています。」

「そう、よろしくね。それで何の用かしら？」

「あのですね、超大型深海棲艦はもういません。」

「またまた、そんな下手な嘘をつかなくてもいいのよ？自分の鎮守府を守るのに、他所の鎮守府の狩娘である私の手は借りにくいのかしら？」

「いやそうじゃなくて……。本当に深海棲艦はいないんです、もう追っ払いました。」

「……本当に？」

「本当です。」

「へえ……えっ？」

引きつった表情を浮かべながら、顔だけを団長の方に向ける山城さん。そしてそんな彼女に向かって申し訳なさそうな顔をしながらもコクリと頷く団長。

「か、下位の狩娘だけでちようかだいしんか……ンンツ、きよだんいしんかん……ゴホンツ、おつきな深海棲艦をやっつけたっていうの!?!、意外とやるじゃない……。」

私達下位の狩娘が超大型深海棲艦を撃退したことが信じられない様子の山城さん。

全身がプルプルと震えていますし、おまけにセリフもカミカミです。いいところを見せよう思っつて自信満々で出てきたのに、既に全てが終わっていたのが恥ずかしかつたのでしよう。

さつきまではプライドが高く少失礼な人かと思っつていましたけど、意外と残念なところがあつて親しみが持てる人なんですな。

これは団長と仲が良かったというのも頷けます。

「いえ、私達も戦いましたけど一番活躍したのは提督です。提督が戦つて追ひ払いました。」

「提督、それつて団長のこと?でも団長は戦えないハズよね?それとも噂の子供提督かしら?」

山城さんもゆうた前提督のことを知つているんですね、団長から聞いていたんでしょうか?

「いえ、深海棲艦と戦つたのはこちらの彼です。彼が私達の新しい提督です。」

「えつ、この人が?……え、え??へ、へえく……ふくん。まあ顔は悪くないわね、でも本当に超大型深海棲艦を追ひ払えるだけの実力があるのかしら?」

ここでようやく新しい提督に気が付いたのか少し驚いた様子の山城さんですが、そのまま提督に近付くと、まるで鑑定家が骨董品の価値を吟味するかのような感じで観察を始めました。

私の自慢の慧眼でお前の実力を見抜いてやると言わんばかりです。

流石の提督もジロジロ見られて少し居心地が悪そうですね。

……つていうかいくら何でも距離が近過ぎるんじゃないでしょうか？

観察に集中しているんでしようけど、気付かないうちにどんどん提督に近付いていつてますよ。

しかもそんな歩きにくそうな高い靴で、更にこまごまとした歩き方なんてしたら……。

「……………?!?きやあー!」

ああ、やつぱり転んだ！何も無いところなのに足をもつれさせてつまづくなんて、流石は不幸艦。

G級狩娘を名乗るわりには妙にどんくさいですね……………というか倒れた方向には提督が！

「うわっ、危ない!?!」

ドシューーンッ!!

山城さんは提督を押し倒すように転ぶと、そのままもつれ合うように二人で倒れ込んでしまいました。

提督も慌てて受け止めようとしたみたいですけど、流石に急過ぎて踏ん張れなかったようです。

「ま、まるで2人が抱き合ってるみたいネー。」

「言わないで下さい、私もちょうど同じことを考えていたんですから。」

倒れてきた山城さんを受け止めようと咄嗟に両腕を広げた提督、倒れる際に受け身を取ろうと慌てて両腕を前に伸ばした山城さん。

それがどうしてこうなったのか、山城さんの両腕は提督の首に回されており、提督の両腕も山城さんの背中に回されています。

提督が山城さんと抱き合いつつ押し倒されたようにしか見えません。

何なんですかこの唐突なラブシーンもどきは？ 久しぶりに再会して感極まって跳び付いてきた彼女を受け止めようとするも、受けきれずに倒れた彼氏の図か何かですか？

「にやつ!?!と、とんでもない光景を見てしまったのね……。」

「ほう、意外と積極的なんだな山城のヤツ。あの姉以外に興味の無かったヤツが、初めて会った男をいきなり押し倒すとは。アイツもドンドルマという新しい職場で成長したといったところか。はっは!-」

とんでもない光景と言いつ睦月さん、まだ幼い彼女には刺激が強過ぎたんでしょうか？

団長も団長で何呑気なことを言ってるんです？

「それより提督、早く山城さんを離して起きたらどうですか？山城さんもいつまでも寝てないで早く立って下さい………提督？山城さん？」

返事が無い？ひよつとして倒れた際に怪我でもしたんでしょうか？

提督は山城さんを受け止めたまま背中から倒れたんです、頭でも打っていたら大変です！

「提督、山城さん………あつ!?!こっ、これは!?!」

「What?……Oh, Noooooo!!!」

返事が無いのも当然です、何故ならお2人の口は互いの口によって塞がれていたのですから！

……っていうかこんな偶然あり得るんですかっ!?!

ラブシーンもどきかと思っただらもどきじゃなかった、本当にどうしてこうなった???

「HugとKiss両方しちゃったんデスカーーツ!?!ご、合計110ポイント……いや、相乗効果で1000ポイント!!クツ、マズいネー、悔しいけどこのままじゃ勝てないネー!-」

「だ、だ、大丈夫です！扶桑型の山城という艦はドが付く程のシスコンで有名な艦娘なんです、それは狩娘となった今でも同じなハズで

す！それに提督は私や金剛さんとの過剰な触れ合いでも、顔色一つ変えなかった自制心の強い人なんですっ！とにかく安心して下さい!!」
目の前の光景に混乱しているのか、自分でもちよつと何を言っているのか分かりません。

「会ったばかりの提督にいきなり惚れた2人がそれを言っても説得力が無いのね、睦月は恋愛ってそんな軽いものじゃないと思うんだけどなー。」

う、うるさいですよっ！

「……………んんっ……………えっ……………あっ!?!き、ききき……………キヤーーーツ!!」

口付けをしたまま呆然と固まっていた山城さんですが、ようやく正気に戻ったのか悲鳴を上げてその場から飛び退きます。

山城さん、耳から首元に至るまで顔全体が真っ赤です。頭から湯気が昇っているような錯覚すら覚えますね。

「10秒以上も長いKissをしちゃって、妬ましいネー！」
それは同感です。

山城さんがどいたことでようやく提督も立ち上がります。

山城さんに負けず劣らず提督も顔も真っ赤です……………つて私を抱き締めたときも、金剛さんの治療をした時もまるで動じなかった提督の顔が赤くなってる!?

ま、まさか提督は山城さんのような女の子がタイプなんでしょうか？

「何てこと、姉さまに捧げる予定だった身体と唇が……………ああ姉さま、山城は穢されてしまいました。」

何とも言えず気まずそうな顔をする提督と、怒り、恥ずかしさ、落胆といった具合にコロコロ表情を変え続ける百面相の山城さん。

「今まで男性との身体的接触なんて団長とした握手以外、一回も無

かったのに!!」

ええ〜?それはそれで人としてどうかと……。

鎮守府が女性中心の職場だからとはいえ、今までよく男性と触れ合わずに生きて来られましたね。

団長に従っていたことから男嫌いということでは無いんでしょうけど、姉の為に自分の身体を綺麗に保っておきたかったとかその辺りの思考なんでしょうか?

「ちよつとあなた!よくもキスしてくれたわね!一体どうしてくれるの!?!」

涙目になりながらもポンポンといった感じで顔を赤くして怒る山城さん。怒っているハズなのに、あまり迫力がありません。

パツと見は大人っぽい雰囲気の落ち着いた女性のようにですが、その実態はまるで駄々をこねる子供です。

何というか、残念な美人という言葉がとても似合いますね……。

それとキスをしたのは提督じゃなくて貴女の方からです。

「あなたのせいで……あなたのせいでっ!私と姉さまの将来の幸せ家族計画がパーじゃない!!」

提督に詰め寄る山城さん。転んだのは山城さんであって、巻き込まれた提督は悪くないと思うんですけど、理屈と感情は別なんです……。

……。
「というか姉さまとの幸せ家族計画って……自分の姉に一体何を求めるつもりだったんでしょうかこの人?」

「あなた責任取りなさいよッ!!」

「せ、責任を取れって言われても……。」

怒る山城さんと困り果てる提督。

責任って、提督に何を要求するつもりなんでしょうか? 慰謝料の請求?

事故みたいなものとはいっても、こういうのは男性が悪くなるケースが多いですからね……。

でももし裁判沙汰になった場合はこの香取、全力で提督の弁護をさせて頂きます。

着任早々に他所の鎮守府の狩娘にセクハラを働いて提督解任だなんて笑い話にもなりません。私は最後まで提督の味方ですよ！

「責任を取って……責任を取って……。」

言葉に詰まる山城さん。どんな面倒ごとを言い出すつもりなんでしょうか？

「責任を取って、私と……け、けけけ……ケツコンしなさいよツ!!」

なあんだ、慰謝料じゃなくてケツコンですか、裁判沙汰にならなくて良かった……ケツコン？

「は？」

瞬時にハモる私と金剛さんの声。

「け、ケツコン？」

「そうよケツコンよ！私はもう姉さまに合わせる顔が無いわ！だってらその原因を作ったあなたが責任を取るのは当然じゃない！」

いや、その理屈はおかしい。

「それとも何？私の初めてを奪っておきながら私とのケツコンは嫌だって言うの？私が欠陥戦艦だから？それとも私が筆頭狩娘とかいう頭の悪そうな集団に所属してるから？ハア……ヤリ逃げされるなんて私ったら本当に不幸ね……。」

「いや、そういうワケじゃ……。そりや僕だってこんなタイプの美人さんとケツコン出来るのなら嬉しいし……。」

超理論を展開する山城さん相手に流石にしどろもどろになる提督。

後半何かつぶやいていたみたいですけど上手く聞き取れませんでしたね、何と言っていたんでしょうか？

それにしても自分の所属している集団を頭悪そうって、同僚に話を聞かれたら解体されるんじゃないでしょうか？

「びっ、びじっ!?!……じゃ、じゃあ何が不満なの？」

びじ？ビジー？IT用語ですか？

近距離にいた山城さんには提督のつぶやきが聞こえたんでしょうか？

再び瞬時に赤くなりながらも提督に理由を問います。

「僕らはまだ出会ったばかりで、お互いのことを全然知らないじゃないか。そんな状態でいきなりケツコンって言われても流石に……。」

ごく当たり前のことを話す提督。

「けどそれってどちらかと言えば女性が言うセリフなのでは？これが草食系というものなんでしょうか？」

「だったらデートよ！デートに行きましよう！それでお互いの仲を深めて、そしてケツコンするの！それだったら文句無いわね！」

それに対してガツガツと攻める肉食系の山城さん。

キスをされて吹っ切れたのか、ここだけ見ればシスコン艦の面影は全くありません。

セリフだけ聞いたなら、まるでどこぞの餓えた狼さんみたいですわ……。

「……。」
「そういえば彼女はケツコン出来たのでしょうか？風の噂では妙な揚げ物製造マシンを作っているらしいですが……。」

ですがこのままでは提督が山城さんとケツコンしてしまいます。それだけは何としてでも阻止しなくてははいけません！

「ちよつと待「チョット待つネー！！」つてくだ……さ……い。」

私の声に被せるように声を張り上げる金剛さん。せめてさつきみたいにならせて下さいよ、グスン……。

「そんなの認められないヨ！いきなり現れて提督とケツコンだなんて無茶苦茶ネー！そもそも他所の鎮守府の狩娘が違う鎮守府の提督とケツコンするなんて前代未聞デース！そんなにケツコンしたいなら、自分の鎮守府の提督とケツコンすればいいじゃないデスカ！！それに好きでもないのに責任を取らせるためだけにケツコンしたってお互いUnhappyになるダケネー！」

いいぞ、もつと言え……って感じですね。反論の余地も無い正論

です！

「あ、あなた金剛ね？一体何なのよ、私と彼の問題に首を突っ込まないでくれるかしら!? 私の鎮守府の提督は確かに尊敬出来る人だけど、ケツコンするかというのはまた別問題よ……それに誰が彼のことを好きじゃないってゴニョゴニョ……。顔も悪くないし、声も好みだし、性格も良さそうだし、深海棲艦と渡り合えるだけの実力があって、団長にも認められていて、そしてこんなことまでされたうえに、欠陥戦艦の私を褒めてくれるだなんて、いくら初対面とはいえ好きにならない方が無理でしょ……。」

「そういやドンドルマの提督はあの人だったなア。確かにあの人ケツコンっていうのはちーつとばかり想像し辛いもんなア。」

当然そう簡単には引き下がらない山城さん。何やらブツブツ言ってますが、このまま金剛さんに論破してもらいましょう。

団長も一人で納得していますけど、尊敬は出来るけど恋愛対象とは見られていないドンドルマの提督って一体どんな人なんでしょう？

「なにより提督のW i f eの座は既に私のモノなんだからネー！」

そうそう、その通り………えっ？

山城さんに続いてデタラメをでつち上げる金剛さん。

当事者のはずなのに話に入り込めず部外者になってしまった提督も呆然としています。

ましてや団長や睦月さんなんてもはや空気ですよ、空気!!

ですが、このまま放っておくワケにはいきません！

「ちよっ、ちよっと待って下さい!？」

「どうしたネ、香取?今いいところなのに……。」

「そんな嘔吐かないで下さい、いつあなたと提督がケツコンしたっていうんですか?」

話を止められて不服そうな金剛さんですが、私の話を聞いた途端にそれを待っていたと言わんばかりに胸を張ります。

「そんなの逢ったときからネー!ホラ、船長もこう言ったじゃないデ

ス力？逢うべくして逢ったって。つまり私と提督は夫婦になる為に逢ったのネー！それに山城の唇を奪ったからケツコンって言うのなら、さっきの戦いでKissされた私もケツコンしたも同然ネー！」

「そんな屁理屈通るわけがないでしょう!?それにそんな理由でケツコン出来るんだったら、私にだって提督とケツコンする権利があります！」

「な、なんデスとーっ!?」

ハアハア、言つてやりました……つて、しまった!?

何とかこの状況を丸く収めようと思つていたのに、私の発言のせいで尚更混沌としてしまいました。もう現時点で收拾をつけるのは不可能です。

「な、何よ!?あなた達も彼とケツコンしようつての?」

私と金剛さんの発言に驚きを隠せない山城さん。

そりやあ誰だつて驚きますよね……。私自身も驚いていますもの。

まあ一番驚いているのは提督のようですけど……。

「提督つてモテるんだねえ……。」

「こりやあ面白いことになってきたな。物事はなんだつて面白いに越したことはないぞ。はっは！」

呆れる睦月さんと面白がる団長、他人事だと思つて傍観の姿勢に入つてますね。

呑気に面白いとか言つてますけどこれは笑い事じゃないです、私が言えた義理じゃありませんが……。

バサツバサツバサツバサツバサツバサツバサツバサツ……。

ふと遠くから羽音が聞こえてきました。ニクイドリやトウゲンチヨウといった鳥類と比べると遥かに力強い、だけど聞き慣れない羽音です。

羽音は段々ところちらへ近付いるようで徐々に大きくなっていきます。何かが近くを飛んでいるのでしょうか？

「んっ?おおっ、おいあれを見てみる！」

空を指差す団長。私達も一時的に言い合いを止めて空を見上げます。

「ほら、あそこだ。あそこにガブラスの姿が見えるだろう？」

大きな翼を羽ばたかせる持つ黒い蛇のような生物。あの独特な姿をした生物は間違いなくガブラスです。

ホルク？メルノス？いえ、知らない子ですね。

「珍しいな、こんなところにガブラスが現れるなんて。それもたった1匹とは。あいつらは基本的に山奥に群れで棲んでいるからなア。」

確かにそうですね、私もガブラスは滅多に見た事ありません。

ここバルバレ鎮守府は砂漠と平原に囲まれた土地。山もあるにはありますが、ガブラスを見に行こうと思ったらかなり遠出をしなければいけません。でも私達は観光に来たワケじゃないし、ガブラスを見る為だけに山に行くほど暇でもなかったですしね。

「ん？あのガブラス変じゃない？何だかフラフラしているよ？」

……言われてみれば確かにそうですね、飛行が安定していないみたいです。

それに黒いはずの頭が白くなっている？いえ、白い何かを被っているのでしょうか？

変なガブラスはそのまま私達の真上まで差し掛かります。

「クアッ!!」

唐突に頭を振るガブラス……って頭が取れた!?

……いえ、違いますね。頭に被っていた白い物が外れたみたいですよ。

「クアー♪」

邪魔な物が無くなりスッキリしたのか、ガブラスは私達には目もくれずにそのまま飛び去って行きました。一体あのガブラスは何だったのでしょうか？

ヒラ……ヒラ……パサッ。

ガブラスの頭から外れたそれは、そのまま提督の頭の上に覆いかさ張るように落ちてきました。

いえ、上空を見上げていたので落ちた場所は提督の顔の上ですね。

「んんっ、何だコレ？」

当然それを手に取り調べる提督。布のように見えますが、ハンカチでしようか？

「ああっ、それはっ!？」

提督が手にした布を見て驚く山城さん、一体どうしたんでしょうか？

「それは私のパンツよっ!!」

へえ、この布切れ山城さんのパンツだったんですね……………えっ、パンツ？

「それは数日前ガブラスに盗られた私のパンツなの！」

流石は不幸艦、下着泥棒ならともかく野生動物にパンツを盗られるなんて中々経験出来ることじゃありません。

……………つてことは提督は山城さんのパンツを被ったことになるんでしょうか？

「あ、あなたたっ!?!私を抱いて唇を奪った上に、次はパ……………パパパ、パンツまでツ!!」

今のはどう見ても提督は悪くないのでは？事故ですよ事故。それと抱いたとか誤解を招くような表現はやめて下さい。

……………いえ、ここはプラスに考えましょう。

提督が山城さんのパンツを頭に被ったことで山城さんは提督のことが嫌いになるハズです。そうすれば山城さんの提督への好感度は大幅ダウン。このケツコン騒動も回避出来ます。そしてこのまま金剛さんも言い包めれば、いずれは私が提督と……………

「こうなったら絶対にケツコンしてもらおうわツ!!人のパンツを頭に被っておいて逃げられると思わないことね!!」

「ええーっ!?!」

何でそうなるんですか!?!そりや提督も叫びますよ。

そもそもその理論だとガブラスとケツコンするハメになると思うんですけど……………

「クッ、こうなったら……………」

「金剛さん？スカートの中に手を入れて一体何をしてるんです？」

「今からパンツを脱いで、提督にPresentするネー！」

「はあ!？」

な、何を言っているんでしょっかこの人!？」

「山城は提督が自分のパンツを被ったからケツコンすると行ってマース、ならば私も提督にパンツを被せればケツコン出来るハズデース！何より洗って干していたパンツよりも脱ぎ立てのパンツの方が絶対に強いネー！このケツコン勝負、第一夫人の座は貰ったネー！」

「馬鹿なことを言わないで下さい！これ以上は收拾がつかなくなります！そもそもここ外ですよ!？あなたは時間と場所をわかまえる金剛型の長女じゃないんですか!？」

「チツチツチ、甘いネー！お砂糖マシマシのスコーンよりも甘いヨー！」

当たり前のことを言っただけなのに何故か呆れられる私。

一体私のどこが甘いと言うんでしょっか?？」

「ホラ、私の今の装備を見るネー。私は何を着ているネー?？」

「そりゃ吹雪型の装備一式ですけど……。」

「そう、つまり今の私は吹雪型。吹雪型十一番艦の金剛ネー!!」

おっしやっていることの意味がよく分かりません……。

そもそも吹雪型の十一番艦ってようするに綾波型のことでは?？」

「ブツキーと言えばパンツ！パンツデース！ブツキーはパンツ、パンツはブツキー！もはや世界の常識デース！そして私の改ニグラでもパンツが見えていマース！だからパンチラした私は紛れもなく吹雪型というワケデース！今の私は吹雪型であって金剛型ではないのだから時間と場所をわかまえる必要は無いのデース！それに聞いた話によれば吹雪型九番艦の磯波ちゃんも吹雪型のエロ担当と呼ばれているそうじゃないデスカ?？そんなにエッチな娘がいるのなら、吹雪型十一番艦である私がパンツを脱いだところで大した問題にはならないハズデース！」

金剛さん、ひよつとしてあなた酔っ払っています?？それとも変なクスリでも使ったんですか?？」

それと吹雪さんと磯波さんに土下座して下さい。

「うわあああああ〜〜!?!」

巨大な怪物と戦った結果、今までの仕事をクビになり、鎮守府運用のイロハも知らずに提督になる。そして初対面の女性にキスされてそのまま一方的に求婚されて、更に複数の女性に求婚される。挙句の果てには唐突にパンツを被せられる。

こんな超展開の連続にとうとう頭がパンクしたのか、パニックを起こした提督が逃げ出してしまいました。

まあ、気持ちには分かりません。

「あつ!?!待ちなさいッ!絶対にケツコンしてもらおうわよ!!」

「Oh、待つネー!待ってくれたら私のパンツあげるからサー!」

当然提督の後を追う山城さん、そしてアホなことを言いつつそれに続く金剛さん。

このまま3人が鎮守府の中に入ってしまったら、他の狩娘にも飛び火して鎮守府全体がとんでもないことになってしまいます。これ以上騒ぎを大きくするワケにはいきません。

こうなったら……。

「待ちなさいー!いつ!!それ以上の狼藉はこの香取が許しません!」

私も追うしかありませんよね?」

「古くからの言い伝えによるとガブラスは災厄の使者というらしいが、俺達にとつては幸せを呼ぶ黒い蛇かもな?ホラ見ろ、あの4人はもうあんなに仲良くなったぞ。はっは!」

「それをいうなら幸せの青い鳥なのね。そもそもあれが仲良く見えるのならお医者さんに診てもらった方がいいと思うのにな……。」

天龍ちゃんとうーちゃんさん！

「……ということが、あつて……現在の鎮守府に至ります……。」

「へえ、バルバレ鎮守府ではそんなことがあったのか……。」

問題児だらけの鎮守府が偶然の積み重ねによつて出会つた新しい提督のお陰で、すっかりとした鎮守府に生まれ変わったのか。

まさに運命の出会いをしたつてワケだ！

えつ、提督と山城の衝撃的な出会い？何のこつたよ？そんな話は聞いた覚えがねえな……。

「しかし本当に凄い提督なんだな。丸腰で深海棲艦を追い払うし、素人だったにもかかわらず滅茶苦茶だった鎮守府の改革を成功させちまうなんて。オレ達の提督と取り換えて欲しいくらいだぜ。」

「あつ、そういえばうーちゃん提督の写真を持つてるつぴよん！見たいく？」

「あるのか!?見たい見たい！」

これ程の功績を出したんだ、そりやどんなヤツか気になるつてもんだろ？

それにまつ毛に下着姿つて何度も言われりや、どんな容姿なのか気になつて当然だ。

何よりソイツモテるんだろ？やっぱりイケメンなのかな？まつ毛の件は別だとしても顔を見てみたいと思わないか？

「これがその写真つぴよん。つい最近撮ったばかりの撮れたてピチピチ、とっても新鮮な画像だつぴよん！」

卯月が取り出したのはピンク色をしたスマホ。

隅にはウサギの顔のシールが貼つてあつて卯月のイメージにピッタリな可愛いデザインだな。

おつと、いかんいかん。オレが見たいのはスマホのデザインじゃなくて中の写真だったな。

スマホのモニターに映っているその写真には4人の狩娘と2人の男性が写っている。

写真の一番右端でドヤ顔ダブルピースをしている狩娘が睦月だな。その睦月の後ろに立っているテンガロンハットの爺さん、この爺さんが団長って人だろう。

睦月の隣に立っているのは金剛。吹雪型じゃなくてちゃんと金剛型の服を着ているな、あれから新しく装備を作ったのか……。

写真の左側にいる緑色をした独特の制服を着て、眼鏡を掛けた狩娘が香取か。へえ、本当にカエルのポーチを付けてるんだな。

そんでもって一番左端で少し不機嫌そうな顔をして写っているのが山城……なのかな？

立ち位置が端っこ過ぎて顔が見切れて半分になっているせいでよく分からん。

とはいえ写真越しでもにじみ出る、この不幸なオーラのお陰で初見でもこれが山城だと理解出来るのが何ともコメントに困るな……。

そんでもって最後に香取と金剛の二人に腕を組まれながら中央に立っている男性こそが……えっ？

えーっと、こいつがバルバレの提督……でいいのか？ハッキリ言うって変態にしか見えない。

そう、その外見は珍妙の一言に尽きた。

まず目に付くのはガイコツのような気味の悪いマスク。これを被っているお陰で素顔が全く分からない。まつ毛とかそれ以前の問題だ。

続いて目立つのは身に着けている黒いメッシュ状の変な服、網目の隙間から素肌が見えるという非常にキモ……斬新なデザイン。

そんでもって腰に巻いているのはまるでチャンピオンベルトのような、作った人のセンスを疑うゴツい緑色のクソデカギザギザベルト。

もはやダサイとかそういうレベルを超越してる、こんな格好してい

て恥ずかしくないのか？

そもそもなんで写真撮るときにマスクを被ったままなんだよコイツは？

「こ、個性的な提督なんだな……。な、何というか話で聞いていたイメージと全然違っていて驚いた……。です、ハイ……。えーつと、勇気のあるブレイブとかいう装備は？」

あまりの衝撃にしどろもどろになりながらも質問してみる。

正直言つてこんなものを目にして平然としているなんてオレには無理だ。

やっぱ提督は取り換えなくていいです……。

「ブレイブ？あの装備は装備ボックスの奥に仕舞ってあるっぴよん。あれは防御力がペラペラだから見た目と違って頼りにならないっぴよん。」

いや、見た目の犠牲が大き過ぎるだろ……。

オレは腕のダンゴムシやパンツ丸出しの下半身に滅茶苦茶抵抗があるんだけど、この提督はこんな冒瀆的な姿を何とも思わないのか？「これは5倍ナルガとかKBTTTという通称で呼ばれている装備で……発動するスキルも素晴らしい……です。スキルの効果で、武器の斬れ味が、上がります。それに回避力も、スゴく上がる……です。まさに攻防一体。初めて披露したときには、照れ隠しで殴りかかってきた、山城さんの攻撃をヒョイヒョイと、避けてました。とつてもカツコよかった……です。」

「香取お姉ちゃんや金剛お姉ちゃんもそんな提督を見てキヤーキヤー言つてたっぴよん。自分の提督が人気で卯月も鼻が高いっぴよん！」

カツコいい……。この装備が？それとも華麗に攻撃を避ける提督がか？

キヤーキヤー言つてたのはアレだろ、変態的な装備に対する悲鳴だろ？歓声じゃないよな……？

そういう山城は照れ隠しで殴ったっていうけどこれに照れる要素って……。いや、これ以上考えるのはよそう。

そもそもナルガとかクボナントカと違って一体何だよ？何が5倍

になったんだ???

とにかくバルバレの狩娘って未来に生きてんな……。

「しかしバルバレ鎮守府でそんなことがあったっていうのなら、ひよつとしてここクロオビ鎮守府でも何かドラマチックなエピソードがあるんじゃないか？人間は一人一人に違ったドラマがあるっていうし……。」

「そんなものあるワケないでしょ。」

期待を込めて龍田に聞いてみるが、即座に否定される。

そんなに適当にあしらわなくてもいいじゃんか……。

「提督が副業にのめり込んで本業をすっぽかす話がドラマチックだと思う？そんなドラマじゃ視聴率上がらないわよお。」

た、確かに……言われてみればあの提督にマトモなドラマを期待する方が無駄だった。

「それに私を含めたこの狩娘にもそんな大層なエピソードなんてないわあ。強いて言うなら、まだ新人だった頃の神通さんが朝起きて狩りに行って、朝ご飯食べてポポミルク飲んで狩りに行って、昼ご飯食べてポポミルク飲んで狩りに行って、晩ご飯食べてポポミルク飲んで狩りに行って、お風呂に入って寝るとい生活毎日続けていたらいつの間にかハンターランクを解放してたって話くらいだけとお、ただ戦ってただけの変わり映えしない毎日よお。むしろ提督の業務を引き継いで、狩りにも行かずひたすら仕事をしている今の方がよっぽどドラマねえ……。」

は……？何それギャグ？軽く紹介したけどそれってとんでもないコトじゃん!?そのエピソード無茶苦茶興味あるぞ！

それとポポミルクっていうのが何なのか気になるが、とにかくそんなにミルク飲んだらお腹が緩くなるぞ？

「……っていうか提督の重要性は分かったけど、今の長話つてする必要あったか？」

話が長過ぎて忘れていたが、そもそもこの話を始めたキツカケは卯月と狩りに行く理由が関係してるんだったよな。だけど話を聞いても未だに卯月と一緒にいく理由が分かんねえぞ？

「あらあ、分からなかったかしら？うーん、天龍ちゃんにはちよつと難しかったみたいねえ。」

……イラツ。何だよオレの理解力が足りないみてえじゃねえか？

こんだけ長い話を寝ずに最後まで聞いたんだぞ？褒めるところはあっても馬鹿にするところはないだろう？

「要点だけ、掻い摘んで言えば……もつと短く簡単に、説明出来た……かも。でも弥生、説明へタだから……ゴメンなさい。」

あつ、しまった!?!落ち度のない駆逐艦に謝らせてしまった。

フッフ、怖いかじゃねーよ！自分よりちっちゃな娘に八つ当たりして怖がらせるとかサイテーじゃねえか!!

大丈夫大丈夫！怖がらないで。天龍、怒ってなんかかないですよ？

「プークスクス。」

「天龍ちゃんつたら……ウッフ。」

慌てて弥生をなだめるオレを見て笑う卯月と龍田。お前ら、後で覚えてろよ？

「あのね、最初に子供提督が着任してバルバレ鎮守府が問題児だらけになったって話があったでしょ？」

そうだな、それで後始末に香取達が苦労したんだろ？

「それで話の中にも出てきたけど、卯月ちゃんはそんな問題児の一人

でねえ。問題行為を繰り返していたの。最も今は新しい提督のお陰で更生したんだけどねえ……。」

「えへへ、あの頃のことはワキ毛の至りだっぴょん！」

それを言うなら若気の至りだな、そもそもお前まだ若いだろ。それと女の子がワキ毛とか言うんじやありません！

「そんな卯月ちゃんは今までの経験を活かして、これからワザと天龍ちゃんに迷惑行為をしてもらうからよろしくねえ。」

「イタズラは卯月の十八番、腕が鳴るっぴょん！」

なぐるほど、卯月が来たのはオレに迷惑を掛けるためだったのか……えっ???

「ちよっ、どどどということだ!?ワザと迷惑を掛けさせるためだけに来るだなんて全然意味分かんねえぞ!!」

迷惑掛けられて喜ぶヤツなんているもんか、いるとしたらソイツは真性のドMだよ!

???'「迷惑?気にせず好きなだけ掛けていいからね。いくらでも私に頼っていいのよー!」

……今、ここにいないハズの狩娘の声が聞こえたような?

まあ世の中には迷惑を掛けられても平気ってヤツもいるよな……オレは違うけど。

「天龍ちゃんにはどういう行動をされると迷惑に感じるか、それを体験してもらってワケ。実際に体験したら自分もやろうとは思わないでしよう?そのためにも元問題児だった卯月ちゃんの経験と協力が必要なのよお。」

「いやいや、そんなの口で説明すりゃいいじゃん!?わざわざ足を引つ張られる趣味はねえっての!」

「だっておバカな天龍ちゃんじや、口で言っても覚ええないもん。それに百聞は一見に如かずって言うでしょ?他にも痛くなければ覚えま

せんとか、騾に一番効くのは痛みだとか言うじゃない？要は習うより慣れよってね♪」

誰がおバカだ!?体罰されなくてもそのくらい覚えるわい!!

「それじゃあ私は弥生ちゃんと狩りに行ってくるから、卯月ちゃんは天龍ちゃんのことをお願いねえ。」

「ばいばい天龍さん。生きてたら、また……会いましょう。」

そのまま弥生を引き連れて退室する龍田。

っていうか弥生、不吉なこと言わないでくれ！何だよ、ひよつとして卯月と一緒に狩りに行くと死ぬのか!?

「はいはい、卯月にお任せっぴよん♪それじゃあ天龍さん、行こっか?」

「えっ、ちよっ?!離せっ、襟を掴むな!!」

弥生を連れて行った龍田とは逆に、無理矢理卯月に連れていかれるオレ。

そんなに引っ張らなくても自分で歩くって!

自分よりちっちゃい娘に引きずられるとか屈辱の極みだ……。

「心配しなくても大丈夫!うーちゃんの妨害テクはバルバレでもトツプクラスだから安心するっぴよん!ふん娘の称号は伊達じゃない♪」
「ふん娘!」

何、その不名誉な称号?どう聞いても安心できる要素が微塵も感じられないんだが……。

「ふん娘っていうのは狩娘のハンの読み方を変えたものっぴよん。実際の年齢じゃなくて、行動がお子ちやまの狩娘のことをこう呼ぶんだって。あの頃のうーちゃんはお子ちやまだだったから真正正銘のふん娘だったっぴよん。だけど今のうーちゃんは一人前のレディーだから大人の狩娘に生まれ変わったの……なあくんちゃって♪」

ああそう、クソみたいなことばっかりする狩娘だから糞娘って呼ぶんだと思っただよ……。

それとお前はまだお子ちやまだろーが。

「今回は天龍さんのためにわざわざ金剛お姉ちゃんに頼んでガンラン
スも借りてきたつぴよん。もつと感謝してくれてもいいんだよ？
ぷっぷくぷく。」

そう言つて卯月が傲慢気に見せ付けてきたのはライフルと槍を合
体させたような不思議な形の武器。

銃火器つて時点で嫌な予感しかしないんだが……。妨害のためだ
けにわざわざ借りてくるだなんて、そんな変な気遣いいらねえよ！

弥生の言つた通りオレつて本当に生きて帰れるのかな？

「あつ、そうそう大事なことを忘れてたつぴよん！」

「うぶつ!？」

何か思い出したらしく唐突に立ち止まる卯月。

急に立ち止まられたせいで襟元を掴んだままの拳が思いつきり喉
に突き刺さつたぞ……。痛い。

「だ、大事なこと？ 一体何だ？」

「ごほんっ……。……。ハチミツください。」

今までの明るく元気な様子はどこへやら？

突如としてまるで感情の無いプログラムのような、抑揚のない喋り
方を始める卯月。

その異様な雰囲気になんか寒気を覚える。

「ハ、ハチミツ？ ちょっと待ってろ……。」

オレからハチミツを貰うことのどこが大事なのかサツパリ分から
ないが、それが本当に大事なことになる仕方がない。

丁度いいところに収納ボックスがあるんでそこから取り出す。

えーつと、以前龍田に1つ分けてもらったヤツがあつたよな。それ
をマサムネに交易で少し増やしてもらつて前日にようやく帰つてき
たんだっけ？

「ピッタリ10個あるぞ、これでいいか？」

卯月にハチミツを渡す。

苦労して増やしてくれたマサムネには悪いが、お前が増やしたハチ

ミツほんの数秒で半分以下になったぞ。

「わーい、ありがとう天龍さん！天龍さんってとってもチョロいんだね！ぷっぷくぷく。」

ハチミツを貰うと機械のような喋り方から、元通りの元気で明るい卯月に戻った。

が、それと同時に何故か罵倒される。人から物を貰っておきながら出てきたセリフがチョロいって酷くない？

「あのねー、ハチミツちようだいって言われてもあげちゃダメなんだよ。」

「えっ？でもお前がくれって言ったんじゃ……。」

「ぷっぷっぷっ、これだからチョロチョロチョロ〜んな狩娘は困るっぴよん。」

小馬鹿にしたように肩を竦めながら鼻で笑う卯月。

チョロチョロチョロ〜ん……？

とにかく何でハチミツ渡したただけでここまでボロクソに言われんだよ？

「どうしようもない緊急事態ならともかく、自分で簡単に集められるものを人にねだる狩娘なんてロクな娘じゃないっぴよん、非常識の塊っぴよん！こういったアイテムくれくれ行為はふん娘の代表格で、実際にやるともれなく嫌われるからよく覚えておくといっぴよん。そしてそんな狩娘に言われた通りにアイテムを渡しちゃうのも、私は何も知らないおバカな狩娘ですってアピールしてるようなものっぴよん！よく覚えておくといっぴよん。」

ああ、そういうこと。だからチョロいって言われたのね……。

ゴメン、オレ自分でハチミツ採ったことねえわ。今持ってるのも、元を辿れば龍田に分けてもらったヤツだ。だって海に行ってもハチの巢なんて見当たらねえんだもん。簡単に集められるなんて今知ったよ……。

オレはチョロくておバカでロクデナシの狩娘です、生まれてきてすみません。

「まあまあ、落ち込むのはまだ早いっぴよん。最初言ったようにかつ

てのうーちゃんどうしようもないふん娘だったぴよん、お陰で周りに
いっぱい迷惑掛けたつぴよん。あの頃のことはクセロシキつぴよん
！でも提督が『知らないものは仕方が無いさ、これから覚えていけば
いいんだ。僕も提督業については何も知らないからね、これから一緒
に頑張つて覚えていこう！』って言つて頭を撫でてくれたつぴよん。
そして一緒にお勉強をして今のステキな卯月になったつぴよん！天
龍さんもステキな狩娘を目指して一緒に頑張るつぴよん！」

そうだな、オレは艦娘としての知識はあれど狩娘としての知識は少
ないんだ。これから頑張ればいいんだ。ありがとな卯月。

それにしても見た目はともかく中身はいい提督だなあ……。もう
ドクロ頭でもいいや、ここの提督と代わってくれ。

あとクセロシキじゃなくて黒歴史な……。

「あ、このハチミツは授業料として貰つておくつぴよん。これねー、パ
ンに塗つてトーストにするととっても美味しいんだぴよん。ぷっぷ
くぷく。」

「……えっ？返してくんないの？」

「えっ？貰つた以上は卯月のもものだから返さないつぴよん。変なこと
言うんだね、ぷっぷくぷく。」

「ええええええ……。」

開始早々人を信じる心を裏切られ、早くも心がくじけそうになる天
龍なのであった。

天龍ちゃんとうーちゃんさん2

「ようやくキャンプに着いたぴよん！お待ちかねの出撃でえくす！が
んばるぴよん！」

いつもは龍田に連れられる形で出撃しているオレだが、今日は卯月
に引つ張られての出撃だ。

クエストの費用は当然オレ持ち。確かにオレが受けるべきクエス
トなんだからオレが払わなきゃいねえんだろうけど、割り勘システム
とかないもんかねえ……。損した気分が拭いきれねえ。

「支っ給品♪支っ給品♪」

卯月は支給品ボックスの中に上半身を突っ込み、両足をパタパタさ
せながら中を漁っている。

オイオイ、スカート穿いてるせいでピンク色の縞パンが丸見えに
なってるぞ。恥ずかしくないのかね？

え？常にパンツ丸見え状態のヤツが言うなって？全くもってその
通りだよ、コンチクショウ。

「これで準備バツチリ！やる気も満々！うーちゃんのガンランスは
さつきからビンビンだぜ……。なあんちゃって。実際はガンランスあ
んまり使ったことないんだけど、金剛お姉ちゃんの見様見真似で頑張
るっぴよん。」

ようやく卯月が支給品ボックスから出てきた、それじゃあオレも出
撃の準備をしますかね。

ガサゴソ……ガサゴソ……。

「……あれ？」

ガサゴソ……ガサゴソ……。

「……………おい、これってまさか!？」

「そうよ、そのまさかっぴよん！」

支給品ボックスの中には地図以外何も入っていなかった。

しかもその肝心の地図にも黒の太文字でデカデカとハズレなんて落書きがしてあり、とてもじゃないが使えたもんじゃない。

そして振り返ったオレの目に入ったのは腕の中に支給品をゴツソリと抱いている卯月の姿。

「支給品は全部卯月が頂いたつびよん！これこそふん娘の基本行動、支給品独り占め！天龍さんは荷物が少なく済んで良かったね、ぷっぷくぶく。」

「そういや以前龍田が言ってたな、支給品は独り占めせずにみんなで使いましょって……。」

確かにこれは困る、支給品がある前提で来たからあんまり自前のアイテムも無いぞ。

え、持ち込み不可クエストでもないのに自分でちゃんと用意しない方が悪いって？

「NDK？NDK？迷惑に感じたつびよん？ごめんね、でもこれも愛の鞭！天龍さんを一人前の狩娘にするための龍田さんからのお願いだつびよん。だからいつぱい意地悪するし、当然アイテムも分けてあげないつびよん。」

口では申し訳なさそうに言っているが、まるで表情が一致してない。

悪いことを自覚していながらこんなに楽しそうな顔をしていられる人なんてそうそういないぞ？

「あつ、そうだ。これだけなら特別に分けてあげるつびよん、そーれ！」

ポイツ……ベチャツ。
「……………」

卯月が投げてきたのはペイントボール。

それは油断していたオレの顔面に直撃し、オレの顔は妙な匂いを放つピンク色の塗料まみれになった。

「わーい、ピンク色つびよん！うーちゃんとお揃いだ〜！あはははは。」

だ……駄目だ、まだ怒るな……。こらえるんだ……。し……。しかし

……。

まだ出掛けて1分経ってないだろ、怒るには早過ぎる。

それにこれはオレのことを想ってワザと憎まれ役をやってくれて
いるんだ……多分。

ましてや相手はオレより年下の子供だぞ、ここは年上として我慢の
見せ所だ。

「そんじゃ次行こっか？このままベースキャンプにこもつての寄生プ
レイもオツだけど、それじゃあうちちゃんが面白くないっぴよん。
れつつらご〜！」

どこまでもマイペースな卯月に渋々着いて行く、のっけからこの調
子でオレの体力持つのかな？

「へッへッへッ……。」

卯月と一緒に進んでいると、まるで不審者のような声をあげる怪し
げな人影を発見した。

しかしそいつは変質者ではなく、かといって光の国からオレ達のた
めに来てくれた正義の巨人でもない。れっきとした深海棲艦だ。

頭全体を覆う白いマスク、砲台のような右腕、そして巨大な口のよ
うな下半身。

あの姿は間違いなく軽巡へ「あれぞ今回のターゲット、へ級先生
だっぴよん！」ゆう……せ、先生？

突然意味不明なことを言い出した卯月に困惑するオレだが、卯月は
構うことなく話を続ける。

「へ級先生こそ、全ての狩娘に戦い方のイロハを教えてくれる大先生
だっぴよん！へ級の動きは他の大型深海棲艦と共通するところが多
いっぴよん。だからへ級と戦ってその動きを覚えてしまえば他の深
海棲艦なんて楽勝……になるハズっぴよん。」

なくるほど、最初は何言ってるのかと思ったが多少は納得がいったぜ。戦い方の参考になるってんで、それで先生って呼ばれてるんだな……。

見た目もドス級駆逐艦に比べて人型に近いし、確かに学ぶことは多そうだ。

それに凶体も大柄で見るからに手強そうだ、気を引き締めて掛かるとするか。

「まあうーちゃんは今までずーつと寄生をしてきたから、未だに先生の動きを覚えてないんだけどね。えへへへ。」

いやそれ笑い事じゃねえだろ……。

オレにフン娘の何たるかを教える前に、自分の腕を磨いた方がいいんじゃないか？

「さあて、へ級はまだこつちに気付いてないな。だったらチャンスだ。」

現在のオレ達は大きな岩陰に身を潜めている。

このままへ級が背中を向けたところで、背後から奇襲をかけるのがベストだろう。

そうすれば最初の不意打ちと振り返ってから戦闘態勢に入るまでに4、5発は多く殴れるはずだ。

「あつ、そうだ！うーちゃんいい物持ってきたつびよん。」

卯月はそう言うが早いか、ポシエツトから手榴弾のようなものを取り出した。

それを左腕に着けた小さなボウガンのようなものに取り付ける。

「それは？」

「これ？これはスリンガーだよ。」

「スリンガー？」

「えーつとね、卯月もよく分かってないんだけど開発中の新アイテムでね、物を遠くまで飛ばすことが出来るんだつびよん。まあパチンコ銃みたいなものだつびよん。まだ試作品であんまり出回ってはない

んだけど、今回はテスト運用中の香取お姉ちゃんのところからこっそり借りてきたんだっぴょん！」

パチンコが新開発の装備？原始的だなあ……。

それにしても黙って持ち出してよかったのか？

「それじゃあ発射っ！」

卯月は岩陰から腕だけをこっそり出すと、へ級に狙いを定めて弾を発射する。

キイイイイイン!!!

へ級のすぐ傍まで飛んで行った弾は空中で破裂し、それと同時に大きくなって甲高い音を立てる。

「へエツ!？」

高音に動揺したのか、へ級の動きが止まった。頭をふらふらさせながら呆然としているように見える。

「これぞ必殺、音爆弾びょん！」

「音爆弾？」

「そう！音爆弾は破裂する際におっきな音が出るイタズラに持ってこいのアイテムっぴょん！金剛お姉ちゃんがトイレに入ってるときにドアの前で破裂させたら、驚いて便器にハマっちゃったほどの威力だっぴょん。まあ後ですごく怒られたんだけどねえ、ぷつぶくぷ。」

なんつーことを……。そりゃ誰でも怒るわ。

「そして先生は大きな音に弱いっぴょん。きつとマスクの中で音が反響してるんだっぴょん。おっきな音を聞いた先生はビツクリして動けなくなるから攻撃のチャンスっぴょん。」

そうか、ならば今こそ攻め時！

最初は邪魔しに来たって言われてどうしたもんかと思っていたが、こうもあつさりとチャンスを作ってくれるとはやるじゃねーか！

「うおおおおお!!」

いつでも抜刀出来るよう骨の柄に手を添えながら一気にへ級に走り寄る。

先生だか何だか知らねえが、その首貫ったぜ!!

「……あつ、言い忘れてたけど先生はすぐ正気に戻るし、更に驚かされたことで激怒する性質があるから注意するつぴよん。」

「……あつ?」

「へアアアア!!」

ドゴオツ!!

「うげえつ!」

へ級怒りの右フツク。

そんなものが飛んでくるなんて夢にも思わなかったオレは顔面をブチ抜かれ、勢いよく吹き飛ばされる。

「あがががが……。い、言い忘れたんじやなくて、ワザと言わなかったんだろ?」

「ん〜?そうかもしれないっぴよん。でも聞かれなかったし、言い忘れるのもしょうがないよね。あははは〜。」

こ、こいつう……。

BGM：咆哮

「へアアアア!!」

改めてこちらに向き直り、敵意をあらわにするへ級。

右目をキラキラと輝かせ、右手の砲口からもチラチラと火の粉を漏らしている。

……ん?火の粉???

「へエエ……。」

怒り心頭のへ級はオレに向かって右手の砲口を向けてきた。

砲撃か?いや、この海域の深海棲艦は砲撃はしてこないハズ。

実際にイ級は撃つてこなかったし、神通がそう言ってたんだから間違いない。

だとしたら威嚇行動か？誰だって砲口を向けられていい気はしねえ。

「天龍さん、へ級の片手の砲口をよーく見るっぴよん。火の粉が漏れているのが分かるっぴよん？へ級は怒ると砲口から火の粉が漏れるっぴよん。そういうった普段と様子が違うところを見極められれば相手の機嫌を判断することが出来るっぴよん。」

岩陰に隠れたままの卯月が、声だけで教えてくれる。

「ついでにもう少し砲口を眺めてみるっぴよん。きつとビックリするものが見られるっぴよん！」

ビックリするもの？なんだそりゃ???

ビックリするものとやらが気に掛かり、観察を続けてみることにする。

この距離ならへ級のパンチも届かないから安全だろうしな。さあて鬼が出るか蛇が出るか？

「へッ!!」

「へっ???」

へ級の砲口から勢いよく発射されたのは鬼でもなければ蛇でもなく、真っ赤に燃える紅蓮の火球。

当然その火球は砲口を覗いていたオレ目掛けて飛んでくるワケでして……。

シュボツ……。

「あゝあゝあゝ~~~~っ！あゝっぢい~~~~っ!」

火球はそのままオレの顔面に着弾し、オレの頭は炎に包まれる。

「あちあちあちあち!」

慌てて両手で頭をはたいて消火を試みる……が、火は全然消える気配が無い。

マズい、このままじゃ髪型がアフロになっちゃう!?

何だかんだで神通のことが怖い天龍であった。

「へエーッ!!へエーッ!!」

硬い装甲に覆われた右腕を身体ごと振り回しながら暴れるへ級。

これじゃあ危なつかしくて近寄れないぜ。

あの右フックは適当にブンブン振り回しているように見えるが、一発一発がドスイ級のタツクルに匹敵する破壊力がある。

そんな威力の技を連発してくる相手に、無暗に突っ込んでいったらあつという間に返り討ちだ。

本来ならば相手が怒る前にある程度動きのパターンを見て覚える必要があるんだろうけど、そんな悠長なことをする前に相手がキレて暴れ出したからそれどころじゃなくなつた!

クソツ、どうすれば……。

「うーん、このままじゃ天龍さんが乙つちやうつぴよん。フン娘的にはそれもアリなんだろうけど、この時点でやられてもらつちやうのはまだ面白くないし、ここは一度形勢を立て直した方がいいつぴよん……。」

今まで何もせずに岩陰に隠れていただけの卯月は、ボール状のものを取り出すと今度はそれをスリンガーに装填し始めた。

「よーし、これを喰らうつぴよん!」

また音爆弾か?

これ以上怒りのボルテージが上がっていくのは勘弁なんだが……。

ピューン、ベチョツ……。

発射されたそのボールは途中で破裂することなく、そのままへ級に命中した。

そしてへ級にベツトリとこびりつくボールの中身。

「……………オゲエツ!? く、臭っ！ な、何だこれ？ うっ?! 臭いを通り越して痛い!」

それはとてもじゃないがこの世の物とは思えない、謎の液体だった。

一秒ごとに目まぐるしく色が変わり続ける液体。敢えて言うなら虹色だろうか？

虹色の液体はドロツとした粘性の高いゲル状をしており、ゴポゴポと不気味な泡が次々に立っている。更にシューシューと不快な音を立てながら、これまた虹色の煙が上がり続けている。その煙は凄まじい激臭を放っており、とてもじゃないが近付けたもんじゃない。

そしてそんな劇物をぶつけられたへ級はどうなったかというところ……。

「へエッ、エッ、エッ、エッ、エッ、エッ……!!??」

怒り状態になった時よりも更に凄まじい声を上げながら、もだえ苦しみのうち回っていた。

当然である。離れていても悶絶するような液体を全身に浴びたのだ。

へ級は浴びた液体を洗い流すかのように、慌てて海中に潜っていく。

海面から薄っすらと見える水中にいるへ級のシルエット、その影はそのままだるかへと泳ぎ去っていつてしまった。

……………あれ? これってひよつとしなくても逃げられた?

天龍ちゃんとうーちゃんさん3

「ゴホツ……あー臭かった。まったく何だっただよ一体？」

謎の異臭はようやく治まったが、へ級にはまんまと逃げられてしまった。

いや、ここは見逃してもらったというべきか？

しかし謎の煙を吸ったせいで喉が痛いし、目もかゆい。おまけに鼻水も止まらないぞ。

「天龍さーん、大丈夫だったつぴよん？」

今までずっと岩陰に隠れていた卯月は、へ級がいなくなったのを確認するとようやく姿を現した。

「無事で何よりだつぴよん。いやあ、へ級は強敵でしたね。」

何やりきった顔してんだ、お前全く戦ってなかっただろ……。

「それより今のヤバそうなものは一体なんだよ？」

「ヤバそうなの？それってひえい玉のことつぴよん？」

ひえい玉あ？

何だろう、名前からして嫌な予感しかない……。

「これはうーちゃん達の鎮守府にいる比叡お姉ちゃんが作った料理を素材玉に詰めたもので、うーちゃん世紀の大発明だつぴよん！」

ええ……あれ料理だったのか??形容出来ない色をしていたんだけど……。

というか、作ったのお前かよ。

「比叡お姉ちゃんはお料理が趣味で、よく大好きな金剛お姉ちゃんと仲良しの提督の為に腕を振るってるつぴよん。だけど出来上がる料理はどれもこれもとてもじゃないけど食べられたものじゃない、というか食べたら命に関わるものばかりつぴよん。使ってる材料には何一つおかしい所は無いのに、あんなものが出来上がるなんて不思議つぴよん。謎つぴよん。ミステリーつぴよん。」

命に関わるってマジかよ!?オレの鎮守府にはメシマズがいなくて助かったぜ。

というかそいつを料理と呼んでいいのか?アレを浴びたへ級の装甲が少し溶けていたような気がするんだが?

「当然そんなものを食べたくない金剛お姉ちゃん」と提督はあの手この手で食べるのを避けようとするつぴよん。金剛お姉ちゃんが比叡お姉ちゃんの気を引いている隙に提督が作った料理を別の料理とすり替えたり、食べたふりをして誤魔化したり……。」

そもそも料理をさせないっていう選択肢は無いのか?

無いんだろうなあ、というか対策してもきつとすり抜けられるんだろうな……。」

「それで比叡お姉ちゃんの料理は嚴重な管理の下で処分されるんだけど、そのまま捨てちゃうのは使われた食材達に対して申し訳ないかなって思った心優しいうーちゃんが、試しに素材玉に詰め込んだところ完成したのがこれつぴよん!」

いや、その発想はおかしい。

そんな劇物オレだったら関わることすらイヤだぞ?

「作る際にガスマスクと厚手のゴム手袋が必要になるけど、効果は見ての通りつぴよん!これを一度でも使っちゃえば、こやし玉を使うのが馬鹿らしくなっちゃうつぴよん。」

「こやし玉?」

また聞いたことのないものの名前が出てきたな、こやしって肥料のことか?

「ええ?天龍さん、こやし玉も知らないつぴよん?そんなんじやこの先生きのこれないつぴよん!」

呆れたと言わんばかりに肩をすくめ、ヤレヤレと頭を左右に振る卯月。

なんでこやし玉を知らないだけで、ここまで見下された態度をされなければならぬのか?

「こやし玉っていうのは、素材玉の中に深海棲艦のう〇こをたっぷり詰めた素敵なアイテムだつぴよん!」

深海棲艦のう○こ？

ああ、そういや師匠が言っていたな。深海棲艦の縄張りには、たまにう○この的なものが落ちてるって。

「当然う○こは臭いし汚いっぴよん。だからこやし玉をぶつけられた深海棲艦は、その臭いを嫌がってその場から逃げ出しちゃうっぴよん！」

成程、理解した。ばっちいこやし玉には深海棲艦を追い払う効果があるんだな。

そしてこやし玉よりも強烈な臭いと刺激を放つひえい玉はこやし玉の上位互換にあたるといったところか。

へ級じゃなくてもそんなものを顔面に受ければ逃げ出すよなあ。

自分の作った料理がう○こ以下の扱いを受けてるなんて、比叡本人は知ってたんだろうか？

「最も想像以上に威力が高過ぎたせいで、近距離で使ったり素手で投げたりするのは自分もダメージを受けちゃうから危険っぴよん！自爆を避けるためにもスリンガーを使って遠距離から狙うのがベストっぴよん。」

「そりやそうだ、だってあれ近くで嗅いだらとんでもなく臭かったかな。っーか臭いを通り越して痛かった、ありや化学兵器だろ………待てよ、オレの顔の調子が悪いのはそのせいかな!?お前オレが近くにいての分かってたのに使いやがったな！」

「テヘペロ、こやし玉を持ってなかったから仕方なかったんだっぴよん♪許してねっ?」

可愛らしく笑って誤魔化そうとする卯月。

こやし玉を持ってなかったとは言いが、ひえい玉はしっかりと用意している辺り確信犯だろ。

まあお陰でへ級に張り倒されなかったから許すけど、なんだかなあ……。

比叡は自分で調理していて、よく無事でいられるなあ。

自分で作ったものだから耐性があるのか？

「しかし助かったのは確かだが、その代わりにへ級を見失っちゃまったな。」

へ級はペイントボールをぶつける前にどこかへ消えてしまった。

ドスイ級みたいに海面を泳いで逃げるのなら行先も目視で分かるが、海中に潜って移動されるとどこに逃げられたのか見当も付かない。

これを追跡するのはかなり骨が折れるぞ。

「それなら安心、実はもう一つ新兵器を持ってきたつぴよん！」

そう言つて卯月が取り出したのは、仄かに緑色の光を放つ物体が入った小さな金属製のカゴ。

「これは？」

「これは導虫だつぴよん！」

「しるべむしィ？」

また虫か……猫虫といい狩娘つてやたらと虫を扱いたがるな。

ひよつとして虫が好きで奴が責任者の中にいるのか？オレはそんなに虫好きじゃないけど。

かわいい小鳥とか綺麗な小魚とか、もつと一般受けするような小動物はいねえのかな？

「そう、そしてこのカゴは導虫を入れる虫カゴ。導虫には物の臭いを覚える習性と、覚えた臭いを追跡する習性があるつぴよん。だから導虫に深海棲艦の臭いを覚えさせれば、ペイントボール無しでも深海棲艦の位置が分かっちゃうつぴよん。つまりこの虫を飼い慣らして虫カゴに入れておくことで、いつでも簡単に深海棲艦を追い掛けることが出来るようになるつぴよん！」

なあるほど、臭いで探索する警察犬や災害救助犬みたいなものか。

これならわざわざペイントボールを使う必要が無くなるから、深海棲艦を見失う事は無くなるってワケだ。

うーん、虫を訓練するより犬が水上を歩けるようになるモジュールでも開発した方が早いんじゃない？

でも戦闘になったら犬は足手まといになるよな。アタリハンテイ力に適応した深海棲艦とも戦える犬を探すとすると流石に割に合わないか？そもそも深海棲艦と戦える犬なんているワケないよなあ。

えっ、猫なら足手まといどころかちよつとした戦力にすらなるだつて？いやいや、なんで犬が駄目で猫ならいいんだよ!?

おっと話がズレてきた。

「因みにこれもまだテスト段階のもので、香取お姉ちゃんのところからこつそり借りてきたものだつぴよん!」

これって絶対後で怒られるパターンだよな……。

オレは何も聞いちやいないし見てもいない、オレは卯月が試作品を持ち出したことなんて全く知らないぞ。

「それじゃあ早速追跡開始だつぴよん!導虫よ、行けえ〜!」

そう言つて虫カゴを両手で高らかに掲げる卯月。

そして虫カゴから緑色の光を放つ導虫が飛んで………いかない。

「……………うん、あれ?えつと??……………よし導虫よ、行けえ〜!」

カゴから出てこない導虫を疑問に思いながらも、仕切り直してもう一度虫カゴを掲げる卯月。

今度こそ虫カゴの中から導虫が飛んで……………いかない。

「んんつ?……………あつ、そつか!そつかそつか、だからかあ〜。」

何やら一人で騒いで、一人で納得してしまった卯月。

何が何やらさつぱり分からん、分かるように説明しろ。

「何が『そうか!』なんだ?」

「えつとね、導虫は覚えた臭いを追つていく性質があるつて言ったでしょ?だけどひえい玉の臭いが強烈過ぎて、へ級の臭いが分かんないみたいつぴよん。」

「だったら導虫にひえい玉の臭いを追わせれば…………。」

「それが嗅覚がとっても敏感な導虫にとつて、ひえい玉の臭いはキツ過ぎるみたいで外に出るのが嫌みたいつぴよん。」

「はあー？それじゃあ追跡出来ねえじゃねえか。」

先程までへ級がいた場所はひえい玉の残りカスがプカプカと浮かんでおり、その周囲には敵の追跡どころか作戦の続行すら躊躇われるようなケミカルな泡が未だにゴボゴボと沸き立っている。

更には不気味な煙もモクモクと立ち昇っており、そこから凄まじい悪臭を放ち続けている。

そりや導虫とやらが出てこられないのも納得だよ、オレだって帰りたいもん。

というかこれは規模こそ小さいが、ハッキリ言ってシヤレにならないレベルの水質汚染なのでは？

「だったら導虫の代わりにうーちゃんが臭いを追っかけて探すつぴよん！うーちゃんはウサギさんだから鼻はいいつぴよん。何たってウサギは1キロメートル先に落ちたニンジンの匂いだって嗅ぎ取ることが出来るんだつぴよん！」

ウサギが優れているのは嗅覚ではなく聴覚なのでは？

というか卯月はウサギつぽいだけでウサギではないだろ……。

そもそも1キロメートル先に落ちたニンジンとか、そんなのどう考えても無理だつて。

「えへへ、今の信じた？実はウツソぴよん♪でもただでさえ臭いの強いひえい玉ならペイントボールの代わりにもなつちやうつぴよん、だからうーちゃんの鼻でも追跡は難しくないつぴよん。導虫ならぬ導卯月だつぴよん！」

そうなのか？オレの鼻はさつきひえい玉が至近距離で炸裂したせいで、完全に詰まってしまつて全然分からねえや。

「でもその前に……。」

卯月は懐から白い粉の入った小ビンを取り出すと、それを惨劇の跡に振り撒いた。

粉を振り掛けられた汚物は徐々に反応が沈静化していき、やがて煙も泡も出なくなった。

「今度は何だよ？またしても試作品の薬品か？」

「これ？これは消臭玉と抗菌石とウチケシの実をまとめて粉末にして

混ぜたものだっぴよん。消臭玉には消臭効果があるし、抗菌石とウチケシの実には殺菌及び浄化作用があるっぴよん。ひえい玉を使った後にはこれを絶対に使わなきゃいけないんだっぴよん。これを使わないと環境破壊になっちゃうっぴよん！」

「分かってんなら尚更使うなよ……。」

「そもそも普段はひえい玉は作るのも使うのも、提督と香取お姉ちゃんに止められてるんだけどね。でも旅の恥はかき揚げって言うし、スリンガーだってせっかく持ち出したんだっぴよん。使わなきゃ損でしょ？」

出先でバレないからってやりたい放題しようと思っただけがんな。

それとかき揚げじゃなくてかき捨てだな。

「それじゃあ改めまして、導卵月出動だっぴよん！」

こうして卵月の案内でへ級の追跡を開始した天龍。

しかし一癖も二癖もある卵月の案内で、果たしてへ級に辿り着くことが出来るのか？

その結果は案内をする卵月のみが知るのであった。

天龍ちゃんと卯月ちゃん 4

「くんくん。うーんとね、臭いを感じるのはこっちつぴよん。」

現在卯月の案内に従ってへ級の追跡をしている最中なのだが、いくら歩けど追い付く気配はまるで無い。

それはへ級の移動速度が異常に早いワケでもなければ、卯月の道案内が間違っているワケでもない。

「あつ、こんなところに鉱石の採取ポイントがあるつぴよん！せっかくだしちよつと掘っていくつぴよん。それ、カッーンカッーンと……。」

その理由は見ての通り、ことあるごとに卯月が道草を食うからである。

ウサギだから道草を食って当然ってか……やかましいわ！

「鎧玉がいっぱい掘れたつぴよん♪……あれっ？いつの間にやら臭いのする方角が変わったつぴよん。それじゃあこのまま進んでも仕方が無いから引き返すつぴよん！」

「オイオイ、そんな悠長なことをやってる場合かよ？クエストって50分しかないんだぞ？時間足りるのか？さっきから何度もへ級と行き違いになってるし、このままだと永遠に追い付けねえぞ。」

こうなったらもうコイ卯月を置いていつて一人で探しに行こうかな？

手元にマップは無いし、へ級のマーキングもしていないけどこのまま時間を浪費するよりはマシだろう？

「しようがないなあ、それじゃあそろそろ本気を出すつぴよん。」

そんなオレの心境を読み取ったのか、ようやく卯月も真面目にへ級を探す気になったようだ。

最初からそうしろよ……。

「くんくんくんくん………あつ、あそこにいたっ！見つけたっ
びょん！」

「あつ、アレか……あつ、アレかあ……。」

卯月の案内でようやくへ級に追い付くことが出来た………
出来たのだが。

「あのさあ、アイツ……何だか顔が爛れてないか？」

発見したへ級の顔面、とうかマスクは見るからに痛々しく焼け爛
れており、未だにジユクジユクと痛々しい音を立て続けている。

更には腐食によるものなのか、幾つもの十円玉サイズの穴が空いて
しまっており、その穴からはわずかな火花と黒煙を立ち昇らせてい
る。

また肩から胸に掛けても酷い火傷のような痕があり、心なしか元氣
が無さそうに見える。

「ほとんど攻撃してないのに既にボロボロじゃん。何だか狩るのが申
し訳なくなってきたな……これもひえい玉の効果なのか？」

「その通りっぴょん。ひえい玉はぶつけた深海棲艦を追い払うだけ
じゃなくて、大ダメージを与えることも出来るっぴょん！ついでに言
うとスリップダメージのオマケ付き、追撃の溶解液で更にダメージは
加速するっぴょん。だからひえい玉はこやし玉の上位互換だつて
言っただっぴょん♪」

いや、これはやりすぎだろ……。

これって禁止級の非人道兵器じゃないの？そりや使うのも作るの
も禁止になるよ。

いくら相手が深海棲艦で、最終的に狩ることになるとはいつでも流
石にこれは可哀想だ。

そして深海棲艦にすら大ダメージを与える物体を作り上げるなん
て、比叡は一体どんな材料を使ってどんな調理をしてんだよ？

提督と金剛は今までこの料理を前にしてきて、よく無事に生き延びてこられたな……。

「それで今度はどうするんだ？もう音爆弾を使うのは無しだぞ、もちろんひえい玉もな。」

「ゴメンゴメン、今度は大丈夫っぴょん♪」

狩りを始める前にあらかじめ卯月に釘を刺しておく。

これ以上スリンガーで変な物を投げられちゃ堪らないぜ。

「今度はうーちゃんが狩娘として狩りに協力するっぴょん！協力しての狩り、狩娘としての醍醐味だっぴょん。」

「卯月との協力プレイか、即席のコンビでそう上手くいくもんかねえ？」

狩娘に名を変えたとはいえ、オレ達は元々艦娘。

軍人として、集団戦闘の大切さは痛いほど分かっている。

こういう時こそ提督が仕事をするもんだが、狩娘の提督は基本的に放任主義だ。

だからこそ現場で指揮を執れる狩娘が必要になるが、オレにそんな能力は無いし、どう考えても卯月にだって指揮は執れないだろう。

さて、どうしたものか？

「何だか難しく考えてないっぴょん？そんなに真面目にならなくてもいいんだよ？」

「え？」

「狩娘っていうのはね、狩猟時間を気にしたりよほどの事情でもなければ基本的に個人プレーなんだよ。周りの動きを見ながら自分に出来る最善手を打つ、それが結果的に連係プレーになるっぴょん。それに艦娘と違って余程のことが無きや死なないし、深海棲艦との戦闘もあくまで環境調査の一環ぴょん。防衛戦でもない限り、絶対に勝たなきゃいけないワケでもないからもっと気楽になるっぴょん。」

「はあ、そんなに適当でいいのかよ？」

「そりゃあ負ければ悔しいけど、力を合わせて敵に勝てたときの達成

感はひとしおなんだっぴょん！大丈夫、心配する事は無いっぴょん。ひえい玉のお陰で既にへ級は弱ってるし、金剛お姉ちゃん譲りのガンランスは物凄い威力なんだから負ける要素なんて無いっぴょん！」

「分かった、分かった、わーかった!!そこまで言うのなら力を貸してもらうからな！」

「へへっ、了解っぴょん！大船どころか軍艦に乗ったつもりで任せるっぴょん！」

我心得たりと言わんばかりにビシツと敬礼をする卯月、上手いこと言ったような顔をしているが、オレ達元々軍艦だからな……。

その敬礼と同時に卯月が浮かべたニヤリとした如何にも悪そうな微笑み、その意味深な笑顔の意味を理解するのは、このすぐ後である。

「それじゃあ仕掛けるぜ！卯月、着いてこい！」

探し出すのに時間を掛けすぎたせいか、あれだけ酷い目に遭ったにもかかわらず、すっかり警戒を解いてしまっている呑気なへ級に攻撃を仕掛ける。

不意打ち上等、背後から二人掛かりでバツサリとやらせて貰うぜ！

「行くぞー！」

ボンツ！

「……えっっ？」

へ級の背後まであと一步といったところで、突如背後で発生した謎の爆発により宙を舞うオレの身体。

な、何だ？いきなり背後から攻撃されたぞ、一体何が起こっているんだ？

敵の背後を取ったつもりが、逆に背後から攻撃されるとは……。

走馬灯でも見ているかのように、ゆっくりと流れていく周囲の風景。

空中に打ち上げられて身動きが取れない……というか、この異常事態に呆然としていて身動きが取れないオレはそのまま空中で一回転しながら、へ級の背中を飛び越えつつ仰向けに落下した。

「……………」

海面に大の字になって倒れたオレの頭は丁度へ級の足元にあり、当然へ級と目が合った。

突然の出来事に、お互い呆然としたまましばらく見つめ合う。

「……………へアツ！」

「あつ、やべえ!？」

一足先に正気に戻ったへ級が砲口を向けてきたのに気付き、慌ててそこから離脱する。

先手を打ったハズなのに、逆に先制攻撃されてるう!？」

「はいガード♪そのくらいの攻撃じゃ、この守りは貫けないっぴよん。」

「すまんっ、助かった！」

追い付いてきた卯月がオレの前に出て、飛んできた火球を大楯で防いでくれた。その隙に体勢を立て直す。

「気付かれてなかったハズなのに、何でいきなり吹っ飛ばされたんだ!？」

「はいはい、そんなことより今は目の前の相手に集中するっぴよん！」

オレの当然の疑問は卯月に適当にあしらわれる、とはいえ今は確かにへ級から目を逸らすべきではない。

謎の攻撃で先手こそ取られたが、相手は先程の戦闘でダメージが蓄積しているせいか動きに精彩を欠いている。

それにこつちには卯月の援護もあるし、敵の狙いがオレと卯月の二人に分散したことで回避に余裕が出てきた。これが集団戦の強みつてやつか。

卯月の背後から飛び出し、砲口から放たれる火球を掻い潜りつつ、へ級の懐に飛び込む。

この距離ならオレの方が有利だ！

「今度こそいくぞ！覚悟ッ！」
ボンッ！

「は？」

太刀を振り抜こうとした瞬間、再び背後で起きた謎の爆発により空を舞う。

ああ、オレは空を飛んでいるんだ。大海原を駆ける狩娘が次に目指す舞台は大空か……。 (現実逃避)

ボンッ！
ボンッ！
ボンッ！
ボンッ！
ボンッ！

龍田曰く『鈍いことに定評のある天龍ちゃん』らしいが、流石のオレでもいい加減に気が付いた。さつきから毎回背後から謎の爆発を受けて吹き飛ばされている。

背中の傷は剣士の恥らしいが、敵に背を向けてないのに背中を攻撃されたんじゃ防ぎようがない。

しかもこの爆発は相手が構えていないにも関わらず発生している。誰でも嫌がるなんちゃら弾や、脳波でコントロール出来る遠隔兵器でも使われていない限り、この爆発はへ級の仕業じゃないのだろう。ならば犯人は別にいるということになる、だったら戦いを有利に進めるためにも犯人探しをするしかねーよなあ！

オレの推理としてはこうだ、この場にはオレと卯月とへ級の他にもう一隻深海棲艦が隠れ潜んでおり、不意打ちの攻撃で爆発を起こしているのだろう。

爆発のタイミングも今までの攻防から大体掴んだ。へ級の攻撃を卯月に防いでもらい、その隙に飛び出して攻撃をしようとした瞬間に

毎回爆発している。

オレの後ろにいる卯月にすら気付かれずに攻撃を仕掛けているということに対しては多少の疑問も残るが、水中に潜んでいる潜水艦かなんかだろう。

攻撃のクラクリが分かれば恐れるに足りず！次の攻防でその正体を掴んでやるぜ！

「ヘエツ!!」

「甘いっぴよん！この鉄壁の守りはそう簡単には破られないっぴよん！」

へ級の攻撃を卯月がシールドで防ぎ、その隙にオレが前に飛び出す。

ここまではいつものパターン、しかしここからは一味違うぜ！

へ級に攻撃を仕掛けると見せ掛け、背中に全神経を集中する。

……来たツ、背後から僅かな殺気。そしてそれ以上に何とも形容しにくい、まるで楽しげというべきか……とにかく妙な気配を感じる。

「来るのは分かっているんだよ、そう何度も同じ手に引っ掛かって堪るか!!」

太刀の切っ先を海に突き立ててブレーキ兼軸代わりとし、勢いを殺しつつその場でクルリと半回転して全身で振り返る。

さあ犯人の姿を見せてもらうぞ？仮に見えずとも繰り出された攻撃くらいは見切ってみせる！

「……えっ?」

「あっ……。」

そこでオレが目にしたものは新たな深海棲艦……ではなく、オレに向かってガンランスの砲塔を向けている卯月の姿だった。

「バレちゃった。でも、えいっ♪」

ボンッ!

「うわあっ!?!」

ガンランスから放たれる砲撃、その爆発は容赦なくオレを吹き飛ばす。

なるほど、新車の深海棲艦なんていなかったのか……敵は身内にいたんだ。

そりゃ卯月が何も言っただけじゃないわけだ、だって本人が犯人なんだから。

「そーいや爆発してるのにあまりダメージが無いなーと思ってたけど、アタリハンテイ力学によって威力が抑えられていたんだな。」

「バレちゃったじゃない、何をやっとなんだお前は!？」

「何って、見ての通り天龍お姉ちゃんの狩りの妨害をしてるつぴよん。」

「妨害い!?何考えてんだ!？」

「まあまあ、悪く思わないでほしいつぴよん。この妨害もれつきとした龍田お姉ちゃんからの依頼つぴよん。」

「はあ?？」

「忘れたつぴよん?そもそもーちゃんは天龍お姉ちゃんに迷惑を掛ける為に呼び出されたっていうことを?？」

「……そーいやそーいだった。へ級との追いかけてここに時間を掛け過ぎてすっかり忘れてたよ。」

「真剣に狩猟をしているときに味方から吹っ飛ばされるのってイヤでしよ?？」

「当たり前だ!そもそもそんなことが好きな奴なんかいないよ!？」

「それが分かってもらえれば十分つぴよん。要するに意味もなく味方を巻き込むような攻撃はよくないし、ましてやわざと攻撃するなんてダメ絶対つぴよん。」

「そーいことか、確かに太刀は大振りな攻撃が多いから味方ごと斬ってしまうことはあり得るな。」

「それを分からせるためにわざと撃ち込んでたつてワケか、それにしちや必要以上に執拗だったが……。」

「それじゃ、バレたからにはもう遠慮はいらないつぴよん!ガンガンいくよ。」

「いやもう理解したから撃たなくていいつて……。」

「ボンッ!」

ボンッ！

ボンッ！

「うわっ!? バカやめろッ！」

まだ撃つ気か！もういいだろ、これ以上は狩猟に差し支えるって！
次々と炸裂する砲撃、もはや狩りどころじゃない。何とかこの暴虐を止めさせるには……。

「クッソー、本当はこういうことはしたくなかったが仕方がない。ア
タリハンテイ力学のお陰でダメージは無いんだろ？ だったら殴って
止めさせる！ いい加減堪忍袋の緒が切れた、お仕置きだ！」

「ぶっぶくぶう〜！ 対人戦最強のガンランスに太刀で挑むつもりっ
びよん？ 甘い、甘過ぎるっびよん。最強の矛と最強の盾を両立したガ
ンランスの前では、太刀なんてただの棒切れにしか過ぎないんだって
いうことを教えてあげるっびよん！」

「年上を舐めるんじゃない、このイタズラウサギ！ お尻ぺんぺんして
やるからな！」

こうしてオレ達は本来の目的も忘れ、不毛なバトルを繰り広げた。
オレが斬り付ければ盾で防がれ、カウンターの砲撃で吹き飛ばされ
る。

オレが距離を詰めればバックステップで一瞬で距離を稼がれ、そし
て砲撃で吹き飛ばされる。

オレが距離を取ればその場に陣取り、仕方なく近付いたところを砲
撃で吹き飛ばされる。

ガンランスの弾が切れたところをチャンスと見て接近すれば、普通
に突き攻撃で転ばされ、その隙にリロードを許す。

仕方なくオレが石ころを投げて攻撃すれば、より速度と精度の高い
スリンガーを使った射撃で石ころを撃ち込まれ返り討ちに遭う。

……アレ？ さつきから一回もロクに攻撃を当てられていないよう
な？

あれから10分近く卯月と格闘し、オレは完膚無きまでに敗北した。縮めて完敗だ。

年上の威厳だとか、戦闘狂キャラとしての尊厳だとか色々な物が粉々に砕け散ったぜ。

「ハアハア……何故だ、なんで勝てねえ？」

「へっへっ、そんなの当然だっぴよん。使っている武器が対人戦に向いているとか向いていないとかいう以前に、天龍お姉ちゃんは対人戦慣れしていないんだっぴよん。そんなのでうーちゃんに勝とうたって無理無理。うーちゃんだって対人戦はそんなに得意じゃないけど、流石に対人経験ゼロの相手にガンランスを使って負ける程弱いつもりは無いっぴよん。」

「その年齢で対人経験があるなんて、一体どんな人生を歩んできたんだよ!？」

オレ達が本来は人の命を奪う軍艦だったということも忘れて尋ねる。

こんな小さな娘に対人経験があるなんて紛争地帯かよ？

「えーつとね、うーちゃんの鎮守府では喧嘩だとか譲れないものがある場合には、鎮守府の内港で対人戦をするっていうのが恒例なんだっぴよん。狩娘同士で武器を使って戦って、先に外港に出た方が負けになるっぴよん。見学も出来るし賭けとかもあって面白いっぴよん。みんなは戦争部屋って呼んでいるっぴよん、もつとも何が部屋なのかは不明っぴよん。」

思った以上に下らない理由だった。

一瞬本来の意味での演習をやっているのかと思ったが、よくよく聞けばまるで相撲じゃん。

それに他人の喧嘩で賭けをされるとか不健全過ぎるだろ。

責任者たる提督と団長と秘書艦は何とかしろよ、止める大人はいないのか？

「因みにこれは面白いこと好きの団長が作ったルールだっぴよん。喧

嘩は不毛だけどしないっていうのは難しいから、それならせめて面白くしようって言って作り上げたんだっぴよん。団長の影響を受けてか提督も肯定的だし、香取お姉ちゃんはしょっちゅう提督とのデート権を賭けて金剛お姉ちゃんと戦ってるっぴよん。賭けの胴元は睦月ちゃん、羽振りがいい時はよくデザートとか奢ってくれるっぴよん。流石は睦月型の一番艦、太っ腹だっぴよん。」

全員ダメだった、っていうか責任者が主犯格かよ!?誰か止めろ! それに賭けの胴元が睦月って風紀の乱れが極まってるだろ、よりもよって駆逐艦かよ……。

とはいえ遺恨を残さないなら決闘方式の方がいいのかなあ?うーん……筋が通っているような、それでいて屁理屈のようないかな?

「そして現在最強の狩娘は山城お姉ちゃんだっぴよん。たまにフラツと現れては挑戦者を全員倒していく無敗の狩娘だっぴよん。香取お姉ちゃんと金剛お姉ちゃんが二人掛かりで攻撃しても勝てないっぴよん。相手の攻撃を盾で受け止めつつ、そのまま盾で殴り倒しちゃうっぴよん。G級狩娘の名は伊達じゃないっぴよん、憧れるっぴよん。」

G級狩娘恐るべし、オレの鎮守府に対人戦ルールが無くてよかったです。神通はおろか龍田にだって勝てる気しねえんだもん。

しかし思った以上にバルバレ鎮守府って魔窟なんだなあ。提督が入れ替わったのなら、もうちよっと健全な運営をしろよ……。

「……そういや今の今まで忘れていたけどへ級は?」

今まで対人戦にアツくなっていたから忘れていたけど、よく考えればオレの本来の目的はへ級の狩猟だった。

「ああ、へ級ならうーちゃん達が撃ち合いを始めた頃にそそくさと逃げ出したっぴよん。」

「は?」

「あれ、聞こえなかったっぴよん?だーかーらーへ級は逃げたっぴよーん!」

「なっ、なんでそんな大事なことを黙ってたんだ!？」

思わず問い詰める、道草食い過ぎてクエストの残り時間5分切つてんだぞ!？」

「いや普通なら狙っていた深海棲艦がエリアからいなくなれば誰でも気付くつぴよん。」

「うぐっ……。」

しかしそんなオレの反論も一瞬で論破される。気付かないオレがマヌケだつてことかよ……。

「まあまあ、きつとへ級なら今頃寢床に帰つて寝てるハズだつぴよん。逃げる前にポイントボールぶつけておいたから今度は導卵月を使わなくても場所は分かるつぴよん。」

いつの間にポイントボールまで当てていたんだ？オレとの戦闘のどさくさに紛れてそんなことまでしていたとは、コイツ実はとんでもない狩娘なんじゃねえの？

オレは逃げられたことにも気付かなければ、ポイントボールを投げていたことにも気が付かなかったぞ？そしてそれだけのことをしながらオレとの戦闘でも圧勝して見せるって……狩娘としての自信無くすわ。

「今度は相手が寝ていて逃げないし、場所もハッキリ分かっているからさつさと追いかけてとつちめるつぴよん！ホラ、ちやつちやと行くつぴよん!？」

「……あい。」

その後、残り時間1分といったところで寢床で寝ていたへ級を卵月の竜撃砲で吹き飛ばし、無事に決着を迎えたのであった。

うーん、なんとも煮え切らない決着だ。卵月はワザと妨害行為ばかりしていたと言うが、それに対してオレは戦闘に貢献したか？妨害があつたとはいえほとんどへ級にダメージ与えてないような？

肝心のダメージソースって卵月のひえい玉と竜撃砲だろ、これじゃあオレが寄生みたいじゃねえか……。

「今日はありがとうねえ。ホラ、天龍ちゃんもちゃんとお礼言ってる。ア、アリガト……ゴザマス……。」

「卯月も面白かったっぴよん。久しぶりにやりたい放題出来たから、いい気分転換になったっぴよん！」

「よかったね……卯月。弥生も、楽しかった……です。」

へ級を狩猟した後、帰還までの1分間の待ち時間で再び卯月に吹き飛ばされ続けたオレは一回もへ級から剥ぎ取りをすることなく鎮守府へと帰投した。

クエストの最後までこれだもん、勘弁してくれ……。

そして帰投してみれば、今度は二人がバルバレに帰るっていうんでお別れの挨拶だ。忙しいなあ……。

「それにお土産もいっぱい貰えたっぴよん。きっとみんな喜ぶっぴよん、ありがとうだっぴよん♪」

「いいのよお。わぎわぎ来てもらったお礼も兼ねているんだからあ。」

お土産に渡したのは1ダースの達人ビールが入った箱。

狩娘が見た目通りの年齢ではないとはいえ、ビールなんて子供に渡していいお土産か？

しっかしこれは確かに人気のビールらしいし、オレ達の提督が作っているからある意味この名物なのかもしれないねえけど、プレゼントがビール1ダースなんてまるでお中元じゃん。

「それじゃあこれでお別れぴよん、泣かないでね〜♪」

「……ばいばい。」

「またいつでもいらっしやい、歓迎するわよお〜。」

「おう、いつでも来いよ！元気でなあ〜。（もう来ないでくれ……。）」

こうして卯月達は帰って行った。いつでも別れっていうものはし

んみりするな。

「それで今日の卯月ちゃんとの狩りはどうだったかしらあ？これで天龍ちゃんもNG行動について、分かったでしょう？勉強になったんじゃないかしらあ？」

「イヤっていう程分かったよ！」

アレはもう二度と経験したくない、勘弁してくれ……。

「フフツ、その様子なら大丈夫そうね。卯月ちゃんを呼んだ甲斐があったというものよお。それとへ級から剥ぎ取ったものは確認したかしら？」

「剥ぎ取り？してねえよ。卯月に妨害されたからな。」

「あらそーお？でも成功報酬で出た素材は貰っているんでしよう？」

「そういやそうだったな、報酬ってボタン押しっぱなしでボックスにパパツと送られるから内容を確認してなかったぜ。(メタ)

「その素材を持って加工屋に行ってみなさい、きっと面白いものが作れるわよお？」

「面白いものお？」

そんなワケで龍田と二人で工廠にやって来たのだ。

「アツ、イラツシヤイマセー。ソロソロ来ル頃ダト思ツテタヨー。」

「おう！早速で悪いんだがへ級の素材を手に入れたんでな、それで何が作れるのかカタログを見せてくんねーかな？」

「リョーカイ！ドウゾー。」

出迎えてくれた加工担当の妖精さんは、自分の身体より大きなカタログを軽々と掲げるとそのまま持って来てくれた。

それにしても妖精さんってよくこんな大きなものをひょいっと持てるよな。人間や狩娘にとってはちよつとした凶鑑程度の大きさだけど、妖精目線で言えば大きさだけで畳一枚分くらいあるからな。厚

みともなれば重ねた畳6枚分はあるんじゃないやねーの？

ましてや素材になる鋼材や深海棲艦のパーツになるとカタログどころの重さじゃないからなあ。おっと、今はカタログの方が大事だな。

「それで、どこのページだ？」

「ここよ、ここおく。」

『天龍シリーズ、龍田シリーズ』

そこに描かれていたのはオレにとって一番見慣れた、そして久々に見た衣装だった。

「こっつ、こっつ、こっつ、これはあく!?」

「そうよおニワトリみたいな天龍ちゃん。へ級の素材で作れるのは天龍型の正式採用装備、天龍シリーズ。ちなみに同じ素材で私の装備も造れるわあ。どお、私とお揃いの龍田シリーズ着てみる？まあ今の私が着ているのは上位のS型だけどねえ。」

待ちに待った天龍型の装備、これさえあればダンゴムシやパンツ丸出し装備とオサラバ出来るってワケだ！

それと龍田には悪いが、お揃いにする気は無いぜ。オレに龍田の衣装は似合わねえよ。

「これだけじゃないわ、こっちのページもよく見て。」

龍田が次に開いたのは武器のページ。

「……あっ!?この武器は間違いない、オレの刀だ!」

「これまた天龍ちゃんお待ちかねの太刀よお、ここでは天龍刀と呼ばれているわねえ。この天龍刀もへ級の素材を使って骨2から強化出来るから今の天龍ちゃんにピッタリなんじゃないかしら?」

「言われなくても作るぞ、絶対作る!他にも何か作れるって言われてもこれを作るぞ!」

「ふふっ、やっぱりね。私もそうだけど、狩娘って何故か艦娘の頃に装

備していたものと同じ装備に惹かれるのよねえ。船だった頃の記憶が正式採用装備を求めさせているのかしら?」

オレが喉から手が出るほど欲しかった装備だ、早速作成に取り掛かる……………が。

「あれ?一つも作れねえんだけど……………」

「それはそうよ。だって素材元となるへ級を一隻しか狩ってない上に、剥ぎ取りだって妨害されたんでしょ?素材が足りているワケがないでしょ。」

「お、おいつ!?さてはオレが作れないの分かってて案内しやがったな!?!」

「ウフフ、どうかしらねえ?」

ワザとだ、これは絶対にワザとだ!

とはいえこれ以上文句を言っても仕方が無いのでここは我慢する。

「作れるということが分かっただけでも儲けものじゃない?それにどれだけ素材を集めればいいのかっていうのも分かったでしょう?」

「そりやそうだけど……………」

「分かったなら狩ってらっしゃい。天龍ちゃんの晴れ姿、楽しみに待っているからねえ。」

「え?一緒には行ってくれないのか?」

「だって面倒臭いじゃない?それに今日はもう疲れたわよ。大丈夫、

一度は勝てた相手なもの。次も勝てるわよお。」

「た、龍田が冷たい。疲れたっていうのならオレの方がよっぽど疲れてると思うんだけどなあ。それに勝てたのもオレの実力じゃないんだけど……………」

先程の勝利は実質卯月の手によるものだ。

…………とはいえそれでいいのか?便乗したような形で勝ってそれで勝てたと胸を張って言えるのか?

オレ一人で戦って倒さなきゃ、とてもじゃないが勝ったとは言えねえ。

「…………よし分かった、見てろよ?あつという間に一式装備を揃えてやるからな!」

「そうそうその意気よ！それに先生をソロで狩れなきや初心者卒業とはいえないもの。装備作成と初心者卒業、二つの目標目指して頑張つて♪」

その後天龍はクロオビ鎮守府近海でひたすらへ級を狩り続けた。
しかし例のアレの加護を受け、ようやく一式装備を作れるようになったのはへ級を13隻倒してからだったという。

曙ちやんと風翔劍士Ⅰ

メゼポルタ鎮守府、そこはカリユード諸島に存在する鎮守府の中で最大の規模を誇っており、所属する狩娘の人数も多く、そして練度も高い。

そんなメゼポルタ鎮守府も元々はドンドルマ鎮守府から枝分かれする形で作られた、いわゆる分家のような鎮守府である。しかし所属する提督の優れた手腕と狩娘達のめざましい働きにより、現在ではドンドルマ鎮守府をも追い越し今に至る。

しかし最も優れた鎮守府とはいえ、狩娘達も常に戦い続けているワケではない。時には息抜きも必要となる、今回はそんな狩娘達の休日を覗いてみよう。

「ハア、漣のヤツ……休日だからってだらけ過ぎじゃない？」

ハイハイどーも、あたしは特型駆逐艦曙よ。とはいえそんなことはどうでもいいでしょ、ここじゃあ艦種なんてほとんど無意味なものなんだから。

あたしはメゼポルタ鎮守府に所属している狩娘なの、もっとも今日は休日だから狩りには行かないけどね。

はあ？最高峰の鎮守府に所属している狩娘が休日なんかにつつを抜かしていいのかだって？

あんた常識つてもものが無いの？休日が無いとかどんなブラック企業よ!?

あたし達はここ周辺の海域の調査が目的であって、近海の深海棲艦

を根絶やしにすることじゃないわ！毎日狩りばかりしているワケじゃないの！

それにクソ……じゃなかった、あの提督が言っていた……らしいんだけど『休むことなく狩りだけを続けていたら、やがて狩りの効率のことしか考えられない頭になってしまう。そして狩猟マシーンになるだけならまだしも、いずれは他人の腕前や装備に戦法にまでケチを付けるようになってしまい、本人の性格までもが歪んでしまう。』だって。

もつともこれは漣から聞いた話であって、あたしが直接あの提督から聞いた話じゃないんだけどね。

それであたしは今日が休みなのはさっき言ったけど、あたし以外にも朧と漣が今日は休暇を貰っているのよ。

だというのに漣が姿を見せないの！もうそろそろ10時になるっていうのに何してんのよ？せめて朝食ぐらいは食べに来なさいよね。

休日とはいえ、仮にも秘書艦でしょ？まだ寝てるのだとしたら弛んでるわ！

あたしはもちろん、朧も潮も朝食なんてとつくに終わらせて歯まで磨いちゃったわよ。

それでしばらく食堂で三人でお喋りしていたんだけど、あんまりにも漣が遅いもんだから流石に気になってあたしが呼びに来たってワケ。

えっ、なんであたしが代表で呼びに行ってるのかだって？朧と潮はどうしたのかだって？

う、うっさいわね！二人にジャンケンで負けたの！

最高ランクの鎮守府だけあって施設の規模も最高ランクなメゼポルタ鎮守府。

利便性のこともあって流石に移動するだけでくたびれ果てるほど広いワケではないけれど、それでも一般的な鎮守府と比べればずっと長い廊下を一人てくてくと歩いて行く。

すると通路の向こう側から誰かがやって来た。

「ホッハ？」

「んっ、あつ!? バケツ提督!」

現れたのはメゼポルタ鎮守府の提督。

いつもピンク色をしたバケツのようなデザインの兜を被っている変なヤツ。

しかもバケツを被っているだけで十分に変なのに、それ以外の格好も奇妙極まりない。

カニの甲羅みたいな質感の青い鎧。魚の鱗みたいなもので作られた、これまた青いスカートみたいな腰巻き。そして兜よりも濃いピンク色をした長手袋とタイツ。

ハッキリ言ったださい以外に言葉が見つからない、一緒に出掛けるハメになったら全力で他人のフリをするレベルね。

そしてこいつは24時間365日、お風呂に入るときも寝るときも、そして食事をするときも常にこのピンクバケツを被りっぱなし。

バケツの口の部分に隙間があるようには全く見えないけど、どうやってご飯を食べてるんだろ？

あたしもこの鎮守府に着任してからそこそこ経っただけど、未だにこいつの素顔を一度も見たことが無い。

とにかくそんなワケで、あたしはこいつのことをバケツ提督と呼んでいる。

「バケツ提督、あんたこんなところで何してんのよ。今日の業務はいいワケ？」

「ホッハ! ハッ! ハアッ! ホッハ!」

「んぎぎぎいいい!!! ああもう、相変わらず何言っただのか分かんない! もういい、さっさと行きなさいよ!!」

「ピャアウ!?!」

バケツ提督は奇声を上げると廊下の奥へと走り去っていった。

ふん、緊急ならともかく平時に廊下は走るなって習わなかったの？
今のやり取りで分かったと思うけど、バケツ提督は意味不明な言葉
しか話さない。

ホッハってどこの国の言葉よ？というかそもそも意味のある言語
なの？

素顔も謎なら話す内容も謎、なんであんな訳の分からないやつが提
督をやってるんだか。

凄腕と名高いドンドルマ鎮守府の提督の下で経験を積み、一人前の
提督と認められてここメゼポルタ鎮守府を任されたらしいけど、あんな
なコミュニケーションを取ることにすら困難なやつが提督をやっている
なんて何かの間違いよ。

漣もよく秘書艦やつてられるわね。まあいいわ、今はその漣を連れ
出してることがあたしの任務よ。

バケツ提督と別れてから再び漣の部屋を目指して廊下を歩き続け
ていると、またしても廊下の奥から誰かがやってきた。

今度は長身と小柄の二人組だ。

「曙じゃないか。おはよう。」

「曙ちゃん、おっはよー！」

「武蔵さんに清霜じゃない、おはよう。」

やってきたのは武蔵と清霜、二人ともあたしと同じくメゼポルタ鎮
守府に所属する狩娘だ。

この二人は基本的に一緒にいることが多い。

戦艦に憧れる清霜が武蔵を慕い、面倒見のいい武蔵が世話を焼いて
いるといったところか。

ちなみにここの鎮守府に大和はいない。いくら最大規模の鎮守府
とはいえ、いないものはいないのだ。

そして会った瞬間から気が付いていたけど、清霜の様子がいつもと違っている。

特に服装、というか装備が……。

だけどそれについてはあまり触れたくない。ぶつちやけて言う相手をしたくない、純粋に面倒臭い。あたしには漣を呼びに行くっていう任務があるんだから。

「(・ω・)」

ううっ、清霜から放たれるオーラが凄い。やたらと話を聞いてほしそうにしている。

ドヤ顔で胸を張ってこつちを見てくるし、全身がキラキラと光っているような幻覚さえ見える。

狩娘に戦意高揚状態なんて無いハズなんだけど……。

「……………」

そして武蔵から放たれるオーラも凄まじい、早く清霜に触れてやれとの無言の圧力をひしひしと感じる。

実際にはそんなことはちつとも考えてないのかもしれないけど、無言のまま胸の下で腕を組んで鋭い眼光でこちらを見下ろしてくる様子はどう見てもそうとしか思えない。

たまにキラツと白く光る眼鏡なんて、こつちにプレツシャーを与えただけだけにかけてるんじゃないの？

「……えーっと、清霜あんたどうしたの、その格好？」

負けた、二人のオーラに負けて聞いてしまった。ああ、あたしの意気地なし。

昨日までの清霜は見慣れた夕雲シリーズの防具を装備していたのだが、今日の清霜は全く違う装いをしている。

艦橋を模した桜の花びら付きの髪留め。赤と白で縁起のいい色合いのセーラー服とミニスカート。肩が露出した長袖。腰に付けた小さな錨。左右非対称なデザインのソックス。狩りをする際に非常に邪魔になりそうな傘。そして黒い金属製の襟に付けられた金色の桜の紋章。

要するに大和の装備である。本人がペタンコな駆逐艦なので、胸に

仕込まれた九一式徹甲弾がめちやくちや目立つ。まるでいかがわしいお店みたい。

「えへへー、カッコいいでしょ。頑張って作ったんだよ。どう？似合う？」

「そ、そうね。いいんじゃない……。」

サイズは合っているけど着せられている感が凄い、ただこれは本人の名誉のために黙っておこう。

「こっちのヘビィボウガンも凄いんだよ！」

取り出した武器もこれまた戦艦大和そのものなデザインのヘビィボウガン、何から何まで大和尽くしね。

納銃状態のヘビィボウガンは真ん中から二つ折りにされているから、まるで沈没してみたい……。

「排熱噴射機構が搭載されているから、ドカーンと超々々弩級戦艦並みの一撃を放てるんだ！凄いやねえ。」

排熱噴射機構ね、確かに威力はあるけどそれでも実弾中心で攻めた方がいいような……。

それに排熱噴射機構が超々々弩級戦艦並みなら、その上位互換の砲熱照射は何並みの威力になるのよ？

「今日はこれの試し撃ちに行くんだ！撃つ時のカッコいいキメ台詞も考えてきたんだよ。エネルギー充填128%、対シヨック対閃光防御、最終セーフティー解除、排熱噴射機構発射あー!!!……ってね！」
「私はその付き添いだ。」

それって大和じゃなくてヤマトじゃない！

それにエネルギーを128%まで溜めるのはヤマトじゃなくてソルカオンでしょ。ソ○カノンの元ネタがヤマトだから問題はないと思うけど混ぜ過ぎよ！

余談だが、排熱噴射機構というのはメゼポルタ鎮守府で使われているヘビィボウガンの特殊機構の一種である。

ヘビィボウガンで弾を放つ時に出る熱や、保温オイルを利用してへ

ビイボウガンそのものを加熱し、一定以上の熱を持った時にその熱を排熱弾という熱線にして発射出来るのだ。

メゼポルタ鎮守府には排熱噴射機構の他にも、抜刀ダツシユや劍晶スキルに超越秘儀など他の鎮守府には見られない特別な技術やスキルが数多くあり、間違いなく狩娘の強さは他の鎮守府の一步先を進んでいる。

しかしそのせいでメゼポルタ鎮守府は修羅の国だと勘違いされているのが所属する狩娘達の悩みどころだ。

周辺に生息する深海棲艦の強さは想像を絶するバケモノばかり。そんな強力な深海棲艦が放つ攻撃は威力、範囲ともに凄まじく、ちよつと被弾しただけでも生半可な狩娘ではたちまち轟沈する。

そこでメゼポルタ鎮守府の狩娘は全ての攻撃をことごとく回避し、万が一の被弾に備えて根性スキルを付けたり、根性札を常備したり、元気のみなもとというドーピングアイテムでダメージを軽減しようとする。

狩娘が所持する武器、防具ともに他の鎮守府のものとは比べ物にならない高性能で、普通の海域の深海棲艦なら文字通り瞬殺してしまう。

そして所属する狩娘の大半が効率主義者であり強い装備を持たない者や、狩りの腕前が劣る者には人権が無く、相手を楽に片付ける為にそこら中でハメ戦法が取り入れられている。

そして一般的な鎮守府に所属する狩娘のことはぬるま湯に浸かったコンシューマー勢として見下している等々………挙げればキリがない。

このような内容の誤解が広まってしまっているが、決して事実ではない。

確かにメゼポルタ鎮守府の狩猟技術は他所の鎮守府よりも進んでおり、それを扱う狩娘も他の鎮守府に比べれば強いのだが、極端に大きな差があるわけではない。

むしろ新技術の試験場として運営されている面もある。

深海棲艦の強さも他所に比べれば鍛え抜かれた個体が出現するこ

とも確かに多いが、即死攻撃を雨あられと降らせてくるような魔物は存在しない。

所属する狩娘にも精神破綻者はおらず、普通の鎮守府と何も変わらないのだ。

その強いという噂だけが独り歩きし、更に尾鰭が付け足され、頭のおかしなバケモノ集団というように思われ恐れられている。

流石にこのままではいけないと考えたのか、誤解を解くためにも他の鎮守府からの研修生を数多く募集しているのだが、噂のせいで怯えられているのか、そう簡単には集まらない。

メゼポルタ鎮守府の誤解が解けるのは、まだまだ遠そうである。

「大和装備と大和ボウガン、そして排熱噴射機構！これで名実ともに清霜も立派な戦艦だね！」

いや、その理屈はおかしいですよ。突っ込みどころが多過ぎる。

確かにここでは素材さえあれば誰でも違う船の服を再現して装備することが出来るけど、それって結局着替えただけじゃない。単なるコスプレよ！

それにここでは艦種が意味をなさないから、駆逐艦が弱くて戦艦が強いつてことはないですよ。憧れるっていうのは自由だけだね。

大体それって立派な戦艦というか、見た目が大和になっただけだし、普通の戦艦には排熱噴射機構なんて付いてないですよ。

まあそれを口に出して言っちゃう程、空気が読めないワケではないけどね。

「これも全部武蔵さんが協力してくれたお陰だよ。本当にありがとう！」

「フツ、お礼の言葉なら何度も聞いたぞ。ならば私も何度でも同じ言葉を返そう。私はお節介を焼いただけに過ぎん。それを作り上げたのは清霜、お前自身の努力と実力だ。」

あーもう、何イチャイチャしてんだか！確かに大和シリーズの装備は作成に多くのレア素材が要求されるから素材集めが大変だったの

は認めるけど、こっちはあんた達が乳繰り合うのを見る為に来たんじゃないわよ。

「えっと、あたしは漣を呼びに行かなきゃいけないんだけど……。」

「おっと、時間を取らせてしまったようだな。すまない。」

「漣ちゃんかあ、今の時間ならきつとあれだよね！」

「そうだな、間違いなくあれだろう。」

あれ？あれって何よ？

「あれ面白いもんねえ、清霜も今日の見たかったなあ。」

「心配するな、手は打ってある。」

「本当!?きつすが武蔵さん!じゃあ帰ったら一緒に見ようねー!」

「フツ、分かっている。」

あれって見るもんなの？

「それじゃあ曙、また後でな。」

「漣ちゃんにもよろしく言っといてねー!」

そういうと二人は去っていった。

せめてあれが何なのか言いなさいよ、もうっ!

あんた達は死に際に犯人の正体を知っているにも関わらず『犯人はあいつだ。』としか言わずに息絶えてしまう推理小説のキャラクターか!

ようやく漣の部屋の前に着いた。バケツ提督とむさしもコンビに時間を食ったせいか実際の距離以上に長い道のりに感じたわ……。

一般的な鎮守府では姉妹艦は同じ部屋で暮らしていることが多いみたいだけど、メゼポルタ鎮守府は規模が大きいだけあって狩娘一人一人が個室を持っているの。

もちろん姉妹艦同士同じ部屋で暮らすのも自由だけど、個室そのものは全ての狩娘に与えられているわ。

最大の鎮守府というのは伊達じゃないってね。

「漣、いる？」

ドアをノックしつつ声を掛ける……が、返事が無い。

「まだ寝てるの？入るわよ。」

ドアを開け中に入ると、床に敷かれた座布団の上で正座をしている漣を見つけた。

「なんだ、起きてるんじゃない。だったら返事くらいしなさいよ……漣？」

正座までして何をしているのかと思ったら、どうやら漣はテレビを観ているらしい。

それも随分と熱心な様子、ノックにも声掛けにも無反応とか相当ね。

ここカリユード諸島は本土とは遠く離れた太平洋の真ん中にある、そのため本土の番組の放送対象地域ではない。

その代わりカリユード諸島独自の放送局及び番組制作会社があり、それにより放送されている番組の内容も本土とは異なっているのだ。

日々のニュースや天気予報は勿論、バラエティやスポーツ、音楽番組にドラマやアニメも独自のものが放送されており、チャンネル数こそ多くないもの様々なジャンルの番組を楽しむことが出来るようになってる。

……それで何の番組を観ているの？

漣が何を観ているのかが気になり、夢中になっている漣の後ろに立ってテレビ画面を確認する。

そこに映っていたのは鈍く艶めく全身鎧に身を包んだ男と、木彫りの大仏のような姿をした大男。

えーっと、これは特撮番組……よね？

二人の男はそれぞれの得物である太刀と……これは狩猟笛？とに

かく木製の法螺貝のような武器を手に戦っている。

何というか、どっちも狩娘の使っている武器に似てるなあ……。
むさしもが言っていたあれってひよっとしてこの番組のこと？

夜の街外れ、人の気配の無い静かな場所で切り結ぶ鎧の男と大仏姿の男。

やがて大仏姿の男は鎧の男の斬撃を受け傷付きながらも、後方へ飛び退くと得意げに語る。

「やりおるな、流石は風翔のフルクシャ。いや、今はクロス・ダオラと名乗っているのだったか？見事なものよ、我々と同じフルシリーズにして太刀のウエポンというのも伊達ではないようだ。貴様の実力なら次期ウエポンマスターも夢ではないというのに、その栄誉を蹴つてまで我々に歯向かうとは実に愚かなことよ。だが今までの戦いで貴様に有効な旋律は分かった。やはり貴様の強さはその風を操る力あつてこそそのもの。次の攻撃には風圧軽減の旋律を上乗せしてやろう。」

そう語る大仏姿の男。

しかしその余裕も、鎧の男改めクロス・ダオラが次に放ったセリフにより綻びを見せ始める。

「残念だが、お前に次は無い。」

「何!?!いや、ただのハツタリだ。そんなものには惑わされんぞ!」

ダオラの一言に動揺しつつも笛を振るい音色を集める大仏姿の男、しかし何時まで経っても演奏が始まることはなかった。

「馬鹿なッ、演奏が奏でられん!?!ワシの龍木ノ古笛の旋律を封じ込めるとは……貴様あ、一体何をした!?!」

「知れたこと、お前の武器である狩猟笛は紛れもない管楽器。管楽器は内部を空気が通らなくては音が鳴ることはない。だからオレの能

力を使い、一時的に楽器内部の空気の移動を阻害しただけだ。」

「そ、そんな方法で!？」

「演奏の使えないお前など、もはやご利益の無い単なる大仏だ。言つた通りこれで終わりにしよう。いけるなシャイナス!」

『いつでもオツケーニヤー!』

ダオラの声に答えるように、どこからともなくこの場には似つかわしくない可愛らしい声が響く。

「烈風っ!!」

「これは!?う、動けんっ!!」

ダオラが掛け声と共に前方に左腕をかぎすと、大仏姿の男を中心に閉じ込めるように竜巻が発生する。大仏姿の男は暴風に拘束され、その場から一步も動くことが出来ない。

「狩技・風翔雷撃気刃斬!!」

ダオラは紫電を放つ太刀を構えると竜巻に高速で突進し、そのまま竜巻を突き抜ける。

そして太刀を鞘に納めると同時に、大仏姿の男は竜巻もろとも縦に両断された。

「がああああ!!笛のウェポンであるこのワシが!この激運のフル夜叉が!!こつても簡単に!?!馬鹿なああ!!?」

断末魔と共に爆炎に包まれる大仏姿の男改め激運のフル夜叉、やがて煙が晴れた跡には塵一つ残っていないかった。

「所詮お前の運などこんなもの、運だけで勝てない相手に戦いを挑むべきじゃなかったな。吹き専のお前には後方支援がお似合いだ。」

夜叉が消え去つたのを見届けると、その場を後にしようとするダオラ。

「フン、相変わらずそんなことをやっているのか。」

「……ッ、誰だ!?!」

しかし闇の中から声を掛けられ、思わず立ち止まり振り返る。

それに応えるように夜の帳の中から姿を現したのは、仄かに紫の光を放つ禍々しい漆黒の鎧に身を包み、同じく紫に光る漆黒の漆黒の棍を携えた男だった。

「お前は……操虫棍のウエポン、狂竜のフルゴア!？」

「その忌々しい名で呼ぶな。今の俺にはブラック・マガラという名がある。久しぶりだな、クロス・ダオラ。」

現れた男の名はブラック・マガラ。

「一体何の用だ、またオレと戦いに来たのか?」

現れたマガラに対して警戒心を見せるダオラ。

友好的とは言い難い空気が流れ、緊張感が高まっていく。

しかしマガラが棍を背に仕舞ったことにより、その空気は胡散した。

「既に一戦を終え、疲労したところを襲うほど落ちぶれたつもりはない。それに今の腑抜けた貴様を倒すことに価値があるとは思えない。」

「オレが腑抜けているだと?」

マガラの侮辱に対して怒りを見せるダオラ。

しかしマガラの口撃が止むことはない。

「そうだ、お前が最初に夜叉に襲われたのは街のド真ん中だろう? だというのに何故貴様はこんな辺鄙な場所で戦っている? 貴様と夜叉の実力差を考えればその場でさっさとケリをつけることも出来たはずだ。しかし貴様は無様に逃げ回り、その間に余計な疲労とダメージを受け、そして無駄に戦いを長引かせた。どうしてそんなことをした?」

「それは……アイツの繰り出す雷光虫弾の予測不能な軌道は、入り組んだ街中では避けるのが困難だ。だから見晴らしがよく戦い易いこの場所に誘導しただけだ!」

マガラの追及に対して反論するダオラ。

しかし苦し紛れの言い訳などマガラには通用しない。

「違うな。お前は街の人間を巻き込むまいと考え、ここに来たに過ぎない。」

「くっ……だとしても無関係な人間を巻き込まないようにする事の何が悪い!？」

「その考え方が腑抜けていると言っているのだ! 貴様には敵を倒そう

という執念が足りん。そんな有り様ではオレが手を下さずともいずれ死ぬぞ?」

「オレは死なない!人々の平穏も、そしてオレの命も、オレ自身のやり方で守って見せる!」

「フンッ、忠告はした。オレは貴様も含めた残りのフルシリーズを全て倒し、ネオウエポンスを壊滅させる。オレが最強であることを証明するためにな。オレに倒されるその日まで、精々生きながらえて見せるがいい。帰るぞ、ヴェルガイン。」

『了解ニヤ。』

ダオラの青臭い答えを一蹴し、興味を失ったかのように背を向けるとヴェルガインという者へ声を掛けるマガラ。

それに対して先程のシャイナスの声よりは低いものの、やはりどこからともなく可愛らしい声が答えた。

それと同時にマガラは闇夜に紛れるように去っていった。

しばらくマガラが去っていった方向を見つめ続けるダオラだったが、やがてダオラの鎧は光の粒子へと変わり、鎧の中から精悍な顔つきをした金髪の青年が現れる。

身体から離れた光の粒子は青年の側に集まると、二足歩行をする白いシャムネコの姿へと変わった。

「ブラック・マガラ、どうしてお前はそこまで強さにこだわるんだ?そんなことで証明される強さに価値なんて無いというのに。」

「人の価値観はそれぞれニヤ。コモンドにとつては大切な人々の平和も、強さを求めるマガラにとつては取るに足らないものなんだニヤ。」

ダオラ……その正体である青年コモンドの言葉に対して、人間ごとの考えの違いについて述べる白猫シャイナス。

「……………なあ、シャイナス。」

「なんだニヤ?」

「今は人の目が無いからいいが、野外で不用意に二本足で歩くんじゃない。それと喋るな、不審がられる。」

「何かと思ったらそんなことニヤ!? 相棒に掛ける言葉がそれって酷くニヤい?」

人々を守るために戦うクロス・ダオラと、己の力を証明するために戦うブラック・マガラ。

異なる目的のために戦い続ける二人の剣士、戦いの果てに二人を待ち受けるものは……?」

曙ちやんと風翔剣士2

番組の終わりと共に流れ始める作品の雰囲気には合わない明るいエンディングテーマ、続いて始まる次回予告。

そして最後に現れる『この作品はフィクションです。実在の人物、団体とは関係ありません。』のテロップ、それらが終わるとリモコンでテレビのスイッチを切る漣。

「……………ああ、面白かった。やっぱり風翔剣士クロス・ダオラは最高だねえ。」

振り返りもせずに右腕だけで後方のベッドにリモコンをポイッと放り投げると、その場でふわ〜と大きく欠伸をする。

リモコン壊れたらどうすんのよ？

まあいいわ、テレビも見終わったみたいだしいい加減に声掛けても大丈夫よね？

「漣、もういい？」

「おりよ？ぼのたん、いたの？」

「いたの？じゃないわよ！ずっといたし、声だって何度も掛けたわ！……」
「……」

無反応過ぎて、わざと無視してるのかと思ったわ。火事でも起きたら気付かずに焼かれるんじゃない？

「今何時だと思ってるの？今日が休日とはいえ、朝食も食べないで何やってんのよ？朧も潮も心配してたんだからね。」

「いやー、メンゴメンゴ。今から行くって。」

ようやく来た道を引き返す、今度は漣と一緒に。

「そーいや行きがけに廊下でバケツ提督に会ったんだけど、どうも急いでたみたいなのよね。秘書艦のあんたなら何か知ってる？」

バケツ提督は普段は執務室にこもっていることが多く、特に用事が必要なければ食事やお風呂くらいでしか出てこない。

それもサボるために引きこもっているのではなく、大量の仕事を処理しているから出てこない。

ああ見えて意外と仕事熱心で、しかも有能で優秀なのよね。だからどんどん新しい仕事や依頼が増えて、ますます忙しくなる。

しかも本人が仕事を苦にした様子がなく、何だかんだで期限内に終わらせてしまうから笑えない。

とはいえワーカーホリックなのかと思いきや、出来ること出来ないことの線引きもちゃんとあるようで何でもかんでも引き受けてしまいうわけでもない、仕事内容の見極めも出来る慧眼の持ち主。

要するにあいつは超有能提督なの。ハア、あんなのがトップクラスの提督だなんて世も末だわ。

「ご主人様のこと？ そういや今日は開発中の新武器のマグネットスパイクとアクセルアックスの試運転に協力するためにドンドルマ鎮守府まで行くって本人が言ってたね。」

「ふーん。」

バケツ提督は優秀な提督だけど、それ以上に戦闘者としても優秀だから新兵器の試運転にもよく呼ばれている。認めたくはないけど、文武両道とはあいつのことをいうのね。

「しかし、あんた本当によくあいつが言っていることが理解出来るわね……。」

「そーお？ そりゃ漣はご主人様と一番付き合いが長いからねー、お互いにツーカーの仲つっつかー……。なんつったりして！ まっ、要するに秘書艦の座は伊達じゃないってことだね。」

そんなワケあるか!?

ホッハとかピヤアウとかしか言わないのに、あれと会話出来る方がおかしいっての！

あれと会話するくらいならバウリンガル無しで犬と喋っていた方がまだ建設的よ。

メゼポルタ鎮守府の狩娘の中でバケツ提督の言葉が理解出来るの

は漣だけだ。

漣は秘書艦であると同時にバケツ提督語の通訳も兼ねている。

バケツ提督にこっちの言葉はちゃんと通じているんだけど、向こうからの言葉は伝わらない……というか理解が出来ない。だから漣がないとロクに意思疎通も図れない。

いくら優秀な提督だろうと、部下と会話が出来ない時点で使い物にならないわよ。

筆談やタブレット端末を使つての会話も試したけど『ホッハ！ピヤアウ！』しか書かないんじゃない意味ないわ！そのくせ重要な書類とかはちゃんと読める字で書くんだったもの。

何なのあいつ、絶対わざとやってるでしょ!?

そういやドンドルマ鎮守府には一人で行つたみたいだけど、向こうの連中はバケツ提督の言葉が分かるのかなあ？

こっちが見ていないところで標準語で喋っているんじゃないでしょうね？

「あ、やっと来た。」

「遅かったね漣ちゃん、何かあったんじゃないかって心配してたんだよ。」

食堂に着くと待ちくたびれた様子の隼と潮が迎えてくれた。

「お待たし、いや遅くなっちゃった。」

「ホントよ、さっさと取つておいた朝食を食べちゃつてよね。このままじゃ昼食に差し支えるわよ。」

「すぐに食べるって……むぐむぐ、冷めてもウマー。」

急いでご飯を掻き込む漣、それを横目に再びお喋りに興ずるあたし達。やがて漣も食べ終わると食器を下げて、そしてお喋りに参加する。そしてその場合、話題となるのは当然……。

「そういうえば、なんで漣は遅くなったの？」

「んん？それ聞いちゃう、聞いちゃう？知りたいのかな？漣の秘密を知りたいのかな？」

臙の当然の疑問、それに対して待っていましたと言わんばかりにクネクネし始める漣。

なんか動きがキモいし喋り方もウザいわね……。

このまま漣に任せておくと面倒臭そうだし、もうあたしが言っちゃお。

「あー、それがね。なんか特撮番組を見ていて、それに熱中して全然来なかったのよね。」

「ぶー、ぼのたんが言っちゃった！漣が言いたかったのにー！」

あたしにセリフを盗られて文句を垂れる漣。

「だけどそれよりも特撮番組と言ったとたんに、臙と潮が「ん!」といった表情をした方が気になった。二人とも何なのよ？」

「特撮？」

「……ひよつとして、アレかなあ？」

「どうやら二人ともその番組に心当たりがあるようで警戒の色を見せる……警戒？」

「そう、現在の漣は特撮番組にハマっているのだ！その名も『風翔剣士クロス・ダオラ』！面白いぞー！」

「やっぱり……。」

露骨にテンションが高くなった漣と、それに反比例するようにテンションの下がる臙と潮。

「そんなもの録画しとけばいいじゃない。」

「そんなものとはなんだー!?それにもう録画しとるんじゃないー！」

再び文句を垂れる漣、こんなに面倒な性格してたっけ？

「ほら、スケジュールが合わないときは見られないじゃん？だから今まで撮り溜めしてたのを早朝からずつと見てたの。」

「ハアア、それで朝が遅くなっただってワケ？それでも先に朝食食べて後から見ればいいじゃない、録画なんだからいつでも見られるでしょ？」

「まーその通りなんだけど、やっぱ出来ることならリアルタイムで見たいっしょ！分つかんねーかな、この気持ち？」

「えーつと、つまり今までの録画を全部見て、更に続けて実際の番組も

生で見たからここまで遅くなっただってワケね。」

「そうそう、その通り！さっすがぼのたんは理解が早い。もつとも見る見ないに関係なく録画はしてるんですけどねー。」

「何それ、何でそんな面倒臭いことしてんの？」

「そりや何度でも見返すために決まってんじやーん。DVDやBRDが出たらもちろん買うけどさー、それまでは録画しとかなきゃ繰り返し見れないっしょ？」

「あっそう。」

もう疲れた……。

「それでねー、今日はみんなお休み貰ってるでしょー？ヒマなら漣から提案があるんだけど？」

唐突に猫撫で声を出しながらニコニコと笑顔を浮かべつつ、こちらの様子を窺う漣。

急にどうしたの、気持ち悪いわね……。今日のアなたなんか変じゃない？

「あー……そうだ、臍は今日は一人ザザミソ祭りをする予定があるの。だから付き合えないよ、うん。」

妙な用事を持ち出して漣の提案を断る臍、っていうか一人ザザミソ祭りって何よ!?

祭りなのに一人でやるの!?そもそもその用事、今適当に考えたでしよ？

漣は気付かなかつたみたいだけど、あたしには「あー……そうだ」って言ったのちゃんと聞こえたんだからね。

「むー、残念。じゃあ潮たんは？」

「えっ!?えっ!と、漣ちゃんには悪いんだけど……今日は時雨ちゃんと夕立ちちゃんを連れてお散歩に行く予定があるから、その……ごめん

ね。」

「ええ、潮たんまでく!? そんなあ。」

潮にも断られてがっかりする漣。だけどあたしにとっては潮の発言の方が問題だ。

「はあ? 時雨と夕立い!? 潮、あんたあいつらと出掛けるつもりなの!?!」

「あはは、ぼのたんってあの子達のこと苦手だよね。」

「時雨ちゃんと夕立ちちゃんは曙ちゃんのこと気に入ってると思うんだけどなあ。」

漣と潮は笑って済みますが、あたしにとっては笑えない。

あいつらに気に入られるなんて冗談キツイわ!

「臙もあの子達とは仲良くやれてると思うよ。曙はどこが苦手なの?」

「苦手なんてもんじゃないわよ、あの白黒コンビ! 声はやたらとうるさいし、力も滅茶苦茶強くて止めるのも難しいし……というかあいつら見た目以上に力強過ぎじゃない? 服引っ張られたときなんて脱げるどころか破れるかと思っただわ! そんなでもってその有り余る力で部屋は荒らすし、物はすぐに壊す! 挙句の果てには構ってちゃんであつとおしい癖に、機嫌が悪くなると滅茶苦茶怖くなるし! あいつらはホントにバカよ! とにかくあいつらの相手なんてゴメンよ! なあにがぽいぬだ! なあにが犬時雨だ! 完全に単なる犬じゃない! あんなの他所の鎮守府の時雨と夕立に申し訳ないわ!」

「わああ、そこまで言う?」

漣に呆れられるが、あたしとしてはあれと普通に付き合える他の連中の方がどうかしている。

「うーん、そこは潮が責任を持ってどうにかするから曙ちゃんには悪いけど、もうちょっと我慢しててね?」

どうにかって……責任を持つての後に付けるセリフじゃないでしょ。

「まあ用事があるっていうならしょうがないよね。よし、臙も潮たんもダメならぼのたんだ! どう? ぼのたんは時間ある? あるよね、だってぼのたんだもんね。」

(#^ω^#)ピキピキ

あたしだから時間あるってどういう意味？そんなに暇そうに見える？

大体あたしだって休日の予定くらいあるっての。

「あのねえ、あたしは火山で目撃情報のあるマグマの中を泳ぐ巨大シーラカンスの真偽を確かめるっていう予定が……。」

ところが断ろうとした途端、漣は椅子から飛び降り、あたしの足にまとわりついてきた。

「ぼのたあん、一生のお願い。今日は漣と一緒に過ごしてよお。漣を助けると思ってたね、ね？それにさあ、前回密林で目撃情報のある足の生えた巨大魚だって結局見つからなかったじゃん。今回だって無理だつて。」

「ちよつと、漣あんた何やってんのよ!?離しなさい!そもそも一生のお願いって、数日前にもそのセリフ使ったでしょ、あんたの一生何回あんのよ!?それに前回の釣りは、きつと使った釣り餌が悪かったのよ!今回は絶対に釣れるんだから!」

振り払おうにも漣は足をガツチリと掴んでおり離れない。

「漣はさあ、河まで昇ってきたドスサイズの深海棲艦を魚と勘違いしただけだと思っけど思っけですけど。」

「いくら何でも深海棲艦と魚は見間違えないわよつ!」

「……ぼのたんの足、スベスベだあく。ドウフフフ……ここか、ここがええんか?」

「このアホッ、足を撫でるな!頬擦りすんなつ!」

「それに灼熱の火山の中でマグマの中に釣り糸垂らしたって糸が燃えるだけで何も釣れるわけないだろ、常識的に考えて。そもそもマグマの中で生きていられる生き物なんていないっしょ。そんな苦行に時間を浪費するくらいなら、今日の休日は漣と一緒に過ごそうよ。休日をポツチで過ごしたっていいことないって……ペロペロ、うーんデリシャス!」

「分かった、分かったからいい加減に離せ!つーかどさくさに紛れて太もも舐めんな!気持ち悪い!」

「やつほくい、言質は取ったもんね〜!」

し、しまった。漣の熱意という名のゴリ押しとセクハラに負けて、ついOKを出してしまった。

さよなら、あたしの休日。さよなら、あたしの予定。

一方の漣はあたしの足から離れると小躍りをして喜び始めた、そんなに嬉しいの？

「じゃ、漣の世話は任せるから……。」

「頑張ってるね、曙ちゃん。」

臈と潮からは同情するかのように肩をポンと叩かれる。

こうしてあたしの貴重な休日は、漣と一緒に過ごすことが決まってしまうのだった。

決断、早まったかな……。

曙ちやんと風翔剣士3

出掛ける朧と潮を見送ったあたしと漣は、先ほど通った道に戻って漣の自室に戻ってきた。

……つたく、本当ならあたしだって今頃二人と同じように出掛けていたっていうのに。

「休日をボツチで過ごすでもいいことないって言ってたけど、休日なのに部屋にこもっている方がよっぽど不健全じゃない?」

「まあまあ、固いことは言いつこなしですぞお嬢ちゃん。」

漣は新たな座布団を取り出すとそれを最初に漣が座っていた座布団の横に置き、そしてそこをポンポンと叩いてあたしに座るように促してきた。

この部屋ってイスは無いの? せめて座椅子とか。仕方がないので座布団の上に割座で座る。

「それでどうしようっていうの?」

「フツフツ、今日はほのたんを洗脳……じゃなくて一緒に観賞会をしようと思ってる?」

「ふーん、観賞会ね……ん? 今、洗脳って言った?」

「言っていないよ。」

「いや、絶対言ったでしょ!」

「気のせいだって。聞こえたとしてもそれは空耳でしょ、あんまり細かいことを気にしていると頭がバケツになるよ?」

「ちよつと、それどういう意味よ!? ハゲるよじゃなくて?」

漣は食い下がるあたしを無視してテレビにつながれた再生機器にBRDを入れると、自分の座布団に正座をする。

さつきもしてたけど、テレビを見るのにいちいち正座するなんて疲れない?

「ん、何? 漣の座り方が気になるの?」

あつ、見てたのバレた。

「この番組を見るときは絶対に正座って決めてるの。番組へのリスペクト、真摯な気持ちで向き合おうってね。」

番組関係者でもないのにそこまでするヤツなんていないわよ……。

「それでは……はい、よいいスタート。」

BGM：魂を宿す唄

漣がリモコンの再生ボタンを押すと同時に流れ出す、厳かな雰囲気
のオープニング。

そして現れる番組タイトル。

『風翔剣士 クロス・ダオラ』

「……これって、さつきあんたが見てた番組？」

「そうだよ。(肯定)」

「なんかその喋り方ムカつくからやめて。」

「フヒヒwwwサーセンwww」

音楽に合わせて進んでいくオープニング映像。

映像の中で鎧の戦士、クロス・ダオラによって行われる演武、そして殺陣。

「……この動き、只者じゃないわね。」

子供騙しの低予算番組だろうと高をくくっていたが、この身のこなしは明らかに素人じゃない。

撮影用のスーツなのか本物の鎧なのかは知らないが、スーツアクターは動きの障害になるであろう装備を身にまとったまま華麗な動きを見せている。

「おっ、ぼのたんも分かるう？」

漣のドヤ顔。

凄いのはスーツアクターであつてあんたじゃないでしょ、何であんたが偉そうにしてんのよ？

「この番組の凄いところはアクションにCGやワイヤーをほとんど使っていない点なんですよ！主役のクロス・ダオラは勿論、敵役も雑魚戦闘員も全員素の身体能力だけでアクションをこなしてんの。だというのに迫力不足かと思えばそんなことは全然ない！寧ろそこに予算を使わなくて済むから、それ以外の部分に予算を割り当てることが出来るようになって映像が迫力満点になってるんだって！」

………なんか漣が熱弁しているけど流石に付き合いきれないわ、要するに中の人たちは全員凄いつてことでもいいのよね。

「そんな凄い番組のわりに、臙と潮からは評判悪いのね。」

「うぐつ、痛いところを突きおつて……。」

ガツクリと項垂れる漣。

「あの二人は食わず嫌いしてるんですうー！特撮番組に興味がないからって見もしないで否定するのはどうかと思いますぞ！二人が見てないだけで、これ本当は人気番組なんだからっ！」

「ふーん。」

そういえば武蔵と清霜もこの番組を見ているみたいだったわね。

人気番組つていうのも嘘じゃないのかも？

「だからこそぼのたんには期待しておりますぞ！」

「は？何の話??？」

「つーまーりーぼのたんがこの番組を評価してくれて、更にファンになってくれれば臙と潮の視聴に対する抵抗感はグツと下がるってワケなんですよ！あの捻くれればのたんすら楽しく見ているのなら、自分も見てみようつて気になるでしょ?」

「あんたねえ、臙と潮を引き込むためだけにあたしを利用しようつての?」

「いやいや、そんなことはございせんですよー。それはそれ、これはこれだから。ぼのたんには純粹に番組を好きになつてもらいたいからねー。」

「全く、調子のいいこと言っちゃつて……。」

「ほら、もうすぐオープニングが終わるから。画面見て画面見て！本編がはっじまるよー♪」

漣にいいようにされてるのが少し気にいらないけど、そこまで言うのなら番組を見てやろうじゃない！その上で酷評してやるんだからね！

「クツ、こいつらは一体何なんだ!？」

金髪の青年を取り囲む、青と黒の鱗のスーツに赤いトサカを持つ恐竜のようなマスクを身に着けた十人前後の集団。体つきからして男性も女性もいるように見える。

彼らは牙を剥く大蛇を模した大剣や赤い鉤爪のような二本の小剣、恐竜の頭を模した巨大な笛や散弾銃のような見た目をしたボウガンといった様々な種類の武器でそれぞれ武装している。それらの武器の共通点は全てスーツと同じ青と黒の鱗を持つ皮で覆われているところだろう。

クチバシのような部位から覗く彼らの顔は、黒く無個性な仮面に阻まれ表情を窺うことが出来ない。

町外れにある昼下がりの雑木林、何故青年はこのような場所で武装集団に囲まれているのか？

その理由は前日にまで遡る。

「失踪事件?」

「そう、失踪事件。コモンド、あなた知らなかったの?」

「悪いなルリ、ニュースはあまり見ないんだ。」

ここは田舎と呼ぶほど寂れているわけではないが、都会と呼ぶほど発展しているわけでもない小さな町、りゅうがちょう竜ヶ町。

その町にある小洒落たカフェのテラス席に座り談笑する二人の若い男女、デート中なのだろうか？

精悍で尚且つ端正な顔つきをした金髪の青年の名はコモンド。

その対面に腰掛けているクセのない艶やかな青いロングヘアをした、可愛らしい顔立ちをした美しい女性の名はルリ。彼女は良く言えばスレンダー、悪く言えば平坦な体つきをしている。

ピッ！

「あつ、ぼのたん！何で止めるのお!？」

しまった！見せられている映像が衝撃的で、ついリモコンの一時停止ボタンを押してしまった！

「……えーつと、そこに映っている青髪の女の人、どこかで見たことがあるんだけど?」

「ぼのたんも分かっちゃう?その通り、この人ユクモ鎮守府の提督さんなのでしょ!」

「ユ、ユクツ!?……ユクモってあのユクモよね?」

「ぼのたんの言うユクモがどのユクモなのかは知らないけど、この提督がいるのは温泉で有名なあのユクモ鎮守府だよ。」

「いやいや、現役 of 提督でしょ。何でテレビに映ってるの?」

「そりや特撮番組なんだから演者がいるのは当然でしょ。」

漣の『何言ってるんだこいつ?』という目線に晒される。く、挫けないわよ、この程度じゃ。

「いや、あたしが言いたいのはそういうことじゃなくて、何で提督が役者やってんのかってことよ。」

「あー、そつち?まず前提としてカリユード諸島は基本的に提督と狩娘に、それを補佐する職業の人達しかいないから役者も芸人もいないの。もつともここまで一般人を連れてくるほどの余裕はないし、ここまで来たがる酔狂な人もいないんだけどね。」

……まあそりやそうよね。

ここは大海原にある離島。道中までに普通の深海棲艦がうようよいるし、いぎ圏内に入ったら入ったで今度はアタリハンテイ力の影響を受けた深海棲艦とやり合わなきやいけない。

こんな遠くに戦力にもならない一般人を護衛するというのは流石にリスクに対してリターンが少な過ぎる。

「そんなワケでこの番組を作るにあたって、オーディションをしてやる気と実力のある人材を集めたんですよ！」

「じゃあ今テレビに映っているユクモ提督もオーディションを受けたってこと？」

「その通り！ほら、こここの隅に映っているカフェの店員さんよく見て。」

「えーつと、これって狩娘の最上？」

「イエーツス！彼女はミナガルデ鎮守府の最上さん。こんな風に見知った人が登場人物として出てくるから、そういった人を探しながら見るのも面白いかもねー？」

ミナガルデ鎮守府もメゼポルタ鎮守府に比べれば小さいけど、それでもかなり大きな鎮守府よ。

そんなところからもオーディションを受けにやってくるなんてどうなっているのかしら？

「この番組の登場人物はほとんどが狩娘や提督で、役者としては素人ばかり。にもかかわらず、演技力も悪くないのが凄いところ。そして俳優を雇わなかったのが功を奏したのか、そっちの面でも予算が浮いたらしいんですよ。お陰で番組のクオリティがまた上がるという好循環！」

「あんたさっきから予算とクオリティの話になるとテンション上がるわね……。」

番組関係者でもないのに予算の話で盛り上がるとかどうかしってるわ。

「それにしても鎮守府での仕事があるっていうのに狩娘どころか提督までオーディションを受けに行くなんて案外暇なのね。」

「なんだとう!？」

何となくつぶやいた一言だったのだが、それが癪に障ったのか漣が怒り始めた。

「漣だってスケジュールが空いたらオーディション受けに行きた

かったの！それなのになんてことを言うんだ、ぼのたん！漣だつてテレビ出たかったのに、新しく始まる特撮番組に出られるってんでワクワクしてたのに！オーディションに落ちたならともかく、挑戦すら出来なかつたんだぞお！この悔しさがぼのたんに分かるかッ!!うわああああん!!」

怒ったかと思つたら悔しがったり、そうかと思えば泣き出したりと忙しいわね。

「ご、ごめん。謝るから、機嫌直して……ね？」

「まあ、もう終わったことだし気にしてないんだけどね。」

先程まで騒いでいたのが嘘のようにケロつとする漣。謝つて損した……。

「ところで確かユクモ提督つてルリつて名前じゃないわよね？それにこんな落ち着いた雰囲気の女の人じゃなかつたと思うんだけど？」

もつとこう、アホっぽい……じゃなくて天真爛漫な人だったわよね？

あまり親しくはないけど、少なくとも絶対にこんな人じゃなかつたわ。

「そりやそうでしょ、役名に決まつてるじゃん。そして落ち着いて見えるのは演技。」

「まあ言われてみれば当然よね……。」

「いくいぼのたん、普段の自分とは全然違うキャラクターを演じられるっていうのは大切なことなんだよー」

普段と違う自分を演じるう？いや別にあたしは役者目指してないんだけど……。

「ほら、電話掛かってきたときとか、お客様が来たときに普段通りの喋り方じゃマズいっしょ？それに漣だつて色んな喋り方するけど楽しいよ。ぼのたんもやってみない？ういいいいいいいっす！どうも、ボノボでくす！……つてね。」

「絶対に嫌!!」

客が来たときくらい普通に話すわよ！

それにボノボつて類人猿じゃない！あたしは猿じゃないわ！

「それとカリユード諸島にこんな子洒落たカフェなんてあったっけ？」

よく見ればカフェだけでなく町の景色も見える。だけどカリユード諸島は鎮守府以外の建物はほとんどない。小洒落たカフェは勿論、町なんてあるはずがないのだ。

「ああ、あれセツトとCGだよ。」

「あれがセツトとCGイ!？」

ウソでしょ、なんて作り込みよ……。

「ほら、さつきも言った予算の都合。予算が余ったお蔭でクオリティが凄いですよ。」

力を掛ける部分が間違っているわ……。本土の町で撮影すればこんなセツトいらぬのに。

まあいいわ。さて、いい加減続きを見るとしましょ。

ピッ!

「もう、あなたは相変わらずね。一人暮らしだからって新聞やテレビも家がないのはあなたくらいのものよ。今のご時世ニュースくらい携帯でだって調べられるんだから。本当に自分の興味のないものにはとことん無関心よねえ。そんなのだから友達が少ないのよ。」

「余計なお世話だ。それで、その失踪事件がどうしたんだ？」

ルリは世間に無関心なコモンドに呆れた様子を見せるが、コモンドは話が気になったようでもう続きを促す。

「そうそうそれでね、以前から世界中で失踪事件は起きていたの。とはいえ場所も時間もバラバラだったから最初は同一事件だとは思われていなかったのよ。だけど事件は徐々に件数を増やしながらこの国を、そしてこの町を囲むように範囲を狭めてきたの。そしてここ最近はほとんどこの町、竜ヶ町で失踪件数が起きているのよ。」

「この町で?」

「そう。被害者には共通点がなく、時間帯もバラバラ。ほとんどの被害者に失踪する動機が無かったから誘拐だと考えられてるんだけ

ど、そもそも犯行の瞬間どころか不審な人物すら目撃されていない、そして現場にも証拠となるものがまるで残されていない。そして仮に誘拐だとしても攫った後の動向も不明で、身代金を要求するわけでもないし、臓器販売とかスパイに仕立て上げるといった目的で海外に連れ出しているのかと思えばそういった動きもない。本当に消え去ってしまったみたいね。」

「まるで神隠しみたいだな。」

「証拠が無さ過ぎて警察とかも手の出しようがないみたいね。不可能犯罪ってことで精霊や宇宙人の仕業じゃないかとも噂されているぞよ。」

「なるほど、言われてみれば。確かに最近は風の様子がおかしい日が多かった。今も風が乱れているんだ、もっと早く気付くべきだった。」
「またいつもの風の声が聴こえるっていう？幼馴染で昔から付き合いのある私は知ってるからいいけど、あまりその話はしない方がいいと思うわよ。遅れてきた中二病だと勘違いされるでしょ。」

「うるさいな。自分のことだ、そのぐらい分かっているさ。言うわけないだろう。」

コモンドは生まれつき風の声を聴くことが出来た。

風を感じることで周囲の状況や、人の善意や悪意といったものが臍気ながら分かるのだ。

何故風の声を聴くことが出来るのかは現在でも不明だが、当時のコモンドはそれを普通のことだと思っていた。

しかし周囲から気味悪がられるようになり、本当に親しい相手以外にその話はしなくなった経緯がある。

「しかしどうしてこの町なんだ？最初は事件は世界中で起きていたんだろう？スケールダウンにも程があるだろう。竜ヶ町はそこまで大した町じゃないぞ、言っちゃ悪いが特に面白みのないどこにでもある古臭い町だ。精々ウエポンス伝説のゆかりの地っただけだ。何故わざわざそんな町の住人を狙うんだ？なぜこの町に拘るんだ？竜ヶ町でないといけない理由があるのか？」

ウエポンズ伝説とは世界中で広く知られている、古の英雄の物語である。

この物語はおとぎ話とされているが、同時に人類の歴史の歩みを紐解くための研究対象ともなっている。

調査の結果、現在はコモンド達の住んでいる竜ヶ町にルーツがあるということが判明している。

「さあ？パツとしない町だし、犯行が気付かれにくいとでも思ったんじゃないかしら？」

「今まで全く証拠を残さなかったのにか？」

「うーん、人攫いの考えていることなんて分からないわ。」

「そこは同感だ。」

誘拐の話はそこで打ち切り、その後は取り留めのない話が進んでいく。

やがてユリは腕時計を確認すると席を立った。

「話に夢中になり過ぎちゃった。私、そろそろ帰るわね。」

「そうか、ならオレも帰るとするよ。」

「もうっ、そこは送っていくと言うのが男の甲斐性ってものでしょ？」

「オレもお前もそういうキャラじゃないだろう？」

「ふふっ、まあね。ただどか弱い私は帰っている途中に誘拐組織にさらわれちゃったりして？」

「笑えないジョークを言うのはやめろよ。」

「ゴメンゴメン。それじゃあ明日もいつもの時間にここで会いましょうね。」

「ああ、またな。」

コモンドも席を立つと、二人はそれぞれの帰路に着いた。何てことはない日常の1ページ。

しかし翌日コモンドがルリと再会することはなかった。

翌日、コモンドは行方が分からなくなったルリを探していた。

「どういうことだ？連絡が取れないだけならまだしも、家に帰った様子もないなんて。」

約束の時間にカフェに向かうもルリはおらず、カフェの店員に聞いても姿を見てはいないという。

しばらく待つてみるが、それでも姿を現さないルリを疑問に思い連絡を試みるが反応はなく、仕方なく自宅まで向かってみるも人の気配は無かった。

「幼馴染だからって平気で合鍵渡すなんてどうかしてるな。しかし部屋には帰宅した形跡がない。そして相変わらず風の様子もおかしい。まさか本当に誘拐されたんじゃないだろうな？」

ここで前日の誘拐の話を出し、ルリの自宅とカフェまでの道を往復してみるがやはり見つかることはなかった。

「この道を通ってないのか？くっ、昨日オレが送って行ってやれば……。そういやあいつは景色のいい通り道があると言っていたがそっちを通ったのか？」

後悔するコモンドだったがルリが寄り道した可能性を考え、せめて手掛かりだけでも得るためにカフェとルリの自宅をただ往復するだけではなく、周辺の道も探すことにした。

「本当に景色がいいな、これは寄り道をしたくなる気持ちも分かる。」

美しい並木道、景色を楽しむのも程々にコモンドは周囲を見渡す。

「いい道だ。しかし、だからこそ他に誰もいないのが気になるな。こんなにいい道だというのに吹いている風からは全く心地良さが感じられない。何故誰もいないんだ？」

まだ時間は昼過ぎ、にも関わらず通行人の姿は見当たらない。

それに対してコモンドが疑問を持ったその時。

ガサツ……。

「!？」

不意に物音が聞こえた方へ顔を向けるコモンド。

彼が目にしたのは木陰から木陰へと身を潜めながら走り去る怪し

げな人影だった。

「誰だ!? 待てっ!」

人影を追い走るコモンド。

体力と運動神経には自信のあるコモンドだったが、それでも人影には中々追い付けない。

相手に追い付かないことに焦りを感じるコモンドだったが、やがて人影は雑木林まで到達するとそこで立ち止った。

「あんなところで立ち止まるなんて、誘われているのか? しかし飛竜の卵は飛竜の巣だ!」

※『飛竜の卵は飛竜の巣』とはカリユード諸島で使われていることわざの一つ。意味は虎穴に入らずんば虎子を得ずと同じ。

相手の露骨な狙いに気付くも、敢えてその誘いに乗ることにしたコモンドも雑木林へと足を踏み入れる。

「追い付いたぞ、お前は一体何者だ?」

追い付いたコモンドは背を向けて立っている人影に声を掛けつつ近づく。

「……ギギッ!」

「なっ!」

コモンドの声に答えるように振り返る人影。

近付いたことで明らかになった全貌、それは青と黒の鱗を持ったトカゲ人間としか表しようのない姿をした怪人だった。

大口を開けた爬虫類そのものの頭部、その口腔にある人間の顔は漆黒の仮面に覆われており全く感情を読み取ることが出来ない。

「……ギギッギギッ!」

「クッ、こいつらは一体何なんだ!」

それと同時に周囲の木陰からも同様の姿をした怪人が十人近く姿を現しコモンドを取り囲んだ。

こうして物語は冒頭へと繋がる。

「「「ギイーンッ!!」」」

それぞれの得物を振りかざしてコモンドに襲い掛かる怪人たち。

「こいつら問答無用か!? だけど動きが甘いッ!」

コモンドは峰に何本もの牙があしらわれた長大な骨刀を振り下ろして斬りかかってきた怪人の攻撃を躲し、まだ太刀を振り下ろした体勢のままの怪人の顔面にジャブを決める。

殴られた怪人が怯むのを確認するや否や続けてソバットをお見舞いし、怪人を吹き飛ばす。

「剣術には自信があるんだ。そっちがやる気ならこっちも遠慮はしないぞー!」

倒した怪人から太刀を奪い取ると、続いて襲い掛かってきた一人の怪人をすれ違いざまに斬り捨てる。そして次々と襲い来る怪人と大立ち回りを始めるのであった。

「どうした? 数ばかりで大したことないんだな。そんなことじゃあいつまでもオレには勝てないぞ?」

「ギギ……。」

次々と怪人を倒していくコモンド。多くの仲間が倒されたからか、それともコモンドの実力に臆したのか、怪人達は徐々に及び腰になってきた。

「(とはいえ、この人数だ。顔には出さないようにしているけど流石に疲れてきた。どうにかして戦いを切り上げつつ、こいつらから情報を手に入れる方法はないか?)」

思案するコモンドだったが、その思考はすぐさま打ち切られる。

「ほう、生身のままで集団のランポス兵を寄せ付けぬとはな……。」

「誰だッ、新手か!」

ザッ、ザッ、ザッ……。

雑木林の奥から現れたのはまるで炎を思わせるかのような赤い鎧に身を包んだ男だった。

二本の角の生えた赤い仮面、艶めく銀髪。深紅のマント。そして全身から薄っすらと立ち昇る陽炎。

その姿はまさしく業火を身にまとう帝王である。

「これ程までに龍の香りを漂わせている男に今まで気付かぬとはな。そしてこの太刀捌き、間違いない。なるほど、これは大当たりを引いたようだ。ランポス兵が敵わぬのも当然か。」

「お前は誰だ、何を言っている？お前もこいつらの仲間か!？」

「おっと、これは失礼した。自己紹介がまだだったな。私の名は超絶のフルカイザー、双剣のウエポンド。会えて光栄だ、新たなウエポンド候補よ。」

「新たなウエポンド？オレのことを言ってるのか？」

コモンドは意味の分からないことばかりを話すフルカイザーに質問をするが、フルカイザーは答えるつもりはないのか一人喋り続ける。

「昨日の小娘も中々の香りを放っていた。しかしお前ほどの逸材に出会えるとは嬉しいぞ。やはりこの町、竜ヶ町は龍の血が濃い者が多い。」

「昨日の小娘？龍の血？どういう意味だ!!お前ッ、ルリに何をした!？」

「ほう、小娘の名前はルリというのか。だが名前などどうでもいい。龍どころか竜の才能すらない者がほとんどのこの世界にとつて、お前や小娘のような存在は貴重なのだ。そして才能のない者はこの世に不要、むしろ害悪と言ってもいい。必要なのは選ばれし者だけだ。」

「さつきから訳の分からないことばかり！質問に答えろ!!」

「そして選ぶのは我々ではない。世界だ、世界なのだ!!喜ぶがいい、誇るがいい、お前は世界に選ばれた！この世界に選ばれたという事実を光栄に思うがいい!!」

フルカイザーは不思議な輝きを放つ二振りの剣を構え戦闘態勢をとる。

「クソッ！」

コモンドも奪った骨刀を構えるが、斬り結ぶ前から既に結果は見えていた。

フルカイザーが全身から放つ威圧感は一ランポス兵のそれとは桁違いであり、それだけで実力差を感じられる。

相手が手にする双剣もこちらの骨刀とは段違いの業物であることが一目で分かる。

何よりこちらは戦い続けて疲労した状態。例え武の心得が無い者でも簡単に分かる絶望的な力の差であった。

「うおおおおお!!」

斬り掛かるコモンド、しかしフルカイザーの剣が煌めくと同時にコモンドの胸元からは鮮血が舞う。

「がっ!? あ……あ……」

「力の差を感じても怯まずに向かってくるその姿勢、素晴らしい。案ずるな、今は何も考えずに眠るがいい。目が覚めた時、お前も私の同志として新たな世界に仕えることになるだろう。ようこそ、ネオウエポンスへ。」

崩れ落ちるコモンドの耳に聞こえたのは、カイザーの意味深な言葉だった。

『この番組はご覧のスポンサーの提供でお送りします。』

「えっ……? いいところなのに、ここで提供になるの!?!」

「そりやそうでしょー、テレビ番組だもん。しかもこれ録画、あらかじめ編集された市販のDVDじゃないんだもん。ところでどう、この提供目? 面白いっしょ。」

これからだつてところで、あたしの目に飛び込んできたのは提供クレジット。

提供の二文字がアイキャッチのクロスダオラの両目に丁度被っているのは確かにおかしいけど、さっさと続きを見せなさいよ!?!

ええい提供はいい! 番組を映せ、番組を!

「ふふっ、ぼのたんもイ感じにのめり込んできましたねえ。この調子、この調子でドゥンドゥンこの番組を好きになってね♪」

漣が何か言っていたが、それも耳に入らないくらいに熱中している自分がいるということにはまだ気付かない曙なのであった。

曙ちやんと風翔剣士4

『みんなで飲もうぜ達人ビール！レッツ・ドリンク達人ビール！ゴクツ、ゴクツ、ゴクツ……。プハー！狩りの後のこの一杯！イエーイ！最高だぜ！』

「……………」

淡々と流れるCM、他に見るものがないので仕方なく見る。

『DX斬破刀！風と雷の力で悪を断つ！ボタンを押すと必殺技を叫ぶぞ！狩技・風翔雷撃気刃斬!!これでキミもクロス・ダオラだ！』

「……………あのさ、漣。」

「ん、何？」

「何で無編集なの？CMそのまま録画されてるんだけど、消してないの？」

「え、だって市販のDVDやBRにはCMなんて入ってないじゃん？」
「そりや当たり前でしょ、市販なんだから。それがどうしたっていうのよ？」

CMが消されていないことに対して漣に文句を言ったら、逆にこいつ何も分かってねえなという呆れ顔で返されてしまった。

「いいい、ぼのたん？当時の放送中にどんなCMが流れていたかなんてことは市販品じゃ分かんないんだぞ？なのにCM消しちゃったら、見返しても当時の気分には浸れないじゃん。それにDX斬破刀みたいな番組の関係商品とかは、番組終わったら見る方法なんて動画サイトくらいになっちゃうっしょ？だったらCMを消さずに一緒に録画しておくのは番組ファンとしては当然のことだって分かるでしょ。」

「……………ウ、ウン。ソウネ。」

何言ってるのか全然分かんなかったけど、この話題にはこれ以上触れてはいけないってことだけは分かったわ。

「……………あつ、CM終わったよ。続き見るよ、続きっ！」

再びクロスダオラのアイキャッチが映る。

CMと漣の話のせいで1分しか経ってないのに随分と長く感じたわ。

「……ん……ハッ!? そうだ、オレはカイザーという奴に負けて……斬られた傷が無くなっている? それにここは一体どこだ?」

コモンドが目を覚ますと、そこは見覚えのない場所であった。

歴史を感じる石造りの趣ある小部屋、コモンドはそこにあるベッドに寝かされていた。

ベッドの他に物はほとんど置いておらず、窓もなく外の様子を窺うことは出来ない

「気が付いたかニヤ?」

「誰だ……んっ!?!」

目覚めたばかりのコモンドに話しかける謎の声、コモンドがその声のする方へ視線を向けてみると、そこにあったのは一つの小タルであった。

「タル? タルが喋っているのか?」

「ボクはタルじゃないニヤ!」

被っているタルを放り捨てる小さな影、コモンドが改めてその声の主を確認してみると……。

「ネコが喋っている!?!」

タルの中から姿を現したのは、二足歩行をするシャムネコのような不思議な生物であった。

「ニヤッフーン、ビックリしたかニヤ? ボクの名前はシャイナス、キミの名前を教えてほしいニヤ。」

「あ、ああ……オレの名はコモンドだ。」

「コモンド? よし、覚えたニヤ。それじゃコモンド、聞きたいことは

いっばいあるだろうけど、のんびりしているとあいつらが戻ってくるニヤ。」

「あいつら?」

「キミを誘拐した連中ニヤ!キミはあいつらに捕まって身体に宝玉を埋め込まれてしまったのニヤ!」

「なんだ?!宝玉?そんなものを埋め込んだのか?!オレの身体に!」

自分を倒した相手にここに連れて来られたことまでは予想していたコモンドだったが、流石に得体の知れないものを体内に埋め込まれたことまでは予想出来ず狼狽の色を見せる。

「埋め込むとっても手術したワケじゃないのニヤ。宝玉は身体にかざすと勝手に吸い込まれて消えるのニヤ。それに誰にでも埋められるワケじゃなくて、キチンと適合する人じゃないとダメなのニヤ。キミが狙われたのはきつと適合者だったからなのニヤ。そして一度埋め込んだ宝玉は適合者が死ぬまで取り出せないのニヤ。」

「死なないと取り出せないって、いくらなんでも死ぬつもりはないぞ?」

「死にたくないのは当たり前ニヤ、だけどそれだけじゃ終わらないのニヤ。あいつらは宝玉が完全に身体に馴染んだのを確認したら、今度はキミを洗脳して仲間に加えるつもりなのニヤ!」

「洗脳だ?!ふざけるな!!」

幼馴染を誘拐した挙句、自分を攫って妙なものを埋め込んだような連中の仲間になるつもりなどさらさらないコモンドは激昂する。

「だからボクは宝玉の埋め込みに成功したことで油断したあいつらが部屋の外へ出るまで、物音一つ立てないで隠れて待っていたのニヤ。あいつらはきつと適合まで時間が掛かるし、キミも自分目覚めないだろうと思っただけを離れたのかもしれないニヤ。それで誰もいなくなった隙にボクのとっておきの秘薬でキミを気付けして起こしたのニヤ。このタルはその際に偽装として被っていたものニヤ。」

「そうか、助けられたな。礼を言う。ところでルリ……青い髪をした女を見なかったか?カイザーってヤツの話が本当なら昨日ここに連れて来られたハズなんだが。」

「青い髪をした女の人？知らないニヤ。昨日はこの部屋には誰も来て
ないのニヤ。」

「見ていない……か、分かった。ところでオレの斬られた傷を治して
くれたのもお前か？」

「傷？確かに秘薬には傷を治す効果があるけど、ボクが見た時には傷
なんて無かったニヤ。」

「無かった？じゃああいつらが埋め込みたいで治療したのか？」

「傷が治ったのは、きつと埋め込まれた宝玉のせいニヤ。」

「何だつて？気を失う程の痛みと瞬間的な失血だったんだぞ、あれ程
の傷が自然治癒で治るハズがない！」

コモンドが着ている服には痛々しい斬撃の痕と血痕が残されてい
るが、その下から覗く地肌には掠り傷一つ残されていない。

これ程のダメージが自然治癒で完治したということに驚きを隠せ
ないコモンド。

「それが治っちゃうのニヤ。宝玉に適合した人間はあらゆる能力が大
きく上昇するのニヤ、治癒能力も並の人間の比じゃないニヤ。とはい
え寝て起きたら全快なんて話は聞いたことが無いけど……よく分か
らないけど宝玉との適合率っていうのと関係があるのかニヤ？」

「まあその件はいい。それよりどうしてお前はオレを助けてくれるん
だ？」

助けてもらったことに対しては感謝しているが、何故そこまでして
自分を助けたのか疑問に思うコモンド。それに対するシャイナスの
答えは意外なものだった。

「ボクをここから連れ出してほしいのニヤ。」

「ここから連れ出す？」

「そうニヤ、ボクはずっとここで過ごしてきたんだニヤ。いつからい
たのか、そもそもその前はどこにいたのかボク自身でも分からないけ
ど、とにかく何年もの長い間にいたのニヤ。そしてあいつらに見
つかったらきつとロクでもないことになるのは分かっているのニヤ、
だから今までずっと隠れて過ごしてきたんだニヤ。だけでもうこん
な生き方は嫌なのニヤ！だからボクを連れて行ってほしいのニヤ。」

「分かった、連れ出してやる！ここから無事に逃げ出せたらの話だけどな。」

「そこは大丈夫、出口までの道は知っているニャ。ボクが道案内するから走るのは任せたニャ。」

そう言うとシャイナスはコモンドの右肩に飛び乗った。

「やれやれ。言っておくがオレの足は速いからな、振り落とされるんじゃないぞ?..」

そしてコモンドはシャイナスの案内に従って走り出すのであった。

シャイナスの案内に従い進んでいくコモンド達。時には上昇した身体能力を使い、時には風の声を聴きながらランポス兵の巡回の目を躲す。

「どうなってるんだここは?窓から見える景色が異常だぞ。」

この廊下も重厚な石造りであり、まるで中世の城か砦のようである。廊下には小部屋にはなかった窓がいくつかあったが、外は薄暗く何も無い空間が広がっているばかりであり、窓からの脱出は不可能であった。

「簡単に言えばここは異次元なのニャ。」

「異次元!?!」

異次元というともないワードが飛び出したことで流石に驚くコモンド。

「この建物は異次元空間に存在してるらしいのニャ。だから今まで誰にも見つかることはなかったのニャ。そして出入口はいわゆるワープゲートみたいなので、宝玉を持つ者しか自由に出入り出来ないのニャ、だからボク一人じゃ逃げられなかったのニャ。」

「なるほど、だから誘拐事件の容疑者と被害者が見つからなかったというワケか。だがそもそも何故異次元空間に建物が浮いているんだ

？この建造物は一体何なんだ？」

「それについては……コモンドはウエポonzの伝説を知っているかニヤ？」

「どうしたんだ、藪から棒に？」

ウエポonz、それは古くからこの世界に伝わる伝説の戦士達の物語である。

かつてこの世界には人と竜が存在していたという。

人と竜はある時は助け合い、ある時は戦い、そして互いに生き続けてきた。

しかしある日、大きな争いが始まった。切っ掛けは些細なことだったのかもしれない。

人は知恵の劣る竜を見下し、竜は力の劣る人を蔑んだ。

人はその知恵を生かして竜を殺し、竜もその力を使い人を殺していった。

世界は人と竜が殺し合う地獄となっていくた。

しかし全ての人と竜が愚かだったわけではない、争いに反対した者もいた。

だがそのような者は裏切り者として、同族からも命を狙われるようになった。

そんな彼らを守るために、そして争いを終わらせるために立ち上がった者達がいた。

彼らこそウエポonzである。

ウエポonzは人の知恵と竜の力、そして大いなる勇気と深い愛の心を持っていた。

ウエポonzは人と戦い、竜と戦った。そして赦し、分かり合い、争いを終結へと導いた。

争いが終わった後、ウエポonzは何処かへと姿を消した。

大きな力は新たな争いの火種となる、我々の存在は平和を取り戻した世界には不要だ。

二度と我々が必要とされることのない世界の存続を願う。

しかし再び世界に危機が訪れるようなことがあれば、我々も再び現れるだろう。

そう言い残して……。

「子供でも知っているおとぎ話、この国どころか世界中で知られている有名な物語だ。だけどそんなおとぎ話と今の状況に何の関係があるんだ？」

「実はそのおとぎ話が実はおとぎ話じゃなかったとしたらどうかニヤ？」

「何だって!?!いや、しかし竜なんて世界のどこにもいないぞ?それにウエポonzが実在したという証拠だってどこにもない。」

「そりゃそっちの世界にいないってだけニヤ。」

「そっちの世界、そして異次元……つまりそういうことなのか?」

「察したようニヤね、世界からウエポonzが姿を消した後に住んでいたのがここニヤ。あつ、今度はそこを右に曲がるのニヤ。」

「こっちの道だな、それでつまりここの建物はウエポonzの移住先ってことなのか?」

「そんなところニヤ。古代には現代の科学では解析しきれない超文明と技術があつたのニヤ、古代の技術を使えば異次元に建物を浮かすのなんて簡単……じゃないけど出来ないことはないのニヤ。ただウエポonzはただ住んでいただけじゃないのニヤ。この異空間を見つけたウエポonzは自分達以外出入りが出来ないように細工をするの中に城塞を作り、命尽きるまで世界を見守り続けていたのニヤ。」

「誰にも知られることなく世界を守り続けていたのか。凄いな、ウエポonzは間違いなく英雄だったんだな。それじゃあ竜がいないって言うのは?」

「それも似たような話ニヤ。戦争後もしばらくは人と竜の共存が続いていたんだけど再び同じ過ちを繰り返さないようにと、竜達も新天地を求めて別の次元へと旅立っていったのニヤ。」

「よくそこまで知ってるな、お前。」

「伊達に長く生きてはないニヤ。いつ頃の記憶なのかまでは分からないけど、うろ覚えとはいえここまで覚えてるっていうことはきつとボクも当事者なのニヤ！ボクはきつとウエポonzの従者をやっていたのニヤ、そうに違いはないニヤ。」

「記憶が曖昧な割に能天気なヤツだな、お前何歳なんだよ？」

自分だったら記憶がハッキリとしない状況でそこまで都合よく物事は考えられない。

脱出を望む割にはお気楽で都合のいい思考のシャイナスに呆れるコモンド。

「それじゃあ、あいつらはウエポonzの残党ってことなのか？」

「それは違うのニヤ！あいつらはウエポonzじゃないのニヤ！」

伝説の英雄が罪なき人々を害しているという事実疑問を抱くコモンドだったが、その考えはすぐに否定された。

「そういえばネオウエポonzと名乗っていたな……。」

「そもそもウエポonzは既に全員亡くなっているのニヤ、残党なんてあり得ないのニヤ。」

「まあそれは当然だな。ウエポonzにだって寿命はある。」

「その通りニヤ。そしてウエポonzがみんな死んじやったことでこの拠点はボクを除いて無人になったハズなのニヤ。なのにボクが長く眠っている間にネオウエポonzっていう連中に占拠されてたのニヤ。」

「だけど入り口はウエポonzにしか開けないんだろう？でもウエポonzは全員死んだんだ、それでどうやって入り込んだんだ？」

ウエポonzしか出入り出来ないのにウエポonzではない者が出入りしているという矛盾。

しかしこの答えは非常に簡単なものだった。

「確かにウエポonzは全員亡くなったのニヤ、でもその子孫は今も生きてるのニヤ。」

「子孫だって？」

「カイザーに何か変な言われなかったかニヤ？」

「……ああ、龍の匂いがするとかどうとか言ってたな。」

「それニヤ、ウエポonzが竜の力を持っていたっていうのはもう知っているニヤ？その竜の力は薄れながらも世界中に広がっていったのニヤ。だけどほとんどの人の竜の力は無いに等しくて、力に目覚めることなく一生を終えるのニヤ。だけどたまに先祖返りなのか竜の力の強い人が生まれるのニヤ。そういった人は普通の人とちよつと違った点があるのニヤ。コモンドも人とは違う不思議な力を持っていないかニヤ？」

コモンドはその不思議な力に対して心当たりがあつた。生まれたころからずつと持っている、風の声を聴く力。

「……ああ、持っている。」

「やつぱりニヤ。ウエポonzにもキミにそっくりな人がいた気がするニヤ。うろ覚えだからどんな人だったのは思い出せないけど、キミを見たときにデジャブを感じたんだニヤ。これもキミを助けた理由の一つニヤ。この人なら絶対にボクの助けになってくれるって思ったのニヤ。」

思っていたよりもフワツとした理由だったが、そのお陰で助かったことに対して自分とよく似ているという先祖に内心感謝をするコモンド。

「きつとネオウエポonzの創始者も竜の力が強かったのニヤ。それで偶然この次元を発見してウエポonzの遺産を手に入れたのニヤ。それで何を思ったのかは知らないけどネオウエポonzを名乗って活動を始めたのニヤ。」

「そして勢力拡大のために世界中から竜の力のある者を集めた、いや拉致したんだな？」

「その通りニヤ。ネオウエポonzは竜の力を持つ人を捕まえて宝玉を埋め込んでいったのニヤ。特に強い竜の力を持つ人は、竜を超える龍の力を持つ者と呼んで何としてでも確保しようとしているみたいだニヤ。」

「世界中で犯行をしていたというのに、徐々に竜ヶ町を中心に犯行を行うようになったのは竜ヶ町にウエポonzの子孫である竜の力を持つ

つ者が多く住んでいたからなのか。」

コモンドはウエポンスのルーツが竜ヶ町にあるということを出し、誘拐事件が増えてきた理由を推測する。

「だがその宝玉というのは何だ？」

「宝玉はウエポンスが亡くなる前に、自分達の持つ力を結晶化させたものなのニヤ。当時ウエポンスが持っていた力とほぼ同等の力が封じられている宝玉と、宝玉を作る際に零れ落ちた大量の破片から作られた竜玉があるのニヤ。ウエポンスは自分達が死んだ後の時代で災いが起きた時に備えて、後世のために力を残そうと思つて宝玉を作つたみたいだニヤ。そして宝玉を埋め込むと、その宝玉の製作者であるウエポンの力を得られるのニヤ。」

「だが、その世界を守るための力がネオウエポンスに悪用されているんだな？」

「そうなのニヤ。竜の力を持つ人には竜玉を埋め込んでランポス兵に、そして龍の力を持つ人には宝玉を埋め込んでカイザーみたいな上級戦士にするのニヤ。」

かつてウエポンスと友好があつたシャイナスには、ウエポンスの技術が悪用されていることに対して深い怒りと悲しみを抱えているようだった。

正義のための力を、悪事に利用する。コモンドにはウエポンスがこの世界を去つた理由が分かるような気がした。

「それで、オレに埋め込まれた宝玉が何の宝玉かは分かるか？」

「それは分からないのニヤ。実はどの宝玉にどのウエポンの力が封じられているかは不明なのニヤ。運用しているネオウエポンスでさえ分かってないのニヤ。」

「じゃあ適当に埋め込んだってワケなのか!？」

「そうでもないのニヤ。適合者と宝玉にもそれぞれ相性が合つて、相性の悪い宝玉はどんなに頑張つても埋め込みようがないのニヤ。それに埋め込んだ後にウエポンスの力を発揮してみれば、それで何の宝玉を埋め込んだか分かるから問題ないのニヤ。」

「そんなのでいいのか？」

世界を救った救世主と、その遺産を悪事に用いる悪党という真面目な話の後に、こんな適当極まりない話を聞かされて若干呆れるコモンド。

「そして新しい戦士を作り出すと改造絆石を使つて手先に変えてしまふのニヤ。」

「改造絆石？それはなんだ？」

さつきから初耳の連続なのに、またしても知らない言葉が出てきたことで流石に疲れを見せるコモンド。

「絆石というのは、人と竜の信頼の証のようなものなのニヤ。昔の人は絆石を使うことで竜と心を通わせていったらしいのニヤ。だけどそれもネオウエポonzによって単なる洗脳装置に変えられちゃったのニヤ。これで無理奴誘拐された人でも、あつという間に組織に忠誠を誓うのニヤ。」

改めて洗脳前に助けて貰えたことに胸をなでおろすコモンド。

「それで、あいつらの目的は分かるか？」

「それについては流石に分かんないニヤ……………でも。」

「でも、なんだ？」

「ある程度の推測は出来るニヤ。ネオウエポonzは世界中から竜の力のある者を集めて仲間に行っているのニヤ、そして選ばれた者だけがこの世界で生きられるって言ったのニヤ。きつとあいつらの目的は世界征服なのニヤ！竜の力を持たない人を劣等種として排除しようという選民思想なのニヤ！」

「世界征服……………本当にそうなのか？」

実際にカイザーと斬り結んだコモンドには、ネオウエポonzの目的が世界征服のような俗なものだとは思えなかった。

カイザーとの戦いは一瞬で決着がついたため、あれだけで全てを察することが出来るとは流石のコモンドも思っていない。しかし戦いに込められた意思は時に言葉よりも雄弁に、そして正確に物事を語るのだ。

具体的に説明するのは難しいがカイザーからは欲望のために世界を掌握するのではなく、寧ろ世界に仕えようという意味を感じた。

勿論カイザー以外のネオウエポンズが同じことを考えているとは限らない。しかしあれ程までに強く感じられる意志ならば、少なくともカイザーが本気で世界のために行動しようとしているということだけは分かる。

そこだけを見ればネオウエポンズは確かにウエポンズの遺志を継ぐ新たなウエポンズ、正義の集団と呼んで差し支えないだろう。しかし彼らからは自らの信じる正義のためなら何をしても構わないという独善的な、そして自分の行動が全て正義であると信じて疑わないという狂気的な意思を感じるのだ。

そもそも正義の集団が秘密裏に罪無き者を拉致するだろうか？力無き者を害悪と呼び捨てるだろうか？

コモンドにはネオウエポンズが兵力を蓄えた後に、無辜の民を粛正するつもりであろうことがハッキリと感じられた。

つまり彼らの目的が世界征服であろうがなかろうが、悪しき集団であるということに間違いはないのだ。

「もうすぐ出口だニヤ！」

「だが見張りが一人いるようだぞ？」

シャイナスの案内でようやく要塞の出口に到着したコモンド。しかし風の声を聴くことが出来るコモンドには、見なくとも出口の前に立つ見張りの気配がしっかりと感じられた。

「きつとランポス兵ニヤ。」

「あの青いトカゲ人間か、このまま見つからずに行くのは無理だな。少々荒っぽくいくとするか。」

コモンドは足元に落ちていた小石を拾い上げると、見張りのランポス兵の方へ向けて軽く放り投げる。

ヒュッ！コッソ。

「ギ？！」

「おらあつ！！」

「ギエツ！」

小石に気を取られて隙を見せたランポス兵に踵落としをお見舞いして意識を刈り取る。

「さっき倒せたから勝てるとは思っていたが、ここまで弱かったか？」
敵の明らかな弱さに疑問を抱くコモンド。

「それはきつと宝玉のお陰ニヤ。きつとコモンドは生まれつき龍の力を使いこなしていたのニヤ、だから普段から強かったのニヤ。それが宝玉の力を得たことで更にパワーアップしたに違いないニヤ！」

「オレの身体能力の高さにはそんな秘密があつたのか……まあそれは置いておくとして、この扉は普通に出て大丈夫なのか？」

出口と思われる大きな両開きの重厚な木製の扉。しかしこの扉を開けた先に待っているのは底なしの異次元空間である。

「大丈夫ニヤ。行きたい場所を思い浮かべて潜れば、大体その辺りに出られるのニヤ。」

「大体その辺りってお前なあ……。」

シャイナスの適当な返答に呆れるコモンドだったが、このままじつとしているワケにもいかず、覚悟を決め扉を開けると何も無い空間へ飛び込んだ。

「ここは……町外れの雑木林？」

コモンドが異次元の扉を抜けると、そこはランポス兵やカイザーと戦った雑木林だった。

振り返ってみるが、そこには木製の扉も異次元の穴も無く雑木林の景色だけが広がっていた。

「ここが外の世界なのニヤ、月を見るなんていつ振りかニヤ？」

シャイナスはコモンドの肩から降り、景色を眺めたり深呼吸をしている。

「すっかり夜になってしまっているな。」

カイザーと戦ったときはまだ日中だったが、今は完全に深夜である。

少なくとも数時間は経過しているようだった。

「さて、やっと逃げられたしこれから……ッ!!」

「ほう？完全に気配を殺していたつもりだったのだが、吾輩に気付くとは流石であるな。」

人の気配を感じたコモンドが向き直ると、木の陰から怪しげな男が現れた。

鋭い棘が目立つ紫色をした中華系の鎧、顔には大きな耳とクチバシを持った鳥のような仮面を被っている。

「吾輩は鬼教官のフルルガ。ランポス兵達の教育を担当している、その名の通り教官だ!」

「フルルガ？ネオウエポンスの追手か!？」

「追ったワケではない。こういうこともあるかと思って試しに監視していただけだが、まさか本当に当日脱走するとは。吾輩の勘は今日も冴えておるな、決して外に出て職務をサボっていたワケではないぞ。又ハハハ!」

フルルガは両手を広げるとこちらにゆっくりと近付いてきた。

穩便に済ませたいのかもしれないが、その逃がさないとも言いたげな姿勢は自然とコモンドに警戒態勢を取らせる。

「荣誉あるネオウエポンスの一員に選ばれたというのに、一日経たずに逃げ出すとはランポス訓練兵以下だぞ。今すぐ戻るのだ!」

「冗談じゃない!拉致に洗脳、挙句の果てには選民思想!そんなことで誰がお前たちに協力するか!」

コモンドはそう叫ぶが、その答えが分かっていたかのようにフルルガは笑い始める。

「又ハハハ!やはりか、だが貴様はすぐにその選択を後悔することになるぞ?何故なら貴様は吾輩に力尽くで連れ戻されることになるのだからな!」

フルルガの広げた両手にそれぞれ独特な形状をした小剣と、スパイク付きの丸い盾が現れた。

「吾輩のクロオビソードを前にして、無事でいられるかな?」

BGM：唸る一匹狼

軽くジャンプするとコモンド目掛けて剣を振り下ろすフルルガ、コモンドも上がった身体能力で躲し、フルルガの横顔に右ストレートをお見舞いするが……。

「ふんっ、又ルいな。所詮はヒヨッコよー!」

まるで効いた様子はなく、回転斬りを繰り返して来る。

「くっ、こいつランポス兵とはワケが違うぞ!」

バク転で回転斬りを避けたコモンドだが、攻撃が通用しないことに少なからず動揺していた。

このまま避け続けていても決定打が無い以上、勝ち目はない。

「又ハハハ！貴様は改造絆石を使った最終処置が施されておらんから、宝玉の力を使いこなせんのだ。そんなザマで吾輩に勝てるハズがない！諦めて戻るか、それともそのまま吾輩に打ちのめされるか、どちらか選ぶといい!」

勝ち誇るフルルガ。

しかしそのフルルガの発言により、下がって観戦していたシャイナスの脳裏に浮かぶものがあった。

「絆石……宝玉……ボクは何かを忘れて……そうだッ！よく聞くのニヤ、コモンド!」

「なんだッ!」

叫ぶシャイナス。コモンドはフルルガから目を逸らさずに、シャイナスの言葉に耳を傾ける。

「ボクは絆石と同じ能力を持っているのニヤ!」

「どういうことだ!?!何を言っている!?!」

「理由なんて分からないニヤ!でもボクは絆石の代わりを果たすことが出来るのニヤ!今はその事実が重要なニヤ!ボクを受け入れるのニヤ!そして宝玉の力を開放するのニヤ!」

「分かった、それでこの状況を打開出来るっていうのならそれで充分だ!来いッ!」

突如として全身から眩い光を放つシャイナス。

やがて光の粒子と化したシャイナスの肉体は、コモンドの全身を包

み込んでいく。

「うおおおおお!!」

「何だこれは!?ぬうつ、風が強くて近寄れんっ!?」

BGM：大敵への挑戦

光に包まれると同時に、黒い小規模な竜巻に覆われ姿の見えなくなったコモンド。

やがて竜巻が消えると、そこに立っていたのは鈍く輝く美しくも力強い鎧に身を包んだ戦士だった。

「き、貴様！改造絆石無しで宝玉の力を使いこなしたというのか!?それにその姿は、まさか!」

姿を変えたコモンドに恐れ慄くフルルガ。

「ハアッ！」

「何!?早、ぐわっ!!」

変身したコモンドが繰り出したパンチは威力、スピード共に先ほどの比ではなかった。

フルルガは咄嗟に右腕の盾で防ぐが、防ぎきれずに吹き飛ばされ地面を無様に転がった。

「な、何なのだ?今のパワーは?吾輩をこうも簡単に吹っ飛ばすとは。まだ腕に痺れが……。」

呆氣にとられるフルルガを他所にコモンドは右腕をかぎす。

すると右腕から雷光がほとぼしり、やがてその光は一振りの太刀へと姿を変えた。

「その武器！その太刀は!!鬼斬破!?間違いない、貴様は太刀のウエポン、風翔のフルクシャ!!旧ウエポンズの創始者にして、最初に世界を守った伝説の男と同じ装備を、こんな男が!?そんなバカな!?これは何かの間違いだ!」

怖気づいたのか、無意識に後ずさり始めるフルルガ。

「いや、吾輩は鬼教官のフルルガ!新兵に負けることなどあつてはならんだ!それに貴様はたった今宝玉の力を理解したばかり、そんな

青二才に吾輩が敗れることなどありえん！」

しかしフルルガは逃げ腰になっていた自分に気付くと、自らを鼓舞し再び向かってきた。

「どりゃあ!!」

キーン!!

フルルガの放つ渾身の一撃。しかしそれもコモンドの鬼斬破に一瞬で受け止められ、そのまま鏑迫り合いとなる。

「力を込めているのにビクともせん!どうなっておるのだ!?!ぬおっ!?!」

コモンドが鬼斬破を振りぬいたことで力負けしたフルルガは大きく弾き飛ばされた。

コモンドは体勢を崩したフルルガに左腕を向ける。

「烈風っ!!」

「ぬわあ!な、何だこの竜巻は!?!」

コモンドの左腕から放たれた空気の塊は、フルルガに直撃するとその身を拘束するように竜巻へと変わる。

「いくぞっ!狩技・風翔雷撃気刃斬!!」

コモンドの握る太刀、鬼斬破から激しい紫電が放たれる。

そしてコモンドはフルルガ目掛けて太刀を構えたまま高速で突進……否、一足で真っ直ぐに跳躍すると、一瞬でその身体を突き抜ける。

そしてフルルガの背後に着地して太刀を鞘に納めると同時に、フルルガは竜巻もろとも縦に両断された。

「わ、吾輩がっ!?!鬼教官のフルルガが、こんなヒョッコなんぞに!?!だが、これで勝ったと思うなよ?ネオウエポonzを裏切った貴様に決して安息の時は訪れん、次々と追手が現れる!これから貴様は死ぬまで闘いの日々を続けるのだ!ヌハハハ!!」

ドゴオオオオオン!!!!

フルルガは爆炎の中に包まれ、そして煙が晴れたそこには塵一つ残っていないかった。

「オレが死ぬ前に闘いは終わるさ、お前達の壊滅という形でな……。」
やがてコモンドの姿が光に包まれると、コモンドは元の姿へと戻っ

ていた。

コモンドから離れた光の粒子は一つの塊となり、シャイナスの姿へと変化する。

「悪いがシャイナス、お前の持つ絆の力をもう少しだけ貸してくれ。俺にはお前が必要だ。あいつらと戦うために、そしてルリを助け出すためにも今この力を失うワケにはいかないんだ。」

「頼まれなくても貸すつもりだったニヤ！ウエポンズの遺産を間違った形で扱うネオウエポンズは許せないニヤ。それに追手が来るならボクだって無事ではいられないのニヤ。だったらコモンドと一緒にいることが正解なのニヤ！あつ、でも美味しいものを食べさせてくれると嬉しいんだニヤ。要塞ではあいつらの目を盗んで残飯漁りしかしていなかったから、いつもお腹ペコペコだったのニヤ。」

「全く。最後までマイペースだな、お前は。」

闘いにシャイナスを引き込むことに引け目を感じていたコモンドだったが、案外乗り気な様子シャイナスに逆に毒気を抜かれてしまう。

「あつ、そうだ!!」

「何だ、急に大声出して?」

「とつても大事なことを忘れていたニヤ!」

「とつても大事って何だよ?」

「それはコモンドの新しい呼び名を考えないといけないってことニヤ。」

「呼び名あ?」

「そう、変身したコモンドの呼び名ニヤ。」

重要な話かと思いきや、シャイナスの出した提案は珍妙なものだった。

「呼び名なんてコモンドのままでもいいだろ?」

「チツチツチツ、そうは問屋が卸さないのニヤ。コモンドは悪と戦う変身ヒーローとなったのニヤ。だったら変身している際に名乗る名前が必要になるのニヤ。」

「長い間異次元にいたくせに、そんな変な知識どこから持ってきたん

だ？」

「風翔のフルクシャって呼び名はダメだニヤ、それはネオウエポンスからの呼び方ニヤ。もっとオリジナリティーのあるものを考えないといけないのニヤ。うーん………太刀のウエポン、縮めて太刀ぽんっていうのを考えてみたけど、どうかニヤ？」

「却下。」

「むう、一生懸命考えたのに！だったらコモンドも何か案を出すのニヤ！」

「新たな名前か……。」

コモンドは考える。

「クロス……ダオラ、クロス・ダオラだ。」

「クロス・ダオラ？どっから出てきたのニヤ、その名前？」

「オレがまだ幼い頃、幼馴染のルリと一緒に読んでいた、ウエポンス伝説を題材とした絵本だ。その絵本の主人公は鎧に身を包み、風の力と一本の刀を武器に悪と戦う戦士だった。その主人公の名がクロス・ダオラだ。昔のことだったんで今まで忘れていたんだが、いなくなつた幼馴染のことを考えていたら、ふと思いついたんだ。」

「クロス・ダオラかあ、コモンドがそれでいいっていうのならそれでいいけど。うーん、太刀ぽんの方がセンスあると思うニヤ。」

「何度でも言うが、それは却下だ。さて、さっさと帰るぞ。」

「ああ、待って！置いてかニヤいで！」

歩き始めるコモンドと、慌ててその肩に飛びつくシャイナス。

二人の影は夜の闇に消えていった。

曙ちやんと風翔剣士5

BGM：トラベルナ

『ニャンニャン♪』

壮大なオーブニングとは打って変わって、可愛らしい歌声と共に笑顔でコミカルなダンスを踊るコモンドとシャイナス。

シリアスな雰囲気吹き飛んだわ……。

「あの鬼教官のフルルガつてもしかして……。」

「ご察しの通り、あの人はクロオビ鎮守府の提督さんですよ〜！」

「やっぱりね……。」

「あの人は番組のスポンサーの一人なんだけど、せっかくだから吾輩も番組に出たい！ってゴネたらしくてね。ついでに宣伝のために自分の鎮守府の名前の付いたクロオビソードを武器にしたんだって。一話でのやられ役っていうのには不満もあつたみたいだけどね。」

「ワガママね、それに演じるのが大事って言ったくせに全然演じてないじゃない。」

「演技がヘタクソ過ぎたのと、本人のキャラが濃かったからそのままでいかせたらしいよ〜。お陰で棒読み演技にならなかつたから結果オーライなんだぜ。」

「しかし本当に提督がアクターしてるのね。」

「漣が今朝に見ていた回に出ていた笛使いのネオウエポンズがいたでしよっ〜。」

「ああ、確かジジイ言葉で話していたあのキャラ？」

「あの人、ジャンボ鎮守府の提督さんだよ。」

「はああああ!？」

ジャンボ鎮守府の提督って、いつもボーン装備一式で過ごしている青いパンツ丸出しの変態骨男じゃない!？」

確かに凄腕の笛使いとして有名だけど、あの人はジジイじゃなくて

おっさんでしょ。

あの喋り方も演技だっていうの？かなり天然入ったアホだって聞
いてるんだけど、よく演技出来たわね。

「さて、そろそろエンディングが終わるから次回予告を見るぞよ！」

次回予告

ネオウエポonzと戦うことを決意したクロス・ダオラ。

彼の前に姿を現したのは黒い鎧に身を包んだ謎の男。

闘いに不慣れなコモンドを容赦なく攻め立てる男だったが、自分に
有利な状況にも関わらずその場を去るのであった。

男の正体とその目的とは？

次回「狂竜のブラック・マガラ」

オレはネオウエポonzを滅ぼしてオレ自身の力を証明する！

「……謎の男なのにブラック・マガラって言っちゃってるし、目的も力
の証明って明言してるじゃない。」

「ぼのたん知らないんだ？まあ日頃からアニメや特撮ドラマ見ないな
らしゃーないか。こーいうのは次回予告あるあるなんだよ、城之内死
すってね。」

じよーのーちって何よ？

こつちが知らないのに知ってる前提で話し進めるのやめてよね。

「それじゃあ2話見よつか？」

「えっ？次の話も見ろの？」

「そりやそうでしょ、だってこれ30分番組だよ？今終わりにしたつ
てまだ滅茶苦茶時間あるよ？」

もうかなり長い時間見たような気がするんだけど、まだ30分しか
経ってなかったの???

具体的には前回から一ヶ月近く経ったような気がするんだけど
……。

このあと滅茶苦茶観賞会した。

「ふーっ、ぶっ続けで見たから流石に疲れたあ〜。」

今朝と同じように大きな欠伸をする漣。

あたしもほとんど動いてないから全身バツキバキよ。

「それでぼのたん、見てみてどうだった？」

「そうね、思っていたよりは悪くなかったわ。」

「ウエヒヒヒー！もう、ツンデレなんだからあ。素直に面白かったっ

て言えばいいのに！」

「うぐっ……。」

ええ、そうよ！熱中して見ていたわ！没頭していたせいでお昼ご飯食べるのも忘れたの、悪い!?

「ねえ、竜とかその力を借りる戦士とか喋るネコとか異世界とか、そもそもウエポonzの伝説とか色んな設定が出てきたけどこれって元ネタあるの？オリジナルにしては思った以上に設定がしっかりと作り込まれていたのが気になったのよね。」

「あー元ネタね。元ネタはモチのロンでありますよ〜。」

「本当!?!ねえねえ、じゃあウエポonzって実在したの!?!」

「えらい喰いつきよう……、もう誤魔化せてないよ。」

「あっ……。」

「えつと、それでね。流石にウエポonzが実在したかどうかまでは知りませんよ?でもね、この島にある遺跡や古文書、たまに発掘される錆びた武器や風化した武器、そして断片的に見つかる謎の生物の化石。これらの事実からかつてこの島には巨大なモンスターがいて、それを狩っていた狩人がいたんじゃないかなーって考えられてるの。そしてそれを補助したネコのような存在についてもね?今でもこの島には不思議な生き物がどんどん新発見されているし、漣達が使っている武器防具も竜人妖精さんの知識で当時のものを再現したもの

だったら辻褄が合うっしょ？この番組はそんな研究と考察を元に作られているから、同じように深海棲艦を狩ってる狩娘には受け入れられやすいのかもしれないね。」

なるほどね。モンスターを狩る狩人と、深海棲艦を狩る狩娘。

設定に違和感を感じにくいと思つたら、あたし達が普段からやってることと似たところがあつたから自然と受け入れられたのね。

「それにこの島はある日突然現れたっていうし、異世界も実在するかもしれないね。もし異世界があるのなら、そこでは今でも狩人がモンスターと戦つてたりして？うーん、実にロマンを感じちゃいますよ！」

「じゃあクロス・ダオラみたいな戦士も本当にいる可能性があるのね！……あつ。」

「ハア、なんも言えねえ……。」

漣の呆れ果てた目線がただひたすらに痛い。

「まあぼのたんが気に入ってくれたのならそれでいいや、そんで気に入った登場人物はいた？」

「気に入った登場人物ねえ。」

「気に入った登場人物がいると視聴が更に楽しくなるよ！その入れ込んだキャラが作中から永久退場しちゃうとクツソ凹むけどねえ……。」

ネオウエポンズの信奉者にして、ネオウエポンズ最高戦力の一人でもある超絶のフルカイザー。

演技がへたっぴでどう見ても役者本人そのものの鬼教官のフルルガ。

まだ戦闘に不慣れなクロス・ダオラを追い詰めたものの、ブラック・マガラのかませ犬となつてしまった轟砲のフルレックス。

その強い精神力でネオウエポンズの支配に打ち勝つたものの、敢えてクロス・ダオラに戦いを挑むことで、己の命と引き換えにクロス・ダオラに闘いの覚悟を伝えた老兵、型落ちのフルクック。

卑怯な手段を使ったことでクロス・ダオラの怒りを買った狡猾のフルゲリヨス。

盾と矛のコンビで襲い掛かってきた鉄壁のフルザザミと切断のフルギザミ。

最強の太刀と名高い鬼斬破を狙い、クロス・ダオラに挑んだ影縫いのフルラギア。

高い素質を持っていたものの、己の力を過信して努力することを知らず、未熟な自分を認められなかった磁斬鎚のフルルコ。

愛するフルカイザーを組織の王にしようとするが、組織への反逆行為としてフルカイザー自身に粛清され、絶望しながら散っていった渴愛のフルエンプレス。

己の運を味方につける能力を武器にクロス・ダオラに挑んだ激運のフル夜叉。

そしてこの作品の主人公であるクロス・ダオラと、ライバルのブラック・マガラ。

可愛らしいだけでなく、謎が多いマスコット枠のシャイナスとヴェルガイン。

この他にも数多くのキャラクターが登場した、そしてこれからも新しいキャラクターが続々登場するのだろう。

「そうね。あたしが一番気に入ったのは……やっぱりコモンドかな。」
「おお、主人公が好きだなんて王道中の王道！ だけど王道をニワカ扱いして認めないへそ曲がりよりは、よっぽど好感が持てますねえ！ 普段はへそ曲がりな態度をしてるけど、本当は素直なぼのたんらしい選択だね〜！」

「誰がへそ曲がりよ!? あたしは普通よ、普通！」

「ほーん? まあいいや。それで、コモンドのどの辺が気に入ったの? 顔かあ? 長身でスタイルのいいイケメンだもんね。それともアクション? バリバリ動けて格好いいよね。はたまた演技力? 演技も一流で、これだけ持つてんのに本業は俳優じゃないとか、本職の人間に喧嘩売ってんじゃないやねって思わない? それにクールなように見えて、熱血漢で情に厚いところもいいよねえ。まさに主人公ってカンジ〜！」

「それもあるけど、あたしが一番気に入ったのは声かな? 聞いてるとなんか落ち着くっていうか、何故かずつと聞いていたって思っちゃ

うのよね。」

「声、声ねえ。ふうーん。そつかく、声ですかあ……。」

「何よ？声が気に入ったことになんか文句あんの？」

「べつにつにく、うふふふふ。」

！
コモンドの声が好きって言ったなら何故か漣に笑われたわ、ムカつく

声が好きなのが可笑しいというよりは、あたしがあの声を好きってことが可笑しいって感じね。

「さあて、次はどうしようか？クロス・ダオラ以外にも録画した番組は多いからねえ。狩猟少女なるが・クルガ見る？低年齢の女の子向けアニメに見えるけど、めっちゃ重いストーリーで話題になった名作だよん。」

「今日はもう見ないわよ。」

「だったらおぱんちゆ大天使モモロウ見る？かなり人を選ぶ怪作アニメだけど、ハマる人はどっぷりハマるらしいよ。まあ漣はそこまでハマってなくて、惰性で見てるだけなんだけどね。」

「だったら見るのやめればいいじゃない！それにあたしはもう見ないって言ってるでしょ！二人揃ってお昼ご飯食べてないんだから、い加減切り上げてさっさと早めの夕ご飯に行くわよ！」

「ふう。分かったよお、曙ママン。」

だあれが曙ママンよ!?

今朝と同じように漣と一緒に食堂にやって来た。

今朝と違うのは漣だけじゃなくて、あたしもお腹が空いているということ。

夕食の時間としては少し早めだけど、昼食を抜いたから二人ともお腹ペコペコよ。

「あ、二人とも来たんだ。」

食堂に着くと既に朧がテーブル席に座っていた。

「ぼーろ、帰ってきてたんだ！一緒に座りませ！」

返事も聞かず、朧の向かい側の席に遠慮なくドカツと腰掛ける漣。

朧は気にしていないようなので、とりあえずあたしも漣の隣に座る。

「それでナントカカントカに行ってきたんだよね？どうだった？」

「うん、バッチリだったよ。」

漣の適当極まりない意味不明な質問、しかし意味が理解出来たのか朧はサムズアップを見せる。

「ザザミソいっぱい集まったから、それで料理を作ってもらってるんだ。せつかくだから漣ちゃん和曙ちゃんにも分けてあげるね。」

そういえば一人ザザミソ祭りとかいうのに行くって言ってたわね。

てつきりその場を逃れるためのまかせかと思ったけど、この様子だと本当に行ったみたいね。

「そういえば潮さんは？」

「さあ？そろそろ帰ってくる頃だと思うんだけど……。」

ドカドカドカドカ……。

何よ、騒がしいわね？廊下の方から誰かが走り回っているような音がするわ。

下品ね。廊下を走るなどまでは言わないけど、もうちよつと静かに出来ないものかしら？

「ぎゃあああああ！待って、止まって！そっち行っちゃダメだよお！」
今聞こえてきたのって潮の声？

ドカドカドカドカドカドカドカドカ!!

足音が近づいてくる？

潮の声が聞こえてきたことといい、この足音つてもしかして!?

ドカドカドカドガッ!!

「ワンッワンッワンッワンッ!!」

食堂の扉を体当たりで強引に開き、中に突入してきたのは白と黒の大きな二頭の犬……のようなナニか。

体高だけで1メートルを超えており、体長に至っては最大の犬種として有名なグレート・デーンをも上回っている。見た目は犬や狼に似ているが、ハッキリ言ってトラやライオン並みの巨体である。

そんな巨大な二頭が勢いそのままにこちらへ向かって一直線に走ってくる……ってこっちは来んな!!!

「ぎゃあああああああ!!?!」

「ハッハッハッ!!」

「ワウワウワウ♪」

二つの巨体に飛びつかれて椅子ごと倒れるあたし。ちよっ、顔っ！舐めないでっ!!

尻尾は物凄い勢いで左右にブンブンと振り回されており、それに触れたイスやテーブルは簡単に吹き飛ばされていく。

「あっ、帰ってきたんだ。お帰りーんこっ!」

「この子達、妙に曙ちゃんのこと好きだよねえ。」

二頭の飛びつきに巻き込まれないようにしれつと避難していた漣と隴が戻ってきて、二頭を優しく撫でる。

「ぜえぜえ……。ああ、やっぱりこうなっちゃった。曙ちゃん大丈夫?」

汗だくになりながら食堂に入ってきたのは潮。

「ちよつと潮、わぶっ!…こいつらをここのまで、ひやうんっ!入れてんじやないわよ!クシユンツ!!」

顔を舐められたり、鼻先を擦り付けられて喋りにくい。

しかもこの二頭、見た目によらず体温が低くまとわりつかれると寒いのだ。

普通動物というのは体温が高く触れると暖かいというのが普通だ

が、この二頭は健康体にも関わらず妙に体温が低い。

暑い日にはクーラー代わりになるが、こんなふうには押し倒されて顔を舐められると身体の芯まで冷えてくる。

毛皮を被った氷の塊のようなものだ。

「ごめんね、急に走り出しちゃったの。ほくら時雨ちゃん夕立ちちゃん、こっちにおいで。」

手をパンパンと叩きながら二頭を呼ぶ潮。

二頭はそれに反応してあたしから離れると、潮の傍まで行きその場にちよこんと座った。

そう、時雨と夕立というのは、この白と黒の犬モドキの猛獣のことである。

言うまでもないが黒い方が時雨であり、白い方が夕立である。

潮が鎮守府の近くの沼地で拾ってきたこの二頭。

拾った直後は二頭とも全長20センチくらいの小さな子犬だったのだが、あつという間にここまで成長してしまった。

頭から尾に掛けて生えている鬣には二列の鋭い棘が並んで生えており、これに刺されるとかなり痛い。この棘は簡単に抜けて、そしてすぐに生えてくる。棘を周囲にはら撒くこともあり、巻き込まれた物体はあつという間にハリネズミのようになってしまう。

大声で吠えると衝撃波が発生し、ガラスのコップ程度なら一瞬で粉々にしてしまう。当然そんなものを至近距離で喰らったら狩娘もただでは済まず、骨が軋み、脳が揺れる。

更に圧倒的な肺活量を生かして、口から空気の塊を砲弾のように発射してすることもある。この空気弾は、木製の扉くらいなら簡単にぶち抜く威力がある。

鋭い牙と鉤爪も生えており、玩具として与えたサッカーボールは一日経たずしてバラバラに引き裂かれた。

当然見た目通りの巨体であり、それに見合うだけのパワーとスピードも兼ね備えている。大の大人でも押さえきれものではない。

そして異常に低い体温。変温動物とかそんなレベルではない、文字通り冷たく寒気のする身体。

しかも未だに成長を続けているようにも見える、いずれ全長何メートルになるのか想像もつかない。

そのような猛獣が鎮守府に二頭もいるのである、油断も隙もあつたものじゃない。

こんな手のつけようのない怪物がいるにも関わらず、鎮守府内で目立った問題が起こらないのは時雨と夕立の知能が非常に高く、また基本的に潮に対して従順だからである。

自分を拾ってくれた潮を親と思っっているのか、それとも恩義を感じているのかは知らないが潮の言うことはよく聞く。

潮も自分が拾った責任を感じているのか、はたまた単純に張り切っているだけなのかは知らないが、二頭の躰に余念がない。

この二頭を拾ってから潮の部屋には犬の飼育法に関する本がたくさん増えた。この二頭が犬なのかは不明なままだが、犬と同じような感覚で躰けられるらしい。

しかしそれでも力の差は圧倒的であり、潮が二頭に振り回される光景は日常茶飯事である。

今回二頭があたしに飛び掛かってきたのも、潮が二頭を止められなかったからだろう。

二頭は鎮守府のメンバー全員にもある程度懐いたり馴れているのだが、潮の次に懐いているのは何故かあたしである。世話した記憶ないんだけど懐く要素ある？

漣曰く『動物っていうのは本能的にそういうのが分かるんだよ、良かったねくぼのたん。』とのことだが全然良くない。

食事前だつていうのに顔面はベトベトで服はシワシワ、そして身体は冷え込んだわ！

「あーもう、酷い目に遭ったわー!」

「でもいつもの四人でご飯食べられたんだからよかったじゃん。ザザミソも滅茶苦茶ウマー♪」

あの後、潮は時雨と夕立を裏庭の犬小屋に繋いできた。

その間にあたし達は散らかった食堂の片付けをする、あたし達が散らかしたワケじゃないんだけど……。

そしてようやく落ち着いて四人で夕食にすることが出来た、臙の獲ってきたザザミソはとつても美味しかった。

食事が終わった後、潮は時雨と夕立の餌やりに行き、臙もそれに付き添った。

またしても二人きりになったあたしと漣は、お互いの自室を目指して一緒に帰っているところよ。

「それに当面の目標も達成出来て、漣的には大満足なんですよ!」

「あたしは頭がおかしくなったのかと疑われたけどね……。」

あたしが漣のオススメするテレビ番組を半日近く観ていたという事実に、臙と潮からは奇異の目で見られた。

それでもクロス・ダオラの面白さを熱弁する漣に根負けしたのか、多少なりともあたしが漣の肩を持つということが気になったのか、二人はクロスダオラを観てみる気になったらしく、漣は二人の次回の予定を詳しく聞いていた。

「それにしてもコモンド役って誰なんだろう?」

ふと気になった疑問。

クロス・ダオラは狩娘の関係者達で作っている番組だから、コモンドもどこかの鎮守府の提督か誰かだと思っただけで、あたしはコモンドの顔に心当たりがない。

「ねえ漣、あんたなら知ってるんじゃないの?コモンド役の人のこと。」

「ん〜?まあ知ってるっちゃ知ってるよ。でもね……。」

「でも何よ?」

「世の中には知らない方がいいこともあるんだよ、正体知っちゃったら面白くないでしょ?それに知らない方が想像の余地があるから、色々妄想出来て夢が広がりめぐってもんですよ!」

「何よそれ。」

あたしに妄想癖があるみたいな言い方やめてくんない?

ん?廊下の向こうからやってくる、あの独特な頭の形をした人影は……。

「ホッハ!」

「あんた、バケツ提督!」

「ご主人様じゃないですか、お帰りなさいませ〜!」

こいつも帰ってきていたのね。

「あんた、仕事の方はちゃんと終わらせたんでしょうね?ドンドルマの提督に迷惑掛けてない?」

「ホッハ!ハアツ!」

「あああああ?!!やっぱり意味分かんない!!」

「ピヤアウ!」 !!

あまりの意味不明さに頭を抱える。

「もう付き合ってらんない!さっさと執務室に帰りなさい!!漣、あたしは先に帰らせてもらおうからね!!」

「あつ!待ってよ、ぼのたくん。」

我慢ならず大股で歩き去る、漣の引き留める声が聞こえるけどそんなの無視よ無視!

「ぼのたん行っちゃった。」

「ホッハ……。」

少し落ち込んだようなご主人様の声。

「大丈夫、ぼのたんはご主人様のこと嫌いじゃないよ。むしろ好きだから、こうして会うたびに声を掛けてくれるんですぞ。」

「ホッハ。」

ぬっふっふっ、ご主人様ったら照れてるね♪

「そういやぼのたんもクロス・ダオラのファンになったんだって。特にコモンドがお気に入りで、一番好きなのは声だっつ〜。」

「ホハッ!？」

露骨に動揺するご主人様。

「あ、ご主人様。ハイメタUヘルムの隙間から金髪がはみ出てますよ?」

「ピャアウ!？」

慌てて被ったままのヘルムをまさぐるご主人様、でもね……。

「サーセン、今の嘘!」

「ホハア!？」

「メンゴメンゴ、許してちょんまげ♪」

「ピャアウ……。」

「でも良かったじゃないですか。こうしてコモンドにファンが増えて。今後はぼーろと潮たんにもクロス・ダオラの視聴者になってもらう予定なんですけど、二人の一番好きなキャラがコモンドになってくれるとご主人様も嬉しいですよ?」

「ホッ、ホッハ。」

「ちなみに漣もコモンドが一番好きですよ?」

「ピャアウ!？」

「ふふふっ♪」

! しばらくは漣がご主人様を独占させてもらいましょう、役得役得ウ

でもいずれはテレビの中のコモンドとしてではなくて、ありのままの提督として素顔でみんなと普通にお喋りが出来るようになる日が来るといいですね。

ね、
ご主人様♪

ここまでの登場人物3

天龍：無事にへ級を討伐し、念願の天龍シリーズの防具と天龍刀という例の太刀を作製出来るようになった我らが主人公。

これでもうチグハグ装備とはオサラバだ。（作製出来るようになっただけで、作製出来たとは言っていない。）

太刀という武器の仕様上、仕方のない面もあるが対人戦は非常に苦手。

年下の卯月にいいようにあしらわれたので、若干フラストレーションが溜まっている。

龍田：天龍が一人前の狩娘として成長出来るように手を尽くす良出来た妹の鑑。

しかしただ成長させるのも面白くないので、存分に酷い目に遭ってもらおうと考えている性根の曲がった妹の屑。

わざわざ卯月にガンランスを用意するように頼んだのは、他ならぬ彼女。

弥生との狩りの間も天龍が吹き飛ばされるのを想像し、ほくそ笑んでいた狩娘のやべーやつ。

卯月：バルバレ鎮守府からやって来た、自他共に認めるいたずらっ子。

幼い精神年齢故に波長が合ったのか、ゆうた提督の影響をモロに受け、一時期はとんでもない核地雷狩娘と化す。

しかし新しく着任したバルバレ提督の尽力により、真つ当な狩娘と

して更生した。

手癖が悪く、尚且つ好奇心旺盛なので開発中の新技術を勝手に持ち出しては試運転もせずにいきなり狩場で使用する困った子。しかしそれにより開発が進んでいる面もあるらしい。

また手先が器用なので自前の調合レシピも数多く持っているが、大抵の場合ロクなモノは完成しない。

サブタイトルをうーちゃんさんで統一していたのに4話だけ間違えて卯月ちゃんて投稿してしまったが、面倒臭いので修正されていないという可哀想な狩娘。

弥生：バルバレ鎮守府からやって来た、ごく普通の狩娘。

数少ない卯月の手綱を握れる人物でもあり、ストッパーとして同行していることが多い。

マイペースな性格をしていたせいか、ゆうた提督の影響を受けなかった数少ない狩娘。

しかし自己主張をしたり自分から動くタイプでもなかったので、卯月の地雷化を防ぐには至らなかった。

バルバレ提督：バルバレ鎮守府に着任した新しい提督。

もともとは連絡船の清掃員であり、提督はおろか鎮守府関係者ですらなかった。

しかし超大型深海棲艦に立ち向かった勇氣と、そのアタリハンテイ力に対する適性を団長に見出され、提督としての勉強や訓練を何一つ積んでいないにも関わらず提督になった。

インナー姿で超大型深海棲艦に立ち向かった逸話の独り歩きと、香取の描いた異常にまつ毛を盛られた似顔絵のせいで、本人を詳しく知らない人からは野蛮人か何かかと勘違いされている。

着任からしばらくは装備はブレイブシリーズを着用していたが、ある日突然ナルガテンプレを着用し始めた。

網目状の奇妙な服とドクロの仮面というトンデモファッションにより、まつ毛特盛のパンツスタイルの方がマシだと思えるようになってたら君も立派なパンツマンだ！

なおこの装備は同じバルバレ鎮守府の狩娘達は普通に受け入れたが、写真を見た天龍はドン引きした。

モデルとなったのはMH4のオープニングに登場する操虫棍のハンターであり、ルックスもそのまんまである。

団長：バルバレ鎮守府の元提督。

元々は艦娘を指揮する普通の提督をしていたが、人手不足を理由に狩娘の提督としてカリユード諸島に派遣された。

しかし提督と呼ばれるのは性に合わないようで、鎮守府のメンバーには団長と呼ばせている。

陽気で前向き、それでいて思慮深く、何より懐深いため人望があり狩娘達からは慕われている

しかし肝心の本人にアタリハンテイ力学の適性が無かったため、狩娘達の戦果が上がらず歯痒い思いをしていた。

無類の酒好きだが、酒が入った後はよく物を無くすらしい。

モデルとなったのは我らの団の団長、というかほぼ本人。お前さんなら出来る出来る！はっは！

船長：連絡船の船長を務めているベテランの船乗り。

ハゲ……ではなくスキンヘッドが特徴的な大男。

海の男らしく荒っぽく豪胆だが、猪突猛進の考え無しではなく柔軟性も併せ持つ男。

長年の経験から舵を取らせれば右に出る者はいない。

また指揮力にも優れており、彼の指揮を受けた船員の無駄のない動きは目を見張るものがある。

その実力はアタリハンテイ力学に適性が無いのを団長に惜しまれ

るほど。

バルバレ提督を最初に拾ったのも彼であり、将来必ず大物になると感じていた。

モデルとなったのはMH4のオープニングに登場するハゲ……スキンヘッドのガンナー。

元ネタに準ずるのであれば同じくハゲ……スキンヘッドでよく似た顔の兄弟がいるのかもしれない。

香取：バルバレ鎮守府の秘書艦を務める狩娘。

たまにお酒が入って使い物にならなくなる団長の代わりを務め、役に立たないどころか足を引っ張ってばかりのゆうた提督の尻拭いをし、提督業に不慣れなバルバレ提督のフォローに入る秘書艦の鑑。

また戦闘力もそれなりにあるが、デスクワークが忙しいので滅多なことでは出撃しない。

大の占い好きであり、朝のテレビ番組の占いコーナーの視聴は欠かさない。

占いで見た運命の出会いを信じ、ラッキーカラーの緑色を用意した筋金入りである。

超大型二級戦の最中にバルバレ提督に助けられ、占いによる相乗効果もあり恋に落ちた。

モデルとなったのは我らの団の看板娘ソフィア。装備も同じく緑色のエコールシリーズ。

眼鏡と髪型繋がりという安直さで決定した、でも結構似合っていると
思う。

使用武器がチャージアックスというのもMH4の新武器繋がりからである。

金剛：バルバレ鎮守府に所属する狩娘であり、鎮守府のエースを務める。

ガンランスを好んで愛用するガンランサー。

竜撃砲を発射するときの掛け声は勿論 Burning Love

!!

鎮守府のエースという立場だが単騎で無双することは少なく、むしろ大盾による鉄壁の守りを生かして他の狩娘のフォローに入ることが多い。

団長が提督だった初期の頃から鎮守府に所属していたためか逆境に強い。

超大型二級戦の最中にバルバレ提督に助けられ恋に落ちた。

狩娘になっても金剛という艦娘の例に漏れず恋愛には積極的だが、鎮守府のエースとして他の狩娘の面倒を見る必要があるので、秘書艦として提督と距離の近い香取や、たまにしか来ないものの一発が大きい山城に比べると提督へのアピール合戦は出遅れ気味。

睦月：バルバレ鎮守府に所属する狩娘であり、鎮守府の切り込み隊長。

ポジティブな性格をしており、チームのムードメーカー。

鎮守府にいる駆逐艦狩娘、いわゆる年少組のまとめ役としても頼りにされている。

ゆうた提督がいなくなった後に鎮守府を立て直したのは勿論バルバレ提督だが、特にマナーの酷かった駆逐艦狩娘を更生させられたのは彼女の協力も大きい。

得物は操虫棍であり、猟虫はガルーヘル。現在ヴァンリエールを指して育成中。

山城：バルバレ鎮守府ではなく、ドンドルマ鎮守府に所属する狩娘。筆頭狩娘というチームの一員であり、筆頭ランサーを名乗る。

団長とは旧知の仲であり、まだ団長が普通の提督をやっていた頃からの付き合い。

艦娘から狩娘への転向という珍しい経歴の持ち主であり、戦闘経験豊富なベテランの狩娘。

一方で男性との付き合いはほとんどなく、男性への免疫は皆無である。

男性との身体的接触も団長と握手をした程度であり、肩を触られた経験すらない。

その結果、半ば自業自得とはいえ事故同然の形でバルバレ提督にハグとキスをしてしまい彼の伴侶となることを決意する。

結局その場では香取と金剛に阻止されたが、たまにバルバレ鎮守府にやって来ては提督とデートをしている。

男性免疫が皆無だったせいで非常にチョロいが、提督からの好感度も一番高く、現状ヒロインレースではトップである。

不幸なことに定評があり、何もしていなくても不幸の方から舞い込んでくる特異体質の持ち主。

しかし提督と親密になったのも結果的には不幸の積み重ねによる運命の悪戯なので、実際は運がいいのかもしれない。

自他ともに認めるシスコンであり、姉である扶桑に会いたがっているが不幸体質のせいか一度も会ったことが無い。

なので自分のオトモ連装砲ちゃんである筆頭オトモの名前を『姉さま』にしている筋金入り。

とはいえ流石に『扶桑』と直球で名付けるのは憚られたらしい。モデルとなったのは筆頭ランサーだが、あのナイスミドルがどこを

どう間違ったのかヒロイン化してしまった。

加工担当：バルバレ鎮守府の工房で武具の加工作成を担当している竜人妖精さん。

性別は男性。カリユード諸島では狩娘に男性がいるように竜人妖精にも男性がいるようだ。

普通の竜人妖精より大柄だが、竜人妖精自体が小さいのでやっぱり小さい。

バルバレ鎮守府立ち上げ初期からいる古参メンバーで、団長との付き合いは秘書艦の香取よりも長い。

寡黙で感情を表に出すことも少ないが、怒らせると大変なことになるらしい。

モデルとなったのは我らの団の加工担当の竜人、体の大きさ以外はほぼ同じ。

あの大男がそのままの姿で手のひらサイズまで小さくなったと考えるとちよつと面白い。

ゆうた提督：本部から送られてきた団長に代わるバルバレ鎮守府の新しい提督。

アタリハンテイ力学に適應しているが、提督としての教育どころか一般教養があるのかすら怪しいレベルの子供。

提督らしいことは何一つせず、提督の立場だけを利用してワガママの限りを尽くした。

最終的にバルバレ提督が団長にスカウトされたことでお役御免となり、本部へ送り返された。

素質自体は悪くなかったらしく立派な提督にするため現在教育中だが、相変わらずのワガママと癩癩で周囲を困らせているらしい。

提督の教育より先に、まずは性格を矯正して一般常識を叩き込むべきなのかもしれない。

外見は提督の服装としてお馴染みの白い海軍軍服の子供サイズを着た子供。

いわゆる二次創作でよく見掛けるシヨタ提督のようなものだが、ゆうた提督はそのような可愛らしいものではない。

幼稚で生意気、しかし年相応でもある小憎らしいガキンチョである。

超大型ドス二級：バルバレ近海に突如として出現した超大型深海棲

艦。

通常のドス二級は複数の二級を従えて中規模の群れを形成しており、群れ全体で一斉に口から吐き出す睡眠液を使い相手の戦闘力を奪う狡猾な深海棲艦である。

しかしバルバレに現れたドス二級は規格外のサイズを誇り、全長は100メートルを優に超える。

どうしてここまで巨大化したのかは不明だが、巨大な見た目に見合った強大な力を持っており、鬼級や姫級ですら相手にならない。

この巨体にとって小細工同然の睡眠液を吐き出す能力は不要となったため失われており、群れを率いる必要も無くなったため二級を呼び出すこともない。

その巨体と力でバルバレ近海を支配していたが、今までバルバレ鎮守府の狩娘達は実力不足で二級が縄張りとしている付近にまで近づくことがなかったので存在に気付くことはなかった。

しかし連絡船が二級の縄張りに侵入してしまい、その連絡船を攻撃するために浮上してきたことで存在が発覚した。

圧倒的な力で連絡船の船員とバルバレ鎮守府の狩娘を苦しめたが、バルバレ提督の奮戦により角を折られて撃退された。

撃退されただけであり討伐はされていないので未だに生存しているものの、人間一人に敗北したことが堪えたのか以前ほどの活発な活動は見られない。

カリユード諸島において初めて発見された超大型深海棲艦であり、これにより対超大型深海棲艦用の迎撃兵器が開発されていくことになる。

モデルはドスバギイ及びダレン・モーラン。

へ級：カリユード諸島海域全般でよく見掛けられる人型をした深海棲艦。

右腕から発射される火球が最大の武器、顔全体を覆うマスクは音を反響する性質を持っているため大きな音は苦手。

ドスイ級よりは強いが、それでも人型をした深海棲艦の中では最弱の部類に入る。

そのためこいつを一人で狩ることが出来れば初心者卒業とされる。

また強力な人型深海棲艦と動きにある程度の共通点が見られるため、へ級の動きに慣れておけば以降の戦いを有利に進められる。

このことからへ級先生の愛称で呼ばれることもある。

モデルは言うまでもなくイヤンクック。

ここまでの登場人物4

メゼポルタ提督：全鎮守府の中でも規模、戦力共に最高クラスのメゼポルタを指揮する提督。

とても優秀な人間であり、巨大なメゼポルタ鎮守府の業務が滞りなく行われているのも彼の實力によるものである。

また戦闘力も非常に高く、下位のヲ級くらいならデコピンで気絶させられるらしい。

ハイスペックなことで知られる提督の中でも文句無しに最強の存在。

その一方でコミュニケーション能力は非常に低い。

彼の喋る言葉は誰も理解出来ず、何を喋っているのか全く分からないという致命的な欠点がある。

具体的には「ホッハ!」、「ピヤアウ!」としか話さない。

ただし台本を読んで喋る場合は普通に話せるらしい。

また常に頭にハイメタUヘルムを被っており素顔も不明である。

曙からの呼び名はバケツ提督、見たまんまである。

一説によると非常にシャイなので素顔を見せて普通に話すのが苦手であり、それ故に素顔を隠して変な喋り方をしているらしい。

本人もそれを克服するために積極的に狩娘とコミュニケーションを図ったり、素顔を晒して話すための秘密の特訓をしているそうだが詳細は不明である。

漣曰く、髪は金髪。

装備はお馴染みバケツテンプレ、もはや説明は不要だろう。

漣：メゼポルタ鎮守府で最古参の狩娘であり、秘書艦を務める。

普段はおちゃらけているが秘書艦を任されているだけのことはあ

り、とても優秀な狩娘である。

それと同時に戦闘力も非常に高く、最強の鎮守府の最強の狩娘と呼ばれているらしい。

鎮守府内で唯一提督の話す言葉を理解出来る狩娘であり、キャラクターボイス07検定一級の持ち主。

提督語の通訳は彼女の仕事であり、いくら提督が優秀とはいえ彼一人では他の狩娘と言葉が通じないので、彼女抜きでは鎮守府の運営もままならない。

また鎮守府内で提督の秘密を知っている唯一の人物でもある。

風翔剣士クロス・ダオラの大ファンで、特に主人公であるコモンドがお気に入りのおようだ。

得意な武器は穿龍棍。

曙：メゼポルタ鎮守府に所属する狩娘、ツンツンした態度が特徴的。何を言っているのか分からないにも関わらずよく提督に突っ掛かっていくが、漣曰く提督とお喋りがしたいだけらしい。

世話焼きな性格をしており愚痴を言いながらも何だかんだで手助けしてくれたり、叱咤してくれるので漣からは曙ママンと呼ばれることもある。

趣味は釣りで、今までにカジキマグロを合計で3000匹以上釣り上げた。

その大量のカジキマグロを使って作り上げた大剣は彼女の誇りであると同時にお気に入り。

特撮番組には興味が無かったが、漣の熱意に折れて視聴した結果ドハマリした。

漣と同じくコモンドが推しキャラであり、特に気に入った点は声である。

何処かで聞き覚えのある声らしく、聞いていると安心するらしい。得意な武器は大剣。

朧：メゼポルタ鎮守府に所属する狩娘、いつもカニとヒトデを連れて
いる。

ハンターランクは漣よりも下だが、調子に乗りやすい漣や沸点の低い
曙に怖がりな潮をまとめ上げるしつかり者。

甲殻類の気配を察知出来るという妙な特技を持っており、鎮守府近
くの砂浜に潜んでいる増え過ぎたヤオザミを駆除して個体数をコン
トロールすると同時に、安全確保とザザミソの調達をしている。

最近気になったものは任務の最中に寄り道した島で見かけた、見慣
れないキノコの生えた不思議な岩。

外見上は変な形の岩にしか見えなかったが、帰りに再びその場を訪
れると岩は最初から無かったかのように消えていた。

朧は直感的にその岩にカニが関係していると感じ、いずれその岩を
調査して詳細を調べるのが目標である。

得意な武器は狩猟笛。

ちなみにヤオザミは本編でもお馴染みのあのカニだが、こちらでは
竜骨ではなく深海棲艦の外殻や艦装を背負っているという設定があ
る。

潮：メゼポルタ鎮守府に所属する狩娘、駆逐艦にあるまじき胸部装
甲の持ち主。

時雨と夕立を拾ってきた張本人で、同時に世話係を務める。

立派な飼い主になるため日々奮闘しているが、生来の控えめな性格
故かビシツと叱ろうとしてもいまいち締まらない。

また体格差がある上に二頭もいるので、散歩の際は基本的に引きず
られている。

二頭の面倒を見ることを決意した後、犬の飼育に関する本を集めて
熱心に勉強しているが、犬とは異なる未知の生物なので全てがその通
りにはいかずに苦戦しているようだ。

得意な武器はライトボウガン。

時雨&夕立：潮が沼地で拾ってきた犬のような生き物。

黒い毛皮をしているのが時雨で、白い毛皮をしているのが夕立。名付け親は潮、毛皮の色を見て直感的に命名した。

時雨は艦娘である時雨の名前を貰っているが、性別は♂である。拾った当初はフカフカの可愛らしい小さな子犬だったが、あつという間にライオン並みの巨体にまで成長した。しかも未だに成長の止まる気配は無く、まだまだ大きくなりそうである。

そこらの動物とは一線を画す身体能力と、普通の動物には見られない特殊能力を持っており、犬どころか既存の生物かどうかすら怪しい。

しかし二頭とも非常に賢く、同時に人懐こいので、噛みついたり暴れるといったことはしないらしい。

ちなみに提督は初めて時雨と夕立を見た際に非常にビックリして、意味不明なことを口走つたそうである。

提督「ホハピヤハア!!?!」

漣「かむのの……?この子達が噛むのかって言ってるんですか?大丈夫大丈夫、噛みませんよ。ご主人様って犬苦手なんですか?」

武蔵&清霜：メゼポルタ鎮守府に所属する狩娘。

先輩の武蔵と後輩の清霜のコンビで、仲が良いのかよく一緒にいる。

艦娘としては最強クラスの戦闘力を誇る武蔵だが、狩娘としての武蔵は特別に強いわけではない。

しかし狩娘として積んだ多くの経験と、大胆不敵な立ち振る舞いは戦闘力以上に非常に頼りになる。

清霜は戦艦に憧れているのは艦娘の時と同じだが、こっちは艦種が意味をなさないのと素材さえあれば好きな装備を作ってもらえるので、大和の装備と同じものを作って装備している。

装備は二人ともヘビィボウガン。武蔵は豪快に排熱噴射機構をぶっ放すのがお気に入りであり、清霜は憧れの武蔵がやっているのを真似しているだけである。

風翔剣士クロス・ダオラ：カリユード諸島で放送されている人気特撮番組。

カリユード諸島に伝わる伝承を元にした設定と、CGに頼らない高水準のアクションが評価を受けている。

美術セットのクオリティも非常に高いが、町の一角を丸々再現したりと無茶もしている様子。

世界を救った伝説の戦士ウエポonz、そのウエポonzの遺した技術を利用して秘密裏に人々を拉致し改造する謎の組織ネオウエポonz、そしてネオウエポonzに挑むクロス・ダオラの戦いを描いた作品。

ウエポonz及び、ネオウエポonzの元ネタはMHFで伝説として語り継がれているあの猟団である。

コモンド：風翔剣士クロス・ダオラの主人公。

金色の髪をした美丈夫で、非常に優れた運動神経と類稀な格闘センスを持っている。

性格は表面上はクールだが、心の中は熱く燃える熱血漢。

幼い頃から風の声を聴く力を持っており、風を通じて周囲の状況を察知することが出来た。

その能力は先祖から受け継いだ竜の力によるものであり、特にその力が強かったコモンドは龍の力を持つ者としてネオウエポonzに狙われることになった。

ネオウエポonzによって太刀のウエポンである風翔のフルクシャへと改造されたコモンドはクロス・ダオラを名乗り、ネオウエポonzの野望を阻止するため、シャイナスの願いを叶えるため、そして幼馴染のルリを見つげるためにネオウエポonzに戦いを挑むのであった。

中の人の正体は不明だが、声がメゼポルタのバケツ提督とよく似ているらしい。

名前の元ネタはメゼポルタ開拓記に登場するコモンドというハンター。

そして装備の元ネタはMHFでお馴染みの地雷装備を通り越したネタ装備であるフルクシャおにぎりである。

シャイナス：風翔戦士クロス・ダオラの登場人物。

二足歩行をするシャムネコのような姿をした不思議な生き物。

長い年月を生きているらしく自分自身に関する記憶すらあやふやになっていくが、それを気にしない前向きな思考の持ち主。

その長い年月のほとんどをウエポンス要塞内で閉じ込められて過ごしていたため、外の世界に憧れており、ネオウエポンスに捕らえられたコモンドを助ける見返りとして脱出の手伝いを要求した。

本人曰くウエポンスの関係者で、ウエポンスと交友があつたらしい。それ故にウエポンスの名を汚すネオウエポンスの所業を許せざにいる。

絆石と同等の能力を持っており、改造絆石の埋め込まれておらず宝玉の力を全て引き出すことの出来ないコモンドをクロス・ダオラに変身させるためのトリガーとなる。

その後はコモンドに厄介になる代わりに彼の戦いを手助けしていることになった。

ネコにしては異常なまでに長生きしている点や、絆石の代わりに務められる点など不思議な点が多いが、本人が覚えていないということもあり詳細は謎に包まれている。

連装砲ちゃんに着ぐるみを着せて、更にCGを合成して演じているらしい。声は別撮りである。

ブラック・マガラ：風翔剣士クロス・ダオラの登場人物。

ネオウエポンズの戦士、操虫棍のウエポン狂竜のフルゴアだったが、組織とは決別しており単独行動をとっている。

己の強さの証明と、ネオウエポンズの殲滅のために戦い続けている。

しかし世界の平和や人々の平穏については興味がなく、ただ戦うことのみが目的のようだ。

その殺意はネオウエポンズによって作られたクロス・ダオラにも向けられており、幾度となくぶつかることとなる。

装備の元ネタはMH4で地雷装備として猛威を振るつたフルゴアエイム。

ヴェルガイン：風翔剣士クロス・ダオラの登場人物。

二足歩行をするハチワレネコのような姿をした不思議な生物。

理由は不明だがブラック・マガラに付き従っており、コモンドに対するシャイナスのような存在である。

シャイナスと何か関係があるようだが、ヴェルガインもシャイナス同様に記憶喪失であり過去は不明である。

超絶のフルカイザー：風翔剣士クロス・ダオラの登場人物。

ネオウエポンズの上級戦士であり、その実力はネオウエポンズの中でもトップクラスである。

ネオウエポンズの掲げる正義を絶対的なものと盲信しており、組織のためなら自らの命を懸けることすら厭わない。

組織の利益になるもの以外には価値を見出しておらず、組織に害があると判断した場合は排除に乗り出す。

その姿勢は味方に対しても変わらず、自らのことを愛するが故に組織に対して不利益な行動をとった渴愛のフルエンプレスを眉一つ動かすこともなく粛清するなど徹底している。

元ネタはMH2のテンプレ装備として有名な超絶カイザーだが、防

具の外見は4G以降のカイザーXシリーズになっている。

鬼教官のフルルガ：風翔剣士クロス・ダオラの登場人物。

ネオウエポンズにおいては下級戦士であるランポス兵の教育及び育成を担当している人物。

教官を任されているだけあって実力はあったようだが、サボリ癖があるようで時折用もなく外に出ていた様子。

いつものようにサボっていた際に偶然組織から逃げ出したコモンドを発見し、連れ戻す為に戦いを挑んできた。

最初は生身のコモンドを圧倒したが、コモンドがクロス・ダオラに変身し本来のスペックを発揮すると手も足も出ずに敗北した。

演者はクロオビ鎮守府の提督であり、番組のスポンサーの一人だったが自分も番組に出たいと考えオーディションを受けた。

演技は下手糞にも程があったが本人のキャラが濃かったのが幸いして合格し、敢えてほとんど演技無しで本人そのまま出演することになったらしい。

装備の元ネタはガルルガシリーズであり、MHFでは地雷装備の一つとして愛されている。

ただし頭部のみガルルガフェイクになっている。

激運のフル夜叉：風翔剣士クロス・ダオラの登場人物。

笛のウエポンであり、木製の太刀のような鎧を身にまとい、同じく木製の法螺貝のような巨大な笛を武器とした高齢の男。

運に自信があり、持ち前の激運で普段ならどうということのない攻撃や罠でクロス・ダオラを苦しめた。

また雷光虫を操る能力も持っており、遠隔戦もこなす。ちなみに雷光虫は法螺貝の中から出現する。

しかし接近戦、遠隔戦どちらも半端な水準であり、実力の勝負ではあっさりと敗北した。

演者はジャンボ鎮守府の提督であり、ボーンシリーズの防具を装備した青いパンツ丸出しの男である。

普段から狩猟笛を得意としており、フル夜叉を演じる際は動きが非常にスムーズだったと好評である。

フル夜叉として高齢の男を演じたが、実際は30代である。

鎮守府の狩娘からは信頼されているものの少しアホな男であり、そのアホさ加減がボーンシリーズを着用するキツカケにもなった。

暁「暁は一人前のレディーなのよ！」

ジャンボ提督（まだ普通の恰好）「いい心構えだな。よし、部下の狩娘には負けてられんな、オレも一人前の紳士を目指すぞ！」

ジャンボ提督「……とは言ったものの何をすれば一人前の紳士になれるんだ？ こういうときは文明の利器に頼るべきだ、ググってみるか。」

ジャンボ提督「ふむふむ、変態紳士か。変態といえば昆虫や両生類が成長して姿が変わるというアレだな。つまり紳士に変態するっていうことに違いない！」

ジャンボ提督「何事もまずは形から入るべきだな。変態紳士っぽい装備か、このボーンシリーズとかどうだろうか？」

こうして青パン半裸の笛吹き男は誕生した。

装備の元ネタはMHFで地雷装備の一つとして親しまれている大仏こと夜叉シリーズであり、武器は龍木ノ古笛である。

ジャンボ鎮守府の提督の元ネタはMHシリーズのムービーでたびたび登場するボーン装備のハンターである。

ルリ：風翔剣士クロス・ダオラの登場人物。

コモンドの幼馴染の女性であり、コモンドのことを最も理解している人間の一人。

コモンドと同じく龍の力を秘めていたために、ネオウエポonzに狙われ消息不明となる。

青くきめ細やかなロングヘアースレンダーなスタイルが特徴的

な、穏やかで知的な雰囲気醸し出す可愛い系の美人。

名前の由来は瑠璃色をした髪から。

演者はユクモ鎮守府の提督であり、ルリの落ち着いた雰囲気とは裏腹に本人は天真爛漫で少し子供っぽい性格をしている、いわゆる残念な美人。

ユクモ鎮守府の提督の元ネタはMHP3公式サイトのカラクター、トモちゃん。

ちなみにこちらのユクモ提督も狩娘からはトモちゃんと呼ばれている。

最上：ミナガルデ鎮守府に所属する狩娘。

風翔剣士クロス・ダオラのオーデイションに合格し、カフェのウエイトレス役として出演することになった。

このカフェは一話以降も度々登場するため、セリフはほとんどないにもかかわらず準レギュラーのような扱いとなっている。

ちなみに応募したのは三隈であり、自分がオーデイションを受けるついでに勝手に最上の名前で応募した。

しかしオーデイションの結果、三隈は不採用となり最上のみが番組に出ることになってしまったらしい。

狩猟少女なるが・クルガ&おばんちゅ大天使モモロウ：どちらもカリード諸島で放送されているアニメ番組である。

狩猟少女なるが・クルガはキャラクターデザインこそ可愛らしいが、非常に重いストーリーが特徴のアニメ。

モンスターを狩る狩猟少女たちが戦いの果てにモンスターと化してしまうという、どこかで聞いたことのあるような内容である。

おばんちゅ大天使モモロウはシニールギャグが特徴のオムニバス形式の短編アニメ。

肝心のおばんちゅ大天使モモロウの正体は不明である、というか劇

中に一切登場しない。

正体には諸説あり、ピンクのツインテールをした女の子という説もあれば、禿げ頭で小太りの豚面の天使という説もある。

雷ちゃんとピンクの長門さん1

あれから何度もへ級を討伐し、天龍シリーズの装備を揃えるのに必要な素材を手に入れた天龍は、そのまま工場で装備を作成し、いわゆる天龍らしい外見となった。

そんな天龍は現在、新装備の試運転として海に……ではなく何故かクロオビ鎮守府近くにある山の麓に来ていた。

「まったくよお、何でこんなところまで来なきやなんねえんだよ？オレは深海棲艦と戦う狩娘だろ？そんでもって山に深海棲艦はいないじゃん。山は蚊とかへびとか出そうだから来たくねえんだけどな。それに山登りに必要な道具なんてないぞ、遭難したらどうすんだよ？」

よおみんな、天龍だ。

オレは昨日完成させた天龍シリーズを着込んで、何故か山までやって来ている。

本当はすぐにでも海に行きたかったのだが、ある事情があつて山までやって来た。

元が船だからなのか山つてあんまり好きじゃねえんだよな、さつさと海に出たいぜ。

「もう、そんなこと言っちゃ駄目よ！それに山でしか手に入らない物だつてあるんだから！第一狩娘だからつて海にしか出ないなんていけないわ、山の新鮮な空気を吸えば気分もリフレッシュするわよ！」
愚痴るオレを叱るのは雷。

以前から山でしか手に入らない素材を取りに行く予定があつたよ
うで、オレが山に行くということを知ると同行してくれることになつた。

「それにカリユード諸島の山に生息している動物は蚊やへびなんて生易しいものじゃないのです。時には深海棲艦よりも強い野生動物も現れるのです。海と同じか、それ以上に注意して進まない危険なのです！」

オレに釘を刺すのは電。

電は雷の付き添いであり、オレにとっては付き添いの付き添いである。

「まあ今回は我々が付いているからな、道に迷うことはないだろう。それと狩娘たるもの、登山道具なんかには頼らんぞ。いつも通り武器と防具があればそれでいい！難には己の実力で立ち向かうものだ！」
そして適當なことを偉そうにそれっぽく言っているのが長門。

最初は山に行く気なんてさらさらなかったクセに、電と雷が行くと知った途端に同行を申し出た。

要するに付き添いの付き添いの付き添いである、コイツ必要か？

見ての通り、オレ達は4人で山に来ている。

海だけでなく山だろが平原だろが、狩娘が集団行動をする際は4人行動が基本らしい。

ジंकスってめんどくせえなあ……。

しかも全員が海に行く時と同じように武器を背負っている、物々しいっただらないぜ。

「それでこの山に龍殺しの実っていうのが生えてんのか？」

「そうよ、龍殺しの実海では手に入らない素材なの！この山に自生しているから採集すれば天龍さんの骨を天龍刀に強化出来るわ！」

そう、オレが山に来たのは龍殺しの実を手に入れるためだ。

前日にオレは集めたへ級の素材で念願の天龍シリーズの防具を作成した。

そしてそのまま続いて太刀も天龍刀に強化……………しようとして挫折した。

素材が足りなかったのである。

お陰でオレの今の格好は骨を担いだ天龍だ、画竜点睛を欠いてやがる。

強化に必要な龍殺しの実は山でしか手に入らないと龍田に教えられ、オレは渋々山に行くことに決めたが、龍田は既に予定が入っていたので今回はオレに同行は出来なかった。

しかし龍田は自分が同行出来ないのにオレ一人で山に入るのは危険だと言い出し、世話焼きで尚且つ山に用事のある雷にオレと同行するように頼み、雷はアツサリと了承した。

そしてそれを聞き付けた電も同行を申し出て、更に三人で出掛けようとするオレ達を見つけた長門も無理矢理付いてきたというワケだ。

山と軽く言ったが、オレの想像していた山とは全然違う。

山登りなんてハイキングみたいなものだと思っていたが、この山は人の手がほとんど入っていない。

生えている木々も樫や杉に松みたいなので見掛けるようなものではなく、熱帯に生えているような見慣れないものばかりだ。

そして山そのものもかなりデカイ。鎮守府のすぐ近くにあっという間のような山じゃないな。

日本じゃ考えられないような光景だ、これもカリユード諸島ならではのことか。

それにしても艦娘の服装とほぼ同じデザインの狩娘の防具だと山道がキツイ。

ブーツで山なんかに来るんじゃないやなかった、つか装備新調するんじゃないかった。

前の足装備のままなら、少なくとも足元は安定していたからな。

「しかしやっぱり山は海とは大違いだなあ。」

「急にどうしたんだ？山と海が違うのは当たり前だろう。」

「いや、まあその通りなだけでさ。ホラ、海は基本的に視界が開けているし、波はあっても上り坂や下り坂なんて無いじゃん。山に入るの初めてだから、それが新鮮に感じてさ。」

海は波間や岩礁に身を潜めることが出来るが、陸地だと岩場に草むらに木陰と隠れる場所がたくさんある。それが物陰から何か出てきそうに感じて何だか落ち着かない。

その一方でしっかりと踏みしめて歩くことが出来る地面というのはとても落ち着く、常に揺れている海上とは大違いだ。

何より海では当たり前のように見掛ける深海棲艦が陸地では全く見当たらない、代わりに見掛けるのは今まで見たことのない動植物ばかり。

最初は山登りなんて気が進まなかったけど、歩いてみると案外面白い。

何でもやってみるもんだな。

「おつ、見ろよ！あんなところに恐竜がいるぜ！すごい！恐竜なんて生まれて初めて見た！話には聞いていたけど本当に恐竜がいるんだなあ。実物を見た今でも信じられねえ。」

オレ達が歩いている山道から少し離れた平地に大きな恐竜が数匹の群れで草を食んでいるのが見えてきた。

灰色の皮膚に立派なトサカを生やした大柄な四足歩行の草食恐竜だ。

「あの特徴的なトサカは……えっと、パラ……パラ……確かパラサイトサウルスだったっけ？」

「それを言うならパラサウロロフスよ。そしてあれはアプトノス、パラサウロロフスじゃないわ！」

「アプトノス？」

オレの疑問に雷から訂正が入る、アプトノスって聞いたことないな。

「アプトノスはカリユード諸島全域に生息している草食種の生き物よ。お肉が美味しいのでたまに狩猟対象になるわ！雷も狩ったことがあるのよ。」

「へえ〜。しかしあんなデカイ恐竜を狩るなんて大変なんじゃないの

か？よく狩れたな。」

「アプトノスは見た目に対して弱いのです。イ級が狩れる実力があるのならアプトノスも狩れるのです。それにさつきから恐竜って言うてるけどアプトノスは恐竜じゃないのです。」

雷がアプトノスを倒したという事実に関心していると、次は電から訂正が入る。

ああ見えて実は弱いらしい、マジかよ。

「え、アレ恐竜じゃないのか？」

「厳密には良く分からない生物というのが正解らしいな。確かに外見は恐竜に似ているが解剖の結果、何に使うのか良く分からない器官が見つかったようで、既存の生物に当てはめるのが難しいらしい。その結果、草食種というフワツとした分類になったそうぞ。まあ眠魚やハレツアロワナなどもそこらの魚類とは違った体のつくりをしていたという報告があるし、カリユード諸島の生物特有の特徴なのかもな？」

思った以上にしっかりとした解説をしたのは長門。

普段はアホな言動ばかり目立つが、マジメモードの時はしっかりとしているらしい。

またこう見えてかなり博識である。思えば初対面するときも未確認生物に対して多くの知識を持っていたし、案外そういった方面に興味があるのかもしれない。

そういうのに興味のありそうな年少の狩娘の気を引くためにわざわざ調べたんじゃないだろうな？

「おっ、ここで道が二手に分かれているな。どっちに進めばいいんだ？」

歩いていると分かれ道に辿り着いた。

この山は初めてで地理には詳しくない、というかそもそも鎮守府敷地内以外の陸地を探索するのすら初めてだ。

こういう時は他のメンバーを頼った方がいいだろう。

「右手に進めば森林地帯に、左手に進めば水辺に出るのです。天龍さんの欲しい龍殺しの実の水辺に生えているのです。」

「じゃあ左の道に進めばいいのか？」

しかしそこに雷が待ったをかける。

「でも雷が欲しい鬼ニトロダケは森林地帯に生えているわ。」

「ふーん、それじゃあ片方を採集した後に戻ってくることにするか？とはいえ往復するのは流石に大変だな。」

「だったら二手に別ればいいだろう、簡単なことだ。」

「それもそうね。じゃあ雷が右手で、天龍さんが左手に別れましょ。」

ということとで二手に別れることになったのだが……。

「それじゃあ電が雷ちゃんに付いていくのです。」

「じゃあ私も雷と一緒に行くことにしようか。」

「いや、ちよつと待て。それだとオレが一人になるじゃねえか！」

いきなり何を言い出すんだ、このアホ戦艦は？

「それがどうかしたか？子供ではないんだ、一人だからといって寂しいとか言い出す年齢ではないだろう？」

「いや、そういうことじゃなくて……。あのさあ、オレこの山初めてなの、道分かんねえの！道案内として龍田の代わりに同行するってんで付いて来てんのに、オレ以外の全員が右の道に行ったら来た意味無いだろー！」

「そうなのです。長門さんは先輩狩娘として、天龍さんのお手伝いをしてあげるべきなのです。」

「やだやだーっ!!私も雷と電と一緒にいい!!」

ジタバタと駄々をこねながら抗議する長門。子供はどっちだよ……。

しかしこれでは埒が明かないな。

「ハア、仕方ないのです。電が天龍さんに付いていくのです。」

「えっ、私と電と雷の三人で行くんじやないのか？」

「そんなワケないのです。電達は何のために山に来たのか分かってるのですか？龍田さんの依頼で山初心者天龍さんを助けるために来てるのです。ピクニックしに来たワケじやないのです。少しは常識的に物を考えるのです！」

「げふう!？」

電が行かないと知り戸惑う長門だが、電に一喝され大破轟沈。

論破された長門が這い蹲っている間に電は雷に近付くと、何かを手渡し始めた。

「これは音爆弾と閃光玉なのです。そしてこっちが射出用のスリングショットなのです。これは信号弾の代わりなのです。もし何か起きたらこれを空に向かって撃つのです、そしてたやすくは駆け付けてあげられるのです！」

電が雷に渡したのは見ての通り普通のパチンコ、鹿の角と頭骨で作られていたりはしない。

卯月が持っていたスリングはまだまだ一般には普及していないようだ。

「もう、電は心配性ね。雷の方がお姉さんなのよ。それに長門さんも一緒だから心配いらないわ！」

「その長門さんと一緒という点が一番心配なのです……。」

それにはオレも同意見だぜ。

こうして二手に別れて山を探索することになったオレ達。

しかしその結果あんなことになるなんて、この時点では誰一人として予想すらしていないのであった。

雷ちやんとピンクの長門さん2

「うわっ、クンチュウが転がってきた!？」

「クンチュウは陸地にも生息しているのです。」

「げえっ、猟虫が襲ってくる!？」

「それは猟虫じゃなくてランゴスタなのです。ランゴスタを猟虫なんて言うとは龍田さんに怒られるのです。」

「デカイ牙のイノシシが突っ込んできやがった、危ねえ!!」

「それはブルファンゴなのです。体当たりを受けると狩娘でも軽く吹き飛ばされるから要注意なのです。」

ハア、本土だとよく天龍幼稚園とか言われて駆逐艦の引率係扱いされる天龍型だが、逆に電に案内されて山登りをする日が来るとは思わなかったぜ。

「天龍さん、山の動物達はとうでしたか？」

「うん、蚊やへびとか言ってる場合じゃなかったわ。何だあいつら、イ級と同じくらい強いのもいるじゃねえか。」

野生動物のくせに深海棲艦よりも強いとか、流星に笑えない。

「ブルファンゴの親玉のドスファンゴはドスイ級よりも強いのです。6メートル以上もある巨大なイノシシだから不用意に出会いたくないのです。」

6メートルのイノシシって、ジブリ映画かよ？

2トトラックだって5メートルもないのにデカ過ぎるだろ……。

「そして狩娘にとつて不慣れな陸上戦は危険なのです。だからドスファンゴみたいな危ない生き物となるべく戦いにならないように、陸では海と同じくらいか、それ以上に気を付けて行動する必要があるのです。分かったですか？」

「充分過ぎるくらい分かったぜ……。」

そんなイノシシには死んでも会いたくない、というか会ったら普通に死ぬ。

「ちなみに某SF科学考察本の著者によれば、ドスファンゴの突進を大剣で真正面からガードすると時速178kmの速度で吹き飛ばされてしまうそうなのです。」

「時速178km!？」

死ぬ死ぬ死ぬ！高速道路を走る自動車だつてそんな速度出さねえよ！生身でそんな速度出して原型保つてられるワケねえだろ!？」

しかも防いだ結果でそれだろ？防がなかったらもつと酷いことになるとか、人間が挑んでいい相手じゃねえ!!

「まあアタリハンテイ力に適応している狩娘や提督なら、突進の直撃を受けてもそんなことにはならないから安心していいのです。それにドスファンゴの突進も、戦艦の砲撃や魚雷の直撃に比べれば何てことないので。普通の人間がドスファンゴの突進を受けても多分ミンチになるだけで済みますが、艦娘でも艀装無しで深海棲艦の砲撃を喰らったら一瞬で赤い霧に変わるので。だからいつも砲弾の雨に身を晒して戦っている艦娘は凄いです、偉いのです、尊敬するのです！だけど電は怖い目に遭うのは嫌なのです、だから電は狩娘になることが出来て良かったと心の底から思うのです。」

「いや、そういう問題じゃないと思うんだが……。」

「怖がらなくても大丈夫なのです、ドスファンゴも倒せない相手じゃないのです。電は戦ったことすらないのですけどね。だけどへ級に勝てる腕前があるのなら、きつとドスファンゴにも勝てるのです。もし出会ったら腕試しとして戦ってみるから、その時は天龍さんも手伝うのです。」

「えっ………??？」

「やったー、ようやく目的地に着いたわ！」

「うむ、思ったより苦労したな。」

「そうね。長門さんがよそ見して石ころにつまづいて泥んこにダイブしたり、長門さんがハチミツ採集しようとして散々ハチに追い回されたり、長門さんがうつつかりシビレガスガエルを踏んづけて麻痺したり、長門さんが草むらにいたカマキリを異常に警戒して全然進めなかったり、長門さんがブルファンゴの体当たりで吹き飛ばされてそのまま崖から転げ落ちたり、色々あつて本当に大変だったわね！」

「ほ、本当にな……。」

私、雷と長門さんは無事にキノコの群生地に辿り着いたわ。

道中でやたらと長門さんが酷い目に遭つてたけど、私が痛い痛い飛んでけーつてしたら元気になるつて言うから実際にやつてあげたら、変な表情をしながら鼻血を流し始めたの！

慌てて丸めたティッシュペーパーを詰めてあげたわ。体調が悪かったのかしら？心配だわ。

今日のお出掛けも、本当は長門さんは着いてくる予定はなかったのよね。

自分の体調が悪いのに私達を心配してわざわざ着いてきてくれたつていうのは嬉しいけど、雷的には具合が悪い時は無理しない方がいいと思うわ！

「さて、採集しましよ。」

「ふむ、キノコの群生地というだけあつてより取り見取りだな。」

アオキノコ、ドキドキキノコ、マヒダケ、毒テングダケ、ニトロダケ、特産キノコに厳選キノコまで！

ここは様々な種類のキノコが生えている場所なのよ。勿論、雷のお目当ての鬼ニトロダケもね！

「ところで雷、知っているか？キノコは基本的に生食は出来ないんだ。」

「そうなの？」

「ああ。毒テングダケを生で食べると危険なのは当然だが、他のキノ

「コモ生のままだと炎症を起こしたり中毒作用を引き起こしたりするんだ。」

「へえ、そうなんだ！」

「茸食というスキルがあればキノコを生のまま食べられるようになるらしいが、普通に食べるのはやめた方がいい。だがな……。」

「ここで長門さんは屈み込むと、足元に生えているキノコを一本むしり取った。」

「このドキドキノコだけは生食が可能なのだ！」

長門さんが差し出すように見せてくれたのは本人の言う通りドキドキノコ。

ドキドキノコは緑色の傘が特徴的なキノコよ、地域によっては水色に白い斑点模様の傘を持っていることもあるそうね。

「このドキドキノコはモドリ玉の材料として使うのが一般的だが、実はそのまま食べることも可能なんだ。とはいえ摩訶不思議なモドリ玉の効果から想像が付くとは思いますが、食べても摩訶不思議な効果が起きるようだな。運が悪ければ毒テングダケを食べた時よりも酷い目に遭うが、運が良ければいにしえの秘薬と同等の効果が得られるのだ。面白いだろう?。」

「いにしえの秘薬!。」

「凄いわ!いにしえの秘薬って全てのお薬の中で最も効果が高いのよ!。」

その代わり作るのにも凄く手間が掛かるの、それがキノコを食べるだけで同じ効果が得られるなんてとってもお手軽でとってもお得じゃない!

でも悪い効果もあるのよね?お腹壊しちやったりするのかしら?

「色んな効果があるが、何が起きるかは食べてみるまで分からない。それがこのドキドキノコだ!どれ、物は試しだ。一つ食べてみよう。」

そう言うと長門さんはドキドキノコを齧り取り、そのままモグモグと咀嚼する。

「うん、意外と味は悪くないな。毒キノコは毒の成分に旨味があるというがこれは……ん?。」

急に怪訝な顔をする長門さん。ひよつとしてキノコを喉に詰まらせたのかしら？

「う、ぐぐぐ……………」

「どうしたの？どこか痛いのか？」

目を見開き歯を食いしばって脂汗を流しながら、両手で喉を抑えつつ片膝を地面に着く長門さん。

凄いや顔をしているわ、まさか本当に毒だったのかしら!?

長門さんがガタガタと身体を小刻みに震わせることで、背負っていたブレイズブレイドが背中からずり落ちていき、ズダンと大きな音を立てて地面に突き刺さる。

「な、長門さん大丈夫!? えっ? 何よこの煙は!?!」

長門さんの全身から蒸気が吹き上がるように緑色をした煙がモクモクと出てきたわ。

モドリ玉を使ったときに出てくるあの煙とよく似た緑色の煙、だけど身体から煙が出てくるなんて普通じゃないわ。一体どうなっているのよこれ!?

「があああああああ!!」

「ぎゃっ!?!」

そして長門さんが叫ぶと同時に、姿が確認出来なくなる程の緑煙が噴き出して私の視界を遮る。

それと同時にバツンバツンと何かが弾けるような音が聞こえてきた。ただ煙で何も見えない、何が起きているのか全然分からないわ!

徐々に煙の勢いが弱まってきた、長門さんは無事かしら?!

「ケホケホッ、長門さん無事!?! 怪我してない? 気分悪くない!?! 119番で救急車…………はカリユード諸島にはないんだった。だったらチケット使ってレンタク呼ぶ? 長門さん…………長門さん?」

何か様子が変わる? 返事がないわ。返事が出来ない程の重症なのかしら?!

ようやく煙も晴れてきたことだし、まずは長門さんの安否を確認しなくちやね!

もし心肺停止なんてことになっていたら、急いで応急処置をしないとイケないわ。

知ってる? 救急車が来るまでの間に正しく応急処置をしておけば対象者の生存率は大きく上がるし、予後の経過も良くなるそうよ。

AEDは持ってないけど、私だって狩娘だもの。ある程度の処置は心得ているわよ!

「長門さん、長門さ……えっ??」

「きゃあああああああああああああああああああ
!!!!!!」

雷ちやんとピンクの長門さん3

「ふーん、これが龍殺しの実かあ。仰々しい名前だからどんなのかと思ったら案外普通だな。」

「龍殺しの実は珍しい植物だけど、生えているところには結構生えているのです。天龍さんは龍殺しの実が自生している山がすぐ近くにあるクロオビ鎮守府に着任出来てラッキーなのです。」

雷に長門と別れて10分前後くらい経ったか？

しばらく山登りを続けていくと、やがて綺麗な小川が流れる開けた場所に出た。

そこには多数の龍殺しの実が実っており、オレは早速採集を始めた。

それにしてもいい景色だぜ。辺り一面には背の低い草が生えており、風を受けて柔らかくそよんでいる。小川の水もサラサラと流れており、澄んだ空気が心地良い。

オレが一番好きなのは勿論海だが、案外山も悪くないもんだな。

「しかし電的には結局ドスファンゴが見つからなかったのが残念なのです。」

電が好戦的過ぎてフフ怖状態だよ、お前本当に怖い目に遭うの嫌いなのか？

キイイイーン!!!

「なっ、何だ!?!」

突如として遠くの方から甲高い音が鳴り響き、それから間を置かずして空が光を放ったように見えた。

「ッ!?これは雷ちゃんに渡した音爆弾と閃光玉の爆発なのです!」
「何だど!?っーことは……。」

「雷ちゃんの身に何かあったに違いないのです!天龍さん、採集はここまでなのです!急いで雷ちゃんのところまで行くのですよ!」
「おうよ!」

スタミナの許す限り走り続け、ようやく森林地帯に辿り着いた。

クタクタだが、仲間の危機を思えば屁でもねえ!

「雷ちゃん!大丈夫なのですかーっ!」

「雷ーっ!無事かーっ!」

「あつ、電に天龍さん……。」

よくやく森の中に呆然と立ち尽くす雷を発見した、見たところ怪我もなさそうだ。

雷の周囲には白い端切れが大量に散らばっているが、それ以外におかしいところは今のところない。

「無事でよかったです!電は雷ちゃんが酷い目に遭っていたらどうしようかと、どうしようかと……。」

雷に抱き着いて無事を喜ぶ電、しかしどうも雷の表情が暗い。

「私は無事よ、でも長門さんが……。」

「長門さん?長門さんがどうかしたのです?」

「そーいや長門はどこだ?」

あれだけ雷と電に執着していたヤツのことだ、急にいなくなるなんておかしいぞ?」

「長門さんが大変なことになっちゃったのよお!!!」

半ベソをかきながら震える指で雷が指さした方向には
……………。

「……ウホッ。」

ピンク色の変な猿がいた。

「はい？何なのですかこの猿は？」

「だからそのお猿さんが長門さんなのよお！長門さんがお猿さんになっちやったのお!!!」

「はあああああああああ!!!??」

ピンク色の変な猿、改め長門……本当にこれを長門と呼んでいいのか迷うが、とりあえず長門だ。長門は今まで見たこともない非常に奇妙な外見の猿になっていた。

でっぷりとしたお腹、鋭い爪を備えているものの器用そうな手指、よく動く長い尻尾、カバのような変な顔、そしてボサボサに乱れた黄色い頭髪。図体も大きく体長は2メートル以上はありそうだ。

どこからどう見ても長門には見えない。頭に着けた黒い角のような長門型のヘッドギアだけが辛うじて長門の要素を残すが、そもそもこれは狩娘の防具であって臙装じゃないからな。

それにしてもゴツい体格の女性のことを一部ではメスゴリラと呼ぶらしいが、本当にゴリラになったとはなあ。

何より一番気になるのは長門の全身からプウーンとほのかに漂う悪臭だ。

獣臭いというよりは、排泄物……ハッキリと言ってしまえば薄めたウ○コのような臭いがする。

全身からこんな臭いがするというのは女として、というか人として尊厳に関わるレベルだ。

口からもまるで生ゴミのような悪臭が漂っている、おえっ……。
「なあ雷、コレは本当に長門なのか？ただのピンク色をした悪臭ゴリラにしか見えないんだが……。」
「ゴリラに尻尾なんて無いのです、これは未知の生物なのです！それに長門さんは確かにケダモノだけど、いくらなんでもコレを長門さんだと認めたくはないのです。」
「本当に長門さんなのよお！どうしてこうなったのかと言うと……。」

少女説明中……

「つまりドキドキキノコの不思議な効果でこうなっちゃまったってワケか。」

「自業自得なのです。カツコつけて変なキノコを食べるのが悪いのです。」

どうやら当たりに散らばっているビリビリに破れた白い布の端切れの正体は、長門が着ていた防具とインナーの残骸らしい。

身体が縦にも横にも大きくなったから服が限界を超えて千切れたんだろうな。

辛うじて無事だったのはあのヘッドギアだけか、とはいえ頭の形に合わせて若干歪んでいるように見える。

しかし猿になったとはいえ、全裸で恥ずかしくないのか？

「ウホ〜。」

長門は話し合うオレ達には目もくれず、地べたに座ると背中をボリボリと搔いたり、暇そうに大欠伸をしている。

仮にもお前のことで話し合ってたぞ？少しは興味持てよ。

「さっきからウホとしか言わないのです、言葉が喋れなくなっているのです。そもそもこっちの言葉は通じているのですか？ひよつとしたら脳みそまで猿になってるんじゃないですか？」

うん、それはオレも気になった。

喋れなくてもボデイランゲージをしたり、地面に絵を描いたりしてコミュニケーションをとろうとするのが普通だろ？

「それは大丈夫よ……うん、きつと大丈夫……多分……。」

雷は長門の味方であろうとするが、言葉の歯切れは悪く、見るからに自信なさげだ。

「えつと、あなたは長門さんなのよね？はいなら1回ウホツと鳴いて、いいえなら2回ウホツと鳴いて、ね？」

「……ウホ。」

「ほら、やっぱり長門さんだわ！ちゃんと返事したもの！」

「偶然じゃないのですか？」

「オレもそう思う。」

「なら次の質問よ！私の名前は電、それで合ってる？」

「ウホウホ。」

「ほらあり!!やっぱり言葉は通じてるし、私のことも分かってるのよ！間違いないわ！」

喜んでいる雷には悪いが、長門の顔が全然雷の方に向いてないんだが……。

これ全部空返事だろ。さつきから長い爪で鼻をほじっていたり、近くをひらひらと飛んでいる蝶を眺めていたりして真面目さが感じられない。

よそ見をしていた長門だが、ふと近くに生えていたアオキノコに気付くと長い尻尾を使って器用にむしり取り、そのまま口へと運んでいく。

「……あつ?!長門さんダメよ、そんなことしちゃ!さつき自分でキノコは茸食スキルがないと食べられないって言ってたじゃない！」

雷が止めるのも気に留めず、長門はアオキノコを美味しそうに食べていく。

「あれ?普通に生のままで食べてる?お腹壊さないのかしら?」

「まあ野生の動物は料理なんてしないしな……。」

「体質までケダモノになったのです。」

ヤバいな、見た目以上に長門の野生化が進行している……。

これほつといったらそのまま野生に帰っちゃうんじゃないか？

「それでこれからどうすんだよ？」

「そりや当然、長門さんを元に戻すのよ！」

「けどどうやって元に戻すのです？ 当てはあるのですか？」

「そ、それは……うーん。」

張り切る雷だが、電に突っ込まれて言いよどむ。

「あつ、そうよ！ もう一回ドキドキノコを食べさせれば元に戻るかもしれないわー！」

「そんなの賭けにもならないのです。それどころかもしキングゴングみたいな巨大なゴリラにでもなったらどうするのです？ そんなことになったら手に負えないのです。」

「ううう……。」

雷は長門を元に戻す方法を提案するが、あつさりと電に却下された。

厳しいことを言うようだが、一理ある。

キングゴングになるかどうかはともかく、何が起きるか分からないキノコを二度も食べさせるなんてリスクが大き過ぎる。

治る保証もないのに、そんなものを無計画に食べさせるのは危険だ。

「とりあえず長門さんを鎮守府に連れて帰るのです。神通さんや龍田さんなら何か知っているかもしれないのです。」

「それもそうだな。いつまでもこんなところにおいても埒が明かないし……。」

「分かったわ。長門さん行きましょう。ブレイズブレイド持って帰るの忘れないでね。」

「ウホ？」

雷が長門に声を掛けると長門は首を傾げてよく分からないというような顔をしたが、雷が大剣を持ち上げて長門の手に持たせようとす

ると意図を理解したのか尻尾で器用に大剣の柄を掴み軽々と持ち上げた。そしてそのままナツクルウォークでのんびりと雷の後を付いていく。

凄いパワーだな。大剣っていうのは両手持ちの重量級武器だったのに、尻尾の力だけで軽々と持ち上げてやがる。

頭は悪くなつたみたいだけど、身体能力だけなら元の姿の頃とは比べ物にならないくらいパワーアップしてるみたいだ。

「……それで、この生き物が長門さんの成れの果てだと?」

「そうなの!・ねえ神通さん、何とかならない?」

その後は何のトラブルもなく無事に(?)下山したオレ達は、武器を片付けてから長門を連れて執務室を訪れた。

そしてこのことを神通に相談したが、流石の神通もこの展開は予想していなかったようで戸惑った様子だった。

「ウホホ。」

「何とかと言われましても……。そもそもこの生き物は何なのでしょう?初めて見ます。この生き物の正体が分からないことには対処の仕様もありません。」

仮にも執務室だというのに床に座り込んでくつろいでいる呑気な長門を頭のとっぺんから爪先まで観察していた神通がポロつとこぼした。

確かに、それについてはオレも気になっていた。しかし神通にも知らないものがあつたとはな……。

「又ハハハハハ!それはコンガだな!」

「うわっ!?ビックリしたのです!」

「うおっ!?どっから出てきやがった!」

突如として現れたのは我らが提督。

さつきまで執務室にはいなかったはずなのに、いつの間にかオレ達の後ろに立っていた。

「コンガ？提督、コンガとは一体？」

神通ですら知らないコンガという生物、当然オレ達も誰一人としてそんな生物は知らないぞ。

「又ハハハハハ！コンガというのは牙獣種のモンスターだ！主に温暖な地域を中心に生息しており、小規模の群れを作って生活している！マイペースだが見た目通り知能は高く、好奇心旺盛で目に映るものにはすぐにちよっかいを掛ける性質だ！またコイツは非常に健啖家で悪食だ！すぐ腹を空かす傾向にあり、雑食性で食べられそうなものは何でも食べる！特に好きなのはキノコ類で、体内に持つ特別な酵素のお陰でマヒダケや毒テングダケも平気な顔で食べてしまうのだ！そして様々なものを食べているせいか、その口臭や放屁にフンは非常に臭い！いざ戦いとなればその悪臭を使って外敵を翻弄する！また大量の食物を収める腹部の皮膚は非常に厚く硬い、大型の個体ともなれば腹部に力を込めることで並大抵の攻撃を弾き返してしまう！更にとても器用で柔軟性に優れた尻尾を持っており、これは第三の手として機能する！尻尾は器用なだけでなく力もあり、自分の体重を支えることなど朝飯前だ！そして最大の特徴はそのボサボサの頭だな！コンガの中でも特に力を持つ個体はその頭髪を植物の汁などを使ってまとめ上げ、自前のトサカを作るのだ！このトサカを持つ個体は群れのリーダーとして区別され、ババコンガと呼ばれる！そのピンク色の体毛から桃毛獣と呼ばれることもあるのだ、又ハハハハハ！」

「長いのです、三行にまとめめるのです。」

「この生物の名前はコンガ。」

食いしん坊でとても臭い。

腹の皮が厚くて尻尾が器用。」

「なるほどなのです。」

「……それで何でそんなに詳しいんだよ？」

「何を言っておる、我輩は提督だぞ？貴様らのようなヒョッコとは頭の出来が違うのだ！又ハハハハハ！野生のコンガならこの鎮守府か

「コンガについては分かったけど、これでは何の解決にもならないのです。」

「そうだよなあ。長門がこのままじゃ見苦しいし、くっせえし、何よりコミュニケーションも取れねえし。」

「そもそもこの様子では狩娘として活動するどころか、一人で生活出来るかどうかすら怪しいのではありませんか?」

その後もみんなで長門をどうするか話し合っていると、雷がビシツと手を挙げた。

「いいわ!長門さんが元に戻るまで私が面倒を見てあげる!」

「「えっ?」」

「ウホ?」

「だーかーらー私が長門さんの面倒を見るのよ!長門さんがコンガのままだと日常生活に支障が出るでしょう!それにホラ、長門さんは私によくしてくれたじゃない?それに対する恩返しよ!何より仲間が困ってるのに助けがないなんておかしいわ!」

なんだこの聖母?!尊いぜ……。

しかし後半については同意するけど、前半については同意しかねる。

結果的にはよくしてくれたんだろうけど、下心あったものだろうしなあ。

「分かりました。それでは長門さんの世話については雷さんにお任せします!」

「はい!雷、任務承りました!」

「とはいえ全てを雷さんに任せるつもりはありません。電さんも天龍さんも雷さんをフォローしてあげて下さい。」

「はいっ!」

「分かったぜ!」

「私も出来る限り力になります、何と少しでも長門さんを元に戻しましょう!」

「ウホホ〜!」

こうしてオレ達の当面の目標は決まった。

当の本人が一番他人事のような顔をしているのは気に入らないが……。

しかしそのコンガという生物の世話をするということがどれだけ大変なのか、今のオレ達はまだ知らないのであった。

雷ちゃんどピンクの長門さん 4

コンガになった長門の世話をすると決めたオレ達は、とりあえず長門を連れて執務室から出た。

「それで、世話をするとは言ったもののどうするのです?」

「まずは消臭玉の用意をするわ! 何をするにしても臭いのは困るもの!」

「提督が言っていたやつだな、そいつはオレがショップで買ってくるぜ!」

「天龍さんにだけ払わせるなんて悪いわ、私もお金を出すわよ!」

「電も出すのです。」

「ウホ?」

本当にいい子だね、この子ら。

おい長門、当事者はお前なんだぞ? 12くらい出せよ。

「臭い対策はこれでいいとして、そろそろお腹も空いたし夕ご飯を食べましよう。」

「え? そいつを食堂に連れて行くのか?」

消臭玉を買ったとはいえ、それは長門が出した悪臭を消すためのものであって、悪臭そのものが出なくなったワケじゃない。

それに今も全身からポワーンと嫌な臭いがする。

「だって置いてけぼりは可哀想じゃない。それに今の長門さんを一人きりにするのも不安だわ。」

まあこの長門を放置するとどうなるのか分かんのは同意する。

「何より狩娘だった頃と同じような生活をしていれば元に戻るかもしれないでしょ?」

「なぐるほど、一理ある。」

「これと一緒に食事だなんて嫌な予感しかしないのです……。」
「ウホッ。」

そして食堂にやって来たのはいいんだが……。

「ちよつと、長門さん！そんな下品な食べ方しちやダメよ！それに早食いは身体に悪いわ！」

「ウツホホー・ウホホー・アグアグアグアグ！」

料理を手掴み、尾掴みしながら大きく開いた口の中へグチョグチョと押し込んでいく長門。

当然食べこぼしや料理の汁があちこちに飛び散っていく。

オレ達も雷を手伝わなきゃいけないとはいえ、オレは長門の向かいの席に座ったことを早くも後悔し始めた。

「きつたねえなあ……。」

「こつちにまで汗を飛ばさないでほしいのです。」

「ほら、こうやって箸を使うの！箸が難しいのならフォークでもいいわよ！」

「ウホウホホー・ムグムグムグムグ！」

隣に座った雷が箸の使い方をレクチャーするものの、長門は全然話を聞いてない。

ちなみに現在の長門が食べている料理だが、普段の長門が食べている量の数倍はある超特盛となっている。

雷がいつも通りの量を持ってくると長門が不満げな顔をしたので、機嫌がよくなるまで量を増やした結果こうなった。

戦艦ということで普段からオレ達の倍近くは食べる長門だが、コンガと化したことでその食欲は更に肥大化したようだ。

大量の料理があつという間に長門の腹の中に消えていく、そして料理を食べ終えたと同時に……。

「モグモグ、ゴクン……ゲエー……ッ!!」

「うげえ!?なんて臭いゲツプだ!」

「うゝっ!く、臭過ぎるのです!!」

長門は口からゲツプを吐き出した。

以前卯月が使ったひえい玉の殺人級の臭いには流石に劣るが、それでも十分に酷い臭いだ。

「ゲホッ!しょ、消臭玉を!!」

雷が慌ててテーブルに消臭玉を叩きつけたことで水色の煙が広が
り、瞬く間に悪臭を消し去った。

「うええ、臭いが消えたとはいえ未だに気分が悪いぜ。」

「今のですっかり食欲が無くなっちゃったのです。」

「もうっ!ダメでしょう長門さん!みんなまだご飯を食べているの!
食事中にそんなことをするのはマナー違反よ!」

「ウホッ?」

雷が長門を叱るものの、当の本人はまるで分っていない様子だ。

こりやあ先が思いやられるぜ。

食事の後は歯磨き、ということまで長門を連れて洗面所まで来たのだ
が……。

「こいつの口って普通の歯ブラシで洗えんのか?」

「ウホ?」

「ここに長門さんが普段使っている歯ブラシがあるけど、これじゃあ
小さ過ぎて頼りないのです。」

見ての通りカバのような顔になってしまった長門。

人間とは比べ物にならない程の大口で、牙獣種というだけあって大
きくて太い牙も持っている。

人間の歯ブラシじゃ、一回使っただけでダメになりそうだ。

とはいえ歯を磨かないという選択肢はない。

長門の口臭対策の第一歩は、まず歯磨きからとみんなで決めたからだ。

「確かテレビで見た動物園のカバは、専用の特大歯ブラシで歯磨きしていたわね。」

「そんな都合のいいものなんてあるわけないのです。」

「代わりになりそうなものなんて、このトイレ用の清掃ブラシぐらいしかないぞ？一応これは新品だから汚くはねえが、便所ブラシで歯磨きなんていい気分はしねえな。」

オレが流し場の下から見つけたのは新品の便所ブラシだ。

相手がコンガになった長門とはいえ、これを口に入れるっていうのはちよつと可哀想だな。

長門が正気に戻ったときに自害とかしなきゃいいんだが……。

「もうそれでいいわ、うがい用のコップはこのバケツを使いましょう。」

雷が持ってきたのはどこにでもありそうな水色をした普通のバケツ、金属製のピンク色をした頭に被る用のバケツなどでは断じてない。

雷はオレからブラシを受け取ると、ブラシに歯磨き粉を塗っている。

「歯磨き粉ほとんど使っちゃったのです。」

「口もデカけりやブラシもデカいからなあ。」

「毎回これだと不便ね、何か対策考えなきゃダメね。まあ今はそのことはいいいわ。ほら、長門さん口開けて。」

「ウホ?。」

「ほら、こんな風にブラシを口に入れるの。」

「ウホアーン。」

雷は口を開けてブラシを口の中に入れるジエスチャーをする。

手に持っているのが歯ブラシじゃなくて便所ブラシなのが異様だが、それで長門に通じたのか長門も真似して大口を開ける……うっつ、やっぱり臭い。

「本当は自分で磨けるようにならなくちゃいけないのだけど、今回は私が磨いてあげるわ。今回ので覚えてね。」

雷はブラシを長門の口に突っ込むと両手を使ってシャコシャコと磨き始めた。

「〜♪」

長門も特に抵抗する様子はなく、されるがままで。

それどころか嬉しそうにさえ見える、口の中がさっぱりして気持ちがいいのだろうか？

「よし！じゃあ流しにペーっつってして、飲んじゃダメよ？」

「ンベエ〜〜〜。」

洗面台に口の中のものを吐き出す長門。

ハッキリ言っつて凄く臭いしそれに汚い、歯を磨いた後に吐き出されたものとは思えない。

雷はよくこいつの歯を磨けたな、オレには無理だ。

「最後にこのバケツの水でうがいをして、それをまた流しに吐いて歯磨きはおしまいよ。」

「ガラガラガラ……ンベエ〜〜〜！」

雷の言うことをよく聞いているな、やっぱり狩娘だった頃の記憶が残っているのか？

「あれ？歯を磨いた後はうがいをしない方が、歯磨き粉に使われているフッ素が口の中に残るから虫歯になりにくいと聞いたのですけど……。」

「まあまあ、細けえことはいいんだよ。」

「そして最後にコレ、息を綺麗にするタブレット！噛まずに呑むのよ、分かった？」

「ウホ。」

雷は懐から錠剤のようなものを取り出すと、それを長門に飲ませる。

口だけを綺麗にしても完全な口臭の解決にはならないってんで、これを飲ませることにしたんだ。

長門は雷に言われた通りにおとなしく呑み込んだ。

「うん、良く出来ました。いい子ね。」

「ンホホ♪」

ここまでしたが、あまりいい匂いになった気はしない。

そりや最初に比べればかなりマトモになったが、それでもそこら辺にいる口臭が酷い人と同等かそれ以上には臭い。

まあ初日だし、口臭の改善もこれからか。

その前に元に戻ってくれば問題ないんだけどな。

口臭対策の次は体臭対策ということで長門を風呂場に連れてきた。

オレ達三人はユアミに着替えたが、当然ながら長門に着せるサイズのユアミは無かった。

仕方がないので現在の長門の姿はヘッドギアを外しただけの全裸だが、こいつは最初から裸みたいなもんだし別に構わねえだろう？

「本当に長門さんの身体をお風呂場で洗うのですか？電は反対なので。」

電は最後まで長門を風呂場に連れてくることに難色を示していた。

『お風呂場はみんなが使う場所なのです。長門さんを洗うのなら中庭でホースでも使って水を掛けてやればそれで済むのです。』

『それじゃあちゃんと綺麗にならないでしょ、そんなことじゃいつまで経っても汚いままよ！そのままじゃ私達が困るし、それにそんな洗い方しちや長門さんが可哀想だわ。それに汚れた長門さんをお風呂場に連れて行きたくないっていうのはまあ分からないでもないけど、そろそろ外も暗くなってくるわ。そんな時間に中庭に出て水撒きなんてダメよ！』

『だとしても電達まで一緒に入るのはおかしいのです。犬や猫をお風

風呂場で洗う人はいても、一緒に入浴する人はいないのです。』

『でもこれは犬や猫じゃなくて長門さんなのよ、長門さんとは何度も一緒にお風呂入ったことあるでしょ？さつきも言ったけど普段と同じような生活をするのが完治への第一歩なのよ。』

『別に好きで一緒に入っていたワケではないのです、それにそんな方法で治るって保証もないのです。』

『でも治らないって保証もないわ！それに治らないにしても長門さんが一人でお風呂に入ることを覚えられたらそれでいいじゃない。』

こんなやり取りがあつて、今に至る。

「ここまで来たんだ、いい加減腹あくくれ！」

「むう、仕方がないので。今日の長門さんはいつもみたいにいやらしい目で電達を見てこないのので我慢するのです。」

「顔だけならいつもの何倍もいやらしいけどな。」

「ウホッ。」

このカバみみたいな顔を見て上品に感じるやつはいないだろう。

それにこの体臭である、下品以外の何物でもない。

せめて風呂で綺麗にして臭いだけでもなんとかしてやらなきやなあ。

「さあ長門さん、お風呂よ……あれっ？」

雷は長門の手を引いて風呂場に連れ込もうとしたが、長門はその場からジッと動かない。

「どうしたの？ほら行くわよ。」

雷は再び長門を風呂場に連れ込もうとするが、やっぱり長門は動かない。

風呂場の入り口で立ち止まったままだ。

「ダメね、ビクともしないわ。」

「そういう猿は毛皮が濡れるのを嫌がるって聞いたことがあるのです。」

「そうか？ニホンザルって温泉好きだろ？濡れるのは平気なんじゃ

ないか？」

「それはニホンザルが特別なだけなのです。普通の猿は毛皮が濡れることを嫌うのです。チンパンジーみたいな知能の高い類人猿ですら、ちよつとした小川を渡ることすら躊躇するそうなのです。それに同じニホンザルでもオスザルは温泉に入らないのです。濡れて毛皮がべちやんこになったら群れの中での威厳が無くなるから風呂を嫌うのだそうです。」

「つまり猿は基本的に水が嫌いってことか？」

「そうなのです。」

「なるほどな、だから猿になった長門は風呂場を嫌がったのか。」

「でもアステラ鎮守府の分家にあたるセリエナ鎮守府の近くで見つかった新種のギンなんとかサルっていうお猿さんは天然のお風呂に入っていたって報告があるわよ？」

「それはその猿が特別なのです。それにニホンザルやセリエナの猿がお風呂に入れても、長門さん本人がお風呂に入れないことに変わりはないのです。」

「それもそうね、とにかくこのままじゃ困るわ。この様子だとお風呂に入れないじゃないじゃない。」

「仕方ねえ、三人がかりで連れ込むか。」

「ンホホ……。」

雷が長門の右手を両手で引き、電も同様に左手を引く、そしてオレが背中を押し込むことでようやく長門を風呂場に連れ込んだ。

そして最後に逃げられないように風呂場の扉をピシヤリと閉めると、長門は観念したのかようやく大人しくなった。

「面倒なことが起きる前にさっさと終わらせるのです。」

「任せて！私が綺麗にするわよ！」

雷は泡立てたスポンジを使い、長門の大きな背中を洗い始めた。

普通は身体を洗うのに石鹸を使うのだが、全身が毛で覆われていることを考慮してか使用したのはシャンプーである。

可愛らしい少女が不細工な大猿の背中を洗っているという絵面がなんとも非現実的でシニールだ。

「ウホホ〜♪」

最初は嫌がっていた長門だが、洗ってもらうことが気持ちいいと気付いたのか抵抗する様子も無くなってきた。

「よしっ、頭のとっぺんから尻尾の先まで洗ったわよ。それじゃシャワーで流すわね。」

長門にシャワーを浴びせると、泡と一緒に茶色く濁った水が流れ出す。

「どんだけ汚れてたんだコイツ？」

さつきまで雷が使っていたスポンジも茶色になっているし、これはもう捨てなきゃダメだな。

「さて、一段落着いたしオレ達も身体を洗うか。」

「そうね。」

「なのです。」

オレは自分で身体を洗い、電と雷は互いに洗いつこをしている。

これがキャツキャウフフってやつか、オレですら可愛いって思うもん。

普段の長門なら大喜びするんだろうな、今じゃ尻尾で桶を回して遊ぶことに夢中みたいだけど……。

「身体を綺麗にしたら入浴よ！長門さん、お湯に浸かるの。大丈夫？こんな風に入るのよ。」

「ウホホ……。」

雷はあえて長門に見せつけるようにお湯に入っていく、お湯が安全なものであると分かせたいようだ。

長門は恐る恐る湯船に近付くと、尻尾の先でお湯をちよんちよんとつつき始めた。

「ウホ。」

お湯に危険がないと分かると、長門もゆっくりとお湯に入っていく。

「よし、成功か。ならオレ達も入るか？」

「綺麗にしたとはいえ、猿と一緒にのお湯に浸かるのはやっぱり気が進まないのです。」

オレは長門に続いて湯に浸かり、電も渋々といった様子で後に続く。

「ふう〜温まる、山登りと長門の世話で疲れた身体に染み渡るぜ。」

「確かに今日はくたびれたのです。」

「もうっ、まだ今日は終わりじゃないわよ？そんな調子じゃダメよー！」

雷はそう言って戒めるが、疲れたものは疲れたんだよ。

もうちよつとくらい気を抜かせてくれ。

「……ウホッ。」

唐突に長門がブルリと身震いをした、何なんだ？

それと同時に長門の座っている場所から徐々に大きな気泡が浮き上がってくる、この泡つてもしかして……。

とうとう泡は水面にまで到達しパチンと弾けた、そして……。

「くっさあ~~~~~」
「!!!!!!」

雷ちゃんどピンクの長門さん5

「うげええええくく!!コイツ、やりやがったな!さっきのゲツプなんて比じゃねえ、ひつでえ臭いだ!」

「うぶつ、最悪なのです!急いで窓を開けるのです!」

「しまった、消臭玉がないわ!着替えの中に入れちゃってる、取ってくるわ!ついでに換気扇の出力も上げてくる!」

長門の放屁により、風呂場は阿鼻叫喚の地獄と化していた。

こんなところ一秒でも長くいたくはないが、このまま逃げ出すワケにはいかない。

急いで換気と消臭をしなければ風呂場が開かずの間になってしまう。

それにもつたないがお湯も捨てなければいけないし、風呂場の掃除もしなければならない。

「ウホッ?」

唯一長門だけが平然としていた。

自分の出した臭いだから平気なのかもしれないが、それ以前にみんなの手伝いをしろよ。

元凶はお前だろ、さっきから何かやらかすたびに自分は関係ないみたいな顔しやがってさあ。

「ふう、とりあえず最低限の清掃は終わったぜ。」

「入浴前より汗をかいたのです。」

「連装砲ちゃん達もお手伝いお疲れ様。はい、これお駄賃ね。もう

帰って大丈夫よ。」

「「ワイー！」」

風呂場の掃除には10分以上も掛かった。

鎮守府の風呂場は広くてオレ達三人だけじゃいくらなんでもキリがないんで、オレ達のオトモ連装砲達も駆り出して掃除したのだった。

サンキューマサムネ、雑用ばっかでクエストには連れて行ってやれてないけど感謝してるぜ！

「掃除したとはいえ、まだ若干ツーンと臭うな。」

「今日はもうお風呂は使えないのです。」

「仕方がないわ、清掃中の立て札を置いて使われないようにしておかなくちやね。」

「ウホッ。」

オレ達もようやく風呂場から出る、もう全員クタクタだ。

疲れを癒すために風呂に入ったのに、入る前より入った後の方が疲れているってどういうことだよ？

「あらっ、天龍ちゃんじゃない。今上がったの〜？」

「あつ、龍田！帰ってたのか。」

脱衣所に着いたオレ達が出会ったのは、ユアミに着替えた龍田だった。

身体にタオルを巻き、髪をタオルでまとめ上げた龍田の姿は、同性でなおかつ我が妹でありながらもとても艶めかしい。

特にむき出しの両肩とうなじが非常に色っぽく、長いまつ毛と澄んだ瞳、潤んだ唇も蠱惑的だ。

こいつ本当にオレの妹か？オレが同じようにやっても絶対そんな色気出ねえぞ。

「あら〜、この子が今の長門さんなのねえ。話は神通さんから聞いたわ、本当にピンク色の猿なのね〜。」

コンガになった長門を見ても特に動揺する様子もなく、自然に接す

る龍田。

コイツ本当にすげえよな、仮に俺だったら事前に話を聞いていても取り乱すぞ。

「龍田さんはこれからお風呂ですか？」

「そのつもりよ。今日は午前上位ネ級三体連続狩猟をこなして、午後からは上位タ級とル級の二体同時狩猟もこなしてきたからちよつと汗をかいちよつたのよ。まあタ級とル級は縄張り争いをする性質があるから、同士討ちに持ち込んで弱ったところをサクツと片付けちよつたからなんてことはなかったわ。」

それだけのクエストを終わらせてちよつと汗をかいただけって、お前……。

しかも本人は汗をかいたと言っているが、その割には全然汗臭くない。

むしろほのかに甘く優しい匂いがするし肌もサラサラだ、オレなんか風呂場の掃除で汗べつとりだつていうのに……。

くどいようだがオレとコイツって本当に姉妹なのか？若干不安になつてきたぜ。

「残念だけどお風呂は使えないわ。長門さんがオナラをしちよつて、部屋全体が臭くなつちよつたの！掃除はしたけど臭いが抜け切るにはまだ掛かるわ！」

雷はそう言いながら清掃中の立て札を風呂場の入り口に置く。

「あらあ、残念ね。それじゃあ今日は自室でタオルを使って身体を拭くしかないわね。」

龍田は棚からタオルを数枚取り出すと、それを自分の荷物に詰め始めた。

「それにしてもその子がオナラをしちよつたつてことは、ひよつとしたらトイレに行きたいんじゃないかしらあ？」

龍田が不意にそう呟くと、雷と電は顔をサツと青くして互いに見つめ合う。

「ま、まづいのです！」

「こんなところで粗相をされたら大変なことになるわ！」

「庭に穴を掘ってそこにさせるのです！」

「毎回そんなことをしている余裕はないし、庭が臭くなっちゃうわ！トイレで流さなきゃダメよ！それにこれを機会に長門さんにトイレを覚えさせるのよ、そうすれば次回から楽になるわ！長門さん、行くわよー！」

雷と電は二人で長門の両手を引くと廊下へ向かって駆け出した。

「あつ、オイ待て！お前らまだ着替えてすらいねえだろ！」

「あらら、行っちゃったわねえ。」

慌てていたのは分かるが、雷と電のやつ身体も拭かずにユアミの格好のまま出ていきやがった。

当然長門の身体もびしょ濡れだ、廊下に水の後が点々と続いている。

「つたく、しょうがないな。後で着替えとタオルとドライヤーを持って行ってやるか。」

「ふふつ、天龍ちゃんも何だかんだで面倒見がいいわね。あつ、そういえば神通さんから話を聞いたんだけどお、他の鎮守府でも狩娘が動物になっちゃったことがあつたらしいのよ。」

「何だ?!？」

「えつとねえ、神通さんが以前潮風丸さんから聞いた話でね。その時は話半分聞いていたから、思い出すのに時間が掛かったそうなんだけどお……。」

『ワシの所属している鎮守府はモガ鎮守府ゼヨ。だからモガ鎮守府に交易に行く際には他の鎮守府よりも特別なものを持っていくことが多いゼヨ。ワシの故郷みたいなもんだし、恩もあるから少し贖身してるんだゼヨ。それで少し前に特上完熟マタタビ漬けを持って行ったら多摩が買ってくれたんだゼヨ。あつ、多摩はモガ鎮守府の狩娘でワシの後輩に当たるゼヨ。ところがそのマタタビを食べた多摩はなんとネコになってしまったゼヨ！あの時はビックリしたゼヨ。』

「……だそうよ。」

「あれ、そんだけ?」

「そう、それだけ。」

「ネコになった多摩はその後どうなったんだ?」

「さあ?」

「さあつてオイ!これじゃあ何の解決にもならないじゃねえか、師匠しっかりしてくれ!」

「多摩は狩娘に戻れたのか?戻れたんならどういう方法を使ったのか分からないと意味がねえ!!」

「多摩がネコになったから何だつて言うんだよ……。」

「潮風丸さんは適当なことを言うことが多いし、神通さんもその時はくだらない話だと思って最後まで聞かなかつたのね。」

「それでどうすんだよ、モガ鎮守府の提督に連絡でもするか?」

「そうね、どうしようもなくなったらそうしましょう。」

「ちなみに雷と電は長門のにトイレの使い方を教えたものの流石に一回で覚えきれぬハズもなく、無事に周囲を汚すことなく流すことこそ出来たものの、それでもなお漂う悪臭によりそのトイレはしばらく使用禁止になったとき。」

「はい、雷よ!ここからは私が話すわ!」

「トイレの後は消臭玉をこれでもかと思つて身体に付いた臭いを消してから、改めて着替えを終わらせたわ。」

「長門さんのヘッドギアも装着済みよ。」

「濡れた廊下は天龍さんと龍田さんがモップで拭いてくれたみたい。」

「その後は天龍さんは工廠で武器を強化をする用事があつて、龍田さんはその付き添いということで別れたわ。」

に出てくる長門さん。

そうそう、その調子よ。長門さんはもつと堂々としていて頼りになるカッコいい狩娘なのよ！（雷フィルター）

病は気から、逆に言えば気を強く持てばきつと元の姿に戻れるわ！
頑張つて、応援しているわよ！

「雷ちゃんと電とで露骨に態度が違うのです、なんだか無性に腹が立つのです。」

「もう、そんなこと言っちゃ駄目でしょ！それより消灯だけど長門さんを夜に一人にするワケにもいかないし、長門さんは私達と同じ部屋で眠ってもらうことにするわ！」

そう提案したら、電が露骨に嫌そうな顔をしたわ。どうしてえ？

「ええ……、長門さんを電達の部屋に入れるのですか？電は嫌なので、部屋が臭くなりそうなのです。」

「ひっどー！ーい！そんなことないわよ、ね？」

「……ウホ？」

「この反応！絶対信用ならないのです！普段の長門さんを部屋に入れるのは何かされそうで嫌だけど、こっちの長門さんを入れるのも嫌なのです！」

電は猛反対、電は意外と頑固だからこうなったらテコでも動かないわ。

「仕方ないわね、じゃあ私が長門さんの部屋に泊まるわ！」

「大丈夫なのですか？」

「大丈夫大丈夫！電は本当に心配性なんだから！電は自分の部屋で休んでいいわよ、元々は私が一人で頑張るつもりだったんだもの。後はお姉ちゃんに任せなさい！」

「……本当に大丈夫なのですか？」

「ウホ~~~~!ウホホ~~~~ッ!!」

「長門さん、もう寝ましよう。夜中にそんな大声出しちゃみんなに迷惑よ?ほら、窓閉めるわよ。」

「ウホ?」

今、私と長門さんは長門さんの自室にいるの。長門さんは床に敷いた布団で、私は長門さんが普段使っているベッドで寝るつもりよ。

最初は部屋主の長門さんをベッドに寝せようと思ってたんだけど、2メートルを超える長門さんの巨体をベッドに寝せるのは流石に無理があつたわ。

そして長門さんがやたらと外を気にしているみたいだから、試しに窓を開けてみたら何故か夜空に向かって咆え始めたの。

どうしてコンガになつた長門さんがそんなことをするのかしら?遠吠えをするのは犬や狼の仕事でしょ。満月を見ると大猿にでもなつちやうのかしら?でも既にお猿になつちやつてるわよね。それじゃあ逆に元に戻ろうとしているとか?うーん、よく分からないわ。

「それじゃあ電気消すわよ?そこのお布団で眠つてね、お休みなさい。」

「ウホ。」

長門さんは敷布団に喜んで、しばらく上で跳ねたり転がったりしていたけど、それにも飽きたのかゴロンと横になる。それを見て私も電気のスイッチを消す。

身体の大半が布団からはみ出しちゃつてるけど、風邪ひいちゃつたりしないわよね?枕と掛布団も使つてないでほつぽり出しちゃつてるし、コンガになつたことで毛深くなつたから必要なくなつたのかしら?

「……………んっ……………あ、そっか。私、今日は長門さんの部屋に泊

まってるんだった。」

今、何時かしら？トイレに行きたくなつて目が覚めちゃった。

長門さんのお世話をすることに夢中で、自分自身がトイレに行くことを忘れてたわ。

「長門さんの様子は……。」

「ゴゴゴゴゴ……ズズズズズ……。」

凄いいびきね、私よく一緒に寝られたわね……。

どうしましょう？トイレに行きたいけど長門さんを一人にするのは世話係として駄目だわ、でも寝てる長門さんを起こしてトイレに着いてきてもらうのも可哀想だし。

うーん、今は寝てるし、ちよつとくらい離れても大丈夫よね？

「普段使いのトイレはしばらく使えなくなっちゃったし、少し離れた方に行きましょう。」

ちよつと出てくるから、長門さんはそのままお留守番お願いね？それじゃあね。

「ゴゴゴゴゴ………ン、ウホオ？」

「フッフッフ♪夜だ、待ちに待った夜戦の時間だあー！」

ようやく私の時間が来たね。

え、お前は誰だつて？夜戦といったら私しかないでしょ、川内だよ！

夜はいいよね、この時間が私の生きがい！さあ出掛けてたっぷりと夜戦をするぞー！

ズズツ……ズズツ……。

「ん？」

何だろう、今の音？ 雰囲気からして足音かな？ でもそれにしてもそれが少し音が重たかったような？

少なくとも今まで鎮守府で生活してきた中では聞いたことのない音だ。

「誰？ 誰かそこにいるの？」

「……………」

返事がない？ ひよつとして不審者？

そういえばちよつと前に泥棒騒ぎがあったね、あの時は寝ぼけていたからあまり詳しい話は覚えてないけどね。

それで長門が事件は解決したって言ってたけど、結局犯人は見つかってないし、盗まれた物品も大半が壊れちゃっていたし、長門はカマキリがどうか言ってたけど、結局事件の真相については謎のまま終わったんだった。

「これはひよつとして犯人が再び動き出したっていう可能性？」

だとしたら身柄を確保しなきゃマズいよね？

私だつてこの鎮守府の狩娘の端くれなんだから、鎮守府の平和は守らないと。

怪しい人物がいれば捕まえる、もし誰かが寝ぼけて歩いているだけならそれで終わり。

とにかくまず物音の正体を確認しないことには始まらない！

「いいわ、夜は私の領域！ 誰だか知らないけど夜に私から逃げられると思わないことね！」

音のした方に忍び足で近付いていく、どうやら廊下の真ん中に何かいるようだ。

まだ暗いためぼんやりとはしているが、少しづつ相手の姿が見えてきた。

そこにあつたのは全体的に丸くてずんぐりとした大きな物体。

中心からは細長いロープのようなものが上に向かって生えており、左右にプラプラと揺れている。

「え、何これ？」

形からして人じやなさそうだけど、だとしたらこれはなんだろう？
暗くてよく見えないし、もう少し近付いて見てみようかな。

より近付いてみると、その物体とロープはゴワゴワとした短い毛で覆われていることが分かった。

物体の下には二本の短い棒が生えている、まるで足みたい。

そしてロープの生え際でもある物体の中心には、お尻のような形をした灰色の少し臭う物体が……。

「……って本物のお尻じゃんコレ!？」

ブボボ、モワツ!

次の瞬間、お尻から茶色の煙が放たれた。

間近でお尻を観察していた私は避けられるハズもなく、その煙を顔面で受け止める。

そして……。

「うぎやあああああああああ
!!!!!!」

雷ちやんとピンクの長門さん6

「普段使わない場所にある夜のトイレってちよっぴり怖いわね。」

私はトイレを済ませた後、来た道に戻っていた。

長門さんは部屋で大人しく寝てるかしら？

「うぎゃあああああああ!!!」

な、何？今の悲鳴は!?

もしかして事件?とにかく急がなきゃ!!

悲鳴の聞こえた現場、そこで私が見た……というか嗅いだのはお風呂場で散々嗅いだあの悪臭。

そして私を見つけて嬉しそうにしている長門さん。

「ひよっとして私を探しに来てくれたの?」

「ウホー!」

「ありがとう長門さん!でも勝手に部屋を出ちゃダメよ?」

とりあえず部屋から消臭玉を持ってきて、ここの消臭をしないとね。

「あれ?床に何か落ちてる?」

暗くて分からなかったけど、よく見ると床に大きなものが落ちていた。

「……って川内さん!」

床に落ちていた……否、大の字になって倒れていたのは川内さん。

完全に気を失っている様子で、顔は真っ青になっており口からは泡を吐いている。

「大丈夫……って臭い!!」

川内さんの身体から漂う臭いは長門さんのオナラの臭いと全く同じ。

きつと長門さんのオナラを直接浴びちゃったんだわ!

「何事ですか!? 悲鳴が聞こえたのですが。」

「あつ、神通さん。」

駆け付けてきたのは神通さん。

神通さんも寝ていたはずなのに、ちよつとした異変を感じただけですぐに目覚めて駆け付けてくれるから凄いわね。

「実は……………」

「なるほど、そういうことだったんですね。」

「長門さんに悪気はなかったの、許してあげて!」

「安心して下さい、別に長門さんを責めるつもりはありませんよ。夜中に出歩いていた姉さんにも問題はありますからね。それよりこれにはチャンスですよ!」

神通さんは倒れている川内さんを見て何かを思いついたみたい。

「まずは雷さん、この場所と姉さんの消臭をして下さい。」

「分かったわ!」

「それが終わったら私が姉さんを縛り上げます。」

「分かったわ……………えっ?」

「せつかく夜に気絶してくれたんです、これを機に姉さんの夜型体質を治すんですよ! 朝になったら水を掛けて起こしますのです。」

「ええっ!」

「姉さんは本当なら私よりも優秀な狩娘なんです、だって私の姉さんですから! それなのに夜戦以外に対する興味が薄いから、ランクも上がらないし評価もされないんです! だからこれは姉さんに対する私なりの愛の鞭なんです! 姉さんは真人間になって、私を超える狩娘になってもらうんです!」

「ええ……………」

「ウホ？」

「ふわぁ、朝ね……。」

川内さんが気絶して神通さんに縛り上げられたこと以外に特に問題が起きることはなく、無事に朝を迎えることが出来た。

うーん、神通さんの気持ちも分かるけど川内さんが可哀想ね。

神通さんは川内さんに昼に活動してもらいたいんだらうけど、川内さん自身は夜戦が好きなんだからね。

だとしたら長門さんを元の姿に戻そうとしている私の行動も長門さんにとっては余計なお世話で、私のエゴに過ぎないのかしら？

でも長門さんも好きでコンガになったワケじゃないだし、一緒にいながら長門さんを止められなかった私には長門さんを元に戻す責任があると思うわ！

だから長門さんの姿が元に戻るまで私は付き合うわよ！

「ウホア〜。」

朝になっても長門さんはコンガのままね。

寝て覚めたらひよっこり元に戻ってないかと思ったけど、そんなに都合のいいことは起きないわね。

「長門さん、朝起きたらまずは顔を洗ってうがいをするのよ。その後は着替えて朝食に行くからね。」

「ウホホ〜。」

長門さんは嫌がるかと思ったけど、昨日のお風呂で慣れたのか大人しく顔を洗わせてくれた。

洗うといっても濡らしたタオルで拭いただけだけどね。

そして私はパジャマからいつもの格好に着替えて、長門さんには

ヘッドギアを付けて準備万全！
それじゃあ朝食に向かいますよう。

「ウツホホ！ウホホ！アグアグアグアグ！」

「相変わらず汚い食べ方なのです。」

「流石にまだ食器の使い方は分からねえか。」

「もし長門さんが元に戻れなかったら、私がしっかりテーブルマナーを仕込んであげるわ！」

途中で電と天龍さんと合流した私達は四人で朝食を摂ることにした。

長門さんの朝食は昨日と同じで超特盛よ、朝からそんなに食べて胃もたれしないのかしら？

「それで今日の予定はどうするのです？」

「今日は長門さんを連れて海に行くわ！狩娘としての活動をするので、本来の自分を取り戻してもらおうのよ！」

「つまり海に狩りに行くんだな!？」

「そうよ！」

「でも日常生活ですら難儀しているのに狩りなんて出来るのですか？」

電のもつともな疑問、でもそう言われるのは予想してたわ。

「だからこそ二人に相談したのよ！私達三人で長門さんのフォローに入るのよ！」

「なるほどな、オレとしては新しい太刀の試し斬りもしたいし構わないぜ。」

「仕方ないのです、雷ちゃんからのお願いは断れないのです。」
「ウホ。」

というワケで鎮守府近くの浜辺までやって来たわ。

「今回のターゲットはシンカイザザミよ！」

「シンカイザザミ？」

不思議そうな顔をする天龍さん。

「そういえば天龍さんはまだシンカイザザミを知らないんだったわね。」

「シンカイザザミというのは簡単に言えば大きなヤドカリなのです。」

「狩娘にもなつてヤドカリ狩りなんかすんのかよ!？」

電の説明に露骨に顔をしかめる天龍さん。

これはそこらにいる普通のヤドカリと勘違いしているわね。

「まず前提として、カリユード諸島にはヤオザミという大きなヤドカリが生息しているのよ。浜辺や森林に砂漠と色んなところで暮らしているわ!その全長は1.7メートルくらいあるわ!」

「1.7メートル!？」

流石にビツクリしたみたいね。

パツと見だけど天龍さんの身長は160cmくらいよね？

だとしたら自分より10cm以上も大きなヤドカリがいたらそりや驚くわよね。

「ヤオザミは普通のヤドカリと同じように、身体が入りそうなものならなんでもヤドにしちゃうわ!そしてカリユード諸島でヤオザミのヤドになりそうなものといえばイ級みたいな小型深海棲艦の艦装よ、だからそこらじゅうで深海棲艦の艦装を背負った大きなヤドカリが見られるのよ!」

「どこにでも艦装を背負った巨大ヤドカリが生息しているとか、ちよつと出かけるの嫌になってきたな……。」

「心配しなくても大丈夫、ヤオザミはそこまで強くないわ!イ級と同じか、少し強い程度よ!」

「ヤドカリがイ級より強いのか……。」

心底嫌そうな顔をする天龍さん。

今でこそ大して強くないヤオザミだけど、何故か発見当初のヤオザ

ミは異様に強かったらしいわね。

走っても逃げられないほどの高速移動と異常な威力のハサミ攻撃で、うかつにテリトリーに入った初心者狩娘をバツタバツタとなぎ倒していたということは天龍さんには黙ってましよう。

「大きく成長したヤオザミは大型深海棲艦の艦装を背負うようになるわ、そういった個体をシンカイザミと呼ぶのよ！そしてシンカイザミは深海棲艦の艦装を背負い続けたことで海上移動が出来るようになったのよ、テリトリーに入ったものに対する攻撃性が高いことから深海棲艦と同じように狩猟対象になっているわ！」

「ちなみにシンカイザミは全長5メートルくらいあって、艦装のヤド込みで10メートルを超える個体も珍しくないのです。」

「10メートル!?!」

天龍さんがものすごくビックリしてる。

そりゃ10メートル超えのヤドカリと言われれば誰でもビックリするわよね。

「巨体を生かした接近戦以外にも、深海棲艦の艦装を再利用しての砲撃戦も得意とする油断ならない相手なのです。しかもヤドも甲殻もとっても堅くて、並大抵の攻撃じゃ傷一つつかないのです。だから油断するとあつという間にボコボコにされるのです。」

「ちよつとお腹痛くなつてきた、帰つていいか?」

天龍さんの顔色がみるみる悪くなってきた、電はちよつと脅かし過ぎね。

「怖がらなくても大丈夫、そのために私達がいるのよ。私達の使うハンマーはザザミの堅い甲殻やヤドを打ち砕いて破壊することが出来るわ！狩娘は協力して狩りをするのが基本、私のことならいくらでも頼っていいからね！それにへ級に勝てたのならシンカイザミにだって勝てるわ、シンカイザミは一流の狩娘を目指す上で避けては通れない相手なんだから！」

「分かった分かった分かったよ！そもそもこのオレが実際に戦いもしないで、前評判を聞いただけでビビッてたまるかってんだ！太刀の試し斬りだってまだなんだ、行ってやろうじゃねえか！」

どうやら天龍さんはやる気が出てきたみたい、やったわね！

一方で肝心の長門さんはどうと……。

「……ウ、ウホ。」

「あら、どうしたの長門さん？」

何だか様子が変わね？すごく不安そうにしているわ。

「ひよっとして海が怖いんじゃないですか？」

「海が怖い？狩娘なの？」

「昨日猿は水が嫌いだって教えたのです。」

そういえばそうだったわね……。

ニホンザルとセリエナの新種のお猿さん以外は基本的にお風呂に入らないんだっけ？

「でも長門さんは海で戦う狩娘なのよ？」

「今の長門さんは狩娘じゃなくて猿のコンガなのです、猿なんだから水は苦手に決まってるのです。」

「でもお風呂好きのニホンザルじゃないのに、お風呂にはちゃんと入れたじゃない？」

「お風呂は浅いから入れたのです。電達は海上に立てる狩娘だから感覚がマヒしてるのかもしれないけど、普通の人間でも足の届かない深さの海に入るのは怖いものなのです。ましてや水嫌いの猿にとって嫌なんてレベルじゃないのです！そもそも昨日お風呂に入れるのにもどれだけ苦労したか覚えてないのですか！」

「むむむ……。」

長門さんの方をしてみると相変わらず嫌そうな顔をしている。

やっぱりこれって私の善意の押し付けに過ぎないのかしら？

嫌がる相手に無理強いするのはよくないって言うけどどうしましよう？

「長門さん大丈夫、安心して。狩娘にとって海は一番本領を発揮出来る場所なの。まずは浅瀬で慣れていきましょう。」

長門さんは嫌がってるけど、お風呂だって慣れたんだし海だって入ってみれば案外大したことないかもしれないわ！それに試してみないで辞めちゃうのもよくないと思うの。

可哀想だけど本当に長門さんのことを想っているのなら心を鬼にするのよ雷！

私は長門さんの手をそつと引いて、浜辺からゆつくりと海に入っていく。

すると私の両足は沈むことなく海面をしつかりと踏みしめた、水面歩行は狩娘……というか艦娘の基本能力の一つね。

へっぴり腰の長門さんも私に引つ張られることで少しずつ海へと入っていき、そして私と同じように海面に立つ……ことはなくそのままジャブジャブと膝までが海に浸かってしまった。

長門さんの両足が踏みしめているのは海面ではなく砂地だ。

「ウ、ウホオ……。」

「あれ、おかしいわね？」

先ほどにも増して心底嫌そうな顔になった長門さん、早く陸に上がりたくてしょうがないといった感じね。

「これじゃ普通に海に入ったのと変わらないのです。」

「どうすんだよ、このまま連れてったら溺れちまうんじゃないか？」

天龍さんの言う通り、このままじゃ長門さんを連れていけないわ！

こういうときに私がすべき行動は……。

「どうしたの？狩娘は生まれつき海の上に立てるように出来てるのよ！気持ちの問題よ！出来ないと思うから出来ないのよ、だったら出て当然と思うの！そうすれば立てるわ！長門さんなら出来る出来る！」

応援あるのみ！某熱血元テニスプレイヤーさんや、バルバレの前提督さんを真似してみたわ！

実際艦娘や狩娘は意識して水面に立っているワケじゃないわ。立てるから立てる、それだけよ。

本能的に立つ行為と沈む行為を切り替えられるから、自由に歩くことも出来れば泳ぐことも出来るの。

みんな出来て当然のことなんだから長門さんにだって出来るわ、頑

張って！

「ウホ……。」

「だけど相変わらず長門さんの足は沈んだまま、さつきから何一つ状況は変わってない。」

「うーん、どうしちゃったのかしら？」

「これは完全に猿化しているのです。」

「どういうこと？」

「つまり狩娘としての力が失われているってことなのです！今の長門さんは狩娘ではなく、単なるコンガなのです！」

「要するに狩娘じゃねーから水面に立てなくなっただってことだろ。」

「そういうことなのです。」

「ええっ!?!どうしましょう、これじゃ連れて行きようがないわ！」

「長門さんに狩りをさせようと思って連れてきたのに、これじゃ狩り以前の問題だわ！企画倒れよ！」

「でももう既にシンカイザミの狩猟クエストは始まっちゃってるから今更帰れないわ！それに四人で狩猟をするって書類を提出しちゃったのよ。」

「だったら長門さんはここに置いてくしかないのです。」

「長門さんを置き去りに？」

「そうね……長門さんを一人残して三人でシンカイザミを狩りに行く、本当はそれがベストなんでしょうね。だけど私にそんなことは出来ないわ！」

「分かったわ、それなら私と長門さんがここに残るわ！悪いけどシンカイザミの狩猟は電と天龍さんで行って来てくれる？」

「うーん。確かにこの長門さんを一人にするというのも、それはそれで不安なのです。」

「オレとしては武器の試運転も目標の一つだしな、試し斬りが出来るのなら何でもいいぜ。」

「決まりね！」

「行ってらっしゃい！」
「ウホ。」

海に出ていく電と天龍さんを見送る私と長門さん。

さて、することなくなっちやたけどどうしようかしら？

雷ちやんとピンクの長門さん7

「うーん。狩りが始まっているのに出撃せずにベースキャンプに残るのって初めてだから、何をしたらいいのかしら？」

電と天龍さんを見送ってからすることがなくて手持ち無沙汰だわ。ただ時間を無駄にするのも嫌だし、みんなのためにキャンプのままで携帯燃料でも作っているべきかしら？」

「ウホ♪」

ふと長門さんの方を見てみると、暇潰しのつもりなのか器用に尻尾を使ってブレイズブレイドの刃を出し入れして遊んでいた。

「もう、刃物はオモチャじゃないのよ。怪我でもしたらどうするの。」
とはいえ尻尾で大剣を持ち上げられるだけじゃなくて、ちやんと刃の出し入れもこなせるなんて凄いわね。

コンガのままでも大剣を使えるんじゃないかしら？」

「……………そうよ、思い付いたわ!!」

「ウホ？」

「いい？長門さん、よく見といてね。」

私は長門さんからブレイズブレイドを受け取り、浜辺に漂着していた少し朽ちた丸太の前に立つと武器を構えて力を込める。

ちなみに私のイカリハンマーは邪魔になっちゃうからベースキャンプの休食用テントの中に置いてきたわ。

「こうやって力を溜めて…………力が溜まり切ったら脱力しちゃう前に解き放つ!!」

振り下ろしたブレイズブレイドは、ズダンと大きな音を立てながら丸太に半ばまで突き刺さる。

「どお、これが溜め斬りよ。」

うーん、大剣は普段使わない武器だから手ごたえがイマイチね。力を溜めること自体はハンマーで慣れてるけど、大剣は溜めてる間に動けなかったり溜め過ぎると脱力しちゃうから私には難しいわ。「さあ長門さん、今のを真似してみて。大剣は溜め斬りに始まり、溜め斬りに終わるのよ！」

大剣を長門さんに返す、大剣は本来長門さんの得意武器だからすぐに使いこなせるようになるわよ！

「ウホ。」

長門さんは相変わらず尻尾で軽々と大剣を持ち上げる。

そして丸太に向かってお尻を向けると大剣を振り上げ力み始めた、力み過ぎてそのままオナラしたりしないわよね？

「ウホッ。」

そのまま長門さんが大剣を振り下ろすと、丸太は切断されるといふより力任せに叩き割られて真つ二つになってしまった。

「ウソっ!?なんて破壊力……。」

フォームは変だったけど私の振り下ろした大剣なんかとは比べ物にならない破壊力ね。

それどころか狩娘の頃の長門さんよりも威力が上がっているんじゃないかしら？

コンガになったことでパワーが増したと考えるのが普通ね、やっぱり動物のパワーって凄いのね。

その後も大剣の基本的な動きを一通り教えていく。

私のメイン使用武器じゃないから本当に基本的なことしか教えられないけどね。

長門さんは尻尾を使っているせいか動きこそ独自のアレンジが多く入っているものの、恵まれた体格と持ち前のパワーで重いはずの大剣を軽々と扱い、次々と砂浜に斬撃の痕を刻み込んでいく。

間違いなく私よりも大剣を使いこなしてるわ。

「武器を使った後は砥石で研いで手入れしなきゃいけないわ。これを

しないと斬れ味が落ちて武器の威力が落ちるの。」

武器の使い方について教えることがなくなったので、続いて武器のメンテナンスについて教える。

「これが砥石。石ころの次くらいに手に入れやすい鉋物で、どこでも簡単に拾えるわよ。それじゃ実際にやってみるからよく見ててね。」

長門さんに見えるようにブレイズブレイドを研いでいく。

ブレイズブレイドは小さな刃の一枚一枚まで研がなきゃいけないから少し面倒ね。

「どう、分かったかしら？」

「ウツホー！」

「……………どうしましょう、もう教えられそうなことがなくなっちゃったわ。」

またしても暇になっちゃう、こういうときはどうすべきかしら？

この状況で私が他に長門さんにしてあげられることは…………？

そもそもさつきから私はどうしてこんなに焦っているの？

なんで長門さんにしてあげられることばかりを探しているの？

ここで電と天龍さんをのんびり待っていればいいだけなのに、どうして長門さんに何かを教えてあげようとかばかりしているのかしら？

いえ、本当は分かっているわ。見て見ぬフリをしているだけ。

このまま誤魔化し続けるというのは長門さんに対して失礼よね…………。

せつかく二人きりなんだし、本当のことを話して気持ちの整理をしましょう。

「…………長門さん、砂浜に座ってくれる？少しお話ししましょう。」

砂浜に体育座りで座ると、隣の地面をポンポンと軽く叩いて長門さんにも座るように促す。

スカートのお尻に砂が付いて汚れることなんて気にしない。

長門さんも私の隣にドスンと腰を下ろす。

「長門さん、ちよつと長いけど聞いてくれる?」

「ウホ?」

「私ね、真つ先に長門さんの世話をするって言い出したでしょ?あれね、9割は長門さんへの恩返し。そして長門さんの助けになろうと思ったからよ、それは本当よ。だけど残りの1割は誰かの世話が焼きたくてしようがなかったからなの。」

「……。」

長門さんは黙つたまま座り続けている。

いつものように尻尾で一人遊びをするわけでもなく、周囲に気を取られることもない。

これは私の話を聞いてくれていると取つていいのかしら?

「あのね、私つて人に頼られることが好きなの。誰かの世話を焼くことが好きで好きで堪らないの。おかしいでしょ?だけどクロオビ鎮守府では誰も私に世話を焼かせてくれなかったのよ。」

「……………」

「妹の電はしつかりしてるから、私がしてあげられることは案外少ないの。それどころか私の方が電に世話を焼かれているような気までするわ。龍田さんも自分のことは全部自分でやっちゃうし、天龍さんの世話も龍田さんが焼いてるからやっぱり私が出る幕はないわ。神通さんは私以上に何でも出来る万能な人だから私が出しゃばると逆に邪魔になっちゃうし、川内さんは川内さんで夜型人間だから私が世話を焼こうにも洗濯ぐらいしかすることがないわ。提督の仕事も全て秘書艦の神通さんが引き受けてるし、お金儲けとか自分自身のこととかは結局全部自分でやっちゃうわ。あれでも提督に選ばれる程度には優秀な人だからね。」

「……………」

「そして長門さんも基本的に私に世話は焼かせてくれないわ。でも今のコンガになった長門さんなら自分で出来ることは限られてるでしょ?だからこれはチャンスだと思ったの。今の長門さんなら私に存分に世話を焼かせてくれるって。」

「……………」

「ずっとこんなことを考えていたの、ごめんなさい。全てが善意じゃなかったのよ。」

「……………」

「どう、これが本当の私。幻滅したでしょ?」

長門さんは黙って最後まで聞いてくれた。

こんなことを話したからにはきつと嫌われちゃうわね、でもこれだよかったのよ。

この気持ちを隠したままではいるのは長門さんを騙して利用しているのと同じよ。

「ウホ……………」

頭を優しく撫でられている?

顔だけ長門さんの方に向けてみると、長門さんが尻尾を使って私の頭をそつと撫でてくれていた。

「慰めてくれているの?ふふふ、ありがとう。」

「ウホ!」

お蔭さまでちよつぱり元気が湧いてきた、重くなった心がすつと軽くなった気がするわ。

やっぱり長門さんはどんな姿になっても優しいわね、こんな私のことを見限らないでくれて本当にありがとう。

コンガになったこと自体は長門さんにとって災難でしょうけど、お陰で私の心の内を聞いてもらえた。

今だけはドキドキノコに感謝しなくちやね!

「正直な気持ちを話してスッキリしたわ、湿っぽいのはこれで終わり!気持ちの切り替えも兼ねてランチにしましょ。長門さんが食べるだろうと思つてアオキノコとこんがり肉を使ったお弁当を作つてきたのよ!」

「ウホ〜!」

長門さんとランチを食べた後、腹ごなしも兼ねて再び二人で武器の素振りをしているとゴトゴトという聞きなれた音が聞こえてきた。

海の方に目を向けてみると、レンタクに揺られながら電と天龍さんが帰って来ていた。

「雷ちゃんただいまなのです!」

「戻ったぜー!」

「お帰りなさい! その様子だと狩猟は成功したみたいね!」

さつきまで振り回していたイカリハンマーをキャンプに片付けると二人を迎え入れる。

背負ったままでもいいんだけど邪魔になるからね。

一方の長門さんはブレイズブレイドを持ったまま、尻尾で持てる上に力もあるから邪魔に感じないのかしら?

「あのカニ滅茶苦茶堅かったな、新しい武器だったのに弾かれまくって凹むぜ。」

「天龍さんは真正面から斬り掛かって、弾かれたところをハサミに捕まって齧られてたのです。電がザザミの脚を叩いて怯ませなかったら、そのまま口の中に放り込まれていたのです。」

「言うなよく。」

「天龍さんはいきなり攻撃したりしないので、もう少し観察するべきなのです。初見の相手に迂闊過ぎるのです。」

雑談しながら剥いてきた素材を片付けたり、怪我の手当てや武器の手入れをして帰還の準備を進めていく。

「ウホ?」

「長門さん?」

そんな中、ふと何かに気が付いたように長門さんが山の方へと視線を向けた。

「ウホ~~~~! ウホ~~~~ツ!!」

「長門さんっ!? 待って、どこへ行くの!?!」

そして昨夜のように遠吠えをすると、突然山の方を目指して駆け出

してしまった。

慌てて声を上げるが長門さんが止まる様子はない、このままじゃ長門さんを見失っちゃう！

長門さんは今コンガなのよ！今の状態だところから一人で鎮守府に帰ってこれるかどうかすら怪しいのに、山なんかに入ったら完全に行方不明になっちゃうわ！

こうしちゃいられない、今の私に出来ることは……。

「あつ、雷ちゃん!?武器も持たずに山に向かったら危ないのです!」「何やってんだ!?ちよつと待て!」

長門さんを追い掛けるのみ!

電と天龍さんの制止も聞かずに、私も山を……というか長門さんの後姿を目指して走り出す。

止めてくれたのに無視しちゃってゴメンね、でも長門さんを見失うワケにはいかないの!

武器が無いのは確かに不安だけどテントで装備していく暇なんてないわ、今はとにかく追い掛けなきゃ!

長門さんの後姿と足跡を頼りに追跡を続けていたけど、徐々に引き離されてきた。

でっぷりとした見た目と裏腹に、四つ足で駆け回る長門さんの動きは非常に軽快だ。

山道を進むにつれて木が多くなってくると、大ジャンプで一気に木を登り、長くて鋭い爪と強靱な足腰を使って木から木へとひよいひよい飛んで移動する場面も増えてきた。

この移動方法も走るのと遜色ないほど速い上に、周囲に木さえ生えていれば足元が草むらだろろうがでこぼこ道だろろうが関係なく一定のスピードを出せる。

何より足跡を残さないから追跡が大変よ、以前天龍さんが言っていた導虫ってというのが欲しいわ!

どうして大きく重たい大剣を尻尾で持ったまま、あそこまでアクロバティックな動きが出来るのかしら?

ひよっとして長門さんが大剣を持っていなかったら、もっと早かったんじゃないの?

「はあはあ……長門さん、待ってえ……。」

走り続けて流石に疲れてきちゃった、本音を言うところちょっと休憩したいわ。

ただここで足を止めたら本当に長門さんを見失っちゃう。

長門さんはどんだん山の深いところに進んでいく、普段じゃ絶対に通ることのない場所だわ。

道らしい道もないありのままの自然が行く手を阻む、進むだけで精一杯よ。

「なが……あつ!?きやああああ!!」

疲れて足元がおぼつかなくなっていたからか、それとも泥を踏んだせいで靴が滑りやすくなっていったためか、はたまた長門さんを追うために上ばかり見ていて足元を見ていなかったせいか、私は前方が急な斜面になっていたことに気付かず、そのまま足を滑らせて転がり落ちてしまった。

「あう、いったあ〜い!」

斜面をゴロゴロと転がって全身をあちこちにぶつけながら落ちたせいで身体中が物凄く痛いわ。

それに髪の毛には木の枝が何本か引っ掛かって絡まっちゃってるし、服は土で汚れちゃった。

だけど長門さんを見失ってしまったことに比べれば、痛みや汚れなんか些細なことよ。

そしてそんなことを気にしていられない理由がもう一つ。

「いっ、どっなの?」

私が落ちた場所は完全に見覚えのない場所だった。

暗い森の中でも特に陰湿で淀んだ空気が漂う、他のエリアとは明らかに雰囲気異なる薄気味悪い場所。

山自体普段から立ち入る機会はそう多くないけど、それでもマップに記されたエリアには立ち入ったことがある。

だけど今私がいる場所は明らかに一度も入ったことのないエリアだった。

恐らく長門さんを追い掛けるためにマップのルートを無視して無理矢理進んだせいで、通常エリアの外に落ちちゃったんだわ。

私が落ちた斜面は一般的な滑り台よりも角度が急だから、登るのは無理ではないけどとても難しそう。

このまま登って来た道に戻るのには現実的じゃないわね、戻れる道がないか探しましょう。

そう思って歩き出したのだけ……。

「さっきからそこら中に白くて丸いものが落ちていたり、木にぶら下がったりしている?」

私の身長と同じくらいか、それ以上に大きな白くて丸い物体。

初めて見るわね、これはなにかしら? ちょっと気味が悪いわ。

BGM：暗闇の捕食者

「クアア……。」

「えっ? キヤツ!」

どこからともなく聞きなれない動物の鳴き声のようなものが聞こえたと思った次の瞬間、私は樹上から飛んできた白い塊に全身を絡めとられ、その場から一步も動けなくなっていた。

「な、何よこれ? クモの糸??」

私の身体の自由を奪ったその物体はどこからどう見てもクモの糸、ただど量が半端じゃないわ。

クモの糸の強度は同じ太さの鋼鉄の4〜5倍っていうけど、そんなものが荒縄のように私の上半身を幾重にもきつく縛り上げて地面と

つなぎ合わせている。

慌てて糸が飛んできた方を向くも、そこに糸を飛ばした犯人の姿はなかった。

その代わりこの薄暗いエリアの木という木全てに、エリア全てを覆い尽くさんばかりの巨大なクモの巣が張られていることが分かった。

この薄暗さと空気の悪さは張り巡らされたクモの巣によって日光や風が遮られていたことによるものだったのね。

よく見れば周囲にある白い球体も全てクモの糸の塊で、更に目を凝らせば薄っすらと糸の中に何らかの生物の亡骸が入っているのが見えた。

「ひよつとして、ひよつとしなくてもこれはクモに食べられた犠牲者の成れの果てで、私もこれからこの子達の仲間入りをするの!？」

そんなのイヤよ！

どうにかして拘束を解こうと身じろぎをするものの、見た目以上に強固な糸はビクともしない。

「おーい、雷、長門！いるのか？返事をしろ！」

顔だけで振り返ってみると、天龍さんがスライディングで斜面を滑り降りてきた。

追い掛けてくれていたの!？」

「天龍さん!？」

「雷、そこにいたのか！坂の手前で足跡が無くなってたから焦ったぞ……っでどうしたんだよその格好は!？」

糸に巻かれた私の姿に驚いた天龍さんは、坂を降りきると私の方に駆け寄ってこようとしている。

来てくれたことはすっごく嬉しいんだけど……。

「天龍さん来ちゃダメ！……ここにはクモがいるわ！」

「クモ？クモがどうした？」

私の説明が悪かったのかキョトンとした表情を見せる天龍さん。

ああもう、なんて説明すればいいのかしら!？」

私が頭を悩ませていると、突然巨大な影が天龍さんの背後に音もなく降り立った。

「天龍さん後ろよッ!」

「あん、後ろ?」

天龍さんも私の声に反応して振り返ろうとするが、それより影が動く方が早かった。

天龍さんの腰の辺りに何かを素早く突き刺す影。

「ぐっ!? な、何だ……急に眠気……が……。」

天龍さんは膝から崩れ落ち、そのままうつ伏せに倒れてピクリとも動かなくなってしまった。

大きな影は天龍さんを無力化したと判断したのか、カサカサと生理的嫌悪感を覚える音を立てながら天龍さんを跨いでこっちに近付いてくる。

近付くにつれてハッキリとしてくる相手の姿、それはまさしく異形だった。

その正体は全長10メートルはありそうな巨大なクモ。

不気味な姿に似合わない美しい純白の甲殻、それを隠すように全身を黒いゴム質の皮で覆っており、背中からは何本もの紫色をした結晶のような棘を生やしている。

巨大な二本の鎌状の爪の間に挟まれた、比較的小さな頭部にある六つの青い複眼は私を捉えて離さない。

クモは私が動けないのを確認すると、びっしりと鋭い牙の生えた長い棒状の大顎を口内から露出させた。

牙からは紫色の液体がポタポタとしたり落ちており、一目で毒液だと分かる。

「クアア……。」

クモは私の目の前まで来ると、湿った音を立てながら毒の大顎をまるでハサミのように大きく開く。

それで私を挟むっていうの!? こんな巨大なノコギリバサミに挟まれたら毒があるうがなかるうが死んじやうわ、ギロチンに掛けられるようなものよ!

「イヤよ。助けて、助けて……。」

「クアアアアア!!」

「長門さん助けてーっ!!」

大顎が閉じられようとした次の瞬間、縦回転しながら飛んできた何かが勢いよくクモの左側頭部に命中し、クモは右に大きく転倒した。

「ギイイ!？」

「えっ?何!?何が起こったの?」

クモにぶつかつたことで勢いを無くし、その場にズンと音を立てて突き刺さつたのは見覚えのあるブレイズブレイド、これってまさか……。

「ウホーっ!!」

「長門さん!？」

私を守るように樹上からクモと私の方に飛び降りてきたのは長門さん。

重い大剣を投げ付けたっていうの!?やっぱり凄いパワーだわ!

長門さんはクモの方を向いて二本足で立ちあがると、顔とお尻を真っ赤にして腰を振りつつオナラをする。

助けに来てくれたのは嬉しいけど、こっちに向かつてオナラをされたから臭いわ!

「クアアア!!」

顔に斬り傷が付いたクモも体勢を立て直し、青かつた目を赤く光らせながら鎌を振り上げて威嚇をする。

「長門さん、助けに来てくれてありがとう。でもこのままじゃ長門さんも危ないわ!私のことはいいから早く天龍さんを連れて逃げて!」

確かに長門さんのパワーは凄いけど、足手まといの私と天龍さんを庇いながら一人でクモと戦うのはいくらなんでも無茶よ!

あのハサミで挟まれたら流石の長門さんだって瀕死になっちゃうわ!

私は地面に縫い付けられているけど、天龍さんはただ眠っているだ

け。

長門さんのパワーなら天龍さんを担いで逃げられるわ！

「ウホッ。ウホ~~~~！ウホホ~~~~ッ!!」

しかし長門さんは私の方を見て大丈夫とでも言うように軽く頷くと、先程のように遠吠えを始めた。

何をしているのかしら、と疑問に思った次の瞬間！

「コココウホッ！ウホッ！ウホッ！」「コココ」

長門さん……じゃなくて何頭ものコンガが森の奥から木々を飛び移りながら次々と姿を現すと、そのままクモを取り囲む形で飛び降りる。

「ウホ!!」

そして最後に一際大きな体格と立派なトサカを持ったコンガのボス、ババコンガが樹上に現れると長門さんの横にドシンと大きな着地音を立てて降り立った。

「ウホ~~~~ッ!!」

「コココウホ~~~~ッ!!」「コココ」

ババコンガが尻尾を使ってお尻からフンを取り出しながら咆え声で群れに号令を出すと、長門さんを含めたコンガ達も同様に尻尾を使ってお尻からフンを取り出し、そしてそれを一斉にクモに向かって投げつけ始めた。

ビチャビチャビチャビチャ!!!

き、汚いわ……。

いくら襲われて死にそうになっていたとはいえ、この仕打ちはいくら何でもあんまりじゃないかしら？

クモは全身を茶色の汚物塗れにして、息をするだけで死にそうな程の異臭を漂わせている。

表情筋を持たないクモだけど、明らかに苦悶の表情を浮かべているように見えるわ。

「クカカカッ!?!?」

激臭に耐えられなくなったクモは尻から糸を伸ばして近くの木の枝に引っ掛けると、糸を伝ってその木に飛び移った。

そして次の木に糸を飛ばし、まるでターザンのように振り子移動をしながら次々に木々を移動して山奥へと消えていった。

BGM：Triumph!

「「「「「ウホホー！ツ！！」「」「」「」」」」」

勝鬨を上げるコンガ達。

「ウホホッ！」

クモが退散したのを確認して顔とお尻を普段の色に戻した長門さんは、鋭い爪と腕力で私に巻き付いた糸をあつさり引き千切ってくれた。

「本当にありがとうございます長門さん！でもちよつと、というか物凄く臭いわ……。」

長門さん一人のフンだけでも堪らなく臭いというのに、コンガの群れと親玉のババコンガまで加わってこれでもかという程にフンをばらまいたから、ここ周辺にはこの世のものとは思えないような悪臭が漂っている。

私が臭いで気絶しなかったのは風上にいたからね、とにかくこの惨状をどうにかしないと……。

ポーチからありつたけの消臭玉を取り出すと、先程までクモがいた場所に片っ端から叩きつける。

大量の消臭玉の効果でようやく悪臭は収まった、一個でも数が足りなかったらと思うとゾツとするわね。

「雷ちやくん、いるのですか？きやつ、崖なのです！わあああああ！！」

崖の上から電の音が聞こえてきたと思ったら、さっきの私のように斜面をゴロゴロと転がり落ちてきた。

「ぐええっ!？」

「い、痛いのですー！」

そして未だに崖下で昏睡していた天龍さんに激突して制止、その衝撃で天龍さんも目が覚めたみたいね。

「はっ、そうだ!? 雷、無事か……って何だこりやああああ!?」
「雷ちゃん、いるのですね! 武器も持たずにこんな山奥まで入っちゃダメって……はわわっ!? 一体どうなってるのです!?!」

「長門（さん）が何人もいる（のです）!?!」

コンガの群れを見て悲鳴を上げる二人。

「その子達は普通のコンガよ、長門さんじゃないわ……あつ、そういうことだったのね!!」

長門さんの今までの行動がようやく結びついたわ!

「長門さんが遠吠えしていたのは仲間と連絡を取るためだったのね! そして山に向かったのは仲間と合流するためだったんだわ! そうなんでしょう?」

「ウホ。」

思わず長門さんに聞いてみる、すると長門さんもそうだとやっているかのように頷いた。

「いやいや、コンガになったとはいえ長門は長門じゃん。野生のコンガが仲間なワケないだろ。」

「そうなのです。何で長門さんが野良コンガと連絡取る必要があるのです? 本気で野生に帰るつもりなのですか?」

「うーん、そう言われるとそうなんだけど……。」

しかし天龍さんと電に即座に否定される、でも今までの長門さんの行動を振り返るとそうとしか思えないのよね。

そんな風に考えていると、茂みをガサガサと揺らしながら何者かがこちらに近付いて来ているということに気が付いた。

ひよっとしてクモが戻ってきたのかしら? それとも新たなコンガ?

その正体は……。

私の叫びに負けず劣らずの音量で叫び返す女性、ということとは……？

「じゃあこっちの長門さんはただのコンガで、そっちの女の人が本物の長門さん!？」

「さっきからそう言っているだろう!?!というかそいつが私に見えるのか?ちよつとシヨックだぞ!？」

壮大にシヨックを受ける痴女改め本物の長門さん。

「やっぱりこっちのコンガは本物の長門さんじゃなかったのですね。」
「でも初めて会ったときに長門さんに長門さんかどうか聞いたらそうだって言ってたじゃない!？」

「だからそれは偶然だって電は言ったのです。最初から長門さんカツコカりにそんな意図はないのです。」

思わず電に反論するものの、すぐさま論破されてしまう。

「それじゃあつまり……。」

「そうなのです、雷ちゃんが早とちりしてこっちの長門さんを本物の長門さんと思ひ込んだだけなのです。」

「とはいえオレらにも責任はあるぜ。半信半疑だったとはいえ、最終的に雷に賛同してこの長門を受け入れることに決めたのはオレ達自身だ。だから雷だけが悪いワケじゃないんだぜ。」

天龍さんが庇ってくれたお陰で少しだけ気分が軽くなったわ。

「というか二人ともコンガの長門さんのことをそのまま長門さんと呼ぶことにしたのね……。」

「まあそれもそうなのです。そもそも本当に悪いのは……。」

「そう言うと電は本物の長門さんをジロリと睨んだ、流石の長門さんも電に睨まれると思っていなかったのかビクリとたじろぐ。」

電って本気で睨むと結構迫力があるのよね。

「雷ちゃんは本気で長門さんがコンガになったと思って責任を感じていたのですよ!?!それなのにどうして長門さんはコンガの群れに混ぜられてターザンごっこに興じているのです?。」

「ま、待ってくれ！こっちにも事情があるんだ！」

長門さんは電に詰め寄られ、後ずさりしながらも必死に事情を説明し始めた。

「昨日私がドキドキキノコを食べたのは覚えていいるだろうか？そして……えっと……彼らのことはコンガというんだな？それで私はこの山から随分と離れた場所にあつたコンガの群れの真ん中に丸裸で放り出されたのだ。」

「「は？？」」

ちよつと何を言っているのか分からないわ。

「ドキドキキノコには不思議な効果があると説明しただろう？何の因果か私がキノコを食べる時と完全に同じタイミングで、そっちのコンガもドキドキキノコを食べたらしい。冗談抜きでコンマ秒レベルまで一致していたのだろう。それで装備やアイテムといった持ち物は残したまま、お互いの位置だけが入れ替わってしまったんだ！」

そんなことつてありえるのかしら？

確かにドキドキキノコはモドリ玉の原料になったりするんだから位置の入れ替わりくらいなら起きてても不思議ではないとはいえ。

いえ、それよりももつと気になることがたつた今出来ただけど……。

「長門さん、どうしてこっちの長門さんがドキドキキノコを食べたことを知ってるの？」

「そりゃこいつらから聞いたからな。」

そう言つて長門さんが親指で指差したのは当然のようにコンガの群れ。

「聞いたつて、長門さんコンガの言葉が分かるの!？」

私からしたらウホウホ鳴いているようにしか聞こえないわ……。

「何となくだがな。多分ドキドキキノコの効果だろう、そっちのコンガもお前達の言葉を理解したりしなかつたか？」

言われてみれば心当たりがあるわね。

つまりこっちの長門さんが私の言うことや話を聞いてくれたのは本物の長門さんだったからじゃなく、ただ単に話が分かるようになったからだったのね。

コンガと私達とで知能レベルに差があるから流石に全てを理解したようには見えないけど、少なくともニュアンスとかは間違いなく伝わっていたと感じるわ。

「それでな、この群れのボスはもういい年で、そろそろボスの座を降りようとしていたらしい。そして次期ボス候補だったのがそいつだ。」

そう言つて長門さんが指さしたのはこっちの長門さん。

「ところがその次期ボス候補が急にいなくなつたんだ。これは群れの存亡に関わる事態だろう？だから群れはそいつを探し始めたんだ。」

なるほど、だから連絡を取り合うために遠吠えをしていたのね。

「それで無事が分かつたから、互いに合流するために山を移動していたんだ。」

長門さんが突然山を目指して走り始めたのにはそう理由があつたのね。

「ちなみにもしそいつが見つからなかった場合、私が次の群れのボスを務めるところだった。」

「「はっ。」」

ど、どうしてそうなるのかしら？

「話すとき長くなるのだが……………」。

~~~~~ 『先日、ドキドキノコを食べた直後の出来事』 ~~~~~

「ゲホッ、ゴホッ……。す、済まない雷、心配を掛けたが私は無事だ……ん？」

「ウホ？」 「ウホ？」 「ウホホ？」  
「は？」

緑の煙が晴れてみればそこは見知らぬ景色、雷の代わりにいたのは初めて目にする2メートル前後のピンクのゴリラ、それも大群。

流石の私も展開に付いていけずに唾然となった。

だが驚いたのは彼らも同じだったのだろう、なにせいきなり次期ボス候補が見知らぬ女に変わっていたのだから。

ちなみにこの時の私はまだこのコンガという生き物の正式名称どころかどんな生き物なのかすら知らない初見状態であり、当然私が次期ボス候補と場所が入れ替わったということも知らなかった。

「ウホ？」 「ウホホ？」

「いきなり誰だとは何だ、とんだご挨拶だな！しかも全然毛が無いだと、失礼な!?私はクロオビ鎮守府の狩娘、長門だぞ！どこをどう見たら私のことがハゲに見える!?……………あれ、何で私は普通にゴリラと喋ってるんだ？」

私は当然コンガ達に奇異の目で見られた。

そして私はコンガの言葉が分かることを不思議に思いながらも、自分の置かれた状況も忘れてコンガ達に反論していた。

ここでコンガ達に敵対されなかったのは不幸中の幸いなんだろうな。

「ブモオオオ!!」

「うおっ、今度は何だ!?!」

だが、突然木々を掻き分けながら現れたドスファンゴにそんなことはどうでもよくなったよ。

「ウホ!?!」 「ウホッ!!」

現れたドスファンゴは最小金冠という程ではないが、そこそこ小さな個体だ。

しかしそれでも分類上は中型モンスターであり、体格が小さいからと言って弱いということにはならない。

小型モンスターであるコンガは自分達より格上であるドスファンゴの突然の出現に驚いたのか、慌てて木に登り始めた。

ドスファンゴに対抗出来そうなババコンガが丁度群れを留守にしていたのも理由の一つだろう。

「ブルルッ!!」

「ほう、私に戦いを挑むつもりか? いいだろう、この長門受けて立つ……………ん? ……あれ、私の大剣は?」

唯一地上に残った私をターゲットにしたドスファンゴ。

とはいえ私は既にドスファンゴの狩猟経験があるし、ドスファンゴ如きに舐められたままでの面白くないのでここは臆せず立ち向かう。

そう考えた私は売られた喧嘩を買うべく背中の大剣に手を伸ばした……………のだが、しかし手は空しく宙を切った。

ここで異常を感じた私は自分自身の姿をよく見てみる、すると……………。

「なっ!? 丸腰どころか全裸ア!? インナーすら着ていない!」

私は生まれたままの姿でコンガの群れの真ん中に放り出されていたことによく気付いたのであった。

バルバレ鎮守府の提督だってインナーは着ていたんだ、全裸でモンスターに対峙したアホなんて私が世界初じゃないだろうか?

鎮守府の仲間達や陸奥にすら見せたことのない全裸をこんなところで、それもサル相手に晒すとは……………。

しかし今はそれどころじゃない、全裸でドスファンゴを相手にするなんて勝てるのか勝てないのかそういう次元の話じゃない。

レンタクを使えない今、ヘタすれば本当に殺される!!

このままではどうしようもない。

私は恥も外聞もかなぐり捨てると、コンガ達と同じように慌ててすぐ近くに生えていた木によじ登った……………全裸で。

偉そうに啖呵を切っておきながらこのザマだ、非常に情けない。

しかしコンガとは違い、爪も短ければ器用な尻尾も強靱な肉体も持たない私が登れる木などたかが知れている。



私が登ったのは低くて細い、見るからに頼りない木。  
登ってから気付いたが、とてもじゃないがドスファンゴ相手に持ち堪えられそうにはない。

「ブモoooooooooo!!!」

ドスファンゴは私を叩き落そうと思ったのか、それとも木をへし折ろうと思ったのか、とにかく木に向かって突進をしてきた。

「うおおっ!?!」

激しく揺れる木。

折れこそしなかったものの、私は抵抗空しく木から落ちた……全裸で。

「うっ!?!」

「ブモッ!?!」

しかも落ちた場所はなんとドスファンゴの背中の上!

このまま地面に落ちてドスファンゴに叩き潰されることだけは避けたかった私は、急いでドスファンゴの毛皮を両手両足の指でがっしりと握り込む……全裸で。

「ブモoooooooooo!!!」

「うおおっ、どうした!?!」

突然興奮し始めたドスファンゴ、興奮の理由は全裸の美女が背中に乗ったから……ではない。

よく見れば私が掴んだ場所はヤツの両耳であり、流石のドスファンゴも耳を掴まれたことには驚いたようで私を振り落とそうと激しく走り回り始めたのだ。

当然私も落とされるわけにはいかず、更に力を込めて耳を握る……ぜん、そろそろやめるか。

とにかくここに私とドスファンゴのロデオ勝負が始まったのだ。

「ブルルッ!!ブルルッ!!」

「コラ暴れるな、痛たたたっ!?!頼む、大人しくしてくれ!!」

ドスファンゴはそこら中の木や岩に身体をぶつけながら走り回る。

奴が巨体だったことで私の身体はそれらにぶつからずに済んだが、むき出しの胸の先端やデリケートゾーンといった敏感な部位がドスファンゴの剛毛に擦れて物凄く痛い。

それにスタミナも消耗してきた、今にも振り落とされそうだ。

剥ぎ取りナイフでもあれば背中につつ刺して隙を作つてやれるんだが、丸裸の現在は堪えるしかない。

「ブモモオオオ!!」

「お、おいつ!止まれっ!そつちは崖だつて……ああ、もう!!」

前を見ていないのか、それとも頭に血が上つて判断力が落ちているのか、崖に向かつて走り出すドスファンゴ。一緒に心中するのはゴメンなので落ちる直前に背中から飛び降りる。

「ぐつ、いだけだっ!?!ううう……。」

「ブルルツ!?!ブモオオオオオオオオオ!!?!?!?!」

ドスファンゴは崖から足を踏み外し、そのまま崖下へと消えていった。

一方の私は全裸で地べたを転がるハメになったが、何とか崖から落ちることだけは避けられた。

「はあはあ、助かった……。」

本気で死を覚悟したぞ。狩娘が陸上で、それも全裸でドスファンゴに乗ったまま崖から落ちてお陀仏なんて笑い話にもならない。

ダーウィン賞受賞なんて不名誉、貰うくらいなら死んだほうがマシだ!

あれ?ダーウィン賞貰いたくなさ故に自害したら、それこそ受賞ものではないだろうか?

まあ、関係ない話は今はいい。

「ウホー!」「ウホー!」「ウホー!」

私がドスファンゴを倒したのを見て、次々とコンガ達が木から降りてくる。

そしてぐるりと私を囲み始めた、今度は一体なんだ?

「ウホッ！」 「ウホッ！」 「ウホホッ！」

「え？毛もなきや尻尾もないヒヨロヒヨロの身体のくせに一人でドスファンゴをやつつけるなんて大したもんだ、見直しただと？そんなもってアイツが戻ってこなかったら、代わりに群れのリーダーをやらせてやるだとお!?ちよつと待て、私はそんなのやるなんて一言も言っていないぞ、そもそもアイツって誰だ……って滅茶苦茶デカイゴリラがやって来た!？」

実力があるからって初対面で、しかも異種族の相手をいきなりリーダーの座に据えようとするなんてどういう思考回路をしているんだ!?

そうこうしているうちに、森の奥からのんびりと現れたのは群れのリーダーであるババコンガ。

顔中に刻まれた深い皺と、身体のところどころに見られる白くなつた体毛が、彼が高齢の個体であるということをも物語っている。

「ウホオ？」

「ウホウホ。」 「ウツホホ。」 「ウホウツホ。」

状況を呑み込めないババコンガに事情を説明するコンガ達。

私は群れのボスなんてやりたくないぞ、頼むからその提案は却下してくれよ。

「ウホオ!!ウホウホ、ウツホー!!」

「群れはお前を歓迎する！第1ボス候補はアイツのままだが、お前は第2ボス候補にしてやる……だとお!?このボス物分かりが良すぎるだろう!?そこは断つてくれ!!」

「ウホウホ！」

「もしお前がボスになったらその頭の黒くて長い毛をワシ自らがトサカにしてやろうだって!?笑えない冗談はやめろオ!!」

~~~~~

「こうして群れに認められた私は次期ボス候補の一人となったのだ。コンガの考えることは発想がぶっ飛んでいて私にはよく分からん。私はコンガのボスになんかにはなりたくなかったからな、そいつが見つかって本当に良かったよ。」

な、何だか色々あったみたいね……。

全裸でドスファンゴと戦った狩娘なんて、カリユード諸島初なんじゃないかしら？

「ちなみに崖から落ちて弱っていたドスファンゴは、そのままババコンガがトドメを刺してコンガ達全員の晩御飯になった。ドスファンゴを瀕死にまで追い込んだ功労者である私は取り分を一番多く貰う権利があるらしく、もの凄い量の生肉を貰ったんだが、お肉大好きでも何でもない私に生肉を食べることは出来なかったから適当に言いくるめて群れの奴らに配ったら、なおさら第2ボス候補として持ち上げられてしまったのだ。」

そういう長門さんからは、定期的にグウ〜つとお腹の音が鳴っている

きつと昨日から何も食べてないのね。

「せめてドスファンゴの毛皮で簡単な服でも作ろうと思ったんだが、刃物も無しに毛皮を剥ぎ取るのは無理だったよ。だから私の服はこの葉っぱだ。」

そう言っつて葉っぱで作られた服(?)を見せつけてくる長門さん。長門さんつて背は高いし、スタイルもいいからこういう最低限のところだけ隠した格好をされると目のやり場に困るのよね。

「そいつが見つかった場合、当然私は用済みになるのだが、それでも群れから追い出したり邪険に扱ったりせず群れの一員として認めるということになっていたらしい。野生的な見た目と違って懐深いとこ

ろはありがたいが、だとしてもコンガとして余生を過ごすなど認められるか！そもそも生のキノコも生肉も私は食べられんぞ！だからといって一人で鎮守府に帰ろうにも丸腰で土地勘もない場所じゃどうしようもないからな、お前達に見つけてもらえて本当の本当に良かった！助かった!!私人は人として、狩娘として生き返ったぞおお!!」

喜びを噛み締めているのか、拳を震わせながら感極まったようにポロポロと涙をこぼす長門さん。

そんなにコンガの生活が嫌だったのかしら？

「ふーん、そんなことがあったのですね。てつきりコンガの大群に『くっ殺』からの『んほお!』のコンボでも決められたのかと思ってたけど、ある意味それよりも面白いことになっていたのですね。」

「くっころろ?んほお?電、何を言ってるの?」

「お前にはまだ早い、というか一生知らんでいい。」

長門さんのコンガ生活のエピソードを聞いての電の感想がこれ。

聞いたことのない単語を言い始めたから、意味を聞こうと思ったら天龍さんに止められちゃった。

私が小さいからってバカにしないでよね?電が知ってるのなら私が知っていたっていいじゃない。

ふと横眼でもう一人の長門さんの方を見ると、仲間のコンガ達に囲まれてワイワイとしていた。

長門さんもコンガ達も無事に再会出来たことが嬉しいようだ。

私達が長門さんを迎え入れたように、コンガの群れももう一人の長門さんを迎え入れようとしているのだろう。

「そっか。長門さん、帰るのね。」

長門さんが鎮守府に帰ってくるのと同様に、もう一人の長門さんも仲間と共に故郷の森に帰らなきゃいけない。

私達とはこれでお別れ、そのことを理解すると少しずつ悲しくなってきた。

たった一日だけの付き合い、それも勘違いによるもの。だけど間違

いなく私と長門さんは心を通わせていた。

長門さんが本物のコンガだったなんて思いもしなかったから、お別れになるなんて思いもしなかったわ。

「ウホ……。」

「な、長門さん?」

長門さんも別れを惜しんだのか、それとも悲しんでいる私を元気づけようとしてくれたのか、私のことを優しく抱きしめて、尻尾を使って頭を撫でてくれた。

「二」「ウーホッ!ウーホッ!!ウーホッ!!」「二」

「や、やめろ!私は別れを惜しんでなんかいない!く、臭いから放してくれ!!」

私と長門さんが別れの挨拶をしているように、長門さんもコンガの大群に揉みくちやにされている。

彼らも別れが惜しいのね。

「ありがとう、長門さん。これ持って帰っていいわよ、私達からの贈り物。大切にしておね!」

長門さんとのハグを終えた私は、地面に突き刺さっていたブレイズブレイドを引き抜くと長門さんへと手渡す。

「おっ、おい待て!その武器は私の……ムグッ!」

「今いい所なんだから空気読んで黙ってる。」

「静かにするので。」

「ンー!?ンンー!!」

長門さんが何か言おうとしているけど、天龍さんに後ろから拘束されて右手で口を塞がれる。

「ウホ。」

長門さんはブレイズブレイドを尻尾で受け取るところこちらに向かって軽く手を振る、そしてババコンガの号令に合わせて群れと共に森の奥へと消えていった。

「長門さん、さよーなーならーなー!!」

私は長門さん達の姿が見えなくなるまで手を振り続けた。

「……行っちゃったな。」

「いなくなつて清々する……と言いたいところですが、ちよつと寂しくもあるのです。」

天龍さんと電も長門さんとの別れにしんみりとした様子を見せる。

「また逢えるかしら？」

「逢えるさ。」

「個人的にはもう逢いたくないですけどね。」

「それよりも早く私を鎮守府に連れ帰つてくれないか、もう全身ポロボロのクタクタでひっくり返りそうなんだが……。」

「「あっ！」」

あつちの長門さんが山に帰り、こつちの長門さんが鎮守府に帰つてきた。

だけどそれで全て解決というわけにはいかなかった。

鎮守府のみんなにあつちの長門さんが本物の長門さんじゃなかったことの説明をしたり、汚れ切った長門さんがお風呂をしようと思つたけどあつちの長門さんのオナラの影響で使用禁止になつていたことに落ち込んだり、お腹を空かせた長門さんがコンガ並にたくさんご

飯を食べたり、装備を全部失った長門さんだっただけど素材の在庫に余裕があったのですぐに元の装備を作成したりと色々あったわ。

当然といえば当然だけど、全部長門さん絡みね。

そして翌日……。

「うーん、清々しい朝ね。昨日の騒動が嘘みたい。」

窓を開けてみれば、今日は気持ちのいい晴れ模様。空気もいいし、きつと最高の一日になるわね！

「雷ちゃん、雷ちゃん！」

外の空気を堪能していると、先に部屋を出ていた電が慌てた様子で戻ってきた。

「どうしたの？」

「大変なのです！」

「え、何？どうかしたの？」

ひよっとしてまた長門さんに何かあったのかしら？

例えば今度はカエルになっちゃったとか？

「いいから、早く来るのです！」

電に手を引かれてどんどん進む。

「これを見るのです！」

「これって!？」

連れて来られたのは鎮守府の入り口である、敷地と外を隔てる門。

そこにあっただのは大人一人が寝そべられるくらい大きな葉っぱ、そしてそこにドツサリと山積みになされた様々な種類のキノコ！

「わあー！」

「凄いですー！」

よく見ればそこら中に獣の足跡がある。

間違いない、これは長門さん達が置いて行ってくれたのよ！

「ありがとう長門さん！本当にありがとうーう!!!」

長門さんが遠吠えをしていたのを思い出し、私は空へ向かって思いつきり大声でお礼を言った。

きつと長門さん達に届いたわよね？

カリユード諸島のとある山、そこには一際変わったコンガの群れが住んでいる。

群れのコンガ達は汚らしい通常のコンガの生態からは想像もできない程に綺麗好きであり、葉っぱを使って歯を磨き、小川で身体を洗う行動が確認されており、これにより他の群れより明らかに病に侵される個体が少ないのだという。

そして狩りの際には尻尾で掴んだ枝や骨に石を武器として利用することで、効率よく食料を手に入れ、外敵にも立ち向かう力を得たとされる。

そんな群れをまとめ上げるボスの若きババコンガは二本の角のような特徴的な頭飾りを身に着け、明らかに人工物である大剣を常に持ち歩いており、それを使いこなすことで群れを守り抜いた。

そしてその群れの結束は厳しい大自然の中でも揺らぐことなく、末永く繁栄したのだという。

ここまでの登場人物5

天龍：今回は実質脇役同然の主人公。

途中までは主人公であろうとしたが、いつの間にかその座を雷に盗られてしまった。

新しく作った武器を試しに意気揚々と海へ出掛けたが、活躍シーンも見事にカットされた。

電によると活躍したどころか足を引つ張ったようである。

他にも長門の奇行に振り回されたり、ネルスキュラの不意打ちで昏睡したりといとこなし。

今後の活躍に期待である。

龍田：天龍達が長門の世話にてんてこ舞いなのを尻目に、ほとんど事態に関わることなく自分の用事を優先したマイペースな狩娘。

天龍に信憑性の怪しい情報を教えた以外に全く手伝う様子を見せなかったが、勘のいい龍田のことなので内心では長門の正体に勘付いていたのかもしれない。

天龍曰く、入浴時の龍田は異性どころか姉である自分ですらドキドキする程の色気を放っているとのこと。

雷：今回のお話の実質的な主人公。

自分のせい（実際は長門の自業自得）でコンガになってしまった長門を元の姿に戻すために奔走する。

連れて帰る必要のなかった長門を鎮守府に連れ込んでいらぬ騒動を引き起こした、ある意味今回の事件の元凶の一人だが、そのことについては誰も責めるつもりはないようである。

とても面倒見がよく世話焼きな性格をしているが、実は誰でもいいので世話をしたいという変わった願望を持っており、更にはそんな願望を持っている自分を恥じている。

存分に世話を焼かせてくれる長門のために、ご飯を食べさせたり、歯を磨いてあげたり、一緒にお風呂に入ったり、同じ部屋で眠ったり、狩りを教えてあげたりと大奮戦。

今回の事件でクモが少し苦手になり、それと同時に悪臭に対して多少の耐性が付いたらしい。

電：ご存じ雷の妹。今回は雷と共にコンガとなった長門のフォロワーに入るが、途中で嫌気がさしたのか徐々に対応が投げやりになっていき、最後は雷に丸投げした。

やることなすこと何から何まで汚い長門相手にストレスが溜まったのか、いつにも増して毒舌が冴え渡り、黒いキャラを隠す様子すらなくなった。

真：先に長門の正体に勘付いたが、雷を上手く説得することが出来ずにそのまま鎮守府への侵入を許してしまった。

もし電がもつと強く否定していれば、結末はまた違ったものになっていたかもしれない。

長門（真）：今回の事件の発端となった狩娘。

彼女が見栄を張って不用意にドキドキノコを食べた結果、今回の事件を引き起こした。

全裸でコンガの群れの真ん中に放り出され、そのままドスファンゴとタイマンするハメになったが、お陰でコンガの群れに迎え入れられ、更には次期ボス候補にまで昇格することになった……が本人にとっては不本意極まりない結果であり、一秒でも早く鎮守府へ帰りたいがっていた。

臭いコンガに囲まれながら粗末なミノをまとっただけの姿で、食事

もとらずに地べたで野宿をするという経験はかなり堪えたようであり、今後の不用意な行動は抑えられた……かもしれない。

今回の騒動で装備を全て失ったが、素材を貯め込んでいたため取り返しはついたらしい。

長門（偽）：自分のことを長門だと思い込まれている一般牙獣種。

みんなに長門と呼ばれ続けたため、長門と呼ばれると反応する程度には自分のことを長門だと思っている。

偶然に偶然が重なった結果、長門と入れ替わって生活することになった。

しかしそれを特に疑問に思うこともなく、普通に狩娘に混じって生活が続ける高い適応力を持ったコンガ。

知能も高いようであり、ドキドキノコの効果もあつたとはいえ雷の言葉を理解したり、歯磨きや入浴を覚え、大剣も使いこなして見せた。

しかし狩娘ではなくモンスターなので水上戦は不可能であり、海に入ることは最後まで嫌がった。

自分によくしてくれた雷に懐いており、雷のためなら自分より遥かに強いネルスキュラにも臆せず立ち向かう勇気の持ち主であり、次期リーダー候補にされるのも納得の高スペックコンガ。

群れに帰る際に持ち帰った長門のヘッドギアとブレイズブレイドは、群れの新たなリーダーである彼を象徴するアイテムとなっている。

提督：ヌハハハ！提督だ！

コンガの生態についてやたらと詳しいが、これでも一応本土の人間であり、MH世界の人間ではない。

恐らくコンガ以外のモンスターについても豊富な知識を持っている。現状では特に役に立たないので教えるつもりはないらしい。

自己中心で高慢な性格をしており鎮守府の運営や狩娘のことなど
二次の人物だと思われていたが、長門について悩んでいた雷達にコ
ンガの情報を与えたり、消臭玉について教えたりと実はちゃんと部下
のことも考えていたようである。

ちなみに野蠻人同然の姿で帰還した長門を見て再び爆笑したらしい。

神通：クロオビ鎮守府の秘密兵器であり、経験に裏付けられた実力
と知識で鎮守府を支え頼れる秘書艦。

しかし流石の神通もコンガのことは知らなかったらしく、今回の騒
動ではあまり役には立たなかった。

潮風丸の話を適当に受け流していたが、その結果今回の事件にまる
で貢献出来なかったことを後悔している。

姉である川内の実力を高く評価しており、もっと活躍の場を広げさ
せるために、川内が気絶したのをこれ幸いとばかりに、介抱するどこ
ろか拉致して更生させようとするなど、若干歪んだ愛情を持っている
ことが判明した。

川内：夜戦大好き軽巡。

仲間達と生活パターンが異なっているせいか持っている情報が遅
れており、コンガのことを知らずに不審者と思つて気配を消して近付
いた結果、ケツを間近で観察した挙句に放屁を浴びて気絶するハメに
なった。

正義感に基づいての行動であったが、今回はそれがモロに裏目に出
てしまったようだ。

苦難はそれだけに終わらず、気絶したところを神通に拉致され、更
生という名目のもとで縛られたまま水を掛けられたり、足の裏をくす
ぐられたりしているらしい。

群れのコンガ：長門（偽）が所属している群れのコンガ達。

温厚な性格をしており、突如として現れた長門（真）に対してもフレンドリーに接する。

普通のコンガなら大型モンスターが現れてもその場に居座るが、このコンガ達はドスファンゴが現れただけでも身を隠すなど、基本的に無駄な争いは好まない。

しかしいざ戦いとなれば統率された動きで一斉にフンをぶつけてくるなど、決して弱いわけではない。

他にも遠吠えで連絡を取り合ったり、ボス自らが引き際であると感じれば後継者を指名するなど社会性の高さがうかがえる。

長門（偽）が群れに戻った後、歯磨きや入浴を覚え、一般的なコンガの群れと比べて遥かに清潔になった。

とはいえ相変わらず放屁やフンはとんでもなく臭いままである、流石に生理的なものはどうしようもなかったようである。

ネルスキュラ：クロオビ鎮守府の裏山に巣を張る鋏角種。

雷達の普段使いのマップには記されていないエリアを縄張りとしていたため、今まで発見されることがなかった。

非常に狡猾であり、不意打ちだったとはいえ姿を見せることなく雷を一瞬で縛り上げ、天龍も振り向く隙すら与えずに一蹴するなど高い戦闘力を誇る。

しかし雷を捕食しようとしたところで長門（偽）に攻撃され、更にはコンガ達のフン投げ攻撃を雨あられと喰らうなど散々な目に遭った。

フンまみれになったことで懲りたのか、縄張りを捨てて逃走してしまった。

討伐はされていないので、未だに裏山のどこかに潜んでいる……のかもかもしれない。

天龍ちゃんと一泊二日の旅Ⅰ

「もうちよいで着くゼヨ！もうすぐワシの故郷にして、所属鎮守府でもあるモガ鎮守府に着くんだゼヨ〜！」

「着クゼヨ〜！」

「もうちよいか。」

「モガはいい所ゼヨ〜。カリユード諸島の海はきれいだけど、中でもモガ近海の美しさは格別ゼヨ！船として生まれたからには、一生に一度はモガの海で泳いでみるべきゼヨ。」

オレは今、師匠こと潮風丸の交易船に乗せてもらい、モガ鎮守府を目指している。

そもそも今回どうしてオレがモガ鎮守府に行くことになったのかというと……。

『天龍ちゃんもたまにはよその鎮守府に行ってみたらどうかしら？知らない場所で知らないメンバーと狩りをするっていうのは新鮮だし、何より勉強にもなるわよお〜。もしどこかに行ってみたいのであれば神通さんに相談してみるといいわあ。どのみち別の鎮守府に行くのなら提督か秘書艦に報告する必要があるんだけどね。まずは神通さんに会いに行つてらっしゃいな。』

『よその鎮守府に行ってみたい……ですか？でしたらモガ鎮守府はいかがでしょうか？モガでしたら潮風丸さんに頼めば連れて行つてもらえると思います。それにネコになったという多摩さんのことも気になりますからね。』

『モガ鎮守府に行きたい？だったらワシの交易船に乗ればいいゼヨ！丁度次の目的地もモガ鎮守府だしお安い御用ゼヨ！』

……というやり取りがあつて今に至る。

あー、別の鎮守府に行くのつて初めてだから緊張してきたな。
どんな場所で誰がいるんだろう？

「着いたゼヨ、今船を着けるゼヨ。」

ゲツ、考え事してたらもう着いてた!?

まだ心の準備が終わつてねーつてのに!!

ここがモガ鎮守府、オレの所属しているクロオビ鎮守府とは全然違うな。

何というか、少なくとも見た感じでは鎮守府らしきがない。

クロオビ鎮守府は茶色のレンガ造りの建物で庭には緑の芝生が広がっているという、いかにも鎮守府らしい鎮守府だ。

まあやたらと広い農場付きの中庭とか、深海棲艦と戦える訓練場と普通の鎮守府にはなさそうなものも多いけどな。

それに対してモガ鎮守府は広い海にポツリと浮かぶ小島と、木の板を組み合わせて作られた海上の足場を土地としており、これまた木を組み合わせて作られた草葺き屋根の素朴な小屋がいくつか建っているようだ。

これって本当に鎮守府か??? 鎮守府の建物が木組みの小屋って……。

これは鎮守府ではなく、東南アジアのどこかにありそうな水上の村なのでは？

「それじゃあワシは積み荷を降ろさなきゃいけないからオヌシは先に行くゼヨ。」

そういや単なる船じゃなくて交易船だったな、商品が乗っているんだっけ？

「積み荷って、今回は何が乗っているんだ?」

「まあ色々に乗っているけど、今回の一番の目玉はラングロローラーゼヨ！」

「ラングロローラー？何だそれ？」

「簡単に言えば美顔ローラーの類ゼヨ。赤くて丸いローラーは、固さと弾力を兼ね備え、肌にしつとりと吸い付くことから今静かなブームになっているんだゼヨ。」

「ふーん、そういうのがあるのか。オレは美容とかあんまり興味ねーから知らなかった。」

「ちなみに商品バリエーションとしてガンキンローラーとバルキンローラーっていうのがあるゼヨ。ガンキンローラーはめちゃくちゃ堅くて重たい金属製で、片手で使う商品なのに重量が5kgくらいあるゼヨ！コイツは表面が強固な突起で覆われているから使うと顔面がボコボコになる凄い商品ゼヨ！バルキンローラーに至ってはなんと骨製の商品で、ローラー本体に粘性の高いタールを使用することで骨を接着しているゼヨ！表面は長くて鋭い硬質の尖った骨で覆われているから、使うと顔に穴が開くスペシャルな商品ゼヨ！この二つはラングロローラーと違って何故か全然売れないゼヨ、不思議ゼヨ。格安にしとくからオヌシ使ってみるゼヨ？」

「断る!!」

「そんなの考えなくても売れない理由は分かるだろ!!」

「人にゴミを押し付けようとするんじゃないやねえ！」

「うーん、残念ゼヨ。まあ欲しくなったらいつでも言うゼヨ。それじゃオヌシが来ることはあらかじめワシの方から鎮守府に伝えておいたから、このまま行っても大丈夫ゼヨ、ドントウオーリーゼヨ！」

「そう言うとは師匠は船の中に戻っていった。」

「ローラーの件はともかく、色々ありがとう！」

「モガ鎮守府へよーこそ。アタシはこの鎮守府で秘書艦をやってる北上だよー、どもどもよろしくー。」

「そして私が大井よ。」

「オレはクロオビ鎮守府から来た天龍だ、よろしく頼むぜ。」

師匠がいなくなり、手持ち無沙汰になったオレを迎えに来てくれたのは二人の狩娘。

ゆるーい雰囲気の上と、どこことなくつつけんどんな様子の大井だ。

しかし北上の服装、というか装備はオレの知っている北上のものは全く違う。

大井の格好は緑色の半袖セーラー服といういわゆる艦娘としての北上と大井の初期衣装なのだが、北上の服装は緑色の半袖や長袖のセーラー服でなければ、ベージュのヘソ出しセーラー服でもない。

身に着けているのは脛まで覆うデザインのスandal、ベルトとサスペンダーで支えられた赤いスカート、白いベスト、黒いアームカバー、そして赤くて丸い帽子。

何というか、南国の役場の事務員といった感じの服装である。

「何出会って早々に北上さんのことをジロジロ見ているんです?」

「まあまあ、大井つち落ち着きなよ。」

北上の姿が気になり頭のとっぺんから足の爪先まで見ていたところ、大井に釘を刺される。

ヤベツ、流石に見過ぎだったか?

「んー? 私の格好が気になるのかな? ホラ、これはアレだよアレ。スカラッシュリーズって言って大本営公認の秘書艦用の制服、っていうか装備の一種。ほれほれ。」

そう言ってその場でくるっと一回転しながら装備を見せつけてくる北上。

しかしオレとしては服装よりも、聞きなれない単語の方が気になった。

「大本営公認の秘書艦用の制服う? 何だそれ? そんなのあったのか? オレんところで秘書艦やってる神通はそんなの着てねーけど。」

「そりや公認つてだけで絶対に着なきやいけない義務はないからねー。それに作成の際に要求される素材も特別なチケットやコインが必要になるから、いざ作るとなると結構面倒臭いんだよ。まあアタシはせっかく秘書艦やつてるのに普段通りの格好つてのもつまんないからこうして作成したんだけどね。」

オレの鎮守府では本人の艦種と違う装備を身に着けているヤツはいないから、こうして見ると新鮮だ。

えっ、初期の頃のオレ？アレは物資不足による間に合わせの装備だからノーカン！

「ミナガルデ鎮守府ではメイドシリーズが秘書艦用の装備になっていて、ジャンボ鎮守府やポツケ鎮守ならヘルパーシリーズ、ユクモ鎮守府なら撫子シリーズ、タンジア鎮守府ならセイラーシリーズ、バルバレ鎮守府ならエコールシリーズ、ベルナ鎮守府ならサージュシリーズとチアフルシリーズ、アステラ鎮守府ならシーカーシリーズとブリゲイドシリーズ、セリエナ鎮守府ならギルドワークシリーズ、そしてロックラック鎮守府とモガ鎮守府がこのスカラーシリーズっていうふうになってるの。」

いっぱいあり過ぎて、半分以上頭に入ってこなかった……。

「何というか、鎮守府ごとに制服があるって感じだな。」

「まあ大体そんな感じであってるよー。そっちの秘書艦が使ってないだけで、クロオビ鎮守府ならクロオビシリーズが正式装備になるんじゃないかな？」

ええっ!?クロオビシリーズってオレの提督が着ているやつじゃん！

神通が制服着た場合だと提督とペアルックになるのか……。

「さーて、潮風丸から大体の話は聞いてるよ。自分のとこの鎮守府だけじゃ学べないようなことを経験しに来たんだって？案外真面目なんだね。」

相変わらず緩い雰囲気のまま話を進める北上。

クロオビ鎮守府の秘書艦の神通がビシツとしたしつかり者だった

せい、この北上の独特のペースには未だ慣れない。

「そつちの鎮守府じゃ学べないことだなんて言われてもねえ、アタシらにとつてはこれが普通だから何を教えればいいのか分かんないんだよね。この北上さまの頭脳を持つてしてもそつちに無くて、こつちにしかない独自のものなんて分かんないからさ。」

投げやりにも程のある北上の話に思わずズッコケそうになる。

これが神通だったらあれやこれやら次々に提案が出てくるからなあ……。

鎮守府の設計自体もそうだが、この秘書艦のギャップだけで充分に独自の経験になったよ。

「なので取り合えず天龍は球磨姉えと木曾、そして大井つちと一緒に狩りに行つてもらふことにしたよ。アタシ達の狩りに参加しつ、そこから何か学べるものがあるといいねえ。」

「えっ!?!」
実際に現場に出て目で見て盗めという、まるで職人の技術を覚えさせるかのような提案をする北上。

しかしそれを聞いた大井はギョツとした表情で北上の方を見る。

「あ、あの……北上さん?」

「んー?何、大井つち?」

「私そんな話聞いていないんですけど……。」

「そりや今言つたからね。」

「なっ、何で私に相談せずにそんなことを決めちゃうんですか!?!」

「だつて大井つちに出撃スケジュール決めさせると必ずアタシと出ようとするじゃん?それは別にいいんだけど、今日は仕事あつてアタシ出られないからさー。だつたら大井つちの出撃枠はここに組み込んでじゃえーつて話になるっしょ。」

「だつたら多摩姉さんに出てもらえば!」

「多摩姉えは今日はゴロゴロしときたい気分なんだつて。」

「グハッ!」

ゴロゴロしたいという雑な理由だけで多摩の出撃が却下されたことにシヨックを受ける大井。

「というか多摩には確認を取ったのか……。」

「んー、でも安心していいよ。大井つちには出撃のこと伝えなかつたけど、球磨姉え達にはちゃんと事前に伝えといたから。」

「ゴフツ!!」

北上に詰め寄る大井だが、フォローどころか更なる追い打ちを喰らって轟沈する。

「球磨姉さん達にはちゃんと確認を取っているのに、私だけスルーされていただなんて……。」

「アタシはさー、サボって溜め込んでた書類をいい加減処理しなくちゃいけなくなつてねー。いやあ、面倒臭いつたりやないね。」

「だったら私が手伝います! これでもそういつた作業は得意なんです!」

「んー、気持ちは嬉しいけど今回はいいかなつて。だつて今日は提督が手伝ってくれる約束してくれたからねー、えへへ。」

「て、提督と一緒に!? 羨ましい、私だつて秘書艦になれば提督と……じゃなくて提督つたら私がないのをいいことに、私から北上さんを奪うつもりね……。」

「大井つちつたら、まーたそんなこと言つちやつてー。それにアタシは既に提督のだもーん。」

「ゴツハア!!!」

仕事か面倒だといいつつ惚気る北上と、対照的にヨロヨロと地べたに体育座りになるとそのまま地面にのの字を書き始める大井。

「というか今気付いたけど北上の左手の薬指に光るものが見えたぞ……。」

「お、おい。右手のそれつてまさか……。」

「うん? あー、気付いた? そう、これは提督からもらった大事な指輪。」

「そう言つて見せつけてきたのは小さなダイヤがキラリと光る、シンブルながらも上品なデザインの指輪。」

「ケツコンカツコカリ!? つーことは練度100超え!? 百戦錬磨の工

リート艦!」

ケツコンカッコカリは猛者の証。神通も歴戦の狩娘だし、やっぱ秘書艦って強くなきゃなれないのか?

しかし尊敬の眼差しで指輪を見るオレとは対照的にキョトンとした表情の北上。

またオレ何か言っちゃいました?

「んー? ああ、なるほど。そういつたことも知らないんだ、こりや学習させ甲斐がありますなあ。」

「へっ?」

「あのさー、忘れてるのかもしれないけどカリユード諸島には練度なんてないよ。」

「あつ、そういえば……じゃあハンターランクの上限解放用の指輪か?」

「ハンターランクを上げるのにも指輪は不要だよ。」

「あれ? じゃあその指輪は一体?」

練度の開放でもなければハンターランクの開放でもないとなるとその指輪は何の役に立つんだ?

「存外鈍いんだねえ、これはそのまんまケツコン指輪だよ。」

「だからケツコンカッコカリの指輪だろ?」

「ケツコンカッコカリの指輪じゃなくてケツコン指輪。別に能力が上がるとかスキルが増えるとかじゃない、永遠の愛を誓い合った夫婦の証明としての指輪だって。」

「あー、ケツコンか。そっかケツコンかー、なるほどねー……………は?」

ケツコン、つまり結婚!? 愛し合う二人が夫婦になるというアレ!?

艦娘だってケツコンカッコカリ止まりなのに狩娘はマジモンの結婚してんの!?

「おーおー、見てわかる程動揺してるねえ。そう、アタシはこう見えて人妻なのですよ! まー籍は入れてないんだけどね。そもそも結婚式挙げてないし、カリユード諸島には結婚式挙げられる場所もないんだけどねえ。」

見せつけるかのように指輪が嵌っている左手を胸に当てて、フランスと胸を張る北上。

狩娘……つーか艦娘は見た目通りの年齢はしていないとはいえ、女子高生の奥さんとか若妻つてレベルじゃねーぞ!?

ケツコンカツコカリを通り越してマジでケツコンしちまうなんて一体どんな提督なんだろう？

カリユード諸島にはケツコンカツコカリ制度自体がないということにまず驚き、その代わりに普通にケツコンしている狩娘がいるというところにも驚いた。

これだけでも自分の鎮守府にただけでは知り得なかった事実であり、勉強になった。

しかしその一方で新たな問題が発生した。

その問題とは指輪を一瞥したことにより、よりドヨーンとした空気を漂わせる大井。

暗い雰囲気のまま「北上さん……提督……。」と小声でブツブツ呟き続けており、非常に不気味。

北上を提督に盗られたことがショックなのか、それとも逆か、はたまたその両方か……。

どちらにせよこんな様子じゃ使い物になんねーぞ。

「大井っちはねー、三日に一回はこうなるんだよ。でも心配いららないよ、任せといて。立ち直らせ方も熟知してるから。」

小声でオレにそう耳打ちすると北上は凹んでいる大井の前に立ち、敢えて聞こえるようにワザとらしく独り言をこぼした。

「……………あー、残念だなー。アタシは大井っちが戦果を挙げてくれるのを楽しみしてたんだけどなー。モガ鎮守府初心者の方天龍にモガの素晴らしさを教えてくれる素敵なお大井っちを見たかったんだけどなー。提督もきつと褒めてくれると思ったのになー、本当に残念だなー。こりや提督のご褒美のナデナデやハグもお預けかなー、あー勿体ないなー。」

誰がどう聞いても棒読みである。

「……分かりましたッ！北上さんがそこまで言うのなら私の力を見せましょう！提督にも私の活躍を……まあ伝えても伝えなくてもいいですけど、出来れば伝えてほしいかなって……。」

しかしそんな棒読みに対して分かりやすいくらい簡単に乗せられて、ガバッと立ち上がる大井。

先程までの暗い雰囲気はどこへやら、テンションは完全に回復している様子である。

「チョロいやツだなあ……えっ？オレもしよつちゆう龍田に乗せられてるって？」

別にそんなことないだろ、なあ???

「それでは行きますよッ！天龍さん、くれぐれも私の足を引つ張らないようにね！」

「わわっ、ちよつと待て！まだオレ来たばっかだろうが!!」

「そだよー、それにまだ球磨姉えと木曾が戻って来てないじゃん。勝手に先に行つちやうのは流石にダメでしょ。」

「もうっ！球磨姉さんったらどこで油売ってるのかしら!!」

オレの腕を引いて勝手に行こうとする大井、それを北上と二人でなだめる。

「こういつちや悪いが中々面倒な性格してるな……。」

しよっぱなから個性豊かなモガ鎮守府のメンバーに翻弄される天龍。

しかしこの程度、ほんの挨拶代わりに過ぎないということを今の天龍はまだ知る由も無かった。

天龍ちゃんと一泊二日の旅2

「そんなじゃあ姉さん達が戻ってくるまで天龍の質問タイムといこつか？聞いときたいこともあるんでしょ？」

北上は大井を落ち着かせると、流れるようにオレの質問タイムを設けた。

話を進めるのが上手いな、伊達に秘書艦やってるワケじゃないってことか。

「えーつと……んじやまず、この鎮守府つてどのくらい狩娘がいんの？以前三日月がいるつて話は聞いたんだが……。」

「所属の狩娘？そんなことが気になるんだ。」
「そんなことつてヒドイな……。」

「まあいいや、現在モガにいる狩娘は球磨型と睦月型だね。潮風丸みたいな独立した狩娘もいるけど、それを除くと球磨型が4人に睦月型が5人。でも長月と菊月と三日月と望月は昨日凍土に4人仲良く採掘に出かけたから明後日まで帰つてこないよ。今鎮守府に残っているのは文月だけ。あんな寒いところまでよく行けるもんだねえ。」

凍土!?聞いただけで寒気が走るな。

それは軍艦じゃなくて砕氷船の役目だろ、砕氷船の狩娘がいるかどうかは置いとくとして……。」

「北上秘書艦、文月のこと呼んだー？」

「呼んでないよ、話が面倒になるからあっち行つてて。」

「あつ、あなたが天龍さんねー。あたし文月っていうの。よろしくう。」

「ほら、いい子だから戻つた戻つた。」

「はあーい。全くもう、みんなあたしのことを置いて凍土に行つちやうんだからー！文月留守番つまんなーい、ぶーぶー！」

北上の声が聞こえたのか、小屋の一つからひよっこりと姿を現した

のは文月。

しかし北上に軽くあしられ小屋に戻される。

こっちはまだ挨拶返してないのに……。

「駆逐艦はほつとくと騒がしくしてくるから苦手なんだよねー。用がない時は引つ込めておくに限る。」

長門が聞いたら怒りそう……。

しかし球磨型が4人？ここに所属している球磨型の狩娘は球磨、多摩、北上、大井、木曾で5人じゃないのか？

どう考えても人数が合わないぞ？

疑問は残るが、とりあえず話を進める。

「じゃあ次は多摩についてだな。ネコになったって話を聞いたんだけど、それってマジ？」

「ネコになった？あー、そういうことね。うんうん、そだねー。ネコになったと言えばなったとも言えるけど、どちらかと言えばなってないかなあ？きつと潮風丸から聞いたんだね。」

どちらとも取れる曖昧な返事を返す北上、どういこうだった？

「口で説明するより見た方が早いかね？多摩姉えー、ちよつと来てー。」

文月がいた小屋とは別の小屋に向かって声を掛ける北上。

「何にや？多摩は今日はお休みだから眠いのにや……。」

目を擦りつつ欠伸をしながら小屋からふらつと気怠げに出てきたのは多摩。

装備は下半身は白地に青の短パンと装甲をモチーフにした靴を履いており、いわゆる球磨型の服を着ているが、上半身は木材を加工して作られたように見える茶色いアーマーに肉球マークの描かれた緑色の肩パッド。頭にはこれまた木材を加工して作られたと思わしき

緑色をした肉球マーク付きの一本角の兜を被っている。

装備こそ独特なもの、どこからどう見ても普通の多摩だ。ネコには見えない。

「えっ、あれっ？ネコじゃなくて狩娘？あつ、そうか！ネコになったけどもう治ったんだろ？」

「ふわあく、何の話をしているのにや？」

「ホラ、ちよつと前に潮風丸がマタタビ持ってきたでしょ？その時の話。」

「あー、そういうことにや。それじゃとくと見るにや。」

寝起きというのもあつてか多摩は訳が分からないという顔をしていたが、北上の説明で納得したのか、兜を脱ぎながらオレに背中を向ける。

そこにあつたのは……。

「ホレ、これでどうかにや？」

「こ、これは猫耳に猫尻尾オ!？」

そう、兜の下から出てきたのは髪と同じ色をしたピンク色の猫耳に、ちよつぴり下がっているズボンから少しだけ見えているキュートなお尻からは、これまたピンク色をした4、50cm程の尻尾が生えている。

「こ、これって本物!?聞こえたり動かせたりすんの!?つか元々あつた耳はどーなったんだ!？」

「質問が多いにや。」

「はい？何ですか？」

「大井じゃなくて多いって言ったのにや、まあいいにや。ほら、この通り。」

多摩が意識すると耳はパタパタ、尻尾はフリフリと動き出す。

部位だけ見れば完全にネコそのものだな……。

「こんな風に耳も尻尾も動かせるし、触られれば感覚もあるにや。でも本物の耳もちゃんとあるし、頭の耳は見た目で別に聞こえないにや。何より耳の穴なんて開いてないから、指を突っ込んでみても頭で止まってそれ以上進まないにや。」

そう言つて横髪をたくし上げると、そこには確かに普通の人間の耳があつた。

「マタタビで楽しんでいたら何故かこの耳と尻尾が生えてきたのにや。だけど別にネコっぽくなくなっただけでネコにはなつてないにや、つまり多摩はネコじゃないもん。」

確かにこれだとネコっぽくはなつてゐるが、ネコそのものになつたとは言えねえよなあ。

神通も師匠の言うことは話半分程度にしか聞いていないつて言つてたけど、こんな風に重要な部分が抜けている適当な情報ばかりじゃあ真面目に聞く気も失せるよな。

「うん？あれ、ひよつとして天龍かにや？そつか、来るとは聞いてたけど今日だつかのかにや。」

「えっ、今更!？」

「寝起きで頭が働いていなかったんだにや。すまんにや、許すにや。」

片手で頭をボリボリと搔きながら非常に雑な謝罪をする多摩。

寝起きだからつて目の前にいる人の判別も出来ないのちよつとヒドくね？

「ここに勉強しに来たんだっけ？ひよつとして多摩の魅惑のボディの調査も勉強の内なのかにや？」

「あ、ああ。まあそんなところだ。」

「しようがないにやあ、だつたら存分に見ていくといいにや。あつ、だけどお触りはNGにや。ネコの耳や尻尾は敏感なのにや、提督以外には触らせないにや。」

「いや、もう充分だ。別に触りやしねえよ。」

「寝てたところを起こしておきながらいけずなのにや。」

「言えない、この調査の発端が仲間とコンガを間違えたことによるものだったなんて……。」

「何だ？やけに賑やかだと思ったらもうクロオビ鎮守府からの研修生が到着していたのか。農場の手入れに夢中になり過ぎたな。」

カツカツと足音を立てながら遠目に見える小島から延びる長い棧橋を歩いて現れたのは、白地に緑のセーラー服と横向きに被った水兵帽が特徴的な狩娘。

他にも弾帯ベルト、黒地に白のマント、グローブにブーツといったものを身に着けており、何より目立つのは金色の格子状の装飾が入った右目の眼帯。

そして濃い緑色の長髪に、これまた緑色をした凛々しい左の瞳。

そう、これらの外見的特徴から導き出される若干オレとキヤラの被っついそうな狩娘の正体は……。

「自己紹介が遅れたな。俺がモg「お前木曾か？よく見たらその装備改二のものじゃん、ってことはG級狩娘!?マジかよ？でもG級狩娘が同行してくれるってんなら心強いぜ……つと悪い、興奮しちまったな。知ってるとは思うがオレの名は天龍。フッフ、怖いか？」しく頼むぜ……ってオイ、人の話を聞け！」

セリフを遮られたことで怒る木曾。

「だけど木曾に会ったことで若干テンションの上がったオレの勢いは止まらないんだ、すまん。」

「あちゃー、やっぱりこうなったにや。」

「まー予想はしてたけどねー。」

「まあっ!?何て失礼！」

その一方で様々なリアクションを見せる3人。

あれ？オレ、何か不味いことしたか？

しかしこの木曾、オレの知識にある木曾と若干外見が違うな。

まず下半身はスカートではなく多摩と同じような短パンになっており、更に中に3分丈程の黒のスパッツまで履いている。

また本来ならヘソも丸出しなのだが、これまた黒のピッチリとした

インナーを着込んでおり、薄っすらと鍛え上げられた腹筋が見えている。

黒のインナーを着込んでいるその点だけを見れば、まるで古鷹改二のようだ。

そして一番の違和感は胸部装甲の主張がまるでないこと、コイツつて結構胸あつた方だと思うんだが……。

その一方で身長はオレよりちよつと高い。

オレの身長が160cmだから、コイツは大体165cmくらいか？木曾の身長はオレと同じか、少し低いくらいだと思つてたから違和感が凄いな。

胸が成長しなかった代わりに背が伸びたのか、そういうこともあるんだな。

「へえ、狩娘にも個体差つていうのがあるのか。だけどオレはお前が普通の木曾と違って貧乳長身になったとしても別に気にしないぜ！よし、オレとお前で暁の水平線に勝利を刻み込もう……つて今回はオレが勉強させてもらうんだつたな！」

片手で木曾の背中をバシバシ叩きながらそう熱弁する。

いきなり馴れ馴れし過ぎるだろつて？仮にも意識したことのある相手が出てきたんだ、テンションも上がるもんだつて。

「何が貧乳だ!?俺はれっきとした男だぞ!!」

「は???」

木曾から発せられた衝撃のカミングアウト。

それと同時に半笑いの北上はオレの右腕を掴むと、木曾の胸をペタペタと触らせる。

うん、硬い。これは貧乳なんてもんじゃない、れっきとした胸板だな。

それもゴリゴリバキバキの太マッチョではないが、ちゃんと鍛え上

げられた無駄のない細マッチョな大胸筋だ。

「まじで!?木曾が男オ!?師匠といい、モガ鎮守府には男性の狩娘が現れる傾向にあんのか!？」

「……ってオイ!北上、何やってんだこの馬鹿!!」

「いーじゃんいーじゃん、滅るもんじゃないし。」

未だに信じられない、脳が解を拒む。

確かに触った感覚では男らしく、無駄のない引き締まった身体付きをしている。

しかし顔といい声といいオレの知ってる木曾そのものだ。

いきなり胸を触られたことで若干頬を赤らめながらも、キツとした目付きでこつちを睨んでくるこの顔を見てこの木曾を男性だと思う人物はいないだろう。

まつ毛も長いし髪もサラサラで肌もスベスベ、どつからどう見ても美少女だ。

「そもそも俺は木曾でなければ狩娘でもない!俺は人間でモガ鎮守府の提督だア!!!」

「……………は?」

「はあああああああああ
!!!??」

嘘だろ!?!だつてどつからどう見ても木曾じゃん!!

ここまで木曾そっくりで人間でしかも男性だなんて信じられるか!?

「ほい。」

北上が木曾の左手のグローブをスポンと引き抜く。

そこにあつたのは薬指で仄かに輝くケツコン指輪。

「えへへー、指輪の交換も済ませたんだよ。この人が私達の提督で、そして私の旦那様。」

確かにこれは指輪だな。

ケツコンカツコカリの指輪は提督が艦娘に一方的に渡すものだが、実際のケツコンなら夫婦で互いに渡し合うものだ。

もしかしたら北上とは別に木曾と提督がケツコンしている可能性も無くはないが、その考え方は流石にひねくれ過ぎだろう。

何より北上が嘔吐いてまで木曾に惚気る理由があるだろうか？

「つーことは、本当にこの人が提督？」

「さつきからそう言ってるじゃねえか。そうだ、俺は狩娘の木曾じゃなくて純粋な人間で、性別は男で、そしてこの鎮守府の提督だ！」

「すいませんでしたーっ！！数々のご無礼お許し下さい！あなたが提督だと知らなかったんですウ！！」

慌ててその場で土下座する。

研修先の提督を狩娘だと勘違いした挙句、馴れ馴れしい態度を取りバシバシ背中を叩くとか速攻で研修中止になってもおかしくない。

「提督が木曾に間違われるのは今に始まった話じゃないからねえ。」

「恒例行事にや。」

「とはいえここまで失礼な人は初めて見ました。」

「半分はお前達のせいだろ……。まあいい、別に怒っちゃいねえぞ。ほら、ツラ上げな。」

ゆ、許された！そして研修中止にならなくてよかった！

研修が中止になること自体も嫌だけど、オレを推薦してくれた師匠の顔に泥を塗ることになるのも嫌だし、何よりそんなことになったら神通に殺される！

到着早々に処刑確定みたいなことにならなくて本当に良かった!!!

「え、えつと……。それでは不躰ながら、いくつか質問をさせていただいてもよろしいでしょうか？」

「無理して敬語で喋ろうとするな、気持ち悪い。俺は別にお前の上官じゃないし、部下の狩娘にも普段通りの喋り方をさせている。お前も普通でいいぞ。」

「ンンツ……。ゴホンツ！それじゃあお言葉に甘えて……。何でそんなに

木曾に似ているんですか……じゃなくてエ、似ているんだ？似てるってレベル通り越して木曾そのものじゃん。」

「この外見は生まれつきだ。整形なんかしていないし、ウィッグも被ってなきやムダ毛処理だってやっちゃいない。ホレ、眼もこの通り。」

そう言って右目の眼帯をめくる提督。その下に隠されていたのは木曾と同じような黄色の瞳であり、そして浅い切り傷も見られる。

やっぱり木曾じゃん！

「生まれつき女っぽい外見にコンプレックスがあつてな。ガキの頃はクラスのアイドル扱いで、男女問わずクラスメイトにキヤーカー言われていたんだ。校内でいつの間にかファンクラブが出来てたし、隣のクラスの男に告られたこともあるな。隠し撮り写真がコッソリ取引されていたことすらあるんだぜ。」

そう語る提督の顔は苦虫100匹まとめて噛み潰したようであり、当時の出来事がいかに屈辱だったかが見て取れる。

「それで男らしくなりたかった俺は軍人を目指すことにしたのさ。ちなみにこの眼の傷は訓練中に付いたものだ、オレの顔が傷付いたときは士官学校の同期どころか一部の教官達すら嘆いていたぜ。そして士官学校を好成績でスピード卒業した俺は、アタリハンテイ力学への適性が認められたこともあって、カリユード諸島で鎮守府を任せられるようになり、こうしてここにいてってワケさ。」

なるほど、そこまで詳しく聞くつもりはなかったんだけど思っていた以上に語ってもらえた。

しかし男らしくなるため軍人を目指したらしいけど、少なくとも外見上は全く効果がなかったみたいだな……。

「じゃあその格好は？見た目はともかく装備まで木曾に寄せる必要なんてないのに。」

「この装備か、これは「あー、それね。それアタシら球磨型からの要望。」という……ってオイ、またかよ!？」

喋ろうとしたところを今度は北上に遮られる提督。

「いいじゃん別に、提督とアタシの仲でしょ？それでね、その装備に深

い意味なんてないよ。提督が木曾に似てるから着せたかっただけー。」

あつけらかんと白状する北上。

それだけの理由で自分の提督に狩娘のコスプレをさせたのか……。でも似合ってるでしょ？提督に着せる装備はこれ以外ありえないって。」

北上の発言にうんうんと頷く大井と多摩。

まあ、確かにそうかもな。オレが北上だったら同じように着せたかも。

「とはいえ何度も言うが俺は木曾じゃない。木曾は軍刀を使ってるんだから俺にも太刀を使えとこいつらには言われたが、俺の得物はスラッシュアックスだ。」

「スラッシュアックス？」

木曾なのに武器が太刀じゃない？いや、もともと木曾じゃないんだけど何だか物凄い違和感がある。

というかスラッシュアックスってどんな武器だったっけ？

名前からして斧なんだろうけど、身近に使っている狩娘がいないからどんな武器か全然思い出せない。

「スラッシュアックスを知らねえのか？しょうがねえな、大井！」

「はい？」

「執務室から俺のスラッシュアックス持ってきてくれ。」

「しょうがないですね、分かりました。」

提督からの指示を受け執務室……というか小屋の一つに入っていく大井。

オレの知ってる大井ならこんな雑用を命じられたら『何で私が……。』とかぶつくさ文句を言いいそうなもんだが、ここの大井は随分と従順なんだな。

「提督、持ってまいりました！」

「ありがとうな、大井。」

「いえ、そんな……。」

大井が持ってきたのは、青い石の塊のようなトゲトゲした見慣れな

い物体。

オレの想像とは随分違うな、どう見ても斧には見えない。

大井はそのトゲトゲを提督に手渡すと、お礼とばかりにクシヤクシヤと頭を撫でられて、まんざらでもなさそうな顔をする。

あつ、分かった。従順というより惚れた弱みじゃん！

いや、それどころか飼い主に喜んでほしい犬の反応だよこれ！

「さて、スラツシユアックス使いとしてはスラツシユアックスを知らない狩娘がいるっていうのは堪えるもんがあつてな。」

未だに顔を赤らめてクネクネしている大井をスルーして、何事も無かったかのように話を進める提督。

全く動じる様子がない辺り、このやり取りがここの鎮守府の日常風景であることが見て取れる。

「見てな、これが俺の魂！へりオスクラツシヤーだ!!」

提督が構えると、ガシヤンと重たい音を立てて不思議な形をした石は姿を変えていく。

その形は確かに斧！未だに想像していた斧とは随分異なるが、トゲトゲの部分を刃にした巨大な片刃の斧がそこにあった。

「うわっ、斧だ！これがスラツシユアックス……。」

「フツ、驚くのはまだ早い。」

提督はオレのこの反応を予見していたかのようにニヤリと笑うと、柄にあるスイッチをカチリと押す。

すると再びガシヤンと音を立てながら、斧の刃が手元まで下りてくる。

その一方で刃の逆側にあったもう一つのトゲトゲの部位が起き上がり、柄の刃と合わさることで一本の巨大な刃と化する。

「何だこれ!?!斧が大剣に変形したア!?!」

「そうだ。斧と大剣、二つの形態に変形するこの機構こそスラツシユアックスの真髄だ!」

「か、かっけえ……。変形する武器とかそれだけで爆アドじゃん!」

「そうかそうか、お前にもこの良さが分かるか。」

これがスラツシユアックス、最初はどんなイロモノ武器かと思った

が滅茶苦茶カッコいいじゃねえか……。

スラツシユアツクスを褒めると提督の機嫌も良くなったのか、さっきのニヒルな笑いとは違ってニコツと花が咲いたような可愛い笑顔を見せる。

何だよこの可憐な美少女、やっぱりこの人女の子でしょ……。

狩娘だけでなく、提督までもがインパクト抜群なモガ鎮守府。

しかしこの提督にはまだまだ秘密があり、そして全ての狩娘にも出会っていない。

天龍のモガ鎮守府研修はまだ始まったばかりである。

天龍ちゃんと一泊二日の旅3

モガ鎮守府にて木曾とそっくりの提督に出会った天龍、しかしこの出会いにより天龍はふとあることを思い出す。

「んー？そーいや木曾に斧って、この組み合わせどつかで見たことあるぞ？それも割と最近。」

「アタシ知ってる、それテレビで見たんでしょ？」

ふとこぼした呟きなのに、すぐさま北上に特定された。

「そうそうテレビだ、テレビで見たんだ。えっと、確か番組名は……。」

「風翔剣士クロス・ダオラー！」

またしても北上に特定される。すげえな、お前エスパーか？

「それだそれぞれ……って何でオレがクロス・ダオラを見ていることを北上が知ってたんだ？ひよつとしてお前も見てるのか？」

「まーね。ここの鎮守府じゃ、アタシだけじゃなく全員の狩娘が見てるよ。」

北上の発言に再びうんうんと頷く多摩と大井。

鎮守府全員で見てるなんていいな、大井とかそういうのに興味なさそうなのに以外だなあ。

オレんとこだと龍田は付き合ってくれねえんだもん。

大体電と雷と長門とオレの四人で談話室のでかいソファアに座って見るんだが、たまに電や雷がオレの膝の上に座ろうとして長門が暴走するんだぜ。テレビくらい大人しく見せてくれねーもんかな？

後は一部の連装砲ちゃんやジョニーとスミスが見にくるんだが、果たしてタコとイカにテレビが分かんのかね？

「あの場組面白いもんなー！それに主役のコモンドの太刀捌き、これがまたスゲーカッコいいんだ！聞いた話によれば、あの番組の殺陣シーンはほとんど無編集なんだろ？つまり実際に出来る動きってことだ。だからオレも暇なときはあの動きを真似しながら太刀の練習をして

るんだぜ？いくぜ！狩技・風翔雷撃気刃斬……って感じてな。」

「テレビの真似をするなんて子供だねー。」

「悪いことは言わん、アイツの動きの真似だけはやめとけ。お前じゃ体壊すぞ。」

コモンドの凄さを熱く語るが、北上には呆れられ、提督には釘を刺された。

子供って言うなよ、ごっこ遊びじゃなくて本気でやってんだって！

「それで天龍が思い出そうとしてるのって、剣斧のウエポンである爆砕のフルブラキでしょ？」

「それだ、自称記憶喪失の少女エクス!!コモンドにネオウエポンズの被害者のフリして近付いて、コモンドの行く先々で爆破テロを起こしたネオウエポンズの刺客！そんでコモンドとの直接対決で武器のエネルギー管理ミスで負けそうになるけど、自爆することで無理矢理拘束から抜け出して敗走した、卑怯で無様なキャラ！そいつのことを思い出したんだ！」

「うん。それねー、演じたのアタシ達の提督。」

「え……？」

思わず首を動かすと、そこには腕組みをしながら舌打ちをする提督の姿があった。

「卑怯で無様なキャラで悪かったな。」

「すいませんでしたーっ!!」

本日二度目の土下座である。

本人の演じたキャラを本人の目の前で貶してしまったア！

「まあ、いいけどよ。悪役だし、実際そういうキャラだったしな。けどこれだけは言わせてもらう、ありやお芝居だ。本当の俺は卑怯な手なんか絶対に使わないし、スラッシュゲージの管理ミスなんて死んでもありえねえ。」

「アツハイ。」

「総合戦闘力では流石にメゼ……コモンド役のアクターには勝てねえが、スラアクの腕前だけならカリユード諸島で俺の右に出るヤツなんていないぜ。これは自惚れでも勘違いでも何でもない、純然たる事実

だ！」

「どうやらスラッシュユアックスの腕前に相当の自信があるようである。」

「以前にカリユード諸島の提督は基本的に狩娘と同等かそれ以上に強いって話を聞いたけど、その中でも最強を名乗るってどれだけ強いんだ？」

「そして総合戦闘力でこのモガ鎮守府を上回るコモンド役、一体何者なんだ？」

「あれ？でもエクスって作中では女の子だったと思うんだけど……。」
「清楚な白のワンピースを着た美少女で、その儂げな雰囲気と言動でコモンドを騙したシーンは今でも覚えてる。」

「正体がバレると豹変して口が悪くなるのもお約束。」

「とはいえ外見が木曾だから、丁寧な口調より乱暴な口調の方が違和感がなかったけどな。」

「うん、作中のエクスは間違いなく女の子だよ。それで演じた提督は男性だけどこの見た目だからね。特にメイクすることもなく、そのまま女の子役として出たんだよ。あの時の提督可愛かったなあ。」

「マジで!?!」

「あっけらかんと語る北上。」

「ここまで言われても未だに男性の提督じゃなくて本物の女性の木曾が演じていたとしか思えない、そのくらい女の子ムーブしてた。」

「でも考えてみれば、当時エクスってどう見ても木曾なのに胸が無いよなーって思いながら番組見てたの思い出したな。」

「つまりあの時点で気付こうと思えば気付けたのか……。」

「役でやってただけだ、好きで女装してたわけじゃない……。この外見で男性役っていうのは流石に無理があるって言われたからな。」

「またしても不機嫌そうに腕組みしつつ語る提督。」

「女装は不服のようだけど女性の演技に全く違和感がなかった辺り、役作りには真剣なんだな……。」

「それにフルブラキの鎧は男性用のデザインのものを用意してもらったからな。」

「えっ、アレって男性用と女性用があんの!？」

作中でエクスが対決時に変身したのは、青く艶めく石で作られたトゲトゲのカブトムシみたいな外見のフルフェイスの全身鎧だ。

あれ男性用だったのか……。

「ああ、あるぞ。女性用のデザインは胸元と背中が大きく空いた青い石製のドレスみたいなの外見のヤツだが、そんな格好じゃクロス・ダオラとの戦いが映えないからな。だから男性用のフルフェイスの全身鎧になったのさ。」

衝撃の事実である。

もしかしたらクロス・ダオラとドレス姿で戦う提督が見られたのかもしれないのか……。

「提督のドレス姿、見たかったなー。絶対可愛いのに……。」

「同感です。」

「にゃあ……。」

「お前らな……。」

しかしこの提督若い見た目してるよなあ。

オレんとこの提督は何歳か知らないけど、どう見てもオッサンだろうか。(※彼は35歳です。)

そんでこの前教えてもらったバルバレの提督は大体20歳前後か。

20代でも若いのに、この提督は外見が外見だから20歳にすら達していないように見える。

実際のところ何歳なんだろう？

ひよっとして老けない体質で、実際は30代だったりして？

ちよっと聞いてみるか。

「あのさー、提督ってお幾つ？」

「会ったばかりの相手に年齢を聞かれたのは初めてだな。まあいいか、別に隠しているワケじゃないし、教えて困ることもないしな。」

艦と戦ったんだよな……。

改めて提督の異常さを思い知らされるな。

「……っーか、提督は北上とマジモンのケツコンしてんだろ!? その若さで! どれだけ肉食系なんだ!」

「あー、そのことか。それはだな……。」

一度はその若さに納得しそうになるものの、この提督が既婚者であることを思い出し、思わずビシッと指差ししながら問い詰める。

日本の法律でも17歳での婚姻は駄目だったろ、カリユード諸島は治外法権なのか!?

提督もそのことについては話にくいのか、気まずそうに目を逸らしながら頬を指で搔く。

この仕草とほんのり朱に染まった顔を見ると、やっぱり女性にしか見えない。

「そりゃアタシから申し込んだんだよ。」

そんな困った様子の提督を助けるかのように、左手を揚げながらこれまた気だるげな雰囲気ですら発言したのは北上。

恥ずかしがる様子もなければ、誇る様子もないその姿は見ての通り平常運転である。

「は? お前から?」

「うん。そりゃこんな素敵な人が身近にいたら迷わずケツコンするでしょう。」

同意を求めてくる北上だが、あいにくオレにはその考え方はよく分からん。

「アタシってさ初期艦で秘書艦だから提督との付き合いも長けりや距離も近いし、何より見た目が木曾そっくりで絡みやすいから常日頃からベタベタしてたんだよ。そしたら『こりゃこの人とケツコンするかねえ!』って本能が言い始めたから、それに従ってガンガンアプローチしたんだ………会って三日目くらいで。」

三日ア!? そんなの口が裂けても付き合いが長いとは言えねえだろ。

「それで俺が根負けしてケツコンを受け入れたんだ……。」

「またまたー、そんなこと言っちゃって本当は提督だつてアタシのこ

と好きなくせにー。」

「ぐつ、そもそも嫌いなヤツとケツコンなんかしない！」

ニヤつきながら肘で軽く提督をつつく北上と、それに照れる提督。
はいはい、ごちそーさまでした。

何で年齢の話をしただけで、惚気話を聞かされるハメになっているんだろう？

「それと提督がこの若さでケツコンしたことが気になってるみたいだけど、したのはケツコンであって結婚じゃないからねー。アタシも結婚したかったけどそれは無理みたいだし、さつきも言った通りここカリユード諸島じゃ結婚自体が出来ないからねえ。まあとにかくここじゃ年齢なんてあってないようなもんだよ。」

結婚とケツコン、分かるような分からんような……。

つまり本物の結婚が出来ないから、事実上の結婚であるケツコンで妥協したってことか？

うーん、我ながら自分で何言ってるのか分からんな。というか口に出したら同じじゃん、文章じゃないと伝わんねーぞコレ。

「もう俺についての話はいいだろう!?!お前の目的は研修であって俺の身辺調査じゃないハズだ!」

恥ずかしくなってきたのか、話を切り上げようとする提督。

とはいえその通りである、気になることが多過ぎて目的から脱線してた。

「そう言われてもよお、本来の目的である研修に入れてないんだけど。待つてるだけってヒマじゃん。」

肝心の球磨と木曾は未だに來ない、バックレたか？

「そうでもないよ、噂をすれば影だね。木曾が戻って來たよ。」

そういう北上の声と同時に、オレの耳にもこちらへと近付いて來る足音が聞こえてきた。

ズシツ……ズシツ……。

やっとなって感じだな。何か足音がおかしい気もするけど、多分気のせいだろ。

そういやここの鎮守府にはマジモンの木曾と、木曾みたいな提督が

いるのか。ややこしいな。

とにかく結構待たされたんだ、これは文句の一つや二つくらい言っても許されるだろ。

「よう、お前が木曾か。散々待たせやがってよお、オイ。遅くなったワケでもあんのか?」

敢えて今の私は不機嫌ですアピールをしながら振り返ったオレの目に飛び込んできたもの、それは……。

「グルルルル……。」

「ん?」

／
—
TO BE CONTINUED…
／
／
／
— (例の

音楽)

／
—
?????????
\
\
?

天龍ちゃんと一泊二日の旅4

木曾が戻ったと聞いて振り返ったオレが見たもの、それは……。

「グルルルル……。」

「ゑ?」

BGM：牙獣現わる!

二本足で立ち上がり、オレを見下ろす巨大なクマだった。球磨ではない、真正銘の熊である。

4メートルを超える規格外の巨軀、青い毛皮、トゲだらけの甲殻に覆われた腕、そこから生える赤く鋭い鉤爪、同じく赤く光る瞳、鋭い牙が並ぶ口内とそこからだらりと垂れた舌。

ば、ば、化け物だ!?

え? 何でこんなところにクマがいるの? ここ海上の鎮守府だよ?

つていうか木曾は? 木曾はどこ? 北上は木曾が来たつて言ったじゃん。

「グルア!!」

「うひいっ!?!」

目の前の非現実的な状況に理解が追いつかず固まっていると、クマは動かないオレをその巨腕で軽々と抱き上げる。

目の前にはクマの顔、というか一噛みでオレの頭を喰い千切りそうな口が!?

抜け出そうとジタバタもがくが、クマのパワーに勝てるハズもなく拘束からは抜け出せない。

「ぎゃあああああ!?! 食べられるウ!! 助けてエエエ!!!」

絶体絶命!?! 研修に來ただけなのに深海棲艦と戦う前にクマに食われて死ぬう!!

しかもオレが死にそうだったのに、提督や北上達は助けるどころか静観している!?

ひよっとして何か彼らの気に障るようなことでもしてしまったのか?

アレか!?好奇心に駆られて提督のプライベートに踏み込み過ぎたか?

知り過ぎてしまったオレがクマに襲われたのをこれ幸いと、このまま始末しようとしているのか!?

「木曾、そのくらいにしとくクマー。天龍が困ってるクマ。」

この惨事にそぐわぬ呑気な声、その声を聞いたクマはオレをゆっくりとその場に降ろした。

し、死ぬかと思った……。未だに膝が震えていやがる。

つーか木曾って、まさかこのクマが木曾なのか!?

「災難だったクマ、でも悪く思わないでほしいクマー。これは木曾なりの挨拶クマ、別に取って食おうとしたワケじゃないクマー。そこだけ分かって欲しいクマ。」

「は、はひ……。」

クマの巨体の陰から現れたのは球磨、熊でなく球磨である。

身に着けているのは球磨型の制服ではなく、青い毛皮で作られた耳付き頭巾と腰巻きに、茶色の甲殻で作られたガントレットにブーツ、どう見ても目の前にいるクマとお揃いの格好である。

一際目を引くのは首から紐で下げられた赤とオレンジ色をした二本の爪の首飾り。

その爪からはただならぬ力を感じられる……ような気がする。

「球磨、遅かったじゃないか。俺が一足先に農場から出る際に、後からすぐに来るって言ってただろ。」

「提督遅れてごめんクマ。ずっと仕掛けてたツチノコトラップによろやくツチノコが掛かったんだけど、取り出す際にうっかり逃がしちゃって、木曾と一緒に頑張って捕まえ直してたクマ。」

そう言う球磨の片手には日本でトップクラスに有名なヘビのUM Aが掴まれていた。

ツチノコ、実在していたのか……。

確かツチノコって捕まえたら懸賞金一億円くらい貰えるんじゃないかってっけ？ すごいなカリユード諸島。

「そうそう、挨拶が遅れたクマ。球磨だクマ。短い間だけどよろしく頼むクマ。」

何事も無かったかのように生きてままのツチノコを懐に仕舞いながら挨拶する球磨。

「あ、ああ……オレが天龍だ……ってそれよりも!!」

オレも釣られて普通に挨拶してしまっただけど、よく考えずともそれどころじゃねえ!

「そのでけえクマ! 今、コイツのこと木曾って呼んだ!」

「うん? そうクマ、この子が木曾クマ。」

「あ? え?? あ?? いや、そういう意味で言ったんじゃないって……。」

何故このクマのことを木曾と呼んでいるのかと聞いたのに、どうしてそんな当たり前のことを聞くんだと言わんばかりの反応で返す球磨。

こりや質問するだけで骨が折れる思ったが、ここで提督から助け船が入る。

「大方、木曾が来ると思ったらクマが出てきてビックリしたんだろ。だがそいつがここの鎮守府の木曾だ。」

「えっと……多摩がネコになったみたいにな、木曾もクマになったのか?」

「そんな事実はないぞ。」

「だから多摩はネコっぽくなっただけでネコにはなっていないや。」

木曾がクマに変身したワケではないらしい。

「じゃあ本物の木曾がクマと入れ替わって、そいつを木曾だと勘違いしてるとか?」

「は? 何言ってるんだ? どうやったら動物と狩娘を間違えるんだ? ましてや自分の大切な部下を。それこそありえないだろ。」

「ウン、ソウデスネ……。」

同僚をコンガと間違えた事実なんて存在しない、いいね?

とにかく木曾とクマが入れ替わったワケでもないようだ。

「この鎮守府には最初から狩娘の木曾なんていませんよ。」

「ホラ、最初にアタシがこの鎮守府にいる球磨型は4人だと言ったじゃん。」

今度は大井と北上から説明が入る。

えつと球磨に多摩、それで北上と大井……確かに4人だ!!

「つまりこの鎮守府にいる木曾は『木曾』って名前のクマであって、本物の木曾はハナからこの鎮守府にはいないってこと?」

「そういうことだ。」

木曾みたいな提督と木曾って名前のクマはいるけど、肝心の木曾がいねえのか!?

何じやそりゃー!?

「このクマはアオアシラの木曾。球磨のオトモンクマ!」

「グルル……。」

四本足で立つことで位置の低くなったクマの頭を撫でながら、そう説明する球磨。

見るからに恐ろしいこの猛獣は、まるで飼い慣らされた猫のように気持ちよさそうに喉を鳴らしている。

「アオアシラ? オトモン?」

アオアシラって何だ? 青い阿修羅? オトモンは音の鳴る門のことか?

「アオアシラっていうのはこのクマのモンスターの正式名称のこと

だ。牙獣種に分類されるモンスターで、カリユード諸島の温暖な気候の土地に群れを作らず単独で生息している。ここモガ鎮守府の周辺の野山にも生息している身近なモンスターだ。」

ピンクのゴリラをコンガって呼ぶように青いクマをアオアシラって呼んでるのか、納得。

「滅茶苦茶デカいな、それに見るからに強そうだ。」

現在確認されている最大の陸生肉食獣はシロクマだけど、それも体長は2・5〜3メートルくらいだっけ？

このアオアシラは目測4メートル前後で、最大クラスのシロクマよりも大きい。

「普通のアオアシラのサイズは6メートルくらいクマ、木曾のサイズじゃ最小金冠にすら届かないクマ。とはいえオトモンになったモンスターは同種に比べて小さいのは普通のことクマ。」

「普通のアオアシラのサイズは最小が5メートルくらいで、最大は7メートルくらいにや。」

「二つ名の紅兜アオアシラなら最大9メートルの個体も確認されているそうですよ。」

「エクスプロアの進撃の巨人コラボでは鉤爪一本ですら人間と同程度の大きさを持つ超大型個体も出現したんだって。いやあここまで来るとワケ分かんないね〜。」

「……は？」

こいつらは一体何を言っているんだ？

二つ名とか紅兜とかエクスプロアとか進撃の巨人とか、意味の分からない単語がどんどん出てきたけど今はそれどころじゃない。

この巨体でミニサイズ？極まった個体は人間が手のひらサイズ？何それ怖い……。

「呆けているところ悪いが、アオアシラはさほど強いモンスターではないぞ。下位個体のコイツで足止めを喰うようであれば狩娘なんか辞めちまえ。」

「はあっ!？」

辛辣な意見を述べる提督。

こんな化け物熊が弱い？嘘だろ、勝てるビジョンが浮かばないんだけど……。

「とはいえ木曾は強いクマ！身体こそちっちゃいけど、そこらのアオアシラとは比べ物にならない強さクマ！球磨の自慢のオトモンクマ！」

「ガウ！」

自慢げに胸を張る球磨と、それを真似るように胸を張る木曾。

「それでオトモンっていうのは？」

「オトモンというのはそのまんま、オトモになったモンスターのことクマ。」

オトモ+モンスターでオトモン、思った以上にそのまんまだった。

「それもただ野生動物を手懐けたワケじゃないクマ。絆石に認められたライダーが、自分の手で卵から孵化させたモンスターと絆を結ぶことで初めてオトモンになるクマ！」

「は？」

いやちよつと待て！色々と気になることはあるけど、今明らかに意味不明で理解不能な単語が！

「卵から孵化!?哺乳類のクマが卵から孵ったっていうのか!？」

「そうクマ、球磨も卵から木曾が出てきたときは本当にビックリしたクマ！でもそういうものだど割り切るクマ、ぶっちゃけ考えても無駄クマ。」

なるほど、納得は出来ないが理解はした。

このことについてこれ以上考えるのはよそう……。

「それじゃ、ライダーってのは？」

「ライダーはハンターとは違った方法で別の自然との調和を図ろうとする人達のことクマ。ライダーはモンスターと心を通わせることが出来たと言われていて、モンスターと力を合わせることで困難に立ち向かったとされてるクマ。ハンターと違ってライダーは数が少ないからあんまり知られてないけど、カリユード諸島でもいくつか痕跡が見つかってるクマ。えーっと、確かラドン？いやロダンだったクマ？」

「レダンだぞ。」

「そうそう、レダンクマ！伝説のライダーレダン！全てのライダー達の起源にして、頂点！そのレダンの活躍について記された壁画が見つかっているクマ！レダンは全てのライダーの憧れにして目標クマ！そして球磨も第二のレダンとなるべく木曾と共に乗娘（ライむす）の修行に励んでいるクマ！」

モンスターと心を通わせる者、それがライダーか……。

そりや木曾みたいな強そうなクマが味方になってくれりや心強いよな。

とはいえ普通に考えたらそんなことを実現するのは並大抵のことじゃない、それを成し遂げたからこそそのライダーか。

そもでもってハンターになった艦娘が狩娘になるように、ライダーになった艦娘は乗娘になるんだな。

しかし自分の憧れの伝説のライダーなのに提督に訂正されるまで名前が適当だったんだが、それでいいのか？

「それにしても絆石って実在してたんだな。クロス・ダオラの変身アイテムだから名前は知ってたけど、フィクションの世界の存在だと思ってたぜ。」

「実在も何も元々絆石はモンスターと絆を結ぶためにあるものクマ。クロス・ダオラに出てくる絆石は名前を借りてるだけで、本物の絆石とは特に関係ないクマ。だから持っけていても別に変身とか出来ないクマ。」

「ありや？」

クロス・ダオラでは絆石はウエポンズの戦士が変身するのに必須のアイテムだが、作中では既に失われたアイテムであり実際に登場はしていない。

ネオウエポンズは人造絆石を使用しており、コモンドはネコの獣人シャイナスが機能を肩代わりしている。

その絆石が実在しているという事実に興奮を隠せないが、そんな機

能はないと否定される。

「これが本物の絆石クマー！」

そう言って右手の甲を見せてくる球磨、そこには卵型のフレームに納められた青白く淡い光を放つ宝石があった。

「綺麗……。」

思わずそう呟く。

放つ光は寒色系であるにも関わらず、何故か不思議と暖かみを感じる。

「絆石は持ち主の心によつてその色を変えるクマー！素の状態では紫色をしているけど、良い心の影響を受けると青く、そして悪い心の影響を受けると赤く光るクマー。当然青く光っている方がいいクマー、赤く光らせるようじゃライダー失格クマー！そして絆石の輝きはオトモンとの心のつながりが強くなればなるほど強まるクマー。つまり絆石の輝きは心の強さそのものクマー！本当の強さは力の強さではなく心の強さ、球磨はこの絆石に恥じない立派な乗娘になってみせるクマー！」

「ガウウ!!」

そう宣言する球磨と、それに合わせて咆える木曾にまるで呼応するように、一瞬だが強く輝く絆石。

その様子は彼女らの未来を祝福しているかのようであった。

「しかし絆石なんてどこで手に入れたんだ？採掘したのか？それともどっかのお土産屋さんにも売ってるのか？」

「いくら何でも土産屋で売ってるわけねークマー。」

本物の絆石なんて今まで見たことがなく、ずっとフィクションの産物だと思っていた。

カリユード諸島に来て日が浅いオレはもちろん、一緒にテレビを見ていた雷も電も長門も絆石が実際にあるとは思っていなかった、その

程度にはマイナーなアイテムである。

だからこそ出所が気になった、まあ流石にお土産屋さんには売ってねえか。

「これは提督に貰ったものクマー！」

そう言われて思わず提督の方を見るものの……。

「気になってるところ悪いが、それは俺がハクム鎮守府の提督から貰ったものを球磨に与えたものだ。それ以上の出所は知らん。」

「え？人から貰ったものを更に人にあげちゃったのか!？」

それは人としてどうかと思うんだが……。

「そう言うな。俺がいらぬから球磨に押し付けたワケじゃない。絆石が球磨を選んだから球磨に与えただけだし、ハクムの提督も俺の部下に絆石を持つに相応しいヤツがいることに気付いたから俺に託しただけに過ぎねえ。」

「??？」

「よく分からないって顔してるな。まあそんなもんさ、俺だって完全に分かっているワケじゃない。だがな、絆石を持ってりやそれだけで誰でもその日からライダーというワケじゃない。絆石を持つに値する者だけが真の所持者になれるということさ。」

「えっと、その絆石がハクム鎮守府から来たものだったのは分かったけど……じゃあ何でハクム提督は絆石を持っているんだ？」

絆石がそこから手に入るものではなく、持ち主を選ぶことは今までの話で分かったが、結局ハクム提督が持っていた理由が分からない。

そんな貴重かつ使い道の限られるものを何故持っていたんだろう？

「何だそんなことか、そりゃ簡単だ。何たってハクム鎮守府の提督自身がライダーだからな。」

「えっ?」

「ハクム鎮守府のリユート提督は俺よりも年下の文字通り子供提督、

そしてカリユード諸島では唯一のライダー提督だ。提督としてはまだまだ甘いところもあるが、ライダーとしての実力は間違いなく最高峰。レダンを目指す球磨には悪いが、レダンに最も近いのは間違いなくリユートだ。子供特有の真つすぐな心が絆石と相性がいいのかもな？」

子供提督、バルバレ鎮守府でも話は聞いたとはいえ、本当に実在しているのか。

薄い本とか、そういう系のSSとか、そういう世界にしか存在しないと思つてたぞ。

適性さえあればお子ちゃまでも鎮守府の提督という重要ポストに就けるとか闇が深いな。

まあ目の前には高校生の男の娘提督というそれ以上に非現実的な存在がいるワケだが……。

「ハクム鎮守府の近くには巨大な絆石の原石がある、詳しい場所は秘密だがな。そして不思議なことに絆原石は周囲の土地を守る力を持つている。絆原石のお陰で自然の均衡が保たれているんだ、土地神様みたいなもんだな。だから必要がない限り採掘はしないし、場所も公表していない。これが絆石が市場に出回らない理由だ、元から需要も少ないしな。」

なるほど、そりゃ誰も絆石が実在してるなんて思わないワケだ。

実質秘蔵されているようなもんだしな。

「ちなみにハクム提督のオトモンって何？」

球磨のオトモンがクマなら、最高峰のライダーのオトモンはライオンか？それともシャチか？

ひよつとして恐竜だったりしてな、実際アプトノスみたいな生き物も実在してるし。

「ああ、リユートのオトモンはヲ級だ。それも隻眼のな。」

「は???」

ヲ級……? ?

「というか鎮守府に深海棲艦がいるというだけでそこまで驚くとは、さてはお前から面倒臭がつて紹介してないな？」

「うっ……。」

「~~~~~♪」

提督はジロツと北上と大井の方に目線を向けるが、大井は気まずそうに下を向き、北上に至っては明後日の方向を見ながら口笛を吹いている。

「つたく、仕方ないな。文月、聞こえるか？」

「はい、しれーかん。文月に何かご用々？」

先程の小屋の出入り口から頭だけニユツと出して返事をする文月。さつき出てくるなって言われてたのに、普通に出てきてる。

まあ秘書艦の命令より、提督からの命令の方が優先度は高いか。

「近くにあいつらはいるか？いるんだったら連れてこい。」

「今一緒にいるよく、仲良くテレビ見てたところ。ちよつと待って〜。」

文月は頭を引っ込めると、小屋の中でドタバタと騒がしく音を立て始めた。

あいつら？誰？そんなことを考えているうちに静かになり、小屋から文月が姿を現す。

文月は園児並みに小さい子供二人の手を引いているようだ、このチビ達が提督の言っていたあいつらか？

ん？というか、この子供どこかで見覚えがあるような……？

「キヤツキヤツ！」

「キュツキュツ！」

「ほら、こいつ^ちが俺の鎮守府の深海棲艦、PT小鬼群だ。」

ゲエー^ーーツ^{!!}?!?!こいつら子供じゃねえ、深海棲艦だ!!

深海棲艦が普通に鎮守府内の建物の中から、それも狩娘に手を引かれながら出てきたア!!

「ほら、二人とも挨拶するの。」

「キヤツキヤツ！オレサマが栄えある深海棲艦のホープ、パトルだキヤ！よろしくつキヤ！こつちの冴えないヤツはオレサマの手下つキヤ！」

「キュッキュッ！ワガハイが深海棲艦の未来を背負って立つ若きエース、トツピだキュ！こつちの情けないヤツはワガハイの子分っキュ！」

「「あ？」」

「誰がお前の子分っキュ!?お前みたいなドジに未来のエースなんて無理っキュ！」

「そつちこそ何が手下っキュ!?いつも足引っ張ってるのに偉そうにするなっキュ！」

二人のPT小鬼群は文月に促されて自己紹介をする……が、仲が悪いのかすぐに取り組み合いの喧嘩を始めてしまった。

「また始まったか、まあほっときや収まる。気にすんな。」

「いつも喧嘩してるけど、パトルもトツピも本当はとつても仲良しなんだよ。」

「いや、喧嘩はいいけど……PT小鬼群ってそもそも三人組じゃなかったっけ？」

目の前で喧嘩をしているパトルとトツピと名乗ったPT小鬼群は見ての通り二人、しかしPT小鬼群は本来三人一組の深海棲艦である。

「ああ、そのことか。察しの通りそいつらは元々三人組だ。カリユード諸島に現れるPT小鬼群は、ある程度成長すると一人前の深海棲艦となるために三人で修行の旅に出る習慣があるらしい。ところがこいつらは旅の途中で仲間の一人とはぐれちまった挙句、他の深海棲艦の縄張りに迷い込んで襲われてたんだ。そこを俺の狩娘達に偶然助けられたんだが、どういうワケかそのまま勝手についてきた挙句、ここに住み着いたのさ。一人前の深海棲艦になると、はぐれたもう一人を見つげ出すまではこの鎮守府を拠点として活動するんだと。」

「よ、よく許可したな……。」

たまたま助けただけの深海棲艦、昔話みたいに恩返しだけが目的で住み着くっていうならともかく、自分の目的のためだけに勝手に鎮守府に居座るとか、オレだったら叩き出してると思うぞ。

「フツ、俺だってお人好しでこいつらを住まわせてるんじゃない。間

近に深海棲艦を置くことで生態調査に役立てているのさ、深海棲艦はまだまだ謎の多い存在だからな。それにこいつらもたまに修行と称して狩りに同行して、サポートしてくれている。単なる穀潰しじゃないのさ。」

なるほど、ちゃんと考えがあつてのことなんだな。

というか深海棲艦が狩りのサポートをしてくれるなんて、まるで才トモ連装砲ちゃんみたいだな。

「とはいえ鎮守府に深海棲艦を住ませるなんて初めてだからな、日頃から深海棲艦を戦力として運用しているハクム鎮守府を頼つたのさ。絆石はそのとき半ば押し付けられるような感じで貰つたもんだ。」

あいつには球磨がこうなるってことが見えてたのかねえと遠い目をしながら呟く提督。

しかしすぐに姿勢を正すと、提督らしく命令を下す。

「さて、お喋りはここまでだ。大井と球磨、分かつてるな？お前らはモガの代表として出すんだ、あまりみつともない真似はするなよ。球磨は言われるまでもないとは思うが、木曾の手綱を握ることを忘れるな。それでは球磨、大井、木曾、そして天龍、出撃だ！モガ鎮守府の戦いつてヤツを教えてやれ！」

「了解です！」

「了解クマー！」

「ガウ！」

「了解！」

さあ待ち望んだ出撃だ！………つて、なんでみんな目の前の海から出ないで棧橋を渡って向こうの島の方に行こうとしてるんだよ???

さも当然というように棧橋を渡っていく二人と一匹に遅れないよう小走りで後を追う。

ギシギシと鈍く軋む棧橋の音、それはまるで現状が理解出来ないオレの内心の不安を現してるかのようだった。

天龍ちゃんと一泊二日の旅5

「ぶっきらぼうに見えてとつても優しくて〜♪しかめっ面してもとつても可愛い〜♪」

「ぶっきらぼうに見えて、とても優しくてえ……しかめっ面しても……とてもかあい……。」

「だけどすっごく強くて〜♪すっごくカッコいい〜♪世界の誰よりも愛してるよ提督〜♪」

「だけどすっごく強くて……すごく、カ……カコいい……世界の誰よりも……あ〜、あうあうあうあう……。」

「コラッ大井！ちゃんと歌うクマ、もつと声出すクマ！羞恥心を捨てて、自分の中の本当の気持ちと向き合うクマ！」

「わ、私はいつでも自分に素直ですよ！」

「いや、それはね〜クマ。大井、そんな調子じゃいつまでたつても提督とケツコンなんか出来ないクマ、お前はそれでいいクマ？お前の提督への愛はそんなものクマ？お前は本気で提督を愛しているクマ!？」

「そ、そんなこと言われても、そもそも提督は既に北上さんと……。」
「北上を言い訳に使うなクマ！知ってるクマ？そんなことを言い続けて、自分の想いを殺して我慢し続けるとそのうち心の病気になるクマ。ようするに病むクマ、頭がおかしくなるクマ！そんなことになつてもいいクマ？お前が良くても北上や提督は困るクマ、もちろん球磨も困るクマ。姉として大事な妹にそんなことにはなつてほしくないクマ、分かるクマ？だったら心のリハビリのためにも次は一人で最初から歌うクマ！お姉ちゃん命令クマ、反論は許さんクマッ！」

「そんなあ……。わ、分かりました。んんっ……深緑の髪〜♪二色の瞳〜♪」

「~~~~♪~~~~♪」

「……なあ。」

「天龍、どうしたクマ?」

「何これ?」

「何ってこの歌クマ?これは球磨が作詞作曲した、球磨の溢れる提督への愛と想いを綴ったラブソングクマ!」

ラブソング?この変な歌がラブソング??こんな歌詞でラブソングのつもりなのか??

「このラブソングを定期的に歌って溢れる愛を発散しないと、球磨の中に愛が溜まり過ぎて爆発しちゃクマ。もし球磨が爆発すると鎮守府を中心とした半径500メートルは焼け野原になるクマ、悲惨な未来を回避して、平穏な時代を維持するためにもこの歌は必要不可欠クマ。」

「あ、そうか……。 (愛が溜まって爆発?鎮守府が焼け野原?何言ってるんだコイツ?) ……で、何で大井にも歌わせてるんだ?」

「~~~~♪~~~~♪」

大井はさつきからずっと一人で恥ずかしい歌詞を歌わされ続けており、見てるだけで可哀想である。

顔は恥ずかしさのあまり真っ赤に染まり、瞳はグルグルと渦を巻いている。

「これは教育の一環、そしてお姉ちゃんから妹への愛クマ。大井には素直さとひた向き加減が足りてないクマ。ラブソングを歌わせることで大井の羞恥レベルを徐々に下げること、大井は提督に素直に向き合って直接愛を伝えられるようになるクマ。そうならば大井は提督とケツコン出来るようになるクマ！」

「は？何だそりゃ？ひよつとしてお前大井に北上から提督をNTRせようとしてんのか？そういう歪んだ趣味でもあんの!？」

「クマツ!?!そんな変な趣味なんて持ち合わせてないし、そういう陰湿なこともしないクマ!これは提督と球磨型狩娘のしあわせ家族計画クマ！」

「ちよつと何を言ってるのか分からない、頭痛くなってきた……。」

「ぬっふっふっ、恋愛初心者の方龍にはちよつと難しかったクマ? まあいづれ分かるようになるクマ！」

そんなの分かるわけがないし、分かりたいとも思わない。

いづれ分かるようになる日が来るとか、そんなの冗談でも嫌なんだけど……。

そもそもどう考えても向こうの方がおかしいのに、何でオレがバカにされてんだ? 理不尽だ……。

「……まあ歌のことはいい。それよりもう一つ聞いていいか？」

「今度は何クマ?」

「何でオレ達出撃したはずなのに、仲良く木曾の上に3ケツして野山を歩いてんだ!？」

「ガウ！」

そう、現在オレ達は三人並んで木曾の背中に乗って進んでいる。

一番前で木曾の舵取りをしているのが球磨であり、その後ろに座っているのがオレ。

木曾に乗り慣れていないオレは落馬……もとい落熊しないように球磨の腰に両手を回して身体を固定しており、後ろからも大井がオレの身体を押さえてフオローしてくれている。

つまりオレは二人に挟まれる形で座っているのだ。

ちなみに球磨の武器……スラッシュアックスだと思われるモノは、オレが球磨の背中に張り付くのに邪魔になるとのことで大井が背負っている。

当然大井も自分の武器である片手剣を装備しているので、実質武器を二つ持っていることになる。重そう……。

これが何を意味するのかというと、今までのカオスなラブソングも球磨の大井に対する説教も全てオレを挟んで行っていたということである。勘弁してくれ……。

「そもそも何で全員で木曾に乗って移動する必要があるんだ？普通に歩いていきやいいだろ？」

「そりや木曾に乗った方が移動が楽だからクマ！」

「いや、そりや確かに乗って移動した方が楽だけど、オレが言いたいのはそのうちのことじゃなくて……。」

「ほら、周囲を見てみるクマ。」

「？」

球磨に言われて周囲を見渡してみると、少し離れたところを流れる小川に潜む首の長いワニのような生物が目についた。

ワニは明らかにこちらを警戒しており、遠巻きに威嚇こそしているものの近付いてくる様子はない。

「あれはルドロスクマ。」

「ルドロス？」

「ルドロスはモガ鎮守府周辺の水辺でよく見られるモンスタークマ。好戦的な性格で、狩娘を見掛けると積極的に攻撃してくる厄介なヤツクマ。でも木曾と一緒にいると木曾を恐れるのかあまり近付いてこなくなるクマ！」

「つまり木曾といると襲われないから安全ってことか？」

「そういうことクマ！野生動物は互いの力関係に対して敏感クマ、意味もなく自分より強そうな相手に喧嘩を売るようじゃ野生の世界ではとても生きていけないクマ！流石にロアルドロスみたいな大物は無理だけど、小型モンスターならビビッて消極的になるクマ！これでも無駄な戦闘を回避出来るし、無益な殺傷も減らせるクマ。球磨としても意味もなく野生動物を傷付けたくはないからとても助かってるクマ！」

「なるほど、ボディーガードみたいなものか。（ロアルドロス……？）」「そうクマ！まあ万が一襲われたとしても、そこらの小型モンスターなら木曾の相手にはならんクマ！ワンパンでぶっ飛ばしてやるから大船に乗った気持ちでいるクマ！」

「実際に乗っているのは大船じゃなくて大熊だけだな。」

「~~~~~♪~~~~~♪」

「それともう一つ聞いときたいんだが、オレ達って海に向かってるんだよな？」

「そりやとーぜんクマ。球磨達は狩娘クマ！」

「じゃあなんでこんなところを歩いてんだ？」

もう既に勘付いていると思うが、現在オレ達は鎮守府の棧橋を渡った先にある孤島を木曾に乗って進んでいる。

要するに陸路である。

「鎮守府の周囲は海に面しているんだからそつから出撃すればいいじゃん？」

交易船で直接乗り込んだり、そもそも鎮守府が海の上に作られていることから分かるように、モガ鎮守府は周囲を海で覆われている。

そこから直接出撃すればいいのに何で島の中をてくてく呑気に歩

いていく必要があるんだ？

「やれやれ、そんな簡単なことを説明するハメになるとは思わなかったクマ。」

オレの当然の疑問に球磨はコイツ分かってねーなど言わんばかりの態度で返す。

何とかさつきからオレに対して辛辣じゃないか？

「まず前提としてこの鎮守府が建っている周辺の間には深海棲艦が生息していないクマ。深海棲艦にもそれぞれの縄張りや、好みの環境つてものがあつて、この鎮守府はちようどそういった地帯の間と間に建てられているクマ。まあ海の上に建ってるんだからいきなり深海棲艦の攻撃を受けないためにも、そういった場所を選ぶのは当然クマ！つまり鎮守府周辺の海は基本的に安全クマ！」

そりやそうだ。

夜に寝てる間に鎮守府の真下から攻撃でもされたら堪らないからな。

「逆に言えば鎮守府から直接出撃しても全然会敵出来ないクマ。深海棲艦が多く生息している海域は島を挟んで鎮守府のちようど反対側クマ、だから狩りに行くならそこを指す必要があるクマ。だけど鎮守府の裏から出撃すると狩場に辿り着くために島を迂回する必要があるから、もの凄く時間が掛かるクマ。つまり島の中を突っ切つてしまえば近道になるクマ！」

要約すると鎮守府から目的の狩場までは海路で行くより、陸路を使った方が早くて近い。島に生息している気性の荒い野生動物は木曾と同行することで交戦を避けられる。

近くて早くて安全ね♪……ということらしい。

木曾の背中に揺られてしばらくすると、見えてきたのは視界いつぱいに広がる大海原。

球磨曰く、ここは孤島のエリア10と呼ばれている場所らしい。

全員で木曾から降りて波打ち際に集まった、潮風が気持ちいいぜ。ちなみにここに到着するまで大井はずっと歌い続けていた、ご苦労さん。

「どうクマ? いい景色クマ!」

「ああ、そうだな。師匠からも散々モガの海は美しいと聞かされたが、これを見ると誇張でも何でもなく、ただ事実を言っていたんだなって分かるぜ。」

見たことがないくらいに澄んだ海。

海岸は崖になっており、海中を覗き込むとそのまま海底が見える程の透明度である。

海底からは明らかに人為的に建てられたと思われる太い石柱が数本、海面から突き出すように生えており、かつてここで栄えた古代文明が存在していたという事実を現している。

「それじゃ早速海に出るクマ!」

「ちよつと待てエ!」

「何クマ?」

いきなり出て行こうとする球磨を引き留める。

不服そうな顔をされるが、このまま出撃されるとオレが困る。

「まだベースキャンプを設置してないぞ! ここにはベースキャンプが無いだろ? このまま出撃すると、もし乙つたときに運ばれるキャンプがないじゃねえか。」

見ての通り、この海岸にはベースキャンプが存在していない。

ベースキャンプは単なるテントではない、狩娘にとつてクエストの拠点となる重要なエリアである。

クエストの出発地点、物資の補給所、休息所、避難所、様々な役目を持つ立派な前線基地なのだ。

「なーんだ、そんなことクマ。」

「そんなことって……。」

「心配しなくてもベースキャンプは既に設置してあるクマ！ エリア2の隣のエリアがベースキャンプになってるクマ！」

「エリア2？」

「ほら、ここにクマ！」

球磨は懐から地図を取り出し、広げるとこちらに見せてくる。

そこに書かれていたキャンプの位置は……。

「遠ッ!? エリア2って鎮守府から出てすぐのところじゃねーか！ エリア10からどんだけ離れてると思ってんだ!!」

「心配しなくてもベースキャンプの釣り場にエリア9に繋がるショートカットがあるクマ。やられたら、そこを通ってくれば復帰が早いクマ。」

「いや、そういうことを言ってるんじゃない……。」

馬の耳に念仏、暖簾に腕押し、何を言っても軽くないなされる現実にと頭が痛くなる。

なおも食い下がろうとするものの、大井に肩をポンポンと軽く叩かれ引き留められた。

「私には天龍の言いたいこと分かるわよ、私も同じことを姉さんに聞いたもの。エリア10から出撃するのに、どうしてベースキャンプはエリア2にあるのかって……。それに対して姉さんはこう言ったわ。」

『球磨が建てたワケじゃないから知らんクマ、無いものは無いんだから諦めろクマ。』

「その後提督にも聞いてみたのだけど、エリア10周辺にはベースキャンプを建てられるほど安全なスペースが無いと言われたわ。ここ周辺は波打ち際まで深海棲艦が近接してくることもあるし、ロアルドロスのような大型モンスターを通り道にもなっている、そんな危険

なところにキャンプは建てられないそうよ。」

ヤレヤレといった感じの顔で、ため息交じりに語る大井。

なるほど、理解した。要するに建てたくても建てられないんだな……。

球磨も最初からそう言えばいいのにと思ったが、そもそも立地に興味が無いので調べてすらいらないのだろう。

お前も苦労してるんだな……。

ところでロアルドロスって何だ……と思ったが、ここでツッコむとなおさら出撃が遠のくと思いいグツと我慢する。

次回、待ちに待った出撃である。

しかし日頃からモガの海で狩り慣れており、お互いに気心も知れている地元鎮守府の狩娘姉妹と、本日ここに来たばかりのよそ者天龍。

そんな即席にも程がある凸凹パーティ、果たして天龍は足を引っ張らずに狩りを終えられるのであろうか？

天龍ちゃんとお泊二日の旅6

「それじゃあ改めて出撃クマ!!」

そう叫びながら真っ先に球磨が海面に降り立ち、続いて大井が降り立った。オレも負けじと海へ飛び出し、最後にオレの隣に大きな水しぶきを立てながら木曾が四本の脚で降り立った。

……………木曾?

「ハアアアア!? ウソだろおお!?」

「いきなり何クマ!?!」

「急に大声出さないで、うるさいわよ!」

二人に怒られてしまった、でも仕方ないだろ?

「熊が、アオアシラが……………水の上に立つてるぞオ!?!」

名前こそ木曾だが、木曾は狩娘ではなく熊型モンスターのアオアシラ。

だというのに狩娘と同じように水面に立っている。泳いでいるのではない、立っているのだ!

「なんだ、そんなの簡単な理由クマ。木曾のライドアクションに『水上移動』があるからクマ。」

「ライドアクション?」

「簡単に言えばオトモン固有の能力みたいなものクマ。木曾は『水上移動』のライドアクションを持つてるから、水の上を歩けるクマ!」

コイツは水上移動が可能ってこと? クマなのに? 納得出来ん。

「ひよつとしてアオアシラってみんな水上移動が出来るのか?」

「んなわけねークマ、熊が水の上を歩けるはずがないクマ。普通のアオアシラのライドアクションは『ハチミツ探知』と『岩砕き』クマ。『ハチミツ探知』は自分の周囲にあるハチミツの位置を察知する能力クマ。『岩砕き』はそのまんま、腕力に物を言わせて岩を砕いてしまうクマ。だけど木曾はそこらのアオアシラとは一線を画す特別なオトモ

ンクマ。特別なオトモンだから『ハチミツ探知』の代わりに『水上移動』のライドアクションを使える、それだけクマ！」

要約：木曾は特別だから水の上も歩ける！

※ちなみに本来なら使えないライドアクションを覚えている特別なオトモンというのは実在し、人を乗せて空を飛ぶ『飛行』が使用可能なイヤンクツクや、短時間だがステルス状態となり周囲の目を欺いて移動出来る『隠密移動』が使用可能なネルスキュラが存在する。

とはいえ流石に『水上移動』が使用可能なアオアシラは存在しない。ましてや『水上移動』とは水上を泳ぐアクションであり、当然ではあるが水面を歩くアクションではない。

「ヒヤッホークマ！」

「グオオオン！」

狩娘……というか艦娘と同じように水面を滑って移動する木曾。

熊が狩娘と海上を仲良く並走しているという、常識的に考えてあり

得ない光景に頭痛がしてくる。

とはいえ艦娘及び人型の深海棲艦が初めて世界に認知された当初は、人間そっくりの生物が当たり前のように海上を歩行をしているという光景は、当時の人々にとっては非現実な出来事だったのだろう。

それが現在はどうして多くの人々に認知されているという事実を考えると、熊が水上移動しているこの光景も艦娘という前例があるぶん、よりスムーズに受け入れられるんじゃないだろうか………いやいや、やっぱりこれ受け入れるのは流石に無理だろ。

「見つけたクマー！今回のターゲット、ソ級クマー！」

物思いに耽っていると、いつの間にかターゲットを発見していたらしい。

球磨の指差す方向、そこにいたのは一般的な深海棲艦とやや比べて平べったい体型をした、全長20メートルはありそうな黒光りする巨大な4つ目のアンコウだった。

水面から全身の2/3を出しており、ちよつとした小島のようにも見えるその姿は、自分の知識として知る潜水ソ級とは随分と容姿が異なる。

一般的に知られている潜水ソ級の姿は、頭に上顎のみの黒い頭部装甲を乗せた、全身を包み隠す程の長髪を生やした人型深海戦艦である。あと地味に巨乳である。

だというのに眼前の深海戦艦は完全にイ級と同じような大半が黒い装甲で覆われた巨大な魚型をしており、4つ目の顔と頭部に乗っている砲台にソ級の被っている帽子(?)の面影があるものの、人型の要素はどこにもない。

何より普通のソ級は大きさも人間と大差なく、一口で狩娘を2〜3人は簡単に丸呑みに出来そうな巨体をしているはずもない。

ハッキリ言って初見でこれをソ級と認識するのは無理がある、深海棲艦特有の黒い外皮と独特の頭頭部を持ったアンコウにしか見えない。

BGM：『海と陸の共震／ラギアクルス』

『パオパオオオオオオーン!!』

がま口の財布を思わせる程に大きく裂けた口を開き、某メカ怪獣王の逆襲に登場する赤い恐竜を思わせるような独特の咆哮を上げるソ級。

字面に書き起こすと迫力が無いように思えるが、空気を震わせ鼓膜を揺さぶるこの叫びは生物としての本能的な部分を恐れさせ、その身を強張らせる。

そして大きく開かれた口の中、本来ならば舌があるべき場所。

そこには青白い肌をした、黒髪の豊満な女性の上半身が生えていた。

上半身しかなかったり、被り物をしていないという差異はあれど、あの姿は紛れもない潜水ソ級。

間違いなくあの深海棲艦の本体である。

「交戦開始クマー！突撃イイイ！」

「いきますー！」

「ガウー！」

ソ級が口を閉じるとほぼ同時に、ソ級に向かって駆け出すモガ鎮守府チーム。

「え？」

それに対して慣れない咆哮を受けたことで動きが止まり、更にはチームワークもあつたもんじやない天龍は出遅れる。

そしてそんな隙だらけの狩娘を見逃す程、深海棲艦は甘くはない。

「天龍避けるクマー！」

球磨の声にハッと我に返ると、長さ2メートルはありそうな鋭い氷柱がこちらを串刺しにすべく、空気を引き裂きながら真っ直ぐ飛んできていた。

「うおおっ!？」

慌てて横に動いて避けたが、回避がギリギリだったため髪を2、3本ほど持っていかれる。

氷柱はそのまま海面へと着弾し、水しぶきを上げて海中へと消え

た。

「もう戦闘は始まつてるのよ、ブーツとしないで！」

天龍は大井に怒られつつも、遅ればせながら戦闘に加わる。

「今ので分かったと思うけど、ソ級は氷を使った攻撃を得意としているクマ！だからコイツが暴れるとその周辺は大きく気温が下がるクマ。一隻だけなら影響は少ないけど、もしコイツが大量発生しちゃったら温暖な環境のモガの海は大打撃を受けるクマ！だからモガ鎮守府の狩娘にとってソ級は他の深海棲艦と比べても狩猟優先度の高い、絶対に避けては通れない相手クマ！」

球磨はソ級に飛び掛かると、手にしたスラッシュアックスを薪割りのように艤装の頭部に勢いよく振り下ろす。

「球磨と木曾の絆の証、青熊斧の一撃を受けてみるクマ！」

「パオオオオ!!」

球磨の持つアオアシラ素材で作られたスラッシュアックス、青熊斧で脳天を叩き斬られたことにより、ソ級は青白い体液を撒き散らしながら悶えた。

「まだまだあ！まだまだ狩りはこれからよ！」

大井は悶絶して動きの止まったソ級の懐に素早く潜り込むと、左手に持つ片手剣で斬り刻む。

「プオオオオン!!」

しかし体勢を立て直したソ級はヒレ状になった右の前脚を持ち上げると、足元にいる大井を押し潰すべく勢いよく振り下ろした。

「ガオオ!!」

しかしその脚が大井を潰すことはない。

素早く木曾が割って入り、振り下ろされた前脚を両腕で受け止めたからだ。

「グルアアア!!!」

「パオオオ!!」

木曾はそのまま受け止めている前脚を掴むと、そのまま横に一回転しながら自分より大きな体格のソ級をまるでハンマー投げのように思い切り投げ飛ばした。

空中ではどうすることも出来ないのか、ソ級の巨体は数秒程宙を舞った後、無抵抗のまま海面に叩き付けられ海面が爆発したかのような高い波飛沫を上げる。

「みんな！離れるクマ！」

しかし球磨が叫ぶ声と同時に、冷凍液がまるで高圧水流のような勢いで波飛沫の壁を突き破って放たれる。

辺り一帯を薙ぎ払うように放たれたその攻撃は、周囲一帯の海を瞬時に凍り付かせ、波飛沫は氷の壁と化する。

常夏の海であるはずのモガの海は、あつという間に流水の浮かぶ極寒の海となってしまった。

「だがこれは咄嗟に放った苦し紛れの牽制攻撃だろ！」

波飛沫で視界が効かない上に、誰かを狙ったワケでもなく周辺を薙ぎ払うように放った時点でソ級がこちらを認識出来ていないということは明白だ。

「これはひよつとすると、ひよつとするとするんじやねえか？」

天龍は目の前の流水に迷わず飛び乗った。

「やっぱり乗れたな、だが脆い！」

流水には無事乗れた。

しかし表面しか凍っていないのか、流水はすぐさまパキパキと音を立てて崩れていく。

「だったら速攻だ！」

天龍は背中中の太刀に片手を掛けつつソ級目掛けて駆け出す。

アクションゲームの崩れる足場のように天龍の足元の氷は失われていくが、それに構うことなく走り続ける。

「どっせい!!」

そして勢いそのまま目の前の氷の壁にジャンプで飛び込む。

天龍は固い氷壁に無様に激突……ということはなく、氷の壁も足元の薄氷と同じように脆く、飴細工のように砕け散り天龍を素通りさせた。

「パオ!？」

「貫ったア！」

まさか氷を突き破って狩娘が現れると思っていなかったのか、呆然とした表情を浮かべるソ級。

その隙を逃しはせず天龍はソ級の広い額に着地し、着地の勢いを利用して太刀を深々と突き立てた。

「パオオオオオオオオオオオオオオオオ!!?!」

予想だにしない攻撃で大打撃を受けたソ級は額に太刀が刺さったまま暴れ出す。

当然太刀を握った天龍も額に乗せたまままだ。

「うおおっ、やべっ！一体どうしたら……。」

「乗り状態クマ！」

「は？」

「天龍！お前の今の状況は乗り状態クマ！深海棲艦の上に乗った状態のことを乗り状態と呼ぶクマ！」

「ま、まんまじゃねーか。」

「名称はどうでもいいクマ！天龍、そのまま耐えるクマ！そしてソ級の動きが鈍くなってきたら剥ぎ取りナイフでメツタ刺しにして弱らせるクマ！」

天龍は球磨に言われた通り、暴れるソ級から振り落とされないうように必死に耐え、動きが鈍った隙を突いては何度も剥ぎ取りナイフを突き刺した。

「動きが完全に止まった？い、今だッ！気刃四連斬りッ！」

痛みと疲れによるものなのか、荒く息を吐くだけのソ級。

天龍は刺さったままの太刀を掴み、顔面を抉るように渾身の力で甲殻を斬り裂く。

顔面を斬り刻まれたソ級は呻き声と共に力を失ったかのように海に倒れ伏し、乗っついていられなくなった天龍も海面へと投げ出された。

「た、倒れた。やったか!?!」

「やったかじゃねークマ、フラグ以前の問題クマ！このくらいで深海棲艦をやれるワケねークマ！」

「倒れているこの隙に攻撃するの！乗り状態の本命は相手からダウンを奪うことなのよ！いいからボサツとしないで攻撃する！」

倒れたソ級に群がるように総攻撃を開始するモガの狩娘達。

球磨の斧が鼻先を穿ち、大井の剣が下顎を斬り裂き、木曾の鉤爪が脳天を抉り取る。

天龍も攻撃に参加し、太刀を脇腹に突き立てる。

「たあっ!!」

「パ……ウ……。」

大井の斬撃が7、8回ほど決まると、突然ソ級はビクリと痙攣しながら口元から白い泡を吐き、くずおれるとピクリとも動かなくなつた。

「決まった？決まった、決まったわ！みんな攻撃中止、攻撃中止よ！特に天龍、絶対に攻撃禁止よ！止まりなさい！」

ソ級が動かなくなったのを確認すると、モガの狩娘達は先程までの猛攻が嘘のように攻撃の手を止めた。

しかし現状を把握しきれしていない天龍は、車は急に止まれないと言わんばかりに太刀を振り下ろしそうになり、大井が飛び付き羽交い絞めにすることで無理矢理動きを止める。

「な、何で止めんだよ!?!」

「この状態のソ級を殴られると困るからよ、少しは考えなさい。」

そうやって天龍を開放した大井が見せてきたのは黒い包帯で幾重にも縛られた独特なデザインをした片手剣。

「これが私の武器、居眠り加古。睡眠属性の片手剣よ。片手剣はほかの武器に比べると小振りだから物理的な威力は低めだけど、その代わりに属性攻撃に秀でたものが多いわ。火や氷といった直接的な攻撃属性だけでなく、毒や麻痺といった間接的に狩りを有利に進める属性を持つている片手剣も多いの。」

大井は納刀すると、ポーチをまさぐりながら眠っているソ級に近付いていく。

「そして睡眠属性は見ての通り、相手を眠らせる。眠った相手は完全に無防備になるわ。無防備だからこそ、相手に与えられるダメージは

通常の3倍にまで跳ね上がる。その代わりに、どんなに些細なダメージでもすぐに目覚めるのよ。だからあなたの攻撃を止めたというワケ。せっかく作った大ダメージのチャンスが太刀一発で終わりなんて勿体ないでしょ?」

大井はそのまま眠りこけるソ級の眼前まで移動すると、ポーチから大タル魚雷Gを取り出し、それをソ級の顔の前に置いていく。

「そうクマ、相手を眠らせたなら魚雷で爆破するのがマナークマ。この一連の流れを睡眠爆殺と呼ぶクマ。超強力な大剣持ちがパーテイにいるならそっちに目覚めの一発を任せてもいいけど、基本は魚雷クマ。」

そう言いながら球磨も魚雷を並べていく。

ちなみにこの世界ではスリンガーはまだ一般的な装備ではないので、睡眠ぶつ飛ばしも一般的ではない。さもありません。

「……どうしたの?早くあなたも魚雷を置きなさいよ。早くしないとソ級が起きちゃうでしょ。」

ポーツと見ているだけの天龍を疑問に思ったのか大井が急かす。

「えつとゴメン、魚雷持ってねーわ。」

睡眠爆殺どころか目覚めの一撃すら知らない天龍が魚雷など持っているはずもない。

しかしその返答を受け、大井の雰囲気はユラリと変わる。

「はあ?あなたねえ、そういうのは事前に準備しているものですよ!!睡眠爆殺を知らなかったとしても、狩りを有利に立ち回るための準備は惜しまないのが狩娘よ!使う使わないじゃなくて持つてくること大事なの!しかも鬼人薬とか強走薬みたいに入手に手間掛かる物ならともかく、魚雷なんて貴重品でもなんでもないわ!必要な時に準備してなかったからありませんでしたなんてあなた狩りを舐めているの!?!どうせ狩娘は艦娘と違って轟沈しないからって気楽に考えているんでしょ!?!」

「ヒエツ、ゴメンナサイゴメンナサイ!!」

「わーっ!わーっ!大井、そこまでにするクマ!あらかじめ戦法を説明してなかった球磨達にも責任はあるクマ!それに天龍を責めたっ

て新しい魚雷は出てこないクマ！今やるべきことを見失ってるクマ！球磨達の目的は喧嘩じゃないクマ、ソ級の討伐クマ！さっさとしないと本当にソ級が起きるクマ！敵を前にして呑気に仲間割れしてたなんて提督にバレたら愛想尽かされるクマ、そんなことになってもいいクマ!?!」

「チツ、提督に迷惑が掛かるということは、秘書艦の北上さんにも迷惑が掛かるということね。北上さんを困らせるのは本望じゃないわ。べ、別に提督に嫌われるのが嫌というワケじゃないんですから勘違いしないで下さいね!!」

「へいへい分かっているクマ、みなまで言うなクマ。」

天龍が魚雷を持ってないと分かった途端、キレ散らかして激しく天龍を責め立てる大井。

しかし球磨になだめられて落ち着きを取り戻すと、ポーチから石ころを一つ取り出した。

「石ころ？それで何をするつもりなんだ？」

「起爆に使うのよ。大タル魚雷は時限式ではないから、起爆するには何かしらの衝撃を与える必要があるわ。武器で叩いたり、手っ取り早く蹴り飛ばしても爆発するけど、そうすると私まで爆発に巻き込まれるでしょう？だから遠くから石ころをぶつけて起爆するのよ。」

そして石ころを魚雷に投げつけた、次の瞬間……。

ドオオオオオオオオオオ
!!!!!!

「バオオオオオオオ!!??」

魚雷の爆風の中から悲鳴と共に現れた煤塗れのソ級は頭部に大きな亀裂が入っていた。

「やった、部位破壊成功クマ！」

睡眠爆殺を成功させたことにより狩りを有利に進める天龍一行。

しかし顔が割れる程の大ダメージを受けたにも関わらず、ソ級の瞳に怯えや諦めの色は一切見えず、明確な闘志があった。

そして天龍は知ることになる、モガの狩りはここからが本番だということを……。

天龍ちゃんと一泊二日の旅7

『パオオオオオオオオオオ!!』

「うっ!？」

魚雷で大打撃を受けたソ級だが、ダメージを感じさせない力強い咆哮を上げた。

大型深海棲艦の放つ咆哮は恐怖という生命にとって抗いようなない本能を刺激する。

熟練の狩娘ですら対抗策無しではその恐怖に打ち勝つことは不可能であり、当然そんなものを真正面から浴びせられた天龍達は身動き一つ出来ない。

その隙を見逃さずソ級は海中へ潜って行ってしまった。

「おい、どうすんだ？海の中に逃げられたぞ。」

天龍は足元を見ながら焦った声を出す。

モガの海は非常に澄んでおり、天龍の足元の海中に身を潜めるソ級の姿は丸見えだ。

しかし見えていてもこれでは手の出しようがない。

狩娘は艦娘ではないので艤装は持つておらず、ましてや今回集まった狩娘は全員近接武器装備である。

大タル魚雷は名前こそ魚雷だが実際は火薬が詰まっただけのタルであり、当然迫撃砲なんて気の利いたものも存在しない。

つまり水中の相手に水上から攻撃をお見舞いする方法を今の天龍達は持っていないということである。

狩人の使っていた武器と同様のものを装備している狩娘に対潜戦など無理な話であった。

「そんなの考えるまでも無いクマ。相手が潜ったのならこっちも潜ればいいクマ、簡単なことクマー!」

「え？潜る？オレが？」

困惑の表情を見せる天龍に対し、当然と言わんばかりに頷く球磨。

「いやいやいや、ちよつと待て。オレ軽巡！潜水艦じゃねえぞ！」

「そのくらい知ってるクマ、球磨だって同じ軽巡クマ。」

「だったらお前も分かるだろ!?船は海には潜れねえんだ、無茶言うな！船が沈むのは沈没したときだけなんだよ！」

「ひよつとして天龍ってカナヅチクマ？」

「バカにすんな、泳げるわ!!」

「なら問題ないクマ。球磨達は艦娘じゃなくて狩娘、艦娘の常識は通用しないクマ！」

「そうは言っても着衣水泳だぜ？着衣水泳って難しいんだぞ！しかも武器を抱えてる！それに武器はただ持つてりやいいワケじゃない、泳ぎながら振り回して戦わなきゃやねえ！んなの出来るか！第一素潜りでそんなに長く息が続くもんかよ、無理だ！溺れちまうぜ！」

長々と続く天龍と球磨の口論。

しかし天龍の煮え切らない態度に元練習艦として腹が立ったのか、それとも長いやりとりでイライラが募ったのか、ギリツという歯ぎしりの音と共に再びこの女の機嫌が低下する。

「さっきから黙って聞いていれば、無理とか無茶とか出来ないとか言い訳ばかり……。やってもいないのに出来ないってどうして分かるの？出来ること全部やって、それでも出来なかったときに初めて出来ないって言いなさい！無理というのは嘘吐きの言葉なのよ、つまりあんたは嘘吐きなの!!いい？ここは一般的な物理法則の常識が通用しないカリユード諸島、そして私達は艦娘の常識が通用しない狩娘よ。あんたの頭の中の常識が通用するとは思わないで！それに球磨姉さんだって出来もしないことをやれとは言わないわ！分かったらさっさとやる！いや、やれツ!!やりなさい!!!」

「わーっ！わーっ！大井は教官気質だから狩りの際につまらない不手際があると烈火の如く怒るクマ！さっきの魚雷の件で大井は既に機嫌が悪いクマ！これ以上火に油を注ぐようなマネするなクマ！この状態の大井は球磨でも怖いクマ！」

「ハ、ハヒイ!!モグリマスモグリマス!!」

「それじゃ海に潜るワケだし、まずは準備体操から……。」

「そんな悠長なことをしている暇はないわ！ さっさと潜る！」

「行くクマ！」

「ガウ！」

／バシヤン！！／

／チャプン！！／

／ドボンツ！！／

「えっ？？えっ？？」

天龍が戸惑っている間に二人と一匹はその場でジャンプして、そのまま頭から海中にダイブしてしまった。

「マジかよ……。クツソー、やるしかねえ!!」

一人取り残された天龍も腹をくくり、決死のダイブを敢行する。

＼ボチャン!!／

ブクブクブクブク……。

(やってみれば意外と何ということはないな……。思い出してみればオレが建造されてから水中に潜るのはこれが初めてだが、思った以上に自由に泳いでるし息も続く。魚になったみたいだ。)

(なっ、だから問題ないと言ったクマ！)

ゴボツ!?(こいつ直接脳内に……!?)

(ファミチキください……。じゃなくて、別に驚くことじゃないクマ。なんとたつて球磨達は狩娘！潜るのだから、相手の脳内に声を送るのだから朝飯前クマ！)

(いやその理屈はおかしい。)

海に潜った天龍は早速球磨達と合流するが、そこで球磨が当たり前のようにテレパシーで話しかけてきたことで驚き、口から泡を吐き出す。

お陰で酸素ゲージが少し減ったが、当の本人は気付いていない。

(そうは言っても天龍だつて既に無意識のうちにやってるクマ。球磨が特別なんじゃないやなくて狩娘なら誰でも出来るクマ。)

(マジで!?)

(ええ、本当よ。水中でも円滑にコミュニケーションを取るための狩娘特有の特殊技能、通称：チャット機能ね。)

(ゲーツ!?!大井まで!?)

(誰でも出来るつて言ったでしょ?そんなに驚かないで。当たり前だけど水中じゃ喋れない、だからこのチャット機能で周囲の狩娘と意思疎通を図るの。水中限定の能力だから今まで気付かなくても無理はないわ。)

(……待てよ?水中限定とはいえテレパシーが使えるなら水張った洗面器に顔突っ込んでチャット使えば実質携帯電話の代わりになるんじゃない?)

(誰かに聞かせるつもりもないの単なる独り言でも、そのまま周囲に伝

達されるからあまりくだらないことは考えない方がいいわよ？それといくら何でも洗面器やお風呂くらいで使えるワケないでしょ？常識的に考えなさい。それに電話みたいに遠くまでチャットは届かない、いいわね。)

ゴボボツ!?(き、聞かれくあwse drift gyふじこip!?)

(うつせークマ、頭に直接響くんだからあんまり大声出すなクマ。そんなことよりさつきもだけど、今も口から泡を吐いたクマ。そんなに酸素を消費して息苦しくないクマ?)

(うん、ちよつとキツくなってきた。)

(それじゃ下を見るクマ。海底の岩の亀裂から気泡が出ているのが見えるクマ?)

球磨に言われて見てみれば、確かに海底からコポコポと泡が立ち昇っているのが確認出来る。

(理由は分からないけど、この海は海底から酸素が噴き出しているポイントがところどころにあるクマ。これもきつとアタリハンテイ力学の影響クマ。もし我慢出来なくなったらそこから酸素を補給するといクマ。)

(ジヨジヨの逆に考えた結果かよ!?!気泡から酸素を補給するなんて漫画の世界だけだつて!そんなの無理!)

(は?今無理って言いました?)

(イイエ、イッテマセン…。)

またしても大井に気圧される天龍。

ちなみに天龍本人は気付いてないが、度重なる大井の剣幕により既に大井に逆らえなくなつていたがどうでもいいことである。

(それとこれは一番大事な話なんだけど、モガの海は流れが緩やかで透明度も高いクマ。何よりここ一帯は水中にもアタリハンテイ力学の影響が大きく出ているクマ。だからこうやって狩娘が潜つて行動出来るクマ。あくまでモガの海だからこそ出来る話クマ。適当な海で真似して溺れても知らんクマ。)

(いやしねえつて!)

(ならいいクマ。狩娘は艦娘とは勝手が違うクマ。潜水艦の狩娘だつ

て適当な海じゃ自由には潜れんクマ。そこんところをよーく覚えておくクマ！)

(さあて、前置きが長くなっただけどそろそろ狩りを再開するクマ。イクゾークマ！)

海底に佇むソ級目掛けてグングン潜っていく天龍達。

対するソ級は目を赤く光らせながらググツと艤装の口を大きく開き、口腔内のヒトガタが露わとなった。

ヒトガタの表情は最初に見たときとは比べ物にならない程険悪なものとなっており瞳もギラギラと輝いている、そして……………。

『プワオオオオオオオオオンンンンン
!!!!!!』

水中にいるにも関わらずビリビリと全身を震わせるような咆哮を放つヒトガタ。

その大音量は信じがたいことに艤装ではなくヒトガタの口から直接放たれていた。

(コイツ、やっぱり怒り状態になってるクマ！)

艤装の大口を開けて突進してくるソ級、その迫力はサメが襲い掛かるパニック映画さながら。

全員が突進に合わせてそれぞれ散開することで回避に成功したが、ソ級が通過したことで発生した激しい水流が発生し、流されないようにその場で踏ん張らざるを得ない。

(分かっていているとは思うけど、怒り状態になったソ級はパワーもスピードも段違いよ！ましてやこっちは水中で動きが制限されている。相手のホームグラウンドで戦うワケだから普段以上に気を付けなさい！)

(だけどこれはチャンスでもあるクマ！怒り状態のソ級は肉質の柔らかい本体が剥き出しだから、そこを狙えば大ダメージを与えられるクマ！それに水中だと冷凍液の射出口が凍り付いてしまふみたいで、冷気攻撃をしてこなくなるクマ！ピンチはチャンス、攻めるクマ！)

ソ級と戦う球磨達から少し離れた場所にいる天龍は、戦わずにじつとソ級の様子を見る。

寄生行為ではない。水中戦が初めての天龍のために、敢えてソ級の動きのクセを見切れるようになるまで離れているように指示されたのだ。

ソ級は球磨の言った通り冷気を使用した遠距離攻撃は行わず、突進や噛み付きに引つ掻きといった肉弾戦中心の戦法をとっている。

その攻撃は破壊力こそあるものの全てが大振りであり、各行動の終わりごとに明確な付け入る隙があった。

(そうか、そういうことか！分かったぜ、戦い方が！)

(よし！天龍も戦えるようになったみたいだし、こっから球磨達も本気出すクマ！)

(沈みなさいっ！)

(ガウウ!!)

ソ級の観察を終え戦場に舞い戻った天龍も攻撃に参加する。

天龍の観察のために敢えて手加減して戦っていた球磨達の攻撃も激しさを増す。

敵が3人から4人に増え、更に容赦のない本気の攻撃を繰り出されては、もはやソ級に勝ち目は無かった。

(うおおおお！気刃斬り!!)

(狩技ブレイドダンス!!)

『パオオオオ!?』

天龍と大井の連続攻撃で完全に動きの止まったソ級、そこを見逃す程球磨と木曾は愚図ではない。

(今クマ！木曾、全力ベアークロー!!)

(グルオオオ!!)

ガッ!!

木曾の残像さえ見える鋭く素早いアッパーカットがソ級のヒトガタの顎を直撃、大きくのけぞったソ級はアッパーの勢いで高速浮上し海面まで吹き飛ばされた。

(ウソだろ？冗談みたいなパワーだ。)

(まだまだこっからクマ！これが球磨と木曾の全力クマ!!)

大型深海棲艦を海面まで吹き飛ばすアッパーの馬鹿げた威力に慄く天龍だが、このくらいでは終わらないとばかりに球磨は眩い光を放つ左手の絆石を高々と掲げた。

(ライドオン!!)

その一声と共に球磨は木曾に騎乗。

絆石の輝きはとどまるところを知らず、球磨と木曾はその光に後押しされるかのようにジェット噴射のように高速で海面へ浮上していく。

ザパンツ!!

そのまま勢いよく海面から飛び出し、イルカのような大ジャンプを見せた球磨と木曾。

空を舞う一人と一匹の口には何故かピチピチと跳ねる新鮮なシヤケが啜えられていた。

『パウ!?』

「これが球磨と木曾の絆技!!シヤケハントクロオオオオオオ!!!」

そのまま両腕の爪を振りかざして開きっぱなしのソ級の口腔内目掛けてダイブする木曾。

顎にアッパーを受けた影響でグロッキーになっていたソ級のヒトガタは慌てて迎撃に移ろうとするもののもう遅い。

ザンツ!!!

絆石の輝きが収まった後に残されたのは胸元にXの傷跡を残したソ級と、その目の前で油断なくソ級を見据える球磨と木曾。

バシヤア……。

やがてソ級は目が光を失い、呻き声一つ上げることなく静かにくずおれた。

「やったクマ、勝ったクマ！木曾、お前のお陰クマ！よくやってくれたクマ〜！お前は最高のオトモンクマ〜！」

「グルルル♪」

勝利の喜びを噛み締め、抱き合って喜びを分かち合う球磨と木曾。遅れて大井と天龍も浮上する。

「ふう、美味しい所を盗られてしまったわ。とはいえ流石ね球磨姉さん。」

「プハア！何だ今の!?これも狩技か？」

「ノンノン、これは絆技クマ。」

「絆技？」

「そうクマ。絆技とは乗娘とオトモンの絆が最高潮になったときだけ使える必殺技クマ！乗娘とオトモンは共に戦うことで絆が深まり、その絆を感じ取った絆石は輝きを増すクマ。絆が最大限に高まることで息の合った最高の一撃を繰り出せるクマ。だから連発は効かないけど、その代わりに威力は折り紙付きクマ！相手にもよるけど、ちよつとした深海棲艦ならイチコロクマ！」

「すげえ……。」

「はしゃぐのもいいけどそろそろ剥ぎ取りをしたら？剥ぎ取る前にタクシーに乗りたくないでしょ？」

こうしてモガの海での狩りは成功に終わった。

大局には全く影響を及ぼさない小さな島での小さな勝利、しかしこの戦いを無意味と切って捨てるのは野暮だろう。

共に戦うことよって築かれるお互いの絆は、狩娘にとっても乗娘にとっても何ものにも代え難い素晴らしいものなのだから……。

球磨ちゃんと熊1

「あれ？ここは……クロオビ鎮守府か？」

オレはふと気付くと、クロオビ鎮守府の食堂に立っていた。

見慣れた自分の鎮守府、しかし何かがおかしい。

室内のはずなのに部屋が広く見えたり、逆に狭くも見える安定しない空間。

自分が立っているリノリウム性の床は頑丈な鉄板のようにも、ふかふかのクッションのようにも感じる、硬くて柔らかい大地。

食堂の椅子とテーブルはふと目を離せば増減を繰り返している。

明るいのに暗い、何もかもが矛盾した不安定で不思議な世界。

何より生き物の気配が一切しない、本当にここはいつもの食堂なのだろうか？

「そもそも何でオレはここにいるんだ？」

自分が直前まで何をしていたのか思い出す……。

そうだ、オレはモガ鎮守府に研修に来ていたんだ。

それでソ級を狩猟して無事に鎮守府に帰還した。

狩りの成功のお祝いとおレへの歓迎を兼ねて、鎮守府の料理担当のスパイスと名乗る連装砲ちゃんが豪華な夕食を作ってくれて、それを含んで食べたんだ。

モガの海の幸をたっぷり使ったパエリア、美味しかったなあ

……。

モガ鎮守府には食堂として使える部屋、というか小屋が無い。連装キツチンのカウンターで2人くらいまでなら座って食べられるが、大勢でワイワイと食べられる場所はない。

だからみんなが集まって食事を摂るときは、野外に大きなテーブルを置いてそこで食べる。

天気の良い日限定だが、空の下でワイワイとみんなで食べるのはちよつとしたキャン普気分だ。

提督にあってんで食べさせようとする北上と、その北上にあってんで食べさせようとする大井。

提督からあってんで食べさせてもらおう球磨、我関せず黙々と食べる多摩。

おかずの取り合いから喧嘩に発展するパトルとトツピ、その二人をなだめようとする文月。

そしてこんがりと焼かれたドス黄金魚を頭からバリバリ食べる木曾。

騒がしいけど楽しくて、そして美味しい夕食の時間だった。

夕食が終われば入浴の時間になる。

しかしモガ鎮守府には浴場もない、ないない尽くしの鎮守府なのだ。

なのでここでは農場の隅の方にドラム缶風呂が設置しており、みんなそこで一日の汚れを落とす。

当然狭いドラム缶風呂なので一人用であり、詰めても二人が精一杯だ。

真つ先に入浴に向かった提督と、提督と一緒にいるために後を追おうとして揉める北上と球磨。

そんな二人を尻目にこっそり抜け駆けして、提督と一緒に入浴したちやつかり者の多摩。

小さい身体を生かして三人で入る文月とPT小鬼群達。

オレは大井と一緒にだ、とはいえ流石に一つのドラム缶に二人一緒に入ったりはしない。

洗いつこをした後、交代でドラム缶に入っただけである。

モガ鎮守府でも入浴時のユアミシリーズは標準装備であり、正真正銘の裸の付き合いはしていない。

提督と多摩の混浴も着衣入浴であり、やましいこともやらしいこともなかったらしい。

ちなみに提督のユアミ姿は何故か上半身まで隠した女性用のものであり、男性なのに女性的な色気が半端なかった。

食事を済ませて入浴も済ませたら、後は就寝の時間である。

モガ鎮守府には大きな建造物がなく複数の小屋で構成されているのは最初に説明したが、それは狩娘達の生活の場となる寮も同様である。

提督用、球磨型用、睦月型＋PT小鬼群用の三つの小屋があるが、スペースの問題で個人用の個室は存在しない。

当然天龍型の小屋などなく、客を寝泊まりさせるための余った小屋も存在しない。

しかし睦月型のメンバーは文月を除いて現在遠征中なので、オレはスペースの余裕のある睦月型の小屋で寝ることになった。

ちなみに木曾は鎮守府の出入り口である栈橋のすぐ近くに作られた、犬小屋ならぬ熊小屋で寝ている。

「つまりオレはここに来る直前まではモガ鎮守府で寝ていたハズなん

だ。」

自分の格好を確認してみれば武器こそ装備していないものの、寝巻きの黒ジャージから天龍シリーズの装備一式、つまりはいつもの格好にいつの間にもやら着替えていた。

当然自分で着替えた記憶もなければ、人に着替えさせてもらった記憶もない。

いくら自分が眠っていたとはいえ、寝ているところを着替えさせようとすれば目くらい覚めるだろう。

何よりそのままクロオビ鎮守府の食堂まで気付かれずに連れて帰るのは不可能だろう。

「……ってことはこれは夢か？」

自分の中の冷静な部分がそう告げている。

「確か明晰夢っていうんだっけ。夢を夢だと理解すれば好きな夢を見られると聞くけど本当かよ？」

よし、ものは試しだ！夢の中に龍田を出そう！

龍田はオレの大事な妹、そしてオレの頼れる相棒、大切な片割れ、脳内で作り出すのに一番適した存在だと思っている。

「龍田出ろく、龍田出ろく！」

ひたすら龍田のことを考える。すると食堂と廊下をつなぐ扉が開き、そこから一人の狩娘が現れた。

「提督く、サキユバス球磨ちゃんが貴方の夢にお邪魔したクマく？」

現れたのは龍田ではなく球磨だった。

それも胸と股を隠しただけの水着のような面積の少ない欲情的な衣装に身を包み、赤い角と赤い翼、そしてこれまた赤い尻尾を生やしたテンプレの極み、更にはヘソの下に何ともスケベなデザインの花トウーを入れた、まさに絵に描いたようなサキユバス姿の球磨ちゃんである。

「ええっ、球磨ア!?何だその格好は!?ひよっとしてオレが無意識の内に望んだのか!?会ったばかりの同性にムラムラしてたっていうのか!?」

「あれ、天龍?ってことはまた失敗クマ!?チクショークマ!!どおりで

見慣れない場所に出たと思つたクマ！」

エロい格好の球磨が現れたことに自己嫌悪に陥っていたが、球磨も球磨で何故か悔しがっていた。

「まあこうなつた以上仕方ねークマ。天龍、悪いけど目が覚めるまでお邪魔させてもらうクマ。」

「何の話だよ？お前もオレが脳内で生み出した夢の登場人物なんだから。」

思わず球磨に詰め寄るが、球磨はチツチツツツと言いながら人差し指を左右に振る。

小馬鹿にしたようなポーズだが、小悪魔風の衣装でされると非常に絵になる。

「確かにこれは夢クマ、ここは間違いなく天龍の夢の世界クマ。だけど球磨は本物クマ！」

「いやいや、何言つてんだ？お前がオレの夢の中に入り込んだとも言うのか？」

「その通りクマ、球磨はお前の夢に入り込んだクマ！球磨は天龍の作り出した夢ではなく、真正正銘の球磨本人クマ！何なら明日起きたときに球磨に聞けばいいクマ。」

「マジかよ……。」

信じらない、というか未だに信じてないけど取り合えず無理矢理納得する。

「で、何で球磨はそんな格好でオレの夢に入り込んだんだ？そもそも夢に入るってどういうことだ？」

「夢に入るっていうのはそのまんまの意味クマ。球磨には他人の夢に入り込む特技を持つてるクマ！」

「いやいや、どういう特技だよ!?というかそんなこと出来るもんなの!?」

「修行の成果クマ。心を無にして滝に打たれたり、穴を掘ってその穴を埋めたり、ドラム缶を押し続けていたら出来るようになったクマ！」

「いや、そんなの修行どうのこうので出来るもんじゃないと思うんだ

が。というか後ろ二つは単なる拷問じゃん。第一修行内容が夢に入ることと全然接点ないし……。」

「甘いクマー！大井も言ってたけど、やって出来なかったなら出来ないと言っつていいクマ。でも見ての通り球磨は実際に出来たクマー！つまりこれは修行さえすれば誰でも出来ることクマー！」

「う、うん……。」

修行してもそんなこと出来る気がしないし、そもそもどんな修行を積みばいいのかさえさっぱり不明だが、深くツツコむのはやめにする。

「ちなみに身体の一部を変化させる特技も持つてるクマー！ほら球磨の顔をよーく見るクマ。」

次の瞬間、球磨のアホ毛がハートの形に変化した。

それと同時に瞳の中にもハートが浮かび上がり、舌の形までハートに変わる。

サキユバスを思わせる格好をしていることも合わさって、まさに発情しているかのようなのである。

「これも修行の成果クマー！別に夢の力で誤魔化しているワケじゃねークマ、これは実際に出来るクマ。何なら明日の朝にも改めて見せてやるクマ。ただ瞳を変化させるのはちよつと辛いからあんまり長くは出来ないクマ。」

「いや別に見たくないし、興味もない。」

「遠慮しなたっていいのに、見なくなったらいつでも言うクマ。」

球磨のアホ毛と瞳と舌はあつという間に元の形に戻っていく。

「球磨は夢に入る修行の一環で夢を自由に操ることも出来るようになったクマ。この夢自体は天龍の見ている夢だけど、既に球磨の支配下にあるクマ。だからホラ、こんな風に……。」

球磨が指をパチンと鳴らすと、クロオビ鎮守府の食堂だったこの場所は一瞬で眩しい日差しと潮風の香りが漂うモガ鎮守府に変化した。

「うおっ!?すげえ!!すげえけど、お前の支配下って……。あつ、だからオレがどれだけ考えても龍田が出てこなかったのか！」

「別に支配したくてやってるワケじゃないクマ。夢に入り込むと嫌で

も球磨の支配下になってしまうクマ。こればかりは球磨にもどうしようもないクマ。そういうものだと思つて納得するクマ。更にはこういうウコとモ出来ルクマ……。」

今度は球磨の肌と髪が病的なまでに白くなり、瞳も赤い光を放ち始める。

そしてサキュバスの衣装は黒い薄手のドレスのようなものに変わり、淫紋と翼と尻尾は全て消えて無くなり、唯一残された悪魔の角は黒と赤の縞模様へ変わっていく。

話す言葉もどことなくぎこちなくなっていく、これらの特徴は間違いない……。

「球磨が深海棲艦になった!？」

「変ワツタノハ球磨ダケジャナイクマ。ホラ天龍、自分ノ姿ヲヨーク見テミルクマ。」

言われるがままに天龍が自分の姿を見下ろしてみると、着ていた天龍シリーズはいつの間にか消えており、その代わりに胸と股だけを隠した水着のような服に着替えていた。

下腹部にはピンク色のハートを象ったタトウーが入れられており、お尻からは尻尾、背中には翼、そして左右のこめかみからはねじれた角が一本ずつ生えていた。

要するにさつきまでの球磨の格好であり、サキュバス天龍ちゃん爆誕というわけである。

「なんじゃああああこりやああああ!？」

「夢ノ世界ハ球磨ノ思イ通りクマ。ダカラ自分ノ身体ヲ変化サセルコトモ簡単ダシ、他人ノ服ヲ変エルノダツテ朝飯前クマ。服ドコロカ別ノ生キ物ニシチャウコトダツテ出来ルクマ。」

「ええい、元に戻せ! 恥ずかしいだろうが!」

「マア深海棲艦モードハ球磨モ落チ着カナイシ、普通ニ戻スクマ。」

球磨が再び指を鳴らすと天龍の衣装は元の天龍シリーズ一式へと変化した。

角も翼も尻尾もタトウーも全て消えた、プレーンな天龍ちゃんである。

一方の球磨はサキユバス姿に戻るかと思いきや、アシラ一式へと変化した。

「球磨だって恥ずかしいものは恥ずかしいクマ、着替えられるなら着替えるクマ。それあの衣装は提督とクマクマする為に三日三晩掛けて考えたものクマ。それ以外の用途で使うのはちよつと嫌クマ。」

「クマクマする?。」

「ニャンニャンするって意味クマ。ニャンニャンだと多摩っぽいから球磨らしくクマクマって言ってみただけクマ。」

「えつと……提督とクマクマするってことは元々は提督の夢に入つていやらしいことをする予定だったってことか? 最初に出てきたときに提督って言ってたし。」

「その通りクマ! 何たって球磨は提督が大好きクマ、愛してるクマ、控えめに言つてケツコンしたいクマ!」

「えっ? いやケツコンって言っても、そもそもお前の提督は北上とケツコンカッコガチしてただろ?。」

いきなり飛び出した爆弾発言。

そもそも球磨は大井をそのかして北上から提督をNTRせようとしてたのではなかったか?

「北上は球磨が提督とケツコンしたいことを知ってるクマ。」

球磨が両手をパンパンと二度叩く、すると今度はその場に北上が現れる。

服装はパジャマでもエロ衣装でもなく、スカラー一式である。

「うおつ、北上!?! お前も本物か!?!」

「この北上は球磨が作ったものクマ、球磨の記憶の中の北上クマ。」

『球磨姉えも提督とケツコンしたいの? うーん、他の狩娘なら嫌だけど球磨姉えならいいよ。だけど条件付き、提督と球磨型全員でジユウコンすること! みんなが提督のことを好きなのは知ってるよ、球磨姉えだけ認めたら多摩姉えと大井っちが可哀想でしょ。だからこれが達成出来たらケツコンを認めたい。』

北上はとんでもないことをさらりと言い放つと、煙になって消えてしまった。

「球磨型全員でジウウコン!? な、何言ってるんだ?」

「言葉通りクマ。多摩も大井も提督のことが大好きってだけクマ! だけど既に北上がケツコンしてるから遠慮してるんだクマ。だから多摩と大井を説き伏せて全員で幸せになるクマ!」

ああ、球磨型狩娘のしあわせ家族計画ってこれのことだったのか。

「多摩はもう陥落したクマ、だけど大井が手強いクマ。あんだだけ提督好き好きオーラを出していながら未だに首を縦に振らないクマ。提督のことは好きだけど北上のことも好きだから、二人の間に割り込むのが嫌なんだクマ。本人公認なのに頭が固いクマ。だから球磨は大井を落とすために日々努力してるクマ!」

「努力って姉の立場を利用してあの歌を無理矢理歌わせることか?」

「それだけじゃないクマ! 寝てる大井の枕元で提督とケツコンしたいと一晩中ささやき続けたり、提督が入った後のお風呂の残り湯やそこで見つかる抜け毛を大井の食事にちよつとずつ混ぜたりと色々工夫してるクマ! これで少しずつ大井は提督とのケツコンを意識するようになるクマ!」

思わず「バカじゃねーの!」と言わなかった自分を天龍は褒めたくなった。

ハッキリ言ってるドン引きしているし、それって単なる嫌がらせだろとも思っているけど、言わないし態度にも出さず、あーそうなんだーと分かったフリをする。

深淵を覗く時、深淵もまたこちらを覗いている。なら最初から覗か

なければ覗き返されることもない。

「天龍はこれ以上踏み込むと引き返せなくなるラインというものを生まれて初めて感じたのであった。」

球磨ちゃんと熊2

「……………そういや、お前はいつまでオレの夢にいるんだ？」

「あれ、最初に言ったと思うけど忘れたクマ？ならもっぺん言うクマ、どっちかの目が覚めるまでクマ。」

「はっ。」

前回の球磨の奇行に一瞬意識を飛ばしていた天龍だが、正気に戻りずっと気になっていたことを聞いてみた。

その結果、返ってきた返答は予想外の一言であった。

ちなみに球磨が最初に言った通り、夢で天龍に会った時点で球磨は目が覚めるまで夢に居座ると言うことを宣言しており、天龍が忘れていただけである。

「球磨か天龍のどっちかが目覚めない限り、球磨がこつから出られないってことクマ。ここでは球磨と天龍は目が覚めるまで一蓮托生クマ、目覚めるまでよろしくクマ。」

「何でだよ、夢を支配しているんじゃないのか!？」

「それとこれとは話が別クマ、支配しているのは夢だけで目覚めについては管轄外クマ。自然に目が覚めるか、外部から刺激を受けて起きでもしない限りは二人つきりクマ。」

「クソツタレ！」

仕方がないので右手で自分の頬つぺたをつねる、何も起こらない。

更にそのまま引っ張ってみる。頬つぺたがうにょんと伸びたただけで、それ以外に何も起こらない。

「め、目が覚めない？」

「そりやそうクマ。だってこれは夢クマ。夢なのにそんなことしたって痛いわけねークマ。」

呆れてため息を吐きながらも、天龍の左の頬つぺたに手を伸ばす球磨。

そしてつねって引つ張る、右の頬つぺたと同じように左の頬つぺた
もうによーんと伸びたがそれだけであった。

「へ、へもふめひがあるくてえざえうおとああるある?！」

「……何て言ってるクマ?！」

「あーもうー!はおはらへをはなへ!!」

「はおはらへをはなへ?……あー、顔から手を離せて言ってるクマ
?了解クマ。」

「……っへ、なにほやつへいるんがおあえ!？」

球磨に左の頬つぺたを引つ張られたままで上手に喋ることの出来
ない天龍は、手を離すことを要求する。

球磨は天龍の言うことを理解して素直に手を離す……と思いきや
離すどころか更に強く引つ張り始めた。

「あがががが!？」

引つ張られ続けた天龍の頬つぺたは軽く10センチ程度にまで伸
びており、正しく現実ではあり得ない状態である。

しかしそれでも引つ張る手を緩めない球磨、そして遂に……。

プチンツ!!

天龍の頬つぺたは軽い音を立てて引き千切れてしまった。

球磨の手の中には肌色のピンポン玉のようなものがあり、言うまで
もなく天龍の頬肉である。

「ギャアアアアアアアアアア!?!?!?テ、テメエ何てことしやがる!?!」

「平気クマ、だってこれは夢クマ。別に痛くないし、顔も別にどうもなっていないクマ。」

左の頬を押しえて涙目で絶叫する天龍だが、球磨に言われて気付く。

確かに痛くないし血も出ていなければ、頬つぺたもちやんと付いている。

「だからってやっていいことと悪いことがあるだろ!？」

キレる天龍だが、球磨は何事もなかったかのように手の中の頬肉を蝶に変えて何処か遠くに飛ばす。

「状況を理解させるのにこれが手つ取り早いと思っただけクマ、別に嫌がらせとかじゃないクマ。そんなことより何か言おうとしてなかったクマ?。」

「そ、そうだ!夢見が悪くて目が覚めることはあるだろって言おうとしてたんだ!つーかお前が顔を引っ張らなけりやさっきの時点で言えてたんだよ!。」

「そいつは悪かったクマ。だけど球磨が入り込んだことでいわゆる夢の枠とでもいうべきものが強固になってるクマ。だから並大抵の悪夢じゃ目覚めっこないクマ。現に顔の肉を引き千切られるという悪夢を見ても目覚めてないクマ。」

「お前ほんと余計なことしかしねーな。」

「そもそも今までの様子から察するに提督の夢に入る予定だったんだろ？なのに何でオレの夢にいるんだ？」

そしてこちらが気になっていたことその2である。

最初に球磨が現れたときは明らかに提督の夢に入ったと思い込んでいたようだったし、エロ衣装も提督とクマクマするため用意したと言っていた。

つまり球磨の本来の目的は提督の夢に入り込んでイチャイチャすることであり、決して天龍の顔の肉を千切ることではないのだ。

なのに球磨がここにいることが天龍は不思議で仕方がなかった。

「そんなの簡単クマ。球磨の能力は近くで眠っている誰かの夢の中に自分の意識を飛ばすものであって、特定の人物の夢を狙って入り込んでいるものではないクマ。近くで寝ている人は全員ターゲットになるクマ。」

「はあ？」

「つまり本当は提督の夢に入りたかったけど、失敗して天龍の夢に入っちゃっただけクマ。」

「そーいや最初に会ったときにまた失敗したとか言ってたようなの？」

「その通りクマ。球磨はこの能力を身に付けてから週に一回くらいの頻度で提督の夢への侵入を試みているけど、今のところ一回も成功したことがないクマ。」

「一応聞いとくけど、提督の夢に入れなかったってことは別の誰かの夢に入ったってことでもいいのか？」

「そうなるクマ。今までで一番多く入ったのは文月達、駆逐艦の夢クマ。遊び盛りの駆逐艦は遊んでとせがまれるから大変クマ。夢の中

限定とはいえ何でも出来るからといって遊園地丸々一個作らされた時は流石に疲れたクマ。考えるだけで作れるとは言っても、逆に言えば考えなきや作れないクマ。球磨だって遊園地行ったことないのに……。」

放送局が存在するカリユード諸島でも、流石に遊園地なんてものは存在しない。

要するに球磨は自分の想像力だけで行ったこともない遊園地を作り上げたということである。

「次によく入るのは大井の夢クマ。大井は十中八九北上の夢か、練習艦として教導をする夢を見ているから入れればすぐに分かるクマ。それと実は大井には球磨が夢に入れることも、夢を自由に操れることも秘密にしているクマ。だから夢で何があっても球磨の仕業だと大井にはバレれないクマ。それで大井に気付かれないようにコツソリ球磨が提督に変身した後に、提督のフリをして大井の前に現れて目が覚めるまでエロいことをし続けているクマ。こうすることで大井の提督とのケツコンのハードルを下げているクマ！球磨は提督のことが好き過ぎて、提督のフリをするもお手の物になったクマ。球磨の完璧な提督ムーブは大井の目さえ騙すクマ。」

ちなみに球磨は大井に対して流石に本番はヤツていないが、それ以外のことなら夢なのをいいことにありとあらゆることを試している。

その結果大井の弱いところは全て把握しており、更には調子に乗って大井の色んな所を開発しているのである。

一方の大井は球磨の仕業とも知らずに北上とケツコンしている提督でそのような内容の夢を見てしまっていることに対して軽い自己嫌悪に陥っており、球磨の作戦は完全に裏目に出ているのだが、肝心の球磨はそれに気付かずエロい夢を見せ続けるのであった。

「これは大井の嫁入り修行でもあるクマ。床上手になればケツコン後に夫婦仲が冷え込むことはないと言われているクマ！それに大井を実験台にすることで球磨のテクニクも磨かれていくクマ、つまりこれはWin—Winの関係クマ！お互いのエロテクを高めることで提督との本番も完璧クマ！最近では球磨の技術も大井の感度もうなぎ上

りで、とうとう手の甲をつねってやるだけで大井をイカせられ「わーっ！わーっ！もう聞きたくなーい！」たクマ。」

球磨の猥談に対して、そういうことに免疫のない天龍は大声を出して無理矢理さえぎる。

しかしその天龍も実は寝ている間に時々龍田に色々と性的なイタズラをされていることを本人は知らないのであった。

「最近は何よつとしたら提督は夢を見ない体質なんじゃないかと思いはじめたクマ。ここまで試しても入れないのはおかしいクマ。球磨は夢に干渉出来るけど、相手が夢を見ていなければどうしようもないクマ。手詰まりクマ。」

「そこまでして夢の中で提督とイチャつきたいんなら、いつそのこと夢の力で提督を作っちゃえばいいんじゃないの？」

「それは違うクマ。」

そこまでもしても提督に逢えないのであれば、いつそ自分で提督を作ってしまったらどうかと天龍は提案するが、球磨はあっさり否定する。

「確かに球磨は思い通りに動かせる提督を作れるクマ。だけどそれは球磨の思った通りにしか動かない提督クマ。暖かみの一切ない、心を持たない単なるラジコンクマ。そんなのとイチャついても虚しいだけクマ。球磨が欲しいのは本物の提督クマ！」

そういう球磨の言葉には確かな信念があった。

しかしいくら本人のしている夢とはいえ、夢の中の人物を本物と呼ぶのちよつと違う気もする。

実に都合のいい信念もあったものである。

「……しかし退屈だなー。」

「そりや球磨が介入した以上、球磨が弄らなければ代わり映えのしない夢の風景がひたすら続くだけクマ。」

やることなくして鎮守府の床でゴロゴロする天龍と球磨。

二人は夢の中で更に寝転がるという不毛な時間を過ごしていた。

「これ目が覚めるまでこのままの状態なんだよな？」

「そうクマ。今が夜の12時で朝の7時に起きるとしたら、7時間ずっとこのままクマ。」

「7時間!? 退屈で眠っちゃまいそうだぜ！」

「普通の睡眠なら夢の内容も本人の意識もあやふやで気が付いたらいつの間にか朝になってるから時間に対する感覚は薄いけど、球磨の管理下にある夢は内容も本人の意識もハッキリしてるから目が覚めるまで待たされることになるクマ。」

「クツソオ、何か暇潰しに面白い話でもないのか？」

「面白い話クマ?じゃあ球磨と木曾の出会いの話でも聞くクマ?程よい長さのエピソードだから目が覚めるまでにぴったりクマ。」

「木曾との?もう時間潰せるなら何でもいいよ、聞く聞く。」

「決まりクマー！」

球磨が指をパチンと鳴らすと太陽の日差しと潮風が香るモガ鎮守府は、たちまち暗くて広い映画館内へと変わり、天龍と球磨はいつの間にか座席へ腰掛けていた。

館内は当然のように二人の貸し切りであり、手元にはごく丁寧にポツ
プコーンとコーラまである。

「うおっ!? 分かっちゃいるけどやっぱりすげえ! 夢の操作って何でも
ありだな、こんなことまで出来るなんて……………ムグ、このポツ
プコーンとコーラ、味が全然しねえんだけど。」

急激な変化に驚きつつも手元にあったポップコーンとコーラを口
に運ぶが、思わず顔をしかめる天龍。

まるでティッシュペーパーか紙粘土でも食べているようである。

「そりゃ夢だから当然クマ、味なんてするワケないクマ。味はしなく
ても雰囲気味わってほしいクマ。それにいくら食べても飲んで
減らないクマ、夢の食べ放題クマ!」

「言葉通り夢の食べ放題だよコンチクショウ! こんなのにいくら食べて
も全然美味しくないし、腹も膨れない。地獄の餓鬼かよ?」

「それよりそろそろ上映開始クマ。携帯電話の電源はちゃんと切った
クマ? 上映マナーは守るクマ。」

「んなもん最初から持ってねえ!」

「冗談クマ、それじゃあスタートクマ!」

館内の照明が落ちると後方にある映写機が動き始め、荒磯に波がぶ
つかって波飛沫がざっばくと上がるといいう、どこかで見たことがあ
る映像が流れ始めた。

そして中央に球磨と記された白い三角形のロゴマークが現れる。

この演出の時点で本当にこのまま見続けていいものかと不安にな
り始めた天龍なのであった……。

球磨ちゃんとお熊3

今から1年ほど昔のモガ鎮守府、球磨型狩娘の生活小屋。

そこにはウキウキでポーチに荷物を詰め込む球磨の姿があった。

「今日は久々の休みクマ、今日は目いっぱい楽しむクマ！」

球磨は本日休暇を貰っており、外出する気満々である。

しかしモガ鎮守府がある孤島は自然が広がるばかりであり、周囲に商業施設のような気の利いたものは一つもない。

それに球磨がポーチに入れているのも釣り竿や虫アミにお弁当といったものばかりであり、本人の装いも普段から狩猟の際に使っている球磨シリーズの防具一式に大剣のアギトと、これから遊びに行くというよりも狩猟に行くと言わんばかりの格好である。

それもそのはず、球磨はモガの森でピクニックをしようと考えていたのだ。

モガの森はモンスターの生息する地域であり、丸腰で出歩くのは危険である。

よって海で深海棲艦と戦う予定がなくとも、森に入るときは武装していく必要があった。

「それにしても提督から貰ったコレ、一体何に使うクマ？」

球磨の左の手の甲に取り付けられた、青い宝石のようなものがはめ込まれた籠手。

これは数日前に提督から贈られたものである。

『これは絆石、ハクム鎮守府の提督から貰ったもんだ。お前はハクム鎮守府がどんなところか知らないのか？まあいい、時間があつたら今度教えてやる。そんなことよりこいつは俺の勘なんだが、この石は俺よりもお前が持つておくべきものだと思う。自分で言うのもなんだが、俺の勘は昔からよく当たると思っている。近いうちにお前にはこの石が必要になる日が必ず来るだろう。それまでこの石は肌身離さ

ず持つておけ。』

「うーん。持てと言われてるから取り合えず持つてるけど、単なる寶石にしか見えないクマ。」

使い道は分からないものの、絆石はアクセサリとしてはオシヤレであり、また提督からの贈り物ということでも球磨は気に入っていた。

「提督は北上とケツコンしてるのに球磨にこんなプレゼントをくれるなんて、実は球磨に気があるクマ？いやいやそんなワケねークマ。それに人から貰ったものを更に人にあげるといのは球磨的にもポイント低いクマ、そんなんで球磨とケツコンとか百年早いクマ。そもそも提督は木曾に似過ぎていてそんな目じゃ見れないクマ。あれで男とか詐欺クマ。」

球磨の上司であるモガ鎮守府の提督の外見は球磨の姉妹艦である木曾に瓜二つであり、球磨はそんな提督のことを内心では妹扱いしていた。

尊敬出来る上官というよりも、気心の知れた可愛い妹といった感じである。

荷物をまとめた球磨が小屋から出ると、そこには思い思いに過ごす鎮守府の仲間達がいた。

クエストカウンターで呑気にお喋りをしている北上と大井。

連装キツチンで猫のようにウマウマと呟きながら遅めの朝食を食べている多摩。

テーブル代わりの大タルの上でせつせと船の設計図を引いている潮風丸。

そしてそんな彼らを見守る提督。

1年前のモガ鎮守府は人員が少なく、農場にいる連装砲ちゃん達を除くとここにいるメンバーで全員である。

北上は鎮守府最古参のメンバーであり秘書艦を務めている。提督とは出会って僅か三日でケツコンしたらしく、球磨がこの鎮守府に所属した時には既に指輪を嵌めていた。

大井はどうやら提督に気があるらしく、何かにつけて提督と会話しようとしたり、さりげなくボディタッチを試みようとしている。その姿はまさしく恋する乙女そのものであり、大井のいじらしさには球磨もニヤつきを抑えられない。しかし提督は姉妹であり大親友でもある北上のケツコン相手ということで、それ以上の行動には踏み込めないようであった。

多摩は今でこそ潮風丸が持ち込んだマタタビによって猫耳と尻尾が生えているが、この頃はまだ生えていない。しかし立ち振る舞いはこの頃から猫そのものである。

潮風丸は鎮守府から独立して交易船の船長となることを夢見ており、自分のかつての姿である交易船を凶面に起こそうと薄れてしまった自分の記憶の中から必死に掘り出している。

潮風丸が抜ければただでさえ少ない鎮守府の人員が更に減るので、提督は近々新たな狩娘を建造する予定がある。球磨としては本物の木曾を建造してほしいと思っているが、後に建造されるのは文月達を始めたとした睦月型の狩娘ばかりというのをこの頃の球磨は知らないのであった。

「おっ、球磨か。その様子だと出掛ける準備は出来たみたいだな。」

「もうバツチリクマ！いつでも出られるクマ……ってどうかしたクマ？」

球磨に気付いた提督が声を掛けてくる。

しかしその表情は何か考え事をしているのか、決して明るいとは言えない様子だった。

「悪いが本当に出掛けるつもりか？今日の外出を楽しみにしていたお前にこんなことを言うのは出鼻を挫くようで気が引けるが、森の様子が変だ。上手くは言えないが普段と空気が違うように感じる。それでも出掛けるのか？考えを改める気はないか？」

提督の表情が硬かったのは森の異変について考えていたからのもうであり、提督は球磨に外出を控えて欲しいようであった。

「大丈夫クマ、こういうのはハプニングも楽しむものクマ。それに球磨だって狩娘の端くれ、何かあっても自分で解決して見せるクマ！」

だが球磨は自分に自信があるのか、それとも軽く考えているのか出掛ける気満々であり、止められないと分かった提督は溜息を吐く。

「そうか、分かった。どうやら決意は固いみたいだな。だがお前は俺の大切な狩娘で、替えの利かない俺の家族なんだ。何かがあったら心配だし、遅いからな。もしちよつとでも何かあったらすぐに帰って来い、いいな？」

「俺の大切な狩娘だなんて、そんなの照れるクマ。」

「全く、ふざけている場合か。まあそれだけ余裕があれば大丈夫か、それじゃ気を付けて行くんだぞ。」

「心配しなくても平気クマー！行ってくるクマー！」

真剣さの感じられない軽い返事を残して出掛けていく球磨。

球磨は決して提督を軽んじているワケではないのだが、どうしても妹である木曾と重なって見えてしまう為に妹を相手にするようなこんな軽い対応をしてしまっているのである。

「……提督はああ言ってたけど、森の様子は平穩そのものクマ。」

孤島エリア10の海に釣り糸を垂らしつつ、球磨はそう呟く。

鎮守府を出てから球磨は一日中島を巡って食べられそうな野草やキノコを集めたり、虫捕りをして過ごしていた。

そして最後のシメとして海釣りを楽しんでいるのである。

「今日の森は本当に平和だったクマ。いつもはうっとおしいくらいにいるジャギイもルドロスも、それどころかブルファンゴすら一匹も見当たらない史上稀に見る平穏な日クマ。モンスター除けにたいまつ持ってきたけど別にいらなかったクマ。それどころか大剣すらいらなかったかもしれないクマ、提督は心配性クマ。」

今日球磨が孤島でモンスターを見掛けることは一度もなかった。

攻撃的なモンスターはおろか、アプトノスやケルビといった大人しい草食モンスターすら一匹たりとも見当たらないというこの状況がどれだけ異常なのか。

少し考えればすぐに分かりそうなものだが、呑気な球磨はそこまで頭が回っておらず、単に手間が省けてラッキーだな程度にしか考えていない。

「うーん、いい天気だと思ってたけど急に曇ってきたクマ。いい時間だしそろそろ帰るクマ。」

ふと空を見上げてみると、いつの間にかどんよりのした雲が空を覆っていた。

これはまずいと思った球磨が荷物をまとめている間にもポツポツと雨は降り始め、帰る支度が出来た頃には既に土砂降りになっていた。

「うわーっ!?!油断してたクマ、大変なことになったクマ!」

突然の雨に両手で頭を守りながら慌てて駆け出す球磨。

「傘なんか用意してないクマ!提督の言ってた異常ってこれのことクマ!?!」

そんなワケがない。この雨は単なる夕立であり、提督の懸念とは無関係である。

しかし球磨にとっては今自分に降り注ぐこの厄介な雨こそが全てであり、森に何が起こっているのかなど考えてすらいない。

「ゲゲツ、土砂崩れクマ!?道が塞がってるクマ!この雨で崩れちゃったクマ?こんなの想定外クマ!」

エリア5まで辿り着いた球磨が目にしたのは、大量の土砂や岩石によつて塞がれたエリア2につながる通路。

球磨は雨によつて土砂崩れが起きたと推測した。

しかし急な夕立とはいえ、孤島で雨が降るのは珍しいことではない。

ましてやこれは狩娘もモンスターも使用する重要な通路、雨が降った程度で崩れるような軟な地盤をしているものだろうか?

「困ったクマ、最短で鎮守府に帰るにはエリア2を経由するのが早いのに……。」

途方に暮れる球磨を他所に、ますます激しさを増していく雨。

「マズいクマ。雨は強くなるし日も暮れてきたし、このままじゃ風邪ひくクマ。」

エリア6を経由するという手もあるがエリア6はジャギイ達の住処であり、球磨としては天気の良い昼ならまだしも、こんな視界の悪い夕方にエリア6に立ち入るのはゴメンであった。

実際のところはエリア6のジャギイ達も同様に姿を消していたのだが、そんなことを球磨は知るよしもなかった。

「……………」

困り果てた球磨がふと周囲を見渡すと、岩壁に洞穴があるのを発見した。

「あれ?こんなところに洞穴なんてあったクマ?ここいっつも通ってるけど全然気付かなかったクマ。うーん、仕方ないクマ。雨脚が弱まるまでここで雨宿りしていくクマ。」

洞穴に入った球磨が最初に感じたのは、清々しく気持ちのいい風の匂いだった。

「雨の日の洞穴つてのはもつと暗くてジメジメしたカビ臭い所だと思つてたけど、ここはどことなく暖かくて空気も澄んだ心地のいい場所クマ……つてアレは？」

球磨が洞穴の中央に目を向けるとそこには岩や土を固めて作られたと思われる小山があり、その頂上には枯草や枝が敷いてある。

「これは何クマ……つてタマゴクマ!？」

小山の上に登った球磨が発見したのは60cm以上はありそうな大きなタマゴ。

全体的に青く、いくつかの緑色の模様が入った今まで見たこともないタマゴである。

「この洞穴つて何かの生き物の巣クマ?……つてことはずっとここにいたらこのタマゴの親が帰ってくるクマ?もしそうならマズイクマ!自分の子供を守ろうとする親の愛情は物凄いパワーを生むというクマ。巢の持ち主に球磨がこのタマゴを盗ろうとしてる敵だと勘違いされちゃったらタダじゃすまないクマ!それに球磨としても我が子を守ろうとする親と戦うなんて酷いことしたくないクマ、早く

出なきや……。」

そう言う球磨だが、何故か目の前のタマゴから目を離すことが出来なかった。

初めて見たタマゴなのに、まるで長年探し求めた自分の半身を見つけたかのような感覚がここから立ち去ることを許さなかったのだ。

「わあ、あつたかいクマ！ずっしりとしたこの重みは命の重さクマ……って、何勝手にタマゴを触ってるクマ!?!こんなことよくないクマ！」

球磨は自分でも気付かないうちに巢の中央に座り込み、そつとタマゴを抱いていた。

こんなことをしている場合ではないと頭では分かっているのだが、意思に反して手はタマゴを離さない。

「でも生命の鼓動を感じるクマ、心が安らぐクマ……。」

我が子を慈しむ母親のような優しい手付きでタマゴを撫でる球磨。

その時、ピシリという音を立ててタマゴに小さなヒビが入った。

「ピシリ?……今の音つてまさか!?!」

驚く球磨を他所に、ヒビはビシビシという音と共にあつという間にタマゴ全体に広がっていく。

そしてタマゴがブルリと震えると同時に殻が内側から弾け飛んだ。

「がう?。」

「う、生まれたクマ。タマゴから熊が生まれてきたクマ。あれ?熊っ

て卵生だったクマ？ いやいや、熊は哺乳類クマ、哺乳類は胎生クマ。じゃあこの熊は哺乳類なのにタマゴから生まれてきたクマ!？」

球磨の腕の中にいたのは青い体毛に身を包んだ愛らしい子熊。

混乱する球磨の様子など知った事かと言わんばかりに、子熊はグルグルと喉を鳴らしながら球磨の胸に頭を擦り付けて甘えている。

「ひよっとして球磨のことをお母さんだと思っっているクマ？ タマゴから生まれたばかりの雛鳥は最初に見た動くものを親だと思い込んで聞いたことあるクマ。確か刷り込みクマ？ でもそれは鳥の話クマ、哺乳類でもそうなるとか聞いたことないクマ。」

子熊は球磨の顔をペロペロと舐めたり服の裾を甘噛みするなどして甘え続けており、球磨のことを親だと信じ込んでいるようであった。

「クマ、球磨はお前のママじゃないクマ。お前の本当のママは今出掛けてるだけクマ。」

球磨は子熊にそう言い聞かせるものの、理解していないのか子熊は甘えるのを止めようとはしない。

子熊を納得させるのは難しいと悟った球磨は溜息を一つ吐くと、あの決意をする。

「よし、それじゃあ球磨がお前のお姉ちゃんになってあげるクマ！」
「がう？」

「お前にはお前を産んだ本当のママがいるクマ。だから球磨はお前のママにはなれないクマ。だけどお前のママが帰ってくるまで、お前のお姉ちゃんになってあげることくらいなら出来るクマ！ 球磨型の長女として妹の面倒を見るには慣れてるクマ、お姉ちゃんの責任としてお前の世話をしっかりとやるクマ！」

「がうー！」

球磨の言葉を理解したのかしていないのかは定かではないが、球磨のお姉ちゃん宣言を聞いた子熊は先程よりも更に嬉しそうに鳴いた。

しかしここで球磨はふとあることに気が付いた。

「そういえばこの熊は名無しクマ。生まれたばかりだから名前が無いのは当然だけど、いつまでもお前と呼び続けるのもちよっと変ク

マ。母親どころか親戚ですらないのに命名するっていうのもおかしな話だけど、この際だから球磨がお前に素敵な名前を付けてやるクマ！……とはいえいざ名付けるとなると難しいクマ、責任重大クマ。何にするクマ？」

命名とは生まれてきた赤子に名前を授けるという大切な儀式。

適当な名前や変な名前は許されない、DQNネームなどもつての外である。

球磨は名前を考えた、考えに考え抜いた。

そしてようやく考え付いた子熊にふさわしい名前、それは……。

「よしっ、お前の名前は木曾クマ！球磨お姉ちゃんの妹になるんだったら名前は木曾以外ありえないクマ！それにモガ鎮守府に所属している球磨型狩娘には木曾がないから丁度いいクマ。今日からお前は木曾と名乗るといいクマ！強さとカッコよさを兼ね備えた我が妹、木曾の名に恥じぬ立派な熊となるクマ！」

「がうー!!」

妹と呼んだはいいが、子熊の性別は果たしてオスなのかメスなのか？

今後鎮守府に本物の木曾が配属されたら一体どうするのか？

そんなことは一切考えず、ただ単純にいい名前を付けたと誇らしげな表情を浮かべる球磨と、無邪気に喜んでみせる子熊改め木曾。

ぐうぐ。

そんな中、大きな音を立てて木曾のお腹が鳴る。

木曾はお腹をさすりながら切ない顔をして球磨を見つめた。

「ひよっとしてお腹空いてるクマ？うーん、普通に考えれば生まれたばっかりの動物はママのおっぱいを飲むクマ。でも木曾のママは不在だし、球磨のおっぱいをあげるつてのは論外クマ。吸われたって出るワケないし、そもそも動物に自分のおっぱい吸わせるのはいくらな

んでも嫌クマ。ここに大井がいれば代わりに吸わせたんだけど……
そういうええが使えるクマ?」

大井に対して酷いことを考えつつポーチの中を漁る球磨。

ちなみに球磨型で一番立派な胸部装甲を持つ大井でも吸われたって何も出ないし、長女命令だとしても許可するハズがない。当然である。

「粉ミルクとかは持ってないけど、これなら食べられるクマ?」

球磨が取り出したのはサシミウオとアオキノコ、今回のピクニツクで採集したものである。

「あぐあぐー!」

よほどお腹が空いていたのか、凄い勢いで食事を平らげていく木曾。

あつという間にサシミウオとアオキノコを食べ尽くしたのを見て、球磨は追加のサシミウオとアオキノコを取り出すと木曾はそれも食べ始める。

赤ちゃんだからミルクしか飲まないではないかと内心心配していた球磨は一安心である。

「おーおー、よく食べるクマ。よしよし、デザートにハチミツもあるクマ。味わって食べるクマ。」

木曾の食欲に気を良くした球磨は気前よくビンに入ったハチミツも木曾に与えた。

木曾は大喜びで蓋の空いたビンに鼻先を突っ込み、中をペロペロと嘗め回す。

「可愛いクマ。これが母性愛ってやつクマ?」

木曾の可愛い様子に頬が緩む球磨だったが、ふと鎮守府のことを思い出し洞穴の外の様子を軽く確認する。

「相変わらずの大雨クマ、ますます夜も更けてきたしこれで帰るのはちよっとキツイクマ。それにこの子を置いて帰るワケにもいかないししょうがないクマ。あんまり遅いと提督に怒られるかもしれないけど、どのみち木曾のママが帰ってくるまでここにいて約束しちゃった以上は一緒にいてあげるクマ!感謝するクマ!」

「がう〜！」

「わっ、急に抱き着いて来るなんてお前は本当に甘えん坊クマ〜。よしよし、いい子クマ〜。」

降り続く夜の雨。

外は暗く気温も冷え込んできたが、洞穴で過ごす球磨と木曾の周りはどこまでも明るく暖かい。

二人が心を通わせるたびにそれに合わせて絆石も少しずつ輝きを増していたのだが、木曾を愛でることに夢中の球磨がそれに気付くのはまだ先の話であった

球磨ちゃんと熊4

「……ZZZZ。」

ぬいぐるみのように木曾を抱いて巢の中で眠る球磨。

抱かれた木曾も安心しきった顔で寝息を立てている。

「……むにやむにや……うーん……クマ？……ん……あれ、ここは？
今まで何して……クマツ!?」

「ぎゃう!？」

目を覚ました球磨は寝起きで頭が働いていなかったからなのかしばらくボーツとしていたが、意識が覚醒すると同時に飛び起き、一緒に寝ていた木曾も驚いて目を覚ます。

「い、いつの間にか寝てしまったクマ！外はどうなったクマ!？」

慌てて外の様子を確認すると、昨日の土砂降りが嘘のようにつきかり快晴となっており雲一つない気持ちのいい天気である。

「朝になってしまったクマ、休みは昨日までだったのに……。提督に怒られるクマ……。」

すっかり寝過ごしたことを焦る球磨だったが、木曾の様子を見てふと思いつく。

「そーいや翌日になったのに木曾のママが帰ってきた様子がないクマ。」

洞穴の中は昨日のままであり、他の動物が出入りした形跡はない。

もし木曾の母親が帰宅していたのであれば、呑気に寝ていた球磨はあつという間に外に叩き出されていただろう。

鎮守府のことも気になるが、一日経つても木曾の母親が帰っていないこの現状に球磨は不安を感じてきた。

「いくらなんでもおかしいクマ。我が子をほったらかしにするなんてネグレクトクマ。テレビの動物番組で見た鳥の親は自分の巢のタマゴや雛鳥を必死に守ろうとしてたクマ。普通の熊はタマゴなんて産

まないけど、常識的に考えて自分の巣をほっとく動物はいないクマ。」
「がう?。」

「……………クマ。」

自分の脚に縋りつく木曾を見た球磨の脳内で、鎮守府に帰らなきやいけないという狩娘としての自分と、一人ぼっちの木曾を放っておけないというお姉ちゃんとしての自分がケンカを始めたのを自覚した。

『球磨は鎮守府に所属する狩娘クマ。狩娘は普段の任務のせいで忘れがちだけど、これでもれつきといた軍属クマ。ただでさえ昨日帰らなかつたのに木曾のママが帰ってくるまでここで巣ごもりするというのは流石に許されないクマ。真正正銘の軍人である艦娘に比べれば狩娘は規則に緩いとはいえ、これでも限度つてもものがあるクマ。』

『何言ってるクマ!?!球磨は木曾にママが帰ってくるまでお姉ちゃんできてあげるって約束したクマ。妹との約束を守るのは姉として当然のことクマ!それにここで木曾を見捨てていくなんて真似したらそれこそ提督に怒られるクマ。動物とはいえ子供を見殺しにするなんて人として最低の行いクマ!』

『……………だったら取るべき行動は一つクマ。』

球磨は考えをまとめると、しゃがみ込んで木曾と目を合わせるとそのまま語り掛ける。

「球磨はずつとここにはいられないクマ、帰らないといけないクマ。だけど木曾のママのことを忘れたワケじゃないクマ、そこで提案があるクマ。球磨と一緒に外に出てママを探しに行くクマ?。」

「???……………がーうっ!。」

「そっかそっか、それじゃ一緒に行くクマ。レッツゴークマ!。」

どう見ても話の内容を理解したというより単純に構ってもらえて喜んでるようにしか見えないが、球磨は納得したものと見て木曾を連れて洞穴の外に出た。

「うーん、いい天気クマ。ほら、これが外の世界クマ。本物のお日様の光に本物の風の匂い、大自然の空気を思いつきり吸うといいクマ。」
「がうー！」

初めて外に出た木曾は興味深そうにキョロキョロと周囲を眺めている。

球磨も同じようにキョロキョロと周囲を眺めているが、それは実際の外の風景と自分の頭の中の風景に差異を感じたからである。

「昨日は天気も悪かったし、日も暮れてたから分からなかったけどよ

く見たらそこから中荒れてるクマ……。」

雨上がりということであちこちに水たまりがあるが、気になったのはそんなものではない。

洞穴の入り口には球磨の足など比較にもならないくらい大きな動物の足跡がいくつもあつた。

しかも足跡はどうやら二種類の生物のものであり、更にはそこから中の地形にめぐり取られたり引き裂かれたような破壊の痕跡もあり、明らかに何らかの生物がここで戦っていたと考えられる。

「この肉球と爪のある足跡はきつと木曾のママのものクマ。だけどこっちの三本指の大きな足跡は始めて見るクマ。一体どんな生き物クマ？木曾のママが帰ってこないのは巣を守るためにこの足跡の主と戦ってたせいクマ？」

だとしたらマズいと球磨は思った。

三本指の足跡は木曾の母親の足跡よりも明らかに大きく、苦戦は免れない。

夜が明けても帰ってこないということはひよつとしたら最悪の事態を迎えている可能性もある。

「駄目クマ、そんな縁起でもないこと考えるのは……！」

球磨は不安げに肉球の足跡の匂いを嗅いでいる木曾の様子を見て、そのようなことを考えた自分を叱る。

今の自分の目的はこの子が無事に母親の元に送り届けること、それ以外のことはその時になってから考えればいい。

「この足跡の主が木曾のママクマ、多分。ひよつとしたら違つかもしれないけど……。巢の周辺にある大きな熊によく似た足跡なんだし十中八九そうクマ。少なくとも赤の他熊ってことはないハズクマ。」

「がう……。」

木曾も匂いから何かを感じ取ったのか、緊張している様子である。

「心配しなくても大丈夫クマ、何かあっても木曾のことは球磨が守るクマ。これでも球磨は普段から深海棲艦と戦ってる狩娘だから、腕っぷしには自信があるクマ！球磨お姉ちゃんに任せるクマ！」

本心を言えば球磨も不安がある。しかし怖がる木曾のためならば、いくらでも虚勢を張って見せられる。

現に今、自信に溢れる球磨の様子を見て木曾は落ち着きを取り戻した。

お姉ちゃんとして妹の前でなら、いつだって最高に粋がってかつこいい球磨ちゃんでいられるのである。

「……………と自信満々に出発したのはいいけど、さっそく詰んだクマ。ここ通れないの忘れてたクマ。」

エリア2への通路は相変わらず土砂に塞がれており通れない。

仕方なく球磨がエリア6へ続く道を通るべきかと迷っていると、球磨の気持ちを汲んだのか木曾が土砂の前に立ち前脚で土を掻き始めた。

「ひよっとしてその土をどけて通るつもりクマ？そんなの無茶クマ。そのペースで土を掘ったら日が暮れるクマ。」

それでも懸命に土を掻き続ける木曾、その必死な様子に球磨も勘付く。

木曾は伊達や酔狂で掘っているのではなく、球磨がここを通りたがっていることを察し、球磨のために頑張っているのである。

「よし、こうなったら球磨もとことん付き合うクマ！妹に任せてばかりでお姉ちゃんのがのんびりしているワケにはいかないクマ！」

自分のために頑張る木曾の様子を見て何もせず諦めた自分を恥じ、一緒に土を掻きだそうと球磨が一步を踏み出したその時……………

「ん？」

視界の隅で何かが光を放っているのに気が付いた。

その光は自分の左手、厳密に言えば絆石から発せられている。

「絆石が光ってるクマ？これは一体……………」

球磨が疑問を覚えたその瞬間……。

「ギャウウウウ!!」

ドオオオオオオオン!!!

「な……な……!?!」

木曾の右腕の一振りと共に爆発四散する土の山。

小さな体に見合わぬパワーを発揮した木曾に絶句する球磨。

「これが生まれて一日の子熊の出せる力クマ……? いや考えるのは後クマ、今はここが通れるようになったことを素直に喜ぶクマ。凄いクマ、エライクマー! 流石は球磨の妹クマー!」

「がう〜♪」

ビックリはしたものの取り合えず頑張った木曾を抱きしめながら頭を撫でる球磨。

そのとき球磨は木曾を撫でている左手の絆石の様子が先程と異なることに気が付いた。

「あれ? 確かさつき絆石が光っていたような?」

しかしどれだけ確認しても絆石が光を放つ様子はなく、指先で軽く叩いてみてもうんともすんとも反応しない。

「おかしいクマ。ひよっとして光ったのは気のせいだったクマ?」

首を傾げるものの何も変化はない。

「まあいいクマ。そんなことよりさつきと先を目指すクマ。木曾、行くクマー。」

木曾を連れて開通した通路を通る球磨。

ここで起きた戦いが通路の堅い地層を崩壊させるほどの激しさであったという事実を考えが及ばないまま……。

エリア2に着いた球磨と木曾だが、エリア5を上回る異様な雰囲気
に息を呑む。

昨日と同様に生物の気配は一切なく、戦闘の余波で荒れた大地は普
段草食獣が草を食む平和なエリア2の景色と同じ場所だとはとても
じゃないが思えない。

「何か変な臭いがするクマ……。」
そして球磨が一番恐ろしく感じたのがこの臭い、吐き気がこみ上げ
るほどの濃厚な鉄の臭い。

「この臭い、どう考えても……。」
球磨が足元に流れる小川に視線を向ければ、水に混じって赤い液体
が流れていた。

「やっぱり……。これは血クマ、つまりこれは血の臭いクマ。」
そのまま川の上流へ視線を動かしていくと、エリア2の崖から流れ
落ちる滝のすぐ近くに大量の血液がべつとりと付着しており、それが

少しずつ川に混ざって流されていたようだった。

球磨は気持ち悪いのを我慢して血に近付くと、右手でそつと触れる。

ヌルリとした感触に背筋がゾワリとするが、詳しく調べるために根性で堪える。

「うっ……。流石にもう温かくはないけど、全然固まってないクマ。つまりこの血はまだ新しいってことクマ。」

血が新しいということは、ここで争いが起こってからあまり時間が経っていないという何よりの証拠である。

ということは血の主かその血を流させた相手、もしくはその両者が近くにいるということにほかならない。

「幸い鎮守府はエリア1につながってるから、エリア2からはすぐクマ。まだ木曾のママが見つかってないけど、これが提督の言ってた異常なら球磨一人の手には負えないかもしれないクマ。木曾には悪いけど、一旦鎮守府に帰ってそれから改めてママを探すクマ。提督や北上に事情を話してみれば、事情が事情だからきつとみんな協力してくれるクマ！球磨の妹なら多摩の妹でもあるし、大井や北上の妹でもあるクマ。妹が困ってるのなら助けてあげるのが姉として当然の義務クマ。」

そうと決まれば即行動。

球磨は木曾に一声掛けると、エリア1へと続く上り坂を目指して歩き出す。

いや、歩き出そうとした……。

「ウウウウウ!!」

木曾は突然坂の上へ向けて唸り声を上げて威嚇を始め、それに釣られて球磨の足も止まる。

「木曾、どうしたクマ？何かあった……。いや、あれは!？」

木曾の突然の威嚇に困惑する球磨だったが、すぐに状況を理解した。

いや、理解せざるを得ない状況に陥った

ズシツ……ズシツ……ズシツ……。
重々しく鳴り響く足音。
ズシツ……ズシツ……ズシツ……。
ズシツ……ズシツ……ズシツ……。
ズシツ……ズシツ……ズシツ……ズン!!

「ぎよ、恐竜……いや、あれはそんな生易しいものじゃないクマ。
怪物クマ、モンスタークマ!!」

坂の上に姿を現したのはぬめりとした光沢のある暗緑色の外皮に
全身を覆われた、全長20メートルを軽く超える巨軀。

大量の鋭い牙の生えた大顎と、その顎に比べて小さな頭部。

非常に長くて太い、巨大なヒルのようにも見える不気味な尾。

その巨体を支える強靱な後ろ脚、それに対して非常に小振りだが鋭
い爪を備えた前脚。

その姿はどこことなくティラノサウルスなどの肉食恐竜に酷似して
いるが、恐竜に比べはるかにおぞましく暴力的なその姿はまさしくモ
ンスターである。

「あっ!?!」

そして球磨は気が付いた。

化け物の口に唾えられた、本来ならば青い毛皮と茶色の甲殻で覆わ
れているであろうその全身を血で赤く染めた大熊の亡骸を……。

地上最大の肉食獣として名高いヒグマやホツキョクグマでさえ3
メートルに達する個体は少ないというのに、目前の大熊は明らかに

6メートルを超えている。

そしてその巨大な熊の亡骸を、まるで無邪気に木の枝で遊ぶ子犬のように軽々と持ち上げる怪物の顎の力はもはや常軌を逸していると言っただろう。

「あ、あの熊は!? そんな、嘘クマ……。」

あることに気付いた球磨は慌てて木曾と巨大熊の姿を見比べる。青い体毛、茶色の甲殻、赤い鉤爪……。

大ききこそ全く違うものの、体の色も体のつくりも何もかもがそっくりであり、明らかに同種である。

いや、同種という言葉で誤魔化すのはやめにしよう。あの個体は間違いなく木曾の母親だ。

確かに二頭が親子であるという証拠はない、しかし不思議と球磨には分かった。

それは絆石を通して球磨と木曾の間につながりが産まれたからであり、それによりあの巨大熊に覚えた親近感から親子関係を見出したのだ。

「木曾をママの下に連れて帰ってあげるって約束したのに、こんなにつてないクマ……。」

打ちひしがれる球磨に対し、そんなのお構いなしと言わんばかりの怪物は文字通り獲物を見る目で球磨と木曾を眺める。

やがて怪物の目が笑うように歪んだかと思うと、怪物は啜っていた大熊を球磨達に向かって乱暴に投げ飛ばしてきた。

「ツ!? 危ないクマ……。」

球磨は慌てて木曾を抱き寄せるとその場に屈む。

球磨の頭上を凄い勢いで通り越して行った大熊の亡骸は、そのまま球磨の後方に落ちると三回ほど地面をバウンドしてようやく停止した。

「ほ、仏様に……いや、自分の獲物になんてことをするクマ!？」

死体を相手に投げ付けるという死者への冒瀆、せっかく捕らえた獲物を武器として扱うという野生動物として常軌を逸した行動。

怪物の予想だにしなかった行動に球磨は気が動転しているのか

怒ったり驚いたりするばかりで、そもそも何故怪物が死体を投げたのかという理由にまで頭が回っていない。

怪物としては死体を投げたのは当たってくればラッキー程度の考えであり、本当の目的は死体から口を離すことそのものにあった。

「ガアアアアアアアアアアアア
!!!!!!」

大熊を捨てて口が自由になった怪物は、身体を大きくそらしながら咆哮を上げる。

木曾を守ると心に誓った球磨に、木曾を手放して自分の耳を塞ぐという選択肢はない。

天をも震わせるかのような恐ろしい雄叫びに、球磨は歯を食いしばって耐えるしかなかった。

そしてその咆哮は、これから始まる地獄の狼煙であるということ。球磨は文字通り全身で感じ取るのであった。

球磨ちゃんときんぐ

「ガアアアアアアアアアア
!!!!」

BGM：荒ぶる乱入者

雄叫びを上げた怪物は体勢を戻すと大口を開けて球磨達に走り寄る。

「ヤバいクマー！」

咆哮の影響で頭が割れそうなほど痛む球磨だが、目の前に迫る危険にそうも言っただけならぬと木曾を抱えて大きく横に飛ぶ。

次の瞬間、さっきまで球磨達がいた場所でガチンという音と共に大顎が閉じられる。

「コイツ球磨達を食べる気クマー!? 既に球磨達よりも大きな獲物を確保してるのになんでクマー!？」

アシダカグモというクモがいる。

このクモは食事中でも新たな獲物を発見すると、今の獲物を捨てて狩りを行う。

クモのこの行動は知能よりも本能と反射によるものだが、現在球磨達が相対しているこの怪物の場合だと高い体温を保つために大量の食事を必要としており、そのため既に獲物を捕らえていても新たに獲物を見付けた場合、食料を増やそうと襲い掛かるのである。

「分かったクマ、島の生き物の姿が見えない理由が。アイツがこの森に現れたことでみんな見付からないように身を隠しているに違いないクマー！運悪く見つけたヤツはアイツの腹の中クマー！そりゃ誰もいないわけクマー！」

球磨の推理通り、島の生物はほとんどが怪物に見つからないように隠れている。

大嵐に立ち向かってても何の意味もないように、強大なモンスターという災害を恐れて脅威が過ぎ去るのを待っているのだ。

しかし母熊は巣とタマゴを守るために、明らかに勝ち目のない相手に隠れることなく挑んだであつた。

全ては子供を守ろうとする母の愛故に……。

それを理解したからこそ球磨は改めて決意する。

母熊が自分の命を捨てても守ろうとした木曾の幼い命は自分が何としてでも守り抜くと……。

「球磨が受け取った命のバトン、ここで投げ捨てるわけにはいかないクマー！」

球磨は木曾を抱っこしたまま走り出す。

本当は鎮守府に近いエリア1に行きたかったが、目の前の怪物の真横を通り抜けて通路を目指すのはリスクが高過ぎる。

よって多少遠回りになるが、川の上流にあるエリア3を経由してエリア1に向かおうと考えた。

怪物の巨体ならエリア1と鎮守府をつなぐ一本橋は渡れないし、それ以前に一本橋の前にある門を通り抜けることも出来ないだろう。

「鎮守府に辿り着きさえすれば球磨達の勝利クマー！」

木曾を抱えたまま走る球磨を怪物が猛追する。

狩娘の中では小柄で尚且つ木曾という荷物まで抱えた球磨と、20メートルを超える巨大生物が本気で鬼ごっこをして勝負になるはずもない。

それでも未だに球磨が捕まらずにいるのは、主に二つの要因がある。

一つは球磨の身体に不思議と力が湧いており、普段とは比べ物にならないくらい身体能力が上がっているということ。

本来であればとつくの昔にスタミナは底を尽き、間違いなく足を止めているのだが、現在はまだまだ余裕がある。

この時の球磨はこれを火事場の馬鹿力によるものだと思っていたが、実際は木曾を守ろうとする球磨の意志に絆石が反応し、限界を超えた力を引き出していたのだ。

もう一つは怪物が負傷しており、本来の速度が出せなかったということ。

怪物が万全の体調であれば絆石の力を得た球磨でも歩幅の差から簡単に追い付かれていたが、怪物は全身のいたるところに真新しい傷を負っていた。

特に右の脇腹と太腿、そして眉間には大きな傷があり、今も少しずつ血が垂れている。

これらの傷は全て木曾の母が付けたものである。

本来ならば怪物と大熊では生物としての格の違いもあって全く勝負にならないのだが、我が子を守ろうとする母の愛が怪物にここまでダメージを与えたのだ。

とはいえ怪物もここまで傷を負ったことで回復のためにより多くの獲物を求めており、球磨と木曾を絶対に逃がすまいと追跡がより執拗になっているのは皮肉としか言いようがない。

「も、もうすぐエリア1クマ！あそこまで行けば……ん？」

エリア3走り続け、ようやくエリア1とつながる通路目前まで来た球磨達。

ここでふと球磨が振り返ったのは偶然だが、その偶然が二人の命を救った。

「岩!?岩が飛んできたクマ！」

後方から球磨達を狙って巨大な岩石が飛んできていたのだ。

怪物がこのまま単純に追い掛けても球磨達に追い付かないということを知り、飛び道具による攻撃に切り替えてきたのである。

振り返ったことで岩に気付けた球磨は大きく横に跳ぶことで回避に成功したが、岩石の勢いは止まることなく今まさに球磨が通ろうとしていた通路の手前に着弾した。

「通路が塞がれたクマ!」

目の前の岩はそこまで大きくはないので登って進むことは不可能ではないし、先程のように木曾に砕いてもらうことだって出来るだろう。

しかしどちらにしても時間が掛かる作業である。

そして今は悠長にしている時間はない、腹を空かせた怪物がすぐ後ろまで迫っているのだ。

「クツ、こっちに逃げるクマ！」

エリア1に行くことを諦めた球磨は、すぐさまもう一つの通路であるエリア7とつながる道を進むことを選択する。

「鎮守府からは離れちゃうけどこの際仕方ないクマ！捕まるよりましクマ！」

エリア7は開けた土地が広がるエリアで逃げるにも隠れるにも不向きなエリアである。

そしてエリア6につながる通路があるのもこのエリアである。

エリア6はジャギイ達の巣があるので普段であれば入りたくないエリア筆頭であり、巣穴から出発したばかりの球磨もここに入るのは避けていた。

しかしそこを通り抜ければ木曾の巣穴があつたエリア5に戻るこ
とが出来る。

そうすれば後は簡単だ、再びエリア2に戻つてそのまま鎮守府のあ
るエリア1に向かえばいい。

「ジャギイに絡まれるのも嫌だけど、背に腹は代えられないクマ！化
け物に比べたらジャギイなんて子犬みたいなもんクマ！」

球磨は木曾を抱いたままエリア6への通路目指して走り出す……

が突如として赤黒い煙のようにも電流のようにも見える形容し難いエネルギーの奔流が通路に向かって放たれた。

巻き込まれれば肉体が蒸発するのではないかと思われるほどの膨大なエネルギーが球磨の進行を妨害する。

「これは龍属性の光クマ!?!」

球磨はその赤黒いエネルギーに見覚えがあった。

龍と呼ばれているが実際は未だに解明されていない赤黒い光を放つ正体不明のエネルギー、それが龍属性である。

提督が持つているスラッシュアックスのヘリオスクラッシュャー、それに搭載されているのは武器に龍属性を纏わせる滅龍ビン。

提督がトレーニングと称して農場の隅の空き地に刺した木の柱を斬り刻んでいたときに、球磨は同じ光を目にしたことがあった。

火属性や水属性などと違って龍属性を扱えるモンスターや深海棲艦はごく僅か、その理由は龍属性の秘める力は生半可な生物には手に負えないほどの強大なものだからだという。

逆に言えば龍属性を扱える生物は紛れもなく強者であるということでもある。

「コイツは龍属性を扱うほどの実力があるクマ!?!」

振り返ってみればその龍の光は怪物の口から放たれていた。

そして龍のエネルギーは怪物が放つのを止めても消えることはなく、煙となってその場に滞留する。

「ああもう！また道を塞がれたクマ!?!」

前門の煙、後門の怪物。

龍の煙に遮られてエリア6に進むことは出来ず、怪物が陣取っているためエリア3に戻ることも出来ない。

他に進める道はないかと周囲を見渡すと、山奥に続く道が目についた。

「あれはエリア8の通路クマ?..」

エリア7にはエリア6だけでなくエリア8につながる通路もある、しかし球磨は今まで一度もエリア8に入ったことがない。

基本的に狩娘は海で戦う存在であり、島そのものの探索をする機会

はさほど多くない。

だからこそ自由に島を探索出来る今回のピクニックを楽しみにしていたのだ。

ましてや山登りなど疲れるし時間も掛かる作業となる、ピクニック気分で足を踏み入れていい場所ではないのだ。

よってエリア8はマップでチラッと存在を確認しただけの場所であり、どのような構造になっているのかなんて見当もつかない。

それでもここでじっとしているよりはましと、球磨は木曾を抱きなおすとエリア8目指して走り出した。

「ハアハア……ハアハア、ここがエリア8……クマツ!？」

球磨は初めて訪れたエリア8を見渡し、そして絶句する。

「い、行き止まりクマ!?!」

エリア8は海に面した崖のエリア。

どこにもつながる道はなく、そして山というだけのことはあり孤島のエリアの中で最も高所に位置する。

球磨は慌てて崖下を覗き込むが、飛び降りるには危険な高さである。

球磨一人なら決死の覚悟で飛び降りるのも選択肢の一つだが、木曾を連れて飛び降りるのは単なる無理心中でしかない。

「まさか怪物はここに球磨達を追い込むのが目的であんなことをしてたクマ!?!」

このエリアは完全に袋小路となっており逃げ場がない。

思い返してみればあの岩投げも龍の煙もこちらの進路を妨害するように放たれていた。

あの怪物はただ暴れまわるだけの凶暴な獣ではなく、獲物を追い詰める知能も持ったモンスターだったのだ。

「こうなったらもう戦うしか選択肢がないクマ。木曾はここに隠れているクマ。」

球磨は木曾を枯草の中に隠すと、背負っていた大剣のアギトを両手で構えて怪物を待ち受ける。

「がう……。」

「心配しなくても大丈夫クマ。別に勝つ必要はないクマ、隙を作って逃げればいいクマ。」

少しずつ大きくなってくる怪物の足音。

音が近づくにつれ球磨の呼吸は荒くなり、全身から冷や汗が流れ出す。

そして遂に通路の奥から怪物が顔を覗かせた。

怪物と球磨の目が合い、球磨の背筋はスツと冷たくなり両足が震え始める。

やがて完全にエリアに侵入した怪物はまるで追い詰めるかのように走るのを止めて一歩ずつゆっくりと、しかし確実に球磨に歩み寄る。

近付いて来る怪物の巨体を前に、球磨は恐怖から今にも武器を捨てて逃げ出してしまいたい衝動に駆られた。

あんな怪物と戦いたくない、絶対に勝てっこないと……。

「でも別に、アレを倒してしまっても構わねークマ？」

だがそんな弱い自分を鼓舞するように強がり口にする、アギトを強く握り締めて覚悟を決める。

「そう簡単に球磨達を食べられると思うなクマ!!」

「グルオオオオオオオオオ!!」

BGM：健啖の悪魔／イビルジョー

怪物の大顎が球磨に迫る、しかしその動きは直線的で単純だ。

狩娘としてはまだまだ駆け出しの球磨でも、この程度ならかわせない道理はない。

右に向かってステップで避け、怪物の顎が通り過ぎたところでガラ空きの胴体のアギトを振り下ろす。

「クマツ!？」

しかし直撃したにもかかわらずアギトの刃は怪物の皮膚を浅く傷付けただけであり、全く手ごたえを感じられなかった。

「こ、こいつ硬いクマ!」

球磨も薄々感じているが、本来ならこの怪物は今の球磨が立ち向

かっつていいレベルの相手ではない。

アギト程度の弱い武器の斬れ味で、この怪物の硬い皮膚を切り裂くことは非常に難しいのだ。

「だつたらー！」

攻撃が効かないと分かるや否や、球磨は戦い方を変えることに決めた。

怪物の身体には母熊によって付けられた深い傷がいくつかある、そこを狙って攻撃する作戦だ。

いくら皮膚が硬かろうと、既に裂けた皮膚ならば問題なく攻撃を通すことが出来るだろう。

文字通り相手の傷口を抉る残酷な戦法に流石の球磨もいい気分はしないが、選り好みをしていられるような状況ではない。

ここで手を抜けば、その代償は球磨と木曾の命で払うことになるのだ。

作戦を決めた球磨は怪物の右側に回り込むように移動を開始する。

怪物の右側には脇腹と足に目立つ傷がある、球磨の狙いはそこだ。

「グルルルル……。」

すると怪物は怪物で球磨の右側に回り込もうとしているのか、球磨に右半身を向けながら接近してきた。

「チャンスクマー！」

狙って下さいと言わんばかりに弱点を晒したまま近付いて来る怪物。

千載一遇のチャンスに球磨は飛び出した。

「……あつ!？」

次の瞬間、球磨の身体は吹き飛ばされ宙に舞っていた。

そのまま重力に引かれて地面に落ちる身体、そしてようやく脳が再起動を果たしたのか遅れて全身に走る鈍い痛み。

「な、何が……起きたクマ?」

地面に仰向けに倒れた球磨は、何とか首だけを動かして状況を把握しようとした。

そこには尻尾を大きく振り抜いた怪物がいた。

「球磨は……球磨は、アイツの誘いに……乗ってしまったクマ?」

そう、これは全て怪物の狙い通りであったのだ。

自分に攻撃が通用しないのなら相手は通じる場所を狙ってくるであろうことを理解し、敢えて弱点を見せることで油断と隙を誘いそこを迎撃したのである。

球磨は怪物が獲物を追い込む頭脳を持っていることを知っておきながら、戦闘の際にもそれを活かした戦い方をするとは考えていなかった。

完全に球磨の浅慮が招いた結果であった。

怪物は倒れて動けない球磨に悠々と近付くと、大顎で食らい付きそのまま持ち上げた。

「あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ!!!」

今まで体験したこともない激痛に、球磨は喉が潰れる程の絶叫を上げる。

何本もの鋭い牙が球磨の身体中へ食い込み、プレス機同然の咬合力は球磨の全身を押し潰し、そして強酸性の唾液が球磨の肉体を焼き焦

がす。

「だ、脱出……を……。」

球磨は何とか逃れようとするが先程吹き飛ばされた際にアギトは崖から落として失くしており、そもそも全身を鋭い牙と強大な顎の力で抑えられているので抵抗どころか身動き一つ取れない。

「あゝっ……ぎっ……ゴホッ……うあ……。」

顎の力は更に強くなり、全身を押し潰されている球磨は呼吸もままならなくなった。

視界はチカチカと白と黒に点滅し、だらしなく開かれた口からこぼれるのは血と泡の混じった涎と蚊の鳴くような呻き声のみ。

球磨の意識は酸素不足により朦朧としており、肉体がバラバラになるのも秒読みである。

しかしこれから起きようとしていることを考えれば、意識がない方が幸せかもしれない。

遂に限界を迎えた球磨の全身の骨という骨は軋み始め、粉碎へのカウントダウンを始めた。

ゴリ……ゴリ……メリッ……メリメリッ……ミシミシミシミッ
……

バキッ!!

球磨ちゃんときつね6

バキツ!!

「ガアアアア!?!」

球磨の骨が砕ける寸前、横つ面に大きな衝撃を受けた怪物は思わず球磨を取り落とす。

放り出された球磨は受け身も取れず無様に地面を転がり、うつ伏せの状態でようやく止まる。

だがそんなことすら細事とばかりに圧力から解放された身体は倒れたまま新鮮な空気を求めて必死に呼吸を繰り返す。

「ゲホツゴホツ!!ハアツ、ハアツ、ハアツ、ハアツ……………い、生きてるクマ…………。た、助かった…………のは、何でクマ?」

視界が回復してきた球磨は、首だけで周囲を見渡す。

本当なら起き上がりたかったが、全身に残る痛みで身体を起こすことすら出来ないのだ。

そこには頭を軽く振りながら体勢を整える怪物と、球磨を守ろうと小さな体で必死に怪物に立ち塞がる木曾の姿があった。

怪物が球磨を噛み砕く寸々に何があったのかと言うと、木曾が怪物の顔面に飛び掛かり勢いそのままに渾身のパンチをお見舞いして怯ませたのだ。

バキツという音はその際のものである。

「木曾?!木曾が助けたクマ?!?何で出てきちゃったクマ?!?あのまま隠れていけば見つからずに済んだのに!」

「ウウウー!」

木曾を守ろうとする球磨は怪物に立ち向かおうとする木曾を咎めるが、振り返った木曾の目を見てようやく全てを理解した。

「そっか……球磨が木曾を守りたいように、木曾も球磨のことを守りたいクマ。」

「ガウー！」

木曾の献身に心打たれた球磨は、自分もその心意気に応えるべく痛み身体に鞭を打ってプルプルと震えながらも必死に立ち上がる。

「守るって一方的なことじゃないし、とつても難しいクマね。どれだけ肉体を守っても、相手に心配を掛けていたら心が守れないクマ。木曾は既にママを失ってるクマ、これで球磨までやられたら姉まで奪わせることになっちゃうクマ。球磨だって球磨のことを庇って多摩や大井に北上が死んじゃったら悲しいクマ、心が壊れるクマ。だったらお互いがお互いを守るクマ。球磨が木曾を守って木曾が球磨を守るクマ！一人で全てを守ることは難しくても、二人で力を合わせれば守れないものはないクマ！」

本当に守るべきものが見えた球磨は木曾の横に並び立つと、失ったアギトの代わりに剥ぎ取りナイフを逆手持ちで構える。

ちよつとでも気を抜いたらすぐに崩れ落ちそうな満身創痕の身体、どうして立っていられるのか不思議なくらい最悪のコンディション。それでも万全だったさつきまでよりもボロボロな今の方が確実に強い。

球磨は強がりでも思い込みでもなく、本当にそう感じていた。その時……。

カツ!!

「クマツ?! 絆石が……?」

「ガウ!」

「ガアアア!!」

今までで一番激しく、そして明るく絆石が光り輝いた。

球磨と木曾には優しく柔らかい暖かな光として、怪物には鋭く眩し

い閃光として周囲を包んでいく。

青白い光の粒子の中で、球磨と木曾は不思議な空間にいた。

孤島の崖で怪物と戦っていたというのに、今はまるで球磨と木曾で二人だけの光の世界にいるようだった。

暖かくてふわふわとした無重力のような世界。

「ここは？・球磨の心の中クマ？」

「ガウ？」

球磨には直感で分かった。

この青白い光の空間は己の心の中の世界であると……。

だが自分の心の中というのは当然のことながら自分だけの世界である、だというのにここには木曾がいる。

「そっか、これは球磨の心であると同時に木曾の心でもあるクマ。」

そう、絆石を通して完全に二人の心がつながったのである。

「何だろう、不思議と力が湧いてくるクマ。それに痛みも平気クマ、気にならなくなってきたクマ。」

身体の傷は癒えていない、だがさつきまでとは違い身体に活力が満ちてくる。

ただでさえやる気が溢れているのに、そこに活力までみなぎってくればもはや負ける気がしなかった。

「ガウ。」

「何より木曾と心がつながっているって感じがするクマ、これが絆クマ？そっか、絆石ってこういうことクマ！ただ綺麗なだけの宝石じゃなかったクマ！絆石、球磨のことを認めてくれるクマ？」

球磨が左手の絆石に目を向けると絆石はまるで返答するかのようになりチカチカと瞬き、やがて光は収束していく。

光の世界は最初からなかったように消失し、二人は元の世界へと帰ってくる。

長く感じた心の世界も現実から見ればほんの一瞬、邯鄲の夢に過ぎない。

「ガアア……!?!」

光が収まったことで視界が効くようになった怪物の前には、先程までの弱々しく一方的に狩られるだけの二匹の獲物はいなかった。

代わりにいたのは、小さい身体に収まり切れない猛々しく闘志を燃え上がらせる二人の戦士の姿だった。

BGM：風の絆

「ここからが本番クマ！木曾、絶対に勝つクマ！」

「ギャウ！」

怪物へ向かって駆け出す球磨と木曾。

そのスピードは先程までの比ではなく、あっという間に怪物の懐まで到達する。

「木曾ッ、そこでブレイクジャンプクマ！」

球磨の指示を受けた木曾は高く飛び上がり、怪物の脳天目掛けてヒップドロップをお見舞いする。

本来であれば小さな子熊が怪物の巨体に押し掛かったところで痛くも痒くもないはずだが、子熊の攻撃は的確に怪物の額を打ち抜き怯ませる。

怯んだことで怪物の防御は手薄になる、そこを見逃さず球磨は怪物の脇腹をナイフで切り裂いていく。

アギトより小さく貧弱なナイフが怪物の堅い表皮に傷を付けた、これは奇跡でも偶然でもなんでもない。

これは乗娘とオトモンの絆により起きた現象だ、二人の心がお互いを守るという意識と信頼感によってシンクロしたことで絆の力が高まり戦闘力が大幅に向上しているのである。

そんなことくらいで強くなれるのかという疑問もあるだろうが、それで強くなるのが乗娘という存在なのだ。

生まれたばかりで戦闘経験が全くないの木曾が怪物と戦っているのも同じように能力が底上げされたからである。

乗娘としての戦いは初めてでありながら、球磨が木曾に的確な指示を出せているのも同様に絆の力によるものだ。

心の底からつながり合ったことで木曾がどのようなことが出来るのかを理解し、今まで一度もやったことのないオトモンへの指示をスムーズに出せるようになったのである。

「ゴオオオオ!!」

怪物は顔面に張り付いた木曾を振り落とすと、そのまま大きな足で踏み潰そうとする。

「硬化の構えで迎え撃つくマ！」

ズウン!!

球磨の指示と同時に地響きと共に振り下ろされた怪物の足。

ぬいぐるみのように小さな木曾が怪物の巨大な足で踏まれればペチャンコを通り越して赤い水溜まりになってしまいうだろう、本来であれば……。

「ギャウウウー！」

木曾は生きていた。

頭上に両腕を突き出して怪物の足を受け止めた木曾は、重みで下半身が若干地面にめり込んでいたものの目立つダメージもなく耐え切ったのだ。

「さっさとその汚い足をどけるクマー！」

攻撃を受け止められて動きが止まった怪物、その足に球磨は思い切りナイフを突き立てる。

球磨の攻撃により思わず怪物は後ずさり、その間に球磨は木曾を引っ張り上げて救出した。

「ゴアアアア!!」

ついさつきまで食料としてしか見ていなかった小さく弱い生物が、急に自分を脅かす戦闘力を発揮し始めた。

その事実には動揺したのか怪物の動きは徐々に単調になり始める、そんな隙を球磨は見逃さない。

「力任せの攻撃、だったらスピードで対抗するクマー！」

乗娘にはパワーにはスピード、スピードにはテクニク、テクニクにはパワーで相手に立ち向かうと有利に戦えるという三棘みの法則が存在する。

そして有利な攻撃を二人同時にお見舞いすることで、相手の反撃すら許さず大ダメージを与えられる連携技を繰り出せる、これこそがダブルアクションである。

狩娘ではなく乗娘にしか適応されないという特徴こそあるものの、これはアタリハンテイ力学と同じように誰も抗えない絶対的な力を持つルールなのだ。

「うりやあ！これが球磨と木曾のダブルアクションクマア!!」

「ギャウ!!」

ガッ!!

「グオオオオオ!!」

怪物の攻撃に合わせて駆け出した球磨と木曾の二人は光の矢と化し、怪物の身体を貫いた。

球磨と木曾のダブルアクションに完全に当たり負けした怪物は、反撃どころか防御すら出来ずに吹き飛ばされる。

「怪物がダウンしたクマ!?!今こそ決着をつけるときクマ!!」

倒れてもがいている怪物を見た球磨は勝負を決めるべく、絆石を高く掲げる。

すると絆石から光が溢れ、今まで以上に球磨と木曾の身体に力がみなぎってきた。

「うおおおおお!!木曾、決めるクマア!!」

「ガウ!!」

球磨はポーチからあるものを二つ取り出すと、それを空高く放り投げる。

そして二人は物理法則を無視した勢いで飛び上がると投げた物体に食らい付いた。

二人が口に咥えたのはプリプリに太ったとても美味しそうなシャケ。

そのシャケは昨日の球磨の釣りの成果であり、特別なポーチに入っていたお陰で未だにピチピチと釣りたてのように元気よく動いている。

「これが球磨と木曾の絆技!!」

「シヤケハントクロオオオオオオオオ!!!」

ようやく立ち上がった怪物だが、何をやるにしてももう遅い。
シヤケを啜えた二人は怪物目掛けて急降下。

貧弱な剥ぎ取りナイフと子熊の弱々しい鉤爪は、絆の力を得たことで伝説の剣にも匹敵する業物と化した。

ザンツ!!!

球磨と木曾は得物を振り下ろした体勢のまま着地する。

確かな手応えを感じた。しかし油断はしない、いや出来ない。

何かあった場合すぐ次の動きに移れるよう、怪物から目を離さない。

「グ……ガ……。」

やがて怪物の身体はグラつき、ドウツという音を立てて崩れ落ちると数回痙攣した後に動かなくなった。

「……………プハー……ッ！緊張で呼吸することすら忘れてたクマ、窒息するところだったクマ。」

怪物が倒れたのを確認すると、球磨と木曾もへろへろとその場へたり込む。

今更になって全身に疲れと痛み、そして恐怖が戻ってきたのを球磨は自覚する。

左手を見れば先程まで眩しいまでに輝いていた絆石の光も収まり、綺麗なものだけの宝石に戻っていた。

緊張の糸が切れたのと絆によるブーストが切れたことで、肉体が本来の調子に戻ってしまったのだ。

「ハアハア……。でもやったクマ、球磨達勝ったクマ……。未だに信じられないクマ……。」

「ガウ……。」

球磨と木曾はお互い顔を見合わせるとニコツと笑い合う。

二人はもう体も心もクタクタだが、それ以上にお互いの胸にこみ上げる達成感と満足感に包まれていた。

「木曾、結局お前をママのところに入れて行ってあげる約束は守れなかったクマ。ゴメンクマ。」

「グウ……。」

「でもお前のお姉ちゃんになってあげるっていう約束まで破るつもりはないクマ。」

「ガウ?」

「鎮守府で球磨と一緒に暮らさないクマ? 本当なら野生動物は野生の世界で生きていくべきなんだろうけど、自然っていうのはみなしごが生きていける程優しい世界じゃないクマ。それに球磨としては木曾と一緒にいたいクマ。木曾の中ではもう球磨の家族クマ、球磨の家族なら妹達や提督の家族でもあるクマ。でも無理矢理連れていくっていうのは無しクマ、木曾はどうしたいクマ?」

「……ギャウ!」

球磨の提案を聞いた木曾は嬉しそうな顔で球磨にすり寄ると、そのまま顔をペロペロと舐め始めた。

「あははっ、くすぐったいクマ。それじゃこれで木曾は改めて球磨の家族クマ。」

噛み砕かれる寸前まで行った身体は未だに引き裂かれるかのような痛みが走るが、木曾と家族になれた事実を顧みれば安いものである。

「それじゃ一緒に帰るクマ。木曾の新しい家になるモガ鎮守府へ……!?!」

そう言って立ち上がろうと片膝立ちになった球磨だが、僅かに聞こえた物音に反応しそちらに振り返る。

そこにあったのは怪物の死体……いや死体だと勝手に思い込んでいたもの。

怪物はダメージを感じさせないスムーズな動きで立ち上がると、球

磨達を見下ろす。

そして……………。

「ウゝ オオオオオオオオオオオ
!!!!!!」

悍ましい咆哮と共に怪物の身体は筋肉が膨張したことにより一回り大きくなり、興奮により血の流れが活発化したことで表皮は赤く染まる。

そして口からは吐息に混じって濃密な龍のエネルギーがあふれ出す、その殺気と重圧は先程までの比ではない。

「あつ……………ああ……………そ、そんな……………」

立ちほだかる絶望の化身、先程の戦闘で全てを出し尽くした球磨に出来ることは何もない。

戦うどころか逃げる体力すら残されていない、そして何より心が折れていた。

自分の持てる全てを絞り出してようやく倒せたと思っていた相手、だというのに怪物はこれからが本番だと言わんばかりに持てる力を開放したのだ。

これに抗うなど時間の無駄であり、出来るのは無様に震え上がることのみである。

「それでも、それでもっ！せめてこの子だけは守るクマ!!」

球磨は木曾に覆い被さった、しかしこれはハッキリ言っただけ無駄な行為である。

抵抗が出来ない以上、先に球磨が食われてその後木曾が食われるだけだ。

「グルル……………」

球磨達に打つ手なし、怪物もそのことを理解したのか嘲笑を上げるように喉を鳴らす。

そして動けない球磨の背中に牙を突き立てるべく頭を下げた。

「おっと、そこまでだ。」

次の瞬間、怪物は呻き声と共につんのめって球磨達の頭上を通り越し、それと同時に巨大なヒルのような物体がドシンと音を立てて先程まで怪物が立っていた場所に落下した。

それは怪物の尻尾、球磨を食べようとして周辺への注意が疎かになった隙を突かれ何者かに背後から尻尾を切断されたのだ。

「全く、あれだけ森の様子が変だと忠告してやったのに……。とはいえここまでよく頑張ったな。」

「て、提督……。う。どうしてここに？」

怪物改めイビルジョーが尻尾を斬られた痛みでのたうち回ってい

る間に、球磨達を庇うように現れたのはモガ鎮守府の提督だった。

肩には斧形態のヘリオスクラツシャーを担いでおり、これでイビルジョーの太い尾を切断したのである。

「部下が帰ってこなかったんだ、探しに来るのは上官として当然だろう。それに言っただろう？ お前は俺の大切な狩娘で、替えの利かない俺の家族だって。家族の心配をしないやつがあるか。」

提督は安心させるように球磨の頭をポンポンと軽く叩く。

「ここからは俺に任せろ。上位個体のイビルジョー程度俺の敵じゃねえ！」

提督はヘリオスクラツシャーを変形させると、武器に敢えてエネルギーを過剰に充填させる。

至る所から蒸気を噴出させ、バチバチと黒い龍のエネルギーを刀身から迸らせるヘリオスクラツシャー。

更に武器を剣から斧へと戻しつつその場でブンブンと振り回しながら、今度は自分自身の気を高める。

「これが剣鬼形態、そしてテンペストアクスだ！ 今まで俺が本気で戦うところ見たことなかっただろ、いい機会だ。球磨、よく見てろ。お前の提督の強さと、スラツシユアツクスの戦い方っていうものをな。」
「ゴオオオオオ!!!」

自身の尻尾を切断した提督を獲物ではなく完全に敵だと認識したイビルジョーは、球磨達と戦っていた以上のスピードで提督に接近すると大顎で食らい付く。

「それで攻撃のつもりなのか？ 遅いな、あくびが出るぜ！」

「ゴガア!？」

相手の方が先に攻撃を繰り出したにも係わらず、後から提督が振り下ろした斧の一撃の方が先に届く。それはまさしく電光石火の早業。

斧はイビルジョーの頭部に叩き付けられても勢いが止まることなく、そのまま自分より遥かに巨大な相手を大地に振じ伏せた。

「おねんねにはまだ早いな、これからが本番だ！ いくぜ！」

「狩技!!トランススラッシュ!!」

提督は斧を凄いい勢いで振り回し、体勢が崩れたことで丁度いい位置にあるイビルジョーの顔面にまるで往復ビンタでもするかのよう連撃を叩き込んでいく。

殴られるたびに折れて飛び散る牙、イビルジョーは抵抗すら出来ず完全にされるがまだ。

だがトランススラッシュの連続攻撃はこんなもので終わりはない。

すぐさま武器を剣に変形させた提督は、そのまま龍エネルギーの残像しか見えない高速の斬撃を無数に繰り出す。

「ガアアアア!!」

非常に硬質なイビルジョーの頭殻、だが提督の放つ斬撃の前ではそんな防御力など無いに等しい。

あっという間に切り刻まれ、切れ目から悪臭を放つ体液を垂れ流す。

「こいつでトドメッ!」

提督は息も絶え絶えとなったイビルジョーの口内に剣の切っ先を勢いよく突っ込むと、圧縮させて限界以上に溜め込んだ龍のエネルギーを一気に開放させた。

「属性解放突きイ!!!」

ドオオオオオオオオオオオンン
!!!!!!

解き放たれた莫大な龍のエネルギーとイビルジョー自体が持つ龍のエネルギー、それらが反応したことで凄まじい大爆発が引き起こされる。

爆発の規模は軽く見積もっても半径5メートル以上はあり、その威力は離れた位置にいた球磨達すら爆風で吹き飛ばされそうなほどだった。

「クマツ!?て、提督はどうなったクマ!?」

提督の安否が気になり、自分が満身創痍なことすら忘れて思わず立ち上がる球磨。

爆発こそ収まったものの、残された龍の煙で爆心地の様子は全く見えな。

爆風だけであれだけの威力だというのに、提督はあろうことかあの大爆発の中心にいたのだ。

心配にならない方がおかしい。

「なんだ、それだけ傷付いていながら人の心配か?なに、心配せずとも俺は無事だ。」

斧の一振りで煙を振り払い払い姿を現したのは戦闘後だというのに傷どころか埃一つ付いていない提督、そして……………。

ズウウウウン……………。

爆発に巻き込まれたことで上半身を醜く焼けただれさせ、力なく地面に倒れ込むイビルジョーの姿であった。

イビルジョーはそのままビクビクと数度痙攣したのち、目を見開いたまま完全に息絶えた。

「お前に悪意が無いのは分かっている、お前もただ生きるのに必死だっただけなんだろう。だが俺も大切な部下を喰われるワケにはいかないんでな。それにこの島はお前が生きていくには狭過ぎる。命

の調和を守るのもカリユード諸島で働く提督の大事な任務の一つだ。悪いがお前のことは狩らざるを得ないのさ、恨んでくれていいぞ。」

提督はそつとイビルジョーに近寄ると、優しい手付きでその瞼を閉じさせた。

「提督くっくッ！無事でよかったクマア〜！」

「ギャウ〜！」

両腕をブンブン振り回し、全身で喜びを表現する球磨と木曾。

「全く、俺を何だと思ってる。自分で起こした爆発だぞ、そんなものでくたばるかよ。とはいえ心配させて悪かったな。」

「ううん、お礼を言うのはこっちの方クマ！提督はあの怪物をあつという間にやつつけてくれたクマ！ありがとうクマ！」

「何言つてやがる、俺はトドメを刺しただけに過ぎない。お前達がコイツを弱らせたからこそだ。」

「だとしてもクマ！凄かったクマ！カツコよかったクマ！！感動したクマ！！流石は提督クマ！」

「そんなことよりもだ。」

「クマ？」

不自然なくらいに饒舌な球磨、露骨に早口になっている。

だが提督は球磨の話を遮ると、両肩に優しく手を乗せ目を合わせた。

「球磨、あまり無理をするな。」

「む、無理？そんな……球磨、無理なんて……。」

球磨は一瞬表情を強張らせると、声を震わせながら視線を逸らす。

提督はそのまま球磨を優しく胸元で抱きしめると、今度は敢えて目を合わせずに耳元で優しく囁く。

「もう一度言う、あまり無理をするな。」

「うっ、うあ………うわあああああああああ！！！」

緊張の糸が切れたのか、球磨はボロボロと大粒の涙をこぼす。

「怖かったクマ！何度も、何度も死んじゃうって！！球磨はここで終わりなんだって！！でも、でもっ！なによりも！守るって誓ったのに……木曾のこと、あれだけ守るって誓ったのにつ！！会ったばかりの木曾を

なんで命がけで守ってるのかって!!木曾を見捨ててっ………
逃げれば!そしたら球磨だけは助かるかもって!そんなことを、
ちよつとだけでも考えてっ!!家族だって………言ったのに!!多摩も、大
井だって、北上すら!家族だ妹だって言っても!都合が悪くなったら
………球磨はきつと見捨てる!!最低の狩娘だっ!!」

「分かってる、分かってるさ。大丈夫、お前はそんな奴じゃない。考え
るだけなら自由だし、誰だって自分の命は惜しい。それでもお前は行
動に移さなかった。安心しろ、ここには俺しかいないんだ。思い切り
泣け、泣くのは恥ずかしいことじゃない。全部吐き出せ。」

「ああああああああ!!うわああああああああああ!!わああ
ああああああ!!」

「ぐすつ……えへへ。一生分くらい泣いたクマ。提督、制服汚しちゃってゴメンクマ。大泣きしたの恥ずかしいから妹達には秘密にしといてほしいクマ。」

「大泣き？何のことだ？俺は何も知らないな。これは雨で濡れただけだ。」

「雨が降ったのは昨日クマ。それに胸だけがベチョベチョになる雨なんて降るワケないクマ。でも提督、ありがとうクマ。」

「がうう！」

提督の胸元から顔を上げた球磨の目元は赤く腫れており鼻水まで垂れていたが、表情自体はとても明るく清々しいものになっていた。

隣で心配そうに見ていた木曾も、元気になった球磨の様子に一安心である。

「提督、球磨は弱いクマ。」

「そうだな。」

「うぐつ、自分から言い出したとはいえちよつとくらい否定して欲しかったクマ。それで提督、球磨は別に最強になりたいワケじゃないクマ。でも手の届く範囲物にあるものを守るくらいの強さは欲しいクマ。もう今日みたいな悔しい思いをしたくないクマ。」

「そうか。」

「こんな弱くて情けない球磨でも強くなれるクマ？」

「なれるさ。もうお前は強くなるために必要なものを持っている。だが、それでも不安なら……。」

「提督？」

提督は球磨の剥ぎ取りナイフを拾うと、イビルジョーの亡骸へ歩み寄る。

そして亡骸にナイフを突き立てると、あるものを剥ぎ取った。

「この爪を持っている。もし辛いことがあればこの爪を見て今日の事を思い出せ。その守りたいという気持ちを決して忘れるなよ。」

そうやって提督が渡してきたのはイビルジョーの足に生えていた鉤爪、それも二本。

そして提督は何食わぬ顔で球磨の腰に着けた鞆にナイフを挿す。

「でもこれって提督が剥ぎ取ったものじゃ……？」

本来狩人や狩娘同士で素材の取引は禁止されている。

「何言ってやがる？これはお前のナイフで剥ぎ取ったものだ、ということとはこれは最初からお前のものだ。だからなんの問題もない、いいな？それに今のお前の体調じゃコイツの硬い爪を剥ぎ取るのは無理だ。自分の代わりに剥いでもらったと思っとけ。」

「ふふっ、詭弁クマ。」

「それとこれも渡しておく。」

そう言っ提督は自分のポーチから赤と黄色の二枚のお札を取り出すと、球磨に押し付けるように渡す。

「これは？」

「これは力の護符と守りの護符だ。これだけでも効果はあるが、その爪と組み合わせてみる。必ずお前の今後の成長の助けになってくれるだろう。」

「こんなに高いものまで……提督ありがとうクマ！」

「礼などいい。それよりそろそろ帰るぞ、みんな心配しているからな。」

「く、クマツ!？」

そう言うが早いか、あつという間に提督は球磨をお姫様抱っこで抱えてしてしまった。

「て、提督!?!何してるクマ!こんな恥ずかしいクマ!」

「何言ってやがる？お前全身ボロボロの上に骨のあちこちにヒビまで入っていて、立つてるだけでもキツイんだろ。さつきからずっと痩せ我慢してるみたいだが、俺の目は誤魔化せねえぞ。そんな奴を歩いて帰らせるほど俺は鬼畜じゃない、大人しく抱かれてろ。そっちのチビ助は木曾っていったか？お前も一緒に来い。球磨の家族になったんだろう？だったら俺の家族でもあるからな。」

「がうー!」

そのまま提督は赤面する球磨を抱いたまま歩き出し、木曾はその後ろをトコトコと付いていく。

「最初はおんぶしてやろうと思ったんだが、あいにく俺の背中は何り

オスクラツシャーが使用済みでな。そういやお前のアギトはどうした？出掛ける際には持つてただらう？」

「アギトは、あの戦いの最中に崖から海に落として失くしちやったクマ……。」

「失くした？やれやれ、狩娘にとって武器は命綱だと教えたんだけどな……。」

「ごめんなさいクマ……。」

「いや、別に謝らなくていい。ワザと捨てたワケじゃないんだろう？あの状況でお前はよくやったよ。海底に沈んでいつちまっただろうし、もう探すのは無理だな。よし、いい機会だ。今日頑張ったご褒美に一つだけ俺が武器を買ってやろう。」

武器を無くしたことを恥じる球磨だが、提督は責めることなくむしろ頑張ったと褒め、新しい武器を買ってやるとまで提案する。

「何でもいいクマ？」

「おう、何でもいいぞ。店売りの物限定だけだな。」

「だったら、ボーンアックスがいいクマ。」

球磨の欲しがった武器、その予想外の答えに提督はキョトンとする。

「お前、大剣じゃなくていいのか？今回は特別だからオオアギトどころかゴーレムブレイドだって買ってやるぞ？」

不思議に思った提督は今の球磨には手の届かない高額な武器を提案するが、それでも球磨の答えは変わらない。

「ううん、球磨は提督と同じスラツシユアックスが使いたいクマ。」

「だったら精鋭討伐隊剣斧とかパワーブロウニーのような強力な武器でもいいんだぞ。」

「いきなり強い武器を使っても使い手が未熟なら本来の威力を發揮出来ないどころか使い手の成長まで妨げる、提督が以前言ったことクマ。」

「ハハッ、こりゃ一本取られたな。そうだ、武器が強いだけで自分まで強くなったワケじゃない。使い手と一緒に成長していく、それが武器の正しいあり方ってもんだ。よし、分かった。ボーンアックスを買っ

てやる、楽しみにしてるよ。」

球磨の答えに満足した提督はそのまま歩み続ける。

一方の球磨は提督に抱かれているこの状況で、あることに気が付き目を瞑る。

（球磨、今凄いドキドキしてるクマ。提督にこうやってくっついてい
るだけで幸せを感じてるクマ。今までこんなことなかったのに
……。）

球磨は今まで提督のことを、木曾によく似たその外見から実質球磨
型の一員として扱っていた。

上官ではあるが、ある時は妹、ある時は弟、ある時は兄というなん
とも不思議でなおかつ気安いポジションに収まっていたのだ。

決して軽んじているわけではない、それでも球磨にとっては上司及
び家族の関係でしかないのだ。

（これって恋クマ？でもどうして提督に恋なんか？）

球磨は決してピンチのところを提督に助けられたから恋に落ちた
ワケではない。

安っぽい創作物のように危機の際に颯爽と助けに来た白馬の王子
様に憧れるような頭の軽い女ではないのだ。

（球磨は提督の背中に憧れたんだクマ。何かあってもこの人がいれば
大丈夫、不安を吹き飛ばしてくれるこの力強い背中に男を見たんだク
マ。）

今までもそうだった、提督として働くその姿に頼もしさを感じたも
のだった。

家族として見ていたつもりも、その姿に少しずつ男としての意識を
積み重ねていた。

それでも家族だから気のせいだと思っていた、思い込もうとしてい
た。

しかしその重ね続けた想いは今回の出来事で遂に決壊した、そして
一度あふれ出した想いはもう止められない。

（北上や大井が提督に惚れた理由が分かったクマ、雌は強い雄に惹か
れるものクマ。球磨達は姉妹、惚れる男の条件だって同じで当然ク

マ。)

「提督……。」

「ん、どうした？」

「大好きクマ。」

「はあ？急にどうした？」

「ううん、何でもないクマ。ちよつと愛の告白をしたくなっただけクマ。」

「ハッ、抜かせ。」

「あつ、本気にしてないクマ！いいもん、これから本気を出すクマ。毎日好き好き言ってるクマ！」

「はいはい、言ってる。」

(北上、大井、ごめんクマ。これから球磨も提督争奪戦に参加するクマ。恋は戦争、いや狩猟！球磨の狩りのテクニツクを見せてやるクマ！)

しかし流石の球磨も、北上に提督ハーレム計画を提案されるとは夢にも思っていないのであった。

「提督、愛してるクマ！」

BGM：生命ある者へ

孤島の海の風景をバックに雄大な音楽と共にスタッフロールが流れる、そしてそれを啞然とした表情で眺める天龍。

「どうだったクマ？面白かったクマ？」

「えつとこれ、球磨と木曾の出会いの話だよな？」

「厳密には木曾との運命の出会いと、球磨がスラッシュアックスを使うことになった切っ掛けと、球磨が提督に恋をした、球磨の新しいアイデンティティーが産まれた記念日の話クマ。」

「濃厚過ぎて胸焼けするかと思った……。」

ふと球磨の方を見てみれば首元に紐で下げられた赤とオレンジの二本の爪飾りが目に入った。

出会ったときからずっと身に付けていたそれ、当初は単なるオシヤレだと思っていたがこの映画を見た今なら分かる。

これがあの怪物の爪と護符を組み合わせて作ったお守りなのだろうと……。

「それにしてもイビルジョーつつたか？あんな怪物今まで見たことないんだけど、マジでいるの？フィクション？」

「この映画はノンフィクションクマ！アニメじゃなくて本当のことクマ！球磨も流石にあんなのと出会ったのはこの一回のみだけど、この島には数多くの巨大生物が生息してるクマ。天龍も巨大生物見たことないクマ？」

「デッカイピンクのゴリラなら……。」

「ピンクのゴリラ？何それ？」

「オレにも分からん……。」

球磨に可哀想な人を見る目で見られたが、頭がおかしいのはオレじゃなくてお前の方だと声には出さないものの心の中でそう思う天龍であった。

「あれ？なんか周囲の風景が歪んでるんだが……。」

「あつ！これはそろそろ目覚めるっていう合図クマ。」

「もうそんな時間!？」

映画館の内装が溶けるように崩れていき、それと同じくして白い霧が周囲を覆い始めた。

「まだスタツフロールの途中なんだから目覚めちやダメクマ〜!」

「そんなこと言われたってどうしようもないだろ! 大体このスタツフロール、ほとんどお前の名前しか出てきてないじゃねーか!」

「そりゃ本物の映画と違って球磨の記憶を再生しただけだから、スタツフもスポンサーもいるわけないクマ〜!」

「うわっ、足元が崩れた! 呑み込まれる〜!?!」

「待つクマ〜! まだ起きるなクマ〜!」

こうして天龍は奈落の底へと消えていった。

「うーん、むにやむにや……ふあ？あつ、マジで目が覚めた！」

天龍が目を覚ましてみれば、そこは当然ながらモガ鎮守府の睦月型用の小屋。

周囲を見渡せば、三人仲良く同じベッドで寝ている文月とPT小鬼群達の姿が見える。

「うーん、あれは本当にオレの夢に入り込んだ球磨の仕業だったのかなあ？単に慣れない環境で変な夢見ただけじゃないのか？夢に入るとかそんなことが現実になり得るのか？」

着替えを済ませた天龍は欠伸をしながら、文月達を起こさないようにそつと小屋から出る。

「天龍、おはようクマ〜！」

「おはようございます。」

球磨型の小屋からは球磨と大井が姿を現した。

「よう、おはようさん！」

「あつ、そうだ！タイミングもちょうどいいし、天龍に面白いモノ見せてやるクマ！」

「面白いモノ？」

「大井く、隣に来るクマ。」

「はい？」

面白いモノを見せると言った球磨は、大井を呼ぶ。

何のことか、心当たりは全くないものの取り合えず言われた通りに球磨の隣に並ぶ大井。

「えいつー！」

球磨は何を思ったか、大井の手の甲を思いつきりつねり上げる。すると次の瞬間……。

「あゝっ♥あゝあゝくくっ？んっ♥んっ♥」

大井は恍惚の表情を浮かべながら膝をガクガクさせ始める。

目の焦点もちゃんと合っているのか怪しく、心ここにあらずといった感じである。

「どうクマ？面白いクマ？」

「お、おう……。」

一方で朝っぱらから急にそんなものを見せられた天龍は面白いどころかドン引きである。

「あゝっ♥あゝっ♥くうっ♥……ふう………球磨姉さん何するんですっ!!」

ゴチン!!

数回ビクビクと全身を震わせた後に、正気に戻った大井は容赦なく球磨の脳天に拳骨を振り下ろす。

「あ痛ーっ!!天龍、大井が本気でぶったクマ!」

「当たり前です!っっていうか何で球磨姉さんが私の弱いところ知ってるんですか!?!」

(そっういや夢の中で大井を性的に開発したとか言ってたな……。)

頭を押さええうづくまる球磨と、本気で怒る大井。

そんな二人のやり取りを眺めながら夢だけど夢じゃなかった、夢で終わらせたいと内心で頭を抱える天龍なのであった。

こうしてモガ鎮守府での研修を終わらせた天龍は、潮風丸の交易船に乗りクロオビ鎮守府への帰路に着いた。

「潮風の香りが心地良いゼヨ！」

「はあ〜〜。」

「どうしたゼヨ、疲れた顔でため息なんか吐いたりして。そんなに研修キツかったゼヨ？でも美味しい空気を吸えば気分も爽快ゼヨ、リフレッシュゼヨ！」

呑気な潮風丸を尻目に天龍は今回の研修を思い出す。

自分の鎮守府では得られない貴重な体験が多く、特に他所の狩娘との合同狩猟は間違いなく天龍を狩娘として一步成長させただろう。

だがそれ以上に今回はくたびれることの多い研修だった。

当たり前のようにデカイ熊を連れて狩猟に赴く狩娘に、自分の妹に意味不明な洗脳ソングを歌わせる狩娘、挙句の果てに起きて早々に自分の妹の破廉恥なシーンを他人に見せてくる狩娘……あれ、これ全部球磨じゃね？

とにかく色々と気が休まらない研修だった、しかし天龍が一番疲労を感じたのは上記のことではない。

「ずっと夢を見ていたせいかな眠りが浅くて辛い……。何で球磨は平気そうにしてんだよ、おかしいだろ？」

「ゼヨ？」

一晩中夢を見続けた天龍は疲れが取れておらず、ぐったりとしている。

一方で同じく夢を見せ続けた球磨は何事もなかったかのようにピンピンとしていた。

球磨に振り回され続けた今回の研修を振り返り、天龍はこう誓うのであった。

「次にモガ鎮守府に行くときは絶対に球磨がないときに行こう！」

ユーちゃんとヤーパン1

まどろみの中から意識が覚醒していく。

目覚めと共に自我が芽生え、それと同時に知識が流れ込んでくる。

周囲は未だ暗闇、だけど五感はしっかりしている。

私は誰だろうか？そしてここはどこなんだろうか？どうして周りは真っ暗なんだろうか？

そうだ、私は艦娘だ。そして私の艦種は……。

そんなことを考えている間に暗闇に光が差し込んでくる。

いや、これは扉が開かれているんだ。

それによってここがどこなのか何となく察しが付いた。

だったら私が最初に言うセリフも決まっている。

「ドイツ海軍所属、潜水艦U-511です。ユーとお呼びください。少し遠出してきました。よろしくお願いします……。」

目覚めたユーが初めて目にしたのは、三度笠を被った若い女性だった。
ほっそりとした身体に、絹糸のように艶めく長い青髪。

見た目麗しい艦娘達と比べても、負けず劣らず愛らしい顔つき。

お世辞にも胸があるとは言えないがその代わりに安産型のお尻をした、スレンダーなスタイルの美人がユーのことをじっと見ていた。

次に周囲を見渡してみればここはコンクリート打ちっばなしの薄暗く狭い部屋で、雑に積まれた段ボール箱や出しっばなしの工具が目

それらからここは工廠なのだと当たりを付ける。

「……………」

「えっと……あ、あなたがユーのアドミラル……つまり提督ですか？」

ひたすらこちらを見続けてくる女性に気後れしつつも、勇気を出して話しかけるユー。

「キヤー！何この子すっごく可愛い！お人形さんみたい！」

「むぎゅ!？」

次の瞬間、女性は破顔してユーを抱き締めると思いつきり頬擦りを始めた。

「あ、あのっ!？」

「えへへ〜！嬉しいなー、嬉しいなー！こんなキュートな子が来てくれるなんて幸せ〜！」

女性の突然の奇行にユーは目を白黒させながらもなんとかコミュニケーションを図ろうとするものの、ユーを愛でることに夢中の女性には聞こえていない。

「あーっ！やっぱりこうなっただち。ほらトモちゃん、早く離して。ユーが困ってるでち。」

女性の後ろからひよこっつと姿を現したのはピンク色の髪をした潜水艦伊58、通称ゴージャである。

「あつ、ゴージャ！見て見て！新しい仲間が増えたよー！それもこんなに可愛い子ー！」

「それは分かったから、早く離すでち。このままじゃ話が進まないよ？」

「ゴージャもしかして妬いてるの？安心して、ゴージャもとっても可愛いよー！」

「わぶっ!?!そうじゃないでち!!離すでちーっ!!」

ユーを離れたかと思いきや今度はゴージャに抱き着く女性と、ジタバタと暴れるゴージャ。

このやり取りは10分近く続いた……。

「ユクモ鎮守府にようこそー。私がここの提督だよ。私のことは気安くトモちゃんって呼んでいいからねー。」

「アド……提督?」

「違ーうート・モ・ち・ゃ・ん!!」

「と、トモちゃん?」

「イエーース!!」

ユーとゴーヤを散々撫で練り回した後、ようやく自己紹介を始めた提督改めトモちゃん。

「トモちゃん、ユーはドイツの子だからイエスじゃないよ。確かヤーでち。」

「ヤー?どいつの子?ゴーヤ、どいつって何?誰のこと?」

「そのどいつじゃなくて国のことでち、ヨーロッパのドイツ!!そんな

ベタベタのダジャレなんか聞きたくないでち！」

「えっ……う・あ、ああ、そのドイツね？も、もちろん分かってたよ！私これでも学生時代は友達に天才トモちゃんって呼ばれたこともあるんだからね！今のはただのお茶目だよー！」

（それ絶対に天才じゃなくて天災でち……。）

ゴーヤのツツコミに一瞬ワケが分からないという顔をしたものの、ようやく意味を理解したのか取り繕うトモちゃん。

「どうやらダジャレではなく本気で勘違いしていたらしい。」

「それにしてもユーって確か建造では手に入らないはずでち。トモちゃんはどうかやってユーを造ったの？」

「えっ、そうだったの？」

「提督なのにそんなことも知らないの!?!ユーは通常では手に入らない珍しい子なんでちよ!!」

「そんなこと言われたって、普通に建造したら完成したんだよ？」

「こ、これが天災たる由縁……。」

「えへへ、天才だなんて。そんなに褒めたって何も出ないよお。でも強いて言うならここはカリユード諸島だからね、常識は通用しないんだよ。常識なんか投げ捨てるー！」

「そもそも投げ捨てるだけの常識を持ってないでち！」

ユーを差し置いて盛り上がるトモちゃんとゴーヤ。

このやり取りも10分近く続いた……。

「ユーちゃん、ほったらかしにしちゃってごめんね。」

「あっ!?!いえいえ、大丈夫です。」

「塩対応!?!やっぱり怒ってる? ほら、ゴーヤも早く謝って!」

「いや、どう考えてもゴーヤは悪くないでち……。」

さつきからずっと自分そっちのけでコントのようなやり取りを続けているトモちゃんとゴーヤ。

まだ造られたばかりで状況を全然把握していないユーは訳も分からずそれをぼけーっと見ていたのだが、急に会話を振られたことでつい適当な返事をしてしまい、それを怒っているんだと勘違いしたトモちゃんは慌ててゴーヤにも謝らせようとする。

「いや、本当に怒ってないよ! ユーはちよつとびっくりしただけなんです!」

このままでは会話が進まないと思ったユーは強引に話を進めることにする。

「ユーはドイツ生まれのドイツ育ちだからヤープンには詳しくありません。だからたくさん迷惑を掛けると思うけど鎮守府のこと、そしてヤープンのことを色々教えてもらえると嬉しいです!」

「うんうん、任せて! ユクモ鎮守府はユーのことを歓迎するよ! 鎮守府のこともヤープンのこともたっくさん教えてあげるからね!」
「ダンケ!」

「これからよろしくね!……とところでゴーヤ、ちよつといい?」

「なんでちっ？」

ようやく話が進んだことに安堵するユーを他所に、トモちゃんとゴーヤはひそひそと内緒話を始めた。

「あのね、だんけとヤーぱんって何？」

「ゴーヤだってドイツ語に詳しいわけじゃないから何でもかんでもは分かんないよ。……っていうか意味も分かんないのにヤーパンについて教えるって安請け合いましたの？」

「ごめんねー。」

「仕方ないでちね……。ダンケはありがとうって意味だよ。」

「うんうん、それでヤーぱんは？」

「ヤーパンは……うん？ドイツ語でヤーはイエスのことだったから、直訳するとイエスパン？」

「イエスパン？何それ？」

「言ってみただけでち。イエスパン、自分で言っておいてなんだけど意味不明でち。話に脈絡がなさ過ぎだし、そもそもドイツ語だとパンはパンって呼ばなかったような……？あーもう、はっちゃんがいてくれたらドイツ語で悩むことはなかったのに。」

「ユクモ鎮守府に伊8はいないもんねー。」

ゴーヤはトンチンカンな推理をしているがパンはポルトガル語であり、ドイツ語だとブロット (bröt) である。

そもそもパンは英語だとブレッド (bread) になるのでイエスとパンはつながらない。

ゴーヤはイエス (yes) がヤーだということは知っていたが、ヤーの綴りが ja ということまでは知らなかったようだ。

知っていればヤーパンの綴りが Japan だということに気付けたのに……。

Japan、つまり日本のことである。

そもそもユー本人に直接聞けばいいのではという当然の疑問が出るが、ゴーヤはトモちゃんのテンションに付き合ったり新しい仲間の加入やらドイツ語の登場というイベントの連続でそこまで頭が回っていないのである。

ちなみにトモちゃんには最初からユーに聞くという発想自体が無いのであった。

「それではユーちゃんのユクモ鎮守府着任記念として、私からのプレゼントだよー！」

そう言つてトモちゃんがユーに渡したのは旧スク水、いわゆるてとく指定の水着である。

ちなみにセーラー服の部分はない、スク水単品である。

「えっ？でもそれって確か改造されたユーが着るものだよ？ユー改造どころかまだここに来たばかりだよ？」

スク水を見たユーは困惑を隠せない。

ちなみにトモちゃんが差し出した水着はゴーヤと同じデザインのものであり、呂500デザインのものですらないのだが、ユーも自分が改造されると大体そんな感じになると大雑把に知っているだけで、具体的にどうなるかは知らないので水着が違うことには全く気付いていない。

「あ、そっかー。狩娘のお迎えって久しぶりだから忘れてたよ。」

「誰もが通る道でち。」

「??？」

よく分からないといった顔をしたユーと、それを見て懐かしいものを見る顔をするトモちゃんとゴーヤ。

「あのねー、ここはカリユード諸島って言う島なんだー。」

「なるほど、ここはヤープンのカリユード諸島。」

「……うん？まあいいや。そうそう、ここはヤープンのカリユード諸島！そしてカリユード諸島の艦娘は船の力ではなくて狩人の力で戦う狩娘っていう存在になるらしいんだ！」

「えつと……らしいってっ。」

「ごめんでち、肝心のトモちゃんがその辺あんまり理解してないの。とにかくユーは船の艦娘じゃなくて狩人の狩娘としてこの世に生を受けたと思ってもらえばいいでち。」

「そ、そんなことないよー！私だってちゃんと分かってるもん！カリユード諸島がヤーパーンで、水着が艦娘で、着任記念が狩人だつてー！」
ゴージャの解説にトモちゃんは意味不明な言い訳をしているが、ユーはそれに見向きもせず目を見つめると自分の胸に手を当てて一度深呼吸をする。

すると自分の中に船の力とはまた違う、熱く滾る未知の力を感じ取った。

「狩娘……。なるほど、今のユーはUボートの艦娘じゃなくて、イエーガーのゼーレを持った狩娘なんだね？」

「えつと……。そう、その通り！（イエーガー？ゼーレ？あれだよ、マングのキャラクターの名前やアニメに出てくるの組織の名前だよ？ユーちゃんってマングやアニメが好きなのかな？外国人って日本のオタク文化に興味ある人多いもんね。」

またしてもドイツ語が分からないのに適当に返事をするトモちゃん。

イエーガーは狩人、ゼーレは魂のことであり、ユーは割とそのまんななことを言っている。

狩娘は獲物を屠ることはするが、決して人類を補完したりはしないのだ。

「そして狩娘は狩人だから艦娘と違って艦装を持ってないし、製造直後は服も下着以外何も着ていないんだよー。」

トモちゃんに言われて自分の姿を確認したことにより、ようやく艦装もウエットスーツも身に着けていないことに気が付いたユー。

今のユーが着ているのはドイツの民族衣装の一つであるディアンドルによく似た下着、いわゆるMHXの女性用インナーType7である。

「というわけでコレ着てねー。」

「え、(´▽｀)で？」

「大丈夫大丈夫、一瞬で着れるから！」

改めてユーに水着を渡すトモちゃん。

この場で着替えるように促すトモちゃんに驚くユーだったが、言われた通りに着替えてみれば着替えは文字通り一瞬で終わり、更には最初に着ていたインナーまで消えていた。

「それじゃあゴーヤ、ユーにこの鎮守府を案内してあげて。私はちよつとやることがあるからねー！（棒）」

トモちゃんはそう言うや否や、明らかに挙動不審な歩き方で工廠から出ていく。

最後のセリフもどう聞いても棒読みであり、素人目に見ても何か隠しているのがバレバレだったが、服が一瞬で変わったことに気を取られていたユーは全く気付かない。

「やれやれ、トモちゃんにも困ったもんでち。んじや、鎮守府案内するから付いてきてね。」

隠し事の下手なトモちゃんにため息を吐きつつも、ユーを連れて工廠を出るゴーヤ。

テレビで演技してた時はあんなに上手だったのに、それ以外で演技させるとどうしてあんなにヘタなのか？

トモちゃんはクロス・ダオラでヒロイン『ルリ』を演じており、作中では既にネオウェポンズに囚われているので主人公モンドの回想シーンくらいでしか出番はないものの、儂い雰囲気をした薄幸の美少女として人気がある。

そんなルリの正体がこんなポンコツ提督だと知られたら、ファンは幻滅するのではなからうか？

そんなことを考えつつもゴーヤはトモちゃんに与えられた任務を遂行すべく歩き出す。

そういえば自分が着任した当時もこんな感じだったなあ、なんて懐かしさも感じながら……。

ユーちゃんとヤーパン2

「そしてこの部屋が倉庫でち。ここには色々物が置いてあるから、必要になったら取りに来るといいよ。」

ゴーヤの案内で鎮守府のいたるところを案内されるユー。

しかしその案内は意図的に特定のエリアを避けるように案内されており、そのことにはユーも気が付いていた。

それについてユーが質問すると、ゴーヤはそれは後でのお楽しみと誤魔化した。

何ともチグハグな建物、今まで鎮守府を見て回ったユーの率直の感想がそれだ。

全体的な作りはヤーパンの古き良き旅館を彷彿とさせる上品な木造建築であり、障子や畳を使用した部屋も数多く見られる。

ヤーパン特有の落ち着いた建築様式は、これから新しい住人となるユーの心も落ち着かせてくれるものだった。

しかし美しいのは表向きな場所だけだ。

人目に付きにくい部分や関係者以外入れない部屋などは素人目にも作りが雑であり、まるでハリボテである。

綺麗な部分と雑な部分がパズルのように組み合わさっており、まるで出来の悪いパッチワークのような印象を受ける。

この鎮守府はどうしてこんな妙な作りになっているんだろう？

「今案内出来る範囲は大体このくらいでち。それじゃそろそろいい時間だし、これからとっておきの場所に連れて行ってあげるね！」

ユーは疑問を抱くものの、質問をする前にゴーヤはユーの手を引っ張ってズンズンと広縁を進んでいく。

広縁から見える外の景色は徐々にオレンジ色に染まってきており、

夕方になりつつあることが見て取れる。

やがて辿り着いたのは二枚の障子により閉められた部屋。

障子に映る陰から部屋に誰がいるのは分かるけど、誰がいるのかまでは分からない。

「それではお一人様ごあんない！」

ゴーヤの声と共に二枚の障子が内側から開かれる。

「「「ユーちゃん！ユクモ鎮守府へようこそ〜！」」」

ゴーヤに押されて部屋の中に入ったユーを出迎えたのは、パンツという音と共に左右から飛んでくる紙吹雪とリボン。

畳張りの部屋の中央には大きな座卓が置いてあり、左右にそれぞれ狩娘達が座っている。

ユーと向かい側のお誕生日席に座っているのは提督のトモちゃんである。

「こ、これは？」

「これはね、ユーちゃんの着任のお祝い！ユーちゃんのためにみんなで御馳走を用意したんだよー！」

突然のことに戸惑うユーだが、その疑問に笑顔のトモちゃんが答える。

ユーが座卓に視線を向けると、そこには美味しそうな料理が所狭しと並べられている。

「ひよっとしてこれってヤーパンのおもてなし文化？」

「そうそうそれそれ！ユーちゃんおもてなし知ってるんだ！これはユクモ鎮守府のみんなからのユーちゃんへのおもてなしだよー！ユーちゃんの歓迎会！」

「ほらっ、早く座るでち。」

自分の歓迎会と言われて目をパチクリさせるユー。

ゴーヤはそのままユーの背中を押してトモちゃんの向かい側のお

誕生日席に座らせた後、自分はトモちゃんの近くの空席に座った。

「さーて、それではユーちゃんの歓迎会をはっじまっるよー。まずは自己紹介から始めよっか!」

「はいはい、イクなの!新しい潜水艦仲間が後輩になってくれて嬉しいのね。格好もイクとお揃いで嬉しいの!」

トモちゃんの提案に真っ先に反応したのは伊19ことイク。

青紫色の髪をトライテールにまとめた、立派な胸部装甲を持つ潜水艦娘。

格好は旧スク水一枚であり、今のユーと同じである。

イクはユーから見て左手前の席に座っており、片手には使用済みのクラツカーを握ったままである。

「しおいです、よろしくね!」

続いて自己紹介をしたのは伊401ことしおい。

小麦色の健康的な肌と茶髪のパニーテールが特徴的な潜水空母。

しおいはユーの右手前の席、イクの向かい側に座っており、彼女の手にも使用済みのクラツカーが握られている。

どうやらユーにクラツカーを鳴らしたのはこの二人のようであった。

「ウシシシシ、オトモ連装砲ノむるれんダ!」

「オトモ連装砲?」

次に自己紹介をしたのはイクの隣に座っている、首から三度笠を掛けた連装砲くん。

トモちゃんの服装とよく似た服を着ており、よく見れば笠のデザインもお揃いである。

だがオトモ連装砲という言葉に聞き覚えのないユーは首を傾げる。「オトモ連装砲っていうのはねー、狩娘のお手伝いとしてハンターをやってる連装砲ちゃんや連装砲くんのことだよー。」

「ヨロシクナ!」

「ヤーパンでは連装砲までヤクトするんだ……。凄いですね、流石は

ブシドーの国。」

「ここにいる全員がヤーパン？ヤクト？と頭にクエスチョンマークを浮かべているが、特に突っ込まれることはなく話は続いていく。

「同ジクオトモ連装砲ヲヤツテルヒラオカウラ。」

「おいの隣、むるれんの向かいに座っている金色をしたひょうたんのような物体が話し出す。

「ひらおかうら？……っていかこれ連装砲なの!？」

「まず謎の物体が喋ったことに驚き、そしてその正体が連装砲であったことに二度驚くユー。」

「これってヒドイなー。ヒラオカはむるれんとコンビで働いているユクモ鎮守府自慢の連装砲ちゃんなんだよー。」

「ウララ、知識ナラ誰ニモ負ケナイウラ！」

「これが連装砲ちゃん!?!と呆気にとられるユー。」

よく見れば露出している腕から中身が連装砲であると辛うじて分かるが、それ以外は全て金色に覆われており、初見でこれを連装砲と見抜くのは無理がある。

ましてやひょうたんの頭部には子供の工作のような雑な覗き穴が開けられているだけであり、中身が連装砲ちゃんか連装砲くんかどうかなんて見分けの付けようもなく、また表情が無いのだから何を考えられているのかも全く読み取れない。

そもそもつるんとした頭部には、連装砲の特徴である二対の砲塔部分が見当たらない。

「中身はとんでもないことになっているんじゃないかと、ユーは内心で恐れおののく。」

「次は私の番ですね。秘書艦の大鯨です、よろしくお願い致しますね。」

「ユーの内心などつゆ知らず、むるれんの隣の大鯨がぺこりと頭を下げる。」

大鯨の服装はお馴染みのセーラー服にクジラエプロン姿ではなく、ピンク色の頭巾のような帽子と、同じくピンクの羽織に膝丈までのもんぺのような変わった服装をしていた。

「この服が気になりますか？これは撫子シリーズと違ってトモちゃんの着ているユクモノシリーズと並んでユクモの伝統衣装……だそうですねよ。」

「ユクモの伝統衣装？」

「そう、このユクモに古くから伝わる装備なんだよー！」

なるほど、ヤーパンのカリユード地方にあるユクモなんですね……と、ユーは若干ズレたことを考える。

ユーの中ではドイツのバイエルン州のミュンヘンといったような感覚なのだろう。

「もう既に教えたけど、ここは空気を読んで自己紹介するね。ゴーヤだよー！」

ヒラオカの隣、大鯨の向かいに座ったゴーヤが笑顔で手を振る。

「そして私がトモちゃん！ユクモ鎮守府の提督だよー！」

最後に大鯨とゴーヤに挟まれた、ユーの対面のお誕生日席に座っているトモちゃんが両腕を広げて既に分かり切っていることを自慢げに言い放つ。

「私達ユクモ鎮守府はユーちゃんを歓迎します！それではユーちゃんどうぞー！」

「ダ、ダンケ！ユーです。まだ来たばかりで何も分からないけど、皆と仲良くなつてここの文化に馴染めたらいいなって思います。よろしくお願い致します。」

ユーの自己紹介、それを狩娘達は笑顔と拍手で迎え入れた。

「さて、それでは前置きが長くなつたけどそろそろ食べよつか。せつかくの料理が冷めちゃうからねー。」

トモちゃんがそう言うと言つて狩娘達は胸の前で手を合わせた。

ユーもみんなが手を合わせたのを見て真似して手を合わせる。

「」「」「いただきます。」「」「」

「い、いただきます？。」

「久々のご馳走なのね！」

「もうお腹ペコペコでちー！」

みんな思い思いの料理に手を付け始める。

山菜の天ぷら、ドスマツタケのお吸い物、サシミウオのお刺身、ガー
グアのタマゴの茶碗蒸し、鎮守府の畑で採れた野菜のお漬物、ユクモ
温泉たまご、特産タケノコの炊き込みご飯、デザート白玉ぜんざい。
どれも美味しそうな和食のフルコースである。

しかしユーは食べようにもまごまごしたまま手を出さない。

「え、えつと……。」

「あれ？ユーちゃん箸使えないの？」

「……そうなんです。」

ユーの様子がおかしいことに気付いたしおいは、ユーが食べられない理由をすぐさま察する。

「気が利かなくてごめんなさい、海外の方には難しいですよね。
フォークやスプーンもあるから大丈夫。テーブルマナーなんて気に
しないでいいんですよ、料理はおいしく食べるのが一番です！」

そのやり取りを見ていた大鯨は立ち上がってキッチンの方へと駆
け出していき、フォークやスプーンを手に戻ってくる。

「はい、こちらをどうぞ。」

「 Danke. 」

「いえいえ、それではどうぞ召し上がれ。」

ようやく使える食器を手にしたユーはおっかなびっくり目の前の
料理に手を付ける。

「……………美味しい！」

「でしょー？大鯨の作る料理はすっごく美味しいんだよー！」

ユーは和食の味に目を輝かせ、パクパクと夢中で料理を頬張る。

そして自分で作ったワケでもないのに自慢げに無い胸を張るトモ
ちゃん。

「このテンプーラっていう食べ物、外はサクサクしてるのに中はふん
わり！こんなの初めて食べました！」

「天ぷらだけじゃないよ、こっちも食べてみてー！大鯨は本当に料理が上手なんだから！」

「「「「「ちそうさまでした！」「「「「「

「「「「ちそーさまでした？」

食事が終わり、再び胸の前で手を合わせる狩娘達。

ユーももう一度真似をして手を合わせる。

「はい、お粗末様でしたー！それでは私は後片付けと洗い物をしてるから、皆さんは先に行っていていいですよ。」

「えーっ？大鯨も一緒に行こうよ。」

「しおいの言う通りなのね、大鯨も一緒じゃないとつまんない！」
いつの間にか持つてきたのか、お盆を片手にお椀の片付けを始める大鯨。

しかしそれに狩娘達が待ったを掛ける。

「でも時間が掛かりますよ。まだユーちゃんに紹介するとっておきがあるでしょう?」

「ダツタラオイラトヒラオカガ代ワリニヤツテヤルゾ!」

「ウラツ!?ボクモヤルウラ?」

「だったら、お言葉に甘えちゃいましょうか?」

「オウ、任せトケ!」

「ムムム……仕方ナイウラ。」

「それじゃあユクモ鎮守府の狩娘全員でレッツゴーだねー!」

オトモ連装砲達が家事手伝いを申し出たことにより、手持ち無沙汰になった大鯨。

そんな大鯨もメンバーに加えて、意気揚々と歩き出すトモちゃん。

「ほら、ユーも付いてくるでち。これから凄いものが見られるよ?」

「凄いもの?」

「ジャーン!これこそユクモの名物、温泉だよー!」

「温泉、これが本物の温泉……。ヤープンの文化として温泉が有名なのは知ってたけど、実物を見るのは初めてです。」

トモちゃんに連れて来られた先、そこにあっただのは湯気の立ち昇る温泉。

「凄いでしょー?ユクモ鎮守府のある土地はなんと地下から温泉が湧き出てるんだよー!だからここでは源泉かけ流しの天然温泉が楽しめるんだー!」

「天然温泉?かけ流し?」

トモちゃんの説明でここに温泉が湧いているということは理解したものの、天然だとか源泉だとか知らない単語が出てきて首を傾げるユ一。

「天然温泉というのはですね、成分を後から追加していない温泉のことですよ。温泉というのは簡単に言うとは特別な成分が溶け込んだお湯のことなんです。その成分を人の手で足したものが人工温泉、最初から溶けているのが天然温泉になるんですね。定義上では水道水に入浴剤を入れたものでも温泉になるわけなんです、でもそんなのじゃ味気ないし風情もない。だからこそ天然温泉は人の手が入っていない自然そのままの温泉ということですね。」

「かけ流しというのはお湯の再利用をしないことであち。施設の大きなお風呂では一度人が使ったお湯を機械で循環させて消毒したり加熱することで何度も使い回すこともあって、これを循環式って呼ぶんだ。でも使い回していると温泉の成分が減っていくし、加熱消毒でコストが掛かるし、何より使い古しのお湯ということで入る人はあんまりいい気分がしないでしょ？それに対してかけ流しは常に新しいお湯が供給されていて、お湯はずっと新鮮なままなんだ。当然水をたくさん使うけど、ここは地下から天然の温泉が湧き出しているからそのデメリットはあってないようなものでち！ユクモの温泉はいつでも最高の状態でち！」

それに対して大鯨とゴーヤが補足する。

「源泉かけ流しの天然温泉がある鎮守府なんてほとんどないんだよー！そしてそんな数少ない鎮守府が何を隠そうこのユクモ鎮守府なのだ！ユ一ちゃん、初めての温泉たつぷりと楽しんでねー！」

「さあさあ、イクと行くのね！」

「みんなでどぼーん！ しに行こっ！」

「えっ？わわっ、水着が!?!」

イクとしおいに手を引かれて温泉マークの描かれた暖簾をくぐるユ一。

次の瞬間、今まで着ていた水着がタオルのセットに変化する。

一緒にくぐったイクとしおいの服装もタオルになっており、振り

返ってみれば後から続いてきたゴーヤと大鯨の服も一瞬でタオルになっっていた。

「驚いたー？これはユアミ装備っていうんだ。」

最後にタオル改めユアミ装備に身を包んだトモチヤンが現れる。

「このユアミもユクモに伝わる伝統的な入浴衣装で、カリユード諸島特有の早着替えのシステムと併用することであつという間に入浴準備が出来ちゃうんだ！その使いやすさからユアミはカリユード全ての鎮守府で入浴時に使われてるんだよ！ユクモの伝統衣装がみんなに認められてるなんてすごいよねー！」

再び自慢げに無い胸を張るトモチヤン。

「それじゃあみんなで一斉にどぼーん！」

「」「どぼーん！」「」

「ど、どぼーん……。」

トモチヤンの合図とともに一斉に飛び込むユクモの仲間達、飛び散る飛沫。

そして口ではどぼーんと言いつつも、恐る恐るゆつくりと湯に入るユー。

「あつ……。」

「どお？あつたかいでしょ？気持ちいいでしょ？あつたまるでしょ？」

「う、うん。凄くいい気持ち。でも……。」

「うん？どうしたの？」

初めての温泉に表情の変わったユーを見て、嬉しそうなトモチヤン。

しかし明るかった表情はすぐに消え、ユーは顔を曇らせる。

「こ、こここまでしてもらっていいのかな？」

「え？何が？」

「だってユー、まだ何もしてないんだよ？鎮守府になんの貢献もしていない。なのにこんなによくしてもらっていいのかな？ご馳走してもらって、温泉に入れてもらって、それにみんなすごく親切にしてくれて、ユーにそんな価値があるのかな？」

自分に自信が持てず暗く沈んだユー、トモちゃんはそんなユーを優しく抱き締める。

「ユーちゃんが活躍しそうだから、珍しい潜水艦だから、みんなそんな理由で親切にしたんじゃないんだよ。みんなユーちゃんがここに来てくれたことが嬉しい、たったそれだけの理由なんだ。ユーちゃんはもうユクモ鎮守府の仲間で、私達の家族なんだから！」

「家族？そっか、ユーはもうみんなのファミリアなんだね？」

「ファミリア？家族だし多分ファミリアのことだよね？」その通り！そして家族を大切にすることに理由なんてある？ないよね！だから気にしなくていいんだよー！」

「ダンケ……。」

とてもあつたかい、それは温泉に入っているからだけじゃない。

こんなあつたかい鎮守府の、あつたかいファミリアのために頑張ろう。

そう心に決めたユーなのであつた。

ユーちゃんとヤーパン3

「今日もいいお湯だったねー。ユーちゃんはとうだった？身体の芯まであったまった？」

「うん、最高だった！」

ホカホカと全身から湯気を上げつつ廊下を歩くユクモ鎮守府御一行。

ユー達は洗いつこをしたり、お湯の掛け合いをしたり、湯船にゴムのアヒルならぬゴムのガーグアを浮かべたりと思い思いに温泉を楽しんだ。

「それじゃもう特にすることないし、そろそろ寝よつか？」

「えっ、もう!?!」

いきなり睡眠を提案してきたトモチヤんに驚くユー。

先程夕食を食べたのが夕暮れ時で、今まで温泉に入っていた時にようやく日が落ちた。

寝るにはいささか早い時間である。

「びつくりするよね？でもここの鎮守府だとみんないつもこのくらいの時間に寝てるんだよ。」

「起きていても特にすることないのね。それにここの鎮守府は早寝早起きが基本なのね！」

「まあ明日の準備とかあるからすぐさま寝るわけじゃないけど、それが終わったなら結局寝るだけでち。」

次々にここは早寝だと説明する狩娘達。

「それじゃあ寝室までご案内しますね、そこで寝巻きに着替えましょう。」

そして大鯨がユーを案内しようとする前に出た……………丁度その時。

カンカンカンカンカンカンカンカン!

突如として鎮守府中にけたたましい鐘の音が鳴り響く。

「えっ!? な、何?!」

突然の騒音にビックリしたユーは動揺を隠せず周囲をキョロキョロと見渡す。

それに対しゴーヤ達はハツとした顔をしたのち、全員揃って同じ方向へと走り始めた。

「あつ、みんな待ってー!!」

そしてワンテンポ遅れてトモちゃんも走り出す。

「……………ハッ!? ま、待って! ユーも行きます! 置いてかないで!

最後にようやく我に返ったユーもトモちゃんの背中を追って走り出した。

走り続けて辿り着いた場所は鎮守府の玄関入り口、そこで全員が啞然とした表情で空を見上げていた。

釣られてユーも空を見上げてみれば、そこにあつたのは波のよういうねりを打つ、稲光を伴った黒く分厚い雲。

ビュウビュウと強い風も吹いており、湿った空気の匂いも伝わってくる。

「えっ？なんでこんなに天気悪いの？」

先程温泉に入っていた頃は雲一つない、穏やかで美しい星空が見えていたのをユーは覚えている。

季節によって天気の変わりやすい日があるというのは知っているが、これはいくら何でも唐突過ぎる。

温泉に入ってからまだ10分も経っていない、その短時間でどこからあれだけの量の雲がやって来たというのか？

「まさか、よりにもよって今日だなんて……。皆さん、必要最低限の物を持ったら急いで例の場所に行つて下さい！」

大鯨の宣言と共に再び走り出す狩娘達とトモちゃん。

「ユーはゴーヤと一緒に来るでちー！」

状況が呑み込めていないユーの片手を掴んでゴーヤも駆け出し、引きずられるようにユーも駆け出した。

「えつとえつと、何が起きたの!?!」

「説明は後でち、今は本当に時間がないの!」

ゴーヤはユーを連れたまま自室に飛び込むと、置いてあつたポーチを掴んで大慌てで中に物を詰め込んでいく。

「油断したでち!こんなことなら前もって用意しとくんだったでち!」

ゴーヤはある程度私物を入れたポーチを身に着けると、再びユーの片手を掴んで走り出す。

「あ、あのっ!? 部屋にまだ物が残ってたけど?」

「全部持っていく時間なんてないし、これから行くところに荷物を全部置くスペースもないでちー!」

ユーは残された物のことが気がかりだったが、ゴーヤはそんな時間も場所もないと一蹴する。

そのまま走り続けた二人はやがて鎮守府の裏口まで到達した。

「ちよつと危ないけど一旦こっから外に出るでちー!」

裏口から出てみれば風はさつきよりも強くなっており更に雨まで降っているが、ゴーヤはそんなこと意にも介せず外に飛び出し、ユーも戸惑いながらも後に続く。

「ハハハでちー!」

辿り着いたのは金属製の小屋、いわゆるシエルターであった。

夜の帳と降り続く雨によって視界が悪く気付けなかったが、どうやら目的地は裏口から数メートル程度しか離れていなかったよう想像よりも早く到着した。

「このシエルターは奮発して素材にエルトライト合金を使った特注品！もの凄く高かったけど、その代わり中に入れば安心でちーほら、ユーも早く入って！」

「お、お邪魔します……。」

シエルターというだけあって壁や扉は重く頑丈な作りとなっているが、内部は八畳程度の広さで窓すらない。

八畳と言うとそこまで狭くは聞こえないかもしれないが、ここには鎮守府のメンバーが全員集まることになっており、更には洗面所や荷物置きなども込みでの八畳なので普通に狭い。

中には既にイクとしい、むるれんとヒラオカ、そして尖った耳の見慣れない妖精さんが十人前後くらい待機していた。

全員少しずつ荷物を持っており、ソワソワと落ち着かない様子である。

「あれ、トモちゃんは何？トモちゃんはまだ来てないでちか？」

「ちよつと遅いけど、しっかり者の大鯨と一緒にいるから心配いらないのね。ほら、噂をすれば……。」

ゴーヤは未だ姿の見えない大鯨とトモちゃんを心配するが、丁度そのタイミングでシエルターの扉が開き、大鯨とトモちゃんが入ってきた。

「とうちやーく!!全員いる？いない人は返事してねー！」

「いない人は返事しませんよ、とはいえ全員いますね。では扉を施錠します！」

大鯨はシエルター内のメンバーを確認すると、扉に嚴重なロックを掛けた。

開いた扉から見えた外の天候は先程よりも更に荒れており、二人とも全身ずぶ濡れになっている。

「いやー、濡れた濡れた。ぶえつくしよいー！」

洗面所から取ってきたタオルで頭を拭きながら持ってきた荷物を下ろすトモちゃん。

その荷物の量は、他の狩娘達の倍以上はあった。

「そんなに持つてこなければもう少し早く避難出来たんですよ！それにそんなに多くの荷物、どこに置くつもりですか！」

「だって〜！みんなの記録が残ったアルバムとか大事でしょー！」

「だからって自分の身を危険に晒してどーするんですか!？」

滅多に怒らない大鯨も今回ばかりはプリプリと怒る。

「あの、ちよつといいかな？」

おずおずと片手を上げて発言を試みるユー。

そのまるで授業中の学生のような動きに、怒っている大鯨や怒られているトモちゃんも含めた全員の視線が集まる。

別にそんなことをしなくても普通に喋っているのだが、まだ着任してから半日も経っていない新人のユーはどのようなように会話を切り出しているのか迷っており、このような感じになったのである。

「さっきまで晴れていたのに、何で急に嵐になったの？それにみんな避難手馴れてたけど、いつもこんなことしてるの？」

「えつと……非常に言いにくいんだけど、ここユクモ鎮守府は大体月に一回は嵐に襲われるんですよ。そして見ての通り、唐突に嵐が起ります。天気予報や直前までの空模様なんて全く当てになりません。こんな感じでこの鎮守府は頻繁に嵐に襲われているので、裏手には防災シエルターなんてものがあるし、避難もやり続けていれば嫌でも上手くなりますよ。」

「月に一回!？」

大鯨の説明に対して、そんなことがあるのかと驚きを隠せないユー。

ユーもヤーパンは非常に台風が多い国だということは知っている。

だとしても月に一回、それも突然の嵐に見舞われるというのは流石に異常事態である。

「この嵐はね、天津禍津神が引き起こしているんだよ！」

「天津風？」

「違ーう！アマツマガツチ!!あのね、ユクモ鎮守府の近くには霊峰と呼ばれているとても高い山があるんだよ。そして霊峰の山頂付近には常に雨雲が渦巻いているんだー。その雨雲の中に潜んでいるのが何を隠そう、嵐を司る天空の神様アマツマガツチなんだぞー！」

突然電波なことを言い出すトモちゃん。

そんなトモちゃんの様子に、また始まったかと言わんばかりの表情をするゴーヤ達。

「アマツマガツチは嵐の神格、ユクモ鎮守府が突然嵐に襲われるのはアマツマガツチが自分の能力で嵐を生み出しているからなんだぞー！神様の異能で作られた嵐だからいきなり発生するし、誰も発生を予測出来ないんだよー！」

「神!?!レーホーという場所には本物の神がいるの!?!」

ヤーパンには八百万の神という考え方があるということをやーは知っている。

言葉の意味はよく分かっていないが、ヤーパンには他の国よりもたくさん神がいるそうさ。

800万柱もの神がいるなら近所の山にも神の一柱くらいいるのだろう。

「まーた適当なこと言ってるでち。ユーが鵜呑みにしたらどうするの?」

「嘘じゃないもん!私見たもん!!ホントだもん!!ユーは信じてくれるよね?私の体験談話したげるから!」

ゴーヤはそれをあっさりとは否定するが、トモちゃんは駄々っ子のように喚いた後、コホンと軽く咳払いをしてから語りだす。

そう、あれは私がユクモ鎮守府に着任するという記念すべき日に起きたことだった。

「わーっ！もう、なんだってこんな大事な日にこんな天気になるのー!?」

私は連装砲ちゃんが御者を務めるガーグアの荷車に乗ってユクモ鎮守府を目指していた。

その日は酷い大雨で山道はぬかるんでおり雨で視界も利かず、ときおり雷鳴も聞こえる。

他の日ならまだしも今日に限って悪天候に見舞われるなんて……と己の運の悪さを呪っていると、突然目の前に閃光と轟音を伴って雷が落ちてきた。

いや、それは落雷ではなかった。全身から青白い雷光を放つジンオウガだったのだ。

「ウオオオオオーーン!!!」

無双の狩人ジンオウガ、ユクモ周辺に生息する大型モンスターである。

基本的に深い森の奥や標高の高い山に生息しており、めったに人前に姿を現すことはない。

私も見るのはこれが初めてどころか、こんな生物が存在しているということすら今の今まで知らなかった。

実際、私はこの時点では謎の大型生物としか認知しておらず、後で調べたことでようやくジンオウガという名を知ったのだ。

「クワッ!」

「えっ? きゃあっ!」

天敵であるジンオウガに驚いたガーグアは体勢を崩し、それによって私は荷車から投げ出される。

「いったあゝ……ヒッ!」

泥まみれになりながら転がる私は硬いものにぶつかることでようやく止まる。

しかし私がぶつかったのはよりもよってジンオウガの太い足、鋭い鉤爪を備えた強靱な足は一振りで大木すら薙ぎ倒すだろう。

絶対的な捕食者の足元にいるということでは震え上がったが、ジンオウガにとって弱者である私は路傍の石に過ぎないのか目をくれることすらなく空へ向かって遠吠えを続けている。

「荷車は……あそこだ! ええいつ、男は度胸! 女も度胸! 48の狩技の一つ、トモチャンダイブ! やあーっ!」

崖下を走る荷車を見つけた私は覚悟を決めて飛び降りる。

いつジンオウガの気が変わって、こちらに襲い掛かってくるかも分からない。

そのくらいなら無理して崖から飛び降りた方が、まだ生存率は高そうだと判断したまでだ。

ちなみに狩技の数は日によって変わる。ようはその場のノリで適当に言ってるだけであり、そもそもこれは技ですらない単なるジャン

プである。

「ぐうっ!?生きてる?やった、私生きてるツ!!」

決死のダイブであったが、上手いこと荷車に飛び移ることに成功した。

着地の際の衝撃はクッション代わりになった荷物とおつきなお尻が軽減してくれたようだ。

それにしてもジンオウガは何に向かって咆えているのか、ふと気になった私はお尻をさすりつつもジンオウガの咆える先へと目を向けた。

そこで私は嵐を物ともせず雲をかき分けながら優雅に空を舞う天空の神を見た。

白と黒に塗り分けられた巨体をくねらせながら、艶めく羽衣をなびかせる雅な姿。

翼も無いのに自由自在に天翔けるその様は、古くから伝説に語られる龍そのもの。

ジンオウガが狼王ならば、あれは龍神。

王ですら悔しげに咆えるしかない、隔絶した力の差がそこにはあった。

「こうして私は無事に鎮守府に辿り着いたわけなんだけど、あの時見た龍のことが頭から離れなくて全然仕事に手が付かなかったんだよ。だから仕事をほっぽり出して色んな情報を調べた結果、とうとう古い文献に嵐の神アマツマガツチについての記述を見つけたんだー！」

トモチちゃんはこう言っているが今でも仕事の効率は今もなく、提督のくせにいてもいなくてもあまり変わらないというのは鎮守府全員の常識である。

いわゆる無能な働き者であり、提督のくせにお茶汲みや掃除などの雑用ばかりさせられているのであった。

「嵐を用いて全てを破壊し尽くす荒ぶる神、嵐龍アマツマガツチ。古くからユクモの地では、嵐に乗って空を飛び回るアマツマガツチの姿が何度も目撃されていたんだらしいんだ。ユクモの人達は幾度となくアマツマガツチの巻き起こす嵐の被害に遭っていたみたいで、それで滅んだ村も決して少なくなないんだってー。私が見たのも絶対にアマツマガツチだよ！嵐に乗って空を飛ぶ龍だもん、間違いないよー！」

興奮気味に語るトモチちゃんだが、見守るみんなの目は生暖かい。

「でもガーグア台車を運転してた連装砲ちゃんはそんなの見てないって言ってたでち。それにゴーヤも霊峰で渦巻く雲を双眼鏡で眺めたことあるけど、そんなの影も形もなかったよ。昔の人はそういう自然現象に神様を見出してただけで、神様も龍も本当は実在しないんだ

よ。」

「でも無双の狩人ジンオウガは実在したんだよー！だつたら嵐の神アマツマガツチだつて絶対に実在するよー！」

トモちゃんは力説するものの、全員の反応を見る限り誰一人信用していないということが見て取れる。

「ぶーぶー！いいもん、いつか私が霊峰に登ってアマツマガツチを狩ってみせるもん！そうすればユクモに平和が訪れるし、私は龍退治を成し遂げたスーパー狩人だ！いつかやってやるぞー、エイエイオー！」

「いや、それはやめといたほうがいいのね……。」

「自然現象に立ち向かうだなんて、ただでさえトモちゃん弱いのにそんなの無茶だよ。そもそも山頂に着く前に遭難しちゃうって！」

ユーもアマツマガツチの存在には半信半疑だが、もしトモちゃんが神殺しや龍殺しを目指すのであれば北欧神話に語られるジークフリートやベオウルフといった英雄並みの実力が必要なのではと疑問に思のであつた。

やがて外から聞こえてくる嵐の音は更に強まっていく。

することのないシエルター内、自然と寝る流れとなり大鯨はクロゼットから全員分の布団を取り出すと順番に床に敷いていく。

「あつ、しまったー！ユーちゃんのぶんのお布団がありません！」

広さも物資も限られたシエルターの中には最低限の寝具しか置いていない。

鎮守府内にあらかじめ用意された部屋ならともかく、シエルターにまで新入りのユーの布団が用意されていないのも仕方のないことであつた。

「じゃあユーちゃんは私と一緒に寝よつか？」

「ええっ!？」

「布団の中で眠るまでいっぱいお喋りするの!面白そうでしょー。」

自分の布団をパシパシ叩いてユーを誘うトモちゃん。

「えー!・しおいも一緒に寝たーい!」

「イクだってユーちゃんと一緒に寝たいし、トモちゃんもだって一緒に寝たいのね!」

それを見たしおいとイクも、トモちゃんの真似をして布団を叩く。

「だったらしおいもイクも、それにゴーヤに大鯨もみんなおいでよ。みんなでお団子になって寝るのもきつと楽しいよー!」

「やれやれ、誘われたからには仕方ないでちね。今回だけは特別にゴーヤも一緒に寝てやるでち。」

「ふふふつ、たまにはこういうのも悪くないですよね!」

トモちゃんの提案で全員が一つの布団に集まった。

「ボクハ?」

「連装砲って硬いし、これ以上は人数が多過ぎるから今回はパス!ごめんねー!」

「ガーンウラ。」

「ジャア代ワリニオイラガヒラオカト一緒に寝テヤルゾ?」

「イヤ、ソレハ遠慮シトクウラ……。」

みんなで一つの布団にぎゅうぎゅう詰め合っただけのお休み、狭いし暑いし寝苦しい。

なのに不思議と広い布団で一人で寝るより、ずっと心が安らぐ気がする。

初日でいきなり嵐に見舞われ、訳も分からず必死にシエルターに逃げ込みそのまま寝泊りをするとうとうとんでもない経験をしたユー。

しかしユーにはこの狭く暑く寝苦しい布団がその不安を取り除き、安らかな夢を見せてくれるだろう確信があった。

外の嵐は激しさを増すばかり、それに反して狭いシエルターの中はどこまでも穏やかな空間が広がっているのだった。

ユーちゃんとヤーパーン 4

「……うん、ふあく。あれ、暗い？」

目覚めたユーは目が覚めたというのに目の前が暗い……いや、黒いということに気が付いた。

少しずつ眼が冴えてくるとそれは黒ではなく、紫っぽい色をした壁であるということが分かった。

目が覚めたら目の前に壁？

そのことを疑問に思いながらも起き上がろうとすると何故か身体が動かない。

「身体が動かせない？ユーは昨日何をしてたんだっけ？」

温かく柔らかいもので上半身が縛られている？

同じように下半身も動かせない、上半身と同じように両足も暖かく柔らかいもので縛られているようだった。

しかもふくらはぎがやけにくすぐったい、ユーが目覚めたのもこのくすぐったさのせいである。

「これは腕？」

首だけを動かしてみれば自分を縛るものの正体は腕であり、要するに抱き締められているということに気が付いた。

更によく見て見れば目の前の壁は僅かに前後に動いているということも分かる。

「うくん、むにやむにや……。えへへ、アマツマガツチ覚悟お。」

そして聞こえてきた妙な寝言。

その声に釣られて顔を上げてみれば、そこにあったのはユクモ鎮守府提督であるトモちゃんのだらしない寝顔。

つまり目の前にあったのは紫色の壁ではなく、ユクモノシリーズを身に着けたトモちゃんの薄い胸だったのだ。

「特大サイズのドスマツタケ、大好きなのね。」

足の方に視線を向ければ、どういふ寝相なのか逆向きに寝ているイクがユーの両足にしがみ付いてふくらはぎに頬擦りをしている。くすぐったさの原因は明らかにこれである。

「そっか、昨日ユーは嵐に遭って……。」

現状を理解したユーはなぜ自分がこのような状況に置かれているのかようやく思い出す。

ユーが鎮守府に着任したその日に突然嵐がやって来て、それでみんなシエルターに避難したんだ。

そして寝巻きに着替えることもなく、一つの布団にみんなで団子になって寝たんだった。

寝る時のユーの両隣はトモちゃんとイクで、目が覚めたらこの状態になっていたんだ。

「あつ、起きたんですね!」

部屋の隅で布団を畳んでいた大鯨はユーが起きたことに気が付くと小走りでやってくる。

「ほら、トモちゃんもイクも起きて下さい!ユーが困ってますよ。」

「ん、おはようなのね……。あれ?何でイク逆向きになってるの?」

「アマツマガツチ……。こんな色白の女の子だったなんて……。思ってたのと違ってたかあいいなあ……。鎮守府で飼おうよ……。ぐう……。」

大鯨に声を掛けられたイクは手で顔を擦りながら起き上がる。

一方でトモちゃんは未だに目覚める様子はなく、ユーを抱き締めたまま笑みを浮かべる。

「トモちゃん起きて下さい!」

「トモちゃん起きるのね!」

声掛けだけで起きないと判断した大鯨はトモちゃんの身体を揺さぶり、イクはほつぺをムニムニといじる。

「うーん……。あれ、ここはシエルター?さっきまで戦ってたアマツマガツチは?」

目覚めたトモちゃんは目をパチクリさせながら顔だけで周囲を見渡し、やがて腕の中のユーと目が合う。

「お、おはようございます……。」

「……………なーんだ！アマツマガツチいるじゃない、やったー！」

「ひゃっ!?」

トモちゃんはユーを強く抱きしめると頬擦りを始める。

それは昨日の初対面時のやり取りの焼き直しであった。

「ユーはユーだよ、アマツマガツチじゃないよ！」

「寝惚けないで下さい、その子はユーちゃんです！」

「トモちゃんの中のアマツマガツチってどんななのね？」

このやり取りは呆れた大鯨がトモちゃんにゲンコツをするまで続いた……。

「あいたたた……久しぶりに大鯨にぶたれたー。」

「ほら、起きたのなら外に出ますよ。」

頭をさすりながら起き上がるトモちゃん。

温厚な大鯨が叩くというのは滅多にないことであり、ましてや自らの提督に手を上げるなどあり得ない話である。

ユーはある意味レアな場面を目撃したといえよう。

シエルターの外に出たユー達が見たのは、嵐でポロポロになってしまったユクモ鎮守府。

建物は無惨にも倒壊し、温泉も泥で埋まってしまっており昨日の景色は見る影もない。

「わ、私達の鎮守府が……。う、うええ……。えぐつ、えぐつ……。」「トモちゃん……。」

目の前の惨状にショックを隠せないトモちゃんは、その場で立ち尽くしポロポロと涙をこぼす。

そんなトモちゃんの様子を悲痛な面持ちで見守る狩娘達。

「うええええ……。ひぐつ……。ぐすつ……。ふう……。……。みんなお腹空いたから朝ごはんにしよっか。朝ご飯は一日の活力、朝ご飯を食べれば今日も一日頑張れるぞー！」

「えっ!？」

……。と思いきや思ったより早く立ち直るトモちゃん。

某柱の男並みの変貌振り、というか切り替えが早過ぎてまるで多重人格である。

「この鎮守府はいつもこんな感じでち。嵐で建物が壊れるのもいつものことだし、トモちゃんが悲しんですぐさま立ち直るといいうのもいつものことなんだよね。」

「でも誤解しないでほしいのね。トモちゃんはやたらと立ち直るのが早いだけで、別に悲しむフリをしたり、悲劇のヒロインを演じる自分

に酔ってるわけでもないのね。」

「しおい達にとつても鎮守府が壊れることはそりや残念だけど、毎度のことだからいい加減慣れちゃった。でもトモちゃんは毎回本気で悲しんで、そして毎回本気で立ち直っているんだよ。」

「そしてその本気は私達狩娘へも向けられているんですよ。出撃する私達の無事を毎回本気で祈って、そして帰投した私達の無事を毎回本気で喜ぶ。トモちゃんは提督としてはお世辞にも優秀とは言えないけど、トモちゃんだからこそ私達はこの人をずっと支えていこうと心に決めたんです。ユーさんは着任していきなりこんなことになったから不安を感じるかもしれないけど、ユクモ鎮守府に来たことに後悔はさせませんよ。」

切り替えの早さに驚くユーの内心を察したのか、ゴーヤ達はユーの耳元でそつと囁く。

毎回鎮守府が壊れているというところにはギョツとしたが、言われてみれば建物が妙にハリボテ臭かったのもそのせいなのだと言わなければならない。ユクモ鎮守府に毎月の立て直しを繰り返しているのなら、予算や工期の問題もあり鎮守府の作りが安っぽいというのも仕方がない。

「それでは朝ごはんですね、こんなものしかなくて申し訳ないのですが……。」

そうやって大鯨が配ったのはご飯を乾燥させた保存食、いわゆる糲。

それとペットボトルに入ったお水だけであり、昨日の豪華な夕食とは比べることすらおこがましい粗食である。

「今日が粗末なんじゃなくて、昨日が豪華過ぎたんでち。」

「この鎮守府はお金がないから普段から貧相なものばかり食べてるのね。昨日久々のご馳走だと言ったのもそのせいなのね。」

「物資の不足する台風明けは特に顕著だよ、流星にここまで酷いのは久しぶりだけど……。」

「今日の朝食が質素なのは別に昨日の夕食が豪華だった反動ではないですよ。ユーさんをおもてなししたせいで食材が足りなくなりましたわ。」

けじゃないので気に病んだり下さいね。」

「さて、ご飯も食べたし次は(ぐうぐう)……………あうう……………コホン、次は毎度お馴染み鎮守府再建計画を始動しまーす！」

朝食後、腹の虫を鳴らしながらも鎮守府再建計画とやらを発表するトモちゃん。

「あの、鎮守府再建計画って？」

「その名の通り、嵐で壊れた鎮守府を立て直す計画だよー！鎮守府を直すって口で言うのは簡単だけど、実際にやるのは大変だもん。そのためにもしっかりとした計画を立てないとねー！というわけで大鯨何かいい案ない？」

「はいはい、今回もいつもと同じですよ。今回からはユーさんが加わるから、いつもより捗るかもしれませんね。今回が初めてのユーさんにも分かるように説明をしますけど、まず何をするにしても資金が必要となります、なのでゴーヤさん達は4人で海へ行き資金稼ぎを。むるれんさんとヒラオカさんには食料集めと再建に必要な資材集めを兼ねて山へ行ってもらいます。私と竜人妖精さんは壊れた鎮守府を片付けつつ、まだ使えそうなものをサルベージする作業に入りますよ。みんなの力を合わせて鎮守府を立て直しましょう！」

「……………あれ、私の仕事は？」

提督のくせに秘書艦の大鯨に案を丸投げし、そして結局自分に何一つ仕事が割り振られていないことに気付いたトモちゃん。

「トモちゃんはそこにある大きな石に座って周囲の見張りをしている下さい。私達の安全はトモちゃんに掛かってますよ。」

「見張り？見張りなら得意だから任せといて！学生の頃は何度も遅刻しては廊下に立たされて、暇だったから他に遅刻する人がいないか見張ってたんだよ！私の見張りのお陰で遅刻者は出なかったんだ、凄

でしょ？それで友達に付けられたあだ名はなんと鬼門番！今日の私はユクモの鬼門番、鬼門番として見張りの役目を絶対に果たしてみせるよー！」

どう考えても一人だけ明らかに仕事内容がおかしい、そもそもトモちゃんの学生時代のあだ名は天災トモちゃんだったのではとユーは疑問に思う？

ちなみに他に遅刻者が出なかったのはトモちゃん以外に遅刻者がいなかったただけなのだが、本人は自分のお陰と信じて疑わないプラス思考の持ち主なのであった。

「こんなこと言いたくないけどトモちゃんにはあんまり仕事をさせない方がいいでち。カナヅチで泳げないから海には着いてこれないし、ブルファンゴ……えっと山でよく見掛けるイノシシにすら大苦戦するから山にも行けないし、片付けを手伝わせようにも不器用過ぎて余計に散らかすでち。周囲の安全を確保するために見張りをしてもらうというのも建前で、ここまで山の動物達がやってくることはないから実質ただ座ってるだけなんでち。」

ゴーヤが再びユーにこっそり耳打ちする。

そんな彼女達の内心なんか知る由もないトモちゃんは、フンスフンスとやる気を滾らせながら石の上に腰掛けるのであった。

はい、ユーです！ユーはゴーヤとイクとしおいの三人と鎮守府から少し離れたところにある浜辺までやって来ました、やって来たんですが……。

「それでは鎮守府の為、そしてトモちゃんの為、出撃でち！」

「腕が鳴るのね！」

「えいおーっ！」

「あの一……。！」

「ん？なんでち？」

「なんでみんなヘンなもの背負ってるの!?!」

出撃に向けて気合を入れる三人組だけど、どうしてもこれには突っ込まざるをえません。

ハッ!?これがヤーパンのポケとツツコミという文化!?

狩娘は艦娘とは違い艦装を使用しない。

そのことについてはユーも鎮守府を出る際に説明されており、納得はしていないが理解はした。

とはいえいくら何でもこの光景は異様である。

ゴーヤは串団子を二本、イクは竹で作った槍とザルのようなもの、そしてしおいは瓢箪をそれぞれ背負っており、とてもではないがこれから出撃する者の装備ではない。

「そんなに変かな？これってユクモの名産品を武器に転用した、れっきとしたユクモの伝統的な武器なんだよ？この瓢弾は瓢箪の中にライトボウガンの機構を組み込んだ技術の結晶なんだ。」

どうして瓢箪に武器を仕込む必要があるんだろう？

ドイツと因縁深いロシアの暗殺者は日用品に暗器を仕込んでいたらしいんだけど、それと同じなのかな？

「こっちの竹銃槍【トリオドシ】はユクモの竹林で採れた上質な竹を素材に使用した、風情溢れるガンランスなのね！」

ヤーパンではノーミンという低い身分の人も竹槍という武器で乱世の戦国時代を生き抜いたり、大戦中にはなんとあのB-29に竹槍で立ち向かったという話は聞いたことがある。

そんな戦闘民族ヤーパン人なら深海棲艦相手でも竹槍で戦える？

いやいや、いくら何でもそれは無茶です。

「そしてこの狩団子【白玉】はユクモ土産として有名な串団子を双剣にしたものだよ！その切っ先は深海棲艦の装甲も穿つでちー！」

お団子というのはおやつ、食べ物です。そのくらいユーでも知ってる。

その食べ物を武器にして深海棲艦に挑む!?そもそもお団子に切っ先がある？

もう意味が分かりません。

我がドイツの技術力は世界一イイイ……………といたいけど、ヤーパンにもヘンタイと呼ばれるほど優れた技術力と発想力があるといえます。

そのヘンタイの手に掛ければ瓢箪も竹もお団子も武器と化すんですね、ヤーパン恐るべし……………。

「勿論ユーのぶんの武器もあるよ。」

ユーの中で誤解と疑念が膨らんでいくが、そんなことを全く知らないゴーヤは随分と古ぼけた木製の弓を手渡す。

あちこちに黒いシミが付いており、巻かれている赤い布もほつれが目立つ古臭い弓。

見るからに使い込まれたお古の装備といった様子である。

「それは古ユクモノ弓でち。本当はもつとちやんとしたものを渡したかったけど、昨日の嵐のせいで武器庫も壊れて、それ以外に使いそうな武器がなかったでち。ごめんね。」

「頭下げないで、これはゴーヤのせいじゃないよ！それに貰ったものに文句言うつもりはないし、むしろ貰えて嬉しいよ！」

実際ユーは武器を貰えたことに感謝しているが、それ以上にヘンテコな武器を渡されなかったことに安堵していた。

本当はリュウノコシカケを渡そうと思っていたのに……というイクのつぶやきが耳に入ったというのもある。

リュウノコシカケ、名前だけではどんな武器なのか流石に判断出来ないが、だとしてもその名前だけであまり装備したくないなあというのがユーの偽らざる本音であった。

ユーちゃんとヤーパーン5

はい、ユーです！武器として弓を貰いました！

ユーは空母じゃないし、弓を使うのも初めてだけど、不思議と手に馴染みます。

狩娘は艦娘とは全然違う戦い方をするっていうから上手く戦えるか不安だけど、みんながいるから大丈夫！

「それじゃ今度こそ出撃でちー！」

ゴーヤの号令と共に海に繰り出していく……………つてあれ？

「ちよ、ちよつと待つて!!」

「何?どうしたの?」

「いや、どうしたのじゃないよ！みんな潜水艦でしょ？なのに何で普通に海を歩いてるの!?!」

ユーもゴーヤもイクもしおいもみんな潜水艦です。あれ？しおいは潜水空母だっけ？

まあどつちでもいいです、とにかく潜水艦は海中を進むものなんです！

なのにみんな普通に水面をテクテクと歩きながら『何を言っているんだろう?』と言いたげな目でこつちを見てくるの？

あれっ?これユーがおかしいの？

「あー、そーゆーことね。完全に理解したのね。」

「しおい達は狩娘だからこれでいいんだよ。」

「どういうこと???」

自分だけで納得していないでちゃんと説明してほしい。

「えつとね、狩娘は艦娘とは違うルールで動いてるでち。艦娘は自分の元となった船の特徴と能力を引き継ぐけど、狩娘は艦種問わず基本的に全員海上で戦うんだよ。それは潜水艦も同じ。無理に潜ろうとしても、潜れる海域以外では溺れちゃうよ。」

「潜れる海域？」

「そうでち。この海には潜れる海域と潜れない海域があるでち。逆に言えば潜れる海域なら、戦艦だろうと空母だろうと簡単に潜れるよ。そしてユクモ近海は潜れない海域だから、潜水艦のゴーヤ達も水面を歩いて出撃するというわけなんでち！」

な、なるほど……。

聞けば聞くほど摩訶不思議な場所なんだね、故郷のドイツとは大違いです。

そういえばマル・ユーって名前の潜水艦は艦娘化する前のオリジナルの潜水艦である時点から潜らずに海上を移動していたって聞いたことがあるけど、海域自体が潜ることに適していなかったからだったんだね。

てつきり性能が足りなかったから上手に潜れなかったんだと思ってたけど、これってとっても失礼な勘違いだったんだ。

ヤーパンって自分の凝り固まった常識に囚われてはいけない国なんだね、カルチャーショック……。

海の上を歩くという潜水艦娘として慣れない感覚に戸惑いを覚えつつも、今のところ深海棲艦と会敵することもなく平和に海を進んでいくユー。

このまま無事に進み続けられるかと思いきや、そう上手くはいかないように……。……。

「あつ、あつっ！」

「今度はなんでち？」

「さつきから汗が止まらないんだけど！」

この海域どうなってるの!? 進めば進むほど気温がどんどん上がっている。

最初は気のせいかなーって思ったけど、今や汗はばたばたと垂れてくるし息も荒くなってくる。

あまりの暑さに頭はぼーっとしてくるし、想像以上に体力も削られたみたいで進むのが苦しい。

「そういえばもうそんなとこまで進んだでちか。ゴーヤ達はもう慣れたから気にしてなかったけど、よく考えたらユーは初体験だったね。」

ユーだけかと思つたら、よく見ればゴーヤもイクもおいも同じように大量の汗を流してる。

なのにもう慣れた!? こんなに暑いを通り越して熱いくらいなのに苦しくないの!?

ひよっとしてこれが噂に聞くヤーパンの夏の風物詩、猛暑!?

「あのね、温泉と火山は切っても切れない関係にあるの。温泉が湧いているユクモ鎮守府の周辺にも大きな火山があるんだよ。そしてその火山地帯は海にも続いている。ここ一帯の海域では海底火山の活動が盛んで、その影響で物凄く暑いんだよ。」

「だとしても暑過ぎない？」

しおいが暑さは海底火山のせいだと言ってるけど、だとしてもこの暑さは普通じゃないです。

試しに海の中に手を入れてみたら、火傷するかと思うくらい熱かったよ!?

「海面まで噴出孔が続いているところも多いし、場所によっては海上にマグマ溜まりまで形成されてるからね。暑さはそのせいなんだ。」

海の上にマグマ!?

そんなの流石にあり得ない……と言いたいけど、しおいが嘘を言ってる様子はないし、何よりこの普通じゃない暑さ。

事実は小説よりもナントカっていうヤーパンのコトワザ通りなん

ですね……。

「このくらいでへばつちやダメなのね！イク達の目的地は何を隠そうそのマグマ溜まり！それにこの海域に生息する深海棲艦はこの暑さの中でも平気だし、大型の個体になるとマグマの中に入ってもビクともしないくらい強いのね！」

マグマに入って無事!? マグマって確か1000℃くらいあったよ
うな？

それって本当に生物なの？勝てる気が全然しないんだけど……。

「勝てなくて当然なのね、ここの海域の深海棲艦はイク達の装備じや流石に手に余るのね。だから会敵しないルートを選んで進んでるのね！だけど鎮守府、そしてトモちゃんの為なら危険も何のその！目的のブツさえ手に入れば、さっさと撤退なのね！」

ああ、だからさつきから深海棲艦と全然会わなかったんだ。

貰ったばかりの弓には申し訳ないけど、ユーもいきなり実戦はちよつと自信が無いし敵に会わないと聞いてちよつとホツとしました。

そしてヤーパンでも潜水艦娘は資材集めからは逃れられないんだ
……。

「でもこのままじゃ深海棲艦にやられる前に暑さでやられそうなんだ
けど……。」

「ふむ。もうちよつと先で飲むつもりだったけど、慣れないユーもい
るなら仕方ないでち。」

そう言つてゴーヤがユーに渡したのはビンに入った青い色をした
ドリンク。

「これは？」

「これはクーラードリンク！クーラードリンクは飲むと一時的に暑さ
から身を守ってくれる素敵な飲み物でち！これさえあればこの灼
熱の環境にも耐えられるんだよ！装備と予算の都合上、耐暑スキルを
積めないゴーヤ達にとってはなくてはならないアイテムでち！暑い
のが辛いならグイツといくでち！」

ちよつと下品だけど、暑さから逃れたい一心で恥も外聞もなくラツ

パ飲みにする。

ちよつと変な味がするけど、この際文句は言つてられない。

ドリンクが喉を通つていくと同時に汗が少しずつ引いていく。

体感温度はまるでエアコンの効いた涼しい部屋にいるみたいで、暑さを全く感じない。

「ちなみにそのクーラードリンクは、にが虫っていう青い虫をすり潰して絞り出した汁が原料になってるでち。」

「ゴボツ!？」

思わず吐き出さなかつた自分を褒めてあげたい……。

虫を食べるどころか飲み物にしてしまうなんて流石はヤーパーン、食にこだわりのある国ですね。

クーラードリンクのお陰で暑さに耐性を得た一行はその後歩き続け。ようやく目的地に到着する。

「うわっ、本当に海の上にマグマ溜まりがある!」

海の上に突き出した噴出孔、そこからは常に赤く煮えたぎったマグマが流れ続けている。

広がったマグマは海水と触れることで受け皿のような形に固まつており、その様子はまるでマグマのチョコレートトファウンテンである。

「さうして、それでは目的の物を……。」

ゴーヤは煮え滾るマグマの近くまで平然と近付くと、マグマが固

まって出来た亀裂にピツケルを振り下ろし亀裂を掘り広げていく。

やがて亀裂が充分に大きくなったのを確認すると、そこに両手を入れた。

「ふんぬっ！」

ゴーヤが亀裂から取り出したのは直径60cmはありそうな赤熱した岩石。

「その岩は？」

「この岩は火薬岩、これを持って帰るのがゴーヤ達の任務でち。今回のクエストはこの火薬岩を二つ持ち帰れば任務完了になるんだよ。」

「二つ？でもイクとしおいも岩を持ってるんだけど？」

ユーとゴーヤが話している間にイクとしおいも亀裂から火薬岩を取り出して抱えていた。

これだと数は三つである。

「そりや当然でち。火薬岩を持って帰るのって、とっても大変なんだもん。だから誰かが失敗しても取り返しがつくように他のメンバーも持つんでち。それに火薬岩つとつても高値で納品出来るからね、余った分も無駄にはならないでち。」

「えっ、全員？」

「そう、全員。つまりユーも持つんだよ。」

「ええええええええええ！」

赤熱した岩は見るからに熱そうである。

(嫌だなあ、持ちたくないなあ……。でも鎮守府の予算のためだし、岩を運ぶだけなら深海棲艦と戦うことに比べてきつと楽だよな？仕事として割り切ろう……。)

渋々亀裂に両手を入れたユーは中に入った岩の一つを掴む、その次の瞬間。

「熱いッ!?っていうか痛い!?それに重いッ!!」

手のひら全体に鋭い針で刺されたような激しい痛みが広がった。岩はクーラードリンクでは抑え切れない程の高熱を発しており、触れている場所からはジュウジュウと文字通り肉の焼ける音がする。

「火薬岩は熱過ぎるから持つてるとどんどん体力を奪われるでち。」

ユーと同じように岩を持つていながらまるで他人事のように話すゴージャ。

ゴージャだけではない、イクとおいものほほんとしたすまし顔である。

「ねっ、ねえ!?みんな熱くないの!?痛くないの!？」

「そりゃ熱いし痛いし苦しいのね、でももう慣れたのね。このくらい痩せ我慢出来るのね。」

「騒いだって熱いのが収まるワケじゃないからね。熱がって無駄に体力を消耗するより、普通にしていた方が楽なんだよ。」

(こ、これがしんとーめつきやく……。しんとーめつきやくはヤーパンのコトワザで、心を無の境地に辿り着かせることであらゆるものに耐えるという無敵の秘技。無の境地っていうのは確かブツキョーを信仰している人が目指す最終境地だったと思う。つまりヤーパン人は標準で悟りの心を持つてる?流石は宗教に対しておおらかだからこそ、逆に信心深いとされるヤーパン人。)

ゴージャ達ヤーパンの狩娘の鋼の精神に、ユーは感心を通り越して戦慄を覚えた。

ちなみに心頭滅却と痩せ我慢は全く違うのだが、その辺の知識が曖昧なユーにとっては同じものようである。

「これこそ最も危険な運び依頼として有名な火薬岩の運搬クエスト!危ないし大変だけど、その代わり見返りも大きいんだよ。このクエストを成功させて、その報酬金を鎮守府の再建に充てるのがゴージャ達の目的でち!それじゃみんな帰るよー、こういうのはさっさと終わらせるに限るでち!早く終われば当然早く帰れるし、この熱さからも解放される。何よりトモちゃんの喜ぶ顔が見られる!のんびりしても何一ついいことはない、タイムイズマネーでち!」

「あっ、待って!置いてかないで!」

「はひ、はひ、はひ、重い……熱い……キツイ……苦しい……。」
「頑張るでち！もうちよつとでベースキャンプだから諦めずに気合を
入れるでち！」

慣れない火薬岩の運搬で心身共に消耗してきたユーだが、ゴーヤ達
が安全な帰り道を選びつつ、更に運搬ペースも合わせてくれたお陰で
無事に運搬を続けていられた。

「そうそう！今回初めて火薬岩を運搬するユーちゃんには分かんない
かもしれないけど、慣れればこんなのなんてことないよ！」

「それどころかずっと運搬を繰り返してきたお陰で、この熱さや辛さ
にも快感を覚えるようになってきたのね！そのうち痛いのが気持ち
よくなってくるのね！」

「いやそれはないでち……………ん、この聞きなれない音？まさか……………」

イクのマゾ発言に呆れるゴーヤだったが、潜水艦娘特有の優れた聴覚がある音を捉えた。

「みんな静かにするでち。今からあそこの岩礁の陰に隠れるでち。」

ゴーヤは近くの岩陰にそつと身を寄せ、残りのメンバーもそれに倣って一緒に身を隠す。

先程まで火薬岩を運んでいるにも関わらずほとんど汗を流さなかつたゴーヤがたらりと冷や汗を流す。

そのただならぬ様子にユーもごくりと生唾を呑み込んだ。

「レツレツ~~~~♪」

姿を見せたのは戦艦レ級。

深海棲艦の中では珍しくゴーヤ達と大差ない小柄な身体、その体格に不釣り合いな巨大な尻尾を持つ、戦艦の名に相応しい恐るべき戦闘力を持った難敵である。

強敵故にレ級の狩猟に対しては厳しい制限が掛けられており、本来であれば上位狩娘どころか下位狩娘のゴーヤ達では戦闘どころか接触すら禁じられている相手である。

当然討伐数も少なく研究もあまり進んでいないためその生態は謎に包まれており、ただでさえ初見のゴーヤ達にとってはどう対応していいのかすら分からない。

「あれはレ級!?今の音はレ級の鳴き声だったでち!?知識としては知ってたけど、実物を見るのは初めてだ……。とはいえなんでこんな辺鄙なところに!?!」

「きつと昨日の嵐のせいなのね!嵐の直後は何故か生物の生息域が大きく変わるから、普段いない場所に見慣れない相手が出てくることも多いのね。」

「とはいえレ級なんて大物、こんな下位のクエストに現れていい相手じゃないよ！最低でも上位狩娘の中でも特に腕利きの狩娘が集まっ
てようやく勝負になる深海棲艦なのに！」

「あ、あれがレ級……。」

レ級の出現に戸惑うゴーヤ達、そして始めて見るレ級の迫力にただ
ただ気圧されるユー。

「レ、レ、レ……。」

レ級はゴーヤ達には気が付いていない様子だが、何を思ったかみんなが隠れている岩礁の数メートル手前まで来ると岩に背を向ける形で海面に座り込んでしまった。

「動かないのね……。」

「どうする？走って振り切る？」

「火薬岩抱えたままじゃ無理でち。あつという間に追い付かれるよ。」

「でもこのままじゃ火薬岩の熱にやられて、戦わずしてしおい達は終わりだよ？」

「回り道しようにも岩陰から出た時点で絶対に見つかるでち。ゴーヤ達が熱で倒れる前にどいてくれるのを信じて待つしか……。」

「あつ、そういえばイクいいものを持ってたのね！」

レ級をどう躲すか話し合うゴーヤ達だったが、ふとあることを思い出したイクは片手で火薬岩を持ったまま、もう片手でポーチの中を漁る。

「イクはこやし玉を持ってきてたのね。これをぶつけて追い払うのね！」

イクはポーチから卵ほどの大きさの物体を取り出すと岩礁に隠れたまま上向きに球を投げた。

投げられた球は山なりの軌道を描きながら、見事レ級の頭頂部目掛けて落ちていく。

グシャツ!!

「レ級。」

頭に何か当たったことに気付いたレ級が右手で頭を拭う。手に付いたのは白と黄色のドロドロとした物体であり、どう見てもこやしではない。

しばらく自分の右手を眺めていたレ級だが、やがて岩礁の方へくると振り返る。

「しまったのね、間違えたのね！あれはトモちゃんがおやつ代わりに持たせてくれたユクモ温泉たまごなのね!？」

「何てことしてくれるんでき、このおバカ!!」

「言い争いしてる場合じゃないよ、レ級がこっちに気付いた!」

投げたのは卵ほどの大きさの物体ではなく、卵そのもの。

しようもないミスに顔面蒼白になるイク、逆に顔面真っ赤になるゴージャ、だが事態は呑気に喧嘩する暇すら許してくれない。

BGM：黄金の鬘／ラージャン

「そつ、総員退避！岩陰から離れるでち!」

ゴージャの号令と共に全員が岩礁から離れた、次の瞬間……。

ドオオオオオオン!!!

レ級の尻尾の口からまるで怪獣映画のような強大なビームが発射される。

音を置き去りにするほどの勢いで放たれた黄色い閃光は、先程までゴージャ達が隠れていた岩礁を易々と貫き、そのまま粉々に消し飛ばした。

「あんなの当たったらひとたまりもないでち。」

その常識外れの威力に恐れおののきながらも、どうすれば全員で無

事に帰還出来るか知恵を振り絞るゴーヤ。

だがゴーヤが答えを出す前にイクとしおいは火薬岩を海に投げ捨てると武器を構えてレ級の前に立ち塞がる。

「これはイクの責任なのね、イクが間違えたからレ級にバレたの。だからレ級を足止めするのは当然イクの仕事なのね。」

「イク一人じゃレ級相手に時間稼ぎしても一秒も持たないよ。でもしおいも残れば二秒は稼げるでしょ？二秒もあればゴーヤとユーを逃がせるよ。」

「イク、しおい、何やってるでち!?レ級になんて勝てっこないでち!バカなことしてないで早く逃げて!」

イク達の突然の無謀な行動に考え直すよう叫ぶゴーヤだが、覚悟の決まった二人は首を横に振る。

「バカなのはそつちだよ。あたし達の任務を忘れたの?いつ誰がレ級に勝つなんて言った?このクエストは火薬岩を二つ納品出来ればそれで終わり、だからしおいとイクがいなくても問題ないんだ。岩を四つ持っていったのは単なる予備。それに2乙までは失敗じゃない。ここでしおいとイクがやられても、その間にゴーヤとユーが帰還すればあたし達の勝ちなんだ!」

「分かったらさっさと帰るのね、喋ってる時間すら惜しいのね。」

「くっ……。ユー、今のうちに逃げるよ!火薬岩は絶対に落とさないように!」

「えっ!?でもこのままじゃイク達が!!」

「いいから早く!先輩命令でち!」

「レエエエエエエ!!」

「やああああ!!」

後ろ髪を引かれながらも振り返ることなく全速力でその場を離れるゴーヤとユー。

その後方で二度、爆音が響いた。

物悲しいほど静かな海原をゆっくりと進む二つの人影。

「はあっ……はあっ……。」

「ほら、ユー頑張るでち。ゴールはもう目と鼻の先でち。」

その影の持ち主はゴーヤとユー。

二人とも体力気力共に限界であり、もはや走ることすら適わない。しかしそれでも火薬岩は意地でも手離さなかった。

これを離してしまえばイクとしおいの献身が全て無駄になってしまふから……。

「イク、しおい……。」

ユーの視界が涙で滲む。

手で拭おうにも両手は塞がっており、零れ落ちた涙は火薬岩の表面に落ちて蒸発していく。

「ユー、何でそんなに泣いてるでち？ひよつとして始めて見たレ級が怖かった？」

はらはらと涙を流すユーを見たゴーヤは疑問に思う。

「ゴ、ゴーヤー！ゴーヤは何でそんなに平然としていられるの!？」

しかしユーはゴーヤの的外れで軽い対応にシヨックを受けた。

「イクとしおいを犠牲にしたんだよ!？せっかく仲良くなれたのに！ヤーパンの生活で不安でいっぱいだったユーを受け入れてくれた、大切なお友達だったのに！ゴーヤのことだって仲間想いの優しい艦娘だと思ってた！なのに何でイクとしおいがやられたつてのにそんな酷いこと言えるの!？返してよ、イクとしおいを返してよ!!！」

感情のままにゴーヤに当たり散らすユー。

だがゴーヤは自分が罵倒されたことなどまるで気にも留めず、ただ単純に納得がいったと言わんばかりの顔をした。

「あー、そういうこと。それなら心配せずとも大丈夫。安心してベースキャンプに向かうでち。それとゴーヤもユーも艦娘じゃなくて狩娘でち。」

あくまで冷静な態度を崩そうとしないゴーヤにこれ以上の文句を言うことを諦めたユーは、せめてイクとしおいの献身に應えるため最後の力を振り絞りベースキャンプを目指す。

そしてベースキャンプに辿り着いたゴーヤとユーが見たものは……。

「……えっと、何これ？」

「艦これ、じゃなくて犬神家でち。」

キャンプのある砂浜に上半身が埋まってそのまま動けなくなったイクとしおいの姿であった……。

「とりあえず先ずは火薬岩を納品するでち。」

「あ、はい。」

納品ボックスに火薬岩を入れ、ようやく熱さと重さから解放されたゴーヤとユー。

二人はそのままイクとしおいの足をそれぞれ掴むと、思い切り引つ張り上げた。

「プハッ……このまま死ぬのかと思ったのね！」

「うう、いくらこつちが動けないからって頭から放り捨てるなんてあの連装砲ちゃん酷い！お陰で二人とも埋まつちやつたんだよ！」

砂の中から出てきたのは所々髪や水着に焦げ目こそ付いているものの、怪我一つない元気そうなイクとしおい。

「えっと、何で無事なの？」

「無事じゃない方がよかったですでち？」

「いや、そういう意味で言っただんじゃ……。」

あんな別れ方をしたというのに普通に再会出来たという事実によりの頭はパンク寸前である。

そういえばヤーパーンでは根性論及び精神論なるものがあるということをやユーは思い出した。

確かヤーパーンのとある古い宗教で信奉されているものであり、これの信者は根性の力によってありとあらゆるものに耐えられるのだとか……。

現在のヤーパーンでは邪教の教義とされ信奉者はその数を大きく減らしたようだが、軍という特殊な環境下では未だにその教えが根付いていたのかもしれない。

心を無にすることであらゆるものに耐えるしんとーめつきやくも、実は仏教ではなく根性論の教義の一種だったのかもしれないが、宗教に関して知識が浅いユーにはこれ以上のことは想像もつかない。

とにかく根性さえあれば己の死すら覆せるといえるのだろうか？
だとすれば根性恐るべしである。

なお根性論は存在しないが根性スキルは存在する。

とはいえ実際の根性は死にそうになった時に一回耐えられるスキルであり、流石に死を覆す程の効果はない。

死、というか乙を取り消してくれるスキルは連装砲の生命保険スキルである。

「冗談でち。ここではやられても狩娘は轟沈しないんだよ。轟沈する前に連装砲ちゃん回収してベースキャンプまで届けてくれるようになってるんだ。このシステムを連装砲タクシー、略してレンタクと呼ぶんでち！」

「レンタク？」

どうやら二人が沈まなかったのは根性とは無関係のようであった。しかし根性は無関係でも、レンタクなるものが二人の轟沈を防いだというのは事実である。

狩娘の死を覆すレンタク、ヤーパンはそのような超技術の実用化にすら成功しているという事実によりは啞然とするしかない。

「イクとしおいが轟沈しなかったのもレンタクのお陰なのね。だからこそあんな無茶が出来たのね。」

「もつともレンタクはベースキャンプに着きさえすれば後はどうでもいいってスタンスだから、ベースキャンプに着いた途端に乗客は投げ捨てられるんだ。あたし達が埋まっていたのもそのせいだよ。」

「狩娘は投げ捨てるものでち。」

「フツ……だがまだ生きているのね。」

あれだけの目に遭ったというのに、終わりよければ全てよしと言わんばかりに笑顔を絶やさないイクとしおい。

いくら助かる見込みがあるからといって、自ら死地に赴く者がどれだけいるだろうか？

仲間を助けるためなら自らの危機すら厭わない義の心。

やはりヤーパンの狩娘は心持ちからして違う、これが大和魂……。

だが今のユ一の心はヤーパンの狩娘への感服よりも、イクとしおい

が生きていたことに対する安心と喜び、そしてゴーヤへの暴言による後悔で埋め尽くされていた。

「イク、しおい、無事でよかった……。」

「イク、このくらいじゃ沈んだりしないのね。いつひひひひ！」

「心配掛けてごめんね。」

「そしてゴーヤ、酷いこと言ってごめんなさい。本当にごめんなさい。ユーはもう二度とあんなこと言いません！」

「別に気にしないでち。事前に説明していなかったゴーヤにも落ち度があるからね。それにユーがみんなのことを大切に思っているって知れて嬉しかったよ。」

「えー、何々？何を言われたのね？」

「ダメー！これはゴーヤとユーの秘密でち！」

「ぶー、ケチンボ！」

「ほら、ゴーヤもイクもそこまでにして。早くトモちゃんの待ってる鎮守府に帰ろう。」

そして月日は流れ……。

「チャオ！あたしはそう、ルイージ・トレツリよ。」

再建されたユクモ鎮守府の工廠にて、新たな狩娘ルイージ・トレツリが造られた。

「マンマミーヤ！また海外の潜水艦だー！とつても可愛い！ヒアウイゴー！」

「ひやつ!?えつ、なんなの!?この人がルイのアンミラーリオ!?」

案の定、新たな狩娘に抱き着くトモちゃんと呆気にとられるルイージ。

「コラッ、ともちゃん！いきなりそういうのはメツですよ！」

そんなトモちゃんの後方から現れたのは、あれからすっかりユクモ鎮守府に馴染み、肌も小麦色に日焼けしたU-511改め呂500であった。

「あつ、ろーちゃん！新しい子が仲間になったよ！ルイージちゃんっていうんだって！」

「それはいいから早く離してあげて下さい。ルイージちゃん困ってます。」

「わー、ろーちゃん引つ張らないで！離す、離すから！」

「いきなりびつくりさせてごめんね。でもトモちゃんは悪い人じゃないんですよ。」

ろーはトモちゃんを引き剥がしながらフォローも忘れない。

「あ、あい。それはこの短時間でじゅーぶん過ぎるほど分かったよ。それとルイージじゃなくてトレツリ、いやルイって呼んでほしいな。」

「分かりました！さて、改めましてユクモ鎮守府にようこそルイちゃん。ここユクモ鎮守府があるのはルイちゃんの故郷のイタリアンとも、ろーちゃんの故郷のドイツとも違う神秘の国ヤーパンです。」

「ヤーパン？」

「そう、ヤーパンです。ヤーパンにはヤーパン独自のルールがあり、ろーちゃんやルイちゃんの凝り固まった古い常識ではこの先付いていけません。だからこそ海外艦先輩のろーちゃんがルイちゃんにヤーパンの常識を教えてあげますね！郷に入れば郷に従え、ですつて。」

ここまでの登場人物6

天龍：毎度お馴染み主人公。

特に詳細を聞かされることもなく研修として半ば強制的にモガ鎮守府へ送り込まれた。

同じ鎮守府でありながらクロオビ鎮守府とモガ鎮守府の違いにカルチャーショックを受けまくる。

狩娘は艦娘と違い水中でも戦闘が可能ということを知った。それと同時に潜れる海域でなければ潜水艦娘でも潜水不可能ということも初めて知った。

何よりクロオビ鎮守府とは比較にならないくらいキャラの濃いモガ鎮守府の提督と狩娘にもうタジタジである。

しかしこの程度で参っているようでは、独自性の塊であるメゼポルタ鎮守府などに出向いた場合だとショックのあまり気絶してしまうかもしれない。

潮風丸：交易船の船長をやっている男性の狩娘、そして天龍の剣術の師匠。

モガ鎮守府出身の狩娘でありモガ鎮守府に顔が効く。

今回の天龍の研修がスムーズに受け入れられたのは彼のお陰である。

交易品に変な商品ばかり混ぜることに定評がある。

実は鎮守府の打ち上げパーティーの際に作者に存在を完全に忘れており、セリフどころか出番自体がない。

きつと他のメンバーがみんな楽しく食事をしている間、一人寂しく交易船の中で過ごしたのだろう。

オトモ連装砲の剣レン丸も今回はちょっとセリフがあっただけで

出番はほとんどなし。

今回は彼らがメインの話じゃないから仕方ないね。

球磨：モガ鎮守府の狩娘であり、鎮守府きつてのやべーやつ。

鎮守府の最古参狩娘は北上だが、北上は秘書艦として活動しておりあまり出撃しておらず、また球磨型長女として他の出撃メンバーをまとめることが多いので実質的にチームのリーダーとなっている。

伝説の乗娘を目指しており、オトモンの木曾と共に日々修行に励んでいる。

しかしその実態は提督のことが好きで好きでたまらないぶっちぎりでイカれた女である。

提督への愛情アピールのために様々な特技を会得しており、瞳と舌とアホ毛をハート型に変形させられるようになったのもその一つ。

そして最終的に自分の夢と他人の夢をつなげるという究極奥義に目覚めた、夢の主を差し置いて侵入した夢の内容を自由に操作することも出来る。

これを利用して提督の夢に入ってエロいことをしようと目論んでいるのだが、今のところ一度も潜入に成功したことはない。

本人の戦闘力は並だが木曾との絆が高まることで身体能力が強化され、格上の相手とも互角以上に戦えるようになる。

木曾：球磨のオトモンのアオアシラ。

鎮守府に本物の木曾がないのと、球磨が自分がアオアシラの母親ではなく姉になってあげるといふ意思表明から木曾と命名された。

見た目は普通のアオアシラだが元々艦娘である球磨の手によって孵化されたのが影響しているのか、本来であれば持っていないはずの水上移動のスキルを持っており、これによって海上戦闘を可能としている。

おっかない見た目に反して温和で人懐っこく、初対面の人にも挨拶

代わりにベアハッグをお見舞いしてくる。

手加減というものを分かっているので痛くはないのだが、かなり心臓に悪い。

そして本気を出せば小型の深海棲艦を簡単に蹴散らし、大型の深海棲艦でもぶつ飛ばすほどのパワーを誇っており、雑魚モンスターのアオアシラだと思つて舐めて掛かると痛い目を見る。

得意技は相手の守備力を下げるブレイクジャンプと、隙が大きいものの威力の高い全力ベアークロー。

絆技はシャケハントクロー。

これはどこで使用しても足元からシャケを召喚し、そのシャケを木曾と球磨が食べることで強力な爪攻撃を繰り出すという謎な技である。

性別は多分メス。

北上：モガ鎮守府最古参の狩娘であり、鎮守府の秘書艦を務める。常にマイペースな姿勢を崩さない、掴みどころのない狩娘。

モガ鎮守府提督に一目惚れし、出会って速攻で告白してケツコンにまで持ち込んだ。

ハーレム肯定派であり、球磨や大井を焚きつけて球磨型で提督を困らせてしまおうと考えている。

キャラクターのモデルはMH3のギルドガールズであるアイシャであり、装備も一緒だが性格はあんまり似ていない。

彼女がこのポジションになったのは、アイシャと髪型が近いからという安直な理由によるものである。

大井：モガ鎮守府所属の狩娘。

北上のことが大好きな百合っ子であり、それと同時に提督のことが大好きなノンケでもある。

かつて練習艦をやっていた経歴からか、初心者に対してはやたらと

厳しい。

しかし北上に勝手に出撃スケジュールを組まれたり、球磨に逆らえなかったりと姉妹の中でのヒエラルキーは相当低い。

提督のことを愛しているが、既にケツコンしている北上を氣遣って身を引いている。

しかしそんな本心はとつくの昔に北上に見抜かれており、更に提督ハーレム作戦を実現したい球磨によって恥ずかしい目に遭わされ続けている。

提督ハーレム作戦の一環として提督の姿に変身して夢に侵入してきた球磨に調教されて全身開発済みとなっており、手の甲をつねられただけでビクンビクンとしてしまう。

大井自身は球磨が他人の夢に入れることを知らないので自分の欲求により提督のエツチな夢を見ていると勘違いしており、提督の夢を見た日は目が覚めるたびに軽い自己嫌悪に陥っている。

ちなみに潮風丸にラングロローラーを注文したのは彼女である。

多摩：モガ鎮守府所属の狩娘。

かつて潮風丸から購入したマタタビの副作用により、猫耳と猫尻尾が生えている。

猫耳は見た目だけで聴覚はないが、神経や筋肉はあるようで自由に動かすことが出来る。

同じように尻尾も自分の意思で動かせる。

しかし強く意識していないと感情と同期して耳も尻尾も勝手に動く。

そこを見れば現在の気持ち分かるのは本物の猫と同じである。

猫耳と猫尻尾が生えたことに対して本人は全く気にしておらず、知らない人が見ればまるで最初から生えていたかのような自然体である。

暇なときは日当たりのいい場所でゴロゴロしたり、鎮守府の棧橋から海を泳いでいる魚を眺めたり、提督の膝の上に乗ったりと猫のよう

に気ままに過ごしている。

ちなみに撫でると喉がゴロゴロと鳴る。

更に何か感じるものがあつたのか、スキルのには何の恩恵もないどころりシリーズの防具を好んで着用している。

ここまで猫要素が揃っているにも関わらず、相変わらず自分は猫ではないと言い張っている。

なぜそこまで否定するのは不明。

文月：モガ鎮守府所属の狩娘であり、鎮守府に五人いる睦月型狩娘の一人。

長月、菊月、三日月、望月の四人の姉妹がいるのだが、四人出撃のジnkスのせいで一人だけ凍土への出撃に連れて行ってもらえず、お留守番となった。

狩りの腕前はお世辞にも上手とは言えないが、常に明るく狩場でも笑顔を絶やさないチームのムードメーカー。

パトル&トツピ：モガ鎮守府に住み着いているPT小鬼群の二人組。

本来は三人で一つの深海棲艦なのだが、立派な深海棲艦となるべく旅に出た結果迷子になってしまい、挙句の果てに残りの一人とはぐれて二人になってしまった。

海の真ん中で途方に暮れているところを文月に拾われ、鎮守府の居候となる。

艦これ本編では回避率の高い厄介な深海棲艦なのだが、こちらではイ級相手にすら追い回されるダメダメな深海棲艦のおこちゃまである。

二人とも生意気で調子に乗りやすい性格をしているが、根は素直なのか文月や北上の言うことはよく聞く。

狩娘の狩猟に同行して経験を積むことで立派な大人の深海棲艦と

なろうと思っているが、いざ狩猟となるとビビッて逃げ回ってばかりだったり、狩猟対象そつちのけで二人で喧嘩してばかりである。

しかしたまに全力の狩技に匹敵するレベルのコンビンেশヨン攻撃を見せることもあり、小さいとはいえ決して侮れない。

最近ではモガ鎮守府の住み心地を気に入り、もうこのままの生活でもいいかなと思っている。

残りの一人のことも気がかりだが、多分自分達と同じようにどこかの鎮守府に転がり込んでいるだろうと考え、あまり真剣には探していない。

名前の由来はPT小鬼群の元ネタであるパトロールトピードボートから。

きつと三人目の名前はボートか何かだと思われる。

キャラクターのモデルは言わずと知れたチャチャとカヤンバ。

チャチャとカヤンバをモデルにするにあたって三人目の存在は正直邪魔だったので、行方不明扱いとして消し去ったという裏話がある。

モガ鎮守府提督：文字通りモガ鎮守府の狩娘を指揮する提督。

訓練校でも好成績を修め、17歳という若さで提督という職に就いた。

見た目は艦娘の木曾に瓜二つ。数少ない相違点は身長と胸、そして声の高さ。

男性である提督の方が背が高く、当然胸もない。そして声も本物の木曾よりは少し低めである。

とはいえそれでも男性ではなく女性の声と言われれば納得する程度の低さでしかない。

特に処理してないのにムダ毛は生えておらず肌も爪も綺麗であり、体臭は何故か全く汗臭くなくフレグランスな甘く優しい香りがするという。

女の子っぽい自分の姿にコンプレックスがあり、男らしくなるため

に軍人を目指したのだが、訓練校でも女の子よりも女の子していると評判となり、ファンクラブが作られたり男から告白されたりと散々な目に遭っていた。

木曾と同じく片目に傷があるが、これは訓練中の事故で付いたもの。

ファンクラブの連中は美しい顔に傷がついたと大いに悲しんだが、当の本人は男として箔が付いたとむしろ気に入っている。

提督になってからは装備まで木曾と同様のものになり、なおさら木曾との見分けが付かなくなってしまった。

これは部下の球磨型狩娘達の要望により装備しているものであり、若干腑に落ちないものの士気高揚になるならいいかと本人も妥協している。

得意武器はスラツシユアックスであり、お気に入りの得物はヘリオスクラツシャー。

常人ではマトモに運用することすら難しい剣鬼解放&テンペストアクス&トランススラツシユの狩技トリプルコンボを己の手足のように使いこなす。

モデルとなったキャラクターはMHのキャラではなく艦これの木曾。

MH3シリーズは他の作品に比べてムービーに登場するハンター達の個性が薄い気がする。

エクス：風翔剣士クロス・ダオラの登場人物。

ネオウエポンスに狙われた被害者としてコモンドの前に姿を現し、彼に保護された。

しかしその正体はネオウエポンスの刺客である爆砕のフルブラキであり、コモンドの行く先々で無差別爆破事件を引き起こして彼を肉体的にも精神的にも追い詰めた。

儂げな雰囲気的美少女だがそれはコモンドを欺くための偽りの仮面であり、本性は嬉々として卑怯な手段を使う外道。

口を開けば次から次へと罵詈雑言が飛び出すとんでもない人物であり、正体を現した時は某人気カードゲームアニメの敵役ばりの顔芸を披露した。

コモンドとの直接対決では剣モードのエクリクシーを振り回し続けた結果ビンを消費し過ぎてしまい、コモンドの目の前で強制変形するという大きな隙を晒した結果、竜巻の檻に囚われる。

そしてそのまま動けずに狩技・風翔雷撃気刃斬を食らって終わりになるところだったのだが、粘菌を自爆させることで辛くも逃れた。

しかし自爆の代償は大きく、顔に決して癒えない傷を負った。

ちなみにこの時、敵役のくせにマスク割れを披露している。

そのまま爆炎に紛れて姿をくらましたのが、敗北の悔しさと顔の傷の痛みからコモンドに復讐を誓うようになる。

やがてその怒りと憎しみは猛り爆せて新たな力となるのだが、それはまだ先の話である。

演者はモガ鎮守府提督だが、外見が女性にしか見えなかったので渋々そのまま女性として演じるようになった。

変身後の姿も最初は女性用のドレスのような装備を用意しようとしたのだが、流石にそれは抵抗があるとのこととで男性用のフルフェイスの全身鎧を用意することになった。

提督曰く、性格性別戦法の全てにおいて自分とは真逆のキャラとのこと。

しかし正体がバレるまでの美少女ムーヴに全く違和感がなかったのはご愛敬である。

名前の由来は爆発を意味する英単語エクスプロージョンから。

モガ鎮守府：周囲を海で覆われた小さな島にポツンとある、これまで小さな鎮守府。

敷地の狭さ故にほとんど設備はないが豊かな自然に恵まれており、ここでしか採れない特産品も多い。

隣の島に作られた農場では稀にツチノコが見つかる。

一時期地震が多発していたが、提督が「ちよつくら海に潜つてくる。」と言つて半日くらい鎮守府を留守にした結果、その日の内に不思議と収まった。

帰つてきた提督はまるで月の破片のようにも見える美しくも巨大な角のようなものを抱えており、「今回は特別に見逃してやるが、次来たら絶対に殺す。」と物騒なことを呟いていたらしい。

その角を見た三日月は物凄い既視感に襲われたという。

鎮守府の近くにあるモガの森は昼間こそ普通の森なのだが、夜になると化け物の巣窟になると噂されており、提督命令で夜間外出は禁じられているのだとか……。

ハクム鎮守府提督：モガ鎮守府提督以上に若くして提督の座に就いた少年であり、いわゆるシヨタ提督である。

年齢は10歳前後くらいだと思われる。

まだ若さゆえに甘く粗削りな部分も多いが、クソガキであつたゆうた提督と違ってちゃんと提督としての仕事を果たそうとする頑張り屋。

とある事情により絆石を所持しており、それが原因なのか、それとも本人の素質故かモンスターや深海棲艦と心を通わせることが出来る。

そのせいで鎮守府はモンスターや深海棲艦だらけでロクに狩娘もいないのだが、深海棲艦達が狩娘の代わりに任務を行っているので運営に支障がなく、また上層部からはモンスターや深海棲艦の生態調査を命じられているので、そのまま鎮守府として問題なく活動を続けている。

提督でありながらライダーとしての修行も欠かさず行っており、伝説のライダーであるレダンのような最高のライダーになることが夢。

どこからともなく現れたヘンテコな体型の連装砲ちゃんとコンビを組んでおり、彼の知識に助けられることも多い。

学者を目指す女の子と、闇落ちしそうな男の子の二人の幼馴染がい

るらしい。

本名はリユート。

モデルとなったキャラクターはMHSTの主人公リユート、というかそのまんま。

言うまでもなくヘンテコな連装砲ちゃんとはナビルーのことである。

隻眼ヲ級：ハクム鎮守府提督であるリユートと一番最初に絆を結んだオトモ深海棲艦であり、同時に鎮守府の秘書艦を務める。

着任直後……というかカリユード諸島に上陸したてのリユートが浜辺で偶然拾った黒くて大きな不思議なタマゴ、その中から誕生した。

産まれた直後は二、三歳児並の体格だったが一日ごとにグングンと成長していき、一ヶ月も掛からずに我らがよく知る大人のヲ級の姿にまで成長した。

なおこれにより、少なくともカリユード諸島の深海棲艦はタマゴから生まれてくるということが発覚した。

学習能力は高く、最初はロクに話も出来なかったが、今では普通に喋る上に文字まで書ける。

また戦闘力も非常に高く、素の状態でも上位クラスの深海棲艦程度なら一蹴し、リユートとの絆の力が高まればG級深海棲艦すら圧倒するレベルとなる。

左目に傷を負っているが、これは生まれて間もなくリユートに襲い掛かった全身から黒い瘴気を放つ不気味な深海棲艦に立ち向かった際に受けたもの。

傷を負ったこと自体は気にしておらず、むしろリユートと自分の絆の証だと思っているが、ときおり傷口から黒い瘴気が立ち昇ることがあり、この状態になると自分を制御出来なくなってしまう。

リユートのことが大好きであり、愛さえあれば種族の差なんて関係ないよねと本気で思っている。

モデルとなったのはリユートのオトモンである隻眼レウス。

MHの看板モンスターがリオレウスなら、艦これの看板深海棲艦はヲ級だろという安直な発想によりこのポジションになった。

レウスと違って失踪しておらず、ずっとリユートと共にいたのが一番の違いである。

ハクム鎮守府：鎮守府としては珍しく、内陸部に造られている。

周囲は山や崖が多く、一番近い水場が湖なので本当に鎮守府なのか疑わしいが、それでも誰が何と言おうと鎮守府である。

とはいえ僻地なのは疑いようもなく、存在意義が疑われる鎮守府である。

実戦経験のない新米提督であるリユートが派遣されたのもそれが理由であった。

しかしリユートが深海棲艦やモンスターのオトモン化に成功すると評価は一変。

未だ謎の多い深海棲艦やモンスターの生態解明を目的とした鎮守府として大きな評価を受けるようになった。

また鎮守府近辺にて発見された絆原石の守護や、謎の黒い瘴気を放つ深海棲艦やモンスターの討伐及び調査など、他の鎮守府には出来ない任務も多く、今や替えの利かない最重要鎮守府となっている。

なお狩娘は一人も所属していない。

何度も工場で狩娘の建造を試みたのだが、本来であれば失敗しないはずの建造ですらペンギンと白いナマモノしか出現せず、最終的には建造を諦めてしまったようだ。

U-511：ドイツ生まれのはずなのに、ユクモ鎮守府の工場で建造された潜水艦狩娘。通称ユー。

本来であればユーは建造不可能の狩娘なのに、特に何かしたわけもなく偶然建造されたらしい。

カリユード諸島のことをヤープン、つまり日本の一部だと勘違いしており、カリユード諸島での常識をヤープンの常識だと思い込んでいる。

最悪なことに周囲はユーの勘違いに気付いておらず、誰も訂正しなかったので更に勘違いは加速した。

ヤープンで学んだことをドイツに持ち帰れば祖国はより発展するのではないかと思っているが、残念ながらカリユード諸島の技術と常識はカリユード諸島の中でしか通用しないので、仮に持ち帰ってもあまり役に立たない。

ゴーヤ達とお揃いの提督指定の水着を着て任務を行っているうちに日焼けしていき、特に改造をしていないにも関わらず勝手に呂500になってしまった。

とはいえ見た目が変わっただけで中身は何一つ変わっていないので、実際は自称呂500でしかないのだが、船そのもののスペックが意味をなさないカリユード諸島ではどちらであろうと関係ないのであつた。

お下がりの古ユクモノ弓を使っていたが、使い続けるうちに弓が手に馴染んできたようで今や立派な弓使いへと成長した。

しかし呂500になった今現在使っている武器は鹿角ノ弾弓。

ご存じパチンコである。弓どこ行つた？

相変わらずの予算不足により防具は未だに提督指定の水着を使っており、そもそも属性解放のスキルの存在も知らないのです、狩猟ではペチペチと棘付き鉄球を放つだけであるが本人は満足している模様。

伊58：ユクモ鎮守府所属の狩娘、通称ゴーヤ。

メンバーの中ではリーダーシップがあり、現場の指揮を務めることも多い。

ユクモ鎮守府提督であるトモチヤんのことを慕っており、トモチヤんのためならたとえ火の中水の中。

使用武器は双剣の狩団子【白玉】。

出先でゴーヤのお腹が減ると、いつの間にか双剣の団子部分が少し減っていることがあるらしい。

伊19：ユクモ鎮守府所属の狩娘、通称イク。

決してバカではないのだが迂闊な所があり、大事な局面でやらかすことが多い。

しかし責任感はある、自分の失敗は自分で取り返そうとする一面もある。

トモちゃんのことを慕っており、トモちゃんのためなら茨の道もなんのその。

ゴーヤとユーを逃がすためにレ級に戦いを挑んだが、ワンパンで倒されベースキャンプに送り返された。

使用武器は竹銃槍。

相手の弱いところに太いのを突き刺して中で炸裂させるのが楽しいらしいが、深い意味はきつとない。

伊401：ユクモ鎮守府所属の狩娘、通称しおい。

メンバーの中では影が薄い方だが、仲間のフォローは欠かさない縁の下の力持ち。

実は戦闘力はゴーヤやイクよりも上。

とはいえ若干上というだけであり、圧倒的に強いわけではない。

イクと同じくレ級に挑むも、イクよりちよつと強い程度で埋められる差ではなく、同じように敗北した。

トモちゃんのことを慕っており、トモちゃんのためならもう何も怖くない。

使用武器は瓢弾。

性能面よりもデザインを気に入っており、暇なときは表面を磨いたり床の間に飾ってみたりしている。

大鯨：ユクモ鎮守府所属の狩娘であり、鎮守府の秘書艦を務める。掃除や洗濯に食事の用意など、どう考えても秘書艦の仕事ではないことまでやっている。

その結果、鎮守府のメンバーからは実質母親扱いされている模様。更に提督であるトモチヤンがポンコツなので、執務も大半は大鯨が行っている。

トモチヤンのことを慕っており、家事全般を引き受けているのも偏りにトモチヤンのため。

キャラクターのモデルとなったのはMHP3のギルドガールズであるコノハ。

最初の予定ではササユ枠として迅鯨も出そうと思っていたのだが、鎮守府の所属狩娘をなるべく少なくしたかったのと、この内容でヤンデレ枠のキャラクターまで出すとなると話がまとまらなくなると考え登場は見送られた。

むるれん&ヒラオカ：ユクモ鎮守府所属のオトモ連装砲。

むるれんはユクモノシリーズを身に着けた連装砲くんであり、ヒラオカはガンキンシリーズを身に着けた連装砲ちゃんである。

むるれんは一流のオトモを自称しており、狩りも上手く、狩猟の知識についても詳しい。

ヒラオカはモンスターと深海棲艦に対する知識が豊富であり、語り始めると止まらなくなってしまう。

所属的には二人ともトモチヤンのオトモなのだが、トモチヤンがほとんど狩りに出ないのと、オトモを持たない他のメンバーのオトモとして狩りに同行することが多いので、実質的に鎮守府全体のオトモとして扱われている模様。

キャラクターのモデルはMHP3公式サイトの『教えて!トモチヤン。』に登場するオトモアイルーのむるにゃんとヒラオカ。

設定もほぼ同じであり、違いは種族がアイルーか連装砲かという点

のみである。

ユクモ鎮守府提督：ユクモ鎮守府のトップに立つ提督、通称トモちゃん。

艶やかで美しい青い長髪が特徴的な可愛い系の美人。

しかしその実態は頭が悪く、要領も悪いダメ人間。

実力者揃いの提督の中では例外的に物凄く弱く、ブルファンゴ相手にタイムマンでキャンプ送りにされたこともある。

訓練校でも常に成績は底辺だったのだが運だけはいらしく、何の間違いか訓練校を卒業して提督というポジションにまで収まった。

とはいえカリユード諸島ではアタリハンティイ力学に対応した提督を求めており、本人の実力は二の次といったところもあるので、普通の鎮守府ではとてもじゃないが提督にはなれなかったと思われる。

仕事をさせると逆に仕事が増えるので、提督なのに提督らしいことをほとんどさせてもらえず、大鯨の執務中はお茶汲みをさせられている。

そんなどうしようもない提督なのに、狩娘達からは物凄く慕われている。

その理由はトモちゃんが狩娘のことをとても大切に考えており、みんなのために何かをしようと常に一生懸命なことをみんなが知っているからである。

可愛いものが大好きで、可愛い子に囲まれた鎮守府での生活を楽しんでいる。

ただただ単に可愛いものが好きなかただけであり、同性愛者ではない模様。

学生時代はいくつものあだ名を持っていたようで、天災トモちゃんやら鬼門番やら様々な呼び方をされていた。

黙っていれば顔だけはいいので、風翔剣士クロス・ダオラのヒロインであるルリを演じたこともある。

鎮守府を脅かす嵐の元凶であるアマツマガツチを退治するのが当

面の目標だが、その道は果てなく険しい。

ちなみに胸部装甲は最低レベル、哀れなほど薄っぺらで寝起きのユウが壁だと勘違いしたほど。

キャラクターのモデルはMHP3公式サイトの『教えて!?トモちゃん。』に登場する駆け出しの新米ハンターであるトモちゃんその人。

Luigi Torelli:パスタの国からやって来たはずなのに、普通にユクモ鎮守府の工廠で建造された潜水艦狩娘。通称ルイ。右も左も分からないうちにろーちゃんから誤ったヤーパンの知識を吹き込まれ、完全に間違った日本観を植え付けられた。

ルイが所属した時点でも相変わらず鎮守府は貧乏続きであり、提督指定の水着を身に着けて資材集めに奔走することになるのであった。使用武器は大剣であり、日本人はこんなものを武器にするのかと勘違いしつつも番傘【秋雨】を振り回している。

ユクモ鎮守府：和風の建築物が特徴的な鎮守府。

天然の温泉が湧き出る土地として知られており、それを活用した広く美しい露天風呂が作られている。

温泉の効能はかなりのもので、毎日クタクタになるまで働いている狩娘達が翌日も元気に働いているのは間違いなく温泉のお陰。

またユクモの木として名の知られる良質な木材や、マツタケやタケノコなどの美味しい山の幸が採れる場所としても有名である。

しかし山には危険なモンスターも数多く生息しており、不用意に立ち入るのは非常に危険。

なにより霊峰と呼ばれる一際大きな山からは定期的に嵐が吹き荒れ、その嵐によって鎮守府は幾度となく破壊され続けている。

そのため再建を繰り返した鎮守府は見た目こそ和風の旅館のような美しい外見をしているものの、内部はハリボテ同然となってしまうた。

ユクモ鎮守府周辺の地域は嵐の直後だとモンスターや深海棲艦の生息域が大きく変わるので、意図せぬ場所で思わぬ強敵と出くわすこともある。

トモちゃん曰く霊峰の頂上には嵐の神であるアマツマガツチが棲んでおり、嵐を起こしているのも動物達を追い立てているのも全てこのアマツマガツチの仕業だと言っているが、残念ながら誰も信じていない。

鎮守府近くの海には数多くの海底火山が存在しており、その影響で気温が物凄く高くなっており、クーラードリンク無しでは歩いているだけでも命に係わる。

また非常に危険な深海棲艦も数多く生息している文句なしの危険地帯。

しかし貴重な鉱石も数多く産出し、何より最も危険な運び依頼として有名な火薬岩が採れるということで危険を承知で金策に訪れる狩娘も多い。

本編で考えればユクモ村を出た途端、ドスジャギイやアオアシラのいる溪流ではなくウラガンキンやアグナコトルがうろつく火山に飛ばされるようなものである。

ちなみにこの鎮守府は本来であれば造れない狩娘が建造されることに定評がある、その運をハクム鎮守府にも分けてあげて欲しい。

天龍ちゃんとアイスがボーン！1

「新種の未確認深海棲艦ンンン？マジで!？」

早朝のクロオビ鎮守府。

執務室に呼び出された天龍は思いもよらぬ話をされて素つ頓狂な声を上げた。

「いえ、まだ深海棲艦と決まったワケではありませんが……。」

天龍の早とちり、それをやんわりと否定するのは秘書艦の神通。

「この鎮守府がある島からすぐ近くの海域に氷雪島ひょうせつとうと呼ばれている島があります。そこは一年中雪が降り、島のほとんどが氷に覆われた未開の土地です。」

「雪と氷の島ねえ………一年中!?!いやちよつと待て、それはおかしいだろ!?!」

「おかしい?何がですか?」

再び突然大声を上げる天龍だが、何がおかしいのか分からない神通は首を傾げる。

「だってその島はここですぐ近くなんだろ!?!だけどオレはこの島にいて寒いなんて思ったことないし、雪だってまだ一度も見てないぜ?そんなに寒い島が近くにあるんなら、こっちの島だってちったあ寒くならなきゃおかしいだろ!?!」

「それがカリユード諸島ならではの環境です。ここではいわゆる島と島をつなぐ海域の境界線、そこを超えた途端環境が激変するんですよ。理解は出来ずともそういうものだとな納得して下さい。」

「お、おう。」

「話を戻しますが近頃は深海棲艦、野生生物共に徐々に活性化の兆しが見られます。今まで大人しかかった動物が活発的となり、深海棲艦は活動範囲を広げつつある。ただの偶然で一斉に生物が活性化するはずがありません、何か理由があるはずです。私は長門さんに一週間、

氷雪島の生態調査と写真撮影をお願いしていました。島に住まう生物達にどのような変化が見られるか調べるためです。そして現地で長門さんが撮った写真にこのようなものがありました。」

神通は机の引き出しから数枚の写真を取り出すと机の上に並べていく。

多少のブレは見られるものの、そこにはまるで海を泳ぐかのように雪をかき分けて進む正体不明の黒光りする背ビレが写っていた。

「カリユード諸島に生息している深海棲艦には、背ビレや角など本土の深海棲艦にはない部位を持ったものも多数見受けられます。ドスイ級などの中型駆逐艦に多く見られる特徴ですね。」

「なるほど、神通の言いたいことが分かったぜ。」

「察しが良くて助かります。」

つまりこの雪の中を進む黒い背ビレの持ち主が、はたして深海棲艦なのかどうかを確かめてきてほしいということだった。

「先程申しましたようにこの背ビレの持ち主が本当に深海棲艦かどうかは分かりません。ですがこの黒光りする外皮は深海棲艦の持つ特徴と一致するものですし、万が一深海棲艦が陸上に適応していたとなれば一大事です。」

「りよーかいりよーかい、任務とありや行くき。とはいえオレは氷雪島なんて行ったことないし、オレなんか任せて大丈夫か？長門はもう鎮守府に帰ってるんだろ？」

「心配せずとも流石に一人では行かせません。頼りになる助っ人を用意してありますよ。」

そのセリフと共に神通はパチンと指を鳴らす。

その指の音に合わせて執務室の天井の一角がパカッと開き、そしてそこから一人の狩娘が飛び降りてきた。

「とうっ！川内、参上！」

華麗にスーパードロワー着地を決めたのは神通の姉である川内。

「今回の出撃には姉さんを付けます。この出撃は姉さんのリハビリも兼ねているんですよ。」

「リハビリ？どつか悪いのか？」

リハビリだと神通は言うがパツと見たところ川内にはどこもおかしなところはないし、別に今まで怪我や病気をしていたという話も聞いたこともない。

「ご存じだと思いますが、姉さんはこれまでずっと夜型生活を続けていました。」

川内は公式で夜戦バカと呼ばれるほど夜戦が大好きな艦娘である。

その夜戦好きな性質は狩娘となった現在でも変わっておらず、昼の間は寝て過ごし、夜になると起きて出撃をしているのだ。

「ですが先日の長門さんの騒動で、姉さんの生活スタイルを矯正するキツカケを得られたんです。」

長門さん騒動とは、長門と入れ替わったコンガを長門本人と勘違いして鎮守府で面倒を見ていたという一連の騒動のことである。

日中に寝ていた川内は鎮守府にコンガがいることを知らなかったのも、夜間に廊下にいたコンガを不審者と思い込み抜き足差し足で後方から接近したところ放屁の直撃を受け、そのあまりの悪臭により気絶したのだった。

神通は川内が気絶したのをこれ幸いと昼夜逆転生活の矯正に利用したのである。

ちなみに長門がたった一人で氷雪島に送られたのは、この騒動に対するお仕置きも兼ねているのだとか……。

「姉さんは本当はとても強い狩娘なんですけど、夜型生活を続けていたせいか日が出ての間だと戦闘力が激減するんです。」

「は？何だそれ、吸血鬼にでもなったのか？」

吸血鬼は日が出ている間だと戦闘力が低下するのではなく灰になって死亡するのだが、細かいことは言いつこなしである。

「私は姉さんのリハビリとして危険度の低い日中のクエストに出撃してもらい、クエストをクリアするたびに少しずつ難易度を上げていきました。そしてこれはリハビリの仕上げです。姉さんには天龍さんと共に氷雪島へと向かってもらいます。姉さん、大丈夫ですね？」

「心配性だな神通はく。私を誰だと思ってるの！そのくらいお茶の子さいさいだよ！」

心配そうに確認する神通だが、川内は自信気に胸を張る。

「そういうわけですので改めて天龍さんと姉さんには氷雪島の黒い背ビレの調査を依頼します。更にこのクエストは天龍さんのランク3への昇格試験も兼ねています。クエストの成否は背ビレの持ち主を特定すること、討伐の有無は問いません。もちろん討伐が可能なのであれば討伐してほしいですが、情報を持ち帰るだけでも構いません。対象が深海棲艦なのか、単なる野生動物なのか、それをハッキリさせることが最重要です。」

「昇格試験か、腕が鳴るぜ！それじゃあさつさと準備を終わらせて出発だ！」

自分の昇格が掛かったクエストと聞いてよりやる気が湧いてきた天龍は、興奮冷めやらぬまま執務室を飛び出していった。

鎮守府を出発した天龍と川内は氷雪島を目指してモーターボートに乗って進んでいた。

ボートに乗った状態で深海棲艦の襲撃を受けると、ボートに損傷が出ることもあり少々厄介である。

なので深海棲艦の少ない比較的安全な海路を選んでいたのであった。「うー、寒っ！本当に神通の言った通りだ。ある一定のラインを抜けた途端寒くなってきた！」

「氷雪島周囲の海域は流水が増えてくるからこれ以上ボードで進むのはちよつと危ないんだって。だからこつから先は徒歩で行くよ。ボートは連装砲ちゃんがここに停めておいてくれるから、調査終わったらまたここに戻ってこようね。」

島に近付くにつれ徐々に肌寒さを感じるようになり、それと同時に少しずつ流水も目立つようになってきた。

流水の漂う海をボートで進むのには危険が伴う、なのでボートに乗って進むのはここまでとなる。

しかし無人のボートを海に放置していくわけにはいかない。

そこで鎮守府で色々な雑用を担当している連装砲ちゃんのうち一人にボートに同乗してもらっており、天龍達がいけない間の留守を預かることになっている。

連装砲ちゃんにボートを任せた天龍と川内はそのまま海面に飛び降りると、氷雪島を目指して歩き出した。

歩き始めて五分前後、島まであと数km程。気温はますます下がってきた。

「クシユン！どんどん寒くなってきたな。」

「氷雪島の寒さはこんなもんじゃないらしいよ。私も上陸するのは初

めてだけどさー。」

「つたく、二人とも初見とか大丈夫なのかよ……………ん？」

だべりながら進む中、天龍はふとあることに気付いた。

「揺れてる？地震か？」

「地震？ここ海の上だよ、地震なんて起きるわけないでしょ？」

「でもホラ、揺れてるだろ？」

天龍に言われて川内も足元に注意を向ける。

「ホントだ、僅かにだけど確かに揺れてる！」

「だろ？海の地震なら海震って呼ぶのか……………うおっ!？」

「何この揺れ!？危ない！」

先程まで意識しなければ気付かなかった程度の軽い揺れ。

それが突然激しさを増し、海面にはもはや立っているのがやつとなレベルの波が発生していた。

「うおおお!？足元見ろ足元！」

「足元？うわっ、何アレ!？」

荒れる海を覗いてみると、海の底から巨大な黒い影が浮上してきているのが見えた。

影は見る見るうちに大きくなっていき、波で身動きの取れない二人の足元にまで迫っている。

「来るぞッ！備えろ！」

ザザーーーン!!

ちよつとした山ほどもあるヌメリを帯びた黒い巨体、遠くからでも目立つ黄色い光を放つ大きな目玉。

天龍と川内は足元から現れた黒い物体に押し上げられるような形で乗ってしまった。

「な、なんだよコイツ!？この色、この形、そしてこの目！深海棲艦か!?放射能を浴びて巨大化したフラグシップのヌ級か!？」

慌てる天龍だが川内は落ち着いた様子でポーチから一冊のノートを取り出すと、パラパラとページをめくっていく。

「おつ、あったあった！天龍、コイツ深海棲艦じゃないよ。これウミウシだ！ウミウシボウズっていうとつても珍しいウミウシ！私達今ウミウシの背中の上に乗ってるんだあ！すごおい!!」

「ウミウシ？…これがあ？」

ウミウシと言われて天龍が真っ先に思い浮かべたのは、アオウミウシと呼ばれる人の指の爪くらいの大ささしかない、青くて小さいナメクジのような生き物である。

しかし足元の生命体はクジラをも凌駕する真正正銘の巨大生物であり、一般的なウミウシのイメージとはかすりもしない。

恐る恐る背中の上からウミウシの全体像を見渡してみれば、どうやら黄色い目のようにみえたのは身体の模様であり、それとは別にちやんと二本の触角が生えた頭部を見つけたことで、ようやくウミウシのイメージと一致したのであった。

「ふむふむ。普段は夜行性で、夜になると餌のイカを求めて浮上してくるんだって。獲物を求めて夜の海に繰り出すなんて私と同じだねー、この子も夜戦が好きなのかなあ？えへへ、シンパシー感じちゃうなー。へえー、日が昇っている内に活動することは滅多にないんだ。日中に出現したのは神通が言ってた異常つてのが関係してるのかなあ？ほうほう、性格は大人しい上に、見た目と違って意外にも人懐こいみたいだから危険性はかなり低いみたいだね。元々かなり珍しい生き物みたいだから、日中に見られた上に背中に乗ることまで出来た私達つてとつてもラッキーだよ！」

未知の体験に怯える天龍とは対照的に、マイペースにノートを読み進めていく川内。

「ついでに写真も撮っとこー！」

ノートに続いて川内が取り出したのは、見るからに高級感漂う一眼レフカメラ。

迷うことなく足元のウミウシボウズの写真を撮っていく。

「お、おい。さつきから読んでるそのノートはなんだよ？それにその

カメラ、お前の私物か？」

「え？このノート？これは長門の調査と撮った写真をもとにして、提督と神通と竜人妖精さんが作った氷雪島の生物についてまとめた生態ノートだよ。そしてこっちは現地の生物を撮るための鎮守府の備品のカメラ、私の私物じゃないよ。私に写真の趣味なんてないし、写真撮ってる暇があったら夜戦に行くね！そもそもこれって神通から調査のために渡されたものだよ。ノートが無いと現地の生き物の詳細が分からないし、カメラが無いと新種の生物を見つけた時に困るでしょ？天龍がさっさと会話を切り上げて執務室を出てっちゃったから私が持つことになったんだよ。これがなかったら始まる前から任務失敗になってたんだから感謝してよねー！」

「お、おうスマン……。」

知らない間に任務失敗の危機に陥っていたらしい。

天龍は反省しながらもウミウシのスベスベした背中から滑り台のように滑って降りる。

ここで「滑り台だけにな！」とダジャレでも言おうと思ったが、言う前に察したのか川内が懐疑的な目で見てきたので素知らぬ顔で口笛を吹いて誤魔化したのであった。

氷雪島とは、神通の説明にあつた通り一年中雪と氷で覆われた島である。

この島の雪と氷が解けることはほとんどなく、気温は常に氷点下という極寒の地である。

この島は大抵猛吹雪に見舞われているのだが、本日は珍しく天候に恵まれており、カラツと晴れた気持ちのいい青空が見える絶好の調査日和である。

しかし吹雪いていないとはいえそれでも気温は氷点下のままであり、とてもじゃないが生身の人間が動き回るには厳しい環境下である。

そしてそんな凍て付いた島に、何の準備もせず普通に上陸した天龍と川内がどうなったのかというと……。

「あゝあゝあゝあゝさゝむゝいゝよゝおゝおゝ!!」

「なんゝなんゝたゝよゝこのゝしまゝはゝあゝあゝ!!」

それはもう面白いくらいに凍えていた。

寒さのあまり唇は青く染まり、身体はガタガタと震え、奥歯はガチガチと音を立てる。

鼻水に至っては拭いても拭いても次から次に垂れ落ちる。

「どゝうゝすゝんゝだゝよゝおゝおゝおゝ!?!このゝまゝまゝしゝやゝちゝよゝうゝさゝのゝまゝえゝにゝこゝおゝつゝちゝまゝうゝそゝおゝおゝ!!」

「こゝこのゝちゝかゝくゝになゝかゝとかゝつゝくゝつゝたゝへゝゝスゝキゝヤゝンゝフゝかゝあゝるゝらゝしゝいゝかゝらゝあゝあゝあゝ!!まゝすゝはゝそゝこゝまゝてゝひゝなゝんゝしゝ

よおおお!!
「わかつたああ!!」

まだ島に上陸しただけで戦闘どころか調査すら始まっていないというのに、再びクエスト失敗の危機に陥った天龍と川内。

恥も外聞もかなくなり捨ててベースキャンプに駆け込む情けない二人の調査、果たしてうまく進むのか？

それはこの大自然だけが知っている………のかもしれない。

天龍ちゃんとアイスがボーン! 2

「ふわああああ……あつたけエ〜、生き返るウ〜。」

「割と本気で死を覚悟したよ、寒いって辛いんだねえ……。寒冷地行ったことなかったから知らなかった。」

氷雪島のベースキャンプに建てられたテントの中、そこで天龍と川内は火を起こして暖を取っていた。

「しかしこれからどうすんだ?このままじゃ調査どころか、外に出ることすらままならないぞ?。」

「それは問題ないよ、ほらここに……。」

川内が手に取ったのはテントの隅に束になって吊るされているトウガラシ。

「トウガラシ?そーいやトウガラシに含まれるカプサイシンには体を温める効果があるって聞いたことがあるけど、ひよっとしてそれをかじりながら探索でもするつもりか?流石にトウガラシの丸かじりは勘弁してほしいんだが……。それにトウガラシだけで耐えられる寒さじゃないぞ?。」

「そこは安心していいよ、そのまま食べるつもりはないから!。」

川内は近くに置いてあつた箱からすり鉢とすりこぎを取り出すと、トウガラシ数本をゴリゴリとすり潰していく。

あつという間に粉末状になったトウガラシ、それを空きビンの中に入れる。

続けてポーチから魔法瓶のポットを取り出し、ビンにお湯を注いでいく。

やがてトウガラシはお湯に溶け出していき、見るからに辛そうな真っ赤な液体が完成した。

「出来た、これこそ寒い地域の必需品!一口飲むだけで全身ポツカポカになるスペシャルアイテム、その名もホットドリンクだ!。」

「いや、それってトウガラシの粉末をお湯で溶いただけの単なるトウガラシの汁じゃ……。」

「ホットドリンク!」

「そんなこと言われたって、誰がどう見てもトウ「ホットドリンク!!」……分かった、もうそれでいいよ……。」

天龍は川内からホットドリンクを渡されると、飲むように促される。

見るからに辛そうな赤い液体に天龍は顔をしかめるものの、鼻を摘まむと一気に飲み干す。

「ん、ん、っ、辛ッ!?……あれ、暖かい?」

予想していたとはいえ、脳を貫くような強烈な辛味が天龍を襲った、しかしそれと同時に身体の奥底からポカポカと暖かな熱が生まれしてきた。

今の状態ならたとえ全裸で雪の中に飛び込んでも平気でいられるという確信がある。

「ね、効くでしょ? 調合技術の発達によってにが虫のエキス無しでもここまでちゃんとしたホットドリンクが作れるようになったんだ!」
「にが虫?」

「うん、にが虫。とても苦いけど高い滋養効果のあるエキスが採れる虫。ホットドリンクを作る際にはそのエキスを混ぜる必要があったんだけど、今じゃ不要なんだ。にが虫調達するのって結構面倒だし、何より辛いトウガラシと苦いにが虫を混ぜて作ったホットドリンクってこの世のものとは思えないような味がしたからね! 味噌や醤油で味付けしないととてもじゃないけど飲めたものじゃなかったよ。」

調合技術の向上だと川内は言うが、すり鉢でトウガラシを砕くだけのこの単純作業に技術もへったくれもないと天龍は思うのであった。

「それじゃ身体も温まったことだし調査に行こー！」

ホットドリンクで寒さへの耐性を得た天龍と川内はキャンプから出発した。

混じりけのない美しい純白の雪が降り積もった白銀の世界、ホットドリンクにより寒さを気にする必要が無くなった天龍は周囲の風景を楽しむ余裕すら出てきた。

「おい見ろよ、鼻の短いマンモスだ！」

「えーっと、あれはポポとって見た目は大きくて強そうだけど実際はとても大人しい草食種だよ。家畜として飼育されることもあるみたいで、実際に飼ってる鎮守府もあるんだって。」

「トナカイっぽい生き物もいるじゃん！」

「そいつはガウシカ。ポポと同じ草食種だけど、ポポよりもずっと気が荒いみたいで迂闊に近付くと怒ると角を振りかざして襲ってくるんだって。」

雪景色の中を歩いていると野生動物の姿が見えてくる。

天龍が質問し、それに対して川内はノートでチェックしながら答えていく。

「しかし思ってたより自然に溢れた島なんだな。極寒の地っていうか、らもつと不毛な土地なのかと思ってたけど、ポポやガウシカみたいな動物がそこら中にブツ!？」

「天龍!？」

草食種ばかりの平和な光景を前に完全に油断していた天龍。

そんな天龍の顔面にどこからともなく飛んできた雪玉が直撃した。

「プハッ、ペッペッ!だ、誰だあ!こんなくだらねーイタズラをしやがったのは!？」

「天龍、アイツだ!」

「アイツ?」

「ヴオツヴオツヴオツ!」

川内が指差す先、そこにいたのは白いヒヒのような姿をした動物。

白ヒヒは鋭い目付きで天龍達のことを睨んでおり、ポポやガウシカと違って明らかに好戦的な生物であることが窺える。

「アイツが雪玉を投げてきた犯人!」

「ゲッ、長門じゃん!白い長門だ、雪長門!!」

「えーつと、あれはコンガじゃなくてブランゴっていうらしいよ。寒冷地に生息する白い牙獣で、知能が高く群れで狩りを行う。足跡の痕跡から察するに群れを統率する大型の個体も存在すると考えられるんだって。」

いつぞやの長門騒動を思い出す猿の出現に驚く天龍と、冷静にノートをめくる川内。

「群れえ?アイツ一匹しかないじゃない!一匹で二人の狩娘に勝てるワケないだろ!誰に喧嘩売ったのか教えてやらあ!」

未知の牙獣とはいえ相手はたったの一匹、何より顔面に雪玉をぶつけられたことでイラついていた天龍はブランゴに灸を据えるべく一歩を踏み出す。

「ヴオツ!」 「ヴオツ!」 「ヴオツ!」 「ヴオツ!」 「ヴオツ!」

「えっ?」

そんな勇み足の天龍を出迎えたのは、雪の中から飛び出してきた何頭ものブランゴ達。

2対1の状況は、数秒も経たないうちに2対10へと変貌した。

BGM：白い闇の住人／ドドブランゴ

「ココココココヴオオオオオオ!!」「ココココココ」

「に、にににに逃げろくくッ!!」

脱兎のごとく逃げ出す天龍と川内と、それを追うブランゴの群れ。

こちらは元々洋上での運用を目的とした艦娘の流れを汲む狩娘。

陸上でも人並みには動けるものの、それでも慣れの問題もあって海と比べると明らかに動きに精彩を欠く。

ましてやここは雪や氷で覆われた氷雪島、雪で足を取られたり氷で滑ったりと思い通りに動くことすら一苦勞である。

一方のブランゴはこの極寒の環境に適応した生物であり、足場の悪さもなんのその。

むしろこの劣悪な足場の方が動き易いと言わんばかりの軽快な動きで迫ってくる。

二人がブランゴ達に追い付かれるのも時間の問題であった。

「ハアツハアツハアツ、チクシヨー！全然振り切れねえ！どうするツ!?このままだとマズいぜ！」

「そんなこと言われたって……あつ、あそこー！」

川内が指差す先にあつたのは岸壁にポツカリと開いた洞窟。

「ど、洞窟?!あそこに逃げ込もうつてのかわ?!そんなところ入ったら逆に追い詰められちゃうだろ!?!」

「逃げ切れないなら迎え撃つのみ！洞窟の中なら雪は積ってないから動き易いし、壁を背にして戦えば少なくとも囲まれることはないでしょ！何よりやられっぱなしで悔しくないの!?!」

「わーっただよ、そこまで言うならやってやろうじゃねえか！いい加減逃げるのにも飽きてきたところだ！地の利さえ得られれば、数の差があつたとしてもおサル程度に負けやしねえ！」

洞窟に飛び込んだ天龍と川内はそのまま走り続け、やがて背を預けるのに丁度いい壁を見つけるとブランゴを迎撃すべく振り返った、振り返ったのだが……。

「あれ？あいつらいねーぞ。」

「えっ、マジで？」

振り返ってみればブランゴは一匹もいなかった。

先程までの喧騒はどこにもなく、あるのは静寂のみである。

「洞窟に入ったことで諦めてどっか行ったのか？」

「ブランゴの縄張りの外に出られたのかもね。」

実は二人が洞窟に駆け込んだ時点でブランゴは引き返していたのだが、走るのに夢中の二人はとっくの昔にブランゴがいなくなったことに全く気付いておらず、手頃な壁を見つかるまで無駄に走り続けていたのだった。

「ブランゴから逃げ切ったのはいいけどよ、洞窟って薄暗いし何か出てきそうで不安になるな。」

「そう？ 私としては暗い方が落ち着くけどなー。」

ブランゴがいなくなったことで緊張の糸が切れ、それにより走り続けたことによる疲労が徐々に込み上げてきた二人は息を整えるついでに駄弁って時間を潰す。

「そりやお前が夜戦好きだからだろ……ひゃあっ!？」

突然、天龍の首元にヒンヤリと冷たくてプニプニとした感触の物体が触れた。

反射的に物体を掴み取って見ると、そこにいたのは白くブヨブヨとした皮膚に包まれた、全長40cmはありそうなヒルのような姿をした生物であった。

「ギイ……ギイ……。」

「うわっ何だコイツ、気持ち悪ッ!」

「そんなに気持ち悪いかな？ 私はこういうの結構好きだよ。プニプニでスベスベだし、生き物として未成熟な感じが普通に赤ちゃんみたいで可愛いと思う。」

「お前精神状態おかしいよ……。」

ホラー映画に出てくるクリーチャーのような薄気味悪い外見のヒル状生物を可愛いと言い張る川内に天龍はドン引きである。

「多分天井に張り付いてたのかな、天龍を獲物だと思って落ちてきたのかも？ ヒルに似てるから血を吸ったりしてね？ それにしても天龍がひゃあって、ひゃあだってプププ……。」

「ええい笑うな！ それよりこいつの情報はないのかよ!？」

「んー、ノートを見る限り書いてないっぽいね。つまりこれって新発見だよ新発見！ 新種の調査も大事な任務、写真撮ろう！ そのままそいつ持っというー!」

「ちよっ、他人事だと思って無茶言うな！ こいつ噛み付いてこようとすんだよ！ 本当に血を吸われたらどーしてくれんだ!？」

天龍に掴まれたままのヒルはギイギイと鳴きながら身をよじって暴れる。

たまに首を伸ばして短い牙が並んだ丸い口で噛み付いてこようとするので油断も隙もあつたものではない。

必死にヒルを抑える天龍をよそに呑気にカメラの準備を始める川内。

ボトツ……ボトツ……ボトツ……。

「えっ？」

そんな天龍と川内の頭上から何匹ものヒルが降ってきた。

一匹だと思つて油断したところに大群が現れるとは、何やらデジャヴを感じる展開である。

しかもそれらのヒルは全長1メートル程はあり、明らかに最初の個体より大きい。

何よりヒルの大群は二人が入ってきた洞窟の入り口の方角に陣取っており、逃げようにも退路を塞がれてしまっている。

「どうすんだよ、この状況？こいつら身体はデカいし数も尋常じゃないぞ、こんなのに集団で血を吸われたらミイラになるって！」

「だっ、大丈夫！見るからに動きは遅そうだし、体型から考えて攻撃方は噛み付き一択！ブランゴに比べたら戦闘力は確実に劣ってるはず！」

「そつ、そつだよな……さつきのに比べりゃこのくらい！」

天龍は持ってたヒルを放り捨てると背中中の太刀に手を掛け、川内もカメラを取り出すのをやめ、背中中の狩猟笛を意識しながら身構える。

ドスン！

次の瞬間、天龍と川内の前に巨大な生物が落ちてきた。

背部は光沢を帯びた白色をしており、腹部は逆に暗い赤色をしている平べったい巨体。

目も鼻も耳もなく、短い牙がびつしりと並んだ丸い口のみが存在する顔。

本来目があるべきところにはウネウネと脈動するピンク色の部位があり、これがまた嫌悪感を煽る。

尻尾と思わしき部位は頭部と同じ形状をしており、まるで頭部が二つあるようだ。

周囲に眷属のようにヒルを侍らせるその姿は、まさにヒルの王と呼ぶにふさわしい。

BGM：零下の白騎士／ベリオロス

「また新種!」

「ウヒイツ!?!何だ何だ何だ、今まで見てきた中で一番気持ちわりいバケモノだ!ひよっとしてブランゴどもが引き返したのってこいつがここにいたからなんじゃ……って危ない、何か吐き出した!」

突然の事態に動揺している天龍と川内に向けて怪物はおもむろに口から紫色をした粘液を吐き掛けた。

粘液は二人の間をすり抜けてそのまま後方に着弾し、ゴポリという音を立てつつ刺激臭のあるガスを発生させる。

振り返らずともこの臭いだけで理解した。

この粘液の正体は猛毒であり、浴びてしまえばひとたまりもないということだ。

「うわ、こいつ毒吐くのかよ!?!今度はどうすんだ!?!新種の調査も大事だが、この状況でまだ調査なんて言わないよな?解毒薬なんか一本も持ってないのに、こいつとやり合うのはマズいぜ!」

「うん、流石にこれは想定外。せめて写真の一枚でもほしかつたけど今度ばかりは逃げるよ!」

「と言っても出口の方はあいつに塞がれてる、どこに逃げんだ?」

「そりゃ洞窟の奥の方だよ!どこかに抜けられるかもしれないでしょ!?!」

「しゃーねーな。行き止まりだったら恨むからな!」

「その時は一緒にやられてあげる！それにクエスト申請は出してるから、負けてもレンタクが来てくれる。少なくともそのまま食べられちゃうようなことはないから安心して！」

「ハッ、そりやありがたいこった！」

本日二度目の逃走劇。

今回は足元が安定しているので先程よりも早い速度で走れているのだが、怪物もその鈍重そうな見た目からは考えられない程のスピードで迫ってくる。

しかも走り方がこれまたおぞましく、つい振り返ってしまった天龍は振り返ったことを後悔した。

「ヤベツ、今見たが距離が近くなってるぞ！」

「このままじゃいずれ追い付かれるってこと!?!だけどこの洞窟多分行き止まりだ、私達の出す音が向こう側から反響してる！出口があるのなら音が返ってくるはずないもん！このまま進んでも逃げられない以上、どうにかして撒かないと！」

「撒くつつたつて相手はデカい上に速いし、しかもこのまま進めば行き止まりときた！こうなったらどっちかが足止めでもするか!?!」

「それはどうしようもなくなった場合の……あつ、あれ見て！あそこの壁の上、何かいる！」

「まさかこの状況で新手……何だありや？小人か!?!」

このままではどうやっても逃げ切れない。

そんな状況に絶望すら感じ始めたとき、川内が洞窟の壁に何かを見付けた。

そこにいたのは角の付いた茶色の毛皮を被った小人のような生き物があり、片手にはモリを持っている。

「ウイツキキーツ!!」

「グボオ!?!」

小人はモリを構えると、小柄な体格からは想像出来ないほどの勢いで怪物に投げ付けた。

モリはそのまま怪物の眉間へと突き刺さり、怯んだ怪物は思わず足を止める。

「「「ウイキーウイキーウイツキキー!!」」」」

怪物が動きを止めた瞬間、地中から小人の仲間が大勢飛び出しモリの集中砲火を開始した。

モリの雨を浴びている怪物は完全にバランスを崩しており、前にも後ろにも動けずされるがままである。

「すげえ、あの化け物の動きをああも簡単に止めるなんて……ん？」

「キツキツ!」

「ひよつとして付いてこいって言うてんのか?」

「キツ!」

ふと天龍が違和感を感じ視点を下げると、最初にモリを投げた小人がすぐそこに立っており、天龍の服の裾を引っ張っていた。

引っ張られるがままに付いていくと、すぐ近くの洞窟の壁に人間が匍匐前進をしてようやく通れるレベルの小さな横穴が開いており、小人は迷うことなく穴の中へと入っていった。

「ここに入るの!? どうする天龍、この小人信用する?」

「このままここですじつとしててもしょうがないだろ、もしもこれが罠ならその時また考えりゃいい! 本当はスカート履いたままこんなところ取りたくなかったがそれは我慢だ! 川内、この穴に逃げ込むぞ!」

「しょうがないなあ。」

天龍と川内はまず先に背負っていた武器を穴へ押し込むと、続けて穴の中に潜り込んでいくのであった。

天龍ちゃんとアイスがボーン！3

小人達の導きにより横穴へと逃げ込んだ天龍達。

そのまま腹這いになって進んでいくとやがて広い場所へと出た。

「ウイーキッ！」「キツキー！」「キイー！」

「うわあ、小人がいっぱいいる……。」

「うーん、これも調査の一環だし写真撮ってもいいのかな？いやでも勝手に撮ったら流石に怒られるよねえ。」

そこは小人達の集落であった。

広い空間には仕留めた獲物のものと思われる骨や毛皮が多数あり、彼らの武器であるモリやハンマーなどもそこら中に置かれている。

洞窟の奥ではあるが窓の代わりなのか壁に直径2メートルくらいの大きな穴が開けられており、そこから外の冷たい空気と光が入り込んでいる。

至る所にいる小人達は全員天龍達のことを観察するように見つめており、少し居心地が悪い。

天龍達を横穴へと案内してくれた小人は二人を集落の中央まで連れてくると、姿勢を正しながら二人の方へ向き直った。

「ウイツキー！ウーイッ！ウイツ！」

「えっ？」

「ウイツウイツ！ウイキー！」

「何言ってるの？天龍分かる？」

「全然分からん？……って何だ!?アイテムポーチが勝手に!?」

小人は二人に向かって何かを喋っているのだが二人にとってはウイキウイキとしか聞こえず、何を言っているのかさっぱり分からない。

言語の違いというブ厚い壁に阻まれて異文化コミュニケーションに大苦戦していると、突然天龍のアイテムポーチがモゾリと動いた。

驚いた天龍がポーチに手を入れてみると、何やら硬質なものに手が触れる。

こんなもの入れたっけと思いつつもそのまま掴んで引つ張り出せば、中から出てきたのは紫色の塗装がされた隻眼の長10cm砲ちやん。

「ヤア旦那サン！オ困リノヨウダネー！」

「えっ、お前はマサムネ!？」

彼は天龍のオトモであるマサムネ。

マサムネは戦いの苦手な平和主義者のオトモであり、天龍は普段から彼を狩猟には連れて行かずに交易をさせていた。

当然今回のクエストにも連れていくつもりはなかったのだが……。

「お前何でアイテムポーチの中なんかにいるんだよ!?!そもそもいつからそこにいたんだ!？」

「今回ノ出撃デ旦那サンガ困ツタコトニナル予感ガシタンダゾー。ダカラ旦那サンヲ助ケスルタメニ鎮守府ヲ出ル前カラ、コツソリアイテムポーチノ中ニ潜ンデイタンダゾー。」

アイテムポーチはいわゆる四次元収納空間となっており、明らかにポーチに入りそうもない大きな物や重い物でも詰め込むことが出来る。

マサムネはこれを利用して、天龍にバレずにこっそり着いてきたのだった。

「勝手に着いてきたのかよ、着いてきたいなら普通にオレに言えばいいじゃん。」

「コノ島ハモンスターガイルカラ、普通ニ歩クト戦闘ニナツテシマウンダゾー。ダカラ隠レテ行ク必要ガアツタンダネー。」

「メガトン構文やめろ、そんなに戦いたくねーのかよ。」

「ソナナコトヨリ旦那サン、言葉ガ通ジナクテ困ツテルンデシヨー? コナナコトモアロウカト、着イテキテ正解ダツタゾー。」

「こんなこともあるのかとって、お前何が出来るんだよ?？」

「フツフツ、実ハボクコウ見エテ世界中ノ言語ニ詳シインダヨ。」

「マジで?？」

「彼ラノ言葉モバツチリ分カルヨー！ボクガ通訳スルカラ任セテネー！」

マサムネはそう言うのと小人の元へ行き話し合いを始めた。

天龍の耳にはお互いにウキヤウキヤ言っているようにしか聞こえないが、話はちやんとまとまったようで、マサムネは自信に溢れた顔で天龍の横に戻ってきた。

『ワレラはボワボワ、遙か昔からこの地に住まう戦士の一族ダ。』
「私はクロオビ鎮守府の川内、こっちは同じくクロオビ鎮守府の天龍。」

毛皮の小人は自らのことをボワボワと名乗った。

尤もこれはマサムネの翻訳によるものなので翻訳そのものが間

違っていたらどうしようもないのだが、その可能性は考えないことにする。

あまりそのような意識はないが、一応鎮守府の先輩狩娘として川内が話し合いの場に立つ。

『センダイにテンリユウか、覚えタ。センダイとテンリユウ、キミラは狩人カ?』

「違うよ、私達は狩娘。今の時代に狩人は多分いないんじゃないかな?」

天龍がクロオビ鎮守府で建造されたその日、神通にかつてこの島には狩人と呼ばれる者達が存在していたということを説明されていた。

強大なモンスターを狩猟することを生業とする狩人、そしてその勇猛な魂を受け継いだ艦娘を狩娘と呼ぶのである。

『そうか、狩娘というの力。とはいえキミラが持っている武器はワレラが知る狩人とよく似ている。その武器は巨大なモンスターを狩るのに使っているのダロウ?』

「うーん、モンスターよりも深海棲艦を狩る方がメインなんだが大体そんなところかな。」

『ならばキミラも狩人ダ。』

「うん?」

よく分からないうちに謎の理屈で狩人認定された川内達だが、ボワボワはそのまま話を続ける。

『つい先日までこの島に一人の狩人がいたのダ。大きな剣を背負い黒く長い髪をした女の狩人。彼女はキミラの同胞カ?』

「ひよつとしなくてもそれって長門のこと?」

『ナガト?』

「長門は同じクロオビ鎮守府に所属してる私達の仲間で、任務でこの島を調査してたんだよ。私達は長門と入れ替わりでこの島の調査に来たの。」

『なるほど。チンジユフというのが何なのかは知らないが、ナガトと呼ばれる狩人がキミラの同胞だということが分かればそれで充分ダ。』

長門について情報を得たボワボワの雰囲気が変わる。

『ワレラは見ていタ、キミラのことをずっと見ていタ。キミラがこの島に上陸して、そしてあの洞窟でピンチになるまでずっと見ていたノダ。』

「見てた？ 私達をずっと監視していたってこと!？」

『そうダ、そしてワレワレはキミラと同じようにそのナガトの様子もずっと見てイタ。それを踏まえた上で言わせてもらウ。』

『キミラにはがっかりシタ。』

「な、なんだと!？」

いきなり侮辱されたことに天龍達は啞然とするが、ボワボワは話を続ける。

『ナガトは素晴らしい戦士ダ。彼女は雪獅子の手下の群れを相手にたった一人で全滅させ、その直後に乱入してきた白兔獣も休むことなく戦い返り討ちにシタ。巨獣は相手にたまたま敵意がなかったとはいえ、臆することなく近付き抜け毛を採取シタ。雪鬼獣とも互角の勝負を繰り広げ、最終的にはヤツの片腕の鈍氷を破壊することで追い返したのダ。』

「雪獅子？ 白兔獣？ 巨獣？ 雪鬼獣？ 川内、何のことか分かるか？」

「きつと長門がこの島で調査したモンスターのことだと思ウ。雪獅子はさっきのブランゴ。白兔獣はウルクススじゃないかな？ 巨獣は毛を採ったって言ったしきつとガムートだね。雪鬼獣は腕の鈍氷って

言つてたから多分ゴシヤハギのことだと思う。全部ノートに書いてあるから後で見せてあげる。」

聞きなれない名前を連続で出されたが、それらはどうやら長門が調べたモンスターのこのようだった。

『ワレラの先祖はかつてゴキダンと名乗る一人の狩人と友となり、共に狩場を駆けたことがあつたそうダ。』

ゴキダンなんて変な名前だなあと天龍は思っているが、実際は五期団というのはその狩人が所属していたチームの名前であり、狩人本人の名前ではない。

しかしそもそもそのボワボワが勘違いをしており、誰も訂正することなく話は進んでいく。

『ゴキダンは強く勇敢な素晴らしい戦士ダ。ワレラはゴキダンの友となつたことを今でも誇りとしており、今でも一族に語り継いでイル。ナガトも同じく強く勇気のある戦士ダ、ワレラは強きモノを貴ぶのだ。だがキミラは逃げてばかりダ。キミラは二人なのにナガトが一人で倒した雪獅子の手下からすら逃げ出しタ。キミラは本当にあの勇敢なナガトの同胞なのか?とてもナガトと同じ戦士には見えナイ。』

「てめえら、オレ達が腰抜けの臆病者だつて言いてエのか!？」

ボワボワの言いたいことを理解し、その内容に腹を立てて喧嘩腰になる天龍。

だがボワボワはそんな天龍の怒りをも軽く受け流す。

『違うのか?この地は誰もが常に戦つてイル、大人しく争いとは無縁そんな草食獣ですら生き残る為に戦い続けているのだ。最初から戦うことを放棄した弱きモノにこの地はふさわしくナイ。弱きモノがこの地にいることは許されナイ。今回はワレラが助けたガ、キミラがこのまま逃げ続けていけばいずれ逃げ切れなくなり命を落とス。悪いことは言わナイ、命が惜しくば即刻この地から出ていきタマエ。』

「好き勝手言いやがって!帰れとかてめえら一体何様のつもムグツ!？」

「落ち着いて落ち着いて、ここは私が話すから。」

完全に頭に血が上った天龍は啖呵を切ろうとするが、このまま喧嘩されては話がこじれて任務どころじゃなくなると思った川内は慌てて天龍の口を塞ぐ。

「狩娘の役目は自然の調和を保つことなの。自然の存在ではない深海棲艦ならいつでも狩るけど、意味も無く何の罪もないモンスターを狩ることは禁じられてる。それは自然の調和を乱すことだから。長門が色んなモンスターを狩っていたのは生態調査の任務があったからで、それに報告でも必要以上の狩りはしなかったと聞いているわ。何より私達の任務は長門とは別だから、消耗を避けるためにも無駄な戦闘はしたくなかったの。」

『つまりキミラは目的のために逃げざるを得なかっただけで、本当は勇敢な戦士だと言いたいのか?』

「そう!それに逃げ切れなかったらちゃんと迎え撃つ気もあつたんだよ。私達は極端に言えば戦うために生み出された生まれながらの戦士!いや本当は戦士じゃなくて兵士なんだけど……。とにかく私達は伊達や酔狂で狩娘や艦娘なんて名乗ってるワケじゃないんだよ。」
『フム……。』

川内の話を聞いたボワボワは少し考えた後に、再び口を開く。

『ならばキミラの勇気をワレラに示すのダ。そうすればワレラだけでなく、この地もキミラのことを認めるダロウ。』

「勇気を示すっていつでも何すればいいの?何かモンスターを狩ってみせればいいの?」

『そうダ、大物を仕留めるのダ!キミラの力を見せてミロ!』

「だったら丁度いいや、私達の任務はこの背ビレの持ち主を調べることなんだよ。もしこの背ビレの持ち主を狩ったら私達のことを認めてくれる?」

『なるホド、コイツカ……。運命的なものを感じるナ、ワレラの先祖とゴキダンが初めて共に戦った記念すべき相手もこのモンスターだったそうダ。いいダロウ。ワレラにとっても感慨深いこのモンスター、コイツを狩ればワレラはキミラのことを立派な戦士だと認めヨウ。』

川内は例の背ビレの写真を取り出してボワボワに見せた。

どうやらボワボワはその写真の相手と因縁があるようようで、狩りの相手に相応しいと判断したようだった。

「ひょっとしてこの背ビレの持ち主のことを知ってるの？ だったら詳しく教えてほしいんだけど……。」

ボワボワの反応を見て今回のターゲットに心当たりがあると判断した川内は、詳細を聞き出そうとする。

『悪いがそれは言えナイし、言わナイ。ここでキミラにワレラがコイツのことを教えてしまつては意味がナイ。ワレラが与えた情報で勝利してモ、それはキミラの勝利の価値を下げるからダ。確かに情報は立派な武器ダ、事前に情報を集めるのは当然の戦略ダ。だがキミラが努力して手に入れた情報と、ワレラが与えた情報とではその価値は大きく違ってクル。勝利とは与えられるものではナク、自ら掴み取るものなのダ。』

川内の提案を一蹴するボワボワ。

だがボワボワの言うことにも一理あると考えた川内は引き下がる。ボワボワから情報を提供された場合、それは彼らの助力を受けたことになる。

与えられた勝利、勝利の価値を下げるというのはそういうことなのだろう。

価値の低い勝利ではボワボワを納得させることは難しい。

彼らを納得させる勝利を得るためには、ボワボワの助力無しに勝利しなければならぬというわけだ。

『安心しろ、コイツの居場所をワレラは知つてイル。狩りの手助けはしてやれないガ、コイツの住処までキミラを案内してやることは出来ル。ワレラはキミラの勇敢な姿が見たい、だからキミラを狩場まで導くのだ。』

目の前のボワボワはそう言うのと両手をパンパンと鳴らす。

するとその音を聞いた他のボワボワ達はボワボワの被り物を模した物体を取り出し、そしてそれに火を付ける。

物体が焼けると同時にモクモクと煙が立ち昇り、煙はそのまま大きな壁の穴から外へと出ていく。

『これは救援ののろし、ワレラが戦いに赴く際に使っているものだ。』
やがて物体が燃え尽きて煙が止むと、壁の穴からひよっこりと黒い
獣の頭が顔を覗かせる。

黒い頭はそのまま穴からするりと這い出ると、壁伝いに降りてき
た。

穴から出てきたことであらわになつたその姿はイタチに似ている
が、サイズはトラよりも大きい。黒いのは頭と手足だけで他は全て
モッフモフの白い体毛に包まれており、この寒い地域に適応した生物
であるということが一目で分かる。

大イタチは天龍と川内の前で止まるとそのまま伏せの態勢になつ
た。

「このイタチみたいなのはモンスターは？」

『カレはウルグ、ワレラの盟友だ。ウルグはワレラと共に狩場を駆ケ
ル。今回はカレがキミラを狩場へと連れて行ってくれるダロウ。
さあカレの背に乗りタマエ。』

言われるがままに天龍と川内はウルグの背に跨つた。

「当然マサムネは来ないんだよな？」

「ボクジャ足手マトイニナルカラネー、ココデボワボワト一緒二旦那
サンノ無事ヲ祈ツテルヨー。」

そう言つてマサムネは手を振つた、明らかに二人を見送る体勢であ
る。

『恐れることはナイ。確かにワレラは手を貸さないが、別にキミラの
力のみで戦う必要はないのだ。』

これから出発ということでも多少なりとも緊張している天龍達の内
心を見抜いたのか、ボワボワは不思議なアドバイスを送ってきた。

「お前は手は貸さないのにオレらの力以外は使つていいってどうい
うこつたよ。」

『このような格言がアル……。』

あるものは全て使え

『ゴキダンが使っていた言葉だ。あるものは全て使え！周囲をつぶさに観察しろ！想像力だ！体のみならず頭を使え！戦いの本質を突きたい言葉だ。相手は自分より力も体格も上回る真正銘のモンスター。そんな相手に真っ向勝負を挑むのはただの蛮勇だ。勇気と蛮勇を履き違えてはならない。ゴキダンは時には地形を利用し、時には他のモンスターと同士討ちさせることだ、自分より強いモンスターと渡り合ってキタ。周囲の環境を利用するのも立派な戦術、あるものは全て使えとはそういうことだ。キミラも馬鹿正直にモンスターと戦うのではなく、あるもの全てを使って勝利を手にするのだ。』

「あるものは全て使えか……。分かった、やれることは全部やれってことだな。」

『そういうことだ。では行け、センダイとテンリユウ。務めを果たし、この地にふさわしい戦いを見せてミヨ。』

ボワボワのその言葉を合図に、ウルグは二人を乗せているとは思えないほどのスピードで壁に取り付いた。

そしてそのままヤモリのように壁を登っていき、大きな穴へと飛び込んでいく。

「わあ、外だ！やっぱり冷たい！」

「くう、眩しいぜー！」

穴の外は当然洞窟の外、ホットドリンクを飲んでいるとはいえ相変わらず冷たい風が二人の肌を撫でる。

降り積もる白い雪は光を反射し、洞窟の暗がりに慣れた二人の目に眩しく突き刺さる。

「わっ！動き出した!？」

「うおっ!?!落ちる落ちる!!」

寒さと眩しさに参っている二人を無視してウルグは勢いよく走り出す。

サドルもなく、手綱もハンドルもない自動運転の生きたバイクとでもいうべきウルグ。

そんなウルグの突然の加速に天龍と川内は振り落とされないうように必死にその背にしがみ付くのであった。

天龍ちゃんとアイスがボーン！4

背に天龍と川内を乗せたまま雪の森を駆け抜けるウルグ。

ときおり立ち止まっては地面の匂いを嗅ぎ、そしてまた走り出す。

それを繰り返して、やがて森を抜けて開けた雪原に出た。

「フウンッ！」

雪原に出たウルグは周囲を確認して立ち止まるとその場にペタリと伏せた。

そして首だけで振り返り、天龍と川内の方を向いて一咆えする。

「どうしたんだコイツ？」

「降りろって言いたいんじゃない？」

天龍と川内がウルグの背中から降りてみると、ウルグはスツと立ち上がり森の方へと引き返していく。

やがてウルグの姿は雪や木々に紛れて見えなくなった。

「さて、ここで降ろされたからにはこの辺にあの背ビレがいるはずだけど……。」

そう言いながら辺りを見渡そうとするが、見渡す間もなくヤツは来た。

「川内ッ！あれを見ろ！」

二人の前に雪を掻き分けながら現れたのは、写真に写っていたのと全く同じ黒い背ビレ。

背ビレは雪の中を泳いでいるとは思えないほどスムーズかつ悠然と進んでおり、そのスピードは二人の全力疾走をも上回っている。

背ビレは二人を認識しているのか、雪を撒き散らしつつどんどん接近してきていたのだが……。

「消えた!？」

二人の目前まで来た途端、背ビレは雪の中へと沈んで消えていった。

「嫌な予感がする、このままここに立ってるのはマズいよ！」

天龍と川内は己の直感に従いその場から飛びのいた、次の瞬間……。

ドオオオオン!!!

さつきまで二人が立っていた場所から雪を突き破り、巨大な生物が飛び出してきた。

その姿は分かりやすく言えば足の生えた古代魚といった感じであり、ここだけで判断すればユーモラスな生物に思える。

しかし一目で肉食であることが分かる口腔からはみ出た太く鋭い牙、こちらを獲物としか見ていない青白い瞳、全身を覆う黒と黄色の硬質な鱗、一際目立つ巨大な一本角、そして18メートルはあろうかという巨体がこの生物の危険性をこれでもかかとアピールしていた。

『クアア……バラバラバラララ!!!』

雪の上に胴体で豪快に着地した古代魚は大きく息を吸い込むと咆哮を上げる。

「ど、どう見ても深海棲艦じゃないよな？」

「そだね、これは現地の大型モンスター。泳ぎに適した形に進化した結果、深海棲艦と似た姿になっただけ。背ビレの正体が深海棲艦じゃないって分かった以上、本来ならここで任務を終わらせてもいいんだけど……。」

「分かってる！ボワボワが見てるってんだろ!?あそこで啖呵切つって今更引き下がるか！任務に関係ないからってここで帰ったら、一

生ボワボワに軽視されたままになるだろ！それに今後また任務でこの島を訪れるようなことがあったとき、ボワボワに敵対されてたんじゃない支障をきたす！そんなの認められるか！」

「そこまで分かっているならいいわ、なら私達がやるべきことは一つだね。」

「ああ！コイツを討伐して、オレ達の勇気と実力を見せ付けてやれ！」
「ターゲット、暫定的に凍魚と仮称。これより交戦を開始する！」

BGM：凍て地に轟きし猛哮

二人の闘志を感じ取ったのか、大量の雪を巻き上げながら敵意剥き出しで突進してくる凍魚。

来るのが分かっていたら避けるのは容易と、二人は散開しようとしたが……。

「くっ、分かっちゃいたが足元が雪だから動きにくい！」

雪により退避が遅れてしまった天龍、その隙を見逃さない凍魚は突進の勢いを利用して飛び上がった。

「うおおっ!？」

このままでは潰される、そう判断した天龍は恥も外聞もかなくり捨てて、その場から全身を投げ出すような動きで回避を試みる。

これは通称ハリウッドダイブ、正式名称は緊急回避と呼ばれるれっきとした回避方法なのだが、攻撃を避けるためとはいえ、顔面から雪の中へ突っ込むことになった天龍の姿は無様の一言であった。

直撃は避けたものの、天龍のすぐ側に凍魚の巨体が落下したことで大量の雪が舞い上がる。

舞い上がった雪は当然のように倒れている天龍の背中へと降り注いだ。

「畜生、やりやがったな……って、なんだこりやあ!？」

攻撃を避けた天龍はその場で立ち上がるとすぐさま反撃しようとするが、自分の意に反して腕はピクリとも動かない。

ふと自分の身体を見下ろせば、両腕と胴体を覆うように雪の塊が付

着しており、腕が全く動かせなくなっていたのだ。

その姿はまるで雪だるまである。

「この雪おかしいぞー！ただの雪なのに固まってて全然取れねえ！」

この固まった雪の性質にはカラクリがある。

凍魚の体表からは雪を固める性質を持った粘液が染み出しており、この粘液を使うことで凍魚は身体中に雪を纏っているのだ。

体表から剥がれ落ちた雪にも当然雪を固める粘液が付着しており、その雪を浴びたことにより天龍の身体も雪で固められてしまったというわけなのだ。

「クソがつーこのままじゃ手も足も……いや、足は出てるか。とにかく手が出ねえぜ！」

「こつち来てー！私が叩き割るからー！」

「イテツ!？」

雪だるま状態のまま、その場から走って逃げだす天龍。

川内が天龍を覆う雪に狩猟笛を叩き付けると、思いのほかあっさりと雪は剥がれ落ちた。

「感謝するぜ川内、反撃だツ！」

再び雪の中に潜行するべく、その場で腹這いになって雪を掻き分けている凍魚。

その隙だらけの背中に天龍は太刀を振り下ろす。

ズムツ……。

しかし太刀から伝わってくるのは、今まで感じたことのない妙な手ごたえ。

直撃させたにも関わらず、まるでダメージが通った様子はない。

「ゆ、雪だー！身に纏った雪で攻撃を受け止めやがった!？」

凍魚が全身に纏った雪の塊は、衝撃を和らげるクッションの役割を果たす。

硬過ぎず、柔らか過ぎない絶妙な硬さを持った雪の装甲が、太刀の斬撃を包み込むように無効化したのだ。

「天龍下がって！そういうものを引っぺがすなら打撃武器の出番！」
天龍と交代で飛び出した川内は凍魚の背中に狩猟笛を思いっきり叩き付けた。

当然のように雪の装甲に阻まれる狩猟笛の一撃、ここまでは先程の太刀の下りと全く同じである。

ピシッピシッ……バキン！

しかしここからが違った。

狩猟笛を受け止めた雪の装甲はヒビが入り、そのまま砕けて表皮から剥がれ落ちた。

「ハンマーや狩猟笛は叩き壊すのなら得意なんだよね。それ、もう一丁！」

流れるような動きで凍魚の巨大な角にも狩猟笛を叩き付けると、その衝撃で頭部の雪も同様に剥がれ落ちる。

「どう？これで少しは攻め易くなったでしょ？」
「上出来だ！今度こそ喰らいやがれ!!」

雪の無くなった凍魚の背中に再び太刀を振り下ろす、今度こそ確かな手ごたえ。

凍魚の皮膚に斬撃の痕を刻み込み、ワントンポ遅れて傷口から舞い上がった血飛沫は、外気に冷やされてあつという間に赤い結晶に変わる。

『バラバラララララ!!』

凍魚は一瞬痛みに悶えたものの、素早い動きで天龍達から距離を取ると、雪の中を円を描くような動きでグルグル泳ぎ始めた。

「何やってんだ……って、ああっ!？」

回転を止めた凍魚の全身は先程の巻き直しのように、再び雪の装甲

で覆われていた。

「どーすんだよ、もう一度雪を剥がそうにも何度も同じ手が通じるとは思えねーし。このままじゃキリがないぜ?」

「うーん、そうだ!」

「おっ、何か閃いたのか?」

「相手が雪を纏うなら、纏えなくしちゃえばいいんだよ。」

「纏えなくする? そんなこと言ったってどうやって? 辺り一面雪まみれだぜ?」

「ほら、ここに来るまでにウルグに乗せてもらったでしょ。その時に景色を眺めてただけけど、途中でスケートリンクみたいに凍り付いた海があったのを覚えてない? そこなら雪がないから装甲を纏われる心配も無いし、足場も安定しているから有利に戦えるよ!」

「なるほど。でもこの雪原がアイツの縄張りなんだろう? 普通生き物つて縄張りから出ないものなんじゃないか? どうやってここからおびき出すんだ?」

「それにはこれを使う。」

川内が天龍に見せたのは狩猟笛。

「狩猟笛は笛というだけあって音を鳴らすことが出来るんだけど、この音にはモンスターへの注意を引き寄せる効果があるんだよね。それを利用してアイツをここから連れ出す。」

「了解! フォローはしてやるからしくじんなよ?」

『カンカンカカコカン♪カカカカココココカンコンカン♪』

狩猟笛、那珂ちゃんマイクから軽快な音が鳴り響く。

『クアア……? バルルル!!』

その音を聞いた凍魚はにわかに興奮し始めた。

尾ビレを雪に叩き付け、鼻息は荒くなる。

「よっしや、乗ってきた! 乗ってきたんだよな? あの魚が那珂ちゃん

のファンだったってことはないよな?」

「那珂ちゃんには悪いけどそれはないでしょ?それじゃ氷の海までひとっ走りするよ!」

『バラバラララララ!!』

走り出す二人と、それを追う凍魚。

明らかにスピードに差があるが、そこは天龍が雪玉を投げ付けて凍魚の気を逸らすことで補う。

幸い雪原と氷海の距離はそこまで離れておらず、二人は5分と掛からず氷海に到着した。

「おおっと!?!氷の上って油断していると滑るな!これで本当に有利になんのか!?!」

「それなら油断しなきゃいいでしょ!それより仕上げの演奏よ!ここで引き返されちゃ堪らないからね!」

雪原を離れ、雪が浅くなってきたことで全身を埋めることが出来なくなった凍魚は普通に地面を走って二人を追ってくる。

雪がないのを嫌がった凍魚が引き返すのを阻止するため、川内は再び那珂ちゃんマイクを構えた。

『カンカンカカコカン♪カカカカココココカンコンカン♪』

『バラバラララララ!!』

演奏により判断力の低下した凍魚は、とうとう氷の上に足を踏み入れた。

「よっしゃ!作戦成功だ……って何か揺れてねーか?」

「え、何?演奏の音でよく聞こえない。」

作戦成功に喜ぶ天龍だったが、ふと足元から揺れを感じた。

しかし演奏が続いている川内にはよく伝わっていないようだ。

「だからホラ、足元が何だか揺れてるような……うわっ!?!」

「きゃあっ!?!」

急に揺れが激しくなり、思わずふらつく天龍。

最初は凍魚の巨体に乗ったことで氷が割れ始めたのかと思ったのだが、実際はそうではなかった。

なぜなら揺れの震源地はあろうことか川内の足元から発生していたからだ。

揺れにより演奏どころでなくなった川内がその場で尻もちをつくと、尻の下の氷に少しずつヒビが広がっていく。

「川内のケツが氷を割ったのか!？」

「こんなときに何ワケの分かんないこと言ってるの!?!それよりこれどうなってんの!?!」

ドオオオオオオ!!!

「ぐわああああ——ッ!!」

「せ、センダイ——ン!!」

川内の真下の氷を突き破って巨大な影が飛び出す。

かち上げられた川内は見事な車田飛びを披露し、べしやりと顔面で氷の上に落下した。

氷の中から飛び出してきたのは手足の生えたサメとでもいうべき巨大な化け物。

化け物は氷の上に着地すると、川内の方に視線を向ける。

「川内しっかりしろ!!」

「うぐ、失敗した……。いいアイデアだと思ったのに、ターゲット以外のモンスターも刺激しちゃった……。」

「そんなこと言ってる場合か!?!サメの化け物だぞ、化け鮫だ!」

音を鳴らした張本人である川内の方に視線を向けていた化け鮫だが、自分以外の巨大な生物がいるのに気が付くと、そちらに視線を動かす。

そこにいたのは当然凍魚、凍魚と化け鮫の視線がぶつかり合う。

『ギャアアアアア!!!』

『バラバラバラバラ!!!』

お互いに敵意を高め合う化け鮫と凍魚。

想定外のモンスターの出現に、戦況は混沌を深めていくのであった。

天龍ちゃんとアイスがボーン！5

『ギャアアアアア!!』

『バラバラバラララ!!』

凍て付いた海の上にて、互いに敵意剥き出しで咆え合う凍魚と化け鮫。

魚類に酷似した二体のモンスター¹の放つ咆哮は大気を震わせ、天龍と川内の鼓膜も容赦なく揺らしていく。

「うう〜ツ、うっさい!!」

「なんつー馬鹿デカい声だ！そもそも魚が咆えんじやねえ!!」

前後からステレオで浴びせられた咆哮のシンフォニーに反射的に耳を塞いだ天龍と川内。

二体のモンスターは息を合わせたかのように、隙を晒した二人目掛けて突進を開始する。

「やべっ！これ挟み撃ちじゃん！」

「そんなこと言ってる場合!?避けるよ！」

天龍と川内はその場から飛び退くが二体のモンスターは構うことなく突進を続け、氷の海の中央で激突する。

『バルググウウ!!』

『ギャアアアアア!!』

凍魚は化け鮫の鼻先に噛み付き牙を深く突き立て、化け鮫はそれを振り払うべく全身を激しく振り回す。

激しい動きに付いてこられなくなった凍魚はやがて振りほどかれ、振り回された勢いで氷の大地に叩き付けられた。

「縄張り争いね……。」

「縄張り争い？」

「知らないの？モンスターは種類によっては敵対していることがあって、そういったモンスターはお互いの縄張りを守るために激しく争い合うことがある、それが縄張り争い。深海棲艦にも同じような習性があつて、ターゲットの深海棲艦の縄張りに他の深海棲艦を誘導することで縄張り争いを誘発させて狩りを有利に進めることが出来るんだよ。」

「つまり凍魚と化け鮫は敵対関係にあるから、オレ達そつちのだけで争つてゐるってわけだな？」

「そういうこと。」

「あいつらを戦わせることでオレ達が漁夫の利を得る、あるものは全て使えとはそういうことか……。」

このまま凍魚を化け鮫と戦わせ続け、弱ったところを一網打尽にしようと思ふ天龍。

しかし現実はその甘くはない。

『バルラツ!!』

『ギユアツ!?!』

凍魚は今度は化け鮫の脇腹に食らい付くと、先程とは逆に化け鮫を振り回す。

その際に天龍は凍魚と目が合った気がした。

やがて振り回しに勢いが付いて来ると凍魚は化け鮫を投げ飛ばす、投げた方向は天龍達がいる場所。

「うわっ、こつちに飛んで来た!?!」

「あ、あいつ!?!オレ達を狙つて!?!」

飛んできた化け鮫を避けるべく天龍と川内が身構えた、次の瞬間……。

ブオオオオオオオ!!!

「化け鮫が巨大化したア!?!」

「目測が狂った！このままじゃ避けられない!?わああ!!」

「ぐええええ!!」

化け鮫は空中で大きく膨張し、巨大なボールのような姿へと変貌した。

元々大きかった化け鮫の身体、それが更に巨大化したことで天龍と川内は逃げ場を失い、化け鮫の膨らんだ腹部に押し潰される。

『ギユオオー・ギユアツ!・ギユアツ!』

天龍達を巻き込んで氷上に落下した化け鮫だが、落下のダメージなど全く意に介した様子はなく、見た目通りボールのように転がって再び凍魚へと向かっていく。

「いつてえ……。オイ、無事か?」

「うん、このくらいなら耐えられる……。」

化け鮫の腹に押し潰された天龍と川内だったが、思ったより軽傷で済んでいた。

「着地の衝撃を和らげるために膨らんだんだね。お腹が柔らかかったお陰で潰された割にダメージが少なく済んだみたい……。」

「あんの魚野郎、オレ達を狙って投げやがったな!」

「やっぱりあれはわざと?」

「目が合ったんだ、間違いねえ!凍魚は化け鮫とオレ達をまとめて倒そうと考えたんだ!」

最初は化け鮫という強敵が現れたことで、狩娘という格下を忘れて戦い始めたのかと思ったが、それは天龍達の勝手な思い込み。

凍魚は化け鮫も天龍達もどちらも倒すべき敵だと考えて行動していたのだ、そしてそれは化け鮫も同じだろう。

化け鮫も凍魚と戦いつつも、いつでも天龍達を攻撃する用意は整っていたのだ。

「奇遇だな!オレもお前らと同じこと考えてたんだ、お前ら二匹ともまとめてブツ飛ばす方法ってのをな!もちろん川内もいけるよな!」
「当然!それに長門は一人で大戦果を挙げたつのに、私達はモンスターが共倒れになるまで待つてるってのはカツコが付かないでしょ?」

「よし、その意気だ！そこでだ、ちよいと耳を貸せ。オレにいい考えがあるぜ！」

「いい考えねえ……そのセリフって失敗フラグってヤツじゃないの？」

「うるせえ！いいから黙ってオレの話を聞け！」

「うしやああああ!!」

「らあーっ！」

互いに威嚇し合う凍魚と化け鮫、その隙を逃さず天龍は凍魚に、川内は化け鮫へそれぞれ横合いから攻撃を仕掛ける。

『ツ!?バルルルツ!!』

凍魚はいきなり横合いから攻撃されたこともあつて怒り狂い、鼻息

を荒しながら天龍へと角を振り下ろす。

それを読んでいた天龍は身軽にかわし、狙いを外した角は勢い余って足元の氷に叩き付けられた。

大蛇のように硬くて鋭い角、そこに凍魚の怪力が加われば硬い氷にすらヒビが入る。

そんなものが当たればひとたまりもない、しかし天龍はそれを理解した上で敢えて凍魚を挑発する。

「よし、いい調子だ！いいか、相手はオレだ！化け鮫じゃない、オレを狙って攻撃してこい！」

「うわっ!?こ、この手ごたえはー！」

一方で化け鮫に戦いを挑んだ川内は苦戦を強いられていた。

「これってアレじゃん！なんちやらの拳っていうマンガに出てくる、拳法殺しの肉体ってやつー！」

風船のように膨らんだ柔軟な腹部は狩猟笛の打撃の衝撃を分散してしまふ。

川内は負けじと何度も殴りつけるものの、やはり効いた様子はない。

「手数を増やしてもダメか。マンガでは連続で攻撃し続けて肉の壁をかき分けていたけど、現実にはマンガのようにはいかないね。」

『ギヤツギヤツギヤツギヤツ!!』

化け鮫は川内の攻撃が自分には通用しないと理解しているのか、あざ笑うような声を上げるだけで攻撃をしないという余裕すら見せている。

この柔らかい肉体を攻略するのであれば、斬撃武器を持っている天龍と役割を交代してもらおうのが一番手っ取り早い。

しかし肝心の天龍は既に凍魚と交戦中である、それに打撃が効かな

いくらいで川内は諦めない。

私は拳法家じゃないんだけどなと愚痴りながらも、改めて狩猟笛を構える。

「マンガの拳法殺しも結局は拳法で倒されたんでしょ？同じように狩猟笛にも打撃が効きにくい相手を攻略するやり方っていうのはあるからね！」

川内は狩猟笛を大きく振り回し、最後に蹴り上げることで気合を入れる。

「ハアッ！狩技・アニマートハイ!!」

「殴りごたえはなかったけど、何度も殴らせてくれたお陰で旋律も狩技の力も溜まってんの！狩猟笛の真骨頂を見せてあげるッ！」

『カンカンカカコカン♪カカカカココココカンコンカン♪』

化け鮫の前で演奏を開始する川内。

『ギヤアアア!!』

演奏の音色は相対してるモンスター達の神経を逆撫でる。

先程まで余裕を見せていた化け鮫も演奏によって攻撃的になり、積極的に川内に攻撃を始めた。

「遅いよっー！」

勢いを付けて飛び上がり、膨らんだ腹部でのしかかり攻撃を仕掛ける化け鮫。

しかしその程度で川内の演奏は止まらない、演奏をしながらも流れるように回避する。

『カンカンカカコカン♪カカカカココココカンコンカン♪』

続いて化け鮫はゴロゴロと転がり、膨張した全身を使って川内を押し潰そうと試みる。

「だから遅いつてのー！」

しかしそれも当たらない。

先程の焼き直しのように川内は演奏を続けたままヒラリと回避する。

「アニマートハイは演奏中に回避行動をとれるようになる狩技！そんな大振りな攻撃じゃ避けて下さいつて言ってるようなもんだよ！そしてこの那珂ちゃんマイクの旋律効果は……。」

演奏を終えた川内は演奏前と同じように化け鮫の膨らんだ腹部へと狩猟笛を叩き込む。

ズドムツ!!

『ギヤアツ!?!』

今まで全く効果がなかった打撃、それが身体の芯にまで響く重い一撃に変わる。

思いもよらないダメージを受けた化け鮫は困惑の色を隠せない。

「那珂ちゃんマイクの旋律効果は攻撃力と防御力の強化、ついであらゆる狩猟笛共通の旋律として移動速度も強化されるからね。今までと同じだと思ってると思う目を見るよ?」

先程までとは比較にならないスピードで化け鮫の巨体に強化された打撃を矢継ぎ早にお見舞いしていく川内。

膨らんだ化け鮫の腹部はもはや攻撃を受け止めるクッションではなく、大きいだけのサンドバッグと化していた。

『ギシャアアアア……。』

「うっ!?!」

身体が肥大化し動きが鈍くなっている膨張状態では不利だと判断した化け鮫は、全身から冷たい空気を放出して元の大きさへと戻っていく。

至近距離で冷気を浴びせられたことにより、旋律で強化された川内も流石に怯んで攻撃の手が緩む。

ピシツ……ピシリピシリ……。

川内が離れたその隙に化け鮫の表皮から体液が染み出してくる。

化け鮫の分泌する特殊な体液は、低温に晒されるとすぐに凍結する性質があるのだ。

バキンツ!!

やがて硬質な音と共に体液は完全に凍り付き、化け鮫の全身に氷の装甲が形成された。

敵を引き裂く鋭い矛、攻撃を受け止める頑丈な盾、攻防一体の氷の装甲を身にまとった姿。

これこそが化け鮫の本気である氷纏い状態だ。

『ギヤアアアア!!』

本気を出した化け鮫は氷の大地に頭から突っ込むとドリルのように身をよじらせる。

化け鮫の体液で作られた氷は天然の氷よりも硬度が高いようで、あつという間に氷に穴を開けると化け鮫の巨体はまるで吸い込まれるように氷の中へと消えていく。

唯一氷の中から飛び出ているのは青白い装甲をまとった背ビレ。

その背ビレは足元の氷をバターののように切り裂きながら、文字通りサメ映画を彷彿とさせる動きで川内へと迫ってくる。

「やつぱり……。最初に氷の中から現れたからそうじゃないかとは思っていたけど、氷の中を潜行する能力を持ってたんだ!」

氷を切り裂きながら近付いて来る背ビレ、それに触れれば同じように切り裂かれてしまうだろう。

川内は敢えて大袈裟に回避してみた、すると背ビレも同じように大きく旋回し、川内を追い掛けてくる。

「ふーん。どうやって氷の下からこつちのことを認識してるかは分からないけど、とにかく私のことを追い掛けてくるつもりなんだ。それなら、もうちよつとだけ鬼ごっこに付き合ってもらおうか!」

身軽にステップを踏み続けることで、己を叩き潰そうとする凍魚の猛攻をかわしていく天龍。

スタミナの許す限り走ることで、氷の下から自分を狙う化け鮫の追跡から逃げ続ける川内。

しかし回避というのは体力以上に神経を削っていく。

徐々に動きは精彩を欠いていき、防戦の末に二人は氷の中央で背中合わせとなった。

しかし二人の表情は追い詰められたものが浮かべる絶望に染まったものではない。

その真逆のしてやったりと言わんばかりの不敵な笑み。

『バラバラララ……。』

『ギヤアアアア……。』

二体のモンスターに挟まれた二人は背中合わせのまま肩越しに会話する。

「ごつちの仕込みは万全だぜ。そんでそつちの首尾は？」

「ごつちも上々、いつでもいけるよ！」

「うしっ、そんじゃ仕上げといくか！」

「了解っ！」

二人は同時に駆け出して、それぞれモンスターの横をすり抜ける。

『ッ!?』

モンスターはまさかクタクタになるまで追い詰めたはずの敵が元気に駆け出すとは思っておらず、止める間もなく素通りさせてしまった。

それもそのはず、二人の動きが徐々に鈍くなっていったように見えただのは相手を油断させるためのフェイク。

モンスター達はまんまとそれに引っかけたのだ。

「お前らがマヌケで助かったぜ！お礼に天龍様からのプレゼントだ!!」

「仕掛けるよ！大盤振る舞いだあっ！」

二人は氷上を走り回りながらポーチから大きなタルを取り出して、放り捨てるように次々とあちこちへ置いていく。

もちろんそれらはただのタルではない。

大タル魚雷と呼ばれている内部に大量の爆薬が仕込まれた特別製のタルである。

やがて氷上には6個の大タル魚雷と4個の大タル魚雷G、合わせて10個もの魚雷が置かれた。

本能的にそれらの危険性が分かるのだろう、大量の魚雷を前にして流石のモンスターもたじろぐ。

「待たせたな、それじゃ綺麗な花火を上げさせてもらうぜ！」

天龍はポーチから片手サイズの小さなタルを取り出すと、タルの蓋から出ている導火線に火を付ける。

当然こちらも単なるタルではない、小タル魚雷という片手で扱える

小さなサイズのタル魚雷である。

「そんじや行ってこい！」

天龍はI字バランスのように片足を天高く上げ、そして足を勢いよく振り下ろすと同時に火の着いた小タルを思い切り投げる。

まるで野球漫画のように綺麗な投球フォームで投げられた小タルは、風を切って一つの大タルへと直撃した。

次の瞬間、氷海地帯は灼熱と閃光に包まれた。

計10個の大タル魚雷による爆発は莫大な光と煙、そして爆音を発生させ、その場にいる者全ての視覚と聴覚を奪う。

しかし飽くまでそれは一時的なもの。煙が晴れ、目は光を取り戻し、耳鳴りは去っていく。

やがてモンスター達は気付く、あれ程の爆発にも関わらず自分達にはそれ程ダメージがないということに……。

「ダメージが少ないことを不思議に思ってたんな、そりやそうだ。魚雷はそこら中にばら撒いたんだ。お前らの近くでまとめて起爆したわけじゃない。だがそれでいいんだ、オレの狙いはお前らを爆破することじゃないからな。」

ピシリ……。

どこからか硬いものにヒビが入る音が聞こえてきた。

ピシピシ……ピキピキピキピキ……。

やがて同じような音があちこちから響き、音自体も少しずつ大きくなっていく。

突然の事態に困惑し周囲を見渡していたモンスター達は、足場と なっている氷の大地に次々と亀裂が入りつつあることに気が付いた。「今頃気付いてももう遅い！オレ達が意味もなく逃げ回っていると

思ったか？オレ達の目的はお前らにワザと足元を攻撃させることで、氷全体を脆くすることだったんだよ！この大タル魚雷の爆発はその仕上げってわけだ。そういうことで仲良く一緒に落ちようぜ！」

バキバキバキバキ……バギンツ!!

一段と大きい音を立て、遂に氷の大地は完全に砕け散る。

砕けた氷では上に乗る者の体重を支えることは出来ず、それに伴い天龍も川内も、そしてモンスター達も冷たい海へ放り出された。

「よつとー！」

天龍と川内は危なげなく海の上へと降り立った。

周囲にはみぞれ状になった氷が海に浮いており、ここまで細かく砕けていては再び上に乗るのは不可能だろう。

「さて、モンスターどもは……やっぱりな。」

海に落ちた二頭のモンスター、しかし彼らは寒冷地に棲む魚型のモンスターである。

溺れることも凍えることもなく、背中と背ビレを露出させた形で海に浮いている。

しかしいきなり足場を崩されて海に落とされたショックで動揺しているのか、二頭ともゆっくりと泳いでいるだけで大きな動きは見られない。

「見た目で予想はしてたけど、魚型をしているだけあってお前らは海でも活動可能なんだろう？だから海に落とされても大してダメージは受けない。とはいえどんなに泳ぎが上手くたって、オレ達と同じように水の上を陸と同じように歩くのは無理だろう？だからこんな風背中が無防備になる！」

天龍はポーチからロープを取り出すと、手早くカウボーイのような投げ縄を作り、それを凍魚目掛けて投げ付けた。

ロープの輪はまるで輪投げのように上手く背ビレを捉える。

「ビンゴ、背ビレに引っ掛かった！胴体が沈んでくれたお陰で背中に乗りやすいぜ！」

天龍はロープを手繰り寄せながら凍魚の背中に飛び乗ると、更にロープを固く背ビレに巻き付ける。

背に乗られたことでようやく再起動を果たした凍魚は身をよじつて暴れるが、天龍は足を踏ん張り、ロープを握ることで離れない。

川内も天龍と同じように化け鮫の背ビレにロープを取り付け、背中に乗り込む。

「ツタの葉とクモの巣とネンチャク草を寄り合わせて作った特製のロープだ、ちよつとやさつとじゃ外れないし千切れないぜ！これで即席の手綱の完成だ、それじゃ思いつきり泳いでもらおうか！」

左手にロープ、右手に太刀を握った天龍は、凍魚の背中に太刀をグサリと突き立てた。

『バラバラフラツ?!』

巨大な爆破に巻き込まれる、氷を砕かれて海に落とされる、背ビレに手綱を取り付けられて背中に乗り込まれる。

一連の出来事はいずれも凍魚の冷静な判断力を奪うのに充分なものであり、それを立て続けに起こされた挙句、トドメと言わんばかりに背中に太刀を突き立てられた凍魚は完全にパニックを起こして滅茶苦茶に泳ぎ出した。

天龍は背ビレに巻いたロープを巧みに操ることで凍魚の進行方向を制御し、スピードが落ちてくれば再び太刀を刺すことで加速させ、凍魚が海中に潜ろうとすればロープを引き絞ることでそれを阻止する。

その様子はまるで暴れ馬を華麗に乗りこなす天才ジョッキーのようであった。

「ハイヨー、シルバー！ロープのお陰でモガの時より乗りやすいな。よおし、モンスターを乗り回すこの戦法を『ライドオン・天龍ダイナミックステアリング・スペシャル』と名付けよう！」

自分で開発したと思いい込んでいい気になっている天龍だが、この戦法は遠く離れたカムラ鎮守府において『操竜』という名前で既に広く知られているものであった。

「川内！そつちの調子はどうか!?!」

「大丈夫、こつちも上手く乗れてるよ！」

背中に生えている氷の棘のせいで若干乗りにくそうにはしているものの、川内も天龍と同じように化け鮫をまるで水上バイクさながらに乗り回す。

「よし、それじゃあタイミング合わせろ！」

「了解！」

天龍は凍魚を化け鮫目掛けて猛スピードで泳がせ、川内もそれを迎え撃つように化け鮫を泳がせる。

「いっつけええええええええ!!!」

!!!」

ドオオオオオン!!!

凍魚と化け鮫は真正面から全速力で激突した。

化け鮫は凍魚の鋭い角で氷の装甲ごと顔面を切り裂かれ、しかし凍魚の角も激突の衝撃には耐えられず根元からへし折れる。

『バラ……ラ……』

『ギ、ギャ……』

か細い呻き声を最後に完全に動きの止まった凍魚と化け鮫は徐々に沈んでいき、やがて騎手の天龍と川内を海上に残して、暗く冷たい海の底へと完全に沈んでいった。

「貴様らには水底がお似合いだ……なんつってな。」

天龍と川内はモンスターが沈んでいくのを見届けると岸に上がる。「わざとモンスターの攻撃を誘って、次に脆くなった氷を爆破して、最後はモンスターを乗り回して激突させる。最初に聞かされたときは何て無茶苦茶な作戦を考え付くんだって思ったよ……。」

「あるものは全て使え、オレはその言葉通りに行動しただけだぜ。それにお前も結局オレの作戦に乗ったじゃねーか、作戦が成功したのはお前の協力があったからこそだぜ。」

「そりゃ我武者羅に攻めるよりは何らかの方針があった方がいいし、

一緒に出撃したのはこれが初めてだけど、これでも天龍のことは信頼してるんだからね。」

「よせやい、照れるだろ。」

「ふふっ、それじゃボワボワの住居に戻ろっか。ちよつと遠いけど私は来た道を覚えているから迷子になつたりする心配は……。」

ドンツ!!!

天龍と川内が歩き始めたその瞬間、後ろの海から二つの大きな水柱が立った。

水柱の正体はもちろん凍魚と化け鮫。

凍魚と化け鮫は海から勢いよく飛び上がり、先程まで天龍達が立っていた岸に着地する。

『バラバラバラバラ!!!』

『ギヤアアアアア!!!』

「こっつ、こいつら!?まだ生きていたのか!？」

二頭のモンスターは明らかに致命傷を負っているものの、その闘志に衰えは見られない。

それどころか自身の命がもう長くないことを悟っているのか、刺し違えてでも天龍達を倒そうという意思すら感じられる。

「こんなになってまで戦おうとするなんて!？」

「もはや意地なんだろうな!川内、油断すんなよ!こいつら手負いの獣を通り越して完全に捨て身だ!捨て身の奴は何をしてくるか分かんねえから怖いぜ?それにこっちも流石に余裕はない、相手が死ぬ気ならこっちも死ぬ気で掛からなきゃ本当に死ぬぞ!」

残された命を全て燃やし尽くしてまで戦おうとするモンスター、それを迎え撃つべく天龍と川内も武器を抜く。

「ホットドリンク飲んでるのに何だか肌寒くなってきたな、奴らの決死のプレッシャーのせいか?」

急に寒気を感じた天龍は緊張をほぐそうと軽口を叩く。

「いや、本当に気温が下がっているみたい。ほら、雪降ってる。」

気付けばいつの間にもやらチラチラと雪が降り始めていた。

「相手がやる気なのに雪に気を取られてちやダメだよ……って急に雪が強くなってきた!?!」

初めは粉雪でしかなかったそれが10秒立たずして激しくなり、それに伴い風も強まって吹雪となる。

「おいおい、あれ見ろ！異常気象にしたっておかしくないか!?!」

天龍達が爆破したことで砕けた氷海、それが目の前で再び凍って固まりつつある。

いくら気温が下がったとはいえ、海水というのはそう簡単に凍るものではない。

凍魚と化け鮫も異変を察知したのか、あれ程までに滾らせていた闘志は消え失せており、それどころか目の前にいる天龍達のことすら忘れたように怯えながら周囲を見渡している。

「一体何が、うわっ!?!」

「きゃっ!?!」

吹雪は遂に猛吹雪へと変わる。

それにより発生したホワイトアウトで目の前は完全に真っ白になる。

そもそも凄まじい吹雪によって目を開けていることすら辛いこの状況、それでも天龍は負けじと目を開ける。

せめて目の前で何が起きているか確認するために……。

BGM：壮麗纏いし銀盤の貴人

その時、天龍は見た。

真っ白い吹雪の中に浮かぶ雄々しくも幻想的なシルエットを。

「ドラ……ゴン……?」

角の生えた頭部、長い首、四肢を持つ巨体、長い尾、二対の翼。

その姿は伝説に語られるドラゴンそのものであった。

『クアアアアアア!!』

ただ恐ろしいだけではなく優雅さを感じさせる、不思議と心に染み渡る龍の咆哮。

その咆哮が聞こえなくなると同時に荒れ狂っていた吹雪は嘘のように止み、清々しいまでの青空が広がっていた。

「凍魚と化け鮫が!?嘘でしょ、モンスターは凍ったのに何で私達は無事なの!？」

天龍と川内の目の前には氷像のように凍り付いてしまった凍魚と化け鮫がいた。

寒さに強い二体のモンスター、しかしその肉体は心臓まで完全に凍結しているようであり、命の鼓動が全く感じられない。

その一方で不思議なことにあれだけの猛吹雪を浴びた天龍と川内の身体には雪の一つすら付いていなかった。

「そうだ、ドラゴンは!?ドラゴンはどこへ行った!？」
天龍は慌てて周囲を見渡すが、澄み切った空には鳥一匹見当たらない。

「どこにもいない、あれは見間違いだったのか?」

『いや、見間違いではナイ。』
「ボワボワ!?それにマサムネ!」

いつの間にか天龍達のすぐ側にはあの時のボワボワと通訳のマサムネがいた。

『キミラの戦いは全て見せて貰った、素晴らしい戦いだ。キミラは間違いなく真の戦士だ。しかも氷の神イヴェルカーナに認められるとは前代未聞の偉業だ!』

「イヴェルカーナ?それってあのドラゴンのことか?」
『そうだ、イヴェルカーナはこの島の神だ。』

ボワボワはゆつくりと語る。

何も無い島があった

その島には本当に何もなかった 草も 獣も 水さえも
ある日 海の彼方から氷をまとった龍が島にやって来た

かの者の名は氷龍イヴェルカーナ 冷気を統べる者

イヴェルカーナは何もなかったこの島に雪と氷をもたらした

イヴェルカーナが通った海には氷の道が出来た

多くの生き物が導かれるように氷の道を渡って何もなかった島に
やって来た

時が経つにつれ氷の道は解けてなくなった

しかしイヴェルカーナのいる島の氷はいつまでも解けなかった

氷雪島が生命溢れる島となったのはイヴェルカーナのお陰

だからこそイヴェルカーナはこの島の神なのだ

氷の神にして島に生命をもたらした生命の神

イヴェルカーナを敬え 雪と氷を敬え 生命を敬え

おおイヴェルカーナよ 氷雪島の神よ 我らに神の加護のあらんこ
とを

『これがワレラの一族に古くから伝わるイヴェルカーナの伝説だ。だ
がイヴェルカーナが人前に姿を現すことは滅多にナイ。今まで実際
に出会った者などワレラの歴史の中でも10人にも満たナイ。だが
キミラはイヴェルカーナと出会い、そしてその戦いを認めらレタ。』
「戦いを認められた？」

『そうだ、イヴェルカーナが認めたからこそキミラは凍らなかったの
だ。これはとても名誉なことだ！ボワボワの歴史に刻まれるべき出
来事だ！偉大なる戦士ヨ、イヴェルカーナの戦士ヨ、今までの非礼を
許したマエ！そしてワレラの盟友ヨ、戦士テンリュウと戦士センダイ
を丁寧に入れて帰るのだ！』

突然天龍と川内の両肩は何者かに掴まれる。

そこにいたのはヘビと翼竜を足して2で割ったような姿をした青白い生物。

「えっ、えっ?何コレ?」

『カレラはコルトス。ウルグと同じくワレラの盟友だ。カレラがキミラを連れて帰ってくれ。』

「連れて帰るって、まさか飛んで帰るっていうのか?こいつらに足で捕まれたままで?」

『そうだ。だが心配することはナイ、カレラは決して落としたりしない。だから安心してカレラに身を委ねるといい。』

「いや、そんなこと言われても心の準備ってもんが……うわあああああああああああ!?!」

天龍と川内の生まれて初めてのフライト、それは飛行機でも気球でもなく変な生き物に吊り下げられてのものになった。

『飲めや、歌えや！今日は宴だ！神の戦士の誕生だ！壮大に祝エ！』
ボワボワの住居に戻った天龍と川内を待っていたのは、テンション爆上げなボワボワ達によるお祭りだった。

『ミナノモノ、今日からこの日をテンリュウセンダイ記念日とスル！』
『『『『ウオオオオオオ!!』』』』』

「天龍川内記念日イ？」

「私達は調査に來ただけなのに、何だか大変な事になっちゃったね……。」

大盛り上がりのボワボワだが、肝心の天龍と川内はそのテンションに着いていけない。

『戦士達ヨ、こちらをお食べ下さい。』

「何だこれ？焼いただけの肉か？」

居心地悪そうにしている天龍と川内に一人のボワボワが差し出してきたのは、石で作られた皿に乗せられた謎の肉。

一応火が通っているその肉を、天龍と川内は恐る恐る口に運ぶ。

「あれ？思ってたより美味しいな。こういうのって肉が片面しか焼かれてなかったり、まともに味付けされてないってのが定番なんだが、火はしっかり通ってるし自然の旨味があるから味も気にならない。」

「それってどこの定番なの？そんなの聞いたことないよ。それよりこのお肉だけど味はどことなく魚肉っぽいよね？でも生まれて初めて食べる味だ、本当に何の肉なんだろう？」

激しい戦いの後でお腹が空いていたこともあり、美味しいと分かるや否や思わず肉を食う天龍と川内。

石の皿の上にあった肉は二人の手に掛かりあつという間に無くなった。

『気に入って貰えたのならワレラも嬉シイ。その肉はキミラが仕留めたモンスターの肉だ！』

「えっ!？」

ボワボワの住処の奥に目を向けてみると、そこには輪切りにされて

炎で炙られている凍魚と化け鮫の変わり果てた姿があった。

『自然の恵みダ、巡り巡る命に感謝を捧げるノダ。それが冰雪島で生きるということダ。』

「ブーーーーッ!!!」

肉の正体を知った天龍と川内は思わず吹き出す。

『自分で狩った獲物の肉は美味いだろウ？まだ食べる力？おかわりはいくらでもあるゾ。』

「わ、私はお腹いっぱいになっちゃって、もういいかな〜って……。」「お、オレも……。この肉はお前らが全部食べていいからさ……。」

実際は満腹になったのではなく、食欲が失せただけだというのは言うまでもないことである。

『聞いたかミナノモノ！自分で仕留めたにも関わらず、神の戦士はこの肉を全てワレタに分け与えてくれるそうダ！流石は神に選ばれただけのことはアル、慈悲深き戦士を崇めヨー！』

『『『慈悲深き戦士を崇めヨー！』』』』

「ああ、うん……。もうそれでいいよ……。」

肉を食べ残しただけで何故か高まるボワボワの忠誠心。

天龍と川内は訂正するのも面倒臭くなってしまい、もうどうにでもなれと諦めの境地である。

「あつ、そういえばモンスターの写真撮るの忘れてた！」

焼かれている二体のモンスターを見て、川内はようやく忘れていた任務の一つを思い出す。

最初にボワボワの集落にお邪魔したときまでは覚えていたのだが、その後ボワボワから試練を与えられたり、ウルグに乗ったりと色々あったせいで、肝心の凍魚と遭遇した頃には写真のことなど綺麗さっぱり忘れていたのだ。

「オイオイ、どうすんだ？」

「うーん、どうしよっか？」

「それでこれが今回の成果ですか？」

額に青筋を浮かべた神通の手の中にある二枚の写真。

そこにはこんがり焼かれた魚と鮫の切り身が写っていた。

「おう！こっちのデカイサーモンステーキみたいなのが凍魚で、こっちのフカヒレっぽいのは化け鮫ってんだ！」

「どう、見直した？ 私達の力があれば大型モンスターが二匹いても、まとめて火に焼いて食べちゃうわ！」

「だからって本当に火に焼いて食べるヤツがありますか!!」

「デスヨネー。」

鎮守府に帰った天龍と川内を待っていたのは神通のお叱りであった。

本当は自分達が焼いたわけではないのだが、これ以上言っても火に油を注ぐだけである。

「これでもお二人の働きは認めているんですよ？ 希少生物ウミウシボ

ウズの超至近距離からの撮影に成功する。原住民であるボワボワを新たに発見するだけでなく、彼らと友好を結ぶ。ボワボワが使役するウルグとコルトスも発見し、彼らに乗ることも許される。新種のヒル状生物を発見する。背ビレの正体を突き止め、更に新種のサメ型生物も発見、そしてその両方を仕留める。最後に島の神といわれるイヴェルカーナの情報を持ち帰る。いずれも大きな功績です。」

褒めるところはしつかり褒める神通。

とはいえ神通からは怒気が放たれたままであり、天龍と川内は手放しで喜べない。

「し・か・し！だからこそ詰めが甘いのです!!特に姉さん!私が何のためにカメラを託したと思っっているのです!姉さんを信じたからこそ私がカメラを直接渡したというのに!今回お二人が撮ってきたのはウミウシボウズとボワボワとウルグとコルトスの写真のみ!」

「いや、一応凍魚と化け鮫の写真も「何か言いましたか姉さん?」イイエナニモイツテマセン……。」

「話を聞くにヒル状生物とイヴェルカーナの写真を撮れなかったのは仕方ないでしょう。化け鮫とやらの写真もまだ許せます。しかし今回のターゲットであり、出撃前に口酸っぱく任務だと伝えていた凍魚の写真を撮っていないのは単なる怠慢です!任務を何だと思っっているんですか!?!」

「ひやあくくく!?!すみませんすみませんすみませんすみません!!」

上司である神通の説教に対してひたすら謝ることしか出来ない神の戦士(笑)の姿がそこにはあった。

「ふう……。まあ小言はこのくらいでいいでしょう。お二人は写真がないとはいえ、背ビレの正体を突き止めて情報も持ち帰りました。天龍さん、あなたのランク3への昇格を認めます!」

「はいすみません!!」

「天龍さん?」

「はいすみま……じゃなかった。これでオレもランク3なんだな!」

「その通りです。これからはより難易度の高いクエストも受注出来るようになりますよ。」

「よっしやああああ!!」

念願叶って遂にランク3に到達した天龍、より高みを目指す彼女にとって喜びもひとしおである。

「じゃあ私は？私も任務達成したんだしご褒美あるよね？おねーちゃん夜戦の出撃許可が欲しいなあ。」

「は？そんなものありませんけど？」

「えっ？」

喜ぶ天龍を見た川内は猫撫で声で神通にご褒美をねだってみるものの、あっけなく却下される。

「姉さんの夜型生活を直すためにやってるのに夜戦を許可したら元の木阿弥じゃないですか。そもそもカメラを任されていない天龍さんはともかく、カメラを任されておきながら写真を忘れる姉さんにご褒美なんてあるわけないでしょう。」

「そんなあ~~~~!!?あんなに寒い中で頑張ったのに~~~~!!あんまりだあ~~~~!!神通のイジワル~~~~!!」

「うわあ……。」

執務室の床で子供のように寝転がって駄々をこねる川内。

そのみつともない様子に流石の天龍もドン引きである。

「ハア、仕方ないですね……。姉さん、今度一緒に私と夜戦に行きましよう。」

その一言で川内の動きが止まる。

「本当？一緒に行ってくれる？」

「ええ、ですが一度きりですよ。その後はまた普通に出撃してもらいます。」

「うわああああああ、神通あーりかどく、大好き~~~~」

「はいはい、困った姉さんですねえ。」

ベソをかきながら神通に抱き着く川内、そんな川内を神通は優しく撫でる。

内容が些かしようもないが、確かな姉妹の絆がそこにはあった。

「あの、まだオレがここにいること忘れないでほしいんだけど……。」

ちなみに今回新たに発見されたモンスターはそれぞれギイギ、ギギネブラ、ブランドロス、ザボアザギルと命名された。

しかし肝心の写真が一枚も無かったので、生態ノートには鎮守府で一番絵心のある龍田のイラストが載せられることになったのだが、肝心の天龍と川内の説明が下手なので何度も書き直すハメになり、これまた二人は何度も叱られたのであった……。

天龍ちゃんと炭鉱夫1

神通の依頼をこなしたことで無事ハンターランク3に到達した天龍。

ランクが上がったことで今まで挑めなかったより難しいクエストに挑戦出来るようになった。

そんな天龍が今回挑んでいるクエストは……。

「ハア、何でオレがこんなことやんなきゃなんないんだよ？」

「天龍ちゃん頑張つて！」

ピッケルで海上に突き出ている採掘ポイントを掘っていく天龍と龍田。

そう、天龍が挑んでいるのは採集クエストである。

何故天龍が採集クエストを受けているのか、その理由は出撃前まで遡る。

「えっ？今受けられる狩猟クエストがないって？」

「はい、ランク3どころかランク1も2にも狩猟クエストは一つもありません。」

クロオビ鎮守府の執務室、そこで天龍は神通に詰め寄っていた。

「せっかくランク3になったっていうのに？」

「別に意地悪で言ってるわけじゃないんですよ。タイミングがいいのか悪いのか、現在特に狩れるような相手が発見されていないんです。戦いというのは相手がいて初めて成立するものです、なのでその相手がいないければ狩猟クエストの依頼は出しようがないんです。」

納得のいかない天龍だが、神通に優しく諭される。

「たまにはこういう日だってありますよ。」

「そんなこと言われたってなあ……。」

新たな敵との戦いを心待ちにしていたにもかかわらず、出鼻を挫かれたことでテンションは下がりに下がる。

「天龍ちゃん探したわよお。」

「あつ、龍田!」

そこへやって来たのは皆さんご存じ天龍の妹こと龍田。

「やつぱりね、どうせそんなことになってると思ってたわあ。」

「どうせって……。」

「狩猟クエストがなくてやる気が出ないんでしよう?ワガママねえ。」
「うぐつ……。だって仕方ないじゃんかよ!せつかくランク3に上がったんだぜ?どんな相手と戦えるか気にならないか?それに自分で言うのもなんだけど、天龍って艦娘としてはお世辞にも強いとは言えないじゃん。天龍改二とか腹立つことに改二の軽巡で最弱って言われてるんだぜ?数少ない長所は燃費の良さだけど、そのせいで呼びびがかかるのは遠征要員ばかりだ。だけど狩娘だったら性能は関係ない、戦艦だろうが駆逐艦だろうが能力は全員横並び。それにやられたって轟沈しない。だからオレはここで建造されたことに感謝してるんだぜ、ここでなら思いっきり戦えるってな。」

「つまり気兼ねなく戦える環境下にあるのに戦えないのが嫌なんですよ。」

「そゆこと。」

「ふうん。でも神通さんの言うように敵がいなきや戦えないわよ?それに狩猟クエストは無くても採集クエストがあるじゃない。採集クエストなら敵がいなくても受けられるし、むしろ邪魔してくる敵がないから普段より楽チンよ。」

「ええ、採集クエスト?採集クエストってチマチマとアイテム集めるだけのつまらないクエストじゃん!そんなのオレの趣味に合わねぞ。」

「それがワガママだって言うの。狩娘は艦娘よりも軍隊っぽさは少な

いいし、狩娘の自主性も重視されてはいるけどそれでも好き勝手していいわけじゃないのよお。それにクエストに貴賤はないわ。アイテムを集めてくるのだから大事なクエスト、必要だからこそ依頼があるの。そして本物の一流狩娘は受けるクエストを選ばない、好き嫌いしているように最高級の狩娘なんて夢のまた夢よ。」

「龍田さんの言い方はちよつと大げさですが、狩猟クエストがないからってだらけてもらっては困ります。今日は休日ではないのですから。それにランク3にならないと出撃許可が下りない海域もあって、そこでしか採集出来ない素材だってあります。そういうものを集めて次回の狩りに備えるというのも大切なことですよ。」

「そうそう、それに新しい海域の下見にもなるしね。初めての海で深海棲艦を探し回って迷子になるのはイヤでしょ?。」

「ハア、わーったよ!じゃあこの燃石炭の納品ってやつにするよ。」

「ふふつ、じゃあ今回は私も付いて行ってあげるわね。新しい海域だし困ることもあるでしょ?。」

こうして天龍は龍田と一緒に採集クエストに出ることになったのであった。

「新しい海域ってことでワクワクしてたんだけど、そこまで代わり映えしねえなあ……。」

「そりゃそうでしょ。今までの海域から一つ隣の海域に移っただけで、極端に離れてはいないもの。でもね、ここの海域の方が貴重な資

源が多いし、それを狙って強力な深海棲艦も集まってくるのよ。」

「とはいえ今日は深海棲艦いないんだろ？」

「まあね。」

天龍の目の前に広がる大海原。

鎮守府を出てすぐの海域より若干岩礁が多いという違いこそあれど目立った差はそのくらいであり、ただただ青く穏やかなだけの海である。

「本当に何にもいねえなあ。」

まだ出撃してほとんど時間が経っていないというのもあるが、敵対的な深海棲艦の姿は全く見られない。

大型の深海棲艦はおろか中型のドス系深海棲艦、それどころかイ級の小さな小型深海棲艦すら見掛けないのだ。

一応ワ級といった危険度皆無な深海棲艦や野良連装砲ちゃんなどは何度か発見しているので、海に誰もいないなんてことはないが、こちらに敵意を向けてくる相手がいないというだけで気が抜ける。

「さて、今回のクエストの目的は覚えてる？」

「ああ覚えてるよ、燃石炭の納品だろ？」

「そう…そしてその燃石炭を手に入れる方法は……。」

龍田はピッケルを取り出し、近くの岩礁にある採掘ポイントを掘っていく。

「アハッ、出たあ♥ホラ、これが燃石炭よお♪」

龍田が掘り出したのはニワトリの卵ぐらいの大きさをした石炭。

「採掘で手に入るのは分かったけど石炭掘っただけで艶っぽい声を出すのはやめろオ!!何が出ただ!オレとそっくりな声でそんなこと言われると背筋がゾクゾクするんだよ!」

「もうっ、ちよつとふざけただけなのに……。」

「全く、それにしてもオレの知ってる石炭と違うな。」

石炭は黒いダイヤモンドの別名で呼ばれることもある、変質した黒い木の化石である。

しかし燃石炭は石炭でありながら色は赤みを帯びており、また灰かに熱を発するという性質によって触るとホカホカと暖かい。

「この燃石炭は通常の石炭よりもずっと燃焼効率がいいのよ。マカライトを始めとしたこの地域特有の鉱石は鉄よりも丈夫な代わりに並の熱量では精錬出来ないわ。私達がマカライト製の武器防具を使えるのも燃石炭のお陰なのよ。その代わりにまとまった鉱脈がないからこうやって地道に採掘していくしかないんだけどねえ。」

「石炭の採掘なんて普通に考えたら狩猟の片手間に出来るような気軽な作業じゃないと思うんだけどな……。」

天龍もピッケルを取り出すと物は試しと採掘ポイントを掘ってみる。

「これか？龍田のと全然違う気がするんだけど？」

天龍が掘り出したのは龍田の持つ燃石炭とは比べ物にならないほど赤く、そして高い熱を放つ石。

最初は単に上質な燃石炭かと思ったものの、よく見れば全く別の種類の石であることが分かった。

「それって紅蓮石じゃない！」

「紅蓮石？」

「紅蓮石は産出量の少ない希少な鉱石で、強力な装備を作る際の素材として欠かせないものなのよお。」

「ふーん。」

「もう、本当に希少なだからねえ！ビギナーズラックでいきなり採掘した天龍ちゃんには分かりにくいと思うけど、この海域の採掘ポイント全て回っても一回のクエスト中に一個掘れるかどうかってくらい珍しいんだから！」

紅蓮石の需要も希少性も分からない天龍は興味なさげにポーチに石を突っ込むと採掘を再開する。

続いて掘れたのは緑色をした鉱石。

「これは？」

「それはドラグライト鉱石ね、マカライト鋼よりも上質なドラグライト鋼が精錬出来るわ。ドラグライト鉱石は紅蓮石ほどの希少性はないけど、それでもマカライト製よりも強力な装備の素材になるわ。」

「へー。」

またしても反応の悪い天龍は鉱石を雑にポーチに入れてから採掘の続きを始めるのであった。

あれから海域中を探索し、目に付いた採掘ポイントを粗方掘り尽くした天龍は思わずつぶやいた。

「おかしくね?」

「えっ、何が?」

「こんだけ採掘したのに未だに燃石炭が一個も出てないんだよ! どう考えてもおかしいだろ!」

そう叫ぶ天龍のポーチの中に燃石炭は一つも入っておらず、その代わりには鉄鉱石やマカライト鉱石、ドラグライト鉱石などの石系素材がたくさん入っていた。

「素材がいっぱいだよ良かったじゃない。」

「そうじゃねえよ！このクエストは燃石炭の納品なんだろう？なのにこれじゃ納品出来ねえぞ！」

「心配しなくても私が既に納品に必要なだけの燃石炭を掘ったから天龍ちゃんは気にしないでいいのよ。」

本人の言うように龍田のポーチは既に燃石炭でいっぱいであり、これだけあれば納品してもお釣りがくるレベルになっていた。

「オレが納得しねえの！戦闘がないのはまだ仕方ないとして、アイテムまでないんじゃないよここまで来たオレがバカみたいじゃん。せめて一つくらい掘りたいんだよ！」

「うーん、アイテムは欲しがれば欲しがるほど出てこないっていうリンクスがあるんだけど……。」

「物欲センサーってやつ？オレはそんな迷信信じねえぞ！」

「仕方ないわねえ、それじゃこの海域最後の採掘ポイントに行きましょ。だけど次が最後なんだから、これで出てこなかったら諦めてね？」

「おうよ！」

この海域の一番奥にある一際岩礁に囲まれたエリア、天龍と龍田はそこにやって来た。

「ここは本来なら大型の深海棲艦の寝床になっていたり、小型の深海棲艦が群れを成している危険なエリアなの。でもその代わりに採掘ポイントの数も多いから、アイテムを集めるなら危険を冒してでも来る価値はあると思うわよ。」

「なるほど、確かに戦闘エリアとしては狭くて戦いにくそうだけど、岩礁が多いからこそ採掘には困らないのか。じゃあ早速掘ってみるぜ……チツ、鉄鉱石か。それで今度は石ころ。でもまだまだ掘れるみた

いだし最後まで諦めないぜ！」

しかし掘っても掘っても出てくるのは鉱石ばかり。

流石の天龍も諦めムードになってきたが、それでも一縷の望みに賭けて最後の採掘ポイントにピッケルを振り下ろす。

その声に天が答えた……のかどうかは定かではないが、遂に今まで一度も見たことないものが出土する。

「わっ、何だこれ？燃石炭じゃないけど、綺麗な小石みたいなものが出てきたぞ！」

「あら、それお守りじゃない。」

「お守り？お守りって以前雷に貰って、今も装備しているこれのことか？」

天龍が取り出したのは本人の言った通り、かつて食堂で雷に貰ったお守り。

お守りには気絶スキルが8ポイント付いており、1つある装飾品スロットには電に貰った耐絶珠が入っている。これによって気絶半減のスキルが発動している。

しかし雷と電には悪いが、見ての通りそれほど価値のあるお守りではない。

雷と電に着任祝いにプレゼントされたからというのものもあるが、天龍がこれを装備している一番の理由は他にお守りを一つも所持していないからなのである。

「そうそうそれよ。天龍ちゃん覚えてる？雷ちゃんにお守りは採掘していると見つかることがあるっていわれたの。」

「あー、そんなことも言ってたっけ？」

「もう、適当なんだから。あのね、詳しい理由は分かんないけどお守りは一般的に強い深海棲艦が多い海域で出やすい傾向にあるのよ。鎮守府付近の海域よりこっちの海域の方が危険度が高いことの証明ね。これから天龍ちゃんが危険度の高い海域に行く機会が増えれば、お守りを目にする機会も増えるわよ。」

「ふーん。それでこれは何のお守りなんだ？」

天龍は掘ったばかりのお守りを日にかざしてみたり海水で洗って

みるが不思議な力は何一つ感じられず、現状ではただ綺麗なだけの石にしか見えない。

「残念だけどそれは帰ってみないと分からないわ。」

「え、何でだよ？」

「掘っただけじゃダメなのよ。ちゃんと磨き直して本来の姿を取り戻してあげなきゃお守りの性能は分からないわ。鎮守府にはお守りを復元してくれる機械があるからそれを使いませよ。」

「そっか、だから持って帰らなきゃダメなのか。」

「さびた塊を掘り当てた場合も扱いはお守りと同じだからゴミだと思っ捨てないようにね。」

「さびた塊？」

「さびた塊も採掘で手に入るアイテムで、見た目は名前通りさびた金属の塊なんだけど、その正体は現代では解析不能な技術で作られた古代文明の武器よ。こっちを復元するには大量の研磨剤が必要になるから、お守りと同じように気軽に復元とはいかないけど覚えておいて損はないわあ。」

「ふーん。しかし肝心の燃石炭は結局一つも出なかったな。」

「そういう日もあるわよ。今回は私の燃石炭を納品して終わりにしましよう？」

「チツ、納得いかねー！」

「ふふつ、私がいて助かったでしょう？」

こうして天龍初めてのランク3のクエストはとても平和な終わり方を迎えた。

しかしこの平和なクエストこそが次の騒動の引き金となるなんて、この時点では誰にも予想出来るはずがないのであった……。

天龍ちゃんと炭鉱夫2

好戦的な深海棲艦が一隻も出現しなかったことで、最後まで安全かつ平和に採掘作業を終わらせることが出来た天龍と龍田。

天龍的には全く戦闘がなかったことにより若干の不完全燃焼感が残るものの、龍田に『お守りの復元作業はある意味で狩りよりもワクワクするわあ。』と胡散臭さを隠さない含み笑いで告げられたことにより、半信半疑のままではあるが工廠へとやって来た。

「これがお守りの復元機？何か思ってたのと違うな。」

工廠の一角、そこに置いてあったのは安物の電子レンジのような外見をした粗末な箱。

身も蓋もない言い方をしてしまえば単なるガラクタ。

その見た目だけではとてもお守りを復元出来るような機能を持った機械には見えない。

「確かにこんな見た目だけど、とりあえず騙されたと思ってやってみてよ。」

天龍は復元機の戸を開けるとそこに掘ったお守りを入れる。

そして戸を閉めた後に分かりやすく『復元』と書かれた丸いボタンを押してみた。

「これでいいのかわ？」

「ええ、一分もあれば終わるわよ。」

ジジジ……と無機質な音が鳴り続け、やがてチーンとベルの音が鳴る。

「うわっ、ホントに電子レンジみたい。」

復元機の電子レンジそのままな挙動に呆れながらもそつと戸を開けてみると、さっきまでちよつと綺麗なだけで何の力も感じられなかった小石はピカピカに磨き上げられ、不思議な力を感じさせる宝石へと生まれ変わっていた。

「おお、これが完成したお守りか。」

「ええ、これでちゃんとスキルが発動するようになるわ。まずは握ってみて、それでどんなスキルが秘められているか分かるから。」

天龍は言われた通りにお守りを右手で掴んでみる。

出来立てほやほやだからなのか、手の中のお守りはどことなく暖かい。

「えっと、これで使えるようになるスキルは砥石使用高速化……ってスキルポイントたったの1!?スキルって確か最低でも10ポイントないと発動しないんだろ!こんなんじや使い物になんねーよ!」

天龍の脳内に流れ込んできたお守りのスキル情報は本人の言った通り砥石使用高速化。

読んで字の如く、砥石で武器を研ぐスピードが速くなるスキル……ではなく研ぐ回数が減るスキルである。

つまり実際は高速化というより簡略化とでも呼ぶべきスキルなのだ、そんなことよりもその肝心のスキルポイントは僅か1しかない。

それならせめて装飾品でスキルポイントを補おうにも、このお守りにはスロットも開いてないのでこのままでは全く使い物にならない。

「それなら大丈夫よ、スキルポイントの仕様が変わったから。」

「仕様?」

龍田の言う仕様の意味が分からず天龍は首を傾げる。

「防具が剣士用とガンナー用で分かれているのは知ってるでしょ。だけど似たような防具が二種類もあるのは分かりにくいし使いにくい。何より場合によっては二つとも作らなきゃいけないのが素材的にも金銭的にも負担になるから不便だって意見が多かったのよ。そこでアステラ鎮守府を筆頭に、セリエナ鎮守府やカムラ鎮守府が連携して防具を一つにまとめる研究を始めたのよ。そしてその研究は無事成功し、剣士でもガンナーでも使用可能な新しい防具が完成したわ。」

「それが仕様変更にどうつながるんだ?」

「まあまあ、そう焦んないの。それで完成した新しい防具は確かな性能を持っていたんだけど、それでもまだ完成したばかりで信頼性が低

い。だから現在は3鎮守府で試験運転の真っ最中、問題がなければ近いうちに他の鎮守府でも作れるようになるそうよ。」

「オレ達の鎮守府でもか?」

「勿論よ、かくいう私も作れるようになる日を楽しみにしてるわ。狩りに生きるものとして、新しい武器防具に心躍らない者はいないんじゃないかしら?」

まだ見ぬ装備に期待を寄せるその気持ちは天龍にもよく分かる。

新しい素材を手にするたびに新しい装備が作成可能になっていなか、工廠にチェックしに行くのは天龍の楽しみの一つになっているからだ。

「そしてここからが本題なんだけど、防具の研究中に副産物と呼ぶには大き過ぎるほどの成果が出たのよ。その一つが装飾品のスロット関連ね。装飾品のサイズに合わせてスロットのサイズにも幅が生まれたのよ。その結果、大サイズの装飾品は大サイズ用のスロットにか入らなくなった代わりに複数のスロットを必要としなくなったわ。」

「大サイズの装飾品? 複数のスロット? 何の話? そんなのあったっけ?」

現在天龍が所持している装飾品は耐絶珠一つのみ。

耐絶珠は小サイズの装飾品なので、使用するスロット数も一つだけである。

なので複数のスロットを必要とする大きな装飾品に心当たりがない天龍は首を傾げる。

「そっか。天龍ちゃんは小サイズより上の装飾品を持ってないし、そもそも装飾品の生産自体をしたことがないから知らないんだったわね。あのね、今までの装飾品は大中小の三種類の大きさがあったの

に、装飾品を入れるスロットの方は小サイズしかなかったのよ。だから中サイズの装飾品を入れるには小サイズのスロットが二つ、大サイズを入れるにはスロットが三つも必要だったの。だけど今回の研究のお陰でスロットにも大中小の三つのサイズが開発されたわ。お陰でサイズさえ合えば複数のスロットを必要とすることがなくなったからスロット数に余裕を持たせられるようになったのよ。その代わりに大きいサイズの装飾品は小さいサイズのスロットを複数用意しても入れられなくなっちゃったけどね。そして新しい武器防具にはこの新しいスロットが搭載されていて、装備の普及と共に新しい装飾品も出回るようになると思うわ。ちなみにより強力なスキルが込められた特大サイズ装飾品とスロットの研究もされてるみたいね。」

「へえ〜。」

「そしてもう一つの成果がスキルポイントね。今までは基本的にスキルポイントを10まで増やすことでようやくスキルが発動していたのが、研究のお陰で1ポイントからでもスキルが発動するようになったのよ。おまけにマイナスキルを無くすことにも成功したから、今まで以上に気軽にスキルを発動出来るようになってるわ。サラツと説明したけど、これって大革命よね。」

「そうなのか？」

そう力説する龍田だが、ハンターランク3にもなつて未だにその辺を理解していない天龍はどうにも反応が薄い。

「もう、本当にすごいことなんだからね！スキルっていうものは余程のことがない限りは防御力よりも優先されるものなんだから！まあいいわ、それで新しく完成した防具が持っているスキルポイントもこつちの新しい方になっているし、装飾品のスキルポイントも同じようになっているのよ。当然お守りのスキルポイントもね！」

「お守りのスキルポイントも……ってことはまさか!?!」

今の説明で察しの悪い天龍もようやく理解する。

「お守りの方は既に実用段階に至っていて、この古い復元機も中身はアップデートされてるから新しいスキルポイントを持った性能の高いお守りが復元出来るようになったってわけ！」

「つまりこの一見スキルポイントが全然足りないように見えるお守りでも、砥石使用高速化が発動するってことか？」

「そういうこと。もっとも楽にスキルが発動するようになった代わりにスキルの性能も低下していて、砥石使用高速化だとスキルLv1じゃ研ぎ回数が一回減るだけよ。完全な性能を引き出すにはLv3まで上げる必要があるわ。」

「へえ、だとしても発動まで10必要だったスキルポイントが3にまで減ったんだろ？そりや便利だ……ん、待てよ？」

完成したばかりのお守り感慨深く眺めていた天龍だったが、ふとあることを思い付く。

「なあ、もう一度さっきの海域に行つてさ……採掘してまた新しいお守りを見付けられればさ、またお守りを復元出来るだろ？」

「そうね。」

「そしたらさ、もっといいスキルの付いたお守りが出る可能性もあるだろ？」

「そうかもね。」

「それでさ、そのいいお守りを装備すればスキルのお陰でオレはもっと強くなれるだろ？」

「まあ理屈の上ではそうね。」

「よっしゃあ！それを聞いてやる気が湧いてきた!!まだ昼過ぎだしもう一度くらい出撃出来るからな。そうと決まればまたお守りを探しに行くとするぜ！天龍のお守り採掘で最強を目指す計画！今ここに始動だあ！」

「何その変な計画名、そもそもそう上手くいくかしらあ？」

強さにこだわりのある天龍はピツケルを引つ掴むと再び出撃すべく駆け出していく。

あれほど戦闘の絡まないクエストにやる気を見せなかったというのに、お守りの存在を知った途端にこれである。

露骨なまでの掌返しに流石の龍田も苦笑いを隠せない。

そこまで強さにこだわるとはなるのならスキル関連についても普段からもう少し勉強すればいいのと思う龍田なのであった。

ちなみに天龍は勢い余ってクエストを受注せずにそのまま出撃しようとしたため、直前で神通に取り押さえられ説教を受けたのだとか……。

天龍のお守り採掘で最強を目指す計画！は前途多難である。

天龍ちゃんと炭鉱夫3

天龍が出撃して一人になった龍田はそのまま鎮守府に残って農場の世話をしたり、設備のメンテナンスを手伝うなどして過ごしていた。

やがて今日の内に出来そうな仕事もなくなり、自室に戻ってのんびりしていると部屋の扉が開く。

「ただいまー。」

扉を開けて中に入ってきたのは天龍。

顔や手足には土埃や煤汚れが付着したままになっており、如何にも採掘から帰ってきましたと言わんばかりの風体である。

「天龍ちゃんお帰りく、採掘の方はどうだった？」

「それがさあ、今度はちゃんと燃石炭掘れたんだけどよー。代わりにお守りが一個も出てこなかったんだよなあ。」

お守り目当てで採掘クエストを受けたのに肝心のお守りが一つも手に入らなかったことで天龍の顔には不満の色がありありと見える。

「フッフ、それが物欲センサーよ。欲しいと思ったものに限って入手難易度に関係なく全然手に入らなくなる、物欲センサーはそんな不思議な現象を引き起こすわ。レアな素材はもちろん、本来なら簡単に集められる雑多な素材の入手率にすら干渉する。この現象に苦しめられたことのない狩娘なんて私の知っている限りじゃゼロね。全ての狩娘にとって……いえ、全人類にとっての敵と言ってもいい存在じゃないかしら？」

「ぜつ、全人類の敵!? そんなにか!？」

龍田の発言に慄く天龍。

ただの言葉の綾なのに本気で深海棲艦と同等か、それ以上の脅威だと思っっているらしい。

天龍が何を考えているのか手に取るように分かった龍田は笑いを

堪えながらも話を続ける。

「全人類は流石に言い過ぎだったかしらあ？人命に関わるようなものでもないしね。でも迷信扱いしていた天龍ちゃんもその身に染みたんじゃない？さっきの出撃で燃石炭を欲しがったときは燃石炭が、今回の出撃でお守りを欲しがったときはお守りが出なかったでしょう。」

「まあな、今朝の出撃では全く出なかった燃石炭がザクザクと掘れた時には目を疑ったぜ。まるで神様かそれに準ずる何者かが嫌がらせ目的で出てくるものを操作してんのかと思うくらいにはな……。」

そう言う天龍の表情は苦虫を噛み潰したかのようである。

信じていなかったはずの物欲センサーに翻弄されたのが相当堪えたようだ。

「なあ、物欲センサーを防ぐ方法ってないのか？」

「そうねえ、聞いた話によると無欲な人はセンサーの魔の手から逃れられるそうよ。だから全ての欲を捨て去るためにも、心を無にすればいいんじゃないかしら？」

「心を無にイ!?それって悟りの境地ってことじゃん、んな無茶な！」

心を無にしろと言われて実際に無に出来る者が、果たしてこの世にどれだけいるのだろうか？

仏教の教えの下に日々辛く厳しい修行に励んでいるお坊さん達が目指しているのが、全ての煩惱を捨て去った悟りの境地なのだという。

世界中のお坊さんが修行の果てにようやく行きつくときされる悟りの境地に、修行と全く縁のない狩娘が素材集めの片手間に辿り着こうなど無理な注文である。

「まあそうよねえ、そもそも欲がなかったら素材集めなんてやらないだろうし……。後は地道に回数を重ねることかしら。物欲センサーの呪縛も完全ではないから、何回も繰り返しやっていけばその内手に入るかもねえ。」

「何回もって具体的には何回なんだ？」

「何回もは『何回も』よ、明確な数値なんてないわ。目的のものが出て

くるまで、そして自分自身が満足するか諦めるまで何回もやり続けるからこそ『何回も』なのよ。」

「マジかよお……。」

ゲツソリとした顔となつて、その場にへたり込む天龍。

終わりが無いのが『終わり』という採掘・苦行・レクイエムの片鱗に振れたことで、ようやく自分が目指していたものの実態を知り、へこたれてしまったのだろう。

「ホラ、立って立って。まだお風呂に入っていないし、それにご飯も食べてないんでしょう？今日の疲れは今日の内に癒して明日に備えるのが狩娘の基本よ。お風呂に入ってリフレッシュして、ご飯を食べてエネルギーを補給をして、温かい布団でグッスリと眠る。そうやって今日の疲れを全部消せば、明日元気に出撃出来るでしょう。」

「ウン……。」

脱力した天龍に肩を貸して廊下を進んでいく龍田はさながら介護人である。

お守り掘りの不毛さを知る龍田としては、天龍がこれに懲りたことで明日から普通に狩りに行くってくれることを願いながら……。

そして翌朝……。

「ふうん、このアイテムを作成するにはこのレシピが……。」「
バアン！（大破）

「ひやつ!？」

「龍田ぁーーツ!!」

「て、天龍ちゃん!?!どうしたのその格好!？」

自室で調合書を読んでいた龍田の前にドアを蹴破って現れたのは提督指定の水着、要するにユクモ鎮守府でお馴染みの潜水艦娘が着ているスク水に着替えた天龍。

「ご丁寧に腕装備や足装備まで外しており、残っているのは天龍のアイデンティティとも言える頭装備の角付き眼帯のみである。」

腕装備や足装備を外すことに何の意味もないどころか防御力が下がるだけなので損しかしていないのだが、形から入るタイプなのだろうか？

自分がスク水になっていることが恥ずかしいのか天龍の顔は若干赤くなっており、龍田的にはそんな天龍の可愛い姿が見られたことにごちそうさまと言いたいところではあるが、今回ばかりはいきなり想定外な姿で現れたことにより面食らってしまいそれどころではない。

「オレ分かったんだよ!」

「分かったって何が?」

「昨日寝る前に色々調べたんだ!昨日は何も考えず普段通りの格好で採掘してたけど、採掘には採掘に相応しい格好があるんだってことが!いわゆる採掘時の装備というか制服ってヤツ、それがこの提督指定スク水なんだよ!」

「ああ、そういうこと。そうね、確かにスク水には採集と高速収集のス

キルがあるものね。」

「だろ？これを装備して採掘に行けば昨日よりも多くのアイテムが素早く手に入るって寸法さ。」

「ここまで聞いて龍田もようやく天龍が何をしたがっているのかピンときた。」

「ちよつと天龍ちゃん!?まさか今日も採掘に行くつもり?」

「おう!お守りを掘りに行くんだぜ!」

「ええ!?昨日あれだけやる気をなくしてたというのにどういう心境の変化なの?」

昨日ふにやふにやになった天龍に肩を貸した龍田としては、再び天龍がやる気になっているこの現状は受け入れがたいものがある。

「風呂入って飯食ったことで一度頭が冷えたんだよ。努力なくして成長なし!オレは今の俺よりも強くなるためにお守りを掘る努力をするぜ!」

「何でそう悪い方向に思い切りがいいのよ。そういうのは頭が冷えたんじゃないくて、喉元過ぎれば熱さを忘れるっていうのよ。それに今日は昨日と違って深海棲艦がいるのよ?」

「熱が下がったのならどっちも同じようなもんだろ。それと今日は深海棲艦がいるつつつても本来はいるのが普通なんだろう?それじゃ止める理由にはなんないぜ!そういうわけで行ってくるぜ、採掘がオレを呼んでいるウゥ!」

龍田の苦言も全く気にせず廊下の奥へと消えていく天龍。

去り行く天龍の後ろ姿にため息しか出ない龍田なのであった。

翌日の夕方……。

「天龍ちゃんは昨日に続いて今日もお守り掘りかあ、大丈夫かしら……。」

ガチャ……。

「龍田あ……。」

「て、天龍ちゃん!?!どうしたのそんなにボロボロになって!?!」

本日のクエストを終わらせて自室で翌日の準備をしていた龍田。

そこへ昨日と違ってゆっくりと扉を開けて部屋に入ってきたのは、ボロボロにやられて見るも無惨な姿となった天龍であった。

動きもフラフラと精彩を欠いており、一目見ただけで尋常な状態ではないことが分かる。

「オレ分かったんだよ……。」

「分かったって何が?」

「納品している内に気付いたんだよ。昨日は何も考えず普通に採掘地点とベースキャンプを往復して納品してただけど、納品っていうのは指定数のアイテムを納品したという結果さえあれば過程はどうでもいいんだって……。」

「まあ、確かにそうね。」

「だろ?で、一秒でも早く納品する方法を考えている内にこの結論に

辿り着いたんだ。」

「辿り着いたってどこに？」

この時点で嫌な予感しかしないものの、一応龍田は続きを促す。

「基本的にクエストは3回やられるまで失敗にならない。やられた狩娘は死なずにベースキャンプに運ばれる。納品ボックスはベースキャンプにある。ここから導き出される答えは一つ。アイテムを集め終わってからワザとやられればすぐにベースキャンプに戻れるから移動の手間が省けるってことだ！」

「ああやっぱり……。」

天龍が行ったのはいわゆるデスルーラと呼ばれるもので、本人の言う通りワザとやられることですがすぐにベースキャンプに移動するテクニクである。

どうりで納品という難易度の低いクエストに出ている割にボロボロになっているわけだ。

「やられたことで報酬金は減っちゃうけど、オレの目的はお守りを掘ることだからな。ちよつとやそつと報酬金が減ったって気にしないで。移動時間を短縮出来る方がさつさとクエストを終わらせられて得だからな。」

「いや、流石に自分の身を削るやり方かどうかと思うわよ。それにモドリ玉使えば一緒じゃない。」

「モドリ玉の素材を集める方が大変だろ？そんな暇があったら採掘に行かせ。」

「じゃあこれから採掘に出るたび毎回ボロボロになるっていうの!？」

「ヘーキヘーキ、これも必要経費ってヤツさ。それに今日の疲れは今日の内に癒して明日に備えるのが狩娘の基本だつて龍田も昨日言っただだろ？お風呂に入ってリフレッシュして、ご飯を食べてエネルギーを補給をして、温かい布団でグッスリと眠る。そうやって今日の疲れを全部消して、明日も元気に採掘に行くんだぜ！」

「いや私そういう意味で言っただんじや……。。」

「そんじや風呂入ってくるからまた後でなく。」

龍田の苦言を気にすることもなく、ボロボロのスク水姿のまま廊下

の奥へと消えていく天龍。
去り行く天龍の後ろ姿に頭痛を覚える龍田なのであった。

更に翌朝……。

「天龍さん、最近燃石炭の納品クエストにしか行っていないようですね。」

天龍は神通に呼び出されて執務室にいた。

ちなみに天龍は当初、朝食後にすぐさま出撃するつもりだったのでスク水姿のままである。

「秘書艦の私がクエストの管理も兼任している関係上、誰がどのクエストに出ているのかはすぐに分かります。天龍さんはここ数日納品しかしていません。」

「まあその通りなんだが、それってダメなのか？」

「絶対にダメというわけではありませんが、我々の第一の目的は深海棲艦を狩って周囲の海域の安全を守ると共に環境の調査を行うというものです。決して全ての行動を縛るつもりはありませんが、多少なりとも鎮守府の目的に沿って活動していただけなければ困ります。」

真面目に説教をする神通だが、叱られている天龍がスク水姿のままなので傍から見ると非常にシュールな光景である。

「分かったよ、じゃあ今日は納品クエストじゃなくて狩猟クエストに出るよ。」

「分かってくれましたか！」

「ああ、だけど念のため聞いておくけどクエストっていうのは結果良ければ全てよしだよな？」

「そうですね、防衛クエストでワザと手を抜いて防衛対象を崩壊寸前まで破壊されるようなことがあったり、明らかな違反行為や迷惑行為を行った場合であればクエストを成功させたとしても注意や罰則の対象となりますが、基本的には結果が全てです。クエストを成功さえしていただければ問題はありません。」

天龍が何を言いたいのか分からない神通は明らかに疑問の表情を浮かべている。

しかし一方の天龍は言質は取ったと言わんばかりに軽くガッツポーズをしてみせた。

「じゃあせっかく執務室にいるんだし、このままクエストの受注していくわ。つーわけでこれを頼む。」

「えっ、これですか？」

天龍が受注したクエスト。

それは例の海域で小型の深海棲艦を数体狩猟するという簡単なものであった。

「ダメなのか？」

「……仕方ありませんね。それに大型種ばかりにかまけて小型種を放置するのもよくありません。高ランクの狩娘ほど大型種のクエストばかりで小型種のクエストを受ける回数が減る傾向にありますから、

小型種の増加を防ぐためにもこういったクエストを受注するというのは大切なことです。しかしだからと言って小型ばかり相手にしてもらっても困りますよ?」

「わーってるわーってる、次回は他のクエストとかも受けるからさ。じゃあな!」

狩猟さえしてもらえばいいと言った手前、強く天龍を引き留められない神通は部屋を出ていく天龍の背中を見送るしかなかった。

今までの一連のやり取り、それを龍田は隣の部屋に潜んでこっそりと聞いていた。

「天龍ちゃんったら、適当に弱い深海棲艦を狩りつつ同時に採掘をするつもりなのね……。」

悪知恵を働かせてまで採掘に勤しもうとする天龍の姿に、龍田は呆れを通り越して感心すら覚えた。

この鎮守府一番の実力者であり、仕事をしない提督に変わって鎮守府の全権を握っている秘書艦の神通相手によくやるものである。

「頼みの綱の神通さんですら止められないのなら仕方がないわ。こうなったら私が何とかしなくっちゃ!」

天龍の採掘狂い、それを直すべく龍田は決心を固めるのであった。

天龍ちゃんと炭鉱夫4

ジジジジジジ……チーン。

「さて、今回はどうだ？……チツ！」

工場にある復元機、その中を覗いた天龍は露骨に嫌そうな顔をしながら舌打ちをする。

「またハズレかよ、クソツッ！」

そして機嫌の悪さを隠そうともせず、毒づきながら八つ当たりで壁に拳を打ち付けた。

どうして天龍の機嫌が悪いのか、それはロクなスキルの付いたお守りが出ないことにある。

天龍がお守り採掘を始めてから数日が経つが、今のところ採集系のスキルか何らかの属性耐性スキルのポイントが1だけ付いたお守りしか出土しておらず、実用性の高いお守りは一つも手に入っていないのだ。

最初は慣れない採掘作業や新たなお守りとの出会いを楽しんでいた天龍も、終わりの見えない単調な作業の連続に流石に飽きてきたのだ。

しかしいくら飽きても止めることはしない。

今回はダメでも次の採掘ならいいお守りが出るかもしれないという、いわゆる沼に嵌っているのだ。

「明日こそ……明日こそ……。」

呪詛のように同じセリフをブツブツと呟きながら、工場からフラフラと出てきた天龍。

物欲という名の執念に取り憑かれたその姿はさながら幽鬼のようであった。

ちなみに未だにスク水姿のままである。

「明日、明日になれば……エへ、エへへ……。」

「そこまでよ！」

危ないクスリをキメたような言動を見える天龍の前に立ち塞がるように現れたのは龍田。

「なっ、何だよ龍田!？」

「天龍ちゃん、もうお守り採掘に行くのはやめなさい！」

「はあ?いきなり現れて何言い出すんだ!？」

「天龍ちゃん、採掘の効率を高めるために無理を続けてるでしょ?身体中ボロボロよ、そんな状態で出撃とか見ていられるわけないでしょう!」

龍田の言う通り天龍は時間の許す限り採掘クエストに出撃し続けており、一秒でも早く出撃するために食事や睡眠などの時間は最低限に済ませており、純粋な休憩時間に至っては一切ないというブラッくな勤務状況を自ら作り出していた。

更に天龍は帰還時間短縮のためにデスルーラを繰り返していた。狩娘はそう簡単に轟沈しないという事実が、逆に平気で身を削るような無茶をさせていたのである。

「別にオレが何をしていようとオレの勝手だろ?それに私的な採掘クエストだけじゃなくて、ちゃんとした普通のクエストもこなしてる。鎮守府に迷惑は掛けてねーぞ！」

「そういうこと言ってるんじゃないわ!お守りなんかのために傷付いていく天龍ちゃんを見ているのが辛いのよ!」

「お守りなんかとは何だ!強力なお守りが手に入れば狩りが楽になるんだぞ！」

「下位じゃ強力なお守りなんて出やしないわよ!せめて上位かG級になるまで待ってよ!」

「だったら上位やG級でも改めて掘り直すだけだ!下位で手に入る範囲で一番強力なお守りが出るまで掘って、上位に上がったら上位で最強のお守りを掘って、そしてG級になったらG級最強のお守りを掘るんだよ!そうすりゃ常に最強の状態でいられるだろ!？」

「口で言うのは簡単だけど、そう上手くいくわけないでしょ!それだけのお守りを手に入れるためにどれだけの時間を費やすつもりなの

!?それに死なないと思つて油断してたら本当に死んじゃうかもしれないのよ!」

「うるせえなあ。だとしても誰かに強制されたわけでもない、オレがやりたいからやつてるんだよ!。どれだけ時間が掛かろうが構いやしねーよ!」

「そう、どれだけ言つても止めるつもりはないのね?」

「ああ。」

「だったら勝負をして決めましょう!」

「勝負だあ?」

「そうよ。私が勝つたら天龍ちゃんには採掘に行くのを止めるの。」

「はあ!?そんなの誰が乗るかよ!。受けてもオレに何一つも得がねーじゃねえか!」

「そう言うと思つたわ。だから私が負けたらもう二度と天龍ちゃんの採掘を止めないわ、それどころか採掘に協力してあげる。採掘の邪魔をしてくる深海棲艦を食い止めてあげるし、納品アイテムが足りなかった場合は私が肩代わりしてあげるわ。何よりも今後神通さんに採掘を咎められた場合、私が庇つてあげる。悪くない話でしょ?」
「なるほどな。で、その勝負の内容ってのは?露骨にオレに不利な内容の勝負だったらそもそも受けないぞ?」

「そこは大丈夫、勝負はあくまでフェアよ。着いてきて。」

天龍が龍田と一緒にやって来たのは鎮守府の演習所。

以前太刀の練習の仕上げとして潮風丸に連れて来られた場所でもある。

「ここか。」

「そうよ、ここまで来たならもう勝負の内容は察したわね？」

「ああ！オレと龍田でタイムマンするんだな!？」

「全然違うわよ!!」

的外れなことを言い出す天龍に流石の龍田もツツコまざるを得ない。

「深海棲艦と演習するの！私と天龍ちゃんと同じ深海棲艦と同じ装備で戦って狩猟タイムを競うのよ！」

「なるほどな、確かにそりゃフェアな勝負だ。」

「そういうこと、それじゃ着替えてくるからちよつと待っててね。」

龍田はそう言つて更衣室の中へと入っていく。

訓練所ではあらかじめ指定された装備とアイテムを使って狩猟を行う施設である。

今回は天龍と龍田で同じ装備を使って同じ深海棲艦と戦うルールとなっている。

なので先に龍田に装備を選ばれてしまえば装備選択の余地がない天龍は不利となる。

龍田の得意武器であり、なおかつ天龍は使ったことすらない操虫棍を使用武器に指定されてしまえば苦戦は免れない。

ましてや天龍が戦ったことのない初見の深海棲艦をターゲットにされてしまえば、天龍の勝ちの目は完全になくなってしまいうだろう。この勝負、フェアなようで実は全然フェアではない。

龍田が仕組んだ出来レースなのではと天龍が邪推していると、更衣室から着替えを済ませた龍田が出てきた。

「待たせたわね〜。」

「おう……って、なんだその格好!？」

更衣室から出てきた龍田の格好、それはスク水だった。

角付き眼帯とスク水、そして背中に背負ったものすごく見覚えのある太刀、それが龍田の装備の全てである。

分かりやすく言ってしまうえば今の天龍が使っている採集装備と完全に同じであった。

「これが今回使用する装備。防御力の強化段階やお守りのスキルも含めて天龍ちゃんと完全に同じものを今回のためにわざわざ用意したのよ〜、これでフェアねえ。採集装備だから事実上スキル無しと同じだし、天龍ちゃんが今装備してるお守りも採掘で手に入れた気まぐれLv1のスキルしか付いてない採集用のお守りなんでしょ？訓練所でピッケルとか使わないから装備する意味はないけど、これも完全再現のために装備しといたわあ。」

「お、おう……。」

フェアな勝負とは言われたがここまでするとは思っておらず、スク水姿の眼帯龍田という予想外にもほどがある存在が現れたことによつて天龍はアホ面を晒すしかなかった。

というか防御力の強化段階やお守りのスキル内容まで含めて完全再現されているのはドン引きである。

「そ、それでその装備で何を狩るんだ？」

「今回のターゲットは下位のへ級よ。」

へ級とは以前バルバレ鎮守府から卯月と弥生が来たときに、天龍と卯月で狩りに行った深海棲艦である。

「へ級う？今更へ級かよ、へ級とか何隻狩ったと思ってるんだ？」

天龍が普段装備している天龍シリーズの防具は何を隠そうへ級の

素材を中心として作られている。

天龍はこの装備を完成させるべく何隻ものへ級を倒していた。

へ級との戦いを繰り返したことで相手の行動パターンはしっかりと頭の中に入っている。

使い慣れた太刀と狩り慣れたへ級の組み合わせ、これによりフェアどころか天龍に非常に有利な要素が揃った演習となっていた。

逆に言えばここまでの好条件で龍田に負けてしまえば、天龍はぐうの音も出ない完全敗北を叩き付けられることになるのだが……。

「最後にアイテムは砥石のみ。回復薬も携帯燃料も無しよ。本当は砥石も無しにしたかったんだけど、まあいいわ。へ級くらいスキル無しアイテム無しでも狩れるわよね？」

「おうよー！」

狩娘にとつてのへ級は狩人にとつてのイヤクツク的な立ち位置にいる深海棲艦である。

多くの狩娘はこのへ級から戦い方の基本を学ぶのだ。

初心者狩娘にとつては強敵のへ級だが、狩りに慣れた狩娘なら龍田の言う通りノースキル、ノーアイテム、そしてノーミスで狩れる相手なのである。

「先に私から挑ませてもらうわ。天龍ちゃんは観客席から私の戦い方を見てていいわよお。」

「ん？『戦い』じゃなくて『戦い方』をだど？それってどういう意味だ？」

「そのままの意味よ。私の戦い方を見て参考にしたらいいんじゃない？そしたら天龍ちゃんのタイムも縮まるでしょ？」

「んだとお!?舐めやがって！ハンデのつもりか!?いくら龍田でも許さねえぞー！」

「どのみち今の天龍ちゃんじゃロクなタイムは出ないわ、それじゃ先に行くからね。」

「クツソー!!後で吠え面かかせてやる!」

コケにされたことに憤る天龍だが、龍田はもはや興味を無くしたかのように振り返ることもなく戦闘エリアにつながる扉の中へと消え

ていく。

それを見た天龍も舌打ちしながら観客席につながる通路を進んでいくのだった。

ちなみに今更言うまでもないが念のために書いておくと、二人とも角付き眼帯スク水姿のままである。

スタイル抜群の二人がコスプレみたいなスク水姿で姉妹喧嘩をする様子は、本人達からしてみれば真剣だったのだろうが、傍から見ればマヌケ以外の何物でもないのであった。

観客席に天龍が着くと同時に戦闘エリアの檻が解き放たれ、龍田とへ級の戦闘が始まった。

「ウソだろ!?何だよあの動きは、相手の攻撃が怖くねえのか?」

観客席で天龍が目にしたのはへ級の攻撃を文字通り紙一重で躲しつつ、相手の弱点部位のみを攻め立てる龍田の姿であった。

僅かにでもタイミングがズレればへ級の攻撃に被弾する。

防御力など実質無いも同然のスク水装備では、下位のへ級の攻撃ですら当たればタダではすまない。

しかし龍田はへ級の動きを完全に見切っているのか、最低限の動きで攻撃を避けていく。

そして相手に僅かにでも隙があれば逃すことなく的確に攻撃を加えていく。

相手の行動パターン、自分の武器と相手の肉質の相性、そして自身の動き、全てを把握していなければ出来ない動きであった。

「へエエエツ!」

龍田の放った斬撃によりあつという間にへ級は倒れ伏す。

「ワンサイドゲームじゃねえか……。オレこれに勝たなきゃなんねえの?」

戦いとすら呼べない一方的な蹂躪劇に戦慄する天龍であったが、龍田の顔に喜びや達成感、自慢といった感情はない。それどころか不満さえ覗かせている。

「クリアタイムは4分ちよつとか、ギリギリSランクに届かなかったわねえ。あのタイミングで気刃斬りを成功させていればもっと早く倒せたかしら?慣れない武器だと思いついた行動に出られないのが歯がゆいわね……。」

どうやら龍田にとって納得のいくタイムではなかったことが不満の原因らしい。

しかし今回は天龍とタイムを競うのが目的であり、再挑戦は認められない。

一回で満足なタイムを出せなかったとしても、それは自分の未熟な腕前が原因だと己を納得させる。

「さて天龍ちゃん、あなたに私のタイムを超えられるかしら?」

戦闘エリアから観客席にいる天龍へと声を掛ける龍田。

どう聞いてもお前には無理だというニュアンスがアリアリと伝わってくる。

「チッククショー！何だつてんだよ！やってやる！取ってやろうじゃねーか、Sランク！」

やけくそで叫んだ天龍は観客席から直接戦闘エリアに飛び降りた。がんばれ天龍、大切な採掘ライフを守るのだ！

「それじゃ私はいったん下がるからね。」

龍田は戦闘エリア立ち去り、倒されたへ級も連装砲ちゃん達に運び出される。

やがて観客席に龍田の姿が現れると同時に、新たなへ級が戦闘エリアに解き放たれた。

「うっし、いくぜえ!!」

「へエエエ!!」

天龍は先手必勝と言わんばかりに太刀をへ級の頭部目掛けて振り下ろした。

ガキン!!

そしてその素直で分かりやすい攻撃はへ級の右腕の装甲であつさり弾かれる。

「うわ!？」

攻撃を弾かれたことで生まれた隙、それを見逃す程へ級はマヌケではない。

動きの止まった天龍に向けてへ級は火球を放つ。

「た、龍田はこの火球をローリングで普通にすり抜けたんだ！オレだつて！」

迫り来る火球、それに怯むことなく真っ向から迎え撃つ天龍。

しかしそれは勇気の伴った行動ではなく、単なる思い付きによる蛮勇でしかない。

「あつっーっー!!!!」

自分から火球に突っ込んだことで天龍は火だるまになってしまっ

た。

火を消すためにみつともなく転がり回る天龍、それを龍田は冷めた目で眺める。

「バカねえ。回避性能スキル無しでのフレーム回避の有効時間はおよそ0.2秒、適当に突っ込んででも避けられるはずないでしょ。」

その後も天龍の無様な戦いは続いた。

慣れたと大口を叩いておきながら、まるで有効打を与えられず時間ばかりが過ぎていく。

先に龍田の戦いを見せられてプレッシャーを感じていたのもあるのだろう。

龍田の動きを意識するあまり思っていたように戦えずそれによって更に時間が過ぎていく、正に悪循環。

アイテムがなく防御力もヘナチョコという極限状態の中で、永遠とも思える戦いの果てにようやく有効打が入り、力尽きたへ級は倒れ伏す。

「ハアハアハア……。」

肩で息をする天龍。

途中からタイムを気にする余裕はなくなり、それどころか自分が何故戦っているのかすら分からなくなりつつあった。

「クリアタイムは18分。遅過ぎる、論外ね。」

そこへ冷や水を浴びせるかのような容赦のない龍田の声が飛ぶ。

「18分？そんな戦ってたのか、オレ？」

「そうよ、これで勝負あったわね。」

18分というクリアタイムに愕然とする天龍。

SランクどころかAランクにすら届かない遅い時間。

しかし天龍は自分が龍田に負けたことよりも、そこまで時間を掛け

てしまったという事実の方にショックを受けた。

「よつとー」

先程の天龍と同じように観客席から直接戦闘エリアに飛び降りた龍田は落ち込む天龍に近付いていく。

「さて天龍ちゃん、どうして自分が負けたか分かる？」

「……………そりゃ龍田がっええからだろ？」

「違うわ、負けたのは天龍ちゃんが弱いからよ。」

「どっちも同じだろ。」

「違うわ、相手が強いから負けたのと自分が弱いから負けたのでは全然違うわ。」

今の天龍には龍田の言いたいことが分からない。

龍田は先程の冷たい態度ではなく、優しく暖かみを持った声で天龍に語り掛ける。

「今の私達は互角の条件、武器も防具もスキルもアイテムも何もかも同じよ。それなのに差が出たのなら、それは本人による差なの。私は常に狩りに出て腕を磨いているわ。でも天龍ちゃんは採掘ばかりで最近はまだにも戦ってない。戦うとしても相手は戦略関係なく倒せるような小型種ばかり。採掘というぬるま湯が天龍ちゃんの戦いの勘を鈍らせたのよ、だから簡単に倒せると思ったへ級に大苦戦した。スキルがあれば強くなる？そうね、強くなれるでしょうね。でもどれだけスキルが強くても、肝心の本人が弱くても意味がないのよ。天龍ちゃんが求めていた強さというのは自分自身の強さであって、スキルで得られる強さのことではなかったはずでしょう？」

龍田の声に徐々に天龍の目に光が戻っていく。

そして龍田の話が終わると、天龍は自分自身の両頬をピシヤリと一回叩いた。

「ゴメン龍田、オレが間違ってた！本来天龍っていう狩娘、いや艦娘は装備が良かろうが悪かろうが常に自信を持って戦う女なんだ！敵と戦わずに穴掘りだけして強さを得ようとするなんてオレのキャラじゃねえ！そんなんじや本土で遠征ばっかやってる連中と何が違う！」

「分かってくれたのね！」

「ああ！心配掛けた、本当にゴメン！お陰で目が覚めたよ、オレを見捨てないでくれてありがとう！」

戦闘エリアの中央で優しく抱き合う姉妹。

美しい姉妹愛だが、その姿はやっぱりスク水なのであった……。

食堂で仲良く談笑する天龍と龍田。

演習を終わらせた龍田は普段の装備に戻り、採掘から足を洗った天龍も普段通りの装備に戻った。

つまり二人ともスク水ではなくなったのだ。

「それじゃ明日はちゃんと討伐クエストに行くのね？」

「ああ！まあ錆び落としだからいきなり難しいところには行かぬえけ

どな。」

「おーい、これを見てくれ！」

そこへやって来たのは長門。

「先程クエスト帰りに潮風丸に会ったのだが、そこでこいつを譲ってもらったんだ！」

長門は大きな壺を両手に抱えている。

「これはマカ錬金壺といって、不要な素材を入れることでお守りを合成してくれる壺なんだ！これさえあれば採掘に行かなくてもお守りを手に入れることが出来るぞ！」

「お守り!？」

長門の声に反応するように思わず椅子から立ち上がる天龍。

それをジト目で見た龍田は席を立つと、長門の前へと歩み寄る。

「ん、どうしたんだ龍田？そんな険のある笑顔を浮かべて？」

「フンッ！」

「ヴッ……!？」

龍田は長門に腹パンをお見舞いすると、騒ぐ天龍を引きずるように食堂を後にした。

その場に残されたのは腹を押さえてうずくまる長門と、床に転がるマカ錬金壺だけ。

「わ、私は何故龍田に殴られたんだ……？」

その答えはマカ錬金壺だけが知っている………かもしれない。

葛城ちゃんとカムラ鎮守府Ⅰ

青々と生い茂る木々、滝が流れ落ちる大きな崖、楽しそうにさえずる小鳥達、優しく辺りを照らす木漏れ日。

そんな美しい大自然の中にポツンと置かれた、太ったカップパのようにもカエルのようにも見える外見をしたカラクリ仕掛けの大きな木造人形。

そのからくり蛙を相手に木刀を振るう一人の少女の姿があった。

「えいつ！えいつ！」

忍者を彷彿とさせるデザインをした紺色の装束に身を包んだ黒髪の小柄な少女。

少女は基本に沿った動きで木刀を振った後、懐から緑色の甲殻を持った虫を取り出した。

「鉄蟲系技行くわよ！」

虫は尻尾の先から一本の糸を垂らすと、空に向かって勢いよく飛んでいく。

少女はその糸を掴むことで飛ぶ虫に力いっぱい引つ張ってもらい、その勢いを利用してからくり蛙に跳び蹴りを食らわせた。

「飛翔蹴り……からの！」

少女は空中で木刀を構え直すと、からくり蛙の頭部に落下の勢いを利用して木刀を振り下ろす。

「気刃兜割イ!!」

少女は木刀をからくり蛙の頭部に叩き付け、そのままバランスを崩すことなく地面に着地することに成功した。

「や、やった！遂に成功したわ！」

気刃兜割が成功したことが嬉しいのか全身で喜びを表す少女。

そんな木刀片手にはしやぎまわる少女の後方から一人の男性が現れた。

「おーい、愛弟子！」

「あつ、提督！ウツシ提督！」

男性に気付いた少女は振り返ると笑顔を見せる。

現れた男性は彼女の提督、名前はウツシというらしい。

少女の装備とはまた趣の異なる忍者風の装束を身にまとい、腰には狼のような生物のお面を下げている。

「やあ、愛弟子！キミの努力を見ていたよ。遂に鉄蟲系技が使えるようになったんだね！俺も自分のことのように嬉しいよ！」

「もうっ、また愛弟子って呼んでる！私には葛城って名前があるのよ！」

少女の名前は葛城というようだ。

「はっはっはっ！だけどキミは俺が育てた最初の、そして現状唯一の狩娘だからね。俺の愛弟子に違いないのさ！」

「でも鎮守府には雲龍姉さんと天城姉さんがいるじゃない！それにも狩娘はいるでしょ！」

「そうは言っても彼女達はフゲン前提督が育てた狩娘で、俺はそれを引き継いだだけだからね。誰が何と言おうと俺の愛弟子は葛城、キミ以外にいないのさ！」

「ハア、もういいわ……。」

何度言っても愛弟子呼びを止めようとしないうツシ提督に諦めたのか、葛城は溜息を吐く。

「それより愛弟子！キミは鉄蟲系技を成功させた！これで狩娘見習いは今日で卒業、名実ともにカムラ鎮守府の狩娘を名乗れるよ！今まではずっとこの修練場で訓練の日々だったけど、今日から実戦に出られるんだ！」

ウツシ提督の言う通り、ここはカムラ鎮守府………の修練場。

カムラ鎮守府は位置的にはユクモ鎮守府と近い場所にある鎮守府であり、ユクモ鎮守府と同じように和風の雰囲気漂う鎮守府である。

「せっかく実戦に出られるようになったのに、いつまでも木刀では心

許ないだろう？これは俺からのプレゼントだ！」

「これはカムラノ鉄刀!?私にくれるの?やったあ!やっぱり本物の太刀を持ってば身も心も引き締まるわね!」

ウツシ提督が葛城に渡したのは鱗状の模様が特徴的な緑青色をした鉄製の直刀であるカムラノ鉄刀。

カムラは良質な鉄が産出される土地であり、その鉄とカムラ独自の技術で作られた鉄器は他の鎮守府で製造されたものよりも丈夫なものが多い。

このカムラノ鉄刀も例外ではなく、非常に信頼の置ける武器である。

ちなみに武器の他にもカムラ鎮守府はバルバレ鎮守府やセリエナ鎮守府と共同で防具やスキルの研究も行っており、防具やスキルの面でも他の鎮守府の一步先を行っている。

カムラ鎮守府はその古めかしい雰囲気とは対照的に、様々な新技術を持った次世代鎮守府なのだ。

「喜ぶのはまだ早いよープレゼントはこれで終わりじゃない、次のプレゼントはこれさー!」

ウツシ提督はピーーツと音を立てて口笛を吹く。

すると周囲の森がざわめいた後、木々の間から丸っこい中型の鳥が5羽程こちらへ向かって飛んできた。

「よーしよしよし、よく来たね……って痛い!いたたた!?止めて止めて!!」

飛んできたのはまん丸体系のオレンジ色の羽毛を生やしたミミズクのような鳥達。

しかし集まった鳥達は何が気に入らないのか自分達を呼んだはずのウツシ提督を蹴ったり突いたり執拗に攻撃し続ける。

やがて気が済んだのか、鳥達は攻撃を止めると葛城の前に降りて一列に並んだのであった。

「ふう、酷い目に遭った……。さてこの子達はフクスクというんだ!

愛弟子も鎮守府で何度か見掛けたことがあるだろう。カムラの狩娘はこのフクズクをパートナーにして周囲の索敵をさせているんだ！狩娘デビュー記念に愛弟子にも一羽あげよう、このフクズク達の中から好きな子を一羽選んでくれ！」

フクズク達から攻撃を受けたことで若干やつれたウツシ提督は一旦置いといて、葛城はフクズクを一羽ずつ吟味していく。

「どの子がいいかなあ？うーん、この子は何か違う。この子もピンと来ないなあ。こっちの子は……うん？」

フクズクの列の一番端、そこに一羽だけ明らかに雰囲気の違いフクズクがいた。

フクズク特有のオレンジ色ではなく、葛城の装備と同じような深い青色をした羽毛。

大きく発達し、後方に長く伸びた羽角。

クリクリとした黄色い瞳を持つ他のフクズクとは違って目の色は赤く、目付きも若干悪い。

翼には小さな爪まで生えており、外側にある三枚の風切羽に至ってはまるで刃物のように硬く鋭く変化している。

この不思議なフクズクに葛城の目は釘付けになった。

「この子よ！私このフクズクにするわ！」

葛城は青いフクズクを抱き上げる、フクズクの方もまんざらではなさそうだ。

それを見たウツシ提督はフクズクが葛城を受け入れたことに安心してつつも、そういえばこんな色のフクズクなんていたっけ？と内心で首を傾げていた。

「あなたの名前はセイちゃんよ、青いからセイちゃん！セイちゃんよろしくね！」

「ホー。」

セイちゃんと名付けられた青いフクズクは葛城の左肩に飛び移ると、そこを定位置と決めたのか大人しくなる。

「よし、パートナーとなるフクズクも決まったね！それでは次行ってみよう！」

葛城とセイちゃんを連れて修練場から出ていくウツシ提督。
その後ろ姿を見送ったフクズク達は静かに森の中へと戻って行っ
た。

ウツシ提督に連れられて葛城がやって来たのはオトモ広場。

修練場はオトモ広場から川を船で渡った場所にあるので厳密には
戻ってきたと言うのが正しい。

「さて、これから第二のパートナーを選んでもらおう！」

「第二のパートナー？」

「カムラの狩娘のパートナーはフクズクだけじゃないんだよ！第一の
パートナーであるフクズクが索敵をしてくれるのに対して、第二の
パートナーは戦闘そのものを手助けしてくれるんだ！」

そう言いながらウツシ提督は両手をパンパンと鳴らす。

するとその音が合図となったようで、周囲の茂みや木の上から次々と犬のような生き物が飛び出してきた。

「あつ、ガルク！」

「そう、ガルクだ。前提督がいつも連れてきているカエンとは愛弟子も遊んだことがあるだろう？ けどこのガルクはただのペットじゃない、狩りを助けてくれる心強いパートナーなんだ！ 俺ももちろんライゴウという名前のガルクをパートナーにしている、狩場では何度も助けられたことがあるんだよ！ だから愛弟子にもパートナーとなるガルクを決めてもらおうよ。カムラの技術で鍛えた武器とフクスク、そしてガルク。この三つを揃えて初めて出撃が許可されるんだ！」

「うーん、この中から選ぶのかあ……。」

フクスクの時と同じように一頭ずつガルクを吟味していく葛城。

しかしやはりピンとくる個体はいない。

とはいえガルク抜きでは出撃の許可が下りないようだし、この際妥協してでも選ぶべきかと葛城が考えていると……。

「ホー!？」

今まで大人しかかったセイちゃんが突然騒ぎ出し、葛城の肩から飛び立った。

「セイちゃんどうしたの？ どこへ行くの!？」

急に飛び立ったセイちゃんに慌てた葛城だったが、セイちゃんはすぐ近くのオトモ広場と修練場を隔てる川のほとりに降り立った。

セイちゃんが遠くに行かなかったことに安心した葛城だったが、セイちゃんが川の上流を眺めていることに気付いた。

「何か見えるの?？」

葛城がセイちゃんに釣られるように川の上流へと目を向けてみるとそこには……。

「何あれ?？」

どんぶらこどんぶらこ赤い色をした犬のようなものが流れてくるではありませんか！

「ひよつとしてガルクが溺れているの？ だったら助けなきゃ！」

葛城は狩娘特有の能力で川の水面に降りると赤いガルクを抱き上げる。

「お、重ッ!？」

一般的なガルクですら大人の男性より大きな体格をおり、見た目以上に重たいのだ。

ましてやこの赤いガルクは普通のガルクよりも大きく、しかも水に濡れたせいでことさら重い。

しかし葛城も意地と根性で持ち上げ、どうにか岸まで運ぶことに成功した。

「はあはあ……。」

「愛弟子、お疲れ様！ところでそのガルクのことなんだけど……。」
運んだガルクを葛城とウツシ提督は眺めるが、ピクリとも動かない。

しかもそのガルクは全身に皮膚も毛皮もなく、頭から尻尾の先まで赤い筋組織が剥き出しになってしまっており非常にグロテスクである。

川を流れるうちに岩に何度もぶつかつたり、魚にかじられたことで皮膚が剥がれてしまったのかもしれない。

まぶたのない瞳も白く濁っており、これはもう死んでしまっているのだと葛城は考えた。

しかし水死体となったこのガルクの観察を続けていると、どうやらこの赤い身体は硬質な外皮で構成されたものであり、皮膚が剥がれたのではなく最初からこのようになっていたのだということに気が付いた。

皮膚以外にも普通のガルクとは大きく違う点がいくつもある。

例えばこの太くて長い、松かさのような甲殻で覆われた尻尾。

ガルクの尻尾は毛で覆われていて分かりにくいのが、尻尾そのものは細くて柔らかい上に、長さもそれほどでもない。

このガルクが大きいのは運んだ時点で分かっていたが、尻尾の先まで含めると全長5メートル以上はありそうだ。

もう一つは一目見ただけで高い咬合力を感じさせる大きく発達し

た筋肉質な頭部、そして口を閉じてても口の外にはみ出る太く鋭い牙。ガルクは細面であり、口を閉じれば当然牙は見えなくなる。そもそもガルクの牙はここまで太くはない。

そして一番異様なのは二層構造になった、まるで大型ナイフのような鋭いカギ爪。

驚くことに爪の数は全部で十本もあり、上に生えている四本の爪はただ鋭いだけだが、下に生えている六本の爪にはノコギリのようなギザギザの刃が生えており、引つ搔くを通り越して相手をズタズタに引き裂く恐ろしい凶器になっている。

ガルクの爪は走る際に地面をしっかりと踏み込むのに使用するものであって、相手を引つ搔くことには使用しない。なので爪は短し、引つ搔かないのだから鋭さも必要ないのだ。

「見れば見る程変わったガルクね……。」

「いや、どう見てもそれガルクじゃなくてモン……。」

「あつ、動いた!」

葛城はこの赤い水死体をガルクだと思っているようだが、ウツシ提督はどんな角度から見てもこの生物がガルクには見えない。

なのでそのことについて突っ込もうとした瞬間、水死体の足がピクリと動き、葛城がそれに気を取られたことでウツシ提督のツツコミは未遂に終わった。

どうやらこの赤いガルクは水死体ではなく、溺れて気を失っていただけのようである。

「ワウ?」

「大丈夫? 起きられる?」

「ワウ!? グルルル!!」

目を覚ました赤いガルク。

葛城は介抱しようと近付くが、赤いガルクは葛城を警戒し近付けないと長い尻尾を逆立てながら威嚇する。

他のガルク達は敵意剥き出しの赤いガルクを取り囲み、逆に威嚇し返した。

状況は正に一発即発、いつ戦いが始まってもおかしくない。

(ど、どうしよう!?このままじゃガルク同士で喧嘩になっちゃうじゃない!こういう時どうすれば……。)

この場を収めるべく頭を働かせる葛城、そしてふと思い付いた。

桃太郎は犬をきび団子で仲間にしていたと……。

(このガルクはどんぶらこどんぶらこと川を流れてきたんだ、だったらヒントは桃太郎よ!桃太郎はきび団子だけで野生動物のサルやキジすら仲間にしたでしょ、だったら最初から人に飼われている犬を仲間にするのなんて朝飯前よね!ガルクだって犬みたいなものでしょ、だったら食べ物を与えれば言うことを聞くはずよ。これで仲間に来なかつたら世界の方が間違っているわ!)

何一つ筋の通らないトンチンカンな発想だが、テンパってマトモな判断力を無くした葛城にはこれが正しい選択のように思えた。

ポーチにはきび団子こそ入っていないものの、肉焼きの練習に使った生肉の余りが入っている。

それに腹が膨れれば精神的に落ち着くし、食料を貰えたことでこっちが敵ではないと理解して貰えるかもしれない。

「これ、食べる?」

葛城はそつと赤いガルクの前に生肉を置く。

ガルクは警戒しつつもその匂いを嗅ぎ、やがて異常がないと判断すると肉を食べ始めた。

「そうそう、食べていいよ。私はあなたの敵じゃないからね。ほらみんなも落ち着いて、この子は悪いガルクじゃないわよ。」

赤いガルクを落ち着かせるように優しく声を掛ける葛城。

赤いガルクが食事をしている間に、他のガルクも落ち着かせる。

腹が減っていたのか肉はあつという間に無くなり、食べ終えたガルクはまるでエネルギーの充填を終えたとでも言わんばかりに全身を赤熱化させ、口からは蒸気のような白い呼気を漏らす。

見るからにヤバそうな姿へと変貌した赤いガルクだが、内心は落ち着きを取り戻したのか威嚇を止めており、葛城のことを白く濁った瞳で見つめている。

「私がおね、溺れていたあなたを助けたのよ。私はあなたの味方よ!そ

れでね、恩を売るわけじゃないけど私のパートナーになってくれないかな？あなた、私が今まで見てきたガルクの中で一番大きくて立派よ。あなたが私のパートナーになってくれればこれからの生活がきつと楽しくなると思うわ！あ、もちろん断つてもいいわよ！断つたからって苛めたり追い出したりしないわ！」

まだ慌てているせいか早口で赤いガルクに語り掛ける葛城、だがその心はしっかりとガルクに伝わったようだ。

ガルクはそつと葛城の顔に鼻を擦り付ける。

「クウン。」

「いいの？やったあ！契約成立よ！」

喜ぶ葛城は赤いガルクのゴツゴツとした首周りに思い切り抱き着く、ガルクは嫌がるそぶりも見せずにはされるがままになっている。

これは完全に認められたと思つて間違いないだろう、葛城のテンションはもはや天井知らずである。

「これでああなたは私のガルクよ、後悔はさせないわ！力を合わせて戦いましょう！よし、あなたの名前はモモちゃんに決めたわ。よろしくねモモちゃん！」

「ワオオオオオオン!!」

赤いガルク改めモモちゃん、いい名前を付けたと葛城もご満悦である。

名前の由来は桃太郎からなのだが、葛城の内心を知らないウツシ提督からしてみればどうして名前がモモちゃんに決まったのかサツパリ分からない。

しかも可愛いガルクではなく、こんな不気味な外見の謎生物をパートナーに選んだ葛城の感性には変わり者として知られるウツシ提督でも少し引いた。

しかし敵意を向けてくる相手に臆することなく歩み寄り、恐ろしい見た目に左右されることなく和解して見せたその姿は彼女の可能性を感じさせるものでもあった。

「我が愛弟子よ、オレはキミの成長が誇らしいよ！ただ強いだけじゃない、優しさも兼ね備えたキミならカムラ一番の狩娘になることだって夢じゃない！いや、全鎮守府で一番の狩娘になることだって夢じゃないさ！キミの未来は明るく輝いているよ！それに俺も全力で応援している！師匠として、提督として！いつでも、いつまでも！どこでも、どこまでも見守っているよ!!」

葛城に流石にうるさいと思われていたことは秘密である。

葛城ちゃんとカムラ鎮守府2

前回、青いフクズクのセイちゃんと赤いガルクのモモちゃんをパートナーにした葛城。

現状修練場とオトモ広場で出来ることを全部やった彼女はウツシ提督と一緒に鎮守府に帰ってきた。

「お帰り葛城。」

「お帰りなさい葛城。」

「姉さん！」

鎮守府に戻った葛城を迎え入れてくれたのは、それぞれデザインの違う巫女服のような防具を身につけた二人の女性。

彼女らは葛城の姉であり、ここカムラ鎮守府の秘書艦も務めている狩娘である。

左側のみに髪飾りを付けている半袖の服装の女性が長女の雲龍、銀髪の長い三つ編みとゆるふわな雰囲気特徴的である。

両側に髪飾りを付けている長袖の服装の女性が次女の天城、明るい茶髪と左目尻の泣き黒子、そして優しい雰囲気特徴的である。

「姉さん、私今日から狩娘になったのよ！狩娘よ狩娘！」

「そう、よかったわね。」

「葛城が今までずっと頑張っていたのは天城も雲龍姉様も知ってたからね。本当におめでとう！」

表面上は淡々としているが内心ではちゃんと喜んでいて雲龍と、分りやすく祝福してくれる天城。

しかし二人とも視線はどこことなく葛城の後方へと向けられているような気がする。

より厳密に言えば、葛城の後ろにいる赤いガルク（？）へと向けられているようだった。

「あつ、今紹介するわ！この子が私のフクズクのセイちゃんとガルク

のモモチちゃん！」

その視線を新しいパートナー達に対する興味によるものだと思う。葛城は二匹の紹介も兼ねて前に出す。

「どう、可愛いでしょ。セイちゃんもモモチちゃんも普通のフクズクやガルクとは見た目がちよつと違って個性的なのよ！お陰で私だけのトクベツって感じがしていいでしょ！」

「可愛い？可愛いかしら？そうね、フクズクはちよつと目付きが悪いけど見ようによっては可愛く見えるかも？」

「え〜つと……と、とつても個性的な子達ね、葛城の言う通りよ！天城も今まで色んなガルクを見てきたけど、葛城のガルクみたいな子を見るのは初めてです！」

「えへへへ、でしょう！この子達と一緒にすっごい狩娘になって見せるから期待しててよね！」

セイちゃんとモモチちゃんを褒められて嬉しそうな葛城だったが、どう聞いてもモモチちゃんのこととは褒められていないし、そもそも雲龍と天城の顔がずっと引きつっていたことには気付いていないのであった。

「おう、葛城か！遂に狩娘として認められたそうだな！」

そこへ立派な太刀を背負った大柄な老人がやって来た。

髪は全て白髪になっているが、筋骨隆々で全く年齢を感じさせない。

「あつ、フゲン前提督！」

老人に対して葛城も雲龍も天城も、そして提督であるウツシもが会釈する。

何を隠そう、この老人こそがカムラ鎮守府の基礎を築いたフゲン前提督なのだ。

雲龍や天城を狩娘として育て上げたのもフゲンであり、鎮守府の實質的なトップは彼なのだが、年寄りがいっまでも出張つていては若い芽が育たないとの考えで提督の地位をウツシに譲り、現在は鎮守府の顧問として裏方に徹しているのだ。

「いつの間にか剣まで背負つてやる気に満ち溢れているな。ん!?……」

ウム、心通わせられるパートナーも得られたようだな！フクズクとガルクは狩りを有利に進めるための便利な道具などでは決してない、何物にも代えがたい友だ。大切にするんだぞ、いいな？」

「うん……じゃなくてはい！セイちゃんもモモちゃんもまだ出会って一時間も経ってないけど、仲良くなれたと思ってる……ます！私は大切なこの子達に恥じない狩娘になってみせる……みせます！」

モモちゃんの姿を見て一瞬驚いた顔をするものの、ウツシ提督や二人の姉と違ってすぐさま何事もなかったかのように振舞うフゲンは流石である。

「さて、ちよつと説教臭くなってしまったが葛城よ！オマエにこの言葉を贈ろう！」

「気焰万丈！猛き炎の如く狩場を駆け、鎮守府の誇りと讃えられる英雄を目指せ！」

気焰万丈。フゲン前提督の口癖であり、カムラ鎮守府のスローガンでもあるこの言葉。

炎のように力強く命を燃やし、その熱く燃え上がる魂を代々受け継がせるという意味を持つ。

そして今回、新たに狩娘となった葛城にもカムラの魂、気焰万丈の心は受け継がれたのであった。

「さて、ここいらで俺は引っ込むとしよう。ジジイの出番は終わりだ、後は若い者同士でやってくれ！」

「ではここからは俺が提督としての務めを果たさないとね！」

去っていくフゲン前提督を見送った後は、ウツシ提督が場を仕切る。

「いいかい愛弟子、狩娘の仕事は色々あるけど基本はクエストだ。何をするにしてもまずクエストを受けることから始まるんだ、いいね。そしてそのクエストを受ける方法、それはクエストの管理をしている

秘書艦に受注して承認を得なきやならない。カムラ鎮守府の秘書艦は愛弟子も知つての通り、雲龍と天城だ。」

葛城に向けて雲龍は胸の前で軽く右手を振り、天城は笑顔を見せる。

「雲龍は下位の、天城は上位のクエストを取り扱っている。今の愛弟子は狩娘になったばかり、狩娘ランクは1だからね。残念だけどまだ最低ランクのクエストしか受けられない。でもこれからさ。経験を積んでランクを上げていけばそのうち上位のクエストだって受けられるようになるし、ひよつとしたら上位よりも上のクエストだって受注出来る日が来るかもしれない！愛弟子、キミの可能性は無限大だ！提督として、そして師匠としてキミの成長を心より楽しみにしているよ！」

その後、葛城は雲龍からクエストを受注し、セイちゃんとモモちゃんを連れて海辺に来ていた。

狩娘になって初めての出撃、しかし葛城の顔色は微妙に優れない。

「……で、何で提督までここにしているわけ？」

その理由は彼女らの後ろにニコニコ笑顔のウツシ提督が腕組みしながら立っているからであった。

「何でって、そりや我が愛弟子の記念すべき初陣、処女航海だからね！師匠として付いていくのは常識だろう？」

「言い方がキモいんだけど……。」

そんな常識聞いたこともないし、それが常識なら自分は非常識でいいとばかりに葛城はしかめっ面を見せる。

「さて、海に出る前にこれを渡しておこう。」

そう言ってウツシ提督が渡してきたのは小さな蜘蛛の模様が描かれた犬の首輪。

「それは猟犬具、水蜘蛛だ。猟犬具というのはガルクのために作られたサポートアイテムさ。ガルクに装備させることで戦略の幅を広げてくれるぞ！そして今渡した水蜘蛛は猟犬具の中でも特別なもので、妖精さんの技術を取り入れて作られているんだ！それを身に着けたガルクは狩娘と同じように水面を歩けるようになるぞ！それがなきや流石のガルクと言えども狩娘のパートナーは務まらないぜ！」

葛城はモモちゃんの首に水蜘蛛を巻いてあげた、モモちゃんも首輪を嫌がることなくすんなりと受け入れる。

「うんうん、似合ってるぜ！それじゃ気を引き締めて行ってくるんだ！初心者狩娘向けの簡単なクエストとはいえ気を抜いちゃいけないよ、何事も始めが肝心！逆に言えば始めさえ上手くいけば残りも全部上手くいくさ！オレは海の上は歩けないけど、キミ達の活躍はフクズクを飛ばしてちゃんと見守っているからね！」

何だか監視されてるみたいで気分を害しながらも葛城は海に繰り出していく。

ウツシ提督としては自慢の愛弟子である葛城のカッコいいところ

が見ただけなのだが、葛城にとってはうっとおしい以外の何物でもないのであった……。

「凄い！本当にガルクが水面を走ってる！」

葛城と並走するモモちゃん。

そのままスピードを落とすことなく鋭くカーブを切り、そのまま勢いを殺すことなく大ジャンプへとつなげていく。

初めて会ったときはドンブラコドンブラコと川を流されていたというのに、今じゃ地上と遜色ない動きを見せるまでになっていた。

この水蜘蛛はウツシ提督の言った通り、ガルクに水上活動を可能とさせる猟犬具である。

妖精さんの謎技術の影響なのか何故かガルクにしか使用出来ず、ガルク以外の生物が装備して水面を歩こうとしても水没してしまう。

つまりモモちゃんはとてもガルクとは思えない見た目をしているが、水蜘蛛を使用出来たということかられっきとしたガルクであるという証明になる……のかもしれない。

「ホー。」

モモちゃんにとって、そして葛城にとっても初めての海である。

地上と同じ動きが出来るか、訓練と同じ動きが出来るか、一通りチェックしていた葛城の下に偵察に出していたセイちゃんが帰ってきた。

「あっセイちゃん！ターゲットは見つかったの？」

「ホー！」

「よし、追うよモモちゃん！」

「グルウッ！」

葛城を誘導するように低空でゆっくり飛んでいくセイちゃん。

葛城はまるで馬に乗るのと同じようにモモちゃんの背に跨ると、こ

れまた馬を走らせるのと同じように脇腹を軽く蹴る。

するとモモちゃんは馬のように葛城に乗せたまま勢いよく走り出す、その一連の様子はもはや犬型の馬である。

しかしガルクは馬ではない、なので馬には出来ない芸当も見せてくれる。

セイちゃんは直線コースでターゲットに向かっていているようなのだが、葛城とモモちゃんの前に立ちはだかるのは大きな岩礁。

空を飛べるセイちゃんと違って飛べない葛城達は回り道をするしかないと思われたが……。

「跳んでモモちゃん！」

葛城の指示を受け、モモちゃんは岩礁目掛けて大きく跳ぶ。

このまま岩礁に激突するかと思いきや、壁面に取りついてそのまま壁を駆け上がり、岩礁を登り切ってしまう。

そして岩礁の頂上から反対側へと飛び降りると、何事もなかったかのように走り出した。

「見つけたわ、あれね！」

葛城はセイちゃんの索敵とモモちゃんの高い機動力のお陰で、あつという間にターゲットの居場所に辿り着いた。

魚雷とマッコウクジラを混ぜ合わせたような黒く丸みを帯びたシルエット、白くて短い二本の足、深海棲艦特有の大きく発達した歯、額に生えた群れのボスであることをアピールする一本の角。

ようするに今回のターゲットはドスイ級である。

大多数の駆け出し狩娘が一番最初に狩る大型深海棲艦、それがドスイ級であり、天龍が最初に狩った大型深海棲艦も当然のようにドスイ級。

そんなドスイ級に葛城も挑むことになったのだ。

「私は本丸を狙うわ！セイちゃんとモモちゃんは取り巻きの相手をお願いするわよ！それじゃあ作戦始め！」

葛城は走るモモちゃんの背から飛び降りると、ドスイ級に戦いを挑

む。

その戦いぶりはどうと……今回が初めての大型深海棲艦戦、それどころか初めてのクエストとは思えないほどの安定した立ち回りを見せていた。

基本的に深追いはせず相手の動きの隙を突くように攻撃を加えていき、そうかと思えば見切り斬りで相手の攻撃をいなしつつ気刃大回転斬りへと派生させてダメージを与えていく。

小型モンスター相手とはいえ実戦経験を積んでいた天龍でさえ初見では手こずったドスイ級が、初出撃の葛城相手に完全にペースを奪われているのだ。

しかしその理由はいたって単純なもの。

修練場でからくり蛙相手に訓練を積んでいた、それだけである。

からくり蛙は単なる練習用のサンドバッグではない。

向きや姿勢を変えるだけでなく、四股踏みによる格闘攻撃や様々な属性ブレスを使った遠距離攻撃もしてくる立派な『訓練相手』なのだ。

からくりとは思えないほどの素早い動きと攻撃の熾烈さは、下手な中型モンスターより強いまでである。

そもそも建造されてからロクな説明もなくいきなり実戦に放り出された天龍と違って、葛城は教官も兼任するウツシ提督や先輩狩娘である姉達にじっくりと戦い方について学んでいたというのも大きい。

座学と実技、両方において最高の教育を受けていた葛城にとって初陣かつ初見とはいえドスイ級程度に苦戦する理由にはならなかった。

「ホー……」

「ガウウー・ガアブー！」

またセイちゃんとももちちゃんの戦闘力が非常に高く、配下のイ級を全く寄せ付けなかったというのも要因の一つである。

セイちゃんは飛び回ることでイ級の注意を引き、時にはすれ違いざまに刃物のように硬質化した翼で斬り付ける。

ももちゃんは強靱な足腰で縦横無尽に動き回り、爪の一振りでもイ級の群れを引き裂いていく。

二匹の奮闘のお陰でイ級の横やりが入らなかったことで、葛城は落

ち着いてドスイ級の狩猟に集中出来たのだ。

とはいえ訓練されたガルクでも小型深海棲艦を一撃で仕留めるなんて芸当は出来ないし、ましてや噛み付きならともかく爪を武器にして戦うなんてことは決してない。

フクズクに至っては本来の仕事は偵察のみで戦闘力は皆無であり、狩猟中に降りてくることはほとんどないのだ。

しかしこの異常に戦闘力が高い二匹を初めてのパートナーに選んだことで、パートナーに対する価値観が完全にバグった葛城は何も知らないまま安心して二匹に背中を任せるのであった。

「イッ！ツ、イッ！ツ……。」

一方的にダメージを負い、ボスの誇りである角も折られ、満身創痍となったドスイ級。

既に限界が近いのか動きは鈍く、肩で息をしているように見える。分かりやすく言えば瀕死にまで追い込んだということであり、罨と麻酔があれば捕獲も可能だろう。

「いいわいいわ、いい感じ！いい具合に追い詰めたわ！このまま逃がさずに決めるわよ！そしてトドメの一撃に選ぶのは当然この技！飛んで翔蟲！」

「イッ！ツ!？」

自ら飛ばした翔蟲に引っ張られる勢いを利用して繰り出す強烈な飛び蹴り。

葛城の右の足裏はドスイ級の眉間にめり込み、顔面に軌跡の付いた凹みを残す。

ドスイ級が怯んでいる隙に葛城は空いた左足でもう一発ドスイ級に蹴りを入れることで、後方宙返りをしながら空高く飛翔する。

そして空中で太刀を振りかぶると、落下の勢いに合わせて渾身の力で振り下ろす。

「喰らえっ！気刃兜割イ!!」

ザンツ!!!

空気すら斬り裂くような鋭い斬撃、気刃兜割。

その一撃は文字通りドスイ級の頭部の甲殻を叩き割り、断末魔を上げる暇すら与えずに絶命させた。

「イツ!? イイ~~~~ツ!?」

ドスイ級が倒されたことに気付いた配下のイ級は蜘蛛の子を散らすように慌てふためいて逃げ去っていく。

しかしそれを追うようなことはない。

葛城の任務はドスイ級の狩猟であり、イ級の殲滅ではないからだ。

「ふう、これにて任務完了ね!」

「ウォー~~~~ンツ!!」

「ホーツ!」

狩猟までに掛かった時間は十分足らず。

相手が初心者向けのドスイ級とはいえ、初めての出撃とは思えない幸先のいいスタートになった。

「おーい、愛弟子〜！」

出撃した海辺まで戻ってきた葛城達を、ウツシ提督は手を振りながら迎え入れる。

「よくやったね！キミの活躍は余すところなく見ていたよ！初めての出撃であそこまで鮮やかな狩りをするなんて想像以上だ！この結果はキミの努力の積み重ねによるものだ、本当によく頑張ったね。キミを鍛え上げた提督として、俺ももうひたすらに鼻が高いよ！」

「えっ……そ、そう？ふうん……そっか。まあ、ありがと……えへへ……。」

褒められたことでまんざらでもなさそうな顔で照れる葛城。

ウツシ提督の大袈裟な振る舞いやしつこいまでのお喋り加減に対してうっとおしがつている葛城ではあるが、何だかんだ言って提督のことは慕っているのであった。

「これから愛弟子のクエスト成功を祝って、鎮守府に帰ったらうさ団子で打ち上げパーティだ！」

「わあい、うさ団子！葛城うさ団子大好き！」

うさ団子、特別な製法で作られたカムラ鎮守府の名物団子である。カムラ鎮守府に所属している者でこの団子が嫌いな者は一人もない。

人間や狩娘はもちろん、妖精さんやガルクですら大喜びで食べるのだ。

もちろん葛城もうさ団子が好物なのであった。

「……と言いたいところなんだけど、火急の知らせが入ってね。残念だけどうさ団子パーティはまた今度だ。」

「は？・何でよう？」

脳内でうさ団子パーティを思い浮かべて頬を緩ませていた葛城の耳に、冷や水を浴びせるようなウツシ提督の深刻な声が響く。

「実はさっき葛城が戻ってくる直前に鎮守府から連絡があったんだ。鎮守府に百竜夜行が近付いているってね……。」

「百竜夜行？・何それ？」

無事にドスイ級を倒して一息吐こうとした葛城の前に立ちはだかるのは百竜夜行。

葛城の長い一日はまだまだ終わらないのであった。

葛城ちゃんとカムラ鎮守府3

「実はさつき葛城が戻ってくる直前に鎮守府から連絡があつたんだ。鎮守府に百竜夜行が近付いているってね……。」

クエストを無事に終わらせた記念にこれからうさ団子で打ち上げだ……と思いきや、ウツシ提督の口から出てきたのは百竜夜行とかいう初めて耳にする単語。

百竜夜行とやらがどんなものなのかは葛城は全く知らないが、言葉の響きから察するに不穏な雰囲気漂っている。

「百竜夜行？何それ？」

「そういえば愛弟子は百竜夜行を一度も経験したことがなかったね！よし、愛弟子よ！まず前提としてモンスターのことはどれだけ知っているかな？」

「私知ってるのは大まかなことだけで、モンスターの細かい種類や特徴とかは知らないわよ。それでもいいのなら、まずモンスターとはこのカリユード諸島でしか確認されていない野生動物の総称で、基本的に本土の生物よりも大きな体躯を持つ種が多い。また強靱な肉体を持っていて銃で撃たれたくらいじゃビクともしないし、口から火を吐くなど現実離れた能力を持っていることもある。その生態はまだまだ謎に包まれていて、私達狩娘の任務にはそういった未知の生物の調査も含まれている……ってところかな。」

「うんうん、それだけ知っていれば充分だ。よく勉強しているね！」

「そしてウツシ提督の特技はそのモンスターのモノマネ……でしょう？」

「うん、そうだね……。」

葛城がモンスターについてしつかりと勉強していたことに対して喜んだウツシ提督だったが、最後に葛城が呆れ口調で放った一言によって目に見えてテンションが下がる。

自分の特技を貶されたのが悲しかったらしい。

「この間だつて稲味噌肉とか言いながら地面に仰向けに寝っ転がりながら、ブツサイクなタヌキのお面で自分のお腹をポコポコと叩いていたじゃない。ああいうのみつともないからやめてよね。」

「稲味噌肉じゃなくてイソネミクニだよ！イソネミクニは水棲のモンスターで、仰向けで泳ぎながら食料の貝を固い腹部で叩き割る習性があるんだ。モンスターのモノマネっていうのはそのモンスターの生態や行動を熟知していないといけないから、真似が出来るっていうのはそれだけでも凄いことなんだぜ!?それとあのお面はタヌキじゃなくてブンブジナ！俺が一つ一つ魂を込めて作った大切なお面だよ!?俺がお面作るのが好きなのは愛弟子も知ってるだろう?」

自慢のモノマネもお手製のお面もメタクソに酷評されたウツシ提督は悲しそうな顔でイソネミクニとお面について説明するが、葛城にとってはそんなの知ったことではない。

葛城はイソネミクニもブンブジナもどちらも見たことも聞いたこともないのだから、変なお面を持って奇行をしているようにしか見えないのだ。

「はいはい、すごいすごい。で、そのモンスターと百竜夜行に何の関係があるの?」

「まだ愛弟子が建造される前、カムラ鎮守府には定期的にモンスターの大量が押し寄せてくることがあったんだ。それを妖怪や幽霊みたいな怪異が大量で練り歩く百鬼夜行になぞらえて、百竜夜行と呼ぶようになったんだ。今のところカムラ鎮守府以外では確認されていない現象なんだぜ。」

「モンスターの大量が鎮守府に?私が造られる前にそんなことがあったんだ……。」

葛城は今まで狩娘になるための修行や勉強に必死で、自分が造られる前のことについては聞いたこともなければ聞こうとしたこともなかった。

自分が造られる前に何度も鎮守府がモンスターの襲撃に遭っていたと聞けば感慨深くもなる。

しかし今の話の中で、ふとあることに気が付いた。

「あれ？だけど鎮守府ってちゃんとモンスターの縄張りから外れた場所に建てられているんでしょ？なのにモンスターが迫ってくるなんて、それも大群でだなんておかしくない？それによその鎮守府では起きてないんでしょ？だったら百竜夜行はどうして起きるの？」

「それが原因は不明でね。どうしてカムラ鎮守府でしか起こらないのか、どうしてモンスターはカムラ鎮守府を目指してやってくるのか、それがさっぱり分からないんだ。百竜夜行のモンスターはいずれも極度の興奮状態にある上に、普段なら敵対しているモンスター同士が争うことなく本来の縄張りを離れてまで鎮守府に近付いてくる。不思議な現象だろう？原因については研究されてはいるんだけど未だに明確な答えが出なくてね。そのあまりに必死な様子から何かから逃げようとしているんじゃないかという説まであるんだ。でも愛弟子が建造されるちよつと前くらいからパツタリと止んでいてね、それで我々のあずかり知らぬところで勝手に解決したと思ひ込んでいたんだ。」

「だけど実際は解決しておらず、また鎮守府に迫ってきたってこと？」
「そういうことさ。今まで再発しなかったのは偶然だったんだろうね。まあ今はとにかく急いで鎮守府まで戻ろう。まだ百竜夜行が迫ってるってだけで、規模や状況は何一つ分かっちゃいない！それに鎮守府には前提督がいらっしやるとはいえ、俺もれっきとした提督だ。百竜夜行に備えなくちゃいけないからね！」

「分かったわ。そういうことならさっさと帰りましょつ……つて早ツ!？」

ウツシ提督が翔蟲を飛ばした瞬間、鎮守府がある方角に向かって空高く飛んで行き、あつという間に姿が見えなくなった。

呆気にとられた葛城もダメ元で真似して翔蟲を飛ばしてみるが短い距離を飛ぶのが精一杯で、仕方なくモモちゃんに乗って走り出す。

これはファストトラベルと呼ばれる移動方法であり、特定の拠点やキャンプまでひとつ飛びで移動可能な新技術である。

しかし今まで鎮守府の敷地内でしか活動したことがなく、今回が初

出撃でファストトラベルのことなど何一つ教わっていないかった葛城は地道に鎮守府を目指すしかないのであった。

「はあ、やっと帰ってこれた。モモちゃんもお疲れ様。」
「ヴオウ！」

狩猟地から鎮守府までモモちゃんの背に揺られながら帰ってきた葛城。

ずっと騎乗していたことで痛むお尻を撫でつつ、走り続けてくれたモモちゃんを労う。

しかし意外にもモモちゃんは少し疲れただけで、ちよつと休むとすぐさま元気になった。

生物として格の違いを感じさせる一幕である。

「……………でしたらバリスタの増設を……………」

「……………それに妖精さん達の招集も急がなければ……………」

そして鎮守府の執務室……………ではなく、何故か外にあるダンゴ茶屋にてウツシ提督とフゲン前提督と雲龍と天城の四人は話し合いの真っ最中。

「おつ、愛弟子！帰ってきたんだね！」

帰ってきた葛城に気が付いたウツシ提督は笑顔で手を振る。

しかし自分だけさっさと帰ってしまったウツシ提督に、葛城は不満げな顔を隠しもしない。

とはいえ今は緊急事態、モンスターの大群が攻め込んでくるという一大事である。

文句を言いたいのを我慢する程度には葛城も大人であった。

「さて、愛弟子も帰ってきたし話をまとめよう！原因は相変わらず不明のままだけど、突如として発生した百竜夜行が鎮守府に近付いている。群れを率いる大物はドスフロギイ。幸いなことにいずれも下位相当の個体ばかりで、群れの大きさも小規模だ。いつものように翡翠の砦に誘導して、そこで迎え撃つ。最優先目標は群れの中心となっている大物ドスフロギイだ、奴を倒せば群れは散り散りになるだろう！砦の関門が破られれば鎮守府にモンスターの侵入を許してしまう、そうなたら俺達の負けだ。だからこそ何としても食い止めなければならぬ！砦の設備をフル活用して奴らを追い払うぞ！」

いつものほがらかな様子とは違い、提督としてピシッと場を取り仕切るウツシ提督。

未だ百竜夜行というものがあまりよく分かっていない葛城も、話に着いていこうと必死に内容を噛み砕いていく。

「そしてここからは俺の提案なんだが、今回の作戦は葛城を中心に進めようと思う。」

「へえ、葛城にねえ……………ファツ!?葛城!?葛城って私じゃない!？」

そんな葛城だったが、ウツシ提督からの寝耳に水な提案により頭をトンカチでぶん殴られたかのような衝撃を受けた。

「えっ?えっ?何で私!?百竜夜行って鎮守府の危機なんですよ!?失敗

したらどうするの!? 初出撃を終わらせてきたばかりの初心者任せ
ちゃ駄目な案件でしょう!? そもそもモンスターなんてテツカちゃん
以外は凶鑑と提督のモノマネ以外じゃ全く知らないし、ここは姉さん
達に任せるべきじゃないの!」

突然の指名に焦る葛城だが、ウツシ提督はその反応は想定通りと言
わんばかりに葛城をなだめる。

ちなみにテツカちゃんとは鎮守府で飼育されている鬼蛙テツカブ
ラの子供のことである。

「まあまあ。愛弟子よ、落ち着いてよく聞くんた。今回の百竜夜行は
小規模でモンスターの強さも大したことがない。だからこそ経験を
積むためにキミが出撃するんだ。今まで終わつたと思ひ込んでいた
百竜夜行が再び来たんだ、今後も来ないとは言ひ切れぬ。そしてそ
の時に百竜夜行の規模が大きければ、キミは高難度の百竜夜行に挑戦
することになる。いきなり難しい百竜夜行に挑戦しろって言われて
も無理だろう? だからこそ敵が弱い今回の百竜夜行で勉強しておく
必要があるんだ、つまりこれはまたとないチャンスなんだぜ! それに
みんな愛弟子が今回の百竜夜行を切り抜けるって信じているん
だ、だつて誰もこの提案に反対してないだろう? なあに、心配せず
とも一から十まで愛弟子に丸投げするわけじゃない。俺達だつて手
伝うさ!」

「葛城、安心して。私が付いてる。」

「雲龍姉様と比べれば見劣りするでしょうが、天城もいますからね!」
「臆することはない。葛城よ、オマエは猛き炎だ! 気焰万丈! 百竜夜
行、何するものぞ! 今までずっと守り抜いてきたのだ、だつたら今回
も守り抜く。それだけよ!」

葛城の活躍を信じて疑わない全員の顔、それに後押しされることで
葛城も少しづつやる気が出てくる。

「もう、これ嫌って言うてもダメなパターンじゃない! 分かつたわ、私
やるわ。それに私が駄々こねたところで百竜夜行は待つてくれない
しね。」

「よし、それでは百竜夜行に向けて準備をしよう!」

故郷を守る、堅固の要塞

翡翠の砦

百竜 来たれり

いざ 気焰万丈

我らが牙城 不拔なり

「……というわけでやって来ました翡翠の砦！」

「何がやって来ましたよ、何かの番組かつつーの！」

「ホー。」

「グルル……。」

現在ウツシ提督と葛城達がいるのは鎮守府のすぐ近くにある峡谷。辺りを見ればいくつもの防壁が築かれており、峡谷を通ろうとする者の移動ルートを制限及び誘導する造りになっている。

「ここでモンスターの侵攻を食い止めるの？」

「そうだよ。鎮守府につながる最終関門を突破させると鎮守府に直接攻め込まれてしまう。そうなたら終わりだ。だけど一人でモンスターの大群に立ち向かうというのも流石に無理だ！だからこそここに設置された多種多様な狩猟設備を使ってモンスターを追い払うんだよ。まずはこれを見てくれ！」

ウツシ提督は翔蟲を使い防壁の上に登り、葛城も続いて登る。

登った防壁の上には台のようになっていて、箇所がいくつかあった。

「これが設置台。台の下には地下道が掘られていて、上で合図を出せば妖精さんが様々な狩猟設備を設置してくれるぞ！」

そう言いながらウツシ提督が台を足で軽く叩くと台は左右に割れるように開き、下からボウガンを大型化させたような兵器が一人の妖精さんと一緒にせり上がってきた。

「これはバリスタだ、強力な矢や特殊な弾丸を放つことが出来る。進行してくるモンスターを射撃して追い払うんだ。」

防壁の上には他にもいくつものバリスタが設置してあり、それぞれに妖精さんが一人ずつ乗り込んでいるのが見えた。

「愛弟子が射撃をしてもいいんだけど、一人で全部の設備を使うのは無理があるし、何より手数が足りないからね！愛弟子の手の届かない範囲は妖精さん達が担当してくれるぞ。妖精さんは直接戦闘は出来ないけど、バリスタ程度なら動かせるからね。バリスタを何台も設置することで、力を合わせてモンスターを追い払ってくれるんだ。彼らの助力無しで百竜夜行を切り抜けるのはとても難しい。百竜夜行をクリアする第一歩は彼らを頼ることから始まると言っても過言ではないさ！」

葛城と目が合った妖精さんはキメ顔でサムズアップをして見せる。小さい体格ながら鎮守府を守るという自信に満ち溢れたその姿は、葛城の緊張を和らげた。

緊張が和らいだことで、葛城は一つの疑問を尋ねてみようと思える。

「さつきからずつと気になっていたんだけど、何度もモンスターを追い払うって言ってるでしょ。何でモンスターを追い払うことにこだわるの？倒さなくていいの？」

「ああ、それか。百竜夜行に加わっているモンスターはみんな極度の興奮状態に陥っていて正気じゃないんだ。そこで狩猟設備を使ってキツイ一撃をお見舞いすることで頭を冷やさせる。そうすることで正気を取り戻して、現状を把握したモンスターは撤退していくというわけさ！別に倒してしまっても構わないんだけど、次から次にモンスターは来るから倒している暇はないと思うよ。倒すのは群れを率いる大物だけで十分だ！大物だけは絶対に関門を超えられるという自信があるのか、どれだけ攻撃しても引き下がらないから倒す以外に方法がないだけなんだけどね。」

葛城としても別にモンスターを倒したくてウズウズしているわけではないので、倒さず追い払うだけという方針に不満はない。

むしろ現れるモンスター全てを倒し続ける必要がないことに安堵すらした。

「もし設備が邪魔になったり、いらなくなったのならもう一度設置台に合図を送るといいよ。そうすれば妖精さんが設備を撤去してくれる。状況に合わせて有効な設備を置いていくのが百竜夜行を切り抜けることにつながっていくんだ！それでは次に行こう！」

ウツシ提督は防壁から飛び降りると、今度は通路に直接作られた設置台へ向かう。

そしてさつきと同じように底を叩くと、今度は竹を束ねたような物体がせり上がってきた。

「これは竹爆弾。モンスターが触れると爆発する爆弾さ！かなりの破壊力を秘めていて、防御力が高いモンスターにも効果はバツチりだ！

モンスターが通りそうなところに置くといいよ。」

「へえ、見た目はパツとしないけど強いんだ。だったらこれをいっぱい置いたらいいんじゃない?」

爆弾とは強力な武器である。

実際の戦争でも様々な種類の爆弾が使われているのは周知の事実であり、兵器から転身した艦娘、そしてその艦娘が変化した狩娘にとっても爆弾が強力だという認識は当然のようにある。

だからその爆弾をたくさん使って戦おうというのは自然な提案だったのだが……。

「いや、残念だけどそんなに在庫がないんだ。それに設置にも手間が掛かるし、モンスターが触らなきや意味がない。そして撤去した場合、安全確認のために一度分解する必要があるから再設置にも時間が掛かる。だからこそタイミングを見計らって使ってくれ!」

爽やかな笑顔でそう言い放つウツシ提督と、それに対して渋い顔を見せる葛城。

今の話を聞いただけでこの兵装の使いにくさに気が付いた。

モンスターの大量が押し寄せる隙間を縫って、必死にこの使い勝手が悪い爆弾を設置する。

そんな場面を想像し、なるべくこの兵装には頼るまいと心に誓うのであった。

「さて、他に説明すべきは……おや? 騒がしくなってきたね。」

谷の上空を飛び交う小鳥が一段と騒がしくなり、遠くからは徐々地に鳴りのような音が聞こえ始めた。

明らかな異常事態だ。

「うん、百竜夜行はすぐそこまで来ているみたいだ。それじゃあ俺は自分の持ち場に戻るけど、近くで見守っているからね!」

そう言つてウツシ提督は近くの設置台の扉を開くと、中に潜り込んでいこうとする。

「ちよつ、ちよつと待つて!? 今、まだ他にも説明することがあるような素振りだったじゃない!? それに持ち場つて何よ!? 一緒に戦つてくれるんじゃないの!?!」

葛城は慌ててウツシ提督を引き留めようとするも、無慈悲にもウツシ提督は首を横に振る。

「悪いがそれは出来ないんだ。地下で狩猟設備の準備をしたり、谷から外れて直接鎮守府に向かうモンスターが出ないか監視する必要があるからね。心配せずともキミなら出来る！頑張つてね！」

何とも無責任な一言を残すとウツシ提督は狩猟台の中に消えていった。

「何なのよ、もおーっ!!」

BGM：百竜夜行

ドシンツ!

突然の物音に振り返ってみると、橙色の毛皮と鋭い鎌のような形状の棘の生えた長い尻尾を持つ肉食恐竜のような生物が木製のバリケードを乗り越えて内部に侵入してきたところだった。

「あっ！あれは確かオサイズチ!？」

鎮守府近辺でよく見られる中型モンスターで、そこまで強い相手ではない……らしい。

何故『らしい』かという葛城が今まで鎮守府の外に出たことがなく、オサイズチを見るのが始めてだからである。

中型と言うが頭のとっぺんから尻尾の先まで優に10メートルはあり、どう考えても中型では済まされない巨大生物である。

「オサイズチは本来は手下のイズチを引き連れて縄張りを徘徊しているモンスター……だったわよね？手下のイズチがいないのならコンビネーション攻撃とかしてこないはずだし、これはむしろチャンスなんじゃないかしら!？」

突然の遭遇に驚きながらも何とか活路を見出した葛城だったが、モンスターが一体しか現れないようでは百竜夜行とは呼べない。

ドシンツ!

ドシンッ!

最初のオサイズズチを追うように、バリケードの向こうから別のオサイズズチが現れた。

その数、合計で三体!!

「「ヴァオーーッ!!」」

「ちよっ?!いきなり三体とか無理無理!!ごめんなさいごめんなさい、お願い許して!!」

相手は細身でなおかつ大部分を尻尾が占めているとはいえ、相手は全長10メートルもある恐竜のような外見のモンスター。

それが三体も現れたことでせつかくやる気になっていた葛城は、開始早々に戦意を喪失しかけてしまう。

「方位445……撃テ!!」

だがそこに救いの手が差し伸べられる。

オサイズズチ達に向かって一斉にバリスタの矢が放たれたのだ。

矢はオサイズズチの顔や喉などいわゆる急所を的確に狙っており、元々そこまで打たれ強くないオサイズズチ達はいきなりの攻撃に慌てふためいた様子でバリケードを飛び越えて引き返していった。

「守ツテミセルツテ言ツタロ?」

バリスタの矢が飛んできた方へ振り返ってみれば、そこにいたのは葛城にサムズアップをしてみせた妖精さん。

他にも周囲のバリスタからも妖精さん達が葛城に向かって手を振っている。

守ってみせるなんて言われた記憶は全くないが、その行動に葛城は勇気付けられ、そして今自分がすべきことを改めて自覚する。

「そうよ、私は一人じゃない!みんなが鎮守府のために精一杯戦っている!私一人で戦う必要はないんだわ!そして私は提督に、姉さん達に、前提督に、そしてみんなにこの場を任された。だったら私が今すべきことは、怯えることじゃない!この場を守り抜くことよ!!」

そう決断した葛城の行動は速かった。

空いてるバリスタに飛び乗ると、続々と現れるモンスターに向かって矢を放つ。

時には大破寸前のバリスタを新品と入れ替えることで戦線の維持をしつつ、妖精さんに指示を出してモンスターを追い返していく。セイちゃんもモモちゃんには動き回ることでもンスターを攪乱させ、その隙にモンスターへ矢を撃ち込んでいく。しかし倒しても倒しても現れ続けるモンスターの大量は砦の守りを打ち破らんと押し寄せてくるのだった。

「しまった！からくり蛙みたいなモンスターに抜かれた！」
「ヴオロロロロ!!」

葛城達の努力も虚しく遂に防衛網は突破され、関門の一つ手前にある木製の柵に到達したからくり蛙にそっくりな大型モンスター、ヨツミワドウは柵に向かって張り手を繰り出す。

木製の柵は本命である金属製の関門に比べ、そこまで耐久力のあるものではない。

ヨツミワドウに叩かれるだけで破片をまき散らし、面白いように歪んでいく。

「これ以上やらせな……きゃあつ!？」

ヨツミワドウに意識を向け周囲への注意が散漫となっていた、そんな隙を他のモンスターは見逃さない。

上空から白い鳥のような姿をした大型モンスター、アケノシルムの火炎液が容赦なく降り注ぎ、葛城の行動を阻害する。

葛城がアケノシルムに邪魔されるといことはヨツミワドウがフリーになるということである。

ヨツミワドウを狙えばアケノシルムの妨害が入り、アケノシルムを狙った場合はヨツミワドウによる破壊が進む。

「くっ、どうしたら……あつ、セイちゃん!？」

「ホー！」

葛城の危機を感じ取ったのか上空のアケノシルムに向かって飛んでいくセイちゃん。

しかしその体格差はまさに大人と子供。

いくらセイちゃんが見た目のわりに強いとは言っても、大型モンスター相手に真っ向から戦いを挑んだところで勝てるわけがない。

では真っ向から戦いを挑まなければどうなるのか？

「ホーッ!!」

小さな体を活かして攪乱するようにアケノシルムの周囲をぐるぐると飛び回るセイちゃん。

それをうっとおしく感じたアケノシルムは翼でセイちゃんを叩き落そうとする。

しかし小さなセイちゃんには当たらない。

セイちゃんはわざと激しく飛び回り、全身からこぼれ落ちる金色の粉を少しずつアケノシルムの周りに撒き散らしていく。

そして気付かない間にそれを吸っていったアケノシルムに遂に異変が現れた。

「キョエエエエ!」

突如としてアケノシルムは空中でバランスを崩す。

まるで酔っ払ったように前後不覚となり、セイちゃんを追うどころではない。

やがて飛ぶことすら出来なくなり、フラフラと地上に墜落していく。

「ホルルルルル!」

思うように動けず地面でもがいているアケノシルムに向けてセイちゃんから今度は青い霧のようなものが放たれた。

それを浴びたアケノシルムはあつという間に深い眠りに落ち、完全に動かなくなってしまった。

「何だかよく分かんないけどチャンスよ!大砲を出して!」

葛城は自分が使っていたバリスタを大砲と入れ替える。

大砲は威力こそ高いものの取り回しに難があり、また単純に防衛が忙しくて今まで出す暇がなかった。

しかしアケノシルムを確実に仕留めるためにも遂に使用を解禁する。

「セイちゃんの作ってくれたチャンスが無駄にはしないわ！いっけー！」

睡眠状態のモンスターは無防備なため、普段よりも大きなダメージを与えることが出来る。

これはカリユード諸島において狩猟を行う者にとっては常識である。

眠っているアケノシルムに直撃した大砲弾はただでさえ高いその威力を更に増し、アケノシルムの大きなトサカを一撃で破壊してみせた。

「ギョエエエエ!?」

流石のアケノシルムもこれには耐えられず、尻尾を巻いて飛び去って行く。

「よしっ、次はからくり蛙を……しまった、時間を掛け過ぎた！」

「ヴォロロロロ!!」

ヨツミワドウの大きく膨らんだ腹部が柵を押し潰す。

アケノシルムに掛かりきりになっている間にもヨツミワドウの破壊活動は続いており、耐久の限界を迎えた木製の柵は遂に破壊されてしまったのだ。

「ヴォアアアアッ!!」

関門に向けて前進していくヨツミワドウ。

邪魔な柵が無くなったことが群れ全体に伝達したのか、今まで妖精さん達を妨害するように動いていたオサイズチやアオアシラまでもが関門に向かって進攻を開始する。

「まずいわよ……このままじゃ関門を守り切れないわ!？」

「気焰万丈！助太刀に来たぞ！」

関門前の設置台からガイナ立ちで現れたのはフゲン前提督。

「猛き炎よ、待たせたな！だがこちらもようやく手隙となった。我が太刀の冴え、見せてやろう。」

フゲンは関門を守るように太刀を構える。

そこに押し寄せるヨツミワドウ、オサイズチ、アオアシラ。

「鎮守府へは通さん！焰が如く闘志を燃やせ！ウオアアア!!」

目にも止まらぬ一閃。

葛城に分かったのは何かが光ったと思った瞬間、フゲンの目の前にいたモンスター達がまるで紙屑のように吹き飛ばされたということだけだった。

「ハアア、絶好調！」

恐れおののき逃げ出すモンスターを見送って、フゲンは破顔する。

「うっそお!?!フゲン前提督強過ぎ!?!」

「ガッハッハッ！見直したか？ジジイもまだまだ捨てたもんじゃないだろう？さて、俺はまた地下に戻るぞ。」

「えっ？もう戻っちゃうの……じゃなくて戻られるんですか？」

危機を脱したとはいえ、せつかく出てきてくれたのにもう戻ると言われれば葛城も困る。

関門まで到達されなかったとはいえ、既に木の柵は破壊されているのだ。

「なあに、オマエを助けたいと思っっているのは俺だけじゃない。他の奴らにも出番をやらんといかんのぞな。」

そう言いながら再びガイナ立ちで地下へと消えていくフゲン。

入れ替わるように今度は二人の人影が地下から現れる。

「葛城、待たせたわね。」

「今度は私達が力になりますよ！」

「雲龍姉え！天城姉え！」

続いて現れたのは弓を手にした雲龍と、ランスを構えた天城。

「三人で戦うのは初めてね……。」

「葛城疲れてない？まだ行ける？」

「こんなの疲れた内に入らないわ！むしろ姉さん達のお陰で元気が湧いてきた！百竜夜行なんかブツ飛ばしてやるわ！」

「ならいいわ……。」

「鎮守府のためにも、皆様のためにも頑張りましょう！」

「私達、三姉妹の力で！」

「『災禍を、払う！』」

雲龍の放つ矢が雨あられと降り注ぎ、天城の振るうランスは突風を巻き起こす。

それに巻き込まれたモンスターは次々と撤退していった。

「凄い、姉さん達あんなに強かったんだ……。でも私だつてあの二人の妹なのよ！負けられないわ！」

それを見た葛城の瞳にも力が宿り、その想いの力が技のキレへと繋がっていく。

「やあっ!!」

葛城の太刀筋は一太刀ごとに洗練されていく。

その動きは上位狩娘である姉と遜色ないものであった。

「「焰よ、力を！」」

「ヴオオオオオオオオオ!!!」

「この声は!?!」

関門を守るべく奮闘する葛城の耳に、今まで聞いた中で一番重々しい咆哮が届く。

「来たわ、大物。注意して……。」

「大物?まさかそれって!?!」

大物と聞いて動揺する葛城の前に、大きな足音を立てながらそれは現れた。

オサイズチはおろか、ヨツミワドウすら上回る巨体。

オレンジ色をしたヒキガエルのような質感の皮膚と、見るからに毒々しい紫色の喉袋。

そして今まで現れたモンスターの中で一番の闘争心と威圧感。

とうとう大物ドスフロギイがこの場に現れたのだった。

「これが大物ドスフロギイ!?!」

「そうよ、群れを率いる個体。これを倒せば百竜夜行はおしまい。だけれどその強さは他のモンスターの比じゃない。気を付けて……。」

「天城と雲龍姉様は谷の入り口付近でモンスターの侵攻を少しでも食い止めます。大物が倒れば百竜夜行は終わり。だからこそ葛城が大物と戦い、私達はその戦いに横槍が入らないようにするんです。遅れて現れるモンスターは大物から受ける影響が薄いお陰で、食い止め

るだけならそこまで難しくくないですからね。だからこそこの場は任せますよ、葛城！」

そう言い残し雲龍と天城は翔蟲で飛んでいく。

大物を目前にして一人取り残される形となった葛城、しかし彼女に絶望の色はない。

尊敬する二人の姉にこの場を任されたという事実が、彼女に力を与えていた。

「いいわ、やってやろうじゃない！おっしやあ！来い！大自然！」

「ヴオオオオオ！」

BGM：反撃の狼煙

大物ドスフロギイの咆哮と共に戦いの幕が切って落とされる。

頬を膨らませて毒霧を吐き出すドスフロギイ、葛城はそれを素早くかわすと反撃の一撃を繰り出す。

しかしドスフロギイも伊達に大物をやっているわけではない、その攻撃は読めていたと言わんばかりに回避行動に移ろうとする。

「ホー！」

そうはさせじとセイちゃんが素早く頭に飛び付き、クチバシで目を突こうとする。

ドスフロギイはすぐさま頭を振ることでセイちゃんを振りほどく。

しかしそれによつて回避が遅れ、避けられるはずだった葛城の攻撃の直撃を受けた。

「グルルルッ!!」

葛城の攻撃に続いてモモチちゃんは素早い身のこなしでドスフロギイの背中に飛び乗ると折り畳んでいた鋭い爪を展開し、爪を突き立てて皮膚を引き裂いていく。

葛城は知らないことだが、モモチちゃんと同族は爪と牙だけで硬質化した骨や堅く塗り固めた鉱石すら簡単に破壊してしまうパワーを持

っ。

大物とはいえドスフロギイの皮膚を引き裂くなど造作もないことであつた。

「バリスタ隊、照準大物ドスフロギイ！上ノ変ナガルクニハ当テルナヨ！テエー！」

当然黙つてやられるドスフロギイではなく、セイちゃんと同じようにモモちゃんを振り落とそうとする。

そこへ妖精さんから援護射撃が入り、ドスフロギイは強制的に動きを止められた。

その隙にもモモちゃんのカギ爪攻撃は続いていき、最終的にドスフロギイの額を切り裂いたところで顔面を激しく蹴り飛ばして飛び降りる。

ドスフロギイは蹴られた勢いそのままに防壁の一部へと激突、体勢を崩して倒れ込んだ。

この一連の動きはアステラ鎮守府でよく行われているクラッチクローの基礎動作そのものである。

クローで相手の皮膚に傷を付け、頭にスリンガーを射出することでモンスターを吹き飛ばして障害物に叩き付ける。

モモちゃんは偶然にもクラッチクローの戦闘方法を再現したのであつた。

「倒れた今がチャンス！ちよつと卑怯だけど傷口を狙わせてもらおうわよ！」

モモちゃんの付けた傷によつて肉質が軟化したドスフロギイ。

最初の一撃とは明らかに手ごたえが違うことを確信した葛城は、倒れて動けないドスフロギイの傷口を集中的に狙つていく。

勝てば官軍、これは鎮守府を守るためにも負けられない戦いなのだ。

「ヴアアアアアアア!!!」

しかし大物ドスフロギイは普通のドスフロギイではない。

普通のドスフロギイでは耐えられない連撃にも耐え抜くと飛び起きて体勢を立て直す。

その際に牽制として尻尾を振り回し、葛城を近付けさせない。

「クツ、あれほど斬り付けたのにまだまだ元気そうじゃない！大物と
いうだけあって体力には余裕があるのね！」

元気の有り余るドスフロギイと違い、連戦続きでそろそろ疲れの見
え始めた葛城。

しかしここで退くわけにはいかないと気を引き締め直したところ
で、この場にそぐわない底抜けに明るい声が聞こえてきた。

「妖精の皆さーん！みんな元気！一致団結だ！」

声の主は当然ウツシ提督。

関門前の設置台から楽しそうに大きく手を振りながらの登場であ
る。

「やあ！我が愛弟子！調子はどうだい？元気にしているかい！」

「これが元気そうに見えるっての！？こっちは大物とやり合ってたのよ
！」

ウツシ提督の呑気な声に思わず半ギレで答える葛城。

「そうだろうと思ってキミのためにこんなものを用意したよ！」

そのウツシ提督の声と共に、バリケードの向こうから現れたのは一
頭のアオアシラ。

「ちよつと！？何してくれてんの！？向こうは姉さん達が押さえてくれて
るっていうのに、何でモンスターをここに通してんのよ！？」

「心配せずとも俺から二人にお願いしてそいつを通して貰ったんだ
！」

「はあ！？」

大物との戦いの真っ最中にアオアシラが現れたことで葛城の堪忍
袋の緒が切れかかる。

だがウツシ提督はワザとアオアシラを通したという。

「こういうことさー！てああああ！！！」

ウツシ提督はこちらへ走り寄ってくるアオアシラを瞬く間に鉄蟲
糸で縛り上げた。

「さあ愛弟子よ！今なら操竜に持ち込める！そのアオアシラを操って
ドスフロギイと戦うんだ！」

「そういうことね！とうっ！」

葛城は鉄蟲糸で絡めとられて動けないアオアシラに飛び乗ると、巻き付いた糸を束ねることで操竜へと移行した。

「それともう一つ、こんなものも用意したよ！」

ウツシ提督が指を鳴らすと近くの防壁の設置台から銅鑼がせり出してくる。

ウツシ提督はその銅鑼に向かってクナイを投げ、クナイが激しくぶつかったことで銅鑼は大きな音を響かせる。

「これは反撃のドラだ。この音色を聞けば全身に力がみなぎるぞ！」

「凄い、何でか分かんないけど信じられないくらい力が湧き上がってくるー！」

「さあここからだ！行け！我が愛弟子よ！キミの活躍を見せてくれ！百竜夜行なんか恐れるに足らず！俺が教えた狩猟技術を存分に発揮して、砦を守り抜いてくれ！頼んだよ！俺はいつだってキミのことを見守っている！ああ、思い出すよ……。キミを一流の狩娘にするため訓練したあの日々を！今こうしてその成長ぶりを目の当たりに出来て俺は猛烈に感動している！頑張れ！キミは強い！ここが踏ん張りどころだぞ！なあに、恐れることは一切ない！キミが思っている以上にキミは強い！強くて強くてしようがない！キミさえいればカムラ鎮守府は守り抜ける！」

長々と喋りながら地下へと消えていくウツシ提督。

だが葛城は操竜に集中しており、そんなこと聞いてすらいない。

「練習ではパンダカーしか乗ったことなかったから事実上ぶっつけ本番みたいなものだけど、やってみせるわ！」

どうやら今までずっと遊園地にあるようなパンダの形をした乗り物で操竜の練習をしてきたらしい。

そんなもので操竜の練習になるかどうかはさておいて、反撃のドラのお陰で手綱を握る手にも力がこもる。

「行けっ！」

葛城の操竜に合わせてアオアシラが大物ドスフロギイに飛び掛かった。

相手はアオアシラを上回る大きさを誇るとはいえ、流石に受け止めることは出来ずに突き飛ばされる。

「ヴォッ!!」

しかしドスフロギイもやられてばかりではない、体勢を崩しながらも毒霧を吐いて反撃を試みる。

操竜には鉄蟲系の耐久力という名前の時間制限があり、鉄蟲系がちぎれてしまえば操竜は続けられない。

ドスフロギイは本能的にそれを理解しており、鉄蟲系を切るために攻撃を加えようとしているのだ。

「翔蟲、頑張つて回避してっ!」

しかし攻撃を受ければ鉄蟲系の耐久力が減るということは葛城にとっても百も承知。

故に翔蟲にアオアシラを引っ張らせることで無理矢理に毒霧を回避する。

しかもただ避けるだけでは済まさない、避けるついでにアオアシラをドスフロギイの側面に回り込ませた。

「この位置、貫つたわ!」

大抵の生き物は側面からの攻撃に弱い。

それは大物ドスフロギイであっても例外ではなく、真横から繰り出されたアオアシラの右のカギ爪は避けられることなく横腹をえぐり取る。

「更にもう一発!」

続けて左のカギ爪が、そして再び右のカギ爪と、両腕からデンプシーのように繰り出されるカギ爪のラッシュユが容赦なくドスフロギイを襲う。

しかも葛城はただ単に隙を突いて攻撃を仕掛けているだけではない。

モモちゃんが付けた傷を狙うようにアオアシラを誘導しており、その連続攻撃は見た目以上のダメージをドスフロギイに与えていた。

この激しい連撃の前に大物ドスフロギイといえど思わずダウンしてしまおう。

「よおし、シヤケハント……じゃなくて操竜大技いくわよ！」

操竜大技、それは操竜のシメに繰り出される文字通りの大技である。

威力こそ絶大だが繰り出す際の際が大きく、また激しい動きによって鉄蟲系にも大きな負担が掛かり、発動後には確実に千切れてしまふ。

そのためこの必殺技は操竜で相手を弱らせた最後のフィニッシュとして使用するものなのだ。

「グオオオオオオオ!!」

アオアシラの咆哮と共に繰り出された猛烈な突進、続けざまに放たれるカギ爪攻撃。

怒涛の連続攻撃がドスフロギイの体力を削っていくが、アオアシラの激しい動きに耐え切れず鉄蟲系もまた一本ずつ切れていく。

そしてアオアシラが渾身のベアハッグを繰り出すと同時に最後の鉄蟲系が引き千切れる。

まさにそのタイミングで葛城はアオアシラの背中を踏み台にして空中へと飛び上がった。

「これで終わりよー！」

アオアシラを飛び越え、ドスフロギイの真上まで到達した葛城は独自の構えを見せる。

それは葛城が一番得意とし、そして信頼を置く必殺技。

「気刃兜割!!」

ドラの音色によってみなぎる力を切っ先に集中させて繰り出した気刃兜割。

力だけでなく、鎮守府を守ろうとする意志、姉や提督から託された

誇り、あらゆる想いが込められた必殺の刃は今までで最高の一撃となつて放たれた。

BGM：クエスト成功

「勝った、勝ったわー!」

葛城の全身全霊を込めた気刃兜割。

その威力はドスフロギイを仕留めるにとどまらず、斬撃の余波で足元の大地にも小さいながら切れ込みを入れ、振り下ろした際に発生した風圧だけで後ろにいたアオアシラを怯ませるほどだった。

役目を終えたドラは静かに台の中へと戻って行き、葛城の溢れる力

も収まっていくな。

「さて、あんたはどうすんの?」

葛城はゆっくりと振り返り、残ったアオアシラの鼻先に太刀を突き付ける。

ドラが無くなったことによつて力は元に戻ったが、アオアシラ一匹を追い払うくらい今の葛城に造作もない。

「グ、グウ……。」

大物ドスフロギイが倒されたことで既に闘争心を失っていたアオアシラは、怯えた様子を隠すことなく逃げ去っていく。

「本当に大物が倒されると他のモンスターは逃げていくのね……。」

葛城がアオアシラを見逃していると、雲龍と天城が翔蟲にぶら下がったまま空を飛んで戻ってきた。

「やったわね、葛城。」

「相手をしていたモンスター達が急に退却を始めたから、もしかしたらと思つて戻つてみれば思った通り! 凄いわ葛城、遂に大物を倒して百竜夜行を終わらせたんですね!」

「えへへ、そお?」

降りてきた雲龍と天城に褒められ気を良くする葛城。

百竜夜行を終わらせた達成感と鎮守府を守れた安堵感に身を委ねていた。

ドオン!!

その時、突然の爆発音が鳴り響く。

驚いた三姉妹がその方向に振り向けば、そこには爆発によつて発生した硝煙の中で力なく倒れたアオアシラがいた。

さつき葛城に見逃されてこの場から逃げ出そうとしていた個体である。

「何!?何が起ったの!?!」

まだ戦いは終わっていないなかったのかと慌てて三人が武器を構えるのとほぼ同時に巨大なモンスターが姿を現す。

BGM：悪逆無道／マガイマガド

「グロロロロロロ……。」

それは鎧武者の兜のような立派な角を生やし、鋭い槍のような長い尾を持った、虎のようにもアンキロサウルスのようにも見える恐ろしい姿をした大型モンスターであった。

「あれは、マガイマガド……。」

「えっ?」

雲龍が思わずつぶやいたマガイマガドという一言、聞き覚えのない名前に葛城は思わず聞き返す。

「マガイマガド、本来なら人里はおろか自然界ですら滅多に姿を見せることのない珍しい大型モンスター。なのに過去の百竜夜行ではふらりと姿を現しては鎮守府、百竜夜行のモンスター双方に壊滅的な打撃を与えてきた。その性質は非常に獯猛で危険性もとても高い。かつての戦いにおいて私達では相手にならず、フゲン前提督を以てしても追い払うのがやっとで一度も倒すことは出来なかった相手よ。」

「そんな……。」

雲龍の口から語られる恐るべき事実。

尊敬する二人の姉、そしてモンスターの大群を蹴散らす程の力を見せたフゲン前提督ですら倒せなかった相手が現れたとなれば、勝利気分ですでに浮かれていた葛城の心も一瞬で冷や水を浴びせられたように静まり返る。

「まさか今回も現れるなんて思わなかったけど安心して!あれから天城達も強くなつたんです!前回のようにはいきません!」

葛城を守るように雲龍と天城が前に出て、更にはセイちゃんとモモ

ちちゃんも戦闘態勢に入る。

「グルロロロロロッ!!!」

マガイマガドの咆哮、それは百竜夜行で現れたどのモンスターよりも迫力と殺気があり、大物ドロフロギイですら比較にならない。

たった一度の咆哮、それだけでこちらの戦意が削がれそうになる。

そして咆哮と共にマガイマガドの全身から紫色をした鬼火のようなものが吹き上がる。

その姿はまるで怨念をその身に宿して地獄から蘇った悪鬼羅刹のようであった。

「ホーツー！」

「ガウウー！」

セイちゃんとモモちゃんがマガイマガドに同時に飛び掛かる。

だがその攻撃もマガイマガドの前脚から生える太刀のような甲殻にアツサリと受け止められ、そのまま跳ね返された。

とはいえ弾き飛ばされた程度ではやられない。

セイちゃんは空中で体勢を立て直し、モモちゃんは転ぶことなく着地する。

「まずいー！」

「えっ、まずいって何が？」

今の攻防を見た雲龍の顔が険しくなる、しかし葛城には何がまずいのか分からない。

確かにセイちゃん達の攻撃は防がれたが、跳ね返されただけで大きなダメージを受けたわけではない。

一目で分かる異常としてはマガイマガドの反撃を受けた際に鬼火が燃え移ってしまっていることぐらいだが、それでも熱そうにしていく様子は見られない。

このくらいならまだ戦える……………そう思った次の瞬間。

ドオン!!

葛城の目の前でセイちゃんもモモちゃんが爆発した。

セイちゃんはそのまま受け身も取れず地面に墜落し、モモちゃんは自分がドスフロギイにそうしたように爆発の勢いで防壁に叩き付けられて動かなくなる。

「セイちゃん!? モモちゃん!?」

ボロクズのようになったパートナーの姿に葛城は思わず悲鳴を上げる。

幸いなことに大きな出血は見られず、呼吸も止まっていなかったので致命傷は免れたようだが、自力で動くことが出来ないレベルのダメージを受けたことに変わりはない。

「今の爆発、ひよっとしてアオアシラを倒したのも同じ方法で!?!」

「コレ以上ノ狼藉ハ許サンゾ! バリスタ隊一斉ニ撃テー!」

一瞬でセイちゃんとモモちゃんがやられたのを見て、妖精さん達はマガイマガド目掛けて矢を放つ。

だがマガイマガドが高く持ち上げた尻尾をくるくると振り回すと、尾の先から次々に鬼火が飛んでいき、それは寸分違わずバリスタ隊を直撃した。

「グワーツ!?!」 「ヤラレター!!」 「ゴメン、モウ無理ーツ!」

「逃ゲローツ!」 「後退セヨー!」 「爆発スルゾーツ!」

「警告スル。オ前ハ戦イカラ逃ゲヨウトシテイル。逃亡者ハ、オ尻百叩キノ刑ニサレル! アツ、ヤツパ駄目ダ!」

次々に爆破されていくバリスタ隊。

砲台は一瞬で破壊され、元々戦闘力が高くない妖精さんは設置台の中に逃げ込むしかない。

こうしてあつという間にバリスタ隊は全滅してしまった。

「見ての通り、マガイマガドの鬼火は燃え移ったものを爆破する。そしてその威力は絶大。決してあの鬼火には触らないで……。」

雲龍はそう言いながらも連続で矢を放つ。

バリスタ隊の射撃よりも激しい弾幕であり、並のモンスターではひとたまりもない。

だがマガイマガドは鈍重そうな外見とは裏腹にひらりひらりと軽快な身のこなしで次々に矢を避けていき、避けられないと判断すれば甲殻の厚い部位で弾いていく。

「くっ、動きが不規則で狙いが定まらない……。」

雲龍は焦りながらも次の矢を番える、しかし素早いマガイマガドは避けながらも徐々に距離を詰め、やがて自分の間合いに雲龍を捉えた。

回避行動を取っていたマガイマガドの尾はいつの間にか甲殻が展開しており、十文字槍のような姿に変化した尾の甲殻の隙間から鬼火があふれ出す。

やがて大量の鬼火に包まれた尾を雲龍に向かって、まさしく槍のように突き出した。

「姉様はやらせません!!」

だがそこに盾を構えた天城が割って入る、盾を持つ者として仲間を守るのは当然の責務。

甲高い音を立ててぶつかる尾と盾、凄まじい威力の前に盾を弾かれつつも突き攻撃自体は何とか防ぎきった。

「よし、防ぎましたーこれで……あっ!？」

だがマガイマガドの攻撃はそれだけで終わらない。

尾から旋風のように鬼火の渦が発射され、その直後に大爆発を引き起こす。

盾を弾かれた天城にそれを防ぐすべはない。

爆発に巻き込まれた天城は吹き飛ばされてゴロゴロと地面を転がっていき、うつ伏せに倒れてピクリとも動かない。

「天城!？」

「天城姉さん!？」

吹き飛ばされた天城の姿を追って思わず振り返ってしまう雲龍と葛城。

しかし戦闘中に敵から目を離すということがどれほど愚かな行為なのか、二人は身をもって知ることになる。

「グオゴオオオオオオオ!!」

「えっ？」

マガイマガドの咆哮が聞こえたと思つた次の瞬間、雲龍は空中にいた。

一体何が起こつたのか？

まるで他人事のような気分で雲龍は何故かとても痛む身体を必死に動かし、ようやく動いた首だけで下を見る。

そこには全身に今までの比ではない燃え盛る鬼火を身にまとつたマガイマガドが、さつきまで自分が立っていた場所でブレーキを掛けるように足を踏みしめている様子が目に入った。

どうやら自分は突進してきたマガイマガドに跳ね飛ばされたらしい、この全身の痛みは突進を受けたからだろう。

燃え盛るマガイマガドは身を翻して元居た場所にまで戻ると、そのまま垂直に跳躍して空中にいる雲龍よりも高く跳んで見せた。

そして最高度に到達すると身にまとつた鬼火を爆発させ、その反動を利用してミサイルのようにこちらへ突っ込んでくる。

スローモーションになつた視界の中、ゆっくりと迫りつつあるマガイマガド。

雲龍の視界の隅にはこちらを見ながら何かを叫ぶ葛城が映るが、彼女が何を言っているのか雲龍には全く聞こえない。

ここで自分がやられたら葛城は一人でマガイマガドと戦うことになつてしまうのだろうか？

雲龍にとっては自分がやられてしまうことよりも、葛城の安否の方が気掛かりであった。

「葛城、ゴメンね……。」

ドオオオオオオオン
!!!!!!

「雲龍姉エエエ!!」

雲龍に衝突したマガイマガドは雲龍を巻き込んだまま地面に着弾、

凄まじい大爆発を引き起こす。

これこそがマガイマガド最大の必殺技『大鬼火怨み返し』であり、その破壊力は見てのとおりである。

目を開けていられない程の爆風、葛城は吹き飛ばされぬように必死に堪える。

もうもうと上がる硝煙と土煙。

やがて晴れた煙の中には爆発により生まれた小規模なクレーターと、倒れた雲龍を前脚で踏みじめるマガイマガドの姿があった。

「お前！お前！！お前エエエエ！！」

セイちゃん、モモちゃん、天城、雲龍、大切な家族を目の前で次々と傷付けられ、葛城の怒りは限界を超えた。

自分の中に僅かに残る冷静な部分は二人の姉が敵わなかったのだから自分が出て何も出来はしない、さっさと逃げるべきだと警告を続けている。

だが激しい怒りが冷静さを押さえ込む、ここで賢しく逃げを選ぶくらいならバカのままでもいいと。

「うわあああ！！」

だが冷静さを失い、怒りの感情に任せるまま戦う者の末路など決まっている。

怒りは確かに力を与えるが、それ以上に隙を産むのだ。

もはや剣術も何もあつたものではない、感情のままに振り回される太刀。

そんなものはマガイマガドには通じない、逆に鞭のようにしなる尻尾で弾き飛ばされた。

「あうっ!?何のこれしき、みんなの痛みに比べたら!」

手の皮が擦りむけるのもお構いなしに地面を押さえることで無理矢理吹き飛ばされた勢いを殺してその場で止まる葛城。

幸い身体に鬼火は付着していない、だったらまだ戦える!

だが顔を上げた葛城の視界に入ってきたのは、今まさにこちらに飛び掛かろうとするマガイマガドの巨体であった。

今の葛城にはそれをかわすことも、受け止めることも出来ない。

虫ケラのように叩き潰されて戦闘不能となる、それを理解してしまつたからこそ葛城は悔しきで涙をにじませた。

「これで終わりなの!? 一矢報いることも出来ないで!? 畜生、畜生ツ、ちくしょおおお!!」

「どっせええい!!」

「フ、フゲン前提督!？」

「おう、猛き炎! 諦めるにはまだ早い! まだ戦いは終わつちやいないぞ!」

諦めかけた葛城、そんな彼女を救つたのはフゲン前提督であつた。

葛城に飛び掛かろうとするマガイマガドの巨体を太刀の刀身で受け止め、そのまま押し返そうとするフゲン。

だが力の差というのは非情である、フゲンはマガイマガドに徐々に押し込まれていく。

「ぐうううう!! 寄る年波か! 俺が後10歳若けりやこの程度の相手、ボコボコにしてやるというのに!!」

このままではフゲンまでもがやられてしまう。

命の危機を感じたことで頭が冷え、冷静さを取り戻した葛城は状況を打開すべく知恵を絞る。

「フゲン前提督に加勢しようにも、今の私じゃ単なる足手まとい。だつたらそれこそ逃げるべき? 私がいない方が前提督も守る者がいなくて戦いやすいだろうし。いや、そんな後ろ向きな考えじゃダメ!

気持ちの時点で負けていたら、勝てる試合にすら勝てないわ！今の私に出来ること、何か今の私に出来ること………そうだ！アレよ！あれを使えば！」

悩む葛城の視界に凶らずもあるものが映る。

葛城はそれを利用してマガイマガドに一泡吹かせようと思いつくのであった。

「ぬおおおおおっ!？」

遂に抑えきれなくなり吹き飛ばされるフゲン。

全身から激しく鬼火を噴出させるマガイマガドは倒れたフゲンを見下ろしながら、尻尾を勢い良く振り回して鬼火のエネルギーを集中させ始める。

これは天城を仕留めたマガイマガドの得意技『尾槍・鬼火螺旋突き』の予備動作。

直撃すればフゲンとて敗北は免れない。

「もはやこれまでか、無念！」

だとしても倒れる時は前のめり、例え敗北しようとも無様な姿は見せまいとフゲンは燃え盛るマガイマガドを睨みつけた。

「やああああ!!」

そこへ割り込んできたのは葛城、武器も抜かず素手のままでマガイマガドへと走り寄っていく。

「葛城!?何をやる気だ！」

「グロロロロ……。」

捨て鉢になったような無謀な突進。

マガイマガドはフゲンではなく葛城へと狙いを変え、フゲンは葛城を止めようと手を伸ばす。

だが葛城は止まることなくマガイマガドの目前まで接近すると翔

蟲を飛ばした。

「行けッ、翔蟲！」

翔蟲に引っ張られた葛城はマガイマガドをすり抜けるように飛んでいく。

何をするでもなくただ飛んでいくだけの葛城に拍子抜けしたのか、怪訝そうな様子を見せるマガイマガド。

だが既に葛城の攻撃は完了していた。

違和感を感じたマガイマガドが気付いた頃にはもう遅い、マガイマガドの目の前には爆発寸前の鬼火が浮遊していたのであった。

「グゴオ!？」

「これがあんたの攻略法よッ！」

ドオン!!

鬼火の爆発の直撃を受けたことでマガイマガドは全身の鬼火が誘爆、自爆を起こして倒れ込む。

「どう? これはみんなが受けた痛みよ! たまには自分で味わってみなさい！」

葛城は敢えて自分の身体に鬼火を付着させ、爆発寸前のそれを翔蟲の高速移動によって振り払うことでマガイマガドだけを爆発させたのだった。

「グオア!？」

爆発のショックで意識が朦朧としていたのか、頭を振りながら起き上がるマガイマガド。

思ってもみなかった方法によって反撃を受けたことに戦意が削がれたのか、マガイマガドからは明らかに先程までの勢いがなくなっていた。

「よくやってくれたよ、愛弟子! 弟子にここまでさせたんだ、ここから先は師匠の俺が頑張らないとね！」

いつの間にやら現れたウツシ提督。

ウツシ提督は爆発で倒れているアオアシラに駆け寄ると、その口に無理矢理秘薬を流し込む。

「さて、瀕死になっていたところに悪いんだけど、キミにはもう一働きしてもらおうよ！」

ウツシ提督は秘薬の効果で何とか起き上がったアオアシラを再び鉄蟲糸で容赦なく縛り上げていく。

そしてそのままアオアシラに跨って操竜に持ち込むと、続けて白いイタチのような生物を取り出した。

「こいつはエンエンク。モンスターを引き寄せる独特のフェロモンを発する環境生物さ。こいつをこうしてつとー！」

ウツシ提督はエンエンクを軽く刺激することでフェロモンの分泌を促す。

エンエンクがフェロモン出し始めると、それをアオアシラの頭にこすり付けるように塗り込んでいった。

「これでフェロモンアオアシラの完成だ！」

目が覚めた途端、訳も分からず鉄蟲糸で縛られて背中に乗られた挙句、いきなり頭にフェロモンを塗られたアオアシラの混乱は察して余りある。

ましてや自分を爆破した犯人であり、強さでも大きさでも自分の遥か上に行くマガイマガドがすぐ近くにこの状況。

「グオツ!?!」

「さあ来いマガイマガド！鬼さんこちら、手の鳴る方へ！」

ただでさえ百竜夜行が終わったことで戦意を失っていたというのに立て続けにこの仕打ちである。

パニックを起こしたアオアシラは脇目も振らず全力で逃げ出し、所々でウツシ提督が走る方向を操作することでスムーズに翡葉の砦から脱出させた。

「グロロロロ……。」

エンエンクのフェロモンに本能を刺激され、アオアシラを追い始めるマガイマガド。

だがその途中で一度だけ立ち止まって振り返ると葛城を睨む。
その視線は『今回は退くが、次はこのようにはいかない。』と物語っ
ているようだった。

アオアシラを追ってマガイマガドは立ち去り、やがてその気配も完
全に無くなった。

「はあく、死ぬかと思った。というか気持ちだけなら何度も死んだ！」
ずっと神経を張り詰めさせていた葛城だったが、緊張の糸が切れた
のかようやく膝を着く。

「……っていけない！雲龍姉えと天城姉え！セイちゃんとモモちゃん
は!?!」

「心配するな、葛城！みんな無事だ！」

「愛弟子、キミのお陰だよ！」

傷付いたみんなのことを思い出し葛城は慌てて振り返ったが、雲龍はフゲン前提督に支えられ回復薬を飲まされていた。

同じように天城もウツシ提督に助け起こされており、セイちゃんとモモちゃんは妖精さん達の手によって優しくベースキャンプへと運ばれていく。

「ウツシ提督!? 何でここにいるの!? アオアシラと一緒に囚になったんじゃない?」

「ある程度逃げたところでアオアシラを乗り捨てて翔蟲で帰ってきたんだ! 心配しなくても逃げる途中で見つけたヒヤクメマダラを使つてアオアシラに強走効果を付与してきたから、そう簡単に追い付かれることはないはずだよ。強走効果が切れた後のアオアシラの末路は知らないけど、そこまで離れれば流石のマガイマガドもここには戻つてこないだろうからね。」

地味に残酷なことを笑顔でサラツと話すウツシ提督。

まああのアオアシラは鎮守府の仲間どころか攻め込んできた敵なのだから、最終的にどうなろうと興味がないのは仕方がない。

「それよりも葛城、よくやってくれた! あのマガイマガドを攻略して見せるとは、お前はまさしく猛き炎だ! カムラの誇りだ!」

「うん、本当に凄いよ! 本当に素晴らしいよ! キミは俺の想像を超えて強く、そしてたくましくなっていたんだね! 弟子はいつか師匠を超えていくものだなんてよく言われるけど、今回の愛弟子の活躍を見たことで俺も実感したよ! キミはきつと、いや絶対に偉業を成し遂げる最高の狩娘になるんだって!」

「えっ? いやそんな、持ち上げすぎだって! あれは無我夢中でたまたま成功しただけで、上手くいく保証だってなかったんだし!」

「いえ、そんなことはないわ……。」

「姉様の言う通りですよ。葛城、よく頑張ったわね。」

フゲンとウツシ提督に褒められるも謙遜してしまう葛城だったが、回復薬を飲んだお陰で無事に復活した雲龍と天城も葛城の活躍を称賛する。

「今まで私達はずっとマガイマガドに辛酸を舐めさせられていたんです。葛城、あなたはそのマガイマガドの戦意を喪失させてみせました。これがどれほど凄いことなのか、今回の百竜夜行が初めての葛城にとってはピンとこないのかもしれないけど、マガイマガドを追い払うなんて今まで誰も成し得なかったことなんですよ！」

「天城の言う通り、今まで誰もマガイマガドを追い払えなかった。マガイマガドは暴れるだけ暴れて、気が済めば去っていく災厄。私達はそれを見送るしかなかったの、とても悔しかったわ……。だけど百竜夜行に初めて参加した、それも実戦経験もほとんどないような狩娘がマガイマガドと渡り合ってみせた。それは例え奇跡や偶然が重なっただけだとしても凄いことなのに、あなたは奇跡や偶然に頼ることなく自分の知恵と勇氣だけで成し遂げてみせたわ。あなたは私の妹にしておくには勿体ないくらい凄い狩娘よ。」

「そつ、そんな……。天城姉えに雲龍姉えまで、あうあうあう……。天城と雲龍にも褒めちぎられた葛城は赤くなって俯いてしまう。

「どうだい、分かっただろう。ここは素直に褒められるべきだよ、でないと今までやられっぱなしだった俺達の立つ瀬がないしね！」

「うむ、ウツシ提督の言う通りだ！ここは盛大に祝うとしよう、新たな英雄の誕生をな！」

ウツシ提督とフゲン前提督、そして雲龍と天城の四人は葛城の見える目の前で右手を重ね合わせる。

気焰万丈！カムラの新たな英雄、葛城の誕生だ！！

そして重ねた手を天高く掲げて、四人全員で大きく宣言した。

「ぎゃーっ！みんな止めてえ！恥ずかしいじゃない!」

「いつもの調子が戻ってきたじゃないか愛弟子！さあ凱旋だ！今度こそ祝勝会、お団子パーティーだ！」

終わり良ければ全て良し、マガイマガドにやられたことなど無かったかのように上機嫌で帰っていく四人。

葛城は慌ててその背中を追う。

「それにしても今回の葛城の活躍は本当に目を見張るものがあったな。」

「ええ。マガイマガド関連を抜きにしても無事に関門を守り抜き、大物ドスフロギイを倒しています。多少の焦りこそ見られたものの、初めてにしては上出来と言えるでしょうね。」

「ウツシ提督もそう思うか。雲龍と天城はどう思う?」

「私も同意見です。私が初めて百竜夜行に参加したときはあそこまで動けませんでした。」

「天城もそう思います。葛城、あの子は私達にはないものを持っています。」

「そうかそうか！ウツシ提督よ、これはもう決めてもいいのではないか?」

「そのようですね、フゲン前提督にまでそう言って頂けるのなら愛弟子も自信が湧くでしょう!」

フゲンと何やら話をしていたウツシ提督は上体だけで振り返ると右手を振りながら葛城に呼びかける。

「愛弟子!」

「何よ?」

「今後の百竜夜行も全て愛弟子を中心に進めていくことにしたからよろしくね！」

「ふーん、そう……。はあっ!?何でそうなるのよ!？」

「今回の百竜夜行を見て確信したんだ。これからも愛弟子に任せておけば間違いなく上手くいくだろうってね!これはみんなの総意なんだよ、一回の百竜夜行で全員を認めさせるなんて流石は俺の愛弟子だ!」

「何が総意よ!私の意思が入ってないじゃない!」

「みんなの期待を背負って立つ。責任のある重い立場だけど、みんなそれだけ愛弟子のことを信頼しているんだ。頑張っっていこうね、俺も見守っているよ!」

「ふざけるなあーっ!!!」

成立しているようですれ違っている二人の会話。

何を言おうともまるで通じないウツシ提督に我慢のならなくなつた葛城は思わず天に向かって叫ぶ。

「えっ!？」

その時、空を見上げる葛城の視界に不思議なものが映り込む。

雲の隙間をすり抜けるように飛んでいく、龍のようにも深海魚のようにも見える不思議な青い巨大生物。

その巨大生物に不思議なものを感じ取った葛城は思わず足を止めて見とれてしまう。

「あれは一体?」

「おーい、愛弟子!何をしているんだい?早く行こう!」

「あつ、ウツシ提督!今あそこに……。あれっ?」

ウツシ提督に呼ばれて視線を戻した葛城は再び空を見上げるが、そこには青空が広がるばかりで青い巨大生物は影も形も無かった。

「見間違いだったのかな?」

「愛弟子―?」

「はーい!すぐ行くわ!」

やがて葛城はいくつもの困難を乗り越えて一つの伝説を作ることになる。

そんな彼女の記念すべき第一歩はここから始まったのであった。

ここまでの登場人物7

天龍：天龍型の主人公をやってる方。

今回は昇格が掛かった試験だったとはいえ、極寒の地へと送り込まれた上に慣れない地上戦を強いられるハメに……。

そして連携の練習どころか会話すらロクにしたことのない実質初対面の同僚と一緒に攻撃することになり、野生動物に追い回された挙句、原住民にはボロカスに扱き下ろされた。

しまいにはミツシヨンの内容をド忘れして、上司に焼き魚の写真を提出して誤魔化そうとする。

コイツ本当に主人公か？

その後お守りの誘惑に心を囚われたことで炭鋤夫に目覚めてしまったが、演習のタイムアタック勝負で妹の龍田に実力差を見せ付けられる形で修正された。

燃石炭を掘りに行って肝心の燃石炭が一個も掘れなかったり、いくらお守りを復元してもロクなスキルが付いたものが出なかったりと運のステータスは基本的に低い。

実戦でいきなり氷を割ってみたり、モンスターに乗って操縦してみたりと行動力だけは人一倍ある。

アドリブ力の高さは主人公の証、みつともないところもあるけどやっぱりコイツは主人公だった。(手のひら返し)

龍田：天龍型の主人公をやってない方。

演習において慣れない装備を使ってソロプレイでAランクを叩き出す程度の実力を持つ。

本人曰く、もうちよつと練習すればSランク狙えたとのこと。

討伐クエストばかりに行こうとする天龍に息抜きとしてお守りの

採掘を教えたが、まさかのめり込むとは思っておらず内心でビックリしている。

普段は飄々としており姉が一喜一憂する姿を見て楽しむという変な性癖を持っている。

しかし姉が誤った道へと進もうとした場合は放置せずにちゃんと更生させる、まさに妹の鑑。

本来の主人公相手に上から目線で説教をするのは俺TUEEE系の二次創作主人公にのみ許されたムーブ、よって龍田はなろう系主人公。(大嘘)

川内：夜戦を愛する川内型長女。ピンクの長門さん回以来の再登場。

今まで毎回チョイ役ばかりでロクに活躍しなかったので、実質今回が初登場みたいなものである。(暴論)

神通曰く非常に高い実力を持っていながら、夜戦にしか出撃していなかったのが昇格試験を受けられずハンターランクが上がらなかつたらしい。

コンガの放屁で夜間に気絶したのをいいことに、神通に夜型生活を矯正させられていた。

今まで日中にほとんど出撃していなかったせいで日が昇っている間の戦闘力が落ちるといふ謎の体質になっており、そのリハビリの一環として天龍と一緒に氷雪島に送り込まれた。

氷雪島での戦いでは狩猟笛を振り回して大立ち回りを演じるだけでなく、場所が不利だと判断すれば狩猟笛の音色で敵を誘導させたり、天龍のアドリブにもすぐさま対応して見せるなど前評判に違わぬ実力を発揮して見せた。

戦闘力が落ちるとされる日中でこれなので、夜間の戦闘力がいかに高いかが窺える。

ギイギを見て可愛いと感じる独特の感性の持ち主。

ゲームだから可愛く感じるけど、リアルで目の前に生きていてしか

も攻撃的なギイギが現れたら普通に怖いし気持ち悪いんじゃないかな？

多分フルフルベビーやキュリアとかも好きそう。

神通：天龍と川内を氷雪島に送り込んだ諸悪の根源。(?)

今回の出番は少なめだが川内の夜型生活を治すために苦心しており、サボりがちな提督の代わりに秘書艦として鎮守府全体の執務をこなしながら川内のリハビリにもずっと付き合っていたらしい。

普段は厳しい態度を崩さず天龍達が焼き魚の写真を持ち帰った際には厳しく説教をしたが、何だかんだで姉の川内には甘いようで任務達成のご褒美に川内と一緒に夜戦に行く約束をしてしまった。

マサムネ：天龍のオトモ連装砲、種族は長10cm砲ちゃん。

戦闘に適性のない平和主義者であり、戦力外と見なされ一度も出撃することなくずっと交易をさせられていたのだが、氷雪島に向かう天龍のアイテムポーチにこっそり潜むことで遂に念願の初出撃を果たした。(戦闘したとは言っていない)

戦闘面では役立たずだが世界中の言語に精細しており、ボワボワの言葉すら翻訳してみせた陰の功労者。

クロオビ鎮守府のC-3POである。

長門：本作のオチ担当。

毎回登場するたびに酷い目に遭っており、今回も一人で氷雪島に送り込まれたり、善意でマカ錬金壺を貰ってきたのに龍田に八つ当たり同然で腹パンされたりと散々である。

しかしその実力は確かであり、氷雪島では立ち塞がるモンスターを次々と撃破し、島の中でも上から数えた方が早い実力者のゴシヤハギすら撤退に追い込むなど大活躍をしたらしい。

今までもシヤベルでアトラルカマキリに立ち向かったり、全裸でドスファンゴを倒したりと実力の片鱗は見せていたが、ここにきてようやく本来の強さを見せつけた。

純粋な戦闘力だけなら自分よりハンターランクが上の龍田にも引けを取らない。

とはいえ今後も活躍シーンより酷い目に遭うシーンの方が多いは確定している。

長門の未来に幸あれ。

ボワボワ：氷雪島の原住民。

独自の言語でコミュニケーションを取っており、通訳なしでは何を言っているのか全く分からない。

狩りで生計を立てているバリバリの戦闘民族であり、必殺の銛攻撃は大型モンスターすらダウンさせる。

戦いばかりの生活を送っているせいが強者を貴ぶという価値観を持ち、島のモンスターと勇敢に戦った長門を尊敬している。

その一方で弱者は見下す傾向にあり、モンスターから逃げ回っていた天龍と川内には厳しい態度で接した。

彼らの先祖は『ゴキダン』と名乗る狩人と共に狩りをしたことがあるらしく、その際に『あるものは全て使え』という至言を受け継いでおり、現在もその教えを守り続けている。

ウルグとコルトスを手懐けているのもその一環であり、他にも罾を用いたりモンスターを同士討ちさせる戦法にも理解を示す。

卑怯上等！勝てばいいんだ、何を使おうが！
ちなみに狩ったモンスターは美味しく頂く。

これは命を奪った以上、奪った命には敬意を払わなければいけないと考えているからである。

こうして見返してみると少しガジャブーと設定が混ざっているような気がする。

イヴェルカーナ：ボワボワ達に氷の神として崇められている古龍。突如として天龍達の目の前に現れ、ブランドロスとザボアザギルを一瞬で氷像に変えてしまった。

ボワボワの伝説によると氷雪島が現在の環境に変わったのはイヴェルカーナが島を冷却したからなのだという。

ボワボワ曰く天龍達は神であるイヴェルカーナに認められたとのことだが、実際のところは不明。

初期プロットではサメ型モンスターつながりということであノルパティスが登場する予定だったがあえなくボツ。

その後キリン亜種やトア・テスカトラなど二転三転した挙句、結局イヴェルカーナに決定した。

面子を考えれば当然の結果である、流石にイヴェルカーナが相手では役者が違った。

葛城：カムラ鎮守府期待のホープ。

出撃経験の一切ない新人だが、頼れる提督や姉達の下で訓練を続けていたお陰で新人だった頃の天龍と比べて明らかに強い。

パンダカーに乗っていただけで練習と呼べる練習もしておらず実質初挑戦となる操竜も問題なくこなし、初見でマガイマガドの攻略法を見出すなど戦闘に関するセンスは非常に高い。

とはいえ想定外の事態だったとはいえ初出撃を終わらせてすぐに百竜夜行に挑むことになり、続けて乱入してきたマガイマガドと連戦するハメになった。

どう考えても新人にやらせる仕事内容ではないのだが、その全てをやり遂げてしまったために今後も次々に難しいクエストを割り振られることが確定している。

一人前になるまで一度も外に出ることなく鎮守府で訓練漬けの生活を送っていたせいで世間知らずな一面があり、明らかに変な見た目のフクスクやガルクでも気にすることなく雇用する。

得意技は飛翔蹴りと気刃兜割、というか現状それ以外の技を知らない。

二人の姉がいるが、二人と比べると明らかに背が低く胸もぺたんこである。

ウツシ提督：カムラ鎮守府の提督。

フゲン前提督から提督の地位を継いだばかりの新人提督であり、提督になってから最初に育成した狩娘が他ならぬ葛城である。

とはいえ以前からフゲン前提督の補佐及び鎮守府の教官として活動していた経歴があり、実質新人とは名ばかりのベテランである。

葛城のことを愛弟子と呼んで溺愛しており、暇さえあれば影から彼女を見守っている。

神出鬼没であり、いつの間にか葛城の背後に立っていたりするが決してストーカーではない、ちよつと過保護なだけである。

趣味はモンスターモノマネとお面作りだが、そのどちらも葛城からの理解は得られていない。

しかしお面は鎮守府外ではお土産として意外と好評で輸出されていたり、モノマネも雲龍が興味を持って教えを乞うたりと理解を示す人もいるようだ。

非常によく喋る人物であり、セリフを考えるのに苦労させられる執筆者泣かせのキャラクターである。

フゲン前提督：カムラ鎮守府の前提督。

カムラ鎮守府を立ち上げた人物であり、気焰万丈の精神を鎮守府全体に普及させた人物でもある。

指揮力、戦闘力ともに高く、鎮守府の誰からも頼りにされる人物ではあるが、いつまでも老いた自分が出しゃばっているのは若い芽が育たないと考えウツシに提督の座を譲った。

現在は基本的に表立っての活動はせず、鎮守府の相談役のようなポ

ジシヨンに収まっている。

しかしいざ鎮守府の危機となれば太刀の一振りでもンスターを蹴散らす活躍を見せる鎮守府きつての猛者。

彼が後ろに控えているからこそ、みんな安心して前線で戦えるのだ。

葛城に猛き炎という二つ名を授けたのもこの人。

雲龍&天城：カムラ鎮守府の秘書艦であり、葛城の姉。

フゲン前提督によって鍛え上げられた狩娘であり、フゲンが提督をやっていた頃は彼女らも秘書艦ではなく狩娘として活躍していた。

提督がウツシと交代し、葛城が狩娘として少しずつ成長してきたのを機会に秘書艦に転向した。

モデルはご存じヒノエとミノトの姉妹であり、雲龍がヒノエで天城がミノトのポジションである。

しかしクールで口数の少ない雲龍と元気で明るい天城ではヒノエとミノトのキャラクター性とは真逆な気もするが、姉妹の立場を入れ替えられない以上は仕方がない。

セイちゃん：葛城のフクズク。

他のフクズクとは明らかに違うシルエットと青い羽毛が特徴。

その唯一無二な見た目を気に入った葛城によってパートナーに選ばれた。

普通のフクズクは戦闘力が皆無であり偵察しか出来ないのだが、普通のフクズクではないセイちゃんは小型モンスター程度なら普通に戦えるだけの強さを持っている。

吸った者を混乱させる金色の鱗粉と、浴びた者を昏睡させる催眠ミストを得意技としており、これらを使えば大型モンスターですら動きを止められてしまう。

ベルナ鎮守府の近隣にある古代森で外見、特徴共に非常によく似て

いる大型モンスターが確認されているのだが、カムラ鎮守府にはそのモンスターの情報が共有されていなかったのでみんな疑問に思いながらも受け入れている。

名前の由来は作者の実家のセキセイインコ、恋愛クソザコトリックスターは関係ない。

モモちゃん：葛城のガルク。

白濁した眼、口内に収まりきらない牙、松かさのような外皮に覆われた長い尾、ナイフよりも鋭い二重構造のカギ爪、そして皮を剥がされた犬の死体のような外見。

どう見てガルクには似ても似つかず、その不気味な外見から鎮守府の大多数はモモちゃんのことを怖がっている。

しかし例によって葛城にはちよつと変わったガルク程度にしか思われていない。

葛城によつて溺れていたところを救助され、そのままパートナーとしてスカウトされた。

ガルクとしては規格外の強さを持っており、特にそのカギ爪から繰り出される連続攻撃は金属製の装甲ですらバターののように引き裂いてしまう。

アステラ鎮守府が調査しているとある谷にてモモちゃんと酷似した大型モンスターが確認されているが、やはりカムラ鎮守府にはそのモンスターの情報は伝わっていないのであった。

ちなみに飽くまでパートナーのガルクであつてオトモンではないので絆技は使えない。

なおカムラ鎮守府では本来なら水上移動の出来ないガルクを狩娘と同時に運用するために、水蜘蛛と呼ばれる独自の猟犬具を開発している。

名前の由来は本文中にあるように桃太郎、セイちゃんと語感を合わせようとしてこの名前したが我ながらかなり無理のある名前だと思う。

マガイマガド：かつて百竜夜行が起こるたびに幾度となく乱入しては鎮守府、モンスター共に大打撃を与えて場を混乱させ続けてきた凶暴な大型モンスター。

百竜夜行の回数が少なくなっていくと同時にその姿も徐々に見られなくなっていく、やがて百竜夜行が止むと同時に完全に姿を消した。

それ以降音沙汰はなく存在を忘れられていたが、再び百竜夜行が始まったのに合わせて活動を再開した。

その屈強な体格に見合っただけのパワーを誇り肉弾戦だけでも相手を寄せ付けないが、それだけでなく爆発性のある鬼火による攻撃も得意としており、その二つを組み合わせることによって手の付けられない強さを発揮する。

実際に戦闘になった際はセイちゃんとももちちゃんを一撃で倒し、バリストア隊を一瞬で全滅させ、雲龍と天城の二人掛かりでも相手にならず、フゲンを一方的に追い込むなど文字通り桁違いの強さを見せ付けた。

しかし最終的には葛城の機転によって大きなダメージを受け、戦意が衰えたところでウツシ提督の奇策によって翡翠の砦から追い払われた。

明らかに格下でありながら初めて自分にダメージらしいダメージを与えた葛城を明確な敵として意識するようになり、以降も百竜夜行や大社跡の調査において幾度となく姿を現しては葛城と激闘を繰り広げることになる。

その後も決着が付くことはなく互いにライバル意識が芽生え始め、やがては地の底に潜む烈風と雷電の化身とも呼ばれる異形の女神を相手に葛城と共に共同戦線を張って挑むことになるのだが、それは葛城もマガイマガドも知らない未来の出来事である。

本文中においてマガイマガドはフゲンですら追い払うのがやっとと書いておきながら、マガイマガドを追い払ったのは葛城が初めてと

速攻で矛盾してみせた。

これはフゲンはマガイマガドが自主的に去るまで耐え続けるしかなかったが、葛城は戦意を喪失させて追い払うことに成功したという意味である。

「作者はウソつきだ」と思った少年少女のみなさん、どうもすみませんでした。

作者はウソつきではないのです。まちがいをするだけなのです

……

山城ちゃんと極秘指令1

広大な砂漠、その隅にひっそりと建てられたとある鎮守府。その名はバルバレ鎮守府、以前卯月の昔話に出てきた鎮守府である。

かつては『ゆうた』という名前のマナーも常識もない提督に牛耳られていた時期があり、その頃は鎮守府の雰囲気も最悪であった。

更に同じタイミングで超大型深海棲艦に襲われ、鎮守府壊滅の危機に陥ったこともある。

しかし後に新しく提督になる男の活躍によって深海棲艦は退けられ、そのままゆうた提督と入れ替わる形で提督になった彼の手によって鎮守府の雰囲気も改善されたことにより今ではすっかり明るい雰囲気へと生まれ変わった。

そんな新生バルバレ鎮守府、今回のお話はそこから始まる。

バルバレ鎮守府の工房、そこで一人の狩娘の少女が作業台に一枚の図面用紙を広げていた。

「ここはこんな感じで……こっちはこうで……。」

少女は夢中になって図面を引いていくが、ある程度描いたところで手が止まり、悩むように顔が険しくなっていく。

「ああ〜ダメダメダメ!!こんなんじゃダメーッ!!」

そしていきなり叫ぶと紙をグシャグシャに丸めてそのままゴミ箱に投げ捨てた。

しかしゴミ箱は既に紙屑でいっぱいになっており、投げられた紙は

弾かれて床に落ちる。

気を取り直した少女は今度は裁縫道具を用意するとそこから取り出した裁ちバサミを使って布を切っていく、切った布を今度は縫い針で手際よく縫っていく。

少女の手によって簡易的ではあるものの布はあつという間に可愛らしいデザインの小さな服へと変わり、少女はその服をデッサン用の木製人形に着せた。

「うーん。」

少女は服を着た人形を手にとると、様々な角度から眺めていく。

だが少女の表情は再び険しくなっていく、人形から服を脱がすとその辺に放り捨てる。

「はあく、やっぱりダメだなあく。」

そしてすっかりやる気を無くした少女はどうでもよくなったかのように作業台に突っ伏してしまった。

「イサナちゃん、何してるの?」

「んっ?……あつ、山城おねえさん!」

そんな少女、改めイサナの後ろから声を掛けたのはドンドルマ鎮守府の精鋭部隊である筆頭狩娘の一人であり、筆頭ランサーの別名で呼ばれることもある山城。

前々提督である团长とは艦娘だった頃から付き合いがあつたということもあり、まるで実家に帰省するかのような感覚で定期的にバレ鎮守府を訪れているのだ。

ここでイサナの容姿について説明しておこう。

イサナは背も低ければ胸も薄い、見ての通りの少女である。

モコモコとした黄色いオーバーオールと、これまた黄色のモコモコとした長袖の手袋を身に着けており、いくつもの三つ編みを作ることによってまたしてもモコモコになった豊かな金髪と相まって全体的

に黄色い印象を受ける。

その一方で瞳の色は青く、おでこに巻かれたバンダナもこれまた青い。

オーバーオールの肩紐は両肩とも外されて前に垂らされており、それによってオレンジの胸のインナーとおへそが丸見えになっている。

顔には薄っすらとそばかすがあるが可愛らしい顔をしており、将来は美人になるであろうことが予見される。

山城の声に反応したイサナは先程までの落ち込んだ様子など無かったかのように笑顔で飛び起きた。

「山城おねえちゃんまた来てくれたんだね〜！今日はどんな用事なの〜？」

「わ、私のことはいいじゃない……。…（この提督に会いたくて来たなんて口が裂けても言えるわけじゃないでしょ!?!）」

山城はバルバレ鎮守府の新提督にホの字であり、バルバレ鎮守府にやってくる理由の大半は新提督目当てである。

よその鎮守府に所属しているくせに提督を狙って現れる卑しい女ということ、自分のことを棚に上げて香取と金剛にはライバル視されているのであった。

とはいえ仮にも山城はドンドルマ鎮守府のエースの一人であり、多忙の身である。

そんな彼女が今回どうやってバルバレ鎮守府に来れるだけの時間を作ったのか？

それには非常に深……。くなく、むしろ浅く薄っぺらいわけがあった。

『先日のドンドルマ鎮守府にて』

「しれえからの招集です！山城さん行きましょう！」

「はいはい、聞こえているわ。分かったから大声出さないで……。」

自室で雑誌を読んでいた山城に声を掛けたのはドンドルマ鎮守府において新顔の狩娘である雪風。

まだ経験の浅い新人だが持ち前前の幸運と好奇心、そして柔軟な発想から繰り出される独自の戦法で多大な戦果を挙げており、期待の新人として筆頭狩娘の一員に任命された少女だ。

ちなみに山城が読んでいたのは『男をクラツとさせちやう女の10の仕草』とかいう非常に頭の悪そうなタイトルの雑誌である。

少し前までの山城であればこういう雑誌には見向きもしなかったのだが、脳内がピンク色に染まっている今の彼女にとっては超重要参考資料なのであった。

ドンドルマ鎮守府の最奥に位置する執務室。

そこは他の鎮守府の執務室とは雰囲気が大きく違い、まるで神殿のような厳かな様相を呈している。

「遅いですよ山城。あなたも筆頭狩娘の一員としての自覚があるのなら、ルーキーの雪風に先輩として模範となる姿を見せるようにしなさい。」

「分かっているわよ、悪かったわね。」

「まあまあ、不知火さんもその辺で。提督からの指令を待ちましよう。」

「大丈夫です！まだしれえも来てないから遅刻にはなりません！」

執務室に着いた山城と雪風を出迎えたのは同じく筆頭狩娘のメンバーである不知火と蒼龍。

不知火はその冷静な判断力と厳格な姿勢からメンバーを率いる筆頭リーダーとしての役割を持ち、蒼龍はそのふわふわとした雰囲気とは裏腹に全体を見渡す目を持った有能な狙撃手であり筆頭ガンナーの異名を持っている。

不知火、蒼龍、山城、雪風、筆頭狩娘はこの四人のメンバーで構成されているのだ。

不知火の小言に顔をしかめながらも既に横に並んでいる不知火と蒼龍の横に山城も立ち、遅れて雪風も山城の隣に立つ。

四人が並んだその直後、先程入ってきた通路の方からズシンズシンと重々しい足音が鳴り響いてきた。

やがて姿を現した足音の主は片手に大きな太刀を携えた鎧姿の巨大な老人であった。

老人はそのまま四人の横を通り抜けると奥にあった大きな玉座に腰掛けた。

この巨大な老人は大提督と呼ばれているドンドルマ鎮守府の提督である。

彼の種族はなんと竜人妖精であり、本来なら竜人妖精は手のひらサイズにしかならない個体がほとんどなのだが彼は人間の数倍もある規格外のサイズを誇っている。

また竜人妖精は女性の個体が多いのだが、彼は見ての通り男性の個体である。

そんな彼はアタリハンテイ力学への適性と高い戦略眼を持っていたため人間の提督を差し置いてここドンドルマ鎮守府の提督を任されており、ドンドルマ鎮守府をここまで大規模な鎮守府へと育て上げたのも彼の手腕あつてこそ。

その実績と豊富な知識から多くの提督に尊敬の眼差しを向けられているのであつた。

「ムオツホン！筆頭狩娘よ、よくぞ集まってくれた。」

威厳溢れる大提督の声。

その声に釣られるように自然と山城達の背筋も真っ直ぐ伸びる。

「私達筆頭狩娘は司令の手足となつて働く部隊です。指令のご命令とあらば拒否する者は一人もいません。」

筆頭狩娘の代表としてリーダーの不知火が答える。

山城としては内容によつては拒否したい命令だつてあると思うが、生真面目な不知火にとつてはそうではないらしい。

「ウム、その心構えをワシは嬉しく思うぞ。ムオツホン！さて、それでは本題に入ろう。」

大提督は嬉しそうに頷くと咳払いをしたのち、姿勢を改め真面目な顔となる。

「これからヌシたちに極秘指令を下す。」

「極秘指令……。」

大提督の重々しい雰囲気と極秘指令というこれまた重い言葉から、歴戦の猛者である山城も思わず生唾を飲み込む。

「極秘ということでは既に分かっているとは思いますが、これから伝える内容は他言無用である。僅かでも情報を漏らすことは許されぬぞ。仮に漏らせば最低でも筆頭狩娘からの除名、最悪解体すらあり得る。よいな？」

極秘指令を外部に漏らさないというのは組織として当然のことである。

だとしてもそれをわざわざ強調して言われる辺り、どれだけ重要な指令を下されるのか？

解体処理など事実上の死刑みたいなものである、死刑にされるほどの指令とは一体何をさせるつもりなのだろうか？

「ワシがヌシたちに下す極秘指令、それは……。」

「それは？」

「アペケロスの卵5個とリノプロスの卵5個。」

「計10個を納品することだ!!」

「は？」

告げられた指令が信じられず思わずマヌケな声を出した山城は悪くない。

「む、聞こえなかったのか？ならばもう一度言おう。アペケロスの卵5個とリノプロスの卵5個、計10個の納品だ。」

「大丈夫です、一字一句余すことなく記憶しております。山城、司令からの指令を聞き返すなんてどういうつもり？」

不知火に怒られた山城が左右を確認してみれば、蒼龍も雪風もこの指令にまるで疑問を持っていないようで平然としている。

(こんな指令どうして平気なのよ？まともなのは私だけなの……!?)

この場で状況を飲み込めていない自分一人だけが異端のようだが、どう考えてもおかしいのは自分以外の全員だ。

そう意識することで山城は精神の安定を図る、それでなければ狂いそうさ。

「ハッハッハッ！よいよい、いきなりこのような指令を出されて困惑するのも無理はない。卵の運搬という最難関のクエストを提示されれば、歴戦の狩娘でもたじろぐのは当然のことだ。」

「いや、そういう意味で言ったんじゃない……。」

「卵の運搬というのは実に奥深いのだ。卵は種類ごとに運び方にコツがあり、少しでも間違った運び方をすればたちまち鮮度が落ちる。モンスターや深海棲艦の討伐のような華々しい戦果のある仕事ではないが、しかし誰にでも頼めるような簡単な仕事でもないのだ。戦うのではなくただ運ぶだけなどと軽く考えるような不埒者には依頼出来ん。卵を運ぶのに必要なのは卵を落とさずに運び続けられるだけの膂力、運搬を決して諦めない精神力、そしてこの依頼を決して外部へ漏らさないと誓える誠実さ。これらの要素を兼ね備えた最上級の狩娘をワシは探しておった。そしてヌシたちは卵を運ぶのに相応しい狩娘として選ばれたのだ、誇ってよいぞ。」

自分の世界に入っているのか、山城のセリフを遮って卵について熱く語る大提督。

卵を運ぶのに相応しい狩娘って何?!何をどう誇ればいいのか?!そもそも卵の運搬って最難関クエストだったの!?

本気で頭痛を覚える山城だったが、周りはそうでもないらしい。

「司令にそこまで評価していただけるとは!?!この不知火、必ずや司令のご期待に応えてみせます。」

不知火は本気で誇りに思っているようであり、蒼龍も似たような感じである。

ポケーツと分かってなさそうな顔をしている雪風だけが山城の癒しである。

「ここだけの話だがワシは卵シンジケートの裏ボスなのだ。」

「卵シンジケート?」

思わずオウム返しで聞き返した山城は悪くない。

卵シンジケートって何!?裏ボスってことは表ボスもいるの!?

今回ばかりは山城だけでなく不知火達も驚いた表情をしているのがせめてもの救いだ。が、その実態は山城が卵シンジケートという意味不明な単語そのものについて驚いたことに対して、不知火達は大提督が謎の組織に所属しているという事実に対して驚いていたので、外面はともかく内面は全く違う驚き方をしているのであった。

「ウム、卵シンジケートとは卵をこよなく愛する者達で構成された秘密の組織だ。カリユード諸島中に構成員がおり、本土にも所属しているものは大勢いる。国家や身分に人種、年齢や性別といったあらゆるしがらみに捕らわることのない、ただ卵を愛するという意志の下に人々が集まって出来た組織、それが卵シンジケートなのだ!」

それってただの卵愛好家の集まりでしょ、山城はそう思うが口に出すことはない。

卵運びの指令内容を漏らしただけで解体処分される可能性があるのだ、下手なことなんて言えたもんじゃない。

「だが、この組織は飽くまでも秘密の組織。又シたちはワシが卵シンジケートの裏ボスだということを漏らすことは許されぬ。もちろん卵シンジケートの存在についてもだ。最初にも言ったが口を滑らせれば恐ろしい目に遭う、よいな?」

これである、知りたくもないことを無理矢理教えてこちらの命を握ろうというのだ。

押し売りでもここまで理不尽極まりないものなんてそうそうないだろう。

「だが袖振り合うも他生の縁、又シたちに卵を愛する心があるのであれば我ら卵シンジケートの構成員に加えてやることもやぶさかではないぞ。」

「はっ!この不知火、不肖の身ながら是非とも末席に加えさせていただきたく思います。」

「不知火さんが入るのなら私も……。」

「じゃあ雪風もー!!」

「えっ？えっ!?」

あつという間に筆頭狩娘の75%が卵シンジケートに所属してしまった。

何も考えずにその場のノリで決めた雪風はともかく、不知火と蒼龍は何を思つてこんな怪しげな組織に入ろうと思つたのか？

そして山城に突き刺さる4人の視線、特に不知火からの圧が凄い。戦艦クラス的眼光とはよく言ったものである、何で卵シンジケートの裏ボスである大提督よりも不知火からの圧の方が強いのか？

「ぐ……ぐぐぐ……は……はい……入……り……ます……。」

「おお！よくぞ決断してくれた！卵シンジケートの裏ボスとして同志が増えるのは心から嬉しく思うぞ！」

同調圧力に屈して遂に膝を折る山城。

みんなの前でなければみつともなく涙と鼻水と涎を垂らして歯ぎしりしながら痲癩を起しているところである。

美人が台無し？そんなもの意味不明なグループにぶち込まれたことに比べれば屁でもない。

そのくらい嫌だったのだ。

卵のことは別に好きでも嫌いでもなかったが、今回のことで大嫌いになりそうだ。

「ムオツホン！それでは同志が増えたことを祝つてヌシたちにこの歌を授けよう。」

『た・ま・GO！た・ま・GO！たツ・まツ・GO——ツ!!』

「これは卵シンジケートの賛歌だ。卵への愛を伝えたいとき、心高ぶったとき、落ち込み心折れそうになったとき、この歌を歌うとよい。尤も秘密の組織であるがゆえに人目に付く場所で歌うのは禁じておるのだがな。卵はいつも又シたちの心にある、それを忘れるでないぞ。」

到底歌とは呼べないクソみたいな謎の掛け声を聞かされて真顔になる山城だが、大提督はこの歌に大層な自信があるらしい。

どう鼻屑目に評価してもこれは歌ではなく卵と連呼しているだけある。

こんな歌で傷付いた心が立ち直るのであればこれまでのやり取りでボロボロになった自分の心を救ってほしいところだが、実際に歌えば余計に心が折れるだろう。

そもそも普通に生活していたら心の中に卵なんてあるわけないだろう、常識的に考えて……。

「それでは行くがいい、筆頭狩娘よ!!」

「はっ！お任せください。それでは筆頭狩娘、出撃します!!」

不知火に引き連れられ執務室を後にする筆頭狩娘。

その最後尾で山城は苦虫を百匹単位で噛み潰したような顔をしながら、本気でこの仕事を止めたくなかった。

なぜ自分がこんな目に遭わなければならないのか？山城は己の不幸を呪わずにはいられない。

自分が筆頭狩娘だからいけないのか？だったらそんなもの捨ててやる。

筆頭狩娘という立場もドンドルマ鎮守府のエースとしての称号もあらゆるものも投げ捨てて、そのうちきつと建造されるであろう扶桑姉さまと愛するバルバレ提督に挟まれて一生イチャイチャして過ごしたい。

辛い現実から目を逸らしたい山城は現場に到着するまでそのよう

な妄想をし続けて気を紛らわせるしかないのであった。

山城ちゃんと極秘指令2

「……………ハッ!?私の愛しの旦那様はどこ?私の敬愛する姉様は?私の可愛い子供達は?」

「ほへ?山城さん、急に何を言ってるんですか?」

鎮守府を出てからずっと姉とバルバレ提督の妄想を続けていた山城。

そのまま半ば無意識に歩き続けていたのだが、顔に吹き付ける熱風と砂粒の感覚によりふと我に帰ってみれば眼前に広がっていたのは岩場と砂漠で構成された荒野であった。

「雪風?」

「はい、雪風です!」

山城の少し前方にいたのは雪風一人、不知火の姿も蒼龍の姿もどこにも見当たらない。

「何で私こんなところにいるの?」

「何でつてここまで一緒に歩いてきたじゃないですか。」

何故自分が砂原なんぞに二人きりで放り出されているのか全くもって不明であったが、雪風によれば自分の足でここまで歩いてきたらしい。

本人は妄想に浸っていて事実上意識が無かったのだが、身体の方は夢遊病の患者のように勝手に歩き続けてここまで来てしまったということになる。

そんな馬鹿なと思う山城であったがこれにはちゃんとしたワケがある。

これでも山城はG級狩娘であり、筆頭狩娘のメンバーに選ばれる程度には優秀なエリート狩娘である。

G級狩娘のしつかりとした足運びは無意識のままでも何かにつまづくことなく安定した歩行を実現し、実戦の中で磨き上げられた冴え

渡る勘は夢心地のまま先行する雪風を追従し続けた。

その結果がこれである、気付いた頃には見知らぬ景色。

どこかで転ぶなり、ふらつく動きを不審に思った雪風に起こして貰うなりすれば早い段階で正気に戻れたのだが、本人が優秀過ぎたせいで逆にスムーズに事が進んでしまい雪風に疑問に思われることもなく、唐突に砂原に送り出されるといふ不幸を味わうことになったのであった。

「えっと、ごめんなさい。砂漠の日差しがキツくてちよつと頭がぼーつとしちゃったのよ。それで短期記憶障害を起こしちゃったみたいで、鎮守府を出た後から何があったか覚えてないの。何があったのか教えてくれる?」

「そうだったんですか、気付かなくてごめんなさい!熱中症は怖いですからね!まだ暑いフィールドには出てないけど、もっと早い段階でクーラードリンク飲んでおくべきでしたね!」

「ぐっ!?そ、そうね……。」

実際のところは最初から何も聞いてないし考えてもいなかったのだが、素直にそう告げるのは先輩としてのプライドが許さなかった。

なのでかなり無理のある言い訳をしたのだが、純粋な雪風はその見え透いた嘘をアツサリと信じ込む。

つまらないプライドのために素直な雪風に嘘を吐いたことで山城の良心も瀕死の重傷を負うのであった。

く鎮守府を出た直後く

既に妄想を始めていた山城、だが他のメンバーはそれに気付くことなく海を目指して進んでいく。

そして海辺に着いたところで全員が自然と足を止める、山城も自分の世界に入ったまま釣られて止まる。

「それでは改めて今回の任務の内容を確認します。アペケロスの卵5個とリノプロスの卵5個の納品です。」

場を仕切る不知火の声。

それに領く蒼龍と雪風、そしてタイミングよくカクンと下がる山城の頭。

それを見た不知火は全員が聞いているものと判断して話を続けていく。

「アペケロスとリノプロス、どちらも乾燥地帯に生息するモンスターです。しかしその生息域は基本的に被ることはなく違う地域です。一つ一つのフィールドに四人全員で向かうのは効率が悪い、ですので今回はパーティを二つに分けて行こうと考えています。」

「へえ、そうなんですわー!」

「確かここから一番近いアペケロスの生息地はジャンボ鎮守府近くの乾燥地帯だったっけ?」

「はい。そして近隣で一番リノプロスが多く見られるのは……。」

「バルバレ……。」

「その通り、バルバレ周辺の砂漠地帯です。」

妄想の中でバルバレ提督とイチャついていた山城。

思わず口からこぼれたバルバレの一言、それが偶然会話と噛み合ったことで話はそのまま進んでいく。

「私と蒼龍がアペケロスの生息地に向かいます。リノプロスの方は山城と雪風に任せようと思います、よろしいですね?」

「はいっ!頑張ります!」

「ウン……。」

元気のいい雪風と対照的に生返事の山城。

当然である、だって山城は話を聞いていないのだから。

「山城はバルバレ鎮守府に何度か行ったことがありますよね。だってら近場にある狩場の場所も分かるんじゃないですか？そこまで雪風を案内してほしいのですが。」

不知火は山城をバルバレ近くの狩場まで行かせようとしているのだが、シラフならとにかく今の山城に道案内させるのは不可能である。

無意識の山城は誰かの後ろに着いていくことは出来ても、自分一人で目的の場所に向かうことは出来ないからだ。

本人の気付かぬところで山城は絶体絶命のピンチを迎えていたのであった。

「可愛い子には旅をさせよ……。」

「うん？山城、今何と言いました？」

「子供は色んな経験をして成長していくものよ……。」

「なるほど、山城がそこまで言うのなら……。」

そこに飛び出した山城の意味不明の寝言。

それをどう解釈したのか、納得した顔の不知火は雪風に地図を渡す。

「雪風、貴方はまだまだ新人です。ですが新人だからといって我々におんぶに抱っこではいけません。自分の成長のためにも自力でこの場所まで辿り着きなさい。山城には敢えて貴方に指示を出させず、後ろに着いてもらいます。これも貴方の成長の為です、いいですね。」

「はいっ！」

「心配しなくても大丈夫です、ちゃんと地図はあるのですから。どうしようもなくなった時だけ山城を頼りなさい。」

「はいっ！」

不知火と雪風は同じ陽炎型の姉妹艦である。

それ故に雪風に成長してほしいという気持ちは筆頭狩娘の中でも一際大きい。

山城の可愛い子には旅をさせよの一言で、雪風に率先して動いても

らいたいとの気持ち芽生えたことで雪風を先行させようと思ったのである。

ちなみに山城の脳内ではいつの間にもやらバルバレ提督とケツコンしており、子供も産まれていた。

妄想を始めてまだ10分も経っていないのにそこまで関係が進んでいるとは卑しい女である。

やたら子供子供と言っていたのはこれが理由であった。

「それでは雪風出撃します！山城さん行きましょう！」

「子供、ふふふふ……。」

こうして偶然に偶然が積み重なった結果、山城は自分がトリップしていることを誰にも気付かれることなく雪風の背中に着いていくことで目的地にまで進むことが出来たのであった。

「……ということがあったんです！ちゃんと山城さんを頼らずに現場まで来れましたよ！」

「そうね、雪風エラいわ。よくここまで来れたわね。」

「えへへえ〜！」

誤魔化しがてらに取り合えず雪風を褒めてみるが、山城本人としてはそんなやり取りした覚えも無いのだからまるで心がこもっていない。

雪風が照れている間に自分を落ち着かせることで精一杯なのであった。

「それでえっと、ここは？」

「はい！ここはリノプロスがたくさんいる砂漠地帯のベースキャンプです！」

雪風の言う通り、ここは海から砂漠に直接上陸出来る場所に設置されたベースキャンプ。

バルバレ鎮守府がある地域には広大な砂漠が広がっている。

大半は雑草の一本すら生えていないキメ細やかな流砂の大地となっており、砂上船と呼ばれる専用の乗り物を使わなければ流砂に足を取られて移動することすらままならない過酷な環境となっている。

しかし全てのエリアがそうになっているわけではなくちゃんと歩ける砂地も存在するし、更には岩場やオアシスといった生物の生息可能に適した環境もしっかりと存在する。

「雪風達はこれからリノプロスの巣に向かいます！それは地図を読んだ限りここにあるらしいです！」

不知火から貰った地図、それにはこのフィールドのエリア情報も載せられており、過保護なことにリノプロスの巣があるエリアに印も付けてある。

先程雪風に地図を渡す際に書き込んでおいたらしい、雪風はこの地図を頼りにリノプロスの巣を目指すつもりだろうだ。

「さあ山城さん行きますよー！」

元気よく砂漠へと駆け出していく雪風。

不本意なクエストだったためやる気のなかった山城も渋々後を追う。

「はあ、海で戦うはずの狩娘が何で海とは程遠い砂漠に出向かなきゃいけないのよ……。本当に不幸だわ……。」

ザクザクと砂を踏み締めて歩く二人、足元は流砂ではないとはいえ砂地である。

狩娘の足は海を歩くためのものであり、砂漠を歩くように出来てはいない。

歩き慣れない地面、照りつける日差し、そして吹き付ける砂埃。

「ううう、暑いですねー！」

クーラードリンクを歩き飲みし、額の汗を拭う雪風。

元気が取り柄の雪風もこの慣れない環境には流石に歩き辛そうにしている。

では不幸が取り柄の山城の方はどうなっているのかというところ……。「あ、っ、い、……武器重い……あつ、靴下に砂入った……うっ!? 目にも砂入った……何で私がこんな目に……。」

まだ卵の運搬どころかリノプロスの巣にすら辿り着いていないのにこの有様である。

背中に背負った黄金に輝く大槍バベルは重いだけでなく太陽の熱をまんべんなく吸収し、熱さと重さのダブルパンチで容赦なく山城のやる気を奪っていく。

こんなことになるのならバベルなんか持つてこず、適当に軽くて小さい武器でも装備してくればよかったと思うがそれも後の祭り。

砂漠に大事な武器を捨てるわけにもいかず、持ち前のプライドと根性だけを頼りに砂漠を歩き続けるのであった。

歩き続けたことで徐々に砂地は終わりを見せ、疎らに植物が生えた岩場へと景色が変わっていく。

足元が歩きやすい地形へと変化したことで雪風も山城も元気を取り戻し、やがて目的の場所へと辿り着いた。

「見つけました！リノプロスの縄張りです！オアシスの近くにリノプロスの巣があります！」

熱い砂漠における清涼剤、オアシスの周辺にリノプロスが群れを成して営巣している様子が遠くからでもはつきりと見えた。

リノプロスは鳥類などと違って自分の身体で卵を温める習性は持たず、地熱と太陽で卵を温める生態を持っており、卵は地面に皿状に掘られた丸い窪みに産みつばなしされていた。

「リノプロスには悪いけど早速卵を貰っていきましよう！」
巣に向かって飛び出していこうとした雪風を山城は慌てて捕まえる。

「雪風待ちなさい！こういうのにはやり方というものがあるのよ！」
雪風に近くの岩陰に隠れて待機しているように指示を出すと、山城はオアシスに向かって歩き出す。

「いい雪風？リノプロスは聴力こそ発達しているけど視力はとても悪いの。そして当然卵を守ろうする本能こそあれど、その警備はザルもいいところよ。だからこうやって……。」

抜き足差し足忍び足でリノプロスの巣へと近付いていく山城。

山城の言う通りリノプロスは聴力にこそ優れるが視力はかなり低く、音を立てなければ接近してもそう簡単に気付かれることは少ない。

山城はそのままバレることなくリノプロスの巣の中にまんまと入り込むことに成功した。

「ま、私に掛ければこんなものね。（小声）」

「山城さんすごいーいー！（小声）」

「それじゃあ卵を頂くとしますか……ん？（小声）」

山城の手際の良さに離れた場所で見えていた雪風も目を輝かせる。それに気を良くした山城が卵に手を付けようとした瞬間、彼女の上空に黒い影が現れた。

何事かと山城が見上げてみればそこにいたのは……。

「ノイオス？」

ハゲワシに似た頭部を持つ翼竜種の小型モンスター、ノイオスであつた。

ノイオスは砂漠や荒野といった乾燥地帯に多く見られる翼竜種。

肉食だが基本的に生きて獲物を襲うことはなく、死肉を食べる腐肉食のモンスターであり危険度は低い。

戦闘力も低ければ性格も臆病で、このモンスターに傷付けられる方が珍しいとさえ言えるだろう。

厄介な飛行系大型モンスターならともかく危険度の低いノイオスなら問題ないだろうと判断した山城は警戒を緩める。

持ち前の不幸で手に負えない化け物でも現れたんじゃないかと影を見た時点で少し冷や冷やしていたのだ。

そんなノイオスだがこの場にいるのは一羽だけである。

本来群れで活動するノイオスが一羽しかないということは、この個体は群れとはぐれたのであろう。

群れとはぐれて不安なのか動きに落ち着きがなく、あっちへフラフラこつちへフラフラと飛んでいる。

そしてはぐれノイオスは何を思ったのか山城の方へと飛んできた。

「ちよっ!?何でこつちに来るのよ、あっちへ行きなさいよ! (小声)」
危険度の低い小型モンスターということで油断していた山城も予想外のこの事態には流石に慌てる。

止まり木にするように山城の頭に止まろう足を伸ばすノイオス。

いくら大人しいモンスターとはいえ爪は鋭く、脚力もそれなりにある。

そんなもので頭を掴まれては堪ったものではない。

ノイオスを追い払おうと思わず振り回した腕、それはノイオスの横っ面に直撃した。

「キイイイイイイイイン
!!!!!!」

ノイオスは驚くと高周波を放つ性質がある。

この高周波はかなりの音量を誇っており、上空で鳴いたノイオスの高周波によって地中に潜んでいたモンスターが思わず飛び出してく

ることすらあるという。

山城に殴られたこの個体も例に漏れず高周波を放つ、山城の頭のすぐ上で……。

「うるさつ……あつ!?」

「ブルルル……。」

「ブルル……。」

「ブルルルル……。」

ノイオスの出した高周波。

それはオアシス全体に響き渡り、リノプロス達の注目を集めるには充分過ぎた。

「ど、どうも……怪しいものではありません。通りすがりの山城です……。えつと……それじゃ、お邪魔しました……。」

「ブオオオ!!」

「ブアア!!」

「ブウウウ!!」

「ててて撤収くくく!!」

音を出した元凶のノイオスはいつの間にやら遙か遠くへと飛び去っており、残された山城に目掛けて次々にリノプロスの大群が突っ込んできた。

この状況では卵どころではなく、リノプロスの警戒を解くためにも一旦この場から離れるしかない。

危険度の高い大型モンスターが現れなかったから幸運？

そんなことはない、危険度の低い小型モンスター相手にすら酷い目に遭わされるからこそ山城は不幸なのだ。

「ああもうしつこい、これでも喰らいなさい!」

しつこく追ってくるリノプロスに逃げ切れないと感じた山城は音爆弾をリノプロスの群れの真ん中に放り込む。

音爆弾は破裂することでノイオスの高周波に匹敵する大音量を鳴らすアイテムである。

音爆弾の爆音によってリノプロスが山城の位置を見失っている隙に、山城は雪風の待つ岩陰に逃げ込むのであった。

五分後

「よし、リノプロスの警戒心も薄れたようだし今度は一緒に一度行くわよ。もうやり方は分かるわね?」

「はい!雪風、決して走らず急いで歩いてきてそして早く卵を手に入れます!略してユキイレです!」

「ユキ……?まあいいわ。」

リノプロス達が落ち着いたのを見計らって卵を手に入れるべく再びオアシスにゆつくりと近付いていく山城と雪風。

作戦ユキイレ開始である。

今度はノイオスに絡まれるといったトラブルに見舞われることなく巣の中心にまで到達する。

「それじゃ卵を貰うわよ。割れ物だからゆつくり優しくね。(小声)」

「はい!ゆつくり優しく貰います!(小声)」

山城と雪風はそっと卵を持ち上げた、ずしりとした重みが両腕に伝わってくる。

そのまま来た時と同じく物音を立てないよう静かに歩き去っていく。

「やりました!リノプロス達に気付かれることなく卵を持ったままオアシスを抜け出せました!」

「喜ぶのはまだ早いわ、ベースキャンプに戻って納品するまでがクエストよ。それにクエストクリアに必要な卵の数は全部で5個、最低でも三往復しないといけないわ。」

「はい、大丈夫です!」

楽観的な雪風に対して山城は頭痛を覚える。

山城は知っている、運搬というのは帰り道こそが本番であるということ。

行きはよいよい帰りは恐い、運搬クエストというものがどれだけ面

倒臭いのかを知る山城は一人溜め息を吐くのであった。

山城ちゃんと極秘指令3

リノプロスの巢から卵を盗み出した山城と雪風。

二人は来た道を通ってそのまま戻ることにする。

「思ったよりアツサリでしたね！もう拠点とオアシスをつなぐ道も覚えたし、これを繰り返すだけなら運搬って思ったより簡単かも！」

簡単に卵が手に入ったせいも既にクリアしたも同然と言わんばかりに油断している雪風。

しかし経験豊富な山城はここからが本番と気を引き締める。

「あれっ？あんなところに黄色いトカゲがいますよ。」

まだ砂漠にも到達していない岩場のエリア。

そこに黄色い鱗と二対の小さいトサカを持った恐竜のようなモンスターが数匹たむろしていた。

「やだっ、あれゲネポスじゃない。」

「ゲネポス？」

「麻痺毒を持った攻撃的な小型モンスターよ。幸い親玉のドスゲネポスはいないみたいだけど今の状況じゃ面倒ね。」

「行き掛けにあんなのいましたっけ？」

当然いない、いればすぐに気付くだろう。だが驚く雪風と対照的に山城は冷静だった。

何故なら運搬クエストにおいて行き掛けは安全だったエリアでも、運搬アイテムを持って帰ろうとすると突然現れた危険なモンスターに妨害されるというのはあるあるだからだ。

運搬の邪魔をするためだけに湧いて出てきたとしか思えないこれらのモンスター、まるで楽に運搬させてなるものかという『大いなる意志』の介入を疑う現象である。

ベテランの山城にとってこのような運搬の妨害は慣れたものであり、驚くに値しない。

「ゲネポスは目がいいわ、見付からずに進むのは不可能よ。奴らの攻撃をかわしながら進むしかないわね。」

「えっ、戦わないんですか？」

「普段だったら戦うわよ、でも卵を運んでいるのに戦えるわけがないでしょ。」

「あつ、そっか！」

とぼけたことを言う雪風に呆れながらも山城は意を決してゲネポス地帯に足を踏み入れる。

「全方位に気を配るのよ！どこから攻撃が飛んできてもおかしくないわ！」

「はいっ！」

「クギヤラツ！クギヤラツ！」

「ギヤツ！ギヤツ！」

「バオウ！バオウ！」

山城と雪風を発見したゲネポス達は一齐に走り出し、跳躍力を生かした飛び蹴りや麻痺牙による噛み付きで二人を歓迎する。

「雪風はやられません！」

小柄な体を活かして雪風はゲネポスの牙を回避する。

雪風を狙うゲネポスは一頭だけだったので、攻撃を空ぶったゲネポスが体勢を立て直す前にさっさと走り抜けることでエリアを突破する。

「私もこんなところからはさっさとおさらばさせてもらおうよ！」

山城は一頭目のゲネポスの蹴りを走って回避し、その先に待ち受ける二頭目の尻尾攻撃を身体を逸らすことで避け、三頭目の噛み付き攻撃をガードの体勢も整っていない盾で無理矢理受け止める。

並の狩娘なら回避の難しいゲネポスのジェットストリームアタック。

だが山城はG級の筆頭狩娘、そのくらいで捕まるようなヘマはしない。

「……っっていうか何か私だけ露骨に狙われてない!？」

雪風の妨害をするゲネポスは一頭だけなのに対し、残りのゲネポスは全て山城の方へと向かってきており状況は四面楚歌。

「舐めんじゃないわよ！武器が使えないからってベテラン狩娘を甘く見るな！」

「グギャツ!？」

山城は一番近くにいたゲネポスの頭に回し蹴りをお見舞いし、怯んで動きが止まったところで今度は渾身の横蹴りを繰り出して吹き飛ばす。

蹴られたゲネポスはまるでボウリングのように後続のゲネポスを複数巻き込みながら転倒、それに動揺したことで他の個体の動きも一時的に止まる。

「山城さん凄いです！」

「喜ぶのは後にして！いいから早く逃げるわよ！」

これだけ激しい攻防を繰り返しながら肝心の卵には罅一つ入っていない、山城の絶妙な力加減とバランス感覚がなせる業である。

ゲネポスの動きが止まっている隙に山城は先に逃げていた雪風と合流し、岩場エリアから抜け出すことに成功するのであった。

岩場エリアを抜けた先は砂漠エリアになっており、そしてその砂漠を抜ければベースキャンプ。

ゴールはすぐ近くだからこそ失敗するわけにはいかない。

しかし砂漠には二人の行く手を阻む第二の刺客が待ち受けていた。

「山城さん見て下さい、砂の中を背ビレが泳いでますよ！すごい、あんなの始めて見ました！」

珍しいものを見たと言わんばかりに目を輝かせる雪風。

だが山城にとって砂漠を泳ぐ背ビレなど厄介者以外の何物でもない。

「ガレオスまでいるの!? パツと見で一頭しか見当たらないからそこは不幸中の幸いだけど……。」

「ガレアス?」

「ガレアスじゃなくてガレオスよ。それエルガド鎮守府で言ったら怒られるからね。」

エルガド鎮守府とはカリユード諸島のある地域にて、突如として出現した謎の大穴を調査するために造られた鎮守府であり、そこを指揮する人物こそガレアス提督である。

ガレアス提督はカムラ鎮守府のフゲン前提督とも親交のある歴戦の猛者であり、その経験と実力から多くの功績を上げている。

そんな偉大な人物の名前をモンスターと混同するなど失礼にも程がある。

エルガド鎮守府にはガレアス提督を尊敬する者も多く、万が一彼らの前で提督の名前を間違えてしまえば厄介なガレアスファンの手によって吊るし上げられてしまうだろう。

「ガレオスは砂の上を歩く獲物の足音を敏感に察知して襲ってくるわ。砂地に足を踏み入れた時点で交戦は避けられないものと思いたい。」

意を決して山城と雪風は岩場と砂漠の境目を超える。

その瞬間、縄張りを巡回するように一定のルートを泳いでいた背ビレは山城達の方へと向きを変えた。

「来たわ、背ビレで引つ掻けようとしている! あのヒレにはゲネポスと同じように麻痺毒を持っているから絶対に当たっちゃダメよ! なるべく小さい動きで避けて!」

高速で迫ってくる背ビレ、二人はそれを卵を抱えたままステップでかわす。

しかしガレオスの攻撃は止まらない。

背ビレによる攻撃は効果が薄いと判断したのか、今度は弧を描くようにゆっくりと泳ぎながら徐々に接近してきた。

そして残り数メートルまで近付いたところで背ビレは砂の中へと沈んでいく。

「足元から飛び出してくるつもりよ、スピード上げて！」

山城と雪風は全力で走り出す。

その直後に先程まで二人がいた場所の砂が爆ぜ、そこからシユモクザメのような姿をした生物が飛び出してきた。

「あれがガレオス、大きい……。」

ガレオスの全長は10メートルに僅かに届かない程であり、ちよつとした中型モンスター並の大きさを誇る。

しかしこのサイズでも能力的には小型モンスターであり、本来は群れを作ることと真価を發揮するモンスターでもある。

それを考えればたかが一頭のガレオス程度に怯んでなどいられない。

「急いで！もう少しでベースキャンプなんだから！」

砂の上に落ちたガレオスは再び地中に潜ると高速で二人の後を追ってきた。

「キュイイ！キュイイイ！」

「変な声で鳴きながら追ってきてます！」

「あの鳴き声は滑空攻撃の前兆、あの図体でグライダーみたいに飛んでくるわよ！」

滑空攻撃は動きこそ直線的だがスピードが速く、またガレオス自身の大きさも相まって卵を抱えたままでは避けにくい攻撃である。

1、2回程度ならともかくこれを何度も繰り返されれば運搬どころではなくなってしまうだろう。

「そうだわー！こつちに来なさいー！」

雪風を連れて山城はある場所を目指して走り出す。

その際にワザとらしく大きな足音を立てるのを彼女は忘れない。

足音によって聴覚を刺激されたガレオスは興奮状態に陥り、二人目掛けて飛び掛かる。

「キュオオオオ!!」

「今よ！避けなさい！」

ガレオスの滑空攻撃を察した山城は右に、雪風は左に向かって大きく避ける。

ガレオスは二人が左右に避けた間を勢いよく通り過ぎていった。

飛び出したガレオスはそのまま砂の上に落ちて再び地中に潜っていくと思われたが……。

「キュガッ!?!」

その前に砂漠から突き出た岩に激突し、力なく墜落する。

モンスターを岩にぶつけて自滅させるこの手法は突進を多用する一部の大型モンスターに対して有用な攻略法である。

本来ガレオス相手に使う手法ではないのだが、ガレオスの視力の悪さを知っている山城は同様の戦法が通用すると判断したのだ。

なお通常ならガレオスは苦戦する要素のない小型モンスターなのでこんな小細工を使う必要はない。

砂から引きずり出すのが面倒な人が高周波を使う程度である。

卵を抱えて戦闘が出来ないからこそ、このような回りくどい作戦を取ったのであった。

「さっ、今のうちにいくわよ。のんびりして目を覚まされても面倒だしね。」

ようやくベースキャンプに帰ってくることの出来た二人。

クエストを始めてまだ10分ちよつとしか経ってないのに、もう半日くらい経ったような気分である。

それくらい濃密な10分だった。

最後の最後で卵を落としては元も子もない、二人は慎重に納品ボックスの中に卵を入れる。

「ハアー……。ようやく終わったわね。」

「えっ？まだ終わってませんよ。卵の納品は五個だから、後三つ納品しなくちや駄目ですよ。」

「あっ!？」

すっかり終わった気になっていた山城だったが、雪風の一言で正気に戻る。

後輩の前で油断した姿を見られた山城は恥ずかしさを誤魔化すように一度コホンと息を吐くと、次の出発の準備をするのであった。

行きの描写は変わり映えしないので割愛する。

強いて言うのであれば今は卵を持っておらず身軽なので、ガレオスにもゲネポスにも全く絡まれることなく通り抜けることが出来た。

そして再びリノプロスの卵を二個回収するとその場を後にする。

今度は安全に帰ることが出来るよう祈りながら。

「あれっ？」

「どうしたの？」

「ほら、あそこのゲネポスの縄張りになつて居る岩場のエリア。そこに入るための通路が大きな黒い岩で塞がれてます。」

雪風が顎で指し示す方向、リノプロスの巣とゲネポスの岩場エリアをつなぐルート。

そこにはちよつとした家くらいありそうな大きな巨岩が鎮座していた。

「ついさっきここ通つたばかりですよ？その時はこんなものなかつたと思うんですが……。」

雪風の言う通り、ベースキャンプからリノプロスの巣へ向かう際にはここには何もなく、普通に歩いて通過した。

それから卵を拾つてここまで戻るまでの短時間でこんな巨大な岩が出現するなんてことは常識的に考えてありえない。

しかし常識なんてものはここカリユード諸島では意味をなさない。そんなことについて考えるよりさっさと目の前のクエストを終わらせて帰つた方がいいということを山城は知っているのだ。

「隙間も無いし、ツルツルしてるから登つていくのも難しそうですね。」

「こういう岩は硬過ぎるから強力な爆弾とかを使つても砕くのは無理よ。素直に回り道した方が早いわ。それにクエストをクリアすればこの岩も消えるから、今後の通行のことを考えるもの無駄でしょうね。」

「クエストが終わるとこの大岩が消える？そんなことあるんですか？」

「そういうものなのよ。運搬クエストはそういうものだど割り切りなさい。」

運搬クエストの時だけ出現し、クエストが終われば消え去る岩。

まるで言っている意味が分からないが、実際にそうとしか言いよう

のない現象なので説明のしようがないのだ。

道が通れない以上ここにおいても仕方がないので、山城と雪風は来た道に戻り別のルートを探す。

二人が選んだのは荒野のエリアを通るルート。

岩場を通るよりは迂回する形となるが、足元は安定しており歩きやすい。

だがそんな環境が安定したエリアにモンスターがいないはずもなく……。

「クルルルツ！クルルルツ！」

「わあ、ダチヨウみたいだなモンスターがこっちにやって来ました！ゲネポスよりもおっきい！」

「げえ!?クルルヤック!?!」

二人の姿を視認するや否やトコトコと走り寄ってきたのは発達した前脚と鮮やかなトサカが特徴的な中型モンスター、クルルヤック。

クルルヤックは二人を観察するように周囲を歩き回る。

敵意は感じられないが、ずっと見られて鬱陶しい。

「ククツ、クルルツ！」

「何だか物凄く見られてるんですけど……。」

「相手にしちや駄目よ。クルルヤックは基本的にこちらから手を出さなければ大人しいモンスター。目を合わせずに立ち去るの。」

まるで野生の猿と遭遇したときの対処法である。

二人はクルルヤックをいないものとして扱うように、素知らぬ顔で立ち去ろうとする。

「クククツ、クククツ。」

しかしクルルヤックは二人の後ろを着いてくる。

攻撃してくる様子は見られないが、離れるつもりはないようだ。

「な、何で着いてくるんですか?」

「私達が持つてる卵が欲しいのよ。」

「卵?」

「クルルヤックの大好物は卵なのよ。私達が隙を見せたら卵を盗られるかもしれないから決して目を合わせず、だけど油断はしないように

しなさい。卵を渡して帰ってもらうっていうのもナシよ。一度でもそれをやったら卵が貰えると思って永遠に付きまとってくるようになるわ。」

完全に猿扱いのクルルヤックだが、危険度は猿とは大違いである。二人は緊張したまま荒野を抜けるのであった。

「やっと砂漠まで戻って来れましたあ。」

「呆れた、コイツまだ諦めてないのね。」

「クルルルッ！」

荒野経由で砂漠エリアまで戻ってきた二人。

おまけで卵目当てのクルルヤックまで着いてきてしまった。

砂の中では相変わらずガレオスが一頭泳ぎ回っているが、これがさっきのと同じ個体であれば振り切るのは少々難しいだろう。

モンスターとて馬鹿ではなく学習能力がある。

先程の追い掛けっこで岩の位置を覚えられた以上、岩にぶつけるという作戦の成功率は格段に下がると見て間違いない。

「あれ？ガレオスが向かってきませんね。」

しかし砂漠に入ってみれば拍子抜け。

ガレオスは遠巻きに様子を窺うだけであり、襲ってくる様子はない。

「ひよつとしなくてもコイツの仕業ね。」

「クア？」

クルルヤックは性格が大人しく体格も小さいとはいえ腐つても中型モンスター。

一方のガレオスは体格だけならクルルヤックを上回るものの、分類上は小型モンスター。

フィジカルの差は埋めがたく、クルルヤックを恐れてガレオスは近

付こうとしないのだ。

「ちよつと納得いかないけどこれはチャンスね。このままベースキャンプに直行するわよ！」

こうして山城と雪風は楽々キャンプに帰還することが出来た。

最後まで着いてこようとしていたクルルヤックだったが、ベースキャンプに続く狭い通路を見て通れないと判断したのか追跡を諦めて引き返していく。

「これで四個納品、残りは一個ね。」

「一個ということは卵を持つのは一人で大丈夫ですよね。」

「そうね。卵は雪風が持ちなさい、私が護衛してあげるわ。両手が塞がってるならともかく、フリーの私とその辺のモンスターに後れを取るわけないでしょ。」

作戦も決まり、二人はベースキャンプを後にする。

さつきまでずっといたクルルヤックはいなくなっており、行き掛けの駄賃に倒しておこうと思っていたガレオスまで見当たらない。

そのままクルルヤックと遭遇した荒野まで進んでいくが、やはりモンスターの姿は見られない。

モンスターが全くいない平和な道中、しかしその平穏に逆に胸騒ぎを覚えた二人は急ぎ足でリノプロスの巢へと向かった。

「なっ!?なああああ!?なあにしてるのよ!!」

「ブアア!!」

「ブルルツ!!」

そこで二人が目にしたのはリノプロスの巢を荒らすクルルヤックの姿だった。

クルルヤックは威嚇を繰り返すリノプロスを意に介さず、巢から卵を拾い上げるとクチバシで割って中身をすすする。

「クエツ！クエツ！」

クルルヤツクはある程度卵の中身を食べると投げ捨てて、次の卵を拾い上げるといった行動を繰り返している。

「どうやら卵の美味しいところだけを食べたいようで、何とも贅沢というか罰当たりな食べ方である。」

「うわあ、巢の周りが割れた卵でベチヨベチヨです！」

クルルヤツクの蛮行により巢の中の卵はどんどん減っていく。

このままほっといては卵が食べ尽くされてしまい、物理的に納品が不可能になってしまうだろう。

「やめろー、卵をよこせー!!」

某皇帝陛下のようなセリフを吐きながらクルルヤツクに飛び掛かった山城は、食事中で油断しきっているクルルヤツクの頭を盾で思い切り殴り付けた。

突然の衝撃でクルルヤツクが怯んだ隙を見逃さず、クルルヤツクの身体を掬い上げるようにランスで豪快に薙ぎ払う。

「グエエ!?!」

クルルヤツクの身体はいとも容易く宙を舞う。

モンスターの中では小柄な種とはいえ、自分より大きく重量もあるクルルヤツクを山城は軽々と投げ飛ばしてしまったのだ。

地面に叩き付けられたクルルヤツクは目を白黒させながら尻尾を巻いて逃げ去った。

元々臆病な性格の上に、自分より小さな生物にアツサリと吹き飛ばされたことで完全に戦意を喪失したらしい。

「フーン！もう来るんじゃないわよ。」

クルルヤツクがいなくなったことで山城と雪風は改めてリノプロスの巢を漁ろうとしたのだが……。

「卵が一個しかありません！」

巢の中に残された卵はたったの一個。

初めてここを訪れたときは十個くらいあったというのにクルルヤツクもとんでもないことをしてくれたものである。

「これ持ってっちゃっていいんでしょうか?」

「どういふこと？」

「だってこれ持ってっちゃったら卵が全部無くなっちゃいますよ、そんなの可哀想です！」

雪風はリノプロスの卵を全て持って行ってしまうことに抵抗があるらしい。

だが山城からしてみれば杞憂である。

「大丈夫よ。リノプロスの巣はよく襲撃されるものなの。さっきのクルルヤツクだって私が追い払わなきゃ卵を全部食べてたでしょ？そしてリノプロスは巣の卵が足りなくなつたと判断すれば再び産卵する習性を持つてるわ。これによって厳しい自然界の中でも数を減らすことなく生き抜いていくことが出来るのよ。だから卵を持つていくことにそこまで罪悪感を感じなくてもいいわ。もちろん無茶な乱獲や密猟はダメだけどね。」

山城は周囲のリノプロスの動向に注意を払いながら雪風に卵を拾わせる。

全ての卵を盗られたリノプロスの気持ちを考えることは結構だが、山城としては他にもっと気にすべきことがあるのだ。

「そんなことよりこれが最後の卵だから絶対に失敗出来ないわよ。いくらリノプロスが何回も卵を産むといっても、流石に一日で何個もポンポンと産んだりはないわ。これをしくじつたらまた数日後にここに来るか、別の縄張りで卵を探すしかないからね。リノプロスのためを考えるのなら、もう二度と来なくていいように必ず成功させなさい。」

「はいっ！」

クルルヤツクの襲撃のより殺気立っているリノプロスをかわしつつ山城と雪風は縄張りを後にする。

リノプロスを倒して安全に帰ることも出来るのだが、卵を盗んでいくのにその親まで手に掛けるのは流石に良心が咎めるのでやめた。

岩場エリア前の黒い岩はそのままであり、二人は荒野エリアへと進んでいく。

この荒野はクルルヤツクがいたエリアだが、さつきまでクルルヤツクが居座っていたせいか本来ここにいるはずの小型モンスターがいなくなっている。

そのクルルヤツクもどこかへ逃亡してしまったため、このエリアは危険なモンスターのいない安全なエリアとなっていた。

お陰で二人は何一つ邪魔が入ることなく荒野エリアを通過するとに成功したのだった。

大した苦労もなくあっという間に砂漠エリアまで辿り着いた山城達、一度目の大苦戦が嘘のような順調っぷりである。

しかしこれは悪名高き運搬クエストである、このまま何事もなく終わるはずもなかった。

「わっ！ガレアス……じゃなくてガレオスがたくさんいます！いっぱい泳いでます！」

目の前に広がる砂の海、その中を泳ぐ背ビレ、背ビレ、背ビレ……。行き掛けにガレオスがなくなっていたのは仲間を呼びに移動していたからだだったのだ。

「ど、どうします？これ絶対に襲われますよ……。」

「安心なさい、私はG級狩娘よ。ガレオス程度、何匹集まろうがあなに指一本触れさせやしないわ！」

「分かりました、山城さんを信じます！」

二人が砂地に足を踏み入れるや否や取り囲むように集まってくるガレオス達、それを山城は次々にいなしていく。

時には盾で防ぎ、時には槍で叩き伏せる。

ちぎっては投げの大立ち回りで敵の戦意を削いでいき、わざと大袈裟に槍を振るうことによって相手を威嚇、宣告通りガレオスを寄せ付けけない。

「流石は山城さんです！これならすぐにでも突破出来るかも！」

「あつ、おバカ！そういうのをフラグって……。」

BGM：一本角の盾大名／ダイミョウザザミ

雪風が不用意な発言をした瞬間、山城の足元から一際巨大なガレオスが飛び出してきた。

巨大なガレオスは山城を軽々と空高く吹き飛ばす。

「きやあつ!?!」

「山城さん!?!」

「これはっ、ドスガレオス!?!」

普通のガレオスが10メートルになるかならないか程度の大きさなのに対して、この個体は軽く見積もって18メートルはあろうかという巨体だった。

そう、このモンスターはガレオスではない。

ガレオスの群れを率いるドスガレオスと呼ばれる特殊な個体であり、見た目こそほとんど変わらないがパワー、体力、知能、凶暴性、全てにおいてガレオスを大きく上回る大型モンスターなのである。

「そうか、ただ群れを呼んだんじゃない！確実に仕留める為にリーダーのドスガレオスを!?!」

「山城さん、大丈夫ですか!?!」

「こつちに来ないで！雪風、貴方の任務は卵を納品する事！ここは私が食い止めるからさっさと行きなさい！」

吹き飛ばされながらも即座に受け身を取り立ち上がった山城はこつちに来ようとした雪風を制すると、ランスで地面をバシバシ叩く

ことで自分にヘイトを向けさせる。

全てはクエストを成功させるため、そしてまだ下位狩娘で経験の浅い雪風を守るためである。

「わ、分かりました！どうかご無事で！」

「誰に向かって物言ってるの。ドスガレオス程度に苦戦してたらG級狩娘なんかやってないわ！さあ掛かって来なさい！」

「シャアアアアア!!」

飛び掛かるドスガレオスの巨体、それすら盾でいなして受け流す。

流星のG級狩娘でもドスガレオスの全体重を真正面から受け止めるのはそう簡単なことではないが、無駄な力を逃がしてやれば本来なら受けられない攻撃でもやり過ぎることが可能となる。

「その程度じゃ私の守りは破れないわよ！何度でも来なさい、全部受け切ってやるわ！」

地面を叩くだけでなく、わざと大声を出すことでドスガレオスの聴覚を刺激していく。

雪風が完全に走り去るまでガレオス達の注意を逸らし続ける必要があるのだ。

「シャアアアア!!」

「キュオオオオ!!」

「カアアアア!!」

「そう、それでいいのよ！」

山城の挑発が功を為したのかガレオス達は完全に山城に狙いを定めた。

地中という死角からの攻撃だが、歴戦の勘というヤツで見えない攻撃も捌き切る。

山城レベルにもなれば敵の攻撃を見てから防ぐのではなく、あらかじめ攻撃が来そうな場所を守っておいたり、わざと隙を晒すことで攻撃してほしい場所に攻撃を誘導することすら可能となるのだ。

小足見てから昇竜余裕なプロゲーマーもビックリのニュータイプ狩娘である。

「そっつー！」

威力は低いが矢継ぎ早に繰り出されるガレオス達の連続攻撃、そこに混ざって放たれるドスガレオスの放つ重い一撃。

威力の異なるそれらの攻撃を的確に防ぎつつ、隙を見つけては反撃を加えていく。

いくらG級狩娘の実力でもドスガレオスを一撃で仕留めるのは流石に無理だが、通常のガレオス程度を戦闘不能に追い込むくらいなら山城にとってはそう難しいことではない。

そしてガレオスの数が減れば必然的に攻撃を受ける頻度も減る。

攻撃を受ける頻度が減るということは防御の回数を減らすことと同義であり、防御の回数が減ったのであれば反撃の機会は更に増える。

いつの間にか取り巻きは全て倒され、残るはリーダーのドスガレオスだけとなっていた。

こうなればもう詰みである、ドスガレオス自身は強力なモンスターではなく動きも単純で読みやすい。

今まで山城相手に有利に戦えていたのは雪風という足枷と配下のガレオスがいたからであり、それらを失った以上ドスガレオスに勝ち目は方に一つもなかった。

「ギユオオオオオオオオ!!!」

砂中から飛び出して噛み付こうとするドスガレオス。

山城は敢えてドスガレオスにランスを噛み付かせて動きを止めると、ドスガレオスが口を離すよりも早くランスごとドスガレオスの頭を地面に叩き付けた。

「はああああっ!!」

地響きと共に地面に叩き付けられるドスガレオス。

山城の振り下ろすランスの威力は並の狩娘が放つハンマーの溜め3スタンプにも匹敵する。

ドスガレオスもまさかこのような方法で攻撃されるとは思っても見なかったのだろう。

咄嗟に身を守ること出来ず、下顎を強打したことで無防備に倒れ伏す。

山城は噛まれたままのランスを手放して身軽になると目の前にあるドスガレオスの頭部を足場にして跳躍、落下の勢いを利用して盾で思い切り首を殴り付けた。

「グギユ!?」

山城の渾身の一撃によりドスガレオスは完全に意識を失い、半開きの口からだらしなく舌を出したままピクリとも動かなくなる。

ドスガレオスの首は他の部位よりも皮膚が薄く弱点となっており、それを知っていた山城は大ダメージを与えるべくチャンスを探っていたのだ。

一撃で仕留めるのは無理だが、二撃あれば仕留められる。

これがG級狩娘をも超えた筆頭狩娘の実力である。

「ふう、勝負あったわね。」

山城はランスを回収すると、ドスガレオスにトドメを刺すことなくその場を後にする。

よく見れば周囲のガレオス達も倒れているだけで命に別状はないようだった。

「安心なさい。私達の目的は卵を持って帰ることであんた達の殲滅じゃない、命まで奪う気はないわ。」

狩娘の本分は生態系の維持と調査であり、基本的に依頼や非常時以外での殺生は厳禁である。

今回のケースであれば卵の納品を成功させるための狩猟は許可されているので、運搬の邪魔をするドスガレオスを殺してしまっても何の問題はない。

だが筆頭狩娘である山城の実力を持ってすれば、自分の命を狙うモンスターすら殺さずに無力化することが可能なだった。

「山城さあくん！無事だったんですねえ！」

ベースキャンプでは納品を終わらせた雪風が山城のことを待っていた。

「何言ってるの、私は筆頭狩娘よ。ドスガレオス程度に負けはしないわ。それより雪風だって私と同じ筆頭狩娘の一人なんだから、いずれ同じことが出来るようにならなきゃダメよ。」

「ええっ!?雪風もあれと戦うんですかあ？」

「いや別にそういう意味で言ったわけじゃないんだけど……。ドスガレオスより強いモンスターや深海棲艦なんて世の中にゴロゴロいるんだから、あの程度の相手に勝てないようじゃこの先やっていけないってことよ。」

「はあいー！」

分かっているのか分かってないのか、ニコニコと満面の笑みで返事をする雪風。

さて、後は帰るだけ……。なのだが、今回彼女達はドンドルマ鎮守府から徒歩でここまで来たことを覚えているだろうか？

つまり連装砲タクシーやモーターボートのような帰りの足なんて

用意されていないので、クエストを終わらせたら再び徒歩で鎮守府まで帰らなければならぬ。

帰るまでが遠足とはよく言ったものだ。

ブラッくな任務のように思われるが、これは極秘ミッション(笑)であるため情報漏洩を考慮して連タクの手配がないという事情もあるのだ。

そして筆頭狩娘は特殊な任務を受けることが多いので、悲しいことにこういう足のないクエストには慣れっこなのであった。

「それじゃ、帰ろうかしら……はあ……。」

「山城さんどうしたんですか？」

帰ろうとしたところで大きな溜め息を吐く山城。

ガレオス軍団を一人で制圧する高い実力の持ち主であっても決して疲れないわけではない。

くだらない内容に反比例して機密性の高い極秘任務、半ば脅される形で変な組織への不本意な加入、ただ相手を倒せばいいだけの普通のクエストと違って慣れない運搬クエスト、何故か雪風よりも自分を集中的に狙ってくるモンスターへの対処、卵が残り一つになってしまったことにより脳裏にチラつくクエスト失敗の文字……。

様々な心労が重く押し掛かり、山城の気力を奪っていたのだ。

まだ新人ということでも事の重大さが分かっておらずのほほんとしていられる雪風は呑気なものである。

クエスト中は気張っていたものの、クエストが終わったことで気が抜けてしまい今までの疲れがドツと押し寄せてきたのである。

「うーん、山城さんの元気が無さそうで心配です……そうだった！」

何かを閃いた雪風は無線を取り出すとどこかへ連絡を取り始めた。「はいっ！雪風です！……雪風は大丈夫です、でも山城さんが疲れて元気が無いんです！……バルバレ？……そうなんですか？……分かりましたっ！雪風は一人でも帰れますから！……はいっ！それじゃあ雪風帰投します！」

無線の電源を切ると雪風はニッコニコの笑顔で山城の方へ顔を向ける。

「山城さん良かったですね！」

「良かったって何が？」

「今、不知火お姉さんに連絡したらクエスト報告はこっちの方で上げておくから山城さんはこのままバルバレ鎮守府に行って休んでしまつていいそうです！」

「はあっ!？」

「バルバレ鎮守府はここから近いから今日はそこで羽を伸ばして明日帰ってくれば構わないらしいですよ！」

「いやいや、何でそうなるのよ!？」

取り乱す山城。

脳内でバルバレ鎮守府に寄り道したいと思つてなかったと言われれば嘘になるが、だとしても帰還もせずそのままお泊りを勧められるとは思つてもみなかった。

「山城さんはバルバレ鎮守府のしれえのことが好きなんですか？」

「にやつ!?!い、いきなり何を言い出すのよ!？」

「不知火お姉さんが言つてました！」

「不知火、いつか泣かす……絶対泣かす……。」

雪風から投げ込まれる火の玉ストレート。

顔面に剛速球の直撃を受けた山城は、デッドボールを用意した不知火に必ず報復することを誓つた。

「それで好きなんですか？」

「そ、それは……いや別に私はアイツのことなんて……。」

「それじゃあ嫌いなんですか？」

「いやそうじゃなくて……誰も嫌いだなんて……ゴニヨゴニヨ。」

「じゃあ好きなんですね！」

無邪気さ故に山城を追い込んでいく雪風。

意地悪でからかつているのではなく、素でこの反応なのだから始末に負えない。

「いつかバルバレのしれえとケツコン出来るといいですねー!ケツコン式挙げるときは絶対に雪風も呼んで下さい、いっぱいいっぱい祝いますからー!」

イサナちゃんと天を廻りて戻り来よ！

「うう、アポ無しだけど大丈夫かしら？」

前回雪風に追い詰められたことで山城は逃げ込むような形でバレ鎮守府までやって来た。

そして鎮守府の玄関ドアに手を掛けたままウンウンと唸っているのであった。

「もしも連絡も無しに急に押しかけてくる重い女とか思われたら死にたくなるわね……。」

どうやら中に入って提督に会うことに踏ん切りが付かないようである。

モンスター相手にはあれだけの戦闘力を誇るG級筆頭狩娘も、気になる相手の前では単なる乙女なのであった。

「ええい、女は度胸！筆頭狩娘がこんなことで怯んでどうするのよ！ここはむしろ押せ押せで香取や金剛と差を付けなきやダメなのよ！」
そもそもその所属が違うのでバルバレ提督と頻繁に顔を合わせるこ
とが出来ない山城は、恋のバトルにおいて香取や金剛より大きく後れ
を取っている自覚がある。

香取は秘書艦なので提督と一番距離が近いし、金剛は妹達を巻き込
んで提督包囲網を作り上げようとしているらしい。

ならばこちらは量より質！

頻繁に会えないのであれば、忘れられないくらい濃厚な一日を過ご
してみせる。

それが山城の考える逆転の一手であった。

「よし、頼もーうー！」

道場破りのように勢いよく玄関を開け放つ。

「……あら？提督く、団長く……おかしいわね。じゃあ香取く、金剛
く、睦月く……誰かく、誰かいないのく？」

しかし鎮守府内は想像していたよりずっと静かで、人の気配が感じられない。

普段であればこの時点で山城の声を聞き付けた誰かが迎えにここまで来てくれるのだが、今回は誰も出て来ないのだ。

「なんか静かねえ。鎮守府の中には誰もいないし、ドンドルマとはえらい違いよ。(詠唱開始)」

流石に誰もいないなんてことはなく何人かの連装砲ちゃんや妖精さんはいたものの、狩娘とは誰も出会うことなく気まずい気分のまま執務室までたどり着く。

「提督いるー……って団長!?!」
「う……う……。」

執務室で山城が目にしたもの、それは提督用のテーブルに力無く突っ伏す団長の姿だった。

息はあるようだが山城の声にすら反応せず、起き上がるどころかピクリとも動かない。

何より団長がいつも大切にしており肌身離さず持っているトレードマークの帽子が床に転がり落ちてしまっている。

これは誰がどう見ても明らかな異常事態だ。

「団長っ、団長しっかりして!」

山城は慌てて団長に駆け寄る。

団長は山城がまだ艦娘として本土で活動していた頃に所属していた鎮守府の提督であり、狩娘となった今でも付き合いのある恩人なのだ。

バルバレ鎮守府においても今の提督が着任するまで提督として活動していた時期があり、今でこそ指揮権の混乱を避ける為に一歩引いた位置にいるが、それでもその影響力は非常に高い。

そんな重要人物が倒れていたとなれば慌てふためくのも無理はないだろう。

「団長……って何これ酒臭っ!？」

「リモセトス!？」

介抱のために団長を抱き起した山城だったが、団長の全身から立ち昇る酒臭さに驚き思わず手を放してしまう。

手を放されたことにより団長の頭は重力に引かれてテーブルに激突、呻き声を上げて再び倒れ伏した。

「よく見たらテーブルの下に空っぽの酒瓶が!? 仕事中に飲んでいたってコト!? 団長、あなたって人は!」

団長はお酒が大好きなのだが同時に悪酔いもしやすく、まだ山城が部下として一緒にいた頃に酔った拍子に大事な書類を紛失したこともあったのだ。

その書類の尻拭いをしたのが他ならぬ山城であり、いくら尊敬する相手とはいえ我慢出来ないこともある。

仕事中に酒を飲むなど言語道断、元部下としてガツンと叱ってやらねばなるまい。

「団長…何やってんのよ、団長!？」

青筋を立てながら団長の襟首を掴んで乱暴に起き上がらせる山城。

だが明らかに団長の様子がおかしい。

最初は酔って寝ているのかと思ったが、目は白目を剥いており口からは泡を吹いている。

「ボガバドルム……。」

「なんて声、出してんのよ……団長。」

常人の口から出るような声ではなく、毒でも盛られた動物が死ぬ寸前に出すような変な呻き声。

よく見れば団長の額は赤く腫れてコブになっており、完全に気を失っているようだった。

「あれ、ひよっとしてこれって私がさっき手を放したせい?」

飲酒によつてただでさえ酩酊していた団長は山城の不手際でテーブルに頭をぶつられけたことによつて完全に意識を失ってしまった

のであった。

「わ、私のせいじゃないわよ……。お酒を飲んだ团长が悪いんだから……。私知ーらない、私悪くないもんねー。ヒューヒュー！（吹けてない口笛）」

本来であればこれこそ介抱すべき事態なのだが、色々と事態が積み重なったことで脳の処理能力が追い付かなくなった山城は何も見なかったことにすると執務室を後にして廊下を進み続けるのであった。

止まるんじやねえぞ。（字余り）

執務室からなるべく距離を取るようコソコソと歩く山城。

その様子は周りの目を気にして犯行現場から遠ざかろうとする挙動不審な指名手配犯そのものである。

ようやく会えた团长を気絶させてしまった以上、親しい相手……。いやそこまで贅沢は言わないのでせめて顔見知りの相手と出会いたいと考えて鎮守府内をさまよい歩く。

「それぞれの自室にも誰もいなかったわね。このタイミングでみんな出撃中ってワケ？そんなことある？だとしたら何て間が悪いのかしら、やっぱり不幸だわ……。」

やがてうろつく内に工廠へと辿り着く。

工廠の担当であれば流石に出撃することなく中にいるのではないかと期待して入ってみれば、そこには気落ちして作業台に突っ伏す一人の少女の背中が見えた。

「はあく、やっぱりダメだなあく。」

「イサナちゃん、何してるの？」

「んっ？……あつ、山城おねえさん！」

山城に声を掛けられて笑顔で飛び起きた少女の名前はイサナ。

バルバレ鎮守府の工廠で竜人妖精さんに弟子入りして鍛冶屋見習

いをしている狩娘である。

「山城おねえちゃんまた来てくれたんだね〜！今日はどんな用事なの〜？」

「わ、私のことはいいじゃない……。 (ここの提督に会いたくて来たなんて口が裂けても言えるわけないでしょ!?)」

ようやく出会えた心許せる相手、だがその質問にバカ正直に答えるわけにはいかない。

山城はバルバレ提督に恋していることを秘密にしている。

筆頭狩娘として立場のある自分が恋にうつつを抜かしているなんてことを、周囲にバラしてはいけなないと考えているのだ。

別に恋をしていることぐらい恥じることはないのだが、今まで恋愛というものに全く縁のなかった山城はこういうものは隠すべきと思っており誰にも話していない。

実際のところは彼女の知人のほとんどにはバレており、知らないのはそれこそ雪風やイサナのような精神年齢が幼い狩娘くらいである。

「さつきから鎮守府の色々な所を周ってるんだけど全然人がいなくてね、神隠しにでも遭ったのかと思って心配してたのよ。」

「あー、そういうこと！心配しなくても誰も神隠しになんか遭ってないよー！それに私の他に団長さんがいるから誰もいないなんてことはないよ。執務室には行かなかった？行ったら団長さんがいるはずだよー！」

「だ、団長は疲れて寝ちゃったのよ！私も最初に誰かいないかと思つて執務室に行ったんだけど、団長は座ったままグーグー寝ててね。執務中に寝ちやうのは良くないと思つたけど団長も日頃の激務で疲れが溜まつているんだろうと思つてそつとしてきたのよ、そつとね！本当よ!!」

「そうなんだ〜。団長にも苦労を掛けてるし、私達ももつと心配掛けないようにしつかりしないとねーっ！」

ウソをつきました。

ホントは自分が気絶させたのにね。

「それで何で誰もいないの？」

「えっとね、まず昨日の海でねえ……。」

バルバレから程なく離れた洋上の狩場。

そこでは二人の狩娘と一隻の深海棲艦が死闘を繰り広げていた。

「クツ……シツコイワネ……！」

「榛名、そっちへ行つたわ！」

「任せて霧島！……ここは榛名が通しません！」

金剛の装備しているものとよく似た防具を身にまとい、武器も金剛と同じくガンランスを装備している二人の狩娘は金剛の妹である榛名と霧島。

二人は現在、大型深海棲艦である戦艦棲姫と戦闘の真っ最中である。

「ダツタラ……コレナラドウカシラ……!」

「あつ、やだ!? きやあつ!!」

「榛名!!」

戦艦棲姫に攻撃を仕掛けようとした榛名だったが、逆に戦艦棲姫の背部ユニットの大きな腕に捕まってしまった。

「ケイセイギャクテンネ……。」

榛名の両腕を掴んで自由を奪うと、人質として盾にするように霧島の方へと向ける。

「よし、榛名をさけて……。」

霧島は状況を打破するためにガンランスの必殺技である竜撃砲を起動させたが……。

「アネガシンデモイイトイウノツ!」

「死なないでしょ……多分。」

一度火の入ったガンランスは止められない。

頭脳派を自称しているが実際は割と脳筋な霧島は希望的観測に任せて竜撃砲をぶつ放した。

その結果……。

「榛名は大丈夫しゃありません!!」
「榛名——っ!」

竜撃砲は当然のように榛名に直撃、上手に焼けた榛名はボロ雑巾のようになって吹き飛ばされたのであった。

も昇天ペガサスMIX盛りにカットしてくれるんだって、凄いね！」
ハゲをどうやってカットするとか？

しかもどうやらそのペガサス盛りとやらはカツラではなく地毛らしい。

だとするとその美容師は自由に髪を生やす能力があるということになるのだが……。

そんな能力があれば自分の頭の眩しさに心を痛めている人々は歓喜し、逆にカツラや植毛の職人は廃業に追いやられてしまうだろう。

「で、提督がメゼポルタ鎮守府に行くって聞いた霧島おねえちゃんも自分も行きたいって頼み込んだんだ！」

執務室で外出の準備をしているバルバレ提督とアフロの榛名。

そんな二人の下に霧島がやって来た。

「あら、霧島。」

「やあ霧島、僕達はもうすぐ鎮守府を出るんだけどその前に何か用事かい?」

「指令、榛名を連れてメゼポルタ鎮守府に向かうとお伺いしましたが……。」

「耳が早いんだね。メゼポルタには凄腕の美容師連装砲ちゃんがいるさ、そこに榛名を連れて行って髪を元に戻してあげるんだ。髪が元に戻れば榛名も元氣を取り戻すんじゃないかと思ってね。」

「もしよろしければこの私、霧島も同行させてもらってもよろしいですか?」

「ん? いいけどどうしてかな?」

「メゼポルタ鎮守府ではパンチやキックで敵と戦うことが可能になる独自のスキルがあると聞きました。それがあれば今までとは全く違った戦い方が出来るはずです!あの時もそのスキルがあれば榛名を傷付けることなく深海棲艦にダメージを与えることが出来た!私はそのスキルを習得したいのです!榛名の髪をそのようにしたのは私の不徳が致すところ。未熟な自分に別れを告げて姉妹を、そして鎮守府を守るためにも私は新たな技術を身に着ける必要があるのです!どうかお願いします!」

「霧島……。それって結局榛名が竜撃砲を撃たれる代わりに殴られるだけの結果で終わりそうな気がするんだけど……ううん???」

メラメラと燃える霧島の闘志。

それに対して榛名は疑問を覚えたものの、霧島の熱意の前に押し負ける。

何だかんだで頑張ろうとする姉妹には弱いのだ。

榛名を巻き込んだことを反省して新しい戦い方を模索するのはいかにも頭脳派らしいが、そこで出てきた答えがステゴロなのは脳筋ここに極まれりといった感じである。

「うお〜っ!二度とあの事は繰り返させません!」

「う、うん……。すごいやる気だね。確かに霧島の言うスキルはある

よ、その名も体術っていうスキルだね。僕らに身近な体術スキルは回避やガードの際にスタミナの消費を抑えるものだけど、メゼポルタで使われている体術スキルは格闘攻撃の威力を底上げするというもので、名前が同じなだけで全然違うスキルなんだ。それを身に着ける為にメゼポルタ鎮守府に行きたいんだね?」

「はい、その通りです!」

「分かった、じゃあ事前に話を通しておこう。これでも僕はメゼポルタの提督と仲が良いからね、霧島の願いも無下にはされないはずさ。」

「ありがとうございます!」

霧島がペコリと頭を下げた次の瞬間、バアンと激しい音を立てて執務室の扉が開かれる。

「話は聞かせてもらいまシター!」

「ひえ〜っ!」

扉をぶち破る勢いで入室してきたのは金剛、そしてその金剛に無理矢理引きずられる形で比叡も執務室にやって来た。

「Hey、提督うー! 榛名と霧島を連れていくなら私と比叡も連れて行くデース!」

「えっ!? いやまあ君達を連れて行くのはいいけど何で!」

「そんなの簡単デース! 榛名は髪がアフロになったことで心が傷付いている、霧島は新しいスキルを覚えるのに必死で心に余裕がない。心が不安定では何をやっても上手くいかないものデース! だからこそ姉妹で尚且つ心に余裕がある私達が同行するのデース! 私と比叡が榛名と霧島の支えになりマース!」

「こ、金剛お姉さま!」

「えっ、そんなの初耳ですけど? お姉さまが榛名が提督と二人つきりを出掛けるなんてズルいつて言ってるここまでムグッ!」

金剛の気遣いに感動する榛名と霧島。

それに対して余計なことを喋ろうとした比叡は金剛の手によって口にスコーンを押し込まれたことで強制的に黙らされる。

「ホラ、比叡もこう言っていることだし私達を連れて行くデース!」

「モグモグ……。」

「うん、比叡が何言ってるのか分かんないけど確かに心のケアも大切なことだからね。よし分かった、それじゃあ金剛と比叡も一緒に行こうか。」

「Thank You! (フツフツフツ、上手くいったデース！榛名達を心配する気持ちがないといったらウソになるけど、私の本当の目的は私達4姉妹で提督を囲い込むことにあるのデース！最近香取のアプローチも露骨になってきたし、たまにしか来ないのに提督からの好感度が一番高い山城という強敵もいるからネー。鎮守府の外という誰の邪魔も入らない場所で提督を手に入れてみせマースー!」

内心でほくそ笑む金剛だったが、バアンと激しい音を立てて再び扉が開かれる。

「ここにいましたね、金剛さん!!」

「ゲエツ、香取!」

金剛を追って入室してきたのは秘書艦の香取。

普段は穏やかで優しい狩娘のだが、今の彼女は明らかに機嫌が悪そうである。

「貴方の目論見は全てお見通しですよ!」

「も、目論見って何のことデスカー? ピューピュー! (ちゃんと吹けている口笛)」

「誤魔化すつもりですか、まあいいでしょう。もう約束は取り付けてしまったようですし、ここで却下させるのもフェアではないでしょう。それに提督と榛名さんがメゼポルタ鎮守府に行くのは確定事項です、なので……。」

香取は眼鏡をギリリと光らせるとビシツと提督を指差す。

「提督、この香取も連れて行って下さい!」

「エエ~~~~ツ!」 「ヒエ~~~~ツ!」 「ええっ!」 「ほう……。」

「私は提督の秘書艦です! であれば秘書艦らしく提督の傍に仕えるのが務めです!」

「香取も一緒に行きたいのか? でも留守の間は団長に提督の仕事を頼むことにしてるから、香取には秘書艦として団長のフォローをして欲しかったんだけど……。」

「それなら問題ありません！団長に提督と同行したいと相談したところ、快く送り出してくれましたので！」

本人はそう言っているが、実際は珍しいお酒で団長を買収しただけである。

山城には流石に劣るものの、香取も団長との付き合いは長い。

なので団長が酒好きなことは把握しており、こんなこともあるかとあらかじめ珍しいお酒をストックしていたのであった。

「うーん、団長の許可があるならまあいいか。じゃあ香取も一緒にメゼポルタ鎮守府に行こうか。」

「ありがとうございます……フツ、思い通りにはさせないわ！」

「グヌヌヌ……。」

勝ち誇った顔の香取と、悔しげに睨む金剛。

こうして提督と金剛4姉妹と香取の計6人はメゼポルタ鎮守府へと向かったのであった。

「それで提督さんも秘書艦の香取おねえちゃんも鎮守府の主力の金剛おねえちゃん達もないから、これでは仕事にならないってことで団長は今日は全ての業務を中止にして休日にすることにしたんだー！」
本日は休みらしい、だから団長は日中からお酒を飲んでいたのである。

しかしイサナは香取が団長にお酒を渡したことも、そのお酒を団長が飲んでいたことも知らない。

山城も香取と団長の取引内容を知らないので、休日なのをいいことに団長が自分でお酒を用意して飲んでいたので思い込んでいる。

「じゃあ鎮守府に誰もいないのは……。」

「うん、休みになったことで睦月ちゃんが鎮守府のみんなを誘って外に遊びに行ったんだよー！」

以前超大型深海棲艦に鎮守府を襲撃されたことがあるというのに鎮守府には誰もおらず、団長は酔い潰れて前後不覚。

山城には危機感が足りてないようにしか思えないが、そんな空気の緩さもバルバレ鎮守府のいいところの一つなのだろう。

「私も遊びに誘われたんだけど、せっかくの休みなんだから以前からやってみたかったオリジナルの装備の製作にチャレンジしたいってことで断ったの！だけど作りたかって思ってただけでデザインも性能も何にも考えてなかったからアイデアの時点で行き詰っちゃったんだ！そんなところに山城おねえちゃんがやって来たんだよー！」

だからバルバレ鎮守府には団長とイサナしかいなかったらしい。

山城としてはバルバレ提督と行き違いになったことに落胆を覚えたが、自分に会えて喜ぶイサナの前で露骨にガツカリする真似は避けた。

それに提督に会えなかったことは残念だが、卵の運搬で疲れ果てた心身を休めることは出来る。

しょうがないのでイサナの作業に付き合っただけで休めたい。

しよう」と山城が判断するのは自然な流れであった。

「ねえ山城おねえちゃん、何かいいアイデアとかない？」

「うーん……私は加工とかには疎いからいいアイデアは持ってないけど、行き詰ったときには気分転換して気分をリセットするといいアイデアが閃きやすいってよくいうわよ？」

「息抜き、息抜きかあ……。あつ、そうだ！こっち来て！」

息抜きについて何かを考えていたイサナだったが、何かを思い付いたようでも山城の片手を掴むと工廠を出て歩き出す。

イサナに引つ張られて到着したのは鎮守府の娯楽室、休憩用の大きなソファとこれまた大きなテレビが目を引く。

「はいドーン！」

イサナはソファに勢いよく飛び乗る、山城もイサナの真横にそつと腰掛けた。

「今週放送してた風翔剣士クロス・ダオラ、私はまだ見てなかったんだ〜！録画はしてあるから今から見ようと思うんだけど山城おねえちゃんも一緒に見るでしょ？」

「クロス・ダオラね……。私も個人で録画してるけど、今回は私もまだ見てなかったし丁度いいわ。一緒に見てあげる。」

「今回の放送はなんとってブラック・マガラがメインの回だもんね！ブラック・マガラは私達の提督さんがやってるんだ、だからここの鎮守府の狩娘は全員クロス・ダオラを見てるんだよ！私達の提督さんがテレビで人気なんてスゴいよね〜、他の鎮守府の子に自慢出来ちゃうよね〜！」

山城は元々テレビにあまり興味がなくクロス・ダオラも見ていなかったのだが、クロス・ダオラのライバルであるブラック・マガラを演じているのがバルバレ提督だと知ってからは番組を観始め、そして番組そのものにハマったという経緯がある。

イケメン俳優目当てで特撮を観始めたお母さんみたいな始め方なのであった。

ただしバルバレ提督本人に恋をしている山城としては提督が人気になるのは嬉しい反面、テレビから入ったにわかファンが増えるのも

嫌だという複雑な心境を抱えていた。

色んな意味で厄介なファンである。

「それじゃ録画を再生するねー!」

イサナがりモコンを操作すると同時にテレビの画面が切り替わり、録画データが読み込まれる。

鎮守府も娯楽室も実質貸し切り状態だというのにやってることはソファーに座つてのビデオの鑑賞。

しかし未視聴のクロス・ダオラ……というよりテレビで活躍するバルバレ提督を見たがっていた二人の留守番狩娘にとってはそんなのどうでもいいと言わんばかりにテレビに食らい付くのであった。

イサナちゃんと天を廻りて戻り来よ2

BGM：光蝕む外套

ここは真夜中の公園。

滑り台やブランコに鉄棒といった一般的な遊具があるだけの、そこまで広くなく目立ったものもないありふれた町の公園である。

本来であれば誰もいない時間帯、しかし現在は静寂を切り裂くような戦闘音が響き渡っていた。

「ギイッ!!ギッ!!」

青と黒の鱗に覆われたトカゲのような姿をした怪人達、彼らはネオウエポンズの下級兵士であるランポス兵。

ランポス兵は公園内にて一人の人物を取り囲む、輪の中心にいたのは黒く禍々しい全身鎧を身に着けた戦士。

「ギイーーーーッ!!」

ランポス兵達は手にした短剣で一斉に黒い戦士に攻撃を仕掛ける。「エイムoffトリック。」

だが黒い戦士は慌てることなく静かに呟く。

言葉に応じるように戦士の左腕に黒い粒子が集まっていき、長い両刃の棍へと姿を変えた。

戦士は棍をまるでバトンのように軽々と振り回し、ランポス兵の攻撃を次々と弾いていく。

「ギ!?!」

やがてランポス兵の一人が体勢を崩したのを確認すると、戦士はそのランポス兵に向けて右腕を突き出す。

戦士の腕からは羽を広げた甲虫のように見える黒い光弾が発射され、ランポス兵を吹き飛ばした。

「ギッ!? ギイ!!」

攻めあぐねたランポス兵達は戦士から一旦距離を取ると、出方を窺うように陣形を組んだ。

「それで身を守っているつもりか? だが一塊になったのはオレにとって都合だ。」

黒い戦士の持つ棍は一瞬で黒い粒子へと変わり、今度は悪魔の顎のような外見の大砲へと変化した。

戦士が大砲を構えると砲口に新たに黒い粒子が集まっていき、やがてそれはバスケットボールほどのサイズにまで大きくなる。

「トリガーoffハザード!」

黒い戦士の掛け声と共に粒子の弾はランポス兵達の中心目掛けて射出される。

地面に着弾した粒子は大爆発を起こし、ランポス兵達は爆風の渦の中に一人残らず飲み込まれた。

「ギイッ!?!」

「まだ終わりじゃないぞ、トリガーoffハザードの爆発は三連撃だ。」

一撃目の爆発はどうか耐え抜いたランポス兵達、しかし着弾地点から広がるように第二、第三の爆発が発生し、それらに巻き込まれたことで木の葉のように空中へ吹き飛ばされる。

やがて重力に引かれるがまま、受け身すら取れずに地面に叩き付けられていった。

「ギギギ……裏切り者……狂竜ノフルゴア……ギギ……貴様ノ様ナ……出来損ナイニ……ギイッ!?!」

一人のランポス兵が倒れたまま怨嗟を口にするが、やがて力尽きたのか塵となって消えていく。

他のランポス兵達もいつの間にか塵となっており、公園には黒い戦士だけが残された。

「狂竜のフルゴアは貴様らネオウエポンズが勝手に付けた呼び名だ。貴様らと決別したオレはその名は使わん。ブラック・マガラ、それが今のオレの名前だ。」

黒い戦士、ブラック・マガラが全身の力を抜くと鎧が黒い粒子へと変化していく。

粒子が晴れると中から目付きの悪いの茶髪の青年が現れ、黒い粒子は青年の足元に集まると二足歩行の黒い猫に変化した。

「なあマガラ、トリガー of ハザードの余波で公園の敷地に穴が開いちちゃったけどどうするのニヤ？」

「知らん、興味ない。」

「ニヤアツ!? 興味ないって? こんな大穴開けたら翌日大騒ぎになっちやうニヤー!」

「うるさいぞヴェルガイン、そんなことは俺の目的とは関係ない。周囲がどうなるうが知った事か。それに今回は無関係な人間とやらは巻き込んだじゃないだろ、それでもまだ文句があるのか?」

黒猫ヴェルガインは青年マガラを問い詰めるが、マガラは本当に興味がない様で全く取り合わない。

「ニヤア……じゃあせめて騒ぎになる前にここから離れるのニヤ。」

「そうだな、面倒事はゴメンだ。」

そう言っつてマガラとヴェルガインはその場を立ち去ろうとする、だが……。

「ぐうっ!?!」

呻き声と共にその場で膝を着くマガラ。

ヴェルガインは慌ててマガラを支えようとするが、体格差から上手くいかない。

「マガラ、大丈夫ニヤ!？」

「ゴホッ、ゴホッ! くそ、あの程度の雑魚を相手にしただけでこのザマか……。」

「……あの、大丈夫ですか?」

マガラとヴェルガイン以外誰もいないはずの公園に第三者の音が響き渡る。

本調子ではなかったとはいえここまで接近されたことに驚いたマガラは声のした方に振り向く。

そこには白い上着に黒いワンピースを着た18歳前後と思われる黒い髪の少女がいた。

「きゅ、救急車呼びましようか?」

「オレに構うな、さっさと帰って今見たものは全部忘れろ……。」

「爆音がして気になって見に来たら、あなたが苦しんでいるのが見えたんです。爆発に巻き込まれたんですか?」

中々引き下がらない少女にマガラは思わず舌打ちする。

こんなことなら爆発を起こすトリガー of ハザードは使うべきではなかったと思うが後の祭りだ。

「えっと、オイラ達のこととはほっといてほしいのニヤ。」

「えっ! ネコが喋った!？」

「ネコが喋ろうが別にどうでもいいだろう、早く消えろ。」

「いや、でも……。」

いい加減この少女のことが鬱陶しくなってきたマガラは、彼女を殴って気絶でもさせようかと割と外道なことを考え始めるが……。

「ガッ!?! ゲフツ、ガフツ!!」

「マガラ!!」

「危ない!」

再び体勢を崩すマガラ、今度はヴェルガインではなく少女が身体を支える。

「は、離せ……。」

「でも具合が悪くて立てないんじゃない? ……えっ!？」

純粹にマガラのことを心配していた少女だったが、突然驚いた顔を

して動きを止めた。

少女が何を見て驚いたのか、それは何を隠そうマガラの顔であった。

夜中で暗かったこともあり今まで少女はマガラの顔がはつきりと見えていなかったのだが、身体を支える為に近付いたことでマガラの顔を認識したのだ。

「ぐっ……………」

「マガラッ、しっかりするニヤ！」

「あっ!? しっかりして下さい！」

だが少女が話しかける前にマガラは苦痛により遂に気を失ってしまっているのであった。

「……………うっ、ハッはっ！」

マガラが目を覚ましてみると、知らない部屋の知らないベッドで寝かされていた。

あまり物の置かれておらず、必要最低限の家具しかない殺風景な部屋。

しかし掃除はしつかりと行き届いており、本棚にもちゃんと本が並べられてあってダンスも使用されていれた形跡がある。

よって使われていない物置などではなさそうだ。

窓からは光が差し込んでおり、どうやら翌日になってしまったようである。

「あっ、目が覚めたんだね！良かった！」

こちらの声を聞き付けたのか、部屋の扉が開くと昨日の少女が入ってきた。

昨日の時点では敬語を使った余所余所しい態度だったのに、翌日になった途端に何故か随分と馴れ馴れしい口調に変化している。

「今までどこにいたの？ずっと探していたんだよ、お兄ちゃん！」

「お兄ちゃんだと!？」

しかしそんな些細な疑問も少女のお兄ちゃん発言により吹き飛んでしまうのであった。

場所を寝室からリビングに移したマガラと少女はテーブルを挟んで座っていた。

「私だよ、妹のハルカだよ！」

「知らん。」

「知らんって、あなたフォージお兄ちゃんでしょ！」

「だから知らんと言っている。」

「そんなはずないよ！昨日声を聞いた時点でアレツと思っただけど、顔

を見た時点で確信したの！あなたはフォージお兄ちゃん！」

長い黒髪の少女、ハルカはマガラのことをフォージと呼び、自分はその妹だと主張する。

「おい、ヴェルガインなんとかしろ……。」

少女と話すのが面倒になってきたマガラは部屋の片隅で寝っ転がっていたヴェルガインに声を掛ける。

「いや、そんなことオイラに言われても……。そもそもマガラに妹がいるなんてオイラ知らなかったし……。」

だが家族間の会話ということでヴェルガインは割って入れず、オロオロするばかり。

「お兄ちゃんは一年前に行方不明になっていたの、私ずっと探してたんだから！お兄ちゃんの部屋だっていつ帰ってきてきてもいいように毎日掃除していたんだよ。だから帰って来てくれて本当に嬉しかった！」

どうやらマガラが寝かされていた部屋は兄であるフォージの部屋だったらしい。

目を覚ました時に綺麗に整頓されていたことから、ハルカが掃除をしていたというのは本当のことなのだろう。

「だから何度も同じことを言わせるな、オレはお前のことなど知らん。」

「うう、嘘よ。確かに性格は凄く変わっている。お兄ちゃんはもっと優しくかったし、喋り方もそんな風じゃなかった。でも私がお兄ちゃんを間違えるはずがないわ！思い込みでも他人の空似でもない、分かるの。間違いなくあなたはフォージお兄ちゃん！」

どれだけ否定してもマガラが兄フォージであると主張するハルカ。このままでは話が進まないと思ったヴェルガインはようやく話に加わる決心をする。

「そもそもマガラは過去の記憶がないのニヤ。マガラっていうのも仮名で、本当は自分の名前さえ知らないのニヤ。」

「えっ、お兄ちゃん記憶喪失なの!? そんな!!」

「そうだ、オレには過去がない。だから仮にオレが本当にお前の兄

だったとしても、それは前のオレの話であって今のオレには関係ない。お前の兄の存在は記憶と共に消え去ったということだ。休ませてくださいには感謝するが、オレとお前は赤の他人。オレと知り合ったことがあいつらに知られればオレもお前も面倒なことになる。分かったらオレのことはさっさと忘れろ。」

ヴェルガインの言葉にショックを受けるハルカ。

そんな彼女に追い打ちをかけて突き放すべく、マガラは冷たい言葉を浴びせていく。

「じゃあな。」

俯いてしまったハルカにマガラは何故か罪悪感を覚えたものの、家を出ていくべく立ち上がろうとする。

「……おい、なんだこの手は?」

だが家を出ようとしたマガラの服のすそをハルカはギュツと握っていた。

「消えてない、お兄ちゃんは消えてないよ! 口調は冷たいけど私の身を案じてくれたよね? あいつらつて人達に私のことが知られたらまずいんでしょ? 本当にどうでもいいなら何も言わずにさっさと出ていけばいいんだもの。あなたの中には間違いなくお兄ちゃんが残っているわ!」

仮にそうだったとしてそれに何の意味がある?

マガラはそう思うものの、何故かハルカの手を振り解くことが出来ずにいた。

「そもそもお前の家族はどうした? 何故お前以外に誰も出てこない? オレがお前の兄だというのならお前の両親もオレを息子扱いするはずだろう?」

この家はこじんまりとしているがれっきとした一軒家、にも関わらずハルカ以外の人間がいる気配はなかった。

「パパとママは……二人ともずっと前に……事故で亡くなったわ……。」

「それは……悪かった。」

辛いことを聞いてしまったことで思わず謝るマガラ。

普段のマガラならこの程度で謝ったりしないのだが、この少女相手だとも調子が狂うのを自覚する。

「ううん、いいの。悲しかったけどそれはもう受け入れたから。けど一年前にお兄ちゃんまで私の前からいなくなってしまった。心が張り裂けるかと思っただわ、私にはもうお兄ちゃんしか残されてなかったから……。」

ハルカは柵に置いてあった写真立てを手に取る。

そこにはマガラに似た落ち着いた雰囲気、霧囀りの男性と茶髪の少年、そしてハルカに似ている優しそうな女性と黒髪の少女が写っていた。

この四人が両親と幼い頃のハルカとフオージということだろう。

「それがパパとママ、そしてお兄ちゃんと私。」

続いてポケットからスマートフォンを取り出し、写真を表示する。

そこにはハルカ、そして無愛想な今のマガラとは違って優しい笑顔を浮かべたマガラが二人で仲良く並んで写っていた。

「これが去年、お兄ちゃんがいなくなる前の最後に撮った写真。」

「そんなものをオレに見せてどうしようってんだ……。」

今までの写真を見ていけば流石のマガラも自分がハルカの兄フオージであるということに認めざるを得ない。

しかしだからといって記憶のない自分ではフオージにはなれないし、そもそもなるつもりもない。

マガラには目的があり、そんなことにかまけているヒマはないのだ。

「今までの反応でお兄ちゃんに記憶がないっていうのは分かったわ。でも完全になくなったわけじゃないっていうのも分かった。記憶の奥底にちゃんと残ってる、私はそれを思い出させたいの!」

「思い出させる? 何をやるつもりだ?」

「思い出巡りよ! 私とお兄ちゃんの思い出の場所、そこを巡ってお兄ちゃんの記憶を呼び戻すの!」

「だが、オレがそんなものに付き合う義理など……。」

「まあまあ、マガラも少しくらい付き合っただけのニヤ。」

自分の過去などどうでもいいと思っただけのマガラはハルカの提案

した思い出巡りに難色を示すが、そこにヴェルガインが口を出す。

「ヴェルガイン、お前どつちの味方だ？」

「ハルカちゃんには昨日夜食として大盛りの鰹節ご飯をご馳走になったのニヤ、だから今はハルカちゃんの味方ニヤ！」

「チツ、そんなもので買収されやがって……。」

「それに……。」

鰹節ご飯なんかでハルカの味方を始めたヴェルガインにマガラは悪態をつくが、ハルカに味方をする理由はどうやらそれだけではないようであり、ヴェルガインの顔付きも真剣なものに変わる。

「マガラは日々の戦いで身も心も傷付き、疲れ切っているのニヤ。だからたまにはこういう安らかな日があってもいいのニヤ。このままじゃマガラが壊れちゃうのニヤ。」

「だがハルカが狙われるかもしれないんだぞ？」

「そんなの今更ニヤ。ここまで関わっておいて今から別れたところでハルカちゃんが狙われない保証はないのニヤ。それならいつそのこと一緒にいた方がずつといいのニヤ。」

「フン、簡単に言ってくれる。まあ、知らないところで襲われるくらいなら側にいた方がまだマシか……。」

自分の事を考えて休むように諭してくるヴェルガインにマガラもとうとう折れる。

「えっ、それじゃあ!？」

「ああ、不本意だが今日一日だけ一緒にいてやる。それまでにオレの記憶を取り戻して見せろ、いいな?付き合うのは今日だけだぞ。」

「うん、うん……やった!ありがとうお兄ちゃん!私絶対にお兄ちゃんの記憶を取り戻して見せるからね!」

よほど嬉しかったのか年甲斐もなくぴよんぴよんと跳ねて喜ぶハルカ。

その様子を呆れて溜息を吐きながら眺めるマガラと、更にその二人を保護者のような優しい目で眺めるヴェルガイン。

ここで画面が白くなっていき、そしてCMへと切り替わるのであった。

「ギリ……ギリ……ギリ……。」
「ん？」

黙ってテレビを見ていたイサナだったが、番組の途中からすぐ近くで変な音がすることには気付いていた。

番組がCMになったことで改めて音の発生源に首を向けてみると、そこには真顔で歯軋りをする山城がいた。

「ヒッ!? や、山城おねえちゃんどうしたの!？」

「ギリ……あ、ごめんなさい。怖がらせてしまったかしら？」

「う……ううん、そんなことないよ〜!（本当はちよつと怖かったけど……。）」

笑顔だが目が笑っていない山城は無言でイサナに歯軋りの理由を

聞くように圧を掛けてくる。

いや、本当は掛けていないのかもしれないがイサナにはそうとしか思えなかった。

見えている地雷、しかし踏む以外の選択肢が無かったイサナが仕方なく踏んでみることにする。

「あの、山城おねえちゃんはなんでそんな怖い顔してたの？」

「あの妹のハルカって娘、どう見ても榛名よね？」

「うん、あれはここバルバレ鎮守府の榛名おねえちゃん。ちよつと前に金剛おねえちゃん達四姉妹でオーディション受けに行った結果、榛名おねえちゃんだけが受かったんだ！その時は珍しく四人で大喧嘩して提督にすっごい怒られたんだよー！」

「そう……。榛名、妹役の癖にベタベタし過ぎじゃない!?妹役ということで誤魔化してるみたいだけど私には分かるわ！あれは役にかこつけてイチャイチャしようと思っ卑しい女の目よー！」

「そ、そうかなあ？」

山城はどうやら榛名がバルバレ提督の妹役として出ているのが気に食わないようである。

しかしそんなのイサナにはどうしようもない。

「あつ、ホラー！そろそろCM終わるよ！続き見よつ、ねっ！」

「そうね、いちやつこうとする榛名は気に食わないけど提督が演じるマガラを見なくちゃ。ああ、マガラ……。いつも優しくて心配りを欠かさない提督も素敵だけど、クールなマガラもカッコいいわ♡たまには私にもあんな感じで冷たく突き放してくれないかしら？」

まだ色恋沙汰についてはよく分かっているイサナだが、それでも山城が映像の中の榛名に対して静かにキレ始めたことで一緒にクロス・ダオラを観始めたのは失敗だったのではないかと思ひ、若干後悔をするのであった……。

イサナちゃんと天を廻りて戻り来よ3

「それじゃあ思い出巡りの旅へレッツゴー♪」

「レッツゴーニャ♪」

「チツ……。」

家の外に出たハルカとマガラ、そしてヴェルガイン。

兄であるマガラと久々に一緒に出掛けることが出来るということ
で、さつきまでとは打って変わって非常にテンションの高いハルカ。
「えへへへ。」

ハルカはそのままマガラの右腕に抱き着く。

「何のつもりだ？」

「私とお兄ちゃんが一緒に出掛ける時はいつもこうしてたの。記憶を
取り戻すためにも普段と同じようにした方がいいでしょ。」

「本当か？」

どうも騙されているような気がするマガラだったが、今日一日付き
合おうと宣言した以上は無下にすることも出来ず、ハルカに腕を引っ張
られて歩き出すのだった。

腕を組んで街中を歩くマガラとハルカ。

ヴェルガインは普通のネコのフリをして、二人の後を着いて回る。
「視線が鬱陶しいな……。」

傍から見れば仲睦まじく腕を組んで歩く美男美女と可愛いハ
チワレのネコ、注目を集めないわけがない。

微笑ましく眺めてくる者もいれば、嫉妬の視線を向ける者もいる。

「お兄ちゃんと出掛ける時はいつもこんな感じだったのよ。言ったでしよ、いつも腕を組んで出かけていたって。この視線も記憶を取り戻すのに大事なものだって！」

「先ずはそう言うことにしておいてやる。」

二人と一匹は記憶を取り戻すために町の探索を続けた。

時にはブティックに入ってマガラを着せ替える、またある時はペトトショップに入ってヴェルガインの匂いが付いたマガラが店の子猫に興味を持たれたことでじやれつかれたり、町を流れる川に小石を投げ込んでみたり。

ペトト同伴では入れない場所も多く、ヴェルガインは着いていくのに難儀した。

「どう、何か思い出せそう？」

「ダメだな、何も思い出せん。」

「そっか……。」

何も思い出せないという割に平然としているマガラ、実際に思い出せないことを何とも思っていないのだろう。

「そもそもこれって本当に思い出巡りの旅なのニヤ!?ただデートしているようにしか見えないニヤ！」

「本当だよ。私とお兄ちゃんはいつもこんな感じだったんだもん！」

ヴェルガインからマジかよこの兄妹といった目で見られるもののハルカは気にしない。

ハルカにとつては当たり前のことを当たり前のようにやっているだけなのだから、他人にどう思われようと気にならないのだ。

「でも……までやっても何も思い出さないのは流石に不安だから、これから記憶を刺激する取って置き場所に案内するわ！」

未だに何も思い出さないマガラだが、ハルカは次に案内する場所に

余程の自信があるようで、意気揚々とマガラの腕を引いて歩き出す。

「……は？」

ハルカによつて連れて来られたのは町外れにある小さな売店。

客が入る店内スペースというものはなく客と店員がやり取りする出窓だけがある、いわゆる昭和の町のタバコ屋のような雰囲気の売店だった。

「ここが私とお兄ちゃんの取つて置き場所！小さい頃からここによく通つてたんだよ。ごめんくださいーい！」

ハルカは売店の窓をコンコンと叩くと窓が開き、中から初老の女性が顔を出す。

「はいはい、いらつしやい……つてハルカちゃんじゃない！久しぶり

だねえ、一年振りくらいじゃないの?」

「おばちゃん久しぶり!全然顔出せなくてごめんね。」

「いいのいいの!お兄さんいなくなっらずと探してたんでしょ。唯一の家族なんだし仕方ないわよ。」

「うん。それでね、今日はおばちゃんに会わせたい人がいるから連れてきました!」

そう言つてハルカはおばちゃんの前にマガラを押し出す。

「あらっ、フオージ君じゃない!帰ってきたのね、おばちゃんも心配してたのよ。お兄ちゃん見付かってよかったわねえ、ハルカちゃん!」

喜ぶおばちゃんだったが、マガラからしてみれば初めて会うおばちゃんに親しげに声を掛けられたことで困惑しかない。

「それじゃ、いつもの二つね!久々だからいつものって言うのもちよつと変だけど……。」

「はいよ、いつものね。」

ハルカのオーダーを受け、おばちゃんはゴソゴソと何かを作り始める。

そして500?は入りそうな大きめの紙コップに入った飲み物を二つ、カウンターに置いた。

「お待たせ。ハチミツレモンだよ。」

「それじゃお会計を……。」

「ああ、今日はタダでいいよ。」

「えっ?」

出てきたハチミツレモンにお金を払おうとするハルカだったが、それをおばちゃんは制止する。

「おばちゃん道楽でやってるところもあるしき、それに久しぶりに顔を見せてくれたことと、お兄ちゃんが見つかったことへのおばちゃんからのささやかなお祝いき。その代わりこれからはまた昔みたいに顔を見せておくれよ?」

「はい!おばちゃんありがとう!」

「ありがとう……。」

「ふふっ、またおいで。待っとるよ。」

元気よく礼を言うハルカ、それに釣られるようにマガラも思わず礼を言う。

マガラとしては礼を言うつもりはなかったし、そもそもそんなことを言うキャラでもなかったが、このおばちゃんには何故か礼を言わなければいけないような気がしたのだ。

これが失われた記憶に関係することなのかと訝しみながらもハルカにハチミツレモンを手渡され、そのまま今までと同じように腕を引かれてその場を立ち去るのであった。

ハチミツレモン片手に連れて来られたのは公園であった。

昨夜マガラがランポス兵を倒し、そしてハルカと出会ったあの公園

である。

今の時刻は昼時であり本来であれば遊ぶ子供達がいる時間帯だが、公園の入り口には立ち入り禁止のテープが張られており誰もいない。だがハルカはそれを無視してテープを跨ぐと公園の中に入っていく。

マガラとヴェルガインも公園の中に入ってみれば地面にはトリガーofハザードで開けた大穴がそのまま残されており、穴の周囲には三角コーンとコーンバーで簡易的な柵が作られていた。

どうやら昨夜マガラ達が立ち去った後に誰かが通報し、それを受けて役所が一時的に封鎖をしたようであった。

「よいしょっと。」

ハルカは公園のベンチに腰掛けるとハチミツレモンを飲み始めた。

マガラも取り合えずハルカの横に座り、ヴェルガインも誰もいないのをいいことに普通のネコのフリをやめてベンチに座る。

「フニャ〜、ずっと四足歩行だったから疲れたニャ。」

「ふつつ、ヴェルちゃんもお疲れ様。この公園はね、私とお兄ちゃんがちっちゃい頃によく遊びに来ていたんだ。そしてさっきのお店でハチミツレモンを買ったら必ずここのベンチで飲むようにしていたんだよ。ほら、飲んでみて。」

「……分かった。」

マガラはハルカに付き合えば付き合う程に自分のペースが崩されていくことを自覚していた。

ネオウエポonzを倒すこと以外に興味がなく刺々しい態度で他人を遠ざけていたはずの自分が、いつの間にか促されるがままに公園のベンチで大人しくハチミツレモンを飲もうとしている。

だが結局のところ今まで何も思い出さなかったのだ、これを飲んだらいい加減におさらばしよう。

そう考えてハチミツレモンに口を付けた瞬間、見覚えのない光景が頭の中に広がった。

「お兄ちゃん待ってよ。」

自分の後ろをトコトコと走る幼い少女。

顔はハルカの家で見た写真の幼い頃のハルカそのもの。

「ほら、早くおいでよ！」

とても近くから少年の声がある。

否、近くからではない。この声は自分自身が出しているようだった。

映像の中の自分は幼いハルカを連れて走り、やがて先程の売店へと到着した。

「おばちゃん！いる〜？」

売店に向かって声を掛ける自分。

売店の窓ガラスに映っているのはハルカの家の写真で見た幼いフォージそのものだった。

だとすればこれが自分の顔なのか。

「はいはい、よく来たねえフォージ君、ハルカちゃん。」

売店のカウンターから顔を出したのは中年の女性。

少し若くはなつてはいるものの、間違いなくあの初老の女性だ。

「ハチミツくださいー！」

「ハチミツくださいー！」

「うん、ちよつと待っててねえ。」

女性からハチミツレモンを受け取り、お金を払った自分とハルカは仲良く手をつなぐとその足で公園を目指す。

そして今自分達が座っているベンチと同じベンチに二人で腰掛け、同じように二人でハチミツレモンを飲むのであった。

「美味しいねお兄ちゃん！」

「うん、美味しいね！」

「ハチミツ……くだ……さい……？」

「お兄ちゃん?! い、今ハチミツくださいって!?!」

マガラがこぼした眩きに驚き振り向くハルカ。

「確かにオレはここでハチミツレモンを飲んでいた……のか? 今と同じように……。」

「思い出したの!?!」

「いや、思い出したのはそれだけだ。」

「だとしても、それだけでも嬉しいよ……お兄ちゃん。」

マガラが記憶の一端を思い出したことにハルカは思わず涙ぐむ。

ガシツ!

だがマガラは持っていたハチミツレモンのコップをベンチに置くと、いきなり真剣な顔をしてハルカの両肩を掴み自分の方へと向き直らせる。

「えっ、お兄ちゃん!? こんな場所、こんな時間からそんな大胆な! でも私、お兄ちゃんにだったら……。」

「危ないっ!」

「えっ、キヤツ!?!」

マガラはそのままハルカを抱き寄せてベンチの後ろに倒れ込みながら伏せる。

それを見たヴェルガインも慌ててベンチから飛び降りた次の瞬間、マガラ達が座っていたベンチの手前の地面に何かが勢い良く突き刺さった。

「あう、お兄ちゃん……。」

「ビツクリしたニヤ、何なのニヤ?」

「これは、矢文か?」

地面に刺さっていたのは畳まれた紙が結びつけられた矢。

マガラは用心深くそれを拾い上げ、罨などがないか確認しながら紙を広げていく。

そこにはこの街の地図が描かれており、街外れの廃工場跡がある場所に赤い印が付けられていた。

「ネオウエポonzからの果たし状か。矢文といい古風な真似をする、気取っているのか?ヴェルガイン!」

「はいニヤ!」

「お兄ちゃん!?!」

「着いて来るな!家に帰ってろ!」

マガラは果たし状を握り潰すと、ヴェルガインを肩に乗せて走り出した。

「ここか、指定の場所は……。」

「フッフツ、よく来たな。待っていたぞブラック・マガラ、組織の裏切り者よ。」

廃工場跡に辿り着いたマガラの前に姿を現したのは、くすんだ灰色の甲冑を身にまとった細身の男。

立派なトサカ飾りの付いたアーメットヘルムを身に着けており、その出で立ちは中世の剣士のようなだった。

「何者だ？」

「私は水妖のフルアグナ。双剣のウエポンにして、ネオウエポonzで最も華麗な剣技を誇る剣士とは私のことよ。」

「ネオウエポonzで最も華麗な剣技？悪いが貴様がそこまで大層なヤツとは到底思えないな。」

「フツ、無知蒙昧な者に分からねぬよ。」

この僅かなやり取りでマガラはフルアグナがプライドが高い性格であろうと当たりを付け、敢えて軽く挑発することで揺さぶりを入れてみるが軽く受け流される。

「ブラック・マガラ、私の任務は組織から抜けたお前を粛清することだ。」

「フン、またそれか。オレの前に現れるヤツはいつも裏切り者の抹殺だの、出来損ないの処分だのそればかり。だがオレの目的も貴様らネオウエポonzの殲滅！そちらから出向いてくれるのは好都合、どれだけ来ようが返り討ちにしてやる！」

マガラも早速変身しようとするが、それにフルアグナは待ったをかける。

「フッフ、戦意は十分のようだな。その方が私としても望ましい。だがその前に私の目的を聞いてもらおうか。戦うのはそれを聞いてからでも遅くはない。」

「何だ？貴様の任務はオレの粛清だろうか？たった今聞いたばかりだ、

それとも辞世の句でも聞かせてくれるのか？」

「今のは飽くまでネオウエポンスからの任務、私個人の目的とは違うのだ。」

「一応聞くだけは聞いてやる。」

一体何を言い出すつもりなのか？

降伏して配下になれば命だけは見逃すとも言うつもりか？

それとも殺される前に潔く自害でもしろと言うつもりか？

どちらにせよマガラはマトモに取り合うつもりはなかったのだが

……。

「私の目的はお前との決闘だ。お前に一対一での尋常なる決闘を申し込む!!」

「決闘だと!?!」

予想外の言葉に流石のマガラも驚きを隠せない。

言われてみれば確かに周辺に取り巻きのランポス兵の姿は一切見られない。

どうやらこの男は本当に一対一の決闘を所望のようだ。

ある事情により長く戦えないマガラからしてみれば願ったり叶ったり状況だが、同時に相手の狙いが見えてこない。

思い返せばフルアグナは場所を指定し地の利を得ておきながら、不意打ちもせずに堂々と姿を現した。

自らの有利を捨てる行為が逆に疑念を抱かせる。

「分からないな、何故そんな真似をする？お前に何の得がある？」

「簡単なことよ、それが私の美学だからだ。私は美しいものを好む、そしてそれは戦いにおいても例外ではない。一対一の決闘で美しく相手を打ち倒すことにより、私の戦いは芸術たり得る。伏兵も罫も私の芸術を汚すだけの不純物、神聖で美しい決闘にそんなものは不要なのだ！」

「何が神聖で美しい決闘だ！戦いというものを遊び感覚で行う貴様は単なる時代錯誤の野蛮人だ！」

「フツ、何とでも言うがいい。お前のような本物の美を知らぬ者に、私の崇高なる理念を理解出来るなどと最初から思っておらん。」

プライドが高いナルシスト、そして揺るぎない価値観を持った狂人。

そりや他人からの言葉程度では一切揺るがないわけだ、とマガラは密かに納得する。

「そんなことよりそいつはそのままでもいいのか？」

「何のことだ？」

「お前の後ろの小娘のことだ。」

「何っ!？」

フルアグナの言葉に振り返ってみれば、そこにいたのは走り疲れたことにより肩で息をするハルカだった。

「ハアツ……ハアツ……お兄ちゃん……。」

「お前っ、何故ここにいる!? 帰れと言ったはずだ！」

「だって、お兄ちゃんが急に駆け出して……そしたら私、お兄ちゃんが二度と戻ってこないんじゃないかって思って心配になって……。」

マズいことになった。

ハルカは身を護る術を持たない一般人、戦いに巻き込まれてしまえばひとたまりもない。

普段であれば戦闘による周囲への被害など全く考えないマガラだったが、何故かこの少女を戦いに巻き込む気にはなれなかった。

だがフルアグナは攻撃を仕掛けることなく腕組みをしたまま静観している。

「どうした、早くその小娘を逃がすといい。」

「何だ?!？」

「言っただろう、私の戦いは芸術だと。戦えない一般人を巻き込んだり、人質に取るような真似は私の美学を傷付ける行為に他ならない。他人を気遣って本気を出せない相手を矜る、そんなものは決闘ではないのだ。だからこそ人のいないこの廃工場跡を戦いの場を選んだのだからな。いか小娘よ、私はお前を狙うような真似はしない。だが私の戦いに割って入るのであれば話は別だ。完璧な芸術を作り上げるには、雑味は取り除かねばならない。だからこそ私に手を汚させるような真似をさせてくれるなよ?。」

「ハルカ、しつかりしろ！いいか、今からここは戦場になる！死にたくなかったら離れていろ！」

「あ……う、うん……。」

怯えたことで本調子が出ないのか、ハルカはヨロヨロとおぼつかない足取りで廃工場跡から去っていった。

BGM：乱舞する吹雪

「さて、それでは美しい闘争を始めるとしようか。」

「そのくだらない信条にこだわったことを後悔させてやる、やるぞヴェルガイン！」

「ニヤッ!!」

ヴェルガインは黒い粒子へと姿を変え、マガラの全身を覆い尽くしていく。

足を覆った粒子は硬質化しグリーヴへと変化、そのまま腰、胴、腕も順番に高質化して鎧へと変化していく。

そして最後に顔が二本の角の生えたフルフェイスのマスクへと変化した。

「ハッ！」

マガラがガントレットに包まれた左腕を伸ばすと新たに黒い粒子が集まり両刃の棍、エイムofトリックが姿を現す。

それを見届けたフルアグナの両手にも青白い双剣が握られた。

「黒蝕剣士ブラック・マガラ!!黒き憎悪が貴様を断つ！」

「いいだろう。水妖の名を冠する我が双剣、ウンディーネの華麗なる舞を見るがいい！」

先に仕掛けたのはフルアグナ。

本人の言葉通り、舞い踊る様に軽やかな双剣の連撃を繰り出す、マガラはエイムofトリックでの確に弾き返していく。

「軽い！その程度の攻撃でオレに届くと思うな！」

マガラは攻撃の一瞬の隙を突き、フルアグナの腹部に横蹴りをお見舞いする。

「グツ!?だが仕込みは済んだ。」

蹴られたことで後退したフルアグナ。

だが攻撃を凌がれたにもかかわらず、その声には余裕があった。

「仕込み? なっ、これは水!？」

気付けばマガラの足元にはいくつもの水溜まりが出来ており、打ち合ったことでエイムoffsetリックやマガラの手足にも水が付着していた。

「言っただろう、我が双剣は水妖なのだ。そして当然これで終わりではない。今のは飽くまで第一楽章、続いて第二楽章を堪能してもらおう。」

マガラの耳にピシパシと硬質な音が響く。

「何だ?!凍っているのか!」

足元の水溜まりは徐々に凍っていき、マガラの手足に付いた水も凍っていく。

「だがこの程度、何の障害にもならん!」

とはいえ所詮付着した水が凍った程度、冷たいが動きを阻害されるほどではない。

「やれやれ、誰がこれで終わりと言った? 第二楽章はまだ続いているのだよ。」

再び舞い踊るフルアグナ。

マガラはこれを防いでいくものの、飛び散る水までは防ぐことが出来ずに濡れていき、そして濡れた傍から少しずつ凍っていった。

「どうした、徐々に動きが鈍くなってきたぞ。その体たらくで私のダンスの相手が務まるのかね?」

「ぐっ、やってくれる。」

最初は大したことなかった凍結攻撃も、繰り返されることでじわじわとマガラの動きを制限していく。

氷の冷たさ、氷の重さ、氷の硬さ、あらゆる要因がマガラの重石となり、体力を奪っていくのだ。

「水を操る双剣と、水を操る私の能力。水と氷が奏でるハーモニー、この二つのマリアージュが至高の芸術を作り出すのだ！」

「ぐうっ!？」

重くなつた武器と腕ではとうとう攻撃を防ぎ切れなくなり、マガラは直撃を受ける。

相変わらず軽いフルアグナの攻撃。

この程度では致命傷には程遠いが、直撃を受けたということは今まで散らせていた水を真正面から浴びるといふ結果を生み出す。

「最終楽曲だ！フィナーレへと参ろう！」

「うおおおおお!?……お……お……お……」

大量の水を浴びたことでマガラの身体は今までの比ではないスピードで凍り付いていった。

今まで被害の少なかつた胴体や顔、そして背中までもが氷で覆われていく。

そこにフルアグナは更に水を浴びせていく、もはや防ぎようはなく氷は厚みを増していくばかり。

そして遂に指一本すら動かせなくなる、完全な氷漬けとなつてしまった。

「美しい決闘だった。感謝するぞブラック・マガラ。お前の黒い鎧のデザインはナンセンスだったが、私の手により美しい氷像へと生まれ変わったのだ。お前は私のコレクションの一つに加えてやる、これからは芸術品として過ごすがいい。」

フルアグナは凍つたマガラを持ち帰るべく手を触れようとする。

だが触れる瞬間に違和感に気付いた。

「視線を感じる?それも真正面からだど?」

この場にはフルアグナと氷漬けのブラック・マガラしかいない、つまりフルアグナに視線を送る者など存在しないはずだ。

もしかしたらさつき逃げた小娘が戻ってきたのかもしれないが、それでもあんな小娘からこんな強烈な視線を感じるはずがない。

「だとしたら、まさか?まさか!？」

氷漬けとなつて動けないはずのブラック・マガラ、その身体から突

然暗く禍々しい紫色の光が放たれた。

続いてバキバキと音を立てて氷にヒビが入っていき、そのヒビから黒い粒子があふれ出す。

光、粒子、共に激しくなり、それにさえぎられたことで完全にマガラの姿は見えなくなった。

だが何が起きているのかは分かっている、氷の中からマガラが甦ろうとしているのだ。

そして遂に完全に氷が砕ける音が聞こえ、それと同時に光と粒子が晴れていく。

BGM：渾沌に呻く者／ゴア・マガラ

氷の牢から脱出したマガラ、その姿は大きく変わっていた。

元は美しかったものの、汚れに塗れたことで輝きを失ったステンドグラスを彷彿とさせるようなくすんだ色の鎧。

背中から生えているのは天使にも悪魔にもなり切れない中途半端な墮天使の穢れた翼。

左右で色の違う紫と金色の禍々しい角。

そして角と同じように左右で色の違う、全てを憎むような鋭い目付きをしたヘルム。

唯一手に持つエイムofトリックだけがブラック・マガラだった頃の原型を留めていた。

「渾沌剣士ケイオス・マガラ!! 呻く憎悪が貴様を渾沌に引きずり込む！」

これこそブラック・マガラの強化形態、ケイオス・マガラ。

「なんと醜い姿だ、もはやお前に芸術としての価値はない。せめても慈悲だ、私の手で死に際くらいは美しく彩ってやろう。」

フルアグナはマガラを再び氷漬けにすべく、武器を構えようとするが……。

「うつ!?何だ?何が起こっている!?!」

唐突な頭痛と悪寒により思わず膝を着いてしまう。

堪え切れずに咳き込むと、ヘルムの隙間からは毒々しい紫色に変色した唾液が流れ出る。

これはどう見てもただの風邪や毒によるものではない。

「頭が痛い!?!目がチカチカする!力を思うように制御出来ん!一体何だというのだこの吐き気は!?!」

「それがオレの持つ狂竜の力だ。」

「狂竜だと?」

「そうだ、周囲を見てみる。」

フルアグナが周りを見渡してみれば、いつの間にやら紫色の澱んだ粒子溜まりがそこら中に発生しており、そしてそれら全ての粒子は目の前のマガラの鎧の隙間から漏れるように発生し続けていた。

「この言い方は気に入らないが、貴様ら風に言えば狂竜のフルゴアとしての特殊能力だ。」

ネオウエポンスのウエポンは全員大なり小なり何らかの特殊能力を持つ。

超絶のフルカイザーであれば熱と爆炎を操る能力。

激運のフル夜叉であれば運氣を上昇させ、雷光虫を操る能力。

水妖のフルアグナであれば水を瞬時に凍らせる力。

風翔のフルクシャ改めクロス・ダオラには風を自在に操る力。

そして狂竜のフルゴアであるマガラの能力、それこそがこの狂竜の力なのであった。

「ぐっ!?!があっ!?!」

「苦しいだろう?身体が言うことを聞かないだろうか?この狂竜の力はオレにさえ制御出来ない。一度この渾沌の姿になってしまえば、変身を解除するまで溢れ出る狂竜の力を止めることは出来ないんだ。だがお陰で貴様らネオウエポンスを苦しめることが出来るんだからな、止めるつもりはない。」

ここまで苦しんでいるにも関わらず、フルアグナは無理矢理立ち上がり戦いを続けようとする。

しかしそれは彼の誇りから来るものではない。

頭では冷静に判断しようにも、闘争心が掻き立てられて肉体の方が止まらないのだ。

「身体の動きに逆らおうとするな、全身がズタズタになるぞ。」

「ど、どういうことだ。」

「狂竜の力には相手の闘争心を増幅させて狂戦士に変える効果があるんだ。たとえ理性が拒んでも身体は闘争を求める。無理に抑え付けようとするより、身も心も闘争に委ねた方が楽だぞ。狂竜の力は一度感染したが最後、たとえ何もしなくても少しずつ全身を蝕んでいき、最終的には中枢神経すら破壊して死に至らせる。そんな死に方をするくらいなら肉体の限界を超えてまで暴れて命を燃やし尽くした方がまだマシだろう?」

「闘争心だけで暴れるなど……ぐっ、私が嫌う最も美しくない衝動の一つだ!そんな下劣なものには……飲まれん!私は最後まで私の戦い方を貫く!」

フルアグナは今にも暴れ出そうとする身体を制して、今までと同じように双剣の構えを取る。

だがそれに抵抗するように全身は細やかに震えており、双剣を握り締める拳からは紫色に変色した血が滴り落ちる。

「そこまでして美しさを求めるか……。何があっても曲げないその信念には敬意を払おう。」

「ぐおおおおお!!」

先程までと比べて明らかにぎこちないながらも、双剣の演舞を崩さずに斬り掛かってくるフルアグナ。

その意志は見上げたものだが、この状況では隙が増すだけだった。

「グリーンフォーワンダー!!」

マガラの叫びと共にエイムofトリックに粒子が集まり、エイムofトリックの紫色だった刃は金色の刃へと変化。

更に切っ先も鋭く伸び、そこから矢じりのように枝刃が生えて非常に攻撃的な外見へと変わる。

「そこだッ!」

「ぐおお!？」

マガラはグリーンフォワードの鋭い穂先にフルアグナを軽く突き刺すと、フルアグナを空中に向かって投げ飛ばす。

続いて操虫棍であるグリーンフォワードを使い、フルアグナ目掛けて高いジャンプを繰り返した。

「バースォーデス!!」

空中でマガラの持つグリーンフォワードは瞬時に分解され、今度是不気味な色をした球体を掴む黄金の爪のような外見のハンマーへと再構築される。

「これで終わりだツ!!」

バースォーデスをフルアグナに叩き付け、そのままの勢いで落下していく二人。

やがて地響きと共に着地し、砕けたコンクリートと狂竜の粒子が舞い上がったことで視界が遮られるものの、次の瞬間それを超える大爆発が起きたことでその粉塵は晴れていく。

そこにはケイオス・マガラが一人だけで立っており、フルアグナがいた形跡はどこにもない。

ここに勝負は付いた。

「これでまたオレの価値が証明された……。」

『それよりもマガラ、早く変身を解くのニャー!』

「分かっている。」

フルアグナを倒したことで感傷に浸るマガラだったが、焦るように変身解除を促すヴェルガインの声に従って渋々変身を解く。

それと同時に周囲に立ち込めていた紫色の煙も最初から無かったように消えてしまった。

「マガラ、大丈夫ニャ? 身体は何ともないニャ?」

「オレは平気だ、何ともない。」

「お兄ちゃん!!」

「あいつ、まだ近くにいたのか!？」

一息吐こうとしたところでこちらに走り寄ってくるハルカの姿を捉えたマガラは驚き呆れ果てる。

「ハルカ、お前帰っていると言っただろう!？」

「ごめんなさい。お兄ちゃんが心配で、向こうの資材置き場に隠れたの……。そしたら急に爆発が起きて、これはただ事じゃないと思っ
て……。」

資材置き場がどこにあるかは知らないが、主戦場から離れた場所にあったことにホツとするマガラ。

もし距離が近ければ狂竜の力はハルカにも……。

(ハツ!?今オレはハルカが狂竜の力に蝕まれなかったことにホツとしている?さっきの公園でもそうだ、オレ達を直接狙ったものではないか?とはいえ飛んできた矢からコイツを庇った。このハルカという少女にオレはやたらと心揺さぶされている。オレ達は本当に兄妹なのか?だとしても今のオレには……。)

考え込むマガラだったが、突然割れるような痛みが頭に走った。

続いて全身が焼けるように痛み出し、喉の奥からは熱いものがこみ上げてくる。

「ぐうあつ!?ゴホツゴホツ!？」

「お兄ちゃん!？」

「マガラ!?やっぱり平気じゃなかったニヤ!しつかりするニヤ!」

血を吐いて倒れたマガラに駆け寄り必死に起こそうとするハルカとヴェルガイン。

「あれだけ大口を叩いておきながら結局は負けたか。だがあの愚か者にしてはいい働きをしてくれた。」

その様子を遠くから何者かが見ていたのだが、それに気付く者は誰もいなかった。

「間違いなくこの周辺からウエポンの反応があったな、探しに行くぞ
シャイナス！」

「了解ニヤー！」

そして新たにこの町に足を踏み入れた者もいたが、それに気付く者
も今はいない。

しかしこうして役者は揃い、事態は再び動き出すのであった。

イサナちゃんと天を廻りて戻り来よ4

廃工場にて氷妖のフルアグナを倒したマガラ。

しかしその後、血を吐いて倒れてしまう。

ハルカとヴェルガインはどうかして助けようとするものの適切な治療など出来るわけもなく、かといって救急車を呼ぶわけにもいかない。

せめて家に連れ帰ってベッドで休ませたかったが、少女とネコの力で男一人を距離の離れた家まで運ぶのは無理がある。

それでも二人は力を合わせてどうか公園までたどり着き、マガラをベンチに寝かせたのであった。

「ハア……ハア……。」

「お兄ちゃん、しっかりして！」

公園の蛇口で濡らしたハンカチをマガラの額に乗せ、ティッシュで血や汗を拭きとる。

ハルカの賢明な手当てにより容体は少しずつ回復しているようだが全快には程遠く、まだ自分で起き上がることすら出来ない。

「ねえヴェルちゃん、どうしてお兄ちゃんはこんなことになっているの？」

行方不明、記憶喪失、謎の組織からの刺客、不思議な姿への変身、そして激しい体調不良。

兄の身に起こったこれら数多くの異変。

再開直後は怖くて聞くことが出来なかった、聞けば兄は再び自分の元から離れていくと思った。

だがもうそんなことは言っていない。

少しでも兄のことを知るためにハルカはヴェルガインに尋ねた。

「うーん、勝手に話しちゃっていいのかなヤ？」

「お願い！私が知らないお兄ちゃんのことを受け入れるためにも知っておきたいの！」

ヴェルガインはしばらく逡巡していたものの、ハルカの意思の前に折れたのか話すことを決めたようだ。

「分かったニヤ。」

「う……………く……………ここは？」

「目が覚めましたか？」

男が目を覚ますと見覚えのない場所に寝かされていた。

病室にありがちな簡易的な医療用ベッドと仕切り用のカーテンがあるだけの全体的に暗く無機質な部屋。

男のベッドサイドにはシルクハットを被り、赤いゴーグルとペストマスクを付けた全身黒づくめの怪しい男が立っていた。

「誰……だ？」

「私は痺賊のフルギルオス、あなたの手術を担当した者です。こう見えても医師の心得があるのですよ。」

フルギルオスと名乗った男は自分の事を医師だと紹介した。

しかしそのゴーグル越しに感じる視線は医師が患者に向けるものではなく、マッドサイエンティストが実験動物を見るものであった。

「手術？オレは手術を受けたのか？」

「ふむ、手術を受けたことは覚えていないようですね。それではあなた、自分の名前は分かれますか？」

「オレの名前は……フル……ゴア。そうだオレの名前は狂竜のフルゴアだ。」

男は頭に思い浮かんだその言葉を自分の名前だと認識した。

本当は別の名前を名乗っていたような気もするが、それを思い出すこともなければ思い出そうとも思わなかった。

今の彼にとっては狂竜のフルゴアこそが正しい自分の名前だからだ。

「ではあなたは何故ここにいるのかも分かりますね？」

「ああ、そうだ。オレは竜を超える龍の戦士としてネオウエポonzに選ばれたんだ。そして龍の宝玉と絆石を埋め込まれた……。」

「では他に分かることは？」

「いや……今のオレにあるのは龍の戦士として生まれ変わった事実、ただそれだけだ。」

「よろしい、記憶処理は問題ないようですね。」

男、フルゴアが名前と己の立場以外何も覚えていないことにフルギルオスは満足そうな様子を見せる。

余計な記憶は必要ない、ネオウエポonzの一員として組織に役立つことだけが重要なのだ。

「それでは行きましょう。あなたはもう既に動けるようになっていません。これからのことは歩きながら説明します。」

歩き出したフルギルオスを追ってベッドから降りるフルゴア。

今の彼が身に着けているものは粗末な入院着だけで履物すらないが、気にすることなく裸足で後を着いていく。

「ランポス兵のようなウエポンを名乗ることすらおこがましい雑兵も分類上は下級ウエポンであり、強力な竜の力を自在に操るのが組織の主力である上級ウエポンです。一般的にウエポンと呼称されるのはこの上級ウエポンからですね。そしてその竜すら超える龍の魂をその身に宿するのがG級ウエポンです。しかし龍のウエポンはこれまでの技術では作成不能でした。龍が持つあまりにも強大なエネルギー。それは我々の手に余るものであり、力を引き出すどころか安定させることさえ至難の技でした。そんなものを人の身に宿してしまえば大き過ぎる力に肉体は耐え切れず崩壊してしまいます。ですがそれも今日で終わる。優秀なあなたの素質と私の優れた技術、これらが合わさったことにより遂に新世代のウエポンが誕生しました。あなたは栄えある龍のウエポンの第一号であり、未来への礎となる試作モデルでもあるのです。」

一人で興奮気味に話すフルギルオス。

フルゴアとしてはフルギルオスが語る技術や成果には興味はない。フルギルオスもそれが分かっているのかフルゴアに解説しているというよりは、自分の成果に酔っているだけのようにも見える。

やがてフルゴアは頑丈そうな合金で作られ、一部に強化ガラスで作られた窓が張られた小部屋に案内された。

内部には監視カメラやスピーカーこそあるが、それ以外は椅子の一つすらない殺風景な作りである。

「あなたは龍の力を埋め込まれましたが、まだ実際に龍の力を引き出したわけではありません。理論上は龍の力を使えるとしてもそれは理論上の話に過ぎないのです。よく失敗に対して理論上は完璧だった、私の理論が間違っているはずがないなどと言い出す愚かな研究者がいますが、そんなものはフィクションの世界だけの存在です。実際に目に見える成果が出ずに成功などとは口が裂けても言えません。」

「それで、オレに何をさせたいんだ？」

フルゴアはこれから何をするのか内心で察してはいたが一応フルギルオスに尋ねる。

「ここは実験用特殊耐久室です。この部屋はちよつとやさつとのダメージでは傷付かない頑丈な素材で作られています。あなたにこの中で龍のウエポンとしての力を開放して貰いたいのです。」

「つまりオレのデータ取りというわけか。」

「理解が早くて助かります。あなたの実力を計測し、定められた基準値を超えていればようやく龍のウエポンとしての完成になります。」

フルゴアが部屋に入ると合金製の扉が閉められ密室になる。

フルギルオスはガラス窓の外に立ち、何やら計測機器のようなものを弄り始めた。

『それでは変身してください。』

部屋に備え付けられたスピーカーから流れるフルギルオスの声。

その声に従いフルゴアは全身に力を巡らせていく。

するとフルゴアの全身から黒い粒子があふれ出し、フルゴアの全身を覆い尽くす。

その粒子は硬質化していき黒い鎧へと変わっていった。

『……フム？想定より数値が低い？まあいいでしょう、これからダミーを出しますので攻撃して下さい。』

床の一部が開き、その中からマネキンのような人形が現れる。

「エイムオフトリック。」

フルゴアは黒い粒子を硬質化させて両刃の棍を形成すると即座にダミーに斬り掛かった。

この武器を握るのは初めてなのだが、改造の際に脳内に戦闘技術がインプットでもされているのか実に手に馴染む。

そのお陰で武器の使い方が分からないなどといった無様を晒すこともなく、ものの数秒でダミーはバラバラになってしまった。

『なるほど、戦い方に問題はないと……。では次は実戦です、手加減の必要はありません。思い切りやって下さい。』

再び床が開くと今度は青いトカゲのような姿をした兵士が一人現

れた。

『彼はランポス兵、ネオウエポonzの最下兵です。彼らはクローン技術で作られたいくらでも替えの利く安価な存在。殺す気で戦い……いや、戦って殺しなさい。』

「ギイツ!!」

奇声を上げながら手にした短剣で襲い掛かるランポス兵。

最下兵とはいえ平穏な世界で暮らしていた一般人にとっては十分に恐ろしい存在である。

だが龍のウエポンとして作られたフルゴアはこの程度で恐怖など感じない。

また人を傷つけることや殺すことにも忌避感がないのか、相手が初対面でなおかつクローン人間とはいえ、ダミーの人形を相手にするのと同じようにまるで人間扱いなどせず淡々と斬り伏せる。

「ギギツ!!」

息絶えた一人目が塵に変わると同時に二人目が現れた。

どうやら一人殺しただけでこのテストは終わらないようだ。

フルゴアは二人目、三人目と作業的に順々と処理していく。

『ム、これは？試してみましよう。』

だが戦いを観察することであることに気付いたフルギルオスは一人ずつ出すのを止め、一気に三人のランポス兵を呼び出す。

ランポス兵も数の利を生かし、愚直に一体ずつ戦うのではなく攪乱するように動き始める。

しかしフルゴアは焦ることなくエイムオフトリックをドクロのような不気味な装飾の付いた銃へと変化させた。

「レイオフヴァイス、連爆榴弾発射。」

ドクロの銃口から発射された弾丸はランポス兵の一人に着弾する。

直撃した弾丸は威力が低い様でランポス兵に銃撃でのダメージは見られなかったものの、その直後に弾丸そのものが連続爆発を引き起こす。

連爆榴弾は着弾地点に爆発を起こす徹甲榴弾を改造した特殊弾であり、その威力は従来の三倍にも跳ね上がる。

その破壊力によって爆心地にいたランポス兵は勿論、その隣にいたもう一人のランポス兵までもが爆風に巻き込まれて塵と化した。

「ギ……ギツ!? ギイイイイ!!」

一瞬で仲間が倒されたことに狼狽えた最後のランポス兵だったが、攻撃を受けていないにも関わらず突然苦しみ出すと胸を掻き毟りながら塵に変わる。

「これは一体……クツ……!?!」

突然死亡したランポス兵に流石のフルゴアも面食らうものの、突然謎の立ち眩みを感じたことで考えを中断される。

『ありがとうございます、お疲れ様でした。これにてテストは終了です。』

そこへ掛かるフルギルオスの声、戦闘終了とのことでフルゴアも体勢を立て直すと一息つく。

「ふう、それでオレのデータは取れたのか?」

『はい、中々に興味深い。ですがその前に……。』

フルギルオスが手元の端末を操作した、次の瞬間……。

「があああつ!?!」

床からコンセントプラグのような金属の板が三枚張られた棒がフルゴアを挟むように左右に一本ずつ伸び、そしてその二本の棒の間に高圧電流が発生する。

『アノカソードダクトを改造して作成した装置です。消費電力は多く設置場所も限られる欠陥品ですが、中々の威力でしょう。』

放電は十秒にも満たなかったが、感電したフルゴアは動けなくなり仰向けに倒れる。

「ぐっ……がつ……何のつもり……だ……?」

『残念ながらあなたは失敗作だということですよ。』

「オレが……失敗作……?」

『ええ、まず出力が足りていない。確かに上級ウェポンとしては最高クラスのエネルギー反応がありました。我々が求めているのはG級である古龍のエネルギー。上級の最高程度では困ります。そして次に何もせずとも倒れたランポス兵。あなた自身は気付いていないよ』

うでしたが、あなたが戦うたびにあなたの身体から黒い粒子が少しずつ撒き散らされていたのです。それに触れ続けていたランポス兵は肉体が破壊されました。あれが狂竜のフルゴアとしてのあなたの特性なのかもしれませんが、いくら替えの利くランポス兵とはいえあなたが戦うたびに無意味に兵を消耗させられるのは困ります。まああの程度の粒子量でしたら上級ウェポンには効かないとは思われますが、それも蓄積してしまえばどうなるかは分からない。身内に爆弾を抱えるのは御免です。そして最後にあなたは戦闘後に調子を崩した。あなたはただの立ち眩みだと思っただのかもしれませんがデータは誤魔化せません。狂竜の特性はあなた自身の肉体も蝕んでいます。今はまだ軽い体調不良で済んでいます、戦いが続けばやがてその損傷は無視出来ないものになる。戦うたびにあなたは血反吐をぶちまけ、やがて死に至るでしょう。ただ基準値に満たないだけならまだよかった、上級ウェポンとして運用出来るのですから。しかしあなたは敵を滅ぼし、味方を滅ぼし、最期には自分自身をも滅ぼしてしまいます。だからあなたは失敗作なのですよ。』

「クツ、勝手なことを……。」

フルゴアはどうにかして起き上がろうとするものの、痺れた身体は言うことを聞かない。

『それではあなたの変身機構も破壊しておきましょう。』

「何ッ!? やめろっ! やめっ、ぐあああッ!!」

フルギルオスの操作により天井からレーザートーチが出現し、細いレーザーが発射されて無抵抗のフルゴアの腹部を貫く。

『あなたに埋め込まれた改造絆石に傷を付けました。付いた傷はごく僅かなもの、ですが変身を阻害するには充分過ぎる。これであなたはもう変身出来ません。一回使うだけで部品が焼け付くため再利用の出来ないレーザートーチ、しかも高コストなので量産も難しい。ですがそれ程のものを使わなければ絆石に傷を付けるのは難しいのですよ。』

「ああ……があっ……。」

フルギルオスは蘊蓄をのたまっているが、変身機構を破壊されて生

身の姿に戻ったフルゴアにとってはそれどころではない。

ウエポンは宝玉と絆石の二つがあつてようやく変身可能となる。

その絆石を傷付けられたことで尋常ではない痛みが全身を襲っていた。

『それでは名残惜しいですがあなたはこれから処理場へと送られます。ああ、ご安心ください。失敗作とはいえ失敗もまた技術の向上に繋がるのです。あなたから得られたデータにより、次に生まれてくる龍のウエポンはより優れたものとなるでしょう。あなたの犠牲を無駄にはしませんとも、それではさようなら。』

フルギルオスの操作により扉が開くと二人のランポス兵が部屋の中に入り、倒れているフルゴアの肩と足を掴んで持ち上げ部屋の外へと連れ出した。

抵抗すら出来ないフルゴアはされるがままである。

ランポス兵達はそのまま廊下の突き当りにある廃棄物処理用の大型ダストシユーターの蓋を開けるとそこにフルゴアを投げ入れた。

フルゴアを捨てたランポス兵達はそのままシユーターの蓋を閉じるとその場を後にする。

蓋を閉じる瞬間に小さな黒い影がその中に飛び込んでいったことに気付かぬまま……。

「……ぐっ、ハッは？」

フルゴアが目を覚ますと、そこはロクに分別もされておらず生ゴミ、紙類、廃材といったありとあらゆるものが捨てられている異臭漂うゴミの堆積場だった。

ゴミの中には人骨のようなものも見える、彼も失敗作の一人なのだろうか？

このままでは自分もゴミの仲間入りをしてしまうと理解したフルゴアはどうにかして脱出を試みるも、絆石の痛みは未だに続いており身体に力が入らない。

「このままでは……。」

「おい、聞こえるかニヤ？」

どうにかして脱出の糸口は無いものかと周囲を見渡しているといつの間にやら二足歩行をするハチワレ模様のネコがすぐ近くにいた。

「何だお前は？」

「オイラの名前はヴェルガイン！オイラはキミと取引がしたくてゴミ捨て場の中まで追ってきたのニヤ！」

「取引だと？」

「そうニヤ、キミが目覚めてからの一連のやり取りは全部見てたニヤ。キミがフルゴアと名乗ったところも、フルギルオスのテストで戦っていたところも、失敗作と呼ばれて酷い目に遭ったところも……。」

「チツ……。それでお前はこんな死に掛けのオレと一体何の取引をしようと言うんだ？」

戦闘後の仕打ちを思い返して気分を害したフルゴアだったが、そこ

は堪えて話の続きを促す。

「オイラはずっとこのネオウエポonzの基地から脱出する機会を狙っていたのニヤ。」

「脱出だと?」

「オイラは見ての通りちっちゃくて非力なネコ。物心ついた頃からの基地にいて、それ以来ずっと隠れて過ごしてきたニヤ。ネオウエポonzは人を攫ってはウエポンに改造するとしてもない奴らニヤ。そんな奴らに捕まっちゃえばどんな目に遭うか分かんないニヤ。でも弱いオイラは戦うことも逃げることも出来ずにひたすら身を隠していたのニヤ。そこにキミが現れた!」

「オレが?」

「そうニヤ!キミはネオウエポonzにゴミとして捨てられて、それでも諦めずに生きようとしている。違うかニヤ?」

「いや、間違っていない。オレはこんなところで死ぬわけにはいかない。」

「そう、そこニヤ!キミは仮にもネオウエポonzの一員ニヤ。だったら組織が死ぬと言ったら迷わず死ぬのが忠誠心つてもものニヤ。」

「随分と極端な話だな。」

「死ねと言われて死ぬような組織などまっぴらごめんだが、それでも組織のために戦えと言われれば戦うつもりであつたフルゴアはヴェルガインの話に理解を示す。

「でもキミは死なないため、生きるために脱出しようとしている。つまりキミの組織への忠誠心はもう無いのニヤ!組織に忠誠心を持つた者に取り引を持ち掛けても実験動物として捕まるのが見えているニヤ。だから忠誠心無くしたキミのような存在が現れるのを待っていたのニヤ。オイラは生きてここから出たい、キミも生きてここから出たい。利害は一致しているはずニヤ!オイラをここから連れ出してほしいのニヤ!」

ヴェルガインの言う通りフルゴアにネオウエポonzへの忠誠心はもう無い。

協力することで生きてここから出られるのであればフルゴアとし

ては願ったりである。

「だがお前を脱出させようにもオレは動くことすらままならない、手の貸しようがないぞ。」

「そこは大丈夫ニャ、これがあるニャ……んべえっ！」

ヴェルガインは口から大きな毛玉を吐き出す。

そしてその毛玉をほぐしていくと、中から一つの小さなビンが現れた。

「これは秘薬ニャ、これを使えば大体の傷は元通りニャ。キミが傷付いているのは知ってたから、ここに来る前にちよろまかしてきたのニャ！こう見えても物を盗ってくるのは得意なのニャ。今から塗ってあげるニャ。」

何とも手癖の悪いネコである。

ヴェルガインはビンの蓋を開けると、中身をフルゴアの腹部に塗り始める。

口から吐き出された薬ということでフルゴアも本当は嫌だったが、治療のためと自分に言い聞かせて我慢した。

「……これは？」

秘薬を塗ってからわずか数秒で腹部に開いていた穴は綺麗に無くなり、電撃で傷付いた身体も全快していた。

絆石からの痛みも止まり、身体を動かすのに何ら支障はない。

「グツ、だが変身は出来ないか……。」

しかし鎧の姿への変身は出来なかった。

いくら秘薬が強力な治癒効果を持つていたとしても、無機物である絆石の傷を修復することは不可能なのだ。

絆石からの痛みを止めただけでも御の字である。

「治療してくれたことは感謝している。だが変身出来るならともかく、生身で堆積場の壁を破ることは出来んぞ。」

試しに壁を叩いてみるがまるで手ごたえがなく、このまま叩き続けていても壁より先に拳が潰れてしまうだろう。

「だったら変身すればいいのニャー！」

「オレの話聞いていたか？その変身が出来ないと言っているんだろ

う!？」

頓珍漢なことを言い出すヴェルガインに思わずキレるフルゴアだったが、ヴェルガインはチツチツチツと舌打ちしながら指を振る。「実はオイラには隠された能力があるのニヤ。オイラ絆石の代わりになる能力を持っているのニヤ。」

「は？いきなり何を言っている？」

唐突に変なことを言い出したヴェルガインを頭のおかしい人間に向けるような目で見るフルゴア。

だがヴェルガインは真剣だった。

「ギャグでもジョークでもないニヤ！オイラは生まれつき絆石の機能を肩代わりする能力を持っているのニヤ。何でそんな力があるのか自分でも分からないけど、きつと今のためにあつたのニヤ！」

「妄言だったら許さんからな、変身！」

フルゴアが宝玉の力を開放すると同時にヴェルガインは黒い粒子へと姿を変える。

やがて煙が晴れると黒い鎧姿のフルゴアが一人で立っていた。

「おお!?これは！」

『言った通り変身出来たニヤ。』

ヴェルガインの言う通りフルゴア一人では変身出来なかったのがヴェルガインがいれば問題なく変身出来た、ヴェルガインがフルゴアと一体化することで絆石の代わりに果たしているのだ。

『それじゃ脱出ニヤー!』

「分かっている！トリガーのハザード!!」

フルゴアは悪魔のような外観の大砲を作り出すと、壁に向けて引き金を引いた。

ドツゴオオオオオン!!!

発射された黒い粒子の塊は爆音と共に壁に大穴を開ける。

フルゴアは迷わずその穴に飛び込むと走り出す。

出口までのルートはヴェルガインが知っているとのことだったので、後はその案内に従って脱出するだけだ。

やがて古めかしい木製の大きな扉が目につく。

フルゴアはその扉を蹴破ると迷うことなく外へ飛び出すのだった。

出た先はどこかの山の中だった。

周りには誰もおらず、身を隠しながら進むには最適である。

『生まれて初めて外の世界を見たニヤ、感激ニヤ〜!』

外の景色に感動しているヴェルガインは放っておいてフルゴアは歩き出そうとするが……。

「いけませんね、そのようなことをされては……。」

後ろから声を掛けられたフルゴアが振り返ると、そこには痺賊のフルギルオスが立っていた。

「まさかこんなにも早く再開するとは私の頭脳を持ってしても予想しきれませんでしたよ。ですがあなたは処分されることが決定しています。分かったら早く処理場に戻りなさい。」

「断る。」

「まあそうでしょうね。でしたらあなたの改造に携わった者の一人として私が責任を持って処分いたしましょう。改造絆石を欠いているにも関わらずどうやって変身したかは知らないが、これも次のためのいいデータとなる。」

フルギルオスは黒い皮の貼られた片手サイズの小振りな斧、マラドタバールをフルゴアに向ける。

「気を付けなさい、この斧には麻痺毒が塗られている。上級ウエポンでも触ればただでは済みませんよ。」

「ほう、敵に情報を開示していくとは余裕の表れか？」

「ええ、先程のデータでああなたの出力限界は見切っています。それに合わせて動けば負ける道理はありません。では参ります。」

斧を片手に斬り掛かってくるフルギルオス、それをフルゴアはエイムoffトリックで受け止めるとそのまま弾き飛ばす。

吹き飛ばされたフルギルオスだが、空中で体勢を立て直し華麗に着地をしてみせた。

「流石は上級ウエポンを超える出力だ。これがG級であればどれほどのものだったのやら、あなたが失敗作なのが残念でなりません。同じく上級ウエポンとはいえ実力的には下から数えた方が早い私では真つ向勝負では分が悪いようですね、しかし！」

フルギルオスは懐から玉を取り出すと、それを地面に投げ付ける。

割れた玉からは白い煙幕が発生し、辺り一面を覆い尽くした。

「けむり玉か!？」

「力では負けていても知略で勝てばいいのです。卑怯だとか小手先の技だとかは敗者のたわごと。そもそも技や戦略というものも本来は格下が格上に勝つためにあるものなのですよ。私はこのゴーグルで

煙の中でも視界が確保出来ませんが、あなたはどうでしょうか？」

煙の中から縦横無尽に走り回る音が聞こえる。

視覚面だけでなく聴覚面ですら翻弄し、徹底してこちらの死角を突くつもりだろう。

何故なら相手の斧には麻痺毒が塗られており、一発当てればそれで勝敗が決まるのだから。

カサツ……。

右側から一瞬間こえた音に振り向くフルゴア。

その瞬間、斧を構えたフルギルオスが左側から飛び掛かり……。

「フォーソfフォル。」

そして自身の斧が届く前に、フルゴアの振るう巨大な斧の刃が腹部に深々とめり込んでいた。

「ガフツ……小石を投げて音に誘導したというのに……何故私の来る方向が分かったのです？」

「お前が煙の中でも物が見えるように、オレも粒子の中を動く物は感知出来るのさ。」

「そのようなことが……。」

フルギルオスが周囲を見渡してみれば煙で分かりにくかったものの、確かに足元には黒い粒子が広がっていた。

「自分で自分の首を絞めたということですか……。煙幕さえなければこの程度……すぐに見破れたというのに……。」

「だがその場合、真つ向勝負を挑むしかないお前はパワーで負けていた。つまりオレに挑んだ時点でどのみち負けるしかなかったということだ。」

「フフフ……素晴らしい……。早々に切り上げず、もつとデータを取っておくべきでしたよ……。ですが、これも次回のデータに活用し……。」

「お前に次はない、チェインソーサー!!」

斧の刃が高速回転し、フルギルオスの胴体をえぐり取っていく。「ですが狂竜のフルゴア、あなたはもう死の運命から逃げられない！ネオウエポンズは裏切り者を許しません。次々に追手が来るでしょう。そしてあなたは戦うたびに弱っていく。追手に殺されて死ぬか、限界を迎えて死ぬかの違いしかありません！あなたがどのような終わりを迎えるのかとても楽しみですよ。」

やがて斧の刃はフルギルオスを両断し、フルギルオスの肉体は大爆発を起こす。

爆風によって煙幕も晴れ、そこには巨大な斧を片手に佇むフルゴアだけが残された。

「狂竜のフルゴアというのはお前らが定めた名前だ。組織から抜けたオレはその忌まわしい名は名乗らない。今からオレはブラック・マガラだ。」

変身を解いたことで黒い戦士はフルゴア改めブラック・マガラとヴェルガインに分離する。

「えーっと、ブラック・マガラって呼んだ方がいいのかニヤ？」

「マガラでいい……クッ!?!」

突然の頭痛に襲われるマガラ、これも狂竜の力の副作用なのだろう。

今はこの程度で済んでいるがフルギルオスは戦い続ければ症状はより酷くなり、最終的に死に至ると言っていた。

「これからどうするのニヤ？外に連れ出してくれたことはオイラにとって返しきれない程の恩なのニヤ。だからこれからも戦うというのであれば協力するけど、でもマガラは戦わない方がいいんじゃないかニヤ？」

「いや、オレは戦い続ける。ヴェルガイン、力を貸せ！」

マガラが戦うことで命を縮めるということを知っているヴェルガインはマガラに戦いを止めるように言ってみるが、マガラは戦いを止めるつもりはないようだ。

「本当に大丈夫ニヤ？どこかに身を隠して静かにしていれば、退屈かもしれないけど長く平穩に暮らせるのニヤ。」

「オレは自分が死のうがどうだっていい。」

「ニヤツ!?だつて死にたくないからゴミ捨て場から脱出しようとしてたんじや……!?!」

未だにマガラを説得しようとするヴェルガインだったが、暗く濁ったマガラの瞳を見たことで思わず息を呑む。

「オレが死にたくなかったのは失敗作として何も為すことなく処分されようとしていたからだ。オレを作っておきながら失敗作だと？そして裏切り者として追手を寄こすだと？上等だ、お前らの追手を倒し続けることでどちらが失敗作なのかハッキリさせてやる！オレを失敗作と判断して処分したことを後悔させてやろう!!」

そう言うときマガラはふらつきながら山を下りていく。

マガラに協力すると決めた以上、ヴェルガインに出来ることはない。

今日初めて会った自分の薄っぺらい言葉ではいくら説得を重ねようと絶対にマガラは止まらないだろう。

いつかマガラが心を許せる相手が現れることを願いながらヴェルガインはマガラの背を追って山を下りるのであった。